

ノット・アクターズ

ルシエド

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

大多数のファンは、好きな番組の名前だけを覚える。

熱中したファンは、好きな番組の俳優の名前を覚える。

濃いファンは、監督・脚本・プロデューサーの名前を覚える。

少し外れたファンは、服のデザイナーや、BGMを作った人の名前を覚える。

でもでも、そこで一つの問題。

番組に出た小道具や、映画に登場した衣装。

それらを作る人達は、名前が出ることすらもない。

インタビュで記事に載るのは、いつだって映画を作った主役達。

作品を作る要。

けれど、作者に非ず。

演劇の舞台になくてもはならない存在。

けれど、演者に非ず。

彼らがいなければ何も表現することはできない。

けれど、表現者に非ず。

小道具、大道具、舞台作り、衣装作成。

その者達ノット・アクトर्स、演者に非ず。

目次

ノット・アクター | 1

彼だけが彼を天才だと知らない | 32

古来、天才芸術家は天使の絵や像と共に

在った | 56

単行本プロフィールで好きなカマキリ、

好きなヤスデ、好きな寄生虫が記載して

ある百城千世子ちゃん | 84

芸術は天使と共に在り | 101

バーニングゴジラ殺人未遂事件 | 135

その主人公からは、少し有機溶剤の匂い

がした | 157

日曜朝のヒーローと、名女優は魅了する

ゴジラの話の後日談、そしてやってきた

ゴジラな男 | 178

来たれ撮影の序盤戦 | 201

疲れが命を削るぞ中盤戦 | 224

ようやく終わる終盤戦 | 251

空の美しさの理由 | 285

演劇集団・劇団天球 | 310

理由は笑顔の内に在り | 341

主人公の本音「今時実写でセカイ系って

難しくないですかね」 | 369

デート・ア・ライ | 418

一難去ってまた一難 | 438

475

それは星に手を伸ばし続ける愚行のよう	に	ラストシーンの後は	英二「演技がヘタクソなモデル出の人でも真面目に頑張ってる人は好き。ちゃん	と上達するし」	気楽で真面目な撮影の授業	夜風さんちの経済状況でマグロ食えるはずがない、よって『マグロ食ってないやつ』である	見る目がある、ということ	夜と星と朝	ぼくたちには、ヒーローがいる	夜風さんの初仕事	魔法使いは、シンデレラに感謝も見返りも求めない	夜風双子の社会体験	NOT 芥's	ここが時代劇の世界か(ディケイド導入)	風無くて風、朝無くて夜	英でること二のつぎで、城にはやがて朝がくる	非真剣10代しゃべり場	千世子「フアントム・スレッド良いよね英二君。服作りの天才と女性の恋物語。よ	690	667	639	615	588	559	588	559	817	794	750	717
--------------------	---	-----------	--------------------------------------	---------	--------------	---	--------------	-------	----------------	----------	-------------------------	-----------	---------	---------------------	-------------	-----------------------	-------------	---------------------------------------	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

り深く愛してる方がより強く相手を支配
すると教えてくれる名作映画だよ」

1021

劇場版ウルトラ仮面 Wヒロイン&ディ

景ド スーパーヒロイン大戦2018

公開未定

1048

「優しい人に報われてほしい」と芸能界で

願う人間ほど、愚かで間違っている存在

はいない

1095

朝遠く、夕焼けの茜を、夜が呑む摂理

1119

きつと上手く行くと、何の根拠もなく、夢

を見ていた

1159

親の死から逃げた天才の少女、親の愛で
役者になった非才の少女、親に――

1217

愛はあつた。そこに、彼の周りに、きつと

あつた

1249

ラーメン男列伝

1324

夜風「天使」の顔が、一瞬視えた。とて

も怒っている」

1358

デスアイランド、開幕

1408

女の子が決して手に入れられないすてき

なもの

1441

特に台詞もなく森を歩くだけの平和な撮

影

1467

私だけを見てろつつつたのに五秒で他の		ものである	
女優見る男	1493	ゲロ女、降臨	
撮影に参加してる女優のスリーサイズを		シン・ゴジラ	
全て把握しているのは控えめに言って変		手塚監督の望むもの、その一つ	
態では？	1528	夜風が見た息合う二人	
特撮で言えば強化イベント（なお登場人		二人が見た二人の絆	1766
物全員が強化されるため相対的に見た場		デスアイランド：五日目：英二離脱初日	1738
合に他の人より強化された者は一人もい		1828	1712
ない模様）	1554	デスアイランド：六日目：英二離脱二日目	1683
広がる夢中の中 小さな虫の話をしよう			1641
ぜ	1585	interlude：スポンサーゲッ	1614
撮影とは！ 1日目に残り29日の準備		ターズ	
をし、2日目に残り28日の準備をする		デスアイランド：七日目：英二離脱三日目	1885

突入

1924

デスアイランド：八日目・朝風英二の帰還

1960

英二「家城茜って知ってます？ ゴジラ

×メカゴジラの女主人公でメカゴジラ搭

乗者です。城で茜ですよ？ こう、好ま

しく思ってる友人の名前の合体感が最高

ですよね……あの二人も仲良くしてくれ

たら嬉しいです」

茜刺す少女

茜の世界

お芝居に心はいらないんだよ

嵐の前兆

21542120208220461996

夜風景 千世子は抱く 殺意かな(5)

7・5)

2187

仮面なき素顔を愛される者は自分と比較

し、心無くとも演じられる者は自分と比

較した

2239

草加雅人は乾巧を心底嫌いつつ心底信頼

していた

2276

奴らは俳優でないがために(ノット・アク

ターズ)

2340

芥に非ず

百城千世子の『アクターズ』

百城千世子の『ファン』, s

アクタージュ act-age

25012467243024062340

ノット・アクター

昔、特撮映画では多くの仕事を一人の人間が兼任していた。

怪獣のスーツと街のセットを同じ人が作ったり。

監督と脚本を同じ人がやっていたり。

怪獣のスーツと主人公の服を同じ人が作っていたりしていたという。

現代では、それぞれの仕事に分業されている。

多くの人が自分の専門を極め、多くの会社が自分の専門を極め、多くの人と多くの会社力が力を合わせて映画やTV番組を作り上げる。

それが、現代の映像作りというものだ。

ならば、現代においてそれらの多くを一人でこなせる人間がいたとすれば、その人間は間違いなく天才と呼ばれる人間と言えるだろう。

けれども。

それが、俳優でないのなら。監督でないのなら。プロデューサーでないのなら。

脚本でないのなら。デザイナーでないのなら。音楽担当でないのなら。

その天才は、日の目を見ることはないだろう。

現代の映像作品は、多くの人間、多くの会社が力を合わせて作られる。

けれども、『表舞台で脚光を浴びる人間』というものは、ほんの一部に限られている。作品を作る要。

けれど、作者に非ず。

演劇の舞台になくはならない存在。

けれど、演者に非ず。

彼らがいなければ何も表現することはできない。

けれど、表現者に非ず。

小道具、大道具、舞台作り、衣装作成。

その者達、演者に非ず。

子供の頃、俺はウルトラマンと仮面ライダー……棘谷プロと西映の両方の撮影場所で

仕事をする父に連れられ、幼い頃から色んな現場に行った。

早くに母親を亡くした俺は、撮影場所の片隅で手の空いている大人に相手をしてもらうことが多かった覚えがある。

仕事一筋で金稼ぎに興味の無い俺の父親には、あまり金がなかった。

だから仕事場で誰かに俺を預けて、ベビーシッターとかそういうのの金を浮かせてた
と聞く。

それが許されていたのは、俺が幼い頃から大人しい子だった（らしい）のと、何より
俺の父親が……他の誰もが比肩できないほどに、優れた道具作りの名手だったからだ。

俺の父は何でも出来たが、特にウルトラマンや怪獣が壊す街のミニチュアを作るのが
とびつきりに上手かった。

俺は子供心に憧れたんだ。

父が作るヒーローに。

父が作る怪獣に。

父が作る街に。

父が作る武器に。

父が作る衣装に。

父と一緒に、色んな特撮の撮影の舞台に行った。

撮影のプロである色んな人と触れ合った。

ある日から、気まぐれに撮影に使っていた廃材で遊ぶようになった。

周りの大人を真似するようになった。

最初は見よう見まねで、途中からは大人に教えてもらって、周りの大人ができる撮影関連の技術は全部できるようになった。

中学に入る頃には、撮影所の新人よりかはよっぽど使える人間になっていた。

親父と同じく、俺は特撮番組の物作りなら大抵のことができる奴だった。

親父と違って、俺は等身大の人間を魅せる仕事が上手いと言われるガキだった。

ハンパに遺伝して、ハンパに遺伝しなかったわけだ。

そして、今。

18歳になった今も、俺は撮影所に入り浸っている。

物心ついた時から今にいたるまでずっと撮影所に入り浸っている、っていうことは、俺は人生のほとんど全てを撮影所通いに費やしてることだ。

我ながら変な人生を送ってるなと思わざるを得ない。

俺の立ち位置も、『最高の特撮職人の息子』から『仕事を振れば大抵のことはこなす若手のフリーランス』に変わった。

つまり、正式に映像作りのスタッフとして雇われるようになった。

俺の背は伸びたけど、変わったことなんて給料の有無と、責任の有無くらいしかない。思えば酷い話だ。

あのプロデューサーも、あの監督も、俺が撮影所に遊びにきてみんなの手伝いをして
いる限り、スタッフ一人分の給料を浮かせられると考えていたわけだ。

だから俺も、中学卒業まで正式なスタッフになって給料を貰うという発想にそもそも
至らなかつたのだ。

数年分はプロに混ぜられて無駄働きさせられていた事実、許すまじ。
大人は汚え。

監督やらプロデューサーやは、俺が中学校に入る頃にはプロのスタッフと同格の技
量があると気付いていて、ずっとただでこき使っていたのだ。

汚い大人達は楽しげに笑っていた。
『やつと気が付いたのか、はっはっは』

『お前もやつと俺達の同僚だな』

俺が中学卒業と同時にこの世界に入った時、嬉しそうにしていた大人達の顔を覚えて
いる。

俺がちゃんとしたプロになって、映像作りに関わるようになってからも、あの人達は
給料を払っていつも俺を雇ってくれている。

今になっても、俺に色んなことを教えてくれている。

大人の考えることは分からね。

さて。

「いい感じだな……」

俺は基本フリーランス。呼ばればどこにでも行く何でも屋だ。

昭和の時代は俺みたいなのが山のようにいたらしい。

今は西映の特撮番組『ウルトラ仮面』の撮影で仕事をする人が多いが、仮面ライダーもウルトラマンも戦隊もやる。

映画やCMの援軍に行くこともある。

本当に時々にはだが、新人教育のための講師の仕事をすることもある。

そして今日は、仮面ライダーのネットムービーの撮影のお仕事だ。

近年のネットは強い。

とても強い。

俺は仕事以外でパソコンやスマホ使うのが苦手だが、そんな俺でも分かるくらい強い。
い。

有料会員限定配信の番組は、新時代の金の卵なのである。

西映株式会社の看板の一つ『仮面ライダー』もまた、ネット限定配信で稼ぐことをしつ

かり考えている有名番組の一つだ。

俺はこれのスーツ造形、小道具大道具、環境作りの仕事もやっていて、今は撮影に行っているところである。

「お、いい動き。ネットムービーだけじゃなく、本家でも使えそうだなあの俳優さん……」

現地で見るとは大切だ。

でなければ改良ができない。

仮面ライダー、及び俺が今メインで関わっているウルトラ仮面において、スーツは大きく分けて二種類に分けられる。

『アップ用』と『アクション用』だ。

アップ用は、そのスーツを至近距離から大^{アップ}写しで撮影してもかっこよく見える、写りは良いが壊れやすい芸術品。

アクション用は、そのスーツを着て戦闘などをするため、アップ用より頑丈で、軽く、柔軟で壊れにくい実用品。

この中でも特にアクション用は、現地でのアクションを見てアクションがし難いと見たなら、すぐにも改良していかないといけない。

少しでも壊れたなら、即日直さないといけない。

その改良と修復が、俺の仕事なのだ。

例えば、仮面ライダーフォーゼ（2011年）。

仮面ライダーフォーゼは、宇宙を題材にした仮面ライダーだった。

両腕を突き上げ『宇宙キター！』と叫ぶ動きや、不良主人公のため仮面ライダーの格好でヤンキー座りをする格好が印象に残っている。

ちなみに俺はラスボスのサジタリウス・ゾディアーツが一番好き。

超新星で強化変身する前のデザインが好き。

そんなフォーゼだが、最初に作られたアツプ用スーツは酷いことになった。

スーツの構造や素材においても挑戦的だったせいで、肩関節が動かず『宇宙キター！』ができない上に、生地が伸びないのでしゃがむこともできなかったのである。

なので、フォーゼのアツプ用スーツは、写真写りこそいいものの、フォーゼの特徴的な動きを何もすることができなかつたのだ。

バカじゃねえの？

とまあそういうわけで。

フォーゼのアクション用スーツは、多大に改良されたものが作られた。

その後も紆余曲折あり、仮面ライダーフォーゼのアクション用スーツは撮影期間の間に適宜、改良を加えた新しいスーツとの交換を続けた。

なので最終的に、フォーゼのアクション用スーツの数は相方の仮面ライダーメテオのスーツの数の六倍にもなったという。

白い生地は日焼けしやすいとはいえ、本当に改良に次ぐ改良だったことが伺える。

俺も現地で撮影を見て、改良の必要があると思ったなら、すぐに改良を提案するつもりだ。

「ん、今のところは改良の必要無さそうだな」

まあ、それを抜きにしても、俺は監督や俳優が全身全霊で撮影しているこの空気が好きで、特に用がなくても色んな撮影現場に足を運んでいる。

俳優。

カメラマン。

監督。

脚本。

美術担当にアクション担当。

色んな人が忙しく動いている、この空気が好きだ。

「カットカット！ そんじゃ15分ほど休憩入れるよー！」

監督が休憩を宣言する。

俺は折りたたみ式の椅子を持っていき、配信用オリジナル仮面ライダーのスーツを着

たスーツアクターさんが座れる場所を用意してやる。

おつかれさん。

「ありがとう」

「いえ、俺の仕事ですから」

15分休憩なら、すぐに再開になる。

マスクだけ脱がせて、スーツは脱がせない方がいいだろう。

特撮のスーツは、一人で脱げないことが多い。

背中にチャックがあるなど、物理的に手が届かないパターンが多いのだ。

このスーツもスーツアクターさん一人では脱ぐことができず、その上脱ぐにも着るにも時間がかかる。

安易な判断で脱がすと後に響きかねない。

特撮でスーツを着て演じる演者（アクター）のことを、スーツアクターと言う。

TV番組においても映画作品においても、要となる『顔なしの俳優』だ。

マスクを脱がせてやると、汗まみれのスーツアクターの顔が出て来た。

「水です」

「ありがとう。悪いね、スーツ造形の君にこんな仕事させて」

「いえ、俺はそんなに他にすることもないですから」

仮面ライダークウガ（2000年）、という番組がある。

平成仮面ライダーの始祖とも言える名作中の名作だ。

その最終決戦において主人公のクウガとラスボスのダグバは、雪降る山の銀景色の中、真つ赤な血で雪を染めながら、最終決戦に挑む。

この日の雪山撮影はあまりにも寒かった。

ので、スーツの下にホットカイロを三十枚ほど仕込んだそうなの。

まあ雪山だし凍死しかねねーもんな、当然か。

ただし、このクウガの件は極めて例外だ。

基本的に、スーツは熱い。

そりやもう熱い。

仮面ライダーでも、ウルトラマンでも、怪人でも怪獣でも全部同じだ。

ゴムっぽい素材が多いため、熱はこもり、蒸発した汗はこもり、太陽の熱はスーツの内部に蓄積されていく。

特撮番組の歴史は、スーツアクターが春夏秋冬全てで脱水症状を起こしてきた歴史だ。

ヘタクソな監督は、その辺りを計算に入れられない。

経験豊富な監督が、その辺りを計算に入れられないことはまずない。

この15分の休憩は、スーツアクターの限界を見極めた上での休憩なのである。うーん派手に蒸気化した汗が吹き出てんな……汗臭え。少し劣化したウレタンや塗装剤の臭いと混ざって臭い。さて、他の役者はどうなってるかな？

「！」
「？」

おーおー、やってるやってる。

監督は助監督と、俳優は俳優と、カメラマンはアクション監督と話してるな。あつちはずっとモブキャラ演じてた俳優の卵達で集まって話してんのかな？

流石に俳優のヒナ達は若えなあ、10代ばっかだ。

俺も18歳だけど。

うん。

こういう空気も好きだ。

特に役者を見ているのは楽しい。

『自分以外の誰かになる』役者。

『自分を存在しない架空の人物へと変じさせる』役者。

『自分を視聴者の分身と化す』役者。

何かを演じてる人間は好きだ。

「やつ」

「? ……湯島さん、こつち来てていいんですか?」

「今日役者の方に同じ年おらんねん、見知った顔は君だけや」

モブキャラを演じていた俳優のヒナ達の方から、綺麗な女性が一人歩み寄ってきた。

親しげに話しかけてくる彼女は、俺もよく知る人物だった。

湯島ゆしまあかね茜。

今は……オフィス華野所属だったよな?

子役上がりの俳優で、この作品では怪人に追い立てられる女性Cを努めていたはず。

綺麗な容姿、柔らかな笑み、よく通る声に十分な演技力と、新人基準で言えば俳優に必要なものは全て持っている。

長い髪を編んで肩前あたりに流しているのも印象的だ。

ただ、逆に言えば現状それだけでしかない人でもある。

まだ、ヒットしていない人。大舞台の主演女優にはまだなれないような人だ。

まだまだこれからだとは思いますが……ああくソ、駄目だな。

この業界にいると、どうしてもヒットしていない知り合いを見ると『まだ』という言葉を使いたくなる。『まだ売れてないだけ』と思いたくなる。

芸能界で『まだ』ほど嫌な言葉もない。

知り合いを鼻屑目に見るのは、あまりよくねえことだ。

反省しよう。

「どや最近、仕事相変わらず忙しいんやろ？」

「そうですね。最近はウルトラ仮面での仕事が多いですが」

「キミはいつも特撮の仕事持つてる印象あるなあ」

子役上りの人には、俺と昔馴染みの人も多い。

俺は3歳の頃から現場にいたからだ。

大人達に子供同士遊んでなさい、と言われることも多かつた。

湯島さんとも現場の隅っこで遊んでいた覚えがある。

だからこそ言えることがある。

子役上がりが俳優を目指して生き残れるパターンは、とても少ない。

だから俺は、彼女を応援してるんだ。できれば生き残ってほしい。それが人情じゃねえか。

つて、ん？

「湯島さん、服の袖が破れてますよ？」

「え？ ……あつ、ど、どないしょ！ これ借りもんなんや！」

ありやりや。

怪人から逃げるシーンで木の枝とかに引っ掛けたか？

「大丈夫大丈夫、衣装屋には俺が話通しておきますよ。縫って直すんで、腕出してくださ
い」

「ちよい待ち、休憩終わるまであと10分も無……」

「三分くだされば、まあ」

「……できるんなら、お願い！ 大きな声では言えんけど、私……」

「湯島さんの監督からの心象を悪くしたりしませんよ。次の仕事に響くかもですし」

だからそういう顔するなつて。大丈夫、間に合わせるから。

腕を差し出してきた湯島さんの破れた袖を摘んで、針と糸で縫う。

急ごう。

女の子の前だから見栄張ったが、三分はきつついわ！

特撮番組で登場人物が着ている服は、大まかに三パターンに分けられる。

俳優の私服。

番組用に一から作った専用服。

そして、衣装を貸してくれる会社から衣装を借りたものだ。

湯島さんが破った服はこの、貸衣装に入る。

場合によっては番組の予算で賠償しないといけないやつだ。

近年だと、現在放送中の戦隊シリーズ『快盗戦隊ルパンレンジャーVS警察戦隊パトレンジャー』なんかが、この衣装システムにおいて象徴的だ。

変身したヒーロースーツ。

パトレンジャーの警察制服。

ルパンレンジャーのタキシードを改造した怪盗服。

全てが衣装部による新造で、かつ各キャラが私服という設定で着る服は、貸衣装の衣服を衣装部がコーディネートした形。

服装面から、二つの戦隊が戦い競い合うという斬新な戦隊番組を、きっちり演出している。

よって当然だが、俺も撮影用の衣服を作るため、大抵の服は一通り作れる。

特撮とは、そういう世界だ。

布を操れないものに、特撮の世界で物作りをする資格はない……親父はそう言った。

だから。

この衣装も、ちゃんと直せる。

まあ、新人がやったとなれば角が立つが、俺はあそこの貸衣装屋から大きい仕事を今

一つ委託されてる。

俺が伝えればグチグチ文句は言わんだろ。

湯島さんの名前出す必要もないし、俺が破って直したことにしとけばいいや。

その代わり、あそこの会社が貸衣装を補充する時、ちよつと良い質のやつを納品しておこう。破つてごめんなさい、つてことで。

「はい完成」

「早っ?! 二分しか経ってないんやけど?!」

「俺、仮面ライダーカブトの新造スーツの仕事やったことあるんですよ」

「それ絶対関係ないやろ」

クロックアップ! 仕事は終わる! うーむ意外と早く終わった。

破れが目立たない仕様にしたが、本当は破れた部分に刺繍の一つでも入れた方がいいんだ。

そうすれば刺繍で誤魔化されて破れた跡がほとんど見えなくなる。

だけど今は撮影中。

カットごとに袖口の刺繍が増えたり減ったりしたらアウトだ。

なんで、破れ跡が極限まで目立たないようにして縫った。

かーっ、めんどくせえ!

これだから撮影つてやつはめんどくせえんだ。

しかし破れた袖つついてる湯島さんかわいいな。

「はー、また腕上げたんとちやう？」

「15年くらいは特撮ヒーローの世界にいますと、色々身に付くものもあるんですよ」

「いつ聞いても耳を疑う年数で困るんやけどなあ、それ」

15年。15年かあ。特撮の世界つて余裕で20年選手がいるから困る。俺でもまだ若造だ。

「相変わらずの出来で安心したわ。ありがとさん、また助けてもらった」

「お気になさらず、仕事ですので……湯島さん、ちよつと痩せました？」

袖は完璧に直せた。

でも、なんというか。

袖を持った時に気付いたが、湯島さんが前より痩せてるような気がする。

俺の発言の瞬間、湯島さんの表情がこわばった気がした。

「そこは美人になったー、とか言うんやで！ でもま、言われて嬉しいことではあるなー」

「そうですね。細身になって、小学生の頃よりもますます美人になりましたよ」

「まーたそんなお世辞！ 嬉しいやん！」

すぐに笑顔に切り替えて冗談を言い始める湯島さんに合わせて、俺も笑って話を合わせる。

ああ。

クソ。

余計なこと言っちゃまった。

子役上がりは苦労してる。

子役の時にすっかりブレイクできなかった子役はなおさらだ。

仕事は多くなく、頑張って自分を売り込んでいっても仕事は少なく、撮影に出ても人気俳優ほどの効果は得られず、次の仕事に繋がりにくい。

痩せたように見えるのは、苦労してるからだ。

「湯島さん、お茶どうぞ。休憩明けからも頑張ってください」

「重ね重ねありがと。うん、頑張る気が湧いてきたわ」

職業柄、決して表舞台に上がれない俺と。

実力不足で表舞台に上がれない彼女。

俺は、彼女の方が辛いだろうと考える。

彼女にとって『売れない』ということは、「お前に実力がない」「お前に魅力はない」「お前の努力は無駄」と言われているに等しいからだ。

脚光を浴びるのは、一部の人間だけだ。

例えば、そう――

「かーっ、百城千世子みたいに売れたら楽なんやけどな」

「……あはは、あのレベルは結構頑張らないと難しそうですね」

「頑張つても、届くんかなあ、あの高さやと……」

――今の時代、湯島さんの世代と若手を代表すると言われるトップ女優、『百城ももしろ千世子』のような。

俳優は誰しも、あのレベルの成功を夢見るのだろう。

スポーツライトは、大抵ああいっただ人物に集中して当てられる。

TVや雑誌といった”大衆の視線を集めるスポーツライト”が、全ての人間に平等に当てられることはない。

目立つ者、頂点に近い者に集中して当てられる。

それが芸能界というものだ。

ここは、『選ばれし者』を上には押し上げ、それ以外を切り落とす、そういう世界。

「届きますよ、湯島さんなら」

俺は嘘をつく。

「この業界、ブレイクするかは結構運なところありますから」

「そう、やろか？」

「そうですよ。運が巡ってくれば、湯島さんはもつと上に行けます！」

「……うん、そうやね。よし、休憩明けから頑張らんとな！」

芸能界は、努力が報われる世界ではない。

ここはスポーツの世界に似ている。

一握りの人間が極端に報われる世界で、才能が無い努力家も、努力しない天才も、等しく空気になって消えていく。

才能が無い人間が、才能がある人間の上に行くことはほぼない。

才能というのは、身長だったり、顔の良さだったり、演技の幅であったり、演技力の厚みと深さであったり……とにかく多様だ。

湯島さんにそれがないわけではないと、俺は思う。

だが、大成功する人間ほどにあるとは思えない。

俳優になれない一般人と、湯島さんのような才能ある女優と、百城千世子という頂点。

その関係は、特撮の一般人と、一般人より遥かに上だが仮面ライダーの引き立てにならない怪人と、仮面ライダーという頂点の關係に、どこか似ていた。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい！」

ん？　なんだ、どうした？

「湯島さん、ちよつと様子見てきます」

「あ、私も行くわ。でもこの声……」

「って、あれ、おい、おい、おい。」

「あ、仮面ライダーの顔ぶつ壊れとる」

「すみません！」

この子役の子が、スタッフがブルーシートの上に置いておいたマスク踏んじやったみたいで！」

「ウワアアアアアアアアアアア!!」

「ガキヤー!! ぶつ殺すぞテメーツ!!」

「子役が踏んだって……なんで子供が踏みかねないところに置いといたんだぶつ殺すぞ！」

「直せますか?」

「直せますか? じゃねーよ殺すぞ。……いかんいかん冷静に。」

「うーわ片目の部分があつぱりイッてるな……駄目だ。こりや目の部分の素材の調達から始めないとどうにもならん。」

「えー、うーん、どうかな……」

「造形屋から言わせてもらいますと、三次元工作機とレーザー加工機がないと。」

完全に元通りの素材と形には戻らないですね。そういう加工をしたので」完全に元通りにするには東京に戻らないと無理だ。

今時の仮面ライダーのマスクは、コンピューター支援設計・CADシステムでの設計に三次元工作機などを加え、繊細かつ鋭利な造形を可能としている。

それは今壊された、ネット配信用のオリジナルライダーのマスクも例外じゃない。

マジで死ぬよ……いやわざとじゃないし死ぬはちよつと言い過ぎか、タンスの角に足の指ぶつけてろ……

「監督、東京に戻りますか？」

「キツいな、スケジュールが。」

街を撮影のために専有していい時間は、事前の届け出できつちり決まってる。

今回の撮影にはこの町並みを撮影するのが必須だが……

もう一度申請して、認可が降りて、撮影し直すとなると、納品が間に合わん

「！」

現代の特撮の撮影の聖地といえば、『採石場』だ。

屋外でドカンと火薬を爆発させて撮影できる場所は限られている。

なので花こう岩や石灰石を採掘する採石場の跡地などを多用するのである。

特撮の撮影に使われる採石場は、栃木市の岩船山、佐野市の採石場跡地、近年特撮の

撮影に使えなくなった埼玉寄居町の採石場の三種類だ。

そして今回の撮影は、採石場での撮影の後、街中での撮影も行うという形式だった。

……近年に埼玉の採石場が使えなくなってしまったことが、最悪の結果に繋がったよう
うだ。

栃木市も佐野市も栃木県。

埼玉ほど東京に近くない。

スーツの修繕のために往復すれば、それなりに時間を取られてしまう。

「東京と往復すれば日が傾いてしまう」

「ここは妥協してこの街のカット無かったことにしません？」

「それはそれで再構成の時間がかかるし、監督ここでの撮影にこだわってるからなあ」

監督達があーだこーだと話している。

屋外撮影でネックになるのが、太陽の位置だ。

特撮で屋外撮影は必須だが、撮影中に太陽が沈んで夕日になったりしてしまえば、昼間のワンシーンとして繋げない。

昼間のシーンは、昼間の撮影だけで成立させなければならぬ。
が。

これから東京に戻って、スーツを完璧な形で修復して、栃木のここに戻って来て、採

石場と街中での撮影をやらうとすれば、絶対に夜まで食い込む。

昼間のシーンの撮影は間に合わない。

やべーぜ。

「しかし、仮面ライダーのマスクが子役に踏まれて壊れるアクシデントとはな……」

まったくだよ！ もつと言ってやれ！

初代仮面ライダーの撮影において、仮面ライダーのスーツや怪人のスーツを身に着け、最高のアクションで日本を魅了した男達がいた。

その名は『小野剣友会』。

最高のスーツアクター集団である。

その小野剣友会には、三つの鉄の掟があったそうだ。

ひとつ。

『たとえ吹替えでも、仮面ライダーに入らせてもらえないことを最高の名誉と思え』。

ふたつ。

『仮面ライダーを着させてもらえたものは、人の見ているところで煙草を吸ったり、寝そべったり、立ち小便などをしてはならない。それは主役であることの誇りを傷つける行為である』

みつつ。

『脱いだ面を、地面に置くなど軽率に扱ってはならない。主役には必ず付き添いがつき、脱いだ面も靴も上座に安置せよ。面、靴といえども、我々全員が飯を食わせていただくスターさんであるからである』。

だから、仮面ライダーの面を踏む者は一人もいなかったそうだ。

小野剣友会の役割を他の会社が務めるようになり、初代仮面ライダーが放映されてから50周年も見えてきた。

色んな人が色んなことを忘れてるんだろう。

色んな大人から色んなことを伝え聞いた俺が覚えていることでも、それはきつと、現場の色んな人が忘れてしまっていることなんだろう。

だから”うっかり”、仮面ライダーのマスクを踏めるところに置いてしまった。

俺は、それがなんだか、少し悲しい。

なのに。

そんな俺より悲しそうにして、誰よりも泣きそうになっているちつちやな女の子がいた。

「大丈夫ですか？」

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……」

大人の動揺と、自分がしたことの大きさを感じ取ったんだろう。

仮面ライダーのマスクを踏み壊してしまった子役の女の子が泣いていた。

スターズの、山森やまもりか歌音ちゃん……だったか？

一緒に仕事したことはなかったな。

芸能界の最大事務所・スターズ所属の子役。

今はまだただの子役でも、スターズとなれば将来的に大女優になつてる可能性も高い。

うん、そうだ、そう思つておこう。

今日、一緒に仕事をした仲間のために。

いつかまた、一緒に仕事をする仲間のために

この子のキャリアに傷を付けないため、と思つて頑張つてみるか。

やる気を出す理由は出来た。

「大丈夫ですよ、山森さん」

ハンカチで、歌音ちゃんの涙を拭つてやる。

「楽勝ですから、心配しないでください」

「らしくしよう……？ ホントに……？」

「はい、おにーさんを信じてください。あつという間に直してみせますよ」

楽勝なわけねえだろクソが。

でも楽勝って言つとかないといけないんだよ。

俳優に無駄な心配かけて、演技に影響が出るなんて許されることじゃねえんだ。

監督が俺を見て、顎に手を当てた。

「できるか？ スーツを直せるのか？」

「監督は知ってるでしょう？ 俺の親父だったなら、このくらいはお茶の子さいさいで

す」

「……ああ、お前の親父なら、息をするようにやり遂げただろうさ」

そうだ、あの親父にできるなら、俺にだってできるはず。多分。

スタッフの大人はとりあえず俺の指示を聞いてくれるはず。

さてどうするか。

技術のあるアマチュアが仮面ライダーの手足一本を模倣したものを作ると、大体三〇

五時間くらいかかると聞いたことがある。

昔、人が少なかった時代に特撮のセットやスーツを作る時は、『一ヶ月で完成させる』

というのが一つの慣例だった。

ま、そんなに時間がかかるのが当然ってわけだ。

すぐできるわけがない。

パツパと完成させられるもんでもない。

俺だって仮面ライダーのスーツを作れと言われたら、一ヶ月は時間が欲しい。道具も無い。スーツの素材もない。何よりも午後だし、時間が無い。

(使える時間は……)

一時間。

使えるとしたら一時間だ。

元通りの素材・必要な加工機材無しで、一時間で一ヶ月の成果を模倣する。できるか？

(いや、やるしかないな)

予定通り撮影を進めるには、俺がスーツを突貫で直すしかないのだ。

このまま行けば、どう転がっても予定通りの期日で撮影は終わらない。

そうなるよ、映像のリリースは延期になる。

邪推や悪口が好きな消費者はこう言うだろう。

『あの監督は撮影期間の計算もできない無能なんだな』と。

そしてそういう悪評は、最終的な人気や売上に響くのだ。

どんなに頑張っても。

どんなに有能な人が集まっても。

そういう悪評一つで、番組や映画が得られたはずの人気や売上は損なわれる。

俺みたいなのは、表舞台に上がらない。

だからそういう悪評の影響は受けない。

世間というものは、監督や、プロデューサーや、脚本や、俳優ばかりを叩く。

俺みたいなのは褒められもしないが、叩かれもしない。

俺が頑張らなくても、俺に悪評はつかない。

本当は頑張らなくてもいいのだ、俺は。

だな。

ふざけんな。

誰にもそんなことは言わせない。頑張ってるんだぞ、監督も脚本も俳優も、みんなみんな！

番組の撮影は、つつがなく終わらせる。絶対に。

さて、やるか。

やるだけやってみます、なんて言わない。

できるか分かりませんがやってみます、なんて言わない。

俺がすべきことは一つだけ。

「やれます。一時間、時間をください。監督」

『できる』と言って、実際にやってみせることだ。

でなけりや。職人気取りの俺の腕に、価値なんてあるもんかよ。

彼だけが彼を天才だと知らない

現在の所持品を確認しよう。

撮影者の隅っこに転がっていたスプレーが六種類。

片方の目が完全にぶっ壊れたスーツ一着。

俺のポケットに入ってた金属ヤスリ等の手持ち仕事用具一式。

以上。

……結構詰んでる！ つらい！

「あの、おにーさん、駄目だったら……」

「大丈夫です。俺に任せてください、山森さん」

山森歌音ちゃんは、自分が壊したスーツを前に泣きそうだ。

子供を泣かせるわけにはいかねえよなあ？

何せ、ここは子供の味方・仮面ライダーの撮影舞台なんだから。

うーん。

どうすつかな。

とりあえず片目が壊れたスーツの、もう片方の目も引っこ抜いておこう。

「わー!？」

「の、残った片方の目まで!」

「何しとるんやキミー! えらいこつちややで!？」

「いやいや、片目残してたら駄目ですよ。」

この短時間じゃ絶対に同じ素材は揃えられません。

そうなるかと右目と左目の色合いの差が出て、ひと目で分かってしまいます。

それなら、両目とも外して両目とも同じ素材で一から作った方がいいですよ」

「む」

「それなら両目の色は揃います。」

視聴者は、左右の目の色が違えばすぐ気付きます。

でも両目の色が揃ってるなら、普段と少し色合いが違っても

『光の加減だろう』

と思ってくれるものなんです。まずは両目の色を揃えることを考えないと」

頷いてる。みんな分かってくれたようで何よりだ。

うし、まず前提だ。

素材の関係上、完璧に戻すことは絶対に不可能。

そんなでもって、今回の撮影一回分乗り切れればいい。

カメラの前で、同じ仮面ライダーに見えればいい。
つまり、だ。

長持ちしなくてもいいから、普段のスーツと同じように見える仮面ライダーの目を作り、このスーツにはめ込めばいい。

まず、そこを始点にしよう。

冷静に、一つ一つ考える。

現在の仮面ライダーの多くの目は、平成の時代に行われた革新……つまり、『ミラー素材の上に透明な素材を載せる』という構造で作られている。

下地のミラーが太陽光を反射し、それをミラーの上に重ねられた色付きの透明素材が乱反射させることで、電飾がなくても目の部分が輝いて見える仕組みだ。

鏡の上に色付きガラスを重ねた美しさ。これで、平成仮面ライダーの目を作っている。

つまり俺が今用意すべき素材は、『ミラー素材』と『その上に重ねる透明な素材』。
元の仮面ライダーの目に見える目を作るには、どうしたらいい？

……よし。よし。

見えてきたじゃねえか、完成像。

「赤っぽい下敷き！ 塩ビ製のやつ買ってきてください！」

あとできれば大きめのフォトフレームを！ 下敷きに合う大きさで！

どっちも百均に行けば買えるはずですよ！ 超特急でお願いします！」

スタツフさんの大人に向け、叫ぶ。

「分かった！ 20分で戻る！」

15分に戻ってこいやダボが！

「急がなくていいです、事故りますよ！ ああやっぱ事故らない程度に急いでください

！」

「ああ！」

ちくしように急いでくれよ、んでもって事故らないでくれよ頼むから。

「目の型作りますので、乾燥中は触らないように気を付けてください！」

木を急いで削り、目のパーツを作るための、木型を作る。

むかーしむかしその昔。

ウルトラマン、ウルトラセブン、帰ってきたウルトラマンという三作があった。

帰ってきたウルトラマンに新しく作ったスーツのセブンを出そうとしたところ、セブンの目の型がどっか行っちゃったので新しいスーツ作れませーん！ ってなったそう

だ。
バカなの？

おかげで仕事人目線で見れば分かるが、帰ってきたウルトラマンの18話に登場したセブンは古いスーツで、38話に出たセブンはアトラクション用のスーツだった。

後楽園遊園地とかシアターGロッソとかで使われてるアレだ。

何もかも目の型をなくした奴が悪い。

この話を聞いた俺は怖くなったので、大体のスーツの寸法を覚えておくことにした。

この配信ネットムービー限定の仮面ライダースーツの造形には俺も関わった。

寸法は頭の中に入ってる、余裕だぜ！

速く、速く、とにかく速く。

高速で型紙を引き、電動ノコギリで急いで木を切り抉ってざっと型を作り、手持ちの

金属ヤスリでゴリゴリと削ってから紙やすりで仕上げる。

よし、これでとりあえず仮面ライダーの目の型にはなった。

速乾ニスを塗って、で。

「すみませーん！ 演出用の扇風機借ります！」

「おう、持ってけ持ってけ」

扇風機の風を、ニスを縫った目の型に当てる。

あんまりよろしいやり方じゃないが、早く乾かしたい今はしょうがない。

とにかくこれで、10分くらいで仮面ライダーの目の型は出来るだろう。

こいつの上に加熱した下敷きを乗せたりして、目のパーツを作るのだ。

「いけそうなん？」

「できるといつたらやるのが俺ですよ、湯島さん」

湯島さん、今話しかけられても丁寧に対応する自信ないからやめてほしいな、うん。

あ、そうだ。

「湯島さん、ちよつと手伝ってくれませんか？」

「ええけど、何を？」

「撮影の備品漁りです。探すのは——」

「そうだ、今思いついたが、あれがあれば……」

「お、あったあった、これでええんとちやう？」

「！ ありがとうございます、湯島さん！ こんなに早く見つかるとは！」

「仕舞い場所を考える部屋の掃除のノリやな。早く見つかったのは運やで？」

「いやあれだと部屋の掃除が苦手な俺は一生見つけれなかったと思いますよ」

「容易に想像できるのが嫌やな……」

見つかったのは、仮面ライダーの撮影に使う、スーツの下に入れて細い体格を誤魔化す『アンコ』というものだった。

詰め物で体のラインを作る、というのは珍しい技法ではない。

仮面ライダービルド（2017年）の主人公・ビルドなら、スーツの生地内部にウレタンシートをキルト状に縫い付けることで、マツシブさを出している。

要するに、スーツに詰めた素材シートで、筋肉を表現している。

仮面ライダーエグゼイド（2016年）のクソかつこいい兄貴キャラ・仮面ライダーレザーは、アクションをしない撮影シーンなどでは、ブーツの中に中敷きインソールを入れてスタイルのバランスを取っている。

要するに、靴に詰めた厚い中敷きで、身長を補正している。

そして、仮面ライダービルドに登場した、主人公の相棒・仮面ライダークローズの強化フォームであるクローズチャージもまた、スーツの中にアンコという詰め物を入れている。

シートを縫い付けたスーツが完成品である仮面ライダービルドとは違い、クローズチャージの場合は、完成品のスーツの下に詰め物をして筋肉を表現しているのだ。

んでもって、クローズチャージのスーツの下の、二の腕と太ももに巻かれているアンコは、ポリエチレン樹脂というもの。

「……よし、当たり！ 透明ポリエチレン樹脂だ！」

湯島さんが見つけてくれた、スーツの下に入れるアンコの内容物は、俺の期待通りにポリエチレン樹脂……それも、透明ポリエチレン樹脂だった。

番組内で仮面ライダービルド、仮面ライダークロースと共に戦った三人目の仮面ライダー・仮面ライダーグリスには、胸に透明な装甲がある。

あの装甲は、着色した透明ポリエチレン樹脂製だ。

透明ポリエチレン樹脂はその名の通り透明で、かなり柔らかで……着色前ならば、加工すれば仮面ライダーの目にだって使える。

俺の予想通り、スーツアクターさんの詰め物の中には、透明ポリエチレン樹脂が入っていた。

透明ポリエチレンは溶解させるなら125度、変形加工するだけでも100度弱あればいい。

今の俺の手持ちでも、十分加工できる。

「出番だぜ」

俺は、道具袋からエンボスヒーターを取り出した。

女性のネイルを飾るジャンルの一つに、『エンボスアート』ってやつがある。

エンボスヒーターは、それに使う道具の一つだ。

が。

俺はネイルアートにまで手を伸ばしてないが、こいつをそこそこ使っている。

何せエンボスヒーターは、指でつまめるサイズのくせして、250℃という熱風を出

す。

ちよつとした素材くらいなら加熱して加工できるってわけだ。

スーツやセットを加熱してちよこつと直したい、って時には重宝する。

こいつを使えば、さつき掘り出してきた透明ポリエチレン樹脂を、仮面ライダーの目の形に整形することも不可能じゃない。

「下敷き買ってきました！　塩ビの赤です！」

「ありがとうございます！　いいタイミングです！」

塩化ビニール……塩ビは加工しやすい。

かつ、歴代の仮面ライダーにも使われてきた素材だ。

昔からずっと仮面ライダースーツの主流素材の一つであったウレタンは、銀色や金色を表現するために必要な銀粉を貼り付けても、すぐに剥がれてしまう。

よって西映は伝統的に、仮面ライダーや怪人のスーツの表面に塩ビを貼り付け、その上から銀粉を塗装する技術を使っている。

またそれ以外にも、仮面ライダーフォーゼのアクションスーツ等々、軽快なアクションをするためのスーツに塩ビが使われることは多い。

よって無論、俺も塩ビは使い慣れている。

買ってきてもらった下敷きの素材を、塩ビ指定にしたのはそのためだ。

(透明素材は集まった、色合いは厚みと塗料で調整するとして、後は)

俺は豪快に、監督の私用車の窓に貼られていたシート——内側から外側が見えるけど、外側からだだと鏡みたいにししか見えないうつ——を引っ剥がした。

「あー!？」

「後で弁償します!」

マジックミラー、ハーフミラー、って呼ばれるものがある。

要するに表から見ると鏡にしか見えないが、裏から見るとミラーの向こう側が見える、一方通行の鏡だ。

こいつの技術は鏡だけじゃなく、サングラス、車や家の窓に貼るスモークなどにもなり、フィルム状にして使われることも多い。

仮面ライダースーツ造形の世界において、サングラス同様に外からは鏡・内側からはガラスのように見えるこのフィルムを、『カバーグラス』と言う。

監督、悪い!

監督が車の窓にその手のフィルム貼ってたのはさつき気付いたんだ!

許せ!

ともかくこれで、『鏡』は手に入った。

材料は十分揃ったと言えるぜ。

完成形は見えた。

ミラーのカバークラスの下地に、先程掘り出した透明ポリエチレン樹脂を重ね、下敷きを加工した色付き透明層を重ね、本物と一見して見分けがつかない偽物を作る。

それ以外に、道はない！

「こつから本番、かな」

「が、頑張ってください！」

歌音ちゃんが応援してる。

うーん、なんつか。

仮面ライダーがステージで応援されてるのはよく見るが、俺が応援されることってほとんどないから新鮮だわ。

さて。

仮面ライダーは、複眼でなければならぬ。

例外の仮面ライダーもいるが、虫を思わせる複眼が必要なのだ。

そのためまず、ミラーフィルムに線を引く必要がある。

まず、ミラーフィルムを少し加熱して曲げ、立体曲線を作って冷やす。

硬いアメを加熱して柔らかくして、目の形にするのをイメージすればいい。

フィルムを加工し、適宜カットして、目の木型を使って、目の形に加工した。

「次」

次いで、ミラーフィルムにマスキングテープを貼る。

マスキングテープというのは、塗装の形をくつきりさせ、塗装する部分とそうでない部分をハッキリさせるテープだ。

例えば、□の形の白いプレートがあるとす。

プレートに凸の形にマスキングテープを貼ってから塗料を吹き付けると、上部の左右にだけ塗料の四角い形が付く。

プレートに凹の形にマスキングテープを貼ってから塗料を吹き付けると、上部の真ん中にだけ塗料の四角い形が付く。

プレートに≪の形にマスキングテープを貼ってから黒い塗料を吹き付けると、黒い塗料に染められた白いプレートの表面に、≪の形の白いマークが残る。

マスキングテープを貼り、スプレーを吹き付け、俺はハーフミラーフィルムに網目状の複眼を付けた。

まだ鏡にしか見えないが、銀色の複眼っぽくはなった。

ここにうつすらと赤色の塗料を吹き付ける。

「よし」

綺麗な色合いの赤の奥に、確かな網目状の線が見え、複眼が出来たように見える。

いい感じじゃね？

続いて、スーツアクターさんの詰め物から掘り出してきた透明ポリエチレン樹脂をカットし、目の型を使って指の半分ほどの厚みの層に加工する。

ここが難しい。

丁寧に、丁寧にやって、厚みに差が出ないように目の型に沿う曲面を作る。

そして次に、買ってきて貰ったフォトフレームに、下敷きをセットする。

フォトフレームは写真や絵画をセットするあれだが、これに下敷きをセットして目の型の上に乗せると、当然目の型の上に乗っかる。

ここで、下敷きをエンボスヒーターで加熱する。

するとフォトフレームの自重で、フォトフレームと下敷きはゆったりと下降し、下敷きは目の型に沿って熱変形し、目の型の通りに形成される。

透明ポリエチレン樹脂の包材で上から少し押しやって、最終的に綺麗に整形してやれば、冷えた頃には立派な赤い塩ビ製の目の完成だ。

この技術を、俗に『ヒートプレス』と言う。

後は、透明ポリエチレン樹脂と赤い塩ビのバランスの悪いところを調整し、細かな加熱と加工で全体の形を整え、最後に加熱して接着だ。

ミラーの上に線で描いた複眼と塗料を乗せたものに、指の半分ほどの厚みの層に加工

した透明ポリエチレン樹脂を乗せ、その上に下敷きを加工した赤い層を乗せ、接着する。
塗料で調整、調整。

これで仮面ライダールの複眼の部分が出来た。

後はミラーガラスの光の反射と、ポリエチレン、塩ビの透過率を計算して、目立たないように覗き穴を空けて視界を確保。

そしてマスクに二つの目をセット。

……うん、よし、アップにしない撮影レベルなら問題ない出来だな。

これで何とか、アクションに耐えるスーツの目の造形が完成しました。

つかれた。

ゆっくりやれば疲れなかったかもしれないが。

超特急で普段の数倍くらい速度でやったから、つかれた。

「おお……よく、よくやってくれた！ これで撮影が続行できるぞ！」

喜びの声が聞こえる。

俺を褒める人の声が結構聞こえてる気がする。

でもなんか疲れたから聞こえねー。

「おつかれさん」

湯島さんに労われた気がするが、まあ気のせいじゃないな多分。

死に体に鞭打って、監督に忠告を出す。

「監督、おそらく綺麗に見えるのは撮影数回が限度です。」

今日の撮影が終わったら、正式な修理に出してください」

「分かった。助かったぞ」

そりやそうだろ、俺がいなきや無理だったんだ、もつと俺を潰えやがれ。

でもこれ俺の通常業務扱いだから多分お給料に反映されんよな。

スーツが壊れたら直すのは俺の仕事でしかないし。

っらい。

帰ったらプリン食おう。

「だがまさか、本当に一時間だけで余裕綽々に終わらせるとは……君も親父に似てきたな」

「本当に一時間で終わらせられる案件だったら楽だったんですけどね」

「？」

「いえ、なんでもないです」

今回のものは雑に言ってしまうえば、綺麗な模様を付けた鏡の上に透明な素材を乗せ、その上に色付き透明の下敷きを乗せただけのものだ。

だが、現代において『プロしか使ってない特別な素材』というものはほとんどない。

昔は『キングコング対ゴジラ』でキングコングの気ぐるみを作るため、貴重なヤクの毛を取り寄せていたりもしたそうだが、現在ではそんなことはほほしくない。

誰でも手に入れられる材料や素材でスーツを作ることがほとんどだ。

素材だけで見れば、どんな仮面ライダーも安っぽく見える。

仮面ライダーウィザード（2012年）の目にあたる部分も、言ってしまうえばミラーグラスの上に透明ポリエステルのカバーを被せたただけだ。

仮面ライダーカブト（2006年）の目にあたる部分も、ざっくり言えばミラーゴーグルの上に、着色したアクリル板と、光の向きを散乱させるアクリル板を被せたただけだ。

だがどちらも、美しい顔面造形の仮面ライダーの代表格と言われる存在だ。それは何故か？

技術があるからだ。

それを格好良く仕上げ、意図した形と色合いに仕上げる技術があるからだ。

習得するのに何年もかかる技術が使われていたから、仮面ライダーウィザードも、仮面ライダーカブトもかっこいい仮面ライダーだった。

当然のことだけど、技術を磨いた時間の積み重ねがない素人だったら、一時間じやこの修理は絶対に無理だったと思うぞ、こんなにやろう。

撮影絶対間に合わなかったからな。

あんたが監督だから面と向かっては言わんが、反省して管理体制考えてくれよ。俺は一時間で修理をこなしたんじゃない。

俺は、十八年と一時間で、この修理をやった。それだけの話だ。

「ふう……」

「あの、ありがとうございますっ！」

「ああ、山森さん。いいですよ、気にしないでください、これが俺の仕事ですから」

ま、このちっさい子の感謝と笑顔だけで、この苦勞の甲斐はあったと思うことにしよう。

技術があれば。

誤魔化しは効く。

リカバリーはできる。

他人のフォロワーだってやれる。

俺の人的価値って奴は、ほとんど全てがこの技術に立脚してる。

「撮影頑張ってください。応援してます、山森さん」

「……はいっ！」

元気に駆けていく山森さん。

子役だけど、7歳だったっけかな。

初めて会った時の湯島さんもそのくらいの歳だった気がする。

つと、いつの間にか湯島さんが近くにきてる。

「顔に疲れが出とるし、もう帰った方がええんとちゃう？」

「……ん、そうですね、そうしますか」

「なんかこう、スタッフが皆気合入ったー！ みたいな顔しとるね。

君の影響で、私もなんかこう、気合い入れてやらないと！ っで感じになったわ」

ううむ、疲れが顔に出たか。情けない。

日本の映画の世界で、最年少子役と言えば芦口愛菜さんだ。

三歳の時にオーディションを受け、六歳の時にドラマの主演を努めている。

世界レベルでの子役の天才ならクバンジャネ・ウオレスさんだろう。

五歳で受けたオーディションに受かり、六歳で映画の主演を努め、その時の映画の名演で九歳にして第85回アカデミー賞主演女優賞にノミネートされた怪物。

特撮の裏方をやるための危険物取扱資格だって、俺は小学五年生の時に取ったが、歴代最年少の資格取得者は小学二年生の八歳だ。

今でも『ウルトラマン歴代で最高のアクション』と評されることが多い、ウルトラマン80のスーツアクター・青坂順一さんなんて、12歳の頃に演劇集団入りしてるんだ

ぞ。

それが天才って奴らの世界。

化物の世界だ。

芸能界に早く入れればいいってもんじゃない。

昔天才と持て囃されてた人間が、次第に凡人になっていくパターンだって非常に多い。

だがそれでも、天才ってやつらはやはりエピソードや経歴からして、格が違う。

天才って奴は、こんなことで疲れを顔に出してしまう俺とは何かどこかが違う。

例えば、百城千世子なら……あの今の若者世代の頂点なら、どんなに疲れていても、それを顔には出さなかつただろう。

まだ俺には力量が足りない。

精進せねば、だ。

スマホを取り出し、電話をかけて、他の職場の進捗を確認する。

「アキラさん、どうですか？ ウルトラ仮面の撮影、問題なく進んでいます？」

今日の仕事はこの辺にしといて、明日からの仕事の準備でも始めるか。

ああ忙しい。

「すみませーん、俺先帰ります。今回のこと西映東京撮影所に報告してきますね」

「おつかれ！」

「今日は助かったよー！」

「あ、ロケ弁持って帰る？ 君ならいくら持って帰っても誰も文句言わないぞ」

「いただきます」

俺は製作者だ。創作者じゃない。

俺は他者の表現を形にする者だ。映画監督や俳優のような表現者じゃない。

俺は俺を魅せる人間じゃない。

他人を魅せる者だ。

作品を作りたいという監督が、自分の表現したいものを形にするため、他者を魅せる

ため、技術が要る時。

出演した俳優が、自分自身の演技を最大限に活かすため、他者を魅せるため、技術が

要る時。

その時初めて、俺という存在に価値が生まれる。

呼んでくれれば、どこでも行くさ。

必要としてくれるなら、俺の腕でいいのなら、いくらだって貸してやらあ。

『誰も見たことのない光景』を人々に見せるのが創作者なら。

俺は、まだ誰も見たことのない『監督達の頭の中にあるそれ』を、人の目に見える形

にするのが仕事。

俺は何も創らない。

ただどあらゆる物を造れなければならない。

でなければ、何を作る意味も無い。

大体の場合、成功した映画や番組においてインタビュが行われるのは、メインの俳優、監督に脚本にプロデューサー、そんなもんだ。

エランドール賞だって、基本的には監督や俳優やプロデューサーが受賞してて、それ以外が受賞する時も『特別賞、〇〇製作チーム』って一緒にたに表彰される。

でもまあ、いいじゃねえか。

そういうのも悪くないと俺は思う。

俺の努力が誰かの栄光と成功になる。

それを誇らしいと思う気持ちだが、ここにあるんだ。

ならないじゃねえか、と思うわけだ。

あら、スタッフさんが話しかけてきた。

「ところで君さ、さつき君が仮面ライダーの目を直してる時もあったけど……

汚れる作業する時、君別のシャツに着替えてたじゃない？

でもそのシャツなんか特徴的だよね。

数字の753だけ書いてあるシャツって絶妙にダサイよね。何かの罰ゲーム？」

「……ははは、まあ気にしないでください。ではお先に失礼します」
名護さんをバカにするな、殺すぞ。

意外と今日は早めに帰れたな。

ただいま、俺の家。

「たまには家も掃除しとくか」

親父は死んだ。

おふくろはそれより早くに死んだ。

俺は一週間の内四日くらいは、自宅じゃなくて俺の事務所で寝泊まりしてる。

家で寝る日より事務所で寝る日の方が多くなった時点で、俺がこの家に帰る意味はなくなつた……けど、なんだかんだ、親父やおふくろと過ごした家は捨てられないでいる。

一週間の内三日くらいしか人がいない、それも寝る時くらいしか家にいないというこ

の家は、普段さぞかし寂しいことになってるだろう。

しょうがない。

俺も基本は仕事人間だ。

「あ、夜風さん」

「あら、お隣さん」

む、お隣さんの夜風さんとぼったり出会ってしまった。

「お隣さんの、黒くて長い髪の綺麗な容姿の女の子……名字は夜風さんで合ってた、よな？」 表札を結構前に見た気がする。

珍しいな、会うのは。

いや悪いのは俺か？

「お隣さん」と 会うのが珍しい”レベルに家に帰ってないのがいかんのか？

いかん、近所付き合いつてやつが全然できてねーわ俺。

「あの、これ職場で貰った貰い物のお弁当なんです、いくつかどうですか」

「えっ、いいの？ これが映画で見たお隣さんのおすそわけというやつなのかしら」

「ええ、まあ、はい」

弁当で……近所さんの機嫌を取ろうとしてる俺は浅ましいにもほどがあるな……

「ありがとう。今日の晩御飯の献立を考えなくて済むわ、お隣さん」

「……ああ、そういえば、名乗ってませんでしたっけ」

この人は俺の名前を知らない。

俺はこの人の名前を知らない。

まあ、そんなもんか。これからはもうちよつと、家にめつたに帰らないとしても、たまーにくらいにはご近所付き合いをしよう。親父はちゃんとしてたし。

「貴方の名前は？」

聞かれたなら答えるしかない。

”親父あの人のこと尊敬しすぎだろ”って感想しか出てこない、俺の名前を。

「朝風英二あさかぜえいじって言います。どうぞよろしくおねがいます」

「私は夜風景よなぎけい……でも、何をよろしくすればいいのかわからないわ」

俺も分かんねえよ。

とりあえずよろしく、お隣さん。

古来、天才芸術家は天使の絵や像と共に在った

俺の今のメイン業務は日曜朝の子供向け番組・ウルトラ仮面の補佐である。

そもそも俺はフリーランス。

特にどこかの企業に属してゐるわけでもなく、けれども給料と引き換えに雇われればどこの会社においても社員のよう働く。

そのため、俺のポジションは雇われる度に変動する。

美術監督をやったこともあったし、バイトと一緒にされたこともあった。

ウルトラ仮面の製作現場において俺は、美術監督の下くらいに位置している。

現場レベルの話で言えば、監督が「こういうのを作りたい」と指示を出し、脚本がシナリオを／美術監督が絵作りを始め、脚本に沿って俳優が演技練習を／俺が美術監督の指示に沿ってセットや道具を作っていく感じの流れになっている。

ただそれ以外にも、総合的な玩具や関連グッズの造形の話し合いに、顔を出すこともある。

現在、仮面ライダーや戦隊シリーズなどの日曜朝のヒーローものは、パンダイなどの玩具屋・西映のプロデューサー・造形の会社が話し合つて

「どういう作品にするか」

「どんな玩具を出していくか」

を最初に決めてから、番組を作る監督達に下達されるスタイルになっている。

要するに『この玩具を出してこういう番組を作つてね』という部分が最初から決まってるのだ。

当然、この初期方針を決める話し合いはかなり白熱する。

白熱しすぎて、後に食い込みすぎることもある。

例えば仮面ライダー電王（2007年）は2007年1月28日開始の番組だが、仮面ライダーの名前もデザインも決まっていない企画提出が2006年6月。

メインキャラクターのデザインの決定稿が出揃ったのが2006年8月から9月にかけてである。

スケジュールギリギリすぎじゃね？

でも面白かった。

万人受けする傑作だと思っぜ。

その翌年の仮面ライダーキバ（2008年）は2008年1月27日開始の番組だが、2007年5月の時点でそれまで進めていた企画を全部白紙にし、七転八倒の末にやっと決まったらしい。

造形の会社の方の都合で、企画が連鎖崩壊して全部白紙にしないといけなかったって話だ。

こつちも相当ギチギチじゃねえか……

でも面白かった。

万人受けはしないがドロドロした人間模様から爽快感のある結末、本当に最高だったぜ。

名護さんは最高だ。

西映の慣例だと、平成仮面ライダーは前作の放映開始から二ヶ月後に次作のキャラクター提案がパンダイから行われ、そこを叩き台にして、話し合いが始まる。

ここでようやく、俺が関わってくる。

まあつまりだ。

パンダイは俺に、玩具展開の一つを任せてきた。

ウルトラ仮面の次の商品展開を見据え、玩具会社、特撮会社、造形会社全てが納得するような一品を納めてくれと依頼してきたのだ。

それが——『バイク』だった。

現代、バイクというものは、過激に言えば需要として死滅しかけていると言っている。俺はバイクは好きだ。かつけえし。

だが、かつての仮面ライダー達が走り回っていた時代ほど、子供達や若者はバイクというものに憧れを抱かなくなっている。

バイクの売上ピークは1982年（仮面ライダースーパー1翌年）の時代で、その後売上は下がり続け、2016年にはそのピーク時の一割程度まで売上が低下したと言われている。

つれえ話だ。

んでもって仮面ライダーなどにも、交通法の規制が入った。

昔ほど、仮面ライダーのバイクは自由に公道を走れなくなったわけだ。

バイクの人気低下に加え、こいつが追撃として突き刺さる。

その結果、仮面ライダー本編でのバイクの登場頻度の低下に繋がりに、バイク関連の商品展開の縮小化に繋がっていった。

つまりだ。

この時代、バイクを売りにするのはキツいって分かりきってるわけで、その上でこんな仕事を俺に振るのは、とんでもねえ無茶ぶりだっつーことだ。

ウルトラ仮面の新展開、それに合わせた新バイク。

こんなもんどう仕上げてても期待を下回る気しかしねえ。

作っても作っても満足行く仕上がりにならない。

考えても考えても『これだ』っていう結論が出ない。

駄目だ。

上手くないかん。

俺は駄目だ。

「根を詰めるとよくないよ」

「アキラさん」

「コーヒー淹れたけど、飲む?」

「……いただきます」

いい人だわ、アキラ君。

俺は現在、西映私有地の片隅でアキラ君とあーだこーだとバイクの試行錯誤をしてい
た。

『星^{ほし}アキラ』。

現在業界最大手の一つである芸能事務所・スターズの顔の一人であり、スターズ社長星アリサさんの息子さんでもある。

要するに、彼に何かあればお偉いさんが黙ってないおぼっちゃまだ。
が。

ただのおぼっちゃまじゃあねえ。

割と背も高い。

スタイルもよくイケメン。

一定上の演技力もあり、日曜朝のヒーロー番組の主演もすっかり果たしている人だ。かつ努力家で、撮影初日は大して動けてなかったが、撮影の途中からは生身で怪人と戦闘シーンも撮れるくらいには動けるようになっていた。

一年間毎週放送するために、毎日のように過酷な撮影スケジュールをこなすのが日曜朝のヒーロー達だ。

撮影の合間にもコツコツ努力することがどれだけの負担だったのか、俺にも分からん。

一年間撮影を続ける日曜朝番組と一緒に仕事したからこそ、俺はこの人の努力家な面に気付けたが、そうでなければ気付けたかも怪しい。

おかげで子供や女性からの人気は絶大だ。

しゅつとしたイケメンで、素の性格もよく振る舞いもかっこいい。

俺はあんま背が高くないから横に並ばれるとクソが死ねとつい思ってしまうが、死んではならない芸能界の次代のエースの一人だろう、と俺は考えている。

何より彼と俺は、映画の趣味が合う。

LINEとかで話してると楽しい。

俺も彼も特撮ヒーローものの映画が好きなんだぜイエイ。

そんな彼の力を借りても何も思いついてないダセえ役立たずが俺だ。

情けねえ。

バイク作りに詰まった俺がLINEでアキラ君に相談したところ、アキラ君は「オフだったから」とすぐ駆けつけてくれた。

僕が主演の番組の新展開のバイクなら、僕がいたほうがいいだろう、と言って。

いい人すぎねえかこいつ、頭大丈夫か？

振る舞いがかつけえ奴は性格もかつけえのか、ぱねえ。

アキラ君の助言を貰ってすぐ解決、ってなったなら俺もカッコつけられたんだがな

あ。

駄目だ。

完成図すら見えてこない。

駄目だ。

あ、コーヒー美味い。

「こういうのは一つ一つ決めていった方がいいかもしれない。何か決まった部分はあるかい？」

「決まった部分、ですか」

おぼろげながら、色合いにはうつすらとイメージがある。

「塗料は、要所にマジヨォラを使おうと思ってます」

「マジヨォラ？」

「キングギドラや仮面ライダーで使われてる分光性塗料です。

携帯電話や車、電車なんかにも使われてることがあります。

MAGIAとAURORAの名前を混ぜてマジヨォラ。

『魔法のオーロラ』の名に恥じず、複数の色合いを表現する優秀な塗料ですね」

マジヨォラは、日本ペイント社が開発した分光性塗料だ。

こいつは五層構造のクロマフレア顔料……まあざっくり言うと、塗料の中に層が作られていて、それらが光を個別に反射するようになってるんだ。

イメージとしては、赤い鏡と青い鏡を溶かした塗料をイメージすりゃいい。

光を当てると、赤い鏡と青い鏡が個別に光を反射して、見る角度によって全然違う鮮

やかな——かつ複雑で美麗な——色合いが見えるってわけだ。

オペイク・リフレクター・メタルと呼ばれるこの仕組みが、塗料の世界にかなりの革新をもたらした。

”緑の奥に金色が見えるメタリック”といった、目を疑うような色もこの塗料のおかげで鮮やかに描けるようになったってーわけだ。

こいつを一躍有名にしたのが、凝り性なスタツフが集まりこだわりまくったことで有名な仮面ライダー響鬼（2005）。

主役の仮面ライダー響鬼の全身に使われたアンドロメダIIという名称のマジョーラが、響鬼を最高にかっこいい仮面ライダーに仕立て上げたのだ。

アンドロメダIIはシアン&パープルのマジョーラで、これによって響鬼は見る角度によってシアン、パープル、そしてその二色が混ざった色に見える。

これが実に生物的な色合いを醸し出し、『ただの人間が修行の果てに辿り着く戦闘形態』という響鬼の異例的な設定と、実によく噛み合ってたってわけだ。

響鬼は顔部分もグラデーション仕立てにしてたもんだから、この光によって変化する響鬼のマジョーラカラーとは相乗効果を起こす、まさしく芸術的な仕立てだったってわけよ。

マジョーラは優秀だ。

だが、優秀な分扱いも難しい。

色つてのは増やせばいいってもんじゃない。良い色を使えばいいってもんじゃない。色を増やしすぎればごちゃごちゃしてかつこ悪いし、鮮烈な色を沢山並べれば目に痛い気持ち悪いしで褒めるところ無しだ。

めんどくつせえ。

だがやりがいはあるってもんだ。

何より、色だけ決まっても仕方ない。

バイクをマジョーラで仕立てることを決めたなら、さつさとデザインそのものも決めちまわないと話が進まねえ。

「……しようがない、最後の手段で行ってみますか」

「へえ、最後の手段？ 君がそう言うのは珍しい」

「発泡スチロールの削り出しをやめて、バイクの実機で実際に製作してみます。」

「実物大のバイクでモデルを作ってみれば、何か新しいイメージが湧いてくるかもしれない」

「それはまた、豪快だなあ」

発泡スチロールには、三種類の製法がある。

その中でも最も有名なのは、ビーズ法発泡スチロールだろう。

叩いたりぶついたりすると小さい白い粒になるアレだ。

一般人は『発泡スチロール』と聞くと、まずビーズ法発泡スチロールを想像する。こうした粒になる物とは別の発泡スチロールをナイフなどで削り、簡単に加工できるミニチュアのメカにしたり、着色して川のセットの小石等に使う。

これを撮影の世界では、『カポック』と言う。

俺は今日までカポックで色々バイクのモデルを作ってきた。

だが、いつまで経っても完成形が見えてこない。ピンと来る形が見えてこない。

だから西映の倉庫に眠ってたバイクを借りて、とりあえずの仮装甲を色々付けて、アキラ君にも感想を聞いてもらうことにした。

ま、いいだろ！

西映やたらバイクあるしな！

仮面ライダー剣の時代には本編の仮面ライダーが使うバイクが4種類しかなかったのに、ホンダのバイクだけでも撮影に14種類のバイクを使ったらしい。ホンダの人が言ってた。

なんでそんなに無駄な数のバイクを……いやまあそれはいいか。

借りてきたバイクを据えて、使うかもしれない素材と塗料片つ端から揃えて、よし。

「アキラさん、離れててください。」

切断時に飛ぶ破片や、塗料なんかがそっち飛びますから」

「気にしないでくれていいよ、大丈夫だから」

「死にますよ？」

「……え」

「昔は俺みたいな仕事してた人、よく早死にしてたんですよ。」

有機溶剤はシンナーを始めとして、吸いすぎれば脳は萎縮し、血管はボロボロに。

吸い込んだ塗料の粉は肺の内側に張り付いて一生取れません。

FRP（繊維強化プラスチック）や金属の欠片は切断時に飛んで失明もあります。それから」

「うん、わかった。大人しく離れてることにする」

分かってくれたようでよろしい。

俺も作業に合わせてマスク、ゴーグル、手袋は使ってるんだ。

危ないから近寄らんでくれ。

あんたの顔は俺と違って商品なんだから。

「ヤッ」

まず、カッターナイフで木の板をサクサク切り刻んで……よし、ここから塗装して、今の俺の脳内にあるイメージを再現するためにバイクに貼り付けよう。

「カッターナイフで木の板を!？」

「アキラさん、もうちよつと離れてください」

「えっ、今のどうやって」

「刃にちよつと仕組みがあるんですよ。それだけです」

カッターナイフの刃には工業なんかで使う『黒刃』ってやつがある。

刃が黒いカッターナイフの刃みたいなもので、近年はホームセンターにも並んでる。

表面が黒いのは青色酸化皮膜つっ—表面処理をしてるから、らしい。

こいつの特徴は、普通のカッターナイフの刃よりも遥かに鋭利に研磨された鋭い刃だ。

カッターナイフでダンボールを切るのに苦労する人間とかいるらしいが、こいつを使えば誰が切ろうと、ダンボールも薄紙同然。

現在の仮面ライダーのアクション用スーツくらいなら、スーツの上からぶつ刺して中の人を殺すことだってできるだろうな。

プラスチックでもスパツと落ちる。

指もうっかりでスパツと落ちる。

鋭く薄いもんだから下手に使えば切れ味だってゴリゴリ落ちる。

そんな、普通のカッターナイフよりちよつと使いにくい黒い刃だ。

切れ味があるもんで、刃筋を立てて上手く走らせれば、細い板を切断するのにノコギリを使うよりよっぽど速く切断できる。

要するにアレだな。

映画とかでやたら優れた武器として扱われる日本刀の同類。

切れ味良いけど、刃が欠けやすく、扱いが難しいってやつだ。

「それと、強度が……補強しておくか」

実際にバイクを走らせてみて転倒した時のことを考え、ステンレスをちまちまと切断し、ペンチで変形させて木の板だけの装甲を裏から補強していく。

使うのは、ドイツのエッセイ社の金属切断用ハサミだ。

ハサミといえば紙を切るもの、というイメージが日本では強い。

だが、強化プラスチックや金属を切断するためのハサミというものも存在するものだ。

エッセイ社製ののであれば、金属切断用と銘打たれているものも、防弾チョッキなどの素材であるアラミドファイバーをスパスパ切断できるのが売りなものもある。

つか、ドイツ製のこの手のハサミは大体優秀なんで、安めのハサミを買っても十分だ。

ドイツスリップスあたりなら、ホームセンターなどでも置いてるし、金網だつて余裕、慣れてれば厚さ1mmくらいのステンレスを切ることも難しくない。

犯罪にも使われてることがあるらしい高性能ハサミ！ いやそれはよくねえことだな。

俺みたいな職業の人間は、私的に購入して持っておくに越したことはない。持っておくとクソ便利でとてもよろしい。

「て、鉄の板が銀色の折り紙みたいにスパスパ切られてる……」

「コツは刃筋を上手く立ててることですよ。後でアキラさんもやってみますか？」
「え、じゃあ、やってみようかな」

後で、ちゃんと安全確保してからな。

「朝風君は、何をそんなに悩んでいるんだい？」

あんたみたいになだかつこよくあれば良いってもんじゃないのさ、ヒーロー。

「現在の西映特撮番組に出すバイクなら、必要な要素は三つ。

まず、単純なかつこよさ。

次に、ギミック。

最後に、売れる要素。この三つが揃っていないと駄目だと思われます」

「バイクの三つの要素？」

「まず、かつこよくなければ売れない。

そして、子供がガチャガチャ動かして遊べるものでないと売れない。」

なのでバイクに合体機能や変形機能を付けて、玩具にも反映するんですよ。

子供は自分の手でガチャガチャ動かせる玩具が好きですから。

平成仮面ライダーの変身ツールで、スマホよりガラケーが人気なのはそういう面もあります」

「ああ、なるほど」

子供は意外とかっこいいだけの玩具を、かっこよさだけで愛さない。

動かない玩具でもいわゆる『ブンドド』して遊ぶ。

子供がその手でガチャガチャ弄れるということが、その時点で玩具の売りになるのだ。

西映はそのあたりをよく分かっている。

初代仮面ライダーの大ヒットは、1971年に発売された『光って回る変身ベルト』が子供達に大受けしたこともその理由である、と言われている。

子供でも遊べる単純さで、子供が操作すると光って回るこの変身ベルトは、当時二年間で380万個売れたって話だ。

消費者物価指数は2017年が100.5、1971年が33.5だったから……現在の価値に換算すりゃ、ベルトの売上は171億円相当になる。やっべえ、初代様のこの売上頭おかしいぞ？ ベルトだけで年収85億って何？

「そして最後に三つ目の、売れる要素。

これがあるとパンダイさんや西映のプロデューサーからOKが出やすいです」

「だ、打算！」

「俺はこの15年で売れるかどうかを軽視して潰れた特撮会社を沢山見てきたので……
売れない商品を購入すんのはちよつと、いやかなり気が引けます、はい。ごめんなさい」

俺の仕事を勘違いしちゃならない。

俺は芸術家じゃねえんだ。

ウルトラ仮面も、俺一人で作ってるわけじゃない。

芸術家みたいに好きなように作りたいもんだけ作って、結果売れませんでしたじゃ、他の関係者に合わせるツラがない。

かといって、かっこよくて売れるバイクならなんでもいい、ってわけじゃない。

「ただあんま細かすぎるディテールにすると、造形会社さんに怒られてボツくります」
「難しいね」

「難しいんですよ。細かすぎる造形は壊れやすいですし、金型も作りにくいんです」

必要なのは三要素。単純なかっこよさ、ギミック、売れる要素だ。

売れない造形は、玩具屋のパンダイがボツを出す。

かっこ悪すぎる造形は、ヒーローに詳しい西映がボツを出す。

実際に作るのが難しいくらい、複雑過ぎたり芸術的すぎたりする造形は、ブレックスや虹色企画といった造形会社が出す。

そういつた前提で、それぞれがアイデアを出し合うんだ。

こうすることで、いつも一定以上売れ、いつも一定以上のかっこよさを維持し、製造コストと製造難度を低めに抑えたシンプルかつスタイリッシュなヒーローやバイクができる。

これが、現在の西映ヒーローの企画システムなのである。

一種の三権分立みたいなものだ。

こいつが毎年新しいヒーローを生産するという無茶を、商業的に成立させる。

仮面ライダーの場合はここに岩森プロの監修も加わるため、更に手堅い企画運営システムが出来上がってるってわけよ。

ウルトラ仮面という番組も当然、このシステムの一環に組み込まれてる。

この三権分立システムを突破する物を作るのは容易じゃねえ。

アキラさんの主演番組だし、なんとか成功させてやりたいもんだが……そう思っても、いい感じ物は思いつかねえんだよな……シット！

「朝風君、提案なんだが」

ん？

「僕の方をバイクに合わせてみたらどうだろうか？」

「アキラさんの方を……バイクに合わせてる？」

なんじゃそりゃ？

「他のドラマでの話を思い出したんだ。

ドラマの企画を通したかったそのプロデューサーは、一計を案じた。

自分が考えていたドラマの舞台を作り、女優を借り、作りたいドラマの雰囲気を見せ
たんだ。

そのプレゼンで『このドラマの企画は当たる』と思わせ、企画を通したそうだよ」

「雰囲気を……見せる……」

「バイク単品では審査を通る質にはならないかもしれない。

でもそれなら、例えば僕が着替えてバイクに跨っている姿の写真なら？」

僕という添え物を添えて、審査を通る『一枚絵』を作ってみるといのもいいんじゃないかな」

「……！」

「大切なのは、君が作ったものが、最終的にどういうプレゼンになるかさ。

誰も、君が作ったバイクが売れるかどうかなんてわからない。

偉い人達は、君が作ったバイクデザインと、そのバイクのプレゼンを見るんだ」

プレゼン。

プレゼンか。

確かに、バイク単品のデザインや特異性で売ることばっか考えてたな、俺。

”星アキラに合うバイク”という売りなら、別の方向性も見えてくる。

近年の特撮バイクは、変身後の姿とマッチするように作られてる。

だが、変身前の姿にも、変身後の姿にも合うデザインのバイクなら、十分な強みになる。

それにしても、ヒーローとセットのバイクか。

そういえば昔、バイクの玩具にはそれにまたがるレーサーの人形もちゃんと付随して、レーサーの人形の出来も売上に影響したって話を聞いたことがある。

「なるほど、盲点です。ありがとうございますアキラさん。ちよつと光明が見えてきました」

「君の助けになったなら、何よりだ」

技術屋でしかない俺にこういう視点はありがたい。

「バイクが完成したら飯奢らせてください。面白い店と美味しい店、どっちがいいですか?」

「え、なんだいその二択……面白い店が気になりすぎるじゃないか」

「へへ、それじゃ面白い店に今度ご案内しますよ。期待しといてください」

お連れするぜ、『仮面ライダー・オブ・ダイナー』へ。

『仮面ライダー・オブ・ダイナー』は、仮面ライダーシリーズとパセリリゾーツがコラボレーションした公式レストラン。

本家撮影の関係者や、本家仮面ライダーの俳優が入り浸ってることでも有名だ。

東京池袋駅から徒歩二分でアクセスもいい。

だが何よりも、その特徴的なメニューが話題になり、客の目を引く斬新なメニューが売りである店だ。

クウガのラスボスをネタにした『ン・ダグマ・ゼソバ』はまぜそばとして割と美味かった。

逆に主人公をネタにした『喫茶ポレポレ雄介特製カレー』も中々に美味かった。

でもアマゾンのイユの目玉ケーキはちよつとオススメできないぜ。

誰だよ目玉ケーキに赤いフルーツソースかけようとか思いついた料理人……

「それより、いいのかい？ もうそろそろ時間的に危ないんじゃないか、朝風君」

「えっ？ ……あっ」

あ、やべっ、今日は午後から仕事あんのに！ バイク作りに熱中しすぎた！

「すみません！ アキラさんを呼んでおいて、置いて行くような形になって……」

「気にしてないさ。君が慌ただしいのはいつものことじゃないかな」

マジでごめんなさい。

「千世子君によろしく。彼女のことだから、誰によろしくされる必要もないかもしれないが」

そうなんだよなあ。

彼女くらいになると、俺の腕もあまり必要じゃない。

仕事場に入った時、そこはCMの仮撮影中だった。

俺は第一声も忘れ。

CM撮影の手伝いに来たことも忘れ。

ただ、『彼女』に見惚れていた。

幼く、無邪気で、悪戯で、それでいて美しい、そんな少女。

男女問わず魅了する少女。

大衆の最大多数人種から愛される少女の姿を完璧に演じられる怪物。

だから彼女が微笑み動けば、見慣れた俺でも目を奪われる。

(相変わらず、綺麗だな)

百城千世子は、美しかった。いつものように、それが当然であるように。

(CMの監督を探すか)

時代の変化は、特撮の撮影にも影響を及ぼす。

その中でも、怪人の造形にまで影響を及ぼしてしまったのが、仮面ライダーBLACK

K RX(1988年)と仮面ライダークウガ(2000年)の間の断絶……いわゆる、

昭和ライダーと平成ライダーの間の十年の断絶だ。

この断絶の間、仮面ライダーはずっとテレビのレギュラー枠では放送されてなかった

んだと。

これが、クウガの撮影に影響を及ぼしちまったんだ。

世はテレビの革命時代。

BLACK RXが終わってからクウガが始まるまでの十年で、一般家庭に普及して

いるテレビの質は一気に上がり、これが撮影スタッフの間でも問題に上がり始めてい

た。

つまり、『テレビ画質が上がったことでスーツのシワが見えてしまうのでは』という問題が出てきちまったわけだ。

そうして生み出された『仮面ライダーの敵である怪人』が、クウガの『グロンギ』、アギトの『アンノウン』だ。

グロンギやアンノウンは装飾が多くて洒落てる、って感想を見た覚えがある。

怪人スーツを作り、後からそこにセツトする衣装を作っていくグロンギとアンノウンのスーツの製造方式は、何も知らないときぞかしオシャレに見えるだろう。

だがあの装飾は、大体がスーツの劣化やシワを隠すためのものだ。

特にスーツの部位の中でもシワが寄りやすい股間部分は、腰布や腰アーマーで隠しているパターンが多い。

そういう視点で見れば、グロンギやアンノウンの“装飾で股間を隠している率”が異常に高いってことにも気付けるはずだ。

つまり、グロンギやアンノウンの衣装つてやつは、オシャレで付けてるわけじゃない。

あれは画質がどんどん高くなっていくテレビから、シワが寄った部分を守り隠す、一種の鎧だったってわけさ。

(まったく、彼女は相変わらずだな……)

年食った俳優は、シワの出る肌を気にしてカメラを変な目で見ることもあるっての

に)

高画質なテレビ、高画質なカメラ。

それはスーツのシワだけでなく、女優の僅かな肌の荒れすらも映し出してしまふ。

技術の発達は、美しさを売りにする女優の僅かな隙すら撮影してしまふ、女優にとつては生きにくい時代になった。

それでも俺は断言できる。

百城千世子を撮影しているあのカメラに、百城千世子の商品価値を落とすようなものは、一切映っていない。

百城千世子が、そんなものを映させない、完璧な立ち回りを演じきると断言できる。

(お、車……：そーいや今回の仕事は、車屋と百城千世子による新車のCMだったな)

近年、『Thunderbolt Fantasy 東離劍遊紀』という作品を研究する機会があつた。

サンダーボルトファンタジーは、簡単に言つてしまえば特撮技術の粋を集めて撮影した、ドラゴンボールばりの迫力で行われる、中国風味の武俠ファンタジー人形劇だ。

人に操られた人形がドツカンドツカンと派手に戦う映像はかなり見ごたえがあつた。

このサンダーボルトファンタジーの撮影には、通常の撮影カメラよりも遥かに高画素のカメラが使用された。

性能が良すぎるカメラ、つてのは人を映すのにあまり向かない。

肌荒れや眼球の血管すらも映してしまい、変に不気味になってしまうからだ。

だが人形を俳優代わりに使ったかつこいいファンタジーアクションである”サンダーボルトファンタジー”は、人形なので肌荒れ等もない。

高画素カメラで撮影することがメリットにしかないのだ。

人形劇による撮影は、そうして人間が演じる演劇では真似できない個性、新たなる地平を切り開いたつてわけ。

けれど、そんな人間と人形の演劇の関係性にも、例外はある。

このCMの撮影も、かなり高画質な映像を撮るためのカメラだ。

人間を撮影するというより、風景を撮影するカメラに近い。

風景を撮影するカメラはどこまでも良い映像を求めるため、高い解像度を求めることが多い。

それは女優の僅かな目の下のクマすら許さないような、タイトな映像撮影をするつてことを意味するんだが……百城千世子は、なんてこともないように、撮影の舞台で振る舞っていた。

歳を取った女優が嫌がるような、高画素での撮影にも笑顔で応じる。

高画質のテレビにも一切隙を映さないような、完璧な容姿と振る舞いで演じる。

サンダーボルトファンタジーが人形劇だからこそ許されたことを、人形のように美しい彼女は、その身一つでこなしてしまおう。

人形のような美しさ。

人でないような美しさ。

天使のような美しさ。

ゆえに、付いたあだ名が『天使』。

彼女はスターズの天使、なんて呼ばれてやがる。

他の誰かが天使なんて呼ばれてたら俺は心の中で笑ってたかもしれないが、彼女は別だ。

彼女に対してだけは、『天使』という評価が過大評価になりもしない。

俺はこの子と一緒に仕事をする度に、”失敗できないな”と気を引き締めている。

「あ」

あつ、気付かれた。

「そっか、英二君も絡む仕事だったんだ」

天使が俺に微笑みかける。

「よろしくね。君がいるならアクセシントがあっても安心かな」

「よろしくお願ひします、百城さん」

俺の心拍数とか、俺の心情とか、俺の体調とか、全部に影響するような微笑みだった。百城千世子は今はまだガンには効かないがそのうち効くようになると思う。

単行本プロフィールで好きなカマキリ、好きなヤスデ、好きな寄生虫が記載してある百城千世子ちゃん

バイク作りに、車のCMの撮影。

アキラ君と一緒に仕事のウルトラ仮面に、百城さんと一緒にCM仕事。

二人共売れっ子だからこういうことは時々あるが、俺が積んでるタスクがこの二人の仕事だけになるのは結構珍しい。

ちよつとしためぐり合わせというか、運命を感じる。

「アキラさんって百城さんの昔馴染でしたっけ？」

塗装に一区切りつけて、今日も来てくれたアキラ君に呼びかける。

「そうだね。結構昔から……もうそろそろ十年くらいの付き合いになるのかな」
「十年。そりゃ長いですね」

日曜朝のイケメンヒーローと、可憐な若手No.1女優。

熱愛報道されてもこの二人なら許せる気がする。

他だつたらちよつと殺意を抱くかもしれん。

俺が作ったデザのバイクには、アキラ君だつて乗るわけだ。

アキラ君を事故で死なせてもしたら泣く人は多そうだな。百城さんとか。

……手は抜けねえぜ。

「やっぱこれだと空力の干渉で変な振動がハンドルに来るから……ここ削って……」

「朝風君、そんなにバイクの安全面をデザイン時点で考えなくてもいいんじゃないか？」

安全面に関して神経質になりすぎて、デザインの自由度が少なくなってる可能性だっ

て……」

「死にますよ」

「えっ」

「仮面ライダーのバイクは安全面軽く見ると死にます」

死ぬぞ。

「初代仮面ライダー・本郷猛を演じた富士岡さんはスーツアクターも兼任してました。

危険なアクションもこなしていたものの、バイクで転倒事故が発生。

富士岡さん曰く、肩の上に自分の足があるのが見えたそうです。

しかも運び込まれた先の病院が最悪に質が悪かったと聞きます。

古い医療しかない、患者が転院を申し出ると拒絶、転院時にカルテの受け渡し拒否

……

富士岡さんは転院先で最先端の医療を受けられましたが、当時は車椅子覚悟だったと

か

「その頃日本に人権はなかったのかな？」

あつたぞ。

「なぜ事故ってしまったのか。」

その理由の一つに、初代仮面ライダーのバイク・サイクロン号が挙げられます。

何せ、造形師が作ったもので、見かけはいいものの機能性は最悪。

溶接は造形師、カウルの作成者は彫刻家。

造形しなかった風防は市販品なのでマシンだったものの、非常に脆かったとか。

最悪なことに、最初のサイクロン号は人が乗ると部品が干渉し走行不能になりました。

バッテリーもパワーが足りないので後に増設し、結果バランスは悪化。

改造したマフラーは落ちやすく、一度草むらに落ち火事になりました。

富士岡さんは後年、いつか事故るだろうと思ってたとインタビューで明かしています」

「その頃日本に人権はなかったのかな？」

あつたぞ。

「そういうことで、仮面ライダーの仕事は分業されました。」

俳優、スーツアクター、バイクスタントの三人で演じられるようになったんです。それから毎年、バイクに余計な装飾を盛る人と、それを却下する人の戦いは始まりました。

そして、歴代七人目の仮面ライダーとなるストロンガー（1975）の到来。バイクスタントの栗沢さんはストロンガーのバイクを指して、

『バイクの原型が残ってるから歴代で一番走りやすかった』

とコメントしています。やっと仮面ライダーのバイクは、バイクになったのです「うん、いいことだ」

「まあ栗沢さんはその後、撮影中にバイクの下で爆薬爆破されちゃうんですけどね。

スタッフのうっかりミスでバイクと一緒に吹っ飛ばされて、心停止状態で運ばれました」

「その頃日本に人権はなかったのかな？」

あつたんだよこの野郎。

「現代ではそういうことはもうほありません。

でもアキラさんが乗るかもしれないバイクですし、構造から手は抜けませんよ。

人が乗った重量でパーツが変形してタイヤに当たったりしたら、最悪でしょう」

「ああ、分かった。朝風君の気遣いも感じられたよ」

「……いえ、それは、その、別に」

爽やかな微笑みで恥ずかしいこと言うなコイツ。

車のCMの仕事の最中も、バイクの進捗が悲しいことになってることが頭から離れん。

いかんな、頭の切り替えができてない。

しっかりしろや俺。

頭の切り替えができないようじゃ、複数の仕事を同時に受ける資格はない。

複数の仕事を同時に受けてどれかが疎かになるようじゃプロ失格だ、死ねばいい。

「ねえ」

うおっ!?

あ、危ねえ、変な声出すとこだった……って百城さん!?

なんでこっちに？

「百城さん？ 休憩時間ですか、お疲れ様です」

とりあえず頭下げとこう。

あ、微笑んだ。

この自然な作り笑顔は、差し詰め本物と見分けがつかない美しい造花つてとこか。
自然の花はうっかりすると枯れるが、造花は枯れない。

彼女の作り笑顔はとても自然で、かつ大抵の逆境で揺らがない強さがある。

「セット組み直してらしくてさ、私暇になっちゃったんだ」

「そうでしたか。俺に何かご用ですか？」

「ねえ、また虫の話してよ。前は仮面ライダーの元ネタの話聞いたから、それ以外で」

「え、虫の話？」

「私が聞いたことのある虫の話をしたら罰ゲーム、でどうかな？」

「え、っ」

おい仕事で無茶振りするのは許すが仕事以外で無茶振りすんのやめろ。

でもそも仮面ライダーの話を百城さんにした覚えは……いやどうだっけ、覚えてねー
わ。

えー、なに、虫の話？

どうすつかな。

百城さんが聞いたことのない虫の話か……じゃあ二ツちな話した方がいいのか？

「えーと、モスラいますよね。百城さんはご存知ですか？」

「虫の大怪獣だったっけ」

「そう、それです」

「あれ、蛾ガだよな？」

「！」

「綺麗な蝶チョウって言ってる人いるけど、あれは蛾だよな」

「……さすがお目が高い」

大怪獣モスラ。

虹色の美しい羽を持つ、女性人気が高かったから高い蝶の怪獣……と誤解されることが多い、蛾の怪獣だ。

平成の主役映画では全身フルメタルの鎧モスラなども登場し、クツソかつこい。

モスラをダサイと言う奴には例外なく鎧モスラでググらせることにしてる。

しかしすげーなコイツ、昆虫博士か？

そういうえば小学生の頃昆虫博士とか呼ばれてるやつクラスにいたけど中学校にはいかなかったな……もしや、昆虫博士とかいう役職には小学生しかなれないのでは……？

チョウ目の中で蝶とされる個体を除いた、残り全てのチョウ目を蛾と言う。

なので蝶が持っている特徴って奴は、必ず蛾のどれかが持っている。
蛾ってのは要するに『その他』なのだ。

未確認奇天烈生物のモスラは学術上、どんなに綺麗でも蛾でしかねえのだ。

「それで、今のところ私が聞いたことのある話だけけど、これだけ？」

おう、無茶振り。

この人地味にサドっ気あるんじゃないか？

しかし女の子に虫の話ってどこまでしていいのか判断に迷うぞ。

「えと、1996年にそのモスラの平成シリーズ一作目がありました」

「うんうん」

「撮影のためにスタジオオに天然芝を運んできたんですね」

「人工芝じゃないんだ。今なら人工芝になるのかな？」

「凝り性な製作スタッフだったのでどっちにしても天然芝だったと思いますよ。」

で、スタジオオに天然芝を持ってきたわけなんです、そこからどうなったと思います

「？」

「どう、つて？」

「天然芝にくつついてたヒルの卵が、照明に暖められて一斉に孵化したそうです」

「……ヒル!？」

「なのでヒル注意の張り紙貼って撮影を継続したそうです」

「いや撮影中止しないの……?」

「血を吸われたくらいじゃ死にませんからね」

「どうだ? このラインの話はセーフか? アウトか?」

「百城さんも女の子だ、気持ち悪いとか思われてねえよな?」

「……駄目だ! 内心が読めねえ! 自然な作り笑顔が可愛……じゃなくて、自然な作り笑顔のせいで感情が読み切れねえ!」

「ちよつと驚いた表情とかさえ演技に見える!」

「他にそういう話ってあるの?」

「あ、意外と反応悪くないやつだこれ。」

「1970年にガメラ対大魔獣ジャイガーって映画があつたんですよ」

「私のお母さんも生まれてなさそうな大昔だね」

「ジャイガーは産卵管を相手に突き刺し、卵を産み付けるタイプの珍しい怪獣なんです」

「寄生蜂みたいな怪獣なのかな?」

「ええ、まあ」

「昆虫博士かよ。」

「このジャイガーが産卵したゾウの鼻を切つて、寄生虫を取り出すシーンがあるんです」

よ。

メイクしたゾウの鼻を使って、特殊撮影でボドボドーつと出て来る寄生虫を描写したんです」

「へえ」

なんだそのへえは。どういう意味のへえだ。

「豚の内臓の寄生虫を臓物屋から仕入れてきたんだそうです。」

豚の寄生虫を怪獣の幼虫に見せかけたんですよ

あまりにもグロテスクだったので映像にはフィルターかけたって言ってました」

「豚の臓物から回収したのなら、多分豚の回虫かな」

寄生虫博士かよ。

「こんなもんでよろしいですか？」

「他に何かある？ 映画の話なのに、私が聞いたことがない話は興味あるかな」

この大女優、寄生虫が大丈夫なタイプの美少女だったか……幻滅はしないが意外だな。いやめつちやびつくりするわ。寄生虫に興味ある天使……？

アキラ君とか下ネタ苦手だったし、多分彼でもこの寄生虫話はギリギリだぞ。

しつかしトークとか本業でもないのに何頑張っちゃってんだ俺は。

「ええと、他だと」

「百城さん！ 休憩終わりですよ、戻ってください！」

よかった、タイムアップだ。

「あらら……英二君、話の続きはまた後でね」

「え、あ、はい」

やべーな、話のネタが尽きるぞ。ネタを集めておこう。

「監督は朝風さんも呼んで来いって言ってましたけど」

「え？」

「え？」

なんかあったか？ 嫌な予感しかしねえ。

俺と百城さん呼び出した監督は、「スカートのなびきを調整してくれ」と言い出した。

どうやら、今回のCMを作るにあたって監督が持ってきたイメージは、新規発売車とマッチする百城千世子を演出するため、夏らしいワンピースとスカートのはためきを持つてきたいらしい。

澄み渡る青空、鮮烈な木々の緑、そこにスカートがなびくワンピースの百城千世子を

車の脇に添える……なるほど、ベタだがいい絵だと思う。

監督は色気や淫靡さを出すためではなく、少女らしさを出すためにイメージ通りにスカートを動かしたいっぽい。

だが、撮影用大型扇風機の風量を調節しても、いい感じになびかないらしい。監督は今の衣装に問題がある、と考えたようだ。

つまり、俺の出番ってわけだな。

「分かりました。丁寧に仕上げるんで10分ください」

「オーケー。休憩10分延長!」

ハサミと針と糸を引つ掴んだ俺の手元を、百城さんが覗いている。

やめろ。

照れる。

手元が狂う。

「どうするのかな?」

「スカートに重りが足りないんですよ、多分」

カーテンに触れたことがない人間、というのはいないだろう。

だが、「カーテンのどこが一番重いのか」と考えたことがある人は、そこまで多数派ではないだろうと俺は思う。

カーテンで一番重いのは、下端だ。

下端の折り曲げられたところのウエイトが計算され、僅かな風ではためきすぎないように、かつ人間が簡単に開け閉めできるように、軽さと構造が計算されている。

完成されたカーテンは、風が吹いても、見ていて不快でないなびき方をする。

この技術が応用されたのが、仮面ライダーウィザード(2012)だ。

仮面ライダーウィザードの制作陣は、それまで戦隊シリーズを担当してきた岩垣さんをアクシオン監督に招き、魔法使いのローブを華麗にはためかせる流麗なアクシオンを実現した。

人によって「踊っているよう」「魔法使いそのもの」「華麗の具現化」と様々な評価を下すそのアクシオンは、今でも仮面ライダー最高傑作と言う者がいるほどだ。

そんなウィザードのアクシオンを支えた最たるギミックが、マントでありコートでもある造形の『魔法使いのローブ』である。

ビニルレザーで形成し、フチをポリ塩化ビニルで加工してラインを作り、端にはカーテンと同様の理論で計算されたウエイトが仕込まれた。

この魔法使いのローブはウィザードが飛んだり跳ねたり、その場でくるりと回るだけで綺麗に動き、仮面ライダーウィザードの華麗な動きを視聴者に印象付けたという。

必要なのは計算だ。

マントローブも、カーテンも、スカートも同じ。

下端のウエイトを計算して、百城さんの身体能力を計算に入れれば、百城さんの動きに合わせて狙った通りにスカートを動かすことは、そう難しいことじゃない。

「では、今作った布のウエイト仕込みますんで、百城さん着てる服ください」

「私が着てる服をください？ 裸が見たいの？ セクハラかな？」

「!? せ、セクハラなんてしませんから！」

更衣室かなんかで着替えてくれればいいですから！」

「うん、分かっている。それじゃ着替えてくるね」

「この野郎！ からかったな！ ぶっ殺……どこかでほどほどに適度に痛い目見やがれ！」

……駄目だ、本心が見えない。なんなんだこの美少女！

ささっと10分で仕上げた俺を待っていたのは。

”あ、これ今日中に終わる仕事じゃねーな”という確信だった。

「うーん……スカートは理想的になった。

でもだからこそ分かった。このワンピースじゃ駄目だ。

このCMに相応しい専用の衣装を作る必要がありそうだな……」
これだから凝り性な監督は！

良いもの作るけどよ！ その苦勞のしわ寄せは下に来るんだぞ！

低寺プロデューサーが作ったクウガとか凝り性がいい方向に噛み合ってたけどよオ
！

「朝風、新しいの作れない？

あの銀色のカーボデイとマッチしつつ、天使のイメージに合うような衣装」

「……えーと、硬質でメタリックな車と、柔らかな百城さんの印象を、服で合わせると？」

「そうそう。 んじゃぱーっと頼むね？ 特別ボーナス上にかけておくからさ」

硬いイメージの車と柔らかな少女のイメージを合わせろってか。

確かに百城さんが車に寄り添う絵を撮るなら、百城さんと車の間にあるものは、百城さんが着ている服以外にはない。

服をクッションにして、車と百城さんのイメージを合わせる気か。

でもな、割と高難易度だぞそれ。

百城さんは売れっ子だ。彼女の世代では間違いないとトップと言いつける。

そんな彼女は、料理で言えば最高級の食材だ。

俺が彼女に服を作るということは、最高級の食材を調理するに等しい。

「下手な仕事をすれば、素材の良さは全く活かされなくなるだろうよ。
最悪だ。」

「できるか？ 朝風、監督としてお前にしか任せられないんだ」

「できます、任せてください」

「よしそう言ってくれろと信じてたぞ」

「期日的にもそんな余裕ないな。死ぬよ……滅びろよTV業界……凝り性な監督より
仕事は速くて安定してる監督の下の方が仕事は本当に楽だわ……」

「英二君」

「百城さん？」

「天使は、俺に微笑んだ。」

「頑張つて」

「しようがねえな！」

「頑張ります。百城さんも期待して待つていてください」

「そうだね。期待して期待して、ハードルを上げて待つてるね」

「あつ、それはちよつと許してください」

「バイクと新衣装か。ピンチの理由が増えてきたな、震えてきやがったぜ。」

「まずはバイクか新衣装か、どっちかでも片付けないと話にならないな。」

仕方ない、最後の手段だ。

人を頼ろう。

ちよつとのアドバイスでいい。

何かが変わるきっかけになればいい。

現役の伝説の男達の一角、黒倉伸一郎さんと、井下敏樹さんにアドバイスを求める――

芸術は天使と共に在り

うーん俺の周りは畜生多すぎねえか。からかわれるだけで終わってしまった。

いや大人は信頼や期待してくれてんのは分かるが。

一昔前の大人は「アドバイスで簡単に解答を教えると若者のためにならない」みたいなノリ持つてるからなあ……あれ、どうなんだろう。

俺としてはサクツと答えを教えて欲しい。

でも実際はどうなんだろうか？

簡単に答えを教えるのは間違いなのか、そうじゃねえのか。

分からん。

俺みたいな製作者じゃなくて、物語と映像を0から作る創作者ならどうなんだろうか。

自分の中にある何かを外側に出力する俳優や監督は、安易に他人に答えを求めなかつたりするんだろうか？

分かんねえな。

「ふー」

結局、バイク案も衣装案も完成してねえ。

期限的には一刻も早くやらないと間に合わない、ってほどカツカツでもねえが、撮影や企画準備つてのは余裕があればあるほどいい。

時間があるとはいえ期限に余裕があるわけでもなし。急いだ方がいいだろう。

「あ、そうだ」

思い出した。

親父のバイク図鑑が何十冊か俺ん家にあつたはずだ。

家に帰れば、あれを参考にできる。

多くの脚本家、デザイナーは、”頭の中の引き出しを増やす”ことが重要だと語ってる。

おう、ド正論。

まったくもって同意だ。

普段から多くの本、多くの図鑑を見ておくことで頭に情報が蓄積され、何かを作る時に活かされる『地力』になってくれるってわけだな。

特にスケジュールがキツキツになりがちな特撮映画、毎週一本撮影しないといけない特撮番組の現場ではこいつが必須になる。

企画段階で脚本やデザインが全部ガツチリ決まつてる、なんてことはまずありえん。

大抵の場合は撮影しながら、放送しながら、脚本・ヒーロースーツ・怪人スーツなどを作っていくもんだ。

なら、そこで一々資料は探す時間はねえし、参考本なんて買ってられねえし、資料の山からデザイン集を引っ張り出してくる時間もねえ。

何せ最悪、毎週新しい怪人を出さないといけない番組もあつたんだ。

頭からパツと情報を引っ張り出して、商業的に合格のラインのもんをささつと作る、そんな腕と知識が必要になるもんだぜ。

仮面ライダー電王（2007）放映時、造形会社ブレックス所属デザイナーの安倍さんは、電王の第一話と第二話の脚本が出来上がった頃、西映の黒倉プロデューサーにこう言われたそうだ。

「プラットフォームってのが出るようになったので描いてください。30分で」と。

この無茶振りもう殺意抱いても仕方ねえと思うんだけど？

バンダイと西映の同時要請みたいなもんだから、まあ断るのも難しく、しかもブレックスの安倍さんにはこれをサクツとこなしてしまふ能力もあつた。すげえ。

安倍さんも中学校の頃から特撮デザイナーを目指してた人だし、頭の中に入ってる資料の量はとんでもねえこつたろう。

俺の親父もそうだ。

資料を普段から沢山頭に叩き込んでる男だった。

俺も親父のマネをしてきたが、親父の持ってた資料にはまだ手を出してなかった。

親父のメカデザインは凄かったが、そいつは親父が軍艦などの兵器や、バイクやスポーツカーなどのメカニカルなもんを十分研究してたからだ。

親父のバイク系の参考資料を見れば、俺のバイク仕事も一歩先に進むかもしれない。

揺れる電車の中、親父の残した資料に思いを馳せる。

「あとは、^{マテリアル}構成素材か」

こっそりと、電車の音で消えてしまうくらい小さな声で、俺は呟いた。

現在、仮面ライダーのスーツを作る主要構成材は二種類。

FRP（繊維強化プラスチック）と、ウレタンだ。

FRPは炭素繊維などを内部に仕込むことで、強度を飛躍的に上昇させたプラスチック。
ク。

仕組みとしては、コンクリートの中に鉄筋を仕込むことで強度を飛躍的に引き上げる鉄筋コンクリートのそれに近い。

こうして作られたプラスチックは、引張・捻じれなどの弾性強度が極めて高いものとなる。

ウレタンは柔軟で、多様性と汎用性がある、極めて便利な素材だ。

人工皮革にすれば硬い靴底にもなり、柔らかく仕立てればソフトパッドになり、スポンジや接着剤に使うことすらできる。

仮面ライダーのメタリックに見える（が実はそこそこ柔軟性を持つ）装甲は、このウレタンの上に塗装を施すことで完成する。

FRPは硬く、鋭い角や、鋭利な角度の装甲も仕上げられ、硬質な質感も出せる。

よってアップ撮影などに使う、アップ用スーツに向いている。

ウレタンは壊れにくく、柔軟で強靱、折れや割れとも無縁だ。

よってアクション撮影などに使う、アクション用スーツに向いている。

西映の仮面ライダーが使うバイクには、FRPは使えない。

ちよつと転べば折れて怪我に直結する上に、鋭く割れるという最悪のパターンになった場合、現代の仮面ライダースーツすら貫通して、中の人の肉に深く刺さりかねないからだ。

けれども、ウレタンの方はバイクパーツに使われることがある。

硬質ウレタンは危険な『割れ』を避けつつ、仮面ライダー達の剣も硬質ウレタンで形成することが可能なほどに、十分すぎる硬度を持つからだ。

「ウレタンかなやつば」

基本強度を計算し、ステンレスパーツとウレタンパーツでバイクの装飾を作る。

この方向性で良い……と思う。

奇抜な素材を使いたい気持ちもあるが、希少な素材は値段がたつけえし、壊れた時に素材を取り寄せようとすると苦労することもある。避けてえところだ。

ありふれてる素材つてのは、安いし簡単に手に入るつー最高の長所がある。

FRPもウレタンも、一般人もプロも買ってて、色んな人が買うから企業も沢山作つてて、沢山作られてるからどこでも買えるし値段も安い。

この長所を無視して奇抜な素材に走る、つてのは俺の趣味じゃねえな。

要所に塗料・マジョーラを使うこと。

バイクパーツにウレタンを使うこと。

そこまでは決まった。

じゃあ、ここから俺は、どうデザインを設計していくべきなんだ……？

移動中も色々考えたくて電車に乗ったが、最近は電車でスマホ弄る人増えた気がするな。

電車降りて、後はバスで帰るか。

……ちよつと寄り道したくなってきたぞ。

あの駄菓子屋まだ残ってるかな？

”このガムの中に一個だけめっちゃ酸っぱいハズレが入ってるよ”ってガムとか買ってたんだけどまだ売ってるといいなあ、へっへっへ。

「あ」

「あ」

って、夜風さん？ 制服……ってああそうか、この年頃って学生なのが普通だったか。

「夜風さん。学校の帰りですか？」

「お隣さんの……そう、美味しいお弁当の人」

「朝風です、朝風英二」

俺の名前のインパクトが弁当のインパクトに上書きされてる！

「あなたも学生の人？」

「いえ、俺はもう働いてるので」

「そうなの？ だからいつも家にいなかったのね」

いや、家に帰ってなかったのは面倒くさかったからっす。

仕事場に寝泊まりって楽……めっちゃ楽……俺の携帯に仕事の電話かけてくる人も、俺の事務所の留守電に仕事の依頼残す人も、事務所に直接来る人も、全部対応できるからな！

事務所Ⅱ自宅が許されるのは若い内だけ、らしい。

もつと自宅に帰る癖付けた方がいいんかね。

「ここで会えたのも何かの縁ですし、ご飯でも奢りましょうか？」

「嬉しいけど遠慮するわ。私は家に帰って弟と妹にご飯を作ってあげないといけないの」

「家族思いなんですわ」

「普通だと思うわ。親がいなかったら、姉ってこうするものでしょう？」

！

この歳で親がいなくて、かつ家族思いとは……いかん。俺こういう話に弱い。

家族思いな人っていいよなあ。尊敬する。

俺は親父が死ぬまで、親父に息子らしいこととしてあげられた記憶がない。

なんかこの子にしてやりたいな、って思っちゃまうな。

しかし、なんだ？

この子が自分のことを話してる台詞が、妙に他人事に聞こえる。

役者が役を演じているときのような、かすかな作り物っぽさを感じる。

気のせいかな？ 気のせいだよな。

「それじゃ弁当やお惣菜でも奢りますよ。そこのお店あたりで」

「そんなにしてもらう理由がないわ」

「実はちよつとお願ひしたいことがあります」

「お願い？」

人間は理由のない施しを中々受け取らないが、だったら理由を付けてやりやいい。

「俺はあんまり家に帰らないので、回覧板が来てたら回しといてほしいんです」

「そういえば、ご近所の人が朝風さんは回覧板を回さない人間の屑って言ってたわ」

「うぐつ……」

やべーな。もうちよつと家に帰るようにしねえと。

「弁当どれ買います？ 俺を助けると思つて、どうかお願いします」

「じゃ、お言葉に甘えて、ハンバーグカレー弁当を三つ」

ハンバーグにカレーとか欲張りセットだな。

最近の弁当はすげえや。

俺も料理とか人並みにしか作れないが、俺が自分で作る料理よりコンビニ飯の方が美味いと感じる時もあるんだよなあ……悲しいぜ。

「この店初めて来ましたけど、このハンバーグカレー弁当子供が好きなものが詰まっていますね」

「そうね」

「夜風さんがこれを選んだのには何か理由があるんですか？」

「子供は、好きなものに好きなものを足したらもつと好きだと思うものでしょう？」

そうだな、子供は好きなものに好きなものを足すのが好きで、日曜朝のヒーロー番組ではその辺りも常に意識して——いや、待て。

好きなものに、好きなものを足す？

「閃いた」

「ヒラメ？ ヒラメのお弁当が欲しいの？ 店員さん、ヒラメ弁当も追加で！」

「え？ ま、待った待った！」

お前は難聴系主人公さんか何かか！ 待て待て！ その弁当俺が嫌いな野菜入ってる！

眠い。

眠いが、眠くない。

矛盾してるが、最高の仕事が出来た日の翌日、徹夜明けの朝はいつもこうだ。

体は眠りたがってるのに、意識はギンギンに覚醒してハイになってやがる。

CM用の百城さんの服と、バイクの設計図は完成した。

夜風さんから得たヒントが、俺の中に足りなかった。ピースをきっちり埋めてくれた。

センキュー夜風。

好きなものには好きなもんを足せばいい。そう考えてからは早かった。

百城さんとのCMの仕事も、アキラ君との特撮仕事も、分割して考える必要なかったんだ。

何故なら。

俺は百城さんもアキラ君も、二人とするどつちの仕事も、好きだったんだから。

「では朝風君、見せてもらおうか」

「はい、では、新衣装を身に着けた百城さんをご覧ください」

かつ、かつ、と小さな足音を響かせて、その衣装を身に纏った百城さんが来た瞬間。

新人の息を飲む音と、熟練の監督が目を細める仕草が、仕事が当たったということ。俺に確信させ、安堵させた。

「白のワンピース……いや、照明の加減で、うっすらと青紫が見えるな」

「はい。薄めたマジョーラによる塗装を施してあります。他にも、細かいところに色々」
ベースはありきたりな白一色のワンピース。

スカートに前回監督に要望された通りのなびく仕込みをすることを忘れないようにして、それ以外の部分には大幅な改造を施した。

製作にあたり俺がまず思い出したのは、仮面ライダーオーズ（2010）に登場した主人公の最強形態・プトティラコンボだった。

平成仮面ライダーのスーツは、ベースが黒というものが多い。

黒いタイツに、ウルトラマンスーツに使う『ネオプレンゴム』というゴムの黒い種類のものを含有させ、ゴムとタイツの中間の性質を実現するものが開発されてから、黒いスーツをベースに主役仮面ライダーを作るというシステムは更に確固たるものになっていった。

これは西映がインタビューされても製法を明かさなかった秘蔵のスーツ製法だったが、近年はこのスーツに代わる黒いスーツの製法が、次々生み出されるようになっていったという。

んで、紫と黒の装甲を際立たせるため、ベーススーツを白くしようってなったのが、仮面ライダーオーズ・プトティラコンボだった。

悪くねえ選択だ。

おかげでプトティラは、たいそうカッコいい仮面ライダーになったしな。

プトティラの白いベーススーツは、無地の真っ白なグロー感のあるものがセレクトさ

れ、アクション用スーツは通気性の良いメッシュ生地にて作られた。

今回使ったのは、このプトティラのスーツ製法と縫製技術だ。

白いワンピースに、グロー感のあるプトティラコンボの白地スーツを合わせ、そこに下地になる白色塗料を含有させ、一旦乾燥させ、服の裏側に薄い裏地を貼ってから、本塗装を行った。

ただの布の上には、綺麗に塗料が塗りにくい。

なんで、プトティラを参考に改造したワンピースに無害な白い塗料を染み込ませて、柔らかい仕立てになるよう固めた。塗料の上には塗料が乗るからだ。

塗料が固まっても、ワンピースの生地の柔らかさは損なわれない。

そして百城さんの肌に塗料が触れないよう、服の裏に薄い生地を貼り付けた。

最後に、服の表面を薄めたマジヨウラにて塗装した。

マジヨウラは薄めて使うことで、下地の色を取り込みつつ、マジヨウラの色をまろやかに引き立てるといふ使い方もできる。

「ねえ英二君、これなんて名前の塗料を使ってるのか聞いてもいい？」

えっ、百城さん、ここでそれ聞く？

勘鋭すぎんだろこの美少女。

「……マジヨウラの中でも、天使ミカエルと呼ばれるカラーリングのものを使っています」

おい百城千世子。

その表情はなんだ。

皆さんその領きにはどういう意味があんの？　なんで皆領いてんの？

ミカエルは、仮面ライダー響鬼に使われたアンドロメダIIと同じシアン&パールの改良品……いや、正確にはパージョン違いのマジヨラだ。

オパールカラー2PLが多く配合されていることで、マジヨラ特有の多彩な色合いが、天使らしい白っぽくて柔らかかなカラーリングに仕上がっている。

そういう塗料だ。

少し薄めたミカエルと、かなり薄めたミカエルを併用すれば、ミカエルだけで服の表面を塗装してもかなり美しい仕上がりになる。

優しく、柔らかかな、白を貴重とした模様を描ける。

百城千世子という天使の服の上に、天使ミカエルを表現できるってわけだ。

ワンピースの上にこのミカエル塗料を、濃淡を付けた波模様状に塗装することで、このワンピースは金属に親しい硬質さと天使を思わせる柔らかさを同時に表現する。

柔らかい金属を表現するだけなら液体金属っぽさを出せばいい。

だが、硬い印象と柔らかい印象を両立するだけでは、百城千世子にはあまりにも相応しくない。

『天使らしさ』ってやつも強調しなきゃ、プロの仕事じゃねえさ。

「いいよいいよイメージ通り！ 流石は朝風英二だ、仕事が早い！」

「満足してただけて光栄です」

「悪いね、こんな監督で。昨日の夜も電話で色々注文つけちゃったしさ」

「……いえ、それが俺の仕事ですから」

殺してえ。

だが表現者なんて皆こんなもんだ、しょうがない。

表現者が「こういうアイテムが欲しい」と言ってきたなら、その人がイメージ通りに創作するために、必要なもん作るのが俺だ。

できないんなら、俺の腕がポンコツだったってだけの話さ。

それに、いつものことながら、この達成感は悪くない。

「お疲れ様」

百城さんが労ってくれた。

いたずらっぽく笑って、俺の前でぐるりと回り、スカートの裾を摘んで——おとぎ話の中のお姫様がそうするように——俺にお辞儀する。

芝居がかかった自然な動作、という矛盾する所作。

うーわ可愛い。

こうして見ると、俺の服が美しいものに添えるだけの添え物でしかないとよく分かるぜ。

”服に着られている”ってことが絶対にならないのが、この人の素晴らしいところだ。

「ふふっ」

何故今俺の顔見て笑った？

「知ってる？」

昔の芸術家って、よく天使の絵や像を作ってたんだって。

何故かっていうと、天使は物を作る芸術家を守護するものだったからなんだって」

ああ、知ってるよ、天使様。

「もったいないお言葉です。撮影頑張ってください、百城さん」

「うん、最高の画えが撮れるだろうけど、それよりさ」

なんぞや？

「私は君の頑張りに報いるために頑張ります、とか言ってあげようか？」

試すようなこと言うな、この人。

そう言われたら俺は確かに、天にも昇る気持ちになるだろうがよ。

そう言われたら、嬉しさで死ぬかもしれないねえけどよ。

「遠慮しておきます。貴女がテレビを見る多くの人達のために演じてること、知ってま

すから」

その服は、俺を魅了するためのもんじゃなく、大衆を魅了するために作ったんだぜ？
百城千世子は微笑んだ。

その微笑みは、俺の気のせいかもしれないが、いつもより年相応の微笑みに見えた。

「それじゃあね」

感情が読めないからかい屋はこれだから怖い。

今のからかいに”言ってほしい”と答えてたらどうなったか。

幻滅されてたか。

失望されてたか。

百城さんの心情はいまいち読み切れないから、分からん。

ただ、彼女に必要な物を作ってやれたことには、満足感しかねーな。

俺にも作れねえものはある。

百城千世子は長年のトレーニングで、俺が作れないそれを身に着けている。

だから彼女は若手世代を代表する売れっ子女優で、俺はカスみたいな俳優にもなれない。

彼女の微笑みと、俺の作る物は同じだ。

何年も何年も頑張って、ようやく作れるようになった、自慢のものなんだ。

だから、誰もが彼女に魅了される。

「さて、撮影に一区切りついたら次はバイクだ。作成の予定を立てないと」
もうひと頑張りだ、さあやるぜ。

アキラ君にもっと多くのスポットライトを当てて、目指すはあの天使超えだ！
スポットライトを集めるような良いバイク、ここに作り上げてやる！

アキラ君にそのバイクを見せた瞬間、手応えみたいなもんを感じた。

銀と緑を基調にしたバイクは、アキラ君の視線の先で、きらりと輝いていた。

「これは……近未来的？ いや、生物的？ 朝風君、これは」

「次の番組展開に合わせて作った、バイク案の完成形です」

基本の塗装は通常塗料にし、要所にマジョーラ『セイフアート』と、マジョーラ『ガブリエル』を使用した。

セイフアートはシルバー&グリーンのマジョーラ。

ガブリエルは天使ガブリエルの名の通り、百城さんの衣装に使った塗料の兄弟にあたる塗料であり、真珠のような輝きを放つグリーン&パープルのマジヨールだ。

特撮の世界、特に仮面ライダーの世界では、風を緑色で表現する。

俺は一度記憶していた西映作品の『風の表現』を思い出し、その一部を抽出し、このバイクの表面に、うっすら見える緑の模様として再現した。

主に参考したのは、仮面ライダーW（2009）のサイクロンジョーカーが回し蹴りをした時、エフェクトとして現れる緑の風である。

セイファートが銀と入り混じる緑を描き、ガブリエルが紫と入り混じる緑を描く。

要所に彩られたマジヨールは、通常塗料と相まって、バイクの表面に風を描く！

光の加減で角度ごとに違う表情を見せるこのバイクは、まさしく風そのもの！

星アキラは風になるのだ！

……何考えてんだ俺は。

徹夜の影響まだ残ってるのか。

やべえ、今の中二すぎる思考を口に出してたら、自殺もんだったぜへへ……

「悩んでいたフォルム形状がようやく決まったんだな、朝風君」

「はい。アキラさんが協力してくれたおかげです」

百城さんの衣装は、アキラ君と一緒にやってた仕事で使った技術の流用で完成した。

そしてこっちのバイクもまた、百城さんをヒントに得た着想で完成した。スターズの天使、百城千世子。

俺がそこから連想したのは、天装戦隊ゴセイジャー（2010）だった。

「地球ほしを守るは天使の使命！」を合言葉に、人の姿をした護星天使という存在達が地球を狙う悪と戦う、という戦隊シリーズの作品だ。

『戦隊全員人間じゃない!?!』と驚いていた人がいたのが記憶に新しい、かなり踏み込んだ設定の異色戦隊シリーズだ。

結構すぎ。

まあ異色って言ってもカーレンジャー（1996）ほどじゃねえが。

『星を護る天使』。

星アキラと百城千世子と一緒に仕事をしていた俺は、ここにぴーんと来たわけだ。

ゴセイジャーの敵をデザインした東澤安施さんは、企画者の松井大さん、老松豪プロデューサーからの要望を聞き入れ、”虫をデザインに取り入れているが虫に見えない口ボの敵”をゴセイジャーの敵としてデザインしていったという。

おかげで、敵の本拠はガをイメージしたものに、本拠から飛び立つ宇宙船はサナギをイメージしたものになったそうだ。

虫と機械の組み合わせで子供を魅了した、というものなら日本特撮には代表格があ

る。

そう。

仮面ライダーだ。

仮面ライダーのバイクだ。

仮面ライダーのバイクというものは、虫と機械の延長にある。

東澤さんがゴセイジャーで描いたデザインを思い返せば、それらのデザインを参考に
して、仮面ライダーのようでも仮面ライダーじゃないバイクのデザインも作れる。

虫のようでも虫でない、仮面ライダーらしくないのに仮面ライダーの良さを継承した、
そんなウルトラ仮面のバイク。

これでまず、バイクの大雑把な方向性が出来た。

虫らしさをイメージした俺の頭に、そこから百城さんとした会話が蘇る。

そして連鎖して、モスラ3キングギドラ来襲（1998）に登場したモスラの最強形
態、鎧モスラが頭に浮かんだ。

鎧モスラにはデザインとして、一つの革新がある。

それは、メタルボディに虹色の羽を合わせたということだ。

現代デザインにおいて、鉄っぽい造形を作るなら、色は極限まで減らす方が簡単だ。

カラフルにすればするほど、『錆の臭い』がしそうなほど重厚な鉄の塊』からは遠ざか

る。

重厚な鉄つばさと虹色を最高の形でマッチさせることは難しく、これがデザイン技術的に成立したのは比較的近年である。

鉄と虹を合わせた成功例があまり多くなかった時代に、前例の真似ではない形で最高の成功例を見せてくれたものが、モスラ3にて登場した鎧モスラなのだ。

俺は参考資料の一つに、この鎧モスラを使った。

鎧モスラは美しい流線型の体型をしており、空力を意識した細身のフォルムは、生物というよりもバイクのそれに近い。

更にはマジョーラの多彩な色合いと、無骨なメタリック塗装の部分をマッチさせるのに、鎧モスラの造形は最高の参考資料と断言できる。

断言して悪いか！

仮面ライダーのバイクは、バッタの改造人間のバイク。

ゴセイジャーの敵は、虫をモデルに使った虫に見えないメカ要素ありの怪人。

鎧モスラは、メタリックなボディを手に入れた虫。

これを、俺の頭の中で混ぜて、俺の頭の中で一つのイメージにまとめる。

そうして出来たシルエットに、通常塗装と、セイファートとガブリエルの二種のマジョーラを塗り、バイク表面に風を作り上げた。

今こいつには、仮面ライダーと、戦隊シリーズと、大怪獣モスラの魂が宿っている。風をバイクの形にしたかのようなバイク。

こいつはまさに、俺にとってのサイクロン号だった。

「アキラさん、どうですか？」

「デザインは申し分ないと思う。これが走ったら、流れる背景に相当映えそうだ」

よし！ 好感触！

「ところで、さつき向こうで拾ったんだけど」

「え？」

「これ、千世子君の方の仕事で使ったっていう塗料だろうか？」

それでこっちはバイクに使った塗料だったね。

この二つ、入れ物を見るに天使^{エンジェル}コレクションというシリーズものだったのか」

やめろや、そういう目ざといの。

「天使か。千世子君のあだ名を思い出すな」

おい、俺の発想の源をさっさと見抜くんじやない。

女の子をきつかけにいいデザインを思いついたとか恥ずかしいだろ。

衣装もバイクも天使揃えですー、とか見抜かれたら心が死ぬ。

公に知られた日には、俺は切腹も覚悟するぞ。

「まあ、それはいいじゃないですか。

それですね、もう一つこのバイクにギミックを考えたんですよ」

「ギミック？」

「アキラさんがバイクに話しかけると、バイクが答えるんです。

喋って走る、主人公の相棒としての存在。

そういうバイクはどうかと、企画会議にプレゼンしようと思つてます」

「バイクが……ああ、そうか。

それならバイクの玩具も、『喋る玩具』という売りを付与できるんだね」

「はい、そうです。

うるさいくらいペラペラ喋る相棒バイク。

仮面ライダーの方が試行錯誤してるバイクのどれとも被らせないため、こうなりました」

俺の中では、仮面ライダー555（2003）のオートバジンというバイクと、仮面ライダーキバ（2008）の相棒・キバットを混ぜたような存在を想定している。

これなら売れる可能性は結構あると思う。

何故なら仮面ライダーW以降、平成ライダーにおいて『相棒』は売れる要素だからだ。でもパンダイあたりはどう反応するかかわっかんねえんだよな！。

実際売るのがそこだからなあ。

「この発想に至った経緯なんですよ……」

ディケイド14話の時に、黒倉さん達が残したコメントを思い出したんですよ」

「黒倉さん……黒倉プロデューサーかな？」

「そう、あの人です」

仮面ライダー、戦隊、現在は西映の特撮番組分野全体に責任を持つほどの人、黒倉伸一郎プロデューサー。

あの方はディケイド14話の時に、興味深いことを言っていた。

「黒倉さんは、ウルトラマンの元ネタである20億の針というSF小説を引き合いに出しました」

「20億の針？」

「宇宙からやってきた刑事と犯人は、地球では人間と一体化しないと生きていけません。

少年は正義の刑事と一体化し、地球にやってきた悪を探し、倒そうとする……そんな話です」

「それは確かに、ウルトラマンだ」

宇宙からやってきた光の戦士が地球人と一体化して、つてのがウルトラマンの基本フォーマットだもんな。

「黒倉さんは言いました。

ウルトラマンよりも、仮面ライダーの方がその面白さを受け継いでいたと」

「? ええと、よくわからないな」

「石ノ森章太郎先生が書いた初代仮面ライダーの漫画で、本郷猛は死ぬんです。

そして脳だけになった仮面ライダー一号の意識は、二号の意識とテレパシーで繋がり

……

というのが、初代仮面ライダーの漫画のフォーマットなんです。

ウルトラマンで言えば、地球人が二号で、ウルトラマンが一号つて感じてしょうか」

「聞いてもあまり良く分からないけど、なんとなくは分かるよ」

こんなクソややこしい話によくついてきてくれるよ、マジであります。

ややこしい話してマジすまん。

「黒倉Pは電王がその流れの継承者、バディ物の後継だと言っていたんです。

電王とモモタロス。

翌年はキバとキバット。

当時はそういう、主人公&主人公と一つになる相棒、という製作側の流行があつたん

ですわね」

「なるほど。黒倉P等、その時代からいたPには受けが良い可能性があると?」

「そうです。」

そして、この”相棒路線”は少しだけ形を変えて続きました。

仮面ライダーWの、翔太郎とフィリップ。

仮面ライダーオーズの、映司とアंक。

仮面ライダーフォーゼの、弦太朗と賢吾。

仮面ライダーウィザードの、晴人とコヨミ……相棒が人間になったんですね」

そして、仮面ライダードラライブ（2014）で、黒倉プロデューサーが目指していた、『別質の意識と地球人が融合し共存して完成するヒーロー』って奴は復活した。

今なら喋る相棒バイクとか、企画に採用される可能性は十分にある。

「『バイクとのバディ』。これは比較的、西映のプロデューサーに受けが良いと思うんです」

まー喋るバイク、って部分は採用されなくてもいいんだけどな！

喋るって部分が却下されれば、バイクのデザインそれそのものは企画を通りやすくなる。

”企画チェックはとりあえず粗探して一つくらいはケチつけとけ”ってのがあんならしい。

これやると企画の質がグッと良くなるらしいが、ケチつけられる方からすりやたまっ

たもんじやあない。

たとえバイクが喋らなくなっても、俺が魂込めたバイクのデザインは通るだろう。

……ん？

待て。

アキラ君、なんだその表情は。

「……朝風君、よく頑張った」

「な、なんですかいきなり」

「こういう商売つ気のある話は、君は苦手だろう。」

君が頑張って色々考えたのが伝わってくるようだ」

失礼だな星アキラ！　しまいにや怒るぞ！　でも言ってることは正しいから悔しい

！

「ええ、まあ、はい、結構苦労しました。」

期日にもっと余裕があったら、もっとゆったりまったり完成に向けてたでしょうけどね」

「僕が思うにだが、君が無茶な仕事振られるのは……。」

普通の人が1ヶ月でやる仕事を1週間でやれと言われたら、3日で仕上げるからじゃないか」

……。

やめろやそういうこと言うの！

「それ言われたら、その……反省は次に生かそうと思います」

「絶対君は同じこと繰り返すと思うよ」

なにおう。

「こほん。ええと、バイクは完成したので、それでは約束の食事にお誘いしたいと思いま
す」

「面白い店っていうの、期待してるよ。朝風君がそういうなら相当だろうしね」

「インスタ映えだけは保証します」

「インスタ映えしか保証してくれないのか……」

大丈夫大丈夫、あの店はアマゾンズ劇場版の一番印象に残る食事シーンを再現した肉料理とか、血まみれのアマゾン腕輪を模したケーキとかしかないわけじゃないから。

555の主人公たつくんが舌を火傷させた熱々のうどんも、たつくんのための冷やしラーメンとかもちやんと置いてあるから。

バーニング揚げだし豆腐辛味噌仕立てとか、響鬼の明太鼓とか、ネタにしか思えなくてもちゃんと美味しかったんだぜマジで！

最高にネタにはなる！ それだけは保証する！

仮面ライダー・オブ・ダイナーは定期的にメニューを入れ替える。

俺にも今あそこどのメニューが揃ってるのかは分からん。

アキラ君がどの料理を選ぶか想像してワクワクしながら、俺は彼と共に歩き出した。

ねみ。

ねむい。

ここどこだ。

俺の家？ 事務所じゃないな。俺の家か。

そうだ、アキラ君と一緒に飯食って、カラオケ行って、事務所よりこっちの方が近かったから家に帰ってきたんだだけ。

スマホスマホ。

緊急の仕事なし。

テレビテレビ、ニュースニュース。

あ、リモコン見つけ。

明神阿良也特集とかやってるよすげー、天気予報見よ。

しかし、今思い返してみても、俺にしてはいい出来だったな、あのバイク。

メタルに複数の色を複数合わせる技術とセンスは、鎧モスラを作り上げた西宝の特撮美術造形部・大林知己さん・老狭新一さんのカラーリングとテクニックを採用。

”風を緑色で表現するパターンの書き方”は西映の仮面ライダーの表現をアレンジして使用。

そしてバイクの全体像のデザインベースに、子供が好きな虫らしさと、子供が好きなロボらしさを融合させたゴセイジャーのデザインライン……東澤安施さんのデザイン技術を使った。

その上で、それらを噛み砕いた俺の中のイメージに沿い、俺のセンスで実際に作った。いやーやつぱりデザイナーと造形を一人でやると楽だな。

苦沢靖さんとかは仮面ライダーで剣(2004)、カブト(2006)、電王(2007)で死ぬほどカッコいい怪人デザインを描いたが、複雑なデザすぎて死ぬほど造形が難しかったと聞く。

でも造形の虹色企画さんに苦沢さんのファンが多くて、死ぬほど面倒臭いデザインを死ぬほどカッコいいスーツに仕上げてくれたんだとか。

造形会社にファンがいる有能デザイナーって卑怯じゃねーかな！

俺はそういうこともないから、この手の仕事は、自分の発想をそのまま形にするために自分で造形やっていくしかない。

専門のデザイナーと専門の造形が組んで作った作品と比べりや見劣りもするだろう。

俺が出したあのバイクも、あくまで企画案でしかなく、玩具屋と特撮屋と造形屋にブラッシュアップされて全然別物になる可能性だつて非常に高え。

だが、今の俺に出来ることは全部つき込んだ。

満足した。

俺のデザインがそのまま残らなくても、おそらく後に残るもんはある。

良い造形が出来たつて満足感と、この造形がそのまま残らないつていう悲しみが混ざつたこの感覚が、造形屋の醍醐味つてやつだと、俺は思う。

あのバイクは間違いなく、俺のこれまでの仕事の中でも最高傑作だ。

ま、だからといってこれで満足してたらいけねえ。

すぐにあの最高傑作を超えるくらいのもんを作るくらいの気概じゃなきや、俺に成長はねえ。

だつてそうだろう。

俳優は人間だ。

人間は成長する。

なら、俺が作るもんも進化していかなきゃおっつかねえ。

かつて仮面ライダーが空を飛んでいなかった時代があり、今は仮面ライダーが自然に空を飛んでいるのが当たり前の時代だ。

進化しない奴は、置いていかれるしかねえんだ。

演劇a.c.t.の時代が流れることを、誰も止めることなんて出来やしねえ。

「おっ」

CMが流れている。

少し前に俺も少しだけ手伝った、百城千世子と新車のCM。

マジョーラ・エンジェルコレクションのミカエルが、車の色合いを映えさせ、同時にそれを身につける百城さんの容姿を引き立てていた。

百城さんに目を奪われ、少し経って、俺は瞳を閉じる。

頭の中に、鮮明なイメージが浮かぶ。

車の横に立つ百城千世子、バイクの横に立つ星アキラ。

俺が人間の方を演出した事例と、俺が機械の方を演出した事例。

俺のイメージの中でも、百城さんとアキラ君はとて『主役』らしい輝きを放っていた。

「『主役』は綺麗な、本当に輝ける舞台の主役。」

その輝きの手伝いができるのなら、こんなに嬉しいことはねえ。

「今日は仕事の予定ないしレンタルショップでゴセイジャー借りてこよう」

星と天使の事を考えていたら、本家ゴセイジャーの決め台詞『地球ほしを護るは天使の使命！』が聞きたくなってきた。

今日は一日かけてゴセイジャー全話見ることにしよう。

スーツの素材全部見分けるテストとかやるかな。いい訓練になりそうだ。

「……今思ったが、アキラ君が百城さんを護ることはあっても逆はあんまなさそうだし……」

星を護るは天使の使命、じゃないな。うん。

百城千世子、あれは天使だけど小悪魔なのではないだろうか？

俺は訝しんだ。

バーニングゴジラ殺人未遂事件

大手芸能事務所・スターズ。

業界最大手の一つに数えられるほどの大手。

どのくらい大手かって言うと、オーディションで一人を選ぶために募集をかけると、三万人の応募者が集まってくるくらいだ！

滋賀の仮面ライダー美術展が入場者数三万人とかだぞ、頭おかしんじゃないかねえの……？

俳優の発掘と育成においては比肩するものを探すが難しいほどの大手事務所で、俺はここに所属している俳優と一緒に仕事をすることが多い。

最近の数多くの映画のメイン格の多くが、スターズ所属の俳優だからだ。

最近絡んだ相手だと子役の山森歌音ちゃん、アキラ君、百城さんなんかがスターズだ。スターズの社長の星アリスさんはアキラ君のおふくろさんだが、アリスさんがアキラ君を親として鼻負してゴリ押ししてる、って感じはしない。

むしろアリスさんが推してんのは百城さんの方だろう。

演技に幅があり、生まれつきの才能よりも後天的に訓練で身に着ける演技力を重視

し、スポンサーや監督の意図をできる限り反映してくれる俳優。

人々の記憶に一生残る名演ではなく、汎用性の高い演技を重視する。

そうやって、俳優が役にのめり込み過ぎて潰れないようにする。

そうやって、俳優の芸を『特異』から『一般的』の枠に入れる。

出来上がった俳優の多くは、無理をした演技をしない、末永く芸能界で食っていける

人間として完成するのだ。

俺が物を作る人間なら、スターズは”スターを作る”事務所ってことになるんだろうな。

スターズはスターを排出する。

それで芸能界での影響力を増す。

増した影響力で、自分の事務所の俳優をドラマや映画にキャスティングしてスターを作る。

以下、ループ。

この繰り返しで事務所の力を増大させ、スターを増やし、スターを作るために新人に経験を積ませる場を増やす。

商業的に見れば理想的なループが完成するってえのが恐ろしい。

こいつは時に「事務所のゴリ押し」とも言われるが、多くの映像作品の品質が低くな

りすぎないための『最低値保証』になる。

昔と比べりや、演者の質の平均値は劇的に上がった。

それは演技のメソッド、演技指導のマニュアル、作品の大失敗を避けるための方法論ってやつが業界に蓄積されたからだ。

商業的に、マニュアル的に、一定以上の質の俳優を排出し続ける。

スターズはそういう意味じゃ、芸術家の工房と言うより、機械的な工場みたいなもんか。

だから事務所のゴリ押しが嫌いな監督とかはスターズが嫌いだし、同じ俳優の顔を見飽きた視聴者はスターズが嫌いだし、手堅く無難に作品を作りたい監督はスターズが好きだし、人気俳優の顔が見たいだけのミーハー視聴者はスターズが好きだ。

スターは生まれてくるものだと思いが、現社長のアリサさんはスターは作るものだと思ってるらしい。

スターズはスターを作る工場だ。

そこで、百城千世子や星アキラという『商品』は作られ、商業の世界で成功している。まあ分かる。

俺も百城さんやアキラ君が出てる番組とか録画して絶対に見てるしな。

そう、これが俳優目当てで見るファン心理ってやつよ！

映画や番組を作る人間は、芸術家と工場者の二種に分かれる。スターズも俺も、どっちかと言えば後者だ。

過去の事例を参考にして、過去の成功例と失敗例を研究して、知識と経験の積み重ねを成功に直結させようとするスタイル。

誰も見たことのないものを作る芸術家とかにはなれねえやつだ。

そういうもんだから、俺とスターズが絡む仕事は結構相性が良い。

スターズは徹底したスケジュール管理と俳優管理を行ってるから、俺にあんま無茶振りしねえしな。俺にあんま無茶振りしねえしな！ 俺にあんま無茶振りしねえしな！！！！

しかし、スターズのこの姿勢が満場一致で上手く噛み合ってるところもある。

その一つが、スターズ事務所の食堂だ。

つまり飯だ。

飯にはそこまで急速な進化や、斬新な革新がなくていい。

昔ながらの美味しい飯を作れば十分に需要がある。

スターズの食堂の飯は美味い。

その食堂で、俺はアキラ君と飯を食っていた。

「アキラさん、ワイヤー無しスタントマン無しで、自分でアクションするの控えませんか？」

俺がラーメンをすすする。

「多少危険でも、僕がアクションもやった方がアングル誤魔化さなくて済むじゃないか」
アキラ君がチャーハンを食う。

確かに今時は、アクションもできるイケメン俳優が演じるヒーロー” っていうのは、子供にも大人にも男性にも女性にも人気なもんだけだよ。

「佐原岳さん、いるじゃないですか」

「鎧武の？」

「そう、鎧武の主演・葛葉紘汰を演じた人です」

佐原岳さん。

仮面ライダー鎧武（2013）の主演を演じ、その圧倒的な身体能力で『生身のアクションで視聴者を圧倒する』というとんでもねえことをやってくれた人だ。

具体的に言うくと、敵に変身前に襲撃され、壁に向かって逃げ、垂直の壁をノースタン
トで駆け上がり、壁を蹴ってバック宙というとんでもないことをする。

もちろんワイヤーとかもない。

おい任天堂のマリオじみたことするんじゃない。

スーツアクターやアクション監督など、番組のアクションに関わる人は揃って彼のアクションを絶賛し、仮面ライダー歴代主演俳優で最も身体能力が高いと評された。

佐原岳さんは性格も明るく、誰とでも仲良くなれるので、プロデューサーは揃って彼を『少年漫画の主人公のよう』とたとえた。

脚本の実淵玄さんも、佐原岳さんの性格に影響を受けたとか。

なんだこのリアルスーパーヒーロー。

アクションができるイケメン俳優で、性格も良い子供達のヒーローで、身長170cmの佐原岳さんはなんつーか……身長173cmのアキラ君とタイプが近い気がするんだよ。

「佐原さんが前に言ってたんですよ。

アクション俳優のイメージが付きすぎて、逆に普通のドラマの仕事来なくなっちゃった。

ただ本人もそこまで気にしてなくて、バラエティで冗談めかして言ってた時もありました」

キャストインタビュー
役者選びは、製作サイドの頭の中にあるイメージと、オーディションにおける役者の演技が合致するかどうかが重要だ。

ここで問題がある。

イケメンで、演技力があって、派手に動ける、アクションが売りの俳優。

イケメンで、演技力があって、派手に動けない、演技力が売りの俳優。

この場合、顔と演技力が互角でも、多くのオーディションでは後者が選ばれるという。顔の良さと演技力が互角でも、唯一無二のアクションが目立ちすぎると、「演技力等はアクションほどじゃないな」と、相対的に低い評価をされがちなのだ。

また、ドラマの大人しくて運動が苦手なキャラなどにも「イメージが合わない」として、アクションができる俳優はキャストイングされにくい。

『他の人にできないことができる』は、芸能界では弱点になることもある。めんどくせえ。

今日ふと、ちよつと心配になつちまつたんだ。

アクションを”俳優としての売り”の全面に出しすぎると、アキラ君のこの先の仕事限定されちまうかもしれないねえ、と。

「それは……そういうこともあるかもしれないな」

「アクションが悪いとは言いません。

ただ、アクションって怪我の可能性も付き纏いますしね。

ウルトラ仮面が終わったら、アキラさんはその後の仕事もありますし……

今後の仕事のことも考えると、その辺のバランスも考えた方が良くないかなと」

「……母は過保護だからね」

「アリスさんの言ってることは、割と正しいと思いますよ」

アキラ君はワイヤー無し、スタントマン無しの少し危険なアクションを平気でする。アキラ君の顔に傷が付くことも許容しないアリス社長は、そういうのを認めない。

母親の言うことを、アキラ君はよく聞いているが、一から十まで従ってはねえみたいだな。

「……」

あつ、ちよつとむすつとした。

アキラ君じゃなくて母親の主張の方の味方したのはマズかったか。

「でも、アキラさんのアクションは凄いですよ！

アレに魅了された子供も多いですからね。

あくまでバランスの話ですし、アキラさんのことですから、アキラさんの自由にするべきです」

「ああ、そうだね。心配してくれてありがとう。忠告は参考にさせてもらおうよ」
人付き合いはムズいが、あんま不快にさせないように喋らんとな。

百城さんほどじゃねえが、子供の前で常にヒーローで在ろうとするアキラ君も、不満や暗い感情を隠すのが上手い。

子供におふざけのキックを食らっても、「ヒーローの笑顔」を浮かべられるのが彼

だ。

表情の動きには注意しとこう。

不快の反応を見逃したらよろしくない。

「た、大変です！ 朝風さん！」

あれ、スターズ専属のヘアメイクの人が来た。

どうかしたのか？

つか二十代の人に敬語使われるとむずがゆいからもっとぞんざいに扱ってほしいわ。

「どうかしましたか？」

「そ、そのそのその」

「落ち着いてください。何が起こったんですか？」

「ゴジラの中で人が死んでいます！」

本当に何が起こったんだよ!?

現場に辿り着いた俺とアキラ君が見たのは、ゴジラVSデストロイア（1995）に登場するゴジラの最強形態の一つ、バーニングゴジラの着ぐるみ^スから、人が救出されている光景だった。

死んでねえじゃん、勘違いか。

「あ、あれは……今度やるって予定の企画の……」

その部屋には、多くのゴジラやメカゴジラのスーツが並んでいた。

今度、ゴジラの当時のスーツを再現して、中に人が入ってスターズの人気俳優と一緒に展示会場を回る……という、西宝株式会社主導の展示イベントが予定されていた。

俺もちよつと関わった仕事だ。

その一環で、今は一時的にゴジラの着ぐるみなどがスターズ事務所に置かれている。事務所に置いておいて、どのゴジラにどの俳優を合わせるか、俳優と着ぐるみを並んで立たせて決めようとしてたつてー話だ。

だが、なんでその中から、人が救出されてるんだ？

話を聞きつけたスターズの事務員や俳優もちらほら見える。

誰かに話を聞いてみるか。

「おはよう、英二君、アキラ君」

「ああ、おはよう千世子君」

「おはようございます、百城さん。何かあったんですか」

百城さんだ。今日も可愛い。

「んーとね」

百城さん、曰く。

スターズの事務所に警備員を装った泥棒が潜入していたらしい。

警備会社に入り、スターズの事務所の警備に回された日に、スターズの事務所から金目のものをおかっぱらう計画だったんじゃないか、と推測されてるようだ。

泥棒は二人。

金目のものと、企画書のメモから高く売れると判断したゴジラのスーツを盗もうとしたらしい。

ところが儲けを独占しようとした泥棒Aが、泥棒Bにおふざけだと言って、泥棒Bがパーニングゴジラの着ぐるみに入るよう仕向けたらしい。

そして、泥棒Aはスーツのチャックを閉め、部屋もロック。

残されたパーニングゴジラの中の泥棒Bは、着ぐるみの中で失神してしまったそう
だ。

「なるほど納得です。百城さん、説明ありがとうございます」

ゴジラのスーツは一人じゃ脱げねえ。

一人が入って、一人が後ろから閉め、部屋に閉じ込めればそのまま死ぬ可能性も高い。儲けを独占しつつ、共犯者を消して口封じし、自分の身の安全を確保しようとしたつてことか……胸クソ悪いな。

「スーツに焼き殺されそうだった、つてうわ言のように呟いてたよ。怖いね」

子供に夢を与える怪獣スーツを悪用とか死ねよ……

「だが朝風君、当時のものを再現した着ぐるみなんだろう？」

ならつまり、過去には人が入っていたことがある着ぐるみだったはずだ。

それなら、人を入れたところで、すぐにあんな大変なことにはならないと思うんだが

……」

アキラ君。ゴジラは人を焼き殺す大怪獣だ。忘れんなよ。

「アキラさん、バーニングゴジラは、エネルギーが暴走した状態のゴジラです。

全身は赤く輝き、体のいたるところから蒸気を噴き出しています。

その雄々しくも危うい姿は、ゴジラの中でも一番人気を争えるほどの人気を博しました」

「うん」

「光らせるため、電飾に860個の電球。

これが着ぐるみ内部を加熱します。」

更に水蒸気と炭酸ガスを噴出する仕組みと電飾が合わさり、スーツ重量は130kgを超過。

噴出される炭酸ガスは着ぐるみの中に溜まり、中の人は四回も気絶し倒れました。

救急車で運ばれたスーツアクターは不整脈を起こしていたそうです。

それにより、酸素ボンベがないと中で呼吸できないことが判明しました。

加えて、内部電飾回路に不備があったので、感電の危険性がある仕様になっています」

「人権は放射熱線で燃やし尽くされたのかな？」

世界よ、これが日本のゴジラだ。

「ちなみにこういったギミックがなかったシンプルな初代ゴジラですが……

その着ぐるみの中の温度は、60℃ほどだったそうです。

ノーマルな形状のスーツですらそれですから、バーニングゴジラはもつと……」

「人権は最初からなかったんだね」

まったくその通りだアキラ君。

「そりゃ倒れてるところを発見されるわけだ」

まったくその通りだ、天使ちゃん。

でもクソかつこいから否定的になれねえんだよな、バーニングゴジラ。

「いいですか、覚えておいてください、アキラさん。」

——バーニングゴジラは、着ぐるみでさえ人を殺す、最強の怪獣王なんです」
「危険度最悪のスーツって言えばいいじゃないか」

うるせえ。

「さしずめ、バーニングゴジラ殺人未遂事件ってどこかな？」

「ちよつと、ちよつと、百城さん」

「字面の破壊力が凄すぎるぞ、千世子君」

盗難事件が霞むインパクトをありがとう。

「ん？ これは……」

これは、床に落ちてたこれは……ひと目で分かる。

これは、初代メカゴジラの歯だ。

初代メカゴジラの歯は透明樹脂を形成して作られている。

だが、何故初代メカゴジラの歯が床に落ちてるんだ……？

「この透明樹脂の歯が、犯人を見つけた手がかりになってくれるかもしれません」

「なるの？」

「なるのかしら」

「ならないんじゃないかな」

「なったらいいですね」

うるせえ。周りのスターズの皆さんも総ツッコミ入れてくんや。

「朝風君、ゴジラのスーツを盗んだとして、それはどのくらいで売れると思う？」

「そうですね、ネットで安物のゴジラの着ぐるみを買っても1万2000円……」

2016年に作られた精神W E Bの精巧モデルの192cmフィギュアが448万

……

となると、買い手が見つかるか次第ですが、500万から1000万くらいでは？」

「そんなに!？」

「現代は仮面ライダーの怪人スーツも一着数百万になったりする時代ですから。

それに、これは西宝の昔の秘蔵技術も使った西宝製の当時再現レプリカですからね。

海外のマニアな金持ちであれば、その数倍出したっておかしくないと思います」

驚くなよアキラ君。

ま、マニアの気持ちは、俳優にはあんま分かんないだろうけどさ。

有名な絵は模写した絵ですら高値が付くのと同じで、西宝製の初代ゴジラスーツレプ

リカともなりやあ、どのくらいの値段が付くかも分かんねえよ。

「そう、これは大きな損失です」

「! 社長!」

「母さん?」

「アリサさん！ おはようございます！」

「私達は管理責任を問われるでしょう。」

失われたスーツの弁償、信用の損失……無視していい事案ではありません」
来たか。

スターズ社長、星アリサ。

往年の名女優にして今や敏腕女経営者。

顔が怖くて圧が強い。

「箝口令を敷きます。」

大々的に公にし、スキャンダルにしていることではありません。

許可が降りるまで、ここで起きたことは他言無用です。

SNSでの発言も厳重に注意するように。警察への連絡も事務所が行います」

ん、そりやそうか。

通報のタイミングと内容もちよつと考えたいところだよな。

こんな下手したら最悪のスキャンダルになりかねん。

芸能界はスキャンダルを隠したがるもんだ。

偉い人は大打撃。

事務所の仕事も減る。

大スキャンダルともなりや、業界全体の元気もなくなる。

映画の収入や番組の稼ぎが減れば会社も余裕がなくなつて、下っ端からリストラされていき、売れない俳優も下から順に消えていく。

だから、誰もが隠したがらる。

あんまよくねえことなんだが、隠そうとする人達の側の気持ちも分かる俺は、一概にクソが死ねとか言えねえ。

被害者が泣き寝入りとかは気分が悪くなるから、そういう悪質なスキャンダル隠蔽の類は公になつてほしいけどよ。

スキャンダルは、事実の公開と処罰だけに終わるならまだいい。

だが情報化社会の現代では、過剰な個人攻撃や企業攻撃、デマや作り話の洪水によつて最悪の方向に転がって当然のもんだ。

これがスキャンダルになりや、最悪あることないこと書かれたりして、偉い人や事務員や俳優が引退に追い込まれる可能性だつてある。

さて、どう采配する気だ、アリサ社長？

「あら、朝風英二」

げっ、目が合った。

「しほはらくぶりです、アリサさん」

「また背が伸びてきたようね。父親に似てきたわ」

アリサさんは親父の友人だ。

役に没入するタイプの女優だったアリサさんに親父は相当振り回されたらしく、親父はアリサさんを語る時は苦い顔になっていた。

つまりだ。

計算した上で、無茶振りする方の人間である。

「警察にはある程度事情を話して通報したわ。それで、朝風」

この人は、親父を朝風と呼んでいた。

俺のことも朝風と呼んでいた。

俺と親父を比べる人はいる。

俺と親父を重ねる人もいる。

だがこの人は、明確に俺に親父超えを期待している。

それが、怖い。

この人は俺に甘い評価をくださない。

俺の仕事を見て、親父の真似事の仕事か、親父にできなかったことを俺がやった仕事か、それをひと目で見抜いてくる。

この人の目は、怖い。

アキラ君のやや他人に甘いところが、この人には欠片も見当たらない。

「盗まれたスーツだけでも、取り戻せないかしら」

「えっ」

頼む相手間違えてない？

「歴代ゴジラスーツの足跡を見て、一瞬で見分けられる貴方なら、あるいは」

そんな誰でもできるわ。

「泥棒はスーツを盗んで、おそらくまだこのビルの中にいる可能性もあるわ。

ならば貴方であれば、盗人がスーツをどう運搬するかも、想像できるはず」

「いや、俺はただの造形屋ですよ」

「泥棒を捕まえろとは言わないわ。

貴方が怪我をすることも私は望んでいない。

ただ、スーツを取り戻して、企画が予定通り進んでくれればいいの。

取り戻せなくても、スーツと盗人の現在位置だけ分かればいいわ」

む。

そうして、通報で来た警察の人がさつきと取り押さえ、スキヤンダルを嗅ぎつけてきた記者とかが来る前に速攻で事件を収束させる気か。

この人、本気で事件をスキヤンダルにさせないつもりだな。

だが、俺みたいな喧嘩に勝ったこともないようなクソザコナメクジ野郎にこんな仕事振られても……

「あなたのお父様ならできたわ」

……親父ならできた？ ほほう。

「ええ。私は色々と貴方のお父様に無茶振りしたけど……彼が期待に応えないことはなかった」

親父もおんなじこと言ってきましたよ。

星アリサはいつも俺の期待を超えた、俺の予想を飛び越えていった、って。

「貴方にこの一件を一任するわ。受けてくれる？」

「それは、仕事ってことでしょうか」

「そうね。ちゃんと報酬は払うわ。今後の評価にも色を付けると約束しましょう」

「……」

「多くは望まないわ。」

貴方の今の能力に相応の結果を出してくればいい。

完全無事なゴジラのスーツが戻ってくるなら、それ以上は望まない」

……あ。

あーはいはい。

何言ってるか分かった。

泥棒が盗んだゴジラの着ぐるみがちよつとでも壊れてたら、直してからスターズ事務所を持って帰ってこいってことだな。

親父！ この人の無茶振りによく応え続けられたな！

「俺は……」

どうすつかな。

ちよつと、気分的には断りたい。

親父を引き合いに出されると受けたくなくなるけど、こんな仕事俺の仕事じゃねーだろって思考の方が優勢だわ。

うん？ どうしたよ百城さん。

「面白そうじゃん。朝風君、やってみたら？」

「そうですね、やってみます」

しゃあねえ、俺は今日だけ探偵だな。

「あの、アキラさん」

「何か用かい？ 山森君」

「あの、朝風さんのお父さんとアリサさんの関係の話、聞いたことあるんですけど……」

もしかしたら、もしかして千世子さんと朝風さんの関係、そのままなんじゃ……」

「山森君、やめよう。その辺りを考えるのは少し怖い」

おい、聞こえてんぞ。

小さい女の子とイケメンなら何でも許されると思うなよ？

その主人公からは、少し有機溶剤の匂いがした

社内を自由に歩き回れるカードを発行するから待つてなさい、と言われたので待機中。

俺はフリーランスの男。

スターズの関係者じゃない。

んでもって、スターズの事務所は入り口のところまで首から下げた関係者カードを見せないと出入りもできねえし、部屋も電子ロックが掛けられるところが多い。

じゃなきや熱烈ストーカーとかの犯罪者が入ってきてもおかしくねえからな！

芸能界はやべーところだぜ。

ちよつと油断して事務所に入れた記者が機密をこっそり撮影してスクープしやがった、なんて事例も過去にはあるもんだ。

なので俺はゲスト用のカードしかないの、スターズの機密とかがある部屋には入ることもできやしない。

だが、警備員とかのカードは防犯のために臨時でどこにでも入れるようになってるらしい。

今回のコソド口は警備員に紛れて来た。

なら、俺が入れない場所に隠れてる可能性もある。

アリサ社長は俺が今日は自由に動き回れるよう——つまり今日だけは俺に見られたくないものも見られていいと割り切って——カードを発行してくれると言ってくれた。

太っ腹！

発行までに10分はかからないと言われたので、並んだゴジラスーツの前で会話でもして時間でも潰そうか……と考えた、が。

どうしよつかね。話しかける相手。

安定のアキラ君か、考えてることよく分からん百城さんか、何か言いたそうにしてる山森さんか……よし、アキラ君が安定だな！

「よう、いい朝だな。退屈しない良い朝だ」

って、逆に話しかけられてしまった。

「おはようございます、堂上さん、町田さん」

「最近一緒に仕事してねえから会いもしなかったな、英二」

「おはよう、朝風君」

話しかけてきたチャライ系のモジャつ毛頭の男は、堂上竜吾^{どのうえりゆうご}。

その横で朝の挨拶をして微笑んでる髪長の美人さんは町田リカさん^{まちだ}。

どちらも、スターズ所属の俳優だ。

堂上さんは、昔監督にダメ出しされまくってイライラしてた時に俺に喧嘩売ってきた人。

町田さんは、その時俺を庇って喧嘩になりそうだったのを仲裁してくれた人。

演技にも色々言えるが俺の中のイメージは大体そんなん固定されている。

俺は技術も過去の所業も忘れんタイプだぞ堂上この野郎。

だがこの前のドラマはよかったぞ堂上。

まあ俺の中のイメージだが、堂上さんはヤンチャな若者役やるとがっちりハマるし、町田さんは他人をよく見てるから撮影に参加していると若手俳優が喧嘩しなくなる。

映画の主演級を十分やれる人材な印象だ。

どっちも19歳で俺の一個上だが、業界に入ったのは俺が先。

出会った当初はこの二人と俺は距離感を測りかねてたところがあったな、そういや。

「で、泥棒どこにいるのか分かったのか？俺にだけ教えるよ」

「いやまだ探しに行ってもないんですけど」

無茶言うんじゃないぞ堂上！

ケラケラ笑う堂上と对象的に、町田さんは心配そうな顔をしていた。

「社長の言い分は無茶振りだよ。朝風君がでなくても誰も文句は言えないと思うな」

「いえ、仕事なので。受けた仕事はやり遂げます。

それは仕事受けといて納品できませんって言うようなものでしょう」
「……うーん、そういうもんかなー。」

別に朝風君ができなくても社長は怒らないと思うけど……」

「堂上さん、町田さん、今日何か変なものとか見ませんでした？」

「いや全然」

「変なもの？ うーん、私が見た変なものか……」

ぬ、考え込んでしまった。

町田さんに真面目な対応されるとちよつと申し訳なくなるな。

堂上みたいに思い出そうともしない対応されるとそれはそれで腹立つが。

「で、何が盗まれたんだっけ？」

「？ ……？ えと、堂上さん、どういうことですか？」

「だから、どれが盗まれたんだよって話」

「いやいやいや、ラインナップをよく見てください！

初代ゴジラの1号スーツの再現物だけがないじゃないですか！

初代ゴジラの2号スーツだけ残ってますし見れば分かるでしょう？」

「分かんねーよ特撮キチガイ！ 全部同じだろゴジラなんて！ 見分けつくわけあるか

！」

ぐつ、ちよつと傷つくこと言いやがって！

アニメゴジラの宣伝文句とかで『国民的キャラクター』って紹介されてただろゴジラ

！

国民的キャラクターなら国民は覚えておけよこの野郎……

「……すみませんでした、今のは俺が悪かったです」

「英二つて特撮に関しては何も詳しくなくて気持ち悪いよな」

うるせえ。

お前結構言動で問題起こしがちなんだから黙ってる堂上。

「お恥ずかしい限りです。造形屋ですが、根がマニア気質なもので……」

「つか、さつきから謝らなくていいって。

そういうところを仕事に活かしてるってのは皆知ってることだろ。

マニア気質っつか、それは誇っていい知識ってことでいいんじゃないかねえの」

良いこと言うな堂上。ちよつと嬉しいぞ。

「あの」

堂上ちよつと待ってる。

歌音ちゃんが俺をお呼びだ。

「どうかしましたか、山森さん。」

仮面ライダーのネットムービー撮影以来です、少しばかり久しぶりです」

「あ、あの時はありがとうございます。えと、その」

何か言いたげだな。どうしたんだ。

「私、最初は寝ぼけてたんだと思ってました。」

でも今朝見たんです。ここの廊下を歩く、ゴジラの姿を」

「！」

マジか。こりや有力な証言だぞ！

「詳しく教えてもらえますか？」

「朝、私はこの階の廊下を歩いていました。」

そうしたら、曲がり角の向こうからゴジラが出てきました。

ゴジラは吠えて、私は怖くなって背中を向けて逃げ出しました。

そうしたら、何かがぶつかるみたいな音が聞こえて……それからは、何も見てません」

「何時頃のことだったか聞いてもいいですか？」

「レッスンの前準備の前だったので、朝の四時半くらいです」

「なるほど。ありがとうございます、山森さん。助かりました」

四時半か。

ふむ。

その時間だと事務所の出入りは……すると……エレベーターは節電でその時間動いてない……ゴジラが廊下歩いたら見つかる時間帯……やっぱこの事務所出てないんじゃないのか泥棒？

つか子役の子供を驚かして怖がらせるなよコソドロならぬクソドロ、死ねい。

「百城さん、山森さんをちよつと預かってもらえますか？」

「いいよ。おいで、歌音ちゃん」

「あ、はい」

百城さんの膝の上に山森さんが乗った。

子供を膝の上に乗せてる天使は絵になるな……まあとりあえず、怖いもの見ちゃった山森さんの相手は一旦百城さんに任せておくか。

「アキラさん、堂上さん、町田さん、ちよつと」

18歳組と19歳組で作戦会議だ。

来い来い。

もつと寄れ、内緒話だ。

「どう思います？ 俺は皆さんの意見が聞きたいです」

「私は泥棒が着ぐるみ着て脅かしたんだと思うな。」

顔を見られたくなかったんじゃない？

だから廊下で歌音ちゃんの足音を聞いて、とっさに着ぐるみ着たんだと思う」

「僕も同意見です」

「奇遇だなアキラ。俺も同意見だ」

「俺もそうだと思います。するとですね、一つ思い当たることがあるんです」

町田さんの見解は正しいだろう。すると、だ。

「初代ゴジラの1号スーツは、着ぐるみとしてはとんでもない曲者なんですよ。

総重量150kgオーバー。

スーツの骨組みは鉄骨と金網。

綿を詰めた布袋が内側に詰まっているので、熱いは重いわ、汗を吸って気持ち悪いわ。

下駄を履いて動かすことを前提にした足部分は、下駄のせいで妙に歩きにくい。

腕は肘と胴体が接着されているので、肘から先しか動かせず、転ぶと一人で起きられま

せん」

「うわあ……」

「動けないスーツってことか？」

「そうですね。その認識で間違いはないです」

その昔、特撮の世界において鉄骨はかなり軽い素材だった。

初代ガメラのスーツ造形において、合金をベースにしたスーツを、鉄骨をベースにしたスーツに変更して強度を維持したまま軽量化を図ったほどに。

強度と重量を常に計算しないとイケねえのが造形屋だ。

軽すぎて脆ければ失敗、重すぎて動けなくても失敗。

初代ゴジラに鉄骨が入っているのは、重くしたいからじゃねえ。

軽くしたいから鉄骨を入れたんだ。

——— 何かがぶつかるみたいな音が聞こえて

だからこそ、山森さんが聞いた音の正体も分かる。

「つまり、山森さんが聞いた音は、ゴジラスーツ着た泥棒が転んだ音だと思うんです」

「あー」

「それっぽいね」

「その光景想像すると泥棒がクソ情けなくて笑いそうなんだが、俺笑っていい？」

「後にしてください」

真面目にやれや堂上。

「転んだからって何かあるのか？」

「重要なのは、泥棒のことです。」

俺は筋肉ムキムキの泥棒の可能性も考慮してました。

ですが、転んだとなれば話は別です。

泥棒にはゴジラの着ぐるみを着て動かせるだけの筋力がない可能性が高いです。

その程度の筋力であれば、ゴジラの着ぐるみを運ぶ方法も限られてきます」

「ほー」

少なくとも、抱えて長距離を運ぶのは無理だ。

短時間で遠くに運ぶのも無理だ。

台車あたりを使ったんじゃないか？

「早朝、ここの事務所は人の出入りがあっても、節電でエレベーターが動いてません。

搬入口も開きません。……でしたよね、アキラさん？ 前に聞いた通りですよ？」

「大丈夫、朝風君の記憶は間違っていないよ」

「となると、事務所に人が溢れる時間帯も考えますと……」

エレベーターや搬入口の機械で一気に運んだってこともないと思うんです」

泥棒が盗んだ時間が朝四時半ちよい前で、事務所に俳優の歌音ちゃんが出てきたのが四時半頃ってことは、そこからどんどん人が事務所に満ちていって、逃げ道がなくなっていくってことだ。

バカなコソドロめ。

芸能人の睡眠時間をガンガン削っていく殺人タイムスケジュールを甘く見たな？

「ゴジラスーツが展示されていて、盗まれたのが四階。

なので泥棒が事務所内に隠れているとしたら、一階から四階のどこかだと考えます」
歌音ちゃんを驚かした後に転ぶような筋力なら、おそらくそうなる。

「ん？ 俺よく分からないんだが、なんで四階より上が除外されてるんだ？」

「初代ゴジラのスーツを着て、あるいは抱えて、階段を上がれるわけないじゃないですか」

「……あー」

「初代ゴジラの1号スーツは何もかもが重すぎたんです。

脚パーツだけでも重すぎて、着ぐるみは地面にあるもの跨げなかったんですよ」

「……それでよく撮影できたね」

「何でゴジラがのっそりのっそり動いてたのかって、その辺が理由なんですよね」

初代ゴジラのスーツは軽量化した2号でも100kg。

そりや選ばれしスーツアクターにしか着られないに決まってるだろ。

選ばれてない泥棒ごときに運べるもんじゃねえ。

怪獣王だぞ怪獣王。

「割と絞れましたね。皆さんの意見のおかげです」

さて。

アリスさんが戻って来る前に、もうちよつと色々考察したいところなんだがな。

「つか、俺は知らなかったが昔のゴジラってやばいスーツだったんだな」

「ただ、パーツが少なめで一体になってる部位が多いスーツだったことは幸いしたんですよ。」

パーツが一体になってないと、関節に重量がかかりすぎますから。

超光戦士シャンゼリオン（1996）なんて凄いですよ。

仮面のヒーローなのにスーツ重量100kg近く。

”これを着て演技が出来るのは岡末次郎だけ、他の者では首が折れる”

と言われるほどでした。凄いですよね、並のスーツアクターが着ると首折れるスーツ」

「く、首が折れる……おいアキラ、お前すげえところでヒーローやってたんだな」

「流石にウルトラ仮面の現場はそこまで過酷じゃないよ……」

「私思うんだけど、それで撮影できる人って超人としか言いようがないと思う」

俺もそう思います。

堂上さんは強者を見る目でアキラ君を見て、町田くんはヤバい人の後継者を見る目でアキラ君を見て、アキラ君はなんか乾いた笑いをしていた。

「ん、シャンゼリオン……？」

……?
シャンゼリオン……いや、待て。何か、閃きそうだな。そうだ……手がかりつてのは

「朝風君、何か?」

ちよつと待つてろアキラ君。考えまとめてから話すから待つてくれ、悪いな。

超光戦士シャンゼリオン（1996）。

主人公が人間の屑を極めたヒーローものだ。

特にその最終回は、あと百年は並ぶものは出ないだろうと、俺は断言しちまえる。

借金まみれのヒーロー、借金の上に借金、給料は未払い、警察も平気で攻撃する。

「変な匂いがする」と子供が訴えれば、「敵は怪物だ、臭かろう」で流してまともに取

り合ったりもしないヒーロー。

悪は臭うんだとき、すげえ理論だな。

そうだ。

悪は臭う。

”変な匂い”だ。

スーツを探すには、目だけじゃなく鼻も使えるもんじゃねえか?

「皆さん、変な物を見たとか……あと、変な匂いがした覚えがないですか?」

アキラ君、百城さん、歌音ちゃん、堂上さん、町田さんに問いかける。

その中で一人、百城さんだけが反応した。

「そういえば……今朝事務所を暇潰しに見て回ってた時、変なゴムみたいな匂いがしたかな」

百城さん！ やっぱ百城さんがナンバーワンだ！

「どこでしましたか？」

「三階と四階と、あと三階四階の間の階段だったかな。それがどうかした？」

「犯人はおそらく三階のどこかに隠れてますね」

「……へえ」

あ、今何かいつもと違う微笑み方した。かわいい。

「理由を聞いていい？」

『ラテックス』という素材があります。

ゴム液なんて言われることもありますね。

ゴムの木の幹に切り傷を付けて、そこから出てくる樹液の名称がラテックスです。

ゴジラ、ガメラ、ウルトラマン……昭和のヒーローの多くは、ラテックスで作られています」

かつては最先端の素材として、特撮の世界で大活躍したラテックス。

部屋に並べられた再現スーツのいくつかに、ラテックスは使われている。

だが今の時代では使われちゃいねえ。

劣化しやすいラテックスは、時代についていけなかった。

今ではラテックスが果たしていた役目を、ウレタン等の素材が果たしているのが現状だ。

「このラテックスに酢酸などの酸を加えて固めたゴムを天然ゴム、あるいは生ゴムと言います」

「ああ、輪ゴムのアレ？」

その通りだ、アキラ君。

「そうですね。」

オレンジ色の黄土色をした飾り気のないあの輪ゴムが、まさにそれです。

初代ゴジラの公開は1954年11月。

ですが企画開始は1954年3月。

ゴジラのデザイン原型が出来たのが1954年6月。

この頃にはラテックスが日本に入っていなかったもので、怪獣造形には使えませんでした」

「はーん、分かったぞ。生ゴムの方を使ったんだな？」

「正解です、堂上さん。」

ラテックスというのは、つまり酢酸を抜いた生ゴム液ですからね。

生ゴムをバケツの水に一晚漬け、ワセリンを混ぜ込んでゴム質を作ります。

こうして作ったゴム質を、石膏像に塗り、焼き窯で加熱して固形化する……

焼き固められたゴム質のこのスーツこそが、初代ゴジラとなったのです」

「！　じゃあ、かすかなゴムの香りってというのは……」

そういうことだ。

「初代ゴジラのスーツは、油とゴムの混合材質です。

スーツを着て歩けば、床にゴムの匂いがかすかに付きます。

壁に尻尾でもぶつければ、皮膚の一部がくっつくこともありえます。

油とゴムの混じった匂いが、ここ四階と下の三階でしか感じられなかったのなら

……」

「スーツがあった四階と、運ばれた先の三階だけに、匂いが残っていたってことか！」

しかし本職の俺が僅かなゴムの臭いに気付かなかったとは不覚。

……ん、そうか、普段から油まみれ、有機溶剤まみれの俺と違って、普通の女の子の

方が臭いものには敏感なのか！

……俺も結構臭ってたりすんだろうか。

周りが気を使ってくれてたりしてたんだろうか。

やべえ。

やだな。

そうだったら心が辛え。

百城さんは存在レベルでいい匂いしそうな感があるからな……絶対気持ち悪がられるからこんなこと絶対に言わねえけど。

「着ぐるみつて中がくっせえイメージあるよな、アキラ。外も臭いとは知らなかった」

「いやいや、ウルトラ仮面のスーツの外側は臭くないからね。クリーンだよそこは」

「……まあ確かに臭いですけど」

剣道部の人などは特に知ってると思うが、密閉された厚着の中身は臭くなる。

汗がドバドバと出て、それがスーツの内側に染み込み、目に染みそうぐらいのヤバい刺激臭になる……こいつは、着ぐるみの宿命みたいなもんだ。

よってゴジラのスーツの内側も臭い。

やべーほど臭い。

だがこの手のスーツで臭いのは、実は汗だけじゃない。

口元だ。

唾液……唾も本当にくっさいのである。汗に負けなくらい臭い事例もあつてヤバい。

スーツを着てると、人は溢れる唾液を拭けない。

激しいアクションをすると、口元からはかなりの唾が出る。

唾は鼻の前あたりの内側部位に当たるもんだから、唾が変性したくっつき臭いはダイレクトに鼻に来るからヤベえ。

スーツに付いた泥棒の唾とか処理すんのクツソ嫌だわ。

でもスーツアクターさんに嫌な思いはさせられねえ。

泥棒から回収したら泥棒のくっせえ臭い——臭いと決まったわけじゃないが絶対にくせえ——を消し去る作業から始めるか。

「話は一区切りついたようね」

「！ アリサさん！」

「通行証よ。どこで探してもいいけど、あまり余計なものはないで頂戴ね」

よっしや水戸黄門の印籠ゲット。

後は、三階のどこかに潜む野郎を見つけりやゲームセットだ！

「堂上さん、町田さん、エレベーターと搬入口だけ見張っておいてもらえませんか？

多分泥棒が一発逆転で逃走成功させるには、その二つの逃げ道しかないと思うんです」

「うん、分かった。警備の人も呼んでおくね」

「次の仕事の台本読みながらでいいんならやっておくぞ」

堂上！ ……まあ、やってもらえるだけありがたいか。サンキュー二人とも。「アキラさん、三階に行きましょう。最後の詰めです」

「分かった。でも、泥棒を見つけたら僕の後ろに隠れると約束してほしい。

頼りなく見えるかもしれないが、それでも君よりは体を動かせる自信がある」

「む」

「君は僕が守ろう」

「……おおう」

なんだこいつ、めっちゃかっこいいぞこいつ。

真面目にこういう台詞言ってるぞこいつ。

俺が幼児だったたら「ウルトラかめんがんばえー！」って叫んでるところだ。

俺が女だったたら「素敵！ 抱いて！」ってなってるわ。

かっこいいぞアキラ！

でも俺の横に並んで歩くな、俺の背の低さが際立つから。殺意湧くから。

「アキラ君は昔からこうだよ？」

実感こもってますね百城さん。

「つて、百城さんもついてくるんですか？」

「危なそうな場所には近寄らないようにしておくから大丈夫だよ？」

「いや危ないですって」

「君も危ないじゃん」

「俺は仕事です。貴女はそうじゃないでしょう」

あ、駄目だ、俺の話あんま聞いてないなこの人。暖簾に腕押しだ。

……ちよつとは心配してくれてんのかな？ とか思い上がりそうになるのが怖い。

「英二君はスーツに関わることをする時も、ちよつと本気度が違うよね」

そりゃ、まあ、なあ。

「舞台の上で輝く、ってやつが好きなんですよ。

大怪物も。

仮面のヒーローも。

多くの人に支えられて、舞台上上がる役者って人達も」

セツトの中で暴れ人を魅了したゴジラと、舞台の上で踊り人を魅了する役者。

そいつはきつと、本質的には似たようなもんだ。

「作られてから一度もステージに立ってない着ぐるみが……」

盗まれて、売りさばかれて、そのまんまなんて悲しいじゃないですか」

だからこそ。泥棒の野郎はぶつ殺す。

「職人だね」

「舞台の上に立つものは、全部大切にしたいだけです」

スーツも、俳優も、俳優が使うものも、全部だ。蔑ろにはしたくない。

天使は微笑んでいるが、内心はよくわからない。

だが、今の俺の返答が、とりあえず正解だったらしいことだけは、なんとなく分かった。

日曜朝のヒーローと、名女優は魅了する

ゴジラは、盗まれる宿命にある。

そう言ううちよつと過言かもしれねえが、定期的に盗難被害が取り沙汰される特撮の世界でも、ゴジラの盗難騒ぎはドラマティックなエピソードがあるもんだ。

1979年、2mほどのゴジラ展示用人形が盗まれた。

この犯人は当時大学生だった人気イラストレーターで、酒に酔った勢いでゴジラの人形を盗んだつー話だ。

1991年にゴジラの宣伝用スーツが盗難。

ゴジラ捜索本部が設置され、1979年の犯人が名乗り出て、盗んだゴジラを返却するという珍イベントになったらしい。

1979年の犯人は返却して、公の場でこう呼びかけたという。

「俺は返したから」名古屋の君も早く返した方がいいよ」

ゴジラ界隈の人間面白すぎねえ？

ところがこの宣伝用スーツは結局見つからず、1992年には更に撮影所から撮影用スーツまで盗まれちゃったという。

ガバいな防犯！

ただこっちの撮影用スーツは犯人が怖くなったのか多摩湖近辺に捨てられてるのが発見され、撮影は問題なく行われた。不幸中の幸いだな。

特撮ゴジラの映画がそこその頻度でやってた時代は、もう終わった。

だから最近の若い人はこういう感覚が分からねえらしい。

ゴジラのスーツ盗めば高く売れるんじゃないか、って感覚が。

ゴジラのスーツを盗むような熱狂的なファンがいる、って感覚が。

俺も最近の若い人だけどその辺の感覚わっかんねえなあ。

ゴジラのスーツは盗まれる。

それは一種の宿命みたいなもんだ。……嫌な宿命だなこのやろう。

まあ盗んでるってだけで言うなら、子供の心と女性の心はアキラ君が、男の子の心は

百城さんが奪いまくってると思うがな！

「見つからないね」

「どこかに隠れてると思うんですよ。アキラさんも十分に気を付けて」

しかし見つからん。

三階のどこかにいると思うがな。

今は三階にも結構人がいるから、隠れられる場所は多くないと思うんだが。

「三階以外にいる可能性はあると思うかい？」

「百城さんに言われて気付きましたが、確かに四階から三階にしか匂い付いてないですよ」

「考えにくいか……」

「多分台車で運んで、ちよつと床や壁でこすつたから、そこに臭いが付いてるんだと思います」

日も昇りきつてない早朝のことで、エレベーターとか使えなかつたなら、運べるのは階段だけのはずだ。

じゃあやっぱ三階より下には持って行けてないと思うぞ。多分。

「私達と手分けして別々の部屋を探せばいいんじゃない？」

「泥棒と百城さん達だけが出会ったら、百城さん達が危ないじゃないですか」

「ふーん」

「やっぱ百城さん達はもつと人が多い安全なところに行つてた方が……」

「今の三階も人は十分いるし大丈夫じゃない？」

「私も、頑張つてみます！」

何故か手伝いを申し出てくれた百城さんや歌音ちゃんが、クローゼットとかをガンガン開けていく。

この二人外見は可憐な女の子だが少々怖いもの知らずで怖い。

アキラ君が二人を見てくれてるおかげで、なんとか安心できてるのが現状だ。

自然に女の子を気遣うイケメンの安定感にはパねえな。

だが、本当にどこだ？

ゴムの匂いが手がかりだが、三階に移動したその後が分からん。

初代ゴジラの1号スーツは高く売れそうで魅力的なのは分かるが、折り畳めねえし、重いから棚の上に押し上げたりすんのも難しい。

「……あの、百城さん、何故俺の横顔を見てるんですか？」

「気にしなくていいよ」

考え事してたら、百城さんに横顔を見られていたらしい。

何故？

何故こつちを見る。

やめろ、恥ずかしい。

「そ、それよりですね、犯人とスーツどこに行ったんでしょうね」

話を逸らそう。視線も逸らしてくれ百城さん。

「朝風君、ちよつといいかい？」

「なんででしょうか？」

よし、百城さんがアキラ君の方を見た。

「こつそり警備員に混じってるとか、そういう可能性はないかな」

「警備員に？」

「警備員はよそからの派遣で、そこに泥棒が混じっていたという話だからね。

母さんだつて警備員の顔全員分は覚えてないよ。

泥棒が警備員の服を着直して、少し変装して、ゴジラを隠して……

他の警備員とは顔を合わせないようにして、しれっとした顔で事務所を歩いてるか

も」

え、なにそれ俺できない。

俳優ならできんの？

泥棒にそれできんの？

「それでバレないもんでしようか？」

うーむ、それで誤魔化して隠られるって発想がそもそもなかったな。

泥棒はどつかの箱の中にでも、スーツと一緒に隠れるって思ってた。

でもアキラ君は、人の中に泥棒が隠れると推測したわけだ。

これは“物は箱にしまう”って発想が起点の俺と、“人は人の中に隠せる”って発想

が起点の俳優アキラ君の違いか。

百城さんが苦笑している。

「普通の人ってそんなにマジマジと他人の顔見てないよ」

「そうだね。千世子君も僕と同意見みたいだ」

「肝心な部分を抑えて変装すれば意外とバレないものだよ？」
ぬ。

大人気俳優二人が口を揃えてそう言うか。

じゃありえるのか？

いや、でもそうか。

特命戦隊ゴースターズ（2012）で主人公のヒロムを演じた鈴木勝大さんは、戦隊制服のイメージが強すぎた。

だから私服でロケバスから降りた時、子供達が沢山いたが「ヒロム、出てきてよー！」と気付かない子供達の声をもろに食らい、めっちゃショックを受けたらしい。

仮面ライダードライブ（2014）で敵組織幹部のブレンを演じた松島庄汰さんは、『メガネの敵幹部』という印象が強すぎて、眼鏡を外すと誰だか分からなくなるといった人だった。

子供にも分かってももらえないのがショックだったらしく、眼鏡を外して幼稚園の周りをフラフラしたりとかしてみたが、結局誰にも分かってももらえなかったらしい。

事案！

服を変えるだけで、眼鏡を変えるだけで、意外と人は気付かない。

変える前と変えた後の顔を見比べるならまだしも、目に映る数多くの人の中の顔から”気付く”ことはかなり難しい。

人は普段、そこまで道行く人の顔を見てねえからだ。

(あ、歌音ちゃんに顔を見られないようにしてたのはそういうことでもあるのか?)

特撮の主人公やメイんキャラだってそうだってんなら、帽子とかで顔のパーツの一部を隠してれば、結構多くの人の目を欺けるかもしれねえ。

センキューウルトラ仮面。

するとゴジラの着ぐるみを着て歌音ちゃんを脅したことも、相方を意識が失われるようなスーツに入れて口封じしたことも、安全策に見えてくる。

俺達は誰も犯人の顔を見てねえんだよ。

警備会社が写真とかでも送ってくれない限りは、顔が分からん。

「英二君、犯人を見つけられるスーツとか作れないの?」

「作れませんよ!」

俺をなんだと思つてんだ百城さん!

「だって英二君は物作りが一番得意じゃない?」

「得意と万能は違いますよ……」

赤外線を可視化するスーツくらいなら作れますけど、泥棒の役に立つだけですわね」
「……作れるのか、朝風君」

泥棒を見つけられるスーツが作れないことに変わりはないんだから意味なくね？
くそうここで”作れますよ”とか言えてたら百城さんに褒められてたんだらうか。

「あれ」

歌音ちゃんが走っていく。

おいちっさい体で走ると転ぶぞ、気を付ける。

危ないことは控え目にしとけ、小さいけど女優だろうが。

ん？

何だ？ 歌音ちゃん何か拾ったか？

「朝風さん、これ何でしょう？」

「これは……」

「何？」

透明樹脂だな。この形は、見覚えがある。

「メカゴジラの歯ですね。あの部屋にも落ちていたやつです」

初代メカゴジラの頭部はFRP（繊維強化プラスチック）製、歯は透明樹脂製だ。

当時の映画の画質では分かりにくいだが、立ち絵写真だとよく形が分かる。

当時のFRPは、今のFRPほど強度が高くなく、また他素材と接合した場合の相性も良くはなかったのが問題だった。

仮面ライダーV3のマスク造形でも、FRPの予定だった部分をラテックスゴムで造形し、割れるのを恐れてマスク内側に布を貼っていたはずだ。

再現スーツの接着が甘かったのか、FRPのメカゴジラマスクに据えた透明樹脂製のメカゴジラの歯が外れやすくなってたんだろうな。

泥棒がスーツを盗んだ時、ぶつかって落ちたんだろう。

「あの人の靴に引っかけたみていで……」

よく見つけてくれたな、歌音ちゃん。

ああそうか、納得だ。

スーツを盗んだ時に、靴の紐にでも引っかけたのか。

俺達の身長よりも低い、小さい子の低い視点だからこそ、透明樹脂の歯が転がっても見逃さなかったんだな。

小さな子供しか見つけられない手がかり。

MVPやりたいとこだが、それは全部終わってからにしてやろう。

「ありがとうございます山森さん。あなたのおかげで、泥棒が見つかりました」

「え……あ、役に立てて嬉しいです！」

歌音ちゃんが指差したあいつが、おそらく泥棒クソ野郎だ。

アキラ君は何か言いたげだな。

「偶然靴に引つかかった可能性はあるんじゃないか？」

「ですね。もう一つ確証が欲しいところです。ですので」

一芝居打つか。

芝居なら俺より歌音ちゃんの方が上手いくらいだろうが、泥棒なんぞにこの人達の素晴らしい芝居をくれてやることはねえ。

あまりにももったいなすぎる。

「いざという時はおまかせします、アキラさん」

近場の衣装部の部屋から生地を二つ引っ掴んで、事務員みたいなフリして、偶然ぶつかったフリを装って生地二つをぶちまける。

「ご、ごめんなさい！」

「ああ、気を付けて」

「あれ？」

運んでこいって言われたメカゴジラ機龍の生地どっちだったかな。

ど、どっちだったかな……ああ困った困った。

あの、あなた、自分がどっちの手でどっちの生地持ってたか覚えてませんか？ どうです？」

俺に絡んでほしくないみたいな表情してるな。

早く生地拾ってどっか行けって顔だ。

そりゃあそうだろうな。警備員の服着て、人に紛れて、お前の顔を知ってるかもしれない人に絶対に会わないようにして、ここそ逃げるタイミング窺ってたんだろ？

俺にはさっさと離れてほしいよな？

「こっちの生地だろうから、早く拾って行きなさい」

だからうっかり、どっちの生地がメカゴジラ・機龍のバックパックの生地なのか、俺に教えちゃうんだよな。

青い生地と、青寄りの紫の生地で、紫の生地を選んじまうんだよな。

「なんでこれだと思っただんですか？」

「え？ ……そ、そりゃ、昔ポスター見たことあったからさ」

墓穴を掘ったなドマヌケめ。

「なんで”こんな”に紫っぽい生地”を選んだんですか？」

「え？」

参考資料を沢山詰め込んだ俺のスマホを操作し、俺のスマホの中の、メカゴジラ・3

式機龍の画像を泥棒に見せつける。

それはゴジラ×メカゴジラ（2002）のとあるポスター広告の画像。

かつて映画で大暴れしたメカゴジラ・機龍のバックパックの色は、その広告では青だった。

「3式機龍のバックパックって、実は紫色なんですよ。」

ウルトラマンティガ（1996）のスカイタイプと同じ生地を使ってるんです。

あなたの選択は正解です。この青寄りの紫の生地こそが、メカゴジラ機龍の生地」

スタツフロールを見りゃ誰でも分かるが、『ゴジラ×メカゴジラ』はチーフ助監督の野座間さんも、セカンド助監督の伊東さんも、西宝の現場は初めてな棘谷系の人だ。

つまり普段はウルトラマンを撮ってる人達ってこった。

当時、ここからウルトラマンティガの生地がメカゴジラの素材へと流れた。

「でも広告パッケージやモンスターアーツなど、大抵の場合青だと扱われます。

だから機龍のバックパックが青だと思ってる人の方が多いですよ。

フジミ模型のチビマルゴジラシリーズに至っては、3式機龍のバックパックは水色です。

紫っぽくても、紫っぽい青なことがほとんど。

バックパックが紫であることを意識している公式絵や人形は少数……それは、何故か

「？」

青だと思ってる企業。

紫混じりの青だと思ってる企業。

青いバックパックなら水色で良いと思ってる企業。

色々居たな。

だが、本当は紫なんだよな、あのバックパック。

「生地は照明の下で色合いが変わるからです。

カメラというフィルターを通せば映像は違うものになるからです。

だから、ティガと機龍は違う色に見える。

映画とTVでは、西宝と棘谷では、ステージも照明も全く違います。

だからこそ、機龍のバックパックは青、あるいは紫風味の青に見える。

ウルトラマンティガの体表の紫は、少し青っぽい紫色に見える。同じ生地なのに」

表情が動いた、失言に気付いたな？

「機龍改のバックパックの本当の生地を知っているのは！

日本特撮映画師列伝 ゴジラ狂時代（1999）の読者か！

当時の撮影の関係者と、その関係者に師事したものか！

スーツを見ることができた、事務所の偉い人と泥棒しかいない！」

ウルトラマンティガが、テメエの悪事を暴く！

「ぐ……そんなカマかけ回避できるわけないだろ……！」

「ウルトラマンは悪を見逃さないんですよ、泥棒さん」

「頭大丈夫かよ？」

泥棒に頭の出来を心配される謂れはねえよ死ね。

「どけっ！」

「ぎゃっ」

押されただけで突き飛ばされる自分が憎い！ もつと身長と体格欲しかった！

くそがっ喧嘩も強くなりたい。

って、泥棒が百城さんと山森さんがいる方に向かった！

「危ない！」

その瞬間。

何気ない動きで、百城さんは、視線を近くの窓に向けた。

「」

やべえ、なんだ今の。

所作一つ。

動作一つ。

小さく手を動かし、姿勢の向きを動かし、目を自然に見開いて、耳を澄まさないように聞こえないくらいに小さく声を漏らす。

それだけで、百城さんは窓の外に何か恐ろしいものがあるように思わせた。泥棒に足を止めさせ、窓の外に顔を向けさせた。

逃げようとした泥棒は、百城さんを見た瞬間”そこに何か恐ろしいものがある”と思ってしまう、そちらに顔を向けてしまった。

俺でさえ、一瞬窓の外の方を見てしまったほどだった。

『パントマイム』。

説にもよるが、2200年以上前から存在する演劇の基本にして、肉体の芸術と呼ばれるもの。

口を使わず、体の動きだけで何かを魅せる技だ。

例えば特撮の世界では、スーツを着て演じるスーツアクターはアクションだけでなく、これができるなければならないとされる。

顔を隠した上で、だ。

仮面ライダーは仮面を被ったまま、子供に微笑む演技をしないといかん。

ウルトラマンはスーツの変わらない表情で、弱りきった弱々しい姿を見せなきゃならん。

怪獣の身振りで人間のような感情表現をさせるのパンツマイムだ。

表情や視線で何かを表現することも許されず、体の動きで口で語るに等しいことをし、観客に情報と感情を伝えなければならない。

それが、日曜朝のスーツアクター達がずっと背負ってきた義務だった。

百城千世子は今、それをハイエンドレベルでやりやがった。

少し体を動かし、少し演技をしただけで、人を操った。

まるで、ドラマで演技をして視聴者の心を奪うように、泥棒の心を意のままにした。

何をすれば、それを見た人間の心がどう動くか、そこまで把握できてこそその大女優。

一秒の演技が、泥棒の足を完全に止めた。

俺から見て左側の窓を見て足を止めた泥棒の視界の死角を縫うように、俺から見て右側の壁に跳びつき、壁を蹴り跳んだアキラくんが、泥棒の背後から空中回し蹴りを叩き込んだ！

倒れる泥棒！

取り押さえるアキラ君！

「っ！」

あれは！ ウルトラ仮面32話の三角跳びからの空中回転蹴りのシーン！

ウルトラ仮面はあれで怪人を地面に転がしたんだ！

「…………ふう。こんなものか」

かつけえぞウルトラ仮面！ 日曜朝に子供に夢を与える動きだ！

そして思わず、俺の口から言葉が漏れた。

「思い知ったかコソドロ、これが日曜朝のヒーローの力だ」

思わずどやつと笑んでしまった。

山森さんが俺の服の裾を掴んで、なんだか不思議な表情で話しかけて来た。

「朝風さんが敬語以外を使ってるどころ、初めて見ました」

…………。

やべつ、うっかり。

まあいいや。

俺やっぱ、俳優さん好きだわ…………俺にできないことをサクつとやるとこ特に好き…………

俺はバカだ。

自分基準で色々考えすぎた。

『素人考え』をもっと計算に入れておくべきだった。

自殺してえ……ああ、なんつーこった。

泥棒をふんじばって、俺達はスーツの場所を聞き出した。

曰く、この泥棒は駐車場に細工した車を用意して、回転扉天井やらクッションを仕込んだそこにスーツを投げ落とし、何着も一気に盗むつもりだったらしい。

四階から三階に移動したのは、投げ落とすのに相応しい位置の窓がなかったから、三階に移動してから投げ落としただそうだ。

スーツが見つからないわけだ。

そして、ふんじばった泥棒に案内させた先で見つけた、車のクッション上のゴジラは。

「……ボロボロだね」

「ああああああああああ」

見事に悲惨なぶつ壊れ方をしていた。

「な、なんでこんな……スーツはこんくらいの高さなら大丈夫って聞いてたのに」

「お前ー！ お前なー！ 俺の知り得る範囲でこんななー！」

硫黄や炭素すら加えてないミキサー練りしてない生ゴムスーツにんな耐久性あるかッー！」

生ゴムに千切れ難さはない。

生ゴムに硬さはない。

生ゴムに経年劣化耐性はない。

生ゴムに硫黄などを加えて弾性限界を劇的に引き上げる加工法を『加硫』って言うが、当然昔のゴジラスーツにそんな気の利いた加工なんてされてねーよ！

っーかな！

鉄骨とかの”重い骨”が使われてるスーツは落下によえーんだよ！

”軽い骨”が使われてるスーツでもなきや骨も折れるわ！

見ろよこの全身複雑骨折状態のゴジラをよォ！

「おま、おま、それでなんで、バーニングゴジラのスーツの仕組みは知って……」

「え、だってネットでネタにされてたから……」

「いいじゃんこんくらい。昔の特撮の人って人の命とかどうでもいい悪人だったんだろ？」

「しまいにや殴るぞこのコソドロ野郎！

「うるせー！

危険なスーツでも昔の人は扱いミスったことは無いんだよ！

仲間を危ない目にあわせたくて、そういうスーツ作つたんじゃねえんだよ！

だから死人出てねえんだよ！

皆最高の映像作った上で、皆揃って全員で一緒に完成した映画を見てえんだよ！

スーツで意図的に人間を危ない目にあわせたお前が偉大な先人達の同類ヅラすんな殺すぞ！」

映画を見る人達の笑顔のためなら、最高のスーツを探求することを躊躇わない人達が、危険なスーツを着て危険な撮影に挑むことを躊躇わない人達がいた。

そうだ。だから子供の頃の俺は、真似し始めたんだ。

あの人達の生き方を。

「ふふ、英二君が素の自分出すのって随分久しぶりじゃない？」

「……………これは、すみません、お見苦しいところを見せてしまいました」

うぐ、また礼儀のなつてない話し方しちまった……………なんかちよつと楽しそうだな百城千世子！

「あの、元氣出して……………」

「朝風君はこういうの本当に嫌いだろうからね……………心中察するよ」

歌音ちゃんとアキラ君の優しさが胸に染みるわ。

「俺、警察に突き出す時に、あなたが壊したゴジラのスーツの制作費言つときますね」

「おいやめろ」

やめねえよ。

「どうしましょうかね、ここから……」

あーやだやだ俺思考停止してる。めっちゃショックだ。

「君が直せばいいんじゃないかな？」

……百城さん。

軽く言ってくれるな。

いや、でも、うん。

「直しちやいなよ。君の本職でしょ？」

探偵ごっこなんかよりずっと君に向いてることだよ」

できない、とは言いたくない。

「そうですね、やります。これを使うスターズの展示会イベントまでには必ず間に合わせます」

アリサ社長が俺によこした仕事は、泥棒を見つけて、完璧な状態のスーツをスターズの下に取り戻すことだ。

俺の仕事はまだ終わってねえ。

仕事は、最後までやらねえと。

”奪還 じゃなくて、”修理” って形で、元のゴジラを取り戻す。

「やっぱりさ、物を作ったり直したりしてる時の方が、君はいい横顔してるよ」

……むっ。なんかめつちややる気出てきた気がする。

まずはそうだな、解剖だ。壊れたとはいえ当時の再現スーツ。

このゴジラの亡骸を解剖して分析して、当時の製法技術を正確に吸収させてもらおう。

スーツの修理はそっからだ。

「そっういえば3式機龍は、ゴジラの死体から作ったメカゴジラだったかな。

朝風君のここからの作業は、そういう意味では機龍作成に近いかもね」

「アキラさんの今の一言で俺のやる気は十倍になりました」

やるじゃねえかアキラ君！

ようやつと完成した初代ゴジラの1号スーツは、信じられないくらい重いスーツのせいで動きがめつちや緩慢だったが、百城さんと一緒に元気にイベント会場を回っていた。

よかったよかった。

やっぱゴジラはいいな。

百城千世子もいい。

並んで歩いてもけっこうサマになる。

良いものと良いものが絡んでるのとても良い。俺はそう思うのだ。

ゴジラの話の後日談、そしてやってきたゴジラな男

完成した。

「できたぞ、どんなにヘタクソでもゴジラの声を作れる手袋だ！」

怪獣の声は色んなものを素材にしている。

赤ん坊の鳴き声を加工すりや、ウルトラマン（1966）のジャミラの悲しくも恐ろしい声に。

車のブレーキ音をベースに、少し人の吐息といびきを混ぜればガメラ（1965）。

宇宙大怪獣ドゴラ（1964）のベースは人の心音。

んで、ゴジラの鳴き声は松ヤニを付けた革手袋で、コントラバスの弦をこすった音を録音、こいつを手作業で逆再生した音だ。

松ヤニつってのは要するに天然の樹脂だ。

樹脂の扱いなら俺もちよつとした技術は持つてるんだぜ。

CAD（コンピュータ支援設計）で設計し、三次元工作機で雛形を作り、それを手作業で補正した……まさに会心の出来！

楽器の扱いがドヘタだろうとゴジラの声の素が出せる！

あとは録音して、値を設定したソフトにぶっこめば、ゴジラの声が完成する。

このソフトの設定値さえ知ってれば、この手袋とコントラバスを持った人間は誰でも、自由自在に元祖ゴジラの声が出せる！

「ふはは、俺は楽器演奏の才能はクソほどなかったが、物作りに関しちや少しはマシだぜ……！」

今度西宝の先生達に会うことがあつたら見せよう。

ゴジラを生み出した名会社・西宝の大人達は既に伝説だが、俺からすりや尊敬する先生達だ。

こういう形で成長を見せていかないと、いざという時仕事で頼ってもらえないかもしれねえもんなあ。

ちなみに、ゴジラの鳴き声を流用したと言われる怪獣は、ウルトラシリーズや他怪獣映画にも多く、40近い怪獣に流用されてやがる。

ヤバくねえ？

ゴジラは映画単品で見ても、怪獣映画の始祖だ。

だが鳴き声一つで見ても、多くの怪獣の始祖ってわけだ。

まさに怪獣王。

つと。

インターホンが鳴った、こんなこと考えてる場合じゃないな、お客さんだ。

「今出ます！ すみませんちよつと待っていてください！」

あり？

予想してた身長より、数段小さいな身長。

てか子供だ。

「あれ、山森さん」

「おはようございます、朝風さん」

どした。

遊びに来たのか。

俺の事務所がスターズ事務所に近いからってそういうのはあんまよくないぞ。

「立ってないでどうぞ。俺の事務所は小さいですが、茶菓子くらいはありますから」

ま、いいか。

子供は暖かく許容してやるのが大人だ。

同業者にして先生であるあの人達に許容され、あの撮影所の数々にいられたからこそ

そ、今の俺がある。

俺も子役には優しくしてやらんな。

もしや俺も既にいい感じに大人になってんのかね？

……いや、まだ駄目だな。俺はあの人達みたいな立派なヒゲもまだ生えてねえし。

ソファアに座らせて、カステラと紅茶を入れてやる。

「流石に塗料臭すぎるよ」と言ったアキラ君が置いてった芳香剤のおかげで、事務所の空気はかなり改善された。

「ポットくらい置いといたらどうか」と百城さんがくれた電気ポットのおかげで、事務所で暖かいコーヒーや紅茶が飲めるようになった。

堂上が「茶菓子置いとくと女の子の客にモテるかもしれない」と言った日から、この事務所にはそこそこの茶菓子が置いてある。お前が食いたいただけだろ堂上。

今の俺の事務所に隙はねえ。

「どうぞ、カステラと紅茶です。チョコや緑茶もありますよ」

「あ、おかまいなく」

「遠慮なさらないでください、山森さん。」

うちの事務所は年配の方が来る時の方が多いので、チョコがあんまり減らないんです
「よ」

なんでジジババはあんなせんべいとか好きなんだ？

チヨコとかの方が明らかに美味しいし脳のエネルギーになると思うんだが。

「あ……ごめんなさい、お仕事で中だったんですか」

おお、目敏いな。まだ片付けてなかった、事務所隅っこのあの服に気付いたのか。

「いえ、あれは完成品ですよ。」

俺は手慰みに仕事と関わりのないものをお遊びで作ってたところです。

『巖裕次郎』さんからの依頼ですね。見ての通りの羽織と袴です」

「巖裕次郎さんって、あの?!」

「はい。その巖裕次郎さんです。俺なんかの仕事で良いのか戦々恐々ですよ」

巖 裕次郎。

世界的に有名な舞台演出家で、世界のイワオと言えば彼のことだ。

凄まじいスパルタで有名で、あの人に見出されて育てられた人の中には、舞台や映画

の世界で大活躍してる人も少なくない。

物理攻撃もしてくるスパルタなもんで、怖い。

いや怖い。

マジあの人怖い。

親父があの人とちよくちよく仕事してたらしいが、その繋がりで俺があの人の仕事受けたら、ハンパな物作ってんじやねえと靴でぶん殴られたことがある。

”死んだ親父の顔に泥塗るつもりか”と怒られたことは、昨日のここのように思い出せる。

怖い。

「うっ」

「だ、大丈夫ですか？ 朝風さん顔色が……」

「大丈夫です。嫌なこと思い出しただけなので……」

もう怒られたくねえよお……でもあの人は他人の成長と改善を望んでるからこそそのスパルタで……悪い人には思えねえよお……ちくしょう。

「注文は”わざとらしいくらい強く折り目を強調する袴”でしたね」

「折り目を強調した袴……？」

「折り目に柔らかさがないのは目立つんです。」

服の襟が立ててあって、その襟がピンと硬そうだと、そこに目を引かれるでしょう？」

「あ、確かにそうですね」

「折り目を強く魅せる演劇がしたいんじゃないでしょうか。詳細は知りませんが」

袴の折り目を強く見せる方法には、仮面ライダーゴースト（2015）のリョウマ魂に使われた技術を応用し、裏地にウルトラスエードを貼った。

ゴースト放映時はエクセーヌと呼ばれていたが、現在は事業統合によってウルトラス

エードと呼ばれる、超極細繊維の不織布と特殊高分子弾性体を三次元融合させた人工皮革である。

リヨウマ魂は袴のデザインを取り込んだ仮面ライダーゴーストの一形態だ。

袴の基礎知識があり、袴を造形することが可能で、それを仮面ライダーのスーツに応用できる……そういう名人も、仮面ライダーの世界にはいる。

ウルトラスエードを折り目に仕込むことで、遠目には柔軟で柔らかな袴に見えても、近くで見ればシルエットが崩れない印象的な袴になるはずだ。

ただ、リヨウマ魂そのままでやると流石に袴の全体的な重量バランスとシルエットがブサイクになつから、裏地貼りは控え目にして調整した。

巖さんは飾り気の無い舞台でも、徹底的に仕込んだ役者の凄まじい演技で圧倒する、金のかかるセットが要らない名演出家だ。

だが、こうした小細工を最高の形で使える応用力の高い演出家でもある。

この印象的な袴がどう舞台俳優の引き立て役になるのか、ちよつと楽しみだな。

「舞台の方でもお仕事なさってたんですね」

「ええ。頻度は高くないですけどね」

それにしても、舞台か。

最近舞台の方で仕事してないな俺。

仮面ライダーや戦隊シリーズで活躍した人って舞台の方でも活躍してること多いから、あつちで仕事すんの楽しいんだよな。

TVシリーズと一緒に仕事した人に仕事依頼されることもあるし。

仮面ライダーシリーズで俳優のファンになった子供が、舞台の方まで役者さんの応援に行くのを見るとめっちゃほっこりする。ほんわかする。

ああいうのめっちゃ好きだ。

「それで、山森さんは何のぐう用ですか？」

俺用のコーヒーにコップ一杯ほどの砂糖を入れて、かき混ぜる。

俺はコーヒー派だがお客様に出すのは紅茶か緑茶の方が良いんだよな。

手元のティーカップを見つめていた歌音ちゃんは、少し申し訳なさそうに、顔を上げて俺に問いかけてきた。

「あの、地方巡業について聞きたくて」

「お仕事ですか？」

「いえ、オーディションです。」

マスコットキャラクターの着ぐるみと子役が色んなところを回る番組で……

日本各地のゆるキャラと絡みながら、色んなデパートでイベントもするお仕事です」

「なるほど」

地方巡業つてのは、元は相撲の用語だ。

力士さんが日本各地を回って興行し、各地のファンと触れ合いつつ、取り組みを見せたりするあれだ。

転じて、芸能人が各地を巡って公民館とかで芸やトークを見せたり、レギュラー番組の内容で日本各地を回ることや、それに付随する各地でのイベントなんかもこう言うことがある。

そんなもつて、マスコットキャラクターやゆるキャラ絡みか。

ゆるキャラと言えば2000年からじわじわ人気を伸ばし、2006年のひこにやん、2010年のくまモンに、2012年のふなっしーなんかが強え、現代の新ジャンルだ。

子役と絡めるとなお強い。

子供とゆるキャラの着ぐるみは、並んできるとびつきりに映える。なるほどな。

そういう企画なら、良い子役を探すわけだ。

んでもつて歌音ちゃんはそのれに受かりたいから、なんでもいいから参考になるものを探してるってわけだな。

その手の知識は、オーディションを受ける上であればあるほどいい。

「朝風さんは、印象に残っている地方巡業などがありますか？」

「俺は最近ウルトラマンとがつつり組んでるアリオウとかが来てると思っていますね。」

アリオウでウルトラマンショーまでやってるのは、子供相手には強すぎます。

しかも最近はEXPO（ウルトラマンのイベント）級のシナリオも組んでますから。

ストルム星人の生き残りにベリアルの復活。

ジャグラーとリクの俳優さんのウルトラマン論。

クライマックスで流れるBGMフュージョンライズ。

並び立つジャグラーとロイヤルメガマスター……

……つと、詳細の解説までは要りませんね。とにかく、今は地方巡業もホットですよ」

「私もそう聞きました。」

だから知り合いの人に色々聞いて、オーディションに臨もうと思つて……」

ふむ、ちゃんとしてるなこの子役。悪くない姿勢だ。

「俺にできる話の多くは他の人にできる話でしかないと思います。」

ですので、他の人があまりしない話でもしましょうか。

地方巡業、ヒーローショー、ご当地マスケット……

キャラクターというものが、一般人の日常の身近になるまでの話です」

どうすつかな。

そうだ、仕事の概要を掴ませてやるなら、ルーツから語ってやるのが一番だろう。

「ターザンを知ってますか？」

「名前だけなら。あーああーの人ですよね？」

「そうですね、それで合っています。」

本家ターザンを見たことがなくても、名前も聞いたことがないという人はいないでしょう」

『ターザン』はもう有名過ぎて、本編見てなくてもターザンって名前だけは知ってるって人が多数派で困る。

いや別に困らねえか。

「和製ターザンと昔呼ばれていた、バルーバの冒険（1948）という小説がありました。これを映画化した日本のモノクロ映画、名を『ブルーバ』（1955）といます。」

開幕と同時の1955年、ブルーバは動物園で宣伝を兼ねたイベントを開きました。一説には、これが日本で初めての子供向け特撮映画イベントだと言われています」

「あ、もしかして、後追い映画というものなんですか……？」

「そうですね。」

映画のターザンがアメリカでヒットしたのが1918年。

後追いやリスペクトと考える人も少なくはないそうですよ。

当時にしては画期的な類人猿の着ぐるみ使って人気でしたしね、ターザン」
後追い映画って本当に多いよな。

アルバトロスみたいな突然変異異常種を除いても多い。

そういう映画やらされてる俳優さんの気持ちってどんなのか、聞くのも怖えわ。

「同年、つまり1955年に、『ゴジラの逆襲』がイベントやってます。

子供を撮影所に招いたイベントをやったんです。

そして、1964年にゴジラは『三大怪獣 地球最大の決戦』を公開します。

この映画に合わせ、ゴジラは東京、名古屋、大阪を宣伝巡業し……

後の時代に続く、各地を怪獣やヒーローが巡業するシステムの始まりです」

「あ……地方巡業？」

「そうです。俺の個人的な解釈ですが……

”画面の向こう”が人々の日常の身近になったのは、ここから。

可愛い着ぐるみやかっこいい着ぐるみが各地を回るシステムの祖は、ここにあると考
えます」

こいつが、子供達が近くのでパートや遊園地の類に行つて、そこに来たヒーローやマ
スコットキャラと触れ合うというフォーマットの始点だ。

昔の子供は、こういうヒーローや怪獣に触れ合えるイベントが、最高の娯楽だったと

か聞く。

「これはまさに革命と言っているいいものでした。

何せ、劇場の画面の向こう、映画の中にしかなかったゴジラ……

それが現実には、それも日常生活の中に現れたんです。子供達への影響は絶大でした」
画面の向こうに見えるのと、直接触れ合えるのは違う。

子供達は触れられる距離にいる怪物に興奮し、我先にと抱きついた。

ミッチーランドのミッチーにそうするように。

おかげで昔巡業に使われた撮影用ゴジラスーツの、体のひだひだとかヒレとかが片っ端から子供達にもぎ取られ、全身がハゲたようになっちゃったらしいが。

「続き、1966年に多摩テックで『ウルトラQ大会』が開かれました。

ウルトラQはウルトラマン等、ウルトラシリーズの始祖ですね。

怪物が多く並び、怪物の寸劇なども行われ、ゴジラよりも規模は大きくなりました」
「ゴジラから、ウルトラマンなんですか？」

「そうですね。

リレーのバトン渡しをイメージしてくださると、分かりやすいと思います。

後続が続いたことで、『キャラクターイベント』の概念が誕生したんです」

ゴジラを始め、ウルトラシリーズが拡大した。

この1966年に、初代ウルトラマンのTV放映が始まる。そして、1971年に、初代の仮面ライダーのTV放映が始まる。

「これをとうとう『舞台』にしたのが仮面ライダーです。」

1971年の冬、後楽園遊園地で仮面ライダーのショーが開かれました。

仮面ライダー2号を中心としたオリジナルストーリーで、これが大ヒット。

地方巡業は、演劇から生まれ、演劇を取り込んで別物となりました。

少し後の時代になって、このイベントに名前が付けられます。『ヒーローショー』と

「あ、ヒーローショーなら私も知ってます！……見に行つたことはないですけど」

もつたいねえな。

でも今の時代ヒーローショー見に行かない子供意外と多いしな、仕方ねえか。

「やがて、仮面ライダーが打ち立てたヒーローショーの器を、戦隊が拡大します。」

ヒーローショーは戦隊シリーズの手で、どんどん進化と改良を続けていきました」

仮面ライダーストロンガー（1975）の放映時、ストロンガーのショーにゲストとして、放映中の秘密戦隊ゴレンジャー（1975）が参戦したのが、後楽園での戦隊の初陣だった。

ゴレンジャーはスーパー戦隊シリーズ一作目。

仮面ライダーの方が、1975年に放映終了したストロンガーから1979年のスカ

イライダーまでTVで連続放送をやつてなかったのもあって、後樂園の主役は戦隊に移ったわけだ。

バトンは続く。

ゴジラから、ウルトラシリーズ、そして仮面ライダーへ、最後に戦隊へ。

「戦隊が見つけた新しいフォーマットは、他のヒーローショーにも反映され……」

2009年、全天候対応型の大型屋内劇場シアターGロッソまで出来た、というわけ
です」

「ええと、さつき言つてた遊園地は……」

「後樂園遊園地ですね。」

『後樂園ゆうえんちで僕と握手！』

のフリーズで、日本中にその名を知られたヒーローショーの祖の一つです」

さて、話のまとめに入るか。

「この後樂園遊園地が、山森さんと共演するゆるキャラの始まりの地でもあります」

「……え、そうなんですか!?!」

「2002年11月23日、後樂園遊園地で

『第1回みうらじゆんのゆるキャラショー』

が開かれました。

2004年には東京ドームでゆるキャライベントが開かれます。

そして2007年にひこにゃんが火付け役となり、ゆるキャラブームが来るといわけです」

「ほえー……」

「同郷の者に近いんですよ、日曜朝のヒーローとゆるキャラさん達は」

仮面ライダーが作り上げた後楽園遊園地のヒーローショーを、後に続くスーパー戦隊シリーズが盛り上げた。

ヒーロー達が後楽園遊園地の野外ステージから移行し、スカイシアターを使っていたのが2000年から2009年。

ゆるキャラが後楽園遊園地で借りてたステージもスカイシアター。

両者が子供達を笑顔にしていた舞台は、同じステージだった。

燃えるじゃねえか。

日曜朝のヒーロー達とゆるキャラは、同じ舞台で、子供を笑顔にするために、違う方法でショーをやったって言うんだからよ。

そりやもう、戦友じゃねえか。

やり方は違っても、同じ場所を目指してたんだ。

「俺が個人的に思うことですが、山森さんにはこのことを念頭に置いた上で……」

現代の着ぐるみと俳優の関係というものを、意識しておいてほしいということです
「着ぐるみと俳優の関係、ですか？」

「山森さんと着ぐるみが並んで歩いて、子供が来たとします。」

山森さんは自分から子供に話しかけますか？

子供と着ぐるみが触れ合うよう誘導することを、真つ先にやりますか？」

「……えと」

「企画のプロデューサーや事務所の意向次第だとは思いますがね。」

俳優が主役なのか、着ぐるみが主役なのか。どちらを売っていききたいのか、というの

は

「あ

ヒーローや怪獣が、有名人と握手をしてる写真を見たことがある人は多いだろう。

俺はああいうのを見る度に思う。

あれは、有名人の方のイメージアップをしてるのか？

それとも、着ぐるみの作品の知名度を上げようとしてるのか？

どっちか片方ってこともなく、どっちの効果も狙ってるのか？

仮に山森さんがオーディションに受かったとしよう。

スターズは事務所として山森さんを売りたい。

だからマスコットキャラクターやゆるキャラを知名度上昇の道具に使い、山森さんを有名にするための引き立て役にしたいはずだ。

逆に企画側は、企画を成功させるためにオーデイションしてるわけだから、スターズである山森さんを客寄せにして引き立て役にしたいはずだ。

「山森さんの判断を信じます。悪い人ではないと、俺は信じてますから」
現実は無視できねえ。

番組側の意向、事務所の意向、どっちも山森さんは無視できねえだろう。
それでも思う。

子供が大好きな着ぐるみを使って、色んな場所を回るんだ。
ただの子役でも『プロ』として、子供の夢は壊さねえでほしい。

「ありがとうございます、朝風さん。私……頑張つて、このアドバイスを無駄にしません
！」

「いいんですよ、もつと気楽で。」

山森さんが受かっても受からなくても、どういう選択をしても、俺は怒りませんから」
ま、俺にできるのはアドバイスだけだ。

あれするなこれするなとか言う権利はねえ。

特撮ヒーロー達と同郷のゆるキャラのために、山森さんが仕事を失敗するのも見たく

ない。

頑張れ山森さん。

日本中回ってれば、同じように日本中回ってるウルトラマンとかと会うかもしれないぞ？

「あ、ちなみにですね。

泥棒を捕まえた後に俺がちよつと話した、ゴジラ盗難事件の話覚えていますか？」

「ええと……

1979年にゴジラの2m人形が盗まれて。

1991年に宣伝用の着ぐるみが盗まれて。

1979年の犯人が人形を返して、『君も返そう』と呼びかけて。

でも戻ってこなくて、1992年に撮影用スーツも盗まれてしまった、ですよね」

「その1979年に、酒に酔った勢いでゴジラを盗んだ人が、ゆるキャラ概念の生みの親です」

「えっ」

「ゆるキャラ概念の生みの親です」

「……えっ？」

「2000年にその人が、ハイパーホビーという雑誌でゆるキャラ概念を創出したんで

す」

ハイパーホビーは徳間書店発行のホビー雑誌……と言いつつ、ここでしか読めない特撮俳優のインタビューなどが読める中々よろしい雑誌だ。

俺も依頼されて短めのを寄稿したことがある。

もう二十数年の歴史があるツワモノ雑誌だったな、確か。

「ゴジラを盗んだ人ですが、まあ反省してると思うので許してあげてくださいね」

そうだ、許してやれ。

俺は許すとも許さないとも言えねえがな！

西宝は1979年の犯人に怒らないといけないうろが怒れないとか、怒るより宣伝に利用しますとかコメントしてるもんだから、俺は公的には何も言えねえ。

言わんほうがいい。

口は災いの元だ。

「そんなところで繋がっていったんですか……」

社会や歴史つてもんは、どこも繋がってるもんだ。

「ゴジラに始まりゴジラに帰ってきた……なんでしょう朝風さん、このループ構造」

「世の中そんなもんばっかですよ」

「私が子供だから知らないだけでしょようか？」

「山森さんが俺と同じ歳になるまで、あと十年は必要ですからね」

俺が笑うと、彼女はちよつとむすつとした。

少し、今の子供扱いは嫌だったらしい。

子役らしい、年齢相応の反応だった。

「話し込んでしまいましたね。もうこんな時間です」

「え？ あつ」

「俺はこれからスターズ事務所に行かないといけないので、事務所まで送っていきますよ。」

お菓子はお土産に持って帰りますか？ いくつ持って帰ってもかまいませんよ」

「い、いりません！」

そかそか。

「朝風さん、スターズでまたお仕事なんですか？」

「そうですね。ちよつとゴタゴタしてるところがあるらしいので……」

もつとも、スターズをただの腰掛け程度にしか使っていないあの人と、スターズ由来の仕事をするを、”スターズで仕事” と言って良いもんか分からねえがな。

待ち合わせ場所の、スターズ事務所の会議室で、その男は椅子を傾け、背もたれに体重をかけ、デスクに足を乗せていた。

「人を待たせんよ、ノロマじゃないのは仕事だけか？」

「すみません、お待たせしました。俺は待ち合わせの時間を間違えてましたか？」

「いや、きつちり待ち合わせの五分前だ。ま、俺は待つてたがな」

偉そうなその男に不快感をそう覚えたいのは、俺の中に『偉そうにしていいくらいの能力はある』と考える心があるからだろうか。

俺が製造者メーカーなら、この人は創作者クリエイター。

その傲岸不遜な雰囲気は、思うまま望むままなんでも蹂躪してしまえる、ラスボスみたいで。

「つまんねえ仕事があるんだ。

さっさと終わらせてえ。

エージ、世界で一番早く動く俺の手足になれ」

「世界で一番は無理ですが、手は抜きませんよ」

「全力出せよ？」

「はい」

『黒山墨字』

俺を呼び出したラスボスは、偉そうに椅子にふんぞり返っていた。

来たれ撮影の序盤戦

『ラーメンと、高級な日本料理。あなたはどっちが食べたい?』
名演出家にして名監督である黒山墨字の作品の説明をするには、この問いが一番分かりやすい。

ラーメンという分かりやすい娯楽か。エンタメ映画か。

高尚な日本料理か。芸術的に価値がある映画か。

どちらが好きかは人による。そういうもんだ。

黒さんはカンヌ国際映画祭、ベルリン国際映画祭、ヴェネツィア国際映画祭の世界三大映画祭の全てで入賞した男だ。

すげえ。

なんだお前。

頭おかしいぞお前。

見る人が見れば、35歳の日本人監督でこれが凄いことなんだとひと目で分かる。

見る人が見れば、だ。

今の日本でこの経歴を見せても、「???」って反応が最大多数だろうな。

良くて「あーなんかすごそう」って反応くらいじゃねえか？

なんにせよ”よく分からん”としか、一般人は言いようがねえだろう。

何故なら日本では、映画は面白ければいいからだ。

作品に贈られる海外の賞には、日本人はあまり興味を持たねえ。

カンヌ国際映画祭、ベルリン国際映画祭、ヴェネツィア国際映画祭の世界三大映画祭は、どれも凄えもんだ。

だが、この三つの映画祭の映画は、あんま日本では上映されねえ。

それは何故か？

見ねえからだ、日本人が。

面白くないが素晴らしい映画がある。

面白いが素晴らしい映画がある。

それなら日本人は、後者を見る。

面白ければいいからだ。

俺も銀魂とかめっちゃ好き。

世界三大映画祭は、ハリウッドとは違い。

ハリウッドはよりエンターテイメントな映画、これまでにないものでありつつも大ヒットを狙った映画、大衆のための映画を作る。

世界三大映画祭では、よりアートな映画、より挑戦的で前衛的な映画、難しい技術を使つて芸術的で美しくした映画が評価される。

だからハリウッドの映画は一般人の多くに受け、めっちゃ売れる。

世界三大映画祭で評価される映画は、評論家に受ける。

そういうことなら、映画で稼ぎたい日本の会社は、売れるかも怪しい世界三大映画祭の入賞作より、ハリウッドでめっちゃ売れた作品を輸入したいもんだろ？

だつて誰も、赤字なんて出したくないもんな。

「売上が全てじゃない、売れなくても素晴らしい映画はある」と主張するデカイ派閥の拠り所が世界三大映画祭になつて、つて面も強え。

芸術か？

エンタメか？

そいつはまさに、人によるつてやつだ。

好みの問題だ。

どつちを重視するかは、監督やスポンサーによつて違うだろうし、映画を見に行く人の好みにもよるだろうぜ。

こいつが、世界三大映画祭での入賞者が日本で皆に凄えと言われない理由だ。

エンタメに特化してない。

だから世界三大映画祭の映画は大抵ハリウッドほど大ヒットしない。

大ヒットしねえから、『世界三大映画祭の入賞作は凄い』という意識が一般人の記憶の中に刻み込まれない。

だから日本の映画館に輸入もされなくなり、日本人の目に映る『世界三大映画祭の名作』の数もどんどん減っていく。

ヒーローが仲間達との絆&ド派手なアクションとCGで悪役をぶっ飛ばす映画と、美麗な背景と繊細な心情描写で美しい世界と心情の動きを表現する映画。

それなら、日本やアメリカでは前者の方が圧倒的に売れる。かくいう俺だって、それなら前者の方が好きだ。

黒さんは、日本では無名だ。

アリス社長は以前、黒さんが日本では無名な理由を、黒さんが金も名声も求めてなかったからだと言っていた。

だが、俺の個人的な見解は違う。

そもそも黒さんの活躍のフィールドの関係上、日本人は黒さんの経歴に「すげー」ってなれないんじゃないか、ってのが俺の見解だ。

すげえ人なんだが、この人が日本人向けに作品を作っているのを見たことがない。国内ではまだ無名の怪物。

例えるなら、まだ世の中が核ミサイルの存在を知らない時代の核ミサイルだ。

この人が『炸裂』すりや、間違いなく世界は震撼する。

だがこの人が『炸裂』するかどうか、まだ誰にも分からない。

確かなのはこの人の能力だけで、未来は分からない。

だってそうだろ、やべえよ。

日本は『エンタメ映画が受ける世界』だ。

つまりそこを下地にして腕を磨いた映画監督つてのは、世界三大映画祭で入賞しにくい作風と技術を揃えた監督になる。なっちまう。

日本人でも世界三大映画祭で入賞する人はいるが、そういう人達はまさしく周囲に染まらない個性の強い人や、本物の天才ばかりだ。

”日本で受けやすい監督”が、単純にイコールで”世界で受ける監督”になれない理由は、こういうところにもある。

黒さんは、日本には染まりきらなかった。

黒さんは黒さんの画作りをしてやがる。

そいつは、他人が真似しようとしてもできないすげえ強みなんだ。

日本で映画を作るなら、理想的な監督つてのは日本の観客層と日本の業界に最適化された監督なんだろうが、この人はそんな枠には収まっていない。

「ほー、また面白いの作ったんだな。」

ゴジラ手袋と専用の設定した音楽ソフトか。

凡人でも凡人に出せない音を模倣できるって試みは悪くねえんじやねえか？」

「差し上げますよ、ゴジラ手袋。俺はもういくらでも作れますから」

「お、いいのか？ 柵の土産にするわ」

「絶対喜びませんよ」

俺は黒さんに呼ばれた。

黒さんはアリサさんに呼ばれて、この現場の対応を任されたらしい。

ここは、とある漫画原作の二時間ドラマものの撮影場所。

問題がここで発生したのは、少し前のことだそうだ。

日本の映像界にも派閥がある。

プロデューサー同士の対立、師匠筋の対立を引き継いだ対立、テレビ局内の派閥争いに、単純にプロデューサーの性格に問題があつて不仲な監督がいたりもする。

そいつが今回、モロに出た。

撮影が開始されてから、とんでもない大喧嘩が発生し、監督が降りちまったのだ。

監督のコネでその撮影に参加しただけだ、って人は割と多い。

そういう人は、偉い人が監督と喧嘩したり監督に不義理を働いたりすると、監督と一

緒に撮影を離れちまう。

こうなつて初めて、上の人は「ヤバイ」と実感し、「なんとかしろ」と言い、現場がそのツケを払うことになる。くたばれ。

カバーに動いたのは、このドラマにスターズ俳優を何人も提供しているスターズだった。

スターズが黒山墨字を動かし、黒さんが俺を引っ張つてきた、そういう話だ。

あくまでピンチヒッターなので、スタツフロールとかに俺達の名前が載るわけじゃない。

次の監督が正式に決まるまで、俺達で撮影と制作を進める。

じゃなきや、制作の遅れが、正式な監督が決まる頃には手遅れになつてるからだ。

「ごめんね、こつちの都合で朝風君まで動員しちゃつて」

「いえ、俺も仕事ですから。町田さんはいつも通りに仕事してください」

「うん、でも君が来たなら物作りの方が遅れることはなさそうね」

町田リカさんを初めとして、知つた顔がちらほら見える。

申し訳無さそうな表情をしているが、その言動には俺に対する信頼があつた。

……失敗に終わらせたくねえ。

この人達で作る映像は、絶対に予定通り世に出してやる。

「おう朝風。ガタついた大道具の修理とかも頼むぞ」

「黒さん、了解です」

「しつかしあのババア、ウルトラの母の癖して慈悲も優しさもねえ仕事振りしやがる」

「やめましようよそういう呼称使うの」

”ウルトラ仮面の母”を略すなや！

「ほらプリヴィズだ。お前も仕事しながら見とけ」

「分かりました。大道具を直しながら見ておきます」

Preview visualization reel
プリヴィズリールとは、映画の実作成の前に作る映像、その総合的な名称のこと

だ。

このドラマの場合なら要所の絵コンテ、撮影に使う街の一角の撮影写真、俳優を使つての簡易な通し演技などがそれぞれにあたる。

まあ映像を見てるだけの時は手が空くしな。

空いた手で大道具を直していくつてのは悪くねえかも。

「ああそうだ。

午後までにクライマックスシーンの橋作つとけ。

幅5m、長さ15mくらいでいい。

派手に崩落するやつだが、分かつてるよな。任せたぞ」

おい

おいコラ。

午後まで？ あと二時間くらい？ そのヒゲむしるぞコラ。

「できるな？」

「できませんけど……」

撮影スケジュールをフルに使って、俺もフルに使って、何作る気だ！

満足いかなない映像は絶対市場に出さないプロはこれだから！ これだから！

二時間だと、俺一人じゃ絶対に手が足りねえ。

いや、スタッフ全員動員しても一から橋なんて作ってられねえ。

こういう時は既存の奴のリペイントに限る。

頭の中で今、ここの各スタジオと倉庫の中にあるものを考える。何かあったか？
そうだ、あれがあったな。

「第八スタジオから橋のセット持ってきてください！」

重くて大きいので大道具などの動ける人全員行っていいです！」

既にあるものを利用すのは一番楽だ。

何より出来が早く、かつ上質になる。

流用万歳！ 流用にも視聴者視点で欠点はあるがそいつは今は考えなくておく。壊れない橋のセットを、壊れる橋のセットに変えるのもまたクソ労力がかかるだろうが、そこ考えるのは後にしねえとな。

残ってるスタッフにも色々聞いておかないと。

「ちよつといいですか？

MA（マルチオーディオ。映像編集責任者）の人はどこですか？

あと美術監督や美術の総締めの人と相談がしたいんですが」

「朝風さんと黒山さんが来る前、前の監督と一緒に全員出ていきました……」

「……ああ、分かりました。だからそんな顔しないでください。すぐに代わりがきますから」

死ねよお……俺が死ぬだろ……ちくしよう。

昭和の時代はスタッフの大半がストライキボイコットとかできた空気があったらしいが、もう想像もつかねえわ。

「映像編集で残ってるのは何人いらっしやいますか？」

「新人と美術大学からのバイト、合わせて四人です」

「分かりました。アフターエフェクトか似たソフトを使える人間は？」

「ええと……聞いてきます！」

Adobe After Effectsは、デジタル合成やモーション・グラフィックスを行える販売ソフトウェアだ。

プロも、プロを目指す者も、こいつを使ってる奴は多い。

大学生でも使っていて、映画・TV番組・CMの作成にも使われてるこのソフトがあれば、バイトの人間を使ってもとりあえず映像加工で一つの作品にはできる。

「いました朝風さん！ 新人とバイトに一人ずつ！」

「ありがとうございます！ ……あとは」

高い技術を必要としないように、俺がここからの舵取りを間違えないようにしている。

（プランを立てよう）

まず、黒さんが作れと言ったクライマックスシーンの橋。

こいつは崩れる橋の上をヒロインが駆け抜け、橋を渡りきって主人公に抱きつき、愛を誓うっていうシーンだ。

原作の漫画だと、それまで日常描写がほとんどだったところの最後に派手なこのシーンを入れることで、かなり印象的な場面になってる。

まあいいよな。

自分の命も顧みない愛の証明。

王道だ、嫌いじゃない。

俺の想定プランはこうだ。

第八スタジオにある橋のセットは、分割して運べる構造になってたはずだ。

大体のセットは、分割できるようになってる。

分割しねえと運べねえし、スタジオの入口から出せねえからな。

あの橋は確か、棘谷が古巣の人達が作った足場……だから、セットの下に車輪キヤスタが付いてる比較的重いやつと、付いてない比較的軽い奴に分割できる。

人手があれば、ここまで運んでくるまでは問題ねえ。

何よりいいのは、分割できるってことだ。

橋を真ん中から二つに分けられれば、できることもある。

■ ■ を元の橋のセットだとする。

■ と ■ を二つに分けた橋のセットだとする。

□ を橋の高さまで上げられた飛び石みたいな、点々とした足場のセットとする。

○ を人間だとする。

通常の橋のセットは、

○ ↑

■ ■
人がこういう風に歩いて渡れる。

ここに、二つに分けた橋の間に飛び石的なセットを挟み、■ □ ■ ■ という順に並べる。

■の部分はやんと橋のセットになってるが、□の部分は点々としか足場がないわけだから、ジャンプして足場を飛び移っていかないといけない。

すると、



こういう風に、橋の部分は走って、飛び石的な足場の部分はジャンプしながら進んでいく感じになるだろう。

ここで、□の部分に橋のCGを合成する。

そして、主役たちが来たところで、CGを崩壊させる。

するとどうなるか？

走ってる途中にジャンプして、点々とした足場を飛び移っている元の撮影映像が、崩れる橋の中で、崩れていない足場を探して跳び移って渡りきるシーンに変わるってわけだ。

橋のセットが来て、そいつが組み上がったなら、俺は橋のセットを二分割した状態で大

改造して、□の部分にあたる橋の高さの飛び石セットを作りやいい。

それでなんとか、午後には間に合う。

黒山さんが俺に午後までに作れと時間を指定したのは、そういう画作りをしておけっ
ていう俺に対する指示だろう。

俺の能力で二時間以内に作れるものなんてこのくらいだな。

□で言えやヒゲオヤジ。

とりあえず映像編集班は橋のCG作りに集中しておいてもらおう。

今はスタッフを誰も遊ばせておきたくない。

かといって今の制作班の状態じゃ、映像編集の出番が来るのはかなり先だ。

時間をかけて、ここの橋が崩れるシーンのクオリティを上げててもらおう。

頑張れよ皆の衆。

「橋セット到着しました！ 今から組み上げます！」

「分かりました、出来たら俺にすぐ言ってください！」

今俺が動かせる人間は全部セットの組み上げを頑張ってもらおう。

俺はその間に、大道具の修理と、必要な分の作成を終わらせねえとな。

クロマキー合成、つてやつがある。

今の撮影方式だとそういう呼び方は正しくないから、別の呼び方しようぜって、言っ

てる人もいたが。結局今もクロマキー合成と呼ばれてやがる。
ある色成分を除外する、ってやつだ。

例えば、特撮の撮影では緑や青のマットが壁と床に敷き詰められた場所で、俳優の撮影なんかをしてるのが、これにあたる。

緑一色のマットを背景にして、撮影した俳優の動画から緑を除外する。

そうすると、緑の部分は透明扱いになり、この俳優の動画を他の動画の上に重ねるだけで、簡単に合成動画が出来る。

昔ながらの、特撮の王道だ。

この『透明にするための背景』を、グリーンバック、ブルーバックと言う。

何で緑と青なのかと言えば、そいつが人間の肌の色の補色だからだ。

補色ってのは、色相間で正反対に位置する色の組み合わせのこと。

補色を使うことで、緑や青を消しても人間の肌は画面から絶対に消えねえってわけだ。

「こつちで緑の塗装やるんで他のスタッフさんは近寄らないでくださいね！」

他スタッフに、俺は大きな声で呼びかける。

一旦スタジオの通路を使って屋外に出て、そこから塗装だ。

クロマキー合成のいいところは、緑の背景も緑の物質も、完全に同色なら一緒に消せ

るってところにある。

例えば緑の背景の前に、同色緑の足場を作り、百城さんにそこを歩かせるとする。するとクロマキーで緑を消せるから、何も無い空中を百城さんが歩いている合成映像を作ることができるとしてわけだ。

そう、足場。

大道具が作るべき足場だ。

しからば俺が作るべき足場である。

(備蓄の木材は足りてる。ぱぱっと作るか)

まず作ったのは、クロマキー合成用の足場。

仮面ライダー撮影場所で『サカナ台』と呼ばれる、仮面ライダーの撮影現場でしか使っていないニツチなやつを魔改造品を作った。

青色と緑色の二色、二種類一つづつありや十分だろ。

このサカナ台が発明されたのは、仮面ライダーディケイド(2009)の時。

これでもか、これでもかと仮面ライダーが出て来るといっつかつてない撮影に、撮影スタッフはライダーキックの撮影に疲れ切っていた。

そこで助監督の超さんが開発したのが、このサカナ台ってえわけだ。

なんでサカナ台かって？

その助監督の超さんのあだ名が、サカナだったからさ。詳しくは知らん。

緑のサカナ台の上に仮面ライダーが寝そべり、ライダーキックのポーズを取り、緑の背景で撮影し、クロマキー合成で緑を除外して合成する。

これだけでライダーキックの映像ができる。

へへっ、こいつはやはり基本だ。コイツがないと始まらねえ気がする。

「橋のセット組み上げまでもう少しです、朝風さん！」

「分かりました！ こっちも残り終わります！」

小道具も作らねえと。

CG含む合成は新人とアルバイトに今のところ任せてるが、援軍が来たら速攻手直しをしてもらいたい……が、どうなるか分からん。

CGの粗は誤魔化さなきゃならねえ。

撮影時、カメラ手前側に作り物の手すり等を用意し、そいつが壊れるようにするなどして、『手前にリアル、奥にCG』の鉄則を徹底する。

ジュラシック・パーク（1993）ってやつがある。

言わずとした、世界を震撼させた伝説の恐竜映画だ。

こいつは機械動物模型アニメイトロニクス、着ぐるみ、CGを上手い具合に混ぜ合わせていた。

CGはカメラから遠くに、ヴェロキラブトルは着ぐるみで表現してカメラの近くに

……こうすることで、実物を見ている人間の目が、遠くのCGも実物のように見せてくれる。

こいつが『手前にリアル、奥にCG』って鉄則の魅せ方だ。

(あとは！)

家屋系のセットも微調整・微修正し、橋のセットの準備が完了するギリギリまで他のことをやっていかねえとな。

瓦礫、煙も作らねえと。

橋が壊れるシーンで瓦礫が飛び、煙が漂ってりや、あとはカメラワークを激しくすることでCGに多少粗があっても誤魔化せる。

映像編集の方に新人と大学生バイトしかいねえってんなら、俺がここからカバーすりゃいい。

瓦礫は発泡スチロール製、煙は四塩化チタンに混ぜ物をして作る。

四塩化チタンは空中の水分と反応して白煙を生じる特性を持つ物質だ。

ヒーローのスーツに黒い跡を描き、そこに四塩化チタンを塗っておけば、「弾丸が当たったところが焦げてるし煙出てる……痛そう」みたいに視聴者に思わせることができる。

こいつに混ぜ物をすれば、白と灰の混じり合った煙を演出できる。

橋のセットに仕込んでおいて、任意のタイミングで瓦礫と煙を同時に出現させることだつてきでできるわけだ。

また、ラブシーンでどこか現実的でないような、やや幻想的なシーンを演出することも可能だ。

そのまんま白煙で使つてもいいし、光を当てればまた別の色に見えるしな。

いやー便利だな四塩化チタン！

最近は仮面ライダーの撮影とかこれ昔ほど使つてねえけど！

「朝風さん！ 橋のセット準備完了です！ 言われた通り二分割してセットしましたー！」

「ありがとうございます！ 五分以内にそっち行きますー！」

まずは橋を加工する。

全体の塗装をどうにか工夫して、カメラアングル次第で過去のセットの流用だとバレない、そういう感じにしておきたい。

あと橋の各末端に手を入れて、CGの橋が崩壊した後も自然に見えるようにしておかないと。

作る、作る、作る。

ぶつさいくな出来だが、とりあえず11:30になる前に橋は完成した。

「黒さん、ちよつといいでしようか？」

手すりのチェックなどもしてほしいんですが……」

「ん？ やつとか」

C Gの橋が壊れる時、手前で壊れるための手すり。

とりあえずありものを使って、塩化ビニール製の手すりを作った。

真ん中に仕込みがあつて、目を凝らさないと見えないくらいの細い糸を引つ張ると、真ん中が気持ちいいくらいベキつと折れるようになっていた。

そういやウルトラマンメビウス（2006）に出てくる怪獣・コダイゴンジアザーの持つてる釣り竿も、あれ竹つぼく塗装しただけの塩ビパイプなんだよな。

普通のカッターナイフで切れ込みが入るくらい。

この手すり、ちよつとアレに近いかもしれん。

コダイゴンジアザーの釣り竿は本編で折れるが、確か切れ込みを入れてぶつ叩いても全然思うように折れなかったんだ。

だから折れた断面をそれっぽく加工した釣り竿を作成し、あらかじめ切断しておいた釣り竿を接着剤で仮止めして、叩きつけることで折れたシーンを演出してたはずだ。

リアルな折れ方にすりやいってわけじゃねえ。

分かりやすく折れること、分かりやすく折れた断面を魅せることが大事だ。

塩ビで手すりを作り、切断して二つに分け、断面をFRP（繊維強化プラスチック）で加工して折れた断面を刺々しく表現する。

工房に詰めてた方がもつといい出来になるんだが、ここで作るなら削り出しが限界だな。

それでも十分な出来になってると思う。

こうして本体塩ビ・断面FRPで作った手すりを、簡単に接着剤でくつつける。

くつつけた部分は上から塗装してるんで、そこで接着されてるなんて見ただけでは分からんように仕上げた。

こいつは、初代ウルトラマン（1966）由来の技術だ。

初代ウルトラマンのスーツは、スーツを着た上で医療用の薄手袋を付け、手袋とスーツの腕部分を一緒にしてゴム系塗料で銀塗装していた。

こうすることで、手袋とスーツの継ぎ目を隠すことに成功したのだ。

まあ、ゴム系塗料だったもんだから、着る時にはいちいち塗らなきゃならんし、脱ぐ時にも時間を掛けて剥がさないとイケなかったそうだが。

塗装によって、既に折れてる手すりの接着面は見ただけじゃ分からない。

塩ビとFRPの二種を使っていることも分からない。

突貫作業にしては結構自信ある作品だけ、これ。

自信作だった、んだが。

「ボツ」

ボツかよ！

「この手すり折りやもつとよく分かるんだろが、折らなくても分かる」
「……出来が悪かったでしょうか？」

「いや、出来は悪くねえだろ。悪いとすりや、スタンスの方だ」

スタンス？ 俺の？

「分かりやすさ第一の子供向け番組のノリは、俺の手足には要らねえぞ」
「っ」

「分かりやすい折れ方はいらん。

地味でも、映えなくても良い。リアルに折れるようにしろ」

「……はい」

「やり直した。0点、出直してこい」

殺すぞ！

黒さんじゃなかったらキレてたかな！

あんたの言うことにあんま間違いないからなクソ。

……黒さんは、芸術を映像に描ける人だ。

でなけりや、世界三大映画祭全てで入賞なんてできやしない。

芸術に、分かりやすさはあまり必要ない。

分かりやすすぎるものは芸術として下等、なんて言う人もいるしな。

俺が仕事に自然と入れた”分かりやすさ”は、黒さんがしようとしていた仕事からすれば異物で余計なものだったんだろう。

仕事は続く。

その後も結構、俺は仕事の呼吸があんまり合わない黒さんにダメ出しされ、仕事の細かいところを細々と修正させられていった。

つかれた。

黒さんは不機嫌には見えん。

ダメ出しはたくさんされたが、それは俺があまりにも無能だったんじゃないかと、黒さんがより良いものを目指した結果なんだろうか。

いや分かんねえけど。

そう思いたい。

主に俺のメンタルのために。

黒さんは流石だな。

自分の名前を出さないことを条件にして、スケジューリングの権限までもぎとってやがったとは驚きだわ。

まあ分かる。

こんな作品に監督として名前を残したくないって思考も、スケジュールレベルで組み直さないとこの作品は世に出せないだろう、って思考は。

リアリストだもんな黒さん。

俺も今日は結構セットを作った。

椅子にテーブルに衣装に、撮影時に使う小物に、色々作った。

午前が一番忙しいと思うたら午後の方が忙しいってどういうことだ。

つかもう夜の12時だぞ。

『午後』もう終わってんじゃねーか！

俺は名目上は外部からの応援アシスタントだ。

が、黒さんが今代理監督な上、その手足として動かされてるもんだから、実際は助監

督と美術監督を両方やってるようなもんだ。

アリサ社長ー。

早く本格的な代理として使える人間派遣しておくれー。

俺が死ぬぞ。

俺が俺を殺す。

適当な仕事をするくらいなら過労死して逃げた監督と問題起こした上の奴に思い知らせてやる覚悟だぞこの野郎。

「ふう」

休憩室で休んでいていいと言われたので、休憩室のソファーに横になる。

技を身に着けても体力は増えない。

朝から晩まで休憩を控え目にして動き続けりや、俺の体力はどう工夫しても空っけつになっちまう。ここから徹夜作業は無理だ。

道具作りは、俺が頑張ればとりあえず遅れは出ねえだろう。

映像編集は分かん。

他の仕事を全部引き受けて一部の業務にだけ集中させればなんとか、って感じか。

他は……黒さんが上手くやってくれることを祈ろう。

頑張れ黒さん。

あんたが上手くやってくれないと、俺は間違いない一ヶ月以上地獄を見るぞ。

「何考えてるの?」

疲れからか、俺は幻聴を聞いてしまう。

柔らかな声だった。

このまま寝ちまおうかな、朝まで。

「無視されると傷付くなあ」

あ、これ幻聴じゃねえやつだ。

「百城さん!」

「こんばんわ。お疲れ状態かな?」

「お疲れ状態です……何故ここに?」

「アキラ君と出先で会ってさ。」

君に差し入れしようとしてたけど、忙しくて駄目になっちゃったんだって。

だから私が代理で来たんだ。

はいこれ、アキラ君が差し入れしようとしてたやつ」

「あ、白い恋人。前に好きだと言ってたのを覚えてくださっていたみたいですね……」

あいつマメな男だな、マジで。モテる男だ。

「それとこっちは私から差し入れ。ただのコーヒーだけだね」

「！ ありがとうございます！ 一生大切にします……！」

「いや、ここで飲めば良いんじゃないかな」

「疲れてるんで俺が今何か変なこと言っても忘れてください、切にお願いします」
くすつ、と百城さんは笑った。

可愛い。

甘いものとコーヒーはありがてえ。パワーの源だ。

「お疲れ様。また明日も応援にきてあげようか？」

「……いえ、大丈夫です。頑張れます」

「男の子だね」

百城さんは、ソファアの上でくつとしていた俺の頭を撫でて。

「かっこいいよ」

そうして、帰路についた。さようなら百城さん。夜道には気を付けて帰れよ。
うむ。

やる気が出た。また明日から頑張ろう。

疲れが命を削るぞ中盤戦

世界三大映画祭の対は、世界三小映画祭とかじやない。

世界三大ファンタスティック映画祭だと、俺は思う。

こっちはSFやホラー、ファンタジーなど、エンタメ性が強いジャンルを扱う三大祭りだ。

シツチエス・カタロニア国際映画祭、ブリュッセル国際ファンタスティック映画祭、ポルト国際映画祭……とりあえず、世界三大映画祭よりは娯楽性を前に押している。

俺はこっちの方が好きだわ。

シツチエス・カタロニア国際映画祭なら、『時をかける少女』『サマーウォーズ』『アイアムアヒーロー』『君の名は。』とかが受賞してる。

ブリュッセル国際ファンタスティック映画祭なら、『バンパイアハンターD』『仄暗い水の底から』『デスノート』とかが受賞。

ポルト国際映画祭は『REC/レック』が入ってる時点で頷くしかねえ。RECは1と3からオススメしていききたい。何故ならクソ面白えから。BADENDだけど。

うん、こりや面白え映画が多いな。

世界三大ファンタスティック映画祭全部で受賞した『アイアムアヒーロー』とかは俺もクツソ好きだが、俺のぼんやりしたイメージだと黒さんはああいうの撮らなそうだ。

黒さんは世界三大映画祭の全てで受賞した超有能な監督だ。

ハリウッドで成功したわけでも、世界三大ファンタスティック映画祭で受賞したわけでも、日本で名作を生み出したわけでもない。

あくまで、世界三大映画祭で受賞した人だ。

評論家に絶賛される人と言い換えてもいいかもしれないな。

だからじみに、得意分野の方向性が俺と合わない。

俺の得意分野は、エンタメ性の強い特撮分野だからだ。

合わせようとするれば問題ないが、それでも僅かにズレが出そうになる時も多い。

なので俺の方が意識的に合わせないといけない。

この監督の持ち味を僅かにでも殺すのは、あまりにももったいなすぎる。

例えばもっと、黒さんの持ち味を活かせるスタッフ……この人の肌に合う俳優でもいれば、評価が高くて一般的な人気も高い映画も作れて、方向性もハッキリすると思うんだが。

百城さんみたいな俳優嫌いなんだよな黒さん。

それはイコールで、今の主流である、スターズ系の俳優が合わねえってことでもある。

百城さんは、スターズの俳優成メソッドの集大成みたいな人だからだ。

俺とこの人の合わない部分は、ほんのちよつとのズレとして出る。

だがそいつは逆に言えば、この人と俺は仕事の上ではほんのちよつとのズレしかない。

もうちよつと何か違えば、ガツチリハマる気はするんだが。

「おいエージ、この花瓶が気に入らん。

なんでこんなセンスにしたんだ？ 前の美術担当は無能だな。

ヒロインが主人公に投げつける花瓶だが、別のやつが欲しい。

投げた花瓶が壁に当たると綺麗に割れて、かつ良い絵柄で、割れる音も良いやつ作れるか？」

「はい、一回事務所に帰って作ってくるんで時間くださいー！」

まあいいや、オラツ、今は仕事仕事！

『飴ガラス』、というものがある。

テレビや映画を色々と見てきた人なら、一度は見たことがある。ガラスのシーン”というものがあるはずだ。

たとえば、ガラスを突き破って突入してくる人のシーン。

たとえば、ビールのガラス瓶で人の頭を殴って、瓶が割れるシーン。

たとえば、ガラステーブルが灰皿を投げつけられて碎けるシーン。

あれらのガラスは、全部偽物だ。

そのガラスの通称を、飴ガラスと言う。

飴ガラスは透明なガラスの代用品としてだけでなく、壺や花瓶、皿や偽の壁などに使われることも多い。

なので、ミステリーやサスペンスには欠かせないものなんだぜ。

「よし、出来た。さっさと持ってこ」

現代の飴ガラスは大まかに二種類。

砂糖、コーンスターチ、酒石酸水素カリウムを混ぜ、150度程度に熱して液状にし、型に流し込んで固めるタイプ。

もう一つが、割れやすい安価な樹脂を200度程度に熱して液状にし、型に流し込んで固めるというタイプだ。

俺は今回樹脂の方を使った。

だって安いし。

綺麗に仕上がるし。

ガラスの偽物ってジャンルで、壊れやすい花瓶も、それっぽい魔法使いの指輪も、クリスタルのような笛も作れなきゃならねえ。

それが特撮の世界だ。

この花瓶は内側に切れ目を入れてある。

よって、割れる時は切れ目に沿って綺麗に割れる。

ヒロインが主人公との恋愛模様がこじれ、投げつけた花瓶が壁に当たって綺麗に割れる……完璧だ。黒さんのやりたい演出はこれで完璧にやり遂げられる。

よし、そろそろ橋が壊れるシーンに使う瓦礫と煙の作成を本格的に始めつか。

「朝風君、あの、ちよつと」

「どうしました町田さん？」

「ヒロイン役の主演女優の子がね、橋が崩れるシーンの飛び石みたいなところ跳べないって」

「……」

「あの子そんなに身体能力高くないの」

あーもう！

「任せてください。ここのスタジオ、上からワイヤーで吊れるセットありますから」

「え、”吊る”の？」

「吊ります」

補助程度のもんだが、ワイヤーアクションだ。

ワイヤーアクション。

一般人でも知ってる人が多い、上から何らかの糸で人を吊ることで、空中戦のアクションシーンを撮影する方法だ。

元は1954年のミュージカルで生まれたもんだと言われているが、近年ではそれより早く歌舞伎が技術として成立させていたって説もある。

そういう説が出てくるってだけで歌舞伎すげえな。

映画における生身の人間の吊り下げは、50年台の日本映画で成立したらしい。

空の大怪獣ラドン（1956）なんかが有名かもしれない。

ラドンは後の怪獣映画とかにも出てたし。

ワイヤーアクションはその後香港に渡り、香港映画で独自の進化を遂げ、ハリウッドの人気作品を通して日本にまた渡ってきた……っつー歴史があるわけだ。

ワイヤーアクションは年々進化してやがる。

昔、ワイヤーはあんまりもんで使えなかった。

緑の背景に緑に塗ったワイヤー、つてやつても、ワイヤーはいくら塗ろうが完璧に背景に溶け込んでくれねえことが多かったからだ。

そういう時、現場は絶対にワイヤーを使えなかった。

だがデジタル加工でワイヤーを消せるようになって、ワイヤーは太いもんを使えるようになり、重いもんも安全に吊れるようになった。

俺のこの手の技術は、棘谷が映像を作りをする時にいつも頼ってる有限会社 特殊効果 拮抗船と一緒に何度か仕事をした時に習得した。

拮抗船の美術師である枝岸さんも確か、ウルトラマンのCGと合成の革命期に、技術進歩で太いワイヤーが使えることを喜んでたなそういや。

ワイヤーは、上手くやればジャンプを自然に演出できる。

棘谷はウルトラマンメビウス外伝 ゴーストリバース(2009)で、海外展開で大人気の戦隊シリーズ『パワーレンジャー』の横谷監督と、彼のチームを丸ごと採用。

横谷監督のチームと棘谷スタッフは手を組み、多くの実験的な技術を試し始めた。その内の一つが、ワイヤーアクションによる質感のあるジャンプ表現だ。

『低重力の空中戦であれば極めてリアルになる』という結論に至り、ゴーストリバースの後に制作されたウルトラ銀河伝説(2009)にも、この技術が採用された。

だが、この時の研鑽は無駄になってねえ。

試行錯誤は蓄積される。

ジャンプをワイヤーで表現する技術の蓄積は残ってる。

俺もまた、そういう技術を多く自分の仕事に継承してきた。

「黒さん、橋渡る際のジャンプシーンにスローモーション入れてもらってもいいですか？」

「いいぞ、やつといてやる」
よし。

過去の映画作品を振り返ってみると、ジャンプシーンにスローモーションを入れる映画は案外多い。

スローモーションだと、ワイヤーを使つての崖ジャンプシーンとか、爆発に吹っ飛ばされる主人公をワイヤーで吊つて表現するシーンとか、そういうところの不自然さが消せるからだ。

ジャンプで飛び移れない女優でも、ワイヤーで吊つてジャンプシーンを演出して、他のあれこれで誤魔化せば、なんとかいけるんじゃないかね？

「ヒロインの女優は誰が吊るんだ？」

「撮る時は俺が吊ります。黒さんは撮影に集中してください」
「おう」

大丈夫、だと思ふ。

道具を使つて工夫すりや大丈夫のはずだ。多分。

昔から西宝では、モスラやキングギドラをワイヤーで吊って操作すんのに、素人同然のスタッフすら動員してた。

大怪獣を動かすには数十人のスタッフが必要だったからだ。

必要なのは知識と工夫。俺の知識と技術を活かせるフィールドで戦ってやる。

あ、主演女優さんだ。

「あの……ワイヤーで吊るって話を聞きましたけど、ワイヤーって切れないんですか？」
切れねえよ。

「安心してください。スターズの女優さんには安全が確保されたことしかさせませんよ」

「そ、そうですか」

「今の時代のワイヤーは、大体ポリエチレン繊維の『テクミロン』です。

メーカーの公表値ですが……

ガラス繊維の比重が2.54、高強度カーボン繊維が1.78。

防弾チョッキの素材が2.54、テクミロンが0.96。

比弾性率はガラス繊維が300、高強度カーボン繊維が1500。

防弾チョッキの素材が1000、そしてテクミロンも1000です。

比強度はガラス繊維が10、高強度カーボン繊維が19。

防弾チョッキの素材が21、なんとテクミロンは35です。凄いですよね」
「……………」

「絶対に切れないってことです。俺を信じてください」
「……………分かりました」

黒さんに断って、一旦俺の事務所に戻った。

こうやって俺が現場を離れると作業が完全停止すんのが嫌なんだよクソが！

増員！ 援軍はまだか！

誰か美術部門で俺の代わりに総指揮しろや！

事務所に戻って取ってきたのは、ワイヤーワーク・コーデイネーターの専用機械。

日本じゃ、ワイヤーアクションってのは全部手引き式だ。

だが今回の撮影に手引き式でやれる技術者はいねえ。

そこでハリウッド式だ。

ハリウッドではワイヤーアクションは、圧縮空気を使った機械制御で行われる。

ワイヤーを使う技術がない俺でも、機械を間に挟めばなんとか、形になるはずだ。

形になれ。

頼むぞ俺の腕。こっちの分野は自信ねえぞ俺。

原作漫画のクライマックスのシーンを、こいつで演出する。やってやる！

しかしアレだな。

今更ながらに思うが、撮ってて楽しいクライマックスシーンや重要な心情描写のカットをバシバシ撮ってる黒さんは、弁当で好きなものから食べる子供みてえだ。

撮影スタジオに戻って、ワイヤーで吊るための仕込みを始める。

「今からスタジオ上で作業するので、何かあったら大きな声で俺を呼んでください」
「はい」

走っていくワイヤーアクションには、天井から俳優を吊る支点の滑車、それもスライドして動いてくれる支点の滑車が必要になる。

俳優を○、ワイヤーを△、支点の滑車を▲とする。

橋のセットを■、飛び石の足場とCGの橋の部分を□とする。

そうなると

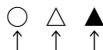


こう、一緒に動いて行って。

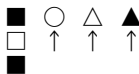




ジャンプシーンでワイヤー巻き上げて。



俺の機械操作で上手く飛び石の上に降ろして。



上手い具合に橋を渡りきらせる。

出来が最高峰のプロレベルにはならねえだろうから、仕事終わって皆が帰ったら居残って練習しておくか。撮影期間もまだあるし。ああでも許可出るか？ どうだろ。

だがやっぱ、最良は本職の援軍が来てくれることだ。

本職が仕事を変わってくれることが一番だ。

頼んだぞアリサ社長。
頑張れウルトラの母。

出来なかつたら罵声浴びせたくなるかもしれないぞ。

あとはそうだ、スプリングブランサーも用意しておこう。

スプリングブランサーは、昔ゴジラやモスラやキングギドラをピアノ線で操るために、工場で作られていたものを特撮の現場に持ってきたやつだ。

内蔵されたスプリングが、吊ったものの荷重を0にしてくれる。

撮影の状況を見て、こいつで質感を出していこう。

「エージ！ ちょっと降りてこい」

「はいはい黒さん、なんででしょうか？」

「このスターズの俳優の血を吐く演技がクソだ、なんとかしろ」

「えっ」

ぶっ殺してやろうかこのヒゲオヤジ。

……いや、でも、うーん。

黒さんが言うのも分かるな。演技がちよっと物足りない。

これからレッスンを伸びるのを期待しよう。

「……黒さん、カメラワークを融通してもらってもいいですか？」

「いいぞ、特別にな」

あざす。

ええと、恋のライバルが毒殺されて血を吐くシーンか。

確かにここは『毒で苦しい』って感情を視聴者に伝える表現力が高くないと無理か。

何しよう。

何ができる？

俺に出来るのは物作りだけ。

それで『毒で苦しい』って表現を補正して、演技力の底上げをしてやるには……よし決めた。ここの撮影所の食堂に行つて材料を調達してくつか。

「五分ください。血糊を作ります」

食紅、ケチャップ、コーヒーの粉、片栗粉しかなかった。

まあいいや。

ありもんでどうにかなるならそいつが一番だろう。多分。

「こちらが血糊Aです。」

毒を飲んだ直後、口から溢れる血の表現に使ってください」

ケチャップを血のベースにして、赤色は食紅で、黒色はコーヒーの粉で出す。

こうすることでほどよく『赤黒いグロテスクな吐血』ができる。

片栗粉を混ぜれば、ドロドロな血も表現可能だろう。

成分の配分は計算してるから、俳優が口の中に含んでいれば口の中の唾液で薄まって、撮影時に吐き出すタイミングではリアルな血に見えるはずだ。

「こちらが血糊Bです。」

赤い塗料を溶かしたシンナーで、ほどよく崩した発泡スチロールを溶かしました。

泡立った赤いこの塗料を、先程の血糊Aに混ぜたものが血糊Bとなります」

俳優が口に含んでおいて、吐き出すシーンを演出するのが血糊A。

俳優が吐き出した血糊に混ぜ込んで、血の印象を更に強烈にするためのものが血糊Bだ。

なんでかまでは俺も知らんが、人間つてのは単純に血を模したものより、泡が混ざった血や、黒が混ざった血により實在感・不快感・不安感を覚えるらしい。

わざとらしいと思われるかもしれないが、表現力と演技力を俺の技術で補ってやるには、パツとこのくらいしか思いつかねえ。

「血を吐くシーンでまづカット。」

吐き出した血糊の血溜まりに、シンナーで溶かした発泡スチロールを混ぜて再開。

こうすれば吐き出した血の泡がいい感じに目を引いて、凄惨さを出してくれるかもです」

「おう、(´)苦勞」

黒さんから却下は出ない。セーフ！

俺の仕事もぶっちゃけ、表現力が足りない俳優さんを一流レベルまで引き上げてねえんで、黒さんの要求に完璧に応えられたわけじゃねえ。

なんでちよつと怖かった。

よかった、俺の技術力不足だーとかにならないで、表現力がない俳優にイライラするだけで済んだみてえだ。

「撮影再開するぞ。準備始めろ」

ふう。ちよつと休憩。水分取ろう。取らなきゃ死ぬ。俺が死んじゃう。

休憩終わったらワイヤー撮影のためのレールチェックから始めるか。

支点の滑車が動くレールの調子が悪いと撮影は絶対失敗するし。

しかしなんだな。

黒さんのカメラワークというか、映す画えの作り方は本当にいいな。

『背中の映し方』ってのがある。

ドラマとかだと、カメラは人間の目の高さにして、ほんの僅かに見下ろすような角度で男の背中を映す。

また、”大軍に立ち向かう主人公の背中”を映すシーンなどでも、カメラは引いて広

い範囲を映しつつ、斜め上から見下ろすようにカメラを動かす。

背中への映し方に決まりつてもんはない。

アツプにして背中をしつかり映してもいいし、カメラを引いて男の背中を背景の一部にしたっていい。

だが、やっぱ映えるアングルは見下ろすようなアングルが多い。

そこに来て黒さんは、セツトの構図、カメラの位置、照明の位置と角度を巧みに計算して、このドラマの恋愛パートを『斜め下からのカメラアングルで映す男の背中』が印象に残るような面白い映像に仕立て上げやがった。

まるで、仮面ライダーウィザードの15話だ。

敵に向かって走っていくヒーローの背中を、斜め下から見上げるようにカメラに映すあの素晴らしい映像作りを思い出させやがる。

いやあれともまた違うな。

あれより丁寧で、戦闘じゃない分かなり情緒的に見える。

斜め下から見上げるようなアングルで、男の背中を見せる……既成概念に囚われないカメラワークと、そこから作り上げられる映像。

いいなあ。

こういうの好きだわ。

斬新なんだよなこの人の映し方。既成概念に沿ってないから新鮮さを感じるっつか、見慣れた感や見飽きた感がねえ。

照明を上手く調整して、朝日が面白い角度で照らす背中も魅せてくる。

撮影スタジオでは照明こそが太陽だ。

照明を操る監督は、スタジオの中では太陽を操る神様にも等しいだろうな。

「おい、エージ」

「はい黒さん、また何かしますか？」

「いやちよつと聞きたい。セットのあそこのタンスは何をイメージして仕上げた？」

「最近のミニチュアのモデルに多用される、”一般的”イメージの強い家具のイメージです」

お、俺が改良したセットの部分に速攻気付かれたか。

黒さんはリアル嗜好だ。

俺はそう判断した。

そこで俺が連想したのは、ゴジラシリーズ、ウルトラシリーズ、戦隊シリーズに関わり、巨大怪獣・巨大ロボ・ミニチュアなどに造詣が深い井下泰幸さんだった。

伝説の男・棘谷英二の手がけた黄金時代の全てのミニチュアはこの人が関わってる、と言えば業界関係者は皆戦慄するだろうぜ。

井下泰幸さんは戦時に大日本帝国海軍に所属していた。

だから特撮の世界の人達は、軍艦のミニチュアの設計ができる有望な人員として、この人を直々にスカウトしに行ったんだ。

だが、この人はミニチュアの才能を花開かせた。

何故か？

この人が戦争の戦傷を治していた時、職業訓練所での先生が家具作成師で、美術学校での先生も有能な建築士だったからだ。

この人の信条は『本物を作る』こと。

つまり、セットの家具、ミニチュアの家具、本物の家具、その間に差を作らないってことだ。

ビルの大きさを正確に測り、正確にミニチュアビルの縦横比に反映しようとしたことなど、語られる伝説には枚挙に暇がねえ。

黒さんの望む屋内の撮影セットを作るには、既存の販売品の家具をコピーしたようなものをセットに置いても、絶対にOKは出ない。

この人の理想を作るには、俺が頭の中で、この人の脳内設計に合わせた造形をするしかない。

なので、タンスの写真を片っ端から見ても、そこから黒さんの理想に近いものをイメー

ジとして抽出し、井下泰幸の信条を参考にして形成した。

すなわち、『本物を作った』。

商業品としては実在しない、俺のイメージで構築したダンスだったが、やっぱり黒さんの目に留まってくれたみてえだ。

「前に俺は手癖で仕事してて、無駄な手間をかけて申し訳ありませんでした」

黒さんのこれは無駄なこだわりってやつだ。

大衆に分かるようなこだわりじゃない。

黒さんの理想を目指して作品を作ろうとすると、どんどん無駄な部分に労力が重なる上、一般的な視聴者にはそのこだわりがほとんど伝わらねえ。

俺のこのダンス作りだって、やらなきや黒さんはいつまで経っても満足しなかっただろうが、所詮はダンス一つだ。

市販品や既存のセットでいいだろ、と他の監督なら言うだろう。

それでもやつぱり、黒さんは納得しないに違いない。

「分かる人にだけ分かる作りでいい。ですよね」

俺がそういうと、黒さんはにやりと笑った。

「手が空いたときでいい。セット全部に手を入れる。できるか？」

「できます」

よかったよかった。

こりやあもうボツは出ねえな。やったぜ！

つーかーれーたー。

今日は早く帰れたが、明日は早朝から仕事だ。

帰宅時間と出勤時間と就寝時間と起床時間が全く安定しないのが、睡眠時間が短いことよりもよっぽど辛いと俺は思う。

近年でもスーパー戦隊シリーズとかは、メイン戦隊に序盤の時期休日がないことが多い。

序盤スケジュールの基本は五日撮影、二日アフレコとかだからだ。

休みなんてねえよ。

だがこれでも最近是人権が取り戻されてきた方だ。

昔、ゴジラの撮影は朝9時にセットに俺みたいな人間が入り、17時頃に撮影準備が

完了して撮影が開始され、俺みたいなのがあくせく走り回って朝の5時に撮影終了って
いうのが慣例だった。

『ゴジラは5時ならならぬと終わらない』とかいうフレーズはちよくちよく聞いた
な。

こいつを二ヶ月近く、連日連夜やつたりもするわけだ。

そういう人達、あるいはそういう人達の弟子の指導を受け、今の俺がある。

こういう撮影を乗り切った人は、最近の撮影を見てこう言うかもしれんわけだ。

「最近の若いもんは」と。

うるせえ死ね。

よく過労死出なかつたな。

俺が情けねえ姿を見せたら昔の人は、情けねえな最近の若いもん！ とか言うんだろ
うか。

うーむなんつーことだ。

まだ俺には頑張りが足らねえとでも言うのか。

ただやっぱ、俺の脳内には家具系のインプットが足りてねえ。

普通に番組を撮るくらいならいいが、黒さんクラスの人と仕事するとどうしても再イ
ンプットが必要になっちゃう。

「じゃあねえ、一回帰るか」

俺の家には親父の残した資料がある。

前にバイクの情報を入れた時と同じように、親父の残した資料を頭に入れておこう。

明日からの仕事に活かせる下地がほしい。

しかし、疲れたぜえ。

東映特撮ファン感謝祭2017で、仮面ライダーディケイドを演じた井下正大さんと、仮面ライダーファンで有名な店橋弘至さんがトークしてたっけな、そういや。

あの時、店橋弘至さんは「あなたにとつてのヒーローとは？」と聞かれて、「疲れない・諦めない・落ちこまない」と答えてた。

あークソ。

俺はヒーローにはなれそうにないな。

アキラ君に子供達がそういうイメージ持つてんのは、まあ分かる。

あれはヒーローだわ。

「うん？」

俺の家の前に……いや、お隣の夜風さんちの前か？

ちっさい子供がいる。

男の子と女の子だ。

なんか泣きそうになつてゐるな。手に持つてゐるのは玩具か？

「どうしたのかな、君」

「え……あ……」

「何か困つてゐることがあるなら、俺が力になつてあげようか？」

男の子は、泣きそうな顔で俺を見た。

どうしよう、と口にして、差し出されたその玩具は、一部が破損していた。

あー。

あるある。

俺もガキの頃に撮影所で雑な扱い方して玩具壊してたわ。

子供の頃はこういうこと頻繁にあるんだよな。

「そのくらいなら俺が直せるよ」

「本当!？」

「ああ。少し時間をくれればね。その間、俺の家の適当な部屋で遊んでていいよ」

まあそもそも俺の家に遊ぶものとかほとんどねえけどさ。

壊れた玩具を眺めつつ、子供達を家に招いた。

男の子と女の子は何故か驚いた顔をする。

「え、お兄さん幽霊屋敷の人？」

「ん、んん？ 幽霊屋敷って何？」

「誰も住んでない家だけど、時々幽霊が動いてる家なんだって噂になってて」

「うんうん、探検したいって小学校のクラスの男子も言ってるね」

マジでもうちよつと家に帰った方がいいな俺！

「やっ」

壊れた部分に、指で触れる。

破損箇所の素材は、ポリエチレンテレフタラートか。

まあうちにあるものでなんとかなるかな。

ポリエチレンテレフタラートは特撮のスーツや小道具、もしくはそれを模した子供用玩具なんかに使われてる素材だ。

仕上げ方を考えれば柔らかい衣服繊維にもなるんで、俺はそっちにも使ってる。

最近の人気商品だと、仮面ライダージオウ（2018）のライドウオツチなんかを作るのにも使われてるな。

Polyethylene Terephthalate
ポリエチレンテレフタラート。

なので、略称はPET。

こいつで作ったボトルを、『ペットボトル』と言うのだ。

「ま、ポリエチレンテレフタラートなら直すのは楽だな」

ポリエチレンテレフタレートは80℃くらいでグズグズになる。融点に達させるなら270℃もありや十分だ。

親父が家で使ってた器具を使って、再形成する。

この玩具に使われてた型がない以上、完璧に見分けがつかないほどの形で直すのは無理だが、子供の目では見分けられないくらいにソックリの形に修復を完了させる。

「ゴメンな待たせて。はい、直ったよ」

「早っ」

「わっ、すごい元通り……お兄さんマジシャンの人!? 手品か何か!?!」

お兄さんマジシャン? とか言われたら「No, I, m a W I Z A R D」とか応えなくなるだろうやめろ。

「ちよつと手先が器用なだけだよ。さ、家にお帰り、二人共」

本を積み木みたいにして遊んでいた小さな二人の背を押して、家を出て……そこでばったりと、人と出会っちゃった。

夜風さんだった。

お隣さんだった。

夜風さんは、子供二人と俺の顔を交互に見て、顔を青くする。

「ゆ……誘拐? 通報しなきゃ」

「違いますからねー！」

そう見えても仕方ねえけどよ！

ちっさいあの子ら二人は、お隣さんの夜風さんの妹さんと弟さんだったらしい。

双子の兄妹で、男の子の方が夜風ルイ。女の子の方が夜風レイ。

姉の夜風さんの名前は夜風景、つまりケイなので統一ネーミングっぽい。

もつと兄弟が多かったら夜風ヘイとかも居たんだろうか。夜風ヘーイツ！

「なあなあにいちやん、これ川で拾った玩具なんだけど直せる？」

「これは……戦隊のキュウレンオーか。ちよつと中開けても良い？」

「いいよー」

「んー……ああ、これなら大丈夫。

中をちよつとはんだ付けすればまた動くよ。

動かなくなつたから捨てられちやつたんだらうね。

今度直して、電池入れて、外側を塗装して新品と同じにして持つてくるよ。預かつて

いい？」

「本当!? お願いー！」

なんか懐かれてしまった。

どういふことだ。

子役以外の子供の扱いはてんで分からねえ。子役はアレでもプロだからな。

そもそも昔から年上の大人としか触れ合っていないから、本当は同年代や年下と会話するのもそう得意じゃねえんだぞ俺……

「晩飯食べていったらどうかしら」

「え、そんなに迷惑はかけられませんよ。その気持ちだけで嬉しいです、夜風さん」

「弟がとつても懐いてて、とつても感謝してるから。私もお礼してあげたいの」

「とはいつても」

「それに、今のあなたは死にそうなくらい疲れてる人つて、見れば分かるから」

「えっ、そうですか？」

そういうもんかね。

でも優しさが身に沁みる。ちよつとグラつくな。

「さつきからレイとレイの遊ぶものをどんどん直してもらってるから、お礼がしたいわ」

ここの子会話の間が微妙に独特だな。

「……分かりました。じゃあ、夜風さんのお言葉に甘えさせていただきます」

「カレー作るから、ちよつと待ってて、おべん……英二くん」

「今お弁当の人って言いかけましたよね」

招かれた夜風家の家の中を見渡してみる。

……あまり裕福な家とは言い難かった。

ま、俺の家もあまり立派なもんじゃないが。

子供達は幽霊屋敷とか言ってるが、俺の家は屋敷って言えるほど大きくない。

親父は仕事にしか興味がなかった。稼ぎとは無縁の男だった。

母親は親父にしか興味がなかった。……いや、違うな。親父の作品にしか興味が
ような、世界で一番親父を理解し愛している女だった。

両親共に、本質的な部分では、生活の安定にも金にも興味がなかった気がする。

それがおかしいことなんだと俺が気付いたのは、15歳の時だった。

だから俺は、”子供の頃に貧乏を苦しいと思った”っていう記憶がない。

そいつはきっと幸福なことだったんだろう。

俺にとって、生きることと、遊ぶことと、仕事をするることと、懸命になることと、努
力をするることと、当然のことをすることは、同じことだった。

あまりこの家の経済状況については触れないようにしておこう。

踏み込まない方がいいこともある。

クソが死ぬやツと言われても仕方がない時がある。そいつが家庭問題ってやつだ。

「カレーどうぞ」

「カレーどうも」

「カレーは好き？」

「ウレタン素材くらいには好きですよ」

「例えが分らないわ」

「ローマの休日くらいには好きです」

「あ、私も好き。映画のローマの休日でしょう？」

「そうそうそれそれ。」

「あ、カレー上手い。」

「おふくろのカレーと全然違うな。」

「おふくろは親父の味覚基準で全部の味決めてたんだから仕方ねえことだったんだが。」

「このカレー割と好きだ。」

「玩具を直せる人だったなんて知らなかったわ。ああいうお仕事してるのかしら」

「そうですね。ただ、直すより作る仕事の方が多いですよ」

「なんか例を出せるやつないかね。」

「ポケットを漁ってみつか。」

「仕事道具、プラ板、手帳、スマホ……あ、指輪があつた。」

技術向上を兼ねた手慰みに作ったやつだ。

「こんなのを作ってます」

「黄色い花の指輪？ 綺麗ね」

俺が手渡しした指輪を、夜風さんは興味深そうに見ていた。

細い指に嵌めるサイズの、銀の台座の上に咲いた、透き通るような黄色い花の指輪。

「金属に見える指輪の台座は銀塗装のポリカーボネイトです。」

台座の内底にはミラーシートを貼ってあります。

花の部分はクリアイエローのアクリルと透明エポキシ樹脂の二層構造。

花の表面の塗装はアイエローに見えますが、ゴールドのグラデーションです」

「日本語で話して？」

「日本語で話してます……」

指輪の造形は仮面ライダーウィザード(2012)の魔法使いの指輪を参考に。

ミラーシートの上に透明色つき素材を重ねることで、『向こう側が見えないステンドグラス』の如き美しさを表現するのは、仮面ライダーキバ(2008)の仮面ライダーサガを参考に。

花のクリアイエローのアクリルと透明エポキシ樹脂の二層構造は、仮面ライダー鎧武(2013)の美しい透明パーツを参考に。

透明なクリアイエローの表面に、金のグラデーションを施して綺麗な花として完成させるのは、仮面ライダーフォーゼ（2011）のメテオストームの頭部を参考にした。

この指輪はそのままでも透き通っていて美しい。

だが光を当てると、台座のそこに貼られたミラシートが光を反射し、クリアイエローのアクリルとエポキシの層が光を屈折させ、複雑とシンプルの中間辺りの煌めきを放つ。

光を屈折させて初めて、そこに層があると分かる仕掛けだ。

「現実には存在しない美しい花を作るのが、俺の仕事です」

「素敵」

夜風さんは指輪のクリアイエローの花弁を通して家の中を見たり、家の電灯の光を指輪に当てて色んな角度から見たりしていた。

……いい目をしてるな。

センスがある。

”何が美しいものなのかが分かるか” っていうのはセンスだ。

センスは磨けるが、センスを持ってない奴は一生それを身に付けられない。

この人はセンスがある人だ。

もしもこの先”美しいもの”を探求することがあれば、この人のセンスは輝くかもし

んねえな。

「よかったらそれ、差し上げますよ」

「いいの?」

「お隣さんですから」

「お隣さんでそういうものかしら? ……でも、ありがとう」

……綺麗だな。

指輪も似合ってる。

うん。

良い出来の指輪だったが、この人にやってよかった。

悪くない気分だ。

「電話震えてるよー」

「おや、ありがとう、ルイ君。ちよつと失礼します、夜風さん」

はて、誰からの電話だ?

アリサ社長だ。

廊下に出て、急いで電話にも出ねえと。

「は?」

え。

あー、はい。

アリサ社長が頑張ったのは分かりますよーうん。

分かるけどなあ、オイ。

ギャラ交渉で問題？

最初に決裂した監督達に支払うギャラの問題で、引き継ぎの監督達にまともなギャラが支払えなくなっただって？

予算オーバーがもう見えてるって？

？
スポンサーがギャラ値切ろうとして、引き継ぎの監督が値上げしようとして、大喧嘩

もうちよつと、問題が解決するまで君達だけでやっててくれ？

援軍はそれまでなし？

放送枠はもう買っちゃったから撮影スケジュールを延長することは不可能？

ぶっ殺すぞ。

ぶっ殺す！

番組が完成した後の夜道では気をつけろよてめーらッ！！

ようやく終わる終盤戦

ギヤラにこだわる人を否定はしない。

養う家族がいるわけでもない俺には、家族を養つてる大人の気持ちは分からねえ。

仕事に相応のギヤラが支払われる仕組みがなけりや、有能な人に会社が支払う金を渋つて、結果的に界限全てが潰れるつてのも分かる。

ギヤラ交渉がなくなつたら業界は潰れる。

上の人の不義理で出ていくことになった前の監督も、前の監督に支払うギヤラ問題でギヤラがロクに支払われない引き継ぎの監督も、二重にギヤラ支払いたくない偉い人の気持ちも分かる。

分かるがな。

そのツケを支払う立場になるとこうしか言えねえ。

ぶつ殺してやる。

この撮影に助監督はいない。

いや、居たのだが、二人は監督と一緒に現場を離れ、残り一人も撮影に協力しているだけで既に助監督を降りている。

現在、助監督という名前が付いてないだけの助監督な俺が、黒山監督の下であれこれやっているってえのが現状だ。

監督の実質的な手足が助監督だ。

A Dとか呼ばれるあれも助監督の一種。

チーフ（ファースト）助監督、セカンド助監督、サード助監督という風に序列があり、それぞれが自分のやるべきことをやり、映画や番組を完成させる。

監督が頂点に立つ王様なら、助監督は王様のすぐ下に位置する側近の大臣様ってことだな。

俺の場合、指示された大道具小道具衣装を作成しつつ、美術関連の総指揮を取って、時々黒さんのパシリをやることになっている。

やる事が……やる事が多い……！

しつつかし、黒さんが書き直したっていう台本見ると、なんつーか。

原作沿いとか原作通りって言葉なんざクソだぜ！ っと思えるくらいの独自展開やっつてんな……原作の良さは残して結構な別物、I Fを書いている気すらする。

「……面白い」

おっと、つい口に出ちまった。

黒さんが書き直した脚本は面白い。

というか。

これももう原作漫画の作者の作品つつうか、黒さんの作品になってるわ。

海外でも日本でも有名なスピルハンバーグ監督の大ヒット作品には、度々原作の小説がある。

ジュラシック・パーク、レディ・プレイヤー、他にも名作がゴロゴロしている。

スピルハンバーグが監督の時でも、製作総指揮の時でも、大抵の場合原作は原型留めてねえっていうのに面白い。めっちゃ面白い。

黒さんの脚本にも、俺は同じような感想を抱いた。

日本は『原作通りに作らなかつたらクソ』って風潮が割と強い国だ。

ただ、この感想をよく見たとしても、コイツを額面通りに受け取ると商業展開や作品作りを致命的に失敗する気がする。

『原作と違う』が嫌なんじゃなくて、『原作を改悪した』が嫌なんだろうと、俺は思う。

「なんで原作通りに作らないんだ」って批判も、本当は原作通りに作らなかつたことが嫌なんじゃなくて、「こんなもん作るくらいなら原作に忠実に作っての方がマシだっただろ」って意味合いが強いんじゃないかな。

もちろん、本当に原作がちよつとでも変えられることも許さねえって人は居て当然だろうが。

原作がある映画作品で、原作を思い切って改変し、すつげえ面白い作品に仕立て上げた作品はファンからも高評価される。

昔の作品のリブート・リメイクなんかもそうだな。

原作をなぞるだけの作品にはない、”新鮮味”って強さがそういうのにはある。とにかく、面白けりやいい。

面白くなけりや、とにかく駄目だ。

黒さんが原作を改変した脚本は、換骨奪胎にもほどがあるもんだったが、この脚本を忠実に映像化できりや絶対面白い。断言できる。

「黒さん脚本の仕事だけでもしてみたらどうです？」

「誰がするか。」

第一、こんな仕事も半ばお遊びじゃなきややらねえよ。

誰かが作った作品の後追い、模倣、内容まで借りて何になる？

誰も見たことがない世界を見せるのが映画だろうが。

原作通りの映画化を見て安心した、金を出そう、なんて観客のための映画なんざ糞だ」
「そういうものでしょうか」

「そういうもんだ。」

誰の後追いをする必要もねえ。

”他の誰とも違う自分”をカメラの前で形にできればいい。

分かるやつが分かればいいだろ？

売れるために大衆に媚びた瞬間、そいつは誰にでも作れるフォーマットの映画になる」

……この人は。

「誰にでも作れる映画なら、俺が作る必要はねえ。

才能がない奴らにでも任せてろ。

俺は俺にしか撮れない画えを映す。俺にしか撮れないヤツをな」

あんたそれで映像作り大失敗したら、”原作の名前だけ借りて大失敗した監督のオナニー”とか言われんだぞ分かってんのか。

原作のないオリジナル作品でも”何が言いたいのかよく分からない監督の自慰作品”とか、絶対に言われんぞ。

あつちは悲惨だぞ。

原作無い分「原作レイブ」とかすら言われず、「監督の自己満足」って酷評と空気作品化したって事実だけが残って、『叩かれたけど売れた』って言い訳すらできねえ。

何の救いもない、ドライアイスが溶けるような、何も残らねえ終わりだ。

失敗した作品は、本当にどうしようもなく、死ぬ。死体まで蹴られる。

怖くないのか。

そういう言動で、そういうスタンスで、派手にすつ転ぶことが怖くねえのか。

見てこなかったわけじゃないだろ、映画の世界で無残に叩き潰されていった人間を。

「そういうの、撮る予定があるんですか？」

「待つてるんだよ、俺は」

「何をですか？ ……いえ、誰をですか？」

「『本物』だ」

本物。

「お前のような人生全てを一つの映画に費やすことを躊躇わない役者を、待っている」

……役者。

「さあ、次のカットだ。しばらくお前の出番はないからな、そこで座って見てろ」

「はっ」

撮影が始まる。

俺は次の仕事に入る前に、撮影と役者の状態を把握するために撮影を見つめる。

撮影直前の、撮影に相応しくないほどに緊張した空気。

この空気が、俺は好きだった。

こういう表現は謙虚な日本人が嫌がるからあんま言わんが。

日本の映画、演劇は、世界でもトップクラスのものの一つだ。

少ない予算でやりくりして作品を作るというジャンルでも。

金をじゃぶじゃぶつぎ込んで何かを作るのでも。

批評家に叩かれながらも大人数を楽しませる画を作り、映し出す人がいるならば、それだけでそれには価値があるだろうと、俺は考える。

世界で一番多くの役を演じた俳優は、十七代目大村勘三郎。日本人だ。

世界最高齢の主演女優は88歳で、日本人だ。

世界で最も前売り券が売れたアニメ映画は、2008年のポケモン映画だ。

エンドロールに出てくる名前が世界一多いのは仮面ライダー555の映画で、一つの映画で出るヒーロー数が世界一多いのは海賊戦隊ゴーカイジャーの映画だった。

色んなもん作ってるから、色んな映画や番組の世界記録を日本は持つっていて、映画の王様なアメリカほどじゃないにしても、良い映画や番組が溢れてる国になってる。

そんな日本で間違いなく指折りの能力を持った黒さんが、現役のクツソ優秀な俳優の誰にも満足してない黒さんが、いつか『本物の役者』を見つけたら、どうなっちゃうんだ？

俳優に何を、どう演じさせるか、それだけで無限×無限の可能性がある。

ただここに、通常のオーディションなんかじゃ比べ物にならねえレベルに、本気で

俳優を厳選するって要素を加えたらどうなる？

どんなヒロインに、何を、どう演じさせるか。

無限×無限×無限。

天才監督でもない俺には、ここまで自由度が高いともう何やっていいのかわからない。だが、俺の主観だが、黒さんにその無限三乗が扱いきれねえとは思えねえ。

原作ありの作品で不評なもの。

そいつあ大抵の場合、悪評の原因は『低品質』と『不協和音』だ。

予算がねえか、重要すぎる部分をカットしてるのに全体の調整してねえか、余計な要素を足してるか、まあ大体その辺に理由があると俺は考える。

時々あるよな。

演劇や番組の世界で、元をアレンジしてめっちゃ面白い映像になったやつとか。

スピノフが、元の作品と全然違う作風だったのに、滅茶苦茶に面白いやつとか。

そいつはアニメや漫画でもあるらしい。

まー武術とかでも本家から独立したスピノフみたいな武術が、本家より強かったりするし、あらゆるものに共通する真理みてーなものなのかもしれないねえ。

黒さんは漫画原作のドラマ化ばっかやってる監督に、唾吐いて馬鹿にするタイプだ。

この人にとっちゃ、こんな仕事は暇潰しみてーなものだろう。

おそらく全力すら出してない。

ところどころカメラワークとか見ると、制作費を使って、この作品を作ってるという名目で、実験的な技術を試してるようにすら見える。

いやそこは俺の妄想かもしれないねえけどさ。

黒さんは我が強い。

そいつは、協調性を求める社会の中では棘にしかないもんだろ。うな。だけど、だけどだ。

普通の社会の中では、周りの人に刺さる棘でしかないそれが……演劇の世界では、観客の胸の奥に刺さる名作の核になる。

この人からすればお遊びみたいなのこの作品のシナリオが、映像が。

こんなにも俺の胸を打つ。

「黒さん。俳優さんの状態と、作品の空気は掴めました。ありがとうございます」
「作業に戻るか？」

「はい。作品の完成形の空気は見えたので、それに合わせます」

作品の空気が出てきた今、先に作っておいたものを微調整して合わせたくなくなってきた。

屋内セットは……まあここから手を入れる必要はねえな。

だが今見ると、橋が壊れるシーンの煙がちよつと繊細すぎる。ポケットマネーでゴルフ用白スモークボールを買ってきたが、こいつを使ってみよう。

スモークボールはゴルフのコンペや始球式なんかで使われる、打つと空中で沢山煙を吐き出し、空中に煙の軌跡を残す面白アイテムだ。

屋外のゴルフ場以外での使用はやめろと言われてる一品だが、撮影は自由！自由だから許される。

第一先人がガメラで同じような撮影してんだ、俺にためらう理由はない。

余り物の一斗缶数個を加工して、水撒きとかに使うホースを繋いで、一斗缶の中にスモークボールを放り込むと、スモークマシンの完成だ。

伸ばしたホースの先から、つまり狙った場所に煙が出せる。

煙を出す四塩化チタンと組み合わせれば、結構思った通りの煙を演出できるはずだ。こいつはいい。

何よりシンプルなのがいい。

最初に俺がスモークマシンを作っておき、俺が配置を考えておけば、素人でも簡単に狙った通りの位置に煙を出せるのがいい。

新人を上手く使えば俺が何かする必要さえない。

炭酸ガスとかドライアイスとかを使ってもいい感じに煙は出せるが、流石にそういうのをここから新規に導入すると、公式に予算を申請せんといかん。

今の上がゴタゴタしてる状態で、申請出してもどう転がるか分からねえ。

撮影スケジュールがギリギリになってから「いや無理」と言われたら笑えない。

俺の方では予算の使用は抑えめにして、引き継ぎの監督にギャラがスムーズに支払われるよう、予算の財布に余裕を持たせておこう。

気を使うに越したことはねえ。

……もうちよつと手があればな。

俺の手は二本しかねえ。

作業の流れを計算しながら色々作業してても、単純に手の数が足りてねえ。

俺が常人の二倍の速さで手を動かしても、仮に50mを3.5秒で走るようなスピードで作業したとしても、所詮二人分でしかねえんだ。

三人で作業するスピードには絶対には及ばねえ。

正直言つて、俺は援軍に期待してた。

後から他の人が来て仕事を引き継ぐことに期待してた。

だから「俺の仕事はここまでやっておこう」みたいな区切りを、勝手に頭の中に設定していたのかもしれない。

だから、しばらく援軍が来ないって聞いた時、『とにかく人手が要るが人手があればできる』作業を後回しにしてたことに気付いた。

今、そのツケが来てる。

その点、黒さんは完璧だった。

あの人は周りの人間に何も期待してなかった。

撮りたいもんから撮りたい順に——映画の方法論に反しない程度に——撮ってただけだ。

だから後にツケが回ってねえ。

仕事の延長を告知されても、あの人の仕事にブレはなかった。

映像編集の方は新人とバイトだけで頑張ってくれてる。

黒さんの意向を反映しつつ、合成もほとんど仕上げてくれた。

他のところはもつと人員に余裕もねえ。

どうすつかな。

「君は

『ライダーは助け合いでしょ』

ってフレーズが好きって言ってたけど、それはウルトラ仮面にも適用されるかな？」

聞き覚えのある声が出て、いやなんでここにいるんだお前と思つて、俺は思いつきり全力で振り向いた。

な、な、おま、お前！

「……アキラさん!?!」

「手伝いに来たよ。何か出来ることはあるかな」

アキラ君だけじゃなくて百城さんもいる！ 可愛い！

「私は四時間後から撮影だから、あんまり長くはられないかな」

「百城さん!?!」

「楽しそうだから来ちゃった。堂上くんとかも後から来そうだよ」

二人を見る俺の視界の隅っこで、町田リカさんが頬を掻いているのが見えた。

お、お前かー！

スターズのツイッター鍵垢あたりでここの撮影のブラックつぶりを流したな！

いやそうか。

俺が弱音吐いたりとか助け求めたりとかしなくても、この撮影スターズ多いんだつた。

そこから嗅ぎつけたのか、アキラ君に百城さん……売れっ子だろうがお前ら！

「な、なんで……」

「私とアキラ君のオフが重なってたから、まあ手伝いもいいかなって」

ノリが軽い！ 態度が優しい！ クソ、二人共幸せになって100歳まで生きて死ぬよ……！

「人気俳優の二人にそんなことさせられませんよ！

お二人にそういう雑用をさせないために俺みたいなのはいるんですよ!？」

「まあまあ」

「まあまあ」

「ま、『まあまあ』でゴリ押しするつもりですか!？」

なんだこいつら！

「あ、そうそう。」

朝風君がこの前撮影に協力してた仮面ライダーのネットムービー。

あつちの人が大半オールアップしたそうだから、気が向いた人は来てくれるらしい
「! 本当ですか!?!」

「ああ。」

新人の人達がドラマパートのセットの参考にしたと言っていたよ。

他にも君に仕事で助けてもらった人が来たいと言ってた。

あと来年二時間ドラマの仕事に初挑戦する人が、現場の空気を感じたいと言ってたかな」

マジかよ！ 仕事は真面目にやっとくもんだな！ 今後も真面目にやろう！

特撮の世界では、複数の仕事にまたがってやる人、一つの分野で活躍した後他のジャンルに行った人、監督やるために全部の仕事をやってみる人とかがいる。

だから素人同然の新人助監督がするべき”怪獣をワイヤーで操る”仕事を、ワイヤー経験者であるミニチュアセット作りの美術担当に代わってもらうことがある。

あつちの仮面ライダーのネットムービーのスタッフには、テレビタ日のドラマやバラエティでのAD経験者・助監督経験者・構成経験者・美術経験者がいたはずだ。

誰か来てくれれば、なんとかなるかも。

いや、なる。

俺も作業に集中できるかもしれねえ！

でも俳優にこういう作業やらせるのはねーわ。気持ちだけ貰って茶菓子と茶を出してもてなして帰ってもらおう。気持ちだけで嬉しいわ。

「アリサ社長が許さないと思いますよ。ですから俺のことは気にせず……」

「母さんは許可をくれたよ」

「……え」

「母さんに言われたよ。

朝風英二が潰れないようにしろ。

朝風英二なら俳優の顔に傷が付くようなことはしない。

それと……朝風英二は、仕事で売った恩を絶対に忘れないプロだって」

うわあ。

本当になんか、うわあだな。

アキラ君の善意と、百城さんの優しさと、アリサ社長の気遣いと、俺に恩を売って上
手く後でこき使おうとするアリサ社長の打算が全部目に見える。

流石過ぎるわあの人。

あの人スタンスは役者を絶対に潰させず、役者を一定の規格で一人前に育て上げ、
その役者で未永く稼ぐことだが……俺に対するスタンスにもそれが見える。

甘くはないが優しい、厳しいけれど過酷じゃねえ。

黒さんと合わねえわけだ。

アリサさんは映画やドラマなんかのために人が潰れることを否定する。

その上でちゃんと、商業的に稼いでる人だ。

俺はしばらくスターズ関連の仕事とか優先して受けることになりそうだな。

つか、受けたい。

怖え人だぜ、星アリサ。

その事務所に所属してる人間を好きになっちまったら、俺はもうその事務所を蔑ろに
なんてできねえよ。

「ありがとうございます」

深々と、二人に頭を下げた、

「そのスチロールを、こっちの完成品と同じくらいの大きさにちぎってくれたら嬉し
いです」

「ああ、分かったよ」

「こんな感じかな」

「そうですね、そんな感じですよ。それが後で偽物の瓦礫になります」

やっべえ。

泣きそう。

俺は俳優じゃねえんだ。

嘘泣きなんて出来ねえ。

だから泣きそうになってるこの気持ちは、嘘じゃねえ。

嘘なんかじゃないんだ。

仕事は終わった。

そこそこ長いような、短いような、漫画原作の二時間ドラマの撮影が終わった。

とはいっても、終わったのは俺と黒さんだけだ。

正式に引き継ぎが決定し、そんなに実績のない引き継ぎ監督が安いギャラでオフア―を受け、俺達の仕事を引き継いでくれた。

アリサさんは「質の良いカットが質の悪いカットを引つ張るだけの凡作寄りになりそう」と言っていた。交渉おつかれさんです。でも仕方ねえだろ。

そこまで責任持てねえよ、俺達。

でも案外大丈夫なんじゃねえかな？

映像作品つてのは、印象に残る名カットがいくつかあると、立派な名作としては語られねえけども、人の間で地味に長く語り継がれる作品になるもんだ。

仮面ライダーとかでも、『作品評価低いし全部見直す気にはなれないけどあそこの名戦闘シーンの回だけ見たい』つてのが時々あるんだな、これが。

見どころがあるやつは強いんだ。

「引き継ぎ作業も完了。お疲れ様でした！」

「おう、お疲れ」

一足先に仕事が終わった俺と黒さんは、俺の事務所まで打ち上げをしていた。

テーブルの上に並ぶ菓子、つまみ、酒、ジュース。

俺が金を出そうとしたが、気付いたら全部黒さんに買われてしまっていた。

”子供には優しくしておごってあげるよ”とかそういうのじゃなく、”さっさと買え”って感じに代わりに買ってくれたのがなんかこの人らしい。

あーあ、早く成人してえ。

こういう時はいつもそうなんだが、大人と一緒に撮影後の打ち上げやろうとして、俺が食うもの飲むもの買いに行くのと、未成年だから大人用の酒とか買えねえんだよな。

慣例通りにスタッフ最年少の俺が買い出しに行こうとすると、「お前酒買えないだろ」って言われて、いつも周りの大人が買い出しに行ってくれたもんだ。

はよどうにかしたい。

コーラ飲んで、ビーフジャーキー頬張りながらそう思った。

「まさかアキラさん達が援軍に来てくれるとは思いませんでした。本当に助かりましたね」

「あの援軍より、援軍が来てからお前の作業が速くなった方が要因としてはデカかったかな」

「いえいえ、皆の助けのおかげですよ」

「張り切ったお前の仕事は速くなつたが、雑にはならなかつたな。」

あの速度で安定すりやもつと上に行けるんじゃないかねえのか？ メンタル次第だが」

仕事の速度は安定した速度ならともかく、ちよつと無理するくらいの速度だと精神面が影響するからなあ。

メンタル不安定な時に急ぐとトチリそうでやりたくねえわ。

「引き継ぎでゴタゴタしなければもつと早く終わつたんでしょうけどね」

「はっ」

あつ、鼻で笑いやがった。

「俺に言わせりや、他人の作つた映像の引き継ぎしてる時点で論外だ」

だろうな、あんたからすれば。

「漫画原作なんて客寄せしたいだけだろ？」

その漫画のファンとかに媚びてるだけだ。

よつほど改変でもしねえと原作そのまんまで、金稼ぎしか頭にねえ作品になるだろ」

「いや、あの、まあ」

アンタどこまで喧嘩売るつもりだ。

四方八方に唾吐いてるとマジで干されて才能がもつたないことになるからやめえや。

金が無い会社とか、スポンサーに土下座しても雀の涙しか金が集まらないスタジオとか、黒字にするためにあれはあれで必死なんだぞ。

「自分にしか作れないものを作るからこそその監督じゃねえのか？」
そうだ。

あんたの言ってることは正しい。

だけど、あんたも知ってるはずだ。

『正しい映画』はねえ。

『正しい映画監督の在り方』なんていうただ一つの正答なんてねえ。

だから俺は、自分が思う正しさを揺らがず抱えてるあんたが他の監督や作品を否定しても、その意見に同意したりしない。

だけど、礼儀や慣例を重んじるこの業界の人達があんたを否定しても、俺は絶対にあんたを否定しない。

「その意見、否定も肯定もしませんよ。

色んな監督を見てきました。

大衆受けする監督も、自己表現を極めた監督も。

俺はどの監督の考え方も好きです。

どの考え方が一番正しいかなんて思ったこともありません。

だけどそれこそが、映画を、TVを、作品を、作り上げてきたはずです」

俺はこの仕事が好きだ。

色んな監督の下で、監督ごとに違う仕事ができる仕事が好きだ。

あんたみたいな監督しかいない業界も、あんたみたいな監督がいない業界も、クソくらえだ。

そんなもんには唾吐いてやる。

面白ければいいエンタメ性の映画だけでも、新しい技術や見たことのない景色を見せてくれる芸術性の映画だけでも、駄目なんだ。

「それぞれの監督がそれぞれの信念を持つてることが、一番素晴らしいことだと思います」

黒さんはつまみを食らって、飲み込んで、くっくくくと笑った。

「死ぬまで楽しめよ、仕事を。ベッドの上で死ねない末路がてめえにはお似合いだ」

「つたく、この人は。」

「親父がそうでした。だから俺も、そうします」

この人は、大衆にまんべんなく受ける大人気作品なんて目指してねえ。

映画というフィールドは、この人の自己表現の場でしかない。

黒山墨字という人類史に一人しかいない人間が、この人にしか撮れないスタイルで、

この人の魂と精神から出力したシナリオで、この人のイメージをそのまま映像する。

この人が歩んできた、他の誰とも違う人生が、この人だけの映画を作る。

そいつを、映画の自己表現って言うのだ。

よく、映画に監督のオナニーだ、監督がやりたいことをやっただけだ、と言われて酷評される作品がある。

この人はびつくりするくらい『それ』だ。

それも、世界的に有名な映画の賞を貰ってしまうくらい突き詰めた『それ』だ。

特撮は、一度日本でその多くが死にかけて。

皆が商業者ではなく、芸術家だったからだ。

得られる金のことなんて考えず、湯水のように金を使って、成功の計算もせず、ただどれだけ望む映像を創れるかだけを考え、皆が『自己表現』を繰り返した。

撮りたい映像を撮り、やりたいテーマを好き勝手にやり、監督が目指した『それ』を数多くの人達が支え、皆が一丸となって同じゴールを目指した。

そうして、多くの特撮は死んじまったんだ。

売れる自己表現しない監督が優れているのか？

売れない自己表現の監督が優れているのか？

どっちだ。どっちが正解だ？ 知らねえよ、そんなのきつと誰も知らねえ。

売れる監督を、売れるフォーマットをよく理解していて、売れる方法論を絶えず使い、売れるやり方という枠から離れられない、この世で最も不自由な監督だとするならば。

黒山墨字は、もしかしたら、この世で最も自由な監督なのかもしれない。

「俺は時々、監督をやる才能があるあなたが羨ましくなります」

もしもいつか、この人が大作を取る日が来たら。

多くの人が、この人の頭の中の幻想を現実にするために頑張ることだろう。

そいつが無性に羨ましい。ぶっちゃけた話、憧れる。

でもこうはなれねえんだよな、俺は。

「はっ」

また鼻で笑われた。

なんでこうこのヒゲオヤジは、意味もなく周りの神経を逆撫でするんだか。

「お前がもう一皮剥けたら、俺の映画で使ってやるよ」

「ありがとうございます」

「こいつは俺を褒めた言葉なのか。」

俺をまだ未熟だと馬鹿にしてる言葉なのか。

……前者だと、嬉しいぜ。前者であってくれー。

俺の事務所のDVDプレイヤーに勝手に名作映画のDVDを入れ始めた黒山墨字の真っ黒な後頭部を見ながら、俺は真っ黒なコーラを飲み干した。

「ああ、そうだ。

お前を今回使ったのはな、お前の能力もあるが頼まれてもいたからだ。

巖裕次郎……あのジジイがお前の現在の正確な技量を知りたがってたからな、報告したぞ」

「えっ」

「十分だよ。お前、あのジジイに電話かけとけ。世界のイワオからの仕事の依頼だ」

「えっ？」

えっ、なにそれ。

聞いてねえぞ。

空の美しさの理由

歌舞伎を知らなくては、特撮で良い仕事はできない。親父は時々そう言っていた。

歌舞伎を直接的にモデルにした仮面ライダーやウルトラマンの敵など、そういうものはいくらでも出てくるな。

が、歌舞伎つてのはもつと本質的なところで特撮に関わってる。

例えば、変身後の名乗り。

例えば、変身ポーズ。

『大げさな構えを記号として使う』というのも、『構えて名乗りを上げる』というのも、歌舞伎を由来とするもんだ。

ゴジラとかも、歩き方の参考に歌舞伎を使ってる。

ウルトラマンマックス(2005)の主人公カイトを演じた赤山草太さんは、出雲の歌舞伎役者であった祖父に憧れ、子供の頃から舞台上が上がっていて、そこからウルトラマンになった。

歌舞伎から始まって、特撮へ。

俺は逆だった。

特撮で親父の仕事について行って、親父が珍しく歌舞伎畑で仕事をするのについて行って、そこで初めて歌舞伎の世界での仕事に触れた。

そこで初めて、あの人に出会った。

『その歳で父親と同じ魔物に魅入られたか。難儀な奴だ。長生きできねえぞ』

この歳になって、あの頃の記憶を振り返って、気付いた。

巖裕次郎さんは世界レベルの舞台演出家だ。俺の仕事もおそらく舞台関連になる。

だがあえて言ってみよう。

俺みたいな現代の特撮屋に、現代の舞台演劇で出来ることは多くねえ。

舞台は何度も公演する。

公演期間中、毎日のように舞台上で演技を繰り返す。

撮影は一発撮りの映像を何度も上映する。

一回録画すれば、その映像は永遠になる。

俺が火薬を仕込んだスーツの撮影は一回撮ればいいが、舞台なら俺は火薬を毎回仕込まなきゃならなくなり、スーツの方が公演期間中保たない。

舞台公演という世界で、俺の技術は多くが死ぬ。

だが、親父はそれでもなかつたらしい。

親父は舞台上にもよく呼ばれていた、らしい。もうこの辺は全部伝聞だ。

巖爺ちゃんは親父をよく雇い、親父は巖爺ちゃんの期待に仕事で良く応えていた。だから俺も、巖爺ちゃんの歌舞伎公演を手伝いたいと言いつちまった。

当時、七歳の時のことだった。

『お前、何が出来る?』

俺はその頃、子供らしく思いがつていたのかもしれない。

椅子を作り、テーブルを作り、巖爺ちゃんの演劇の演目に相応しい舞台を作った。

作った舞台用の家具の出来も、レイアウトも、その時の俺は自信を持って、褒められると信じて疑ってなかった。

『プロとして見られたいか、子供として見られたいか、お前が選べ』

この時、「プロとして見られたい」と俺は言った。

そういつた俺の頭に、巖爺ちゃんはゲンコツを落とした。クソ痛かったぞ。

『馬鹿野郎!』

テレビ撮影か映画の撮影のつもりか!

何平面の角度で、一つのカメラで撮る前提のレイアウトしてやがるんだ!』

カメラを複数使っても、画面に映る映像はカメラひとつ分だ。

だから俺は、ひとつの視点から舞台が見られてる前提で、レイアウトを組んじまつた。

『舞台席は前の人間が後ろの人間の視線を遮らねえんだよ！』

大昔ならともかく、今の舞台を見る人間の席は後ろに行くほど高くなる段差状だ！
映画館の席の配置も見たことねえのかテメエは！

カメラ撮りに慣れすぎて、多くの観客の目がある前提のレイアウトすらできてねえ！』

その日の俺の仕事には、家具の出来くらいしか及第点って言えるもんはなかった。
撮影所に入るようになって四年。

色々できるようになってから二年。

子供であることよりも、自分が腕の無い人間だと自覚してなかったことが、あの日の俺のクソポイントNo. 1だった。

巖爺ちゃんが叱ってくれたお蔭で、俺はあの日の失敗を忘れないでいられる。

『ド素人は使えねえよ。今日は後ろで立って見てろ』

この歳になってようやく分かった。

”子供として見られたい”と言っていたら、俺は一生、あの人から一人前の造形屋として見られることはなかっただろう。

その後も色々作って見せた。

作っては打ちのめされ、生み出しては言い負かされ、縫い上げては罵倒された。

ゲンコツだけじゃなく、靴でも殴られた。

俺の仕事が認められたのは随分後だ。

それも、ラツキーパンチみてえに出来の良い一品が認められた運頼りの一発もんだつたんだ、なっさけねえ。

ふん、と鼻を鳴らして、巖爺ちゃんはこう言った。

『死んだ親父を超えろ。できるな?』

できる、と俺は言った。

今になっても、俺はずっとそう在る。

”できるかどうか分かりませんがやってみます”とか、”やるだけやってみます”

とかはできるだけ言わないようにして、”できます”と言っている。

まあ絶対にできないことは流石に「できない」と言ってるがな。

できるかと言われたら、できますと努めて答えようになっている。

あの日、俺に期待してくれた、俺の未来の可能性を信じてくれた、あの人にそう答えよう。

俺がこれから一緒に仕事をしようとしているのは、そういう人だった。

『劇団天球』。

巖爺ちゃんが見出した役者を中心に固められた舞台劇団だ。

名が売れた主演から無名な脇役まで、等しく実力派。

一言で言うとおねえ。

巖さんのお手製チームの総合値ヤベえ、としか言えねえ。

俺の今回の仕事は、この人達の地方巡業を成功させるため、地方巡業の初期で行われ

る野外公演を成功させることだ。

地方巡業つつつても、関東の劇場を少し回る程度。

地方巡業の前段階、俺が関わる段階はもつと公演範囲が狭く、いくつかの野外ステージを回るだけらしい。

まあ要するに、野外公演は宣伝ってことだな。

スーパールの試食みてーなものだ。

そいつを成功させるとなると、俺の仕事は衣装と野外セットの作成になるか。

屋外用セット作成は割と得意だな、俺。

特撮つてのは屋外にセット作って爆破してナンボ……って言つてたのは誰だったか。そういうや歌音ちゃんも地方巡業のオーディション受かったとかいう話してたな。LINEで。

めでたいこつた。

だが、それなら俺もこの仕事でハンパはできねえな。

ここで俺が地方巡業関連の仕事で失敗したら、あんまりにも恥ずい。自殺もんだろ。前回の仕事は、『完成』まで行かないで引き継ぎになった。

そのせいか妙な消化不良感がある。

ウルトラ仮面関連の仕事も俺のするべき仕事はまだ先つぼいし、俺はこの仕事は鮮やかに、達成感と満足感をもって終わらせたいところだ。

巖爺ちゃんに俺の成長を見せつけてやるぜ！

あれ、つてか、劇団天球との待ち合わせステージこれ。

あの事務所に近いな。

ばったり知り合いと会うかも。

「あ」

「あ」

「あ」

ほーら会った！

「おはようございませす、湯島さん、源さん」

「おはよーさん、英ちゃん」

「……………」

仮面ライダーのネットムービー以来の湯島さん、それと劇場作品『ザ・ナイト』以来の顔合わせになる源真咲さんと、ばったり出会ってしまった。

湯島さんが柔らかな印象を受ける女優なら、源さんは冷静で多弁でないイケメンの印象を受けるクールタイプ俳優だ。

容姿や簡単な振る舞いだけで判断するならば、湯島さんは日常系の作品のヒロインに向いているタイプで、源さんは女主人公を取り巻くイケメンパラダイスで「お前は俺だけを見てれば良いんだよ」とか言うオラオラ系が向いているタイプ。

我ながらひついでえ例えだな。

しかしこの「……………」な反応。

源この野郎俺の顔忘れてんな。

けど予想通り……………いんや、予感通りになっちまったな。

こここの近くにはオフィス華野がある。

湯島さんや源さんは、そこに所属している俳優だ。

事務所単位で見りやオフィス華野で俺と一緒に仕事してる数はかなり多いが、源さんみたいに俺と仕事した回数が一回二回しかない俳優もいる。

逆に湯島さんのように、子役時代から俺と付き合いがある人もいる。

オフィス華野の社長さんには「うちの子達をよろしく」って言われてるがそもそもどうよろしくしているか分かんねーよクソ。

「真咲ちゃん、忘れとるやろ」

「……あーいやいや茜さん、ちよつと待って、名前出てこないだけだから」

「俺源さんに名乗りましたっけ？」

「……」

会話はしたけどあなたに名乗ってねーぞ俺。

役職は名乗ったが。

源さんは映画やドラマの出演経験もある、俺の一つ年下の俳優だ。

確か女性からの人気はそこそこあるみたいな話も聞いたぞ。

高い身長しやがってくたばれ。

前に映画で源さんが出演した時、俺は遅れ気味のスケジュールを取り戻すための臨時追加撮影B班として途中参戦していた。

その時にちよつとは話したんだが、覚えてねえか。

「こう、シユバババツって仕事してる人撮影場所で見た覚えはないんか？」

「……あ、あー、あの手の動きが気持ち悪いくらい速かった人か。お久しぶり」

「いえ、下働きでしたから。覚えてないのも当然ですよ。朝風英二と申します」

源さんの言葉のニュアンスが『ゴキブリの足の動きは速くて気持ち悪い』的なニュアンスなんだがどうということなんだおいコラ。

「……茜さん、俺ちよつと先事務所行ってるわ」

「あ、ちよつと」

おい、一瞬嫌な表情浮かべて去って行くな。

ゴキブリ連想したなテメー。

本物のゴキブリと見比べても、1マイクロレベルでの誤差を見つけれないと偽物と分からねえような偽物作ってきて俺の腕を見せつけてやろうか。

……もつとゴキブリ扱いされそうだな。

一瞬、脳裏に虫の話をしてる時の百城さんの笑顔が浮かんだ。

もしあの人ゴキブリの話でもイケる人だったらどうしよう。どうすりやいいんだコラ。

ちよつとイケそうな気配あんのがこえーぞ。

「英ちゃんも仕事なん？」

「はい。演劇の巖さんから仕事の依頼が来まして」

「演劇の巖……巖裕次郎さんやつけ。どっかで名前聞いたなあ」

「です、その人です」

「反応うっすいー」。

巖爺ちゃんのことを知らない一般層の人は多い。

芸能界の新人にも知らない人は割といる。

が、芸能界で巖さんの話を振られて、知らないと言ったらそいつは絶対に無知のレツテルを貼られちまうだろう。

俺でも心中でその人の評価は下げちまうだろうな。

画期的な演出、幅広い芸風、人並み外れた選人眼に、人材育成能力。

黒さんが外国のすげえ賞をいくつも取った人なら、巖爺ちゃんは気ままにやりたいように演劇をやった結果、世界中から尊敬を集めるようになった化物だ。

ロミオとジュリエットみたいなシエクスピアをやったと思えば、オペラや歌舞伎もやって、ガラスの仮面とかの漫画原作までやり、当然のようにオリジナルもやる。

そして大抵大成功だ。

やべーよ巖爺ちゃん。

各新聞が賞を贈って、県は県民栄誉賞を、市は市民栄誉賞出して、文化庁の芸術祭で

は余裕の大賞、文部大臣賞や文化功労者賞に文化勲章とやベーののオンパレードだぞオ
イ。

国際的な賞も貰ったと思えば、外国から名誉博士号まで贈られる始末。

厳爺ちゃんは売名に必死だったからこういう風に評価されたのか、つていうとそうでもねえ。

あの人は演劇が好きだった。

俺が生まれる前には離れてたらしいが、西映や西宝ではゴリゴリの映画も撮ってた。

演劇を愛した男が、『素晴らしくて面白い』演劇を作り続けた結果、ただそれだけの行動で世界中から認められた。

厳爺ちゃんは凄えんだ。創る演劇全てが凄えんだ。そしてスパルタで凄く怖い。

「湯島さんは最近どうですか?」

「今オーディションの二次審査中やね。」

宇多田ヒカライナイさんと浜崎あゆまないさんがテーマ曲歌うって噂でなー」

「おお、それはかなりいい感じの仕事なんじゃないですか?」

「おかげでプレッシャー大きいなの、事務所のレッスンの厳しさも倍や」

オーディションに対する不安と、もしかしたらという期待が混ぜこぜになった表情。

積み重ねてきた努力が生む自信と、子役時代から大成してない現実が生む不安が均等

に混ざった雰囲気。

頑張ったからどうにかなるはずという希望に、頑張ってもどうにもならなかった過去の悲嘆が染み込んだ声色。

……彼女の成功を祈るくらいは、神様にも許してほしい。

俺が応援してもしなくても、彼女のオーディション結果は変わらねえ。

そいつに、無力感を覚えるのは悪いことか？

「では今日もオーディションですか？」

「せやね。栃木の採石場で屋外オーディションや」

「採石場ですか……」

時代劇とかだろうか。

採石場は特撮番組だけが使ってる場所じゃねえ。

時代劇とかでも結構使われる、汎用性の高い撮影場所なんだ。

「なんでああいふ採石場で撮影するんやろ？」

「あそこには“時代が無い”からですよ」

「時代が無い？」

「どうしても、俺達は人間である以上時代からは逃げられません。

スタジオや採石場みたいな場所でもない限り、撮影には街並みが映ります。

そうなると、もうその撮影を江戸時代だとか大正時代だとか言い張れないんですよ」
鉄塔が映ればアウト。

ビルが映ればアウト。

海で近代的な港が見えたらアウトで、車が走る道路が映るのもアウトだ。
となると、そういうのが一切映らない屋外つてのは限られる。

時代劇で使うとなりや、東映太秦映画村か、日光江戸村か、ワープステーション江戸か、庄内オープンセット。後は伊勢安土桃山城下街とかも使えるか。

俺は『J I N | 仁 |』が結構好きだったから、あれの撮影に使ったワープステーション江戸が個人的に一番好きだけだな！

こういうのに、採石場での合戦シーンなんかを挟むわけだ。

他にもセットあれこれ使って、そうやって時代劇は完成する。

栃木の採石場は良い。

何せいくら爆発させようが、いくら合戦の雄叫びを上げようが、近所から苦情はこねえ。

カメラを360度回しても鉄塔やら電柱やら余計なもんは映らねえ。

あそこには文明が無い。

だが崖もある、広場もある、坂道もある、池もある、草むらもある。

採石場は、戦国時代とも江戸時代とも言い張れる最高のステージだ！

ああいう場所があるとありがてえんだよ湯島さん。

採石場つてのは、探してもそうそうない『時間が止まった土地』つてわけだ。そりゃ時代劇の撮影にも使うわな。

俺がかいつまんで話すと、湯島さんは納得したようだった。

「造形や演出の人はそういうこと考えてるんやなあ、びつくりや」

「余計な作業とか悩みをあなたがたから引き受けるのも、俺達の仕事ですからね」
ちなみにあんなの子役時代に俺は同じ説明しようとしたぞ。

あんなが話の途中で飽きてどっか行っただけだな！

ちよつとグサツと来たぞあの時は。

他人の話聞けるくらいには大人になって嬉しい限りです。

お互い頑張ろうと言い合って、別れて各々歩き始めた。

あの人が受かるといいな、と思つて、ふと”子供の頃はこんなこと考えてなかつたな”と思う。

バツカじゃねえのか俺は。

ガキの頃と同じ思考で、関係で、いられるわけねえだろ。

何も考えずに遊んでいられた頃とは違い。

大人の言うこと聞いてりやよかつた頃はもう終わった。

自分で仕事取つていかなきゃ、この世界には居られねえんだ、俺もあの人も。

もし芸能の世界から親しい人が突然消えても、『仕方ない』で片付けろ。

そんでさつさと切り替えろ。

それ以外に、俺に何が出来る？

「おはようございませう！」

少しモヤつとした心を切り替え、劇団天球との待ち合わせステージに足を踏み入れ、大きく声を張り上げる。

近くに居た、パイプ椅子に座つて台本を読んでいた女性が顔を上げる。

どうやら、入口近くで俺を待つててくれたらしい。

「あら、久しぶり」

「七生さん。二ヶ月ぶりですね」

「巖さんから話は聞いてるよ。ついてきて」

さんざかななわ
三坂七生さんだ。

劇団天球所属の女優で、普段は陰気で眼鏡とそばかすが目立つ女性だが、舞台の上ではコンタクトレンズと化粧で、誰よりも美しい舞台の花に変わる。

俺が「変身ヒーローの変身みたいですね」と、15歳の時に言った。

七生さんは「女が化粧と演技で変身ヒーロー以上に変われることを知らないなら、あんな女で苦労するよ」と、20歳になったばかりのくせして、分かった風なことを言っていた。

この人はいつも、出来の悪い弟を見るように俺を見る。

「七生さん、良いコンタクトレンズに変えたんですね」

「ねえ前から思ってるんだけどなんで私のコンタクトレンズ批評するの?」

見りや分かる。

七生さんは今眼鏡じゃなく、コンタクトレンズだ。

この界限に漬かってれば、コンタクトレンズを見ただけで察せることもある。

コンタクトレンズは目を覆い守る鎧だからだ。

眼鏡と違い、コンタクトレンズはある程度眼球の潤いをコントロールすることもできる。

正しい知識があれば、コンタクトレンズのせいでまばたきの回数が増えていることも自覚できるし、コンタクトレンズを使いこなしてまばたきの回数を減らすこともできるんだ。

こいつが、舞台や撮影においては極めて強え。

例えばスーパー戦隊シリーズでは伝統的に、「まばたきをしない技量」が求められる。

撮影では煙が出て、火花が散る。

人間の目はこういう状況で反射的にまばたきをしちまう。

だが、それは子供の目にどう映る？

煙や火花の中でまばたきパチパチしてるとヒーローは、クツソ情けなく見えるんだ。

逆に煙や火花の中でまばたき一つせず、火花や煙を物ともせず目を見開いて前に進むヒーローってのは、最高にかっこよく見えるんだぜ。

宇宙戦隊キュウレンジャー（2017）の主人公・シシレッドを演じた岐州匠さんも、海岸での撮影で塩水しぶきや砂が目に入る中、特撮で目に火花や煙が入る中、「まばたきが多い！」とめつちや言われたそうだ。

だが、コンタクトレンズを高いのに変えて乗り切った。

目の鏡を一新することで、まばたきの回数を制御してみせたんだ。

まばたきを完全にコントロールできりや、まばたきをしないロボだって演じられる。演技の幅は確実に広がる。

表現の自由度は確実に上がるんだ。

まばたきがコントロールできるっていう長所が付与されたその瞬間から、目が悪い俳優は目が良い俳優よりも優れた俳優になると言っつていいだろうぜ。

流石は七生さんだ。

良いコンタクトレンズに変えていくそのプロ根性、見習わざるを得ねえ。

「ねえ英二」

「はい、なんででしょうか？」

「そういう目で私見るのやめて。多分なんかどこかで間違ってるわよあんた」

そういう目つてどういう目だよ。

俺が何か言おうとしたその瞬間、ステージにいた他の人が俺の頭を掴んで抱えた。

む。この男は。

「おー英二！ よく来たな！ 今度は何だ、何を作りに来たんだ？」

「亀さん、おはようございます」

「おう、おはよう。お前相変わらず背伸びてねえな」

うるせえ。

あおたかめたらう
青田亀太郎さんの登場だ。

俺の頭を抱えた亀さんの顔を見て、七生さんがうんざりした顔をしている。

一見若さゆえのお調子者にも見えるが、ガツチリした下地の上に演技を重ねる、俺も尊敬する実力派名助演の男だ。

劇団天球の特徴の一つに、名主演も名助演も等しく輝いてるってのがある。

この人はまさにそれ、名主演に匹敵する力量の名助演だ。

そも、主演が助演より上、って概念は一般的ではあっても絶対的じゃねえ。

監督が助監督より上、って概念もな。

ハリウッドじゃ主演よりギャラ貰ってる助演、監督よりギャラ貰ってる助監督なんかもいたりする。『助』は『主より劣る』って意味じゃねえんだ。

主演タイプよりも、この人みたいな助演タイプの方が、俺を効果的に使うことが多い。この人はいつも、出来の良い弟を見るように俺を見る。

「アラヤさんはいらっしやらないんですか？」

「んー、あいつはちよつと出てるな。なんだ俺だけじゃ不満か？」

「いえ、しばらくぶりに会えて嬉しいです」

「おいおい、世辞が上手くなつたんじゃないの？」

「純粹さが失われてんじゃないのか、俺は悲しいぞ」

「いや、俺は昔から別に純粹だったわけでは……」

アラヤさん……明神阿良也みょうじんあらかやさんは留守か。

三坂七生。青田亀太郎。明神阿良也。

この三人は、粒揃いの劇団天球の中でも特に目立ちやがる。

俺も、演劇の中で何度彼らに見惚れたことか。

監督でもない俺の私見でしかないが。

例えば主演アラヤさん、助演亀さん、ヒロイン七生さんでドラマを撮れば。

例えば主人公アラヤさん、二号ライダー亀さん、主人公とくつつかないヒロイン七生さんで仮面ライダーを一シリーズ分撮れば。

多分、それだけで十年二十年は語られ続ける作品ができる。

巖爺ちゃんが仕込んだ人達には、それだけの地力と実力が備わってんだ。

それだけの力を仕込めるだけのパワーが、巖爺ちゃんにはある。

「来たか」

「巖先生、お久しぶりです」

「くくつ、巖先生か。テメエがそう言うのは慣れねえな、英坊」

それは、俺が中途半端な仕事をすれば、その瞬間に粉碎されかねないほどのパワーだった。

俺の仕事は、この人達の野外公演を成功させること。

そのために、巖爺ちゃんの望む仕事をこなすことだ。

「舞台背景のセットの背景を描いてみる。

題材は空。台本は亀に見せてもらえ。演劇に沿った空を仕上げりやそれでいい」

「はい」

野外ステージの背景画か。

歌舞伎で言う道具幕だが、野外となるとちと難しい。

海外なら例があるが、日本だと類似の例が多くねえな。皆無でもねえけど。

いっそ、背後に巨大モニターがあるライブステージを参考にした方がいいかもしれない。

野外でセットと背景に凝るってことは、そこを『異界』にするってことだ。

野外公演を観に来た人が「あそこはピーターパンのいる不思議の国なんだ」と思っ

くれるようじゃなきゃ、「あそこはカリブの海なんだ」と思ってくれるようじゃなきゃ、アウト。

自然に、リアルに、かつ観客に世界観を伝えるような絵作りが要る。

そいつはつまり、特撮のミニチュアセットの背景の空を描く技術を、演劇に沿ったフォーマットにカスタマイズしねえと駄目だったことだ。

「英坊。俺がお前に要求するものはただ一つ。お前の成長を見せてみる」「分かりました。少し時間をいただきます」

まずは深呼吸。

考えて、考える。

俺が描く背景は大前提として、劇団天球の舞台俳優の後ろに広げられる。

持ち運びしやすいように、薄い折りたたみ式の木製大型ボードを組んで、その上に背景画を貼り付けたり外せたりするようにしておこう。

その上で、デザインを考える。

脚本を見たが、この演劇なら描く空は青空でいいだろう。

目立つ要素は要らん。

背景は所詮背景だ。

俳優を引き立たせる引き立て役にするのが、おそらく最も的確で良い。

劇団天球の俳優の良さを僅かにでも殺せば、その瞬間に背景は無価値に成り下がる。

「よし」

方向性は決まった。

まず専用の青シートを広げ、青色の具合を確認する。

リアルな空の青つぼく見えなかったら、後で青色を調整しよう。

青空を表現するため、青空を際立たせる白い雲を描いていく。

現実の空における白い雲はただそこにふわっふわ浮かんでるだけのものだが、撮影背景における白い雲は、青空の青を引き立てる名助演の役割を果たすものだ。

雲を描く白の絵の具はアクリル系。

絵の具は変えず、吹き付けるスプレー、ペンキを塗るものと同じ刷毛^{はけ}、塗装用スポンジを上手く使い分けて青シートに雲を描いていく。

続いて少し灰色を混ぜたアクリル塗料で、また雲を描いていく。

雲は光を遮るもんだ。

だから雲の影が他の雲に落ちてると、背景画のリアルさがぐっと増す。

雲をリアルに見せるコツは、白だけで雲を描かないことだと、俺は先人に教わってきた。

そう描いていけば、『雲の遠近感』も出て来る。

信じられねえくらいセットに凝る特撮監督は、「この雲は近い」「この雲は遠い」と雲の遠近感つてもんを考えて、それを表現する技術を研鑽してきた。

俺もこの背景に、その技術を転用してる。

その技術は、雲の陰影を付けることで、どの雲が上でどの雲が下、どの雲が遠くてどの雲が近いかを表現するかの技術の先にある。

よし、ここで太陽を描く。

背景に描く太陽は、光つてねえ。所詮絵の具だ。

光つてねえ太陽を光つてるように見せかけるには、特撮に使う蛍光塗料をベースに、悪目立ちしない程度に他の塗料を混ぜたものを塗る必要がある。

あと、あれだ。

野外ステージだから、太陽の位置を計算に入れて描かないとな。

野外の舞台は、基本的に全て南向きだ。

役者の正面に光が当たり、客は逆光を見ずに済む。

客から見て左側を西、右側を東って言うのは、こいつが起源だって話だ。

まあこの基本が出来る前の舞台は当然南向きだけじゃねえし、この基本を知らねえで南向き以外の野外舞台を作ってる人も結構多いんだけどな！

つまりこの背景画は、屋外公演中は南向きに広げられることになる。

背景画の左半分を午前中の太陽を受けるための部分、右半分を午後太陽を受けるための部分と仮定して、雲の形、雲の配置、塗料の配分量を微調整していく。

「英二、ぶっ続けで作業しすぎじゃねえか？ ほら、お茶やるぞ」

「ありがとうございませぬ亀さん。もう折り返しは過ぎたので、もう少し頑張りますね」
サンキュー亀兄貴。
さて。

雲の形のイメージは、春は綿、夏は岩、秋は砂、冬は泥だ。

ふわふわしてる雲、硬そうな雲、さらさらした雲、ドロっとした雲と言い換えてもいい。

例えば特撮作品・電光超人グリッドマン（1993）をリメイクしたアニメ、SSS S・GRIDMANのイメージデザインは、でっかい雲の間で腕を突き上げるグリッドマンだった。

この背景の雲がいい仕事をしてやがる。

ふわふわもさらさらもしてない、ドロっとしてるわけでもない、岩のように積み上がった重さすら感じる入道雲は、まさしく『夏』だ。

雲を見るだけで『夏』だって分かる匠の技。

巨人に巨大な雲を合わせつつ季節感を叩きつけてくるこの構図は、とんでもねえプロ

が仕上げたもんだとひと目で分かる。

俺は今回、青空に散らす雲を春の雲と秋の雲の混合にした。

単独の季節感を出さないようにして、癒やしの印象が強い春の雲と、寂しさを表現できる秋の雲を混ぜ込んで、バランスを取っていく。

が。

あくまで目立たない背景にするため、雲が主張しないように意識して描いていく。

雲には表情があるらしいが、俺にはよく分からん。

夏の雲は熱意や青春を感じさせる、秋の雲は物悲しさや寂しさを表現する、って技術的に理解してるくらいだ。

今にも雨が降りそうな空は『泣きそうな空』、雷が鳴り響く真つ黒な曇り空は『怒りの空』、そういう風に技術的に理解できてるが……俺は、そこ止まりなんだよなあ。

巖爺ちゃんがそこを技術不足と見てきたら、どうすつかな。

不安になってきた。

「……」

巖爺ちゃんはずっと俺の仕事を見てる。

採点の瞬間まで、何を考えてるかは分からねえ。

落ち着け。

しつかりと、俺のやり方でやれ。それ以外に道はねえ。

本物の空を見たいなら写真でいい。

だが、写真を舞台の奥に貼っても、所詮は『奥に写真を貼っただけの舞台』だ。

舞台の上を、一つの独立した世界にする。

本物の空以上に俳優達を引き立てる、作り物だと分かるのに違和感の無い背景を描く。

作り物で偽物であるというところを、長所に変えてやらねえとな。

……よし。

いい感じに完成形が見えてきた。

身長の想定と調整もバツチリだ。

背景は、俳優と重なった部分は見えない。

よって、2 mより上の背景は前提として全ての部分が見える。

俳優の顔あたりの高さは、観客が俳優の顔を見るため、一番「チラリと見える」部分。

逆に俳優の足元や胴体と重なる高さの雲は、あんな観客の目には見えねえ。

見える雲、見えない雲、ちらりと見える雲。

俳優を引き立てるための雲の構図を、ここまですつと計算して描いてきた。

あとは微調整、微調整。

雲に『漏れる雲』を書き足す。

綺麗な構図の雲に『乱れた雲』を書き足す。

雲は自然界に存在するもんであって、人間の人工物じゃねえ。

多少不揃いな方が雲はグツとリアルに見える。

“こういう”リアルな不揃いの雲を描く技術は、四池監督……四池崇史さんの雲をリ

アルに見せる技術から拝借した。

スプレー、刷毛、塗装用スポンジで更に微調整を加えていく。

「おい七生、見てみろよ」

「なによ亀……あら、また腕上げたんじゃないのあの子。仕事だけは一人前ね」

「見ろよ、シートの中で雲が風に流れてるみたいな青空だぜ」

「ねえもしかして、あれ太陽の絵の下に人が立つと、雲が最高の形の背景になる形式かし

ら」

周りの人の声が聞こえてきたのは、俺の心の状態が一段落したからか。

よっしゃ、終わり。これで完成。

今の俺の中にある積み上げた技術、それを全部ぶつこんだ青空の絵が完成した。

俺はまだ、思い上がっていたのかもしれない。

巖爺ちゃんの表情を見て、そう思った。

「……はあ」

青空の色を調整し、雲と太陽を描き、巖爺ちゃんの演劇の演目に相応しい舞台を作った。

描いた雲の出来も、レイアウトも、その時の俺は自信を持って、褒められると信じて疑ってなかった。

「俺が言ったことを何も分かってねえのか、この馬鹿野郎」

「え」

プロとして見られたい俺の頭に、巖爺ちゃんは叱るようにゲンコツを落とす。

「いっっー」

クソ痛い！

「誰が綺麗な仕事をしろと言った？

綺麗な仕事はあっちの業界のノータリンに受けたのか？」

「あいだだだだ……！」

「お前は何も分かっちゃいねえ。お前は今、親父を一生超えられない道を進みかけてるぞ」

「なんだって？」

「全部やり直せ。お前が今周りに魅せるべきは『これ』じゃねえんだよ」

ああ、面倒臭い。

はつきり言ってくれよ。

自分で見つけねえと意味のない答えがあるつてのは知ってる。

でも、そう言われても何も分かんねえんだよ。

「自分以外の美しさを知るからこそ、極められるものを物作りと言う。

だからお前はその仕事に向いてるんだ。

この仕事に新しい積み重ねは必要ない。お前は後は、気付くだけでいい」

何をだよ。

気付くってなんだよ。

……分かんねえよ。

演劇集団・劇団天球

はあ、どう描けば良いんだ。

とりあえず片付けを始めていこう。

絵を外せば、シートは丸められるように作っておいた。

……だけど、シートを外した後、俺は何を描きやいいんだ？

「いいと思うんだけどなこの背景。何が駄目だったんだ？」

「私に分かるわけないでしょ」

つと、剥がそうとした背景画を、亀さんと七生さんが見てる。後回しにしとくか。

二人には好評みたいだな。

じゃあそこまで酷くはない……と思いたい。

なら問題点はどこだ？

「でも、これだけは言える。

私達の目より、英二の目より、巖さんの目の方が確かよ」

そうなんだよな。

俺も、俺の目以上に巖爺ちゃんの目を信用してる。

何かが違うんだ、何かが。

「巖さんは、俺の作品のどこをいけないと思っただんでしょうか……そこが分からないといつまで経っても地獄みてえに繰り返すだ。

野外公演の開始までには絶対に間に合わせないといけねえし、背景がねえとセットが完璧には完成しねえし、セットが完成した状態で劇団の通し稽古も必須……と、なるど。どんなに長くても使えるのは二週間ってところか。

どうしたもんかな。

「巖さんは曇り空とか夜空が見たかったのか？」

亀さんが真剣に考えてくれている。

「いや、今回の演劇の作中時間帯は昼間よ。

野外公演はナイターでもなければ基本昼間にしかできないわ。

だから演劇の世界の中の時間は全部昼間のはず。だとしたら、曇り空だろうけど……」

七生さんが真面目に考えてくれている。

それだけで、なんか嬉しい。

俺の仕事のことだから、何の役にも立たねえけど……いや、そうじゃねえか。

この二人は、俺の仕事を改善できるようなジャンルの知識はねえ。

「だけど、そんな二人が俺のために真剣に考えてくれてるからこそ、嬉しいんだ。」

「とりあえずプランを考えてみます。まだ空の絵のバリエーションはあるので……」

「ふーん、どんなの？ 聞いてもいい？」

「とりあえず一つは、今七生さんが言った曇り空。」

「他は夕焼けの情景か、ステージを消してしまう背景画もやってみます」

「ステージを消す？」

七生さんが小首をかしげた。

「背景画をリアルにして、ステージに穴が空いているように見せるんです。」

「絵そのものが覗き窓に見える風味というか……」

「絵の向こうの景色が現実であるように見せかけ、目の錯覚を呼ぶタイプ背景にし
ます」

「へえ、そんなの描けるのかお前」

「亀さんがほうとニヤつく。」

「ウルトラマンなどでは必須技能ですからね。」

「撮影スタジオは広くないですから。」

「そこに壁があるけれども、そこに壁があると思わせない……そういう背景になりま
す」

仮面ライダーとかなら、カメラの背景はビルとかになるが、ウルトラマンとかだと巨人の背景に地平線や空が見えるもんだから、背景の空がヘタクソだとスタジオだと即バレちまう。

本物と見間違えそうな空を描けなきや、スタジオ担当は無理なんだよな。
が。

描ける、が。

それだけでどうにかなるか？

「ただ……ピンと来ないんです。

巖さんの言ってることがピンと来てないんです、俺。

このままじゃ下手な鉄砲数撃つになりそうで、成功するイメージが湧いてきません」
「そりや確かに、巖さん相手ならよろしくねえな」

「成功する時は、こうだってイメージがあるんです。でも今はそれがありません」
亀さんは嫌そうな顔をしている。

過去に適当なことやって巖爺ちゃんに怒られたことでも思い出してんのか。

七生さんは納得した風な顔だ。

巖爺ちゃんの演劇に関する仕事で、俺が手抜きをしない姿勢を見せたから、ちよつと俺の評価が上がった感じなんだろうか。

こういう時に、”怒られること”を連想すんのが亀さんで、”巖爺ちゃんの演劇のこ”を連想すんのが七生さんなんだよなー。

七生さんは淡々とした口調で、また語る。

「アバウトで自由度が高い『脚本に合わせた空』って指示。

却下の時にはかなり曖昧で自分で考えさせる指摘。

巖さんは英二に期待してるんだと思うけど……こりやちよつと分かんないね」

「抽象的だよなあ。俺、阿良也に向けて教えてるみたいだと思っただわ」

「あー」

「あー」

七生さんの発言に、亀さんがアラヤさんの名前を出して、俺と七生さんは同時に頷いちまった。

明神阿良也。

現在どっか行ってるっていう、劇団天球のエースだ。

命の危険も恐れない役作りで役に入り込み、そいつを巖爺ちゃん仕込みの演技力で表現する、実力派舞台俳優だ。

演劇界の怪物、憑依型カメレオン俳優とか言われることもある。

アラヤさんの舞台見に行こうかなーとか思ってたチケット買いに行ったら、チケット販

売日に全席売り切れててクソがあつ！ っとなつたことがある。思い出したくもねえ。

『実力派』って表現が使われる俳優には、二種類いる。

一つは、全然知名度もなく実力もそんな高いわけでもないが、映画や演劇の宣伝文句として『実力派』って修飾を使われてるパターン。

もう一つが、アキラ君みたいな華やかで売れてる俳優と対比的に、全国区のテレビとかで顔が売れてるわけじゃないものの、実力が高い……みたいな人を褒めるパターンだ。

アラヤさんは後者にあたる。

天才肌で、本質的。

アラヤさんは何言つてんのか分かんねえことが多いが、他人には分かんねえことも分かっている、そういう天才だ。

本質を掴むのが上手いから、巖爺ちゃんの意図を劇団の誰よりも理解できてる。

巖爺ちゃんの言っていることが抽象的だったから、二人共アラヤさんを連想したんだな。

「阿良也の方が、私達より英二に良いアドバイスできたかもね」

その時、七生さんの溜め息と、誰かの靴が地面を踏むジャリって音が、重なつた。

「呼んだ？」

「！ 阿良也！」

「ちよつといつ帰ってきたの？」

「今」

うわあああつ!?

よ、妖怪に見えた……声出しそうになった……ぬつと出てくんや!

つか顔近い顔近い。

嗅ぐな嗅ぐな。

俺は有機溶剤の匂いがする男だぞ。

「ちよつと見ない間に人間になつてきたね。巖さん、今の朝風の方が好きなんじゃない

？」

「俺は最初から人間ですけど!?! あ、お久しぶりです」

何言つてんだこいつ!

「で、何があつたのさ」

「実は——」

七生さんがアラヤさんに説明を始める。

陰気で愛想がないとか、冷淡で言動に優しさが言われることもある七生さんだが、その実仲間意識とかは強く、根底には純な優しさがある。

ある、と思う。

仮に無かったとしても俺はあると信じている。

見ろこのムーブを。

俺のためにアラヤさんに説明してくれてるこの行動は優しさの塊だぞ。

ぬ。

なんだ亀さん。

俺の頭撫でんな。

「英二、七生はああ言ってたが」

「はこ」

「お前って阿良也と波長合わねえんじゃねえかな」

「……どうでしょう」

そんな合わないって思ったこともないが、合うと思ったこともないな。

少なくとも、今の若手俳優のトップレベルの人達の中だと、一番一緒に仕事をやりやすいと思うのは百城さんだし、一番やりづらいと思うのはアラヤさんにはなるか。

だってなあ。

アラヤさん、演技力高すぎるから俺の作る物そもそもあんま必要ねえんだよな……つ

と、七生さんの説明終わったか。

「なるほど。大体分かった」

「役作りすると大体分かっちゃうアラヤさんがそう言うて果てしなく怖いですね」
こつち見て大体分かった言うな。

あんたの目ってどのくらい他人の深いところ見てるか分かんねえからこえーんだよ。

「朝風、どうすんの。巖さんは絶対にできない課題は振らないよ」

「んー……打開策が見えないので、また本読んでインプット増やしたいと思います」
空のバリエーションも増やしておくか。

空の表情を描写する技術を入れておくだけなら、なんとかなる。

それで巖爺ちゃんが何を言っても対応できる対応力を仕込んでおくんだ。

ってオイ。

アラヤさんなんだその表情。

「朝風はそれが駄目なんだろうな」

「え？」

「勉強すればどうにかなつちやうのが一番ダメ」

わけわからんこと言うな。

勉強したらどうにかなることはプラス要素だろ、それが駄目？

「俺さ、小学校の頃迷路にペン走らせてさ、ゴールまで行くやつやってたんだよね。」

紙に書いてある迷路、知ってる？

行き止まりに行ったらペン戻すやつ。

でも意地悪な迷路はさ、どこをどう進んでも行き止まりになっちゃうのがやらしくてさ」

「えー、えと、そうですね」

何が言いたいんだ？

「今の朝風と同じで、スタートの地点で逆走して迷路の外側を回るのが正解でさ。」

迷路を進むともう終わり。頭使えばどうにかなると思ってるから絶対に失敗するっ
ていうか」

何が言いたいんだろうか。

「朝風はなんだ、頭の良いオランウータン？」

頭の良さが邪魔で、考えて工夫するとどうにかなっちゃうんだよね。

迷路の壁を力任せに壊して進んでたらそりゃ巖さんも眉間にシワ寄せるよ」

何が言いたいんだオラア！ コラア！ 誰がオランウータンだ！

「分かった？ 反省できた？」

「すみません……俺は何かアドバイスされてるのに理解できないゴミカスです……」

「巖さんは路地裏の良いラーメン店が食べたいんだよ。」

君はとても美味しい日清のラーメン出して怒られたの」

「分かりません……………」

俺に理解力が今の倍あれば……………」

「まあまあ、どうどう」

「亀さん」

「亀」

「お前からそれ以上話してても時間の無駄だぞ？」

ハッキリ言うな亀！

あ、亀さんがセツトの背景画叩いてる。

俺の青空は頑丈に塗り込んだからもつと強く叩いても壊れんぞ。

「しっかし本当にもつたいたいねえよなこれ。一回くらいは稽古で使ってみねえか？」

「まーたあんたは勝手に……………一回だけよ」

亀さん？ 七生さん？

「気分転換に俺達の稽古見ていくか？ 何かに気付くかもしれないだろ？」

「え」

稽古？ こいつを使つて？ いいのかそれ。

「ん……………まあ、いいんじゃない。」

巖さんが参加していない流し稽古だから、かなりぬるいと思うけど」
「アラヤさんまで……」

亀さんが呼びかけて、他の劇団員も集まってきた。
マジか。

このボツ背景で、演出家抜きの流しとはいえ稽古やるのか。

「で、見てくか？ 英二」

「是非！」

見てくに決まってるだろ！

俺はあんた達のファンだぜ！

始まる、始まるぞ。

舞台の上には劇団員。

稽古だからか、観客は俺一人。

アラヤさん、七生さん、亀さんはまだ出てきてないな。

「ゴ機嫌麗しゆう、アテネ公シーシアス様」

始まった、『夏の夜の夢』だ。

夏の夜の夢はシェイクスピアの生み出した喜劇だ。

演劇に使う作品としちや、王道の中の王道だな。

シナリオの核はこうだ。

男Aがいる。

男Aは女Aにベタぼれで、女Aの婚約者だ。

割と気持ち悪い男。

女Aがいる。

女Aは男Bにベタぼれで、男Bの恋人で、男Aの婚約者だ。

めっちゃ美人の設定。

男Bがいる。

男Bは女Aにベタぼれで、女Aの恋人だ。

若いイケメン男。

女Bがいる。

女Bは女Aの友達で、男Aにベタぼれだ。

顔の良さはベタ褒めされるほどじゃない、って感じの女。

男Aは女Aが好きで婚約者だから、女Aと両思いの男Bをメチャクソ嫌っている。

女Bは男Aが好きだから、男Aと婚約者かつ惚れられてる女Aを、実は憎んでもいる。

女Aと男Bは、婚約を強制してくる父親も、色々あつて絡んでくる男Aも女Bも面倒臭えな―！ と思い、駆け落ちを決意。

ここから始まる物語だ。

面白いのはおつちよこちよいな妖精のせい、惚れ薬によつてこの恋愛の矢印がしつちやかめつちやかになつちまうところから。

男Aと男Bが、女Bに惚れちまうのだ。

男Aは婚約者の女Aに「お前ももうでもいいわ」と言う。

そして自分に惚れてた女Bに「今こそ君の愛に応えよう！」とか言う

しまいに男Bに「君の恋人だろ？ 女Aとお幸せに！」とか言う。

男Bは恋人の女Aに「お前ももうでもいいわ」と言う。

そして女Bに「君への真実の愛に目覚めたんだ！」とか言う

しまいに男Aに「君の婚約者だろ？ 女Aとお幸せに！」とか言う。

女Aは「ウワアアアアア!! このクソ女どうやってこいつら洗脳したアー！」とキレる。

女Bは「あつ、これは私以外が全員組んでのお芝居ですね……（現実逃避）」となる。

真面目にアレンジすれば恋を軸にした悲劇になるし、一貫してコメディ調にすりや大笑いできる喜劇にできる。

各キャラの性格をアレンジして……例えば男Aと女Bを、愛が報われないヤンデレに設定したりすれば、純愛が試練を乗り越えようとする話になったりもするわけだ。

演劇ってのは面白えよなあ。

特撮の方が面白えけど。

「おお、ライサンダーよ。」

君の要求は危険だ。ぼくの正当な権利を認めてはくれないか？」

「正当な権利だと？」

君が彼女と結婚できたのは、君が彼女の父に気に入られたからだろう。

彼女のことはぼくに任せて、君は彼女の父親と結婚したらいいんじゃないか？」

愛する女Aと結ばれる恋人の男Bがアラヤさん。

婚約者なのに結ばれない道化の男Aが亀さん。

亀さんとアラヤさんが絡んでる序盤の会話だけでも小気味が良くて、二人の言葉の応

酬を聞いているのが心地良い。

脚本の人は新しい人だろうな。

巖爺ちゃんのお癖がねえ。

結構軽めの、テンポを重視したサクサクと進む感じの脚本だ。

「なんてことを言うんだ！ 君は卑劣なやり方でぼくの婚約者の心を奪ったのだ！」

亀さんが、婚約者を奪った男に怒る演技をして、身振りとセリフで感情を発露する。アラヤさんは、真実の愛のため、婚約者のいる恋人を勝ち取ろうとする男Bを演じる。イケメンの振る舞いが上手いなあの人。

これは婚約者のいる女でもゲットするのは余裕って感じた。

亀さんは、婚約者を奪われた男Aの役。要するにピエロだ。

もう婚約者の心が自分に向いてないってのに、無駄に足掻いて、隙あらばアラヤさんが演じているイケメン男をぶっ殺そうとしてやがる。

女Aと男Bの愛のお邪魔虫ってわけだ。

未練がましく、みっともなく、ダセえ。

だけど、アラヤさんと亀さんは、見事に男Bと男Aを演じきっていた。

アラヤさんのイケメンの演技も良いが、今のは亀さんの演技の方が目につくな。

”恋に敗れる者の演技”が上手いってのは、もうそれだけで実力だ。

いい人が痛い目を見るって展開は、ストレスになる。

痛い目を見るのは、意地悪なやつ、道化なやつ、そういうやつらであるべきだ。

亀さんが演じるこの恋愛敗北者は、恋に破れても観客に「かわいそう」と思わせねえ。きつちりダセえ道化を演じきってやがる。

観客はこれでスムーズに、亀さんの男Aと女Aの恋路を応援することなく、アラヤさ

んの男Bと女Aの恋路を応援できるようになる。

「ぼくは婚約者を君から必ず取り戻してみせるぞ！」

！

今、亀さんが先に舞台袖から退場して、アラヤさんの男B演じる長台詞が始まったが……何気なく凄い動きしたな亀さん。

今のシーンの一連の流れ。

亀さんは舞台の右袖から入ってきて、大仰な動きで俺の目を引き、道化みたいな動きをして注目を集め、アラヤさんと対峙して会話、最後にアラヤさんの周りを回った。

で、アラヤさんの背後に回った瞬間、アラヤさんの体が盾になって観客の視線が切れたその一瞬に、『舞台奥に向かつて一歩後退』した。

リアルな公演だったら、一歩分後退したことに気付かない人も多かったかもしれない。

一歩分観客席から離れた亀さんは、そのまま台詞を吐いて舞台袖に退場していった。

つまり、こういうことだ。

亀さんは道化を感じさせる目立つ動きで観客の視線を引きつけ、そのままアラヤさんとの会話シーンに入り、最後の動きでアラヤさんの周りを周って、アラヤさんの背後で客席から距離を取って……客の視線をなすりつけていったんだ。

とんでもねえ。

今の亀さんの動き一つで、亀さんとアラヤさんが引きつけた分の視線が、二人の技量が集めた観客の視線が、アラヤさんにだけ集中するようになるってことだ……!

アラヤさんは亀さんが集めた視線のアドバンテージを受けつつ、長台詞に行ける。

こいつは間違いない名助演だな。

話が進む進む。

なるほど、男Aが亀さん、男Bがアラヤさん、女Bが七生さんか。

七生さんに惚れられる男の役とか亀さん喜んでそうだなあ。

しかも惚れ葉のせいで七生さんに惚れちゃって、最後には七生さんとくつつく役だからな、亀さんの役……うわあキヤステイング考えたの誰だ? 巖爺ちゃんだよな?

亀さんは七生さんに好意的だけど七生さんがつれないのが普段の平常運転だから、めっちゃインパクトあるな、なんか。

「あなたをこんなにも愛しているのよ、私は!」

「だけどぼくは、愛する婚約者と結ばれる運命なんだ。分かってくれ」

亀さんは報われない婚約者への愛を叫んで、そんな亀さんへの報われない愛を七生さんが叫ぶ。

報われない愛、一方通行の愛にもほどがあるな。

七生さんが迫って、亀さんが迫る彼女から後ずさりして逃げようとする。

む。

これ面白え。

七生さんが迫り、亀さんが後ろを見ずに後退してる形。

つまり七生さんはかなり自由に動けるが、亀さんの方がそれに合わせて後退する流れ。

かといって七生さんが楽しってるってわけじゃなく、会話のテンポと迫る動きのテンポを七生さんが合わせてるから、亀さんの方も合わせやすそうだ。

見てると、二人の呼吸のリズムまで合ってるような気すらする。

二人のテンポが合ってるから小気味よく、動きのテンポが合ってるから見てるのが楽で、会話のテンポが合ってるから耳が楽しい。

しかも話が進むにつれて、キャスティングの妙が見えてきた。

惚れ薬の話になって、亀さんの男Aとアラヤさんの男Bが女Aへの愛を忘れさせられ、女Bを演じる七生さんに二人して言い寄り始める。

みんなして私をからかって、騙そうとして、笑いものにしようとしてる、と七生さんが魂のこもった名演の叫びを上げる。

「ふざけないで。」

どうして私がこんなにかかわれないといけないの？

あなた達はみんな、芝居で私を貶めている！

私はあなた達と違って、愛しいものを見つめる眼差しで見てもらったことさえもないに！

この作品の肝は、モテモテの女Aと、モテない女B、その立場がおつちよこちよいな妖精のせいで逆転し、女Bが突然モテ始めるところにもある。

男Aを愛しているのに、男Aが女Aを愛していたから、決して報われない女B。

”私はあの人ほど美しくないから愛されない”という叫び。

それが妖精の失態のせいで、男Aと男Bに同時に愛されることになった困惑。

それまで全く愛されなかった女Bの、何もかもが疑わしく見えるがゆえの、迫真の演技。

うーんしっくりくる。

演技に厚みがある。

七生さんの強みがこのキャスティングにガツチリはまってやがる。すっげえ。

七生さんはわざと不美人を演じている。

女Bは誰から見ても美人な存在ではいけないからだ。

それでは、男Aが女Bから逃げ、女Aに惚れている説得力が減るからだ。

それでいて、報われない恋に身を焦がしている表情の演技の時、七生さんは美しい。

『この女Bは顔が女Aほど良くないから男を射止められない』という設定の説得力を増し、『恋する女は美しい』という魅力を重ねてやがる。

一つの劇の中で、不美人に見える演技と美人に見える演技を使い分けてやがる。どういふ演技力だ。

もうほとんど変身ヒーローの変身みたいなもんだぞ、これ。

うーわ流しの稽古なのに見てて楽しい。

完成形の劇がめっちゃ見たくなくなる。

あ。

いやそのためには俺が仕事成功させなくちゃならねえんだつた！

やめろよおまえこの劇が俺の仕事のせいで台無しとか絶対に嫌だぞ!!

「朝風。稽古終わったよ。いつまで」

あつ、アラヤさん。めっちゃ良かったぞ劇！

「お疲れ様です。とつても、とつても良かったですね！」

「そう？ まだ出来はそんなでもないと思うけど」

本物のプロは言うことが違うな……かっこいいぜ。

「で、俺達の稽古見て、何か気付いた？」

俺達の稽古は、ずっと君の描いたセット背景の前でやってたわけだけど」

「いえ、ちよつと感激したのは確かですが、巖さんが言つてた〝気づき〝はまだです
「そっか」

気付くだけでいいと、巖爺ちゃんは言つた。
気付かつてなんだ。

何に気付かつてんだ。

あんたの育てた俳優達の稽古を見ても、俺は感激するだけで何も気付けてねえぞ。
俺はいつたい、何に気付けば良いんだ？

「電話震えてるよ」

「え、あ、すみません。ちよつと失礼します」

誰だ。

……ホントに誰？ 知らない番号だけど誰これ？

さつさと出るか。

『ども、源つす』

え、源さん？ 源真咲？ お前湯島さんとかと仕事中心じゃないのかこの時間帯。

「源さん？ どうしたんですか？」

つかなんで俺の携帯の番号知つてんだ？

教えた覚えねえぞ？

あ、いや。携帯の番号は名刺に載せてるし、名刺はめっちゃたくさん配った覚えあるな。

事務所のオフィス華野あたりから聞いたのかもしれない。

『その、茜さん、オーディションに落ちちゃったらしいんですよ』

「――」

……そっか。

『だから朝風さんの力でどうにか受かったことにはできませんかね?』

「!？」

え、なにそれこわい。俺何でも屋だがそこまで何でも屋じゃねえぞ。

『うちの社長が言うには朝風さん、どこにも顔が利くらしいじゃないですか。だから』

「……俺にそんなコネも権力もないですよ」

俺が色んなところで使われてんのは、俺が比較的恩を売らないからだ。

事務所やTV局の派閥闘争とかにもあんま関わらず、権力の類も持ってねえからだ。

俺を使うことでデメリットが発生しないってことが、偉い人が俺を気楽に起用する理由にもなってるんだ。

たとえば、俺が湯島さんを助けたいと思っても。

ただの造形屋であることを望んだ俺に、できることはねえ。

『……そうですか』

悪いな。電話越しにも、あんたが落胆したのが伝わってくる。……本当に、ごめんな。『まあそれなら、ちよつと励ますとかしてやってください。なんかめつちや落ち込んでるんで』

「はい、そのくらいなら。教えてくださって、ありがとうございます」
物を作る以外には、俺には何もできねえ。

何もできないならせめて、励ますくらいはするべきだよな。
でなきや。

俺はこの罪悪感を、どこにやっつけていいのかも分からねえ。

俺も仕事に失敗した直後で励ましてほしい方の人間なんだが、しょうがねえか。

心の中で今、源さんと湯島さんに謝つちまった時点で、俺の心は半ば決まっちゃった。

「アラヤさん、今日は皆さんの稽古を一通り見てから帰ります」

「うん、いいんじゃない？」

巖さんも流石に今日中に課題がクリアできるとは思っていないでしょ」

七生さんは巖爺ちゃんの方に行ってるな。

亀さんは他の劇団員さん達と脚本抱えて討論してる。

ここにいんのは俺とアラヤさんだけか？

俺とアラヤさんが二人きりで話すとか、随分珍しいな。

「ああ、そうだ」

ん？

「前から亀や七生に邪魔されて、今日まで聞けなかったけどさ」

亀さんや七生さんが邪魔してた？ 何のことだ？

「君の母親、君の父親の仕事のため、リアルな死体を教えるために自殺したって本当？」

……。

誰から聞いた？

「ただの噂ですよ」

「ふうん」

「ただの噂ですつてば」

「そうか」

「ただの噂です。まあ、自殺したのは本当ですけどね」

分かれよ、ただの噂だつて。

「父は人の死体に見えるものを作るのが上手い人でしたよ。」

母が死ぬ前も、母が死んだ後も。

ウルトラマンや怪獣が壊す街のミニチュアを作るのがとびつきりに上手い人でした。街が破壊されるシーンで、飛び、燃え、転がる死体の造形は、本物にしか見えなくらいで」

それでいて、子供向けの映像には、余分にグロテスクなものは見せないようにしてて。風で巻き上げられる人の人形は本物にしか見えなくて。

炎の中で踊る死体は、目を覆うような凄惨さと、火の綺麗さが両立してて。

凄惨さやリアルさの全てを、ヒーローの格好良さに繋げられる男だった。

リアルな悲惨が、そこに立つ勇氣と優しさのヒーローを引き立てる。

親父は、人の死を魅せるのが上手かった。

親父は、ヒーローを魅せるのが上手かった。

親父は、大人も楽しませながら子供の夢を壊さないことを徹底してて、俺以外の子供のことは過剰なくらいに気遣っていた。

「憧れたんです。その、本物にしか見えない作り物の光景に」

「だろうね」

親父は、『本物』だった。

「君の母親は、元は巖さんのところに居た人なんだっけ」

「はい。巖さんに見出され、舞台俳優から映画女優になって、引退したんです」

幼い頃から俺は親父に現場に連れて行かれて。

おふくろが早くに死んだから、俺は現場の優しい大人に面倒を見てもらってて。

俺はおふくろのことを覚えていて。

巖爺ちゃんは、俺以上におふくろのことを知っている。

「朝風はご両親は好き？」

「はい」

「今でも愛してる？」

「はい」

それは嘘じゃない。

「君の父親の仕事をよく知っていて目も確かなのが巖さんだ。」

巖さんなら、君が父親を超えた時にそのことを分かってくれるだろうね」

「そうなんです。だから、巖さんの課題を超えることは俺にとって大切なことなんです

よ」

俺は親父の仕事を覚えていて。

巖爺ちゃんも、俺と同じくらいには親父の仕事を知っている。

「父を超えたいんです、俺は」

そのために、巖爺ちゃんが出したこの試練を突破してえんだ。

何か変か？ どこかに変なところでもあったか？ それは俺の直すべきところか？
なあ、何か気付いたんなら教えてくれよ、アラヤさん。

理由は笑顔の内に在り

俺が生まれたのは2000年度。

東京のとある病院で、俺は生まれた。

その年、親父は仮面ライダークウガ（2000）の撮影に協力していた。

俺が生まれたその日も、親父は撮影の現場に行っていた。

後から聞いた話だが、結構な難産だったらしい。

俺は赤ん坊の頃から他人様に迷惑をかけるようなクソ野郎で、出産の際に俺は死ぬ可能性が高いと予測され、最悪おふくろの命にかかわるかもしれないと言われていたそう
だ。

出産が始まり、俺が生まれそうになったその時、病院の医者は親父を呼ぼうとした。

そりゃあそうだ。

でなきゃ、親父は仕事してる間に何も知らないまま、息子と妻を亡くすかもしれないねえ。

だけどそいつを、身重のおふくろは止めた。

『仕事に集中してください！』

おふくろは、医者が親父に繋いだ通話口に向けて、そう叫んだそうだ。

親父は仕事を続けた。

医者が出ぬかもしれないと言っても、病院には来なかった。

俺もおふくろも死なず、出産は完了し、それから日付が変わって、親父はようやくそこに来た。

おふくろはそんな親父の選択に満足したらしい。

当時、そういうことがあつて、そういうことを思ったことを、うんと小さい頃の俺に、おふくろは語って聞かせてくれた。

誇らしそうに。

自慢をするように。

母体と赤ん坊の命と、仕事を天秤にかけ、仕事を選んだ夫のことを語って聞かせてくれた。

『あなたもお父さんみたいな人になれると良いわね』

そこで仕事を選ぶような『他の人とは違う判断ができる特別な人間』だから愛しているんだ、と言わんばかりに。

だから俺は理解した。

親父が撮影所で撮っていた、それは。

俺の命より大切なものだったんだと、そう思ったんだ。

人を感動させるそれは、俺の命より価値があるものなんだと、分かったんだ。

俺の命は作品ほどには価値がないんだと、理解したんだ。

少なくとも、仕事を優先した親父と、この日のことを誇らしげに語っていたおふくろが、そう認識していることは間違いなかった。

親父が俺やおふくろの命より優先した仮面ライダークウガを、その日の内に見始めた。

クウガは、ドラマ性がとても強い仮面ライダーだ。

その深いテーマと非常に高い作品クオリティは、人によつては20年経った今も仮面ライダー最高傑作と評価してゐるらしい。

人一倍我慢強く、人一倍やせ我慢が得意なだけの、いい笑顔の優しい男が、超古代の戦士の力を身に着け人々を守るストーリー。

戦いに次ぐ戦い。

守りきれず殺される人々。

傷付く罪無き人の、流れる涙。

主人公が守れた人々の、救われた笑顔。

人々を傷付け笑う邪悪達。

全てが、極めて高いクオリティで作られていた。

無力感と戦いの痛みがひたすら刻まれる地獄の中、仮面ライダークウガはただ一人戦う力を持つ者として戦い続け、人前では笑顔を作り続ける。

印象的なのは、ジャラジという敵と主人公の仮面ライダーが戦った時だろうか。

子供達の頭の中に針を埋め込み、数日後に針が大きくなり、死ぬというゲーム遊びをジャラジはしていた。

頭に針を埋め込み、「四日後に君は死ぬ」と言う。

で、子供達は他の友達の中で針が大きくなって死ぬのを見ながら、宣告された自分の死の日を待つことになる。

死にたくない、死にたくない、と思いつながら。

その子供達の恐れる姿を、ジャラジは楽しそうに眺めて、死の日を待つのだ。

子供達の中には、恐怖のあまり自殺してしまった子までいた。

そして俺は、心優しい主人公が明確な殺意と憎悪で戦うシーンを、その時初めて見た。

主人公はクウガの仮面を被り、ジャラジに襲いかかる。

マウントを取り、ひたすら殴った。

悪の怪人が情けなく顔を守ろうとして、マウントを取った正義のヒーローが、無力感に泣くような叫びと憎悪の叫びが混ざった叫びを上げ、怪人の顔を殴る。

飛び散る血。

血で赤く染まる怪人の白い髪。

怪人の血で赤く染まるヒーローの拳。

あまりにも凄惨で、目が離せなかった。

徹底的に、容赦なく、怪人を攻め立て続ける正義のヒーロー。

ヒーローの脳裏に浮かぶ子供達の顔。

守れなかった子供達の顔。

泣き叫ぶような憎悪の叫びを上げ、ヒーローは怪人を剣で切りつける。

そして倒れた怪人の腹に剣を突き立て、腹を裂くように剣を動かし、殺害した。

とても正義のヒーローには見えなかったが、後で当時のスタッフさんに聞いたところ、マジで仮面ライダークウガは正義のヒーローって言える存在じゃなかったらしい。

仮面ライダークウガとは、皆の笑顔を守るために戦うヒーローだった。

それは正義のための戦いじゃなかった。

正義のためでなく、笑顔のために戦うヒーローにとって、人々の笑顔が失われ続ける

戦いの日々は、まさしく地獄。

仮面の下で泣き、叫び、笑顔を失っていくヒーロー。

他者を殺すことも傷付けることも嫌いな優しい主人公に、世界で唯一の戦う力を与

え、仮面ライダークウガとして戦わせるといふシナリオ。

そういうところがあるから、俺が物心ついた時から今に至るまでずっと、クウガが仮面ライダー最高傑作だと言っている人がいるわけだ。

クウガを一通り見て、幼かった頃の俺は納得した。納得できた。

『ああ、これは俺の命より価値のあるものだ』って。

名作は、俺に納得させてくれた。

”優れた作品は俺の命より遥かに価値があるものなんだ”と、俺は確と納得できた。

もしもクウガが駄作だったなら。

もしもクウガが駄目な作品だったなら。

俺はきっと、特撮を見限っていた。

”こんなもののために”と、親も特撮も憎んでいたかもしれないねえ。

でも、そうじゃなかった。

そうはならなかったんだ。

俺はクウガが好きだ。

俺は特撮が好きだ。

だから、俺の命よりそれらに価値があるって事実を、素直に受け止められる。

グロテスクなだけ、リアルなだけだったら、俺はここまでクウガを評価してなかった

だろう。

俺が一番見惚れたのは、オサガリジョー演じる主人公、五代雄介の笑顔だった。

クウガは仮面ライダーとして格好良かった。

でもその格好良さよりも、仮面を脱いだ主人公の笑顔の方が良かった。

子供をジャグリングで笑顔にしている時の主人公の笑顔が良かった。

守れなかつた悲しみを嘔み潰して、頑張つて浮かべていた笑顔が良かった。

他人の笑顔が大好きな男の笑顔が、とても俺の心に染み込んだ。

父親と母親と、その頃はまださして会話も触れ合いもなかつた撮影所の大人くらいしか知らなかつた俺にとって、画面の中のその人だけが、俺の知る唯一の『とても優しい大人』だった。

何よりも、笑顔のために。

俺も自己満足の仕事にならないように、今でもそこに最大限に気を使っている。

作中で、主人公・五代雄介は青空に例えられた。

彼の笑顔は、青空だった。

見ている気持ちが良いくて、清々しい気持ちになれて、一切の淀みなく晴れ晴れとしていた。

五代雄介が子供を笑顔にして、”君は笑っていいんだ”と言わんばかりの笑顔を浮か

べると、俺も自然と笑っていた気がする。

これが、俺の原点。

俺の青空。

俺にとつては笑顔が青空。

ふと、それを思い出した。

俺が生まれたのが2000年。それからもう、18年も経っちゃった。

まだ、俺の行く道の先は長い。

一通り稽古は見終わったので、巖爺ちゃんに挨拶して帰路につく。

「では、お先に失礼します」

「気を付けて帰れよ。横断歩道はよく見て渡れ」

「巖先生、俺も18になりましたから、その、そういう子供扱いは……」

「なんだもう18になったのか。背が伸びてねえもんだからガキだと思ったぜ」

「背のことはやめてください」

御老体に拳の鞭打ってやろうかオラ。

見てろよ爺ちゃん、今に伸びんだよ、俺の身長はな……！

劇団地球が俳優の入れ替えはあれど、昔の通りの空気でちよつと安心した。

いや、仕事には不安しかねえけど。

どこにどういうものを置くのかもハッキリしてるから、俺が何をやっちゃいけねえのか、どこの物に触れちゃいけねえのか、古い記憶がそのまま適用できるのは嬉しいこつた。

あそこにはカツラ、あそこには衣装、あそこには……あれ？ ん？

いつもあそこには、ネオ・シーダーが置いてあったはずなんだが。

「そういえば、ネオ・シーダー使わなくなっただけですね」

「ああ、最近は色々とうるせえからな」

「お上の規制と自主規制ですね」

『ネオ・シーダー』。

アンターク本舗が1959年から販売を開始した、少しのニコチンを含むタバコ型の咳止め薬だ。

その昔、戦後の演劇舞台は普通のタバコを使ってた。

タバコは演劇舞台の演出の一つで、嫌煙家さんからすれば功績を認めたくねえくらい
の存在になるんだろうな。

舞台の上で男がタバコを吸えば、サマになる。

女にフラれた男が、女々しい香りのタバコを舞台上で吸えば、香りが観客の座る座布
団席にまで広がって、煙と香りが空気を作る。観客もまた、女々しさを感じ取る。

この“香り”は現代のTV番組や映画館のほとんどに無い、失われた演劇の長所だ。
俳優が香りを制御できる。

俳優が観客の五感の一つ、嗅覚もコントロールできる。

動きで目を、声で耳を、タバコで鼻をコントロールできる。

この技術は、メジャーにこそならなかったが強かった。

だが、タバコが原因の火事が増え、タバコを嫌う客が増え、タバコを積極的に攻撃す
る人も増加し、政府もその後押しを始めちまった。

タバコが殺されていった過程は、舞台演劇にも影響を及ぼしていったわけだ。

そうして、舞台でタバコの代用品として使われ始めたのがネオ・シーダーだ。

タバコと同じ吸い方ができて、煙も出て、香りも少しはタバコに近い。

そんなネオ・シーダーは、舞台の上で一気にタバコに取って代わった。

だが。

そんなネオ・シーダーもまた、嫌煙家の人達からすりや親の仇に等しかった。ネオ・シーダーは一般医薬品だ。

法的には、タバコとは全く違うものとされる。

副流煙の害も、吸つてたところで人間の寿命じや害はまず発生しねえつてくらいに薄い。

だがニコチンを使つてる以上、未成年の使用は禁止されてる。

依存症も”万が一”レベルの話をすりや、ないと言い切れるもんでもねえ。

今じゃネオ・シーダーさえ舞台から消え始めてて、トツブランド社とかの電子タバコや水蒸気タバコを使つてゐるのが現状だ。

劇団天球もそうなつたのか。

そいつに加えて、昔は子供がうるせえからと子供お断りの劇場もあつたが、今は子供でも見ていい——子供が騒いでも少しは許してくれる——劇場も増えた。

子供が見てる劇場だと、こういうことを言つてくる人もいるわけだ。

『子供に喫煙シーンを見せて、喫煙を推奨してるのか!』

劇場関連の仕事をしてると、マジでこういう苦情があることは皆知つてる。

なんつーパワーだ。

そのパワーをどつか別のところで活かしてくれや。

つーわけで、電子タバコすら使えねえ劇場とかもある。

子供を盾にされたなら、良心的な人ほど逆らえもしねえ。

タバコも、ネオ・シーダーも舞台の世界じゃあもう死体だ。ここの劇団でもそうなた。

時代は変わってる。

巖爺ちゃんは、舞台の上で昔愛したものが、一つ、また一つと消えていくのを見てきた、そんな演劇歴史の生き字引な爺ちゃんでもある。

「少し、寂しくなりますね」

「無けりや無いでどうにかする。

そいつが芝居だ。

現実には夏の夢を見せる惚れ薬も、夜空を駆ける銀河鉄道も無いもんだぞ」

「それは確かに、そうですね」

ま、巖爺ちゃんからすりゃハンデにもならねえか。

タフなじーさんはこれだから困る。

気に入らねえタバコをこの世から消すためにエネルギーを使ってる人とは、エネルギーの使い方がちげーわ。

「だが、小物がなくなつて寂しいって思ってるのは、お前だけじゃないだろう」

ん、まあ、そうかもな。

巖爺ちやんもちよつとくらいは思つてたりすんのかな。

「芝居の規制もまた強くなつてやがる。

昔ほど脚本は自由じゃなくなつちまつた。

演技にまで口出ししてくるうるせえ奴が出てこないことを祈るばかりだ」

いつか、そうなるかもな。

今はほら。

”危険だから規制する”がちよつとよく分かんねえものにまで適用されてる時代だしよ。

乗つてたら人が死にそんなバイクの規制と、子供に悪影響を与えるから演^やるなつていう規制つてのは、同じもんなのかね。

俺の目には、同じもんには見えねえわ。

ああ、そうだ、だからこそだ。

だからこそ俺みたいなの、工夫と小細工が得意な奴が役に立てる。

「今回の仕事をきつちりと果たして、巖先生に見せてみせます」

「ん？」

「規制があつてもなくても、巖先生が求める小道具を、俺は法の中で作れるつてことを。

巖先生が望むなら、一見素朴な最高の舞台も、必要とされる小道具も、作ってみせませう」

もしもこの先、何かの形で、巖爺ちゃんが昔やった演出ができなくなったら。

その時こそ、俺は俺の仕事をやってみせるぞ。

タバコと同じ香りで、タバコと同じ煙で、タバコの害の無いもんくらいは作ってやるぜ。

「十年早えぞクソガキ」

十年はなげーよ！ 笑うなコラ！

おのれ。

何故俺の仕事は気合いの割に上手く行かんのだ。

落ち込まねえわけじゃねえんだぞ俺は。

誰か励ませ。励ましてくれ。巖爺ちゃんはハゲ増している。

励ましたら俺の好感度上昇のプレゼントをやるぞ。

ただまあ今はいいや。それどころじゃねえ。

落ち込んでる湯島さんを励まさせとせ。

俺が事務所に遊びに来ないかと電話で誘ったが、湯島さんは事務所に来た時、作り笑顔を浮かべつつもどっか様子がおかしかった。

あかんわこれ。

落ち込んでるやつだわこれ、多分。

「紅茶でいいですか？」

「ん、ありがと」

茶菓子と紅茶を出す。

好みに合えばいいんだが。

チョコとか煎餅とか下手な鉄砲数撃ちや当たるで並べておこう。

「私のオーデイションの結果聞いたんやろ」

「え……そ、そうですけど、よく分かりましたね」

「こうも氣遣われたら分かるわ。ありがと、気持ちは嬉しい」

女の勘こえー。

「芸歴だけなら同年代の色んな子に勝つとる。

……でも、同年代の色んな子が、私が選ばれなかったオーデイションで選ばれるんや。

正直こたえるわ。私は最初のリードを使い切って、どんどん追い抜かれて、なんか

子役からやつてる人特有の苦惱。

こいつは、ある程度の歳になってからスカウトされた人には分からねえ。もちろん俺にも分からねえ。

俺は役者ですらねえからだ。

口が裂けても、”辛いよな、分かるよ”なんて言えない。言えるもんか。

「運もありますからね。湯島さんもまだまだ若いですし、これからですよ」

「英ちゃんがそうやからなあ」

「はい？」

「英ちゃんはホラ、物作りの方で百城千世子みたいな評価の高さやん」

それは流星に過大評価だ。

「いやいや、若くて多少無茶が利く便利屋つてのがせいぜいですよ」

昔はそうでもなかったやん。

でも、年々技量が上がっていったやん？

私が足踏みしてる間、君は随分先に進んで直視できんくなつてた」

「足踏みも何もないですよ。

あなたは女優、俺は裏方です。

俺がいくら成長しようと、先に進もうと、あなたより上等なものにはなれません」

「同じ作品作つとるなら対等やろ。上下とか本来ないわ」

優しい考えだな。

俺はそうは思わねえけど。

俳優女優は作品の顔だ。

俺はそれを作る手足だ。

手足と顔、どっちが大切かなんて言うまでもない。

「仕事の幅増やしてどこからも引つ張りだこな君が、正直羨ましい」

そうかい。

俺はあんたみたいな人を尊敬してるよ。

隣の芝生は青く見える、って言うよな。本当に。

「本当ならここままで仕事の幅増やさなくても食っていったんでしょね。ただ」

「ただ？」

「きつと、俺ができないことでも、親父はできちゃうと思うんです」

そうだ、だから。

俺は自分の中の『できない』を一つずつ潰していった。

「親、親なあ」

「子供の頃、湯島さん親御さんにめっちゃ愛されてましたよね」

「あー、あれなー。あれで私も引くに引けんくなって、今も役者やるハメになったんや」
「親は無かったことにはできないと思うんです。」

忘れたり、無視したりすることはできても、無かったことにはならない」

俺もこの人も同じだ。

親がいたから、この世界にいる。

別の親の下に生まれてたら、俺もこの人も、この業界にいたかどうかすら分かんねえ。
どんな家庭に生まれていてもこの業界に入ってそうな、本物の中の本物とは違う。

「それは幸せなことでもあり、不幸なことでもあり、どうしようもないことでもあると思います」

子供は親を選べねえ。

親の影響で人生が大体決まった子供は、人生をどのくらい選べるんだろうか。

よくいるよな。

有名な芸能人の二世の芸能人。

ああいう人達は、自分の人生をどう思ってたんだろうか。

「ただやっぱり、親のせいにはできないんですよね。」

俺達の人生ですから。

だから湯島さんも、親が悪いとか言ったことはないでしょう？」

「……ん、まあ、そやな」

そういうのあんたのいいとこだぞ、湯島さん。

「いつの間にか、やめられんくなってたんや。楽しいやん、あの拍手が、あの達成感が」
それでいいんだろうな、『役者』ってやつは。

それが、辛いことを乗り越える熱量になってくれるから。……羨ましいぜ。

「ちよつと待つててくれますか？」

「？」

「湯島さんが来るまで、ちよつと作ってたものがあるんです」

励まそうと湯島さんを電話で呼んでから、来るまでの間でウレタンせつせと削ってたんだぞ。

「どうぞ、ミニ湯島さんです」

「わっ！ なんやこれごっつかわいー！」

「気に入っていただけなら幸いです」

「なんやつけ、ねんどろいどやつけ。あれみたいな造形でかわええ……これほんまに私
？」

「はい」

お前の方が可愛いぞ。

デフォルメ立体化は案外コツがいる。

大切なのは簡略化しつつも特徴を残し、特徴的な部分を強調することだ。

芸能人のフィギュア化は、大体そういうフォーマットに沿って作成されている。

素材はウレタン。

中身が空なプラスチックカプセルにウレタンを巻いて、削り出して、筆とペンで塗装した。

芯材にウレタンを巻いて削り出すというやり方は、仮面ライダー電王（2007）の相棒怪人・モモタロスの剣の製造法と同じだ。

芯材を空洞にすればかなり軽く頑丈になる。

電王で主役仮面ライダーと共に戦うモモタロス達のスーツもほぼウレタン製なんで、フィギュア作成のイメージを作るのはそんなに難しくもなかった。

こいつとは別に、木を彫刻刀で削って、表面処理・塗装処理・再度表面処理の三層処理で作った人形も作っていた。

「どうぞ、こつちがチャイルド湯島さんです」

「こ、子役時代の私のお気に入りだった服……!」

「なんか小学生時代ってお気に入りのお服があつてかなり頻繁に着たりしてましたよね」

「あー、そんなあったなあ」

「まだまだ作れます。どんな素材でも作れますとも」

大人になった湯島さんをモデルにした、ウレタン製の、プロのレベルで精巧な人形。子供の頃の湯島さんをモデルにした、木から削り出して塗装した、暖かみのある人形。素材と製法には、明確に差をつけておいた。

この二つの違いは、”俺は個人としてもプロとしても応援してる” というメッセージ。

「こつちがファンとしての俺の作品。」

こつちが女優の湯島さんのグッズを、プロとしての俺が作ったらというものです」

「え」

「俺はファンとして、あなたの成功を祈ってます。」

俺はプロとして、あなたが成功できないほど実力が低い人間だと思ってます。

オーディションに受からなかったなら、それは相手側に見る目がなかったことで「すよ」

「……英ちゃん」

「湯島さんが役にぴったりのオーディションだって、必ずあるはずですよ。俺は信じてます」

オーディションは優れた人を選ぶ場じゃなく、的確な人間を選ぶ場だろうがよ。

そんなんで落ち込むなよ。

そいつはあんたが周りより劣ってるなんてことを証明しない。絶対にだ。胸張れって。

湯島さんよりダメダメだけど仕事持つてる女優とかいるんだからさ。

後はホラ、運とか巡り合わせとか、今後の成長とかあるって。

うつむくな。

頑張れ。

知った顔がこの業界からまた一人消えたら、俺は寂しいぞ。

あんたのグッズとか勝手に個人的に作成するような熱狂的なファンがここにいるじゃねえか。

「ファンなんですすよ俺。十年越しの湯島さんのファンなんです。嘘じゃないです」

「……知つとる」

笑った。

誤魔化しじゃなくて、ちゃんと笑ったな、湯島さん。

「君の作品は、昔からずっと、嘘なんてない心がこもつとるもんな。出来は最高や」

俺の顔じゃなくて人形見てそういうこと言うのやめろ。

別に俺の作品から俺の内心は読み取れんぞ。

だからそんなに見るな。

人形から俺の内心読もうとすんじゃねえ。

「それでもないですよ、俺もまだまだ未熟です。」

「今日も全力の仕事をバツサリ切り捨てられて、少し落ち込んでたくらいですから。ははは」

「え、君の仕事がボツ!? そんなんあるか……」

そんな驚くなよ。俺何でもかんでも一発採用な超人じゃねえぞ。

「ただの難癖とちやうん? ボツ出して報酬を引き下げようってハラなんとちやうかな」

「そういうことする人じゃないと思いますよ」

「難癖以外で英ちゃんが落ち込むほど仕事ボロクソ言われるとか信じられんわ」

いや信じろよ。

「あの、何故そんなに」

「君が駄目なら他の誰がやっても駄目ってことやる?」

んなわけねーだろ!

「ともかく、ふつーにやってたら絶対仕事にOK出されてたはずやって」

「湯島さん。仕事で駄目だったのは俺の責任です。」

俺の仕事や能力に納得しなかった人に何か言うのは、やめましよう」

湯島さんは、俺が仕事を切り捨てられた話をしてから、ずっとむすつとしてる。

「私は、英ちゃんの作品のファンなんや」

「――」

「だから言うんや。英ちゃんの仕事の良さが分からん人はしょうもないな、って」

……ああ、そうか。

俺達今、同じようなこと互いに言い合ってたのか。

もしかしたら、湯島さんがオーディションに受からなかったって話してた時、俺の方も顔がむすつとしてたりしたんだろうか？

湯島さんには、俺がどう見えてたか分かったもんじゃねえな。

「俺が悪かったんですよ、きつと。作品作りのどこかで失敗したんです」

「何やそれ。英ちゃんだと、深く考えすぎて失敗したとかしか思い浮かばんね」

「かもしれない。何が悪かったのかまだちよつと分かってないんですよ」

「たまには何も考えんと好きに描いたら、それで合格になったりせんかな？」

「あはは」

湯島さんの笑顔にもつられて、俺の方が笑顔にされてしまった。

「大丈夫大丈夫！」

君が作ったもんが、きつと世界で一番綺麗や！ 自信持てば絶対大丈夫やつて！」
「ありがとうございませす、湯島さん」

励ますつもりが、いつの間にか励まされちまった。

観客を笑顔にすることが俳優の仕事なら、彼女はもうとつくに俳優だった。
ファンもいる、女優の責務を果たせる、そんな女優だった。

応援してるぜ湯島さん。

物作りしかできない俺には、応援くらいしかできねえけど、応援してる。

そういえば。

この人は前に、晴れた日の公園が好きだと言ってたな。

青空の下の公園が好きだと。

笑顔のこの人が、青空を見て笑顔を浮かべる光景を想像してみる。

俺にとっては笑顔が青空。

ふと、それを思い出した。

翌日になった。

笑顔のような空か。

空のような笑顔か。

空に対して言う「美しい」と、笑顔に対して言う「美しい」は違うのだろうか。

それとも、本当は同じなんだろうか。

この哲学的な何かは、作品に表現できるものなんだろうか？

——たまには何も考えんと好きに描いたら、それで合格になったりせんかな？

何も考えず好きに、ね。

俺の仕事の方式から一番遠いやり方だつーの。

何も知らない素人め。

何も知らないからか好きなこと言いやがって。

湯島さんの言ってることが正しいかもな、なんて思っちゃまったじゃねえか。

あんたは素人なのに。

そんな助言聞く必要ないってのに。

何故か、無性にあんたの言葉を信じてみたくなかった。

今日の本来の予定では、俺は劇団に朝九時に合流する予定だった。

それを早めて、早朝から集合場所に行く。

少し、心の中を整理する時間が欲しかった。

遊びのように刷毛^{はけ}を走らせる。

気ままに、思いついた素材を使って、思いつきのままに描く。

過去に習ったこと、学んだこと、何一つして意識しない。制御しない。

思うまま、望むままに描く。さぞクソみたいな作品ができるこつたろうな。

ああ、でもなんか、楽しい。

湯島さんのおかけか肩の力が抜けて、何か不思議なコンディションだ。

遊びつてのはいいな。

そういや、子供の頃に画用紙にクレヨンで落書きとかしてた記憶ねえや。

俺の最初のお絵かきは、撮影所で書かれてた絵コンテの真似事だった。

楽しい。

何の責任もない、遊ぶだけの作業は楽しいな。

仕事の前に気ままに遊ぶのも悪くないかもしれん。

いい気分転換になる。

遊びで描いた空の絵は、俺が過去に描いたどの空の絵とも違っていた。

「おはよ——え——え？」

あ、七生さんだ。

この人髪染めて舌ピアスとかしてるのに朝一番乗りとか真面目な面見せるのあざとくねえか。

俺の絵を見た七生さんが、何故か目を見開く。

「空が……え、空が、これ、何？」

「おはようございます、七生さん」

まー驚くのも無理ねえか。

ここまで何も考えずに描いた適当臭い絵、俺今までお出ししたことねえし。でも遊びだから許してくれ。

お、亀さん、アラヤさん、巖さん、劇団員と、続々来たぞ。

「え、何だこの空……何？」

「……へえ。朝風、こういうことするんだ。なんか癖が変わったんじゃない」

そんなマジマジと見んなや、恥ずかしいだろ、目潰すぞ。

今片付けるからこんぐらいの遊びは許してくれ！

「待て、片付けるな」

「え」

なんで？ 巖爺ちゃん？

「昔、芸術家は彫刻と絵のどちらもやった。

立体と平面。片方を極めていけば、もう片方も極めていける。そういうもんだ、阿良也」

「そういうもんかな」

「なんか会話始まったぞ。待て、会話する前に片付けさせてくれ。

「どう思う？ 巖さん。今から役者が一人増えるようなもんでしょ、これ」

「演じろ。阿良也」

「しなきゃ駄目？」

「他の劇団員が分かってねえ。

「全員絵に何かを感じてるのは事実だが、何を感じてるか分かってねえのさ」

「はいはい」

「アラヤさんが遊びの背景画の前に立つ。

「おいおい待って待って。それそういうのじゃねえから。

「ん、でももしかして、この背景の方がいい感じになるのか？」

「……いや、駄目だ。基本的に失敗作だ。

「自由に描きすぎたせいで背景の自己主張が強すぎる。

「風景画と人物画ってやつがある。」

風景画の主演は風景だ。だから風景に力を入れていい。

「ただど人物画の主演は人物だ。人物より風景に力を入れるのはありえねえ。破綻する。」

俳優に注目を集めたいなら、ここまで主張と個性を出した背景は失敗作でしかない！アラヤさんが、演技を始める。

「多くの書物を読み、知ったことがある。誠の愛が、穏やかに実を結んだ試しはない！」

うっ、おっ、なんだ、これ。

本気のアラヤさんだ。

ステージの上にいるつてのに、観客席の一番後ろにまで届きそうな声と存在感。

観客席の前の人が、大きな声に不快にならない声と演技。

観客席の後ろの人にまで、ちゃんと届く大きくハッキリした声と演技。

そんな矛盾が成立してやがる。

よく通る声であり、不快感を覚えにくい声であり、よく感情がこもった声だ。

しっかりとした役作りから、確かな演技力で演じられるそれが、目立つ背景を力任せにねじ伏せていく。

アラヤさんの存在感が空の存在感と食い合って、その上でアラヤさんが勝ってやが

る。

それが、これまで以上にアラヤさんの存在感を増してやがるんだ。

アラヤさんから目を離せない俺の後ろで、七生さんと亀さんが会話していた。

「亀」

「なんだよ七生、ちよつと集中して見させてくれ」

「あの空の雲、どう思う？」

「……ふわつとしてるな。」

前に描かれてた背景画の雲よりよっぽどふわつとしてる。

空が、春から夏に移り変わってる最中みたいな……なんだこりゃ」

春は綿、夏は岩、秋は砂、冬は泥。

それが雲を魅せる基本だぜ亀さん。

何も考えないで描いても、そいつは手癖に染み付いてたみたいだな。良かった良かった。

夏の夜の夢は、日本では真夏の夜の夢と訳されることもある。

だが日付で言えば、この作品の作中時間は四月末だ。

全然真夏じゃねえ。

別解釈したってせいぜい初夏のことだろう。

俺は無意識的に、その認識を遊びの絵に反映してたんだろうな。多分。

前の俺の背景画は、引き立て役として印象を強めないよう、あえて季節感を強調しなかった。

だが何も考えてなかった俺の手は、春から夏に移る途中の空をかなり強調してる。つまり目を引きすぎちまう。

背景が印象に残りすぎれば、巖爺ちゃんの育てた演技だけで魅せる俳優の強みが死にじまう。

最悪の失敗作だ。

だつてのに。

アラヤさんはその背景を『もうひとりの共演者』として扱うみてえに、その存在感をコントロールし、踏み台にしてみせてやがる。

アラヤさんが少し舞台を動くと、そのすぐ後ろにあたる空の形と雲の形も変わるから、観客席から見たアラヤさんの印象がコロコロ変わってる。

千変万化、つてのはこういうもんなのか。

……面白え。

遊びの絵だもんな。最後まで、遊びで行こう。

演劇に使用する家具用の大鏡があつたな。

あれで、舞台上の空の絵に太陽光を当てる。

早朝のこの時間帯、太陽光はまだ十分じゃねえからな。

「七生、こいつは俺の気のせいかな？」

「……亀と同じところを見て、同じことに気付いたと思うとイラつとするわね」

「やっぱ気のせいじゃないよな。空の表情、変わってないか」

「空に顔なんてないわ」

「……」

「でも……確かに、表情が変わってる。」

阿良也一人の舞台なのに、まるで二人の役者の共演に見える」

遊びだったからな。

表情がコロコロ変わる空って、何か面白そうだろ。やってみたいと思ったんだ。

いやでも恥ずかしいわ、ジロジロ見ないでちよつと見るだけで流してくれ。

遊びの手法なんだって。

あ、アラヤさんの演技が終わった。

名演でしたアラヤさん！

でも”表情が変わる空”を背景にして、初見で完璧に対応して演技を調整すんの、こ

こまでやられるともはや怖えぞ！

「こんなもんでいい？ 巖さん」

「ああ、十分だ」

よーし終わったな。さつさと外して隠そう。物珍しきしか取り柄ないぞこんなの。

「英坊……いや、英二。他の奴にも分かりやすいように説明してやれ」

「え、あの、これお遊びで描いたもので納品予定のものではないんですか」

「やれ。何度も言わせるな」

巖爺ちゃん、おい、なんでや。まあやれって言うならやるけど、しまわせてくれよ。

「この作品の雲は化粧品を塗料に使用しました。ふわっとした感じが出せそうだと思う」

「化粧品!？」

「ルースパウダー、という空気を含む粉状の物を使わせていただきました」

そりゃ亀さんは驚くか。

ま、遊びだしな。

遊びならなんでもありだ。

とびつきり真つ白な化粧品で、雲を仕上げさせてもらった。

「私も使ってるけど、化粧品が絵に定着するわけ……あ、他の塗料に混ぜたの?」

「はい。白の塗料も併用してあります。塗料はあくまで繋ぎですけどね」

七生さんは流石に察しが良いな。女子力を感じる。

「なんでまた化粧品なんて選んだんだ？」

そりや亀さん、遊びだからだつて。

「なんとなく化粧品使おうかなと思つて。

成分表見てああこれなら、つて思つたんです。

成分がマイカ、酸化亜鉛、酸化チタン、シリカ、シルク、水酸化A1、酸化鉄だつたんです」

「いやいや、それがなんだつてんだよ」

「全部過去に弄つたことのある素材だったので、いけるかなと思ひました」

「——は？」

マイカはマイカつて呼ばれることが多いが、雲母のことだ。

マイカプレートは絶縁シートになり、電気が流れる玩具や機材の製造・修理に使える。

夜風さんちの弟くんは修理した玩具を渡した時も、元は捨てられてた玩具の状態が不

安だつたんで、中にマイカシートを安全のため追加しておいた。

電気漏れ怖いしな。

LEDのライトに触れたことがない人はいねえだろう。

LEDの青色は今、メイン素材が急速に取つて代わられようとしている。

新しい青LED、それに使われているメイン素材が酸化亜鉛だ。

夜風さんの弟くんにやったあの戦隊の玩具、あのシリーズにも当然LEDは使ってる。

俺が前の撮影で使った、空気と反応して白煙を出す四塩化チタン。

あれが空気中の水分と反応した後に残るのが酸化チタンだ。

シリカを加工したものを珪砂と言う。

特撮でミニチュアに雨を降らせる時は、水そのまま降らせても全く雨に見えないので、珪砂を水のように見せかけて雨を演出する。

それが基本にして秘奥のテクニクだ。

シルクは絹。

これで百城さんの衣服を作ったこともある。

仮面ライダースーツに使うFRP（繊維強化プラスチック）の着色塗料、その中でも青が強く見える緑色の塗料を、ピーコックと言う。

このピーコックの主成分の一つが水酸化アルミニウムだ。

混ぜちゃいけないもんは分かってる。

酸化鉄は特撮に使う鉄製小道具の黒被覆なんかを使う。

特に鉄の橋の質感を出すため、鉄の橋のミニチュアを本物の鉄で作った場合、こいつ

でミニチュアを被覆してからどう塗装するかを考える場合もある。

「だから俺、化粧品は結構遊べるもんなんだなと思ったんです」

何が害がある物質か。

何が害のない物質か。

それは俳優に害がないか。

それは子供に害がないか。

全部把握してなくちゃ、俳優が着るスーツを作っちゃならねえし、玩具の造形仕事に
関わる仕事をするべきじゃねえ。

どれも俺が知ってる物質だった、だから先人がこういうのに使った前例が無くても、
安心して使えた。

物質は人間とは違い。

同じ作業と加工をすりゃ、必ず同じ結果と形になる。

そいつのなんと心強えことか。

「表情が変わる空は？」

「紫外線顔料を使っています。」

紫外線顔料は立体に使われることが多い、色彩変化塗料です。

暗所では白く、紫外線を浴びることで特定の色に変化します。

この空は紫外線が当たると、徐々に雲や月が変化していくようになっていくんです」
野外公演では、太陽の向きも変わり、ステージの一部が背景に影を落とすこともある。
そこで遊んでみたら楽しそうだな、って思ったんだ。

紫外線顔料は紫外線を使って結構面白くできる。

紫外線顔料に白塗料や透明塗料を混ぜておけば、紫外線を受けた後に変化する色の濃さも、薄くして調整が可能だ。

紫外線顔料の上に薄い塗料を塗りや、紫外線顔料に届く紫外線が少なくなるから、日光が強い時間帯以外には色が変わらないようコントロールもできる。

その雲は、ちよつとの紫外線で青色に変わり、空に溶けて消える。

だから早朝でも消えちまうんで、曇の日の公演でしか見られない。

その雲は、結構な量の紫外線で青色に変わり、空に溶けて消える。

だから10時から14時の間だけ、空から消えてる不思議な雲だ。

その雲は夏の雲みたいに見えるが、特定の時間帯だけ雲の一部が紫外線で消えて、春を思わせるふわふわしたちぎれ雲になる。

季節感も揺れ動くのは見てて楽しいだろ？

そして俺のお気に入りには、特定の時間帯だけ薄っすらと空に見える月だ。

いいよな、時々真つ昼間に青空に見える月。

俺は、子供の頃から、昼に見える月が何故か好きだった。

いつもは夜に見える月が昼間に見えるのが面白くて、楽しくて、美しく見えた。

現実の真昼の月は、太陽がギラギラ輝いてると見えねえ。

だから絵の中の青い空に白く浮かぶそいつも、現実の太陽がギラギラと輝いてる時間帯は、紫外線で見えなくなるようにした。

お遊びで描いただけの表情をころころ変える空の背景画だが、描いてるのは楽しかったな。

うん、楽しかった。

「皆さんはこれから野外公演です。」

そう思ったら、それで遊べる要素ってなんだろうって思ったんです。

この背景画は、朝昼夜で色合いがぐっと変わり、天気でも結構変わります。

公演の度に全然違う背景になったら、それはとても面白いと思ったんです」

七生さんが何か神妙な顔してる？

「天気によって表情を変える空。」

化粧品の雲。

表情があつて、晴れだから……これまさか、『晴れ晴れとした笑顔』？」

「……あ、あー！　そういうコンセプトかこの青空背景！　七生でアハ体験だわ！」

「私でアハ体験すな」

流石女子の七生さんは違えなあ。視点が違うから、男より気付くのがはえーや。

そういうことだ。

この青空は顔。

笑顔の青空だ。

そこに化粧を施した。

女性の笑顔を、化粧品で彩るのと同じように。

ほら分かるだろ、こんな遊びだ作品はもう仕事じゃねえつて。

雲の位置を俳優さんのために調整したとかもない。

引き立て役にもしてねえ。

これは背景画としてはよろしくねえ例の一つだ。

ほらさつさと片付けるからどけどけ。

「俺はこいつを今回の巡業に採用しようと思うが、それでいいな？」

えつ。巖爺ちゃん？

「いいんじゃない？ たまには」

アラヤさん!?

「私も異議なし」

「こいつは面白そうだ」

七生さんと亀さん……つて他の人達もかよ！

え、なんでだ。

こんななにギミツク仕込んだ、俳優に注目集める邪魔にしなければねえ背景要らねえだろ。

「英二。センスとはなんだ」

「え……感性、でしょうか」

「そいつも間違っちゃいねえ。

だが、分かってねえな。

お前これの前にもう一枚描いてただろ。それもそこに広げろ」

「え、え、え」

なんで知ってる！ 最初から俺が描いてんの見てたわけじゃねえよな……？

「お、こっちは夕方なんだな。俺こっちも好きだわ」

亀さん。

お遊びなんだつてば。

こっちは夏の夜の夢のイメージに合わせてもないからな！

「茜色の空。

茜色の反対側の深い黒。

地平線に並ぶ百の城。

空にうつすらと輝き、夜を待つ星」

七生さんのコメントが光る。

やべーな。

何を思っただけ俺がお遊びしてたか、バレたら死ぬ。死ぬしかねえ。

「英二、描いてて楽しかった？」

「はい」

「夏の夜の夢のイメージには合っていないけど、これも悪くないと思うよ」

ありがとう七生さん。

だから早くしまわさせてくれや。

「阿良也、最初の空の絵をどう思う？ こっちの夕方の絵を踏まえて言ってみろ」

「天気、時間帯、舞台の向き。」

「どれか一つが変われば表情を変える」生きた背景。

七生が言った通り、綺麗に化粧した笑顔みたいな空だよな。

ちよつと間違えたら平凡になりそうだけど……二つの絵のどっちも、センスが高い」

「そうだ。遊びでもこのレベルになるのは、センスに起因する」

センス、センスって、何が言いたいんだ？

あと褒めんな、これ以上褒められると顔が茹だりそうだ。

「英二。磨いたセンスはなくならねえ」

「磨いたセンス……？」

「お前は過去の技術をひたすら模倣し続けた。

成功例も、失敗例も、多く見てきたはずだ。

何が良く、何が悪いかを、膨大な経験値が既にお前に学習させている。

お前の感覚は、既に良悪を知っている。そこで何も考えずに仕事をすればどうなる

？」

「え」

「お前にはもう、何も考えずとも失敗作を作らないセンスが身に付いている」

「――」

「過去の模倣を考える必要もねえ。

何も考えなくとも、お前の腕は染み付いた技を形にする。

一度過去の模倣を考えるのをやめてみる。

お前の独自の作風で何かを作ってみても、立派な作品になるだろうよ」

もしかして、巖爺ちゃんが言ったのは、そういうことだったのか？

「その能力をまだ自覚的に使えんのなら、ヒヨッコとしか言えんがな」

「……そう、ですな」

「人の目を引く背景を描きやがって。」

阿良也以外は、この背景を凌駕するための稽古をやり直すしかねえじゃねえか」

うん、まあ、そりゃそうだよな。

失敗作なのは間違いねえんだこれ。

俺が見た感じ、この背景に絶対に負けない俳優は阿良也さんくらいしかいねえ。

次点で亀さんが負けないかもってくらいか。

つまり個性があっても、劇団に合わせることをマジで全く考えてねえんだ。

となると、劇団はまたしつかり稽古の仕込み直しだ。

じゃなきや皆背景に負けちまうもんな。

「えー」って声が劇団の皆様から漏れている。

ごめんなさい。

俺の絵によつて皆の稽古スケジュールが相当キツくなりそうだな……マジごめんなさい。

「お前は競って良かったんだ、英二。」

俳優と競うのもお前の選択肢の一つだ。

そうしてぶつかりあって高め合うこともある。

俳優と高め合うような背景、引き立て役の背景、意識的に使い分けられるようになれ」
「巖先生……もしかして、俺にこのことを教えるために？」

「あっちの業界に浸かりすぎたな。」

誰もお前に失敗作を要求しねえ。

誰もお前に成功しか要求しねえ。

成功と収入が基準の、遊びがねえ業界だ。

それじゃあお前が”そう”成るのも当たり前だろうよ」
ぐっ。

そっか、過去の名人の技術を模倣して、過去の成功例の技術を具現して、なるべく早く仕事を成功させるのが良い業界に浸かってたのが、巖爺ちゃんには悪い癖に見えてたのか。

「お前みたいな奴が他人を美しく魅せようとするための行為は、愛の言葉みたいなもんだ」

愛。愛っすか。

「過去の誰かの愛の言葉を真似する、まあそれもいい。

失敗はしねえだろう。」

愛の言葉を作るのも上手くなるだろうな。

だが本当に何かを愛した時、使う愛の言葉はお前だけのもんじゃなきゃならねえ」

「……はっ」

俺らしい、俺だけの技術、俺だけの作風、ってことか。

「お前は自由だ。

何を作っても良い。

そんな当たり前のことを、お前が身に着けた技術が忘れさせる。

何故なら、先人の技術を使うことは『正解』になるからだ。

面白くねえ。挑戦がねえ。独自性がねえ。何より、遊び心がねえ」

遊び心。……” 気付け” って言ってたのは、それか。

遊び心を持って、挑戦して、面白い俺の独自性を作れっていうんだな、巖爺ちゃん。

「美しいものを創れるのは、美しいものを見たことがあるやつだけだ。

美しいものを生み出せるのは、美しいものを知っているやつだけだ。

お前も役者と同じだ。

自分の中に無いものは演じられねえ。

自分の中に無いものは作れやしねえ。

お前が生み出すものの源泉は、全てお前の中にある。どんなものだろうとだ」

美しいもの、か。

ああ、知ってる。

俺は美しいものを知ってる。

だからその星とか百の城とか茜色の空とか描いてある俺の絵を見るのやめない？

やめろジジイ。

やめろや。

見んな。

「過去の人間の技を学ぶだけでどうする。

まだお前は成長に行き詰まってもねえガキだろうが。

お前にしか生み出せない技も、お前にしか生み出せない物もあるだろう。

朝風英二が真似してきた過去の先人が、過去になかった技術を生み出してきたように

な」

つか、巖爺ちゃんがここまでしつかり長く俺に何かを言うの珍しいな。

こんなに多くのことを一気に伝えようとしているのも珍しい。

勘だけど、伝えようと思ってたことを、これが最後だから全部伝えようとしているよう

な。

なんか、遺言みてえだ。

気のせいかな？

「好ましく思ったものを、美しいと思ったことを忘れるな。

お前が美しいと思った心は、お前にしか形にできねえんだ。肝に銘じておけ」

「……はい！」

だからさあジジイ。

その茜色の夕方の絵を眺めて笑うのはやめてくれ。

なんだ。

何か察してるのか。

察してるとしたらその口を封じなけりやならなくなるぞ。

どうなんだジジイ！

「いい絵だ。お前が今、幸せなことが伝わってくる」

……。

なんだよ。

どういう感想だ巖爺ちゃん。

なんで笑ってんだ。

「俺がくたばる前に、この絵を見られてよかった」

「縁起でもないこと言わないでください。まだピンピンしてるじゃないですか」

「ふん」

そのパワーのある眼光でその台詞は似合わねえって。

俺の幸せとか気にすんなよ。

巖爺ちゃんに仕事を認められたってだけで、俺は結構心満たされてるぜ。

「俳優は原石だ。」

俺達演出家は、原石を磨いて宝石にする。

お前は、宝石を指輪にしてみせろ。その価値を更に高めるために」

任せろ。

そいつが俺の仕事だ。

「はい。やってみせます。

もうちよつと立派になったら、巖先生に仕事で礼をしてみせますから」

「十年早えんだよ、英坊」

テメー十年も待たせるかよ！

一年くらいでやってやる！

主人公の本音「今時実写でセカイ系って難しくないですかね」

以前、海賊戦隊ゴーカイジャーVS宇宙刑事ギャバン THE MOVIE（2012）の撮影準備の時、ちよつとした歴史研究みたいなことに協力した覚えがある。

海賊戦隊ゴーカイジャー（2011）宇宙全てを我が物にせんとする宇宙帝国と、それに抗う宇宙海賊の戦いを描く物語。過去の戦隊全てが地球を守るため参戦し、劇場版では199人の戦士が並び立ち悪に立ち向かう。と宇宙刑事ギャバン（1982）宇宙犯罪組織から地球の平和を守る、宇宙刑事の物語。特撮の歴史に革新を起こしたメタルヒーローシリーズの初代であり、今でも極めて高い人気を誇る。のクロスオーバー劇場版を作るにあたり、監督サイドからややこしい提案がなされた。

そいつが、「ギャバンに『あの』レーザーブレードを持たせたい」であった。

宇宙刑事ギャバンとは、ウルトラマン80と仮面ライダースーパーで『ウルトラマンと仮面ライダー』という巨塔が一旦終わるため、その代わりになるヒーローシリーズの初代となるべく生み出された、当時の新世代ヒーローだ。

だからそりやもう、こだわられていた。

エンタメ性と、かつてない技術を用いる芸術性のどちらも追求され、スタッフも各特撮作品のエキス級が集められたって話だ。

更には実験段階だった合成技術の強みを世に知らしめ、スーツ作成技術においても新技術を採用し、後の時代の特撮の発展に大いに貢献してくれた。

すげー革新的な作品だったわけだ。

そんな宇宙刑事ギャバンのメイン武装が、『レーザーブレード』である。

このレーザーブレードには、三種類のモデルがあった。

一つは、撮影初期に使われていた繊細な芸術品の如き一品。

一つは、上記の一本が折れた際に作られ、メインとなった螺旋模様の一品。

一つは、撮影の途中で作られた低予算撮影用の特撮用蛍光灯を加工した一品。

坂本浩一監督が提案したものは、撮影初期に折れたこの『最初のレーザーブレード』を復活するという、男のロマンとマニア狙いを極めたようなものであった。

いや普通は知らねえよそんなの。

造形チームの端っこにいた俺は、そう思った。

『あれをレーザーブレード・オリジンとして復活させましょう』

提案した坂本監督が前年度に仮面ライダーW（2009）平成二期仮面ライダーシリーズの開祖。その圧倒的なドラマ性、エンタメ性、格好良さと感動を両立した話作り

で、平成最高傑作に推す者も多い傑作。放映から十年近く経った今でも、『最近の仮面ライダーでオススメは?』と質問された時、このライダーの名前が挙がることがあるほどの最終回で俺を感動させたのもあって、俺は疑問を持たずにこの作業に参加した。

かつては芸術性を追求しすぎて折れちまったレーザーブレード・オリジンを、現代の技術でリメイクする。

どこまで外見を似せられるか、どこまで現代の技術で耐久性を上げられるか、そこが問題だと俺は考えていた。

そいつが大間違いだった。

地獄のパーティーの開催だ!

昭和特撮は、昔に行けば行くほど図面を残してねえ。

『再現性が重要』って概念がまだ育ちきってなかったからだ。

つーわけで、初代レーザーブレードの図面も残ってなかった。

しかも剣だ。剣。

監督達は「凝った柄のデザインレーザーブレード」とか言うが、冷静に考えてみる。ヒーローは剣の柄を持ってポーズするんだから、凝った柄のデザインなんか手に隠れてほとんど見えるわけねーだろ!

当時の撮影会の資料を漁った。ねえ。

当時の写真を雑誌等から漁った。ねえ。

当時のデザイナーと会社をあたってデザイン画を探した。ねえぞ。

どこもかしこも二代目レーザーブレードしか映してなくて、初代レーザーブレード単品の写真すらねえ！ どうしろってんだ！

皆で均等に苦労した結果、当時のデザイナーさんのうる覚えな証言、写真にちらつと一部分だけ映った初代レーザーブレードの柄から、答えは出た。

正解はどうやら、ナスカの地上絵をアレンジしてデザインされた銀河連邦警察のシンボルマークを、柄にはまるようアレンジしたものだっらしい。

なるほど、日本警察のシンボルマークを拳銃に刻印するような感じか。

造形畑の人間として言わせてもらうが、実際に作ったレーザーブレード・オリジンがシンプルなデザインだった分、資料集めが一番クソ苦労したと思うわ。

何故……何故あそこまで資料がなかったんだクソ……まあそれはもういい、過ぎたことだ。

ともかく。

俺達造形屋は、監督にああいうのが作りたいたいと言われたら、作るしかねえ。

そのためには知識と技術が要る。これで十分、なんてことはねえ。

一生勉強で、一生研究で、一生探求だ。

だから、色々試してみることにした。

「やっ」

会社を引退した元特撮技師の爺さんの私有地を、ちよつと好意で貸してもらった。

今日は色々試せるぞ。

……試せると、思ったんだが。

「百城さん、もうちよつと離れててください」

「心配性だなあ」

何故か百城さんがいる。細心の注意を払わねえと。

まずはタイヤだ。

近年、タイヤは滅多に燃やせねえ。

許可取るのに一苦労、というかこの土地の所有者さんが色々資格やらコネやら持つてなかつたら、どんなに苦労してもタイヤも燃やせなかつただろう。

タイヤを燃やしてんのはもうテロリストとかデモ隊くらいのもんじゃねえかな。

だから俺も今まで、タイヤ全焼はやったことがなかった。

が、俺はもう未経験のことをそのまんまにはしておきたくねえ。

古い特撮では、近くのマンションの洗濯物をタイヤの煙で真っ黒にしつつ、周囲にダイオキシンを撒き散らしながらこれをやってたって話も聞く。

スピルハンバーグの太陽の帝国（1987）は何千本もタイヤを焼いたとかいう話だ。派手だな！ 流石だ！

一本燃やすための許可を得るだけでこんなに苦労する現代は、昔ながらのテクニクがドンドン駆逐される時代になっちまってるってことだな。

いやタイヤは燃やすと有毒物質出るんだから自治体の方が間違いなく正しいんだけどさ。

「これ何か楽しいのかな？」

「いや、楽しくはないですけど……そうですね、百城さん、ちょっと写真いいですか？」

「どうぞ。えっちな写真は駄目だけどね」

「そんなの要求するわけないでしょうが！」

何考えてんだ！

タイヤにガソリンをドバドバかけ、火をつける。

太陽、俺、百城さん、燃えるタイヤを一直線に並べ、タイヤの燃える煙を背景にして百城さんをスマホで撮影する。

はい撮影終了、危ないものからは大女優はできる限り離れててくださいねー。

万が一に火傷でもしたら、俺があまりにもクソ野郎すぎて殺したくなりそうだ。
「この煙を背景にすると、こう見えます。」

百城さんは肌も白く、白い服も多い『白の人』です。

だからタイヤを燃やして出る『濃く重い黒い煙』を背景にすると映えるんです。

白く美しいものを際立たせるには、汚れた黒いものを背後に置くのが一番ですから」

「へー、白く美しい、ね」

そこに食いつくいな。

「ここまで重厚感のある黒い煙を出せるのはタイヤ焼きの特徴です。」

煙は煙ごとに質が違います。

例えば歌手のステージで出て来る白い煙。

床近くを漂わせれば華やかさを増し、勢いが強ければインパクトを強める効果があり

ます」

「ああ、確かにあれはよく見るかな」

”煙を出すとなんか雰囲気作れる”って認識だけでは駄目なんです。

煙ごとの効果を意識して、煙の質をあらかじめ分析しておくんです。

場合によっては、このタイヤ燃やしのように、今は使えない技法の代用品も必要です

から」

もう今の規制状態だと、タイヤ燃やしは現実に使える撮影方法じゃねえ。するとどうするか。

俺なら、このタイヤ燃やしの代用品が欲しいと言われたらどうする？

……スモークだな。

俺が黒さんとこの前一緒に仕事した時に使ったスモークボール、あれの黒バージョンを作るのに使うスモーク素材を、灯油に混ぜる。

そして灯油に着火する。

これだ。

多分これで、黒煙と炎の魅せ方としてはタイヤ燃やしに限りなく近くなる。

重厚さを感じさせる煙の表現は研鑽を続けるか。

タイヤ燃やしは海外だと、デモ隊が政府の狙撃手の狙撃を防ぐため、狙撃手の視線を遮るための即席広範囲カーテンに使うらしい。こえー。

百城さんと会話をしつつ、タイヤが燃え尽きたので、時間の計測を終了する。

「計測完了。っと」

ガソリンがごうつと燃えるのは一瞬。

そこからタイヤが実用レベルの黒煙を出すまで八分。

黒煙が出続けたのが四分。

全部燃え尽きて炎が出なくなるまで三分だった。

……うーん。

何か思いつきそうなんだが。

俺の作業中に横顔を見てくる百城さんが気になって仕方がない。

「あの、何か俺の頬についてますか？」

「ススがちよつと付いてるよ？」

そりゃありがとう。

「百城さん、また離れててください。危ないものを弄る作業がありますので」

「危ないものって？」

「園芸用の回転スプリンクラーでガソリンを撒いているところに、火をつけるんです」

「わぁ、そりゃ危ないやつだ」

だから離れてほしいんだよ。

園芸用スプリンクラーは地面に置いて、ホースから水を吸い上げて、周囲にばーつと撒くタイプのスプリンクラーだ。

コイツにガソリンをぶつこむのは、封じられた禁忌の技である。

かつてカメラ3 邪神覚醒(1999)必殺のプラズマ火球すら邪神にコピーされ、勝機も腕も失ったカメラ。だが子供を守るべく、カメラが切断された腕の断面で邪神のプ

ラズマ火球を受け止めると、その火球はガメラの『渦巻く炎の燃える腕』へと変わり――の撮影で、監督から渦巻く炎が要求された。

そこで用いられたのが、園芸用スプリングラーにガソリンを放出させ、そこに火をつけるっていうやべーやり方だ。

それからもう20年。

スプリングラーの種類も随分増えた。

今の時代の園芸用スプリングラーを、俺のアイデアで改造してガソリンぶっ込んで、火をつければ火が踊る。

ガメラの腕の渦巻く炎っていうより、火の妖精が空中で踊ってる感じになった。

うん。

美しいけど、本当に危ねえなこれ。

「へえ……英二君、センス伸びた？」

「どうでしょうか。たまたま百城さんの好みにあつたものを作れただけかもしれないし」

「ふーん」

色々試してみよう。

これまで、仕事に備えての勉強、仕事で詰まった時のインプットが中心だった。

だがこれからは、そういうのとは関係なく技術の追求もしてみよう。必要だからそうする、とかじゃねえ。

したいからするんだ。

俺は多分まだ、自分の中にどのくらいの才能があるかも分かってねえんだから。

考え、追求してみるんだ。俺だけの技、俺だけの技術を。

「時間は忘れちゃ駄目だよ。私と君は今日現場入りなんだから」

「分かってます。百城さんを遅刻なんてさせませんよ」

「そっだよ。女の子の一人もエスコートできないって知られたら、笑われちゃうよ」

俺はどうかと思うぞ百城さん。

いくら久々にがつつり同じ仕事をするからって、仕事前に真っ先に俺のところに来るってのは。

今回、俺と百城さんが組む仕事の映画作品のあらすじはこうだ。

ある日、世界が壊れ始める。

空と街には怪獣が現れ、軍隊が戦うが、怪獣の出現は止むことはない。

平凡な少女の日常は、どこか壊れて、変わりながら続いていく。

朝起きて、学校に行つて、友達と話して、家に帰る。変わらない繰り返し。
帰つてこなくなる家族。

日付が進むたび減っていくクラスメイト。

毎日少しずつ壊れ、荒んでいく街。

物語の主役になれなかった、街の片隅の少女の日常の物語。

とまあこんな感じで、怪獣大暴れを全て背景に押しやつて、事態を何も解決できねえ、世界の動乱に振り回されるだけの主人公に百城さんをキャストイングした、そんな作品だ。

動乱の世界。

何か凄いことが起こってるらしいが、主人公には分からない。

話の舞台のスケールはでけえのに、話の規模は主人公と周り数人とかなり小さい。

こういうのをセカイ系とか言うらしいな。

怪獣の足元でうろちよろしてモブが主人公って意味じゃ、アキラ君の家でやらせてもらった『巨影都市』ってゲームのアレに近いな、多分。

俺は美術監督として、百城さんは主演女優と呼ばれた。

そこが決まったのが同日で、だから俺達は同日現場入りになつたらしい。

予算はやや少なめ。

となると、俺もあんま贅沢はできねえな。

俺の技術はより良いもんを作るための技術を使うより、できる限り安く良いもんを作る技術でやりくりした方が良さそうだ。

「俺はまず挨拶回りからかな……」

百城さんと一旦別れて、現場の撮影スタジオを見て回る。

割と悪くねえな。

怪獣メインの怪獣映画だと、俺みたいなのは四ヶ月くらいは拘束される。

が、この映画は怪獣がメインじゃねえ。

メインはあくまで主役を演じる百城さんだ。俺の仕事は割と減る。

意外と早く終わるかもな、俺の仕事。

つーか、多分この予算でこの規模の作品を撮ろうとすると、百城さんを始めとしたキャストの長期拘束と、スタッフの長期維持で予算が全部吹っ飛びかねえ。

当たり前の話だが、日当100万円の給料で仕事を一日で終わらせる奴と、日当50万円の給料で仕事を三日で終わらせる奴なら、前者の方が安くあがる。

百城さんのギャラは人気女優相応に高い。

が、NGもリメイクも出さねえ百城さんの撮影はあつという間に終わる。

なので期間あたりのギャラは高いが、映画一作あたりのギャラは他の女優より安く済

むとか、そういう異常事態が度々起こる。

俺も仕事は比較的速いからな。

期間あたりのギャラを高く要求しても、映画一作あたりのギャラがそんなに高くなかったりする場合もある。

まあ状況によるが。

映画一本あたりで固定額の報酬出して、どんなに撮影が長引いても同じ額のギャラしか払わないって会社もあるっちゃある。

「おはようございます」

歩いていた俺を、朝の挨拶が呼び止めた。

「あ、和歌月さん。おはようございます。また会いましたね」

「今度もよろしくお願いします。前はTVで、今回は映画ですが」

わかつきせん
和歌月千さん。

剣崎アクションクラブ所属の人だ。

背の高い、長い髪を後ろで束ねた、体格も結構良い女性である。

俺より20cmくらい背が高い……なんなんだお前は……なんなんだ……？

アクションクラブの人は、特撮畑の俺と一緒に仕事することが多い。

スーツの中に入るスーツアクターも、危険な撮影のスタントマンも、アクションクラ

ブの人を使うことが多いからだ。

この人もまた、西映の仕事やアクションショー関連で俺と面識があった。なるほど、特撮絡みの仕事ならこの人がここにいてもおかしくねえ。

和歌月さんは俺の顔を見て何故かほっとして、膝を折って、不安そうに俺の耳元でひそひそ話を開始した。

クソが俺の身長に合わせやがって。

その優しい心遣いが俺を痛めつけやがる……！

「その、この映画、大丈夫なんでしょうか」

「和歌月さんは監督の前歴が心配ですか？」

「いつも予告が一番面白って評判の監督でしょう。」

面白い要素を思いついても、いつも作品に活かしきれてない。

ついたあだ名が興行収入ボンバーマンですよ。大丈夫なんですか」

「爆死作品だけ作ってるわけじゃないですから……今回はスポンサーがぎっちり監査してますし」

成功作品もいくつかはあるんだぞあの監督。

……まあ、出演者からすりや、不安になんのも分かるわ。

かくいう俺もヤバそうなら手綱を取れとスターズとスポンサーの両方から頼まれて

いる。

ヤベえな！

「和歌月さん、機材ってどこに揃えてますか？」

「こつちです。案内します」

嫌な予感がしてきたな。

お、カメラが……んん？

「DSMC2、MONSTRO……？」

「どれがどうかしたんですか？」

「和歌月さん。700万くらいですね、このカメラ」

「え？ ……え？」

レッド・デジタル・シネマカメラ・カンパニーって会社がある。

売りは『この会社のカメラと同じ画質を得ることは不可能』と言われた、クツソ高い価格と、その価格に不対応なほどに超高性能なカメラの提供だった。

例えばスーパー戦隊は、2017年の宇宙戦隊キュウレンジャーから8K Heliumセンサー付きのRED EPIC-Wを導入した。これがオプション抜きで350万くらいだな。

これに合わせて棘谷もウルトラマンジード（2017）にコイツを導入。

あのふわつとしてる4Kテレビとかいう概念に対応した、高解像度の撮影を可能とした。

これはそのシリーズの中でもとびきり高い類の機材だ。
レンタルか？

……いや、レンタルのタグねえな。

どつかの撮影所から借りてきたか？ そうだと言ってくれ。その方が安心できる。
大丈夫なのかこれ？

撮影機材に気合い入れるのは確かに大切なことだ。
ただ、な。

力を入れるのに相応な順番みたいなのがあって、正しく重要なもんから順番に力入れると安心できるんだが、その順番が頓珍漢だと見てて不安がな……大丈夫か……？

「大丈夫そうですか？ 朝風さん本当に」

「……頑張りましょう、和歌月さん」

「あ、曖昧な返答……！」

実はスーツアクターさんも有名所が揃っていて共演が不安で……

弓部さんと、梶河さんと、岡口さんが既に打ち合わせを始めてます」

ルパンカイザー快盗戦隊ルパンレンジャーVS警察戦隊パトレンジャーの主人公機

の片割れ。スポンサーの加護という最強の力を持つ。のスーツアクター、ギャラクトロ
ンウルトラマンオーブ（2016）の恐るべき文明リセットロボ。子供達が見ている番
組で平然とウルトラマンの腹を貫く。のスーツアクター、エボルト仮面ライダービルド
（2017）の最悪のラスボス。ナメプを誘わないと地球が消されるレベルに強い。の
スーツアクターとかオフアー出した人の趣味が分かるな。

「俺があの人達と和歌月さんの間に立ちますから。」

顔見知りではありませんからね。大丈夫です、撮影はまだここからですよ」

「なんでまだ撮影が始まってもいないのに窮地みたいな台詞吐いてるんですか朝風さ
ん」

うるせえ。

しかしアクターだけ一流が揃ってんのか、それはまた悩ましいな。

和歌月さんの不安も分かる。

若手とベテランの間に軋轢が生まれないように気を使つとこう。

しかしなんだ……機材だけじゃなく人集めの部分にもアンバランスなところが見え
てきたな……頑張れよ監督。頑張るのはプロデューサーとか制作進行とかでもいいぞ。

「どう、英二君。見て回った感想は」

「百城さん」

「これから監督に挨拶しに行くんだけどさ、英二君はどう思った？」

「百城さんが出演するほどの作品には、仕上がらないかもしれないけどね」

「そうかもね。君の腕がもつたいい作品になるかもしれない」

百城さんから見てもそうか。

俺は製作者の目で現場や機材を見る。

百城さんは役者の目で人や雰囲気を見る。

出た結論が同じなら、こいつは結構厳しい仕事になりそうだ。

何せ、観客からすりゃそんな事情は関係ねえ。

クソ映画はクソ映画だ。

出演した百城さんの評価は、急落まではしないだろうが、相応に落ちるだろう。

そうなってほしくないなら、俺も頑張らなきゃならねえ。

映画つてのは結果論の世界だ。

結果を出す以外に、何かできることはねえ。

「ただ、それはちよつともつたいたいと思っただよね」

む。今少し、百城さんのやる気が見えたな。

「だから私、君の『眼』が欲しいんだ」

「抱えてる仕事があるので、仕事がある内はちよつとあげられませんが……まあ片方

なら」

「違う違う、そうじゃなくて」

にっこりと、天使さんは微笑んだ。

「撮影が本格的に始まる前に、私とデートしない？」

「へっ」

なんだその目は和歌月。

何故そんな目でこっちを見る。

驚くな。驚く顔をしたいののはこっちだ！

デート・ア・ライ

和歌月さんが所属している剣崎アクションクラブアクション監督、アクション俳優、俳優の育成クラブ。拠点は東京、大阪、香港。空手、中国拳法、柔道、合気道、剣道、居合道、古武術などを基本に教えている。は、相当なものだ。

アクションに関しては日本で五指に入る、と思う。

有名所だと、仮面ライダー、戦隊、ウルトラマンのどれでも活躍し、俺達にレーザブレード復活という歴史学者みたいな仕事をくれた坂木浩一監督がこの出身だ。

アクション俳優の王道出世ルートは、アクションで成功し、その後アクション監督などの監督になっていくルート……なので、和歌月さんもいつか監督になるかもしれねえな。

そうなった時、俺がその仕事を手伝えたら、楽しそうだ。

何年経つても助け合える関係ってのには憧れる。

助け合えるくらい親しさは、いつまでも保っていてえもんだな。

さて。

アクションクラブってのは、そもそもなんだ？

この辺がちよつと複雑になる。

まず、俺が親父の仕事についていって見た、巖爺ちゃんの歌舞伎。

この『歌舞伎』は、一説には、歌い舞う特徴的で画期的な芸、という意味合いが当時あつたんじやねえか、と言われることもある。

要するに、喉と体の動きで魅せる、っていう演劇の革命だったわけだ。

後に新国劇1917年設立。『歌舞伎よりもよりリアルな立ち回り』を目指した、男性人気が非常に高かった大人気劇団。剣を使い最大限に活かす演劇という新ジャンルを開発した。男が剣アクション好きなのは当たり前だろ！が、剣劇主に刀を使う劇。剣ではなく刀。当時歌舞伎とは違うスピード感のあるアクションを演劇の世界に持ち込み、観客を大興奮の渦へと巻き込んだ革命児。というジャンルを確立する。

新国劇が剣劇というジャンルを作ったのは、「様式美ばつかで歌舞伎にはリアルなアクションが全然ねーじゃん！」という声が大きくなったからだ。

この剣劇というジャンルが、小内剣友会創設者が『娯楽の王様が映画だった時代が終わり、テレビの時代が来る』と予見していたことで有名。って集団を作る。

小内剣友会は時代劇とか、色んな撮影にアクション担当で協力したそう。

そして剣劇に見放された歌舞伎自体は、ゴジラを走りとして数々の特撮に影響を与え、『変身直後の名乗り』や『決めポーズを取って決め台詞』などを確立させた。

特撮に継承されたこれをなんと言うか？

そう、様式美だ。

そして様式美からの脱却を目指した剣劇ジャンルで、「小内剣友会は若い奴に仕事回さねえで仕事を独占してやがる！ 独立だ！」という声が上がった。

これで独立したのが、『小野剣友会』剣劇が源流のため、この剣友会が演じた初期の初代仮面ライダーや怪人達は、よく剣を使ったアクションをしていた。である。そう。

仮面ライダーの正義と悪のスーツアクターを担当し、日本全土にその名を轟かせた伝説の小野剣友会だ。

こう見るとこう、なんだ。

歴史つてのは皮肉だよな。

小野剣友会は仮面ライダーに戦隊にと、幅広く活躍した。つまりだ。

最終的に、歌舞伎の様式美を脱却しようとした剣劇集団と、歌舞伎の様式美を真似した特撮が混ざったことで、『歌舞伎なのに歌舞伎じゃない』もんが再生したわけだ。

歴史の中でバラバラになってもまた一つに集まって再生するとか歌舞伎くん、お前再生能力持ちの怪獣か何かかよ……？

小野剣友会は天下を取った。

初代仮面ライダーの視聴率は20パーセントを超え、子供達が好きなものと言えば仮面ライダーというほどで、小野剣友会もその人気の恩恵を受けていた。

間違いない天下を取った。

かに、見えた。

今のアクションの世界で、かつて想像されていた”成長していった小野剣友会”のそれに近い隆盛っぷりを見せてるのは、JAEジャパンアクションエンタープライズだろうな。

JAEは海外の影響を受け、世界に通用するアクションスターを育成するため、日本で設立されたアクションクラブだ旧名がジャパン・アクション・クラブ。昔の特撮のスタツフロールにはこっちの名前で載っていることも。

歌舞伎から発展した日本アクション。

海外の技を発展した日本アクション。

この他にも大河ドラマアクションメインの若駒プロダクション剣アクションならともかく、刀のアクションならこちらの界限の方が上手い。そもそも時代劇の『馬から転げ落ちる演技』とか普通の演劇界限じゃ発達しねー技術に決まってんだろ！の技術などが混ざり、こいつが今のアクション界を作る『多様性』ってやつ元になったもんだ。

仮面ライダーと怪人のスーツの中の人も、小野剣友会の役目であつたはずが徐々に、JAEの人間がする仕事へと変わっていった。

”これを着て演技が出来るのは岡末次郎だけ、他の者では首が折れる”と言われた100kgのシャンゼリオンスーツを着てアクションし、とてつもない動きのキレを魅せる・岡末次郎模倣とアクション両方において『達人』と呼ばれるスーツアクター界の怪物。

仮面ライダーアギト以降、響鬼を除いた全ての仮面ライダーシリーズにおいて、全ての仮面ライダー中の人を実に18年間演じてきたスーツアクター・低岩成二『ミスター平成仮面ライダー』の異名を持つ。台詞も表情も許されないスーツの演技で、何十人とこのヒーローを全て演じ分ける怪物。

この二人は伝説の男達であり、役者能力がもう怖えレベルだ。

変身前の役者さんを観察し、スーツを着て動きを模倣し、変身前と変身後を同一人物に見せる技を二人共体得しているあたり、バトルバージョンのアラヤさんにすら見える。

この二人は共にJAE所属だが、この二人以外にも目眩がするようなどんでもねえ人達がゴロゴロしてるのがJAEだ。

数が多い。

有能が多い。

よって最終的に出世する奴の数も多い。

まあ、なんだ。

ざっくり言うとう。

今回俺が請け負った映画の監督がJAE出身、アクション監督が現役JAE、制作進行がJAEから別事務所に移った奴、特撮監督も一時期JAE担当のスーツや小道具を修復してた人だった。

大なり小なり全部JAE絡みの奴らじゃねえか！

身内臭い。

馴れ合い感強い。

”先輩には逆らえませんよ”風味がハンパない。

監督がヤバいことやらかしそうになっても耳に痛いこと言つて止めそうな人がいねえ。

今日が現場入り当日つてことで、初日挨拶も兼ねて打ち合わせに参加したが、美術監督としてあんま多く言えたととは思えん結果になった。

打ち合わせを終えて撮影所を出ると、和歌月さんを見つけける。

なんとなく、彼女が最初に俺の顔を見てホツとしたような顔をした理由が分かった気

がした。

「どうでしたか？」

「……まだなんとも言えないですね」

「そうですね……」

酷すぎてなんとも言えない。言えることがない。

身内で固める撮影チームとか割と珍しくねえけどさ。

駄目だ、肌に合わねえ。

俺とめっちゃ相性が悪いタイプのオッサン達だった。

俺が合わせるのは良いが、俺があつちに合わせてる限り永遠に改善しねえタイプの人

らだ。

俺はなあ。

仕事面で他人の仕事にあんま駄目出しできねえタイプなんだよな。

無理矢理他人の仕事のやり方を変えさせるのがどうにも苦手だ。

他人の都合で自分の仕事の形を変えんのは得意なんだが、どうにもな。

黒さん。

黒さんが居りゃなあ。

あの人、自分の都合で他人を蹴飛ばすの躊躇わないだろ。

ああいう人がいるといいんだよなあ。

「お前の仕事と能力は文句なしにクソだ！」って言える人がいると、撮影の流れに出来た淀みなんて全部吹っ飛ばす。

「朝風さんが周りと連携できれば、徐々に方向修正できるんじゃないですか？」

「どうにも相性が悪いみたいです。」

監督のイメージが伝わってこない、と言いますか……

あの監督のイメージの伝え方と相性が悪いみたいで、俺の方が合わせられないんです」

「監督のたとえ話がヘタクソと言えば良いのでは？ ふわつとしてますからね、言い方」

「やめましょうよ和歌月さん」

なんだかんだ樋回真嗣監督代表作：平成ガメラ、シン・ゴジラ、ふしぎの海のナディア、精霊の守り人 etc とかは俺みたいなポジションから見ると良い監督なんだよな。

アニメの打ち合わせだと「特撮のあのアクションみたいなやりたい」と言つて、特撮の打ち合わせだと「アニメのあれみたいなの演出してください」とか言うから。

樋回監督のやり方が肌に合わねえって人もいるが、少なくともこの現場よりは良い。

なんつーんだろうな。

今回の監督、言い方がふわつとしてるだけじゃなくて、頭の中のイメージも多分相当

ふわつとしてるんだよな。

だから監督の脳内イメージをできる限り正確に把握しようとして、できる限り正確に再現しようとする俺と相性が悪い……んだと思う。

この監督に合うのは多分、適当な監督のイメージを適当に形にする適当な人だ。

その上で、百城千世子を客寄せパンダにして、一定の興行収入を得るタイプの人だ。だから俺とノリが合わねえんだ、多分。

悪いな和歌月さん。

あんまあんたの期待に応えられないかもだ。

「今日はまだ初日ですし、明日はあの百城千世子とデートでしょう。頑張ってください」
「ん、ッ」

こ、こいつ！

人が真面目なこと考えてる前でそんなこと考えてやがったのか！

「最初はビツクリしてたのに、今ではすっかり楽しんでますね、和歌月さん」

「仕事が完璧な人が、仕事以外でオタオタしているのは見てて楽しいかもしれません」

大御所のスーツアクターとの間に入るのやめてやろうかこんにやろう。

……んなことしたら女性アクション俳優が足りなくなつて結局俺の首が締まるか。

絶対やったらいけねえやつだ。

翌日の日曜日。俺は街中の噴水前で待ち合わせしていた。

そわそわする。

そわそわする。

そういうアレじゃないと分かってるんだが。

とりあえず和田倉噴水公園皇居外苑の綺麗な噴水がある場所。高さ8・5mの大噴水と小噴水の組み合わせは芸術的。そのため特撮の撮影にも使われる。特撮好き野郎に自覚はないが、デートスポットとしても非常に高い人気を誇る。で待ち合わせということにした。

ここは結構俺の好きな風景の場所である。

クソ、自分の好きなものの基準でしか色々判断できねえ俺が情けねえ。

「おはよう、英二君」

来た！

「おはようございます、百城さん」

まあ分かってたけど、帽子にマスクにサングラスとか完全に不審者だな。

まごうことなく不審者だ。

しょうがないけどな、テレビに露出してる百城さんは色んな服装で色んな人に見られ、色んな角度から色んな人に見られてる。

つまりそいつは、ちよつとした変装をしたくらいじゃバレるってことだ。

気持ち悪いなーとは思うが、重度のファンには自分が好きな芸能人は体のラインで判別することも可能なんだとか。こえー。

「それで、本当の目的はなんですか？」

「デートが目的だよ？」

「それで、本当の目的はなんですか？」

「えー、エスコートしてくれないのかな？」

「それで、本当の目的はなんですか？」

「……うーん。」

これは見抜いてたとかじゃなくて、デートに本当の目的があつてほしいやつ」

そうだよ。だから本当の目的をさつきと言え。

さしてプライベートな付き合いがあるでもない俺にあんたがそんなことする理由は

ねえ。

そんな好感抱かれるようなことした覚えもねえ。

オラオラさっさと本当の目的を言え！ 言ってくれ！

「私、君の眼が欲しいんだ」

「と、言いますと？」

「君の視点が欲しい。ちょっとね、怪獣を見上げる視点っていうのもピンと来なくて」

「ああ、なるほど。俺の役職の『視点』が欲しいってことですね」

そうか、そういうことか。

百城さんは表現力の鬼だ。

役を掘り下げて演じ分けることはない。演じ分ける必要がない。

表現多様な井村拓哉なんで龍が如くの新作の主人公やってるんですか？ みたいなも
んと言うのが正しいだろうか。あれも「全部イムタク」とか言われるし。

役を掘り下げて演じ分け、全く違う演技を魅せる役者は、漫画家で例えるならギャグ
漫画とシリアス漫画と恋愛漫画を別連載するタイプの漫画家。

百城さんのように役の掘り下げと演じ分けがあまり必要ない役者は、漫画家で例える
ならギャグもシリアスも恋愛も一つの漫画でやる漫画家だ。

例えば、漫画原作のドラマの主演を、この二種の俳優が演じたとする。

前者の場合は「○○ちゃん（ヒロインの名前）かわいい、○○ちゃんかわいいそう、○○ちゃん頑張れー！」と感想が出る。

百城さんの場合は「千世子ちゃんかわいい！ 千世子ちゃんかわいいそう！ 千世子ちゃん頑張れー！」と感想が出る。

つまり、『役の魅力』以上に『百城千世子の魅力』が出て、これ単品でしつかりと商売になる売り物になっちまうのだ。

黒さんとかこういうの嫌いだよなあ、多分。

要するに、百城さんの演技には意識的な技術が必須になる。

ビルの合間に怪獣が見えるシーンだって、首の角度をどのくらい上に傾けるのかで、そこに怪獣がいると思わせる『リアリティ』が段違いに変わる。

空を見上げている百城さんの顔のアップで「あ、何か大きなものを見上げてるんだな」と観客が思えないようじゃ、その映画は間違いなく失敗作だ。

百城さんはそういうわけで、特撮の撮影に詳しい俺の『眼』を盗もうとしている。よかったー。

こりゃ仕事だ、デートじゃねえわ。

仕事なら安心できる。

「英二君の商売道具を盗むみたいで、悪いけど……」

「構いませんよ。どんどん盗んでください。それで作品が良くなるならいいことです」
「ありがとうね」

百城千世子、『NGを出さずリメイクもない』と語られる人。

本撮影で全く失敗しない名演者の能力の裏には、こういう細かな研鑽があったんだな。

けど、それは当たり前か。

白鳥は優雅に見えても水面下で足を忙しく動かしてるもんだ。

綺麗に、苦労知らずに見えても、その下地には圧倒的な努力量がある。

この人に匹敵するような演技を、専門の下積み無しでやれるような人間がいたなら、俺は間違いなく自分の眼の方を疑う。

「いくつか仕事道具は持ち歩いてますから、このレーザーポインターを使いますね」

俺はまず、ビルを指差した。

昼間の街中だ、レーザーポインターはちらつと使うだけにしておこう。注目を集める。

「現在の怪獣描写文法だと、設定上の大きさは50mです。

ミニチュアの作成時、通常は人間の大きさを1.8mと仮定します。

すると27分の1か28分の1となりますが……これでミニチュアを作るとややこ

しくなります」

「なんでかな？」

「ミニチュアは、大きいミニチュアと小さなミニチュアを作ることがあるからです。

一例を挙げます。

まず、本物の街で撮影。

この街を小さくして作った『大きいミニチュア』で、怪獣が暴れるのを撮影。

そのミニチュアを更に小さくした『小さいミニチュア』を爆破して撮影。

これで、街の人間の撮影、怪獣が暴れる撮影、街が吹っ飛び消滅するシーンが撮影できます」

「なるほど」

「こういうのを作る時、 4×7 の $1/28$ や、 3×9 の $1/27$ のミニチュアはちよつとややこしいんです。

なので $2 \times 2 \times 2 \times 3$ の 24 を使うことが多いです。 24 分の 1 ということですね。

24 分の 1 のサイズの、怪獣よりは大きくないビルを作り、街に並べることになりません」

ウルトラマンティガ THE FINAL ODYSSEY 2000年3月公開、劇場版ウルトラマンティガ。スタッフの『主人公がヒロインと結ばれる結婚式に元カノが

乗り込んでくることって恐怖じゃないですか』というコメントと、それをやる采配が恐ろしい。でも確か、ウルトラマンティガの身長が53mだつていうのに、設計書でウルトラマンティガの身長を40m扱いにしていたはずだ。

ミニチュアも全部24分の1で設計されていたはず。

打ち合わせの時に見た書類を見る限り、俺がこれから設計・造形する各種あれこれも、24分の1設計になるだろう。

「だからあのビルの、あの辺りに怪獣の頭が来ると思います」

レーザーポインターをチカツと光らせ、空中に赤い線を引き、撮影で怪獣の頭が来るであろう場所の高さを指し示した。

「あの高さかあ」

百城さんは、ビルの合間を見上げる。

そこに大きな何かがあるかのように。

身をこわばらせ、僅かに足を引き、後退りする。

悲鳴を上げそうな演技を一瞬入れ、悲鳴を押し殺して怪獣に見つかからないようにする普通の女の子を演じる。

その一瞬、百城さんを見ていただけの俺にも、”そこに怪獣がいるかもしれない”と、一瞬思ってしまった。

「どうかな？ 怪獣がいそうに見えた？」

「はい、バッチリです」

パントマイム海外では単純に『マイム』と言う。海外での『パントマイム』は「時代遅れだから」と国際マイムフェスティバルからカテゴリ除外されてしまった、一部の古い演技体系のことを指す。

そこに無いものを、あるように魅せる肉体の芸術。

百城さんの表現力は、そこにないものを視聴者に確かに見せるものだった。

マイムは、技術だ。

徹底して自分の肉体を研究し、関節を把握し、普段自分がコップを持ったリドアノブを握ったりする一動作で、どんな筋肉や関節を使っているかを完全に把握しなきゃならねえ。

感覚でやると絶対に失敗する。

普段人間が感覚だけでやっている所作の一つ一つですら、頭で考えて完全再現するとう、基本技のようでもとても難しい技なのだ。

感覚や手癖だけで演じてる奴には、絶対にこれはできない。

コップを持つてない手をコップを持つているかのように見せるマイムなんてのは、理性による身体制御無しには成り立たねえからだ。

もしも、もしもだ。

マイムの訓練もしつかり受けずに、そこに無いはずのものを幻視させるほど、精巧なマイムを見せられる役者がいたのなら。

俺はそいつは、もう人間じゃねえと思う。

「こう、かな」

百城さんはビルを見上げる自分をスマホで自撮りして、見上げている自分の首と顎に手で触れていく。

写真で記録に残し、手で首の角度を覚えてるんだろう。

首の感覚だけで覚えても、感覚だけでやるとズレが出る。それがパントマイムだ。

今後撮影中に自分の演技にズレが出ないよう、適宜修正していくつもりなんだろうな。

プロやべえ。

「歩こっか。デートだもんね」

「仕事の準備ですよ」

街を百城さんと並んで歩く。

木々が風に揺れていた。

大スターである彼女と並んでいても、俺がある程度平常心を保っているのは、彼女が

帽子にマスクにサングラスと、顔の大部分を隠してゐるからだろうな。

でなきや、俺はテンパるし、日曜の街は大騒ぎになる。

スターというものは、その名の通り星だ。

大衆が地から空へと手を伸ばしても、星へは届かない。

星は、人間じゃない。

有名人は普通の人生を送れなくなる。

百城さんのように、素顔で街を歩く自由すらなくなり、普通の人と同じ人生を送る権利すら失つちまう。

面白がつてプライベートを暴かれるだけならまだしも、最悪心無い批判に叩かれ、引退に追い込まれ、引退後も晒しものにされ続けることすらある。

そいつはつまり、売れた俳優の人生は『自分のもの』ではなくなり、『大衆のもの』に成り果てるってことを意味する。

『俳優は大衆のために在れ』。それがスターズの信条だ。

それは生贄を強いるための言葉じゃねえ。

恋愛感情に素直になつちまうとか、大衆を蔑ろにして“自分のため”に生きようとすると、大衆は簡単に敵になるっていう警告だ。

そうなりや、本当の意味で人生が台無しになるっていう警告だ。

俳優は常にこの信条を胸に秘めておけば、間違えることはねえ。

大衆のために在るってことは、大衆を敵に回さねえってことなんだからな。

百城さんとはつづくの昔に、人生の多く、日常のほとんどを、大衆に捧げている。

自由がない彼女を、日曜日まで仕事の質の向上に費やしてる彼女を見ると、浮ついた気持ちでいた俺が恥ずかしくなる。

平常心を保たねえとな。

俺にできることは、彼女が俺から盗めるものを、彼女に分かりやすい形で提供することだ。

「私が英二君って呼ぶのはいいけど、英二君が私の名前呼んだらバレそうだよね」

「あ、確かにそうですね」

そりやそうか。モモシロもチョコも響きだけでファンが反応してもおかしくねえわ。

「敬語を止めるとまでは言わないから、せめて友達みたいな感じに呼んでくれない?」

「え」

「私のために、ね」

え………?

「も、モモさん」

「モモちゃんにしない?」

「も、モモちゃん？」

「そう、そんな感じで。いい顔してるよ英二君」

……。やつぱ平常心は無理だな！

今までに見たことねえくらい楽しい顔してるわ。

やつぱこいつ他人で遊ぶのが好きな奴だ！

「晴れてて良かったね。いい日曜日だ」

「良い青空ですね」

「何かを見て、何か思ったら全部教えて。」

英二君が何考えてるか全部教えてくれないと、英二君の眼は手に入らないから」

「ええと、そうですね……青空って、合成には鬼門なんですよ。日差しが強い時には特に」

「なんで？」

「日光があるからです。」

東に太陽があるのに、合成した怪獣の西側が照らされてたら台無しです。

CGもまた、太陽の位置と照らされている部分を計算しないとイケません。

俺も小物を合成する時には、撮影時に小さなライトを当てて太陽に沿わせたりします」

「マメな人じゃないと苦労しそうだね。その調子で思ったこと全部言ってくればよいよ」

全部か。うっかり変なこと言わないようにしないとな。

「この歩道橋ですけど、ちよつと古めかしい物なら紙でも作れるんですよ。足元に気をつけて」

「歩道橋じゃ流石に転ばないよ。古めかしい物に限定するのは何かあるの?」

「古い方が誤魔化しが利くんです。

汚したり、サビの塗装したりすると、紙っぽさが消えて本物っぽく見えますから」

「紙でも色々作れるんだ、英二君」

歩道橋を二人で上がる。

歩道橋の下には、六車線のでっかい道路が見える。

少し離れたところには、六車線を挟むようにして立つビルが見える。

あのビルの間には、六車線の上に立つ怪獣とかがいたら楽しそうだ。

「歩道橋の上の百城さんが、あの辺りに立っている怪獣を見上げたら面白そうですね」

「あの辺りに? じゃあ、怪獣の頭の高さはあのくらい?」

「あ、注意してください。

今はももし……モモちゃんが歩道橋の高さの分、高さの下駄を履いてる状態です。

歩道橋の高さは5 mくらいはあります。

ミニチュア作成時の怪獣縮尺の設定身長40 mの、1/8です。

路面から見上げる時とは、微妙な差が生じてしまうかもしれません」

「人間の身長で言えば22cmくらいの差かな？ それは大きいよね」

百城さんが遠くの想像の怪獣を見上げ、それが歩道橋に近寄ってくるのを想像しながら、首の角度を微調整し、首や顎に手を触れて角度を覚えている。

パントマイム技術が高い彼女の動きは、本当に自然だ。

周りに人がいる時にこれをやったら、つられてビルの合間にいる何かを見ようとしてしまう人も出てくるだろうな。

「怪獣は大きいので、歩道橋が揺れたりすることもありませんね。

そういう時は手すりにしがみつく演技をしたりします。

歩道橋が揺れる撮影自体は、カメラを少し揺らしながら撮影するだけでいいですし」

「ふーん……こんな風に？」

百城さんが、揺れていない歩道橋が揺れているかのように演技して、手すりにしがみつくような演技を見せる。

かわいいな。

かわいいしリアルだ。

「そうですね、そんな感じですよ。」

歩道橋の震えは撮影側が演出するので、体を震わせる必要はないと思います。

そうになると……必要な演技は、震える歩道橋で怪獣を見上げながらの、怯える表情でしようか」

「だね」

百城さんの演技に表情が伴った。

……リアルだな。

これでカメラを揺らして、ゴジラの鳴き声でも合成すりゃ、それだけで『ゴジラが歩いているすぐそばの歩道橋』のシーンに使いそうだな。

『百城千世子』が既に単独の役として完成してんのは、本当に強い。

「仮にそう撮影するとしたら、カメラは中央分離帯あたりに置くことになりそうですね」
俺は歩道橋の下の、右の三車線と左の三車線の間にある、草がもっさり生えた部分を指差した。

「もしろさ……モモちゃんは、歩道橋で撮影したこともあると思います。」

近くのビルの窓、斜め上から歩道橋の上のモモちゃんや共演者を映すやり方などで

「うん、それは何度かやったかな」

「でも怪獣とモモちゃんを同時に移す場合は、斜め下からカメラで映します。

そのために下の道路の間の、中央分離帯にカメラを置くと思うんです。その、スカートは……」

「えっち」

「……」

「このやろう。」

「と、とにかく。」

斜め下のカメラから映す時の注意点は、最近の歩道橋の幅もあります。

最近の歩道橋は幅が3mくらいあるということもありますから、考えて使う必要があります」

「怪獣側かカメラ側か、つてことかな？」

「うわっ、凄え。」

説明の途中で気付いたか。

「自分がカメラにどう映るか」の把握力にかけてはマジでバケモノだな。

俺みたいな事前知識もねえのに。

「その通りです。」

東西に伸びる歩道橋を挟んで、北側に怪獣、南側にカメラがあるとします。

歩道橋の上のモモちゃんをアップで撮る場合。

モモちゃんは歩道橋北側ギリギリに寄って、カメラは南側ギリギリに寄ることになります」

歩道橋が3m幅なら、まあそうなる。

「ただし、北側の怪獣と歩道橋の上のモモちゃんを一緒にカメラで撮る場合。

モモちゃんが南側に寄っておく必要があります。

モモちゃんが北側に寄っていると、南斜め下のカメラからだと、歩道橋が邪魔になりますから」

「その場合は……うん。

私が歩道橋の北側に寄りながら、現れた怪獣を凝視。

怪獣を恐れるような演技をしながら、南側に後ずさる演技を入れれば大丈夫かな」

いきなり最適解だ、怖っ。……シビれるぜ。だからスクリーンのあなたは、美しいだよな。

「歩道橋は降りる時が一番転ぶので気を付けてください。

あ、歩道橋のセットですが、登りと降りを同じクオリティで作る必要はないです。

登りと降りの作りは基本同じで、アップでは片方しか映りませんからね。

だから登る時の階段を一つ作ったら、それを降りる時の階段にも流用できます」

「だから転ばないってば。

英二君も予算を計算して色々考えてたんだ？

あれはちよつと考えちゃうよね、出演者としては」

予算がなあ。

セツト作成を抑えて、撮影許可ももらった現実の橋を俺がちよちよいと加工して、それで撮影した方がいいかもしれん。

……ロケは関東だけで終わらせてくれるとありがたいがえんだがどうだろう。

県外ロケでゴリつと予算使う人多いんだよな。

「モモちゃん、ここにビルがあります」

「あるね」

「井下泰幸黒さんとの仕事時に、英二が家具作成で参考にした人。日本アカデミー賞の一つを受賞したほどのミニチュア職人。世界中が注目した日本のミニチュア技術を独自に編み出した天才の一人。さんという方は、歩幅でこの大きさを測りました」

ビルの横を歩いてみる。

距離を測るのは基本メジャーな俺は、歩幅だけじゃ大きさは分からん。

「そして測った大きさを反映し、1950年台から60年台に名作ミニチュアの数々を作り上げました」

「こんな風に？」

たん、と微笑んでいそうな百城さんが、楽しい音を響かせるステップで、ビルの横を歩く。

……ステップが軽やかだなあ。

しかも足元を見てると分かる。一步の歩幅が全部同じだ。

目を瞑ったままステージを歩いてても、ステージから落ちなさそうだとすら思える。

「縮尺を頭の中で再現できるというのは大きいです。

それは自然な演技と直結しますから。

” 怪獣の姿が合成される前の百城さんが見たセットの街”。

” 怪獣のスーツアクターさんが見ているミニチュアの街”。

この二つをシームレスに繋げて、頭の中で一つの画にイメージできると良いですよ」

「そっか、それが英二君の見てる景色なんだ」

その通り。

イメージは現実のように、頭の中に作る。

現実はいメージのように、セットに作る。

現実とイメージの境界を技術的に消失させ、滑らかに頭の中の映像を動かしていくのが基本だ。

「カフェでも入りましょうか」

「へー」

さて、屋内のことも何か説明しておくか。何かから解説していこうかな。

このカフェ内だと何か使えるものとかあるかね。

……ん？

あ。

今の「へー」は『君が女の子をさらっとカフェに誘えるとか全く思ってたよ』的な意味の「へー」か！

しまった。

百城さんに色々伝えることを考えすぎて、『女の子をカフェに誘うって恥ずかしくね？』っていう基本的な思考が浮かんでなかった！ バカか！

ほーら見ろ百城さんのこの顔を！

こいつは人心掌握に長けた天使が不器用な男を見て笑いをこらえきれない顔だ！
マスクとかでほとんど見えねえけど声で分かる！

「私が注文しておくから、また何か話を続けてくれると嬉しいな」

「ん、そうですね……あ、このテーブルの馬の木彫りの人形、バルサですね」

「バルサ？」

「ハリウッドの特撮で派手に壊れる建物に使われる、柔らかい木材ですよ。

柔らかいので加工しないと壊れやすいですが、本当に加工しやすいです。

日本でも昭和の頃、デザイン打ち合わせの時にバルサの彫刻モデルを使ったんです
よ」

「この馬が？ そうなんだ」

「そうですね、市販のバルサブロック千円分くらいあれば……」

モモちゃんの人形がたぶん40くらい作れると思います。安いですから」

「作りたいの？」

「作りませんよ。大女優に不快な気持ちをもたせられるわけにはいきませんから」

「ご注文のダーズリントンティーとケーキセットです。ごゆっくりどうぞ」

あざっす店員さん。

あーこのお茶俺好きだよ。

ケーキもハイセンス。

「例えばここで俺達が食事しているシーンで、怪獣が来るとします」

「うん」

「その場合、基本は平面です。上は見ません」

「天井があるからね」

「そうです。屋内では『怪獣を見上げられない』んです。見えるのは横のみ。

揺れる路面、揺れるお茶、道路を転がる何か、先だけ見える怪獣の足。

そうしたものが入り口向こうに見えて、登場人物が悲鳴を上げる。これが基本でしようね」

俺はテーブルの上のお茶を揺らす。

安上がりな撮影にするなら、テーブルとコップとお茶を用意して、テーブルの下にテーブルを殴るスタッフを一人入れて、俳優さんが揺れるテーブルを見て動揺する演技をすりゃいい。

それだけで、『怪獣が歩いて来てテーブルとお茶の水面が揺れる』ってシーンは十分に撮影可能だ。低予算ならそれはそれでやり方はある。

入り口から怪獣の足が見えるだけなら、安い外側だけのハリボテ足でもいいしな。「役に入りすぎると、つい見上げそうになると思いますますが気を付けてください。

屋内の人は、屋外の人と違って”大きなものがある”とは分かりません。

役者は怪獣だと分かっているても、登場人物が怪獣を知らない場合に齟齬が出ます。

左右に首を振って『なんだろう』と動くのはいいですが、上を見ようとすると矛盾するんです」

「うん、ありがとう」

「ただし、見上げさせたい監督さんというのがあります。

そういう場合、演出として床が揺れるのではなく、天井が揺れるように画を見せます。

その場合は、自然に客が上を見上げる構図になり、天井が壊れ怪獣が……

という風な流れになることもありますね。監督がどういう画を撮りたいかにもよりますが」

「監督の撮りたいものを考えると、主人公に極端に危機が迫る画は少ないんじゃないかな」

「……確かに」

監督についても意見を交わしつつ、ほどほどに時間を潰してカフェを出た。

お、鳥。

「いいですよねあの小鳥。機械で作ってみたいです。

俺、作れないわけじゃないんですけど、アニメトロニクスやる機会少ないんですよ。

動物人形を機械で作るやつですね。

前に作ったのは生々しい深海魚だったんですよ。

モーターで体が動いて、背びれあたりに透明な棒を付けてあるんです。

モーターはあくまで体の動きだけで、水中を動くのは俺が持った棒でなされるんです

ね」

「あはは、本当は泳いでないんだ」

「そうなんですよ。」

これをブルーバックでクロマキー合成ヒゲオヤジ監督との共演で英二が考えてたもの。青背景で撮り、青をなかつたことにする。青を消すので、水中の特撮映像に最適。

他で確保しておいた泡の合成素材と一緒に、暗いスタジオに合成すると……

なんと不思議。深海にも行ってないのに、深海の特撮映像の完成というわけです」

「深海魚って、あの寄生虫みたいな形の？」

「寄生虫基準で容姿を語るのどうかと思いますよ？」

虫博士かよ。

あ、あの木、形がいいな。今度ミニチュアの参考にしよう。

その向こうにはコンビニがある。

「あ。見てくださいモモちゃん、コンビニの看板ですよ」

「そうだね。どこでも見るやつだね」

「あれの基本フレームはアルミなんですよ。」

アルミを粉々にして塗装して、上に黄色を塗ると金属感のある金塗装になるんです。

ライジングアルティメットとか、金色の仮面ライダーはそれで塗装してるんですよ」

「英二君は金色はピンポイントにしか使わないよね？」

「俺の仕事よく見てますね。」

派手なので、確かに全体に派手に使うことは多くないです。

あ、あの看板の土台や四隅はアルミじゃないですよ。プラスチックです。

雨にも風にも強く、傷が多少ついても目立たず、壊れない。良いですよね」

「私は見ただけじゃ分かんないかなあ」

「看板に付いている色は着色ポリエチレンと、表面処理の塗料ですね。

傷に強くするためにASA樹脂も使われてるみたいです。

看板の大半は高密度ポリエチレンで出来ているみたいです」

「それだとうなるの？」

「この看板から仮面ライダーの装甲が作れます。

モモちゃんに似合う花の髪飾りだって作れますよ」

ポリエチレン万能説。

かつてポリエチレンで山森さんがぶっ壊した仮面ライダーの目も直したもんだ。

すつと、一瞬、百城さんの目が細まった気がした。

「私に髪飾り？ 遊びで適当なのを作ったりするだけの話じゃないの？」

「もし作るようになったら、その時はちゃんと本気でやりますよ。」

そうですね……青い花の髪飾りとか作るでしょうね。

作り物が美しくなかったら、誰も本物じゃない作り物なんて求めないじゃないですか」

「……」

「人が作り物を求めるのは、それが本物より良いからです。

俳優が演じる人物も、俺が作る物も、作り物の世界も、そういうものでしょう。

百城さんに何か作るとなったら、俺は現実の花のどれよりも美しいものを目指しますよ」

天然の何かより、人の手で仕上げられた何かの方が美しい。

だから俺に俳優って原石を磨いた宝石を指輪にしろって言ったんだろ、巖爺ちゃん。

「ま、それはまたの機会にね。

英二君が英二君のままなら、その内貰えそうだから今はいいや」

「俺が俺のまま？」

「今日、私はね」

並んで歩いていると、ふわりと百城さんが前に一步を踏み出す。

ふわりと髪が揺れる、軽やかな一步。

地面を歩いているのに、空を歩く天使のような一步だった。

「英二君は四六時中仕事のことや、綺麗なものを見てるんだなって、再確認できた」

百城さんは視線を走らせ、周囲に誰もいないことを確認して、マスク等を外して俺に微笑む。

今日初めてみた、とても綺麗な、百城千世子の微笑みだった。

「撮影で英二君にできないことは、私がすればいいとして」

？ 百城さん？

「俳優は大衆のために在れ。それがスターズ。」

じゃあ俳優じゃない君は、誰のために在るのかな」

聞くまでもねえだろ、決まってる。

「作品のため、それと俳優あなたのために在ります。一緒に同じゴールを目指す仲間ですから」

俺の返答は、正解だったのか、間違っていたのか。

陽気な笑顔が、百城さんの顔に浮かんだ。

……また内心が読み辛え。

「不安要素は多いけど、英二君がいるなら仕事はなんとかかなりそうな気がするかな」

「買い被りすぎですよ。不可能なことの方が多いいんですから」

「君を信じて裏切られたことなんて、一度もないじゃん」

「」

うっ。ストレートな信頼に、ちよつとぐらつときた。

俺はそういう風に見られてたのか。

でもそれで”なんとかなる”と思ひ込まれたら、百城さんがどつかで俺を信用したせいで痛い目を見るかもしれねえ。

「違いますよ。それは俺に能力があるとか、そういうことじゃないんです」

そう言われるのは嬉しいが、事実を言っておかねえと。

「あなた達の期待を裏切りたくない。

だから頑張ってるだけなんです。

俺が知ってる皆の輝きを、皆に知ってほしいだけなんです。それだけですよ」

俺は裏方だ。

裏方に期待なんてすんなよ。

成功して当たり前、失敗したら怒るくらいでいいんだ。

俺達の成功つてのは、あんた達の成功なんだから。

「だから君は、ずっと俳優わたくしの期待を裏切らないでいてくれるんじゃないかな」

そう言つて、百城さんは表情を変えながら、サングラスとマスクを付け直す。

最後の笑顔は、マスクとサングラスに隠されて、よく見えなかった。

一難去ってまた一難

各仕事を分担する特撮分野では、能力こそが重要だ。
いや、違うな。

これは正しくない。

『技術と経験こそが』重要だ。

未経験者をいきなり撮影にぶっこんで、経験を撮影中に積ませて、撮影中に一人前まで成長させるっていうのは日曜朝番組の特権だ。

映画は撮影スケジュールがギリギリで、余裕がねえ。
だからできるやつにやらせる。

この撮影場所における”できるやつ”は、俺だった。クソア！
いい人材はいるっちゃいる。

映像編集チームや脚本の人は言うことないくらいで、スーツアクターといい主演女優・百城千世子といい、演者も粒揃いだ。

粒揃い。

……この単語を悪い意味で使うとは思わなかった。クソア！

能力ある人がチラホラいても、全体の平均値が低い。

超有能な人が一人いるとそうじゃない人が他に五人くらい居る気がする。

バランスが悪い！

俺は美術監督だが、実質特撮監督補佐で、操演責任者で、造形責任者で、照明総指揮やらせられてるようなもんだ。

他にまともな経験者がいねえからだ。クソア！

人手は十分以上に揃えられてるし、経験が無いだけで将来的に有望な人も多い。が、経験者が足りない。

責任者とか、セクションごとに指示出して舵取ってくれる人がいない。

指示待ちの手足が多すぎるのが、俺とかの負荷を倍増させてやがる。クソア！

しかも監督と俺の間で、イメージを共有するところでまた苦勞してる。

この監督は主体性が薄い。

性格の主体性は強すぎるくらいなんだが、作品イメージの主体性が薄い。

俺と仕事の上でぶつかり合うんじゃないやなくて、ぶつかり合うところがねえ。クソア！
ふわつとしてる。

”この監督”こんな感じの作りたいな”とは思っていても、”こんな形に完成させたい”っていう完成形のビジョンが出来てねえ。

指示がふわつとしてるだけなら俺が意図を汲んでいい感じに仕上げりや良いんだが、この人はそもそも完成形がふわつとしてるんで、俺が柔軟に合わせると大変なことになる。

ふわつとしてるものに柔軟に合わせたら、芯がねえ作品にしかならねーよ！
俺がこの人達に合わせることが最悪の結果にしか繋がらない。

あ、相性が悪い！

この監督が何もかも悪いってわけじゃあねえんだが、俺と相性が悪い！

俺が特撮の秘蔵技術とか披露すると、それに引つ張られて監督の完成形のイメージがブレて、監督が脚本を修正させる。お、お前ッー！

だ、駄目だ。

変に良い特撮のやり方を俺が見せると、監督が引つ張られる！

『これ面白い、脚本変えてでも色々入れてみよう』ってなるから悪化する！

俺の技術が足引つ張ってる！ クソア！

プロデューサーと監督が仲良いせいで基本監督の方針が支持されてどうしようもねえッ!!!

ただ、細かい指示が出されてねえから、百城さん以外の俳優陣の中の、経験が浅い若手勢の人達はかなり喜んでる。

自由に伸び伸び演技ができるのが楽しいみてーだが、それで俳優の個性が出てくるもの、統一感があんな出てねえ。

俳優個人の魅力は出てるんだが、映画としては正直怖い。
ギャンブルだろこれ。

全員の個性が噛み合ったらウケるかもしれないねえが、十中八九不協和音が出る……しかもなんだ、明確な目標を目指して撮影した結果こうなってるってわけじゃねえのがまた怖い。

監督が俳優を伸び伸び演技させてるから、半ば制御不能になってるだけだ。

「監督、打ち合わせで俺が言っていた件なんですが」

「君は何度同じことを言うつもりかね朝風君。」

スケジュールと演出は役者全体を見て決めるものだよ。

君の言う通りにしたら撮影が破綻する。役者の再オーディションなど正気かね」

「……すみません」

いや、まあ、俺も無茶言ってるのは分かるわ。

だけどな、顔だけで選んだモデルを直感的に出演者採用とかお前本当にやめろよ。
いやモデルが悪いって言ってんじやねーよ。

俺もモデルが出て来た特撮とか、芸人出演や芸人声優とかの映画好きだよ。

「だけどな、なんかこう……駄目だろこれ！ モデル出演者を仕上げる時間がねーよ！
外見以外あんまよろしくねえ！」

「朝風君、それよりも何かもつと面白い技術はないかね？」

あの炎スプリンクラーは素晴らしかった。

心打たれる思いだったよ。他に見栄えのするものがあれば作品に取り入れたいのだから」

「あの、監督のイメージに沿った演出を絞って使った方がいいと思います」

「派手な演出から見せてくれたまえ。あ、ナパームで何かいい感じにできるかな？」

「……すみません、ちよつとお手洗いに行つてきます。すみません、お話の最中に」

「ウンコかね。派手にぶつ放してくるといい」

派手なら何でも良いのかよあんたは！ 監督！ しっかりしろ！

「ヤベえ、悪い噛み合い方し始めた……どうしよう」

逃げ出した俺は途方に暮れる。

どうすんだよ。

変な意味で八方塞がりになってきたぞ。

おや百城さん、こつち来てどうしたんですか。

「駄目だなあ、英二君は」

「大変申し訳無い……」

微塵も言い訳できん。

「こういう時は、現場の人間関係をちゃんと見て、話の通し方を考えないと」

「百城さん？」

「ちよつと待つててね」

小さく手を振り、百城さんは心地良い足音のリズムで監督に向け歩き出していった。

監督に近寄り、可愛らしくあざといような、けれど正面から見ると自然に見える動きで、可愛いという印象を持たせつつ監督との距離を詰める。

「監督」

「む、千世子くんかね。どうかしたかね？」

「ちよつとお願いがあるんです。聞いてくれますか？」

「おお、いいともいいとも。私にできることならね。何かね？」

「脚本さん達のお願いを、聞いてあげてほしいんです」

「ん？」

両手を合わせて可愛くお願い、してるようにしか監督の方からは分からないだろう。

第三者の視点から見てるから分かる。

会話の間の取り方が完全に女優モードだ。

百城さんと、監督と……あれは映像編集チームのチーフと、脚本の人だ。どういこうとだ？

「監督、撮影スタッフと脚本の総意です」

「撮影計画を見直した方がいいんじゃないですか？」

「む、そうかね？」

総意？ いつの間にそんな方向性で意見の統一が？

……！

そうか百城さん、映像編集チームでそれとなく話を振って、チームの中に『このままだと撮影がマズい』って共通認識を作ったのか。

そして脚本も同じように誘導して、映像編集のチーフと脚本の人が一緒に監督に直訴しに行くよう、誘導したのか。

待てよ。

そうだ。

スポンサーとかから、監督は口が酸っぱくなるほど色々言われてるはずだ。

—— ついたあだ名が興行収入ボンバーマンですよ。大丈夫なんですか

—— 今回はスポンサーがぎつちり監査しますか

そんな会話を、俺はした。

監督は俺の知らないところでもスポンサーから色々言われてる、それは間違いねえ。んでもって、周りが身内だらけの監督から見りや、俺は監督サイドじゃなく、スポンサーサイドやスターズサイド寄りに見える……そうか、だから俺の意見があんま通つてなかつたのか。

だけど脚本と映像編集は、俺の知る限り監督のイエスマンじゃなく、かつ初期に監督達が集めたスタッフで、撮影状況がマズいと判断できるレベルには有能だった。

ここに目をつけたのか。

いや、言われてみりや確かにここしかねえ。

百城さんに誘導されてくれるポジションで、自分の意志で今の撮影に反抗し、監督に素直に意見を聞かせられるのはここだけだ。

もうここ以外で監督に意見通せそうなのは全員、監督のイエスマンしかいねえ。

「むう……そこまで言われたなら、一度打ち合わせてみようか」

「わあ、ありがとうございます監督！」

「うむ、主演の千世子くんにも気を使わせて申し訳ないね」

「私も監督が頑張っているこの映画を、監督のために完成させたいんです！」

「千世子くん……！」

あと、あれだな。

男は基本自分に好意的（に見える）女の子に弱え。

女の子の”お願い”が間に入ると一気に角が立たなくなるな。

百城さんは女優トップクラスの外面の良さと、普段からキャラ作りを徹底する強固なイメージ戦略の実現者だ。

実績があつて超いい子に見える可愛い主演女優の『お願い』の破壊力は高い。

あ、つかそだよ。

この監督、監督つてことは高確率で主演女優に百城さん選んだ人の一人はこいつじゃねえか！

そりゃお願いが効く可能性高えわ！

そこまで計算してたならもう怖いレベルだぞ百城さん。

あ、戻つて来た。

「ただいま」

「おかえりなさい」

「最近思ってたけど、英二君つて派閥闘争とか苦手そだよね」
うるせえ。

お前の対人能力を基準にするな。

俺は仕事してりゃ満足なんだ。

「ねえ。加工してない現実、美しくないよね」

……解釈に困ることを言うな。

百城さんは俺の目に映る現実を持っていったが、百城さんの目に映る現実、そんなのか。

「私達は加工した美しい現実を売る人達。英二君には、わざわざ言うまでもないかな」

ああ。

そりや、間違いない。

花畑は自然のままでも美しいが、間にある膨大な雑草を切った方が美しい。

自然の子犬は可愛いが、汚れを落として毛並みを整えてやった方が可愛い。

宝石は原石のままでも煌めくが、売り物にするなら磨いて指輪にしないとイケねえ。

ドキュメンタリーだって、現実を切り取ってどう見栄え良く加工して人に見せるかが

重要だ。

巖爺ちゃんを人磨いてより輝かせる。

俺は人の傍に添える、人を引き立てる何かを作る。

百城さんは……積み重ねた技術で、自分を輝かせてるところか。

世界のどこかにある美しいものを、手を加えて美しく仕上げるのが俺達だ。

少しだけ手を加えて、美しく仕上げる。親父は『それが技だ』と言っていた。

百城さんは、『加工した美しい現実を売る』と言った。

本質的には、多分同じことだな。

「英二君が全力を出せない枷要因になりそうなものは、これで結構マシになったと思うよ」

なんつーか、恐ろしい。

この人は今、あんなにとつちらかつてた撮影現場をその手で少し加工して、美しい流れに乗せてみせたんだ。

感覚で分かる。

空気が違う。

撮影の流れが、前ほど悪くなくなってる。

そういや、前に聞いたことがある。

百城さんは以前、俳優だつてのに撮影現場全体に影響を及ぼし、監督から制作進行までコントロールして、撮影全体の舵取りをしたことがあつたとかいう噂を。

もし、あの噂が本当なら。

「頑張ろう？ 英二君」

「……はい！」

撮影現場全体が、百城さんの独擅場になったのか？

もしかしたら、もう現場は百城千世子監督がコントロールする撮影に変わったのかもしれん。

少なくとも、監督が百城さんの『お願い』を聞く関係性になった以上、これまでとは撮影の流れが明確に変わる可能性が高い。

百城さんが全体を調整できる。

……ん？ 待てよ。

俺と監督の相性は悪かった。

悪かった、が。

もしも今の流れの変化が、流れの主体が百城さんになんか変わったことを意味するなら。

俺と監督の相性問題は、俺と百城さんの相性の問題にすり替わるのか……？

「今度は俺の仕事で、恩返しに百城さんをより輝かせてみせます」

「あら、凄く気合い入ってるね」

監督筆頭に悪い要素しかなかった制作陣だが、百城さんが微調整に入ってくれんなら、俺がかなり自由に動ける！

これなら、俳優の方のカバーに行ける！ 百城さんの負担も多分減らせるぞ！

人材の偏りは……まあ頑張って穴埋めするしかねえか。クソア！

撮影は進む。

撮影と、撮影準備と、撮影後始末、全部やんなきゃならんのが面倒臭えところだ。

撮影現場全体に目を走らせてる監督の目を意識して、その上で微調整している百城さんの意向を読み取りつつ、俺も現場全体を見ておかねえと。

「ああちよつと待っててください！ 弁当箱捨てないで！」

「はい？」

「後で使うかもしれないので、取っておいてください！」

「弁当箱を……ですか？」

「はい。いい形してますよこれ」

仮面ライダー電王2007年放映開始、電車モチーフの仮面ライダー。仮面ライダー打ち切りの可能性を蹴り飛ばしたシリーズの救世主。「ねえ俺達がライダーのベーススーツ作るより、専門のミズノに頼んだ方がいいんじゃない？」という革命的提案が成されたライダースーツの革新作品でもある。では、時の列車ゼロライナーの側面に弁当

箱を貼り付けている。

轟轟戦隊ボウケンジャー2006年放映開始、『悪の組織を倒すのではなく、最高のお宝を見つけるための冒険』が主題の異色作戦隊。ネットで有名な「オメーの席ねえから！」をやったあの女優さんだが、この作品に登場するボウケンピンクさんである。でも、遺跡の柱をよく見て拡大するとゼロライナーと同じ弁当箱が貼り付けてある。

この映画の予算は少ないわけじゃねえが、百城千世子主演の特撮映画として成功させる質を求めるんなら、もう相当にギリギリだ！

スタッフの弁当箱一つ捨てないくらいの気概で行くんだよ！

「あの、朝風さん」

「和歌月さん、お疲れ様です。撮影上手く行ってるみたいですね」

「おかげさまで。それで、弁当の空き箱を洗ってるのは何故……？」

「ここからの特撮撮影予定を考えてる間、腕動かしてないのがもったいないので」

「休ませていいんじゃないでしょうか」

「いいんですよ。手だけ動かしてる時は逆に頭が暇ですから何かしら考えてますし」

和歌月さんは途中で派手に死ぬ街の女キャラ役だが、まあいい感じにハマってるよな。

「百城さんが引つ張っている俳優の方の撮影は撮りやすいでしょうか？」

「あ、それは感じました。あの人の周りは流れがスムーズな気がします」

「現場レベルで引つ張ってくれる人がいるのはいいですよね」

「スターズのレベルの高さを感じさせられました。……スターズはやはり、憧れますね」
ぬ？

「女優部門の俳優発掘オーディションが日程まで発表されましたよ。応募してみてもいい？」

「……考えておきます」

付き合いが浅いとどういう意味合いでこの返答したのかよく分からんな。

「それで、どうしました？　ここに来たなら俺に何か用があつたのでは？」

「あ、少し気になったことがあります」

人間のシーンで雨を降らせて、怪獣の出現と爆発のシーン。

そこまではいいんですが、何故その後の怪獣のシーンで雨を止めさせたんですか？」

「ああ、それですか」

雨ね。

「一つは合成班の負担を減らしたかったからです。

雨という要素が入った合成は一気に苦労が増します。

なら、その分の労力を他に回してほしかったです。

あとは、スーツの素材が雨を乗せるにはちよつと不安だったからですね」

「雨を、スーツに乗せる？」

「雨の水滴は表面張力で一定の形や大きさになります。」

一旦落ちれば、人間の体の上でも、怪獣スーツの上でもです」

「あ」

「昔霧吹きで再現してみようとしたんですよ、怪獣の体表に乗る1/24の雨粒。

でも全然駄目でした。リアルでない上に、カメラに全然見えません。」

水滴が集まってスーツ表面で丸まり、巨大感が損なわれたことまでありました。

ですので雨はそもそも降らせないか、怪獣の体表で丸くならないようにするかなん

です」

「なるほど……」

「ただ、雨に濡れた路面や地面を怪獣が歩いた跡は仕込むつもりです。」

和歌月さんは街中の怪獣の大きな足跡の横を走ることにしたいと思いますよ」

「分かりました、微力を尽くします。」

……もしかしてなんです、雨の後に爆発がある撮影にも意味があるんですか？」

「もちろんですよ、雨で肌を守っているんです」

女優を水濡れにして万が一にも火傷しないようにしてんだよ。」

「仮面ライダー・ディケイド2009年開始のお祭りの仮面ライダー、ディケイド。第一話の撮影で水に炎と泥とさんざんな目に合わされたメインヒロイン・夏美の演者であるカンナさんは、監督から『キタナ姫』とあだ名を付けられた。あの、その撮影させたのあなたですよ？でも、第一話の撮影は雨↓炎の順です。

水降らしは女優の皆さんの肌を絶対に傷付けないための、俺のルールだと思ってください」

「……意外でした」

「何がですか？」

「いえ、あまりそういう繊細な気遣いをする印象がなかったのです」

「なんだ剣崎アクションクラブからはそういうイメージ持たれてんのか俺。

火傷防止のジェル配ったりとか色々やってただけだな。

アクションクラブはスーツアクターやスタントマンがメインだから、そんなもんなのか？」

「皆さんの演技以外の物は全て俺が用意します。安心して撮影に望んで下さい」
「助かります」

和歌月さんはうやうやしく頭を下げて、他の俳優と合流していった。

結局スーツアクターの大御所と全然話してないなお前。

実績多いベテランのオツサン多いから仕方ないのか。

さて、撮影も日程進んできた。

いい感じに進行も安定してきたな。

と、思っていたバチが当たったのかもしれない。

その日、撮影所に衝撃が走った。

「——予算が、尽きた？ 追加予算もない？」

「監督う！ なんですかこれ!？」

「私も知らんわ！ 初耳だ!！」

予算が尽きた。しかも誰一人として「俺のせい」とは言わず、関係者全員が「は？」としか言っていないような、青天の霹靂であった。

はいはい予算予算。

で、俺は誰を殴りゃいいんだ？

「英二君、空が綺麗だよね」

「ですね。今日も綺麗な青空です」

「空は悩みがなさそうでいいよね」

「空は空で空っぽい悩みがあるかもしれないよ。空が高所恐怖症な可能性もあります」

俺達、何の話してるんだこれ。いや何考えて現実逃避してんだろうか俺達。

この最悪の事態は、各所の小さな齟齬とミスと思いつみ込みが噛み合った結果発生した。プロデューサーは下が上手くやると思っていた。それが慣例だと思っていた。

棘谷系のスタッフは自分の会社のやり方で費用や予算を計算していた。

西映系のスタッフは自分の会社のやり方で費用や予算を計算していた。

スポンサーの会計処理が、一部処理を忘れていた。

制作進行はプロデューサーとその周りが多くを処理するタイプの制作現場にいた。

当時海外の特撮展開を担当していた新人が抜擢され、この映画の各処理に採用されていた。

更には予算を食い潰していた機材や県外ロケ代。

他にも色々。

そのせいでなんとこの時代に、撮影中に突如予算の枯渇が発覚するという事態が発生したのだ！

明日世界滅ばねえかな……クソっ……

そしてそこに、リカバリの利かない額の予算がクリティカルヒットした。

めっちゃ金かけた映画は予算に余裕がある上、スポンサーに金持ちが多いので追加予算も出してもらいやすく、失敗してもやり直しがききやすい。

が、ここの監督は興行収入ボンバーマン。

この映画予算を見る限り、最初の予算要求の時点でギリギリ上限ってレベルだ。現状の予算が上限で、追加予算は望めねえ。

「監督、撮影続行も不可能ですか？」

「予算の枯渇とはいっても、現在香盤出演予定表のこと。巖さんなどのフィールドである演劇劇場においては座席表のことなので注意。を見る限りは問題ないんだ。

あくまで、このまま撮影を続ければ予算が枯渇するという話でしかない。

だが……その……君の担当である、美術・特撮・造形は、もう予算を使えない」「何もできないと、そういうことですか？」

「今あるものを使うならいい」

俺達の撮影最後なんで、まだ映画に必要な物全部作り終わってないんですけど。

物は作れ、ただし何も買うな、って言いてえのか？ ええコラ。

監督は弱々しく笑みを浮かべた。

「わるいこの無人島0円生活って、知ってるかい……?」

「0円でどうにかしろとか言いたいんじゃないでしょうね、監督」
ぶちころがすぞ。

「無理かね……?」

……。

「できません。やれます。任せてください」

「——！ おお、ありがとう、ありがとう！」

あーもう。

ヤケクソだわ。

もう七割がた仕事は終わってんだ、あと三割どうするかな。

え、マジで0円? こっから何も買えない? やべーどうすっかな。

あと最低でもスーツを三着新造する予定だったよな確か。

あれと、あれと、あれを組み合わせて……そっからどうすっかな……どうしよう。

制作費0円とか低予算映画の究極だな、はっはっは！ 笑えねえよ！

「できないならできないって言っ方がいいよ。誰も英二君を責めないから」

百城さんが心配そうに言ってくる。

和歌月さんが勢い良く頷いていた。

周りも皆頷いている。

一体感を感じる……かつてない一体感を……皆『お前でも無理だよ』って心で言うてる……！ 俺もそう思うが今更投げ出せねえよ。

「皆さん、特撮ロボットドラマ『77部署合体ロボダイキギョー』をご存知ですか？」
皆に呼びかける。

まだ終わってねえ。

完全なチエックメイトじゃあ、ないはずだ。

「77部署合体ロボダイキギョーの企画が始まり、プロデューサーは言いました。」

『会議室一部屋分くらい予算で十話完結のドラマ作れない？』

監督は言いました。

『じゃあロボットもので行きましょう』

美術スタッフは言いました。『コクピット一つ作ったら予算が尽きたんですけど』

「一から十まで狂気しかない話を聞かせて正気を奪いに来るのやめない？ 朝風君」

「これですら特撮ロボットドラマを名乗っているんです」

俺の限界はどこにあるのか。

俺ですら知らない。

そいつを試すのを、きつと挑戦って言うんだろうさ。

「やってみましょう、0円撮影継続。未熟な腕なれど、やってみせます」

「英二君、無理なら無理って……」

「百城さん。信じてると、そう言ってくください」

頼むわ、メンタルにパワーが足りねえ。

「俺はあなたの期待を裏切ったことがないんでしよう？　なら、今回もそうしてみせませよ」

百城さんが、きよとんとした顔をして、笑った。

ガラスの花みたいなお顔だった。

「信じてるから頑張つて、英二君。待つてる」

おう。

さて、どうするか。

こんなとんでもねえことを成功に導くには——何か、魔法が必要そうだ。

それは星に手を伸ばし続ける愚行のように

スポンサーが金を出した作品には、余計な金や物を入れちゃならねえ。

例えば、5000万円の金を出して映画を作らせようとしたスポンサーがいたとする。

映画が大成功した場合、この映画の商品展開とか利益とか、その辺を思うまま独占して自由に利益を得られるのがスポンサーの特権だ。

まあ当然だよな。

じやなきや数千円とか数億とかの金ポンと出せねえよ。

ここに、監督が勝手に金に困ったから、別のスポンサーから1000万貰ったとしよう。

5000万のスポンサーは利益が独占できなくなり、1000万出したスポンサーも利益が欲しいもんだからクツソ大変なことになる。

権利をどうする？

利益をどう分ける？

玩具展開権やDVD化権はどう分ける？

こういうことが起こらねえように、事前にその映画にはどのスポンサーがどのくらい金出すかとかを、きっちり話し合っておくわけだ。

つてなわけで俺のポケットマネーとかを使うとかも、バレたらめっちゃ面倒臭えことになる。

誰が金を出すか、どのくらい金を出すか、そいつを何に使うか、きっちり管理されるのが現代の映画撮影ってやつだ。

だから俺達は、こっから追加予算を使えねえ。死ねえ！
要点をまとまる。

まず、俺が作らなきやならねえのは怪獣スーツ三体、そして壊れた街のセット二種だ。現在あるのが怪獣スーツ二種、セット八種だ。

特殊効果に使うもんは後から合わせて行くつきやねえ。

根本的な話だが、俺達には『素材がない』。

素材は金で買うもんだ。

金がねえってことは素材がねえってことになる。

映画の撮影において「しょぼい」って言われねえレベルの素材で、撮影に耐えられる耐久度がある素材ってなると、そりゃ限られる。

その辺の石拾ってくりや全部どうにかなるってわけじゃねえんだ。

素材がねえなら、俺がどんなに技術の粋を凝らそうが完成品なんて作れやしねえ。俺は監督にまず、撮影予定を変えてもらおうよう頼んだ。

「いや、それはストーリーライン上ちよつと……」

が、難色を示された。

まあ、うん、分からんでもねえ。

昔からよくあるからなあ。予算が尽きてシナリオの方を変えないといけなくなつて、シナリオがグダグダになつて世間から叩かれるのは辛いわな。

俺に向けて頭を下げる監督。

ハゲ始めている頭が妙に哀愁を誘っていた。

……しよーがねーなー。

「すまない朝風君、頼む……」

大の大人に頭下げられちやしようがねえ。

こういう”シナリオ改変必須状況”な時、制作はシナリオを変えるかスタッフを地獄に落とすかの二択なわけだが、今回は後者で突貫だ。

この映画の肝は、前半で死んだ主人公の家族や友達が、終盤に怪獣になつて出てくるところにあるらしい。

死んだ人間が怪獣になる。

つまり、それまで現れた怪獣は全て元人間だったという展開だ。

要するに『加害者』と『被害者』だけが『当事者』で、『主人公』だけがそのどれにも該当しなかったからこそ、主人公はまともな目で世界を見る登場人物足り得た……つて話。

ラストは主人公が殺される、主人公が怪獣Ⅱ背景になる、人間という主人公視点の資格を失い主人公でなくなる、という意味が『死』に視聴者視点で付与され、怪獣に追われる大ピンチの主人公のシーンでクライマックスを迎える……というやつだ。

結構面白そう。

俺好きだぞそういうの。

予算に余裕があればな！

演劇と違い、テレビや映画はカットごとに撮影する。

逃げ惑う百城さんとかのシーンはもう全部撮り終わってるか、撮り終わるところまで予算と予定は保つと判断されてんだらう。

俺は、そこにはめ込む怪獣側のシーンや、特殊効果の合成素材を作ることだけ考えておけばいい……はずだ。

使えるものをかき集めるべく、俺はスタッフに呼びかけた。

「マグネシウムの準備お願いします」

「尽きてます！」

「……ナパームは？」

「ガソリンが1リットルほどあるみたいです」

「ドライアイスは？」

「おい、ドライアイス！ ……1kgほどあるみたいです」

「……報告ありがとうございます。なんとか考えてみます」

マグネシウムは、特撮爆発の基本だ。

空気中で燃焼させると熱と光を放ちながら燃焼するマグネシウムは多様に使える。

火薬の中に仕込んで、発火装置代わりに使うこともある。

特撮爆発シーンで見える、白い閃光は大体これだ。

また、通常の日常ドラマでも光の表現でコイツを使うことがある。

それがない。

きちい。

ナパームは特撮爆破の一種だ。

特撮には大きく分けて二種の王道爆破がある。

セメント爆破とナパーム爆破だ。

セメント灰色の粉のあれ。水に混ぜると灰色の接着剤のように使えて、タイルの接着

などに使われる。を爆発で吹っ飛ばして派手にするセメント爆破と違い、燃えるガソリンを吹き上げらせて派手にするナパーム爆破には、ガソリンがいる。

一例を挙げると、監督がやりたがっていた昔ながらのド派手なナパーム爆発ならガソリン20リットルは使う。

1リットル？

できること多くねえぞ……どうする？

ドライアイスは、まあ一回の購入で10kgから20kgは買う。

そこその範囲にドライアイスの白煙を広げるには、10kg単位で使わなくちゃならねえからだが……これも1kgじゃ使えること多くねえよ！

まだだ、まだ何か使えるもんはあるんじゃないかねえのか？

「レフ板を解体しましょう。」

白布式は布が、発泡スチロール式なら発泡スチロールが得られるはずですよ

「レンタルですよ！」

「……クロマキシー合成に使う布を流用しましょう。」

あれは確か綿だったので、上手く使えば怪獣スーツの素材に使えます」

「レンタルですよ！」

「セットの土台の木組みの一部を解体しましょう。この際、木材でも貴重ですよ」

「レンタルです!」

「……あの高いカメラは?」

「新規購入品だったみたいですよ」

あの監督? あの監督? あの監督?

良い映像撮りたかったっていうその気合いだけは評価してやるよ。

……今回だけは尻拭ってやるが、反省しやがれクソがア!!

レフ板撮影に用いられる大きな反射板のこと。太陽光や照明の光を反射して、屋外の撮影場所や屋内の撮影セットを反射拡散した光で柔らかく照らす。ドラマや映画で光の方向が一方方向に寄らず、画面がまんべんなく明るかったりするのはこのため。を解体して素材に出来てりや……いや、ないものねだりはよさねえと。

綿スーパー戦隊シリーズでは、初代である秘密戦隊ゴレンジャー(1975年)から超電子バイオマン(1984)の開始まで、スーツのメイン素材に綿を使っていた。と発泡スチロールさえありやな、クソ。

クロマキー合成に使う布ブルーバック、グリーンバックのこと。この場合、青と緑の綿布として使えるということの意味する。は使えるかと思っただが……そう上手くはいかねえか。

合成先にある程度終わらせて、クロマキー合成用の布を一枚残して全部撮影に投入す

るって作戦だったんだ……待てよ。

撮影を前後させる。

これ、いけないか？ 頭の片隅でちよつと考えておこう。

セットの土台もレンタルかー。

木材、木材。

木材を新規購入する金はないが、この発想の延長で何か考えられないか？

いやいやいや、こういうこと考えてるだけじゃしようがねえ。

片付けられる案件から片付けていかねえと！

「……一人、外に回してください。監督達の車からガソリン抜いてきてください」

「は？」

「車のガソリンなんて帰宅できる量あればいいんですよ！

ガソリン抜けそうな道具はその辺にありますから抜いてタンクに確保してきてくだ

さいー！」

「は、はいー！」

「二人、掃き掃除お願いします！ 第三セット床に散ったゴミを集めて持ってきてくだ

さいー！」

「はいー！」

「残りも俺の指示に従って動いてください！」

動かせる人間を片っ端から動かして、俺も俺の作業に移る。

灯油残量をチェック。

……こつちも2リットルはないな。

灯油を火皿火を使う撮影時に使う容器。この上で火薬とガソリンを混ぜて火を着けたり、火薬を盛って着火したりする。に注いで、俺は二枚着ていた上の服を脱いだ。

上に着ていた服を着直して、内側の俺の服をハサミで解体する。

そして俺の服のゴム部分をできる限り細かく刻んで、火皿に入れた。

まあ俺の服一着燃やすくらいは大目に見てもらえるだろ。

「朝風さん！ 第三セット床のゴミ持ってきました！」

「ありがとうございます！ そこ置いといてください！」

第三セットは、崩壊を始める街のワンカットを撮影して、そのまんまだったはずだ。回収してもらった床のゴミ確認……よし。

ある！

第三セットでの爆発は、ガソリンを使うナパームじゃなく、セメントを使った。だから床にはセメント粉が散ってる。

瓦礫には発泡スチロールを加工したのも散らしてたから、それも回収できた。

ホコリ雰囲気を出すものの総称。瓦礫の中から起き上がる主人公の服の石や砂、立ち上がる怪獣の体から僅かに落ちる砂、怪獣が歩く足元で巻き上がる土煙、建物が壊れた時に出る煙のような土砂などがこれにあたる。もセメントと珪砂セメントはケイ酸を成分に使っているためか、同じくケイ酸を主成分とする透明な砂の珪砂と相性が良い。混ぜると灰色と透明が混ざったちょうどいいホコリになる。を混ぜたものを使つてたから、セメントだけじゃなく珪砂も回収できた。ちよつとだけだな！ あ、珪砂の残量も全然ねえじゃねえか！

一つ回収すると一つ尽きてることが発覚する悪夢の状況だな……つれえ。

お、ガソリンを取りに行かせた人も戻ってきたか。

「ガソリン取れました！ ただ、車から抜くだけでは5リットルしか……」

「それでやりくりします！ カメラさん撮影準備できましたか!？」

「はい！」

「2カット先に撮ります！ 撮ったら先に映像編集の人に回してください！」

忙しなく動く人達に指示を出しつつ、街のセットの中に作られた（というか俺が作った）電柱と電線に手を伸ばして、電線の黒い直線部分だけを外す。

そして、俺が普段使っているイヤホンのコードをぶちつと切った。

イヤホンは黒。

コードも黒。

イヤホンのコードを代わりに電線として入れても、何も違和感はねえ。よし。イヤホンコード表面に、見て分からねえレベルで切り込みを入れておく。ちよつと油も塗っておくか。

電線のミニチュアと化したイヤホンコードの末端に電気回路を接続し、電源に繋いでデカイ電流を流せるようにする。

街のセツトの要所にセメントと珪砂を混ぜた、灰色と透明のホコリを僅かに仕込む。

「怪獣が無人の街に現れ、歩行の振動で揺れる数秒のシーンの撮影、できますー!」

「カット405……はい、スタート!」

俺にしかできない(この現場限定)絶妙な蹴り具合で、セツトを蹴る。

セツトが揺れ、路面に僅かに仕込まれたホコリが揺れる。

『土砂が震えるほどに地面が揺れる、地面が揺れるほどに大きな何かが来る』という表現。

そこで、ミニチュアの電線に使っていたイヤホンコードに大量の電気を流す。

仕様外の大量の電気を流されたイヤホンコードの電線はショートし、バチツ、と被膜のゴムを焼いて煙を出しながら、切れた。

怪獣の出現だけで街が揺れ、何かはずれ、そのひずみがここに現れたという表現だ。

街を怪獣が歩くだけで、電柱は倒れ、電線は切れる。

「カット！」

よし。俺のイヤホンはいい感じに焼ききれてくれたな。

理想的なのは0・2スケアのコード60ワットで音を上げるモヤシ配線コード。英二君が黒さん監督と一緒に仕事した時の、ワイヤー操作機械の一部などに使われる。だったんだが、しようがねえだろ！ 買う金ねえよもうこのスタジオには！

たつた200円なんだけどな0・2スケアのコード……ひもじいわ。

一つのカットが終わり、次のカットの撮影が始まるまでの間に、スタツフがおやつに食つてた分厚い醤油せんべいを強奪。

パキツと折つて、残りも多くねえ塗料でちよつと色付け。

スタツフさんが回収してきたガソリンに漬け込んだ。

さつきスタツフさんに第三セットの床から回収してもらった、瓦礫に見えるよう造形した発泡スチロールを細かく切り刻む。

んで、さつき作つた、火皿の上に灯油と切り刻んだ俺の服ゴムを乗せたものに、切り刻んだ発泡スチロールを入れた。

ガソリンに漬け込んだせんべいを回収。

よし、次カットの撮影準備ができた。

「怪獣が爆散した直後のシーンの撮影、できます！」

一旦、全力で集中する。

撮影に使える素材の余裕がなくなってきた。

もう失敗できねえんだ、他の何もかもが聞こえねえくらいに、全力でやる。

ガソリンを染み付かせたせんべいに火を着け、セツトに転がす。

爆発した怪獣の肉片が、街を転がっていくように。

外側が濃く、内側が薄い色のせんべいは、へし折り方によつてはガソリンを染み込ま

せて燃やすだけで、怪獣の炎上爆散した肉片に見える。

ゴムと発泡スチロールを灯油で不完全燃焼させりや、黒煙が出る。

素材上、必ずそうなる。

黒スモークを混ぜたかったんだけどなあ、百城さんの前で色々練習してたつてのにな

あ、こんな微妙な役に立ち方するとは思わなかったわ。

ともかく、黒煙は出せた。

燃える赤い炎。

街より上がる黒煙。

そして、炎の中で燃える怪獣の肉片。

完璧な絵だ。

怪獣が自衛隊のミサイルで爆散死した直後のシーンとしては、及第点レベルになった。

「カット！ いいよいいよー！」

ギヤオス大怪獣ガメラと戦う、コウモリのような翼を持つ大怪獣。三度の飯より人肉が好き。三度の飯に人間を食うくらい好き。三度にこだわらず一日中人肉を食べるくらい好き。がガメラの吐く炎で爆散した時、肉片がガソリン染み込ませて燃やしたせんべいだったって話を覚えてて良かったわ。

ごめんなスタッフ！

お前らのおやつもうねえわ！ 悪い！

「朝風さん、脚本から修正脚本回ってきました！」

「尻尾切断も受け入れられましたか!？」

「はー！」

よし！

少し無理を言って、怪獣の尻尾切断シーンを撮影に盛り込んでもらった。

これで尻尾切断前の撮影を先に全部終わらせてもらえば、尻尾切断後は切断した尻尾のウレタン素材を他に流用できる！

現在あるスーツが二つ、作らねえといけねえスーツが三つ、これで……いやこれだけ

じゃ全然駄目だ。全然足りん。どうすつかな。

スーツ三つ。

前半戦で死んだ主人公の家族や友人が怪獣化して襲ってくるシーンの怪獣スーツ。

どう作る？

手持ちの素材があんまりにも少ねえ。窮地だ。

けど。

親父なら多分、鼻歌交じりに乗り越えられる、その程度の窮地だ。

「監督、提案があります」

「何かね？ もう朝風君の提案は疑っておらんが……」

「撮影の順番を変更したいんです。」

予定では壊れる前の街のセットと、壊れた街のセットは別々の予定でしたが……

壊れる前のセットを全撮影した後、そのセットを加工して壊れた街のパーツを作ります」

「それはいいが……君は大丈夫なのかね。違和感と労力の問題があると聞いたが」

「大丈夫です。できます」

棘谷式メソッドだと、しっかりと立っているビルのミニチュアは、使い終われば一旦台車などで倉庫にしまうなどして、また次の撮影、次の番組に使うことになっている。

2016年の熊本地震によって破壊された熊本城を、特撮技術によって再現しようという美術プロジェクトウルトラマンサーガ、シン・ゴジラの四池監督が主導。の時も、貸し出されたビルのセットの裏側に、ウルトラマンサーガ2012年公開、ウルトラマンゼロ・ウルトラマンダイナ・ウルトラマンコスモスの三大ウルトラマンが共闘する映画。人間ドラマの質の高さ、アクションのキレっぷり、音楽面での秀逸さ、古参も新規も満足させるリスペクトとエンタメの両立……等々、様々な面から非常に高く評価されている。視聴した人が『AKBが俳優起用された映画はクソだって思い込み捨てるわ』と言うほどの俳優育成能力の高さにも要注目。に使用されたことが分かるメモ書きが、しっかりと残っていたりしたんだぜ。

だから壊れる前のミニチュアA、壊れた後のミニチュアBって感じに作り分けて、倉庫にしまっておいた方がいいやつは保管に移す。それが棘谷流だ。

だが、もうそんなことは言ってもらえねえ。
壊れる前のカットの撮影全部終わらせてもらって、壊れる前のセットを加工して、壊れた後の街を作る。

……結構怖い作業になるな。

失敗したらやり直せねえ、つてのもある。

だが、発泡スチロールとか色んな素材で作った街のミニチュアは、街にある本物と同

じ素材じゃできてねえ。

つまりミニチュアは、適当に殴っても本物みたいには壊れてくれねえんだ。

こういう時は、最初から壊れた後の街の形をイメージして、”壊れた建物という完成形”を目指して作ったりするもんなんだが、それも不可能……結構神経質な作業になりそうだ。

ビルがあるとする。

ビルが粉碎される前の光景、粉碎された後の光景を撮るとする。

普段なら、ビルと瓦礫を個別に作って撮るところだ。

だが今回は、ミニチュアビルを適度に壊して、壊したミニチュアビルの残骸から、リアルな瓦礫も作成しなくちゃならねえんだからな。

「……分かった。君のできるとい言葉を感じる」

「ありがとうございます」

あと、爆発。

爆発だ。

この映画は背景で怪獣と自衛隊がちよくちよく戦ってる。時々怪獣と怪獣も戦ってる。

死んだ怪獣は爆発し、派手さと爽快感を観客に与えるわけだ。

これがねえと地味になる……と、いうか。

もう他の怪獣の爆発シーンを取ってる以上、この脚本に沿うなら、後一回分の爆発が要る。

でもマグネシウムがねえ。

爆発の瞬間にカツと放たれる白い光、広がる爆焰、轟く轟音。

これがねえのは流石に様式美から離れ過ぎだ。

合成してもらおうか？

CG合成でどうにかなるか？

……いや、そういうことができる映像編集の人いなかったな。

そもそもあつちもやべーんだ。予算が消えたのはあつちも同じなんだから、ここから新しい負担を背負える余裕はねえはずだ。

光、光だ。

光なあ。

いい感じに光が出てくれりゃあ何でも良いんだが、光を出すものは通常のマグネシウム使用時と同様に、爆発に巻き込まれることになる。

つまりライトとか仕込んで一緒にぶっ壊れるんだよな。

貧乏な今の撮影陣にそんな贅沢な撮影は無理だ。

かといって、セメント爆破でも、ナパーム爆破でも、爆破に耐えられる強いライトつて……そりやそれこそ数百万とかするし……うーん……？

……あ。これ、使い捨てカメラ？ 誰のだ？ 使つていいのこれ？

制作進行に聞かねえと。

「あの、これなんですが」

「これは、プリヴィズ作成の時に少し使った使い捨てカメラだね。結局使わなかったが」

「貰つていいですか？」

「どうぞどうぞ。頑張つてね。……いや、君はもう十分頑張つてるけど」

「ありがとうございます！」

使い捨てカメラを速攻で分解する。

使い捨てカメラは内部のむき出し回路に300ボルト以上の電気が流れてる上、内部

構造の問題で変に扱おうと火花が目に見える。

ささっと放電させ、回路を回収した。

よっしゃキセノンランプだ！

使い捨てカメラのフラッシュ機構だ！

火薬の中に仕込んでぶっ壊しても大丈夫な光源だ！

完璧に一回限りの使い捨てにするつもりで高電圧をかけフラッシュさせ、爆発を計算

して珪砂を巻き上げさせて、ハレーション強い光が発生した場合にカメラに起こる現象。強い光がハッキリ見えず、ぼんやりした光に見える。撮影時に人間の目を焼きそうなほどに強かった光が、劇場などでは目に痛くない光に見えるのはこのため。特撮撮影時にはこの現象を意図的に起こす。を起こす。

いける！

キセノンフラッシュとセメント小爆破、ほんの一瞬間を置いてナパーム爆破の、ウルトラマンギンガS最終回方式二大ウルトラマンの最強合体必殺技、コスモミラクルエスペシャリー！ あわれラスボスは爆発四散。サヨナラ！ 当時の技術の粋を集めたような爆発シーンであった。だ！

でも結構シビアだなこれ。

電圧上げて、発光時間を調整して、光の向きをカメラに向けて、意識的にハレーション起こして……しかも撮影は一回きりか。

失敗したら撮影さようならだな。

深呼吸、深呼吸。

箱から適当な回路拾って、即席発光装置を作って、コードを引く。

火薬の着火装置と発光装置のコードをまとめて、セットの下を通してすると引いていって、爆発の影響を受けずカメラにも映らない位置までコードを引こう。

コードのもう片方にスイッチを繋げりや、スイッチ押しして即発光、即爆破、つてわけだ。

……コードの長さが足りてねえ！

でもこつから他の撮影すること考えたらもう余分に使えるコードとかねえよ！

しょうがねえ。

爆発場所の近くのハリボテのビルの影に俺が隠れて、カメラに映らないようにしながら発光↓セメント爆破↓ナパーム爆破の操作するしかねえか。

これやるとナパームの熱風で火傷する時あるんだけどなあ。

しゃあねえか。

「百城さん、和歌月さん、この棒を見てください。この棒の高さが怪獣の頭の高さです」俺が次の撮影のための爆破を仕込み、クソブサイクな即席の発光装置を組み立てている間、百城さん達が撮影スタッフと色々話していた。

来たな、棘谷棒。

棒の先つちよに布付けただけのやつ。

ウルトラマンのエキストラとかを集めた時、あの棒を振って、「怪獣の顔を見る視線はこの角度になるので皆さんこの布を見てくださーい！」とかやるんだ。

こうすることで、エキストラの視線の向きがあつちこつち行ったり、視線が見てる高

さが人ごとにブレブレになったりすんのを防ぐ、ウルトラマン撮影の叡智の塊だ。

ただの布と棒だけど叡智の塊なんだぜアレ。

「違うよ？ それじゃちよつと目線が見てる高さが低くなると思う」

「え？ 百城さん？」

「もう少し高いところを棒で指示に出さないと、リアルじゃないかな」

わあ百城さん。

棒振つてた人が予想外の言及に目を白黒させてんぞ。

……周りの俳優の視線、視線を誘導する撮影班の細かな動きすら、修正するつもりか。

「色々あつたけど、私達はもうちよつと懸命にやるべきだと思うんだ」

「百城さん……」

一瞬、百城さんの視線が、こつちを向いた。

「今一番頑張ってるのは、私達じゃないんだから」

うーんこの子。

俺の心にグツと来ること言うな。

百城さんは容姿も雰囲気も可憐華奢だが、その精神的なストロングさはもはやモモレンジャー初代戦隊、秘密戦隊ゴレンジャーの紅一点。ゴレンジャーは五色戦隊だが、桃色だからモモレンジャーなのではない。アクションができるモモレンジャーの俳優を

見たプロデューサーが「フトモモふつといな！」と思ったため、ピンクレンジャーからモモレンジャーに改名されたのである。つまりフトモモレンジャー。ストロングモモちゃん。のレベルだぞモモちゃん。

……凛として強いつて意味で、誰にも勝るヒロインだ。

疑いようもなく、今この撮影場所は、監督すら手玉に取ってるモモシロレンジャーさんを主役として、お前を中心に回ってる。

信じて待ってろ。

ちゃんと、百城さんの映画への執念にふさわしい舞台は、完成させてみせる。

君が踊る舞台を脆弱に作ったりなんか、しねえからさ。

本日撮影、終わり。

撮影日程が消化されていく。

時間が経過していく。

それにつれ、根本的な問題が表出してきた。

そう、怪獣スーツが足りねえって問題だ。

こればっかりはどうにもならねえ。

素材がない。

ゴムにしろ、布にしろ、2 m級の怪獣スーツを三体仕上げるだけの余裕がねえんだ。

自然な怪獣に見せてえんだが、使える金がないっていう最大の壁が厚すぎる。

既存の怪獣スーツ二体での撮影を終わらせ、スーツを改造して別の怪獣に見せかける

ことを俺は提案したが、流石に使い回しがすぐバレると監督・脚本が難色を示した。

拒絶じゃなく、難色を示しただけだったのが世知辛え。

つまりあの人らも、そうしないといけないかもしれないねえってのは分かっているわけだ。

話し合いの結果、一体。

既存のスーツ二つの内、片方なら改造してもいいと言われた。

だが、片方は改造せずに残しておかねえと、話が回らねえと言われた。

……それでも、改造で作れんのは一体。

あと二体作れねえなら意味はねえ。

焼け石に水だ。

と、いうか。

そもそも今の俺達には、スーツを改造できるだけの素材もない。だから無意味な仮定なんだ。

家まで送っていかうかと言ってくれた百城さんの言葉を丁重に断り、一人歩く。今は帰り道の途中も、考え事をする時間に当てたかった。

「……………ふう」

魔法みたいな何かが必要だ。

シンデレラが絶対に行けなかったはずのハッピーエンドにまで、シンデレラをちゃんと送り届けたような、そんな魔法みてえな何かがある。

そいつは俺の発想の転換によってしかなされない。

俺が何か、劇的な何かを思いつかねえと、詰む。

そんな時、電気店の店頭テレビの画面が俺の目に映った。

「お、アキラ君だ」

流石子供達のヒーロー。

テレビの露出も多いイケメンだな。

画面の中のイケメンは、折り紙の企画で凄まじく複雑な折り紙を手を持っていた。『凄く精巧な折り紙ですね。まさに職人の技です』

「折り紙ねえ。そーいや撮影所にも、型紙とか書類用の紙はまだ沢山あったな」

紙？

紙。

紙……紙。

折れる。織れる。貼れる。今回の撮影方式は怪獣プロレスじゃない、だから。

「——品口冬樹さんの、あれが、あった」

俺の頭の中で、何かが噛み合った。

「キングゴング。キングゴング対ゴジラ1962年の日本映画。『怪獣VS怪獣』という最大のエンタメ概念を生み出した始祖であり、ゴジラシリーズ歴代最高の観客動員数を記録している。」

そうだ、歌舞伎見てたのに何で俺は気付かなかったんだ！」
全てが噛み合っていく。

スマホで時間を見た。まだ間に合う。まだ店は回れる。
金を使わなくても、俺にはできることがある。

過去の誰もがやっていけないことを、この撮影だからこそできる特大の変化球を、俺の技術とアイデアで撮影に耐えうる形にできれば。

「まだいける。まだやれる。俺の限界は、まだここじゃねえっ……!!」
俺は、全力で走り出した。

もう今夜は寝ない。寝ずに仕上げる。明日の朝までに、決着をつけてやる!

翌日、朝。

根を詰めてフルスロットルで仕事したせいか、目が霞む。

遠くがハッキリ見えない。

頭が回らない。

ただ、周りに人がいるのは分かる。

周りの人が驚いているのも分かる。

既存スーツの一つを改造したスーツ一つと、新造スーツ二つ。

甲殻持ちのトカゲを思わせるスーツと、野獣を思わせるスーツ二つを見て、他の人達は各々違う反応を見せているようだった。

「な……何故……昨日の時点では、もうひとつも作れないという話じゃ……」

「紙で作りました」

「……え？」

「品口冬樹伝説の造形師。十代、アマチュアの頃からプロ級で界限では有名だったほどの人。ウルトラマン、仮面ライダー、ゴジラ、ガメラ、超星神にメタルヒーロー、果てはゲゲゲの鬼太郎などにも関わった。近年では、ウルトラオーブのマガタノオロチなどを造形している。さんをご存知でしょうか。」

彼はアマチュア時代、イベント用のガンダムを着ぐるみを作ったそうです……『紙で』

既存スーツの改造は、紙で作ったパーツを当てて、既存スーツと同じ塗料で再塗装。繋ぎと誤魔化しに、切断した怪獣の尻尾素材を溶かしてあてて固める手法を使った。

ゴムの表面に塗料を吹こうが、紙の表面に塗料を吹こうが、画面に映る色は変わらねえ。

紙でゴムみたいな質感は出せねえが、これは改造だ。

怪獣の体表の質感がガラツと変わることは、むしろ別の怪獣に見せかけるって目的上、都合が良かった。

紙で甲殻と角を作り、スーツ表面に接着、塗装という作業を繰り返した。

他の怪獣とぶつかりでもしなげりや、このトリックは見破られねえ。

そして、脚本上ラストシーンは人間の主人公を追うだけのシーン。

他の怪獣やビルのミニチュアとぶつかることはありえん。

怪獣プロレスが必要ないこの作品だからこそ使えた、ありえないスーツ新造手段であり、スーツ改造手段だった。

疲れた。

「ま、待って待って待って！ こっちの新造スーツはなんだ！

獣そのものだ！ これは絶対に紙じや作れないだろう！」

「海外では、犬の毛をリサイクルするのは珍しくないそうです。

犬以外にも、ペットの毛を集めて、セーターや帽子を作ったり」

「？」

「日本でも近年後追いついてる人がいて、犬の抜け毛で人形作ったりしてるそうです。

昨日、寛容なペットトリミング店がすぐ見つかったのは幸運でした。

廃棄予定の動物の毛をくださいって言ってた俺、絶対に変人に見えてたと思います

し」

「……！」

「ペットの美容院は、毛並みにクシやハサミを入れますから。

たくさん毛のゴミが出ます。

それを俺が貰って、仕分けて、脱色して、染色して、接着剤で紙スーツの表面に貼り

ました」

俺は、ゴミ袋四つがパンパンになるくらいのを、その店から貰ってきた。運ぶのにちよつと苦労したのは内緒だ。

キングコング対ゴジラで、閉米栄三伝説の造形家。怪獣ブーム、変身ヒーローブームを支えた1950年台から1970年台を代表する天才の一人。さんは歌舞伎の小道具を取り寄せ、それに使われてるヤク牛の一種。尾毛が美しく、徳川家康を始めとする武士に好まれ、憧れられた。の毛を抜き、一本ずつ手作業で脱色と染色をして、接着剤でキングコングスーツに植え込み、キングコングを完成させた。

俺は細々とした道具こそ使ったが、同じことをしただけだ。

木でフレームを作って、紙を貼って、塗装して、接着剤で毛を植え込んでいく、それだけ。

全身に動物の毛が貼り付けてある全身毛のスーツなら、見かけ上は、紙で出来たスーツには見えねえだろう？

「紙だけのスーツならすぐ崩壊しますが、骨組みに細い木を使っています」

「木……？」

「都政は、植える街路樹の種類を定めています。」

サクラ、イチヨウ、ユリノキ、ケヤキ、ハナミズキです。

だから撮影所の私有地範囲に生えてる木もこれだったりします。

昨日、ちょうど駐車場のケヤキの枝落としをやったので、枝を貰ってきました」
「貰ってきました、って」

「紙スーツの骨組みはケヤキです。

ケヤキの骨組みの表面に紙を貼り付けられる形で形成しています。

内部構造的には、スーツ全体の荷重が肩にかかり、肩でスーツを”持つ”構造になっています」

本当はベストみたいなのを中に入れて、胴で重量を支える形にしたかった。

でも金ねえだもんよ。しゃあねえだろ。

スーツの木の枠組みと、安全装置じみた仕込みの糸で、スーツに変な荷重がかかって壊れないような内部構造になってる。

新造スーツAは、脱色して染色した毛を接着剤で植え込んだだけだ。

だから、柔らかい印象を受けるようになってる。

どこか自然で、壊れたビルのミニチュアセットの窓部分を使って作った透き通った目は、どこか純粹さを感じさせる。

壊れた道路のミニチュアの破片を加工して作った歯は三角形の集合体で、いかにも肉を噛み千切りそうな歯だ。

流れるようなシルエツトは、するりと獲物の懐に入って噛み殺すハンターのそれ。

新造スーツBは逆に、毛を刺々しく揃え、部分的に逆立て、塗料で固めている。

だから毛が全て針のような、刃物のような、棘のような、そんな印象を受けるだろう。まさに『怪獣』だ。

弁当箱を加熱して変形させ作った黒い瞳は、どんよりと濁ってどこか怖い。

撮影所の入り口に転がった小石を俺が削って塗装して作った歯は、獯猛さを感じさせる四角形の集合体で、肉を噛み潰すことに特化したようにすら見える。

観客は、『コンセプトを真逆にした姉妹怪獣、兄弟怪獣なのかな?』とか思うだろう。特撮の世界だとそういうの多いからな。

青と赤のコンビの敵とか、金と銀のコンビの敵とか。

「この映画が完成するまでの期間保てばいい、くらいの突貫作業ですが」
動いてもボロは出ねえはずだ。

ぶつかりさえしなければ。

改造スーツは上に紙の増設装甲追加しただけみたいなものだ、関節を動かしてもボロが出るってことはねえ。

新造スーツの方は、実は木の枠組みと紙の表面って都合上関節がスカスカだが、その関節は動物の毛が隠すようになってるし、万が一の時にはスカスカ部分の内側から当たった同色の紙が、素肌を見えねえようにしてくれる。

「撮影はなんとか、いけるんじゃないでしょうか」
知ってるか監督。

あんたが撮影の初期の方に出してた中身がなさすぎて一回却下されてた方針案の紙、この怪獣の胸の当たりに使われてるんだぜ。

俺が出して却下された改善案の紙は、この太腿あたりに使われてるんだぜ。

ああすつきりした。

どうだ、俺の気合いたつぶりの皮肉は。

こいつでちよつと溜飲が下がったからな、ちよつとは許してやるよ。

「じゃあ……俺寝ますんで……何かあったら起こしてください……」

撮影所の隅っこで横になって、眠る。

精根尽き果てるような作業だった。

過去最速に、過去最緻にやった。

重要な部分は、毛を一本一本植える作業を、最高最速の手の動きでやらんといかんかった。

ちゃんと怪獣に見えてるだろうか。

俺の技術を総動員したが、周りがどう見てくれるかは分からん。

ちゃんとリアルだろうか。

見た人が怖いと思ったり、リアルだと思ったりしてくれるものになってるだろうか。子供が、ワクワクできるようなものになってるだろうか。

主演の百城千世子と並べて、見劣りしないものになってるだろうか。
眠い。

撮影が上手くいくといいな。

頑張れよ皆。俳優が上手くやらねえと映画は失敗するんだぞ。

また何かあつたら俺が何とかするから、思いっきりやれよ。
眠い。

あと俺に何かすることあつたつけ。

眠い。

ないよな。

眠い。

あつたつけ？

眠い。

「お疲れ様。ゆっくり休んでね」

百城さん？ 違う？ 誰だ？ わかんね、頭回んねえ。

誰かが俺に何かをかけてくれた。

暖かい。

タオルかな、毛布かな。

嬉しいことしてくれるじゃねえか、誰だろう。

けどもう、眠すぎて、余計なこと考えてられなくて、俺は眠りに落ちた。

眠る俺の傍には、掛けられたその布しかないのに、何故か誰かがずっと傍に寄り添っていてくれている、そんな気がした。

ラストシーンの後は

今回のMVPを俺が個人的に挙げるなら、やっぱ百城さんになるだろう。

百城さんがいなけりゃ、俺は何もできなかった。

あの流れのまま完成まで行こうとしたなら、もつと根本的にしつちやかめつちやかになつてたか……あるいは、大幅な製作延期と人員入れ替えがあつただろう。

彼女の舵取りがあつたからこそ、この作品は完走できた。

俺は物を作っただけだ。

こうして仕事を一通り見ると分かる。

百城さんは本人の努力量と能力もずば抜けてるが、経験値が本当にダンチだ。

有能な監督やプロデューサーと組んだことがあるから上からの視点がよく見えていて、有能なチーフや制作進行の仕事を知っているから仕事の流れの調整ができる。

有能なカメラマンのカメラワークを覚えてるからカメラ映りもいいし、俺の仕事とかも知ってるつてのに服飾やセットの制作における皆の限界も見間違えねえ。

経験が彼女を支えている。

だから、撮影全体のコントロールなんかもできるんだな。

この映画は、根本的に少女の物語だ。
怪獣は全て背景。

物語のための舞台装置であり、ラスト以外人間は生きてる間だけまともに心情が描写され、怪獣になると背景になる。

主演の百城さんの主観視点と、そこで魅せる演技あってこそこの映画だ。

カメラは常に百城さんを映してるし、百城さんの周り以外をカメラは映さねえ。

だからこそ百城さんの時に繊細・時に大胆な演技が重要で、俺が作った怪獣スーツを怪獣プロレスに使わなくても許される作品だった。

怪獣は戦わなきゃならねえ、って風潮がある。

怪獣映画に怪獣同士のぶつかり合いがあつてこそ、っていうファンの大派閥があるもんだから、こいつは最低あと数十年はなくならねえだろう。

俺もちよつとそういうことは思うしな。

怪獣が主役じゃないってことが、俺のスーツの突貫作業を許してくれた。
常にカメラの中心にいた百城さんが、映画そのもののレベルを引き上げてくれた。

俺の頑張りを彼女が”無駄な頑張り”にしないでくれた。

俺の今回の仕事は、百城さんの表現力ありきのもんだった。

声が聞こえる。

特別先行試写会の会場から聞こえる声だ。

映画関係者やマスコミだけに見せる先行上映で、こつそり関係者に”こちよつと変だよ”って言われると、そこをこつそり直したりするのは制作側の秘密である。

まあとにかく、好評みたいで良かった。

これならいい感じに宣伝してもらえるかもな。

脚本と、予算が残った時の特撮と、百城さんの演技がこいつの売りだ。

出演者とかの名声に繋がるような作品になったら嬉しい。

あ、監督。

どうしたんだこんなところに。

こつちには自動販売機とベンチくらいしかねえぞ、会場戻れよ。

と、思ってたたら、感極まった監督に抱きしめられた。落ち着けよオッサン。

「ありがとう……本当にありがとう……！」

「……お気になさらず。仕事ですから」

もしかしたら足りないもんもあったかもしれないけど、俺と合わない監督だったってだけで、あなたの『映画を撮りたい』って気持ちは疑ったことねえよ。

だから、俺があんたの映画に全力尽くしたのは当然のことだ。

直してほしいところはいっぱいあるけどな！

「でもできれば、今回みたいなことはこれっきりにしてください」
「ああ、もちろんだ！」

本当に分かってんだらうなー？

二度三度と同じことあつたら流石に俺もちよつと仕事拒否を考えるぞ。

監督が会場に戻っていつて、入れ替わるように和歌月さんが来た。

「大盛況ですよ朝風さん。行かないんですか？」

「行きませんよ。そういうもんです」

「……そうですか」

「主演でないとはいえ、女優が会場抜けるとマズいですよ」

「所詮脇役です。マイクも渡されないような端役ですから。」

それにちよつと、ああいう空気はまだやっぱり慣れませんか」

アクションクラブ所属ならああいう会場に行ったことないわけがないだろうに。

俳優つてやつは慣れるまでが大変なのかもな。

とにかく、おつかれさん。

「いい経験になりました。それと、もう一つ」

「？」

「挑戦こそが人間だと分かりました。少し、自分の身の振り方を考えてみます」

おう、会場に戻りな。

挑戦、挑戦か。そうだな、挑戦こそが成長を呼ぶんだろう。でも俺らは仕事やってんだからなあ。

求められてんのは、予算を使って斬新な技術を編み出す挑戦をすることじゃなくて、既存の技術を使って安く高品質なウケると分かっている傾向のものを生産することだ。

昔から特撮はそうなんだよな。

現場で色々試行錯誤したり、新技術開発したりしながら、既存技術を使って予算の範囲で安定して望まれたものを作る。

矛盾してるようなことを繰り返してきたんだ。

スターズのメソッド的な、安定と一定上の質を目指す方向性。

黒さんみたいな、芸術肌の人を求める革新と挑戦の方向性。

どっちか片方に寄りすぎても、なんかあんまりよろしくねえ気がする。

挑戦なくして革新なく、挑戦は常にリスクを伴い、商売でリスクは極力減らすもんだ。そもそも、映画つてのは芸術なのか商売なのか、強いて言うならどっちなんだろうか

？ ただの造形屋には分かんねえな。

音だけで、少し遠くの特別試写会のざわめきを楽しむ。

心地いい。

ゴールに到達した、そんな感じがする。

撮影終盤の監督の名采配も、俺のやり方見て色々吸収したスタッフも、撮影期間に下手な俳優さんが何人か成長してたのも楽しかった。

ああ、楽しかった。

キツかったが、この達成感があるからやめられねえんだよな。

「ハリー・ポッターで美術監督が舞台挨拶してたことがあったけど、日本はあんまりないよね」

何であんたまでこっち来んの？

「百城さん」

「隣座っていい？」

「いいですよ。でも会場の方に……」

「少し休憩したいって言って出てきたから大丈夫だよ」

戻る気は無いか。

人一人分くらいの間を空けて、百城さんが俺の隣に座る。

わざわざあんなキラキラした場所からこんな陰の場所に来なくてもいいってのに。

優しいやつめ。

監督といい、和歌月さんといい、わざわざ会いに来てくれんの結構嬉しいぞ。

「監督がね、君をあそこで紹介したがってたよ」

特別試写会で？

何考えてんだあの監督。

試写会に来た人が困惑するかもしれない。

今日はそういうこととしていいイベントじゃねーぞ。

そういうのはスタッフ全員参加の試写会とかの時くらいしか駄目だろうが。

「今日は監督と俳優の挨拶ですよ。」

美術監督が出るなんて進行プログラム上許されません」

「主演と監督の合意があれば、そのくらいは許されない？」

俺が許さねえよ。

「そこで俺が『彼のおかげです』なんて言われて紹介されるなら、俺は絶対に行きません」

今日はスタッフが仲間を関係者やマスコミに紹介する日じゃねーんだよ。

映画の顔であるあんたらが、表舞台でキラキラと輝いて、注目とスポットライトの光

を浴びて、あんたらの撮影期間の頑張りが報われる日なんだ。

「監督のおかげで、俳優のおかげでもあるんですよ。」

俺のおかげ、なんて試写会で言わせるわけにはいきません。

称賛のベクトルが散っちゃうじゃないですか。

監督や俳優などが一番に目立たない舞台挨拶がありますか？　ないでしょう」
「出る気はないんだ？」

「皆さんに称賛が行くことが、俺の望みです」

「君に称賛が行くことが私の望みだつて言つても、私の望みは叶えてくれないの？」
ズルい言い方しやがる。

的確な言葉選びができるつてことは、言葉がどう受け取られるか分かつてることだから、記者会見とかでミスもヘマもしねえ。

言葉がどう受け取られるか分かつてるつてことは、言葉である程度は相手の心の動きや反応を誘導できるつてことだ。

俺が断りにくい言葉を選んできやがったなこいつ。

でも、駄目だ。

ここは譲れん。

俺は出しゃばらない。あんたらが主役だ。だからこそその、舞台なんだぜ。

「あなたが俺の助力で栄光を得るなら、俺は光栄です。それだけで十分ですよ」

あ、むすつとした。

「周りの人に色々褒められてたよ、監督。」

『十年ぶりの名作』

『本当に時々いいものを出す』

『安定感はないがやっぱり才能のある監督』

って、色んな人に言われてた。多分雑誌とかでも監督の功績が語られると思う」

ああ、そうかもな。

光るところはあったわ。

最終的に完成した映画を見たが、ふわっとした部分がフアジーなのにしつかり噛み合っていて、描写範囲と想像に任せる部分のバランスがめっちゃ良かった。

あの監督がああいう作品作るんなら、俺の方があの監督に合わせられるように頑張って成長していつて、また一緒に仕事してみたいと思える。

いいことだ。

一緒に仕事をした人がクソクソ言われてヘコむのを見るより、その人の仕事を手伝って、その人が映画の出来を褒められてる方が気分がいい。

造形屋は誰だっけそうだと思うけどな。

だから食い下がるなよ、百城さん。

そういう目でこつちを見んな。

「どんなに凄くても、褒められない裏方は辛くない？」

何言っただこいつ。

ん？ 自分の言ってることが分かってねえのか？

しっかりしろ百城！

「何言ってるんですか。今百城さんが褒めてくれたじゃないですか」

「――」

「俺は頑張りました。俺は認められ、褒められました。だから嬉しいんですよ」

特撮ヒーローものが『人々の期待と想いを背負ってハッピーエンドを作る主人公』ものなら、『大衆の期待とスタッフの想いを背負って成功させる』彼女こそが、まさに主人公だ。

主演が裏方の仕事を無駄にしないでくれた。

裏方が作ったものを、最高の作品にしてくれた。

主演はもう、俺の頑張りに報いてくれた。

かっこいいぜ、百城千世子。

「じゃ、飲み物くらい奢らせてよ。

この自動販売機のラインナップだと……いちごオレが好きだったっけ？」

「ああ、最近飲んでませんでした。小学生の時一時期めっちゃ好きでしたね俺ん？」

「あれ、あの頃、百城さん芸能界にいましたっけ？」

「いたんじやない?」

いたっけか。

会ったような、会ったことなかったような、いや会ったことあるような気がする。

俺が忘れてるだけか。

相手が覚えてんのに俺が忘れてるって大分失礼だな……気をつけよう。

私は……百城千世子は、昆虫と、他人の横顔が好きに変な子供だった。

誰かに見られてるなんて思いもしない人の横顔が、好きだった。

私に見られてると気付いていない、無意識の表情を盗み見るのが好きだった。

けど、それは周りの子供達にとっては気持ち悪いものだったらしい。

そりゃそうだ。

誰だっけ自分が気を抜いてた時、自分の顔を盗み見られるのは不快に決まってる。

ふと、思った。

私の横顔は、どう見られてるんだろう？

私が見てるなら、周りの皆も私のことを見てるんじゃないか？

そう思ったら、何もかもが怖くなった。

前を見てると、左右の人が怖い。

右を見ると、前と後ろの人が怖い。

私の横顔を見てくるかもしれない他人の目が怖い。

気付けば、逃げるように作り物の世界に没入した。

現実の世界は子供の頃の私にとって、とても生き辛かった。

そんな小学校生活の、ある日の夏だったと思う。

「朝風英二です。短い間ですが、よろしくお願いします」

彼は転校生としてやってきた。

私の一学年上の子として、私と一緒に登校班の新入りとして。

子供なのに、大人みたいな目と、大人みたいな挨拶をしていたのが、どこか不自然で

不揃いで、少し気持ち悪かった。

私にとってとても短い、ひと夏の思い出だ。

「英二君はお父さんの仕事の都合で日本の色んなところを転校しているの。」

日本の色んなところの話の聞けるかもしれないわ。みんな仲良くしてあげてね」

「「はーいー！」」

彼と一緒に登校して、彼と横並びに歩道を歩く。
横顔をじつと見つめてみる。

どこか遠くを見ている目が、目の前を見ていない目が、強く印象に残った。
長く見つめすぎたのか、少年はこつちを見た。

いけない。バレた。気持ち悪がられる。

横顔を盗み見られたら、皆普通は不快になるから。

「あ、あの」

「ん？」

「……………ごめんなさい」

先んじて謝ったけど、少年の反応は薄かった。

「俺はそもそも、お前に興味がない。だからどうでもいい」

「……………え」

「話は終わりか？」

私を見る目。

私はその目を知っていた。

虫が好きな私は知っていた。

この目は、人間が興味のない虫を見る時の目だ。

この人は、私に毛の先ほどにも興味を持っていない。

今の会話も多分、目の前を飛んでる虫を優しくどけてやったくらいの気持ちだったんだ。

ある日、教室で一人で机に向かっている彼が、木を何かで彫っているのを見かけた。

「何をしてるの？」

「造形」

少年は、物を作る人だった。

木を削って、削りカスが教室に落ちないように集めて捨て、木に塗装して、人形を作る。

朝一番に教室に来て物を作って、真面目に授業を受けて、休み時間に物を作って、昼休みもずっと机で作業をしていて、放課後もずっと教室に居た。

先生が違和感を覚えて、そんな彼に声をかけたのを見たことがある。

「英二くん、帰らなくていいの？ お父さんとお母さんが待っているわよ、きつと」

「待つてるでしょうね。」

でも俺は早く帰らない方がいいんです。

母は父と二人きりの時間を好んでますから。

俺が帰ると、母は俺に優しくしないでいけなくなりす。

それなら俺はギリギリまで学校で時間を潰して、二人きりの時間を作ってあげたいのです」

「……英二くん」

「子供の面倒を見るのは、僅かであっても、母と父の負担になると俺は考えます」

淡々としていた。

悔しさとか、寂しさも見えなかった。

ただ、なんとというか、『自分の幸せなんかよりも大切なものがある』人というのは、ああいふものなんじゃないかと、幼い頃の私は思った。

非人間。

クラスメイトと話もしない、物作りにしか興味がない怪物。

意味が分からないけれど……彼は、18歳になった今よりも子供の時の方が、ずっと仕事以外に何も無い人間”だった。そんな気がする。

その頃の私は知らなかったけど、小学校一年生の私の前に現れた頃の彼は、既に撮影所に入り浸るようになってから五年が経ったような怪物だった。

ただ、この怪物は、他人に頼まれると断らない人だった。

断れない、じゃなくて断らない。

” 他人のために物を作る” ことを当然だと思つてゐるような人だつた。

「プリキュアつくつてー！」

「ドラえもんつくつてー！」

「仮面ライダーカブトハイパーフォームパーフェクトゼクター持ちつくつてー！」

「ああ、いいぞ。ただし先に頼んだ人のをまだやつてるから、少し時間はかかるぞ」

木を拾つて、削つて、ペンで塗装して、子供達に渡していく。

子供が望めば何でも作つてあげる彼は、クラスの魔法使いだつた。

担任の先生まで可愛いキャラの人形を貰つていたのが、とても印象に残つてゐる。

別クラスに上級生から下級生までクラスに集まつて、彼のクラスはいつも大騒ぎだつた。

信じられないことだけど、クラスの子供達はみんな誰も彼と友達じゃなかつたのに、彼のことが好きだつたと思う。

なのに彼は周りのご機嫌取りをやつてゐるつもりなんてなくて、技を磨く修行の一環だと思つてゐたらしい。

彼の木彫りの腕は最初から上手かつたのに、ぐんぐん上達していった。

彼が誰とも人間らしく話をしていないのがなんだか怖くて、ある日思い切つて、私は彼のクラスに行つて話しかけた。

「虫の話、できる?」

「虫の話? ……そうだな。うちの親が仕事してる、仮面ライダーのモデルの話でも」

「仮面ライダー……日曜日?」

「そうそう。ちょうどカブト2006年開始の仮面ライダーカブトは、登場仮面ライダーのモチーフがカブトムシ、クワガタムシ、スズメバチ、トンボ、サソリ、バッタなど虫で統一されている。虫統一でこの数のライダーが登場するというのは非常に特徴的。スーツのデザインも極めて秀逸。完結してたしき」

今は虫が好きで、昔は昆虫が好きだった私は、当時から仮面ライダー等のモチーフ知識を集めていた彼と話が合った。

初代仮面ライダーはバッタだったらしい。

知らなかった。

彼もまた、私知ってるマイナーな虫に興味を持ち、モチーフにするために図書館に調べに行ったりしていた。

それが彼の助けになったのなら、今更になって誇らしい。

彼の能力がクラスで期待されたのは、当然図工の時間。

上級生と下級生合同の図工の授業で、クラスメイト達が注目する中、彼は紙にペンを走らせるだけでも上手かった。

周りに頼まれると、クラスメイトの似顔絵を頼まれた分だけ上手く描いてしまおうが、とても彼らしいと思った。

その頃の私は、絵にデザインを起こして、それを実物として形成していくっていう特撮造形の流れを、彼が学校で訓練していたのだと感づいてもいなかった。

むしろ、自分の絵が彼と比べて下手だったことを恥じていたはずだ。

恥じ入るだけだったはずだ。

けれど彼は私の絵を見て、笑わなかったし、バカにもしなかった。

「良いと思うよ。俺は美しいと思う。だって、魂込めて描いたってことは伝わってくるから」

「え……」

「美しい作り物は魂がこもってるものだけだと、母さんが言ってた」

魂。魂？ 作り物に？

「その人が作ったってことは、その作り物はその人の一部なんだぜ。父さんが言ってた」
私の一部？ 私が作ったものが？

よく分からないまま、日は進む。

ある日の朝、たまたま教室に彼だけがいるのを見た。

学校構造上、私は自分の教室に行く途中で必ず彼の教室が目に入る。

彼が座って作業をしている横の席に腰を降ろして、彼に声をかける。

「朝風くん」

彼は少し困ったような顔をした。

「ええと……ごめん、名前なんだっけ？」

「えっ」

なんと彼は、私はもちろんのこと、クラスの誰の名前も覚えていなかった。

彼は毎日何を作るか、どう作るかを考えていて、その合間に他人とした話をすっかり忘れてしまうような人なんだと、私はその時ようやく気付いた。

たぶん、私との会話もほとんど覚えてない。

「……あ、あー。もしかして絵の子？」

なのに、私が描いた絵のことは覚えている、そんな人だった。

私のことは覚えてないのに、私の作ったものは覚えている。

クラスメイトの名前は覚えてないのに、クラスメイトに作ってほしいと頼まれたもの
のことは一つも忘れない。

頭のスベツクの全てを物作りに振って、何もかもから貪欲に吸収しようとする子供。

私は思った。

（今の私が、今のこの人と友達になるなんて、絶対に不可能だ）

ほどなくして彼はまた転校していった。

また親の仕事の都合らしい。

彼の友達にはクラスに一人もいなかったが、彼が転校する時、クラスの子供達の誰もが彼との別れを惜しみ、彼を熱い言葉で送り出していった。

子供達の手には、彼お手製の木彫りに塗装した人形、彼が描いた子供達の似顔絵があった。

彼はたった一ヶ月で、子供達の心から一生消えない記憶を刻んでいった。

その物が皆の手元に残っている限り、誰もが彼のことを忘れないだろう。

友達ですらなかったというのに、きつとずっと忘れない。

私もまた、彼が好き飲み物の話を覚えていたりするんだろう。

彼が信じたものが何なのか、私にも少し分かった気がした。

生き辛い現実が戻ってくる。

いや、私が彼を見ていて忘れていただけで、現実はずっとそこにあった。横顔を見られるのが怖い。

そういえば彼は横顔を見られることを嫌がってなかったな、と思い出す。今なら分かる。

私が、人の横顔が好きで、人に横顔が見られているのが怖くなった人間なら。

彼は物作りが好きで、物作り以外に興味がない。

好きなものが価値観の底にある者同士と気付くと、彼が転校した後だと言うのに、彼という人がどんな人だったのか理解できてしまった。

物作りの彼がいなくなってから、映画の世界の作り物の虚構に溺れる。
そんな私は。

ある日、あの人に出会った。

「役者に向いてる」

私の頭を撫で、スクリーンの向こうの憧れだったその人は、私にそう言ってくれた。
当時押しも押されもしない大女優だったあの方は、私を褒めてくれた。

嬉しかった。

あの人に憧れて、星を目指すように、私は走り出した。

「頑張ろう」

自分に言い聞かせ、できることは何でもやった。

表情の作り方、言葉の選び方、服装、所作、体型、全てを調整コントロールした。

監督、カメラマン、美術、音楽、そしてそれらの人が使う道具についても熟知した。

SNSを利用しエゴサーチを繰り返し、統計を繰り返し、演技を微調整して人々が私に抱く印象を意識的に作り上げた。

寝ることも忘れ、観客^{たにん}の望む私を作る作業に没頭した。

努力は、数字になって返ってきた。

生き辛かった世界は、生きやすい世界に変わった。

私に被せる”私”という仮面を作る作業は、きつと楽しかった。

大衆のための仮面の強度を上げれば上げるほど、私は一人になってゆく気がした。

それでもいいと、そう思えた。

そう思う自分を主観的に見ても、客観的に見ても、女優は天職だと思った。

「朝風英二です。よろしくお願ひします」

天職の私がこの世界にいるんだから、同じく天職を得ている彼がこの世界にいるのは当然。

だから驚くよりも先に、納得していた。

ある日突然に撮影で彼と出会っても、驚きを顔に浮かべずに済んだ。

「ふいっ」

「どっしりました？」

私のことを全く覚えていない彼を見て、まずひと笑い。

仕事に集中するところらを見もしない相変わらずの集中に、またひと笑い。

彼が作ったドラマ用の特別衣装を見て、私の笑いは止まって、作り笑いに切り替える。

技量の上昇が凄まじい。

……あの頃作っていなかった服、あの頃扱っていなかった布で、これだけの仕事ができるなら、他はどんなことになっているのか、少しワクワクしてしまった。

久しぶりに会って、人間らしくなったなあと思った。

あと、なんだかからかうと可愛い反応を見せるようになった気がする。

背も伸びてなかったなあ。

でも昔と違って、遠い目じゃなくてちゃんと私のことを見てくれる目になっていたから、それはよしとした。

次第に、撮影で彼と絡む機会が増えていく。

彼が出世したとかではなく、私が新人から徐々に成功していくにつれ、どの現場でも重宝される彼と会う機会が増えてきた、という話。

「百城さんの演技や振る舞いは、一から十まで綺麗ですね」

そう彼に言われて、部屋に帰ってから、私は一人笑ってしまった。

彼は私に好意的。

それ自体は悪い気はしない。

でも彼が私に好意的なのは、私の普段の顔が全部作り物だからだ。

24時間365日、私は『普段の自分を演じる』ことで日常を過ごしてるからだ。

巧みな技術で作られた作り物を、彼はいつだって愛し、称賛し、その作り物を作るのに使われた技術と時間と努力を褒める。

だから、彼は私に好意的だ。

だから、彼は私の仮面に好意的だ。

それはきつと、彼がこれまでの人生の多くの時間を物作りのために使ってきたのと同じように、私もこの仮面を作るのに人生の多くの時間を作ってきたから。

作り物と本物の違いが分からないはずがない。

彼はプロなんだから。

私を知る限り、作り物の世界で最高のプロなんだから。

彼は私の仮面がそこにあることも、仮面の上に仮面を被って演技をしていることも、その下には私の素顔があることも、全部ちやんと分かっている。

彼が私に好意的なのは、私が仮面を常に被っているような女だから。

私が人生をかけて作り上げたこの仮面を、私の人生ごと肯定してくれているから。

忘れてはいけない。

私が忘れることはない。

彼は“人がものを作る”ということそのものを肯定する、物作りの達人だということとを。

「百城さんの笑顔は芸術ですよね」

英二君がそう言つて、一緒にいたアキラ君がなんでかびつくりしてたことを覚えてる。

この言葉は額面通りに受け取るものじゃないよアキラ君。

”あなたは綺麗ですね” って意味で受け取っちゃいけない。

芸術は、誰かが作るものだよ。

技を磨いて、センスを磨いて、人が意識的に作るものが芸術だから。

私の笑顔を芸術だと言つた彼は、とてもよく私のことを分かっていると思つた。

私の作り笑顔が気にならないの？ と、つまらないことを聞いたことがある。

「百城さんの作り笑顔は美しいから、それで良いんじゃないですか？」

—— 良いと思うよ。俺は美しいと思う。だって、魂込めて描いたつてことは伝わっ

てくるから

—— 美しい作り物は魂がこもってるものだけだと、母さんが言つてた

—— その人が作つたつてことは、その作り物はその人の一部なんだぜ。父さんが

言つてた

彼は十年経つても同じことを言つていた。

どうやら私の仮面には、ちゃんと魂がこもっているらしい。

少し、ほっとした。

彼は物を作ることにばかり興味があつて、他人の物作りを真似して、他人が作った作品ものを褒め讃えて、作り物の世界に現実の自分の全てを費やしても構わない人間だった。

彼は“百城千世子が作った”ものを、同じような台詞で褒めていた。私の絵も、私の仮面も。

私は嘘だらけかもしれないが、彼は子供の頃からずっと、私に対して正直な気がする。彼を信じて裏切られたことは、一度もない。

英二「演技がヘタクソなモデル出の人でも真面目に頑張ってる人は好き。ちゃんと上達するし」

俺の事務所のインターホンが鳴る。

来客を知らせる軽快な音だ。

クソ、今飯作ってたつてのに。仕事か？

つてアキラ君じゃねーか。

「おはよう、朝風君」

「おはようございます、アキラさん。朝ご飯作っていたんですが、食べていきますか？」

「お構いなく。そんなに時間がかかる要件でもないからね」

「まあまあ、どうぞどうぞ」

事務所にアキラ君を招いて、オムライスを出す。

まあ普通レベルだ、俺の作る飯は。

強いて言うならケチャップ一切使ってなくて、ライスはコシヨウを利かせたチキンライス、卵の上に味を調整したデミグラスソースが乗ってることくらいか。

「腕上があったんじゃないか、朝風君。美味しいよ」

世辞でも嬉しいぞアキラ君！

「しかしなんでこんなに卵パックが積み上がってるんだ？」

「造形の練習材料に使おうと思ひまして」

「透明な卵パックを？」

「ウルトラマンの故郷の、M78星雲の光の国ってあるじゃないですか」

「うん」

「昭和の時代の光の国って、卵パックやヤクルトの空容器で作ってたんですよ」

「えっ」

「卵パックって昔は特撮素材の王道でもあったんですよ。」

透明で不思議な凸凹感が出せますから。さよならジュピター1984公開の映画。近未来を舞台に、宇宙SFというジャンルに挑戦した一作。当時の日本はスター・ウォーズ（1977）の影響でバカみみたいに宇宙SFが人気であった。にも使われてましたね」

さよならジュピターは「要素を詰め込みすぎて破裂した」と言われる特撮屋の反面教師映画。

非常に高い技術を使って撮影されたが、億単位の莫大な赤字を生んでしまい、『高い技術と大きなこだわりがあっても売れるわけじゃない』ということの後世の俺達に教えて

くれた。

当時の日本SF界の総力を挙げて作って全力でコケた悪夢だ。

まあ、キネマ公式調べで「配給収入は三億円」、スタッフ曰く「配給収入は八億円だったが数億円レベルの大幅赤字だった」だとか。

この影響で、その後日本では宇宙を舞台にしたSF映画にスポンサーが集まりにくくなった、とか言われるレベルのやべーやつ。

黒山墨字監督作品を真似ました！ とか才能が無いやつがやろうとすると多分さよならジュピターと同じ方向に行く気がする。

「卵パックで光の国かあ……」

昭和の時代のウルトラマンの防衛隊基地の上の方見てみるアキラ君。

雰囲気出すために透明な卵パックがズラツと並べて貼られてるから。

造形屋の視点からあの辺見ると楽しいぞ。

「それに卵はたんぱく質、脂質、ミネラル、ビタミン等々を含む完全栄養食ですからね」
「卵は栄養満点だから健康と美容のため食べている人も多いんだっけゴジラVSスーパーゴジラ（1994）、暴れん坊将軍、はぐれ刑事純情派などに出演した君島十和子など。」

「ジョッキに卵割って溜めて一気飲みすれば、忙しい時の食事はそれで済ませられるん

ですよ」

「やめないか!」

「え、生卵だけの食事って味に目を瞑れば楽なんですけど……」

たまに醤油垂らすと味がいいんだこれが。

食事時間一分切るし、カロリーメイトやウイダーインゼリー感覚でやるといいぞ。

「それで、アキラさんは今日は何の用ですか?」

「君が卵だけ食生活なんてものをもうしないと約束するなら話す」

「……分かりました、約束しますから。何用ですか?」

「母さんが君を日本アカデミー賞の最優秀美術賞に推してきたんだそうだ」

「えっ」

えー?

「過分すぎませんかね?」

「僕は妥当だと思ってるけどね」

日本アカデミー賞と言えば、海外のアカデミー賞を真似して作られた40年以上の歴史がある、日本でも有名な映画賞だ。

美術賞はその中でも美術担当の人が貰う奴だな。

去年の2017年度受賞は、確かシン・ゴジラが最優秀作品賞で、最優秀撮影・最優

秀照明・最優秀美術・最優秀録音・最優秀編集もシン・ゴジラだった。

シンゴジすげえな！

最優秀脚本と最優秀音楽は君の名は。だったっけかな。

アリサさんが俺を推して、根回しして、俺が名作に美術監督クラスで関わって、日本アカデミー賞協会会員が各々の判断で投票して、そんで一番になったらたぶん表彰される。

受賞資格は、授賞式の前々年12月初から、前年11月末までの1年間に東京都内で公開された映画……だったっけか。

いやあ。

十代で取れるもんじゃねーから。

第41回が今年の3月に終わったから……アリサさんは今から仕込みを始めて、20年の受賞を狙う感じだろうか。

俺の成長も見込みで計算してんのか？

少なくとも俺が見る限り、現段階の俺の能力は日本アカデミー受賞級じゃねえ。仕事を速く終わらせるのと、仕事を上手く仕上げる能力はまた別の能力だしな。

「アリサさんは何か見返りを求めていますか？」

「よ、よく分かったね。これから伝えようと思ってたんだけど」

「合理ってやつです。多分スターズに籍だけでも置けとかじゃないですか」

「その通りだ。母さんは、君を懐に入れたらしい」

「そうしたら俺は衣装作成の方に注力することが多くなりそうですね」

スターズ専属の何でも屋がいるのは便利だ。

スターズ出演中の番組のどこにも援軍を派遣できるしな。

俺を新人俳優とセットで貸し出すとか、セット販売みたいなやり方もできる。

それにスタントマンが自分の着てるスーツの手入れをしてる内に、怪人の造形をやるようになった老狭新一さんなど、こういった転向はいくつか例がある。という仕事の転向はそんなに変なことでもねえ。

スターズという枠の中で俳優と裏方の距離を近づけるつもりなのかもな。

あとあれだ、色んな映画のスタツフロールや番組のクレジットに書かれるのが『造形

朝風英二』から『造形 朝風英二（スターズ）』とかの表記に変わる。

良い宣伝にもなるんだよなこれが。

仮面ライダーのOPとか目を凝らして見ると、俳優とかは基本的に所属事務所の名前クレジットされてねえけど、他の撮影スタツフの人は所属の名前を○で載せてたりすんだ。

恩を売りに来るなあ、あの人は。

アキラ君を使いに出してきたのも地味に計算尽くな気がする。

「つか、俳優を売っていくための道具の一つとして俺の能力を認めてくれてるんだろ
う。」

俺がこれでスターズに行かないとしても、恩を売れるならいつかは自分の手元に引き
込めると、そう判断してんのかもな。

俳優を思うように育てたいあの人からすりや、そのために使える駒が欲しいんだろ
う。

「もし仮にそれが成功したら業界内の俺の評価はまあ、ぐーんと上がりそうですね」

「一般の評価もぐーんと上がるんじゃないかな？」

「いえ、日本だと」

『日本アカデミー賞の優秀美術賞取った人の映画だ、見に行こう』

「ってなる人はあんまりいないんじゃないかなと思うんですね」

「む」

「海外と日本は美術にかける金額も違いますから、美術そのものの評価も違いますよ」

「一般的な映画見てる人って、そんな賞取ってる人とか気にしてねえぞ。」

「日本アカデミー最優秀美術賞取った人！　って宣伝より、ツイッターでバズったツイートの「この映画が面白い！」の方がよっぽど宣伝効果あると思う。」

日本アカデミー賞受賞者の名前みんな覚えてるような人に対してだけ宣伝になるよ
うなのって、あんま意味ねえんだよなあ。

映画見てる人の中心ってのは詳しいマニアじゃなくて、大衆なんだからさ。

この時代、SNSで話題になるってことこそが最強の賞にあたるのかもしれない。

「とりあえず保留でお願いします。」

あ、でも感謝の意を伝えておいてください。日を改めて俺も挨拶に行きます」

「分かった。君は今日も仕事かい？」

「受注してた造形を今日中に全部完成させようと考えてます。」

ただその前に美術監督協会絡みで少し行くところがあるので、帰ってからですね」

アキラ君が食い終わった食器を片付けて、俺の分の朝飯を飲む。

……飲むうと、したんだが。アキラ君にガシツと腕を掴まれた。アキラ君腕の力強つ

！

「生卵ジョッキは、やめよう」

ちえー。せつかく作った朝飯が。

映職連、つてやつがある。

日本の映画関連の職能連合だ。

映画に関わる各部門ごとに別々の協会があつて、それぞれに所属してる奴は所属してるし、所属してない奴はしてない。

映画監督協会、撮影監督協会、照明協会、録音協会、編集協会、スクリプター協会、プロデューサー協会、シナリオ協会、んで俺が所属してる美術監督協会。

これを全部まとめてんのが映職連、つてわけだ。

それぞれの協会は技術研究とか新人の育成とか、テレビ局との契約条件の改正行動とか、不当な処置への抗議とか色々やってる。

ああ、あと勉強会とかもやってんな。

著作権とかの法問題を周知させてんだ。

『映画監督に著作権はない』1970年の法改正後、映画の著作権は映画製作会社に帰属すると規定された。小説や漫画と違い、監督は作者としての著作権を持っていないとかな。

美術監督協会の所属は、正会員が70人くらいで全部合わせて100人くらいだ。

賛助会員事業への賛同の意を示して会員扱いで入ってる会社。入会金とか会費を払うことでその組織を支援していることも意味する。美術監督協会は仮面ライダーの西映やゴジラの西宝などが賛助会員。が30社くらい。

……まあ少ねえよな。

仮面ライダー撮影時の仕事っぷりとか、犬神家の一族人気推理小説映画化シリーズ。なんと三度に渡って映画化されている。美術チームを紹介してたりとか、色々やつてる。とこなんだがな。

親父の義理で入ってたけど、なんかあつたら俺も抜けるかもしれない。

出資金1万円で年会費3万6000円は結構高いんじゃないかねえかと最近思ってきた。

照明協会が年会費2万くらいで録音協会が年会費1万くらいだしな……まあこんくらいのお金で苦しくなるような生活は流石にしてねえけど。

あ、黒さんだ。って、その横のは美術監督協会がよく会う人。こつち見た。

待て、なんだその顔。

なんでこつちに寄ってくるんだ二人共。

「妥当な奴が来たな。おい、こいつにでも頼んでおけよ」

「えっ……うーん、そうですね……朝風さんなら、まあ……」

「黒さん、黒さん、超高速で話を進めないでください。俺ついていけないです」
何事!?

「最近病院から出られなくなった美術監督がいるらしいんだよ」

「そうなんですか。それが俺や黒さんに何の関係が……?」

「それで、映画美術スタッフ塾の講師が一人足りなくなつたんだよ」
あれか。

文化庁と美術監督協会が主催で、数日間映画美術を教えてもらえるつてあれだ。

講師は美術監督で、一般人からプロまで自由に参加できる。

基本的にはプロからセミプロが多いんだつたつかけか。

文化庁の事業名は……『時代の文化を創造する新進芸術家育成事業』だった気がする。
……そういうあれか。

「というわけだ、お前がやれ。」

俺も頼まれたがやる気しねえ。

クソ真面目なお前には妥当な仕事だろ」

「えっ、俺が代理の講師ですか?」

「真面目だなんて褒めてんじやねえんだぞ、クソ真面目つて言つてんだからな」

「うっ」

素直に人を褒めたりできねえのかあんたは！

「黒山さんにも朝風さんにも特に言うことはありません。」

こちらは無理を言つて頼んでいる側ですから。

今回はかなり自由にやつていいことになっていますので、節度を守つてくだされば」
出たよ節度。

自由にやれ、でも節度は守れ、つて要求は難しい事案No. 1を争えるやつだ。

自由にやつて失敗すると「節度を守つてなかつた」つて怒られるやつ。

責任取る偉い人からすりや、自由にやつてもらつて全然構わねえのに、問題起こつた時に自分が責任全部おつかぶるのが嫌だから、「自由にやれ、責任は取る」つて言えねえやつ！

「日程確認してもいいですか？」

「どうぞ？」

ふむ……いや結構近いな。

マジでギリギリの差し替えか。

こういうの準備期間があつた方が楽なんだよなあ。

講義だろ？ 今からパワーポイントとか弄つてる余裕ねえよな。

こういう時ちよつとズルい経験豊富なオッサンは、昔の講義に使つたデータをそのま

ま使ったりツギハギにしたりして使うらしいが、俺そういうのもねえし。

講義経験は0じゃねえから、まあやれと言うならやってみせるが。

「分かりました。引き受けます」

「おお、ありがとう！」

協会の人から仕事の資料を貰ってしまった。

どうすつかな。

期間的にスライドとか使えないんだが。

……ああでも待てよ、スタッフ塾はパワポ使えないおじいちゃんとかはホワイトボード使ってやってたんだっけか。

仕事のプレゼンほどガチガチに考えなくてもいいかもな。

「やりたくない仕事は断わりやいいと思うんだが」

黒さんがヒゲをさすってる。うるせえヒゲ引っこ抜くぞ。

「色々仕事やってれば、スキルの上昇にも繋がりますから。」

俺はまだ技術を磨いて成長していかないといけない段階ですよ」

「よく言う。千世子主演の試写見たぞ。十分な出来だったじゃねえか」

「ありがとうございます。そう言っていただけだと嬉しいです」

「この人に言われるならちよつとは腕も上がったと思えるな。」

「あの怪獣、黒一色なのにデイトールがよく見えてたな。どうやったんだ？」
お、目の付け所が違うな。

黒は光を吸収する物質だ。

光を反射しねえから、表面のデコボコが見えにくいんだよな。

だから体の表面にデコボコとか、段差とかのデイトール作っても分かり辛えんだ。

「あれ、黒に見えますけど、実は濃い黒と薄い黒と青い黒の三種類で分けてあるんです。でもそれだけでもデイトールは分からないので、要所要所にシルバーを薄く吹いてあります」

「ほう、シルバーか」

「黒の表面に薄くシルバーを吹いても、黒一色にしか見えません」。

でも太陽光や照明の光を受けた時、黒い体表に光の反射率の差ができます。

これで黒一色であるにもかかわらず、体のデイトールがしっかりと分かるんです」

近年で言うと、仮面ライダービルド・ラビットタンクハザードフォーム仮面ライダービルド（2017）の主人公黒一色強化フォーム。暴走の危険性を常に孕み、愛と平和を求めた主人公に人を殺させてしまう。主人公が殺してしまった人の墓前に跪き、泣きながら謝る姿は子供達に『人を殺してはならない』という倫理を教えた。なんかがこの手の黒一色造形の傑作だな。

黒一色はなあ。

クソ難関なんだよなあ。

黒一色がかっこいいのは分かる。

漫画とかだと黒一色でも体の線は分かりやすい。

だけどスーツ作ると、アップ以外ではアクション時とか黒一色の潰れた塊に見えるし、体が一色だから凝った体表デザインしても、テレビだと見にくいんだよな。

ハザードフォームはその点、実に高い技術が使われてやがった。

布の黒とウレタンの黒、マスクのみFRP（繊維強化プラスチック）の黒で造形。

”素材の黒を使い分けた”んだな。

そこにシルバー吹いてアクセントを付けたんだ。

アップ用とアクション用を兼用で作ったため、転ぶと頭のパーツとかバキバキにぶつ壊れるかもしれないやつベーススーツだが、その分美しい。

俺もその技術は吸収してる。

まあ硬質な黒一色のハザードフォームと違って、軟質な黒一色の怪獣にアクセントを付けるのはまたちよっと別の技術だったけどさ。

「黒さん、次に撮りたい映画とか決まりました？」

「役者が見つかってねえんだよ」

「黒さんのお眼鏡に叶う俳優となると、中々見つからなそうですね」

天才監督なこの人に必要なのは役者だ。

つまり『映画の顔』だ。

どんな人なら合格なのか、この人は役者に何を求めているのか、俺にはさっぱり分からん。

アラヤさんとか菅口将暉仮面ライダーW(2009)でもうひとりの主人公・フィリッポを名演。最後の別れのシーンは主人公の翔太郎とフィリッポの俳優、スーツの中のスーツアクター、撮影スタッフ皆が泣いた、感動のラストだったという。なお最終回ではない。さんみみたいな憑依型か、それとも百城さんみみたいなタイプで個性的な何かを持つてるタイプか……どうなんだろうな。

「とりあえず、スターズの俳優発掘オーディションの審査員やってやることにした」

「あ、それはいいですね」

ほー、考えたな。

スターズの俳優発掘オーディションは例年通りなら、女優部門だけで三万人が集まるつつーとんでもねえレベルだ。

そこから一人選ばれるってんだから、合格倍率は三万倍。

全体の0.003%しか受からねえ計算だな。東大に入るのより一万倍くらい難し

い。

これに受かるなら間違いなく有能……いや、待てよ。

スターズのオーディションに受かったらスターズ専属になるよな。

すると黒さんがあんま好きじゃねえスターズメソッドに沿う俳優になる。

スターズメソッドに沿う俳優になつてからじゃねえと、黒さんが俳優貸してくれと

言つても、貸してくれるわけがねえ。

じゃあオーディションに落ちた奴を黒さんが拾う、つて方法しか無いよな？

スターズのオーディションに来るくらいに意欲があつて、スターズのオーディションに受からないくらいには無能で、黒さんの目に留まるくらいには有能。

……黒さん！

そんな奴は流石にいねえと思うな！

「あーああ、全盛期のジュニーズと同じくらい人が集まつてるオーディションねえかな。ついでに俺の代わりに俺の目に適うような人材をそこから見つけてくるやつも欲しいわ」

「全盛期のジュニーズつて応募人数150万人採用1人のオーディションやったところですよ!!」

倍率150万倍だぞ！

東大に入るのより50万倍難しいんだぞ！

0・00006パーセントだぞ！ 分かってんのか!?

とりあえずスタツフ塾が慣例的に使っている東京都調布市小島町に向かう。
まあ挨拶だけでもしておこう。

移動の間、頭の中でアイデアを色々とまとめておく。

「あー！」

その途中で、顔を覚えているが知り合いではない少女が俺を見て叫んだ。

「見つけた！ あんたでしょ！」

「はい？ って、あなたは……」

「あの撮影に参加してた人！」

桃野さんだ。桃野もものアイさん。

雑誌CamCamの専属モデルだった人。

あの監督がオーディションだからで顔だけで選んだモデル！ 演技力クソの人！

「私がオーディションで選ばれたのに撮影で呼ばれるの中止ってどういうことよー!」
「ああ、そういうえば」

この人は監督が顔だけで選んだんだな……って俺が思ってたら、結局呼ばれなかったんだ。

予算がねえから。

まだ撮影に一回も呼ばれてねえ俳優を出演カットして予算を確保してたんだった。

だからこの子はあの映画に出てねえんだったな。

撮影見に来たことはあつたんだっけか。

なんだっけ、俳優をオーディションで選んで、選ばれたことを通知した段階では、まだ出演契約したことにならねえんだっけ？

俳優と映画の契約の種類は今の日本映画だと大体三種。

プロデューサーと俳優、プロデューサーと俳優の所属会社、プロデューサーと代理人で締結するやつだ。

雑誌専属モデルだと微妙だよなそこらへん。個人付きの代理人がいる人もいるけど。

こんなだから俳優がスケジュール調整しようと思つたところに、やっぱり出演なかったことにするわー、つて電話が来て、俳優のスケジュールが意味もなく空っぽになった

りするんだよな。

だってまだ契約してねえんだから。

しよーがねえ。

そういうもんだ。

じゃねえと、プロデューサーは複数人に一気に出演打診^{オファー}出して、返って来た返事の中から最善を選ぶってことができなくなるからな。

「それにしても、裏方の俺の顔をよく覚えてましたね」

「なんかホラ、秋に飛んでるトンボの羽みたいな速さで手を動かしてる人がいたから」
失敬な覚え方してんなこいつ。

「なんで私の出演がなかったことになってんの!？」

「予算が足りなかったんですよ。」

「桃野さんを撮影に呼んでギヤラを支払うだけの余裕がなくなっちゃったんです」
「え、そうなの？」

なるほど、私のギヤラを高く見積もりすぎたのかしら。

ねえ、あなたから見ても私ってそんなギヤラ高そうなくらい可愛く見える」

「え？ あ、はい。可愛いですね」

「うんうん、そうでしょ？ それなら次の機会に期待かな」

まあ可愛いけどツラの良さだけで何もかも上手くいくことはねーよ。

ええいこれだから面倒臭えタイプモデルは困る。

時々特撮にモデルしかやってこなかった人が来ると、たまーにクソ面倒臭いことになる。

業界の慣例とか常識とか全く知らねえ上に、顔やスタイルがいいモデルは褒められ慣れててプライドが高いことがたまーにあるんだ。

昔、あるモデル女優が泥に突っ込むシーンを拒否し、監督の指示を突っぱねた。

当時中学一年生だった俺は自ら泥に突っ込み、「一緒に行きましょう。」と女優に請い、女優さんは子供だった俺がやったんだからと自分を鼓舞して、泥に突っ込んだ。

今思えばあのモデルの人は子供に優しい分扱いやすかった気がする。

一部のモデルは清廉で清潔なイメージのため、汚れは絶対やらねえからなあ。

「というか、よく受かりましたね、オーディション。桃野さんは正式には出演なしとはいえ」

「アクションが求められてたでしょ？」

「はい。オーディションはそれを求められていたはずですよ」

「アクションを周りが見せてて、私の順番が来たの。」

アクションができますか？　って私言われたのね。私は微笑んだわ」

「……何故？」

「オーディションで自分の心証を悪くすること言うわけじゃないじゃない。」

そうしたらね、アクション監督が何か勘違いしたの。

『ああ桃野さん。何か引つかかってたんですけどようやく思い出しました』って「ん？」

「私と同じ名字で、別の映画で良いアクションを評価された人がいたんだって。」

だから名前だけうろ覚えしてたアクション監督は勘違いしたの。

まあいいかと思つて私は微笑み継続。監督達は私のアクションを見ないでくれて、採用！」

「アクション撮る能力全振りのアクション監督つて時々居ますけど……居ますけど……！」

お前は小森豊仮面ライダー鎧武におけるもうひとりの主人公、駆紋戒斗を演じた。アクションが求められるライバル仮面ライダーであるのに、森を数歩歩くと足をくじき、一アクションにつき一つ怪我をする虚弱男。劇場版ドラえもんを見る限り野比のび太より身体能力が低い。か……？

あの悪夢アクション能力を確認するオーディションで、審査員が各々に「アクションやってみて」と言つていく。小森豊の履歴には「(ボイス)ユニットで活動」と記載。こ

れを読んだ審査員は「(アクションあり)ユニットで活動してたんだ?」と勘違いして発言。審査員の「じゃあアクションもできるんだね」という言葉に、豊はイエスともノーとも言えずほんのり笑った。審査員は小森豊の採用を決定!アクションができない小森豊は「ドッキリだと思いました」と発言!審査の人は撮影開始と同時にのび太以下の動きに「詐欺じゃねえか!」と叫んだ!撮影開始と同時に現れた盛大な悪夢である。は他のところでも起きてたっていうのかよ……!」

「特撮にモデルが出て大成功して人気の女優に、ってルートがあるんでしょ?」

「まあ、それは、あります」

「私もそういうので楽に上に行きたかったな」

最近の若い奴はこれだから! 楽ってなんだ楽って!

……いや、この子、15歳だっけ。俺より三つ下なだけか。

最近の俺より若い奴はこれだから! 楽ってなんだ楽って!

そうだ、雑誌『Cawaii!』の読者モデルから芸能界に入った山木梓忍風戦隊ハリケンジャー(2002)のヒーロー側オーディションを受けたところ、悪の組織の闇落ちクノイチ幹部という、属性積載過多のキャラにキヤスティングされた人。事務所に無断で大晦日生放送でアントニオ猪木に脛相撲を挑み勝利し、事務所にクツソ怒られた女性。さんがいた。

あの人は主役級の正義の女忍者のオーディションを受けに行き、何故か闇落ちクノイチな宇宙ゴギヤルの『フラビージョ』というキャラに採用され、正義にぶつ飛ばされた女性！

あの人を引き合いに出してたしなめてやろう。

世の中は甘くねえんだぜ。

ところで山木さんが演じたフラビージョ資料漁ってた時に「ミニモニ。をデザインの参考にした」とか書いてあったんだがミニモニってなんだ？

今度検索にかけて調べておこう。

「桃野さん、ハリケンジャーを見たことありますか？」

「え？ ハリーポッターと賢者の石？ 見たことあるわよ」

「ハリとケンジャしか合っていないんですけど!？」

あ、やべえ！

今気付いたけどこの子15歳ってことは忍風戦隊ハリケンジャーの最終回の年に生まれた子だ！

分かるわけねえわ！

「私の子供の頃ちよつと見てた戦隊、AV女優が出てたつて後から知ったの」

「桃野さんの年齢なら……：：：：：ゴーオンジャーのケガレシア炎神戦隊ゴーオンジャー（20

08)で害水大臣ケガレシアを演じた及河奈央のこと。TV監督、舞台俳優、歌手活動と非常に多芸。また演技の幅も非常に広く、特に『悪』を演じさせると天下一品。たった三年間でウルトラマン、スーパー戦隊、仮面ライダー全てに出演するというとんでもない人。でしようか」

「AV女優出すくらいなら、私を出したりした方が数字取れそうだって、あなたは思わない?」

……ううむ。こんくらいの自分のツラに自信があると人生楽しいだろうな。

つかなんだ、俺に番組に推薦とかしてもらえないかと思ってるだろうか。

「AV女優が出るなら私もそういう番組出るんじゃないの?」

「そういうことはあまり公に言わない方がいいですよ」

「そうなの?」

「そうです。少なくとも俺は、同じシリーズに先に携わった先人の悪口に、いい気はしません」

俺からすれば皆、尊敬すべき偉大な先人だ。

あんたにそう面と向かって言う気はないがな。

俺は尊敬してる人間の悪口が言われてたら、ずっと忘れねえタイプだぞ。

元AV女優とかを子供番組に出すな、つてナチュラルに見下してる親御さんの声には

領けないのが俺だ。

「変なの。私にイラつとしたなら、怒ったり怒鳴ったりすればいいのに」

……。

いいんだよ、別に。

無知つてのは怒鳴られるほどの罪じやあねえと思うしよ。

「でも、ごめんね。怒らせちゃったなら謝るわ」

「いえ、お気になさらず。ただ、気を付けてくださいね」

……そこで謝れるなら、あんたは多分大丈夫だよ。

今回の映画に出られなくたって対した痛手にはならねえさ。

モデルやってても、俳優になっても。

「俺の個人的な意見で申し訳ありませんが……」

『こつち』に来るなら、桃野さんは振る舞いを少し直した方がいいかもしれませんね」

「えー、そんなにグチグチ言ってきそう？」

「今の業界の偉い人達は結構厳しいですから。ちよつとでも隙を見せたらガンガン来ま

すよ」

「先送りにしたーい……」

「業界のご老人などは、顔が良くて華やかな子より、地味でも礼儀正しい子が好きですか

ら」

「問題は先送りにしておけば私より先に口煩い業界のジジイとババアは死ぬんじゃない？」

「ぎ、斬新！」

” 私若いもん” って顔に書いてある！

「嫌味で言ってるわけじゃないです。忠告ですよ」

「あんたが言ってることが必ず正しいって保証もないでしょ？」

「む」

確かに、それもそうだな。

俺も所詮は18歳の若造。撮影所に15年程度出入りしてるだけの若造だ。

50歳になっても元気にアクションしてる低岩さん低岩成二。仮面ライダージオウのスーツアクターも担当。その動きは年齢を感じさせず、ゲイツ（逆らった相棒ライダー）は死ぬ。や、53歳になっても若々しく特撮部門を取り仕切る黒倉さん黒倉伸一郎。英二が特撮部門の仕事で一番お世話になっているプロデューサー。みたいなこの業界に三十年いる人達と比べりゃ、その半分くらいしか経験を積んでねえ。

「私が女優として大成しなかったら、顔が存在意義の私はどうなるの？」

「あなたの存在意義はあなたの母親が生んだという事実だけでいいんじゃないですか

「？」

「褒められたいじゃない」

「いや、あの、その……そうですね。その原動力は間違つてはないです」

承認欲求。

誰の中にもあるもので、日本人の美德では”ないほうがいい”とされるもの。

こいつから膨大なエネルギーを得て、凡人には絶対にできないような努力と研鑽を重ね、誰も真似できないような能力を身に着けて成功した人を何人も見てきた。

この人もそうなるかもしれない。

そうだったら、楽しそうだ。

「近日俺講義するんですが、それに来ませんか？ 参加費は代わりに払っておきます」

「講義ー？」

「百城千世子が成功した理由を、ちよつとだけ講義内容に加えておきます。

ですから真面目に聞いてくださいよ。真面目にこの業界でやっていきたいのなら、ですが」

「『チヨコ』の？　へー、いついつ？」

どうせ真面目な講義やるにやあ準備が足りねえ。ちよつとためになる講義を聞かせてやるよ。

「ところで、今の子供がスマホを欲しがる理由と……」

昔の特撮番組で、携帯電話型の玩具が売れた理由の共通点をご存知ですか？
子供が買いたくなる玩具って、なんだと思う？

気楽で真面目な撮影の授業

別に俺は卵が格別好きってわけでもねーんだよ。

卵パックを素材としてゲットする時に、結構卵が余っちゃったただけだ。

あとほら、食事が楽だし？

準備の時間も食う時間も大してない食事っていいじゃねえか、な。

卵は食うけど時間は食わない。

理想的だぜ。

ところがアキラ君に禁止されてしまった。

一回の食事でゴリゴリ卵を消費する方法がなくなっちゃった。

こいつは困る。かなり困る。

なので仕方なく、ケーキを焼くことにした。

堅苦しい並びの席や机の並びは取っ払って、座った受講者が円形に、かつそれぞれの距離がそんな離れてない感じにする。

まあこれで真面目に受講する感じじゃないのは分かってもらえんだろう。

受講者が揃ったところで、ケーキを振る舞った。

まあ食べ食べ。

ためになる話はしてやるから。

その上で、肩の力を抜いて楽しんでくれ。

木村桂さん、って作家がいる。

日曜朝の連続ドラマや映画の原作になった小説を書いたりした人で、この人が書いた小説は200万部以上売れたとかいうすげー人だ。

ケーキカフェ開いたり、絵を描いて絵画展を開いたりと多才な人でもある。

この人は学生時代演劇部で、俳優の漫画が好きだった。

その例として上がるのが、『ガラスの仮面』貧しい家に生まれた『自分には演劇しかない』女の子が、人格ごと役に成り切るような憑依型の芝居を武器に、周囲からの畏怖と尊敬と友情を受け止めながら成長していく物語。現在連載開始から42年だが連載中。連載中である。という漫画だ。

この木村さんのケーキカフェに、ガラスの仮面の作者がやってきた。

その時に振る舞ったオリジナルケーキが、俺が皆に振る舞ったこれである。

ふわっふわのパウンドの上に、赤ザラメを入れて煮た甘々のリングを並べ、浅間ぶどうのジャムを散らす。

するとジャムがリングにすうっと吸収されて、透明になって輝き、まるでガラスの仮

面のように見えるのだ。

木村さんはこいつを、シンデレラがガラスの靴を履いてお姫様になるように変わる、ガラスの仮面の役者のイメージで作ったという。

ケーキをカットする時には変身したい役をイメージして、とか言ってるくらいだ。

こいつほど、『女優』を形にしたケーキもねえ。

「この講義ではあまりメモを取る必要はありません。

ケーキでも食べながら、知識として血肉にするイメージではなく、心にふんわり留めて下さい」

まあ女優にこれ食わせたことねえんだけどな。

子役で売れてた頃のアキラ君に食わせたことがあるくらいで。

……アキラ君にやオムライスで腕上げたって言ってもらえたい、あの頃よりは味が良くなつてると信じよう。

「それともう一つ。

この講義では、”恥”はありません。

”正解”もありません。

発言を恐れず、俺に質問されて正解できなかつたことを恥じないでください。

何故なら俺もまた、皆さんに教えられるような”業界の正解”を知ってはいないから

です」

ケーキを食べてる人達の内何人かが、怪訝な顔をする。

おお、そうだ、その顔が正しいぞ。

講習会で見たもんを絶対の正解だと思うようなやつはこの業界では生き残れんぞ。しかし、地味に高校の演劇部部长とか、大学のプロ志望演劇サークルとか多いな。

あ、黒さん監督でドラマのピンチヒッターやった時の大学生バイトもいる。

今回のスタッフ塾は気楽な感じにしてるつてのは本当だったんだな。

これなら、俺みたいな若造でもやりやすい。

”ものを教える”って意外と年齢重要だからな！

年下が年上にもものを教えようとするといラツとされるのが普通だからな！

学校の先生が年食った先生の方が有利なのがよく分かるわ。

「皆さんは美術を学びに来たのだと思います。

ですがその前に、俺は皆さんに一つ前提として認識しておいてほしいことがあります。

俳優です。

役者です。

演者です。

我々が作るものは、俳優を時に引き立て、時にぶつかり、彼ら『人』を輝かせるもの
そう、まずはそこだ。

「そのために一つ、今の時代の演劇の源流の一つを解説したいと思います。

二十世紀のフランスの表現者、エチエンヌ・ドウクルー1898年から1991年を
生きたマイムの傑物。日本演劇界では長らく存在すら語られていなかったが、ここ十年
ほどでぐんと注目度が上昇した。の『コーポラルマイム』です」

さーて、資料準備の時間はなかった。

俺の地金の知識だけでどこまで行けっかな。

「皆さん、パントマイムは知っていると違います。

ピエロとセットのイメージも多いのではないのでしょうか？

無いものを有ると見せかける身体表現法の一つです。

コーポラルマイムはここから派生したものの一つです。例えば……こう」

ちよつと、ギターを弾く真似をしてみせる。

俺の演技力なんてたかが知れてるがな。

「皆さんの席に最初から置いてあるファイルに、紙が入っていると思います。

そこに、今俺が何をしてたかを想像して書いてみてください。間違ってもいいで

す」

紙に書かせて、回収する。

……ふむ。

50人中45人正解か。まあギターならこんなもんだな。

「正解は、ギターの演奏です。」

45人の方が正解されましたね。

あ、正解できなかつた人も大丈夫です。これは俺の演技が下手なだけだからですからね！」

くすつ、とちよつと笑いが漏れる。

おおよかつた笑いが取れた。

こう自分でやってみると、タレントとかはトークで笑い取るの相当勇気使つてんなこれ。お笑い芸人の勇気には俺はとても敵いそうにねえ。

「皆さんは、俺がギターを弾く真似をしていると分かりました。」

それは皆さんの中に、『ギターを弾いている人を見た記憶』があるからです。

少しばかり抽象的な言い方をすると、『ギターを弾いている人を見た感覚』があつたらです」

皆の中にあるギターの記憶が想起されたつてことだが、ここは感覚と言つておこう。多分、その方が最終的に正しい表現になる。

「ですが、ギターが無い国なら？」

ギターが全く普及してない国で、今の俺の演技は伝わったと思いますか？」

何人か目の色が変わったな。将来有望だ。はよプロの世界で活躍しろよ、待つてるぞ。

「皆さんの中には、ギターを弾く人を見た時の感覚がありました。

俺がギターを弾く真似をした時、その感覚が蘇ったのです。

だから俺がギターを持っていなくても、感覚で分かったんですね。

これがパントマイムであり、現在の演技の基本技術の中にあるものです」

経験を元にした、意図的な感覚の共感。

コップを持ったことがある俺が、コップを持ったことがあるお前達の前で、コップを持つような真似をすりゃ、お前達全員に分かってもらえるだろ？

「ギターの演技が、皆さんの内にギターの感覚を呼び起こしました。

友と笑い合う時の俳優の笑顔の演技は、皆さんの内に親しみを。

恋人が死んだ時の俳優の号泣する演技は、皆さんの内に悲しみを。

裏切られた時の俳優の激怒の演技は、皆さんの内に怒りを呼び起こすと思います」

よしよし、理解できた人が増えてきたな。

悲しむ演技が、観客に登場人物の悲しみを想像させ、悲しみを感じさせる。

色恋の演技が、観客に恋の想いを想像させ、色恋のもどかしさを感じさせる。

俳優が悲しんでねえのに、恋してねえのに、観客は俳優に共感する。

そこにそんな感情はねえのに。

”無いはずものが有る”と勘違いして、それに共感する。

何故なら人間には読心能力がなくて、共感能力があるからだ。

相手の気持ちを想像する能力こそが、人間を人間たらしめるからだ。

監督や俳優はこういう展開で、こういう話を見せて、こういう演技を見せれば、観客

はこういう感情を抱く……そんな計算の元に演技を構築する。

演技で、観客の心が見ているものをコントロールする。

マイムと同じように。

見たことがないはずのものが、感じたことのない感情が、観客の頭と胸の内に

しつかりと出来る。

それを誘発させる、俳優の技術。

「エチエンヌ・ドゥクルーの『コーポラルマイム』」。

俺が先程話に出したそれは、そういう心理的な動きを体で表す試みでした。

エチエンヌは体の動きと心の動きを直結させようとしたのです。

ならばそれは、現代の演劇にも継承された、観客の感覚を制御する『感覚の芸術』で

す」

” 怪獣を見上げて怯える女優のリアルな演技”なんて、エチエンヌがいなかったなら生まれるのがどんくらい遅れてたのか分からねえ。

「この『感覚の芸術』こそが、演劇の本質だと自分は考えます」

まずここを掴んでおいて、そこから俳優さん達のために物を作ると、なんか上手く行く。

「パントマイムから生まれ、後のパントマイムの始祖となったコーポラルマイム。

コップを持った時の体の動きを再現し、それだけでコップを幻視させる。

コップを手を持ってもらえないのに、です。

それはとても凄いいことですよ。

ここを源流に持つ演技と、俺達のようにセットや背景を作る人間には共通点があります」

パントマイムが、ギターの演技をしても。

美術が、悲しみに満ちた背景を描いても。

俳優が、怒りの演技をしても。

観客の想像力がそいつを正確に分かってくれねえなら、全部無価値だ。

「それは、『観客の想像力を利用する』ということですよ」

俺がギターを弾く真似をする。

今度はちやんと、50人全員が分かってくれたみてえだ。

事前の説明つてやつは強いな。

観客の想像力を利用する本番の映像作りじゃ、こういう説明できねえつてのが難儀だ。

これが俺じゃなくて立派な俳優なら、はつきりギターの形まで皆に見えてたかもな。「観客の想像力利用は、とても強いものです」

こいつを念頭に置いておくことで、大きな感動を呼ぶ一流の創作者つてやつはいる。

「人間の脳は、自分で考えて至った事柄に強い感動を覚えます。」

『アハ体験』何かに気付いた時、脳が肯定的な感情を発するという心理学概念。などもこれにあたりますね。

『彼は悲しんでいる』という説明文を読んでも悲しくなることはあるでしょう。

ですが、説明文抜きに表情などから『彼は悲しんでいる』と、自分で気付いた時……」

”人に教えてもらった”より、”自分で考えて気付いた”だ。

「……人の心は、大きく揺れます。想像力が、対象の悲しみを想像させるからです」

クイズの難問は他人に答えを教えてもらうのと、自分で考えて解くのが、全然違うだろ？

「コーポラルマイムとはすなわち、技術的に想像力を利用するものでした。

天才のものであった演技の武器を、技術的に天才以外の武器にする……

それこそがマイムであり、現在の演技メソッドの基本にあるものです。

そして技術的に成されたその演技を、俺達は技術的に引き立て、輝かせる必要があります」

そうそう、姿勢正すのは好印象だぜ、お前ら。

何も考えず俳優と仕事すんじゃねえぞ。

俺達は造形・美術・衣装何やるにしても、俳優と共闘して最後まで一緒に戦い抜く、最高の仲間じゃねえといけねえんだぜ。

「エチエンヌのコーポラルマイムは、当時の名演出家に『系統的』と讃えられました。天才的、ではありません。

この技術はとも良く体系的に整理されていたからです。

つまり、後世の人間に伝えやすい、継承と改善がともやりやすいものだったんですね」

なんて言えば良いんだろうな。

『暴力』を『柔道』にした人って言えば、エチエンヌ・ドゥクルーの功績も伝わるかね。そのため、エチエンヌの指導を受けた者達は次代のマイムの中心になっていきました。天才が次代を作ったのではなく、技術の継承と指導が次世代を作ったのです。

他の分野の技術と同じですね。総体の進歩は、自分だけのやり方で偉業を成す天才でなく、大衆でも使える技術が成します」

自分一人で完結する怪物みたいな天才もいりや、全体の技術レベルを引き上げるタイプの天才だっているさ。エチエンヌはまさにそれだった。

「もちろん、最高の演技、最高のマイムは凡庸な人にはできません。

技術とはあくまで、底上げです。

生まれつき名演が出来る天才と同じことを、努力する者に実演させる技術とも言えます」

後ろの方の席でケーキを食ってる桃野さんに視線をやる。

「個人的な話になりますが、百城千世子さんなどは、こうした技術を磨き上げた人ですね」

分かったか、モデル上がり。

百城さんとかは、大衆の反応と理想を常に想像して、そいつを現実にしり合わせてる

人だ。

んでもってそいつは、積み重ねた技術の塊だ。

努力は避けられないもんだぞ。

そもそも演技ってのはなんだ？

『演じる技』だろ。

技ってのはかけた時間とかけた労力に比例して伸びるもんだろ。

積み重ねは前提だ。

誰かに教わるのも前提だ。

自分の外側から何かを学ぶのも前提だ。

モデル出身とか、時々容姿だけで女優もイケると思ってる奴いるけどさ。

過去に俳優になるための専門訓練一切受けてねえのに、それでいきなり俳優として何

かしら最強クラスの能力を発揮するとか。

そんなことが出来るやつがいたら、そいつは本気でバケモノだと、俺は思う。

そんな奴がいたら、誰もがそいつの舞台を見に行くだろう。

他の奴が出る映画も後回しにして、見ないで、そいつが出る映画を見に行くだろう。

そいつが出るテレビドラマにこそ価値があり、他に価値はなくなるだろう。

だってそうだろう。

天才が作る面白い作品だけ見てたいってのが、観客の本音のはずだ。

スピルハンバーグとかの天才巨匠の映画だけ見てる、って人は少なくねえと思うぜ。本当に化物みたいな天才俳優が出てきたら、業界まるごと大変なことになるだろうな。

『いるはずのない本物』ってのはそういうもんだ。

そんな奴が現れたなら。

きつと、俺も目を奪われる。

その人に心奪われるかもしれないねえ。

かつて一度、限界を超えて分不相応なほどの名演を魅せたおふくろに、心のどつかを
持っついていかれた親父のように。

だから、そんな奴は現実にはいやしねえんだ。

そんな奴がいねえからこそ、今のこの業界は成り立っている。

「さて、話を一度まとめましょう。」

俳優も美術も同じく、観客の想像力を利用する者。

無いものを有ると魅せる、想像力を利用する者。

そしてその始祖の一つにあたるコーポラルマイムは、整理された技術の体系です」

さて、ここまでの流れの総決算だ。

芝居のシチュエーションを一つ、たとえに出してみるか。
「俺がこれから、情景の説明をします。」

皆さん、ちよつとそれを想像してみてください。

三人家族がいます。

父、母、娘です。

ですが父は浮気をして家を出ていってしまいました。

母は寢床から出てきません。

娘は一人居間のテーブルに食器を並べます。

つい、三人分の食器を並べてしまう娘。

父はもう帰つてこないのに。

暗い居間が悲しみと絶望を煽る。

歯を食いしばり、目を瞑る娘。

娘は父の食器を衝動的に叩き落とします。

落ちた食器が割れ、音が鳴り、娘はその場に泣き崩れます……」

ドラマなら、よくありそうなシチュエーションだ。

「この間、画面には喋るキャラというものが存在しません。

状況の説明も、心情も、誰も説明してはくれません。

ですが俺達は観客に全てを想像させ、全てを理解させないといけません。

役者の演技と、我々美術の舞台セットに物作り。そこに全てがかかっていると見え
ます」

撮影セットをどう作る？

どんな家具を作って置く？

娘にはどんな服が良い？

部屋の雰囲気は暗い方がいいか？

食器は割るんだから作らなくちゃならない、ならどういうデザインにする？

考えることは無限大、選択肢も無限大だ。俺達は物を作る立場なんだからな。

俺達はここで何が何でも、『娘の悲しみ』を観客全員に想像させなきゃならねえんだ。

「俳優は名演を。

美術は悲しみを伝える雰囲気の写真セットを。

小道具は良い割れ方と良い音を生む食器を。

大道具はムードを壊さない家具の自作が必要となります。一つ欠ければ、台無しで
す」

皆でやってる撮影に気は抜けねえ。

分かるだろ？ こういう講習に来てんだからよ。

「いいですか？」

観客の想像力をかき立てるんです。

見ている人の感覚をコントロールするんです。

悲しみに満ちたこのシーンで、間違っても観客を笑わせてはいけません」

この娘の俳優が悲しんでなくても、その悲しみを全員に共感させる。

そいつが演技。

そいつが演劇だ。

想像力で無いものを有るように感じさせねえと、な。

時々、役が悲しみの底にある時、自己催眠じみた技で自分も悲しみの底に行く俳優もいる。

けどこいつは例外だ。

極端なやつだと、役に引つ張られて心が戻って来なくなる。

底の底にまで沈んで戻って来なかった女優とか、俺は何人も見てきた。

流石にああいうタイプの俳優は、今の業界だと矯正される……と、思う。

「さて、想像力の話が終わったところで、ここで話をガラッと変えましょうか」
よし。

話も一段落したし、次の話だ。

「いいですか。」

今俺がしたのは、作品のこだわり部分の話です。

ですが映画にしるTVにしる、こだわってるだけだと売れません。

売れないと偉い人からかなりボロクソ言われます。売れないことは死ぬことです」

えっ、と漏れた声が聞こえる。

そりやそーよ。

俺は今回講義する側だからな。

講義すべきことは、ちゃんと講義していくぞ。

「一例を出したいと思います。特撮ヒーローの、『腕時計』と『携帯電話』についてです」

ちゃんと聞いておけよー。

どの界限でも物を売るテクニクはあつて損しないからな。

「スーパー戦隊は昔、猫も杓子も『変身ブレス』でした。

ブレスというのはブレスレットの略……ですが、戦隊は違います。

戦隊が変身に使うブレスというのは、腕時計がモデルだったんです。

当時、子供達にとって腕時計というのはかっこいいもの、大人の象徴であり憧れの物

でした」

俺も小さい時ちよつと腕時計に憧れてたなー。

「スマホの流行の前、ガラケーが普及していた時代。

子供達にとって、『携帯電話』は憧れでした。

今でこそやや古い印象を受けるガラケーですが、当時は最先端で憧れの的だったので

す。
ガラケーの携帯電話を变身ツールにした仮面ライダーやスーパー戦隊は、大成功を納めました」

電磁戦隊メガレンジャー1997年開始。追加戦士の大人が携帯ツールを使っていた。一般人を守ってきた主人公達が、悪の組織による『ヒーローの周りの一般人を理不尽に襲う作戦』によつて、一般人の皆に責められ排斥されるドハードな終盤展開はもはや伝説。とか、仮面ライダー5552003年開始。拳銃にもなる携帯電話が異様にかっこいい。当時、革命的レベルにかっこいいアクションと、革命的レベルに面倒臭い人間関係を仮面ライダーに持ち込んだとびっきりの異色作。とか、魔法戦隊マジレンジャー2005年開始。魔法使いの杖に変形する携帯電話が变身ツール。企画段階ではハリウッド・ポッター映画が不死鳥の騎士団まで公開されており、それも計算に入れられていた。とかな。

「当時、これらのデザインに関わっていた野上野上剛さん。国内国外問わず活躍し、メタルヒーロー・戦隊・仮面ライダー・ガンダム・ベイマックス等々そうそうたる仕事を経

歴に並ぶ現代の怪物。過去にゆでたまご先生と組みラーメンマンのフィギュア作りをしたことが有るなど、仕事の幅が本当に広い、絵もゴムフィギュアも超合金ロボも作れるお人。さんは言いました。

これらの子供向けオモチャでもっとも有効なものは、『大人だけが持っているもの』だと」

子供達にとって、それは自分が持つてない、大人が持つている、どんなものなのか想像するしかなかったもんなのさ。

「子供は憧れ、想像します。

自分が持つていないものを。

大人が持つているものを。

実際に手に入れてしまえば、想像以上のもではなかったりもします。

それでも、憧れたそれを手に入れた自分を想像して、親に買ってとねだるのです」

どんなものなのか？

何ができるのか？

大人が皆持つてくるくらいすごいものなのか？

子供の想像は期待に、期待は欲求に変わっていく。

だから欲しがる。

想像力に引っ張られるわけだ。

「想像力は、作品の質の向上、グッズの売上の上昇のどちらにも使えます。

仕事の時に、気が向いた時にでも観客の想像力のことを意識してみてください。

何の情報も出されていない本。

気になる情報だけ出されていて、肝心な部分は買わないと読めない本。

消費者というものは想像力を働かせるため、後者の方を買いたくなるそうですから」

何をすりや評論家に受ける作品になんのか。

何をすりや売れる作品になんのか。

正直、これだけしておけばいい、っていう完全無欠の正答はねえ。

だから、俺が知る限りの”成功の傾向”を教えておく。

俺にできることなんてそんなもんだ。

「では、最後に」

ぼちぼち時間だ。

時間配分的に、俺の講義はもうおしまい。

「19世紀のイタリアの天才彫刻家。

ジョヴァンニ・ストラッツアの『ヴェールの乙女』の写真で、締めさせていただきま

す」

一枚の写真を、高解像度でプリントしたもんを、皆の前に広げた。

お、結構初見な感じの反応があるな。

プリントしてきた甲斐があった。

ヴェールの乙女は、透明感のある石の彫刻だ。

石を彫っただけの彫刻であるのに、透明なヴェールとそれを被った女性が見事に表現されているっていう、とんでもねえ芸術だ。

石は透けない。

なのに透けている。

存在が矛盾そのもので、まるで魔法がかけられてるみてえだ。

見ているとワクワクして、見ていて『楽しい』と『美しい』が両立してる。

「皆さんがこっちの世界に入ると、映画は芸術だ、映画は娯楽だ、と色々知るでしょうが」
良いよな、物作りって。

「見た人をワクワクさせる芸術が理想的だと、俺は考えます」

ヴェールの乙女を見てると、まだ”魅せ方”ってものに限界はないって感じる。

俺達創作に携わる人間は、まだまだ上を目指して行くべきだと思える。

21世紀の人間が、19世紀の人間に負けてられるか。

「こっちの世界には、『正解』はありませんが、『合格』はあります。

そして厳密に言えば『不正解』もなく、『不合格』だけがあります。

予算、監督の好み、プロデューサーの意向、スポンサーの要求……

多くの要素があり、俺達にとっての駄作が採用、最高傑作が不採用になることもあります」

ボツは結構心に来るが、それでへこたれてたら仕事はできねえ。

「俺の講習はここで終わりですが、皆さんはここからがスタートです。

ですので、俺から言えるのは一つだけ。『不合格』でめげないでください」

今の俺はプロじゃねえ人に”頑張れ”としか言えねえが。

いつか”一緒に頑張ろう”って言えたら、それはそれで最高だよな。

「作品の不合格にしろ、オーディションの落選にしろ、それで全てが終わるわけではありません」

本当は、観客の想像力を利用することを意識するやり方とか、売上を出すための考え方なんかよりも、へこたれないハートの方が大事なんだぜ。

「どうか、そこから再起することを忘れずに。

本日はスタツフ塾にご参加いただき、ありがとうございました」

あー終わった終わった。

準備期間短い割にはそこその出来だった気がする。

今度はちゃんとしっかり準備してからの造形講座とかやりてえな。

講師の仕事の質なんてほとんど準備期間で決まるようなもんだよなあ。

あ、即興のトークが上手い人はそうでもないか。

部屋から出てきた桃野さんはこっちに来て、何やら難しい顔をしていた。

俺の講義を咀嚼しきれてないのがひと目で分かる。

おい大丈夫か。

無理して理解しようとしなくていいんだぞ。

「どうでしたか？ 俺が言いたかったこと、伝わりましたか？」

「よく分からないことが分かったわ」

「……そうですか」

だろうな。

「ああでも、あなたが真面目で色々頑張って勉強してることだけは分かった」

「そうですか。それは光栄です」

桃野さんがうんうん頷いている。

理解できない話をする人間に出会ったら、とりあえず“なんか真面目に勉強してそう”で一旦カテゴライズしておくその思考、ちよつと面白いな。

「あまり俺の話は役に立たなかつたみたいですね」

「え？ ああ、ええと、それでもないんじゃない？」

「お氣遣いありがとうございます。それで、お詫びと言うほどのものではないですが」
ほら、どうぞ。

各事務所とかにはもう回つてるが、まだ一般の方には出てないやつ。

「スターズのオーデイションの募集チラシ？ ……あつ、ふーん」

「挑戦するには高い壁だとは思いますが、挑戦する価値がある壁でもありますよ」

オーデイションは優れた人を選ぶ場じゃなく、的確な人間を選ぶ場。

優秀な人間が勝つとは限らねえし、事務所が取り掛かろうとしてる事業次第で、目に見えて他の候補者より能力で劣る奴が選ばれることもある。

だが。

優秀な人間、頑張ってきた人間が、比較的受かりやすいってのもまた事実だ。

「これに受かつたら大スター？」

「になれるかもしれせんね」

「これで選ばれたら大女優？」

「になれるかもしれせんね」

「お祝いの準備しないと……」

「気が早くないですかね？」

三万人集まる奴だぞと言っておくべくなんだろうか。

「今日はありがとね。ケーキ美味しかったわ」

「それだけでも喜んでいただけただけなら嬉しいです」

「もし受かったら、私の女優としてのファン一号にしてあげよつか？」

「うたく。」

い。こんなのがあの映画に居たなら、さぞかし楽しく面倒臭えことになってたに違いない。

「いつかどこかで大女優のファン一号ってことで紹介してあげるから、誇っていいわよ？」

そんなことを言って、桃野さんは去っていった。

「勝利のイメージーションが全く伝わらなかつたな……」

まあ想像力とかそういうこと考えなくても成功する人はいるし。

後はあの人の自己責任だろう。
頑張れ。

顔面偏差値でも演技力でも、自分に自信持つてる奴は強いぞ。
業界で必要なのはタフさだからな。

「ん？」

帰り道、ドーナツ屋が視界に入る。

ドーナツは卵を使う。

生卵一気飲み禁止令が出て卵の使い途に困っていた俺にとって、それはもはや天啓だった。

「卵の消費……ドーナツか」

作ってみるか、来客用に。

「作るか……プレーンシュガー！」

仮面ライダーウィザードにおいて、主人公・操真晴人が好むプレーンシュガーは、晴人にとつて親から愛されていた証。愛の証明。

親を失った息子が、親との愛を再確認する愛の味なのだ。

よし。

アキラ君が次に来るまでに食える味で作れるようになっておくか！

夜風さんちの経済状況でマグロ食えるはずがない、よって『マグロ食ってないやつ』である

昔、俺が小学三年生くらいの頃、スタジオXOトランスフォーマー等のイラストを担当していた会社。特撮分野の伝説級の人物や、ガンダム00のメカニックデザインなどが所属しており、優秀で意欲的な者達の集まりだった。だが、そうした人物達が独立していったことで事実上の解体を迎えた。で以前代表をやっていたという杉口篤彦スタジオXO元代表。貴重な『かつて作品を作る側であり、今は作品を作る人達のことを書籍にまとめてくれている』ライターさん。さんと少しばかり話をしたことがある。

あの人は言っていた。

『笑つちやうくらい不景気だつて知人が言つてたんだよ、最近』

『日本特撮は膠着状態』

『娯楽が増えて消費者が分散しすぎた。』

売上の天井が下がったから、メーカーも企画に金を出さない負のスパイラル。

ヒットするメジャー作品と、存在すら無視される作品の二極化は進んでいくだろう

ね』

なるほど、と当時の俺は思った。

当時の俺から見ても、特撮の界限は死んでいく過程にあつた気がする。

深夜特撮放送作品枠は6作品から0になり、特撮界限に入る金や新規ファンの数は、ぐんぐん減っていた。

杉口さんなんて『バブル崩壊後より酷い』なんて言つてたほどだぞ。やべえ。

『本来経済つてのは、場を乱す無謀者』がいた方が正常に回るんだよ。

膠着状態をぶつ壊す、ハイリスクハイリターンを好む……そう、破壊者だね』

杉口さんは十年周期で時代を変える作品が来る説の支持者だった。

そして、”一億円は無理でも一千万は出せる”つていうスポンサーに合わせて、予算を抑えてヒットを狙う作品に着目していた。

当時の俺にはあんまピンと来てなかつたように思える。

そうしたら同年に仮面ライダーディケイド世界の破壊者、仮面ライダーディケイド。2009年という時代に、型破りな歴史の総決算を行った。その後の西映特撮の『過去作客演祭り』や、『大量アイテム商法による予算確保』など、多くのシステムの基礎を作つたと言える存在。が来たもんだから、そりやもうビビつた。

ディケイドは作中では世界の破壊者、現実でも商業世界の破壊者だった。

過去のヒーロー、敵の再利用。

それが転じた過去作を引用したアイテムの数々。

お約束も決まり事も全部ぶち壊す、型破りでかつ、見ていて楽しい魅せ方。

こいつが出る前と後じや商品の売り方とか、スピンオフムービーの作り方とか、全然違うんだぜ……現実でもディケイドは、世界の破壊者だった。

既存の商法システムすら破壊した、破壊者の仮面ライダー。

結果、期間あたりの玩具売上とか前年比で三倍近くまで跳ね上がってんだからな。

すげえぞディケイド！

その後の時代も、杉口さんが着目してた低予算工夫品質の特撮が続いていった。

『破壊者』。

次の時代を作る、誰よりも多くの批判と称賛を浴びる者。

杉口さんは、十年周期で時代を変えるものが来ると言っていた。

ディケイドが2009年。

それからもうそろそろ十年が経つ。

次に来る『時代を変えるもの』はなんだろうか。

杉口さんは作品のことを言ったんだろうが、俺はそれが俳優ということもありえるだろうと思うてるし、技術ってこともありえるだろうと思っている。

そういうのが仮に来るとしたら、できれば良いものであってほしいよな。

良い破壊者であってほしい。それなら俺も、迷いなくそれを肯定できるから。

ウルトラマンの方の仕事の援軍に行き、帰り道でふと思いつく。

そーいや今日はスターズの女優部門のオーディションの日だった。

もう終わってると頃か？

未来のスターがまた一人選ばれてると頃かね。

俳優発掘オーディション、か。

色々絡むんだよな、ああいうのは。

事務所が受けようとしてる仕事から考えて、足りない人材を補充するとか。

審査員がピンと来た人が選ばれるとか。

今の能力とか。

将来性とか。

話題性とか。

黒さんは審査側行つたし、和歌月さんとか桃野さんも気が向いたら参加してんだろ
う。

他にも最近会ってない知り合いとかが参加してるかもしれん。

女部門だけじゃなく男部門も気になるよなあ。

こういう新人が入ってくる時期ってのはワクワクする。

業界に人が増えるっつーことは、多様性が増えるってことでもあるからな。

ちよつとスターズ事務所寄ってくか。

グランプリ受賞者のツラくらいは拝めるかもしれん。

と、思ってたものの。

なんだ、なんか変な空気だな。

事務所全体が、静かでもなく、騒がしくもない。

普段通りの空気でもなく、かつ非常事態でもなさそうだ。

事務所の色んなところから漏れ聞こえる声に……変な熱というか、妙な興奮を感じる。

「あ、こんばんわ。朝風さん」

歌音ちゃんじゃねえか。

この時間までお疲れさん。

七歳にはぼちぼちキツイ時間だろうに。

「こんばんわです、山森さん。巡業仕事は上手いきましたか？」

「上手くいきました。朝風さんのアドバイスのおかげで……あ、これお土産のチョコで

す」

「ありがとうございます。山森さんのお力になれて嬉しいです」

ああいう長距離移動仕事は『子役にはちゃんと小学校に行ってもらいたい』って考える親御さんとの兼ね合い、時間的制約の問題で結構キツイことになることも多々だろうに。

よく頑張ったな。

偉い偉い。

「事務所が妙な空気ですが……山森さん、何かご存知ですか？」

「オーデイションで何かがあつたみたいですよ」

何か？

……ちよつと心配になってきたな。

知り合いが何か変なことに巻き込まれてたらアレだし、スキヤンダル事案になつたら事務所が巻き込まれる案件になるよな。

無視するつて選択肢はナシか。

「オーデイションを受けた人はまだ残っていますか？」

「ええと……確かおねえさんがお二人、残ってました」

「申し訳ありませんが、その二人がいる場所まで案内してもらつていいですか？」

「はいっ、任せてくださいい！」

張り切ってんなあ。

そんな張り切りなくていいぞ。

足元に気を付けて転ばないようにしとけ。

山森さんが転んでも支えられるよう、少し後ろに付いていき、オーディションの参加者二人——オーディションが勝ち抜きである以上おそらくどちらも最終選考候補者——がいるっていう、その部屋に向かう。

肌がピリピリする。

俺の本能が、何かを感じていた。

「え」

そして、その部屋に居たのは、和歌月千と桃野アイの二人だった。

俺の知りあいである、アクション女優とモデルの二人だった。

二人の間に会話は無く。

部屋の中に明るい空気は無く。

二人の表情に肯定的な感情は無い。

どこか、何か、打ちのめされていた。二人ともだ。……なんだこりや？

「何があっただんですか……？」

俺が声をかけると、二人が顔を上げた。

どちらも選ばれなかつたんだろう、と俺は思った。

だから、オーデイションでは二人共最後まで残り、和歌月さんが最後に選ばれたと聞いた俺の頭は混乱する。そりやもう混乱する。

ますます意味分かんねえぞオイ。

俺の事務所はスターズ事務所に近い。

歩いて行き来すんのも大して時間はかからん。

とりあえず、オーデイションが終わつて事務所に留まつているだけだつた二人を、俺の事務所に誘つてお茶を出してやることにした。

なんで事務所にいっまでもいたんだ？

そう聞いても、”余韻があつたから”とかいうよく分からん答えが返ってくる。

余韻？

それがすぐに帰らなかつた理由？ 意味不明だぞコラ。

「それで、改めて聞きますが、何があつたんですか？」

改めて、何があつたかを聞く。

曰く、とんでもない奴がオーディションにいたらしい。

最終審査のお題は無言劇。パントマイム

おい桃野！　じゃあお前ちよつと有利だったんじゃねえか何やってんだ！

アリサさんがそこで『野犬』というお題を出して、そのとんでもない奴が名演を見せて、そいつ以外は全員が脇役に成り下がって、演技が終わった途端拍手喝采だったらしい。

桃野さんも参加者だつていうのに、思わず拍手してたとか。

……ヤバいなそりゃ。

オーディションは審査だ。

審査員が全員の能力を見ようとするとところだ。

そこで他の候補者を全員脇役に成り下がらせる？

全員が主役に等しいオーディションで？

ライオンと子猫くらい力量差があっても難しいんじゃねえのか、それ。

「それで和歌月さんが選ばれたんですか？　聞いている話だと、俺は、その……」

「私だつて分かりません。納得いきませんよ。」

拍手喝采を受けたのは、彼女の演技だけだったんですから。何故私が選ばれたのか

……」

何があつたんだ？

政治的な何か（婉曲的表現）か。

オーデイションで選ばれたかった人間のタイプにそいつが合致しなかったのか？

いや、どうなんだろう。

有能なんだよな。

それなら他の事務所に取られる前に、困い込むのが鉄板だと思うんだが。

「私、さ」

桃野さん。

……あんたがそういう顔してるのが、今は無性に怖えよ。

何見てきたんだお前。

「分かってなかったスタツフ塾の講義が、今になってようやく分かったわ」

俺の講義が？

「想像力の利用、だったっけ？

無いものを有るように見せる、だっけ？

うん、分かった。あれがそうなんだなあって、予備知識があつたからよく分かった」

「桃野さん……？」

「野犬ってお題が出されて、あの人が構えたの。」

そうしたら私の目に森が、野犬が見えたわ。

あの人が演技をしただけなのに、なぜか野犬の動きから表情まで見えたの」
そのレベルか。

そりややべえな、発掘オーディションに出ていいレベルじゃねえ。

マルセル・マルソー20世紀を駆け抜けた天才。口を開かずとも体の動きだけで幻想の世界を観客に想像させ、物語を紡ぎ、『沈黙の詩人』という最高の称賛に等しい二つ名を付けられた。クラススの演技か。

マルセル・マルソーは、神と呼ばれた表現者だ。

コーポラルマイムのエチエンヌ・ドウクルーの愛弟子でもある。

エチエンヌ・ドウクルーが『神を生み出した天才』であり、マルセル・マルソーは天下を制覇した『パントマイムの神』と呼ばれる。

マルセルの天才的な演技は、「小説家が何冊書いても表現しきれない世界を二分で表現してしまう」と絶賛された。

即興のお題に対応して体の動きだけで、それだけの世界を魅せたなら、あるいは。

マルセルのそれに迫るものがあるかもしれないねえな。

「あれは無理。絶対無理。……いや、本当に私には無理」

桃野さんの反応見りや、伝わってくる。

そのとんでもねえやつ演技能力は、絶対的に天才のそれだ。

「元プロか、プロの娘でしょうか。俺の知り合いの娘さんだったりするかな……」
「いえ、そういうのではないと思います」

「？」

和歌月さん？

「あの人は、審査員を見ていなかった。

オーディションの仕組みを知っていれば絶対にありえませんが。

それに、動きも……私が見てきたどのプロとも違いました。あれは、何か違います」
いや、いやいやいや。

誰かに教わってないってことはねえだろ。

どのプロの動きとも違う？

既存技術による指導を受けてない？

専門の訓練を受けてない天然物……？

いや、いやいやねえだろそれは。

ありえねえって。

「俺は見えてないので、本当に信じられない気分なんです……本当なんですか？」

「はい」

「……うん」

俺の理性はこの二人の勘違いだと言ってるが、俺の心はこの二人の見たものと感じたことを信じたといって言ってる。

二人とも同じ顔をしてやがる。

和歌月さんが勝者で、桃野さんが敗者で、同じ顔をするはずがなかったのに。

分かる。

分かるさ。

二人とも今、敗北者の気分なんだろ。

心中察するぜ、和歌月さん。

「正直に言えば、少し怖さすら感じました。

野犬に立ち向かう自分を演じている、というより……

野犬に立ち向かう自分に成っている、というか……

”演じている”意識さえなさそうなあれは、果たして『演技』だったんでしょか……

？」

にわかには信じられねえ。

二人が見たものをこうして話に聞く限りじゃ、そいつは演じているとかそういうレベルじゃなく役に入ってる、既存の技に見えるものは何も使ってなかったんだろ？

演じてるなんてもんじゃなく、技もねえ。

ならその演技は、演技であって演技じゃねえんだろう。

「とにかく、俺が見る限り、二人とも引きずりすぎです。気持ちを切り替えましょう」

俺は知ってる。この二人は決して凡百じゃねえ。

アクションクラブってのは下地を徹底的に仕込む。

剣崎アクションクラブのレベルに相応に、和歌月さんも能力は高い。

正直、オーデイションを最後まで勝ち抜いてこの人が選ばれたのは納得だ。

この人にはその能力に相応も自信もあつた。

業界でずば抜けた天才も見てきたはずだ。

なのに、これだ。

桃野さんだつて自分に相当自信を持ってただろう。

正直、その自信に相応の顔面偏差値はあるだろうと思う。可愛くはある。

適度に無知なものも打たれ強さに繋がってる。

並大抵の『名演』を見ても、演技の下地がないこの子には「なにそれ？」で終わるだ

ろう。

なまじ演技の知識のある人は、名俳優の名演技を見て正確に実力差を理解して心折れ

ちまうことがあるが、演技への理解力が低い桃野さんはそういうこともねえ。

なのに、これだ。

「あの人が上で私が下だ」っていう確信を得ちまったんだ、この二人は。

それが、この二人の中にあつた自信にヒビを入れちまつてる。

「私、ちよつとでいいから、頭冷やしたくなつた。なんていうか、駄目、無理」

「桃野さん」

「しばらくはスターズのレッスンに集中したいと思います。

折角ですから、選ばれた幸運を活かして……

損なわれた自信を、厳しい環境での努力で取り戻したいと考えています」

「……和歌月さん」

ただのオーディションでここまで絶対的な『敗北感』を刻まれた人達を、俺は初めて見た。

「その、オーディションで目立ったという人はなんとという名前の人なんですか？」

「夜風景、だって」

「は？」

悪い、耳が腐つてたみてえだ。もう一回言つてくれ。……夜風？

二人が事務所から帰って行くのを駅まで送って、俺は事務所前まで帰り、溜め息を吐いた。

「なんだ、何が起こってんだ？」

俺の知らないところで、何かが起こってやがる……」

ここ数年で、とんでもないところからとんでもない女優が生えてくる……つつたら、山木千尋ウルトラマンジードのヒロイン鳥羽ライハ役、手裏剣戦隊ニンニンジャーの高坂キキョウ役、仮面ライダー平成ジェネレーションズの敵女幹部武田役を名演。ベストアクション女優賞も受賞しており、新世代のアクション女優と称される。身長以外は和歌月さんと同タイプ。さんだろうか。

まず12歳の時にジュニア武術選手権大会で槍術金メダル、長拳銀メダル獲得。

16歳までの合計だと、ジュニア武術選手権大会で金メダル2個に銀メダル3個、太極拳のジュニアオリンピックでも3年間で優勝9回。14歳の時には最優秀選手に選ばれている。

武術大会で世界一になった回数、実に11回。

拳闘と剣と槍の部門に同時にエントリーして全部で優勝するようなモンスターだ。

んで、女優になった。

高校卒業したらハリウッドに留学にも行ってる。

パねえな経歴！

おかげで仮面ライダーではライダーをボコボコにする女性役、ウルトラマンでは宇宙人を生身でボコボコにする地球人剣士役をやらされている。すっげえ。

女性の生足と女優のアクションが大好きな坂本監督坂本浩一監督の作品はウルトラマンジードを初めとして、やたら女性を魅せる画が多い。は、めっちゃ彼女がお気に入りだ。

ちなみに両親はめっちゃウルトラマンが好きらしく、彼女も幼い頃はウルトラマンが好きで、その後に武術にはまり込んだらしい。

そして成人後にウルトラマンジードウルトラマンジード作中で、彼女は地球人ヒロインにもかかわらずウルトラマンに武術を指導する。俳優さんが世界レベルであるため、ウルトラマンの成長要素としての説得力は抜群。のメインヒロインに抜擢、と。

なんつーもんを生み出してんだ、ウルトラマン。

だが、仮に夜風さんが山木千尋さんみたいな評価をされたんだとしても、そうはならねえだろう……と、思う。

山木さんは身体能力と武術技能の傑物だ。

夜風さんがそういう人間かというと、俺はちと首を傾げる。

前に会ったが、そういう体格をしてた印象はねえ。

話を聞く限り単純に山木千尋さんより能力が高い人が来た、って感じはしねえ。

何か、それよりもっと何か異質な、異常な何かでも来たかのようだ。

経験が言う。

何かやべーやつが来たぞ、と。

直感が言う。

楽しいことになるぞ、と。

俺の場合こういう時は大体、直感の方が正しい。

事務所の前でちよつと考え事していると、お客さんがやって来た。

「アキラさん」

「事務所までちよつといいかな。母さんが、君の意見を聞きたいらしいんだ」

「今日のオーデイションのことでしょうか？」

「耳が早いね。ああ、夜風景のことだ」

「じゃ、歩きましょうか」

夜道を二人で歩く。

いやー、俺が女じゃなくてよかった。

女だったら夜道でアキラ君と二人で歩くとか許されねーわ。

サタデーされちまう某ゴシップ雑誌に恋愛事情をスクープされること。雑誌の売上は伸び、事務所と俳優にとんでもない被害が出る。この編集部は仮面ライダーに敵しく、暴漢に襲われても子供の夢を守ろうとかつこいいことを言う仮面ライダー俳優は非常に好意的に報道し、ファンから金を借りて返さない仮面ライダー俳優はボロクソに貶める。

幼馴染の百城さんと二人で歩いたりもできないアキラ君には同情しかできん。

アキラ君に恋人とか出来たら俺は隠蔽工作に全面的に協力するぞ！ 任せろ！

それにしても、雲行きが怪しい夜空だ。

「今日はいつにも増して星が見えませんね」

「そうだね」

うし、ちよつと聞いてみるか。

「アキラさん、確か審査に参加しましたよね。どうでしたか、夜風景は」

確かアキラ君は今日のオーディション、俳優視点でのなんとらんたらつてことで審査側で参加してたはずだ。

お隣さんの夜風さんのことも見てたはず。

アキラ君、悩み始める。何故悩む？ あれ？ 今の質問そんな悩むようなことか？ 悩んだアキラ君が、言葉を選ぶような様子を見せて、ようやく俺に一言告げた。

『『本物』だったよ。まるで、銀幕の向こうの、若い頃の母さんみたいに』

ああ、なるほど。

そりや表現に悩むわな。

けどいい表現だ。アキラ君が言うからこそ、よーく伝わってくる。

俺がアリスさんにこのタイミングで呼ばれたのも、なんとなく分かってきた気がする。

俺は、もう死んでるから呼んでも来ない親父の代わりか。

「ああ、そうだ、今気付いたけど……彼女は子供の頃の君に、少し似ていた気がする」

「俺ですか？」

「あの頃の君は、なんというか独特だったから」

「なら、アキラさんはいい友達になれるんじゃないでしょうか」

「はは、どうだろう」

なれるさ。

アキラ君は自覚ねえんだろうけどさ。

色んな変人に根気よく継続して優しく接するのって、本当に面倒臭えことなんだぜ。

やってる人、多くねえもんよ。

ぬ、アキラ君が何か考え込み始めた。

危ねえな。

考え事しながら夜道を歩くなよ。

夜風さんはそんなに衝撃的な存在だったのか？ まだ引きずるくらいに？

危ねえからそういうこと考え込むのは後にしようぜ。

「アキラさん、スーツアクターしりとりしませんか？」

「悪いけど、一人でやっていてくれ。今少し、頭の中でまとめた考えがあるんだ」

この野郎。

「あざどんこうすけ浅井宏輔手裏剣戦隊ニンニンジャーのアカニンジャー。」

「けんすてまこと剣捨誠電撃戦隊チエンジマンのチエンジグリフォンなど。」

「とうえいふみや藤英史哉仮面ライダー龍騎の仮面ライダーベルデなど。」

「やぶけいぞう矢武敬三仮面ライダー555のオートバジンなど。」

「うらしたよしひさ浦下嘉久ウルトラマンレオのマグマ星人。本編ではノンクレジットのため『円谷プロ

画報』を参考に。」

「さいとしひこ西都利彦ウルトラセブンのミクラス。」

「こさいひろふみ古斎弘文東映スパイダーマンのスパイダーマン。」

三家敏夫グリッドマンのダイナドラゴン。

岡末次郎伝説！

内山進怪獣大進撃のキングギドラ。

村丘弘之戦隊とライダーの歴代怪人。こんなにたくさん脚注よく読む気になりま

したね？。

菊池寿幸仮面ライダーBLACK RXのロボライダーなど。

北村久貴ウルトラマンダイナの凶悪怪獣ギヤビッシュなど。

北岡隆幸仮面ライダーBLACK RXの機甲隊長ガゼオンなど。

清原幸弘初代ウルトラマンの油獣ペスターなど。……」

「本当に一人でやり始めた!？」

お、やつとこつち見たか。

ツツコミ誘導しないとイケないとか真面目でまっすぐ過ぎて面倒な奴め。

ちつせえ時からお前ちよつとそういうところあつたからな。

「考え事に没頭しながら夜道を歩くのって、危ないと思いませんか？」

「……まったく」

なーんでお前が呆れた顔するんですかねー？

俺今呆れられることした？ してないよな？ こんにやろう。

考え事に没頭してねえで足元見て歩けや、夜だぞ。

「自動販売機ありますよ自動販売機。何か飲みませんか？ 俺が奢りますよ」

「ごめん。気を使わせたみたいで。それと、ありがとう」

「何飲みたいか、それ言うだけでいいですよ」

「気にすんな。お前は不器用なヒーローで、お前が日曜朝に被る仮面を作るのが俺の仕事。」

「こんなの、ちよつとした仕事の一環みたいなもんだって。」

事務所の階段を登る。

階段を登る前に使っていた携帯電話を、ポケットに放り込む。

アキラ君と別れ、社長室に入る。

「待ったわ」

「お待たせして申し訳ありません」

「急に呼び立てたこつちにも責はあるわ。」

アキラを見て、多少は事情を把握していると思うけれど」

「オーデイションの他参加者からも話は聞いています」

「流石ね。懐かしさすら感じる仕事の速さだわ」

アキラ君を使いによこしたのは、アキラ君からオーディションの話を事細かに聞いておけって意味でもあつたのか。

相変わらず、家族であつても使い方に冷淡さが見える。

「まずはこの録画を見なさい。あなたの意見は、その後聞くわ」

近くのテレビのスイッチが入り、オーディションの映像が流れ始める。
さして。

どんなもんだ、お隣さん。俺は今、実は君にめっちゃ期待しているぞ。

見る目がある、ということ

スターズ事務所に入る前、俺のスマホが鳴った。

さて誰だ、と思えば、表示された番号は黒さんのそれ。

アリサさんに会う前で良かったな、と思いつつ電話に出る。

『お前、今どのくらいまで腕が上がった？ 親父は超えたか？』

黒さんはいきなり、そんなことを言ってきた。なんだ藪から棒に。

「父は、まだ超えてないと思います」

『早く超えとけ。余計な部分は全部お前に任せる』

「どうしたんですか？ 任せるって？ 話が読めないのですが……」

『前から撮りたかったやつがあつてな、武器が揃った』

前から撮りたかったもの、ね。

思わせぶりなことだけ抽象的に言ってるじゃねえぞコラ。

まあ映画のことだろうから分かるけどよ。

『お前の育て方なんざ俺には分からん。』

放っておいても勝手に成長するお前の性格に期待しておく』

このタイミングで武器が揃ったって話は、多分あれか。

「夜風景ですか？」

『なんだ、もう知ってたか。耳が早えな』

「オーディションで一人、女優を諦めた人がいたらいいですね。

審査でもグランプリ候補だったのに、途中で棄権したらいいじゃないですか。

顔も悪くなくて、劇団経験も長い。

そんな人が……長年努力してきた人が……夜風さんの演技を見て、心が折れた」

『ああ、夜風は“本物”だ。あいつを見て自分を“偽物”だと思う奴は多いだろうな』

この世界は、才能の世界だ。

そして、才能だけでやっていくことが難しい世界でもある。

頑張った子役は、途中から業界に入ってきた天才に追い抜かされて消えていく。

努力を怠った天才は、大ブレイクした後に伸び悩んで消えていく。

皆、心を折られる。

何かが折れて消えていく。

折るのは世間の声だったり、自分の無力さだったり、そして天才だったりする。

”天才になれなかった”人達は消えていく。

それを寂しいと思うのが俺で、さして気にしてない人がこの人だ。

「子供の頃、太川茂樹仮面ライダー響鬼の大人側の主人公・ヒビキを演じた男。子供と動物を愛する俳優。近年、人知れず現実世界でも巨悪と戦い勝利していたことが明らかになったりアル仮面ライダー。さんに頭を撫でてもらったことがあります」

あの頃の俺は、なんで胸の奥が暖かくなっていたのかも分からなかった。

周りの仕事を真似するばかりで、周りを見てなかった俺には分からなかった。今なら分かる。

貰ったあれは優しさで、俺の胸に湧いたものは憧れだった。

俺自身がそれを分かっていたいなかっただけで、それを確かに感じていた。

テレビの中のヒーローは、テレビの中で子供に夢と勇気をくれて。

舞台を降りた俳優は、カメラの前じゃなくても子供に夢と優しさをくれる。

日本の特撮ヒーロー番組で、ヒーローを演じた人達のほとんどは、普段の日常の中でも子供に見つかると、子供達の前ではヒーローとして振る舞うという。

こんな映像業界、他にそうそうないだろうよ。

そういう人達の演技が夢を与えるものなら、夜風さんの演技は、それは……そいつは、本当に俺が知ってる夜風さんなのか？

「俺の知る人達の多くは、テレビの中で見る人に夢を与えていました」

『ああ、そうだな』

「見た人に夢を諦めさせる演技をする女優……それは、なんというか」
『安心しろ』

何を安心しろってんだ。

『あれに憧れるような人間もいるだろうさ。』

とびつきの天才か、何も分からない無能か。

少なくとも子供は、いつか銀幕に映る夜風に憧れるようになる。そこは間違いないねえ。それは現在の話か？ 成長した後の未来の話か？

……大女優を目指す者の心を折るようなレベルの演技で、子供に憧れられる演者か。憧れも畏怖も変わらねえよ。天才が凡人に見上げられる、ただそれだけの話だ』

見上げる、か。

手が届かない星に手を伸ばすように、足掻き続ける人もいる。

その途中で折れる人もいる。

アリサさんのスターズが、人工の星を並べた夜空なら。

黒さんが作る夜空は、本物の如き星を並べた本物の夜になるに違いねえ。

人工の星を超える、『本物の夜』か。

ヤベえな。

”ヤバイレベルの演者なんじゃないか”とちよつとハラハラしてたが、黒さんのこの

自信たっぷりな声を聞いてると、ワクワクしてきた。

「聞いた話だけだと、アリサさんが嫌いなタイプの役者だと思いますが」

『あのババアと役者のタイプが似てるからだろ。つたく、審査私情で落としやがって』

「……」

『なに、俺は何も心配してねえよ。』

少なくともお前に関してはな。

あのババアが敵になるとしても、お前が敵になることはねえ』

「俺、業界的にはスターズ派閥と思われる人間なのですが、何故そう思ったんですか」

フリーランスだけど結構恩売られてるんだぞ俺。

あんたとスターズならスターズ選ぶ気がするわ。

何を根拠に言ってるんだ。

『お前は“それ”を美しいと思ったなら、絶対にその敵にはならねえからだ』

「——」

『お前は夜風に惚れ込む。絶対にだ。一億賭けたっていい』

……ねーよ。

「親父が時々言ってたんですよ」

ただ、興味は湧いた。アリサ社長がオーディションの撮影とか持ってねえかな？

『いい仕事をしたのなら、信頼できるキチガイを探せ』って」
キチガイな時点で信頼できねえだろ、と当時の俺は思ったが。
色々見てきた今となつては、親父が言つてたこの意味は、なんとなく分かるようになった。

そして、社長室にて、アリサさんが撮影させていたオーディションを見て。
夜風さんを見て。

俺は、言葉を失つた。

──
いつの間にか拳を握っていた。

握っていた拳は、自然と出た手汗を握りしめていた。

冷や汗が流れてる。

シャツが肌に張り付いていて気持ちが悪い。

目が痛い。

どうやら一回もまばたきをしてなかったみてえだ。

呼吸を再開する。

自然と息を止めていたのは、彼女の演技に見惚れていたから。

心臓がバクバクいつている。急に呼吸を再開した肺が痛い。額の冷や汗が目に入った。

「もう一回、見てもいいですか？」

「いいわよ」

凄え。

なんだ、この演技。

何の技術もくつついてないが……未熟かもしれないねえが……目が、離せねえ。

通常の技術論が全く息づいてない演技。

だからこそ分かる。

この子は、『破壊者』だ。

自分の登場以前を全て過去のものにしちまう、全てを破壊し全てを繋ぎ、”自分のやり方”で業界も世界も変えちまう、とびつきりの天才。

演技を見て、それがひと目で分かった。

オーディションの流れはこうだ。

まず、夜風さん、和歌月さん、桃野さん、それと……舞台の方の仕事で見た若い人だなこれ。

四人が会場に入れられる。

和歌月さんはほどよい緊張が最高の能力を發揮すると知ってて、その状態を保つてる。

桃野さんこれ何も考えてねえわ。リラックスしすぎ。

演劇舞台の方で前に見たこの人は、逆にリラックス状態を程よく保つて微笑み、審査員の心証を良くしてる。真面目な表情の和歌月さんとは対症的だ。

夜風さんは……ぼーっとしてんのかこれ？

お、会場にアリサさん、黒さん、アキラ君、夜風さんの弟妹さんもいる。

家族同伴とか型破りだな。

この映像の視点からして、カメラマンとカメラ補佐、他審査員もいるな。

そこに、アリサさんが『野犬』ってお題を出す。

黒さんがそこでシチュエーションを説明。

夜風さんが主役じゃなかったのは、その瞬間までだった。

夜風さんが動く。

夜風さんの周りの雰囲気が変わる。

夜風さんが”イメージの野犬”を見て構える。

それが、世界を塗り潰しやがった。

周りの審査員も、桃野さん達も、夜風さんがイメージした『森の中で野犬と睨み合う夜風景』ってシチュエーションを幻視してる。

森もねえ。

野犬もねえ。

なのに全員夜風さんと同じ森を見て、野犬を見てやがる。

この撮影に映ってる全員の視線に線を引いて見りや分かる。

全員の視線が一点で交わるはずだ。

だって、そこに夜風さんが演じて見せてる野犬がいるんだから。

……ああ、ヤバい、見てるだけで胸が高鳴る。

つか、こりや駄目だ。

もうこの時点で、夜風さん以外の出演者の勝ちが消えてる。

だってそうだろ。

夜風さんのイメージに沿って演技して、夜風さんの演技が作った森と野犬を前提に演技して、夜風さんがイメージした通りの野犬に合わせて演技する。なんだそりゃ。

お前ら全員、自覚なく全員『助演』になっちまってんじやねえか。

……和歌月さんと桃野さんですら、無自覚に助演に押し込まれたのか。

主演のつもりの共演者を、一瞬で全員助演に押し込みやがった。

なんだ、この、夜風さんの、これ。

桃野さんは野犬に怯えた女の子の芝居をしてる。

まあそれも正解だ。

ただそれじゃ動きがねえから演技力のアピールにならねえだろ。

和歌月さんはなまじでできることが多いせいで判断が遅れてんな。

色々できるのに、何もできてねえ。

桃野さんを野犬から庇う演技を咄嗟に見せたのは百点やりてえとこだが、そこで自分から状況動かさそうって気配が見られん。

正直、採点するならこの舞台俳優の人が比較的高得点だな。

夜風さんの演技に合わせようとしてる。

舞台演劇で助演に慣れてんのか？ 『主演・夜風』に一番合わせられてる空気はあるわ。

誰だっけな、どっかの劇団で見た気がするんだが。

そこで夜風さんは嘸みつかれる演技をして、野犬と戦う演技をし、逃げる野犬を幻視

させる。

そして野犬から家族を守る演技をして、幻の野犬を倒した。

それで、オーディションはおしまい。

審査員が拍手して、桃野さんや舞台演劇の人が拍手する。

夜風さんだけが拍手と称賛に包まれる。

あー、これで「君が合格」って言われたら、和歌月さんも引きずるわな。

……これはヤバいな。

夜風さんの最初の方の演技見て、それに咄嗟に合わせた他三人の優秀さが霞む。

あの一瞬でそれぞれ対応したなら、他三人の下地の能力が低いわけじゃねえってのに。

「演じる役柄に応じて、その感情と呼応する自らの過去を追体験する演技法。

これを、『メソッド演技』と言うわ。

彼女はそれを極めている。

このレベルになると、もう本人でも表出させた感情をコントロールできていないでしよう」

メソッド演技。

そいつが、夜風景の演技の凄まじさの源泉。

『本物の感情にしか見えない迫真の演技』の正体か。

いや、これはもう、それだけで語れるもんじゃねえな。

「ですが、メソッド演技はほんの一面的な凄さにすぎませんね、これは」

「気付いたことは全て言いなさい。朝風」

「アリサさんが『野犬』というお題を出したのは何故ですか？」

「メソッド演技は自分が体験したものしか演じられない。」

よって、見たことがないもの、未体験の事柄は演じられないわ。

野犬を例に出せば、野犬を見る機会もない現代の子には演じられないと思ったの」

「そうです、それです」

映像の再生位置を調整して、アリサさんがお題を出した直後、黒さんがシチュエーションの説明をしたところから再生する。

『お前達は深い森へ迷い込んだ。

野犬に出逢うとは運が悪かったな。

鋭く尖った瞳、牙、爪……

全てがお前達に向けられている。ああ……あと。そいつ腹空かせてるぞ』

黒さんの説明は単純明快。

この短い説明から、夜風さんは迫真の演技に入り、周囲の人間全てに野犬と森を幻視

させた。

「彼女は野犬を見たことが無かったんだと思います。

でも説明され、それを具体的に周囲に見せるほどの名演を見せました。

彼女はここで自分の過去の体験をほぼ使ってません。

もしかしたら怖いものを見た記憶くらいは使っているかもしれませんが……

過去の経験の追体験が一切無い以上、これは実のところ、メソッド演技ではないです」

「そうね」

「メソッド演技が後天的に極められたものだとしても……

この、周囲全ての人の意識を引きずり込むような演技は、彼女の才能です」

マイムの本領は、「そこにいないはずのものが見える」だ。

これの最大の長所であり欠点は、『観客の想像力に依存する』という点にある。

夜風さんの演技は、このマイムの究極地点に片足を踏み入れていた。

系統的なマイムの技術を、全く使ってなかったのに、だ。

メソッド演技で深く深く役に入り込むこともそうだが、そこから繰り出される演技がとてつもなく恐ろしい。

「アリサさんが『野犬』という曖昧なお題を出したのが効いていますね。

野犬、というイメージだけなら、犬種も大きさもバラバラのイメージがなされます。

審査員も演者も、『野犬』のイメージは人ごとにバラバラですから。

ところが夜風さんが演じて見せた野犬の姿、全部一緒なんです。

全員同じ形の、同じ動きをしている野犬を見ています。イメージが統一されてるんです」

それぞれが違う『野犬のイメージ』を持つてゐるつてのに、その全員に同じ野犬を見せる演技つてのは、一体全体どういふことなんだ、オイ。

「観客の想像力が、この野犬を見せてます。

なら人の想像力の数だけ違う野犬が見えるはずなのに。

夜風さんの圧倒的な演技が、一つの解釈以外の野犬の姿を許さない。

観客の想像力を支配してるんです。

あまりにも大型な野犬だと、夜風さんと喧嘩して野犬の方が逃げる演技が成り立ちませんから」

「ええ、そうよ。恐ろしい才能だわ」

観客が創造した”それ”は、現実の何よりも美しい、と言われる。

ロード・オブ・ザ・リングJ・R・R・トールキン作の『指輪物語』原作。圧倒的なファンタジー世界観により、世界中の人達を魅了し、現在の創作分野の多くに影響を与えている。は昔、映像化不可能と言われていた。

そう言われていた理由は、小説の出来があまりにも良かったからだ。

小説を読み、読者が頭に浮かべたあまりにも美しい光景を、現実の特撮映画が絶対に超えられないと確信されていたからだ。

創作者、演技者に、客の頭に何よりも素晴らしい光景を浮かべさせる技量が有るならば、そうすることが何にも勝る想像の創造となる。

観客の想像力に依存するこれは、成功すれば最高のもんになる。

だが失敗すれば、観客の目には何も映らない、想像力が何も映さない、最低最悪のもんになる。

世の中つてやつは、意外と理解力のねえ奴が多い。

それが悪いってわけじゃねえ。

ただ、理解力の高低つて奴がある以上、作品はバカにも分かるようにしなきゃならねえ。

”子供にも分かるような作品作り” っていうのは、本当に重要なんだ。

そう、子供にも分かるようにするのが、重要なんだ。

「夜風さんの弟さんと妹さんがいますね」

映像の再生位置を調整する。

『おねーちゃん、すごかった、ちよー面白かった!』

レイちゃんとルイちゃんが、興奮した様子で演技直後の姉に歩み寄っている。いや、もう、なんつーか。

すげえわ。

「夜風さん、多分野犬見たことないですよ。反応見るに」

「そうね。現代の街暮らしで見るとはまずないわ。」

黒山が野犬の説明をしたせいで、上手くいかなかったけど……」

「姉がそうですから、同一の環境で育った弟妹もそうだと思われまます。」

「この姉弟達はそもそも野犬を見たことがなくて、イメージが持ててません」

「それがどうかしたの？」

「凄かった、面白かった、とこの子らは言ってます。」

「この子らにも野犬が見えてるんです。」

「夜風さんが見たことがないものを演技だけで正確に見せてるんです」

「」

「この子らは後でテレビで野犬を見て、こう思うんでしょうね。」

「お姉ちゃんの演技で見たやつだって。」

「夜風さんに噛み付いた野犬なんて、物質的にどこにも存在しないのに、です」

「この質の演技で”子供にも分かる演技”とか。」

子供レベルの想像力があれば分かる演技とか。

なんだお前、それどうなってんだ。

思わず、俺は息を飲んだ。

表現力は、まだ意識的に使いこなせてるとは言い難いが、それがなくても「周囲の人間の心を意識的に引きずり込む」ことができないだけだな。

一度引きずり込めれば、海の底に沈めるように観客の心を捉えて離さねえ。

きちんと表現技法を駆使すりや、夜風さんの芝居は化物の領域に到達する。

感情表現の表現力は技術だ。

本来、専門の先生についてしっかり学んだ方が良い。

ただ夜風さんのこの演技を見る限り、少し精神的な姿勢を変えただけで、意識的に表現技術を操れるかもしれん。

見た限り、この人は本能で芝居をしている。

この人は、何かに気付くだけで爆発的に成長するタイプだ。

コツコツとした下積みじゃあなくて、コツを掴んで一瞬で成長するタイプだ。

「この人、感情を伝える技とか、意識的に使えてませんが内側に秘めてるみたいですね」「でしようね」

「声です。」

声がよく聞こえます。

普通、大きな感情に引つ張られた人の声は聞き取りにくいです。

激怒した人の怒鳴り声などがそうですね。

ですが夜風さんは、メソッド演技にありがちな欠点がありません。

感情に身を任せているのに、発する言葉がとても聞き取りやすいです。

名作映画の迫真の演技のような、周りにちゃんと聞こえる発声ができてますね」

「発声はまだ甘くないかしら」

「問題点はメリハリくらいですよ。

『迫真の演技に相応』の発声ができてるなら、後は天井知らずに上達するだけです」

夜風さん、いい発声の癖してるな。

幼い頃から名作映画をよく見てる人は、こういう声になる。

人の耳によく届く声、不快にならない声、感情の乗った声を『映画の真似』で自然と

身に着けていくからだ。

ただの一般人はこうはならねえ。

人間の耳は結構適当だから、ちよつとくらい適当な言葉の使い方しても、発言の意

図は伝わりやすい。

だから一般人の言葉は実はかなり適当に使われてやがる。

例えば、『ひ』と『し』が混合されてるパターンってのがクソ多い。

夜風さんには、そういうのが全くねえ。

メソッド演技タイプなら感情で言葉が聞き取りにくくなりがちだったのに、彼女の場合は言葉にちゃんと感情が乗ってるのに、言葉が聞き取りやすい。

発声部分ってのはちよつとでもミスがありやツツコまれる部分で、こいつができなきゃオーディションなんざ無理、なのに長年の訓練が必要なもんなんだが。

すげえ。

すげえわ。

何年レッスン受けても棒っぽい演技しかできない声優だって世の中にはいるんだぞ？

あんた、どういう才能してるんだ。

「子供にも分かる演技。」

子供にも聞き取れる発声。

完璧ですわ。

子供に分かるってことは、誰にでも分かるってことです。

表現力のバランスが悪いものの、強烈に伝える表現力がありますね。

とんでもなく膨大な感情を伝えられるものの、その伝達力が汎用的でない感じでしょう。

うか」

多分、彼女に誰かが『バカにも分かるようにやれ』って言ったな。

その影響で夜風さんの自己満足的な、自分の内側に潜行するような“深い”芝居が、オーディション会場に満ちて伝わる程度の芝居になってる。

バカにも分かるように伝わる芝居ってのは、周りが分かる芝居、周りに伝わりやすい芝居ってことだ。

自分一人で完結するような夜風さんの芝居を、誰かのほんのちよつとのアドバイスが、いい方向に誘導してる、それが目に見える。

「あ、ここ足の動きが僅かに変ですね。

多分これ、森の中で根っこを踏んでしまった表現です。

これは多分メソッド演技の一環でしょうね。

森を歩いていて木の根を踏んでしまった時の体験を再現した、“迫真の演技”です」
「でしょうね。こういった細かな演技が、野犬を見たことがない子供にすら、野犬を見せる」

「夜風さん……これはもう、筆舌に尽くし難いレベルの演技だと思います」

「……」

「マイムは、そこにはないものを見せる技術です。」

ですがそれにも限界はあります。

コップを持って触れる演技をすれば、観客もコップを幻視するでしょう。でも、ビールは無理です。

マイムで表現しきれません。

マイムは基本的に、手に持てるサイズ、手で触れるサイズのものしか表現できません。動いている動物のマイムも、大半の動きが表現不可能です。

パントマイムで森や、襲いかかってくる野犬を表現できるわけがないんです。普通は」

「でも、彼女はやった」

「夜風さんが構えて、虚空を睨んだだけで、皆そこに野犬がいる」と思いました。皆、腹を空かせて夜風さんを睨む野犬を幻視しました。

これ、誰が真似できますか？ 俺には無理です。

パントマイム無言劇ですから、夜風さんは『野犬だ』とすら言っていないんですよ？」

野犬を見たことがない小さな子に野犬を見せる？

主演のもりだった共演者を全部無自覚な助演に落とす？

審査員を含めたその場の全員に、同じイメージの幻覚を見せる？

狼と睨み合う演技を無言でしただけで、狼をそこに幻視させる？

メソッド演技だけで説明できるか。

夜風景は、もはや異能の域にある天才だ。

ああ。

クツソ。

これが、惚れ込むって感情か。

黒さんが一億賭けるわけだ。

観客の想像力を意識なんてレベルじゃねえ。

観客の記憶の利用なんてレベルじゃねえ。

これは、もう、魔法のレベルだ。

夜風景の才能は、童話の中の幻想的な光景——誰も見たことのない光景——ですら、

観客に見せることが可能かもしれねえ。

観客を引きずり込む『底の深さ』だけで言うなら、もしかしたらアラヤさんを凌駕してるかもしれない……底を覗き込もうとしても、まるで夜の空を見てる気分だ。

上限が見えねえ。

果てが見えねえ。

星よりも高いところにあるのが夜空。

大きさも、上限も、底も見えねえ。それが夜空だ。

輝く星ですら、夜を飾るもんでしかなくなる、それが夜空だ。

その底の見えなさに、魅せられる。

尽くしたい。

一度でいいから、この人の全力を、俺の全力を尽くして引き立ててみたい。

そう、思った。

「朝風。この子に弱点はあると思う?」

「弱点だらけだと思えますよ?」

「言ってみなさい」

「まず、舞台演劇は主演以外全部無理でしょうね。」

目立ちすぎます。

脇役に置いたら主役さえ食って劇を崩壊させてしまいますよ。

自分を殺す演技、っていうのがまだできないタイプだと感じました」

弱点なんて、あなたには一番よく分かってんだろ。

現役時代のあなたと夜風さんは、かなり近い同タイプなんだから。

「舞台演劇だと、彼女は自分の役に集中しすぎてしまうでしょうし……」

そうすると、周りの役に合わせられません。

この”周りの演技に合わせられない”のせいでどこかで絶対失敗しますよ。

共演者の演技を受け止められないんです。

百城さんみたいに、共演者の芝居を受け止めて柔軟に演技を変えるのも無理でしょう」

メソッド演技は過去の自分の体験を想起して演技するから、メソッド演技だけだと柔軟性が全くねえんだよな。

「表現形式が不親切なのも少し気になりますね。

分かる奴だけ分かる、って演技の方向に行きそうでそこが怖いです。

感情が伝わりやすい舞台演劇か、個性を抑えて受けを良くするドラマ演劇か……

まあどっちかでしつかり技術や方向性を得ておかないと、躓きそうな気がします」

今のままでと、ちよつと嘯みあわせが悪いと演技が正確に伝わらないパターンも出てきそうでもつたいねえ。

折角周囲全ての人間に同じイメージを持たせられる豪腕の表現力が有るんだ。

そいつを正確に周りに伝えてほしい。

この前百城さんを撮ってたセカイ系の映画みてえな、カメラが主演にびつたりずつと張り付いてる映画なら夜風さんはめちやくちや強えだろうが、そこ止まりになりかねん。

「あとは……テレビの連続ドラマ撮影とかがちよつと読めないですね。

あつちはカットごとにバンバン撮ります。

悲しみのシーン数秒撮影、次怒りのシーン数秒撮影、次日常のシーンを……

そんな風にかットごとに小刻みに撮影していきます。

感情を自分の中に入れる彼女が、そんな風に短時間に頻繁に感情を入れ替えたら……」

「壊れるわ。脆ければ、すぐにでも」

「感情をポンポン入れ替えて、壊れないかもしれません。

逆に感情の入れ替えが追いつかないかもしれません。

撮影スケジュールがギリギリで、頻繁に感情を詰め直すようになったら気を付けましょう」

「あの子の味方のような言い草ね、朝風」

「知り合いなんです、ちよつとした」

「ふうん」

弱点なら、いくらでもある。

「強いて夜風さんを例えるなら、不器用で演技の深度が深くなった小竹しのぶさん、ですかね」

『小竹しのぶ』。

業界では伝説級の扱いをされる名女優だ。

1973年にデビューしてから現在まで一度も仕事が途絶えたことがない、という事実からも、その凄まじさは伺える。

憑依型の女優であり、どんな人間にも『変身』できた怪物だ。

撮影時に瞬時に涙を流すことができた撮影スタッフが証言しており、涙腺レベルで身体制御を行うその技術はまさに天才。

多種多様な女性のドロドロとした感情や情念を演じ分けるその技術はかなりヤバイ。

小竹さんが何よりヤベえのは、普段の自分、役そのものになりきっている自分、本当の自分と役の区別がつかない自分を使い分け、スイッチのオンオフのようにそれらを切り替えられるというその演劇スタイルだ。

自分の心と役の心がごっちゃになった状態から、彼女は一瞬で帰ってくる。

ある時期、小竹さんが妊婦役をやっていた時期。

夜目覚めた時、腹が膨らんでいないのに気が付き、「私の赤ん坊がない！」と大騒ぎしたっていうエピソードがある。

足の不自由な役をやった時には、歩き方を完全に頭から追い出したため、家の中で歩けない状態になっちゃったっていうエピソードがある。

小竹さん曰く、このレベルの演技は「結婚してなくなつた」らしい。

愛する夫、愛する子供の存在が、小竹さんを『普通』に寄せた。逆によえばそれまでの小竹さんは、それほどまでにまともな人間じゃなかった。

親父が言つてた『信頼できるキチガイ』つてのは、そういう人種のことを言うんだらう。

俺が見る限り、夜風さんは意識的に使える技術は素人同然だが、その底無しの『深度』は小竹さんのそれを超えている。

「重度の憑依型女優が抱える弱点は、夜風さんはみんな持つてると思います」

「なるほど。ご苦労様、朝風。ちなみに最終的な採点だと、どのくらいになるかしら」

「100点満点で100点くらいでしょうか」

「……？ 夜風景には欠点があつたんでしょうか？」

「そうですね。欠点や弱点があるので、減点して100点です」

まあ、まだ未熟だ。

成長するまでは100点しかやれねーな。

「もはや、演じるというレベルでなく……」

魂の底から、自らの全てを加工し、別の者になる。

本物のまま、最高の作り物に変じる。

ああいう人を支える仕事ができるなら、俺は死んでも良いです」

良いよな。

あれは良い。

夜風さんの演技の成長のために死ねって言われたら、やってもいいと思えてしまうかもしれない。

アリサさんが、溜め息をはく。

「あなたの父親と同じようなことを、同じような女優に対して言うのね。あなたは」

どこか、懐かしそうに。

「母親に似なくて良かったわ」

どこか、攻撃的に。

アリサさんの言葉には、俺がした発言と夜風景に対する、どこか屈折した攻撃性が感じられた。

夜と星と朝

星アリスさんは、一般には業界に殺されたとも、民衆に殺されたとも言われる。

往年の大女優であり、今でも語り草になる名演者の一人だ。

俺は明確に詳細を知ってるわけじゃねえが、「演出のオモチャにされて壊された」だの「役に『深く』入りすぎて壊れた」だの言われてやがる。

そんな彼女が作ったのがスターズ。

役者は不幸になるしかないと言う彼女が、どんな役者も不幸にしないためだと言い経營する、矛盾の塊。

成功した役者が不幸になると知りながら、役者に成功の仕方を教える矛盾。

役者は辞めた方がいいと思いつながら、未永く業界に残れるタイプの役者を育てる矛盾。

一度心が壊れて、それでも業界にしがみつくと矛盾。

役者として心を壊しているのに、未だに役者という存在に関わろうとする矛盾。

アリスさんはテレビの向こうの役者に憧れて役者を目指す子供の心も、芸能界と演劇の闇に飲まれて心折れ消えていった大人の心も、分かってしまっている人だ。

その矛盾に、この業界に対する感情の矛盾。

業界への憎悪と嫌悪の下に、まだ残る愛や憧れがうつすら見える気がする。俺とアリサさんは違う。

能力の内実も、妄執の内容も違う。

だから俺には、アリサさんが何を信じているのかがさっぱり分からん。

ただ、なんとなく分かる。

アリサさんはかつて色んなものに憧れ、色んなものを信じていた。

そして、その全てに裏切られちゃったんだ。

”他人の人生に干渉して捻じ曲げてでもこの業界に入らないようにする” つつー、ともすりや独善や身勝手とも言えるそいつは、”誰も自分を止めてくれなかった” っていう黒い炎みてえな感情が源流にあるように思える。

色んな人が、この人の心を独りにした。

親父でさえそうだった。

「各々が各々の理由で立場を変え、主張を変え、人から離れていく。あなたの父のよう
に」

アリサさんの言葉の根底に、粘着質でどろりとした感情が見える。

「皆が皆、良い作品を作れるなら犠牲が出ても良いと考えているわ。」

良い作品を見たいという気持ちで囃し立てる民衆も、役者の気持ちなど考えもしない。

作品の良し悪し、作品の美しさと面白さにはかり執着している。あなたの父のように」

役者の人生をなんだと思ってるの、とアリサさんは言う。

「ですが、アリサさん」

「特撮畑のあなたが、役者軽視を知らないとは言わせないわ」

「っ」

アリサさんは今年54歳だ。

つまり彼女の全盛期・現役期は……特撮で、人の命がまだ軽かった頃にあたる。

だから俺は、言葉に詰まる。

多分、『太陽を盗んだ男』や『東方見聞録』の頃もアリサさんは現役だったんだろう。

太陽を盗んだ男は、1979年公開の映画。

『究極の問題作』とも言われ、原爆投下の直接被害者がまだ数多く社会にいた時期に原爆ネタを扱い、撮影所になだれ込んできた抗議団体に監督が「俺は胎内被爆児です」と特別被害者手帳を見せて追い払い、撮影を続行した、そんな問題作品だった。

やべえよ。

迫力のある飛び降りシーンは、ミスもあり相当な高さとなった。

そのせいで、飛び降りたスタントマンは骨折した。

底無し沼に等しい当時の東京湾に、高所から飛び降りるといふスタントマンでも高確率で死ぬ撮影に、スタントを使わず女優を放り込んだ。

女優は仰天した。

社会を混乱させ、偽札偽造と同種の罪に問われると分かっているながら、ビルから作り物の一万円札をばらまく野外撮影を許可なく行いやがった。

撮影許可が降りてねえつてのに勝手に皇居前や国会議事堂などでゲリラ撮影、違法に違法を重ね、それでも撮影を継続するため、撮影チームには『逮捕され要員』が用意された。

逮捕され要員つてのは、警察が来たら自首する要員だ。

何もしてないようなスタッフが逮捕され取り調べを受けている間、撮影を完了させる、つていう撮影戦術つて言や分かるだろうか。

撮影が終わったらスタッフ全員で逮捕されることも覚悟の上だった、つて話だ。

東方見聞録は、1991年の映画だ。

臨場感を出すために俳優が8kgの鎧を付け、水深2mの撮影セットに沈められ、事故でそのまま溺死しちまった。

遺族は当然起訴。監督と助監督は書類送検。

そして、撮影は続行された。

新聞でも大きく取り上げられ、世間の流れによって劇場公開は取りやめ。

会社は倒産、監督は慰謝料三千万を支払うことが決定。

そして、ちゃんと映像ソフトとして発売された。

その翌年には、特撮撮影中のスーツアクター・赤口昌人小柄で男性役も女性役も務められる稀有なスーツアクター。戦隊シリーズの黄色を担当することが多かった。さんが特捜エクシードラフト1992年開始。メタルヒーローシリーズ1作目でありレスキューポリスシリーズ最終作。見栄えの良さとエンタメ性が重視されていた。の撮影中に、首の脊髄を損傷する事故が発生。

子供向け番組であったことが配慮されたのか、スーツアクター程度ではスクープにならないと判断されたのか、当時は全く報道されなかったって話だ。

26年経った今も、赤口さんは首から下が動かないまま、闘病生活を続けている。

……俺も一度、尊敬する先人だからと、赤口さんと親しい業界の先輩に付いて行って挨拶と見舞いに行ったことが有る。

エクシードラフトのアクション、俺好きでしたよ。

アリサさんは、演出家は演者アクターをオモチャにしている、と言う。

何も知らねえで軽い気持ちでこんな台詞を言ってる奴がいたなら、俺は「一緒に撮影する奴が壊れていいと思ってる奴なんていねえよ！」と言うだろうな。

だけど。

相手がアリサさんだから。

アリサさんの重い言葉に、俺の軽い言葉は反撃できねえ。

この人の言葉には”実感”がある。

この人の前で、俺みたいにな大した人生経験もねえ若造が、そんな”軽い”ことをほざくなんざ絶対に許されねえんだ。

「役者は、監督や演出を信じるものよ。

信じて、指示を受け、演じる。

……監督や演出が、作りたい作品を作るため、役者をオモチャにしてるとも知らずにね。

あなたがそうならないように気を付けていたつもりだったけど、さてここからどうなるか」

「俺は、そうはなりません。約束します」

「あなたが親に似るか、親に似ないか。それだけよ」

怖いよなあ。

俺の親父は言っちゃまえば……あんたが壊れていくのを、止めなかった男なんだから。俺がそうなるのは怖いよな。

少し、俺も怖い。

「いつか必ず、いつの間にか、一人になるわ。夜風景も」

アリサさんは確信を持っていた。

痛みを伴う確信だった。

自分と同じ末路を夜風さんが辿ると確信しているアリサさんは、恐れていた。

自分と同じ末路を辿る人間を見ることへの恐れが、言動に垣間見える。

アリサさんには、少しは業界をマシにできたって意識があるだろう。

だけどな。

もし、もしもだ。

アリサさんが少しずつでも変えたと思っていた芸能界が、昔と同じように、アリサさんと同タイプの役者の心を潰したら。

”何も変えられていなかった”って絶望と重圧が、アリサさんの心を潰しにかかるだろう。

恐れの色合いは分からねえが、アリサさんはそいつを恐れている。

その姿を見ていると、胸が痛む。

「改めて問うわ、朝風。

あなたは、自分が父親と同じ存在にならないと断言できる？」

俺は、こう答えた。

アリスさんと話をした夜、その内に夜風家に向かった。

うーんどうなんだこの時間。

失礼じゃねえかな。この時間にお邪魔すんの。

抑えきれない興奮のままに夜風さんに会いに来ちまったが、どうにもおかしくなっ

るな俺……出直す？ 出直すか？

テレビとかの仕事やっているとどうも時間の感覚が狂う。

深夜の二時くらいに事務所の人に人が来て仕事の依頼が来ても、すぐ行くこともある。

そういう時は誰かがヤバイレベルで困ってるってことだしな。

ただなあ。

世間一般常識的にはこの時間にお宅を訪問すんのはどうなんだろうか。

今は一般家庭が晩御飯食い終わってテレビ見てるくらいの時間かね。

まあいいか。

ちよつとだけ挨拶だけして帰ろう。

シヤオラツ、お隣さんのご挨拶だぞ！ インターホンをプツシュ。

「はーい、今出ます」

すんません夜中に失礼します。

「あら、英二くん」

「どうも、改めてご挨拶に参りました」

箱詰めのもんをどうぞ。ちよつとした気持ちです。

「お隣さんのご挨拶？ 引つ越し蕎麦みたいなのかしら」

「いえ、同業者としてのご挨拶です。小さい子が好きなお菓子が詰めてあります」

「あら、ありがとう」

あの演技を見てから話してみると、色々分かることもあるな。

会話の間が独特だ。

けど結構話しやすい。

人の輪の中の会話つつより、映画の中の会話が身に付けさせた日常会話の発音がね。

「つてゆうかあ」みたいな発音が一切無い。

オーデイションの時と同じだ。

彼女は常に自然体。

それが、あのオーデイションじゃ際立って見えたな。

オーデイション開始直前にぼーっとしてて、周りを見る余裕があつて、家族にちよつと手を振ることまでしてたっけか。

いや緊張するからそういうことできねえんだぞ普通は。

彼女にとつちや、お隣さんと何気なく話すことと、オーデイションが始まるのを待つことは大差ねえことなわけだ。

それができる奴って何人いるんだよ。

「すみません、こんな時間に。」

考えてみたら朝風あさかぜの家、一度も引越しの挨拶すらしてませんでした」

「真面目ね。律儀って言った方がいい？」

「いえ、これはなんとというか、だらしなくて後に回しすぎたことに今気付いたと言いますか」

普段から素の自分を演じているようなところがあつて、素の自分がもうどこか作り物のようになつていて、それが一番肩の力を抜ける自然体と成った人。

”自分自身ですら切り替えられる人”。

いいな。

百城さんと夜風さんを見てて思った。

俺、こういう人達が心底好きなのかもしれないねえな。

夜風さんに名刺を渡す。

「役者として仕事する時、気が向いたら呼んでください」

「名刺？　造形……操演……背景……総合美術……？　よく分からないわ」

「役者さんの服と、舞台と、演技に使う小物と、飾り立てる物全てを作る人間です」

夜風さんはきよとんととして、ポケットから以前俺が差し上げた指輪を取り出し、ポンと手を叩いた。

「なるほど、納得ね」

「物を作るのが俺の仕事です。」

「その携帯電話の番号にでもかけてください。24時間いつでも受け付けてますから」

「夜中は寝てるから24時間ではないでしょ？」

「いいんですよ。どうせ撮影は深夜から早朝になったりもします。」

電話がかかってきたら寝ていても起きればいいだけです、俺の場合は」

その名刺も一定以上の交流の知り合いにしか配ってねえしな。

「……私、オーデイションに落ちたわ。お仕事なんてないの」

「仕事が出来たらでいいですよ。役者、目指すんでしょう？」
問いかけて、ふと気付く。

「うん」

夜風さんの迷いの無い答えを聞いて、気付きが確信に変わる。

良い俳優は恵まれていないものだど、丸間進40年以上舞台俳優の経験を重ねてきた本物のプロ。巖さんが好む舞台の一つ『王女メデシア』や、『放浪記』などで名演。ドラマなどではぐれ刑事純情派などに出演。さんが言っていた。

恵まれない環境が闘志となり、闘志こそが人を大成させるつてよ。

だから、大成功する俳優つてのは、普通の子より何か欠けてることが多い。

家が貧乏だったり。

名俳優の子で常に親と比べられ心をすり減らしてたり。

世界や他人を怖がる理由があつたり。

普通の人にはできないことをするために、普通じゃない欠落と、普通じゃない才能と、その両方があつた方がいいと言う人もいる。

『ここではないどこかへ行きたい』。

『嫌いな自分とは違う何かになりたい』。

『今の自分を忘れて、別の人生を生きたい』。

これが、とても優秀な役者を作り上げる原動力になる。

俺と夜風さんは、家が隣同士だった。

だけどそれだけだった。

最近まで名前も知らなかったし、偶然会うまでその家にそういう人がいるってことすら、俺も夜風さんも忘れていた感じだ。

おそらくだがこうして演劇の世界が繋がなければ、ほとんど会わなくなつて互いのことも忘れてただろうな。

それは変なことだ。

普通じゃねえことだ。

俺達は家のごみ捨てをする時に顔を合わせる、つてことすらほとんどなかった。だから互いのことを覚えてなかった。

俺もこの人も、きつとまともな人生を過ごしてない。

この人の親を俺は見たことねえし、この人も俺の親を見たことはねえだろう。

お隣さんなのに、だ。

朝風の家と夜風の家の間の『関係性の空白』っていう異常があった。

異常はきつと、どっちの家にもあった。

俺達の家には、きつと何かが足りてなかった。

今まで気にもしてなかったが、この人の家も、俺の家も、多分同じようにまともじゃねえ。

何かが足りてねえから、『普通』になれてない。

普通じゃねえから、普通の人にできないことができる。

「お隣さん価格で何回かはタダでいいですよ。依頼されれば、何でもやります」

「スーパーの閉店間近の大安売りみたいね」

「ん、んん？ ま、まあその感覚で呼んでくれて構いませんが……」

「ヒゲの人も色々言ってたし、私やっぱり役者を頑張つて目指して行くわ」

ヒゲの人。……黒さんか。あの人に任せておけば安心……安心……？ いや安心で
きるわけじゃ……いい映画撮る人だけど倫理や人格は……安心して任せられるほどの
寛容さとか人格者っぷりはあったかどうか……まあいいや。しーらね。

大丈夫大丈夫、黒さんと夜風さんだし。

「そうだわ、ちよつと聞いていい？」

「なんででしょうか。何でもお答えしますよ」

「私、立派な役者になれると思う？」

俺は、ここう答えた。

テレビはオーディション映像のもう最後にまで辿り着き、再生を停止している。アリサさんに「あなたは、自分が父親と同じ存在にならないと断言できる？」と問われた。

俺はこう、答えた。

「俺には分かりません。その問いに答えるには、俺はあまりにも若造すぎます」

イエスともノーとも言い切れなかった。

親父を見てきた俺の人生が、俺にイエスともノーとも答えさせなかった。

「俺が目指しているのは、父を超える自分です。父とは違うものになると思います」

「そう」

セーフ、だと思う。

クソ、表情が読めねえ。どっちだ？

今の俺の返答がアウトだったら、アリサさんはこういう反応見せねえと思うが。

「演出家も、大衆も、役者をオモチャか何かに見てるのかしらね」

言葉が重えよ、星アリサ。

「私達に価値があるのは、芸術と娯楽を提供している時だけと言わんばかり。

無責任に多くを求め……

無責任に失態を笑い……

無責任に、絶対に心壊れない鋼の存在であることを要求する。

あなたの父親なんて、私が女優を辞めたら一度も会いに来なかつたわ。とても分かりやすい」

「それは」

何か、言い訳か擁護をしようとしたが、なんも思いつかなかつた。

親父の心なんざ、俺には分からん。

死人が何を考えてたかなんざ分かるか。

そしてこの人を前にすりや、俺が適当並べて親父を擁護したところで、嘘で庇つてると一瞬でバレちまう。

俺は、黙るしかなかつた。

「芸に、技に、惚れる人間はいるのよ。今のあなたのように。それはとても残酷なこと」ああ、そういうことか。

役者を辞めたアリサさんを親父が、かつての戦友として助けに来なかつたから……技で魅せる女優としての美しさを捨てた途端、アリサさんと親父の繋がりが切れたから。

俺が、夜風さんの演技を一回見ただけで、夜風さんの演技に魅入られたから。

だからあんたは、俺を見て危機感を覚えたのか。

「でなければ民衆は、ああも簡単に落ちぶれていった俳優を見限りはしない」

大衆つてのは、かつて見惚れていた俳優が落ちぶれるとさっさと離れる。

残るのは熱狂的なファンくらいのもんだらう。

ドラマとかで大ヒットした俳優が、多くの人が自分を褒めてくれることに慣れすぎて、氷の城が溶けて消えるようにファンが消えていくことで心を病んでいくって話は聞く。

ヒット時のファンなんて、一割残れば十分すぎるくらいだから、そうなるんだぞ。

「名作では良い演出家のオモチャになり、駄作では悪い演出家のオモチャになる。

それで成功すれば嫉妬を受け、プライベートを失い、大衆のオモチャになる。

それで失敗すれば嘲笑を受け、晒しものにされ、大衆のオモチャになる。

……俳優が幸福になる道なんて、本当はどこにもありはしないと、そうは思わない？」
思わねえよ。

そこが、俺とあんたの違いだ。

俺はまだあんたほどの人生経験がねえから、何も諦めてねえし、失望なんてねえ。

あんたより強い人なら、あんたが駄目だったことも乗り越えられるかもしれねえだろ

？

夜風さんは知らねえが、百城さんのことは、俺は信じてる。

「後悔していますか？ 役者を辞めようとしたことを」

俺の問いに、星アリスさんは窓外の星空を見上げた。

上を見上げれば、そこにはかすかに見える星空。

夜風さんに「私、立派な役者になれると思う？」と問われた。

俺は、こう答えた。

「俺には分かりません。その問いに答えるには、俺はあまりにも若造すぎます」

イエスとも、ノーとも言えねえ。

才能があることは保証してやるよ。

……でもな。

俺が天才だと思ってた人達、この15年で多くが辞めて、多くが死んでいったんだ。

天才だからって成功を保証して言うなんてこと、俺には絶対にできねえんだよ。

この世界で生きてきた俺の人生が、イエスともノーとも言わせない。

「そっか」

「それで、夜風さんは」

「あ、ちよっと待って」

なんだいきなり。アリサさん、夜凧さんと連続で話してちよつとエネルギー使っちゃまった俺はそろそろ帰ろうとしてたんだぞ。

「名前で呼んでくれないと、ルイとレイがきつと後で困るわ。皆夜凧でしょ」
「え」

「また遊んで上げてほしいの。」

あ、お仕事つて、ルイとレイを迎えに行つてほしいとかでもいいのかしら」
「ま、まあいいですけど」

「だからそういう時、ルイとレイと私を区別するため、ちゃんと名前で呼んで」
「えー、あー、そうですね……」

俺は数少ないダチくらいしか下の名前で呼ばねーんだよ。
やめろやそういうの。

「あ、そうだわ。タダで依頼していいって言つてたわよね。」
私とルイとレイをちゃんと名前で呼べて依頼すれば万事解決ね！」

……こいつ、瞬間的に頭がよく回る奴だ！

今聞いたことを速攻で応用してきやがった！

「け、景様？」

「様はどうかと思うわ」

「……景さんで」

「うん、そうしましょう、英二くん」

百城さーん。

名字呼びのまま安定させてくれる君がちよつと恋しくなつたぞ。

「私、まだちよつと大変だから。」

色んな事務所回ると思うの。

その間あの子達を預かってくれたら、それが一番嬉しいわ。本当に大変」

そうだな。

まだ無名のあんたはこつからが大変だ。

……ただ、凡人がするような下積みの大変さじゃなくて、天才だけが味わうとびっきりの大変さがあんたを待ってるだろう。

今夜風景が感じてる大変さは、きつといつかどこかに行くさ。

「後悔していますか？ 役者になろうと思つたことを」

俺の問いに、夜風さんは夜空を見上げた。

俺が見ている前で、アリサさんは自分が見たもの、感じたことを語る。

それは芸能界で闇の底まで落ちた者の体験談。

「まるで夜のようなだった。光が何も見えない、真つ暗な夜」

聞いているだけで気が滅入るような、重い声。

俺が見ている前で、夜風さんは自分が見たもの、感じたことを語る。

それはただ一度のオーデイションで、舞台の上に魅せられた者の希望語り。

「まるで星になったみたいだったわ。私が輝いて、皆が私を見ていた」

一時間ほど前に俺が聞いたアリサさんの声とは対象的な、明日と光を見つめる声。

俺は、アリサさんの言葉に耳を傾ける。

俺は、夜風さんの言葉に耳を傾ける。

「憧れた世界がこんな世界だったなんて、私は知らなかった」

「憧れた世界がこんな世界だったなんて、私は知らなかった」

アリサさんは過去形で語る。

夜風さんは未来を想い語る。

アリサさんの言葉を聞き、夜風さんを止めた方が良いんじゃないかと、そう思った。

「だから思ったわ」

「だから思ったわ」

夜風さんの言葉を聞き、彼女の熱意と想いを否定したくないと、そう思った。

俺は、アリサさんに同情した。

その意志に、心が同意しかけていた。

「役者になんて、ならなければ良かった」

「私、役者になりたい」

俺は、夜風さんを応援したいと思った。

その心に、俺の意志が魅せられていた。

ここで「役者にならない方がいい」と言わないで、「俺の力で彼女を助けられる時に助けていけばいい」と思うだけの、俺は。

役者が見せる輝きに目を奪われ、心を奪われた俺は。

彼女を本気で止められなかった——止めなかった、俺は。

親父と同じく、悪魔に魂を売ったような人でなしだと、そう思った。

ぼくたちには、ヒーローがいる

〔11:50〕

気が昂ぶって眠れん。

ここまでテンションが高まったのはいつぶりだっただろうか。

黒さんとの会話を思い出す。

——張り切ったお前の仕事は速くなったが、雑にはならなかったな。

——あの速度で安定すりゃもっと上に行けるんじゃないのか？ メンタル次第だが

張り切ってメンタルが安定している時の俺はクオリティそのまんま、速さだけをプラスしていける……らしい。

上手いまま速くする、つてのが難しいんだが、気持ちに乗ってる時は疲れも感じねえしフルの集中力がずっと維持できてる。

腕に染み付いた技を過不足無く使える程度の冷静さが頭に残っていると最高だし。しかし。

「終わっちゃった……」

来月末分まで、つーか今受けてた自宅消化用・事務所消化用の仕事全部終わらせちゃった。

なんてことだ。

やるのがねえ。

そう思うと、ちよつと疲れが出てきた。

昨日の朝にテレビタ日の方に行つて一日中仕事して、3時から6時くらいまで寝て、その後身だしなみ整えてスタツフ塾の応援講師また行つて、夕方に一回棘谷ウルトラマンの棘谷プロダクションは本放映以外にヒーローショー準備等の業務が中々多い。に顔出して、その日の夜にスターズ事務所オーデイションの話聞いて、和歌月さん達と俺の事務所帰つてスターズ事務所行ってアリサ社長と会つて、夜風家行って俺の事務所にまた帰ってきた。

そういやあんま寝てねえわ。

気力は十分なんだが。

十分な仕事には十分な睡眠が要るな、ちよつと寝るか。

と、そこで鳴る電話。

死ねつて思う俺は普通だと思う。

この番号は……黒さんか。

『お前ちよつと協力しろ』

「なんですか、藪から棒に」

食い気味に言うな食い気味に。

『さつき……つっても数時間前か、夜風をうちの事務所に誘った。夜風だ、分かるな？』

「はい」

『あいつをな、受けてたCMの仕事にねじ込んだ。』

次の朝……大体九時間後には夜風をシチューのWEBCMに出演させる手筈になつてゐる』

「え？」

えつ、待てや、オーディション終わつて景さんちにあんたが行つたの今夜じゃねえの？

その次の日の朝に景さんのCM撮影の仕事の予定入れたつてことか？

なにそれ怖え。

景さん誘つてから、プロデューサーとかクライアント企業とかに話通して、使う女優の話通して撮影準備始めて、撮影開始を開始するつてところまでを12時間くらいに納めた感じか？

なにそれ有能。

こわい。

しかし流石黒さんだ。

あの不思議な雰囲気の中に芯の強さを秘めたような景さんを説得して、信用させて、あつという間に自分の事務所所に所属させることを同意させたつてのか。

そんな交渉力もあつたとはな。

驚いたぜ。

ただでさえ最近の子は、芸能事務所へのスカウトと偽つてエロ的なアレの撮影に連れてく悪質業者がいるせいで、そういうスカウトをまず警戒してかかるつていうのに。『ところがな。夜風の前には当然予定してた女優がいたわけだ。』

この女優の事務所がうざつてえことに、派手に抗議してきやがつた』
「割と妥当だと思えますけど」

途中で仕事から蹴り出されたらイラつと来ると思うぞ。

というかあんた日本だと少し微妙な知名度で国内での監督実績もあんま多くないんだから、頼むから敵作らないでくれ。

芸能界割と陰湿なところあるんだからよ。

俺の胃が痛くなりそうだ。

『んで、この事務所が工作してるみたいだな』

「む」

『このままだと夜風の仕事やれない可能性が高い。』

事務所は当初の予定通り、自分のとこの女優を出したいみたいだな。

「なんかねえか？　俺がそいつを匂わせるだけであのクソ事務所が引つ込むような弱みとかよ』」

それはそれは。

そこまで来るとちと悪質だな。

CMに誰を出すかの話に黒さんが相当口出したのは事実だとしても、決めたのはプロデューサーやクライアント企業だろ。

つか弱みってなんだ。

そんな都合のいい話知つてるとでも思つてんのかボケ。

俺はただの造形師だぞ。情報屋か何かと勘違いしてねえか？

「そういう面倒臭え芸能界の政争を生き抜くために懇意のプロデューサー作つとくとか、そういう人もいるんだぞ。」

「なんでただの造形屋がそんなん知つてると思つたんだ？　いつペン反省しておくれ。」

まあ知つてるけど。

「心当たりが無い……ってわけじゃないですね」

『なんだ、言ってみろ』

「その事務所にちよつと怪しい人がいまして」

ちよつと昔のことだ。

仮面ライダー響鬼、つていう2005年の仮面ライダー番組があった。

大人の仮面ライダーと、その人から多くを学ぶ子供のW主人公形式。

主役の仮面ライダーであるヒビキさんは子供からの人気も高く、子供の憧れを受け止める大人つっし難しい役を、俳優の太川茂樹さんが見事に演じきったんだ。

ところが2016年頃に突然太川さん解雇の話が出て、太川さんの悪評が流れ始めた。

事務所が『これは不当解雇ではない、太川はパワーハラが酷い問題児だったからだ』と言いはじめたからだ。

太川さんがつまらないことでキレてマネージャーを長時間説教し、無理矢理土下座させて頭を靴で踏みつけたとか。

勝手に仕事を放棄したとか。

後部座席から運転席をイライラして蹴って、事故が起こりそうになったとか。

『関係者の証言』つて形で、コイツはマスコミとネットで一気に拡散した。

何せ番組の中では人格者な大人の仮面ライダーを演じて、舞台を降りても子供達に好

意的な人格者に見えてたわけだからな。

そのギャップは、皆の語り草になるには十分だったってーわけだ。

ネットじゃこの人はそりやもう、人格者を演じたクズってことにされてた。

まあ最大の問題は、これらの証言案件の多くが『事務所の主張』『匿名芸能関係者の証言』以外に全くソースが無いっていうのに、ネットで長年真実のように語られてたこと。

そしてきっちり調査と捜査がされた上で、裁判所で『こんなパワハラ的事实全くねーよデータラメだよ』と断言されたことだ。

怖っ。

なんじゃそりや。

この過度の悪評で太川さんは俳優生命ほとんど絶たれたんだが？

当然ながら、当時から疑問の声も少しは出てた。

「いや普段から素行が悪いなら全くそんな噂なかったのにおかしいでしょ」とか。

「ある日突然わつと悪評が出てくるのにおかしくね」とか。

「あそこの事務所は芸能界のドンの直系だからそりやね」とか。

「前もあの系列の事務所、独立した女優に仕事行かないよう圧力かけてたな」とか。

「事務所の不当要求に逆らったからとかでしょ、太川さん」とか。

事実とそこから広がる推測が、ぽっぽつと湧いていた。

が、この辺は全然広がらなかった。

長い間ネットじゃ太川さんが『パワハラで干された暴力男のクズ』という風潮が続き、太川さんを信じる声も少なくなっていくたって話だ。

なんでそうなったか、っていうと。

この事務所の上には芸能界のドンにあたる会社があり、マスコミは結構な圧力をかけられちまつたらしい。

後に第三者組織がここにメスを入れるくらい、やべー事態になっていた。

また、フェイクニュース、事務所側の長期間ネット工作なども疑われてて弁護士と警察が2018年現在も詳細調査中であることが公表されている。

そりゃネットの一般人も太川さん叩きの怪しいソースの記事を皆信じるわ。

だって”皆がそう言ってる”って空気出来てんだもんね。

そこまで行ったら工作しなくてもどうともなるわ。

事務所側は泣き寝入りを狙ってたんだらう。

大嘘ついてマスコミとネットの両方でゴリ押しすりや、一俳優は諦めて折れると思つてたんだらう。まあ普通は事務所が勝つよな。

が。

恐ろしいことに、太川さんは諦めなかった。

しかも勝つちまった。

2018年に「全部データラメ、太川さんへの中傷は全て事実無根」と完全勝訴報告。事務所側の嘘が全てバレ、太川さん（仮面ライダー）にこそ正義があつたと判明したのだ。

リアル仮面ライダーかよ……なんだこの人……なんで現実で巨悪に立ち向かって勝つてんの？

んで、それに先んじて各マスコミは誤報を流したことを全面的に謝罪。

特にヤバかった『丁BS』に至っては、放送倫理機構のBPO（放送倫理審理）が入ることに。

事務所は太川さんが全面的に悪いっつゝ証拠を提出したものの、ネットのフェイクニュースや週刊誌の創作だつてことが判明したり。

弁護士が太川さんの普段業務の記録、メール内容、各書類、音声記録を提出したため、太川さんが普段から真面目で良心的な俳優であることが判明したり。

すっげー対照的な裁判になつてたんだよな。

いやもうこれ怖えつて。

なんで事務所を勝たせるため捏造品を作らせ裁判所に出してんだ。

裁判の途中で、脅されて強要されて知らずに書類の偽造に手を貸してしまったんですって証言と謝罪した人まで出てきたからな。

警察もこの案件のヤバさに気付いたのか、捜査に力を入れることを約束。

2018年5月17日には、太川さんのブログに殺人予告の嫌がらせをしていた男を逮捕。

すつげいな社会の悪に立ち向かった男を警察が助けてるぞ。

リアル仮面ライダーかよ。

そういう事情を、かいつまんで黒さんに話した。

俺の主観と私情がちよつと入った語りになったが、そんなくらは勘弁してほしい。

「噂なんです、黒さんに妨害仕掛けてるその事務所、この案件に関わってたらしいんです」

『ほー』

「脛に傷、ってやつですね。

俺そういうのは変に首突っ込まないで当事者と法に任せるつもりだったんですが……

ちよつとばかり道を譲ってもらいましよう。

俺がこの噂聞いたの、『あの事務所の弱点をあの監督が知ってる』っていう話なんです」

『どの監督だ?』

「この前、百城さん主演で俺が美術監督だった怪獣映画です」

『ああ、あれか。なら繋がりはあるんだな』

「その事務所の社長が何月何日にヤバイ会合に出てた、くらいの話でいいでしょうか」

『まああつちの事務所が黙ってくれりゃいい。俺はこういうの向いてねえから任せる』

俺はもつと向いてねえと思うぞヒゲ。

「あんまり期待しないでくださいよ。」

あと、俺が詳細聞き出してきたもあんま多用しないでくださいね。

よその事務所の恨みを買わないことが一番大切なことなんですから、この世界」

『だから日本のこの業界嫌いなんだよ。面倒くつせえな』

「黒さんの失態で夜凧さんの将来が潰されたりしたらぶつ殺しますよ」

あ、やべ。

『……ハハッ！ お前がうっかりでもそういうこと俺に言うの何年ぶりだ!』

「……失礼します」

電話切り。

誤魔化し誤魔化し。

俺としたことが、とんだ失態だ。クソア！

とりあえず景さんの仕事の邪魔を排除しねえと、今何時？

【00:20】

確かあの監督、今日は夜通し撮影だったな。

あそこの第六スタジオの予定表は最近見たから覚えてる。

急げ！

いっけね、結構時間食っちゃった。

スマホで時間を確認。

【00:50】

シチューのWEBCMの撮影開始予定時刻が九時くらいだったか。

七時くらいには話確定しておきてえだろうし、あと六時間ってどこか。

急い方がいいかもな。

スタジオを覗いて確認。

ふむ。

例の監督は撮影中だな。カメラが回ってる。

今は話しかけるのは無理か。

せめてカメラ止まって休憩に入ったタイミングとかじゃねえと。

他スタジオでも撮影やってんなあ。

あ、誰か寝てる。

へへっ、分かるぜ……撮影は呼び出されて「出番が来たら呼ぶから」と言われて三時間スタジオに放置とかあるからな。

寝れる時に寝ておくんだ。

衣装部は着替えの時間が仕事だし、録音部もあーだこーだとテスト撮影してる時は仕事無いこと多いしな。おつかれさん。

こういう時間も好きだ。

俺が何もしないで、眺めてるだけで、色んな人が撮影に駆け回ってる。

必死で、全力で、懸命で。

撮影現場の人達が、全身全霊で良いものを作ろうとしてるこの空気が好きだ。

俺が当事者じゃなくて観客になってるようなこの時間も、嫌いじゃねえ。

俺の肩を誰かが軽く叩く。

振り返って、目が合った。

湯島茜さんじゃーん。

「奇遇！」「奇遇ですね」

あ、同じこと言ってるのに絶妙にハマらなかった！ 発音ズレた！ 惜しい！

「ややわー、ここで会うとは思わなかった。嬉しいわー」

「俺もです。撮影ですか？」

「朝ドラの室内シーンに脇役で出るんや。ほんま脇も脇やけどな」

源真咲さんもいた。

ようこんばんわ。ちよつと眠そうだな。

俳優は俺と違って目の下のクマも致命傷になるからゆつくり寝とけよ。

「ども」

「こんばんわ、源さん」

「お疲れ様つす、朝風さん」

おう俺の名前覚えてくれたんだな。心の中で褒めて使わす。

つてかオフィス華野の二人じゃねえか。

二人セットで仕事か？

「お二人は一緒の仕事ですか？」

「俺は別仕事で休憩時間つすね。ただ、茜さんはちよつとトラブルみたいで」

「トラブル？」

「なんちゆうかな、撮影中止状態ってやつや」

撮影所はいつつもトラブルの種に事欠かねえな。

「茜さんの撮影スタジオでテーブルと椅子の足が折れたらしいんすよ。

撮影の都合で重いもん乗せる土台にしてたせいでどつちも折れちまったとか。

代わりのテーブルと椅子も探したらしいんすけどね。

珍しいもんだったらしくて見つからないんだそうです。

しかもそのテーブルと椅子で撮影進めてたもんだから、急に変えたくないんだとか」

「なるほど、監督のこだわりで止まってるんですね。

説明ありがとうございます、源さん。助かります」

「や、こんくらいなら」

時間に余裕があるってわけじゃないが、あっちの監督に話しかけられるタイミングを待ってる最中だしな。やってやらあ。

「分かりました。じゃあ俺が直しておきますよ」

「え、そんなん悪いて。英ちゃんそういうところやで」

「どういこうだよ。」

「いいんですよ、どうせ手が空いてますし」

「そういうところで賃金と評価と好感度を稼ぎつつ墓穴掘るんやで」

「やですね、お金なんて求めませんよ。」

俺は湯島さんが困ってるから助ける。

撮影が止まってるのが見逃せないから助ける。

俺は仕事が楽しい。誰も損しないなら、それが一番じゃないですか」

「俺はそういうところだと思うつすね」

あ、源が口笛吹いた。

おいコラその口笛はどういう意味合いだ。

夜に口笛を吹くと蛇が来る、って迷信があるからご老人の心象悪くなることがあるん

だぜ！ 本当に時々だけどな！

「案内してください。ささっと直しておきますから」

「ありがとうございます。また今度お礼するわ。こっちや」

湯島さんに連れられ、湯島さんの撮影現場の監督さんに挨拶して作業に入る。

とりあえずチエツク、チエツクだ。

テーブルの方はちよつと凝った構造してるが、大まかにはベーシックな木の円盤に木の棒状の足を四本組み合わせた構造。

そこにピチツと密着する真っ黒なテーブルクロスをかけて、足も含めた全体が人の目

には直視できねえ、けど形は分かる、そんな感じのテーブルか。

足がかなり分かりやすくベキツとってんな。

椅子もベーシックな、L字型に腰掛けと背もたれを組んで、そこに四本の棒状の足を組み合わせた形か。

こつちは……足と腰掛けの接続がボキツと折れたか。

椅子の方は木材じゃねえな。樹脂系か。

折れた断面が比較的綺麗な断面になってやがる。

よし。

こんぐらいなら、まあどうにかなるな。

時間を確認しておこう。

【01:11】

さて、修理開始だ！

【01:13】

修理完了。

「すみません湯島さん、お待たせしました。修理完了です」

「待つとらんけど!?!」

いや流石に何時間もかかるような修理だったら俺も助けにくるかは迷ってたわ。

すぐ直せるから来たんだって。

そういうことだ。

「え……いやなんやこれ」

「日本の制作じゃあまり使われてませんが、アメリカではメジャーな道具を入手したんです」

俺は湯島さんにテープと接着剤を見せる。

FiberFixってテープと、UVリペアペンって樹脂補修材だ。

テープでテーブルの足を補修して、補修材でさきつと椅子の足を接着したってわけだ。

「このテープの強度は強いガムテープの数百倍です。

強度的にはステンレスと大差ないですね。

お湯で濡らしてぱっと貼ればそれで完了です。

この撮影所の環境だと硬化まで2分。完全固定まで20分ですね」

電気にも水圧にも強く、大体の熱や低温にも強え。

コンクリートの折れた柱すらこいつを巻いておけばどうにかなる。

補修作業ってのはかけた時間と、最終的に得られる強度が比例しがちだが……こいつのおかげで、最近の俺の応急修理速度は飛躍的に上昇した。

テープブルクロス掛けときゃ、カメラにテープ補修部分は映らねえ。

「こつちの補修材は、紫外線ライトを当てると5秒以内に固まる接着剤です。なので椅子の方は直すのに15秒かかっただけだと思えます。

硬化タイミングをコントロールできるのが大きいんですよ、これ。

既存の瞬間接着剤は俺の手の速さと比べると硬化が遅すぎました。

かといって、他作業と並行させるには硬化が速すぎる時もありましたから」

しかもこのリペアペン、補修材部分にヤスリがけできるんだぜ。

表面に塗装もしつかり乗るし、乾くとちゃんと透明で白くもならねえ。

硬化まで5秒以内なもんだから、最近の俺の応急修理速度は飛躍的に上昇した。

人類すげーよな。

技術力の進化が半端ねえ。

「俺はまだまだ成長の余地がありました。

既存の技術で満足しすぎていたんです。

最近、その……知り合いのお爺ちゃんに色々教えられました」

「はえー」

湯島さんが『よう分からんがいつもの英ちゃんやなあ』って顔してる。

いやそこは『すげー』って顔してくれない？

「あ、監督さん。

シルエットのため二重巻きにしたので足一本あたり引張強度が409N/cmです。足一本の仮想耐久が120kg、均等重量分散状態では足四本なので480kgです」

「……？」

「夜青龍力士のあの人が乗っても大丈夫ですが、彼が足一本に体重かけると折れます」
「なるほど、分かった」

「応急処置なので後でちゃんと直してもらってください。うちに持ってきたら俺が直します」

いい道具の導入によって、俺は仮面ライダーの剣や戦隊の銃がへし折れても、早けりや10秒以内で接着と偽装塗装を終わらせ、撮影に使えるようにすることができるようになった。

いやー凄えな道具の力。

俺程度の技術だどこまで改善するとは。

「すっげえ速え」

源さんそろそろ休憩時間終わるんじゃないやねえの？ 大丈夫？

感心してんのか。

いや、なんというか。

速い作業を凄と思うより、遅くても丁寧な職人作業を凄と思う癖付けといた方が
良いと思うんだよな俺。

「あんたの手足つてゴキブリの数倍速い気がしてきた……ゴキブリに例えるのは失礼だ
な」

ゴキブリに例える時点で失礼だオラア！

まあ褒められて悪い気はしねえ。

ゴキブリを超えた男か……文字にすると少しかっこいいかもしれねえな。

「ありがとさーん！」

湯島さんに見送られてそのスタジオを離れる。

時間確認。

【01:17】

余裕だな。

……いや通常撮影の慣例からすりや余裕全然ないか。

撮影の休憩時間に人の合間を縫って、監督に会いに行く。

「おお、朝風君！ よく来てくれたな！」

「ご無沙汰しております、監督。お元氣そうで何よりです。すみません、撮影中に」

「うむ、構わんよ。君に仕事を頼むことはないが、ゆっくりしていきたまえ」

この前のスーツ0円から監督が好意的で困る。

「実は少し監督に聞きたいことがあります。」

あと、手伝えることがあれば手伝おうと思ったんですが……無いみたいですね」

「うむ、君には恩がある。何でも聞いてくれたまえ、私は何でも応えよう」

と、そこで、助監督が監督に耳打ちする。

「少し後にまた来てくれないか。君のために時間を作る」

「ありがとうございます！」

これなら大丈夫だな。

今からカットの撮影に入るんなら、そこまで長時間長引くことはねえだろう。

スタジオから出て、スタジオ入口すぐ傍で一人待つてることにする。

やっぱ監督ってやつは本能的な商売だな。

百城さん主演の映画で大成功と大人気が見えてるつてのに、もう次の撮影の序盤撮り

を始めてるつてのは、中々熱意が感じられる。

いいことだ。

あ、そうだそうだ。

湯島さんとかが出る回の朝ドラ録画予約しとかねえと。

絶対仕事で見れねえし。

そんなことを考えていたら、ふと。

真横に、俺の横顔を覗く百城さんがいることに気が付いた。

?なんで!?

?!?!

「傷付くなあ。そんな妖怪を見たみたいないな顔しないでよ」

「……突然妖怪を見て驚いた顔はしてませんが、突然天使を見て驚いた顔はしています」
「かもね」

微笑む百城さん。可愛い。

「なんでここににいるのかな? 英二君、今日ここで撮影あつたっけ」

「景さん……知り合いの新人俳優のデビューの件で、ちよつと」

「ケーさん? ……ふーん」

「本当に凄い人ですよ。」

個性的な演技とか、面白い演技とか、そういうレベルじゃなく凄い演技です。

思わず見惚れてしまいました。

あれは成長すれば百城さんと肩を並べるかもしれないね。

彼女のあの演技は、成長する百城さんの表現力を見た時と同じくらいワクワクしましたよ！」

すつ、と。

百城さんの目が細まった。

期待と戦意が、一瞬だけ百城さんの目に浮かんで消える。

「英二君はさ」

え、あ、はい。なんでしょうか。

「人は褒めるけど、そこまで演技を絶賛することあんまりないよね」

「そうでしたっけ？」

「だからアキラ君が地味に絶賛されてないこと気にしてるの、気付きもしてない」

「え」

え、マジ？

……そうだったかも。

やっべ悪いアキラ君。

これはかなり最悪なことしてたわ俺。

アキラ君は俺の仕事かなり絶賛してくれてた覚えあるぞ……クソ野郎じゃねえか俺

！

「でもちよつと楽しみかな。英二君、出来の良い作り物にはとっても好意的だもんね」
にこりと天使が笑う。

作り笑顔を極めた末に、誰から見ても綺麗に見えるっていう、天使の笑顔。

その下には案外ガキつぽい負けず嫌いな一面があることを、俺は知ってる。

それは自分に演技で喧嘩売ってきた奴を、更に上等な演技で叩き潰したりせずに、や
んわり受け止めて自分の演技に取り込み、自分の演技を引き立てたりするタイプの負け
ず嫌い。

撮影を壊さず、相手を叩き潰さないまま、大きな敗北感を与えるタイプの勝利者。

ひとたび主演にキャスティングされれば、どんな人間にも撮影の主役を譲らない、限
定的な負けず嫌いが。他の演技と競うその熱意が。作品へのその妄執が。

その笑顔を更に綺麗にすることを、俺は知っている。

「英二君はさ」

またその台詞で会話始める気か！

発言を際立たせるために一呼吸置くな！ 怖い！

「私とその人、どっちの演技が好き？」

目が怖い。

「『アメリカの夜』は、

”映画は現実の人生よりも素晴らしいか？”

という問いをめぐる映画でもあったが……」

あのな百城さんはさあ……と思いつつ、とある映画監督の台詞の始まりを言う。

ぴくり、と反応した百城さんが、少し呆れた風に微笑んで、続きを言う。

「もちろん答えはない」

そして俺が、最後に続きを言い、締める。

「子供に”パパとママとどっちが好きか？”と聞くのと同じことなのさ」

分かんذار、百城さん。

「フランソワ・トリュフォー、より」 1950年代にフランスで始まった新時代映画運動・ヌーヴェルヴァーグ運動。それを代表する映画監督の一人が、フランソワ・トリュフォーである。『愛の映画芸術家』と言われ、戦争も政治も大嫌いなので恋愛映画だけ撮っていたという愛の人。『アメリカの夜』は映画撮影を舞台にした、監督や女優などの映画撮影を行う者達の間模様を描く映画である。「アメリカの夜は『映画は現実の人生よりも素晴らしいか？』という問いを巡る映画でもあったが、もちろん答えはない。子供に『パパとママのどっちが好きか？』と聞くのと同じことなのさ」とは、トリュフォーが自作を指して言った言葉である。いい言葉なんだがググっても出ないんで現代では忘れられる運命にある。

今の俺には順番なんて付けられねえ。

だけどな、順番を付けられねえってことこそが、素敵だつてこともある。

「まあ、私は今はそれで納得してあげようかな、うん」

納得してくれて何よりだ。

「今は他のお仕事忙しくて余計なこと考えてる暇ないし。あ、またお喋りしようね」

「ですね。百城さんとは話してて楽しいです」

それは本当だ。

時々珍しい虫の話しろつて言われるのは中々厄介だがな！

「アリサさんが言つてたよ」

何を？

「本物の役者は自分に夢中になつていた人が、他の人に少しでも夢中になつたらすぐ分かるつて」

へー。

「うん、本当だった」

怖いこと言つてんなコイツ。

夜風さんの初仕事

難なく——難なくと言って良いのか知らんが——太川茂樹さん関連の情報を手に入れた。

こいつがあれば例の事務所との交渉が上手くいく。

法的な証拠能力はねえ。

警察に伝えても役には立たねえレベルだ。

あくまで「俺はお前の弱みを知ってるぞ」と匂わせ、例の事務所の譲歩を得るのが狙いだ。

正直言つて、あくどいことやらかしたやつをぶん殴つて懲らしめてやりてえ、つて気持ちがないわけでもない。

でもなあ。

現実には、悪党ですら殴つちやあいかんのだ。

暴力はよろしくねえ。俺の誕生日の仮面ライダークウガ・五代さんもそう言ってる。

どうせ悪党はその内滅ぶ、そう思っておこう。頑張れ警察。

俺は正義とかヒーローとかにはなれんタイプだ。

そういうのは警察とかアキラ君に任せておこう。

「ありがとうございます、ごいしました、監督」

「あまり情報は悪用しないようにな。

恨みを買うと良いことはないぞ。

芸能界は敵を作るより味方を作る方が楽に生きられる世界なのだ」

「肝に銘じておきます。

あ、お礼と言つてはなんですが、あのお城の陰の表現に蛍光オレンジ使うと良いと思います」

監督が撮影に使つてたお城のミニチュアを指差し、一つアドバイス。

ちよつと陰影甘い気がするぞ、あれ。

「ほほう」

「四池敏夫美術監督として高名な四池敏夫さんは、英二が家具の参考にした井下泰幸さんの弟子。さん流です。

ここ、この辺りとか、陰に少し蛍光オレンジを混ぜるといいですよ。

明るいところじゃなくて陰に、です。

漆喰の陰には蛍光オレンジの隠し味があるとリアルになるんです。

……申し訳ありません、スタッフでもないのにお仕事に口出しするようで」

「構わん、構わん。質が上がるなら良いことだ」

寛大な処置に感謝します。ありがたい。

気になって言ったのはいいものの、こういうの気にする人いるしな。

「それと、他にも——」

監督にお礼と俺にできる造形美術面でのアドバイスを置いていつて、百城さん、湯島さん、源さんの撮影スタジオを覗いて、撮影所を出ていく。

んで、電話を掛けた。

【02:30】

意外と早く終わつたな。

ほれはよ電話に出ろ黒さん。

出た。

調べた結果を黒さんに報告、報告と。

『よくやった、うちの事務所に自由に入出入りする権利をやろう』

「はあ、どうも。でも終さんが嫌がりませんか」

『まああいつは大丈夫だろう。お前との仲も悪くねえ』

そういうもんか。

「あつちの事務所との交渉はお任せしますが、俺が他に何かすることありますか？」

『働き者だな』

「茶化さないでください。俺が関わった仕事です、最後まで行く末見届けますよ」

『うちの職員でもねえのにご苦労なこった。だが、今はそのクソ真面目を利用してもらおう』

このクソヒゲは他人の機嫌を取るって概念をどこに忘れてきやがったんだ。

『悪いな』

……まあ、いいってことよ。

『先に撮影スタジオ入りして準備を頼む。終を後から行かせる』

「黒さんはどうするんですか？」

『夜風を拾って後から行く。』

先に現着した奴がいねえと予定外の撮影セットが組めねえからな、頼んだぞ』

「夜風さんを……分かりました」

ああそうか。

撮影自体は前から予定した通りのやつでも、景さんをねじ込んだのは今さっきだから、景さんに合わせた撮影セットは組めねえのか。

前の女優に合わせたセットが予定されてたんだもんな。

下手すりゃ景さんの身長とミスマッチで絵面が酷くなるかもしれない。

俺の事務所に寄りつつまったり撮影スタジオに急行し、その道中で黒さんとスマホで連絡を取り合い、黒さんが撮りたい画えの詳細を煮詰めていく。

「それなら、夜風さんの素材を活かす感じがいいんですね」

『ああ。そこまで凝らなくていい』

「撮影セットと雑務のスタッフは手配済みなんですよね？」

『上手く使えよ』

「俺使われる方が得意なんですけどね……」

さて。

一回頭の中で整理しておくか。

今回の流れはこうだ。

某食品会社が、『父の日にシチューを』企画で、シチューのウェブCMを作ろうとした。

この食品会社がクライアントにあたる。

クライアントの依頼を受けた広告代理店のCMプロデューサーが動き出す。

このプロデューサーが、CMのプロデューサー……要するに現場レベルじゃねえ大きな規模の、全体総指揮を執る。

んで、CMプロデューサーが黒さんの『スタジオ大黒天』にCM作成依頼を出し、女優・スタッフ・撮影機材とかを手配しようとした。

そこに黒さんが待ったをかけて、CMの中心を景さんにすぐ替えた。

あとはプロデューサーが手配した撮影のセットとスタッフを使って、黒さんの頭の中のイメージを、景さんが再現する手伝いをすりやあいって話だな。

セットもスタッフも、今の時代じゃレンタルがある。

金がありや、シチューCM撮影に使える上部にステレンス貼ったキッチンセットなんざ、2週間4000円くらいで借りられる。

撮影に使うもんは大体レンタルができるし、おつそろしいことにディレクター（監督）からカメラマンまで貸してくれる会社すらある。

金と技術と企画力がありや、プロに近い映像を撮ることはできるわけだ。

大事なのは、どんくらい優秀なスタッフと予算が使えるか、だな。

「ところで、テレビ局の方からの借り物多いですね。セットと撮影機材」

『あんたところの局で流すCMだろ、って言って引つ張ってきた』

「なるほど」

『気になつたらセット弄っていいぞ。』

”あの朝風のリペイントや修繕なら頼みたいくらいです”だとさ』

「俺に無断で俺の名前使うのやめましょう、やめましょう。」

ええと、借りた空っぽのスタジオに、借りたセットを組み上げるといふ形でいいです

ね」

『おう』

あんたのそのズケズケ行く感じは殺魔剣八郎薩摩の剣豪、空手と水墨画の達人であるスーツアクター。100kgを超える怪物ヘドラのスーツを着て、その怪奇の動きを演じた。後にはゴジラも演じたことがある。若い頃に他人の空き地でひたすら剣を振り、体を鍛え、それがエスカレートして他人の土地で勝手に道場を開くようになった凄まじき剣豪。地主はキレた。さんを思い出すぞ！

「それにしても、キッチンスタジオ借りなかつたんですね。なんでですか？」

『俺が思う通りのレイアウトにするどころか、好きに弄れもしねえからだ』

「まあ、それは確かに」

キッチンスタジオ、つてのがある。

綺麗なキッチン貸しますよー、普段から綺麗にしていますよー、だから使うなら一時間○円で料金払ってくださいねー、つてやつだ。

クソ高えくたばれつて言いたくなるやつもありや、クソ安いな鼻屑にさせてくれやつて言いたくなるやつもある。

種類によつちや、このスタジオと撮影機材だけ用意して撮影した方が、料理シーンの撮影は安上がりになる。

黒さんはそいつを使わず、スタジオのスペースだけ借りて、テレビ経由でスタジオセットと撮影機材を借りてきた。

おかげで安上がりな上に自由度はダンチだ。

本気で景さんを演出するフィールドを作るつもりだな、黒さん。

「絵コンテ、一枚でいいですから切って送ってくれませんか？」

『おう、ラインで送っとく』

絵コンテとは、映像の設計図だ。

今回みたいな撮影の場合は、景さんがシチューを作ってる絵とかを、監督が監督のイメージに沿って描くことになる。

こいつを皆で見て「あーこういうの作るんだなー」と思うわけだ。

お、来た来た。

シャーペンの走り書きなのにやたら上手いな黒さんのイメージ画。

システムキツチンと、そこでシチューを作る景さんと、その背後に冷蔵庫と食器棚か。

全体的に画面が白く清潔な印象を受けるな……シチューが白いのと、景さんの黒くて綺麗な髪を別方向で印象付けるCMか。

いいんじゃないか？

シチューの視覚効果つてのは、真っ白なシチューに色とりどりの野菜とか、薄桃色の

鶏肉とかが浮かんでる、白を基調としたカラーによるもんだ。

キッチンの撮影セットに目立つ色を置かねえことで、シチューの中の色彩豊かな野菜や肉が目立って美味そうに見えるし、景さんの黒髪とかが印象に残るだろうな。

景さんの髪がうっかり落ちててカメラに映ることだけは気を付けねえと。

あの髪は長いから、白基調のセットに落ちると目立つ。

「そういえば、15秒でいいんですか？」

『ああ、15秒だ』

『CMは15秒』。

これが現在のTVCMの基本だ。

TVCMは15秒と30秒の二種類があつて、全体の85%が15秒CMだつて言われてる。

が、WEBのCMにTVと同じ縛りはねえ。

番組と番組の間っていう縛りがねえからな！

俺が知る限り、6秒のシチューCMや数分クラスのドラマ仕立てシチューCMもあった。

良かった良かった、15秒で。

簡易なスタジオ一つだけで数分もののCM撮影すんのは、間が保たねえしな……あれ

は辛い。

「そういえばさつきLINEでちよつと話したんですけど、柗さんがですね」

『なんだ、生理か？』

「違いますよ！ 本人の前で冗談でもそういうこと言つては駄目ですよ！

そうではなくて、黒さんが衣装の方のレンタルを断つたとおっしゃられてました」

『あーしたした。』

前の女優に合わせた黒い衣装なんて要らん。

邪魔なだけだ。

夜風にはあいつの制服で、エプロンだけ着けて出てもらう』

「ええと……夜風さんの今回のCMの設定は……」

夜風さんは、初めて一人でキッチンに立つた少女。

もうすぐ父が帰ってくる。料理を作ろう。

そう思い立ち、慣れない手つきでシチューを作る。

喜ぶ父親の笑顔を思い浮かべながら味見をして終わり、でしたね。これで15秒と

『そうだ。主に娘がいる父親をターゲットにしてるな』

「父親がいるこの年頃の娘がターゲットじゃないんですか？」

『こんなCMでティーンズの娘が父親のために頑張ろう！ つてなるわけねえだろ』

ひつでえ。

親父か。

俺にとつて親父はそういう存在じゃなかったが、景さんにとつちやどうだっただろうか。

『お前、夜風の制服姿は見たことあつたか？』

「ありますね。数は多くないですが」

『じゃあそれに合うエプロンも作つておいてくれ。衣装の貸出は断つたからな』

一回見りゃ覚える。

基本は白、襟元・袖口・スカートの薄青、リボンが赤だったか。

黒さんの意図を汲むなら、エプロンはシンプルに白でいいだろうな。

あれ、規定の制服って商業利用アウトじゃなかったか？

CM出していいんだっけ？

それだと校章とか隠さないと駄目か？

……いや、学校の制服はその例には入らねえんだったな、確か。

商業に使うといかんののは他の一部の制服だったか。じゃあ大丈夫だな。

まあ念の為、景さんには校章は外してからCMに出してもらうか。

『ああ、そうだ。』

シチューが跳ねるかもしれん。

俺の想定だと、かなりヘタクソに作るだろうからな』

「よく分かりませんが分かりました」

白エプロンとはいえクリーム色っぽいのは駄目、つてこったな。

白いエプロンの表面にちよつと跳ねたシチューがうつすら見えるくらいの塩梅か？

「シンプルな白エプロンなら……そうですね、五分くだされば確実に縫い上げられます」

『そんだけ速けりや問題は起きねえな』

「今時は小学生でも作ってますよ、エプロンなんて」

あんまり俺の実力を低く見積もられてもちと困る。

俺の仕事基準はおいおい覚えてもらっておこう。

「あ、今思いついたんですけど」

今回の撮影はセットのキッチンに景さんが立ち、その向こうに地味な色合いの茶の食器棚と銀灰色の冷蔵庫が見える、壁も床も真っ白、そういうやつだ。

なら、食器棚の戸のガラス張りの部分に仕事ができるな。

「食器棚のガラス部分の表面を鏡面に近い風に仕立てたらどうでしょうか。」

そうしたら夜風さんの背中面もカメラに映ります。

夜風さんを視聴者に魅せたいなら、これで夜風さんがより多角的に見えるかもです

「よ」

『悪くねえが視線が散るな。』

エージ、今回のWEBCMは15秒だぞ。

客の視線はあんまり動かさないと済むに越したことはねえ。

夜風本人と、後ろの柵、視点の焦点を二つ用意しちまうのは好きじゃねえな。

それなら後ろの柵は反射しないようにして、夜風の正面顔に注目させたいところだ』

「そう、ですね。確かにそうです」

うーむ。

流石に黒さんは隙がねえなあ。

俺の浅い発想じゃ役にも立たねえか。

っと、到着した。

「現着現場到着の略。しました」

『ご苦労。セットは打ち合わせ通りにな』

「はい」

【04:05】

そこそこ早朝だな。

早く移動しすぎても撮影セットとスタッフが来ねえから、黒さんと打ち合わせしながら

ら一回俺の事務所に寄って、ゆっくり移動して来たわけだ。

まあこんなもんか。

隣り合ったスタジオとかで人の動く気配。

まだまだ多く点いてる室内電灯。

俺達以外の撮影チームが忙しく動いている中、俺は撮影機材とセット一式が来るのを待った。

【04:25】

ほどなくして、待ってた物と人が来る。

撮影に必要な物と人が到着したのは、ほぼ同時だった。

よし。

「本日はよろしくお願いします！」

スタジオ大黒天臨時代理の朝風英二です、よろしくお願いします！」

大きく声を上げる。

撮影の始まりはやっぱりこいつが肝心だな。

来てくれた皆さんが大きな声で、俺の返事に返答してくれる。

いいな。

こういうところで返事が弱つちいというか、返事にやる気がねえチームだと、うつかり

目を離れた時に手え抜いたりするもんだ。

「これはあつちに、あ、照明はそつちでお願ひします」

とりあえず俺が指示出してセットを組ませる。

まあこんくらいできなきや特撮監督は無理だし、その辺は黒さんも分かつて俺に任せたんだろう……と、思う。多分。

ただ細けえところどうすつかな。

俺の能力だと黒さんの画作りの基本スタイルにすら合わせきれないだろうから、細けえところが黒さんにコレジャナイ感覚えさせかねないんだが。

【05:20】

「おはよ」

あ。

おー。

来ましたか。任せていいつすかね？

「お久しぶりです、柊さん」

「おひさだね。元氣してた？ エージくん」

「はい。おかげさまで」

人当たりがいい笑顔を浮かべ、やや長い髪を纏めた、黒山墨字の片腕がそこにいた。

彼女の名は終雪^{ひいらぎゆき}さん。

黒さんの『スタジオ大黒天』のスタッフで、黒さんの肩書きが監督なら、終さんの肩書きは制作にあたる。

とは言いが、実際は助監督。

要するに黒さんにとって最も自由に動かせる手足であり、監督の意図を最も理解した上で独自判断にて動く、『監督の最大のパートナー』だ。

美人さんなおねーさんである。

今回はCM撮影なんで、『AD』って言った方が終さんの役職に近いかもしれない。まあともかく、俺より詳細に黒さんの撮影を熟知してる人だ。

現場の指示は任せていいな。

「ごめんねー、墨字さんが無茶言ってたでしょ。

無茶振りや辛いことは断っても良いんだよ？

君が頼まれたこと全部引き受ける義理なんてないんだからさ」

「大丈夫です。好きでやってることですから」

しかしアレだな。

俺が18歳でこの人が20歳なんだが、こうまで露骨にお姉さんぶられると複雑だ。

いや、別に嫌ってわけじゃねえんだが。

俺の方が身長高えんだぞ。

「作業はここまで進んでいます。」

俺が黒さんから指示された内容はこっちにまとめてます。

さつき出して今実行中の指示はここにまとめてます。

俺はここから柘さんの下に入りますので、引き継ぎ完了後、指示をお願いします」

「ん、ありがと。分かりやすい」

今回の形式のCM作成の場合、CMは広告代理店のCMプロデューサーが制作会社に依頼を出して任せるわけだが、その任せられた制作会社がスタジオ大黒天にあたる。

もつと細かく言うと、黒さんと柘さんが制作責任者にあたるってわけだな。

黒さんが依頼されて、黒さんが撮ろうとしてる映像を撮るためのスタジオを組み、そのためのカメラを配置し、黒さんの采配で撮影する。

しからば、黒さんのやり方を熟知した人が現地で色々指示しねえといけねえわけだ。

柘さんがそれにあたる。

まー現地の撮影準備とか全部一切切無関係なよその会社に任せる制作会社とか、いろいろわけねえしな……怖えし。

なんだかんだ、柘さんの仕事量はすげえことになってると思う。

「レフ反射板。俳優周辺などに光を集める。どこですか？ 本撮影ではここに、こうい

う感じで……」

「柘さん、ちよつとセットのことなんですけど」

「はいはい、エージくん、ちよつと待っててね」

スタジオ大黒天は今動ける人、黒さん、柘さん、景さんの三人だけつてことになるな。だから仮に、このチームの人間+俺だけで俺の得意分野な特撮を、このスタジオ単独の作品として、最低限の役割だけ用意して撮るとする。

黒山墨字：監督、演出、脚本、プロデューサー

柘雪：チーフ助監督、制作、撮影、編集、録音、タレントマネージャー、事務

朝風英二：特撮監督、衣装、演出補佐、照明、操演、美術、造形、音楽、VFX&C

G、ミニチュア

夜風景：主演女優

どこが死ぬのかひと目で分かるな。

こいつをプロデューサーとかが別において、脚本とか色々要らねえCMの仕様に合わせて、特撮に必要な役職削って、雑用を派遣された他スタツフに任せ、諸々今回のCMに合わせて直す、と。

黒山墨字：監督

柘雪：チーフ助監督、制作、編集、タレントマネージャー、事務

朝風英二：美術、衣装

夜風景：主演女優

うむ、ずいぶんすつきりした。

これなら——俺と佟さんが全力で色々な役割をやっていけば——撮影もイケるぜ。
しかし黒さんはアリサさんとかとコトを構えそうな気配がしてるが大丈夫なんだろうか。

干されないように立ち回ってほしいもんだ。

このスタジオのこの人数で業界が敵に回ったりしたら人材枯渇で映画撮れんぞ。
それともそうなる前に景さんを一気に売り出して、稼いだ知名度で『干せない』状況でも作るつもりなのか？

うーむ、色々考えられるな。

いや、今は目の前の仕事だ。

ちよつと問題出てきたしな。

【06：07】

「……うーん」

「このキッチンセット、黒さんのイメージに合うと思います？」

「ちよつと汚れ過ぎかな。墨字さん、クリーンなイメージって言ってたよね」

「ですね。 柘さんが言うなら、まず確実にこのキッチンセットじゃ駄目だと思います」
テレビ撮影の方で使われ、以後倉庫にしまわれてるやつは時々意外なくらい汚い。
保管が雑とかそういうのじゃねえ。

単に、長期保存してるやつつてのは大体そうなんだ。

撮影用具のレンタルとかやつてるところは、レンタル品を頻繁に手入れして新品に見せるとこと、そんな手入れしてないところがかなり分かりやすい。

まあ要するにだ。

キッチンセット、かなり汚れていた。

黒さんの撮影意図は——柘さんほどじゃねえにしても——俺が理解する限り、クリンで純朴なイメージを持たせた景さんがシチューを作つてねえと、成立しねえ。

借りもののこのキッチンセットじゃ全然駄目だつてことだよ！

とにかくこのキッチンセットの、見るも無残なステンレス部分と、四方の側面の塗料ハゲつぷりをどうにかしないと駄目だな。

きたねえ。

「大丈夫？ どうにかできそう？」

「大丈夫です。今日は一応、フル武装で来ましたから。柘さんはスタジオの方をお願いします」

黒さんと打ち合わせしつつ、俺の事務所に寄ってから来た甲斐があった。

見ろ！ この俺の作業用バックパック！ 総重量65kg！

様々な状況に対応するべく、各機材と各素材を入れられる持ち運び用欲張りセットだ

！

今回の撮影に使いそうなもんを詰め込んであるぜ！

こいつを使えば、俺は事務所に据え置き的大型機械などを使ってる時と比べて、実に15%程度の仕事能力を発揮することができるんだ！

……微妙だな。

自分でも分かる。

だが、ここでの作業には十分だぜ！

「終さん。平均的なステンレス使ってるキッチンなら、ですが……」

「工場でキッチン上部のステンレス部分を鏡みたいに光らせるのに必要な時間、ご存知ですか？」

「知らないけど」

「30分以内です」

「おお、なんだか頼り甲斐が出てきてるね。最近何か良いことあった？」

「はい、それなりに。7時までには終わらせてきますので、少々時間をいただきます」

さーて、まずはキッチンの側面塗装だ！

キッチンセットをスタジオの外の野外に運んでもらって、そこで塗装開始だぜ。

「信じてるぜ、ウレタン」

——ウレタンは柔軟で、多様性と汎用性がある、極めて便利な素材だ。

アキラ君と一緒に新しいバイクの形を模索してた時、俺が思ったことだ。

なればこそ、俺がこのキッチンを染め上げるのに採用したのは、仮面ライダー達の装

甲を作ってきたウレタンの一種——『水性ウレタン塗料』だった。

こいつは夏ならばなんと15分で乾く、超高速乾燥ペンキとでも言うべきもの。

俺は信じてる。

ウレタンを信じてる。

こいつは、歴代の仮面ライダー達の装甲を作ってきたやつなんだからなあ！

と、気合いを入れつつ。

ややテンションを高め、静かに黙って、冷静に素早くキッチンセットの塗装を完了。

白と黒のウレタン塗料によって、あつという間に乾く塗装が完了した。

塗装が固まり始めたのを横目に見つつ、次はステンレスの加工の準備をする。

「目指すラインは……仮面ライダーのマスク、色付きカバーの下に着けられたミラーの

それ」

なんでステンレスの表面を鏡にするのに、30分かかるかねえのか？

そりゃ簡単だ。

最近は全部機械でやってるからだ。

紙やすりをイメージすりゃいい。

ステンレスを磨くのに専用の紙やすりみたいなものがあったって、コイツを機械でギューーンツと動かして表面に当ててることで、ステンレス表面を削りながら磨くってわけだ。

それには普通の紙やすりと同じで目が荒いやつと目が細かいやつがあったって、荒い↓細かいの順にかけていくと、表面がなめらかになる。

木は表面がなめらかになるだけだが、ステンレスはこいつを繰り返すことで鏡みたいになるってわけだな。

『ポリッシャー』っていう、円形の紙やすりを回転させる機械でステンレスを削り磨いていく。

木の表面をヤスリで削って綺麗にしたことがある人は皆知ってると思うが、磨くって言うのは表面を削って、表面の汚れや傷・デコボコを消すってことだ。

俺も今、ステンレスの表面の傷と汚れを削って、磨き消している。

おー綺麗になってきたなってきた。

特撮畑の人間にとって、コイツは因縁深い仕事だ。

初代ウルトラマンなどを造形した伝説の造形屋、成口亨多くのこだわりを持つ芸術家肌な人であり、芸術家の良い面と悪い面を凝縮したような人だった。この人でなければ『ウルトラマン』は生み出せなかったとすら言われる。つて人がいる。

この人が『ヒーロー』として作られていく後輩ウルトラマン達の造形に反発し、『光り輝く者』として作り上げたのが『突撃！ ヒューマン!!』1972年10月7日から12月30日まで放映。なんか怖い。の主人公、ヒューマンだ。

このヒューマンのマスクはフルステンレス。

俺がやったのと同じ方法で徹底的に磨き上げられたマスクは、鏡のように光り輝いたという。

そして重かったという。

記録数値を見る限り、このマスクを被ったまま飛び降りアクションをすれば首が折れる。

ウルトラマンのマスクは正しかったな！

俺はヒューマンのマスクを磨いたかつての芸術家のように、キッチンのステンレスを磨き上げ、多少は鏡に見えるくらいにつるつるに仕上げた。

「柘さーん！ キッチン仕上げ終わりましたー！」

「お疲れ様！ ちょっと食器棚もチェックして！ あと全体の美術面も！」

「了解です！」

さて、次はどうすっかな。

仕事は自分から探してやっていかねえと。

【07:11】

CM撮影が始まる予定の時間まであと二時間くらいか。

他のスタッフと連携して準備を進めていく。

「エージくんちよつと来て。作戦会議」

「はい！」

なんだなんだ。

「カメラの位置、どうしよっか」

どうしよっか、と言われても。

「この手の撮影なら普通に横と正面、あとやるなら斜め前からでいいのでは？」

「墨字さんが一発撮りで全部撮り終わらせるって言ってたからなあ」

「あれ、もしかして寄りのカメラ禁止ですか？」

「寄りのカメラ禁止だねえ」

「何を考えて……ああいや、でもそうですね。」

景さんの場合、繰り返し同じ動きをカメラで撮影、というのが合わないのかも」
「墨字さんの指示だと、斜め上から見下ろすように撮るから、カメラを寄せないとなんだけど」

複数のカメラで景さんのシチュウを作る一連の流れを撮影して、そいつを切り貼りして繋げ、15秒のCMを作る。

そいつが典型的なCMの撮影の仕方だ。

ところが、相手は景さんだ。

多分、あの演技を見るに、カメラの方に合わせられねえ。

撮るにしても一回撮影、よく出来ましたハイ終わり、つてのにしないと齟齬が出るかもだ。

景さんを斜め上から見下ろすように撮るなら、景さんの近くに踏み台の足場を作つて、そこから撮るのが一番だろう。

だがあの景さんはメソッド演技の体現者。

メソッド演技の制御を覚えてない内に、自分の演技に没頭してる景さんに『異物』カメラが近付きすぎると、景さんが変な反応を出して撮影失敗になりかねん。

最悪カメラが殴られてもおかしかねーわ。

イメージの中とはいえオーデイションで野犬殴りに行った人だぞ。

「黒さんはどうして斜め上から撮りたいんでしょうか」

「料理風景を斜め上から撮ると、鍋の中身や味見のお玉の中身、俳優の表情全部見えるからね」

「なるほど」

なるほど！

「ならば、どうしましょうか？」

「正面、真横のカメラは目線の高さ^{アイレベル}。

斜め前からの撮影は目線の高さ^{アイレベル}と……斜め上から撮るかな」

「斜め前で斜め上、ですか」

「墨字さんはこの最後の味見シーン、斜め上からの視点で撮るの譲らないだろうから」

アイレベルってのは、カメラの基本。

目線の高さにカメラのレンズの高さを合わせる、ってやつだ。

これでカメラが記録する映像が自然に、『人間の目の高さから見る景色』になって、その映像を見る人がストレス無く映像を見られるようになる。

そういう工夫だ。

景さんを真横から映すカメラは目線の高さ。

正面から映すのも目線の高さ。

だが斜め前で斜め上からの撮影には、もっとカメラ位置の高さと、角度が要る。どうすつかね。

「斜め上から撮るのは、どのくらい角度つけて撮りますか？」

「演者さんに寄れないんだっけ？ それなら……どうしよつかね」

うーん、と悩む柊さん。

ゆつくりでいいから確実に決めてくれ。

監督の意志を一番把握してるのは助監督なんだぜ、柊さん。

「その女優さん私は知らないんだけど、身長はどのくらい？」

「夜風さんの身長は、目で見た感じ168cmから169cmだと思います」

「じゃあ身長はキリよく170cm想定で、^{アイレベル}視線の高さは160cmでいいかな？」

「ですな」

「その人からカメラが1m離れるごとに10cmカメラの高さを上げる、このくらいで
どうかね」

「いいと思います。ちょうど景さんの表情と味見皿の中身が見えそうな角度ですな」

1m離れるごとに10cm上がるなら、カメラが下を向く角度は大まかに6度くらいか。

いいんじゃないかな。

「カメラ位置と役者さんの距離は6 mくらいになるかな」

「異議無いです。良いと思います、佟さん」

「カメラと役者の距離6 m。」

となると、始点でのカメラの高さが160 cmで、そこから6回分高さ上げになるね。220 cmかな」

夜風さんから1 m離れたところにいる目線の高さ170 cmの人間も、夜風さんから6 m離れたところにいる目線の高さ220 cmの人間も、夜風さんを見下ろす角度は同じ。

そういうことだ。

「カメラマンとカメラを乗せる木の土台が要りますね。作ります。20分ください」
「ん、お願い。仕事の段取りとテンポずいぶん良くなったね、偉い偉い」

あざす！

撮影に使う、木製の王道の土台ってやつがある。

片方は『平台』、もう片方は『箱馬』っていうやつだ。

こいつにカメラ載せて上から俳優を見下ろす映像を撮ったり、こいつに乗せた俳優の上半身を斜め下から撮ったりして、俳優を見上げる映像を作ったりするわけだな。

平台は3尺(90.9 cm)×6尺(181.8 cm)×五寸(15.1 cm)。

箱馬は1.5尺(45.1cm)×1尺(30.3)×5寸(15.1cm)。
今回は箱馬つばい何かを即席で作ることになるか。

カメラマンとカメラを乗せた三脚の両方が乗る構造にしとかないな。
すつげえ個人的な考えだけど尺換算の大きさをクソ面倒臭えよな。

全部メートル系で統一しろよ。

仕事上インチとかフィートとか使うけど全てに死をもたらしたいくらいにこのごつちやになつてる単位系嫌いだわ。めんどろくさい。

あ、いい形の廃材の木外に転がってんじやん。これなら10分で終わるな。

「柘さん、ウマ箱馬の略。工業系の仕事では台のことを大雑把にまとめてウマと呼んだりもするらしい。出来ました。外に置いてあります」

「お疲れ様。少し休んだら?」

「いえ、これからエプロン作りに入ります。

俺より休憩してない柘さんが休んだ方が良いですよ。

撮影始まつたら俺の仕事はほぼありませんが、柘さんは撮影でもメインですし」
「それもそうだけど……うーん……分かった。ちよつと休憩入れてくる」

「何か問題起きたら呼びますから、外の空気吸っててください」

制作会社の仕事の事前準備は大体終わってきた。

こっからこっから。

撮影準備も忙しいが、撮影中が一番忙しいのが制作会社だ。

制作会社があくせく撮影セットを手がけんのは、自分達が思った通りの映像を撮るため、つまるところ本命の前準備でしかねえ。

他のスタッフさんに何か聞かれたら指示を出し、本物のキッチンを模したセットの全体のバランスを考える。

変な角度にならないようにしとかねえと。

黒さんが監督つてことは、俺達は黒さんのイメージを具現化する役割つてことだ。

今ここにいる面々で黒さんに対する理解度は、**柊さん**＜俺＞その他派遣スタッフだから、この序列順に”判断があてになる”つてことになる。

そういうや景さんはこの序列だどどの辺に入るんだ？

わっかんねえ。

そういうや俺、景さんと黒さんがどんくらい仲良いのかも知らねーわ。

時間確認。

【08:11】

ぼちぼち良い時間だな。

良かった間に合った感じだ。

黒さんから連絡ねーし、例の事務所からの妨害もねえってことだ。
今日の撮影は順風満帆に終わりそうだな。

「あ、来た」

！

来たか！

柊さんがなんか反応してる！

”今日が初めての料理”らしきを出すためにピカピカにしていたお玉を放り投げ、柊さんがいるスタジオ外に駆け出す。

おせーぜ黒さん！ 景さん連れて来るって話だったよな！ さあ名演見せろ！

「!？」

そして外に飛び出した俺が見たものは、黒さんと景さんが中で喧嘩する車が暴走し、俺がスタジオ外に置いておいたウマに突っ込み、粉碎しながら壁に激突する姿だった。

なほこれ。

「……?」

車の中から飛び出してくる黒さんと景さん。

……の、ノースタント型アクション俳優!?

服に汚れ一つねえ！

タフだなお前ら……つてそうじゃねえッ!

「ほらあ! 事故ったじゃねえか! お前が暴れるから!」

「暴れて当然でしょ! この犯罪者!」

「誰が犯罪者だ! 芝居を教えてやるって言つたる!? 親切だろうが!」

「信用ならないのよ現に誘拐でしょコレ!?! 犯罪よ!」

「違いますう! 送迎ですう!」

粉碎された俺のウマを蹴っ飛ばしながら、景さんを無理矢理抱きかかえて連行する黒さんが、スタジオ入り口に入って来た。

黒山ア!

てめえが良い映画撮る監督じゃなかったらここでぶっ殺してたところだ!
運が良かったな!

魔法使いは、シンデレラに感謝も見返りも求めない

終さん画作りが結構上手いよなあ。

黒さんの手足に徹しても、カメラに収める範囲、カメラへの納め方、カメラの撮影範囲っていう限定範囲の中でどう魅せるかが上手い。

基礎的なところにも強みが見える。

CMじゃ大した能力発揮できてねえだろうに、それでも上手く見えるぜ。

「カアアアツト!!」

まあ景さんのせいで失敗してんだけどな!

景さんは料理が上手い。

手付き見てりゃ分かる。

が。

黒さんのCMプランは、「父親のために初めてキッチンに立った娘」だ。

おめー料理が上手くてどうすんじや。

「達人かお前は!」

黒さんがキレてる。そりゃーこういうの監督は苛立つわな。

「真剣にやれよ！」

「真剣よ！ 味見してみる!？」

「『真剣に作れ』じゃねえ！ 『真剣に演じろ』ボケ！」

喧嘩始めちまった。

うーん駄目だ。

過剰な憑依型俳優はどうしようもねえくらい扱いにくいんだよな。

しかもメソツド演技型だとなあ。

演じる役柄に応じて、その感情と呼応する自らの過去を追体験する演技法。

こいつを『メソツド演技』と言う。

近年の日本でこいつが有名になったのは、ダークナイトアメリカンコミックの代表的な人気キャラクター・バットマンを中心としたハードなストーリーが展開される2008年の名作映画。のジョーカー狂気を宿したバットマンの宿敵。異能ではなく、精神の異常によって人々を震え上がらせるサイコパス。狂気の哄笑こそが彼を象徴する記号であり、後の時代には「正気の間人にはジョーカーを完璧には演じられないのかも」と言われたことも。を演じたヒール・レジャー金に困らない家に生まれ、親に恵まれず、テレビに出れば出るほど嫌がらせやいじめを受けた幼少期をバネに、俳優として大成功した。ただし、俳優として成功し始めた頃に望んでいた役柄の才能は最後まで手に入らな

かった。おそらくデビューした年齢は星アキラと同年。さんが、役作りの悪影響のせいで死に至ったのがきつかけだろうな。

演者を死に至らしめるほどの演技法。

見るものを圧倒し一生忘れない演技を見せる演技法。

ただしこいつを、単純に既存の演技法の上位互換と見るのはクソ危ういことだ。

まず、メソッド演技は何故生まれた？

こいつは、既存のテクニクを否定し、自らの内面に深く潜り、過剰なほどに役を掘り下げ、自然な演技を作ろうって試みから始まったもんだ。

要約すりや、昔からあるテクニクを否定して心で演じるっつー方向性。

技で演じる人達とは真逆の方向に行こうっていうのが、メソッド演技の根幹だった。

その源流の一つには心理学もある、なんて言われてるんだぜ。

役を作るために、自らの内面に潜行し心を使う。

そいつがどれだけ危険なことか。

知識がありや、誰もが身構える。

例えば、景さんは悲しみと涙の演技をする時、何かとても悲しいことを思い出してるはずだ。

人生で一番辛くて悲しかった何かを思い出してるはずだ。

思い出す度に、自覚なく自分の心を刃で突き刺してのようなものはずだ。

景さんに泣けと監督が命じることが、”本気の涙を流してしまうほど辛かったことを思い出せ”と言ってるのと同じことだ。

誰もが知ってる、アリリン・モンロー映画一本があつという間に興行収入当時400億円相当を稼いだりと、まさに桁違いの存在である伝説の女優。

彼女は悲しみの演技をするため、悲しみのトラウマを繰り返し思い出し、そのせいで頻繁に情緒不安定になってたつて話だ。

メソッド演技は”そういうもの”。

演技の方法の一つと言やあ聞こえが良いが、アリサさん辺りは「演出家が俳優に自傷を強制する外道行為を繰り返している」とか言うだろう。

俺は。

景さんのその悲しみがどういう質のものか分かってんのに、止めない。

止められない。

景さんが仮に「大丈夫」と言い張ったとしても、俺は彼女が涙を流すたびに思い出してる、俺の知らない彼女の悲しみの記憶を無視できない。

俺は。

オーデイションの録画の最後で、皆に拍手され、讃えられ、笑顔になった景さんを見

た。

あれを、喜びと言うべきなのか、希望と言うべきなのか、夢見る顔と言うべきなのか。景さんから、あれを奪いたくない。

止められない。

景さんがこれから先に生み出していくものを、もつと見ていてえ。

それで止めないんだから、俺は本当にクソ野郎だと思う。

(夜風景のことを本当に想っている人つてのは、どう選択するんだろうな。

景さんが望んでる役者の道を進ませるのか、進ませないのか……わっかんね)

口から出そうになった疑問を、口の中で噛み潰す。

「大丈夫かな」

ぼそっと、カメラに直接的に指示を出している柗さんの口から不安が漏れる。

その不安を取り除いてやろうとして。

「大丈夫ですよ」

びつくりするくらい信頼に満ちた声が、俺の口から漏れた。

「信じてるの?」

半信半疑って感じの台詞が、柗さんの口から出てくる。

「疑ってないだけです」

半疑すら無い俺の言葉が、勝手に俺の口から出てきた。

メソッド演技は、アメリカとかの演劇世界の革新だった。

それまでの時代の革新的なものを、新たに革新的な発想で纏めて混ぜ合わせ、結果生まれた革新的な演技法だった。

一時期は、映画でメソッド演技がそれ以外の演技を駆逐するかもと思われてたくらいに。

だが結局は、猫も杓子もメソッド演技、ってことにはならなかった。

才能がねえ奴はメソッド演技が身につかねえか、結果も出せず潰れるだけ。

稀有な才能の持ち主も、メソッド演技の悪影響で燃え尽きていった。

んでもって、メソッド演技以外の演技が、メソッド演技を凌駕するって事例が増えたからだ。

メソッド演技は、他の演技の上であることが確定してるもんじゃねえ。

そいつを使ってる人の命を時に削りながら、前のめりに名演を目指すもんでしかねえんだ。

それだけじゃねえ。

メソッド演技を極めた人や映画は、時に他人を魅了しすぎる。

『クレイマー、クレイマー』1979年公開。第52回アカデミー賞作品賞、第37回ゴールデングローブ賞ドラマ部門作品賞受賞。アカデミー助演女優賞などの受賞者を軸に据え、アカデミー脚本賞や主演男優賞も獲得した。日本ではともかくとして世界的に高い評価を受け、名作として基本好意的に語られる映画。つてコロンビアの映画がある。

この映画は、メソッド俳優の主演男優に、監督以下誰も彼もが引つ張られた。

まず、主人公の妻の役に恋人を亡くしたばかりの名女優が選ばれた。

演技力で選ばれたんじゃないねえ。

恋人を亡くしたばかりのその人なら、簡単に精神を不安定にできるからだ。

撮影時には死んだ恋人の名前を出して女優をいじめ、メソッド演技のそれを外部から強制、精神的に不安定になった女性を撮影した。

それでも駄目なら、カメラの外で女優を平手打ちして泣かせた。

俺はこういうの、あんま好きじゃねえな。

子役が痛みで泣くシーンが必要だったもんで、主演男優は幼い子役が他のスタッフとめっちゃ仲良くなってるのを目をつけた。

そして、「撮影が終わったらもう他人、もう二度と皆とは会えないよ」と言った。

子供は泣いた。それが撮影され、本編に使われた。

泣くに決まってんだろ！

そりや、泣くだろうけどよ！

……ああ、そうだよな。

『本気で心の底から泣いてる子供』の画ってやつは、そうでもしなきゃ撮れなかつたんだらうけどよ。

メソッド演技のやり方を子供に強制するのは、こうでもないと無理だったんだらうけどよ。

俺は、そういうのあんま肯定できねえ。

アリサさんは、こういうのも危惧してる気がする。

強烈なメソッド演技に人は魅入られる。

メソッド俳優で大成功した人がいると、子供や新人がそれに憧れ真似をする。

他の監督も「ちよつとメソッド演技つてのやつてみてよ」と撮影で言うようになる。

そして、主体性が薄い監督達は、最悪メソッド俳優に引つ張られて大変なことになる。

俺にも、それを危惧する気持ちは無いわけじゃねえんだ。

メソッド演技自体の欠点も指摘も、累積されて長え。

死に追い込むレベルの役者への負担もそうだが、演技も水物すぎる。

技術的に冷静にやってねえから、再現性がない演技になることもしばしば。

観客に伝わりにくい演技になることも多い。

『表現力が低い』なんてもよく言われることだな。

メソッド演技を極められてるって時点で、そいつは完全に天才なんだ。

ハンブリー・ボガート『ハードボイルド』の体現者であったハリウッド俳優。彼が作り出したハードボイルドの概念は、後の仮面ライダーWの探偵主人公・左翔太郎にも大きな影響を与えた。は「メソッド俳優はやたらと動き回り、口から唾を吐き散らし、落ち着きの無い演技が得意だ」と皮肉った。

ジャッツ・ニコルソン名俳優にして名監督という映画の化身。アカデミー賞常連であり、彼の作品群の中から名作だけを抜き出して見ようとしても、一日では時間が足りないほど。は役そのものになるのだという人達に、「じゃあ殺人鬼役の時はどうするんだ？」と言った。

アイロニー・ホプキンス映画『羊たちの沈黙』でサイコパスの殺人鬼医師・ハンニバル・レクターを名演。アカデミー主演男優賞を獲得した。役の掘り下げや自分の内面に潜ることを「馬鹿げている」と言い切る、表現力の鬼。極めた表現力によって観客に違和感を抱かせない。ある意味、百城千世子の完成形の一つとも言える存在。は「演技というものは嘘の絵空事であって、全ては台本の中にある」と台本外の役の掘り下げを否

定した。

メソッド演技の否定者ってのは多く、メソッド演技否定者の名演者ってのも多い。そこにメソッド演技特有の危険を指摘する人も加わるわけだ。

昔ほどメソッド演技が海外で絶対視されてねえ理由が、よく分かるな。

普通こんな演技極めようとしてたら、全力で「俳優になるな」って止めるっての。

それでも俺は。

そういうの全部知ってる上で。

アリサさんと同じ結論と選択に至れない。

あのたった一回のオーディションで、俺の心は彼女の演技に魅せられてやがる。

アリサさんも、黒さんも、俺も、景さんの生み出す美しさと可能性を理解してる。

だからアリサさんは、壊れやすい美術品みたいに景さんを扱う。

だから黒さんは、なんもかんもぶっ壊して皆の記憶に一生残る爆弾みたいに景さんを扱う。

俺は……俺はなんだろうな。

まだ分かんねえや。

だけど。

だけどな。

景さんはメソッド演技を極めた者であっても、そこで終わると定められた者じゃねえだろと、俺は思う。

原型的なメソッド演技なんて、もう大概が古くなってる。

メソッド演技は改良を加えられ、細かに分類すれば様々な種類に分類できちまうくらいに、様々な分化と進化を繰り返してきた。

黒さんだって、メソッド演技の改良法、比較的安全な運用法の前例くらいは知ってるはずだ。

そもそも危険性が派手に騒がれてた頃のメソッド演技ってのは、台詞の発音や体の動きで感情を表現するやり方を否定してたが、現代のメソッド俳優達はその辺も普通に使ってる。

メソッド演技が否定したのもメソッド演技に混ぜたりしてんだ。

他の技術を飲み込むことで、メソッド演技は進化する。

メソッド演技がアメリカで革命を起こしたのが、1940年代。

そこから日本にその概念が時に徐々に、時に急激に流入し、日本で信仰みてえな支持を獲得。

メソッド演技を嫌う人達が本出したりし始めたのが20年前から10年前だっけか？

演劇スタジオとか、公式サイトのコラムで批判してたりもしてたな、確か。
だな。

演技は演技だ。

技術でしかねえし、演じるのは俳優でしかねえんだよ。

本来、ただの技術がこんなに嫌われるわけがねえんだ。

じゃあなんでメソッド演技はこんなに好かれ、こんなに嫌われてんだ？

そいつは、メソッド演技ってやつが強烈に人を惹きつける個性を持つてる証拠だ。

凡百にだけは、絶対になれねえんだ。

「墨字さんなんであんな子連れて来たんだらう？」

「もうちよつと様子見てください、柊さん。」

景さんならどうにかかりますよ。

ほら、そろそろ口喧嘩も終わりそうですし。

俺もウマの運搬とか諸雑務はやっておきますから」

「何？ あの子のこと好きなの？ エージくんお熱だね、なんか」

「あの子の演技は好きですよ」

柊さんと話しつつ、お互いしか目に入っていない黒さんと景さんの視界に入って邪魔しないよう、二人の口喧嘩をバックに色々とお手伝いする。

黒さんは、景さんをどう仕上げるつもりなんだろうか。

景さんは、目指してる俳優演技の形とかあんだろうか。

少なくとも、アクターズの昔ながらのやり方にはならねえだろうな。

『アクターズ』。

1947年に創設された、メソッド演技の生みの親たる俳優養成事務所だ。

心理学を導入した20世紀の演劇革命『スタニスラフスキー・システム』を素材に、革新的な発想で生み出された演技法が、メソッド演技ってーわけだ。

ここがなけりや現代の流行りの映画なんてなかっただろうな。

もちろん、ここがなけりやメソッド演技もなかったわけだ。

だが現代じゃ、かつてアクターズが生み出し持て囃されたメソッド演技だけで、何もかも乗り切るってのは無理だ。

俯瞰の視点、マイム系の表現法の導入、メソッド演技を行いながら他俳優に合わせる柔軟性、毎日ルーチ的に繰り返す精神安定作業。

やれること、改善できることってのは腐るほどある。

黒さんは、それを知っているはずだ。

アクターズが生み出したメソッド演技そのままじゃ駄目だ。

メソッド演技を発展させ、その先に。

アクターズの生み出したものから卒業するくらいじゃなきゃならねえ。

アクト：アクトーズに非ず。それこそが、景さんの完成形になるはずだ。

黒さんと景さんのギャーギャーした喧嘩が、ちよつと落ち着いてきた。

「夜風、お前『芝居』を何だと思ってる？」

「……思い出すこと？」

「お前なあ……分かってるなら、早く演れよ。初めて親父に料理を作った日を思い出せ」
スタジオに困惑が広がるのが分かる。

見に来てたクライアントやプロデューサーが困惑してんな。

他スタッフも少し動揺が見える。

「ん？」といった風な顔をして、何やら勘付き始めてるのは終さんだけか。
スタッフに声かけしとこう。

撮影に気が入らなくても困るし、不真面目な女優と思われて手を抜かれても困る。

「カチンコ映画の撮影開始時に監督や助監督が鳴らしている、黒っぽいアレ。表面にどこのシーン、どこのカット、これがNGの結果何回目の撮影かなどが書かれており、これをカメラで撮影しておくことで、撮影映像に映像だけでラベリングすることができ

る。音と映像を個別の機械で記録する撮影様式の場合、カメラ側はこれが鳴らされた映像の瞬間、音声側はこれが鳴らされた音の瞬間を基準にして映像と音声を合成する。短い料理CM撮影などの場合、ただの撮影開始の合図となることも。の合図と共に過去に戻り、カチンコの合図と共に現在に戻ってくる。

”メソッド演技”……過去の自分の感情を自在に現在に蘇らせる。それがお前の芝居だろ”

「……私、父親に料理を作ったことないの。戻るべき過去がないわ……」
奇遇だな。俺も親父と、”そういう繋がり”なかったよ。

「……」

あ、一瞬黒さんがめっちゃくちや頭回した感じの、マジで一瞬の沈黙があった。

うーむ、そうか。

黒さんからすりや、景さんが一回でも初めて父親に料理を作った経験がありや、それであっさり終わるような仕事だったわけだな。

考えてみりや黒さんからすりや、オーディションの最後から数えてまだ24時間も経ってねえくらいなの付き合いだ。

知らんことの方が多いだろうぜ。

同じスタジオ所属の監督と俳優で、その相互不理解はどうかと思うが……俺はお隣さ

んだけど知らねえからもつとアレなんだよな。

「この際相手は誰でもいい。」

初めて手料理を作った日を思い出せ。

俺が撮りたいのはお前の愛情だ。

誰かのために努力するお前が観たいんだ」

ロマンのあること言うよな、黒さんは。

監督は、撮影現場の脳だ。

自らの頭の中のイメージを皆に伝え、皆から帰ってきた意見を拾い、思うまま組み立てる。

各個人に事細かな指示を出し、制作チームっていう体を指揮する制作の支配者。

俺は意見や技術を出し続けてりや良い。

完成形は、監督が決める。

俺や終さんっていう手足は望むまま動く状態だが、景さんっていう顔が思うように動いてくれてねえってのが現状だ。

黒さんの言葉がどのくらい景さんをコントロールして、どう成長させるか。

そこが肝になる。

黒さんがどのくらい景さんの本質を見抜いていて、分かりやすく心に届く言葉を選べ

ているか、そこに撮影の命運がかかっていると云っても過言じゃねえ。
さあ、どうなる。

「カレーライスだったわ」

……！

” 入り始めた”。理屈じゃねえ、感覚で分かる。景さんが役に入り始めてる。

黒さんが景さんの語りと役への没入を邪魔しないよう、手を振って身振りで示す。

誰より早く終さんが反応し、全体を撮影の姿勢に入らせる。

俺も動いてカメラマン達に耳打ちしていき、ついていけない他スタッフを動かさし始める。

「ずっと料理を作ってくれてた人が突然居なくなつて、弟妹が毎日泣いてて」

景さんが思い出を語りながら、包丁や鍋を取り出し始めた。

カメラは……よし、動いてる！

「私は2人に笑って欲しくて、お母さんがよく作ってくれたカレーを作ろうと思つて」
” 入った”。

よし、いい感じに心が役に入れてる！

シームレスな撮影の入りで申し訳ねえが、カメラマンも照明も頑張ってくれよ！

「包丁なんて初めて持ったから、2人共心配そうに私を見ていて」

いい姉ちゃんしてるじゃねえか。

そういうの好きだぜ、俺。

景さんの演技見て……ん、んん？ げっ！

「子供みたいに、不器用に……」

景さんが料理を作るところまで入って、スタッフが皆景さんに見惚れてる。

それはいい。

だけど、やべえ！ セット奥の壁が、揺れてねえけど固定されてねえ！

経年劣化か何かで留め具が壊れたか！

このままだとあと一分もしない内に壁が揺れ始めてNGになる。

クソ、俺の大失態だ。全部の仕事を細かいところまでチェックしてれば……！

そんなこと考えてる暇はねえ！

皆景さんの演技に見惚れてるし、邪魔しないように黙ってる！

このセットの壁は運びやすさと、倒れた時に人が下敷きになることを考えて、かなり

薄く軽い素材で作られてる。

景さんは怪我しないが、いい感じに入れた役から”戻って”来ちまう。クソが！

シチューの平均的な調理時間から考えるとまだ10分以上は作業が続く。

壁が揺れ出すまでの一分もない制限時間内に、作業が終わるまでの……余裕をもって

20分以上保つ補修作業を終わらせる！

急げ、急げ！

視線走らせ、よし見つけた！

経年劣化で折れてる固定具！

取り出したるは、俺が数時間前に折れた椅子に使ったテープ・FiberFixと、紫外線ライトを当てることで5秒以内に固まる接着補修材・UVリペアペン。

1、2、3、4……よし接着！ 仮固定！

化粧落として使う用のぬるま湯で柔らかくしたテープを、表面に貼って固定！

グラスファイバーを使ってるこのテープは、表面にペタッと一枚だけ貼っても引張強度241N/cm……要するに、70kgのパワーで引っ張っても耐えられる。

人間の手で持つて運べる重量のセットの壁を支えるには、十分だ。

危なかった。

普通の接着剤とガムテープだったら、固定が間に合ったかどうか……壁が微塵も揺れなくらいガチッと固定できたかどうか……マジで危なかったぜ。

でも、間に合った。セーフ。

さて景さんの演技を見に行くか。

もうずっと景さんの演技の声しか聞こえねえ。

皆ひそひそ話すらせず、景さんの演技に見入ってんだろうな。

俺が戻った時、景さんはかつての自分を思い出しながら——指を、包丁で切っていた。

かつての自分が、弟と妹のために料理した時に包丁で指を切った過去を、メソッド演技でそのままに再現していた。

ヤバイ。

イカれてやがる。

「包丁で指を自分の意志でザックリ切ってね」って言われて切る女優ってのは、業界に一体何人いるんだ？

切れるか？ 自分の意志で自分の指を、包丁でザックリと。

仮に切れたとしても、包丁で自分の指を切る前に一瞬表情に怯えが見えるもんだ。

怯えをポーカーフェイスで隠せても、自分の指ザックリ行く直前は、痛みを想像した脳が体を強張らせちゃう。

これはもう半ば脳反応だ。

訓練しても隠せねえ人の方が多い。

なのに、景さんは全くそんなことがなかった。

”弟と妹のために上手くできるか”という不安だけが浮かんでいた顔で、自分が指を

切るなんて想像すらしていない雰囲気、危うい手つきで野菜を切ってた。

そして、あたかも不安な気持ちで集中力が散漫になった結果、指を切ったかのように、指を切った瞬間、予想外の出来事にとっても驚き、それを隠すような表情を浮かべ。

痛みをこらえながら、それを我慢していることが自然に伝わる表情に移行する。

指を舐め、血が止まったら料理再開。

つたく、すげえな。

『本物』だわ、景さんは。

……黒さんの指示が上手くかみ合い、本当に本気で自分の指を切ったから、本当に痛いんだろ。

「とても痛かったけど2人が泣くといけないから、笑って誤魔化したの」

それに、優しい。

この演技には、優しさと愛が詰まっている。

誰かを想い料理を始め、誰かを想って涙をこらえた優しい人の記憶が、その時そのままの形で今ここに形を結ぶ。

景さんが大切にしている弟と妹の姿が、そこに見えるかのようにだ。

これが、メソッド演技。

”かつての自分”を掘り出すことで、見る者の心を震わせる名演。

斜め前の斜め上から、カメラが景さんを映している。

鍋の中身も、景さんの右手のお玉も、左手の味見皿の中身も、家族を思う景さんの微笑みも。

全てを撮るカメラに映る映像は、きつと美しいだろうと、そう思えた。

俺も思わず、息を飲んじまっていたから。

景さんは、過去の自分を再現しているだけだ。

創作を演じてるわけじゃねえ。

なのに、再現された過去の景さんの姿が、とても美しく感じられる。

家族を思うその姿がとても尊く見える。

それは普段の日常の中ですら景さんが、周りが見惚れるような生き方をしているから

……ふと、そんなことを思った。

もしそうなら。

俺は彼女の人生全てに見惚れることもあるかもしれないと、ふと思った。

「味は？」

「コゲて苦くて、皆で笑っちゃったわ」

黒さんが笑って問いかけ、景さんが微笑みのまま返答する。

景さんはまだ”戻って”来ていない。

自分の内面に潜る深度が本当に桁違いだな。

「カット！」

黒さんの声が上がリ、息を合わせた終さんが同時にカチンコを鳴らす。

その瞬間、景さんが“戻って”来た。

あーもークソ、見ててハラハラする切り替えの仕方してやがる。

「OKだ！ シチュウはマジでコゲてるから別撮りな！」

「は……はい！」

始まりの合図はなかったが、終わりの合図はあった。

景さんの演技に“引きずり込まれていた”スタッフの人達が、黒さんの張り上げた声

により、現実に戻ってくる。

皆、夢でも見てたみたいな気持ちだろうな。

だがこつちが現実だ。

しっかりしてくれ。

俺は今そつちに気を向けてる余裕ねえからな！

スタジオに誰よりも先んじて、俺は飛び込む。

「景さん！」

「あら、英二くん。いたなら声をかけてくれれば良かったのに」

「手の手当しますから手を動かさないてくださいい！」

過去の自分のリプレイしたら手を切るのは不可避とか、どうなってんだお前！
じゃあお前、演技中にゲロ吐くの不可避の事案になったらどうすんだバカ！

景さんの手当終了。

「ありがとう、英二君。気遣いの鬼ね」

「女優の体には小さなキズが付くのも気にするものですよ。体をお大事に」
怖い。

こりや怖いな。

メソッド演技に没頭してる時は、たぶんどんなに非常識なことでも、自分の体が傷付くことも躊躇わねえ……いや、違うな。

危険だと考える通常思考が動いてないって言うべきか。

日本だと憑依型は、役の感情が自分自身の感情を上回っちゃうことが多い。

撮影時の役で親友だった子を、現実でも親友だと思っちゃったりとかな。

憑依型の女優は特にこれが顕著で、マネージャーや一般人と恋愛関係にならねえ身持ちの固い清纯派女優が、ドラマの共演者をとつかえひつかえしていることがある。

これはその女優がビッチとかそういうことじゃねえ。

演技の度に”その男を好きな女”の役に入り込みすぎるせいで好きになっちゃって、撮影が終わって次の撮影に行くと、次の撮影で別の役に入り込みすぎて別の人を好きになっちゃまうからだ。

恋愛感情を役作りで作れる女優も、役作りで作った感情を理性で全く制御できてない女優も、この業界にはそこそこいる。

そういうのも含めて業界用語で、『共演者キラー』って言う。

いやあ、俳優じゃねえ俺はこういうのに巻き込まれないからそういうところ幸運だと思うわ。

景さんもメソッド演技に本当の自分が引つ張られねえといいんだが。

そこは景さんの生来の精神の頑丈さと、ここからの成長に期待しておくべきか。

つと、柗さん。片付け手伝いますよ。

「ありがと、エージくん」

「いえいえ」

「墨字さんがさつき『金の卵』って言ってただけだよ。……うん、これは誇張無しだ」
「景さんは、ああですから」
びつくりしたろ。

あれが黒山墨字が懐に抱え込もうとするレベルの才能だ。

あーよかった。演技よかった。

贅沢言うと最初から最後まで生で演技見たかったぜ。惜しいことをした。

「柊さん見ましたかあの演技。愛ですよ、愛」

強いて名付けるなら、家族愛の演技ってどこか。

「凄いですよね。どこの漫画でしょうか。言葉無くとも愛が伝えられる、って」

見る者に愛を感じさせる演技。

CMの流れの中に、景さんの台詞はねえ。

台詞もなく、状況の説明もないってのに、ただ料理を作ってる姿を見せるだけで、景さんは黒さんが満足する画を作り上げてみせた。

そう、見せただけだ。

見せただけで説明しない。

見る者の脳に自然と理解させる、そんな画作り。

だからこのCMは、きつと見ているだけで心地良い。

「あそこまでの『愛の演技』は、きっと才能が無い人間には真似すらできないやつですかーっ！ いいもん見た！ いいもん見た気分だ！

「お熱だね、エージ君」

「かもしれない」

「墨字さんが君を引き込めた理由、大体分かった」

柗さんと色々片付けていると、指に絆創膏とテープを巻いた状態の景さんが寄って来た。

「さっそくお仕事で会うなんて思わなかったわ」

「ですね。セツト、何か特別なことは感じましたか？」

「特別……？ いいえ、特別何かは感じなかったわ」

「それならいいです。それが最良ですから」
「？」

ヘタクソのセツトは、足を一步踏み入れただけで分かる。

セツトは家を模しているだけのもんだ。

だからスタジオの床とセツトの間に隙間が出来たり、この隙間で音が反響していやーにセツト感が出ちまうことがある。

ヘタクソならコンパネコンクリートパネル。素材にコンクリートは使っていない。

コンクリートの成形に使う型枠のベニヤ板のこと。演劇の世界ではセットの素材として、特撮の世界ではセットや特殊効果に使う。英二が千世子との仕事時に使っていた『ホコリ』などをコンパネの上に山盛りにし、コンパネを火薬で爆破すると、怪獣やウルトラマンが着地した時の地面の爆発になる。使った方がいくらいだ。

セット組みに工夫はした。

普通、一般家屋と撮影セットでは床を踏んだ感触や音が違う。

夜風家の床は一回歩いて覚えてたからな、そつちに合わせた。

キッチンもそこそこの置き場を調整した。

景さんが料理してる姿は、前に一回見てるからそつちに寄せた。

あとは、夜風家は小さい子供がいる家だからな。

子供が姉や親の真似して包丁を勝手に取り出さないように、とか、包丁のしまい方や

その他諸々の”小さい子対策”が施されているはずだ。

だからそれ相応の物配置にした。

俺の今回の仕事は美術。セットのレイアウトは好きにさせてもらった。

景さんの演技はまだ、寸分違わないメソッド演技のそれ。

基本的に過去の自分のリピーターだ。

だから、記憶の中の包丁等の置き場と現実の置き場が違ったら。

ただそれだけで今ここに蘇った景さんが包丁の場所が分からず混乱してたかもだ。可能性レベルの話だが、それが怖かった。

ただおそらく、そうなつてたなら、黒さんは『どこに調理器具があるか分からなくて混乱している娘』つて方向に方向性を変えてたかも、とは思う。

それはそれで、今回のCM依頼に相応しい画が撮れてただろうな。

そっちなら初々しさが撮れるだろうし。

まあ所詮推測だ。

”黒さんはいくつかのプランを頭の中で広げてたんだろう”つていう俺の推測。

黒さん見てる内にそうなんじゃねえかって俺が思っただけ。

もし本当にそうだったら、俺がこのセットを夜風さんちに地味に寄せた意味はなかったってことだが……まーそれならそれでいいか。

景さんは特別なことは何も感じなかったと言った。

他のセットや舞台、小道具や衣装を知っている人が、俺を褒めてくれることがある。

他の人の仕事と比べて褒めてくれるもんだから、ちよつと複雑な気分になりつつも嬉しい。

他の人がバカにされてるみたいで複雑な気持ちだつてのに、嬉しくなつちまう。

景さんにそういうのはねえ。

彼女はこれが初仕事だからだ。

そんな彼女が、初仕事のステージに何の違和感も覚えなかった。

これ以上の光栄があるか？

彼女は、特別なことは何もしなかった。

彼女は、特別なことは何も感じなかった。

ごく自然体のまま、セツトの環境に適応し、特別何も思わないまま特別何もしないまま、普段通りの自分らしく演じてみせた。

俺はなんとか、過去の記憶に意識を飛ばした彼女が、周囲の環境と不協和音を起こすという、想定外事態を止められたみてえだな。

環境の方をいじって彼女に合わせた甲斐はあった、と思いたい。

床に違和感覚えて集中力が少しでも削がれるとか、そういうことは避けられた。

何も特別でないってことが、こんなにも誇らしい。

自然体で演技できる舞台を用意できたことが、こんなにも誇らしい。

それが、おれたち裏方の誇りだ。

「おい、エージー！」

なんですかね黒さん。

皆から離れて自動販売機横のベンチに座ってる黒さんに駆け寄っていく。

「よう、よくやった。悪くない仕事だったぞ」

「ありがとうございます」

いいところで呼んでくれたな。

聞きたいことあったんだよ。

「今日の仕事、景さんはキッチン前に立ちっぱなしでしたが……」

もしかして、次の仕事も景さんがそこに立ちっぱなしの撮影だったりしますか？」

「ああ。時代劇あたりのエキストラ、それも立ちっぱなしで動きがねえ奴を考えてる」

「……やっぱり」

今の景さんに舞台演劇をやらせたら何もかも崩壊する。

景さんは今のままだと他人に合わせられねえし、後ろの席の方まで演技の質感を届けられるだけの”よく届く演技”が出来てねえからだ。

演劇全体のバランスも考えると、景さんみたいな他役者を食いかねない存在感の役者はめっちゃ使いづらいだろうしな。

かといって、カメラで撮る既存の撮影でも問題が出ないわけじゃねえ。

例えば、遠くから人が迫ってくる演技。

この場合は遠くから走ってきた人が固定カメラに寄り、カメラに迫り、そこでにつきり笑顔を見せるとかの撮影がこれにあたるな。

だが、『憑依型の迫真の演技』をする奴は、そこそこの確率で演技に夢中になった挙げ句、動き回りすぎてカメラに収まらない。

そこそこあるんだ、こういうのが。

だってそうだろ。

カメラの前に満面の笑みを映すシーンは、10cm横にズレただけで顔が全部カメラの撮影範囲から出ちゃうんだぞ。

舞台なら10cmズレてるくらいはどうにかなる。

だがカメラ撮影だと、こういうフレームアウトになっちゃったりするわけだ。

今の景さんだと、動く姿を撮影すると、予想外の方に行きかねえ。

”このカメラの撮影範囲を認識して撮影範囲いっぱい笑顔映してね”と言われても、カメラの撮影範囲の計算や歩数の計算ができねえから、絶対失敗するだろうな。

だから黒さんは、立ったまま撮れる、あっちこっち行かなくていい仕事をあてがった。今回の仕事と次回の仕事を、夜風さんを安定してカメラ内に収められる仕事にしたんだな。

これならカメラの範囲やら歩数やら考えなくていい。

つまり、カメラを意識しなくても撮影できるレベルの仕事だったことだ。

よく考えてやがる。

カメラを意識しなくてもいい仕事で経験積ませつつ、なんらかの技術を先に仕込んで、そこからカメラを意識させるつもりだろうか？

”カメラを意識しろ”と言わなくていい分、景さんがカメラ以外の何かしらに集中できる……そういうことだろうか。

俺のレベルじゃ、黒さんが口にしてねえ意図を読み取るのはここらが限界だ、クソ。

「それにしても。な」

なんだなんだ。

俺の仕事にまだ未熟な部分があったか。

言ってくれ、直すぞ。

「……お前、夜風のこと下の名前で呼んでんだな。珍しくねえか？ ん？」

「――」

「しかもお前、俺にそれを隠してたな？ ちよーつと、俺はその理由を聞きてえな……？」

うわああ……知られちゃならねえやつに！

「まあ座れ座れエージ。何か飲むか？」

コーヒー？ 紅茶？ ククク……ゆっくり話そうぜ」

「クライアントさん！ プロデューサーさん！ ここで監督がサボろうとしてまー

すー！」

「あ、テメエー！」

ふざけんなクソヒゲオヤジでめえのペースになんぞ乗ってたまるかあッ！

片付けもなんとか終わった。

スタツフさん達、撮影用具やセットを用意してくれた人達に礼を言つて、「また頼らせてください」とか言つておく。今後の関係が良好になるからだ。

プロデューサーとかクライアントとかは、CM放映までは仕事で付き合いが続くものだ。

だから丁寧に別れの挨拶をしておく。

俺、黒さん、柊さん、景さんだけになったそこで、時間を確認する。

〔11:50〕

よし、午後からの仕事には余裕で間に合うな。

「俺もうちよつとしたら次の仕事行きます。皆さん、お疲れ様でした」

「後でいいから事務所に来いよ。報酬の話もしねえとな」

「分かりました。では、18時頃にお邪魔します。」

予定の時間に間に合いそうになれば一時間前には連絡入れますね」

「おう」

景さんが興味深そうにこっちを見ている。

おうじつと見んな。

照れる。

横顔だけ見るタイプな百城さんより真正面からじつと見てくるこっちの方が恥ずい。

「今度はどんなお仕事なの？」

「テレビ局のエロHKで特番やるらしいんです。」

昔の映画監督の特集やるって聞いてます。

その衣装と造形と、あと時代を反映したセットの作成の打ち合わせを」

「映画監督？ 誰かしら」

ふむ。

景さんは映画好きだと思う。

だがいい機会だ。少し試してみるか。

「いほん」

少しばかり、映画の台詞を言う。

「『バカになったみたいだ。恋をしたのかな?』」

カチツ、と音もなく何かのスイッチが入った、そんな気がした。

景さんがずっと別人のようになり、彼女の口からとある映画の名演の台詞がそのまま出る。

「『私は、半年前からバカだったわ』」

うわっ、名演だ。

「『日曜日が待ち遠しい!』」 「『フランソワ・トリュフォーの『日曜日が待ち遠しい!』」

(1983)。トリュフォーの遺作。軽快で有能な女優でもある女主人公が、惚れた男のために駆け回る、明るい恋愛系コメディ映画。

こえー。

百城さんとかはこつちに合わせてくるが、景さんは圧倒してくるな。

こつちからおふぎけで話を振ったっていうのに、景さんに飲み込まれまいそうだ。

景さんが「戻って」きて、黒さんが鼻で笑っていた。

「トリュフォーかよ。古臭えな」

「嫌いですか? 黒さん」

「嫌いとはまでは言ってるねえだろ」

なんだこいつめんどくさい。

「そういうえば真面目に黒さんが好きな映画とか聞いたことなかったですね」

「お前らが今語ってたトリュフォーが言ってるんだろ」

「？」

「『映画作家は何かを言うのではなく、見せるだけだ』」

「む」

確かにそうだ。

「俺が好きなのはこういうもんだ」ってのを普通の会話じゃなくて自分の作品で語ろうとするか、黒山墨字！

いいぞ！ そういうの俺結構好きだぞ！

「トリュフォー？ いいよね、私も好きだよ」

「柘さんもでしたか」

「いいよね。恋愛極めた映画監督って感じで。」

『どうすれば恋をしているとわかるか？』

それはとても簡単なこと。

自分の利に反して行動するようになったら、それは恋をしているということ』とか

ね」

あー、それなあ。

「俺、トリユフォー好きなんですけどそれだけはある限り納得してないんですよね」

「どうして？」

「だってそうなら、俺は景さんに恋してることになりませうよ」

「ん？」「ん？」「ん？」

だってそれなら、俺は百城さんにも景さんにも、アラヤさんにも巖爺ちゃんにも恋してることになるぞ。他にも色々。

それは流石にねえと思うがなあ。

百城さんと景さんだけだったとしても俺が相当なクズになっちまう。だからないない。

「ど、どうしよう、告白されてしまったわ。どうごめんなさいって言えば……」

「あわあわしてないでけいちゃん！」

「だはははは！ おつ、お前つ、エージお前！」

「いや、別に告白してるわけじゃなくてですな」

爆笑してんじゃねえぞうるせえヒゲオヤジ！

「夜風さんは才能が美人なんですよ。」

いや外見も美人ではありませんが。

美人というのは、上手く言えませんが、他者を惚れさせてこそその美人じゃないですか
「ん、んん？」

「美人薄命と言いますし、男はバカだから美人を守りたがるとも言うじゃないですか
「えー、あー、いや、その、私ね」

「だから理論的に自然なことなのでは？ 俺そんな間違つてないと思うんですけど」
「柊さん！」

「耳を塞ぎなさいけいちゃん！」

「何かに夢中になつてる時のエージくんの話をもとに聞くと引つ張られるよ！」
「何失礼なこと言つてんだテメー。」

「景さん」

「は、はい」

「あなたの演技に一目惚れしました。」

「作品完成を前提に、あなたの仕事にお付き合いを申し込めます」

「いやーここまで俳優さんの演技に惚れ込んだのは久しぶりだ。」

「前に百城さんの良い演技見た時以来かもしれん。」

「……よ、よく分からないけど、これは交際を申し込まれてるの？」

「よく話を聞いてけいちゃん！」

エージくんのこれ、多分恋愛から一番遠いところにあるやつだよ！」

地獄の底まで相乗りしても良いと思える相手が見つかる、心が躍るよなあ。心が滾る。

「ハハッ！ 才能に甘酸っぱい片思いするバカって奴は見てて楽しいよな、柗！」

「楽しくないんですけど!? 墨字さん!？」

いつまで笑ってんだヒゲ！

ちようどいいところにバスが来たんで、そいつに乗って移動した。

少しばかり歩きそうだったもんで、歩きながらスマホを取り出す。

震えているスマホが表示してる番号は、アキラ君のそれ。

「朝風です。何かありましたか?」

『突然すまない。何かあったというか、何か起きてるといいうか……』

「?」

『最近千世子君と何か話さなかったか? ケーという読みの名字の人とか』

「景さんの話ならしましたよ。」

期待の女優つて話しました。

夜風景さんですけど、名字ではないですね」

『！　そうか、あの夜風……ん？　待った、君が名前呼び？　女性だったと記憶してるけど』

「色々ありました」

『そうか……そうだったのか……』

名字で検索……彼女はケーが名前だと思わなかったから……

……それなら探しても見つかるわけもない……

朝風君の二人称と夜風君の両方を知ってる僕だから気付けたか……

千世子君なら朝風君の目を信用してるから、間接的に夜風君の実力を……

……だとしたら、同格の共演者になる可能性を考えて……千世子君は……』

「アキラさん？」

『いや、なんでもないよ。言っても朝風君の場合は意味が無いことだしね』
んだとコラ。

『どうせ千世子君は実際に演技見るまでピンと来ないだろうし、いいんじゃないか』
「え、本当にどうしたんですか。百城さんに何かあったんですか？」

病気とかだったから見舞いに行かねえと。

『千世子君は大丈夫だろう。君が大丈夫じゃないだろうけど』

「えっ、何故俺が？」

『千世子君と夜風君が同時に仕事依頼してきたら、欲張りな君はどうする？』

「あーそれはそれはえーとあのそのえーとんー……大丈夫じゃないですね」

『ほらね』

「そーだ！俺が仕事の速度を倍にしてどっちの現場にも行くつてのはどうでしょう？」

『どうでしょうかじゃないが』

なんてこと言いやがる。

しかし本当にあつちで何があつたんだ。

俺を知り、夜風さんを知り、百城さんを理解しているアキラ君にだけ分かった何かがあつたのかもしれない。

……まあ、アキラ君なら問題はねえだろう。

この口ぶりだと大したこともなさそうだし。

任せとくか。

『そーだ。夜風君と千世子君の演技、どっちが良いと思つた？』

お前までそういうこと言うんかい。

「百城さんは例えば、発言の前に一瞬溜めと間を作って、次の発言を強調します。

これが観客の心を揺らす、表現力の演技です。

景さんは逆に普通の会話には溜めも間もないので、極めてリアルな演技に感情を込めます。

これが観客の心を揺らす、再現力の演技です。正直言つて、甲乙つけがたいとしか

……」

『そうか』

「ただ、現段階だと百城さんが上な気もしますね」

『へえ』

「たぶん、今の景さんだと周囲にお膳立てされて、幸運が絡んで、それで互角くらいかと」
凡才が何十年経験を積んでも景さんには一息で飛び越えられるだろう。

だけど、百城さんも天才の部類だ。

特に”頑張り続けられる才能”においては、百城さんとアキラ君と並ぶような人間は
そうそういいねえと俺は思う。凄えのさ、お前ら二人は。

『君の才能を見る目は確かだから、僕もそこは信頼できる』

嬉しいこと言ってくれるじゃん。

台詞のセレクトまでイケメンな野郎だ。

「あ、そうだ。今夜一緒に焼き肉食いに行きませんか？」

そうしたいって思ったら、気付いたらそう言っていた。

『焼き肉？ いいよ、時間は？』

「19時半くらいでどうでしょうか」

『じゃあ赤坂のいつものところで』

「はい。急な仕事は入っても気にせずそっち行ってください」

『もしそうなたら仕事の方に行くだろうけど、そうなたら僕は気にするよ』

少し話して、電話を切る。

時間を見て、ふと気付いた。

【12:30】

昨日の夜から、何も食っていない。

なんかずっと仕事してるぞ俺。

そうか……俺のこのほとばしる食欲は……そのせいかな。

心が叫ぶ。

——友達と、焼き肉が食いてえ！ 主にライス大盛りと牛タンが食いてえ！

仕事を超特急で終わらせることを、俺は心に決めるのだった。

夜風双子の社会体験

明神阿良也。

その演技力、三國無双。

俺が見たところ、現在の総合力で言えば百城さんと景さんを上回る。

あんまり世間で目立ってねえのは、映画↓テレビ↓インターネットと娯楽情報媒体の
主役が移り変わっていく中、舞台演劇がイマイチ中軸になれなかつたからだ&個人的に
思う。

要するにテレビ俳優と比べると、舞台俳優は広範囲の一般人に知られねえのだ。

逆に言やあ、舞台演劇ってカテゴリの中では間違いなく若手最強クラスだ。

例えばプロ野球の若手でアラヤさんクラスの評価がされてる人がいたとしたら、その
若手は年俸2億3億とかに相当すんじゃないやねえかな。

そんなアラヤさんが、俺に電話をかけてきた。

『いい熊ってどんな熊だと思っ？』

いい熊と悪い熊って分類をまず知らねえよ！

『できればいい熊を食って役にしたいんだよね』

「ええと、熊を食う、ですか。熊の料理店に行つてみたいとかでしょうか」

『するとしたら俺が店に卸す方がいいかな』

「……………」

『熊つてどのくらいの大きさ？ 人食つてそうなのがいいんだけど』

「え、え？ ますます分かんなくなつてきました……」

とりあえず三毛別熊事件人の肉の味を覚えたエゾヒグマにより死亡者七人、重傷三人の被害が発生した日本史上最悪のクマ獣害事件。のクマは身長2.7mで体重340kgでしたけど」

『そのくらいか。ヒグマ探してるんだよね。』

役作りで親父を食い殺すくらいのヒグマが欲しい』

「役作りで人を熊に食わせるんですか……………」

『食わせないよ。熊は俺が食うけど』

「……………」

『小さいのだとヒグマはどのくらい？』

食いであるといいけど、熊は小さくても十分食いでありそうだよね』

「痩せ型のオスが250kg、痩せ型のメスが100kgくらいでしょうか」

メカキングギドラゴジラvsキングギドラ(1991)に登場するメカキングギドラ

のこと。総重量200kgオーバーで、吊るのに使っていたワイヤーがちぎれたほど。スーツなのに『人を中心に入れると潰れて死ぬ』と判断されたため、結局人は入れられなかった。ウルトラの星は卵パックで作られたが、メカキングギドラの操縦席は鍋の蓋などで作られている。のスーツが確か200kgオーバーなので、これを熊の基準にすれば……」

『朝風はもうちよつと相手に分かるように話した方がいいんじゃない?』

この野郎!

『後さ、別に主目的じゃないんだけど、熊の美味しい食べ方って——』

それからあれこれと話したが、結局俺はアラヤさんの意図をさっぱり掴めず、アラヤさんに持つてる知識を色々喋らされた。

なんだったんだ。

「すげえ。訳わかんねえ。結局何言ってるかさっぱりだった」

近い内になんか熊関連の仕事でもすんのかな。

あの人と話してると、毎回不思議に思う。

言語が全く通じてねえのに仕事に致命的な齟齬起こったことはねえんだよな。

あの撮影の時のあの監督の時の方がよっぽど相性悪かった。

会話の相性は悪いんだがそれ込みで見ても相性そんな悪いわけじゃねえ。

不思議なもんだ。

だから、俺も「明神さん」じゃなくて「アラヤさん」なわけで。相性悪いと言われるとなんか違う気がする。

「……ヒグマのフィギュアか。彫ってみようかな。

俺の芸風はまだ増やす余地があるはずだ……いくぜ」

結構大きな時間的余裕ができたんで、手慰みに修練でも始めよう。

熊。

クマか。

クマのモチーフのヒーローは結構作られてるが、代表的なもんはねえ。

俺個人が傑作だと思うものはあるが、バツタとかカブトムシみたいな印象的で代表的なもんはあんまねえもんだ。

クマのメインフィードは子供向け、女性向けだと思う。

かわいいクマのぬいぐるみに、かわいいクマの小物。

これ何十年くらいずっと売れ筋商品のままなんだ？

クマのぬいぐるみほどのヒット玩具って人類史にいくつあるんだ？

そう思うと、造形屋としては尊敬の念しか抱けん。

子供に売れるオモチャの模索は特撮屋の宿命だ。

なんであんな、人間とかですら食っちゃまうようなクマを、あんな可愛らしい商品にしようと思ったんだマルガレーテ・シユタイフ！いくつか説がある『世界初のテディベアメーカー』の候補の一つ。世界で初めてぬいぐるみを作ったと言われるメーカー。現在も現役である。

そんなことを考えていたら、クマを一匹彫り終わった頃には、クマのぬいぐるみが作りたくなってきた。

「んーいい天気だ」

事務所前に出て、近辺にあったベンチで作る。

良い空だ。

こういう青空の下での物作りは気分が良くなる。

色々縫い方を試しつつ、クマのぬいぐるみを量産してみることにする。

作ってるだけでも楽しいが、作れば作るほど俺の腕が上がってくのも、色々試してる内に新技術を編み出せるのも、こいつを誰かにやって「ありがとう」と言われるのを想像するのも楽しい。

物作りはいいな。

心と技の両方が磨かれてるような、そんな気がしてくるぜ。

しかしこうして作っているとクマのぬいぐるみとか、テディベアとかはすげーな。

アレルギーの原因や、経年劣化で有害になりそうな素材が一切使われてねえ。

子供の柔らかくて弱い肌に絶対に悪影響与えないため、表面の毛はふわふわ柔らかい。

柔らかな仕立てが絶妙で、子供の目や粘膜に触れても害がねえ。

子供が壁に投げつけても、細い腕を持つて振り回しても、噛み付いても壊れねえ。

柔らかいのに、しかも軽い。だけど風では飛ばねえバランス。

子供がどう扱っても子供が怪我しねえラインを、完璧に見極めてやがる。

いやこれ地味に凄い商品だつて。

子供への愛に満ち溢れてるもんよこれ。

ちなみに仮面ライダーウイザードの宝石に見えるマスクは、単純に素材だけ見るとクマのぬいぐるみの中の毛の主流素材の一つと、同じもので出来てたりする。

これ、俺の周りの人とかに配るとしたらどうなのがいいんだろうな？

ふむ。そう仮定して、少し考えてみるか。

百城さんは私的にも大事に出来て、仕事でもイメージ上昇に使えるやつがいいか。

天使のイメージに合わせたら体色は白。

体毛がやや長めでふわふわした印象を受ける……そうだな、モチーフにたんぽぽの綿

毛とかを使ったら面白いかもしれねえ。

景さんなら弟や妹と遊べるのがいいな。

それならあれだ、1m超えの茶色のぬいぐるみとかが良いだろう。

インパクトは十分。デカいってだけで男の子も女の子も大喜び、遊び方は無限大だ。

本当にちつさい子の遊び道具に贈るなら、白よりも濃い茶色がいいんだ。

子供は凄え勢いで汚すし、茶色は汚れが目立たねえから。

例えば湯島さんならどうだ？

見ての通り結構乙女っぽいからなあの人。

男の子っぽいぬいぐるみと女の子っぽいぬいぐるみのセットがいいかな。

タキシード着せた男の子と、リボンとドレスの女の子って感じで。

あ、いや、待て。

よく考えるとぬいぐるみに服着せるって別技術だな……こいつは研鑽しがいがあり

そうだ。

男ならどうだ。

例えば巖爺ちゃん。

そういうやあんま知られてねえけど、還暦とか米寿とかを祝う長寿祝い専用のテディベ

アとかあるんだよな。

あれ作ってみるとか良いかもしれねえ。

巖爺ちゃんには長生きしてほしいもんだ。

黒さんなら……いや、あれをクマのぬいぐるみで喜ばせるのは不可能じゃねえか。考えろ、考えろ。あ、そうだ。

事務所の空気を柔らかくするものだって言えば、仕事の依頼も増える可能性が出てくるから、喜んでもらえるかもしれん。

黒さんはともかく、柊さんとかは事務所に可愛いぬいぐるみが増えりや喜んで……あれっ。いつの間にか柊さんに贈るやつになつてる。何故だ。

こういう思考実験はいいな。

どういう人にどんな物を贈るのがいいのか、って考察力が高まる気がする。

そういえば、だが。

熊熊言つてたが何するつもりなんだアラヤさん。

話をぼんやり聞いてた分には熊をぶっ殺そうとしてたみたいだがどうなんだ。

「何をやってるんだ、君は」

「あ、アキラさん」

「野外でぬいぐるみ生産工場と化してる人間は初めて見たよ……え、何これ1m超えてない?」

「贈り物だからいくら大きくても良いんですよ」

見ろよ、クマさん帝国だぞ。

途中から楽しくなってきたから合体機能とか付けてたわ。

ぬいぐるみの中に柔軟な芯の『骨』を入れてな、ふわふわの綿を骨の周りにしっかりと巻いてからぬいぐるみの中に沢山詰めて、体の末端に端子を付けたって寸法だぜ。

あ、そうだ。

「アキラさん」

「何？」

「クマに勝てますか？ ヒーローですよね」

「勝てないよ!？」

まあそりやそうか。

スタジオ大黒天にぬいぐるみ軍団を贈りに来たら、景さんがいた。ちようどいいや、と思っただんで景さんと話をしてみることにする。

「景さん今タレント養成もやってる制作会社所属の女優ですよね。」

あとCMの時のので見てたんですけど給与形式じゃなくて仕事して報酬貰ってましたよね。

じゃあ多分給与所得者じゃなくて個人事業主として確定申告すると思います。

スタジオ大黒天と委任契約結んでると思いますが、申告のやり方は大丈夫ですか？」

「()じんじぎようぬし……?」

あ、駄目だこりゃ。

また今度にしよう、この話。

「まあ大丈夫ですよ、多分。難しい話ですけど終さんもいますから」

「英二くんは時々黒山さんの扱いが酷いと思う」

妥当だと俺は思いまーす。

「私の分も貰っていいの? ぬいぐるみ」

「三人分作りましたから、三人で遊んでください」

「ありがとう。英二くんには貰いっぱなしだわ」

「そこは……: 閲覧板回してもらってますしね?」

くすつ、と、景さんが笑う。

彼女にとっては自然な笑顔。

俺の目にも自然な笑顔に見える。

だが、それが映画の真似をして顔の表面に貼り付けているのだと分かる人には、結構気持ち悪く見えるかもしれない。

「今、私何か変だった？」

「いえ、綺麗な笑顔ですよ。いい俳優の笑顔です」

景さんが頬を掻いた。

たとい話をすると、百城さんが素顔の上に作り物の仮面、更にその上に作り物の仮面を重ねるタイプなら、景さんは顔の肉を切り抉ったり盛ったりして顔を変えるタイプだな。

個性的な美しさ、強み、魅力がここにある。

「そういえば、保護者は子供に与える物を選ぶって聞きますね。

教育に良いものとか悪いものとか意識して。そのぬいぐるみ、大丈夫ですか？」

「私はあんまりそういうことを考えないから」

「そうなんですか。子供が余計なことを知って、変な成長をするのって怖くないですか？」

景さんが首を横に振る。

「弟達の人生だから。私は安全を守る保護者で、二人の人生を決める命令者じゃないわ」

……。

いいやつだな、本当に。

親ではないかもしれねえけど、立派な姉だ。

「その、不躰なことを聞くようですが……景さんのご両親は」

「母はもうこの世にはいなくて、父は私達を捨てて出て行ったわ」

「……すみません」

「あら」

「? どうかしましたか?」

「英二くんって、そういう顔もするのね」

　　こういう顔だよ。

「英二くんは?」

「両親ともに死んでます。」

　　高校行つてどうなるとも思つたので、中学出たらすぐ社会出て食い扶持稼ぎ始めまし

たね」

「……ごめんなさい」

「あ」

「? 何?」

「景さんってそういう顔もするんですね」

「どういう顔？」

そういう顔だよ。

「人生って色々ありますよね。俺の短い人生でも、色々」

「……そうね。色々だわ」

俺達は、互いのことを教え合ったが、そこから先には踏み込まなかった。

教えたことは信頼の証で、踏み込まないことは思いやり。

俺と彼女の間で、言葉無いままに、そんな感じの意思疎通が交わされた……気が、した。

「そういえば黒さんがいらつしやいませんね」

「時代劇の方にお仕事取りに行ってるらしいわ」

「時代劇。いいですね」

時代劇出身の特撮俳優も、特撮出身の時代劇もいいものです。

端役であればバイト感覚で募集かけるところもありますし」

「今度はどんな役かしら……」

「近年の時代劇は割とファジーですからね」。

挑戦的で成功したのもあれば、目も当てられない失敗もあります。

特例であれば、馬に乗った將軍とバイクに乗った仮面ライダーが共闘しますしね」
「……なんで？」

なんでだろうな。本当に。

「日曜朝の仮面ライダーならルイが……あ」
「？」

「大変、忘れてた」

「何がですか？」

「明日、私学校だけど、ルイとレイは学校がお休みなの。

終さんも黒山さんと一緒にお仕事の交渉に行くと言ってたから、どうしよう……」
なんと。

まあ景さん高校生で弟妹が小学生だと休みが合わない時もあるか。

「何回か仕事はただで受けるって言いましたよね。どうぞ、俺に仕事をください」
高校行っていない俺の時間フリーっぷりを頼っていいぞ。

あ、少し悩んでる。

「ありがとう、英二くん」

「お隣さんですから」

高校行きながら女優って大変そうだな。

忙しそうだ。頑張れよ。

翌日。

俺は双子を夜風お姉さんから預かって、ウルトラ仮面の野外撮影地に仕事に来ていた。

「おー!!」

「おー!!」

「二人とも、あんまり動き回らないでね。」

あと足元に気を付けて。転ばないように……足元見ろって言ったぞ!」
こえー!

よその家の子供預かってるって怖い!

怪我しないか怖い!

爪楊枝に彫刻掘るのとかは俺は気を付けとけば折れねえけど、この子達は勝手に走っ

て足とか折りそうで怖い！

「にーちゃんありがとー！ すっげ、ウルトラ仮面だー！」

「どういたしまして。あ、ルイ君、そっちは地面凸凹してるからちよつと」

「美人のおねーちゃんと私達で対応が変わるんだもの、おとこつてかっつてね」

「レイちゃんどこでそんなこと覚え……ああ駄目駄目、そっちバッテリーと電気回線あるから」

怖い！

しょうがねえ、他スタッフにも助力を頼もう。

「———ということ皆さん、すみませんがこの子達を気遣って見守ってくださいると嬉しいですよ」

「ほー」

「了解」

「十五年前の英二思い出すな」

「英二くんすぐに手がかからなくなっちゃったからね」

「なにになに？ 英二の知り合いの弟達だつて？」

「英二の妹達つてどこー？」

「子供来てるんだつて？」

「朝風の子供？」

「英二もう子供作ったの？」

「誰？ 相手誰？ 湯島さん？」

「孫みたいに思ってた英二に子供ができたのか……泣けてくるな」

「僕四歳の時から英二君見守ってきたガチ勢ですよ」

「ガチ勢ってなんだよ」

「英二の息子見れるって聞いて来たんだけどどれ？」

「朝風と百城の熱愛スキャンダルの証拠が見れるとか聞いたんだけど」

「伝言ゲームそろそろ止まってください！」

お前ら撮影に関わるもの以外の能力をどっかに投げ捨てて来たのか!?

「にーちゃん人気だね」

「スタッフの半分くらいは俺より後に業界に入った後輩。」

残った半分の中の半分くらいは、俺が生まれるより前から業界にいた先輩だからね」

「へー」

「俺は昔から、家にいる時間より撮影現場にいる時間の方が長かったからね。」

撮影現場が俺の家で、撮影の仲間が俺の家族だよ。そういう人もいるんだ」

「ふーん」「ふーん」

ま、感覚的な話だからな。気にしなくていいぞ。

とりあえずこのくらいの子達の相手なら、一番良いのは大人の女性。

それも子持ちの既婚者だと理想的だ。

なので衣装部女性チーム映像作品の衣装を製作・管理する衣装部の中の、女性スーツアクター・女性俳優の着替えや服の製作を担当する女性の集団。男がやつちやいけないことをやる。の下に行く。

確か既婚者の女性も何人かいたはずだ。

「俺が忙しい時はお願ひします」

「おっけーおっけー」

「任せて!」

「あんたも忙しくて目は離さないようにしときなよ」

よーし。

これで俺が作業に回らねえといけねえ時も、二人を預けられる先が出来た。

子守は無理に自分であれこれやろうとするより、子供持った経験ある大人を頼んのが一番だ。

「ルイ君、レイちゃん、何かしたいことはある?」

「ウルトラ仮面に会いたい!」

「あつち、あつち行きたい」

「あー二人共俺の腕を持って別方向行こうとするのは痛い痛い痛い」

アキラ君を見た弟君がそつちに行こうとする。

綺麗な花の群生地を見つけた妹ちゃんがそつちに行こうとする。

正反対の方向に腕が引つ張られて痛い痛い！

……俺より年下なのに、この動物と人間の間みたいになちつちやい子の面倒見続けてきた景さんすげえな！

これ絶対大人の根気と大人の寛容さ必要なやつだぞ！

「その前に二人とも、おやつはどうかな。欲しい？」

「欲しいー！」

「欲しいー！」

「そつか。それじゃ三人一緒に食べに行こうか？」

「うんー！」

なるほど、こういう感じに手綱握ればいいのか。

「なんかいいお兄ちゃんしてるねえ。君のそういう表情は初めて見たよ」

と、そこで俺にかけられる声。

顔をそつちに向けると、怪しいグラスアンに胡散臭い雰囲気と、何考えてるかよく分か

らない軽薄な笑みを浮かべた人がいた。

「！ 手塚さん！ 今回の監督は手塚さんですか！」

「やあ。今回は頼りにしてるよ」

「こちらこそ、よろしくお願いします」

「特撮畑は面白いねえ。監督をコロコロ変えるんだから」

「一年通してやるには、そうやっていくしかないんですよ。負担が大きいですから」

手塚由紀治さん。

その名前から、「お前の名前手塚治虫っぽいけどそうじゃない絶妙に惜しい感じ」と言われる男。

まあ実際結構惜しいよな。

スターズ専属の演出家で、俳優を育てるためにあるスターズのギアの一つ。

アリサさんは俳優を望み通りに制御・成長させるため、俳優以外のユニットとして俺を懐に入れようとしてたわけだが……そういう意味じゃ、この人は俺の未来の一つ。

俳優でないのにスターズで大きな役割を果たす粋の人だ。

世間的には、手塚さんの評価は高くもねえが低くもねえ。

スポンサーや事務所の言うことに逆らわず、有名原作を引っ張って、有名俳優をキャスティングして、定番の演出と構成で映画に仕上げる。

だから『事務所のゴリ押し』とかが嫌いな、人気漫画に人気俳優を当ててるだけで忌避感を覚える人達からは、かなり評判が悪い。

逆にライト層からの支持はかなり強え、そういうタイプだ。
ただ。

俺はこの人、クツソ有能だと思ってる。

何故ならこの人が撮った映画は、基本的に全部結構な黒字になってるからだ。

『絶対に黒字にする』。

こいつがとんでもなく恐ろしい。

”手塚監督が撮った作品はどれも売れた”とか、”業界から重宝されてる”と言われているが、手塚監督の有能さはかなり分かりにくい。

だから過小評価されてるところもあんだよな。

上の用意した有名原作、有名俳優、ルーチンワーク化した演出に、いつものように同じように作っていく作品群。

……待て、なんでこれで売れてんだ。

原作あり作品の大半は、制作費回収できてねえんだぞ。

しかも毎回芸風が変わらねえ監督は、次第に飽きられて売れなくなっていくもんだ。

これで売れてる時点で手塚監督はなんかおかしい。

あくまで、俺視点の解釈だが。

オーソドックスな起承転結を外さない王道の作り、話にメリハリを付ける感覚、面白さをストーリーに付随させるセンス。

面白さを破綻させないバランス感覚、きちんとキャラ／俳優を魅せていくスタイルに、見やすくインパクトのある画作りを得意とする技量。

各々がハイレベルにまとまってるからこそ、この人はいつも同じように作っても面白えし、作った作品は売れるし、仕事が絶えることもねえ。

業界でこういうタイプの監督は、そりゃあ誰からも重用されるわ。

映画は一種の博打だ。

原作通りに作ろうが、原作から大きく外れようが、多額の予算をかけようが、有名俳優や有名原作を使おうが、映画の多くは興行収入爆死する。

そんな中、黒さんが言うところの“クツツつまんねえ作品”を大量生産して、片っ端から黒字にしてんのがこの人になる。

なんだこいつ。

有名原作と有名俳優で爆死する割合がどんくらいのもんか教えてやろうか。

この人は地味に凄い……いや、地味にやっても凄えんだ。

俺が貢献できるタイプの監督じゃねえから、そこは結構寂しいけどな。

「今日はねえ、ちよつと通りすがりの人が視察に来てるんだよ、朝風二代目」
「視察？」

「ほら、あそこ」

「……？ つ、！」

あそこにいるのはアキラ君。

その向かい側にいるのは……アリスさんじゃねえか！

うーわやな流れ。

「こりやまた、アキラさんにはハードな撮影になりそうですね……」

失敗できないってプレッシャーとかがアキラ君にかかつてねえといいんだが。

星親子を見つめていた俺の肩を、軽薄な笑みを浮かべた手塚さんが叩く。

「頑張りなよ。あの人の目は、厳しいからさ」

からからと笑う手塚さんは、アリスさんの手でスターズに拾い上げられた手塚さんは、監督のくせに俺達の味方とは言い難かった。

NOT 芥, S

手塚監督は名監督だと熱心に言うファンは、比較的少ない。

だが商業的に見りや、手塚監督がもたらしてきた利益はめちゃくちゃに多い。

金額換算なら、手塚監督は間違いなく上位層な有能監督だ。

だけど、現代では「興行収入が多いからこの原作あり作品は成功！ 監督は有能！」と

言うのと、あまり歓迎されないってことがたびたびある。

むしろ、興行収入が結構行ってるのに酷評される映画や、興行収入が死んでるのに満

場一致の絶賛の嵐みたいな映画もある。

大衆に広く浅く受け、商業的に成功し、熱心なアンチを作る作品か。

狭い範囲に強烈に受け、商業的に失敗し、十年語られる作品になるか。

怖え話だ。

どつちに進んでも、別々の苦しみがあったりする。

手塚監督は売れる作品を作る。

商業的に失敗しねえ怪物だ。

渡された有名原作と、用意された有名俳優、売り出したいヘタクソ俳優を組み合わせ、

それで映画を成功させる手腕は意味わからんレベルだぜ。

だから、なんつーか。

アキラ君とは触れ合わない平行線になる。

ぶつかり合わねえ微妙な関係性になる。

アキラ君が売れるより、認められたい男だからだ。

今の人気沸騰してる自分を捨て、演技力の高い無名俳優になれるなら、そっちを選び
そうな気がしないでもねえ。

逆に”売り方が分かりやすい今のアキラ君”の商品価値を分かっている手塚監督は、
そっちを選びたがるアキラ君とは目指す方向性がずれ込んでる。

そんな監督が、カメラの前で演技をするアキラ君を見ていた。

その横で、俺は仕事の待機をしている。

「頑張ってるね」

「アキラさんに何か思うところでもできましたか？」

「いや、若いなあ」と

若い？

「良い演技は認められると思ってる。」

良い作品は成功すると思ってる。

でも、努力が必ず報われるとは思ってない。

それは彼の人生経験が下地にあるんだろうね。

だから、才能の絶対視が強まっていく。

ああいう自信のない努力家の演技っていうのは、小手先すぎてよく分かる」

「……」

「僕らはいいい演技してる作品を撮るのが仕事じゃないんだけどなあ。

売れる作品を撮って、銀幕にまで届けるのが仕事なんだけど、分かっているのかな」

「アキラさんが分かかってないはずないでしょう」

「だろうね」

「それに容姿、演技力、アクション技能など十分です。

アキラさんは売れる作品を作る人です。凡人では比べ物になりません」

「でも君は、百城千世子に対してそうするみたいに、熱心に絶賛することはない」

「——」

「……うるせえな。」

絶賛されなきや価値がねえってか？

褒めるところがあつて凡人とは比べ物にならねえ、十分だろ。

「『本物』になれないと自分の価値が認められない、そんな人を何人も見てきたよ」

「アキラさんの価値は……」

「価値がないって言ってるんじゃないよ。彼が自分の価値を認められないって話」

……分かってんだよ、んなことは、てめえに言われなくても。

女性ファンは皆アキラ君にキヤーキヤー言ってる。

子供達は皆アキラ君に夢中だ。

俺とかファンはアキラ君の演技とかに悪口言われてたら、「うるせえ！ 上手い下手とか脇に置いて俺達はアキラ君が好きなんだよ！」って言ってるだろうよ。

だけど、アキラ君が憧れてる才能は、アキラ君の中にはねえ。

そいつは欲しても手に入らねえ。

だから無才でしかねえんだ、アキラ君は。

能力があつても無才。

アキラ君が別の道に行こうとしねえ限り、いつまで経ってもアキラ君は無才のままだ。

「自分の芸術的価値ばかり考えて、商品価値を冷静に見られない。

本物になれないと、自分の努力が本物だと思えない。

隣の芝生の青さしか分からなくなる。

そういうところを見ると、若いなあ、そう僕は思うのさ」

「手塚監督……」

ああ、全くだ。

無価値なんかじゃねえ。

アキラ君は無価値なんかじゃねえんだ。

少し視点の置き場所を変えりゃあ、今よりずっと楽な人生に、今よりもずっと輝ける俳優にだってなれるはずだ。

それでも、焦られるように目指してるんだ。

星アリスや夜風景が見せるような、見たものの心を奪うような名演技を。

「顔が良いならそれだけで満足したって良いのさ。」

それだけで稼いでるような芸能人もたまにいるしね。

彼の頑張る顔が苦しうに見えるのは、自分の手札に満足していないからだ」

熊の怪人が動いている。

アキラ君が生身で、過去最高の戦う演技を見せている。

手塚監督がそれを商業人の目で見ています。

アリスさんは、アキラ君に興味の一つも見せてねえ。

この光景が、今の社会の縮図のようにすらみえた。

「頑張る顔が楽しうに見える朝風二代目と並んでると、特にそれがよく分かる」

俺をアキラ君貶めるための引き合いに出してんじゃねえ、殺すぞ。

……手塚監督の、アキラ君に向けられてる同情がなんとなく感じられるから、どう反応していいか困るじゃねえか、クソ。

「はい、一旦休憩！今の流れで休憩明けにもう一回撮影入るよ！」
手塚監督が休憩を入れる。

俺は熊の怪人スーツの状態を横目で見ながら、アキラ君に飲み物を渡してやった。造形が俺の仕事だが、このスーツは俺が関わってねえ。だから新鮮だな。

とりあえずアクションおつかれさん、アキラ君。

「お疲れ様です、アキラさん。凄い汗ですね」

「ありがとう。このシーンはよく動くところだし、それに」

アキラ君の視線が一瞬、ちらりと母親の方に向く。

アリサさんはアキラ君の方を見てもいない。

撮影スケジュールやカメラマンの能力などを見ていて、息子を気にもしていない。
「あまり、気が抜けないから」

それでも萎えず、心折れず、投げ出さず。

アキラ君はずっと、懸命だった。

小さい頃の俺は、あんま人間味がなかったと言われることがある。

今振り返るとそうだったかも、って思える記憶は多いな。

それがなんで直っていったのか。

今思うと、そいつは周囲の人間のおかげだった気がする。

転校する途中で出会った子供達。

撮影現場の子役。

頭ぶん殴って叱ってくれた巖爺ちゃん。

頭を撫でてくれた大人。

偉大な技術だけじゃなく、他にも色んなことを教えてくれた先人達。

物を作っている合間に触れ合った人達が、俺を変えてくれた。

その中でも、きつとアキラ君が一番に、俺に影響を与えた。

俺の技術に一番影響を与えなかった男こそが、俺の心を一番に人間らしくした。

アキラ君は親に憧れ、親の意志に反して役者になろうとした子供。

俺は親に連れられ、親に賛成も反対もされないまま、親を超えようと決めた子供。

俺の親父とアキラ君の母親は昔、親友関係だったらしい。

でもたぶん昔の話だ。

俺とアキラ君が初めて顔を合わせた時期にはもう、親父達の間には見えない薄い壁があつた。

「一緒に遊ばない?」

撮影所の隅っこで他のプロの仕事をコピーし、ガチャガチャと樹脂パーツをいじつていた俺に、幼い頃のアキラ君が話しかけて来た。

俺とアキラ君は同じ年。

あの頃は確か、お互い10歳くらいだったかな。

「遠慮しておきます。その気持ちだけありがたく受け取っておきますね」

俺は話しかけてきたアキラ君を、やや冷たく突き放す。

「何で遊ぼうか? あ、台本の読み比べする? 演技が上達するかも」

「あの、俺の話聞いてますか?」

「もちろん聞いているよ!」

ところがその少年は、人一倍諦めが悪かった。

ずるずる引きずられ、次第に撮影の合間に彼と遊ぶことが多くなった。

物作りの仕事以外何も見ていなかった俺の視界が、広がっていくような気がした。

同性の気を許せる同年代の存在が、俺の中にあつた何かを消していった。

空いた時間を『興味が湧いた技術をコピーする』でなく、『星アキラを引き立てる小道具作り』のために費やすことが多くなつていった。

俺はその頃一度も自分からアキラ君を遊びに誘つたりせず、アキラ君に誘われたならちよつと嫌そうな顔をして引きずられていつて、それでいて心の奥では自覚なく喜んでゐる、そんな面倒くつせえガキだつた。

「星さんは諦めが悪いですね……」

「あはは、アキラめだつて、面白い！」

「……」

この頃のアキラ君にはまだ、「常識的に考えて相手の心情を推測する」つていう能力が育ちきつていなかったように思える。

ズケズケ相手に踏み込んでいく勇氣。

友達になりに行こうとする行動力。

「迷惑じゃないかな」つて思いよりも先に、「友達になりたい」つていう思いが先行する、その子供らしさが俺の心を解きほぐしていた。

いつの間にか彼は、俺にとっての一番の友達になつていた。

俺が冷たく突き放しても、人懐っこく寄って来る人の良い真っ直ぐな少年。

こんなに人が良い子供を、俺は人生で初めて見た。

だから、大切だった。

「僕達は友達だよね？」

アキラ君が問うて、俺が返答する。

「そうですね。俺は、アキラ君と友達です」

アキラ君がにつこり笑う。俺もつられて笑ったと思う。

そして。

純粹な友情が続いたのは、ここまだけだった。

この頃の形の友情は、もうどこにも続いていない。

アキラ君が落ち込んでいると、人伝てに聞いた。

気になって様子を見に行ってみると、落ち込んでいるアキラ君が目に見えて落ち込んでいるのに、分かりやすくやせ我慢して演技をしているのが見えた。

その頃の俺はよく分かってなかったが、アキラ君は……週刊誌やネットの記事なんかを見ちまっていたらしい。

色々と、本当に色々と言われてたそうだ。

親の七光り。

ステマの人気。

他の子役より下手。

親の操り人形。

親が有名ゆえの傲慢が見える。

仕事を舐めきっている。

親の才能を全く受け継がなかった無能。

星アリサの子として鼻屑されてなかったなら目立たない、無個性。

……本当に、色々言われてたらしい。

これらの心無い言葉の数々、記事のインパクトを強くできるならいくらでもアキラ君を貶めてもいいと思つてた週刊誌とかが、10歳のアキラ君の心を抉つた。

何か言おうとした。

アキラ君に歩み寄つて、励まそうとした。

肩を叩いて褒めたりとかしようとした。

背中を叩いて、元気出せよと言おうとした。

額をコツンと叩いて、何も知らねえ奴らの声なんて無視しろと語りかけようとした。

俺は、あの時の俺は、何か言おうとしたんだ。

でも、何もできなかった。

何も言えなかった。

アキラ君が自力で立ち上がるまで、結局俺は何も言えず、何もできず、何も救えやしなかった。

この時、初めて、俺は——俺が本当は何もできないクソな人間だと、思い知った。だから、なんとかできそうな人の所に行った。

アキラ君の母親の下に。

彼女くらしいの権力があれば、多少はマシな方向に誘導できると、そう思ったんだ。

「ええ、知っているわ」

アリスさんの反応に、少し驚いた覚えがある。

その返答は、アリスさんが週刊誌やネットニュースでアキラ君が酷いことを言われていることを知っているにもかかわらず、何もしてないってことを意味してたから。

止めてくれと、俺はそう言おうとした。

「なら……」

「あの週刊誌や風評は、そこまでの外れだった？」

「え」

「才能でアキラを感じて、見極めてみなさい。

あなたの才能は、あなたにだけは絶対に嘘をつかないわ。

アキラのこれまでの評価に相応の能力が無いなら、今回の報道は真実とも言える」

「……………」

「問いましょう。アキラのこれまでの評価と、アキラの能力は、釣り合っている？」

やめろ。

そういう言い方をすんな。

アキラ君の向き不向きと、望む道を進むための才能の多寡を理解してる、俺は。

何も、言えなくなる。

「……………」

俺の本能と才能は、アキラ君が実力以上に評価されてたこと、その歪みがこうした形で噴出したことを分かっていた。

名女優の息子は時に鼻真され、時に批判され、名女優の息子っていうネームバリューを利用するためだけの仕事の依頼が来ることを、俺は知っていた。

だからこれは当然のこと。

だからこれは普通のこと。

……………だけ。

分かっていても、知っていても、納得なんてできなかった。
できるわけ、ねえだろ。

「でも、でも……アキラさんは、優しかったんです。俺にさえ優しくしてくれたんです」
何も分かってなかったんだ、俺は。

「人を思いやれるアキラさんがあんな目に合うのは、あんまりで……」
そしてアリサさんは、多くのことを分かっていた。

「あなたはまだ、父親のようにならなくて済むかもしれないわね」

「え」

「いい？　これから言うことをちゃんと聞きなさい。

酷いことだと思うかもしれない。

聞きたくなかったと思うかもしれない。でも、ちゃんと聞きなさい」

「は、は、は」

戸惑う俺に、アリサさんは真剣な顔で教える。

「観客は、俳優の本当の心なんてどうでもいいのよ。

悲しむ演技をしていれば、悲しんでいると思う。

怒りの演技をしていれば、怒っていると思うわ。

俳優が本当はクズでも、本当は優しい人でも、お構いなし。

そして、演技をもってその俳優を評価するわ。

優しくて演技が下手な人を、優しいからと言って演技に加点評価する人はいない」

観客視点での俳優の加点項目に『優しさ』なんてものはないのよ、と、アリサさんは言った。

ドロドロとした感情が溜まった目で俺の目を真っ直ぐに見ながら、そう言った。

「この業界において、優しさは頻繁に無価値にされるものなのよ」

「――」

「観客はアキラの優しさなどを、アキラの演技の評価点になど加えない」

アキラ君の友達として、アキラ君のためにここにいるはずだったのに、アリサさんの言い分に瞬時に納得してしまった人非人な俺が、嫌で嫌で仕方なかった。

大衆は『役者の人格』を理由にめったに加点しねえくせに、頻繁に減点はする。

アリサさんの教えは、今も俺の中に息づいている。

あの頃、アキラ君を潰したものは、ある意味そういうものだった。

「そんなものをアキラの俳優としての評価に加えるあなたは、自分を省みる必要があるわ」

俺の感覚が、本能が、才覚と才能が、アリサさんの言葉を肯定していた。

アリサさんの言うことに反抗していたのは、俺の心だけだった。

時は流れる。

俺とアキラ君の距離は、次第に離れていった。

多分、俺が不味かつたんだろう。

何か、よく分からん何かが噛み合わなくなつていった。

元々、アキラ君から歩み寄つて来てくれて、それで成立してた関係だ。

俺なんかがあがいてもどうにかなるもんじゃねえ。

俺は所詮裏方のモブ。

アキラ君は人気が高く、舞台の主役を張れるような光当たる場所の俳優だ。

元から格が違うと言えそうで、俺はアキラ君の迷惑になるんじゃないやねえかと思つて、次第にアキラ君に向けて踏み込むことも怖くなつていった。

怖かつた。

物作りしか出来ることがない俺は、他に何もできなかつた。

だから怖かつた。

友達を、俺の技術でどうにもならねえフィールドで、傷付けるのが怖かつた。

何年もの間、アキラ君とは会つたり会わなかつたり、距離感が縮んだり離れたりして

いた。

俺はその間にも様々な人と触れ合い、技と心をちよつとは成長させていった。

この世界に居続けければ、いつかどっかで仲直りもするだろうと、そう思いながら。

アキラ君は『本物』になろうと足掻いてる。

だけど、足掻いても足掻いても、彼はなりたい自分に一向に近づいてねえ。

彼がなりたい自分になるには、必要な種類の才能の量があまりにも足りてなかった。

報われてほしかった。

アキラ君が報われますように、と祈った。

優しくて気のいいあいつをどうか、と願った。

でも結局は、アリスさんが言う通り——役者の性格なんてのは、めったに加点对象になんかならなくて、優しさは演技力を見る世界において、完全に無価値だった。

周囲の関係者や撮影スタッフは、俺と同じようなことを考えてたらしくて、何人かはアキラ君を助けようとしてくれた。

アキラ君に、それが分かってないわけがねえ。

彼は俺達に感謝だっしててる。

だけどな。

『本物』になりたい彼にとって、そいつは無価値なんだ。

優しさなんかを評価されても、意味なかったんだ。

俳優としてのアキラ君にとって、周囲がくれた優しさは無価値で。

俳優としてのアキラ君を見ている大衆にとって、アキラ君の優しさは無価値だった。

アキラ君は憑依を使いこなすような名俳優に憧れ、大衆は名俳優による名演技を求めた。

それが全てだ。

だからどうにもなりやしねえ。

だけど。だけど！

フアンに寄られて、嫌味なく笑顔を振りまいて、手を振って。

理由を聞いたら「皆が喜んでくれるから」って本心から言う、あの人に。

あの人に、俺は報われてほしかった。

あの人を求める才能があの人の中にないと分かってたけど、それでも報われてほしかった！

報われて、輝いてほしかったんだ！

『才能が』なんて一言で片付けるのは……友達に……俺はっ……！

俺はもう、アキラ君に友達と思われてる自信がなかった。

嫌われてるかも、とすら思っていた。

関係があやふやな時間は、何年もずっと続いていった。
それでも俺は、彼を友達だと思い続けていた。

子供の頃、僕は自分を天才だと思っていた。星アキラ一生の恥だと思う。

CM、ポスター、バラエティ……どこでも引つ張りだこで、僕はそれら全てが自分の
実力によるものだと思っていた。

母を信じるように、僕は自分の能力を信じていた。

だからだろう。

大人に、撮影が止まってる時は子供同士遊んでなさいと言われて、迷いなく彼に声を
かけられたのは。

「一緒に遊ばない？」

朝風英二。

当時、撮影所に入るようになってから7年が経ってたっていう10歳の子供。

僕と同じだと、そう思ってた。

才能がある人だから、僕と同じでこの年齢でも大人と並んで仕事ができてるんだと、僕はそう信じて疑ってなかった。

友達になれると思っただ。

対等だと思っただ。

僕と同性で、同じ年で、同じように撮影で活躍してる人はいなかった。

だから同じ目線の高さで話せると、そう思っただ。

今思うと……僕はあの頃、分不相応の人気で引つ張りだこになる中で、大人に囲まれる毎日に、どこかストレスを感じていたのかもしれない。

僕はきつと、あの才能が渦巻く世界で、同じ年で同性の友達が欲しかったんだ。

「遠慮しておきます。その気持ちだけありがたく受け取っておきますね」

だから、踏み込んだ。

「何で遊ぼうか？ あ、台本の読み比べする？ 演技が上達するかも」

「あの、俺の話聞いてますか？」

「もちろん聞いているよ！」

あの頃、朝風君が手がけていた物の数々のクオリティの高さに怖気を感じるような才能が僕にあれば……もしかしたら、僕に違う未来もあっただろうか。

ほどなくして、僕は知る。

僕に実力なんてなかったことを。僕が持て囃されていたのは、母のおかげだったことを。

何もなかった。

僕には、何もなかった。

なりたいたいものになる力も。

『本物』になる才能も。

母に言われて確認した週刊誌やネットニュース、SNSの書き込みは、10歳の僕が存在することすら否定しているように見えた。

当時の僕には、そう見えただ。

僕の中に信じるに足るものなんてなかった。

信じられる能力はなかった。

僕の無いに等しい才能は、思い上がった僕をいつの間にかに裏切っていた。

自分の能力に裏切られるように、母に裏切られた気持ちになった。

「僕、は」

そうして気付く。

僕と違って、本当に実力で業界で活躍し続けている、今も成長を続けている彼の力に。

そうして自覚する。

”彼と自分が同格だと思っていた”などという、僕の救いようなない愚考を。

僕は母さんの力に押し上げられ、鼻肩され、”星アリサの息子”という記号くらいしか売りの無かった人間だったと思う。

だから、子供の僕を蛇蝎のごとく嫌う人は多かつたはずだ。

親の七光りというものは嫌われる。

子役の頃は大目に見てくれる人が多くても、歳を重ねればそれもなくなっていくだろうことは、目に見えていた、

逆に、朝風君はどうだったか。

彼はもう、周囲の人が気付いた時には、父親というフィルターを通さなくても十分すぎる評価を得られるくらいの技術を持っていたらしい。

親の七光りなんて程遠い。

生きるということの全てを物作りに費やすかのような幼い子を見て、僕の周りのプロは皆朝風君を特別視してたけど、才能が無い僕だけが、その異常性に気付いていなかった。

彼は間違いなく天才で、僕はそうじゃなかった。
なのに。

世間では僕がずっと持て囃されていて、彼はただ一度のインタビューすらされていない
かった。

僕が星アリサの息子で、彼がそうじゃなかったから。

僕が俳優で、彼がそうじゃなかったから。

理由なんてそのくらいのものだった。

それが本当に申し訳なくて、何かがおかしいと思うことしかできなくて。

君はもつと日の当たる場所に出るべきだと、僕は朝風君に言ってしまった。

「俺はそういうのいいんですよ。」

あ、でもアキラさんが皆に認められたら嬉しいですね。

アキラさんが皆に褒められると、自分が褒められてると同じように嬉しいですか
ら」

その言葉が、僕の胸の内を抉った。

皆に認めてほしい僕。

皆に認めてもらうことがどうでもいい、幼い朝風君。

僕がなんで天才になれないのかという理由を、強烈に叩きつけられた気分だった。

「さ、やりましょう。今回も俺、全力でアキラさんをサポートしますから」
「……うん」

分かる。

分かってしまう。

以前は僕に少し冷たくもあつた彼が、暖かく僕に接する理由。

それは、彼が僕と対等だと思つているから。

対等の友達だと思つているから。

朝風英二は、僕を微塵も見下すことなく、対等の友人として大切にしてくれていた。

子供の頃の僕はその視線が本当に辛くて、苦しくて、悲しかった。

いつからか無自覚に、彼から距離を取るようになった気がする。

子供の頃の僕は、本当にバカだった。

それが朝風君を傷付けるかもしれないと思ひ到れていたなら、あんなバカなことはしなかつたっていうのに。

そのきつかけは、あるスタジオの廊下で大人の男二人がしていた会話を、僕がうっかり聞いてしまったことだった。

「すげーな星アキラ。あの食器棚に突っ込んで食器棚が壊れるシーン、いい画になった」

「ああ、ありや伊原式だな」

「伊原式？」

「棘谷のウルトラマンの秘奥技術名って奴だ。」

英二君が前に言ってたよ。

井原弘マープリング・ファイブ・アーツの鬼才である男。才能によつてしか身につかないセンスと、努力によつてしか身につかない計算によつて、『現実で起こるビル崩壊よりも遙かにリアルなビル崩壊』というものを作り上げた。火薬を使つていないのにビルが爆発しているように見える魔法のようなその技術は、特撮界の技術に一種の革命をもたらしたという。つてベテランの天才が開発した構造体らしいな。

壊れる表面の裏に幾何学的計算による仕込みをして、紐を引く。

そうすることで人より大きなサイズの物体の一斉崩壊を操作するんだと。

計算と論理による崩壊で、棘谷の撮影でも井原さんしか使いこなせないんだとさ。

英二君はその技術をコピーして、星アキラがぶつかる食器棚の崩壊に応用したんだ」

「どうやって？」

「星アキラが食器棚にぶつかつて、食器棚が壊れるシーン。今話してたやつのことだが

「よ」

「ああ」

「食器棚の戸の裏に透明ワイヤー付けて、裏で朝風が引つ張つてたんだ。

付けたワイヤーの数は多くて、アキラが突つ込んだ戸を16種別に崩壊させられた。

つまり、アキラがどう突つ込んだでも、朝風が戸の崩壊の形をアキラに合わせられたわけだ。

しかも戸が崩壊する時、食器棚の中から血糊袋が飛び出してた。

観客にバレず、アキラの服の表面に血の跡が付けられたつてことだな。

アキラが食器棚に突つ込む演技が未熟だったもんだから、朝風が補填したんだな」

「そんなことができるつてのか……」

「技術吸収型の、造型界の天才児だぞ。

特撮分野の一流のプロ数百人が星アキラのために全力尽くしてるようなもんだ。

あいつの作った物を使ってあの程度にしか見えない星アキラが微妙なんだよ、つた
く」

ただ、ひたすらに。

「――」

胸が痛かった。

「あ、アキラさん」

「朝風君」

朝風君は会えば対等の友として僕を扱ってくれて、僕がその時点で足りてない能力を埋めたり、僕の得意分野を強調する仕事をしてくれた。

僕の良さを捏造したりせず、僕の中に最初からあるものを強調してくれた。

だから僕は、いつも実力以上に評価されている、気がする。

本当に無才な人間に日曜朝の人気ヒーロー番組なんて任されないだろうけど、朝風君の後押しのおかげで選ばれたのかもしれないと、後々にはそう思えた。

だって僕は。

その番組に僕が選ばれたのが、僕の実力のおかげだなんて、とてもじゃないけど思えない。

「朝風君は、僕に失望したりしないのかい？」

「俺、アキラさんを信じてます。これまでも、これからもですよ」

最悪だと知りつつも、彼と次第に距離を取り始めた。

僕は、彼と友達になったことが『不幸』だったなんて、思いたくなかったから。

朝風君が言う。

「あなたを信じる」

彼の期待が、重かった。

母が言う。

「あなたは役者に向いていないわ」

母の無期待が、辛かった。

時々、スターズの仕事を「彼女の方が受けがいいから」と言われ、千世子君に譲った。

「ごめんね」

彼女の謝罪が、痛かった。

朝風君を名前で呼ぶ機会を逃して、それからどのくらい経っただろうか。

幼馴染のちいちゃんを千世子君と呼ぶようになって、それからどのくらい経っただろうか。

僕から友達になりたいと言った。

僕から距離を詰めた。

いつも僕の方から遊びに誘い、僕の方から話しかけていた。

なのに勝手に、僕の方から距離を取ったんだ。

悪いのは、僕だ。

距離を取ったのに、交流は途絶えなかった。

彼が僕に好意的だったから。

一緒に仕事をする時は必ず、彼は僕のために全力を尽くしてくれた。

よく分からなくなってきた。

彼が僕を恨んでいて当然、嫌っていて当然だと思っていた。

でもなんだが、そうでもない気がしてきた。

かといって楽観的にもなれず、僕と彼が友達なのかどうかさえ、自信が持てない。

そんなあやふやな期間が数年、曖昧に続いた。

それでも僕は、彼を友達だと思い続けていた。

それが終わったのは、『ウルトラ仮面』の企画で、僕が呼ばれた頃。

一年を通して日曜朝に放映され、放映終了後もネット配信などのため撮影は続くという、大型企画だった。

企画の始まりは、放映開始の数年前くらいだっただろうか。

そこで僕は、彼と対峙した。

僕は主演として、彼はスタツフとして招集されていたんだ。久しぶりに彼と一対一で対面した気がして、息が詰まった。

星アキラと、朝風英二の眼と眼が合い、そして。

朝風君がぎこちない笑顔で、手を差し出してきた。

「俺達、友達ですよね？」

どこかで聞いたような台詞。

僕と彼の間では初めての、彼からする友情の確認。

本当は、色々と考えていた。

頭の中に、ごちゃごちゃとしたものが詰まっていた。

でもそんなもの、この不器用な握手の申し出を見たら、全部吹っ飛んでしまった。

何年も蓄積していたものが、全部吹っ飛んでしまった。

「そうだね。僕は、朝風君と友達だ」

彼が差し出してくれた手を、ぎゅつと握る。

その握手で、ただ一回の握手で、確信できた。

また俺達／僕達は、友達に戻るってことを。

ウルトラ仮面の撮影を通じて俺達は／僕達は、かつて失った何かを取り戻していっ

た。

だって、友達だったから。

一つの作品の撮影を、俺達は力を合わせて駆け抜けていった。

俺の親父のアキラ君に対する評価は、辛辣だった。

「あんな低能にかかずらうのは時間の無駄だ。

本物の天才と高め合う方がよっぽど有効だと、そうは思わんか？」

だからその時、俺は熱くなって、親父に真っ向から反抗した記憶がある。

「それは違う、親父」

声を張り上げた記憶がある。

「俺は、俺が美しいと思った！」

だから全力を尽くしてやるんだ！

それは目に見える演技じゃねえ！

評価されるような形のある技術じゃねえ！」

その心を美しいと、そう思ったんだ。

「俺が大好きな映画で、TVで、作品で！『諦めない主人公達』が見せたもんだ！」

諦めない彼を、助けてやりたいと思っただ。

「俺を魅せた心の美しさなんだよ！……二度と、あの人を見下したようなことを言うなッ!!」

そんな俺の友達を馬鹿にする親父に、無性に腹が立った。

親父が微笑む。

「それでいい。お前は確かに俺の息子だ」

ここでようやく、俺は乗せられていたことに気付いた。

本音をあつさり引きずり出されちまって、悔しく思ったことを、覚えていた。

「人格破綻者が社会の中で生きることが認められるには、能力を見せるしかねえ」

親父は。

「それができなきやただの塵こみ、無価値な芥あくたでしかねえんだ」

あの時の親父は、俺に何を伝えようとしてたんだろうか。

「ビーム出せる人間なんていねえ。

特撮に関わった人間の使命は、そいつができないことをできたように見せること。

俳優の魅力ってやつを特に弄らずそのまんま、強調して観客にお出しすることだ」
心構えは、受け取れた気がする。

「頑張れ。惚れ込んだ俳優がいるってことは、喜んで良いことなんだから」
分かってるさ、親父。

ほんの少しで良い。

俺ができることなんざ、限界がある。

天才は一の努力で十の結果を出す。

無才は十の努力で一の結果しか出せねえ。

そして、『本物』は十の努力で百の結果を出す。

もし『本物』とアキラ君がタイマンで競えば、その成長速度は百倍じゃ済まねえだろう。

どうしようもなく追いつけねえ。

もう、そこはどうしようもねえことだ。

だけど。

だけどな。

化粧が美しさを引き立てるように、引き立てるものがありや、話は別だ。

俺達が、裏方として支えられたなら。

俺が、視聴者の多くが気付いてなかった彼の良点を、皆に分かるよう強調できたなら。朝風英二という影が、彼を引き立てられたなら。

アキラ君の十の努力が十の結果に繋がるようにするくらいなら、成し遂げてみせる。やってやるさ。

星アキラが最後の最後に、「諦めなくて良かった」と、そう言えたなら。

俺はその時初めて、アキラ君の友情に報いられる。そう思えるんだ。

朝風君は僕の長所を見て、ちゃんと褒めてくれる。

褒めようとするれば何十秒でも褒め続けてくれるだろう。

だけど、千世子くんなら1分でも10分でも、絶賛し続けられるだろう。

かつてある日に彼の千世子君への称賛を聞いて、僕は悟ってしまった。

もう朝風君の周りには、ちゃんとした天才がいて。

僕なんかと仕事で組むのは、もしかしたら足を引っ張るようなことなんじゃない

か、つて。

ところがその少年は、人一倍諦めが悪かった。

「俺、アキラさんに何の才能も無いと思つたことはないですし、無能だと思つたことも無いです」

彼は僕が望みを叶える未来を、諦めていなかった。

他者を輝かせる。

そのために全力を尽くす彼の生き方が、僕にはとてもまぶしく見えた。

千世子君は微笑み、遠くを見ながら僕に言う。

「英二君から物作りに関する事柄全部引っこ抜いても、友情とかは残りそうだね」

何やら含みのある言い方をしていたのが、印象に残つてる。

少し羨ましい、と千世子君が僕らを見て言つていたのが、彼女らしくなくて意外だった。

そして、母さんは。

「彼は本能レベルで他人を見ている。

天賦の才の視点だわ。

もうあなたも分かっているでしょう?」

「母さん」

「彼の他者への絶賛の度合いは、彼が他人に見た可能性の度合いよ。

朝風も知るあなたの才能の無さでは……どこまで足掻いても、芥あくたに終わるだけ」
分かつてるよ母さん。

でも、だけど。

「母さん」

「何？」

「名俳優になれる才能を持つ人間に彼が惚れ込むのを、『本能』という名前で呼ぶなら」
喧嘩して離れてもまた仲直り出来る友達を得られたことは……絶対に、不幸じゃない。

「僕を彼が全力で助けてくれることは、『友情』という名前で呼ぶんじゃないでしょうか」

「――」

苦悩も、無才も、絶望も、現実も、何も解決してないのは分かっている。
分かっているけど、これは現実逃避なんかじゃない。

この願いが絶対に敵わないと分かっているても、僕は絶対に諦めない。

今更もう、諦められるか。

彼と僕とは、競う関係にない。

彼は裏方。

僕は俳優。

彼は僕の味方だ。……やっと、そう割り切れるようになった。

彼は僕に劣等感を与えず、僕をライバル視することはない。

僕とぶつかり合いながら高め合うことはないが、彼が作ったものは僕の力量に少し下駄を履かせてくれる。

それは、刀鍛冶と武士の関係のようだと、昔一度だけ思ったことがある。

彼が武器を作って、僕は戦う。

他の誰でもなく、自分自身と戦う。昨日の自分自身を超える。

他の天才には勝てなくても、せめて昨日の自分には勝ち続ける。

彼女らが芝居で一瞬で流す涙の演技に、僕が毎日毎日何年も流し続けた汗が、ただの一度でも勝つことができたなら。

僕はその時、初めて朝風君の友情に報いられる。そう思えた。

俺は、それが朝を待つようなものだ、信じてる。

僕は、それが届かない空の星に手を伸ばすようなことだと、知っている。

アキラ君に、アキラ君が望む形の才能が無いことは俺も分かつてる。

だが、あの人を無能だとは思わねえし、何やつても駄目だなんて思わねえ。

何より、あの方は頑張ってる。

報われて欲しいと思うことは、そんなに変なことか？

僕に才能が無いことなんて分かつてる。

でも、諦められるか。投げ出すなんてできない。

焦がれたあの高みに手を届かせるため、頑張ることをやめられない。

夢見て努力することは、そんなに変なことだろうか。

親父を絶対に超えると、俺は誓った。

母さんのようになりたいと、僕は思った。

おふくろは俺の目の前で首を切った。

母さんは僕の目の前で、僕の無才を口にした。

子供の頃から俺は、他人を輝かせるために物を作るのが楽しくて仕方なかった。

子供の頃から僕は、毎日芝居のことだけを考えて生きてきた。

一週間寝ないで物を作り続けることが、子供の頃は好きだった俺。

強い言葉で自分を戒めていないと、一週間と経たず逃げ出してしまいそうな僕。
楽しかった。

辛かった。

アキラ君の可能性を信じてる。

本当は、僕は僕を信じていない。

彼を尊敬している。

彼を尊敬している。

何もできない俺にも、友達のためにしてやれることがあるのなら、俺は。

なんでもできる彼のように、高みへと上り詰めた心があるから、僕は。

アキラ君を高みに押し上げるには、俺はどういうものを作ればいいんだ？

僕はあの高みに駆け上がるために、何をすればいいんだろう。

俺が人生を何年くらい費やしたら、アキラ君の成長の助けになるもん作れるんだろう

か。

僕は人生を何年費やせば、皆に求められる『本物』になれるんだろう。

俺が見惚れた誰かの素晴らしさを、他の人にも認めてほしい。頑張ろう。

僕が母さんに認めてもらうには、頑張るしかない。

俺が作る物は、ちよつとくらいはアキラ君の実力を底上げして見せてんのだろう。

僕を引き立てる小道具・大道具の数々が、僕には分不相応だと思ふこともある。

でも結局は、アキラ君が頑張るしかねえ。

でも結局は、僕が頑張るしかない。

俺なんかの造物がなくても、アキラ君はいつかちゃんと報われると、俺は知ってる。

彼の素晴らしい物がなくても、僕は僕の可能性を信じなければならぬと思う。

ずっと頑張ってきた俺の友達達の人生に、必ず夜明けの朝は来ると、信じている。

空の星にも手を届かせてしまいそうな天才が、僕の可能性を信じていることを、知っている。

だから俺は支えよう。

だから僕は頑張ろう。

諦めない人を輝かせられるのなら、俺の人生にも、きつと少しくらいは価値がある。今更諦めたりなんてするものか。僕は、後悔なんてしてないんだから。

「俺は、俺の才能より価値がある人の良きつてやつを知ってる」

「僕は、自分の才能の価値を知らないことが、天才の条件だつてことを知っている」

「俺は、あいつほど無才の苦を抱えながら、まっすぐに強く育った人間を知らない」

「僕は、彼ほど自分の才能を他人のために費やそうとする人間を知らない」

「だから、助け合える。全力で」

アキラ君の人生にさっさと夜明けの朝が来いと、俺は今日も祈ってる。

朝風君が夢中になって絶賛する、輝く星になるんだと、僕は今日も自分に言い聞かせる。

一年間撮影を続ける日曜朝番組で一緒に仕事したからこそ、俺はアキラ君の努力家な面に気付けたが、そうでなければ気付けたかも怪しい。

そう、そのレベルだ。

小さい頃の俺は、アキラ君の努力家な面すら見ずに、アリサさんに突っかかっていた。愚かなんてレベルじゃねえ。

あの頃の俺は本当に、アキラ君に人の良さ以外の価値を見てなかった。本当に何も知らなかった頃があった。

少しは物を知れた今があった。

そして今も昔も、俺は彼に報われてほしいと思いつけている。

人が良く、優しく、真つ直ぐな性格をしてるっていう長所が、その人の価値に何の貢
献もしなかったりするこの変な世界で。

俺はあの星に、輝いてほしいと願っている。

「彼は人柄のせいか、どこの撮影でもスタッフと良好な関係を築いてるね」

手塚監督が、カメラマンや助監督と会話しているアキラ君を見ながら言う。

「大悪人の俳優のために懸命に必死に頑張れるほど、裏方おれたちは聖人じゃないですよ」

「それもそうだね」

アキラ君が顔を上げれば、周りが見える。

頑張る少年を支えようとする皆が見える。

うつむいてばっかじゃ見えねえもんもあるさ。

アキラ君が頑張つて、頑張つてる彼を周囲が助けてやろうと思つて、助けてもらった
アキラ君が周りに礼を言つて……そうしていれば、作品は出来る。

とても価値のある作品が出来る。

撮影ってのは、一人でやるもんじゃねえんだから、そういうもんなんだ。

まあだからって俺を集団で寄ってたかって伝言ゲームで玩具にすんのはどうかと思うがな！

スタッフ間の仲間意識強いつても考えもんだぞあれ！

「ところでスーツアクターが一人抜けちゃったんだけど、二代目はどうしたらいいと思う？」

「あー、あの風邪気味っぽいのがやっぱり駄目でしたか」

「そうなんだよねえ。代わりがいなくて」

「じゃあ俺がやっておきますよ」

「……ん？」

「次のカットのシーンは、クマの怪人がアキラ君にキック食らう棒立ちのシーンですよ。ね。」

絵コンテはちゃんとチェックしてあります。誰が中の人でも大丈夫だと思いますよ」

「はあー、無茶なこと考えるねえ」

「ゴジラを生み出した閉米閉米栄三。造型屋として優秀なだけでなく、後に閉米プロダクションを設立し、長く特撮の素晴らしき世界を支えた傑物。さんを初めとして、昔はよくやったことです。」

スーツは中に人や木などを詰めしておけば立ちますから、棒立ちならどうでもなるんですよ」

よつこらしよつと。

む。

……身長が足らん。手足の長さも足らん。クソア！

しようがないのでクマの怪人スーツの指の中にぬいぐるみの要領で綿を詰め、柔らかい長めの棒芯を入れて動かせるようにしておく。

クマのぬいぐるみの応用だ。

俺の体格じゃ足らないところにはアンコ筋肉などを表現する詰め物。細身のスーツアクターには必須。英二が仮面ライダーの目の部分を直すのに使ったアレ。詰めて、と。

スーツの足部分にも詰め物入れといて、足りない足の長さはカバーしておこう。

肩周りもちよつとしよぼくなつちまつたで、肩周りの形にした太い針金を内に入れて、肩と胸板の厚さをしつかり誤魔化しておく。

「さあいけますよー！」

「……何やってるんだ朝風君!？」

「さあどんと蹴り込んで来てください。スーツを熟知した俺の受けは完璧ですよ」

「いやいやいや」

「ほら、いいところ見せましょうよ。アリサさん……が……」

あれ？

いない？

……もう、帰った？

「もういないよ。分かってたことだ」

「……アキラさん」

本当になんていうか。

息子の才能が無いっていう確信だけは、誰よりも強いなあの人。

アキラ君に期待してんの経営者としての能力くらいなんじゃねえのか？

アキラ君の心境を思うと、心が痛む。

だけど同時に、こんなことでへこたれねえだろとも思う。

これで折れてるくらいなら、こいつはとつくの昔に折れてるはずだ。

だからこそ俺達は、この撮影の世界で信頼し合う戦友になれたんだ。

「ウルトラ仮面——！ 頑張れ——！」

と、そこで。

景さんの弟のルイ君が、遠くから大きな声を上げるのが聞こえた。

小さな子供の応援。

ヒーローに届けられる応援。

母親からの無期待が影を落としていたアキラ君の目に、光が戻る。

知ってるよな、アキラ君。

ちっさい子供はヒーローの演技が上手いか下手かをあんま気にしねえ。

子供達にとって大切なのは一つだけ。

そのヒーローを好きになれるかどうか、だ。

アキラ君、好かれてるみたいで良かったぜ。

”俳優は大衆のために在れ”。

母さんが掲げた言葉で、観客を前にした僕らが今、胸に秘めておくべきことだ」

そう、その意気だ。

かっこつけるよ、子供の前だけ。

「ですな」

「キックが当たるまででワンカットだから、上手く受けてくれ」

「心配ご無用。俺を誰だと思ってるんですか？」

「テディベア製造工場工場長」

「この野郎！」

アキラ君がバイクにまたがる。

俺が以前デザイン造型を担当した、風をそのままバイクの形にしたかのような、マジョーラを使った風風味サイクロンのバイク。

アキラ君と並べることで両方のかっこよさを引き立てるようデザインした、バイク。アキラ君の助言で完成したバイクだ。

バイクでの登場シーンから始まり、さつそうと現れたイケメンが俺を蹴り倒すのだ。かっくいー。

どうにも緊張するが、棒立ちしかすることねえし、特に緊張が悪影響することもなく。「カットー」

手塚監督の少し楽しそうな声が、現場に響いた。

ここが時代劇の世界か（デイケイド導入）

俺のスマホに連絡が入った。

景さんじゃねえか！ 何用だろうか。

ふむ、公欠の影響が出て今日ルイ君とレイちゃんを大黒天に預けてるって？

おー、俺と終さんで色々景さんの学校の校則調べといた甲斐があったか。

景さんの学校、それが理由として認められれば公的欠席として認められるんだよな。

……限度はあるから気を付けろよって感じだが。

今回CM撮影をして景さんに”実績”が出来たんで、ある程度の欠席は俺達の業界側が証明書出せばどうにかなるようになった。

ただまあそのせいで、景さんも休日に出席したりしないといけねえことも出てきたとか。

高校行く必要あんのかあんた？

まあそれは俺がなんか言うべきことじゃねえか。景さんが決めることだな。

ほうほう、なになに。

景さんがこれから帰るから、時間あったら弟妹を拾って連れ帰ってほしいと。

そうしたら晩飯奢ってくれると。

いい話だ、思わず即答したくなる。

しかしこんなお隣さんへの頼み事みてえなことを……お隣さんだったわ。

俺今の仕事のタスクどうなってたかな。

頭で覚えてるつもりだが、念のため手帳で確認確認。

よし。まあ余裕あるな。

10日かかる仕事や作業を技術革新などで1日で終わらせられるようにして、そこで「9日休もう」じゃなくて「10倍仕事できるな！」と考えてきたからこそ、人類文明は進歩してきた。

俺もそうだ。

他人の10倍速く仕事できる能力がありや、俺は10倍仕事する。

だが別にこのスタンスを徹底してるわけでもねえ。

仕事受けるペースを少し緩めたりとかの調整をすりや、他に色々できることはある。

夜風家のちみつこ達を拾ってくくくは難しくないな。

そんなこんなで、俺はスタジオ大黒天を訪れたのであった。

お、柘さん。ちびつこ達二人もいる……黒さんはまたいないか。

「あ、いいところだ。ちよつと意見聞いていいかな？」

「なんででしょうか？」

「けいちゃんのお仕事のことなんだけどね」

ほー。

固まったのか、仕事の話。

その書類か。んじゃちよつと拝見。

「おお、ネットプラのオリジナル時代劇ですか。よくこんない仕事取ってこれましたね」
「エキストラだけどねー」

『ネットプライム』。

ネット上で様々な動画を有料サービスとして配信しつつ、独自の「ここでしか見れない映画！」などのコンテンツの製作依頼と、独占配信を行っているとこだ。

ネットプライムは外国資本の配信サービス会社にあたるな。

個人的に、ネット中心の情報化社会になった現代の中じや、時流を完全に掴んだネットサービスの一つだと思ってる。

その収入は膨大だ。

月額である程度ここに金払つとけば、好きなだけ娯楽コンテンツを食れるようなもんだから、人が集まってくるのも当然なのかもしれん。

現代じや、一サイトだけでも独自コンテンツ作成とその宣伝に年間100億ドルを費

やしてることが発表されてるところもあるくらいだ。

金額が頭おかしい。

え、どうなってるのそれ。

自分で撮ってる映画も、力入れてるやつと力入れてないやつこそあるが、撮影現場に落としてくれる映像作成依頼料の平均値は、テレビの平均値を超えてるとかも言われるやべーやつら。

外資怖え。

2018年初めに少し話題になったが、時代劇の時代は終わりつつあるというより、新しい時代に突入しつつある。

地上波放送や映画で時代劇を見られる機会はどんどん減ってきた。

だが24時間365日時代劇を流し続ける『時代劇専門ch』などに視聴者が流れ、多くのチャンネル加入者を獲得することで、未だかなり多くのファンを保持してる。

流石時代劇。

歴史が長いだけあってしぶとく強え。

んで、こういうネット配信系に移りつつある時代劇がここ数年熱意を注いでんのが、ネット配信限定系の時代劇だ。

配信会社が金を出す。

製作が時代劇を撮る。

その配信サイト限定で有料配信する。

配信サイトが儲けを独占してがっばがっば。

おそらくだが、今回景さんが参加するっていう『大遅延！参勤交代』も、このウエーブを把握した目敏い人による企画だろうな。

……宮河さん宮河朋之。ドラマ版ライアーゲームのプロデューサーなどを努めた。また、配信界限で日本映画専門ch、時代劇専門chなどの立役者となった人物でもある。地上波から消えていく時代劇と、それを寂しく思う時代劇ファンの受け皿となった配信時代劇界のゴツドの一人。時代劇専門チャンネルで衛星放送内での視聴率トップ獲得など、実績はピカイチである。か？

ネット配信限定のオリジナル時代劇撮影っていうと宮河さんっぽいよな。

黒倉さん黒倉伸一郎プロデューサー。黒倉Pが「告知は出さないが2015年9月24日から日本でもアマゾンプライムビデオサービスが始まる」と噂を聞きつけた。それを聞きつけた黒倉Pがアマゾンに撮影を提案。「そんなドンピシャなタイトルがあるんだ」と驚いたアマゾンがマーケットデータを分析し、「仮面ライダーは売れる」と判断したため、アマゾンが予算を出し黒倉Pが作っていく『仮面ライダーアマゾンズ』の企画が成立した。のアマゾンズ仮面ライダーアマゾンズ。2016年4月配信開始。凄惨

な話に悲惨なストーリー、無残な死に胸を抉るような描写を合わせた近年トップクラスの大作。ところで放映前の児童誌で正義の味方のごとく書かれた「人間を襲うアマゾンと戦うヒーロー・千翼」っていつ登場するんですかね？の話を聞いて打診したのか？

さーてどうだろ。

確か時代劇撮影には一般募集以外のルートで入れられる俳優エキストラもあったな。撮影スケジュールと募集期間を見るに、監督とか迂回してこっから景さんを入れたか。

……黒さんの知り合いとか現場にいそうだ。

黒さんが悪巧みしたら撮影所から蹴り出しそうな人とか。勘だけど。

いかなな、監督を迂回してるからちと勘ぐっちゃう。

「撮影は……ワープステーション江戸ですね。

これ大丈夫ですか？

あそこ茨城のつくばみらい市ですよね？

この事務所からだど国道経由で片道一時間以上かかると思うんですが……」

「そうなんだよねえ」

ワープステーション江戸。

時代劇を何度か見たことのある人なら「あーこれ見たことある！」となる、江戸の街並みを再現したロケ施設だ。

今年明治・大正・昭和ゾーンが完成したため、撮影のバリエーションがぐーんと増え、今指折りにホットな撮影所だ。

景さん魅せるにはいい場所だと思うが、どうなんだそこは。

「電車使ったらもつとかかりますしね、移動。

撮影ぎつちりやつたら帰宅開始が夕方で、そこそこルイ君達一人にしてしまうような……

どうするんですか？ 俺が小学校まで迎えに行くとかそういう想定だったりしますか？」

「墨字さんはそこは心配しなくていいってさ」

「なぜに」

「『どうせそんなこと考える必要なくなるからだ』だって」
「……？」

「撮影が長引く前にさっさと撮影バックレて帰るつもりだったりして……」

あ、英二君は手が空いてたら極力撮影来いって、墨字さんが言ってた」
んな無茶な。

撮影の途中でバックレて帰るとかやったら業界で干されるルート一直線だぞ。

……んー、でもなあ。

適当に見えて計算尽くって時々やるしなあの人……また後で聞いてみるか。

小学校が終わる時間とかあの人の計算に入ってるんなら、俺に見えてない何かがあの人
の目には見えてるはずだ。

「呼んだー?」

景さんの弟君達の名前を呼んだからか、走り回っていた二人が飛びついてくる。

ぐええ。

子供の肘が首とみぞおちに入った。

「にいちちゃんまたウルトラ仮面のとこ連れてってー」

「また今度ね」

「おねーちゃんの言う事ならなんでも聞いてくれそうなのに、おとこってかってね」

「レイちゃん、覚えてたての言葉を使ったがるのは分かるけどやめようね」

元氣いいなあ子供達よ。

終さんがくすつと笑っている。

「懐かれたねえ」

「懐かれてしまいました……」

ここまで懐かれるとか想定もしてなかったわ。
俺の何がいいんだ？

あつちの製作職なのに女優って言っても通じるつちや通じる美人さんに抱きつけよ。
「おなかすいたー」

「すいたー」

そつか、腹減ったか。

「何か作りましょうか。柾さん、二人の相手をお願いします」

「はいはい」

そういや、夜風さんちに差し入れしようと思つて道中で買つてきた食材があつた。

ここはスタジオ大黒天事務所でしかねえが、簡単な調理くらいはできる。

と、いうか。

俺が普段持ち歩いてる仕事道具だけでも、拾った木に可燃性の溶剤とエンボスヒーター最初の話で英二が加工に使つていたもの。で火を着けて、未加工のステンレス板とかを加熱すりやちよつとした料理は作れるんだよな。

ちようどよく今日の俺のワークリュックの中には撮影用フライパンがある。

軽くて人を殴つても（それなりには）平気なやつだ。

ちやちやつと作ろう。

「わ、オムライス」

「生卵一気飲みができなくなったので、毎日オムライスにしてたらちよつと上手くなりました」

「ごめん、日本語で話してくれるかな」

日本語ですけど!?!

「もぐ、もぐ、けいちゃんに来てくれてからうちの事務所も経済状況改善しそうだよ」

美味そうに食べてくれる柘さんと向き合う俺は、ルイ君とレイちゃんの口元を拭いてやったりするので手一杯、柘さんの話に耳を傾けるのに精一杯だった。

「黒さんそんなに稼いでなかったんですか?」

「私が持つて来た仕事を気に食わないって断ったのもしよつちゆう。困るオブ困るだね」

「なんだか分かる気がします」

あれはそういう人だわ。

「だから私の給料とかも、ね……」

「黒山墨字なだけにブラック企業ですね」

「だれうまだよエージ君」

柘さんも大変だな。

「ブラックじゃないよ。」

墨字さんが仕事勝手に断ったら仕事も収入もないだけよ。ただの無色」

「無色じゃなくて実質無職じゃないですか……？」

「ぐ」

映画業界つて時々『誰も彼に仕事依頼しなくなったんで実質引退です』とか雑誌に掲載されたりするような、ひっそり死がある世界だからな……気を付けよう。

「そーれぐちやぐちや！」

「あー！ 俺が気合いを入れてルイ君に贈ったケチャップ製平等院鳳凰堂のオムライスがー！」

「ケチャップで何描いてんの君……」

うるせえ。

「無駄な所でも手の込んだことしちゃうのはエージ君の欠点かもね」

うつせ。

「そうだ、時代劇だけどけいちちゃんの服どうしよつか？

エージ君がけいちちゃんの専用の服とか作るなら、うちがお金出して依頼するけど」

「やめた方がいいと思います。エキストラ役は黒さんの要望だったんですよ？」

「うん」

「それなら、他の人と同じレンタルにしといた方がいいと思います。

エキストラを望んだということは、群衆に紛れる何かの演技……

いえ、正確な狙いは分かりませんが、群衆の演技をさせたいんだと思うんですよね」
「そうだね。それなら、他のエキストラと同じレンタル品の方がいいか」

「はい。統一感と群衆感を出すなら他のエキストラと同じところから借りるのが一番です」

俺が目立たせようと服を作りや目立ちすぎるし、目立たせないように意識するとそれはそれで一般人っぽくはない。

借り物の服を着てるエキストラ達の中に、一着だけ俺製の服混ぜるのはちよつとな。

少々目立つ人と少々目立たない人が混ざってるくらいが、エキストラとして理想的な塩梅……と言いたいところだが、こういうのは監督の趣味も影響するから一言には言えない。

「今回の仕事、目的としてはどのあたりになると思いますか？」

終さんに問うてみると、終さんは腕を組んで考え込む。

「墨字さんは、一回自分が監督する作品からけいちゃん離そうとしてるのかも」

「……あー」

「墨字さんが監督だと、その現場は墨字さんが自由にできるからね。」

けいちゃんの方に現場を合わせることができちゃう。

でも墨字さんが監督じゃないならけいちゃんやんが現場に合わせないといけない。

そんなこと考えてるんじゃないかな、なーんてちよつと思つた。個人的な予想だけだね」

「結構当たつてる気がします。俺も腑に落ちましたし」

なるほどなあ。

景さんの才能を考えると、さほど無茶とも思えねえ。

黒さんが監督しねえ作品にガンガン景さんを放り込んでいけば、景さんの成長の仕方もかなり多様性が出てくる……『黒さんの色に染まつた女優』じゃなくて、『黒さんの誘導で多彩な強みを持たされた女優』になるわけか。

この先、景さんの仕事で黒さんの監督作品じゃねえものが続いてたら、黒さんがその辺考えてる可能性は高いかもしれん。

「おかわり！」「おかわり！」

「はいはい」

とりあえず今は、このちみつこ達にオムライスでも作つてやろう。

撮影当日。

俺と柘さんは先に現地入りしていた。

ワープステーション江戸は大人でも一人400円で入れるが、一般人と業界関係者がきつちり分けられていて、事前の申請によって「撮影スタッフの分の料金は最初に計算して全員分まとめて支払い」って感じになることもある。

柘さんはエキストラの女優のマネージャーとして。

俺の場合は緊急の応援美術スタッフとしてここに入ってる扱いだな。

「エージ君はよく自分の仕事をここにねじ込めたね」

「佐々本修平ウルトラマン80（1980）の撮影で最高峰のアクションを見せた殺陣師。踊る大捜査線などのアクション指導も担当。近年の時代劇であれば、大人気テレビドラマのJIN―仁―（2009、2011）なども担当した。さんには以前お仕事でお世話になってましたからね。」

その恩返しをしたかったのも、ここの撮影の美術が緊急募集入れてたのも本当ですか
ら」

佐々本さん達の仕事の下働きに欠員が出たから、そこを俺が埋める。

俺が仕事の穴を埋めつつ、景さんが何かマズいことになったらサポートに行く。

そんな感じか。

黒さんが俺呼んだってことはその程度の塩梅の仕事を期待してる、と思いついてえところだが。

さて、景さんが今回するエキストラって仕事は何か。

エキストラには極端な例外を除けば二種類いる。

事務所にエキストラ登録された俳優が出るやつと、一般人から集めて使うやつだ。

どっちにしるエキストラってやつは、怪人から逃げる民衆、怪獣から逃げ惑う人々、江戸の街を歩くモブとかの群衆をやらされる。

ま、基本的な仕事だけ見れば、背景のモブなんで大差はねえ。

だが、終さんがマネージャーとして付いてるってことは当然、景さんは事務所から来る女優枠のエキストラになる。

こつちの場合はちゃんと給料が出る分、求められることも多い。

例えば、一般人のエキストラの中に混ぜられ、背景の中で名演技を見せて、全体の”逃げる演技のレベル”を引き上げたり。

密集して逃げる一般人エキストラが転ばないように、わざと集団の中でそこそこの程度の

速さで逃げることで、全体の速さを調節したり。

一般人のエキストラは俳優や監督に優しくしてもらえるが、俳優がやってるエキストラは下手を打つと「素人以下か出てけ！ 事務所に苦情入れてやる！」となる。

さて。

自分を殺せねえ景さんが、どこまでできるか。

『主役にしかなれない』景さんを、黒さんがどうやって背景の群衆に仕立てるか。

ちよつと楽しみになってきましたぜ。

「柘さん、飲み物買ってきました」

「あ、いいのにそういうの。でも、ありがとう」

二人で並んで建物によりかかり、ワープステーション江戸の街並みを見やる。

江戸、江戸、江戸。

どこからどう見ても江戸だ。

俺達が時代劇とかでよく見る江戸だ。

実は撮影上の都合で本物の江戸時代の江戸からはかけ離れてる街並みがあったりするが、時代劇はフィクションだ。許される。

だからここは江戸なんだ。

江戸だっつってんだろ！

正確な歴史考証をしてるやつがこのスタジオにケチつけてくることもあるが、ここは誰がなんと言おうと江戸なんだ。

素晴らしい作品を生み出してきた江戸なんだ。

日本に住んでる人が江戸をイメージするところいう時代劇セットが頭に浮かぶのがほとんどなんだから、もうこれが真実の江戸でいいよな。

「柘さんがいてこそですよね、今回の撮影は」

「ん？」

「俺や黒さんじゃ、景さんを時代劇用の着物に着替えさせるのはアウトですから。

女性で、昔ながらの着物を着せられる人って、最近凄く減ってますし。

景さんも女性ですから、事務所に同じ女性の柘さんがいて安心して部分あると思いますよ」

「やだなーもう、着替えしかさせる予定ないのに。私あんまり働く予定ないんだよ、今回」

重要なことだつて。

女優の不安を取り除ける女性マネジメント担当つてのは大切なもんなんだぞ。

「あ、梅坂桃李侍戦隊シンケンジャー（2009）の主人公、殿こと志葉丈瑠でデビューしたイケメン俳優。2018年に時代劇撮影に初挑戦していたことが判明。彼が頼り

甲斐のある自信満々な男、罪悪感に蝕まれる男、全てを失った虚無的な男を段階に分けて演じた侍戦隊シンケンジャーは、スーパー戦隊シリーズ最高傑作候補だつてルシエドが言つてた。さん、左藤健仮面ライダー電王（2007）で連続ドラマ初主演・映画初挑戦・映画初主演のイケメン俳優。時代劇経験も多い。高い演技力、演じ分け、そして鍛え上げたアクション能力などが売り。電王の野上良太郎、るろうに剣心の緋村剣心、ROOKIESの岡田優也などを演じたのが有名か。アキラのような高い身体能力と、アラヤのような（ある意味夜風のような）深くに潜り役を演じ分ける能力を持つため、ある意味アキラの理想的な完成形の一つでもある。さんですね。現地入りみたいです」

「え、どこどこ？」

「あそこですあそこ」

「口で言うだけじゃなくて指でも指してエージ君……あ、いたいた！ 逆るイケメン力！」

「景さんが出る作品のキャストっぽいですね」

「へー、あの二人が出てるのかあ」

お、通行制限が始まった。

ワープステーション江戸は、大人一般人が小学生お小遣いレベルの入場料で入れるよ
うなところだが、撮影が開始されると入場禁止や一部通行止めになる。

一般人は排他され、本格的に撮影が始まるってことだ。

「あ、原田原田智生。朝風英二と同タイプの、祖父のゴジラやウルトラマンの撮影について行き、スタッフに家族のように愛され育てられた男。『海外で大成功し、国際映画祭で入賞し、60年近く現役の、英二と同タイプの男』。世界的な評価も高く、怪獣造型・映画監督・アニメーション制作・特殊メイクと仕事の幅は多種多様。担当作に平成ガメラ、仮面ライダー555、パラダイスロスト、ウルトラマンギンガ、ウルトラマンメビウスなど。さんですよ原田さん」

「色々な来てるね。あ、あれは……見覚えあるんだけど、誰だっけ」

「福木2018年現在、75歳現役の時代劇界の怪物の一人。『殺され専門の俳優』という、きらびやかな役を求める芸能界では異端とも言える極地を目指した『殺されの達人』。彼の尋常でない身体能力と技で作られる死の演技を見た者は本当に死んだかと錯覚し、トーム・クルーズが「定年で辞めたら是非ハリウッドに来てくれ」と60歳のこの人に言ったという、天才が全ての才能を殺され役に注いだ傑物。時代劇、ヤクザ物、刑事物と幅広い分野で殺され続け、とうとう2011年の映画『レッツゴー仮面ライダー』では、『敵幹部怪人』という最高の殺され役を演じることとなった。余談だが、『超高速！参勤交代 リターンズ』ではスタッフ一覧にこそ名前が載っていないものの、ちゃんと撮影に協力している。さんですよ。ほら、『五万回切られた男』の異名で呼ばれる名演

者です」

「あ、思い出した！　ありがとね、エージ君」

「というか何だこのメンツは。震えてきたぞ。」

外資からたらふく金貰ったプロデューサーが本気で撮影してる気配を感じられる……あー、臨時応援スタッフだけで俺の仕事が終わんの悔しいなこれ！

「さて、どうなるものでしょうか」

「けいちゃんのこと？」

「時代劇って、実はメソッド演技の対極なんですよね」

「そう、そこが難しい。」

「現代の街では皆、大なり小なりメソッド演技してるようなものなんですよ。」

「だって現代の街っていうのは、皆住んでる場所ですから。」

「皆が街で生きてきた思い出を持っていて、それを思い出しながら、自然に街で生きてる」

「あるよね、現代の街での振る舞いの癖が付いちちゃって、時代劇で違和感ある人」

「そうです。」

「自分の過去の記憶に引っ張られて変になる、って意味ではメソッド演技の弊害と同じです。」

現代の街で生きてた俳優さんは、現代の街に生きてる人間は自然に演じられます。

現代の街に生きてた記憶と体験を今の自分に引つ張つてくればいいからです。

でも時代劇はそうはいきません。

誰も江戸時代に生きてた経験なんてないですから、参考にできる記憶と経験がないんですね」

そう、そこが、時代劇を演じるにあたつて厄介なところだ。

「となると、必要なのは知識に技量。

江戸時代にはどんな街があつたか？

どんな人が住んでいたのか？

そこにはいかなる常識があつたのか？

そういうのを頭の中に入れて、意識的に振る舞いを考えないといけないわけですが……」

「けいちゃんは……うん」

「基本、昔の自分を引つ張つてくるのが彼女ですから。

江戸時代に生きてた経験が無い彼女は絶対に不協和音を起こします。

時代劇ほど『この時代に生まれ育つた”自分”を使ってはいけない』ドラマもないですね」

「大変だよ。江戸時代より後に生まれた食べ物も、道具も、概念とかも話しちゃいけないし」

「ギャグとか相当大変だと思いますよ。」

現代のワードも中々使えませんし……

かといって昔の言葉遣いや専門用語を多用すると、若い人や新規さん置いてけぼりですし」

まあそういうの全く気にしてねえ時代劇作家とかもいるっちゃいるけどな。

「けいちゃん大丈夫かなあ」

「景さんの今のメソッド演技だと詰みですけど、黒さんがどう出るかですね」

「けいちゃんこのまま芸幅広がらないと、こういう難しい状況増えちゃうんじゃない？」
それがなー。

間違はなく天才なんだが、間違はなく使い勝手が悪い。

黒さんがその解決を狙ってんなら、景さんが過去の記憶のどこを探っても近いものしか見つからねえであろう、『江戸時代の江戸の世界』を使うのは妙案かもしれん。

「髪に虫ついてますよ柊さん、ちよつと動かないでください」

「え、ちよつ、取って取って！ ……ありがと。虫多くない？ ここ」

「近辺に緑が多いですからね、ここ」

問題は、黒さんの妙案を俺達何も知らねえってことなんだが。

「景さんって、他には狙ってギャグとかもできなさそうですよね」

「あー、分かる。墨字さんがそもそもギャグやらせようとするのか分かんないけど」

ギャグは勢い型でも計算型でも景さんには苦手だと思う。多分。

「ただ、素の景さんはかなり面白いと思うんです」

「あー、分かる！ 真面目な役者さんがバラエティに出て天然キャラで面白いやつ！」

「あれいいですよ。俺ああいうの好きです。」

真面目な顔で天然なことやられるとついクスッとしちやうんですよね」

景さんはお笑い芸人にはあんま向いてねえ気がするが、売れてからバラエティーで年

食ったオッサンのベテランお笑い芸人に囲まれてトークすると、絶対面白い。

いや本気でそう思うんだって。

「おはようございます」

「ん？ あれ、山森さん。この撮影に来てたんですか」

「はい。大名行列の前を横切って殺される役ですけど」

「目立つ役ですよ。子役の誰もが任せられるとは限らない役です。」

流石は山森さんですね。俺も裏方でお手伝いしますが、頑張ってください」

「はい！ それで、その……」

おずおずと、山森さんが一歩こっちに近寄ってくる。

なんだ。聞きづらいことでも聞きたいのか。

何でも答えてやんぞ。

「その人のこと、好きなんですか？」

「え？」

「今そこのお姉さんと話してた人です。朝風さんの表情が、その、特別に見えて」

景さんのことか。

邪推されてんのかこれ？

「え……んー、それはどういう意味ですか？ 山森さん」

「カマトトぶらないでください、朝風さん」

「カマトト……!?!」

「控え目に言つて猛烈にキスしたい人なのか聞いてるんです！」

「それで控え目!?!」

「朝風さんの、そんな惚れ込んだみたいな表情……」

百城さんより演技が上手い人でもないよ、アキラさんが許さないと怒ります！」

「ハードルが高い！ そして途方もなく他人事!?!」

俺の中で突如記憶が甦る！

それは友との記憶。

山森さんの台詞が、俺の中の友達と話した時の記憶を呼び覚まし、俺の脳内で脳内アキラ君が喋り出す。

——朝風君、知ってる？ 子供って純粹だけど実は皆大人なんだよ

イケメンの喋りが、脳内で再生される。

——それはそれとして君、敬語使ってるから周りに大人に見られてるだけで子供っぽいよね

アキラ君の台詞の記憶が……

——というか、君は味覚がちよつと子供っぽい

うるせえぞ脳内アキラ！

「山森さんが思ってるようなことはありませんよ」

「本当ですか……？」

「そうです。確かに、俺は夜風景さんが好きですが」

ガタン、と音がした。

何かを踏み外すような音。

それを聞いて振り返った俺が見たものは、口を抑えてる黒さんと、衝撃を受けた表情の景さんであった。

あつ、やべつ。

「そんな……英二くんが、私のことを好きだったなんて……」

「景さん、そこで思考ストップ、ストップです。今から俺が弁明します」

うわつ面倒臭えことになりやがった。

「ごめんなさい英二くん。私、役者に集中したいの」

「あつ、別に恋愛的に愛の告白したわけでもないのにフラれたみたいで凄く傷付く！」

ちよつと胸が痛い！

「ふられたー」

「ふられちゃいましたね」

佟イ！ 山森イ！

——朝風君、聞いてくれ。君が時々特撮作品を早口で長々とオススメしてくるの気

持ち悪い

脳内アキラア！

いや待てなんで初対面の佟さんと歌音ちゃんの息合ってたんだよ!?

そこはおかしいだろ！

「本当にごめんなさい英二くん。でもこれからもいいお友達でいてね」

「あ、俺景さんのいい友達の枠に入れてもらえたんですか？」

ありがとうございます。嬉しいです。いい友達ってこう、響きがとてもいいですよ
ね」

「……けいちゃんとエージ君の会話聞いていると時々脳味噌溶けそうだよ……」
柊さん、なんで……?」

「おいエージ」

「なんでしよう、黒さん」

「そうだな。俺は映画監督として、一生俺が使わなさそうな台詞で言ってやる」
なんだよ?」

「草生える」

ぶっ殺すぞ。

風無くて風、朝無くて夜

弁明完了。

解説完了。

全ての誤解は粉碎された。

俺は何故仕事の外側でこんな労力を……？

とりあえず挨拶して回る。

俺は数回こっちの仕事に来て多分サヨナラだと思うが、そんな理由で挨拶省くのは失

礼だし、なんか個人的に嫌だ。

挨拶と礼儀は欠かさないと損することはねえ。

金も時間も大してかからねえし、かかるのは労力だけだ。

とりあえず欠かしちゃならねえのは、主演達メイン級の俳優への挨拶と監督への挨拶
だな。

「それじゃよろしく頼むよ朝風君」

「分かりました。任せてください、監督」

「君が仕事場にいる内に作りが怪しい道具は全部任せておきたい」

了解だぜ。

時代劇ですっげー金食う分野がある。

物作り。

物作りだ。

現代では「え？ 主人公が水飲むシーン？ 100均の紙コップでいいじゃん」で済

むことが、時代劇だと「それっぽい時代を感じさせる物を用意しろ！」になる。

こういう事態があちこちに発生すんだ。

時代劇の視聴率は年々厳しくなってるのに！

仮面ライダーとかみたいに売れる玩具で金回収もできねえのに！

そんじょそこらのドラマよかよっほど金がかかる！

そして予算は減らされる。

死ねって言ってるのかクソが。

俺は時代劇が特撮のアクション分野に良い影響与えてるの知ってっから、残ってほしい。
い。

っーかそういうの抜きにしても残ってほしいわ。

もし時代劇が消えたら寂しい。

俺は普段安物や既存のもの組み合わせたり、やつすい素材を技で補ってセット組んだ

り大道具作ったりしてるが、高いセットってのは余裕で一個五千万を超える。

で、今のエロHKの事業計画とかでの時代劇の制作費の最低基準は確か『一千万出さない』（990万）だったはずだ。

あ、一作品でな。

だから10話構成だと1話に使えるのが99万。

ちなみに平成仮面ライダーが1話1500万だ。

……ネトプラが外資の金をぶちこんでくれたからか、良い俳優一気に呼んだプロデューサーの気持ちが悪くくらいに分かる。

普通のドラマで名が知れた俳優をゲストに呼ぶ相場が20万だからな。

五人呼んだらパンクすつぞ、ハッハッハ笑えねー!

「地上波の時代劇は売れないから金は出さんぞ」って声が聞こえる。

うるせえ、じゃあ道具とか安く仕上げりゃいいだろ……と、俺は思うが、やっぱ時代劇に沿った物作りは金かかるぞ、つてとこに話に戻って来るわけだ。

「確かに破損中の物のリスト、受け取りました。

俺は合間を見て直しておきます。他の撮影にガンガン使い回してください」

「礼を言おう。最近はスポンサーも減り気味だ、使えるものは使い回したい」

「配信サイトという最高のスポンサーが登場した今の時代はマシなのかもしれない

ね」

現代ドラマは良いよなあ。

「あ、これうちの新品だからドラマの中で目立つように出して。その代わり制作費出すから」「わーうちのドラマで商品宣伝したらスポンサーになつてくれるってよー！」みたいなスポンサー確保ができるんだからさ。

時代劇はスポンサーが見つからねえ地獄だぜ。

江戸時代に清涼飲料水もメーカーマークが付いたシャツもねえからな！

まあ分かるぜ。

百城さんがドラマ内で食品美味そうに食ってたりしてたら俺は間違いなく買うし。

それならスポンサーはそっちに金出すよなー。

「監督、俺は少し聞いておかないといかんことが……おお、二世君じゃないか」

「お久しぶりです、高田さん」

お、高田高二郎さんだ。

ミフネ倶楽部所属の時代劇俳優だな。

”ミフネ”と聞くと50年くらい演劇や映画の世界に触れてなかった人でも「んっ？」となる。

その反応は正解だ。

高田さんの所属事務所はかつての『ミフネ』の流れを組んでる。かつて世界のミフネと呼ばれた男がいた。

世界規模で活躍し、世界規模で多くの監督や俳優に影響を与えた大偉人だ。んで、この世界のミフネの影響を受けた人はめっちゃ多かった。

日本人なら白澤明、闇崎駿、低倉健とか。

外国の人ならジョーイ・ルーカス、ステイヴン・スピルバーグ、ジョーイ・フォスター、アラソ・ドロン、クリンチ・イーストウッド、マツハ・テイロン、ハリソン・フォード、ブルーズ・リーとか。

つーか国内外に影響を受けた人が多すぎんだよ！

全列挙すんの無理なレベルだぞ！

フランスでミフネがボートでウキウキで遊んでいたら、近くを通ったフランス客船の客が気付いて、「ミフネー！ミフネー！」の大合唱が始まったとかの逸話で度肝抜かれるわ。

ミフネの娘が「スター・ウォーズのオビワン役とダース・ベイダー役のオフアーが父に来てたんです」とか証言してるレベルの人だった。

目眩がするレベルだな。

そんな世界のミフネさんが立てた名プロダクションがあつて、『東京で唯一時代劇が

撮れる撮影所』とかも建設したんだが、内ゲバが発生。

あいつのせいだー、あいつの不義理だ、あいつの裏切りだ、とか色々あつて大崩壊。いや、まあ、なんつーか。

凄すぎる天才のおかげで成立した組織は、その天才が死んだら崩壊する運命なのか？
”ミフネ”なんつー恐れ多い名前を掲げてる高田さんの事務所は、その流れを汲んでる。

どのくらい汲んでるのは正直分からん。

そのせいなのか知らんが、高田さんはめっちゃ正統派の時代劇俳優だ。

剣を持つても演技上手いが、剣を持ってない時の演技も上手い。

今年で御年40のオツサンだが、その年齢相応の実力がある一人だ。

真面目な仕事が期待できるぜ。

「二世君、ところで前に事務所です話の途中だった『江戸に現れたキングコング』の話なんだが」

……おい！

俺今、内心で真面目な仕事期待してたんだが!?

「江戸に現れたキングコング1938年公開映画。発想自体が頭煮えている。がどうかしましたか？」

「いや、前に君が映画の名前だけ出して帰ったからずっと気になってたんだが!」

「そ、そんなにですか!」

「時代劇家の前でこんなパワーのある名前出して解説せず帰る君もどうかと思うんだが!」

江戸のセットの中で、江戸時代の撮影準備をする中、江戸に現れたキングゴングの話をする俺達はけっこうキチガイに見えると思う。

「江戸をキングゴングが襲う映画です。」

それ以上の説明はありません。感じて理解してください。俺にはそうとしか言えませんが!」

「……分かんない! 何故キングゴングが江戸に……!?!」

「高田さん、朝風君。今回監督の俺は江戸にキングゴングを出すつもりはないぞ!」

「分かっている!」

「知ってますよ!?!」

まー1938年公開の映画ってことは、日本が戦争で国家総動員法だ! とかやってた頃だったもんな、確か。

なら江戸をキングゴングが襲うくらいは許してくれ。時代なんだ。

1938年は……アメリカのSFドラマで「火星人が攻めてきたぞー!」って、本物

のニュースっぽく流したら、120万人くらいが信じて大パニックになったのもこの年だな。

昔のドラマ撮ってた人とか相当楽しかったんじゃないかなアレ。

毛もつさもさの江戸を襲ったキングゴングを思いつつ、俺は高田さんが頭に被っている『ちよんまげに見せるためのハゲカツラ』を見た。

……時代劇の物作りは金を食う。

具体的に言う和高田このひとさんが被ってるちよんまげに見せるツラの類とか、撮影に使うツラは種類によっては20万円くらいかかったりする。

高田さんのこのハゲヅラだと10万か15万くらいか。

……たつげえと俺は思うんだけどさ！

個々人によって頭蓋骨結構形違うんだよ！

それ込みで、頭髮のポリウム計算して、頭に完全フィットするハゲヅラ作るのは……割と金と時間食うんだよな……手抜くとすぐハゲヅラがカツラだとすぐ分かっちゃうし。

ハゲは悲しい。

ハゲには悲しみしかねえ。

ちよんまげの周りのハゲには、いつだって金欠現場の悲しみが詰まってやがる。

「こういう配信サイドから制作費が改善されるパターンがあるといいですよね。」

この予算改善に続いて、撮影現場のバリエーションも解決するといいますが「最近では長野の合戦場長野県富士見町の原野のこと。12万6000平方mの広大なフィールドで、関ヶ原の合戦撮影などに使われる。時代劇の印象的な平野合戦と言えばここ。10年以上の歴史、東京から近い、法的に緩い、馬が借りやすい、大型駐車スペースがある……等々、多くの利点を持っていたが、様々な理由からメガソーラー発電所設置のための土地として使われることとなった。2018年よりここは撮影に使えなくなったということである。もなくなるみたいなた話もあるからな」

「ああ……俺も聞きました。また撮影の場所が減るみたいです」

高田さんが腕を組み、沈痛な面持ちとなる。

ちよつと前に湯島さんと話したが、時代劇の撮影に使える場所つてのは限られてやがる。

街が見えたらアウト、遠くに鉄塔が見えてもアウトだ。

だから現代を舞台にしてる仮面ライダーとかと比べて、撮影に使える場所の数は1／1000以下ってレベルだろう。

景さんが新時代の到来を感じさせる新たな波なら。

時代劇は旧時代の遺物として取り残される運命に必死で抗う、旧時代の象徴みたいな

もんか。

「だがほら、俺はよく知らんが、宮河さんがSNSで色々やってるじゃないか」

「高田さんがおっしやってるのは、SNSのブランディングのことでしょうか？」

「ああ、よく分からんがそれかもな」

現代の仮面ライダーやウルトラマンで、俺がクツソ強いと思ってるもんが一つある。

それが、放映直後のツイッターだ。

ツイッターでもなんでもいいが、SNSやってる人なら結構知ってるだろうが、日曜

朝特撮番組とかは、放送中と放送直後に実況書き込み・感想書き込みがドバっと増える。

そりやもうドバっと。

洪水かなんかじゃねえかと思うレベルだ。

んで、その中で秀逸なツイートとかはバズるし、知り合いと互いの感想について語り

合えるし、赤の他人の感想にピンと来たらフォローしたりするわけだ。

「今回のジオウ仮面ライダージオウ。先にデカい過去ライダー客演の情報を出し、続けて更にデカい過去ライダー客演の情報を出すことで、余すことなく衝撃を伝え視聴者を粉砕する、次回予告左之助の二重の極みを得意とする。の次回予告やべーぞ！」とか皆が揃って言っていると、自分の興奮と周りの人の興奮が混ざってもう何がなんだか分からなくなってきた、そりやもう盛り上がるわけだ。

お祭りの熱狂みたいなものか？

まあそういう、「熱い一体感の楽しさ」みたいなのが頻繁に楽しめるわけだ。

こいつはもう完全にSNSの専売特許だな。

仮面ライダーとかウルトラマンは近年、完全にこいつを強みとして使いこなしてやがる。

特定の時間帯のSNS実況の熱さはもう異常なレベルだ。

で、時代劇を配信っていうフィールドに持つていつて生存させた宮河朋之さんは、これに目をつけたわけだ。

まず、60歳以上の定年退職とかした団塊世代、スマホを使いこなす爺ちゃん達である『プレミアムエイジ』を中心に照準を合わせた。

んでオリジナルの時代劇を制作し、平日と休日の朝十時から劇場公開して、「劇場で見た時代劇の感想をすぐSNSで言い合える」環境を整えた。

『映画公開直後の感想を言い合う空気』を作ろうとしたわけだな。

今時のじーさま達は普通にスマホもSNSも使いこなす。

『一体感』で時代劇を盛り上げようと、そう考えてるってわけだ。

今のSNSは良い意味でも悪い意味でもパワーがある。

宮河さんは、昔ながらの金にあかせた絨毯爆撃みたいな宣伝よか、こういうSNSで

の一体感の方が強くなったって言ってたな。

景さんとはもかく、黒さんはこの辺を確実に分かっている。

大手の宣伝と広告だけが時代を作る時代は終わったんだ。

……景さんの演技を見てきて、俺も確信した。

景さんが表舞台に出始めたら、スターズの権力じゃ止められねえ。

今の時代、口コミが評価を広げるこの時代は——『本物』に有利な時代だ。

「まだまだ時代劇は終わらんさ。

いずれはまた地上波で復権することもあるかもしれない」

「あるかもしれない。

仮面ライダーやウルトラマンだって、何度も『もう終わり』って言われてきたんです。

でも、終わりませんでした。

くじけませんでした。諦めませんでした。

”俺が好きなのを終わらせてたまるか”って思う人がいれば、可能性は0にはなり

ません」

「……ああ」

「やってやりましょう。俺は所詮短期間の応援ですが、全力を尽くします」

「頼むぞ」

時代劇の世界にだって、いつか棘谷ウルトラマンを生み出した棘谷プロダクションは疲弊の極みにあった。何故なら、皆が予算額を見ないでドバドバ金を使い、映像を作るたびに赤字を出しまくっていたからだ！ 平成の時代でもテレビ局から数百万の予算を貰うも、その範囲で作らず、一話平均四千万で撮影。もちろん大赤字。後に玩具販売などである程度赤字は減らせたものの、基本的に撮れば撮るほど赤字だった。昭和の時代は予定話数の折返し地点で予算が尽きるのも日常茶飯事だったという。結果、どっぷり勘定の連続でウルトラマンの放映継続体勢は完全に破綻した。のゼロウルトラマンゼロ。地上波から消えたウルトラマンの人気を支えた、二元劇場版限定ウルトラマン。「俺はゼロ！ ウルトランマンゼロ！ セブンの息子だ！」が印象的。特に中国を始めとした海外圏で人気が高く、最近新造されるウルトラセブンのデザインなどは「ゼロに寄せて」と注文されているという疑惑がある。因果が逆転してない!? かギンガウルトラマンギンガ。地上波にウルトラマンを復活させた今の世代の始点の一人。ギンガ世代から『最初に番組全体の予算を決め、そこから一話ごとに使う予算を計算する』ということができる人が指揮に入った。棘谷の革命である。お、遅い……みたいなのが来るかもしれないねえ。

「頑張ってる人を見てると、”まだまだ終わらねえよな”って思える。さて。」

道具の手入れでもしておくか。

時代劇に使われる陣笠は安けりやビニール製、プラスチック製が多い。

こいつはプラスチック製だな。

表面をいい感じに本物に見えるよう表面処理しておこう。

高田さんが斬り殺される役の歌音ちゃんを切るシーンで、いい感じに画面の中で存在感を発してくれりゃいい。

刀は……お、ジュラルミンだ。

時代劇の刀つてのは、昔は竹を削って表面に卵白塗って、その上に銀箔を貼って作った。

だからこいつを、竹光^{たけみつ}って呼んだんだな。

だが最近で竹光^{たけみつ}って言うと、竹の代わりに削った樫を使い、銀箔の代わりにアルミを貼ったもんのことを言う。

安く、そこそこ丈夫で、軽いのでひよろい俳優にも使える。

貧乏時代劇にとっちゃ手放せねえ模造刀^{たけみつ}ってわけだな、竹光は。

こいつとは対照的に、割と高くて、質感と多少の重量感を感じられんのがジュラルミン刀だ。

60cmくらいの長さでも200gちよいってとこなんで、取り回しがしやすい。

高田さんレベルのベテラン役者なら、こいつを使わせてもらってんのも納得だな。

……今日の撮影が終わったら、一部の刀持って帰らせてもらって、俺の事務所でクロムメッキ仕上げとかしてみるか？

あれ人気高えんだよなあ。

とーけんらんぶ？ 刀剣乱舞のこと。刀がイケメン男に擬人化するお話。爆発的に売れたこの作品の影響で、時代劇演劇系の人達が御用達にしていた店のいくつかで商品が枯渇した。だっけか？

あれで刀人気が高まって、時代劇の方に刀提供してる店とかがホクホクになった時、クロムメッキ仕上げを人気高えものの一つに挙げてた覚えがある。

ん？ この袴、折り目が強いな。

どういう意図でこうなってんだこれ。

ちよつと誰かに聞き……って、打ち合わせやってねえのが周りに歌音ちゃんしかいねえ。

「山森さん、ちよつといいですか？」

「はい、なんででしょうか？」

「この袴、この撮影用に用意されたやつなんだと思うけど、これ何ですか？」

「あ、それ、監督の要望だったと思います。」

明神阿良也さん、だったかな……

舞台演劇の方で、折り目を強調した袴を着てる人がいて。

でも、その役者さんの演技がその折り目の印象の強さにも負けていなくて。

役者の演技と高め合う”目立つ袴”を、監督さんが使ってみたいと思ったそうなんです」

「……ん？ んん？」

「私はそれを見てないんですけど、その袴を作った人って、たぶん……」
……。

世間ってやつは……割と狭いな……うん。

「あ。山森さん、もしかして……」

「ごめんなさい。勝手に朝風さんの袴作りのこと話してしまつて」

「いいんですよ。気にしないでください」

そういうや、あの時あの袴を作つてたのを山森さんにも見られてたか。

世間ってやつは狭えなあ。

俺が滑り込みでここの仕事に入れた理由、そういうところにもあつたか。

仕事色々やつてると、意外なところで繋がつて困る。

まさか袴を使う時代劇みたいな撮影で山森さんと仕事するとか思つてなかつたもん

な。

「10分後にテスト開始します！」

エキストラの皆さんはお手洗いに今の内に行ってくださいーい！

セット準備も再確認をお願いしますー！ 監督、ちよつとあそこの……」

撮影開始前の呼びかけが始まった。

ぼちぼち本番だな。

子役の歌音ちゃんも気合が入り始めてる。

「応援してます、山森さん」

「み、見ててくださいー！ 立派に死んで見せますー！」

「いえ、怪我しないように気を付けてくださいね」

今回最初に撮影するカットの流れはこうだ。

女の子（山森さん）が蹴鞠を追って、大名行列の前を横切る。

その罪で女の子は武士（高田さん）に切られる。

ワンカットだが印象的なシーンを組み立てたいところだな。

景さんは背景でそれを見ている群衆の一人という役どころになる。

エキストラでよく見る演技だと、驚きの顔、悲しみの顔、無力感、嫌悪感、憤り、目を逸らすとかがベターなところか。

背景は背景らしくなきやいけねえ。

エキストラがここで笑つてたり、ブーツとしてたり、バカにした顔してたりしちやアウトだ。

何せ、被害者のキャストイングが小さな女の子だからな。

監督の意図は、視聴者に残酷さや憤りを感じさせるところにある。

視聴者に与える印象は、統一しておかなきゃならねえ。

ん？　ここ演出だと、歌音ちゃん地面に倒れんのか。

地面は……まだちよつと石があるな。

地面を見つめて、撮影開始までちまちまと石を拾っていく。

特撮の基本だ。

特撮で爆発物を使う時、爆発物の周りの地面に小さな石とかがあると、爆発で飛んだ石が目当たって失明する可能性がある。

特撮で敵に吹っ飛ばされた主人公が路面を転がるシーンで、路面に石があると俳優が想定外に怪我をしちまう。

だから小石拾いは基本なのさ。

爪切りで切った爪くらいのサイズの石でも、人の肌や目は切れる。

小石拾いは地味で効果そのものは小さいが、俳優が怪我をする可能性を少しずつでも

削れる。

だからちまちまやっていく。

幸い俺は多少手先が器用で速い。

山森さんが転ぶ可能性がある範囲の小石を、ひよいひよいと集めるのに時間はかからん。

そうしていたら、誰かが俺の横で同じことをし始めた。

「景さん？」

「私も手伝うわ」

「いえ、景さんは本番まで休んでて……」

「気にしないで。やりたいと思ったからやるだけだから」

景さんは江戸時代の雰囲気に合わせて、長い髪を上げて纏めていた。

江戸の町人らしい袖まくりをした着物が、『気の強い美人』って印象を受ける。

髪が多いから上げて纏めるとカツラが被れないんだろうな。

だけど服装のバランスがいい感じで、ちゃんと背景の町人達に溶け込んで見える。

つか、面白いな景さんの髪。

綺麗だし長いし、いじりがいがありそうだ。

何やつても美人で綺麗に見えるだろうが、あれこれ魅せ方を考えてみてえ。

「撮影頑張ってください、景さん」

「私、立ってるだけらしいけど……?」

「……真面目にやればなんだって役者の仕事には変わりないですし、応援してます」

エキストラに「頑張つて」つて言うのは確かに何か違うな。

「皆さん良いですかー!」

あ、エキストラへの説明が始まった。

「景さん、早く他の人に混ざってください。……あと、手伝ってくれてありがとうございます」

「ます」

「どういたしました」

「場面設定は見ての通り江戸時代の街の往来です!」

一人の少女が蹴鞠をおいかけ、つい大名行列を横切り――」

行つたな景さん。

あ、あそこにいるのは黒さんと柊さん。

「おはようございます、黒さん」

「ん? エージか」

「『ん? エージか』じゃないですよ。さつきからあくせく働いてたでしょ」

「悪い、見てなかったわ」

「もー」

いいんだよ終さん。

そういう人だつて俺達分かつてんじやん。

あ、そうだ。

「終さん、黒さんは景さんに何か指示出してましたか？」

「え？ ……言つてないかな。有象無象の一人の役やれつて言つてたくらいでん？」

「あいつが失敗でもしたら『ちゃんと町人Aやれ』とでも言うさ」

……ん？

「黒さん、『目立たない町人Aやれ』つて言うつもりないんですか？」

その時、黒さんが俺を見る目が、いつものように『遊べる玩具を見る子供の目』に変わった。

『江戸時代の町人A』やりやいい。俺からすりやそれで十分だ」

嫌な予感がしてきたな。

「エージ、分かつてるな？ お前が言いたいのはそのうちだろ？」

「……何がですか」

「エキストラは目立たねえのが仕事だ。」

背景が目立つたら意味がねえ。最悪でも役者を引き立てなきゃカスだ」
ああ、そうだな。

そいつは俺が巖爺ちゃんのとこの空背景描いてた時も強く意識してたことだ。
「だから俺は、俺が監督の映画ならエキストラは目立たせねえよ。」

俺の映画でそんな勝手させたらなー、俺はクソ腹立つだろうからなー！」
嫌な予感が高まってきた！

「撮影のどこかにはいるんで、何かあったら俺に連絡お願いします、柊さん！」
「あ、うん」

俺はスタツフサイドの方に戻るため、人の合間をかき分けて動き始める。

「なあ……あの男……どっかで見たことね？」

「あ？ そりや同業だしどっかで見てるだら」

「いやあんな柄悪そうなのいたら忘れねえよ。そうじゃなくてなんか別のところで」
黒さんを見たことのある人がぼちぼち反応し始めた。

日本じゃ無名つつつても、過去の入賞ニュースまでなかったわけじゃねえ。
知ってるやつは知ってる。

いや、今は余計なこと気に気回してねえでいざという時フォローできる所に早く行か
えと。

「柗。よく見てろ、面白いもん拝めるから」

黒さんの声が聞こえる。あ、駄目だこれ。

「え？」

柗さんの声が聞こえる。駄目だ間に合わん。

撮影現場の緊張が高まっていく。

日常の空気から、撮影の空気に。

撮影テスト開始前のカウントが始まって、殺される役の歌音ちゃんと、殺す側の高田さんが役に入っていく。

カメラが回され、合図のカチンコが構えられる。

「ではテスト、よーい」

カチン、と音が鳴り。

移動中の俺の目が、景さんの目を捉えた。

その時の俺には不思議と、何故か、景さんの心情の動きが理解できた。

景さんの心情が役に入っていく。

そして、『ズレ』ていく。

メソッド演技……過去の自分をリプレイする彼女の演技法が、夜風景の内側から『最も妥当な記憶』を引きずり出していく。

江戸の町人という設定から、決定的に景さんをズレさせていく。

”小さな女の子”の存在が、景さんの中から、妹を愛する姉の記憶を蘇らせる。演技法が強制的に小さな女の子を『妹のレイ』と認識させる。

役に入れば入るだけ、景さんが普段持つている意識が、認識が、常識が、頭の中から消える。

そうして、”夜風景”が消えて、”作られた町人の役”がその体を支配した時。

景さんは、高田さんに飛び蹴りをかまし、地面を転がしていた。

「大丈夫?」

「――」。はい……でも、私、殺される役……」

「?」

「うわああん!」

ビックリしすぎて泣き出す山森さん、地面に転がる高田さん、唾然とするスタッフ、はつとして正気に戻る景さん。

江戸に、大暴れ怪獣キングゴジラが襲来した。

ウオアー! 頑張れって言った俺のせい!?

案の定というか、景さんはやらかしてしまった。

おめーよー、おめーよー。

おめー本当によー……まあ微塵も予想してなかったってわけじゃねえけどよ。

景さんは過去の自分を今の自分に引き出し、演技する。

だから、なれねえ。

江戸時代の人間に本当の意味でなりきることができねえ。

ただ、なんつーか、俺はやっぱあの人が結構好きだ。

景さんは小さな女の子を見捨てなかった。

人を殺そうとしてる人間、人を殺す刃物を持った人間に立ち向かい、自分がどうなるかと女の子を助けようとしてた。

妹と小さな女の子が重なったんだろうが、演技法のせいで現実と芝居の区別がつかなくなる中、命をかけて他人を守りに行ったんだぜ。

そいつは、つまり。

この人は過去から今にいたるまでずっと、強く優しい人で在り続けた人だってこと

だ。

この人には演技の才能が無かったとしても、愛情深いって個性がある。自分が信じる在り方のために命を投げ捨てられる、その在り方は美しい。

ああいう心が好きだから、これで終わりとかになつてほしくねえ。

なので、色々スタッフ間で動いて擁護に動いてみた。

頼むぞー、頼むぞー、ちよつと大目に見てやるかーみたいな空気になつてくれ。

景さん達の方に行く余裕ねえなこれ。

撮影つてのは集団でやるもんだ。

プロデューサーのタイプによっては会社所属、フリーランス、他の制作チームの人間の応援等々色々な人間が混ざつてる。

「役に気持ち入れすぎてうっかかり蹴つちやいました」とかエキストラの女優が言い始めたら、もうその時点で業界永久追放とかなくもねえ。

週刊誌とかで時々あるからな。

撮影中の女優の暴挙暴言がスクープされて、ネットで大炎上して、それが一生ネットで罵倒のネタにされるとかのやつ。

これ全部分かつてやつてるとしたらぶつ殺すぞ黒山ア！

景さんのやらかしも！

撮影スタッフ内部で俺がフォローすることも！

全部計算尽くで分かってやってるとしたらぶつ殺すぞ黒山ア！

特に、高田さんは怒り心頭だった。

景さんを叩き出してやると言わんばかりだった。

「監督がなんであの女を叩き出さないのか分からんが、それなら俺が叩き出す！」

「お、落ち着いてください高田さん。」

彼女は時代劇が初めてできつと緊張してたんです、どうかチャンスを」

俺がなだめていると、高田さんが怪訝な顔をする。

「なんだお前、あいつとデキてるのか？ まあ顔は良いだろうが、やめとけ」

失礼なことやってんじやねえぞオッサン！

「景さんに失礼ですよ、高田さん」

「……ん？」

やっべ、どう説得すりやいいのかわからん。

俺は作品で納得させるのは得意だが、口八丁で説得するのは別に得意じゃねえつつう

の！

「もはや彼女は江戸を襲うキングゴングですが、キングゴングは優しいんです。どうか

ご容赦を」

「それは擁護してるつもりなのか？」

「た、多分なんとかかります。多分」

ゴで始まってイで終わる言葉で説得を繰り返す。

ごめんさい。

ゴリラは優しい。

俺が謝ってどうにかなるもんでもねえが、人は謝られるとなんとなく許したい気持ちになつてくるもんだ。心理学の話だな。

だが高田さんは、俺の予想よりもはるかに早く、ため息を吐いて妥協してくれた。

「まあ、いい。とりあえずはな」

「……？　こんなにあっさり受け入れてくださるんですか」

「ああ、いや、なんだ」

高田さんは、なんだか神妙な顔をしていた。

「特撮の神様、棘谷英二『棘谷英二の人生がそのまま日本映画の歴史』と言われるほどの傑物。特撮の歴史でこの人と同格に人間は存在しないというレベルの偉人。世界規模で国家単位の経済と歴史に大きな影響を残し、『特撮の神様』の呼び名の通り、特撮に携わる全ての人間にとって神に当たる存在。が”キングゴングに惚れた男”と言われるいたのを思い出してな」

……親父がつけた俺の名前の元ネタの人っすねー。

ところで、その発言にはどういう含みがあるんですかね。

「ただし、仏の顔も三度までだぞ！」

あざす！

「お前の顔を立ててやる。

お前がさつきちまちまと小石を拾ってくれたおかげだ。

地面を転がった俺の肌には傷一つ付いてない……感謝しておく」

……あざす！

そして黒さんがいいアドバイスしてくれてるはずだ、と信じて挑んだテイク2。

「ダメ！」

また突っ込んでくる景さん。

今度は高田さんを蹴らなかつた、蹴らなかつたが。

「お願い……！ この子を助けて！」

山森さんを庇い、高田さんに命乞いをする。

”景さんらしい”。

”江戸の町人らしくない”。

強く優しい女性が、命をかけて少女を守る、台本にない美しい姿。

はい、当然NGっすね。

お、お前っー！

確かに景さんにギャグは向いてねえだろみたいな話はしたが！

こんなやつちやいけねえ天井する奴がいるかッー！！

すれ違った時に高田さんが「仏の顔も三度までだぞ」とか言ってたのが怖い。

監督が何やら考え込んでんの怖い。

撮影スタッフがイライラし始めてんのも怖え。

昔ながらの伝統的で派手な特撮をやるうとすると、事前準備五時間撮影数秒とかザラだ。

一番時間がかかるのは撮影準備だと言っても、そんなに過言じゃねえ。

準備して、準備して、短い撮影で最高の画を撮る。

そいつが撮影つてもんだ。

皆で息を合わせて、力を合わせて、準備に準備を重ねて……立ってるだけで良いはずのエキストラ女優が意味分かんねえこととして、全部台無し。

んで、また準備からやり直して、今度こそと思つたら、また同じ女優のやらかし。

そりゃキレルわ皆。

むしろまだ大きな声があんま出てないって時点で、寛容にすら見える。

西條監督西條昭平監督。スーパー戦隊シリーズ演出本数歴代二位のレジェンド。戦隊とウルトラマンの両方で名仕事を重ね、西映と棘谷の個性の違いについて言及した稀有な人物。とか、ウルトラマンのスーツアクターが一回でも満足できねえ演技したら、その時点で全力ドロップキックかましたって話だからな！

エキストラの間にも嫌な空気が広がってる。

こっちは一般人の分、本当にヤバくなったらどうにもできねえ。

エキストラ間で人間問題起きて他エキストラに蹴られる、って時々あんだぞ？

つか。

時代劇のエキストラの一般公募の人、つてのは、時代劇好きなわけで。

高田さんのファンとかも当然多くて、高田さんの撮影だからってエキストラに来て

る、高田さんの重度のファンとかもいるわけで。

よくいるんだよ役者のファンでエキストラに毎回来てる人とか。

だから高田さんを蹴った景さんが……ヤベえ……どうしよう。

普通の役者なら、撮影開始直前の景さんの周りでエキストラ達がぶつぶつ言ってる
「なんだあのキチガイ」「なんでまだいるんだ」「外せよ」って声で心折れてる。

自主的に撮影から出てくださうな。

でも景さんは自分の内面に潜ってる人だから、”まだ演技の時に周りが見えない人だから”、気にしてる様子はねえ。

そこは幸いか。

……あんまり良い幸いじゃねえけどな。

もう俺にできることがなくなつて来たんで、佟さん達に合流する。

「おつかれ、エージ君」

「もう先が無いですよ。大丈夫ですか？」

「……墨字さん何考えてるんだらうね」

はあ、と俺と佟さんの溜め息の音が重なった。

「エキストラの不満とかは、もう俺にどうにかできるもんじゃないですね」

「そっか。エージくんエキストラの指揮ってしたことある？」

「ありますよ。ウルトラマンで。

俺が大体朝の五時くらいに現地入りして、エキストラさん達は八時くらいに集合です。

怪獣の頭の高さに視線を誘導するため、先に布付けた棒を振ったりしてました。六割から七割の力で走ってくださいね、って言わないと皆転ぶので注意したり。

あと、『これが最後ですよ』って言う時が肝だと思えます。

最後の一回は一般人のエキストラの皆さん、なんでか力いっぱい走って転ぶんですよ」

「へー」

「エキストラの誘導自体は、何事もなければ、マニュアルあれば十分できます」
「墨字さんが時代劇とか撮ったら、それはそれで大変そうだよね」

絶対大変だと思うぞ。

「おいエージ」

「あ、黒さん。ちよつと、なんで景さんを……」

「あれでいいんだよ。どうせ次のカットで終わりだ」

？ 次のカットで終わり？

撮影予定時間はまだまだ長え。

ここで追い出されるってことか……？ 追い出される前提で何を……？

「お前にちよつと、夜風に講義してもらいたいことがある。」

そいつをやつたら、俺が少しだけ夜風にアドバイスして、それで終わりだ。

あいつの才能は、そうやって一つ気が付けばそれだけで全てを解決するだろうさ」
講義？

アドバイス？

いや、待て。

景さんですら制御できてない、景さんですらまだ完全には分かってない……景さんのその心に、あんた何を見たんだ？

「お前に、他人の心に魔法を掛けるやり方ってやつを教えてやる」

俺を、何の仕込みに使うつもりだ？

何言っただ、あの人。

雰囲気……いや、もう相当に人格すら違う。

平成に生まれて平成に生きて夜風景って存在が、この世のどこにもいなくなつてやがる。

なんだ。

テイク1、テイク2と、今の景さんはまるで違う。

溶け込んで。

過去の自分を現在に引きずり出す景さんが——なんでこんなに、江戸の世界にマツチしてる？

撮影が、始まる。

瞬間、景さんの心が切り替わった。

もうカメラは止められない。

切る芝居をした高田さんの目の前で、見るだけの芝居をする景さんの前で、切られた芝居をした歌音ちゃんやんが地面に倒れた。

景さんが握りしめた拳から、血が流れる。

”小さな女の子を見殺しにする町人の演技”が展開される。

もう蹴り飛ばしになんて行かない。

もう女の子を庇いになんて行かない。

歯を食いしばり、血が出るくらいに拳を強く握り締め、流れる嫌な汗、こぼれそうなのに必死にこらえられた涙。

優しい人が女の子を見殺しにしなければならぬという苦悩が、強くにじみ出ている。

伝わってくる。

台詞がないってのに、景さんの表情から、全ての感情が伝わってきやがる。

見捨てたくなかった、という苦悩。

死なないでほしかった、という願いが踏み躪られた痛み。

生きてほしかった、という祈りが砕かれた無力感。

マイムから派生した「言葉を使わずとも無いものを有るものに見せる演技」の究極系を、何の技もなく、才能と本能だけで成立させている。

画面内の存在感の比重が変わる。

カメラは殺した高田さんと、殺された歌音ちゃんを中心にしてしようとしているはずなのに。

もう高田さんに目が行かない。

もう歌音ちゃんに目が行かない。

殺した武士の理不尽に怒りも湧いてこない。

殺された女の子への同情も湧いてこない。

自然と皆、景さんを見ていた。

背景の中の一人でしかない景さんを、皆見ていた。

立っているだけの景さんから、目が離せなかった。

表情で演技をしているだけの景さんに、皆が心を奪われていた。

ブラックホールみてえに、景さんが視界に入ってる人の全ての視線を、自分に集めてやる。

視線の略奪者。

注視の支配者。

景さんと、高田さんと、歌音ちゃんが視界に入っている人に、景さんは自分以外の何かを見ることを許さない。それ以外の選択肢すら与えない。

周囲の観客の想像力を支配したあの日のオーディションとは違う。

今日、夜風景は、観客の視線の全てを支配した。

「カット！ カット！

あいつを……あのエキストラを外してくれ！

黒山の野郎何しやがった！ たった一人のエキストラに、シーンごと喰われちゃう！」

監督の驚愕の声が響く。

もう駄目だな。

景さんが景さん以外の何かを見ることを観客に許さねえ以上、景さんが画面に映った時点で、景さんを主演に据えない全ての撮影は成立しねえ。

主演が何言つても、観客は景さんを見る。

誰が殺しても、誰が殺されても、観客は景さんを見る。

このまま撮影が続いてたら、下手すりゃ他の役者すら景さんに引つ張られる。

もう、景さんが演じることすら、この撮影は許容できねえ。

「ははっ」

思わず、笑いが漏れた。

「はは、ははは……いいなあ。流石だ、景さん」

何故か、俺の一番深いところにある何かが、景さんを見ているだけで、かつてないくらいに『仲間』を見つけた気がしていた。

「あのエキストラを外してくれ！ これじゃ主役にまるで目がいけない……！」

監督の声で、周囲に温度差が出来る。

監督の言葉を理解した者。

まだ景さんの演技に目を奪われたままの者。

そして、景さんの左右にいて、景さんの演技が目に入ってなかった者。

三者の間に致命的な温度差が出来て、瞬時に景さんを撮影から叩き出すことができかねえ。

「えっ……NG!？」

「どうして!？」

「この子今回は何もしてな……」

「……ええ」

「き……君？」

景さんが町人を演じたまま、地面に倒れて死の芝居をしている歌音ちゃんに歩み寄る。

心が戻ってきていない。

まだ、役の深くまで心を潜らせたままだ。

夜風景の演技はまだ、続いている。

『カットで終わった』と思っていた周囲の心が、芝居から離れて現実に戻って来ていたはずの皆の心が、景さんの演技で力尽くに引きずり込まれる。

跪き、無力感に打ちひしがれる景さん。

その瞳から涙がこぼれた。

死んでほしくなかった、という心の底からの叫びを、景さんは飲み込む。こらえて、飲み込んで、けれどそのせいで感情は二つの瞳からこぼれて。とめどなく溢れる涙が頬を伝い、死の演技をする歌音ちゃんの服に落ちる。何かができただけはずなのに。

助けてあげられたかもしれないのに。

こんなことは間違っていると、そう思っていたのに、何もしなかった自分がいて。景さんは万感の想いを込めて、涙と共に小さな一言の声をこぼした。

「いめんね」

万感の想いを込めた、ただ一言。

”芝居の温度が下がった”。

”撮影の空気が冷えた”。

そうとしか言えない、周囲の空気ごと巻き込む景さんの芝居の干渉。

全員の視界に景さんが入った瞬間に景さんが芝居をしたため、景さんの芝居の影響が、撮影全体に及ぶ。

本気の悲しみ、本気の後悔、本気の無力感、そして本気の謝罪。

流れ落ちた本気の涙が、撮影に参加していた全ての人間にざわめきを生む。

「え、おい」

「あの子役……本当に死んでんじや」

「えっ……」

「何?! 事故?!」

景さんのかけた魔法が、一瞬周囲全てに『山森歌音が死んだ』『あのエキストラはそれを本気で悲しんでいる』と認識させ、集団がパニックに至る寸前まで張り詰めた気を膨れ上がらせ――

「あの……」

「え」

――傷一つない山森さんが目を開けて、死体のフリを辞めた瞬間、魔法が解けた。

ああ。

やっべえ。

胸が躍る。

心奪われる。

俺も、景さんしか見えない。

「あ、ああ、なんだ、勘違いか」

「ほつ、良かった……生きてる」

「そ、そりやそうだろ」

「え……ウソ、今の芝居？」

知っていたはずだ。

皆、この子が死んでいないことを知っていたはずだ。

演技だって知ってたはずだ。

これはただの撮影なんだからな。

なのに、景さんが見せた演技を見て、誰もが最初に聞いてた話と、自分が認識していた現実の全てを疑い始めた。

自分達が間違ってるんじゃないか、と。

子供が殺される・殺されたと認識していた彼女の方が正しいんじゃないか、と。

自分の認識への疑問。

彼女を見て得た確信。

その二つが先にあつて、『事故で人が死んだんじゃない』という結論に、周囲の全ての間人が至つちまいそうになつていた。

危うく誰もが、自分が知る現実よりも夜風景が見せた架空の現実を信じかけた。

とても珍しいことだが、フィクションを現実だと信じる人間は少数だがいないわけ

じゃねえ。

バカみたいなフィクションの本を読んで、ずっとそれを信じてる人もいる。人間の脳は、時に現実より創作にリアリティを感じように出てくるもんだ。

そいつは、景さんを見てるとよく分かる。

今、景さんが見せた”偽の現実”は、周囲から”本物の現実”を奪い取りかけた。

あと一分山森さんが目を開けるのを遅らせていたら、救急車くらいは呼ばれてただろうな。

アリサさんは、景さんを「現実と芝居の境界が曖昧すぎる」と言った。

景さんの将来を危ぶんで、そう言った。

まったくもってその通りだな。

今、景さんは。

他人の現実と芝居の境界を曖昧にした。

『銀河鉄道の夜』でジョバンニがカムパネルラと共に旅路を進み、現実／生と幻想／死の境界が分からないままに歩いて行くかのように。

芝居で、この場の全員の心を奪った。

芝居で、スタッフ全員の現実を奪った。

芝居で、作り物で、本物の現実に打ち勝って全てを塗り潰しかけた。

ああ、クソ。

なんて、綺麗。なんて、強い。……惚れる。

景さんが、現実に戻ってくる。

「君！ 名前は——」

監督が呼び止めようとするが、黒さんが景さんを抱えて逃げた。

「上出来だ！ 帰るぞ夜風。お前はもう用無しだよ！」

「？」

「なっ……待て！ 黒山！ その子は一体——」

黒さんが勢い良く車を回して、黒さんが景さんを抱えたまま車に乗り込んだ。

監督が呼び止めようとするが、まるで止まらない。黒さんが聞く耳を持たない。

そこには黒さんの、映画監督としての、景さんの才能に対する独占欲が垣間見えた。

黒さんがこつちに視線をやる。

いいですよ気にしないで。後始末やとくんでさっさと帰ってください。

景さんがこのままここにいたら、さっきの演技のせいで撮影絶対成立しませんから。

黒さんが俺に謝って頭を下げているのが、車のガラス越しに見えた。

「すまん監督！ 埋め合わせは必ず！」

そんな捨て台詞を吐いて、黒さんは車を走らせ、三人で退却していった。

……あーあ。

このクソ問題児どもめ。

俺が色々フオローしとくつきやないか……プロデューサーとかその辺に。

ざわめきが広がってる。

無茶苦茶な黒さんのやり方に。

無茶苦茶で桁外れな景さんの演技に。

怒りなのか感動なのか、困惑なのか称賛なのか、ざわめきの当人達にすら分かってねえであろう混乱が広がっている。

俺は地面に腰を降ろしたまま、立ち上がっていない歌音ちゃんに歩み寄った。

「山森さん、大丈夫ですか？」

「……あ、あの、あの」

「落ち着いてください。痛いところはありませんか」

「痛いところが、あつたんです。すごく痛かった、気がするんです」

「？」

なんだそりゃ。

「倒れた時、お腹を打ったんだと思います。」

痛かったんです。

でも、あの人が演技をして……すごく悲しんで……お腹は痛くて……
もしかして私本当に死んじやつたんじや、つて思つて。

目を開けるのが怖くて、カットつて聞こえてたのに、目を開けられなくて……
なんだか、お腹がすごく痛いような気がして……

勇気を出して目を開けたら、でもやつぱり血は出てなくて。

今思うと、あの人が演技してる時、なんで私はあんなに痛いような気がしてたのか
な、つて」

歌音ちゃんは困惑している。

夜風、景。

天才の目にも天才に見える天才。

天才の心を折つて凡才にしてしまえる才能を持つ天才。

歌音ちゃんが子供で良かった。

まだこの子は、今の演技を完全には理解していない。

感覚的に少し分かつてるだけだ。

この子が子役だけで引退するにしても、この先も俳優続けるにしても、景さんの演技
が悪影響することはあんなないだろう。

大丈夫だ、気にすんな。

君程度じゃどうせ頑張っても、景さんみたいにはなれないから。

「よしよし」

優しく歌音ちゃんの頭を撫でてやる。

くすぐったそうにする歌音ちゃんが可愛らしい。

自分が死んだかもって思った時は怖かったよな。よしよし。

歌音ちゃんはいいい子だからな。

成功してほしいと思ってるし、幸せになってほしいと思ってるぞ。

よしよし。

「あ、あの……私の演技、立派に死ねてましたか？」

「はい、立派でしたよ。」

子役の中では頭一つ抜けてると思います。

俺が子供の頃の子役と比べても、とびっきりで上手いですね。流石スターズです」

「えへへ」

いや、かなりの名演だったぜ。

子役でこのレベルの演技できるの三人もいないんじゃないやねえか？

素直に称賛できる。歌音ちゃんは優秀だな。

歌音ちゃんの手を引いて、監督の下に行く途中、ふと景さん達を乗せた車が走り去つ

て行った方を見る。

「魂まで、持って行かれそうだ。俺の片想いなのが少し寂しいな」
思わず、言葉がこぼれていた。

英でることも二のつぎで、城にはやがて朝がくる

撮影は続く。

とりあえず景さんが抜けてエキストラに欠員が一人出た分は、俺が入って埋めた。

”基本誰でもいい” っるのがエキストラの長所だ。

……うーん、黒さんどこまで考えてんだ。

最後に終さんに車回させて、自分は景さん拾って、俺は残して帰ったのを見ると、「ちよ
うどいいやあいつならエキストラの穴も埋めんだろ」 って考えてたような気すらする。

エキストラに穴が空いて撮影に悪影響出たら俺は難色示すだろうからな。

俺を駒のように使ってるようであり、上手く俺の文句をかわしてやがる。

畜生かあいつは。

「利用されたんだ、俺達の作品ごと。あの少女の成長のために」

そんなこと言ってた監督が、俺の頭をむんずと掴んだ。

待てい。

そんなことしなくても逃げんぞ俺は。

「そうだろ、朝風君」

「俺に聞かれても曖昧にしか答えられないんですが……」

「……？ 君は黒山の指示で工作してたんだと思ってたが」

「いえ、景さんの擁護してたのは自分の意志で、それが全部ですね」

洗いざらい話す。

まさかこうなるとは思ってなかったつてところから、景さんの演技の素晴らしさまで。

いやー、良かっただろあの演技！

エキストラとしてはゴミカスだったけど！

主演で見れてたら最高だったぞ！

”何も知りません”で信じてもらえたのは、俺の普段の行いってやつだろうか。

「黒さんは俺達にあんま内心も目的も話さないんですよ。協力はさせますけど」

「怒っていいんだぞ君は」

「いや怒ってますよ。口に出さないだけです」

「それは怒ってないのと同じだ」

そういうもんかねー。

「もしやとは思いますが、あの子はメソッド演技の使い手か？」

「おお、流石監督。三回エキストラ役を見ただけで気付きましたか」

「話には聞いたことがある。

メソッド演技はアメリカが本場で、あつちではメソッド演技の暴走例がいくつもあるからな」

詳しいな監督。

なるほど、だから景さんがやらかしても叩き出さなかつたのか。

”あれかもしれない” って気付けるだけの下地知識があつたんだな。

「周りが全部飲み込まれてしまった。黒山め、あの子に一体何をしたんだ……？」

「俺も聞いてないんですよね。黒さんが何か話す前に、講義したくらいで」

「講義？」

「監督、朝風二世。黒山とあのエキストラの会話聞いてたカメラマンがいたぞ」

あ、高田さんがいいタイミングでいい感じに人連れてきてくれた。

景さんと黒さんの会話か。超気になる。

そこで聞いた話をまとめると、大まかにこんな感じだった。

『夜風。お前に何が足りないか教えてやろうか』

『最初から勘違いしてんだよお前は。あのガキはお前の妹じゃねえ』

『お前の家族はこの江戸の町にいて、お前の帰りを待つてるんだ』

『あそこで奴に逆らつてもみる。

お前だけじゃねえ、一族郎党、お前の妹弟まで皆殺しだぞ』

『夜風。もつと世界を、他人を、自分を知れ』

『それがお前の——役者の仕事だ』

カメラマンの話はところどころ欠けてたが、合間の単語埋めると黒さんが景さんに言った内容はこんな感じだな。

つーか。

なるほど。

会話聞いて、納得できた。

「なるほど。大体分かりました」

「いや待て朝風君、なんだこれは」

説明がいるか、監督達には。

「夜風景さんは、自分が江戸の町人だと思い込んで演技してたんですね。

なので、小さな女の子が殺されるのが見過ごせなかった。

景さんは勇氣ある人ですから。

なのでそこに、黒さんが”止めようとしたら家族も死ぬ”と新知識を刷り込んだ。

そのために、景さんは家族を想って無謀を自制した……ということですね」

まー古今東西蛮行を制止すんのはリスクって相場が決まってるしな。

家族が殺されるリスクを思わせて、蛮行の演技を止めさせた。

いい策だと思う。

「いや、待て」

ん？ どうしたんだ監督、そんな考え込んで。

「その場でメソッド演技に使えるような自分の過去を想像で作った、ってことか？」

そらそうだ。

景さんのまぶたの裏には、江戸時代で自分が住んでる家も、そこで一緒に住んでる家族もちゃんと見えてただろうぜ。

「そうですね。

でないとその演技は成立しませんから。

江戸時代に生きる自分、江戸時代に生きる弟妹……

それを鮮明にイメージして、自分の本当の過去と同列に扱ったんでしよう。

でなければ黒さんが『江戸時代に生きる夜風景』のイメージだけを作らせた理由がない」

「……俺なら、この時代劇が、作り物の世界だと認識させる。」

本当に殺す気などないと割り切らせる。

江戸にいる家族の話をする？　なんだそりゃ。

江戸に本当に生きて”いた”認識を持たせるなどという無駄な行為は、それは……」

「それだと、黒さんが『江戸に当時生きてた人』を見れないじゃないですか」

「——は？」

「江戸時代を本当に生きた人なんて現代にはいません。

でも景さんにこういう経路で思考させれば、真に迫ったものが出来ます。

限りなく江戸時代当時に生きていた、心優しい女傑の町人に近い心が。

それは”江戸時代を想像する現代人”とは一線を画す、一種の自己催眠ですね」

なんて言うのが正しいんだろうな。

黒さんが誘導して、景さんが現代に生きる自分すら忘れて、江戸時代に生まれ育つた

自分の過去と記憶を捏造し、そっちが本当の自分だと思いついて感じか？

よくまあ、つて感じだ。

江戸時代の知識すらほぼねえのに江戸時代の人間になりきったか。

それって「俺は日本のこと何も知らないが自分が日本人だと確信してる！　疑いもし

てない！」みたいなもんだろうに。

「黒山、夜風……人間の心を粘土細工のように扱うのか……」

「正直怖いですね。景さんの心にかかつてる負荷は相当なものです。でも」
でも、見たる監督。

「美しかった」

いいもんだつたよな。

俺みたいな物作り畑の人間には一生作れない、自分の心も魂も捏ねくり回すような、『自分以外の何かになる』芸術。

俺が作るような『何かを作る』芸術を、使う側の芸術の人達。

惚れ込む気持ちと一緒に、”家族がいるんだから危ないことはやめろ” って言いたくなる気持ちがあふつふつと湧いて来る。

景さんが芸に命まで捧げようとしたら、俺はその時……どうすんのかね。

自己判断で勝手に死んでいいのは家族がいない奴だけだぞ。

「景さんのことを考えるなら、辞めろと言うべきなんでしょうけど……」

景さん自身が全く止まる心配がなく、俺は止められる立場にないんです」

監督と高田さんが、じつとこつちを見ている。

「お前、さつき黒山の前に講義したと言ったな。何を話した？」

そんな大したこと話してねえけど……黒さんの話の直前に知識の下地入れただけだしな。

大体こんな感じ。

落ち込んでる景さんを見て、俺は少し驚いた。

お前、こういうので落ち込むことある生き物だったのか……いや、人間だしそうか。

二回連続で失敗すると少女相応に落ち込むつてのに、撮影開始直前の周りの陰口は気にしてなかった風なのは、どことなく景さんらしい。

「あら、英二君」

「どうも」

「……ごめんなさい、迷惑をかけてる気がするわ」

「いえ、お構いなく。フォローも裏方おれの仕事と言えば仕事ですから」

少し、嘘をついた。

俳優を支えるのは俺達の仕事だ。

だが撮影全体に悪影響を与えるような俳優は、つまみ出すのも裏方の仕事。

本当は良くねえのかもしれない、俺の私情は。

つか俺は気にしてないが、テイク2も終わってテイク3に入る今、他の人のイライラがヤバイ。

大丈夫なんだろうな黒さん。

「こういう系の話したら俺がどうにかしとく」って黒さんが言ってたが、俺がその通りに教えれば大丈夫って信じていいんだらうな。

俺現段階じゃよく分かってねえぞ。

「肩の力を抜きましよう、景さん」

「肩に特に力を入れてないわ……私は力の入れどころを間違えてるのよ……」

「ま、まだチャンスはありますって」

「体が勝手に動いてしまつて……」

好奇心が百万倍になつてそうだ。じゃ、なくて。

しゃあねえ、ちよつと強引に切り込んでみるか。

「俺のちよつとした豆知識で気分を切り替えましよう！」

「なんだか強引に話を切り替えてるところを見ると、英二君のトーク力の上限を感じるわ」

ぐつ、こんにやろう！

「それなら何か、演技の助けになるものを……私、このままじゃいられないから」

えつ、うーん、そういう無茶振りする？

黒さんと景さんの両方の要求に応えられる豆知識か。

景さんがあのエキストラの役をやる一助になりそうな知識だよな。
何かあったかな俺の知識の中に。

んー、んー？

よし。

あるっちゃあった。

「これは、京都でのお話です」

「京都？」

「学生特撮ヒーローが修学旅行に行くところ。」

一説には日本映画発祥の地。

八ツ橋が美味しいところですね。あのやーらかいやつです」

「食べたことないわ」

「……八ツ橋の話は脇に置いておきましょうか。」

今回の撮影と同じ、京都で”メンツのために人が斬り殺された”事件です」

「！」

さて。

1419年、6月に起きたこの事件。

どういう風に教えたら分かりやすくなるかね。

俺個人的には仮面ライダーの例とか混じえまくった方が分かりやすい気もするが、景さんはそんな特撮詳しくもなさそうだしなあ。

この手の知識を定着させるのに良いのは、面白い話をするか、面白く話すかの二択だが、俺のトーク力はたかが知れてるから前者しかねえんだよな。

固有名詞は極力減らして語ってくか。

「京都に、髪留めの紐を売る店がありました。」

事前に注文していた女使用人さんが、店に取りに行きました。

店がまだできてないよー、と言うと、女使用人は激怒しめちやくちやに店を罵倒しました」

「いきなりクライマックスね」

「キレたお店の人は、女使用人をボコボコにし、踏みつけ、彼女の髪を切り刻みました」

「更にクライマックスが」

「女使用人は自分の主人に涙ながらに訴えました。」

「私何も悪い事してないのに！」と。

使用人の主人は、貴族に仕える侍だったのです。許せんと叫びました。

ふざけんな俺は何も悪いことしてねえぞ、と髪留め屋の店主は上司に訴えました。

髪留め屋の上司は、幕府の偉い人だったのです。

上司の貴族に訴えに行つた侍さんは、幕府の侍に待ち伏せされてぶつ殺されました」
「く、クライマックスが止まらない……?!」

そうだぞ。

「これに貴族側の侍達が大激怒。

出撃した貴族侍軍と幕府侍軍が京都の街中で衝突、大規模な市街戦を開始しました」

「1時間30分の映画の残り15分くらいのところかしら……」

そうそう、そんな感じ。

「幕府侍軍は貴族侍軍を撃破、そのまま貴族の家を焼き討ちしました。

ところがここで驚くべきことが起きます。

幕府侍達の上司にあたる將軍一門の名家の人達が、貴族に助勢したのです」

「映画みたい」

「映画みたいですよね」

「マッドマックス1979年公開のオーストラリアのアクション映画。このシリーズで生まれたモヒカンヘアーで暴れ回る暴走族って概念、冷静に考えると頭おかしくない？」

マッドマックス2は北斗の拳の元ネタの一つである。とかああいうの」

「……いや、それは、確かにそうなんですが」

世紀末ロックンロールだよな。

「最終的に幕府が貴族側を称賛、暴走した侍達を処罰しましたが……

重要なのは、『皆が皆メンツと仕返しにこだわった』というところですよ」
「うちのルイとレイの方がまだマシね」

「あの二人はいい子ですからね。景さんの教育がきつといいんですよ」
「……それはいいの、別にいいのよ」

「こういう」メンツが重要だぞ概念が頭に入っていると、多分後が楽だ。
「昔は市民も武士もロックでした。」

基本的に皆「侮られたらぶつ殺す」が基本です。

一説には、これを身分の区分けが防いだとも言われます。士農工商とかのやつですね」

「歯槽膿漏……」

「士農工商です」

「身分を分けると喧嘩が止まるの？」

『『偉い人に喧嘩は売るなよ』って教育が浸透しますからね。』

あと、偉い奴は身分が下の者を弱い者いじめすんなよ、などもです」

「なるほど」

「だからこそ、身分が下の者は身分が上の者に失礼をしちやいけないんです」

景さんが眉をひそめる。

俺が言いたいこと、分かってくたか。

そう、そういうこつた。

これが、今回の撮影で”女の子が殺される理屈”だ。

「極端に言えば、これは武士のメンツによる殺人です。

現代の価値観だとよく分からないかもしれません。

メソッド演技だと更に分からなくなるかもしれません。

ただし、これは当時の人達にとって、決まりごとの一つだったことを記憶して頂けれ

ば」

「嫌な決まり事だわ。……本当に」

ん。

これでよし。

なんとかこれで、景さんにとって武士の思考が頭に入った。

予備知識としては多分十分だな。

本当は、時代劇つてのは嘘が多い。

例えば、山森さんが高田さんに斬り殺される、ワープステーション江戸南東のこの大

店通り。

時代劇ではよく見る町並みだが、実はこの町並みのセットは武士の家と庶民の商店街が並べてあつて、歴史的にはおかしいことになつてゐる。

史実だと、武士と町人の居住区はきつちり区分されていたからだ。

大名行列の前を横切つたつて、実は切り捨てることはほぼねえ。

こつそり許してもらえたりもするし、津軽とかには十歳の女の子が大名行列の前を横切つたが、親が金払つて許してもらつた事例もある。

つまり今回の撮影のあれも、結構なフィクションつてことだ。

時代劇は、物語のための嘘が多い。

面白くするための嘘が多い。

そういうのを引っこ抜いて戦隊フォーマットのエンタメに仕上げたのが、侍戦隊シンケンジャーつていう傑作……いずれ夜風家にもオススメすつかな。

色々考えてるよなあ、黒さんは。

”現実の過去の本当の江戸に合わせたら時代劇と齟齬が出る”とかさ。

だから俺も、話す内容はそこそこ気を使った。

今景さんに話したのも、景さんに色々理解させるのに便利だから使つたが、実際は室町幕府の時代の事件だし。

侍が気軽に市民ぶつ殺すタイプの時代劇の侍倫理観は、江戸時代よりむしろ室町時代

の方が近えんだ。ややっこしいよな。

景さんに時代劇の認識を持ってもらったままじゃねえと、リアルな本当の歴史の知識とか入れても、撮影で混乱するだけという面倒臭さ。

「私、女の子が殺されるのに納得しないとイケないのかしら」

「どうでしょう」

「？」

「役者さんだと、納得しないまま納得する人もいらつしやいますから」

「……納得しないまま、納得する」

「役者さんはいくつもの自分を持っていらつしやいますからね」

矛盾してるように聞こえるかもしれねえけどな。

意外とこれが矛盾してねえんだ。

役の心と、自分の心。

いくつもの心があるからこそ……成立する、芸術もある。

と、いった感じだったが。

俺が知識の下地を埋めて、黒さんが江戸で生まれ育った景さんの心を植え付けた。

俺はあくまで下地作りしかしてねえけどな。

これがやらせたかったんだろうか？ と今になって思う。

だがなんか、外野から俺達のことを見ている監督は、何か気付いたようだった。

「役作りと物作り、か」

「え？」

「黒山、あの野郎」

え、何？

「……あの野郎。」

自分のアドバイスを活かすために、他人の心の中に『知識の下地』を作らせやがった」

「え」

「お前、”そういう物”も作れたのか」

「え？」

「お前は相手に分かるレベルで説明するのが意外と得意だろう。」

感覚の言語化と、細かな解説が得意だからな。

だけどそれが、『他人の中にイメージという物を作らせる』なんて使い方ができるとは

な

「」

え、何、俺もしかして自覚なく黒さんの”景さんの頭の中にイメージを作る”っていう物作り作業の助手として参加してたのかこれ。

「例えばお前が、黒山の頭の中のイメージを、絵や像で作れば……」

「お前が作ったものが何であれ、周囲にイメージを共有させれば……」

「お前に”イメージを作らせ”れば。」

黒山がイメージしたものはそのまま形にできる。意思疎通の齟齬が無いからな」

「いやそんな、まさか」

「朝風君。造型屋の仕事はなんだ」

「……まだ実物になってないクライアントのイメージを、実物にすることです」

「そのために必要な能力はなんだ？」

「クライアントの脳内のイメージを、誰よりも的確に読み取り、反映することです」

「お前、仕事で黒山のイメージを形にしたことがあるだろ」

「……あります」

あるわ。前にそれでドラマの家具とか作ってた覚えがある。

あの時、俺は黒さんの中の合格ラインを越えてたつてののか。

「あの野郎、自分のスタジオに使えそうな人間を揃えるつもりか」

監督が頭を抱えていた。

「黒山の奴め……」

今回ののはメソッド演技の知識と、夜風景への理解の両方が必須だ。

でなきやああいうことは言えねえ。

少女が少女の助命嘆願だけで一族郎党処刑の罪？

俺の知る限り、そんな史実も時代劇の展開も全く無い。

一族郎党皆殺しは大謀反、主君殺しクラスの罪への罰だぞ？

たまげるな。黒山の野郎、堂々と胸張って嘘ついて、少女を完全に騙しやがった」

「景さんが騙されて信じ込んでれば、それは景さんにとつて真実ですからね」

「極悪人の役人が適当な理由付けて娯楽殺人、くらいならそんな展開もあるだろうが

……

逆に言えばそんなサイコパスの口から出まかせレベルでもなきやねえよ、そんなの」

一族郎党皆殺しだ、と黒さんに言われた景さんは、『あの女の子が殺されるのに逆らつたら自分の家族が殺される』と思ひ込み、演技をあの形に変えた。

それは嘘だったのにな。

なんつー人だ、黒山墨字。

景さんがさほど時代劇に詳しくねえつてのに気付いて、しれつとした顔で大嘘ついて、完璧に景さんを操つてみせた。

凄いの誰だ？

知識の下地を入れた俺か？ いや、そりやないな。

名演見せた景さんか？

全部狙った通りに話を進めて、狙った通りに人を動かした黒さんか？

「黒さんが言つてましたよ」

—— お前に、他人の心に魔法を掛けるやり方つてやつを教えてやる

「多分これが、黒さんの言う魔法です」

あの人こそまさに、『映画監督』だ。

造型屋も俳優も含めた全てを支配して、望んだ映像を撮りきる支配者にして自由人。

なんつーか、強え。

「二世君は彼らとの付き合いをちよつと考えた方がいいぞ」

高田さんが忠告してくる。

妥当な忠告、歳を重ねた人の善意。

だけど、あんま受け入れたくはねえ。

「俺、ああいう人の手助けがしたいんです。

もうこれは理屈じゃないんです。

ふつつつと胸の奥に湧いてくる、俺が生まれた時から持ってた、本能なんです」

「……あの子の演技を見るとな。なあ、二世君」

高田さんくらいの年齢層の人には、時々俺を『二代目』『二世』と言う人がいる。そう呼ばれるたび、なんだかよく分からん気持ちになる。

「黒山はともかく、あの子との付き合いはやめた方がいいんじゃないか」

「それは、ちよつと……すみません、考えておきますね」

嫌だよ。

嫌に決まってるんだろ。

なんでんなこと言われにやならんのだ。

俺の付き合いは俺が決める。

「……名実共に二世になってきたな、お前。女に影響受けるところとかそっくりだ」

何言うと同じやアンタ。

俺のどこが女の影響を……影響を……受けてねーよ！

おそらく、景さんのメソッド演技は、現在の映画演劇界で最もオーソドックスなもの一つへと進化した。

他人を演じるメソッド演技。

過去の自分のどれにも該当しない、遠くかけ離れた者すら演じるメソッド演技。

もう景さんは、自分の内側の掘り方を考えることで、自分以外の何かの役を演じられる、ちゃんとした意味でのメソッド演技者に進化したってことだ。

オーソドックスなメソッド演技は、演じる対象の役を調べ上げ、役に自分を“寄せ”ていく。

そして過去の自分の経験を追体験する『だけ』でなく、追体験した上でそこから演技プランを構築していく。

今回の景さんは、黒さんの誘導で擬似的に“江戸時代の町人少女”という役の設定や境遇を調べ上げた形になり、プランに沿って他人の役を演じていった。

結果、メソッド演技の延長で他人を演じることに成功した。

絶対に子供を見捨てない景さんが、子供を見捨てる自分になれた。

言い方変えりや、『演技で良心と倫理を捨てる方法を学んだ』って言うて良いのかもな。

メソッド演技は自分の内面を掘り下げる。

だから善人がメソッド演技で悪人を演じるのは、相当な負荷になる。

”私の中にこんな悪い一面があるなんて知らなかった”という思い込みは、役者の心を自殺方向に追い込んで行きかねない。

だから、心配だった。

だから、会いに行った。

撮影を一区切り終えて、今日の山森さんの名演を褒めるのも兼ねてケーキ買って、山森さんに贈って、んで送っていった。小学生だしなあの子。

景さんのあの演技がなけりや、山森さんの年齢不相応の名演もめっちゃ褒められてただろうに、そこだけは本当に惜しいと思うぞ。

そんでそのまま一直線に、夜風家へ。

エキストラお疲れ様、という慰労も兼ねて、ケーキを三つ買っていった。

「あの、私大失敗して逃げてきたようなものなんだけど……慰労……？」

「そこは、その、お中元とか引越し蕎麦みたいなあれという感じでお願ひします」

「ケーキ！」「ケーキー！」

「ここは弟妹のために甘んじて受け取る、ということでしょうか」

「甘んじて甘いものを……？」

「甘んじて甘いものを受け取ってください、はい」

結局受け取ってくれた。良かった良かった。

「大丈夫ですか？」

見捨てられない善人が、人を見捨てる役を演じた。

それを心配したことを、俺は口にする。

景さんはきよとんとんとして、心配性な奴を見るような目でこつちを見てきた。

なんだその目は。

「英二くん、本当に私のこと好きじゃないの？」

失礼な。

俺の尊敬は恋愛感情すら凌駕するぞ。

「すみません。俺のこの内の熱は、世間一般的な男女のそれじゃないと思います」

「あら、フラれちゃったわ」

くすつと笑う景さん。

……慣れたなこいつ！ ネタにし始めた！

「ねーちゃんの何が不満だ！」

「おとこつてかかってね」

「こごぞとばかりに畳み掛けてくるな双子！

姉の後ろでケーキ食ってろ！

「私、今まで昔の自分になることをお芝居だと思ってた。

だから、知らない自分は演じられないと思ってた。

それなのに……子供を見捨てるような自分にも、なれてしまった」

「景さん」

「私、自分がこんな酷い人間だなんてまるで知らなかった。

私の中にはまだ、私の知らない人間が眠っているんだわ。

黒山さんが私を見つけてくれて、私の中のそれを教えてくれた。

私は私の中の知らない私を見つけていけば……どんな他人^{わたし}でも演じられる」

俺の眼前で、笑む景さん。

到達してたか。

”制御されるメソッド演技の基本”である、この芸術の始点に。

自分の内を通して外を知り、演じるということ。

己が内面を裏返し、外面にし魅せるということ。

感性を理性をもって制御する。

深い悲しみを知ること、悲しみの演技や悲しみの絵などを生み出すことができるよ
うな、この在り方こそが……ずっと昔から、人を芸術で魅了してきたもんだ。

しかし、いい顔すんな、この人は。

何かを演じている時の景さんと、夢を語るような今の景さん。どつちが綺麗なんだろうか。

俺には分からん。

……どつちの顔にも同じように見惚れちまったから、分からねえ。

「私、英二くんが思ってるより酷い人間だったの」

「俺が思ってたより素敵な人間でしたよ」

俺にもあんたにも、自分で気付いてない酷い自分とかはあるだろう、多分。しかし、問題は本当に山積みだ。

今回、景さんは高田さんと山森さんの存在感を完全に塗り潰していた。

もう完全に、相手にならないってレベルに。

スターズの子役と、時代劇ベテランの俳優を、画面上で同時に食い潰した。

本領を発揮した景さんはもう、並大抵の役者には打ち負けねえ。

いや、勝つちまう。

景さんが助演でも、脇役でも、エキストラでも、その場にいれば主役を食つちまう。

じゃあ主演以外の仕事はまず無理だ。

CMみてえな一人仕事なら問題ねえだろうが、演劇系は途端にキツくなる。

かといつて、実績がほとんどねえ景さんをどう主演に据えてもらう？ 無理だろ。

黒さんもこのレベルだと、楽しそうだが辛いだろうな。

景さんがもう少し成長しねえと、仕事はほぼ主演縛りだ。キッツ!

俺が知る中で、景さんを助演にしても存在感で負けず、主演として景さんに打ち勝てるような同年代女優なんざ……一人しか、心当たりがねえ。

逆に言えば、もうあのクラスじゃなきやハマってる時の景さんには太刀打ち不可だ。

どうにもならねえな。

つか、歪にもほどがある。

普通の役者は脇役やエキストラから徐々に仕事に慣れ、技量を上げて行くもんだが……景さんの場合、未熟だからこそ脇役が出来ねえ。

自分を殺していけねえからだ。

だから逆に主演級から仕事ぶっこんでいかなきゃまとも成長していけない。

歪極まれりだなこりゃ。

助演なら、劇団天球の亀さんとか凄いなよな。

あれは凄え。

アラヤさん級に凄えと思うこともある。

存在感を示しても主役を引き立てるに留め、この前俺が背景描いた時みたいに、自分が集めた観客の注目を主演になすりつけて消えたりする。

ああいうのは、今の景さんには無理だ。

主役を最高に輝かせられる亀さんと、主役から注目を奪うことしかできない今の景さんじゃ、助演適正には大きな差が出来ちまう。

『最強の無能』。

今の景さんに脇役をやらせれば、間違いなくそうなる。

だから主役か、主役の最終的な相棒くらいのポジに置いとかねえと。

「景さんが何にでもなれるようになれば、もう何も心配はいらないかもしれませんね」
「私が……何にでもなれる？ 私は今日、酷い自分を見つけたただけけど」

俺は特に何か考えてたわけじゃないが、心の中からすると、言葉が口をついて出た。
「そうです。」

本当は、善性だけの人間が素晴らしいんじゃないです。

可能性に満ちた人間もまた、素晴らしいんです。

だから酷い自分を見つけられた人もまた、素晴らしいんですよ。

善人にも。

悪人にも。

暴君にも。

聖人にも。

本当は人は、心持ち一つで何にでもなれるんです。
どんなものにもなれる人は素晴らしい。

舞台の上で役者は、絢爛なお姫様にも、七つの海を股にかける冒険家にだってなれます」

俺が今まで、一度も言ったことのないような言葉が口から出てくる。

今までの人生の中で見てきたこと、聞いてきたこと、学んできたことが、俺の内から景さんに引つ張り出されて、ひとつつながりの言葉になつていった。

「役そのものになりきれれる人は、新しい役を得るたび、別の人生を生きるといいます」
そうだ。

だから、アラヤさんも言つてた。

”一人演じるたびに生まれ変わつてる気がする” って。

”演じるために邪魔な自分を捨ててる” って。

……あれ。

なんであの時ピンとこなかったアラヤさんの言葉が、今になつてよく分かるんだ？
なんで今の俺には理解できるんだ？

「それで自分の人生を見失つてしまう人もいます。

でも、それでも、見失わなければ……

あなたは役の数だけ人生を生きられる、この世で最も幸福な者になれます」

「大袈裟ね、英二くん」

「大袈裟なんかじゃありません。」

この世の誰もが、一つの人生しか生きられないという制限を持っています。

でも本物の役者には、そんな制限はありません。

なりたいたいものになり、生きたい人生を生きる。望むまま、思うままに。それは、きつと……」

自由、だってことだ。

何にでもなれる、したいようにしていい、この世で一番自由な存在だってことだ。

「それが、一生役者として生き続け、その中で幸せを得ていくということだと思えます」
言いたいことが湧いて来る。

それをするりと言葉にできる。

普段の俺じゃないようで、けれども俺らしいような、しつくりとくる言葉が口をついて出る。

俺は景さんがこの世で最も凄い役者になれるかもしれないと思つてると、言おうとした。

「俺は、景さんがこの世で最も幸せな役者になれるかもしれないと、そう思っています」

言おうとした言葉とは少し違う意味合いの言葉が、口をついて出た。ただどそっちの方が、俺の言いたかった意味合いの言葉な気がした。

景さんにはこっちの方が受けが良かったらしく、弟妹の頭を撫でる景さんが、少し楽しそうに微笑む。

「そうなれたら、素敵ね」

なれるって。

「景さんならできませう、きつと。」

今日あなたは、役作りを覚えまして。

自分の中から掘り出した過去をそのまま使うのではなく、ちゃんと役を作ったんです」

あれが『役を作る』ってことだ。

役は自分の内から掘り出すだけのもんじゃねえ。

自分の内側から掘り出した感情を加工して、役を”作った”時、あなたは役者になる。

今日、江戸時代に生きる自分という過去のどこにもなかった自分を創造したのと同じように。

「あなたは役を作る。俺は物を作る。」

自分を作るあなたと、自分以外を作る俺。

俺はあなたが作り上げるものを、自分が作り上げられる物で、全力で支えます」
誰も見たことがない景色を作る創作の世界によく来たな、天才。

「ようこそこちらの世界へ。歓迎します、夜風景さん」

握手を求め、右手を差し出す。

そこで景さんは、指輪を取り出した。

俺が作ったやつだ。

気に入ってくれたのか。

「そいつがほんの少しでも、夜風景に俺が認められる理由になってくれるなら、嬉しい。」

景さんはなんでか、俺と景さんの手で指輪を包み込むようにして握手をする。

世界中で俺達しかしてない、俺達だけの、特別な握手な気がした。

未永い共闘を約束するような、創作の戦友同士の握手だと、何故か確信できた。

「よろしく。指輪の人」

「よろしくお願いします。役者の人」

微笑む景さん。

また何か一つ、この人に、自分の内にある何かを持って行かれたような気がした。

少し仕事を進めたくて事務所に帰った。

よく分からない感覚があった。

今物作りをすれば、もっと深くまで自分の内側に潜れる気がした。

今までなれなかったものに。

今までならなかったものに。

今の俺なら、なれるかもしれねえ。

たとえば、景さんやアキラ君、百城さんに山森さん、湯島さんにアラヤさんに……俺の知ってる全ての人間を、もっと上のステージに押し上げられるような分かる。

感覚で分かる。

今の俺なら、とりあえずで、親父と同じレベルには行ける気がする。

今すぐにも、親父に並べる。

そうになったら親父を超えるのだってすぐだ。悪くねえ。

余分なものは削ぎ落とせ。

今見えてるものだけに集中しろ。

ただの人間じゃ見えない世界に向かえ。

俺じゃ足元にも及ばねえ天才を押し上げるためには、今の俺じゃ絶対足りねえ。

もつと、俺の全身全霊を込めるように。

他の何かができなくなってもいいから、物を作る能力に俺の全身全霊を注げるように。

まだ行ける、まだ先に行ける。

誰も見たこともないものを。

誰もが楽しめるものを。

人を引き立て、役者を輝かせて、見たものを笑顔にさせるものを。
創れる。

作るだけじゃねえ、きつと、今なら、造れるし創れる。

その時、インターホンが鳴った。

……なんだよ、邪魔すんじゃねえよ、クソ。

事務所のドアを開けると、百城さんとアリサさんがいた。

なんで来てんだお前ら。

駄目だ百城さんのことしか考えられねえ!

俺の人格がエンジェルに支配されてやがる! いや何考えてんだ俺!?

「英二君はさ。惚れ込んだ人にすぐ引つ張られるよね」

はーなーれーろーやーッ!!

今日、歌音ちゃんから連絡を受けた。

「今日の撮影で朝風さんが少し変だったんです、千世子さん」だって。

なんで私に真っ先に連絡してきたか分からないけど、情報はありがたく受け取った。

よく分からないけど、何かあったらしい。

何かよく分からない俳優がいたらしい。

最近何かが起きている。

それはアキラ君が知っていることで、アリサさんが知っていることで、英二君が知っていることで、嘯み合わせが悪く私の耳にはまだ入ってきていないことだ。

何かの予感がする。

色々なことが変わっていきそうな予感がする。

英二君の事務所のインターフォンのボタンを押した。

今事務所に帰ってきていることは、事務所の窓に見える明かりを見た時には分かっていた。

「はっはっ」

出てきた英二君が私とアリサさんを見て、一瞬だけ面倒臭そうにしたのを見て、大雑把に私は状況を察した。

これは私の思い上がりかもしれないけれども。

普段の英二君が価値あると見ているものにそんな顔を見せた時点で、今の英二君は普段の英二君というより……小学生の頃の彼に近かった。

それは、小学校の時の彼を知る私だからこそ、分かったかもしれないことだった。

それにしても英二君はなんで私相手に自分の本心が隠せると思っただろう？

なんで面倒臭がる感情を隠せると思っているんだろう？

思い上がるのもほどほどにしてほしい。

冗談は作品だけにしてほしい。

才能の大小を的確に見る目があるくせに、他人の能力の上限をあつさり見切るセンスがあるくせに、普段から他の俳優の褒めどころ探してあるあなたが。

俳優の才能の大小と、俳優の好き嫌いとは分けて考えて、褒めるあなたが。

才能ない俳優でも結構褒めてるあなたが。

普段から俳優を好き好きといった風な目で見てるあなたが。

いつものそういう目をしていなかったら、横顔を見ている私が気付かないはずなのに。

アキラ君に才能が有るとは決して言わないけど、何か実を結ぶ可能性はあるはずだと自分でも信じきれてないこと言い続けて、アキラ君の在り方を好きだと言い続けてた君が。

アキラ君が望む才能無いって分かってるのに、友達として応援を続けてた英二君が。そういう方向に行ったら、ちょっと私は気に食わない。

あの余分も、あの無駄も、私は嫌いじゃないのに。

「あ、もしかして、今日の山森さんとの仕事について何か聞きたいんですか？」

「そうだね」

「また実力伸びてましたよあの子。

次のスターズのエース級になれるかもです。

年齢のおかげか伸びる速度も速いですし、子役の内にブレイクできる可能性が高いです。

流星スターズというか、あの歳で優秀な子がいると、改めて層の分厚さを感じますね」「そっか、いい感じに成長できてるんだね、あの子」

「それで、話はそれだけですか？」

あのさあ。

英二君？

話切り上げたといって気持ちは伝わってくるけどね。

普段私をちやほやしてる英二君にそういう雑な扱いされると、私でもちよつと、ほんのちよつとだけど、イラツとするよ。

といった感情を顔に浮かべてもどうせ今の英二君には伝わらないだろうし、仮面を維持した。

アリサさんが、私の後ろで呟く。

「……朝風、父親の目に……」

そっかー。

アリサさんに「アリサさんをセンサー目的で連れて来ちゃってごめんなさい」と言ったら後で猛烈に怒られそうだから黙っておこう。

うん、それがいい。

大体分かった。

や、実は分かってないけどね。

英二君の最近の環境は分かかってないけど、英二君のことは全部分かった。

英二君、単純すぎない？

ちよつと可愛い。

「色々言いたいことも、聞きたいこともあつたけど」

でも今日は、あんまり時間がある日じゃなかったから、これはこれでよかつた。

英二君に紙袋に入れたDVDとBDを押し付ける。

「時間無理に見つけて来たからあんま時間ないかな。

はい、これ私の私物の映画。英二君に命令ね。

アキラ君がちよつとオフだから、友達として一緒に映画でも見てるといいよ」

「え、な、何故」

「英二君はもつと沢山の映画を見て、研究して、芸風増やした方がいいと思つて」

「む」

「友達同士で見たらそれだけで楽しいだろうし、アキラ君の視点の意見も大切じゃない？」

英二君の目の色が変わった。

そりやそうだよね。

だつて私が言つてること、”あなたの仕事に現状で満足していないからもつと勉強しなよ” っつて言つてると同じことだもんね。

英二君の同業者に同じことしたら、多分不快に思われる。でも、英二君だから。

今の英二君の頭の中は、私を満足させていなかったという羞恥と後悔でいっぱいになっているはず。

「分かりました。必ずや百城さんの要望に応えられる人間になります」

後は頑張つてアキラ君。

人が良いっていうのは、努力や演技の才能で手に入るものじゃないよ。

友達として影響を与えるってことは、役者の才能でこなせることじゃないよ。

少なくとも、英二君はそう思ってるから。

あ、でも。

アキラ君のことだから、そもそも英二君がどつかの女優さんに影響されて引つ張られてることに、全く気付かないかも。

それでも良い影響は与えてくれるはず、と信じておこう。

「どんな君も、案外綺麗だと思うけど……『星から離れる』のは、なんか違うって思うかな」

「え?」

「なんでもないよ」

聞き返す英二君に返答せず、ごまかす。

背後のアリサさんが動揺して、路面のジャリを爰に踏む音がした。

余計なことと言わないでね、アリサさん。

私は髪をかき上げて、髪飾りが目に入るようにする。

英二君が私の髪に付けられた——青い花の髪飾りを、凝視する。

「その髪飾り……」

今やつと気付いたんだ。おつそいなあ。

「良い出来だと思わない？」

「——」

「私がお店探してたら、一番良いと思ったやつなんだ。多分、一番良い出来の物だよね」
見てる見てる。

可愛いなあ。

そんな目をするくらいなら、さつさと作って私に贈っておけば良かったのに。

さつさと動かないから、私みたいな悪い女にこういうことされちゃうんだよ？

ほら、ほら。

綺麗な青い花の髪飾りだけど、所詮市販品。英二君なら出来は分かるはず。

”俺ならもつと百城さんに相応しいものを作れる”とか。

”俺ならもつと百城さんの良さを引き立てられる”とか。そういうこと考えてるのが、顔を見てるだけで伝わってくる。

英二君らしい嫉妬だね。

私が男の人と一緒に歩いているより、私が身に着けているものに、英二君は嫉妬する。何故なら。

英二君は私が大好きで、私に幸福になつてほしいと、私に美しくなつてほしいと、私のために全身全霊を懸けて物を作りたいと、そう思う物作りの人だから。

「百城さん。明日会いに行きます。ちよつと時間を空けておいてください」
「なんで?」

「いえ、ちよつと百城さんに個人的に渡したいものがあることを思い出しました」

ああ、可愛い。

バカみたいに真つ直ぐで、他人の美しさに敏感で。

才能の大小にも敏感なのに、頑張つてる人を心の底から褒め称えていて。

努力する人の心を尊んでるのに、天才と凡才を褒める時の褒め言葉の量と熱に、無自覚に大きな差を作ってしまう英二君。

そんな英二君が、物作りに集中してる時の横顔が、私は嫌いじゃない。

「それじゃ英二君、また明日」

「はい。百城さんもアリサさんもお気をつけてお帰りください！」

英二君の目を最初に見た時からほとんど口を開いていなかったアリサさんが、帰り道で私の名前を呼ぶ。

「千世子、あなた……」

聞かれてることは分かっている。

だから、簡潔にまとめてご報告。

「私の知る限りの、英二君の言動と行動の全記録と分析。」

私の知る限りの、大衆の言動と行動をエゴサーチしての分析。

前者の方が楽で、前者は後者をやるついでにやればいいだけのこと」

「――」

「振る舞いと言動で周りの反応と思うことを誘導するのが女優。」

大衆っていう、時に何億体で徒党を組む怪物に比べれば……

本当は純情で、可愛い女の子に弱い男の子一人くらい、手を引くのは簡単でしょ？」

アリサさんが何かを思い出すようにして、複雑そうな、苦悩と後悔が入り混じったような表情を浮かべる。

そんなに重大そうに受け止めなくてもいいのに。

私、難しいことはしたかもしれないけど、そんなに難しいこと言っていないと思うけれ

ど。

私は英二君のことをよく知っている。

私はアキラ君にはなれないけれど、アキラ君よりは彼のことをよく理解している。

英二君は私のお願いを聞いて、怪獣映画の時を初めとして私の専門分野外の事柄のイメージを、私の頭の中に作ってくれる造形師。

創り作る創作の世界で私を助けてくれる、私の戦友だ。

「そうね。

その通りよ。

それは私より正しい選択。

千世子……あなたの言っていることが、正しいわ」

アリサさんは何か言いたげだったが、あえて聞かない。

アリサさんが今思っていることを聞かれたら、流星に私も照れ臭くなってしまうだろうから。

非真剣10代しやべり場

夢を見た。

景さんの夢だ。

仕事を受けた景さんが得意げにふんすーとしていた。

「英二くん、私こういうドラマのオフアアが来たの」

ほほう。

大人役と子役のセット系オフアアか。

特撮でも通常ドラマでも面白えやつだな。

30代の俳優と10代の俳優、20代の俳優と年齢一桁の子役……そういうのを組み合わせ、時間の経過を見せる手法だ。

大人が回想で学生時代の自分を振り返るシーンとか、特撮主人公が幼い頃の自分を思い出したりすんのに使える。

大人の子供時代を一話だけ出すだけなら、大人俳優と似た子役を探してくる助監督やプロデューサーの手腕が求められる。似てりゃいいだけだからな。

だが、長期に渡って何度も大人役と子役を組み合わせて画を撮るタイプの作品……た

たとえば烈車戦隊トッキュウジャー子供向けを強調した明るく子供っぽい作風の2014年スーパー戦隊。綺麗な伏線回収から怒涛の終盤鬱展開は、最後の数話において、テレビの電源を思わず切る大の大人が発生するほどの破壊力を誇った。みてえなタイプの作品とか。

巖爺ちゃん達の舞台演劇における、嵐が丘ワザリングハイツ！ 世界十大小説の一つにして、世界三大悲劇。多くの映画、舞台、演劇、ドラマの元となった。少年少女の初恋が、凄まじくややこしいこじれ方をして男女の愛憎が変わっていくのが見ものである。ちなみにSAOのヒースクリフの名前の元ネタ。とか。

ああいうのの撮影をする時は、かなり気を付けねえといけねえ。

何故なら、そういうのには大人と子供の役合わせが重要になってくるからだ。

大人は子役に合わせ、子役は大人に合わせる。

相互に動きの癖を打ち合わせておいて、互いに真似をして、子供時代と大人時代で同じ動きをして、繋がりを感じさせねえといけねえわけだな。

息を合わせる。

役と役でなく、人と人として普段から息を合わせなくちゃならん。

子役が前回の撮影でした演技を大人が受け止め、大人の演技を子供が自分の中で噛み砕き、自分の演技に反映していく……その繰り返しになる。

舞台演劇の世界とかで、時々子役が快活で元気な子供時代を演じ、大人が冷静で落ち着いた着きのある大人時代を演じると、”特に理由もなく人格をコロコロ変えてるんじゃない”とか罵られる。

怖え。

いや確かに何の意味もなく子供と大人で性格ガラツと変わったら変だけど!

景さんが成長して芸幅増えて俺も鼻が高いよ……

「どつちの役ですか?」

「大人の人の学生時代を演じる役よ」

「いいですねー」

「私が役を掘り下げたら、大人の方の役の人の掘り下げが足りなくなつて……」

大人の方の俳優さんが心を病んでしまったわ。

大人役と子供役で並べると、否応なく二人の演技力が比べられてしまうのね」

「あれっ」

「どうしよう。」

私の役の解釈と大人役の人の役の解釈が違つて気付いてなかつたの。

役を掘り下げれば掘り下げるほど何か違う感じに……

知らなかつたんだけど、こういう配役の場合つて子供役は大人役より目立つちゃいけ

ないのね」

「当たり前だろ」

おめーそういうところがまだ改善点として残ってるのが問題だつて言つてんだよ！
そんな夢を見て、飛び起きた。

事務所のソファで飛び起きる。

窓の外に朝日が見え、テレビの画面には再生終了したDVDのメニュー画面が表示されていた。

テーブルの上には飲み物、空の食器、お菓子のゴミなどなど。

右を見ると、同じようにソファで映画を見ながら眠りこけていたアキラ君が、俺の横でくかーつと寝息を立てていた。

「はっ、夢だったか……」

やっぱ景さんのレベルアップは急務だわ。

ゲームで言えばLV1のキャラ、それもダメージ計算時のみLV100分のステータス数字を加算するっていうタイプのLV1だもんな。

『凄い演技をする人にまだ改善点がいくらかでも残ってる』つて凄えことだと思っわ。

まるで、磨いてない最高級の宝石の原石だ。

巖爺ちやんに做って言えば、そいつを指輪にするまでの一工程が俺の仕事になるか。隣のアキラ君を見る。

まさか、アキラ君が景さんにああいう憧れを持ってたとはな。

少し、話をした。

アキラくんは景さんのスターズオーデイションの時に審査側で参加していて、その時に景さんの演技を最初は理解できず、けれど理解したら圧倒されたらしい。

「彼女は本物だ」「僕と違って」

「母さんを思い出す」「憑依型の極致だ」

「朝風君とは前に話に出したっけ？ 夜風景さん」

少しずつ、夜風景の影響が、この業界に現れてる気がする。

今はまだ小さな波紋だ。

桶の中に放り込まれた小さな石程度の波紋。

だが、この夜風景っていう石は徐々に大きくなっている。

いずれは大きな波紋となり、桶も何もかも破壊して、海に落ちて何もかも飲み込む大津波になっていくことは間違いねえ。

「……………んん」

「おはようございます、アキラさん」

「顔洗つてきまーす……」

「どうぞどうぞ」

俺の事務所で、映画見ながら二人して寝ちまったのか。

まあ俺達どっちも仕事後だったしな。

髪飾り作りながらアキラ君待ってた時間に俺が寝ちまっても何らおかしくなかったか。

あぶねえあぶねえ。

と、インターフォンが鳴った。

「よーつす」

あれま堂上さん。

「おはようございます、堂上さん。今日は何用ですか？」

「いや、映画三昧やつてるって聞いてよ。俺も今からオフだったからさ」

遊びに来たのか。

いらっしやい。

……こういう時俺の事務所がスターズの事務所と近いってのは、俺の家にスターズの同年代が遊びに来やすいって特徴になって、なんとも言えんな。

「そーいや俺なんか仕事の話しようとしてたんだが忘れちゃった」

「重要なことですか？」

「いや、そうでもないやつだった気がする。」

「お前この仕事来ねえ？　って誘おうと思ってた」

「俳優に誘われても俺が参加できるわけじゃないですよ？」

「大丈夫だろ。手塚監督だったし」

あー。

それならありそうな気はすんな。手塚さん使う人間にこだわりが極端にねえし。

なんだろうか。また漫画原作ドラマあたりか？

「俺15時くらいには事務所出ますから、それまでにしましょう」

「おう。店員のオススメの映画適当に借りてきたぞ」

どさつ、と堂上さんがDVDをテープルの上に置く。

これに加えて、百城さんが渡してくれたやつと、俺が事務所に置いてるやつ。

この時間からだ、映画見るのに使える時間は5本分か6本分くらいか。

髪飾りは予想以上に良い出来になった。

これから新作作ってもこれを超える出来にはならんな。

……なんでこんな良い出来になったんだ、と自分でも不思議に思うレベルだ。

後はまったり時間潰してから百城さんの午後仕事に合流して、髪飾りを渡そう。

百城さんが東京に戻って来んのは16時より前だってスターズ事務員が言ってた。

「そういえばお二人は、子供役として大人役と組んで、二つの時代の描写やったことあります？」

「あるな」

「あるよ」

「苦労しましたか？」

「いんや、俺の場合は特にそういうのなかったな。」

年上の方の動きの癖をよく見て自分でも真似すりやよかったし。

あと、基本いい歳の役やれるくらいの年齢まで芸能界にいる人は経験豊富な印象あるわ。

つまり俺より基本演技が上手い。

だからか『上手くやらないと』って年下側の俺が気張らなくていいというかわ。」「そうだね。」

僕らが子供役をやる時、僕らの方の演技が格下なのが問題にならなくなる。

普段は『隣の俳優と比較して下手』は致命的だけど……

大人役と比較して使われる時だけは、それが未熟・年下・子供感の強調になるんだ」

うーむ。

やっぱスターズは強いな。

ちやんと自分の考えを持つて、他役者の演技や呼吸に合わせて、理詰めでちやんと演技つてもんを語れてる。

理がねえのに感情の再現力と他者を自分の世界に引き込む吸引力だけでなんとかなる、景さんとは根本が違うな。

理が無いのを弱点と見るか、理が無くとも強いことに驚くべきか。

黒さんがどう育てるかで最終完成形はずいぶん変わりそうだ。

……いや、それは俺も同じかもな。

黒さんは俺を基本放置だが、時たま俺の能力を確認してる。

景さんの仕事に合わせてたら、俺もいつかは黒さんに率いられる一人になるのかもしれない。

それはそれで悪くなさそうだが、今のところその気はねえ。

「で、何見る？」

堂上さんがスルメをかじりながらソファーに腰掛ける。

とりあえず紅茶を入れてやって、と。

「順番的には次は『ウルトラマンゼロ THE MOVIE 超決戦！ベリアル銀河帝

『国』2010年公開、劇場版ウルトラマンシリーズ。ですね」

「はっ、なんだウルトラマンかよ。」

「そんなガキっぽいのとつくに卒業してらつての。」

「まあお前らに合わせて見てやるけど……」

「俺を面白いと思わせられるなら、鼻から紅茶飲んでやるよ。ありえねえけどな」

「視聴開始。」

「視聴完了。」

「うわあ……なんだこれ……めっちゃ良かった……」

「おい鼻から紅茶飲めよ。」

「舐めてたわ、ウルトラマンだって舐めてたわ……いい作品じゃん英二」

「鼻から紅茶の件は免除して差し上げますね」

「お、おう」

「しよーがねーな。そんなに絶賛されちゃあな。」

「というか日本だとこういうのあんま撮らねえよな。なんでだろ」

「日本は昔スター・ウォーズの後追いでSF映画ブームが来ましたが、製作では失敗が続きました」

「ああ。それで及び腰になったのか」

「単純にそれだけって話でもないですけどね」

ベリアル銀河帝国のあらすじはこうだ。

突如、ウルトラの星を襲う主人公・ウルトラマンゼロを模した激強ロボ・ダークロプスの軍隊。

ウルトラマンゼロは光の国の全エネルギーを受け取り、移動に使用し、このロボを送り込んできた遠い宇宙へと並行宇宙移動を行う。

だがそこは、ウルトラマンがまともに生きることすら困難な、ウルトラマンのエネルギーになる光が存在しない宇宙だった。

蹂躪される宇宙。

侵略するベリアル帝国。

主人公・ゼロが出逢う仲間達。

ゼロに残されたエネルギーは、三分間の変身たった三回分。

宇宙を丸ごと一つ支配し、ウルトラマン達の宇宙にまで侵略を始めた悪のウルトラマン・ベリアルに、ゼロは果たして勝つことができるのか……？

そんな感じ。

王道の話の仕立てに、宇宙を西から東へ旅するSFファンタジー感、変形ロボの仲間、燃える炎の宇宙海賊、鏡の星の二次元人、滅ぼされた国のエメラルドの体の姫、ウルト

ラマンと一体化した惑星アヌー人……とにかくSF。

大人からすれば痛快娯楽で、幼い子供からすれば子供向けの絵本の宇宙の旅にも見える。

ウルトラマン界の傑作だな。

あと、作品オリジナルの登場キャラが多く、主人公のウルトラマンゼロもシナリオの中心で掘り下げられるのはこれが初めてなんで、ウルトラマンの入門の一つに使ってえところだ。

ジード2017年放映開始、ウルトラマンジード。劇場版限定ウルトラマンだったウルトラマンゼロが、テレビ放送でレギュラーになった名作。それまで『子』の役割に居たゼロが『兄』や『父』の役割を果たすようになった。の予習にもいいしな。

「つーかあれ浜田浜田龍臣。2010年のベリアル銀河帝国では10歳の少年俳優として『ウルトラマンの弟』を演じ、2017年のウルトラマンジードではとうとう主役ウルトラマンの変身者を努めた。6歳の頃から子役経験豊富で、竜馬伝やドラマちびまる子に出演し、モブサイコの影山茂夫、HIGH&LOWの雨宮尊龍など幅広く活動中。くん？」

「浜田くんだと思う。僕の目にもそう見える」

「ウルトラマンやったとか聞いたが、ウルトラマンやってたのは昔からだっただけ……」

「浜田さんは今でもウルトラマン好きですよ」

浜田さんは今だとインタビューとかイベントで『ウルトラマンジャスティスウルトラマンコスモス劇場版に登場するウルトラマン。秩序のウルトラマンであるコスモスの対の正義のウルトラマン。が好きなんですよ!』とかうるせえくらい言ってるが、いっああなつたんだろう。

あの人ベリアル銀河帝国の時のインタビューでちよこつと言ってたけど、10歳の頃は確かウルトラマンノアが好きだったはずなんだが。

だから岡田聖ウルトラギャラクシー大怪獣バトル(2007)などのプロデューサーであり、ウルトラマンを復活させた英傑の一人。劇場版ウルトラマンXでは制作統括。また、ウルトラマンギンガやウルトラマンゼロの劇中歌などの歌詞担当でもある。さんが当時ラメ入りのウルトラマンノアのソフビ人形を浜田さんに贈ってたんだもんな。

まあ浜田さんはウルトラマンコスモス2001年放映開始。強さと優しさ、そして勇氣。戦う者に大切な物が何かを教えてください。うるウルトラマン。を子供の頃に繰り返し見てたって話だから、思い出のウルトラマンだったってことでもいいだろう。

「英二、アキラ、あのエメラルドの体を秘めたエメラナ姫ってヒロインだけさ……」

「王屋王屋太鳳。小学生の頃のあだ名は桃白白だった女優。るろうに剣心の巻町操、図書館戦争の中澤毬江など。さんですね」

「王屋さんじゃないかな」

「うわあ、マジか。俺ちよつとビビってるぞ」

「大概売れてますからね。」

去年の映画主演四本、ドラマの主演二本、アニメの主演一本ですし。

ロッテやコカ・コーラのCMとかCMの仕事もガンガンやってきましたよ」

「そりゃベリアルも倒せるわ」

なんてこと言うんだ堂上。

「つか……あのベリアルの声……」

「湯上がり決死隊吉本興業所属のお笑いコンビ。吉本興業は所属俳優の稼いだ金の多くを事務所に入れ、それを芸人の将来の保証や新人の発掘に力を入れていくスタイルのお笑い系総合芸能事務所である。の宮白宮白博之。お笑いタレントながら、ウルトラマンでの声優業やアベンジャーズの吹き替えなど、声のみの演技でも非凡なものを見せる。さんですね」

「そうだよ！ 何やってんだあの人!?!」

なにやってんだらうね。

「つかいい演技してるな……」

”悪い台詞言っなくて声だけで悪役に聞こえる”って才能だろ。

声質だけで『悪』を表現してんだから。俺こんなの知らなかったぞ……」

「堂上さん真似してみます?」

「いや駄目だな。」

声での表現に特化した声優に並んでる宮白さんがおかしいだけだ。

俺じゃあどうしても身体表現の演技も混じえねえと……

ってか、ウルトラマンやってる奴はどうなってるんだこれ?

ウルトラマンゼロもウルトラマンベリアルも表情動かねえよな。

なのにスーツの中の人の演技と、声優の演技だけで表情豊かに見えるぞ……」

「ベリアルに関しては口元の造型もありますね。」

ほら、口元が少し笑ってるように見えるでしょう?」

「ん? ……確かに」

「だから、悪役笑いに映える。」

ベリアルが笑う演技で首を後ろに傾けると、口周りがよく見える。

ねめつけるように首を動かすと、口周りが見えなくなつて怒りの表情にも見える。

ポーズで一瞬口元を隠したりすると真面目な表情に見える。良いスーツ造型ですよ」

「なるほどな」

「こういうの作るのが俺の仕事なんですよね」

「なんか満足しちまったな。英二の好きな特撮バリバリ系は今日はもういいや」

桃野さんみたいな可愛さだけを武器に戦える人も、お笑い芸人みたいに喋りの表現を武器に戦える人も、時々特撮の世界で凄まじく活躍することがある。

おれたち造型が、それを活かすこともできる。

「これが面白えんだ。」

「次何見ましょうか。お二人は何が見たいですか？」

「堂上君、最近和歌月っていう新人と仲が良いんだって？」

「それでもねーよ、人並みだ人並み。共通の知り合いがいて話すきっかけになっただけだ」

「アキラさーん、堂上さーん？」

「でも堂上君、彼女が欲しいってあれだけ……」

「ばっかお前！ 誰でも良いってわけじゃねえんだよ！ 誰でも食べるお前と一緒にすんなー！」

「なっ……！！ そういうことはしていない！ 不潔だぞ堂上君！」

「うるせー！」

「お二人ともー！」

「じゃあなんだ、その和歌月さんに不満でも？」

「いや、俺はそういうわけじゃ……ってかそういう話じゃねえつての」
「……」

俺は黙って、DVDをデッキに入れた。

「お、なんだなんだ？」

「朝風君、何を入れたんだい？」

「『グリーン・インフェルノ』です」

視聴開始。

視聴中断。

堂上さんがリモコン操作しやがった。何してくれてんの堂上？

「お……お前エー!!」

「なんですか？」

「なんですか？　じゃねーよ！　蛮族の人肉食映画とか……お前！」

「これは辺境の食人族の文化を、人肉食に偏見持つ都会人が差別することこそが蛮行。

蛮族は悪意があつて人を殺してるわけではないのに、どちらが蛮族なのかという深い

……」

「作品テーマはどうでもいいんだよ！」

「いやあ気持ち悪いですよね。」

俺実は血液連想すると気持ち悪くなるトラウマあるんですよ。
赤い塗料とかはもう慣れたんですけどね。

だからこの作品見てる時も気持ち悪くて気持ち悪くて……」

「自爆か！ 特攻か！ 神風特攻隊か！」

「堂上君、ふと思っただが、これはもしかして朝風特攻隊っていう遠回しなギャグじゃ……」

「黙ってる星アキラ！」

「そうだぞ、アキラ君の理解が正しいぞ。」

「なんか、なんかないか、他の」

「『The Wave』なんてどうでしょうか。」

「2008年のドイツの映画です。」

「ナチスドイツが何故人間を支配できたか、を分かりやすく物語に仕立てた話ですね。ドイツみたいになんかことになるわけねえだろ、と思ってる教師や生徒達。」

「彼らがナチスなどのやり方を学んでいきます。」

「一体感や讃えられる充足感、同調圧力に世間への不満、肯定の渴望……」

「そういうものが丁寧に描写され、次第にナチスのように暴走していく話です」

「僕は少し興味持っな」

「俺は全然」

「じゃあ別のにしようか、朝風君」

アキラ君本当に地味なところにいいヤツ感にじみ出るよな。

『CUBE』1997年カナダ映画。立方体閉鎖空間型デスゲーム映画。デスアイランドより多分面白い。とかどうでしょうか。

罫が仕掛けられた正六面体の部屋を数万を組み合わせたダンジョン。

この中に放り込まれた七人の人間の物語です。

各人間の能力や性格が緻密に計算され、最後の結末に向かう綺麗な物語ですね」

「えー、あれグロじゃね？ グロだけが売りのやつ俺好きじゃねえぞ」

「どうでしょう。」

確かにグロもやりますけど、CUBEシリーズは『数学的な傑作』なんですよね。

初代は壁に書かれた素数などを計算すれば助かる、という論理の話。

2作目になると数学的幾何学図形の処刑システムが人を殺す、って話ですし。

あ、もしかして堂上さん、SAW2004年公開のアメリカサイコスリラー型デスゲーム映画。デスアイランドより多分面白い。のシリーズもただグロだけが売りだと思っってますんか？」

「ああいうグロ系がテレビの子供が起きてるような時間にCM出してたの変だと思っ

わ

「あれもグロ系のイメージ持たれてますけど、ちゃんとやってた初代とかは違いますよ。あれはグロより論理の映画です。」

数学的論理ではなく、観客の思考を製作者が読み切った、思考トリック論理の映画です
すね」

「そうなのか？」

「あー、朝風君。痛い系ちよつと避けてほしい。もうちよつと間を空けたい」

悪いなアキラ君。今夜グリーンインフェルノとか夢に見たら許してくれ。

蟻に喰われてる人間の苦通シーン見る前に映画止めといて良かったね。

『『ハングマン』2015年のイギリス映画。気持ち悪いストーリーカーの物語。ストーリーカーの趣味が、幸せな夫婦を見つけて夫を殺し、妻にナイフを突きつけて「俺を愛していると言え」と言うこと。愛しているとと言うと淫売なので殺され、愛していると聞かないと「俺を愛さなかつたから」で殺される。酷い。とかどうでしょうか。

現実的なストーリーカーの手口を参考にしたって話も聞く映画ですね。

ストーリーカーが自分達の家の天井裏とかにこっそり住んでたら、って話です。

家族が寝静まった後に家の中を徘徊するストーリーカー。

天井裏から何が楽しいのか一家の毎日をじっと見続けるストーリーカー。

寝てる家の主達の体の匂いを嗅ぎ始めるストーカー。

睡眠薬を飲み物に混ぜたりして家族の行動をコントロールするストーカー。

家族の冷蔵庫の飲み物にストーカーがこっそり唾混ぜるシーンとか凄いですよ。

もしストーカーが家に居たら、つていう恐怖を書ききる監督の鬼才が感じられて……」

「気持ち悪いのはちよつと」

ですよねー。

俺も気持ち悪いと思う。

ただ造型屋は『人がかっこいいと思うもの』『人が綺麗だと思うもの』『人が気持ち悪いと思うもの』とかを意識的に作り分けていかねえといかんのよな。

こういうの、実は少しばかり参考になる。

「つーかなんだ！

俺への嫌がらせか!?

なんかふつつーのでいいだろふつつーので!」

「昨日俺とアキラ君で粗方見ちゃったんですよねそういうの。

それに皆さんスターズで日本の名作は粗方見てるでしょうし。

そこから堂上さんが先程満足してしまった特撮系を除外すると、ちよつと」

と、どうか。

百城さんのチョイスに『人間の心を良くも悪くも大きく揺さぶる名作or奇作』が意外と多い……人の心に残らない名作に、一生残る変化球作品が混ざってる。

ああ、”感想聞かせてね”って言うてる百城さんの笑顔が見える。

重症だな俺。

『イツト・フオローズ』2014年アメリカ映画。初お披露目は黒さんが入賞したカンヌ映画祭。

こいつは怖いですよ。

空気が良いんです空気が。怖気持ち悪い的な。

すっげー怖いオバケがいます。

こいつはセックスすると、性交した相手に移ります。

オバケはゆっくりと、常に追いかけてきます。

ゆっくりなので車で逃げれば逃げ切れます。

でも、もし寝てる時に来たら、それが姿を変えて来たら……って映画ですな」

「うーん……僕はちよつと……そういう性病を思わせる系の下ネタタイプが苦手で

……」

「というか怖いって分かってんなら俺達に勧めんのやめろや」

ん？

「じゃあこれはどうでしょうか。

『パラドクス』2014年メキシコ映画。ファンタスティック映画祭とかで高評価なタイプ。」

幽霊は出ませんが途中からかなり怖いですよ。

動画サイトの宣伝映像見るだけでも怖いって言ってる人いるくらいですね」

「へえ」

「幽霊も出ないのに怖い？

そりゃあれだろ、暴力が怖いとか。そんなのでビビったら鼻からチョコ食ってやる

「よ」

視聴開始。

視聴終了。

「いっわ……」

おい鼻からチョコ食えよ。

「……面白かったけど」

歯切れの悪い感想。

まあ分かる

「上に行っても下に繋がる無限構造の階段。

どっちに進んでも元の場所に戻って来る無限構造の道。

どこにでもあるような道や階段が、一瞬でループの地獄に変わる……

なんというか、僕は『もしこうなったら』と想像してぞわつと怖くなる映画だと感じ
た」

「それで合ってると思いますよ」

「この時間設定が怖いよな。」

俺も最初はまさか、閉じ込められたまま35年経過とかまでやるとは思わなかった」
そうそう、それぞれ。

一般人がある日突然、日常の中で道や階段の無限ループに閉じ込められる。

娯楽もない、食べ物や飲み物はある、発狂しそうな閉鎖ループの中で35年……これが
ほとんどもなく怖い。

35年間閉じ込められた人間のどっか壊れてる感が絶妙に出てる。

「つーかオチが……」

「あれはね……」

「ホラー系でよくあるやつですね。」

『解決すると思ってたら最後の最後で何も解決してないことが示唆される』というの」

俺さあ。

ああいう最後に何も解決してないって示されんのさあ。

作品自体が大好きでも、好きじゃねえんだよな……すつきりしねえ……いや作品自体の出来がいいならその作品は好きなんだけどさ。

逆にそういうのを始めとした『映画のお約束』を纏めたパロディの究極致の『キャビン』2012年のアメリカホラー。パロディした作品には枚挙に暇がなく、エイリアン、死霊のはらわた、IT、シャイニング、ブレイド、リングなど。貞子が小学生女子に負けるとは……！とかは凄え面白いよな。

キャビンは予告だけでもめっちゃ面白いし気になる。

100人に予告を見せたら90人くらいは見たいと思うはずだ。

問題なのは本編の面白さの八割くらい予告に詰まってて、予告以外の面白要素はクライマックスに詰まってることかね……ちよつと困る。

あとアレだ。

理不尽とグロあるから今はオススメできん。

「なんか明るいの見ようぜ明るいの」

「デイズニーでも見ます?」

「いいよあんなガキっぽいやつ。俺がこの歳で見ると思っか」

えー。

「朝風君。僕も回復したから、グリーンインフェルノみたいなのでなければ大丈夫」

「じゃあ『ミスト』2007年アメリカSFホラー映画。辛い。見ましょう。」

「最近の若い層には見てない方も多いですが、間違いなく名作ですよ。見たら一生忘れません」

「おいおい、そんな前振りしたら俺達身構えるだろ。」

「身構えた奴を感動させるのは難しい。」

「こんな状態の俺の記憶に一生残る映画なんてありえねえ。」

「もしありえるとしたら、俺は鼻からフルーチェでも食ってやるよ」

「お前は早く鼻からチョコ食えや。」

「視聴開始。」

「視聴終了。」

「……」

「……」

「良い沈黙をありがとう。そうなるよな。」

「いや、その……僕は……」

「なんだこの……なんだ……俺は……」

「俺これ大好きで大嫌いなんですよね」

「……………」

映画の出来で見れば最高レベルだよな？

ある日、町に霧ミストが現れる。

そして霧の中を怪物が動き回り始める。

霧がない場所に怪物は入ってこない。

よってスーパーの中の主人公達はそこで籠城を強いられる。

話の概要だけ見れば、ありきたりなモンスターものだが、『主人公を含めたほぼ全員に主人公補正がない』ってのがあまりにも恐ろしい。

頑張ったら上手く行くわけじゃない。

助けよう、と言うより見捨てよう、って言った方が良かった状況も多い。

やる気を出した奴は一部が上手く行って一部が仲間の足を引っ張る。

現実には立ち向かうより現実から逃げるのにパワーを使う奴が増える。

「誰かのせい」にする一般人が増える。

スズメバチを大きくしたような怪物は人間が殴れば死ぬが、大きくなったスズメバチが怖くないわけじゃないじゃん！ なパワーバランス。

何よりオチだな。

オチが苦しい。

映画史上最悪のラスト15分とか、映画史上最高のラスト15分とか、ラスト15分で鬱にしてくるとか評価が全部違うようで全部同じ。

造形屋の俺としてはこのモンスター造型にこそ注目してる。

グレゴリオ・ニコテロはこの映画の制作にあたり、自分が熟達してる映画史とモンスター史を洗い直し、類似デザインを全部ポツにした。

おかげで、ミストはモンスター映画としてもかなり独自性が高え。

過去にあった様々な事例を見比べ、類似しないことを意識し、自分の仕事に活かす。俺も見習いてえとこだな。

あの時……巖爺ちゃんの依頼で行った時に描いた空の絵。

あれは本当に、過去の事例と重ならない絵だったから。

「俺が大好きだけど大嫌いな理由、分かってももらええると思います」

「見てよかったけど見るんじゃなかった……」

「結構好きだけどかなり嫌い……」

「やっぱり最後ですよね最後。」

「こう、感覚的には

『人の心がない人間に映画作らせるとこうなるのか……』

ってなる感じがあるというか、辛さと苦しさが混ざっている感じがあります」
空気が重い。

「この結末は監督のオリジナルだそうですよ。

オリジナルのこの結末に原作者はこう言ったそうです。

『この結末は衝撃だ。恐ろしい。』

だがホラー映画を見に行く人々は必ずしもハッピーエンドを望んでいるわけではない』と」

「限度があるだろ！」

でっすよねー。

「ホラー系はこじらせてるやつが多いのか……」

「堂上さんのその指摘は間違ってもない気がします、なんて言うんでしょうね。」

ホラーは矛盾があるんですよ。

良いエンディングにするには怪物を倒さないといけない。

でも怪物の恐ろしさを強調するには怪物は無敵じゃないといけない。

なので、怪物の恐ろしさを強調するために、すつきりしないバッドにすると言いますか」

「うるせーな！ 貞子山村貞子。『リング』の方で、ふたなりな方。実は設定上クトウル

フと人間の半神ハーフみたいな奴。だろーと伽椰子佐伯伽椰子。『呪怨』の方で、夫が無しな方。実は設定上幼少期から悪霊を飲ませられ続け悪魔化した女。だろーとお前らのウルトラ仮面とやらの倒させろ！」

んなむちやくちやな。

俺達はヒーロー番組の人。

悪は倒してスツキリ爽快。

これらは怪物が恐ろしくてなんぼのホラー。

怪物倒すヒーローはいちやいかんのだぞ。

「朝風君が嫌いなのも分かる。君、最後に頑張った人間が報われる映画が好きだからね」

「ですです」

「僕も朝風君と好きな映画のタイプは同じだから、感想は大まかに同じかな」

「俺が色々映画見てるのは、仕事の参考にするためですからね。」

とはいっても、俺は映画より仕事の方が好きですから。

映画にそんな時間は割いてません。

映画を見る量で言えば、おそらく百城さんのそれには敵わないと思います」

俺を映画好きと言うのは何か違うよな。

「以前に映画の『ライフ』2017年アメリカ映画。具体的に言うと、進化していく異星

生命体と有能な人達の知略を尽くした全力駆け引きからの衝撃エンド映画。一緒に見ましたけど、基礎知識が多い人でした」

「ん？」

「研鑽と研究を苦にしない人なんでしょうね。」

あと、子供の頃から映画好きらしくて、女優は多分天職だったんでしょ」

「え？ お前ら二人で映画見に行く仲だったのか？」

「いえ、アキラ君と映画見に行った時に偶然会って、三人で見ました」

「ああなんだ偶然か。俺の心臓止まるかと思っただぞ」

幼馴染のアキラ君に会いに来た可能性に気付けよ。

百城さんは忙しい人なんだぞ？

これだから堂上は。

鈍い奴だな。

「そういえば、朝風君あの時何か真面目な顔で話してたね」

「仕事の話ですよ。」

百城さんが抱いた違和感を元に、あの映画の翌日にドレスを改善しました。

映画から帰ったらすぐドレス改善に取り組みましたからね。

おかげでより出来のいい、百城さんの美しさを引き立てるドレスが出来たと思いま

す

「……お前らはさあ……」

なんだ堂上。

「まあいいや。飯だ、飯食おうぜ」

「あ、もうそんな時間でしたか。作ってきますからちよつとお待ちを」

今事務所に食料何置いてたっけ。

「アキラさん、蕎麦ないんでラーメンでいいですかー？」

「うん、いいよ」

「いや俺にも意見聞けよ」

「肉どのくらい入れますか？」

「限度を知らねえくらいに頼む」

お前が遠慮を知れ。

炒めたキャベツ、卵、ソーセージを日清の塩ラーメンの上にぶちまける。

「ハイ出来ました、三人前ラーメンお待ちです」

「おー来た来た。サンキュ」

「ありがとう。いただきます」

ささっと食い始める。

素早く作れて素早く食えて、それで美味い。

ラーメンは神の食べ物だな。

「そーいや無駄にグロ入れる映画とか無駄にキャラ死なせる映画とか、あれなんなんだろーうな」

「堂上君」

飯時にあんまりする話でもない話を堂上さんが始めて、アキラ君がたしなめる。

大丈夫大丈夫。

そこまで飯時にする話気にしねえって、俺。

流石に俺がすることはねえけど、俺がされる分にはいい。

「刺激って、強いんですよね。」

娯楽………というか、嗜好という分野そのもので強いんだと思います」

「？」

俺のラーメンに塩コシヨウをかけて見せる。

「例えば、ラーメンに塩味が足りなかったら？」

ラーメンに熱さが足りなかったら？」

『刺激』が目減りしたラーメンは、美味しくなくなってしまう」

「ああ」

「逆に熱々のラーメンは、固有の需要があります。

塩コシヨウがたつぷりのラーメンもですね。

『刺激を増やす』というのは、それだけで他の人間に求められる要素なんです」

「人死にやグロが刺激かー」

「2005年のキングゴングとかでは……いえ、食事時にはやめておきましょう人間の頭ほどのサイズのカマドウマが人間に群がり、肉を貪り喰らおうとするシーンや、巨大なサナダムシが人間に群がり食い殺すシーンなど、虫が大嫌いな監督が自分の嫌悪感の全てを込めたシーンが有る。観客は目が離せなくなるか、目を逸らすかの二択だったとか。」

これは色んなことに応用できる概念だよな。

「そういう意味じゃ、千世子は結構特異だよな」

「かもですね」

「あいつは安定した演技、安定した需要への供給、余分な刺激が無いことが売りだろ」
そう言っているのか分からんが、そこに百城さんの売りの一つがあることは否定しねえよ。

「英二は百城千世子より刺激的だと思った奴に心引かれたりとかしねーの？」

堂上さんの言葉に、何故かアキラ君がピクつと動く。

俺とアキラ君、同時に同じ人間をイメージしてみたんだな。
いや、どうだろ。

アキラ君の方はひよつとして、俺があの人のことをイメージしたと思ったから今動いたのか？

ま、どっちでもいいか。

だよな景さん。

「まあ、百城さんより刺激的で退屈しない人ならいます。でも……」

でも、安心や信頼で言えば、百城さんは俺の知る女優の中で一番です、と言おうとした時。

がたん、と音がする。

そちらの方を向くと、俺が料理の換気用に開けた入口横の低い窓の向こうに、真つ青な顔をした歌音ちゃんが見えた。

その右手には、和風の袋。

おそらくは時代劇撮影のついでに買われたであろう手土産。

その右手には、スマートフォン。

待てどこに何を連絡しようとしてる？

「大変……千世子さんにラインで伝えなきゃ……！ スターズの皆に知らせなきゃ……」

「！」

「やめよう！」

怖い！ 情報化社会！

千世子「ファントム・スレッド良いよね英二君。服作りの天才と女性の恋物語。より深く愛してる方がより強く相手を支配すると教えてくれる名作映画だよ」

歌音ちゃんにもラーメンを作ってやった。

さつさと食っておかわり申し出てきた堂上さんにも作ってやって、四人でラーメンをすすする。

「さつきの話の続きですけれど」

「刺激の話？」

「そうです。」

俺達が作るもの……

映像作品には、刺激があるといいって話です」

色とりどりの花の形にぱぱっと切り揃えてあげた薄いかまぼこを、歌音ちゃんのラーメンの上に並べてやると、ぱあっと表情が明るくなる。

俺は手を動かしつつ、アキラ君や堂上さんとの会話を続けた。

「料理の世界で、少し前の時代から言われてることがあります。

料理の良さには、未知への感動と既知への安堵がある、というやつです。

俺は個人的にはこれが映画作りにも適用されると思うんですよ」

「ああ、分かる。

ウルトラ仮面の時に僕もプロデューサーから散々言われたよ。

新しいことをやれ、斬新な面白さを、古くからのファンを驚かせろ。

でも古くからの王道をやれ、定番の良さを魅せる、過去の受けた作品を参考に。

難しい注文だらけだった覚えがあるよ。

失敗する挑戦はするな、でも成功する挑戦は増やせ……みたいな」

「おいおい、特撮の世界だけじゃねえぞ。

普通のドラマの界限でもそういうのはちやんと言われてるからな」

「朝風さん達は、とても大変なんですね……」

そうだと、歌音ちゃん。

「自覚していかないといけないんですよね。

俺達は斬新なインドカレーも、懐かしい実家のカレーも作れないといけない。

そして時に、実家を思い出す安心と斬新な驚きを両立しないといけない……」

映画ってのは、そういう矛盾を抱えてるのかもな。

「俺の知ってる中だと、そうですね。」

手塚監督が、漫画原作から安定した作品を作る既知の安堵型。

なんだかんだ原作の良いシーンは残して、視聴者を安定して楽しませてると思います。

あと、有名俳優を使ってるので視聴者は皆演技面では安心して見てる気がします」

「未知の感動型は？」

「それなら黒山監督ですね。」

新しいことをやっている、だから海外の映画祭りでも評価されています。

あの人は毎回誰もが見たことのないものを作ってるタイプだと思います」

ん？ どうしたアキラ君、考え込んで。」

「千世子君の安堵……夜凧君の未知……僕の演技が安堵の方だとすれば……」

「アキラさん？」

「あ、ああ、ごめん。少し考え事をしてた」

俺は難聴系主人公じゃねえからな、聞こえてたが聞こえてなかったことにしてやる。

「昔ながらの醤油ラーメンが食いたい！」

って消費者の需要があります。

でもありきたりな醤油ラーメンはもう要らん、って批判もあります。

今まで食べたことのないラーメンが食いたい！

って消費者の需要があります。

でも奇をてらいすぎたこのラーメンは要らん、って批判もあるわけです」

「まさに撮影作品だな。俺達が苦しめられてるもんだ」

こういう矛盾がなー。

「矛盾あつてこそ、両立できれば強い、って感じがしますよね。映画は。

芸術性とエンタメ性の矛盾。

未知の感動と既知の安堵の矛盾。

さつき話した、ホラーのハッピーエンドと怪物の恐ろしさの矛盾。

あとは……『怪物が走るかどうかの矛盾』とかもそうですね。ゴジラとかゾンビとか」

「僕は走るゾンビが出る作品が好きかな」

「俺は走らんゾンビが出る作品の方が雰囲気出て好きだが」

意見真つ二つに割ってんじゃねーよ。

「ゴジラはゆつたりと歩いた方が雰囲気が出てて怖いのか。

それとも素早く走って飛び回る方が強く見えるのか。

ゾンビはゆつくり動き、数で人間を包围し、圧殺するのが恐ろしいのか。

走って来るゾンビが、怒涛の勢いでバリケードを乗り越え、噛み付いて来るのが恐ろ

しいのか」

「面倒臭えファンが自分の派閥の仲間をわんさか揃えて論争してるイメージしかねえぞ」

「ごもつとも。」

「そういや、日本でゾンビと言えばバイオか。」

「バイオハザードゲームの方。『壁の右側に寄ってゾンビを右に引きつけ、壁の左側を走って抜ける』はゾンビ映画で言うゆつくり型。『モンスターとのハイスピードバトル』はゾンビ映画で言うハイスピード型。はやったことないのでどっちだったのやら」

「映画はスタイリッシュアクションだったな。」

「俺は映画だけだが、三人はバイオのゲームやったことあるか？」

「俺も無いですな」

「僕も無いかな」

「私は、ちよつと年齢が……」

「……そういやバイオハザードって年齢制限あったな！」

「18の俺、19の堂上さん、18のアキラ君ならともかく、7歳の歌音ちゃんにはそりゃあれだ！」

「そういえば、バイオハザードの劇場版劇場版バイオハザードは六作目まで作られた。」

諸問題もあり、嫌う人が一定数いるものの、間違いなく『未知の感動』カテゴリーで優秀な作品である。ですが……」

ちよつとばかり、歌音ちゃんの耳を塞ぐ。

「？」

不思議そうな顔をする歌音ちゃん。

まあここは大人しく耳を塞がれとけ。

「バイオハザード：ザ・ファイナル2016年公開、バイオハザード劇場版最終章。の事故の詳細、去年に出ていましたが……」

凄かったですね。結局吹っ飛んだ片腕は戻らなかったみたいですよ」

「え、何それ俺知らん」

「高速で走るバイクの撮影中のことです。

スタントマンがメタルのカメラアームとぶつかってしまったんです。

骨は折れ、指は飛び、脳内出血し、骨と血と肉と神経をその場に撒き散らして転がったとか」

「うわあ」

「うわあ」

「吹っ飛んだ骨は全部見つからなかったそうです。」

体中の骨はバキバキ、吹っ飛んだ指や骨は見つからず。

脊髄の神経も切れ、脳は出血しながら腫れ上がり。

手術とりハビリで最終的には片腕の喪失と、半身の骨の歪みという形に収まったよう
です」

「うわあ」

「うわあ」

「お二人とも、スタントすべきところはスタントにちゃんと任せてくださいよ。危険ですから」

「頼まれてもやらねえよ、俺は」

「僕もある程度ならまだしも、本当に命まで危険そうならスタントに任せるよ……」

ちよくちよく思う。世界はアリサさんのトラウマを刺激するものに溢れてるよな。

「本当に気を付けましょうね。」

ザ・ファイナルはこの事故の後、細心の注意を払って撮影を継続しましたが……

それでも作品完成までに撮影スタッフが一人、撮影用車に潰されて死んでますから」

「えっ」

「えっ」

そう警告して、歌音ちゃんの耳塞ぎを解除した。

「なんで今、私の耳を塞いだんですか？」

「ちよつと男同士の愉快じゃない話をしていたんです。

すみません、勝手に身体に触れてしまつて。嫌じゃありませんでしたか？」

「朝風さんならいいです。くすぐつたかったですけど」

懐かれてんなあ。

こんな懐かれるようなことした覚えあんまねえぞ。

「最初はそこまでじゃなかったんですけどね。」

初代バイオ劇場版のラストで女優の体についているあざは本物ですが……

あれは女優がスタントを使ってなかったからで、必然のものでしたし……」

「いやいやいや、それは結構どうかと思うよ朝風君！

もしもの話だけど、千世子君がそういう撮影に放り込まれたらどう思う？」

「撮影中止にするために手を回すと思いますけど」

「うわっ」

初代バイオ劇場版はアクションを活かすため、服をめつちや薄着にして、そのせいで下着付けられないから下着無しでアクションしてたんだぞ……？

おめーやらせること許すと思うか？ 俺が？ 百城さんで？

そういうことか……アキラア！

見てみたい以上に百城さんに絶対やらせたくねえだろ当たり前！

百城さんが自分の意志でそういうの進んでやるとかでもなきや絶対に止めるわ！

「バイオ劇場版の撮影状況は2で一回凄くまともになったんですよね。

女優本人がやりたがってたことをスタントにやらせるようになったので。

ビルの上から50m分の壁を駆け下りるシーンとか、あれこれそういうのです」

「それを美人女優にノースタントでやらせたら俺も驚くぞ」

俺もそう思うわ。

バイオ劇場版五作目で16人くらいが落下事故で下敷きになって怪我してたあの時、撮影の危険化の予兆はあったのかもしれない。

「よし、次はゾンビ映画見ようぜ。俺達だけじゃなく、歌音ちゃんも見れるやつ」

そう来たかー。

「話に聞くシヨーン・オブ・ザ・デッド2004年イギリスのゾンビ映画の傑作。既存の名作のパロディでありながら、とても笑えるギャグ・コメディ。『ゾンビ映画で笑えるギャグ映画やっていいんだ』という概念を生み出し、後続に大きな影響を与えた。とかいいんじゃないか？」

「あれ、見たことありませんでしたか。

終盤ちよつとあれ、辛いところがあるんですよね。ネタバレは伏せますけど」

シヨーン・オブ・ザ・デッドは基本的にボボボーボ・ボーボボだが、終盤だけちよつとメインヒロインが死んだ頃のろうくに剣心みたいになって、またボーボボになる。

基本的にボーボボの眷属だからな、ラストもゾンビをペットの犬みたいに使つてる人達が出て来るとか凄いだよアレ。

でも終盤で「あ、俺達ゾンビ映画作つてたんだつた!」「もつと人死なせないと!」グロも出さねえと! あぶねーあぶねー忘れるところだった」つて監督が思い出しちまうからな。

歌音ちゃんにはもうちよつと抑えめのがいいだろうぜ。

「そこでこの『ゾンビ・ヘッズ 死にそこないの青い春』です。

シヨーン・オブ・ザ・デッドはギャグの傑作ですが、腸が出るところが痛そうです。

ですがこの映画の場合、途中から主人公達の腸は仲間に引かれるロープにしか見えません」

「どういう映画だよ……」

「何より、素敵なハッピーエンドですからね」

「ほほう」

「あの、私のせいで見られる映画が限られるなら、私は帰りますからどうか気にせず……」

「大丈夫ですよ。」

ゾンビ映画のため、ノングロとは言えませんが……

それでも俺はこの作品が、子供の心の教育にいいものだと思ってますから」

「ゾンビなのに……」

ゾンビでもだよ。

「あらずじはこうです。」

目覚めた主人公は、自分がゾンビになっていることに気付きました。

しかも特別な自我が残っているゾンビです。

あてもなく歩いていると、頭空つぼの軽い男と出会います。

頭空つぼ、というか頭腐ったゾンビの男は、優しい男でした。

ゾンビになったことに絶望する主人公を励まします。

『お前の恋人を探しに行こうぜ』。

主人公が繰り返し励まされ、死んでも離さなかった指輪のことを思い出します。

『彼女と結ばれることを諦めても、せめてこの指輪だけは』。

ゾンビの友情、ゾンビの純愛、死んでも冷めなかつた愛を届けるための旅路が始まり

ます」

「あつ、俺が好きそうなやつ」

視聴開始。

視聴完了。

「「終わりが……雑！ 良い意味で！」

うわっ、三人の声が揃った。

「いや……なんだあれ……」

エヴァンゲリオンの最終回だっけか。あれの数倍インパクトあるんじゃないやねえかこれ」

「いいんじゃないかな。僕はああいうハッピーエンドは嫌いじゃないよ」

「わ、私、ハッピーエンドでいいと思います。」

それと、迷いながらも貫かれた一途な愛が素敵だと思いました」

三者三様だな。

山森さんが怖がって泣き出したら止めようと思ってたが、そういうこともなかった。

むしろ途中の心優しい人食いゾンビが、人間に撃たれたところで泣きそうになったか。

ゾンビが立ち小便してる途中に警官にホールドアップ！ って言われた時、つい腕を上げて自分のチ○コもぎ取っちゃって「やべっ」って顔でポケットに隠すシーンとかでは流石に歌音ちゃんの目を塞がせてもらったが。

「というか、アレだな。」

ゾンビが普通の人間の爺さんと友達になるのが意外だった。

その爺さんが長年連れ添った婆さんの遺灰を湖に撒きに行く途中の話、いい感じだったな」

「ゾンビの死が全てじゃないって感じでしたね。俺も好きです」

「コミカルで、血が出るシーンでも私大丈夫でした。朝風さんが目を隠してもくれましたし」

「下手な全年齢よりグロっぽくないですからね。」

血が出るシーンのグロさは、この前の時代劇の山森さんが切られるシーンと……

……同じくらいと言いたいところですが、こつちの方がちよつと上かもしれませぬ」

流石にグロすぎかな？

と思ったシーンでは咄嗟に歌音ちゃんの目を覆ってしまった。

アキラ君が俺の横で腕を組んでいる。

「バイオハザードの主人公に相当しそうな黒人が敵にいてビックリだよ、僕は」

「主人公がモブゾンビですからね……」

そして黒人ゾンビハンターが強いこと強いこと。

正統派主人公に相当する無双系黒人に見つかるまとめ倒されかねないのです」

「ゾンビが主人公の映画でゾンビ映画主人公みたい無双キャラが敵にいの怖くね

「？」

あれはあれで怖いよな。

見逃してくれー！ 主人公に指輪渡させてくれー！ っとなる。

ゾンビ映画主人公にあたる黒人が暴れれば、ゾンビはゴミのように死ぬ。摂理だ。
あ、なんか山森さんが初めて見る笑顔してる。

「私、嬉しいです。」

周りの大人の人は、私にこういうのは絶対に見せないようにしてて……

でも朝風さんは、こういうところで私を単純に子供扱いしないでくれて……

ちよつと、大人になった気持ちです！ 私、今日ちよつとだけ大人になりました！」

「喜んでもらえてよかったです」

あつ。

今気付いたが主人公の親友がゾンビ顔で店員に怪しまれて、「病気なの？」「ゴム無しでセックスしたからな。君は注意しろ」ってかつこよく誤魔化して突破するところ、歌音ちゃんの目を塞ぐの忘れてた！

やべー、やべー。

歌音ちゃんが言ってることよく分からないレベルの年齢でよかった。

小学校高学年レベルだったら危なかったかもしれん。

「ちよつと感想戦に一捻り入れてみましょうか。」

「ゾンビ映画に高い演技力つて、どのくらい要ると思いますか?」

「私は、あの湖に遺灰が撒かれるシーンが出来るくらいは必要だと思います」

「俺はそんなに要らねえと思うな。」

「ゾンビ映画の俳優つてのは絶叫と変顔一步手前の死亡顔が大事だろ。演技は大味でいい」

「僕は演技力とアクションの両方が出来ると良い気がするけど」

「悪くない意見が並んだな。」

「皆さん、正しいと思います。」

「怪人、怪獣、怪物が出て来る映画は、ある意味モンスターが主役です。」

「なので俳優の演技が多少悪くても目立たないんですね。」

「派手に戦う映画であればあるほど、そういった傾向は強まっていきます」

「だな」

「ですが、例えば……」

「派手に戦わない映画。」

「幽霊や怪物がひっそり闇から忍び寄る作品。」

「怯える主人公の恐怖が伝わってくるような名演の作品。」

そういった、人間の心情描写こそが主役の作品もあります。

『怖い』と言わないまま恐怖していることを伝える演技力は、その場合必須ですね」
今思ったが、アキラ君はモンスター系はいいが幽霊系あんま向いてないかもな。

かつこよくモンスターをばったばった倒して爽やかに微笑みかけるとかは最高だろうが、幽霊に忍び寄られて、観客すらも総毛立つような恐怖をシアター越しに伝える……とかは多分そんな向いてねえ気がする。

景さんがリング黒髪ロングの恐るべき女幽霊の恐怖を描いた『リング』は今年で20周年。見たことがない人は見てみよう！の貞子を演じたらヤバそうだ。
皆チビる気がする。

魂レベルで怨霊になれそうな景さん以上に怨霊役に適役な人いんの？

「ハリウッドは複合型を結構やってる気がしますね。

名演が出来る人に、主要人物としてしっかり心情描写をさせる。

その上で、しっかり掘り下げた登場人物を怪物とぶつける。

俳優の演技力が低くてもいいのに、俳優にも名演者を揃える。

金の暴力で揃えた素材で、人間と怪物が互いの存在感を高め合う……」

「そして面白い。いいよね、アメコミ映画。」

僕も朝風君も好きな映画には相応の理由があるってことだ」

「こう言っちゃなんですけど。」

造型おれが傑作モンスタースーツとか作っちゃうと……

ある程度俳優さんの演技がしよぼくても、映画成功しちゃうことあるんですよ

……」

” 成功した映画だけど俳優はちよつと棒だった” みたいな作品あるよな。

誤魔化せちゃうんだよなあ、ある程度なら。

「ただ、これそんな悪いことでもないと思うんですよ。」

演技力がやや足りない、がそこまで致命的で無いというか。

高度な演技も高度なアクションも習得が難しいというか……

顔の良さ、アクション技能、演技力。

この内二つが揃ってれば、十分特撮の世界で大成功できると思いますし」

「いるなー、演技は上手くなくても顔とアクション技能高えアクション俳優」

百城さんは顔と演技力が最高レベルで、身体能力はそこまで高いわけじゃないが、自分の身体の使い方を分かっているんで動きは悪くねえ。

景さんは顔が最高レベル、演技力が規格外数値化不能で、新聞配達のバイトで走り込んでたらしく身体能力も体力もかなりのもの。

アキラ君は顔とアクション技能が最高レベルで、演技力も結構高い。

アクションにおいてアキラ君は前二人に圧倒的に勝つてんだが、演技における人外じみた何かの才能……そいつへのあこがれを捨てられなきや、羨望はなくならねえだろうな。

アキラ君が今一瞬、暗い顔をしていたのはそいつが原因か。

なんか余計なこと考えちまったんだろう。

三つの内二つが十分なレベルなら、そこで満足したって問題はねえと思うぞ。

……満足せず上に行くうとしてるから、アキラ君はアキラ君なんだろうけどさ。

「あの、朝風さん」

「なんですか？ 山森さん」

「朝風さんが俳優さんの演技力を作り物で補ったって聞いたんです。出来るんですか

？」

できなくもねえけど。

「一つ、覚えておいてください」

「はい」

「俺ができるのは、引き立てることだけです。

99を100にするだけです。

何の能力もない人を名優に見せかけることはできません。

俳優さんが素晴らしく見えたということは、その俳優さんが素晴らしいということ。俺の力なんて微々たるものです。

第一、物でそこまで演技力を補えるなら、俳優が努力する意味なんてなくなってます。忘れんなよ。

主役は俺じゃねえ、君達だ。

「それでもいいなら、俺の事務所の倉庫をご案内します。いかがですか？」俺にあんま幻想持つても、いいことねえぞ。

しつかり今の実像を見といてくれ。

事務所の倉庫には色々入れてる。

実験的に作った物とか、技術の仮集大成とか。

その中でも出来が綺麗に見えるものは、既存の特撮武器とかを俺が当時の構造・当時の素材で再現したもんだ。

一度過去の物をそのまんま作ることで、その改善案や改良発展案が見えてくる。なので、その辺の再現品は特に要らんやつらだったたりする。

「英二、これなんだ？」

「電王ライナーフォーム仮面ライダー電王・ライナーフォーム。仲間と共に戦ってきた一人の青年が、本当の意味で自分の力で大切なものを守ろうとした、決意の形態。のグロープ部分ですね。」

ライナーフォームは服飾メーカーの特注赤スーツに、黒を塗装しています。

塗装以外の部分はシート貼り付けですね。

ですがグロープだけは黒と白の革を縫い合わせて作られています。それがそれです」

「へー……見かけもいいが、付け心地もいいな」

「グロープの表面には装甲が接着してあります。」

でも薄く軽いものですから、そんなに気にならないでしょう？」

「ああ、このまんまバイクでも使えそうだ」

なんか皆電王仮面ライダー電王（2007）。カブトコーナー（2006）とキバコーナー（2008）の間にある。コーナーとキバ仮面ライダーキバ（2008）。電王コーナー（2007）とデイクイドコーナー（2009）の間にある。コーナーの方向ってんな。

「わっ、重い」

「山森さん！ その辺は重いものありますのでお気をつけて。」

ドツガハンマー仮面ライダーキバ・ドツガフォームの手持ち武器。巨大な石化能力を持つハンマーで、ドツガフォームは敵を石化させ、ハンマーを引きずりながら歩き、巨大ハンマーで敵を粉砕するスタイルを取る。は先端が極端に重い上に10kgもあります。

当時のスーツアクターですら振り回すのを諦めたレベルです。

俺の知る限りですが、仮面ライダーの手持ち武器トップクラスの重さですよ」

「じゅ、10kg……!?!」

7歳女子の平均体重って21kgだっけ？

ドツガハンマー二個で山森さんと同じくらいの重さになるか。

やべーな。

「普通、仮面ライダーの造型はデザイナーがデザインをまず出します。

それを造型企画が形にします。

けれどもキバはその逆で、造型会社がまずデザインを出し、デザイナーがブラッシュ

アップ。

完成したデザインを造型会社が実物にする……という経緯を聞いています。

「そのためキバは個性が強いですが……よく分からないところで弊害が出てるんですよね」

「この重さも、そうなんですか？」

「俺はそう推測しています」

キバの世代で実験的な技術が導入されて、後の時代に繋がる革新が生まれたことも確かなことなんだけどな。

ああほらほら。

ドツガハンマーに近付くんじやない。

君の体格じゃ運が悪いと潰されるぞ。

「山森さんは足元にも気を付けて。ここ、そんなに明るくしてませんから」

「はいー」

小さな手を引いていく。

こつちを見ていたアキラ君が、その手に剣を取っていた。

「朝風君、こつちの剣も随分重くないかな」

「デнкаメンソード仮面ライダー電王・ライナーフォームの手持ち武器。主人公の仲間の顔が全て剣にくっついていてというところでもない造型をしている。ですな。

子供用玩具だとせいぜい60cmと少し。

撮影用は131cm、ターンテーブルが幅39cm。重量はおおまかに5kgといったところですよ」

「僕は体力に自信があつたけど、これは流石に振り回しにくいかな」

そりやそうだ。

5kgつて言つたら猫一匹くらいの重さはある。

10kgなら下手したらデスクトップパソコン一つくらいにもなりそうさ。

昔の西洋騎士のロングソードや日本刀でも1.5kgつてとこだぞ。

撮影用だから許されてるがドッガハンマーもデンカメンソードも、こんなリアルの手持ち武器だつたら落第つてレベルじゃねーわ。

「おーい英二、この剣出来よくね？俺が貰つていいか？」

「いいですよ。どうせ練習作ですから。」

それは電王のモモタロスオード仮面ライダー電王の最高の相棒・赤鬼モモタロスの手持ち武器である剣。本人にも武器にも、『桃太郎』のイメージが反映されている。ですね。

赤色の青竜刀ですが、制作における形状名称は蛮刀でした。

本来は芯材にウレタンを巻いて、削り出しで作られた刀です。

俺の作品の場合は芯材を中空の硬質パイプで代用し、軽く強固にしています。

「それと表面の塗装もオリジナルよりもやや金属質に仕上げてありますね」
「へー。電王ってどんな作品なんだ？」

「……思わずチャンネルバラしたくなるような良い出来だなこれ」
「やめてください、怪我しますよ。電王はですね……」

仮面ライダー電王は、仮面ライダーの傑作である。

もう十周年とかいうレベルの存在だが、ちよくちよく客演したり、平成ライダーの中では例外的なレベルに沢山のスピンオフ映画が作られていたりする。

視聴者に深く考えさせるテーマ性、何も考えなくても楽しめるエンタメ性が両立されていて、仮面ライダー入門にもオススメできるレベルのもんだ。

とにかく面白い。

造型畑の俺の目から見ると、斬新な試みも見えてくるから更に面白い。

特に西映が独自技術で作った下地スーツを全部ミズノに任せた結果、ミズノの技術でスーツのレベルが格段にアップしたとか面白い話だと思う。

硬いアーマー部分に至っては、パーツごとに金属フックピンで止める方式を辞め、超高度な造型によってFRP（繊維強化プラスチック）だけで形成。

プラスチックだけでパーツを固定することで、構造に遊びがない匠の技としか言いようがねえ綺麗な装甲構造が完成した。

更に、塗装にも革新的な塗料がいくつも使われた。

特に白の塗装部分は傷に強く、素晴らしい光沢が見える。

これは塗料に雲母マイカを混ぜたオフホワイト塗料によるものだ。

俺がルイ君の玩具の修理に使ったやつで、雲を描くのに使った化粧品の原材料にも使われてたやつだな。

化粧品の白、電王の白、雲の白。

ちゃんと素材を見て論理で思考すりや、この『白』が至極妥当な存在だつてよく分かる。

さて。

電王のストーリーはこうだ。

歴史を変え、世界の時間を丸ごと思うままに改変してしまう怪人・イマジン。

その恐るべき侵略に抵抗できるのは、気弱でひ弱、何をしてもしも不運に見舞われる頼りない青年・野上良太郎のみ。

時間改変の影響を受けない『特異点』である良太郎だけが、世界を守ることができる。けれども彼に、世界を守る戦いなんて担えるはずもなく。

そんな良太郎がある日出会った、喧嘩っ早く喧嘩が強いイマジン・モモタロス。愛称はモモ。

良太郎に憑依したモモタロスは、良太郎と運命を共にする相棒となる。

時間改変の影響を受けず、イマジンに支配されない良太郎。

良太郎と違い、ちゃんと戦える喧嘩強者のモモタロス。

敵は無数。

守るは時間。

立ちほだかるは時間を超えて来たイマジンの首魁・カイカイは仮面ライダー電王においては悪のラスボスだが、ウルトラマンオーブにおいては主役ウルトラマンのガイさんを演じている。俳優さんのガラツと印象が変わる演技力が凄い。

モモと良太郎の心と力が、始まりに悪へと立ち向かう。

二人の力を合わせた存在『仮面ライダー電王』が、イマジンの野望からこの世界を守る戦いの狼煙を上げた！

つてな感じのことを、三人に説明した。

つか今気付いたがもうそんな時間ねえな。俺そろそろスターズ事務所行かねえと。
「あ、皆さんそろそろお開きです。」

気に入ったものがあつたら好きに持って帰っていいですよ。

俺はこれからスターズ事務所の方に行つて、帰るのは夜になりますから……」

「朝風君」

「どうかしましたか？ アキラさん」

「その電王で、主人公と相棒のモモはラスボスのケイに勝てたのかな？」

「ケイじゃなくてカイです。アキラさんはいつから難聴系主人公になったんです？」

やめろよお前！

そういう聞き間違い！

劇場版ウルトラ仮面 Wヒロイン&ディ景ド スーパー ヒロイン大戦2018 公開未定

そういうこと（映画鑑賞）が数日前にあったことを、休憩室で二人で話している時、テールの向こうの町田リカさんに話した。

「そんなことがあったんですね。皆で映画見て、ワイワイして」
「わあ楽しそう」

ここは池袋サンシャインシティ。

本日ここで行われるウルトラマンのライブステージ……まあ最新型のヒーローショーの運営要員として、俺達二人はここに来ていた。

ウルトラマンのステージは、かなり子供向けに作られているが。

関わっている人達の質で言えば、かなりのハイレベルで纏められている。

和歌月さんが所属していたアクシオンクラブよりも格上に位置する、最高レベルのアクシオンクラブの人間が派遣される、ウルトラマンの中の人。

こうしたステージで活躍した有能な人間や一部の天才のスーツアクターは、ここから

アクション俳優になったり、日曜朝特撮スーツアクター↓アクション監督↓助監督↓TV監督といった様々な出世街道を進み始めたりもする。

司会はトークショーならテレビ局のプロアナウンサー、ヒーローショーならば勝裏まりえプロMC。東京ゲームショウ、東京おもちゃショーバンダイステージ、ウルトラマンフェスティバル、遊園地ヒーローショー、桃の天然水などの飲食広報イベントなどで活躍中。さんなどの所謂『ショーの綺麗なお姉さん』などが担当。

特にいつも一発勝負で“アクセシデントだから撮り直し”ができねえヒーローショーの司会のお姉さん役は、トーク力や表現力、不測の事態に対応する対応力と応用力などが求められる。

あと一定以上の容姿もな。

ウルトラマンのイベントは舞台の背景に空中戦の背景を投射して、ステージの上のウルトラマン達があたかも空中戦しているように見せかけたりもする。

ステージの上のウルトラマンが光線ポーズ取ると、背景がビームのエフェクト出して、マジでビーム撃ってるように見える演出とか凄え。

あれ思いついた人は絶対に天才だな。

その辺の背景管理にも結構有能な人間で固めてやがる。

で、スーツ造型も実はかなり悪くねえ。

昔のテレビの画質が悪かった頃は、テレビ撮影用のスーツが壊れた時にアトラクション用（ヒーローショー用）のスーツを流用しても、ほとんどバレなかつたって話だ。

テレビ撮影用ほどの質はねえが、当時からそんなくらの質はあり、今ではもつと質が向上してる……それがヒーローショーのスーツってやつだな。

たまに倉庫から引つ張り出して来たせいですんげえボロボロなスーツもあるが、ヒーローショー用に棘谷が新造したスーツもあつたりする。

一般層への訴えかけも、ウルトラマンフェスティバル公式サポーターに爆撃問題お笑いコンビ。ちゃんとレギュラー番組を獲得して固定ファンを獲得したお笑いコンビって全体で見るとほんの一部なので、かなり有能枠だと思います。の田井中裕二さんと大田光さんを招いてる。

隙がねえ。

おかげで毎年のように急成長を見せてる、それがウルトラマンの公式イベントだ。

「いいなあ、身内で映画トークとか丸一日オフの時とか絶対に楽しいやつじゃない？」
「楽しかったですよ。また時間見つけてやりたいですね」

町田さんは司会での契約。

要するに、ヒーローショーの綺麗なお姉さん役と、トークショーでウルトラマンの監督や脚本の人、昔のウルトラマンに出ていた有名俳優さんなどの混合トークを綺麗に回

す仕事。

俺は美術、及び小道具と大道具での契約。

壊れたスーツやステージの修復、ウルトラマンが持つてる武器とかの調整、展示スペースの巨大ジオラマ作成、入口近くのウルトラマン像のチェックと修復、後はたまりにウルトラマンや怪獣になりきって撮影できるスペースの衣装・スーツ・舞台の修繕もやってる。

仕事は多いが棘谷さんは超大手で人材も豊富なんで、俺は基本的に潤滑油や緊急補佐をする何でも屋みたいなポジションだ。

「それにしても今日のステージ、町田さんあれ中々ファインプレーだったんじゃないですか？」

「咄嗟に必死にやっただけだから、そんな大したもんじゃないよ」

「いやいや、そんなことないですって。」

まさか子供がウルトラマンのステージに上がって来そうになるとは……」

こういうヒーローショーでは、大人が手を引いてねえと、小さい子供はすぐステージに上がって来ようとしちまうもんだ。

普段はかなり常識が出来てるお父さんお母さん達のおかげで、子供の手がしっかり握られてたりしてて問題が起こらねえようになってる。

サンキュー親御さん達。

スタッフ一同普段から感謝してます。

だが、アクシデントってのは予防しようとしても起きるからこそアクシデントと言う。

NGや撮り直しがねえ舞台演劇やヒーローショーではこいつはマジで致命的だ。

今日も子供が一人、ウルトラマンと怪獣が十人近く入り乱れて戦うステージの上になりそうになった時はひやっとした。

いや、町田さんのアドリブが神がかってたな。

親よりも先に子供がステージに上がりそうになっていたことに気付いた町田さんは、迂回してステージ前で子供を止め、ステージ上のショーをそのまま続けさせる。

司会のお姉さんがステージ前に降りた違和感を消すため、「皆！ ウルトラマンをもっと応援して！ 皆の力が力になるわ！」と大きな声を上げ、観客席の子供達の頭を撫でながら客席の間を軽やかに駆け回った。

咄嗟に状況に対応した俺が、照明の光を弱く柔らかくするフィルターを照明担当に届けた。

一人か二人だったが、この状況に一秒の遅れもなく的確に動いていた照明担当もいて、客席の間を駆ける町田さんをフィルター越しに照らしてくれた。

柔らかで目立ちすぎない光が町田さんを照らし、町田さんは観客の合間を駆けながらステージへと戻っていき、自分が集めた観客の注目をステージへと戻す。

これにより、ステージの上のウルトラマン達の戦闘は継続させつつ、ステージの上に注目を集めさせつつも、観客席の合間を駆けて応援を求める町田さんも目に入るという構図になった。

最終的に、注目も全てステージのウルトラマンに集まった。

こいつは昔から演劇の世界で、観客との一体感を出すために使われてきた技術の応用だな。

舞台役者が、どうしても舞台から遠くなる観客席後方の客の注目を引くため、後方観客席の合間に突然現れ、観客席の合間を歩きながら演技をして目を引き、最終的にステージへと戻る。

こうすることで観客席後方の客の注目を、自然と舞台の上に誘導できるって技術だ。見てて”やるなあ”ってつい思っちゃったわ、町田さんの名判断。

これはウルトラマン・マリーエウルトラマンフェスティバル2016で「司会のお姉さんも実はウルトラの母の部下のウルトラマン」という斬新な設定で進め、「ステージのウルトラマン達が皆戦って手が離せないところで司会のお姉さんがオリジナルのウルトラマンに変身する」という驚きの展開で観客の度肝を抜いた、公式ヒーローショー限

定女ウルトラマン。勝裏まりえさんなのでマリーエ。ゼットンにあえなくボコボコにされるが、そこに颯爽とウルトラマンゼロがゼットンにウルトラゼロキック！ 観客が「ああ今のでゼロに惚れたな」と思うほど見事な展開だったという。の再来が来てもおかしくないかもしれんぜ。

「そういえば朝風君、ジオラマー一つ任されてたね。見たよ」

「これはお見苦しいものを。未だ精進中の身です」

「企画の人が褒めてたよ。最近クライアントの意を汲むの上手くなったんじゃない？」
「去年と比べればそうかもしれませんが」

ちよつとコツが掴めてきたからな。

「ほら、人間って自分の頭の中のことを全部言語化できるわけじゃないでしょう？」
「うんうん」

「自分でも気付いていない本音があったり、そもそもアウトプットが苦手だったりで」
「打ち合わせの時とかしよつちゆうあるねえ」

「でも結局、言葉つてのはその頭の中で考えてることが元になってるわけです。」

例えば、今回は大人向け要素を減らしていこう”って言ってる人がいるとします。

この場合本当に言いたいのは”前回より更に子供向けに寄せたい”だと考えられます。

なら大人向け要素を減らさなくていい場合があるんです。

より良く、より整理し、より増やす……そういう形で子供向けにするとOK出たりしますから」

「へー」

「もちろん、話し合いは重ねた方が良いです。

自分の解釈が間違っていて、単に予算を節約したいだけかもしれないから」

俺達には口と耳がある。

対話を重ねるに越したことはねえ。

だが、人間の意思疎通の道具としては口と耳でも能力不十分なのも事実だ。

もつと感覚的に理解して、物質的に明確化しねえと。

「ちゃんとクライアントの頭の中を把握して、理解して、仕事に反映する。

他のスタッフの頭の中にもクライアントのイメージを共有させる。

その上で物作りをする。

ちゃんと意識しながらやると、仕事の流れがかなり楽かつ綺麗に出来るようになりました」

「……英二君、能力が『美術監督』にも向いてきたんじゃない？」

「本当は指揮は周りの人に任せたいんですけどね。」

やっぱり人の指示を聞いて手を動かしてる方が性に合ってますし。人を使うのに時間を割かれるとやっぱりどうしても気になります。

ただ周りの人に指示を出して、群体として物作りをするのにも慣れてきました」
黒さんとドラマの撮影に行った時、俺一人じゃ手の数が足りねえって思った時、アキラ君と百城さんが来てくれた。

手の数が増えて、どうにかなった。

あの時のことは忘れねえ。

それに、人を使うだけじゃなく、俺自身の技量も日々上がってきた。

「ようやく」

『俺が思ってた以上に素晴らしい！』

って感想をクライアントから安定して貰えるようになってきました」

「いいことだねー」

景さん。

あの人の才能が、俺を刺激してくれた。

古今東西、パツとしなかつた芸術家が他の天才に刺激されて覚醒すること、美しい女性に出会ってインスピレーションを刺激されることはよくあることだ。

そうやって殻を破った事例がいくつもある。

……それで天才に引きずられて自分を見失って自滅すること、女に傾倒しすぎて身を
持ち崩すことも多々あるが、そいつは脇に置いておこう。

前よりなんというか、感覚や才能ってものに深く潜れるようになった気がする。

バガー・ヴァンスの伝説2000年に映画化した、名作小説にして名作映画。自分を
見失った天才ゴルファーと、僅かな助言で人を導くバガー・ヴァンスの物語を描く。監
督はアカデミー作品賞とアカデミー監督賞を初めて同時受賞したハリウッド監督のロ
バート・レッドフォード。メイン二人は「出た映画が全て売れる」と言われた、『インディ
ペンデンス・デイ』『メン・イン・ブラック』『アイ・アム・レジェンド』のウイン・ス
ミス。そして『プライベート・ライアン』『オーシャンズ11』『オデッセイ』のマット・
デイモン。での指導台詞で、「手を使って探せ。考えず、感じる。手にある知恵には頭の
中の知恵が逆立ちしたって敵わない」ってのがあった。

あの時はフィリングで分かった気になってたが、今はあの助言が俺にも本質的に理
解できるようになった。

俺はあれを、手癖で同じ作業が出来るようになること、つまり頭で考えなくても手が
勝手に動いて、考えてる時と考えてない時の手の動きを同レベルにすることだと思つて
た。

そいつは作業スピードの向上や、俺が疲れ果てても同じ質の仕事を仕上げる技能の

習得に、随分貢献してくれたもんだ。

だが、違った。

景さんを見てりや分かる。

これまでの人生全てが、景さんの身体に演劇に必要な身体能力、演技技能の下地を染み付かせて来た。

だからこそ景さんの体には、頭で考えなくても凄いことができる”何か”がある。そいつがおそらく、”手にある知恵”。

景さんの中にも、俺の中にもあるもんだ。

頭で考えてる人間には絶対には到達できねえ領域。

本来、最高クラスの天才の技術つてのは造型でも俳優でも、後の人間には絶対的に継承不可能だったりするもんだ。

だから本質的な意味じゃ『技術』にならねえ。

そいつだけの『異能』のままで終わる。

景さんの演技法みてえにな。

景さんともっと一緒に仕事できれば、もつと先に、もつと上に行けるかもしれねえ。俺にも、ちゃんと異能としての個性が生えるかもしれん。

現状俺の最も優れた部分つてのは、過去の偉大な先人の技能と技巧を誰よりも早く、

超高速で行使するつー、芸術的というよりは工業的なもんだ。

機械にはできない領域の人の技を、機械の速度でやってるだけ。

もし、景さんに合わせて、俺もあの人みたいに”そいつにしか生み出せないもの”を作れたら。

俺もまだまだ、進化できる。

ここ数年上がり幅が一定だった俺の成長速度が、景さんと出会ってからは爆発的に伸びてることも見れば、この志向はきつと間違ってるねえはずだ。

「ああ、そうそう。朝風君にこれ見せようと思ってる」

何？ 企画書のコピー？ ……『デスアイランド』。へー。漫画の映画化か。

スターズ主催の映画だな。

デスゲーム系の漫画の映画化か。

「私結構初期から企画関わってたから、色々頼まれてるんだ。

今日の休憩時間に英二君にスケジュールの打診しろって、手塚監督から頼まれてさ」

「スターズ主催。

監督は手塚監督。

登場人物24人の内12人がスターズ、残り12人は一般オーディションから募集。

一般公募も若手俳優に募集かけて、スターズメンツは……おおっ」

強い！

町田さん、堂上さんいるし。

景さんが事実上の除外されてたとはいえ、事実上3万人参加のオーディションでただひとりの勝利者になった和歌月さんまでいんじやねえか！

双子の亜門さん達も目立つが、お前、お前。

アキラ君と百城さん居んじやねーか。

日曜朝の主人公であるイケメンヒーローと、現在若手No.1女優の美少女がダブルでメインにキャスティングとか……広告効果がこれだけでやばくね……？

しかし12人がスターズ、それも全員最近売れてきてるメンツか。

デスゲームものだと……考えると……ああ、分かった。

デスゲーム系の作品はどうしても活躍しねえ奴と活躍する奴、引き立て役になる奴と作品の中で輝く奴に二極化しがちだ。

デスゲームが本当であることを教えるため、序盤で死ぬバカ。

知略を尽くして勝つ奴と、知略を尽くして負ける奴。

素の戦闘力でバカ強い奴に、自分より強い奴をハメて死に追いやる奴。

そういう割りを食う奴を一般募集の俳優に割り振ったりとか、そういうやり方をするつもりだな？

いわゆる”ジョニタレ”やスターズ俳優なんかによくあることだが、嫌いな人が多くはなくとも一定数いる割には、演技力の平均値が高え。

しつかり金かけてレツスンで鍛え上げられたスターズの俳優は強い。

一般オーデイションで集まる俳優のレベルなら、まず当たり前はしねえだろう。つまり。

一般で集められる俳優は、引き立て役としての面も強いってことだ。

かといって、下手な奴が一般オーデイションで集まっても映画はクソ寄りになる。

大変だな手塚監督。

12人のスターズ俳優は事務所から渡された”推したい俳優リスト”から選んだだろうし、残り12人も一般のオーデイションから選ばないといけないんだろ？

欲しい俳優に電話でオファー出したりとかできないんだろ？

最悪上から勧められた俳優12人と、一般募集の大して能力も高くねえ俳優12人だけで映画作らなきゃならねえんだろ？

地獄だな。

これで黒字狙えたら割と化物なんだが、あの人もいつもこういうので黒字出してんだよな。

「昨日テレビで千世子ちゃんが一般の応募呼びかけてたんだよ」

「昨日？　しまった、テレビ見とけばよかったですね……」

「朝風君は最近本当忙しそう。ちゃんと寝た？」

「一昨日寝たばつかですよ。今夜また寝ておきます」

「うーんこの……」

なんだよ。

言いたいことあるならちゃんと言えや。

ん？　この企画書……あれ？

「あの、俺の記憶だとこの脚本の人結構その……アレだったような」

「私はノーコメントです。プロデューサーにコネがある脚本さんだから」

やーめーろーやー。

百城さんとかが舞台裏で「酷い台本^ホ。また私頼みか」とか言ってるタイプの人だぞ！

いや……俺と比べりや、間違いなく脚本書^ホく能力は高いと思う。

思うけどさ。

この脚本の人、オリジナルだと黒字と赤字を行ったり来たりで、原作付きだとかなり評判良くねえタイプの人で……そうか、最近仕事減ったから、漫画原作の映画の仕事探してたのか。

うーむこりや大変だ。

「分かりました、援軍に行きます。俺もこの日程なら大丈夫です」

「本当？ あ、一般オーデイションも来る？ 一ヶ月後だけど、お仕事あるよ」

「行きます。オーデイションで一般の俳優も見ておきたいですし」

「デスアイランドの一般オーデイションが一ヶ月後か。」

「なら、特撮関連の仕事を前倒しで終わらせておこう。」

「そのためには色んなところに連絡とって、先の先までスケジュール立てて、俺が作らなきゃならねえ建物やスーツを作り置きしといて……あと、緊急時にはデスアイランド関連の仕事を抜けて応援に行ける体制作りだな。」

「スケジュールを再確認する。」

「これから一ヶ月告知を続けて、応募を待つ。」

「一ヶ月後に一般オーデイション開始、そこで俺も仕事参加開始。」

「一般オーデイションが終わったら俺は撮影用の大道具・小道具・衣装を作成開始。」

「24人分の衣装が用意できたら一回デスアイランドの舞台になる島に行つて、現地視察とセット準備開始。」

「その後東京に帰つて来て、スターズ組、一般組の順に衣装合わせして……一般組と一緒に島に移動して現地入り、撮影開始。」

「そして一ヶ月で島での撮影を完了させる。」

後はちよこつと東京で別撮り。

こうだな。

現段階でこのスケジュール予定なら、多分最終的には俺の動きはこうなる。

「手塚監督が、朝風君が来てくれるなら美術監督に据えるって」

「えっ……も、もつと軽いオフアードと、てつきり」

「朝風君最近どんどん伸びてるから、プロデューサー受けもいいみたいだね」

嬉しいこつた。

評判が上がってんなら、その評判に恥じねえように技術を上げていかねえとな。

つか、今気付いたが、スターズ参加者の年齢。

「ざつと計算してみました、スターズの撮影参加者の年齢の平均が約17歳です」

「えっ？」

「百城さん。アキラさん。町田さん。和歌月さん。堂上さん。

亜門さん達。石垣さん。合原さん。若狭さん。九条さん。小澤さん。

全員の年齢の平均を取ると四捨五入で17歳、切り上げで18歳です。

多分ですけど主人公にして中心人物である百城さんの年齢に合わせたんじゃないで

しょうか」

「ひゃあ、計算速いねえ」

「一般募集は……若手俳優に限定する、とは書いてありますが、年齢制限ないんですねこの募集。」

若く見えれば20代の俳優でもオーディションで取るってことでしょうか？」

「BLEACH実写劇場版の福士蒼汰仮面ライダーフォーゼの主役、如月弦太郎を演じた。笑顔に不思議な魅力がある、という独特の才能を持つ俳優。若々しい演技が印象に残る爽快な俳優だが、劇場版BLEACHの黒崎一護役（高校生）を25歳の福士蒼汰が演じたことで、「あの歳で高校生演じて違和感無いのが凄い」「あの歳で高校生は厳しくなってきた」等の人それぞれの意見が出されていた。さんみたいなのもアリだと思ってるのか」

「ああ、確かにそれはありそうです」

「あと、10代しか取らないと20代の参加者がうちの石垣さんしかいなくなっちゃやし……」

「……あー」

スターズ12人で20代なの石垣さんしかいないからな。

10代23人と一緒に撮影して、一人だけ20代とか結構地獄な気がするぞ。

「スターズの売れてきている11人とあの百城さん全投入……」

スターズの本気は伝わるんですが、これ撮影スケジュール大丈夫ですか？

島の外と内を皆さんが行き来しても、一ヶ月の撮影スケジュールで相当ギリギリなよ
うな」

「そこで君だよ、朝風君」

「俺？」

「融通が利かないスケジュールの人達がいる。

そういうのがあると、他にしわ寄せが行くのが撮影。

だからそのしわ寄せを受け止められる、融通の利く人が必要なんだ」

「了解しました。それなら俺も、なんとかお役に立てると思います」

「ごめんね。スターズの都合でこんなこと」

「スターズの都合かもしれないませんが、俺の望みでもあります。

表舞台に立つ人達を助けることは、俺が望んでやっていることです」

町田さんが喜ばしそうに笑った。

しかしなんだ。

スターズには珍しくねえが、『芸能事務所主催の映画』をさらつとやってるスターズの
事務所パワーには恐れ入る。

ジュニーズだつてジュニーズ主催の映画は『大勝負』つて報道されてたが、こんなこ
と平然とやる事務所はすげーや。

ただ、そこには間違いなく、アリサさんが育ててきた”当たり外れのない必中の人材”への信頼ってやつがある。

作れば売れる手塚監督。

おそらくは景さんとぶつかっても打ち勝つ百城さん。

日曜朝の大人気俳優なアキラ君を始めとした、若手のエース達。

そして大ヒットコミックスの原作。

『絶対に黒字になる』んなら、俳優事務所主催の映画制作なんざ賭けでもなんでもねえ。

ただの商品作りだ。

デスアイランド。

無人島に漂着した24人の生徒達が放り込まれたデスゲームを描く人気漫画、その映画化。

半分は俺もよく知ってるスターズメンバー、なら残りの半分はどうなるか。はてさて。

やることはそこそこに多かった。

「朝風さん、マスクの内側が曇って見えないんですけど……」

「新人のスーツアクターさんですか？ はい、ちよつとお待ち下さい」

怪獣のスーツアクターさんが、怪獣スーツのマスクを持って来た。

頑張ってるなあ。おつかれさん。

スーツの内部ってのはすっげえ蒸れ蒸れだ。

子供達のために動き回るスーツアクターさんはめっちゃ汗をかき、かいたそばから汗が蒸発し、蒸発した汗がスーツの内側にこもる。

まさにこの世の地獄。

どんぐらい汗をかくのか、というと。

きむち英一昭和の時代の名スーツアクター。スーツアクターだけでなく、他番組では悪の組織の戦闘員・麻薬組織の構成員・ヤクザなど、戦闘ができる悪役もこなす。ウルトラセブンなどで名演を見せたためまたウルトラマンのオファーが来るが、「あんなキツイ一年またやれるか……そうだ！ ギャラを1.5倍要求しよう！ 他にも要求しよう！」と体よく断ろうとしたが、あつさり了承されて逃げ場を失ったという。要する

に年取1・5倍要求にも等しかったわけだが、それでOKが出されるあたりその能力が窺える。さんというスーツアクターがいる。

この人は毎日毎日、スタミナと塩分を補給するニンニクの醤油漬け、疲労回復と糖分を補給するレモンの砂糖漬け、塩を大量にかけた生野菜をバリバリと食べていた。

それら全てが流れ出るほどの汗をスーツの中でかいていた。

ニンニクによって胃は荒れ、英一さんは「これ体に悪いんじゃない？」と思つて撮影終了後に医者に行つたほどだったらしい。

そして医者は言つたという。「塩分不足ですね」。どんだけ汗かいてたんですかね？

スーツアクターは激務だ。俺じゃとてもこなせねえやべーやつだ。

きむち英一さんもプールに自分がいる時スタッフがうっかり電流流して死ぬかと思ひましたよははーみたいなこと言つてたが、それを切り抜けてこそスーツアクター。

タフじゃなけりや生きていけねえ。

が。タフなだけではどうにもならねえことがある。

わんさかかいた汗が蒸発すると、マスクを内側から曇らせる。

スーツの構造によっては覗き穴に蒸発した汗が詰まる。

こいつが最悪だ。

スーツを着たままじや内側は拭けねえ。

拭くにはスーツを脱がなきゃならねえ。

けどシヨ一の最中にそれは不可能で、子供に絡まれてる時もそれは不可能で、スーツが一人で脱げないやつなら助けてくれる人がいない時にも不可能だ。

かといって前が見えない状態じゃ、下手すりや子供蹴つ飛ばして泣かせちまう。

そりや新人さんはどうしていいか分からねえよな。

「誰にでもできる技術なので、見て覚えておくといいですよ。」

特にヒーローシヨ一では、先輩が慣例的に後輩にこれをやらせていますから。

まず、面の覗き穴に当たるアクリルなどの内側に、シャンプーを塗ります」

「シャンプーですか？」

「はい。これを業界用語で『面シャン』と言います。」

時に汗と混ざるので、ハツカなりなんなり、気持ち悪くならない匂いを選んでください。
い。

シャンプーを塗って乾かした部分は結露しないんです。

蒸発した汗が曇らせることはこれで防げます。

シャンプーを厚く塗れば長時間問題なく見えますが、少し見難くなります。

薄く塗ればより明瞭に前が見えますが、あまりにも大量の汗は防げない時もありま

す」

「な、なるほど」

「今日は俺がちょうどいい具合に仕上げておきますね。」

それと、マスクだけでなく体の方のスーツも全部脱いでください」

脱いだスーツアクターさんの汗を拭いてやり、濡れタオルでもう一度拭く。

汗臭えなあ。

こういうのが嫌な人って結構多いから、人が来る前にささつと終わらせておこう。

拭き終わったスーツアクターさんの体に、鎮痛消炎剤を塗ってやる。

「うっ」

「鎮痛消炎剤です。体温を下げてくれるので、自服用に一つ買っておくと良いですよ。」

安いですし、冷房や扇風機の恩恵を受けられないスーツアクターさんには必須です」

「すみません、何から何まで」

「この消炎鎮痛剤は、ヒーローショーの戦隊世代の発明です。」

面シヤンは本家仮面ライダーのカブト（2006）あたりで生まれた技術です。

俺は貰った技術を次の人に渡しているだけです。

この技術を生み出したのは、あなたの先輩にあたるスーツアクターさん達です」

「……」

「技術は仲間を助けるため提供してこそ、です。頑張ってくださいね」

怪獣のスーツを着終わったスーツアクターさんが、俺に深々と頭を下げる。

「……すみません！俺より随分年下の人に励ましてもらおうとは！行つてきます！」
よせよ照れる。

「足元にお気を付けて。転びますよ」

行つた行つた。

さーとと。

次はどこ行くかな。

「朝風！入口近くのごモラコーナーウルトラマンフェスティバルなどで入り口から入った子供達が最初に見る、古代怪獣ゴモラの首から上だけ人形。首から上だけで7m近くあり子供に人気。制作はクリエイターズフェスのような新しいものから国立民族学博物館のような古いものまで、様々なところに大型モニュメントを提供しているクラオン・ビー。で興奮した子供が飛びついてゴモラ折れた！」

「朝風さん！ステージ大道具スタッフが足りないのてこっちに回ってほしいと！」

「英二、あのジオラマちよつと見かけ悪くね？明日以降別の形にしようぜ、私達で」

「朝風え、サンシャインシティのこの構造ちよつとアレじゃね？」

なんで北西に入り口、南西に出口で、順路がその二つ繋いでんのにトイレが南東だけ？

しかも再入場口出入りしないと駄目なやつじゃん。案内板今より良いの作つてくれ」

……次はどこ行くかな！

あくせく動き始めた俺は超速攻でゴモラの一部損壊を直し、巨大バトルジオラマかなり大きなウルトラマン人形・怪獣人形・街のセットで作られた圧巻のジオラマ。近くで撮影しようとする大の大人でも、ウルトラマンを見上げて撮影する形になるほどに大きい。原作でなかった夢の対決もあり、おそらく最低でも数千万クラスの金をかけて作られた最高レベルのジオラマセット。の方に行こうとした。

と、その時。

飲食のコーナーで、見知った顔を見かけた。

「あれ、湯島さん」

なんでこんなところで……いや、待てよ。

そういやウルトラマン関連のイベントはバイトも募集してたな。

短期バイトで時給950円。昔は900円だったが値上がりしたらしい。

昔は昼飯支給で今は交通費支給とかやり方が移り変わってつたのかなんとか。

うーん俺はバイトとかの方はノータツチだったからな……人事部の仕事だったし……まあ多分、湯島さんはバイトに来てるってことでいいんだろう。

そーいや湯島さんは中華料理屋でバイトしてたっけ。

ウルトラマンのイベントのバイトは飲食店カテゴリで求人出してるのがたびたびあつたか。

そんならこの繋がりも不思議じゃねえ……と思いたいが、やっぱり違和感はある。

聞いてみるか。

「どうもこんにちは、湯島さん」

「！ 英ちゃんやん！」

「バイトですか？ 珍しいですね、こういうところで」

「事務所がなー。色々言うんや。」

せやから、少しでも多くの人に顔売れるバイトしてみたらどうやろ、と思て」

ほー。

いや、悪くないと思うぞ。

今回のこれはウルフェスじゃねえが、ウルトラマンフェスティバルは年に一回の開催で10万人以上の来場者数があるのが慣例だ。

確かプロ野球の試合が一試合平均来場者数3万人。

プロ野球で顔出しするより顔を見てもらえる可能性は高え。

「あ、あの時の姉ちゃんだ」みたいな風に後々思い出してもらえたりとかすれば、テレビとかでちよい役で出てもファンが付く可能性が出て来る。

万人単位の人に顔を晒す、つてのはそういうことだ。

湯島さんの笑顔が客の印象に残れば、そいつは必ず後々生きる。

「何か頼みにきたん？　アイスならいっぱいあるんやで」

「じゃあレッドマンアイス以外で。湯島さんにお任せします」

「……せやな」

なーんで棘谷は公式で、こういうイベントで、レッドマンアイスあまりにも容赦のない残虐ファイトで有名になった低予算特撮・レッドマンをモデルにしたアイス。アイスの上に並べられたストロベリーやラズベリーはまるで切り刻まれた怪獣の肉片のように見える、ストロベリーソースは怪獣が流した血に見える。血みどろ肉片どんと来いな、レッドマンを象徴するようなウルトラマンフェスティバル限定アイス。美味しい。売ってるんだろうな……？

「英ちゃんはなんでここに……って聞くまでもないな。お仕事か」

「そうですね。子供の夢のためのお仕事です」

「あはは、私も”子供好き求む”みたいな求人見て、私にもできそうやなって思ってた

んや」

イベント飲食の店員として、バイトしながら地味に知名度を上げる。多分湯島さんとオフィス華野はその辺目論んだ、と思うんだが。

「ただ、良くも悪くもいつも通りの客入りらしいんや。

あんま期待してたようなことは起こらんなあ、と思うてた」

このイベント店舗の客入りからして、望んだほどの効果は出なそうだな。ウルトラマンのイベント全部に10万人クラスの人が来るわけでもねえ。

全ての人が飲食に来るわけでもねえ。

もうちよつと、何か客寄せ要素でもねえと、顔を売るとかの効果が薄くなりそうだな、こここの店のあそこにあるあれは……そうか。今年はここだったか。

「頑張りましょう。お互いに、頑張る以外に道は開けませんから」

「……せやな。私もうつぶいてる時間なんてあらへん！」

そうそう、その意気だ。

俺は店を離れ、スタッフ用区画に入る。

今日俺が持ち歩いていたバックパックからカポック作成用発泡スチロールその場で人形のように彫り、クライアントに大雑把な完成形をとりあえず見せるために使う。を取り出し、削って、塗装して、初代ウルトラマンを作った。

「朝風君、ちよつとウルトラマンスーツのカラータイマーの調子が悪いんだが」

「はい、チェックして直します。見せてください」

ささつと直して、また待機。

そこそこ柔らかい木があつたんで、彫つて塗装。今度はウルトラセブンを作った。

「英二君、ちよつとバトルジオラマの調整行つてくれないかな?」

「分かりました。他の人と連携します」

他の人の応援に行きつつ、戻つてきたらエンボスヒーターで透明赤色の塩ビを加熱し、餡細工に見えるウルトラマンジャックの人形を作成完了。

おお、いい感じの出来になった。

「ウルトラライブステージの人が足りん。ちよつと行つてくれ」

「分かりました。俺は小道具担当で良いんですね?」

ヒーローショーで壊れた小道具を、グッズ販売エリアで買ってきたウルトラマンの玩具を素材にセコセコ直す。

帰つて来てバッグを漁ると、ロウがあつた。

こりやいい。

ロウを削ぎ、切り込みを入れ、擦るようにして形成。筆で着色する。

ウルトラマンA、ウルトラマンタロウ、ウルトラマンレオの人形を作成した。

おっ、調子が出て来たな。

速さと出来が徐々に上昇してきた。

「英二君、さつき修理頼んだスーツのことなんだけどゆっくりで良くなったから……」

「もう直つてますよ」

「うおっ」

「通気性良くするためのメッシュ部分が破れてただけでしたので、楽でした」

バルーンアート。

細い風船をねじって色々作る芸術。

俺もまだプロの平均値を超えられてねえ、匠の技の集合技術体系だ。

しっかし、風船をある程度形にして、表面を塗装するとちゃんとウルトラマンに見える

るもんなんだな……驚いた。

とりあえずウルトラマン80とゾフィーも完成。これで兄弟揃ったか。

風船の表面はゴムだから、塗料次第では溶剤にゴムが溶けて破裂しちまう。

そこは注意のしどころだった。

なんかちよつと物は試しつて感じだったが、また俺の芸風が増えた気がする。

「すみません朝風さん、人手が足りないばかりに」

「迷子が複数箇所で何人も出ただけじゃないですか。」

俺は子供の手を引いただけですよ。

このくらいなら、いつでも緊急の人手に呼んでください」

ぼちぼち仕事が忙しくなって、休憩時間を全部物作りに割くのも難しくなってきたな。

俺の休憩時間が他の人の援軍に使われることが増えてきた。

まあいいか。

描いて描いて、よし完成。

ウルトラマンティガ・ウルトラマンダイナ・ウルトラマンガイアが邪神ガタノゾーアに立ち向かってるファンアートだ。

縦1m横1m。再確認良し、設計通りだ。

「八面六臂の活躍ご苦労さん。皆の総意だ、朝風はしばらく休んでおけ」

「ありがとうございます。では、お言葉に甘えさせていただきます」
時間こんなに貰っちゃっていいのかね？

と思いつつ、最新作ウルトラマンR／Bのウルトラマンロツソとウルトラマンブルの
アートパネルを完成させる。

要らんパネルあるって話聞いて、ダメ元で聞いてみて良かったな。

まさかタダでパネルが貰えるとは。

塗料ならいくらでも持ってきてたし、これならいくらでもアートが書けるってものだぜ。

さて、休憩時間中にアイスでも食いにいくか。

「おお、朝風君。少しいいかね？」

ん？

おやあなたは企画のプロデューサーさん。

湯島さんと二人で何話してるんですかね。

「どうかしたんですか？」

「なんか私の名前宛てで、あのコーナーに寄贈の人形がいっぱい来とったんや」

湯島さんが指差したのは、通路側からも飲食店の中側からも見る事ができる、一般人から贈られたファンアートとか人形とかを飾るコーナーだった。

子供の精一杯の絵とか、プロのファンアートとか飾っておくやつだ。

こいつが中々需要があつて、こういうのをわざわざ見に来る人もいる。

公式の絵が上手くても何とも思わないが、ファンアートが上手いと興奮する、っていう人は何故か一定数いるもんだ。

「湯島君の名義宛てに贈られた人形がたいそう出来が良くてね！

風船や口ウに木彫りに絵と、種類も実に多彩だ！

今日に備えて色々と作ってきたに違いない!

おかげで客がどんどんこちらの店に来てくれてるんだ。

なんでも、湯島君はテレビに出ている女優の雛だそうじゃないか。

ならばあれは女優としての彼女のファンが贈った物だと思っただが、君はどう思う?
」

「一定以上の力量がある者ならひと目で分かりますよ。

あれは間違いなく湯島さんのファンが作ったものですね。

ファンが献上するために作ったものって特徴が少し出るんですよ。

献上するために作ったものというか、作りに少し癖が現れるんですよ

「やはりか、君も湯島君のファンの手による物だと思っかね」

間違いないな。

「客も集まった、湯島君の顔を覚えて帰った者もいるのではないかな。

そのファンの狙いは大まかに成功したと見ていいだろう。

いやあ、それにしても売上への貢献がめざましい!

これは通常の時給以外にも特別ボーナスを出さなければならんな!

「そうですよ。

その人形や絵を見に来て店に入ったお客さんいたんですよ?

なら、伸びた売上は湯島さんの功績と言つていいはずですよ。

ちよつとは給与に色付けてもバチはありませんし……

あ、そうだ。

給与を大目にした恩を売つて、いつか撮影の仕事を受けてもらうのもいいかもですよ」

「うむ、顔と名前は覚えておこう」

まあプロデューサーからすりゃ、女優の雛なのに既に熱烈なファンがいるつてのは好印象だよなあ、知ってる。

近年のプロデューサーは嫌いな人の声の数より、金を出す熱烈なファンの数の方が重要だつて考えでやつてるもんな、知ってる。

あいたつ。

湯島さんに肘で突かれた。

なんで？

「英ちゃんはさあ……」

湯島ア！　なんだその表情は！

「英ちゃん、そういうところやねん」

何その顔？

言いたいことあるんならハッキリ言えよ。

あー疲れた。

……と言いたいところだが、あんま疲れてない。

後半戦はかなりスムーズに移行してて、イベントの優秀なスタッフがキャパオーバーになることもなく、多くのアクセシビリティを的確に処理していった。

俺あんま要らなかつたな。

最終入場17:00、イベント終了17:30を迎え、まったりとジオラマについて検討して、明日以降の改善点を検討しつつ19:00まで各セクションの人と話し合う。スーツと人形のチェックまでしたら20:00になっちゃった。

明日も欲を言えば06:00くらいには会場に入りてえが、それで早め早めに段取りした今日みてえに後半俺の仕事無くなりそうだ。どうしよう。

「遅かったやん」

「え」

「女の子を待たせるなんてどうかと思うんやけど」

え？ 湯島さん？ ……待つてたのか？

バイトの人達は18時解散だったはずだよな。

ずっと俺を待つてたのか？

「あの……俺に、何か御用でしたか？」

「ちよつと話したいなー、つて思てな」

そんだけか。

待たせてすまん。

待つてると知つてたらさっさと仕事切り上げてきたぞ。

どうせ明日早くに来れば良いだけの話だったからな。

二人して並んで歩き、帰路につく。

「英ちゃん、一緒にやった怪談映画の撮影覚えとる？」

「覚えてますよ。俺は幽霊のマスク制作を担当してました」

「私は幽霊に殺される女の子役やな。」

でも、私の演技が悪いって大人の俳優に怒られて……

才能無い、やる気が無い、役者辞めろて、散々言われて泣きそになって……

その時、英ちゃんが割って入って言ったんや。

『あなたの演技より湯島さんの演技の方が俺は好きだ』って」

「ああ、あの時の……」

「大人の人めっちゃ怒ってたやん。」

鼻根目にも私の演技は上手やなかったし、大人の方が上手かったもんな」

「あの時は、話をややこしくしてすみません。」

あの大人から湯島さんへの心象も悪くしてしまいました」

「ええてええて。」

でもあん時の英ちゃんはもう見られそうにないなあ。

あの頃のトゲみたいなものももうどこにもあらへんし。

どんどん周りに気を使って、周りに合わせられる人間になってった」

言葉の裏には暗に、「あの頃の朝風英二も嫌いじゃなかった」という意図があるよう

で、結構気恥ずかしくなってきた。

直接言わなきゃ良いだろの精神か湯島！

なんか何となく伝わってるぞ湯島さん！

「今は私も、あん時の英ちゃんのことの方が分かるようになったんや」

「何をです？」

「英ちゃん、『湯島さんの演技の方が上手い』とは言わなかったな。

あの大人は気付いてへんかったみたいやけど。

上手い下手で英ちゃんは嘘ついてへんかったって、よう分かった」

「……」

「私を庇ってはいても、庇ってるだけで、褒めてへんかったんや」

あー。

クソ。

これだから、俺はトーク苦手だって言うんだ。

何も誤魔化せてねえじゃねえか。

「英ちゃんがあの時一番残酷で優しかったんやなって、後になってからよう分かった」

「……すみません」

「ええんや。私はあの時、嬉しかったから」

夜空を湯島さんが見上げる。

子役からずっと芸能界にいる役者には、他の人には理解できない苦しみがある。

俺は。

この人にとっての俺は、どっちの役割を果たしてたんだらうか。

湯島さんの苦しみを増やしてたのか。減らしてたのか。

湯島さんに聞いたって分からねえ。

きつと、肯定的なことしか言わねえはずだ。

そもそもきつと……湯島さん本人にすら、俺の存在が”湯島茜にプラスだったかマイナスだったか”の冷静な判断なんてくだせねえはずだ。

俺はこの人と同じ速度で芸能界を走ってこなかった。

そういうことを、最近まで意識すらしてなかった。

付き合いは長くても、仲が良くても、俺は時々そういう余計なことを考えちまう。

「英ちゃんがあの時言ってくれた言葉が。

あの時私を感じたものが。

どうしても俳優を辞められへんことへの答え、みたいな気がするな」

「え？」

「認められたいんや、私達は。今ここにいることを、周りの人達に」

湯島さんが、夜空に手を伸ばす。

届きそうにもない、と思っちゃまった。……なんで、俺は、そんなことを。

「撮り終わって。

オールアップの花束渡されて、拍手されて。

おめでどう、ありがとう、お疲れ様、って暖かく言葉かけられて。

『周りに認められる瞬間』が嬉しくて、楽しくて、その喜びが胸に染みて。だから辞められないんやな。今更なんも、捨てられへんのや」

俺達は呪いをかけられている。

監督も、俳優も、造型も。

一般人が呪われてないなら、俺達はきつと一人残らず呪われている。

星を見上げるように目指した”それ”を、諦めるなんてできやしねえ。

湯島さんが、陽気な少女を演じるように、ニヤリとした笑みを浮かべる。

「私、デスアイランドっちゅうやつのおーディション受けるんや」

「奇遇ですね。俺も誘われてるんですよ、あれ」

「え、ホンマに？ もし受かったら……」

映画一本、私がメインキャラで英ちゃんやんが美術で、つて仕事久しぶりやね」

「かもしれないね」

「ま、受かったところで24人の一人で主人公でもないんやけどな。

それが今の、私の精一杯。

でも私は、このオーディションに全力で挑んで……結果次第で、今後の身の振り考え

るわ」

「……湯島さん」

いつか、湯島さんが遅い足で走り続けるのを辞めるまで。
俺は彼女に手を貸すことができる。

いつか、湯島さんが歩みを止め、この世界から消えた時。

俺達の繋がりは、きつと消える。跡形もなく。

あの頃、子役だった湯島さんと俺の周りには、多くの子役がいた。

今はもう、そのほとんどがこの世界から消えている。

湯島さんという友人まで消えた後、俺は……俺は、どうなってんだらうか。

友達ができるたびに俺の中に何かが増えて、一人業界から消えるたび、俺の中から何が削れている気もする。……気のせいかな。

でもやっぱ、人との繋がりが消えるのは、寂しいんだ。本当に。

「英ちゃん、オーディションでは私を応援してな?」

「そりやもう、他の候補者の誰よりも応援しますよ!」

「誰よりもかー、そら嬉しいなー、ふふ」

飛び抜けた天才が業界から消えることは悲しい。辛い。惜しい。

そう思う理由は、理論的に説明できる。

じゃあそうじゃない俳優が業界から消える時、いつかの日に笑いあった人が業界から消える時、俺の胸の奥に湧くこの痛みはなんなのか。

分からん。

俺はこの感情に、なんて名前を付けりゃあいいんだ？

「夕飯奢りますよ。何が良いですか？」

「私が知ってる美味しいお好み屋でええかな？」

「お店がオリジナルのタネ出して、客が自分で作るとこ」

「はい」

なあ、親父。

くたばった親父。

……まだ俺なんかじゃ超えてねえと、そう信じてえ親父。

あんたくらい誰か一人に惚れ込めば、他の余計な何もかも忘れて、悩まないですむ人間になれたりすんだらうか。

俺は、今は、あんたのそれが、無性に羨ましい。

突破口をどこに見出すか。

そこが問題だな。

黒山おれの名前になんざほとんど力もねえ。

そもそも、権力闘争なんざやってこなかった俺だ。

さつさと夜風をねじ込むなんて力は俺にはねえ。

あるのは数えられるくらいのコネと、世界一の映画撮影能力くらいのもんだ。

スターズ主催『デスアイランド』。

一般応募の俳優と、百城千世子が共演可能な奇跡みたいなチャンスだ。

こいつを逃す手はねえ。

百城千世子含めた23人分の技術を、夜風に一気に吸収させてやる。

今の夜風と主演助演で真っ向からやり合えんのは、同性同年代じゃあいつだけだ。

百城千世子だけだ。

この機を逃せば、夜風を助演出演で一気に成長させるチャンスはいつ来るか分からん。

だが問題がある。

スターズ主催ってことは、審査もスターズだ。

なら、社長意向で夜風が落とされる可能性が高え。

監督の手塚には真正に評価しろって言ったが、さてどうなるか。おそらく、監督の手塚が夜風に肩入れすんのは三次審査以降。

夜風が手塚を変える可能性は大いにある。だがそれも三次以降だ。

手塚がああ面白味のねえやり方を変えるかもしれないねえのがそこから以上、一次の書類審査と二次の映像審査はどうにもならねえ。

俳優発掘オーデイションであんな下の方の審査から自分の目でチェックしてるババアの目をくぐり抜けんのは難しい。

夜風は通すな、くらいは下達してるだろう。

ならどうやって書類を通す？

どうやって映像審査を通過させる？

スターズの従業員は100%ババアの忠実な配下だ。

手塚だって夜風の演技を見て何か心境が変化でもしねえ限り、そうだろう。

複数の職員の中の誰か一人が「夜風」の二文字を見ただけで、夜風の顔を見ただけで、一次審査と二次審査で引つかかって落とされるのは間違いねえ。

となると、どっかで工作が必要だな。

手塚が監督権限で夜風をねじ込める段階まで、夜風を連れて行く白馬の王子様みたいな奴が。

……そーういやいたな。

夜風にベタボレな奴が。

スターズ事務所に簡単に出入りできる奴が。

問題は、あいつがスターズ側の人間だつてことくらいか。

あいつがこの頼みを聞くかどうかは半々くらいと思うが、とりあえず奴を電話で呼び出す。

「おいエージ、ちよつと来い」

『今ちよつと大事な食事なので無理です』

「は？」

『後でいいでしょうか？ 大黒天事務所の方に行きますよ』

「お、おう。お前がこんな強い口調で断わんの珍しいな」

『ちよつと色々とありまして。何用ですか？』

「お前に夜風の仕事を用意する手伝いを」

『……後で必ず行きますから、今は食事させてください。後で必ず行きますから』

そうだ、それでいい。

周りの常識だの一般的な感覚なんかには惑わされんな。

お前の道はお前が選べ。

お前の幸福はお前が選べ。

”常識的に考えてそつちの方が幸福だから”なんて考えじゃ、”役者は皆不幸になる”なんて言つてたあの幸せ押し付け星ババアと変わらねえ。

少なくとも、お前が本気の本気になつていつても、俺に夜風に終に、お前の才能を分かつてる奴らはお前から離れて行つたりしねえさ。

最高の映画をお前と撮り続けてやる。

夜風に惚れ込んでるんだろ？

そこまで惚れ込める相手つてのはな、人生で何人も出会えるもんじゃねえ。

心底惚れ込んだその感情を、適当に終わらせたりなんざすんじゃねえぞ。

お前が人でなし、ろくでなしになつたくらいで離れていくような奴らと居るくらいなら、夜風に一途に惚れたままでいいじゃねえか、なあ。

「優しい人に報われてほしい」と芸能界で願う人間ほど、愚かで間違っている存在はいない

現在黒さんと通話中。通話しながらスタジオ大黒天に向かっている最中だ。

黒さんに景さんがスターズ主催映画『デスアイランド』に潜り込めるよう、俺にスターズでちよこつと工作してくれないかと頼まれた。

えー。

なんでやねん。

まあやるけど。

この人強制はしないが、目の前にチラつかせる餌のチョイスが絶妙なんだよな。

おかげで良いように使われる……いや、それも違うか。

俺が”やりたいと思うこと”を見抜くのが上手いんだ、この人は。

『監督の手塚にはもう話を通してある』

「正気ですか？」

まだ無名な景さんを名前見ただけで拒絶するのはスターズだけです。

スターズは言わば今唯一の反夜風景派閥ですよ？ 分かってますよね？」

『おう』

あえて、つてことか。

確かに景さんの”どんな状況でも主演級に目を引いてしまう”つて欠点を解決しな
いまま、一気に経験積ませて成長させるには、優秀なスターズの集まる映画は最高かも
な。

そもそも他の映画で景さんを的確に成長させていける道がほぼねえ。

俺もそういうのには賛成だ。できる限り協力してえ。

だがなあ。

「俺、アリサさん達には結構恩があるんですよ」

『ああ』

「俺がそっちを優先して、裏切るような真似すると思いませんか？」

『お前がどうするかはお前の自由だろ』

うーわずつりー言い方。

でもしようがねえ。

見透かされてんなら、誤魔化したつてしようがねえか。

「俺は俺のやり方でやります。良いですね？」

電話の向こうで、黒さんがくっくくと笑った。

俺はこの男に、どんぐらい見透かされてるんだらうか。

『俺はな、お前がお前らしく在ることを知ってたよ』

「……何を」

『道を”作れ”。その道を進んだ夜風が、お前が見たいものを見せてくれるぞ』

「——」

俺が見たいもの。

……他の誰も見せられない、あの人だけが俺に見せてくれるもの。

「こういうのを、悪魔の類との契約って言うんでしょかね」

『悪魔に魂を売った奴は願いを叶えるもんだがな。お前の願いはなんだ？』

「父を超えることです。

景さんと出会ってから、凄く遠く感じていたそれが、近くに感じられるようになりま

した」

『そうか』

自分が成長していることを実感できると、改めて思うこともある。

もつともつと、行けるところまで行ってみたい。

俺が思うに、黒さんは他人の才能を伸ばすために劇薬をぶつ込めるタイプだ。

「黒さんは強引で自分勝手ですけど……」

映画至上主義で性格があまり良くないだけですよね。

景さんとかはきつと、黒さんと出会えたことが一番の幸運だったんでしょ」

『おい、それは貶してんのか?』

「褒めてるんですよ」

アリサさんと黒さんが合わない理由は、心底よく分かる。

「少しほっとすることもあります。」

時々、”お前の影響力考えて振る舞い考える”みたいに言ってくる大人もいますが

……

黒さん、そういうこと全然言いませんから。

この俳優お前好きだろとか、好きにやれとか、これやってみろよお前とか。

そういうことばつからね。

周りと上手くやれとか、偉い人には逆らうとか、礼節を弁えろとか絶対言わない。

だからほんつとくに気が楽です。あ、褒めてるんですよ?」

そういう意味では本当に、黒さんはスターズのやり方に絶対馴染めないと思います」

『俺よりガラ悪くねえお前に、俺が言うことなんてねえよ』

多分、多分だが。

黒さんの人生って、本当に楽しいんだろうな。結構羨ましくなる。

大黒天に行く前にスターズ事務所に寄ることを、電話で黒さんに伝えておく。

善は急げだ。

受付の人に話を通して、階段を上がって社長室に向かう。

こういう時顔パスで行ける信用があると楽だな。

「何の用？」

社長室のアリサさんの前に立つ。

単刀直入に言った。夜風景にオーデイションを受ける権利くらいはやってくれと。

「駄目よ」

「ですよね」

「私が認めるわけがない。あなたも分かっていたことでしょう。それで、ここから話す

本題は？」

黒さんといい、この人といい、見透かしてきやがる。

まあいい。

どうせ、本当の勝負はここからだ。

「取り引きがしたいんです」

「交渉材料は？」

「景さんにオーデイションを受ける権利をあげてください。」

そうしたら俺はデスアイランド後、今の事務所を引き払って、スターズの専属になります」

「——なんですつて？」

「何でも言ってください。」

景さんに二度と手を貸すなど言われたらそうします。

スターズとだけ仕事しろと言われたらそうします。

出張しろと言われればどんな現場にも行き、誰の靴でも舐めますよ」

悪い話じゃねえだろ？

俺の全能力を、スターズに渡す。

前からアリサさんが欲しがってた手駒だ。

それを景さん素通し一回で手に入れられるなら、安いもんだろ？

俺が景さんに手を貸すのを邪魔することだってできる。

景さんを業界から締め出したいなら、悪くない一手のはずだ。

「悪い話ではない……けれども。あなたがそこまでする意味はあるの？」

「あります」

「この世界では惚れ込んだ方が負けよ。

夜風景はあなたが献身するほどには、きつとあなたに報いない」

いいだろうがよ、別に。

「能面研究家の上村保雄1919年生誕、1996年没。能面作家を父に持ち、物理学校数学科を卒業、高校教師を経て、大学教授となった。芸術選奨文部大臣賞の受賞経験有り。著作も基本お硬い彼が、仮面ライダーと女優の相関性について少し触れていたことはあまり知られていない。さんはご存知ですか？」

「いいえ」

「上村さんは、女優が被る役の仮面と、仮面ライダーの仮面に近似性を見ていました」

「被ると別の存在になる、ということ？」

「はい。被ると被る前にはできなかつたことができるようになる仮面、だと解釈していいました」

仮面を被って別人になる。

仮面を被って活躍する。

視聴者が皆、被られたその仮面を見る。

それがルールだ。

俺は昔からずっと、仮面を被ったヒーローにも、仮面を被る名俳優にも、心惹かれて

いた。

「引き続き、その方の考えから引用すると……」

古来から、仮面は悪霊を退散させ幸福をもたらすものだったそうです。

悪を倒し幸をもたらす仮面ライダーの仮面も、その一種であると。

仮面ライダーが仮面を被ると、テレビの中で物事が解決され、視聴者に幸がもたらされます。

女優が仮面を被ると、テレビの中で物事が解決され、視聴者に幸がもたらされます」

「……憧れるように言うのね、朝風」

「憧れますよ。」

俺には決して被れないものですから。

仮面を被るあの人達に、俺は憧れ、敬意を持つてるんです」

アキラ君も。百城さんも。景さんも。他の皆も。

それぞれが違う仮面を使い、違う仮面を被っている。

ウルトラ仮面に憧れる子供も、女優に見惚れる大人も同じだ。

俳優達が見せようとして魅せたその仮面に、心奪われている。

「惚れ込んだ女優に全財産捧げるファンと同じです。」

見返りが欲しいわけじゃないんですよ。

心底好きだなあと思えたら、その人の損得が、自分の損得のように思えてくるんです」

「惚れ込んだ俳優のために物を作ること。

惚れ込んだ俳優のオーディションのために動くこと。そこに何の違いがあるでしょうか」

”夜風景が報いない”、だ？

”惚れ込んだ方が負け”、だ？

上等だ。

それでいいだろうと、俺は胸を張って言い切れる。

「……景さんも、親が両方いないらしいです。俺と同じで」

「同情していると言っても言いたいのか？」

「いいえ」

大人。親。なあアリサさん、俺の目に、あんたはどう見えてると思う？

「黒さんも。アリサさんも。」

お互いに対して、

『お前のやり方は押し付けで独善だ』

って思ってると思うんですけど……俺に見えるお二人は違います」

嫌いじゃねえんだよ、二人のどっちも。

「お二人とも、俺や景さんの未来と幸せのこと考えてくれてるんですよ。

俺の将来のこととか考えてくれてるんですよ。

ずっと俺の将来に興味とか持ってなかった母さんと違って。それが嬉しいんです」

「――」

「大人が自分の将来のことを真剣に考えてくれてるのって、なんだか嬉しいじゃないですか」

同じように親がいないからって、景さんが俺と同じ考えの人間だなんて思わねえよ。でもさ。

景さんの将来のことを考えてる、持論を絶対に譲らねえ黒さんとアリサさんって二人の大人がいることは、なんだかんだちよつとは幸せなことなんじゃねえかな。

景さんが自分の意志で人生を選択する過程で、もしかしたら黒さんやアリサさんが邪魔になることもあるかもしれねえけど、それでも、俺は。

まだ10代の子供の将来を本気で考えられる人が、悪人だなんて思えねえんだ。

面倒臭え二人だとしても、悪だなんて思えねえ。

黒さんとアリサさんに独善の要素がねえとは言わねえよ。

だけど、思いやりがねえとも言わせねえ。

黒さんは天才の舞台の世界にある幸せを知ってて、アリサさんはそこにある不幸を知ってる、それだけの話じゃねえか。

「だからどつちも蔑ろにできないんです。

それに何より、俺は景さんにもっと上に行ってもらいたい。

なら俺がこういう選択をするのは必然で、これ以外に道は無いんです」

アリサさんが黙り込む。

眉間を揉んで、手で顔を半ば覆う。

困り果てたような、疲れ果てたような、そんな表情だった。

「……黒山が自分の道に引つ張り込もうとするわけだわ。今更に理解した」

「え？」

「『一緒に行こうぜ』と言ってるのよ、黒山は。

映画史に残らない便利屋扱いの職人ではなく……

他の俳優の引き立て役に終わるただの裏方でもなく……

他の誰でもない朝風英二の名前を、映画史に刻もうとしているのよ。自分と共に」

「いや、そんなまさか」

「あの男はそういう男よ。あの男は傲慢だから」

まさか。……無いとは言い切れねえな、あの人の考えは読み切れん。

「いいわ。一度だけ、一次審査と二次審査での確定脱落を無しにしてあげましょうよしー！」

「けれども、それだけよ。」

一次審査と二次審査で落ちればそこで終わり。

三次の演技審査で手塚が落とせば、それでも終わりよ。

夜風景の演技には極端に汎用性がない。

オーデイションに合わせた最適化など、土台無理な話でしょう。

堅実な路線を好む手塚の作風と、夜風景の演技が合うとも思えない」

「俺は景さんを信じてます。あの人は信じれば、名演で応えてくれるはずですから」

アリサさんが目を細める。

「女優に惚れ込んだ造形屋のその台詞ほど、信頼できるものは……」

アリサさんが溜め息を吐く。

「……信頼できないものはないわ」

俺との取り引きに応じ、景さんを通すだけは了承したアリサさんの表情は。

隠しきれない、かつての日に刻まれた摩耗の跡が見えた。

翌日。

スタジオ大黒天に俺が車で運び込んだものを、事務所で屯していた夜凧家三人と、黒さんと柗さんが見つめていた。

「送るエールの代わりのケーキです、どうぞ」

「お城にしか見えないんだけど……」

「縦1m、横1mのお菓子の敷地に、高さ1mのお城。どうぞ、食べていいですよ」

「待って、頭が混乱してるの」

夜凧さんの目がぐるんぐるんしてる。

良いから食えよ。

この和風の城はオーデイションを控えた景さんへの応援の品として持ってきた菓子なんだぞ。

肌色の土地。

そびえ立つ漆喰色と紺色の二色の城。

生える木。敷地を囲む塀。

和風の城、お菓子の城だ。

素材は市販品！ ゆえに味は市販品相応。

最近気付いたんだが、市販品を素材に使えば味は市販品相応で、でも造型のレベルは俺基準のままだから、スイーツアートって汎用性かなり高いな。

料理の腕が平々凡々な俺でも、なんか料理の達人みたいに見えるんじゃない？

いや実際はそんなことねえんだけど。

「ほら食べていいよルイ君、レイちゃん」

「この壁、チョコだー！」

「食べられるー！」

「塀っていうやつだから覚えておこうね」

さあ食えどんどん食え。

どうせ一人で食い切れる量じゃあねえし。

「あつ、この地面みたいに見えるの、底が浅いしプディングだ……」

そっだぞ柘さん。

しかし真つ先に地面にスプーン伸ばすのは流石っすね。

「おいエージ、これへクセンハウズドイツのお菓子。いわゆる『お菓子の家』型のお菓子のこと。か？」

「モデルの一つではありませんね。

あ、特撮映画へのリスパクトもちよつと入ってますよ。

ほらこの瓦を見てください。

この瓦を八ツ橋せんべいの八ツ橋。茶でやや硬い。で作ってるんですよ。

大魔神怒る1966年公開の特撮映画。縦22m横40mのセットを用意し、鉄板2000枚・丸太500枚・トラック十数台分の火山岩を運び込むなど、桁外れの規模の撮影が行われた。のミニチュア技術でして、失われた技術の一つつてやつです」

「なるほどな。その下のチョコと味を合わせてんのかこれ」

「特撮の歴史は食べるもの作りの歴史ですからね。

電王のデネブ仮面ライダー電王で、とある残酷な設定に繋がる『侑斗をよろしく！』のギミックに使われた飴。食べられるものと食べられないものがある。の飴。

鎧武のヘルヘイム見かけこそ不気味だが味が無い。食べると不味い。元パティシエである駆紋戒斗役の小森豊は「言ってくれば僕がもつと美味しく作ったのに」とコメントしている。の実。

最近だとザミーゴザミーゴ・デルマ。快盗戦隊ルパンレンジャーVS警察戦隊パトレンジャーにおける最大の宿敵。人間態では氷をかじる癖がある。ただただの氷の塊をかじることにはそこそこの顎の筋力を使ってしまうため、ザミーゴがかじる用の氷は小

道具が担当して作成している。の氷とかも。

他にも色々々と、たくさんの物が作られてきました」

「技術のレベルは上がったか？」

「はい。色々と試せました」

食べ物で遊ぶなって怒られそうだが、食べる奴が楽しめたなら、残さず食いきれたなら、まあいいだろうって思わなくもない。

「墨字さん墨字さん、このお城チョコとクッキーですよ。芯にポッキーまで入ってます
！」

「やめろ終、女子のノリをこっちにまで強制すんな！

強度計算はいつものエージらしいな。

お、この木に見えるやつ、レープクーヘンドイツ系のお菓子。ドイツではお菓子の建物や像を作るのに使われる。蜂蜜などで甘みをつけ、シナモンなどの香辛料や果物の皮で風味付けする。とチョコと……葉の緑は抹茶か」

しかしアレだな。

食いながら分析してるプロ二人見ると、美味しい美味しい言いながら何も考えず食ってる双子の子達の純粹さが際立って見える。

純粹さを失っちゃった大人ってのは悲しいもんだぜ。

ん？

どした景さん、俺の袖引っ張って。

その右手に持つてるのは……おお、お目が高い。

飴細工で作ったクリスタルの木だぞ。一本しか作ってないけど良い出来だろ。

「英二くん、英二くん」

「どうかしましたか？」

景さんが、透き通るような表情で飴細工の木を見つめる。

「綺麗ね」

お前の方が綺麗だぞ。

「私、英二くんが作ったもの、好きだわ」

「ありがとうございます。そう言われるたびに、俺はもっと頑張ろうって気になります」

おいどうした、木をじっと見て。

さっさと食っちまえよ。

「食べるのがもつたいなくないかしら」

「ええと、また見たければまた作りますよ」

ん、なんだ。景さんの雰囲気は妙な気がする。

「英二くんにとっては、自分が作ったものは全部いくらでも作れる、量産品みたいなもの

「？」

「？ いえ、そうじゃないものもありますが」

「たとえば？」

「ええと、そうですね。景さんにあげたあの指輪とか、ああいうものはワンオフです。代わりは作ってませんし、力も入れているので、この世に一つだけのものですね。はい」

「そうなんだ」

うんうん頷く景さん。

俺に分からん形で一人で納得してんのやめろ！

あ、とうとう飴細工の木が食われた。

「でも私、こんな素敵な応援されても、返せるものがないわ」

「オーデイションでの景さんの頑張りが俺の報酬になりますよ。」

ただの応援ですし、何か返してもらいたいわけでもないです。

……あ、そうだ。

できればいいんですけど、景さんに周りを見てから演技してもらいたいです」

「周り？」

「周りと競うのはいいです。」

でも、周りに飛び蹴りとかをしなくてほしいんです。

景さんの演技の性質上、難しいのは承知してるので、お願いです」

「あう」

景さんがあわあわしでした。かわいいな。

「そういうことになったら、景さんまで失格になってしまいます。

それどころかオーディションの他の人が怪我してしまいかねません。

デスアイランドには俺の友人も参加しています。

俺はその友人を一番に応援しています。

景さんがその人を怪我させ、景さんが罰されたりすれば、俺はどういう顔をすればいいのかわからないのか」

「え？！」

「え？！ あれ、今俺何か変なこと言いました？」

待て、どこに引っかかり覚えたんか。

「英二くんって、私以外にもそんなに応援してたんだ」

「え？！」

「ううん、なんでもないわ」

「ともかく、頭の隅にでも置いておいていただけると嬉しいですよ」

「うん、約束する。私、誰にも迷惑をかけずに受かってみせるわ」

良かった。

何の確証もねえけど、少し安心できる。

ほっとしていた俺の手を掴んで、終さんが事務所隅に歩いていく。なんぞ？

「けいちゃんをちゃんと口で応援しないの？」

「え？ 景さんは俺の応援の声が一番要らない人では。

エール代わりのお菓子はちゃんとこうして作りまししたし。

わざわざ応援しなくても、俺は景さんがこのくらい一発合格で通過すると思ってます

し……」

わざわざ内緒話するほどのことじゃねえだろ。

え、何その顔。

コーラだと思つてコップの中身一気飲みしたら醤油だったみてえな顔だな。

「エージくんさ、それ応援してる人にも応援してないけいちゃんにもナチュラルに失礼」

「え？ ……あ」

「けいちゃんを受かると信頼してるから応援しない。

その人のことは受からないかもと思つてるから応援する。

それじゃ駄目でしょ。どっちも応援の言葉贈つて、どっちも信じないと」

「……です、ね」

「もー。応援するのもしないのも、どっちも根底が好意で信頼だからタチ悪い……」

いつの間にか、応援の言葉なんてなくても、景さんはさっくり受かると信じきってた。このまま当日を迎えてたら、オーディション現地で湯島さんだけ応援の言葉かけて、景さんにはうっかり何も言っていなかったかもしれないねえ。

危なっ。

そうなつてたら、あまりにも失礼なことになつてたぞ。

「気を付けなよエージくん。」

凄く優しい人と凄く他人に興味が無い人つて、振る舞い同じだからね。

他人に迷惑かけられても微笑んでるだけの人つてそんな感じだからね。

エージくんはどつちにもなりそうだし、どちらでもある人にもなりそうだから」

「……肝に銘じておきます」

「こえーこと言うなよ。」

景さんに応援の言葉をとりあえずかけておこう。

「気負わない程度に頑張ってください、景さん。応援してます」

「でも一番に応援してるわけではないんでしょう？」

「そうですね、すみません。一番に応援するのは、その友人との約束なので」

「そう……ええ、頑張るわ。」

こんな美味しいお菓子を貰ったんだから、ちゃんと頑張らないと」
「その意気です」

「周りの人にも迷惑をかけずに受かる……うん。ちゃんと覚えたわ」

応援された景さんが、独特の動きで何やら自分に言い聞かせている。

……あ。

最悪だ。

今気付いた。

俺、景さんが受かることは信じてたが、景さんが他人を傷付けないと信じきれなかったのか。

信じるっつーのは……なんか、難しいな。

俺の中で、俳優が二種に区分されてる。

『信じてる人』と、『信じたい人』に。

オーディションに受かると信じてる人と、オーディションに受かってほしいと願ってる人に。

人間の心つてのは、なんでこう面倒臭え構造してんだよ。

信じられる人は頭でどうこう考えなくても信じてるし、信じたい人は頭で頑張って色々考えねえと信じきれねえ。

クソ。

天才なら、能力が高い人なら、こんなにも簡単に信じきれるってのに。

……信じられる人に、惚れ込んだ人に、一途なだけの人間になりてえな。

「エージ」

黒さん？ どうかしたか？

「分かってると思うがな。」

「デスアイランドの一般採用枠は12。」

「夜風が受かるってことは、お前の友人が受かるかもしれない可能性が減るってことだぞ」

「……分かってます」

「割り切れる心の姿勢になっちまった方が楽だぞ」

「そうだな。」

「民衆が相対的にも絶対的にも優れた作品を求める以上、俳優は何かの形で絶対的にも相対的にも優れた人間が求められる。」

「だから、業界の形は変わらねえ。」

「何も変わらねえ。」

「……だから、『本物』じゃねえ皆に業界に残って欲しいって気持ちは、ガキのワガママ」

で、ガキの苦しみでしかねえんだ。

「優しい俳優が業界から消えるのが苦しい」……

事あるごとにそんなこと考えてるお前は、今が一番の地獄なんじゃないのか」
うるせえな。

……うるっせえんだよ。

朝遠く、夕焼けの茜を、夜が呑む摂理

デスアイランド一般オーディションを明日に控えた夜。

俺はオーディション会場に一人残り、オーディションのためのセット……『デスアイランドの舞台を思わせる海岸のセット』を調整していた。

細かい調整は、やっぱ一人でやった方が質も上がるし何より楽だ。

セットサイズは10m×10m。

右端、左端、奥のパネル壁に絵が書かれていて、簡単な撮影レベルであれば景色が広がる海岸線にしか見えないようになっていた。

昔作られた撮影セット一式を拝借して、俺が全体的にリペイントとリビルドを施した。

しかし結構楽だったな。

既に美術要員が集められてて、オーディションでも手足みてえに使えるとは思わなかった。

手塚監督の段取りに感謝しとこう。

下には砂浜に見える人工の床板、右左奥には壁。

よつてこのセットを正立方体と見ると、手前と上だけが開けた構図になる。

上と手前から照明で照らして、セット内に光を入れる仕組みになつてゐるわけだな。

本来、こういうセットでは『肌や服に適度にくつき落としやすい人工の砂』を敷き詰めたり、海を寒天で作つたりする。

海に普通に水を張つて、扇風機で波立たせたりとかもするな。

だが今回ののは、海も砂浜も全部セット床板に書かれた絵だ。

そこまでリアルな質感は出ねえ。

その分、カメラには本物に見えるよう、床板も左右と奥の壁も結構力を入れて絵を描いた。

そして、左・右・奥と床下で合計四枚の風景パネルを組み合わせたセットに、偽物の木や偽物の岩を置くことでようやく、このセットは本物の海岸に見える。

『ギ木』つていうもんがある。

漢字にすると『擬木』だな。

こいつはコンクリートやら樹脂やらで、木に見える木の偽物を作つたもんだ。

現代じゃ危ねえ所の手すりや木製に見えたら、まずこれだと思う。

木は腐るから危ねえし長期間保たないからコストもかかる、かといつて金属は錆びるし景観が損なわれたり雰囲気が悪くなる……そんな思いから、こいつは生まれた。

まあ要するに、木じゃないものの表面を塗装して木に見せかける技術だ。多分、この技術で助かったところは多いだろうな。

自然の木をそのまま使つてるように見えるベンチを導入したかった公園。

景観を守りつつ木の手すりで安全を確保したい山道の管理者。

極めつけは動物園や水族館だろうぜ。

動物園や水族館には、巨大水槽の中の巨大岩、猿が登る木、キリンの歩行路を誘導する置き岩など、沢山の”作り物の岩や木”が要る。

そもそも天然の岩なら重すぎて水槽に入れられねえし、水槽ごとに合わせた大きさの岩の調達にすら苦勞する。

天然の木は枯れるし、毛虫とかの害虫も湧いちまう。季節で景観が変わんのも問題だ。

偽物の木はギ木と言うが、岩の方はギ岩と言う。

中身を空っぽにしたりもできるギ木やギ岩は、一人で運べるくらい軽くすることもできるつてのに、動物園に置いても撮影セットに置いても本物に見えるつてわけだ。

俺が今回セットの用意に使つたのは、以前別の仕事で俺が作つたポリウレタンとポリウレアの混合樹脂成形によるギ木とギ岩。勿論オーデイションに合わせて再加工済みだ。

表面塗装にそこそこのこだわりを持って仕上げているので、オーデイションやオーデイション撮影レベルなら本物にしか見えねえだろうな。

絵の空、絵の砂浜、絵の海。

作り物の大岩、作り物の漂着木材、作り物の草と大木。

まあ悪くねえ感じになったんじゃないやねえかな？

一人作業の総仕上げを終わらせていた俺を見ていた手塚監督が、やっと口を開いた。

「昔、面白い理想論を聞いたことがあるよ」

「なんですか？」

「できないことを途中で諦めるのが凡人。」

「できるまでやるのが天才だ、というものさ。」

凡才と天才の最たる差は、最後まで全力を尽くし続けるメンタリテイ……というもの

だね」

ふむ。

一面的には正しい気がする。

最初から最後まで全力を出し続け、気を抜かずに集中力を保ち続けるつてのは、実は凡人には難しい。

休憩や手抜きつてのはどうしても発生しちまうのが普通の人間つてもんだ。

だから休憩や休暇を計算して、決められた時間の中で最大のパフォーマンスを發揮できるようにする……そういうのが、クレバーな考え方になる。

俺もそうだな。

俺の場合は集中力が下がっても仕事の質を下げないように訓練して慣らした。

一定以下の仕事レベルにならないように、が俺の基本だと言える。

「僕はこれはちよつとどうだろうかな、と思う」

「何故ですか？」

「納期の概念を念頭に入れてないからさ」

「それは……確かに」

「できるまでやる、が許される状況ってあまりないよね。

そもそも期限無制限の仕事がほとんどない。

無能は間に合わず、有能は間に合わせる。

ほら、千世子ちゃんとか凄いじゃない。NGも全然出さないしさ」

「ですね」

撮影つてのは細かいミスが出たり、監督が思ってた感じにならねえと、NGになつて

NGの数だけ時間を食うことになる。

あんまりにもNGがたくさん出て、「この撮影には無理があつた」と判断され、打ち合

わせ段階からやり直すなんてこともザラだ。

百城さんは凄え。

NG出さない、つてことがどれだけ非凡なことか。

監督の頭の理想図を把握して、監督が口で指示したこと以上のことを理解して、不可能に近いような難しい演技すらやり遂げて、撮影プランの練り直しにも繋げない。

そうでもしなけりや、NGを出さない女優になんざなれるわけねえ。

NG5回が妥当な撮影なら、NGを出さない奴は平均の6倍速で撮影を終わらせることが可能な計算になる。

NG20回の後には撮影プラン練り直しになるのが妥当な撮影なら、撮影は50倍速以上で終わると言っても過言じゃねえだろう。

だからこそ、百城さんの撮影は上質で、速え。

「納期があると周りは待つてくれないからね。

『できないならできるだけ待つ』は中学校までさ。

『できないなら要らない』が芸能の残酷な世界だ。

だから努めて『できる』と答え、実際に注文を仕上げてみせる君は有能だ。

そこが一番の評価点だと思う。

君が納期に間に合わせなかつたの見たことないし、想像以下の出来だつたことも一度

もない」

「あの、何が言いたいんでしょうか？」

「それが今回のオーディションの肝なんだ」

「……？」

「特別に、オーディションの課題を教えてあげようか？」

よく分からねえな、この人は。

「いえ、いいです」

「なんでだい？」

「今回、俺の友人がオーディションを受けてます。

俳優としての進退を今回の合否で決めようとしてるみたいなんです。

聞けば、俺は絶対にオーディションの内容を漏らします。

話さずにはいられないと思います。だから、聞くわけにはいかないんです」

手塚監督が、トレードマークのサングラスを押し上げる。

このサングラスが目をいつも隠してるから、この人の本心はイマイチ分からん。

「そういうところは子供っぽいだよねえ、君は」

「？ ええと、周りの大人を見習ったつもりではあるんですが。公平性とかそのあたりを」

「そうじゃなくてさ」

ん？ どういうことだよ。

「ズルして罪悪感があつたら子供、罪悪感なくズルをするのが大人つてもものだから」
……。

この人は、斜に構えたりのならりくらりとかわしたり、ひねくれてんのかひねくれたフリしてんのか本当によく分かんねえな。

ノリが軽いから、本当はどっちの方向を向いてんのか、よく分からなくなる。

第一次審査、第二次審査は終了した。

書類上の経歴に問題が無いと判断され、完全な素人ではなく何かしらの撮影に参加経験のある人間も残され、映像審査で容姿などもチェックされた。

そうして残った、500人。

今日この日に、ここから三次審査で12人が選ばれる。

あ、湯島さんだ。

手を振る。

お、手を振り返してくれた。これで緊張ちよつとは抜けたら良いんだが。

確かジュニーズの採用オーディションが実技試験段階で100人、採用10人とかだったな。

つまりジュニーズは倍率10倍で、こっちはおおまかに倍率42倍ってことか。

中々に狭き門だ。

500人が集合した体育館撮影などに使うため、レンタル体育館を借りるといいうり方がある。ものによつては一時間数千円で借りることができるため、数十人から数百人を撮影に使うためには格好のスタジオとなることもある。前後左右上下に広い体育館のスペースはスタジオセットを組むのにも使える。原作ではオーディション開始時の演説シーンの手塚監督が立っているところの描写や、建物外観、扉周りの作画などから、オーディション会場は通常の体育館を二つ連結したようなレンタルクリエイティブスペースである可能性が高い。は見ていて中々にワクワクする。

お、デスアイランドの単行本持つてきて、オーディション前に読み込んでる人多いな。俺もデスアイランドを読み込んで来たが、結構面白かった。

大ヒット漫画の看板に恥じねえレベルの漫画だと思う。

デスゲーム物の面白さと強みの一つに、『読者の予想を外す』ってのがあ

”こいつが死ぬと思わなかった”。

”こいつが勝つと思わなかった”。

”こんな展開だと思わなかった”。

それらが詰まってるのと、作品の続編とか考えずにガンガン魅力的なキャラを死なせていける自由度の高さとかが、この手の作品の強い売りの一つだろうな。

ただ塩梅が難しい。

「逆張りだけのクソマンガ」「読者の予想を外すことしか考えてない作者」って言われたら終わりだと、俺は思う。

つまり『読者を気持ちよく騙す』必要があるわけだ。

読者の思考を計算し、予想を外すことで、逆に読者の予想と想像を掻き立て、読者の期待をどんどん膨れ上がらせていく。

作者が読者の予想を裏切ることばかり考えてんのに、読者が裏切られた気持ちにならず、続きを読んで更に作者に騙されようとする。

これが、デスアイランドの根底にある面白さだと思う。

”予想がどんどん裏切られてるのに先の展開を予想したくて仕方がない”という状態に読者を持っていける作者ってのは、ほとんどいねえもんだ。

映画の脚本にもそうはいねえ。

だから読んでいて楽しい。

映画も見るだけで楽しくなるだろうと期待できるぜ。

お。

源真咲さんに、景さんもいる。

俺の知ってる顔は500人の内、100人いないくらいか？

自己紹介してねえバックダンサーの俳優さんとかは流石に名前覚えてねえわ……悪い。

手塚監督に呼び出され、俺は海岸線のセットがあるスペースに移動する。

「二代目、そろそろオーディション始める予定だけど、見ていくかい？」

「セットが壊れればすぐ直したいですし、こちらからお願いしたいくらいです」

「休憩挟んで、まあ1時間つてところだね。長丁場になるから君も休憩時間挟んでおいて」

「長……いや。短すぎませんか？ 500人ですよ」

事務所のオーディションなら分業できるが、映画のオーディションなら監督や脚本が立ち会っておかねえと後でややこしくなるはずだ。

かといって手塚監督が500人全員見てたら一日で終わるはずがねえ。

「ああ、説明してなかったか。

今回は4人ずつオーディションする予定なんだよ。

500人を4人ずつに分けて125組。

1組5分で625分。休憩を入れて朝の8時から19時までつてところさ」

「大丈夫ですか、監督。腰とか諸々」

「あつはつは。まあこのくらいならね。

僕よりは受験者の方が圧倒的にキツイだろうさ。

お題は”制限時間5分以内に4人が殺し合いを始めるように演じてください”。

実力無しと判断したら即終了、っていう条件で始める予定だからね」

5分。4人で5分。

……こいつはキツツいな。

まともな演技のやり方じゃ、絶対に間に合わねえ時間だ。

ん？ いや、待てよ、これは……そうか。

「四人が殺し合いを始めるように演じろ、なんですね。

殺し合いを始められたら合格でもなく。

始まらなかつたら不合格でもない。

手塚さんのお眼鏡に合う個性を見せられたなら、それでいいよと」

「そういうことだね。四人一組は適当に組ませるつもりだし」
やっべえぞこのお題。

オーディションに集まった人間を適当に四人ずつ組ませた。
つてことは、協調や連携はかなりやりにくい。

オーディションは公平性を保つため、お題が審査の直前で出される以上、事前にお題に合わせた作戦会議とかも無理だ。

つまりこいつは、ハナから協調性なんて求めてねえ。

4人で5分つていう時間設定も厳しい。

例えばテレビみてえに、各キャラに均等に一定以上の台詞時間を割りちまうと、アピール時間がせいぜい1人1分くらいしかなくなる。

それじゃ受かるとは到底思えねえ。

それを解決するには、素早く状況を明確化し、会話の主導権を握って、自分が台詞と演技をする時間を1秒でも長く確保しなきゃならねえ。

人は喋ってる俳優を見るがために、自分の台詞パートでこそ、俳優は審査員に最大のアピールができるからだ。

だとすれば、このオーディションはどれだけ自分が流れと共演者を支配できるか、どれだけ自分の見せる世界観を強制できるか、が重要になる。

いっそ、周りがやろうとしてること全部潰そうとするくらいでもいいのかもな。

たとえば強引だが、他の人が台詞を言っている最中に割り込むようにして大声を上げて、自分の台詞を始めたって良い。

台本はねえんだ、そんならいやっただって良い。

審査員に強い印象は残せるだろうしな。

5分で殺し合いに話を持っていくには、そうやって”相手の台詞を遮ってギスギス感を出す”みたいなテクを使うのも悪くねえはずだ。

自己アピールにもなるし。

だが、そう簡単に行くわけもねえ。

5分で殺し合いの段階まで話を持って行きてえのなら、他三人と協調して『狙い通りの話の流れに持っていくための会話』を作らなきゃならねえ。

会話も無しに、(「デスクアイランドの作中設定で」クラスメイトで友達同士だった四人が、突然殺し合いを始めるわけもねえからだ。

会話が要る。

協調が要る。

他人を押しつけてアピールしなきゃならねえのに、他人に合わせて自分を抑えて、全体的流れを作らなくちゃならねえっていう矛盾。

こいつは相当に悩ましいぞ。

たとえば景さんが過剰に暴走したりした場合、他三人が全く合わせてくれなくて、景さんだけ浮いて終わる可能性も無きにしもあらずだ。

理想的な流れは、あくまで自分が一番に目立ちつつ、自分が目指す演技の流れの完成に他三人も参加させること。

四人で共通の『流れの完成形』を作っていくのも悪くねえが、それを5分以内に間に合わせるのは中々難しい。

かといって、自分が一番に目立つ流れを確実に作りてえなら、他三人の想像力とイメージまで支配して、『自分が考える完成形』を他三人に押し付けなきゃならねえ。

さて。

どうする？ 受験者の皆。

このオーディション、正道を進んできたタイプの役者なら、大女優や大スターでも下手したら成功させられない悪問だぞ。

まーなんだ。

実は少し、小細工をしてある。

背景や大道具つてのは、役者の身長を考慮に入れる。

身長が高い奴に合わせた舞台は背景の印象が違って見えるし、身長が低いやつに合わ

せた作り物のドアは、身長高い奴じゃくぐれない時もある。

このセットもそうだ。

全ての枝、葉、背景、小物を計算に入れりゃあ、『このセットが映えさせる最適な身長』ってやつは確固として存在する。

このセットでは身長158cmがそれにあたる。

まあ俺以外誰も気付いてないとは思うけどな。

鼻屑は流石に怒られる。

ただこんだけ地味な鼻屑だと、大きく派手な効果は望めん。

他の役者が映えないわけでもねえし、俺が調整した俳優を映えさせるセットの効果は全ての俳優に対して及ぶ。ある一人への効果が一番大きいだけだ。

ただ、”僅差で負けた”程度の勝敗決着を、逆転させる程度の効果はある。

湯島さんの身長は158cm。

照明の光を通すと、木々の合間を通る光、床板の海で反射した光が”なんかいい感じ”に湯島さんを映えさせるように計算してある。

……こいつは俺が湯島さんの力を信じていないがための工作なのか、友達として受かってほしいっていう願いからの工作なのか。

俺にもどつちなのか分かんねえ。

女々しいことをしてる自覚はある。悪いな手塚監督。

俺は今、きつと、平等に公平に審査をしたいあなたに誠実な男じゃなくなってる。

「おはよ、朝風君」

「おはようございます。町田さん」

お、町田さんだ。

スターズ側12人の1人を務めながら、今日のオーディションの司会進行もするんだったな。

「朝風君、オーディション受けに来た子に気に入った可愛い子いた？」

「!? 何言ってるんですか!？」

「あ、間違えちゃった。このオーディション、どういう感じになると思う?」

「その二つをどうやったら間違えるんですか……そうですね」

目を閉じて、これまでもある程度は追っていた手塚監督の思考を、後追^{トレイス}いする。

考える。

予想する。

仮定して、思考して、検証して、その繰り返し。

そうしていけば、ある程度は手塚監督の考えも理解できる。

「スターズ12名の選抜なんですけど、元のキャラに近い売れ筋俳優から当ててますね。

双子の亜門さん達を双子のキャラに当てたりしてるのが分かりやすいです。

その上で当て書き演じる俳優を決めてから脚本を書くこと。俳優に柔軟に合わせた脚本が書けるため、その俳優の魅力が最大限に活かされた脚本になる。だが俳優に『全くの別人を演じさせる』という要素が消失していて、俳優がそのまま作品に出ているような空気になることも多く、嫌っている人は本当に嫌っている。原作付きの映画の場合、「俳優のイメージを守るために映画でキャラが原作と違う行動・言動を選ぶ」という問題も発生しうる。しています。

俳優のイメージを残した演技で、原作キャラに配役する采配ですね。

桐谷蓮仮面ライダーW、左翔太郎を演じた。実は本人の素のキャラも左翔太郎にそっくり。また近年ではドラマ『正義のセ』にて、「子供達に夢を与える特撮ヒーローが人を跳ねてしまった。マネージャーがその特撮俳優の罪を被って出頭。自らの中の良心に従うか、マネージャーが覚悟を持って守ろうとした子供達の夢を守るか、特撮俳優は揺れて……」といった役も演じている。『上手く自分を売れている』俳優だと言える。にかっこつけな半人前を演じさせる感じです。

その僅かな違和感を消すため、かつバランスを取るため……

オーディション組は、原作に忠実なキャラ造形でやらせるんじゃないでしょうか

「ああ、手塚監督の作風っぽい感じ。ありそう」

「となるとスターズは『魅せる』、オーディション組は『演じさせる』と思うんです」
スターズは人気俳優だ。

だから俳優目当てに客が寄ってくる。

俳優のイメージをそのまんま映画に出すだけで、十分売りになる。

よって上から渡された”推したい俳優リスト”から原作キャラに近い子をチョイスして、原作に配役してから脚本を当て書きする。

んで、オーディション組は元の漫画のキャラを忠実に演じさせる。

オーディション組はスターズと違って俳優の固有ファンが大していねえしな。

こっちは原作に忠実になることだけを考えてもらって、原作ファンからの受けと印象を良くしてもらおう……まあ、こんな感じだろ。

オーディション組は自分を出さなくていい。漫画の中の役になりきればいいだけだから。一回受かっちゃまえば景さんの大成功は確実だぜ。

何せ景さんは漫画をよく読み込んでそれをトレースすりゃいいだけなんだ。ずっといい！

演じることでそれになりきっちゃう景さんと、そのキャラを最初から話の流れに組み込んでる原作あり映画は、かなり相性が良い気がする。

意外と漫画原作の映画って、景さんには天職の一つなのかもしれん。

殺人鬼の役とかは流石に無理だろうけども。

「ならこのオーディションの選考基準は、少し普通の映画のとは違って……」

『12の役にそれぞれの確な12人を選ぶ』とかではなく。

『目についた個性と高い演技力の12人を選ぶ』なんじゃないかと思うんですよね」

「へー」

「ただ、スターズより演技力高いということはほぼないと思うので……」

それなり以上に上手い人が、原作に忠実な演技をする。

スターズがそれ以上の演技で、普段のイメージに沿ってキャラを演じる。

そうすることで俳優の印象が鼻につく人の感情を宥める、そういう方針だと思います

「す」

「演技力の上下で層を作ったのかな？」

「ですね。引き立て役と言っても、きつと言いきすぎじゃないです」

オーディション組は実質引き立て役で、原作ファン向け要素を補完するための12人だ。

が、『演じる』ことを求められてる以上、撮影中に演技力を上げていたりすることができれば……映像のどこかで、視聴者の胸に残る演技を見せられるチャンスが必ずある。

オーディション組に割り当てられたシーンはスターズほど多くはねえが、『演じる』チャンスが有る限り、有意義なチャンスを掴み取れる機会は絶対にあるんだ。

頑張れよ、湯島さん、景さん。まずは受かってからだ。

町田さんは俺の推察に何か思うところがあつたのか、こめかみを叩いて色々と考えている。

「だとしたら、控え室で原作読み込んでた子達は不利かなあ。

ほら、こういう漫画原作オーディションだと、

『自分に近い役を狙って目標を絞り、その役を連想させる演技をする』

ことで、オーディションに受かりやすくするつてのがあるでしょ。

その漫画のそのキャラに自分を配役させればピッタリ、つて監督に思わせるために

「ですね。そもそも手塚監督、まだ原作読んですらいなみたいですけど」

「え、っ」

「このオーディション、原作のファンの俳優が相当に受かりにくくなってますよ」

俺の知る限り、前に一緒に仕事をした源さんがこのタイプだ。

原作を読み込み、原作に忠実に演技できることをアピールする。

ソラで原作の台詞を一字一句違わず暗唱し、自分の落ち着いたキャラクター性を協調し、大抵のドラマや漫画にいる”落ち着いたクール系キャラ”とかに採用させる。

原作付きの作品だと、源さんはこれでオーディションを勝ち抜いてたはずだ。

……そういうのが逆効果なこともあるんだから、オーディションってのは難しい。

原作キャラに新しい解釈を加えて斬新な魅せ方をする、ってのは、漫画の実写化でやりたがる監督が多い事柄の一つだ。

これもまた、好き嫌いが分かれる要素だな。

これのせいで原作に忠実な奴がオーディションに受からなかつたりするわけだ。

なんでこれをやりたがる監督が結構いるのか？

そいつは、舞台演劇のメソッドにも原因がある。

舞台演劇の世界において、俳優は演出家の想定通りに演じるんじゃない、演出家の想像を超えることが求められる。

俳優が自分の解釈で個性を出すことが求められてんだ。

舞台演劇の演出家は俳優が自分の想像を超えて輝くことを求めるが、映画監督は自分の目指した完成形を作るためのパーツとして俳優を使う。

この性質の差が、様々な監督に影響を与えてるってわけだ。

だから、舞台俳優がテレビドラマとかの世界に行くと、個性を出しすぎる俳優を監督が矯正しかかるなんていう話もある舞台俳優40年以上のベテラン・丸間進さんの言。

手塚監督は、どのくらい俳優を求めてんのかね。

未知への感動と、既知への安堵。

原作を知るがゆえの感動と、原作を知るがゆえの安堵。

どっちもある俳優が理想的なんだが、はてさて。

あ、そうだ。

お茶を飲んで喉を潤している手塚監督に歩み寄り、こつそり耳打ちする。

「黒さんから何か言われてますか？」

「んー、まあ、見込みがないなら僕は一分で切るよ。そんな期待してないし」

「うわあ」

「ただ、あの黒山が懐に入れようとしている二人だからね。

機会があれば……並べたら面白そうかもな、とは思ってる。

それを考慮しても、アリサさんの心象が悪くなりそうな採用はちよつと

うっへえ。

景さんハードモードは続く、か。

夜風景の不安要素を挙げようとするりや、それこそ星の数ほど出てきそうだ。

だが、なんでだろうな。

景さんが負ける気がしねえ。

『上手くやる』のは無理でも、『派手にやる』のは問題ねえと……なんだか、感覚的に分かってるとか、そういう感じ。

信じてるって言うのと、正しくねえ気がする。

俺は、疑ってねえんだ。

夜風景を。

その合格を。

オーディションが始まる。

「はい君達、そこまででいいよ」

うーわー……手塚監督、容赦ねえ。

さつきから4人入っては4人消えてる。

まだ数分しか経ってねえのに、もう16人消化しちまった。

4人の演技を1分も見てねえよ。

あつという間に審査打ち切って、部屋の外に出してやがる。

まともなオーディションじゃねえが、手塚監督は見るべきところは見てるな。

俺にもいくつかのタイプが見えてきた。

このオーディションは四人が海岸線のセットに寝かされるところから始まって、そこから起きて殺し合いに至るまでの即興劇エピソードを見るもんだ。

殺し合いを始めるため、何をやるかが重要になる。

例えば、誰よりも先に起きて第一声を上げようとする奴。
悪くねえ。

第一声は印象に残る。

例えば、わざと最初には起きない奴。

会話の主導権を握ってもこの状況で上手く操縦する自信はないが、演技力には自信があるため、第一声を上げた奴に柔軟に合わせる気だ。

四人全員を”殺し合いを成立させた合格候補”に押し上げる意図が見える。

例えば、わざと狂乱したフリをする人。

狂乱するフリをすれば、「落ち着けー」か「うるせえー」が横から飛んでくる。

「落ち着けー」が来れば「落ち着いてなんかいられない！」とキレて殺し合いに誘導。

「うるせえー」が来れば喧嘩腰で応対して、さっさと殺し合いに誘導すりゃ良い。

いい感じに計算されてるのが見てて分かる。

……分かるんだが。

これら全部一分以内に「もういいよ」されてんの厳しくねえ？

手塚監督のお眼鏡に適う人のハードルが高すぎる……怖い。

何が怖いって、もう湯島さんより明確に格上な人が5人ほど「もういいよ」されてん

のを見てるからだ。

心の奥底に、嫌な気持ち湧いて来る。

湯島さんの実力を正確に見切ってる俺の奥深い部分が、もう既に冷静に結論を出している。

うるせえな。

やってみなくちゃ分かんねえだろ。

「お」

合格っぽい手応えの人が出たな。

一分で終わったが、そいつは他三人がいい感じに演技した一人に合わせきれてなかったからか。

まず、その一人が超速攻で気絶から目が覚めた演技、そして混乱する演技、話しかけて来ようとする三人の言葉も無視で、自分の頭の中の混乱を口にする演技。

「ここはどこ」「なんで」「そうだわ、飛行機が」「ここは無人島」「じゃあ私は」と感情を込めた怒涛の演技で発狂した狂人の演技までシフトし、殺し合いにまで持っていた。

すっげー。

30秒で、巻きで殺し合いまで持って行きやがった。

一般オーディションも侮れねえな。

……スターズの平均値は、こういう人を余裕で超えていくつてのがまた恐ろしいが。部屋に入つて、お題を教えられて、セットの上に四人並んで寝かされて、演技開始……ここまでの流れを時間に換算しても、1分から3分つてとこだ。

最短1分でここまでの演技策を考えてくる役者の思考の速さには驚くばつかだな。が、「これだ」つてもんがねえつてのも事実。

俺は判断基準が甘くなりがちだ。

手塚監督が『監督の目』でちゃんと合格だと思えるような人間じゃねえと、手塚監督のデスアイランドに相応しい人間は揃いやしねえつてことなんだろう。多分。

ん？

「さて、さっさと始めようか。

残り460人もいるんだからね。テキパキ行こう」

「では私の方から演技審査について説明します。

お察しの通り無人島浜辺を模したこちらでお芝居して頂きます。

設定は原作と同じで、修学旅行中の飛行機が嵐に遭つて海に落ち……

無人島に漂着したクラスメイト4人が目を覚ますところからスタートです」

手塚監督と町田さんが解説始めてる。

あれは、景さん？ 湯島さん？ 他に二人いて、四人で来て……あれもう出番？

え、早くね？

もう40番台？

あ、いや、今が41〜44番ってことは10組終わったってことで、全部の組が1分以内に退場だから……オーディションが始まってから20分と少しってところか。

妥当だ。妥当だった。

このオーディションサイクルが速すぎる……！

やべやべ。

まだ応援の言葉贈ってねえぞ今日。

セット調整するフリして、こっそり四人とすれ違う。すれ違いざまに、一言だけこっそりと。

「頑張ってください。応援してます」

景さんと湯島さんが振り向いた。二人一緒に。周りの人に気付かれないくらいに小さな動きで。

あ、応援の声二回分言っておけば良かった。

応援の声一回分じゃ後で何か変な勘違いされつかな……まあいいや。

頑張れよ。

湯島茜に才能がない……なんてことは、言われなくてもよく分かっている。

「うち、ゆしまあかねっていつてなー。よろしくなー」

「よろしくお願ひします、湯島さん。朝風英二といいます。何なりとお申し付けください」

英ちゃんは、出会った時からただの一度も、私を天才扱いしなかった気がする。

子供の頃の私は気付いていなかった。

今の私は気付いてる。

気付かないままだったら、私はどんなに幸せだっただろうか。

子供の頃の私は、神様を信じるように自分の才能を信じていて、天才に天才の造形家の友達が出来たことを、疑ってもいなかった。

「英ちゃんって、自分の能力を疑ったこととかないん？」

「子役が何を言ってるんですか。」

俺達の能力は低くて当たり前です。

だから一生修練なんです。伸びなければ、消えていくだけです」

「そっかー」

私が私のことを何も考えず信じられたのは、本当に子供の頃だけだった。

次第に、自分を信じる理由がなければほんの少しでも信じられないようになっていった。

子供の頃の私と英ちゃんは、その。

対照的だった気もする。

自分のことを信じてないけど、技術は信じてる英ちゃんと。

何の根拠もなく、才能もなく、自分を信じていた私と。

チャホヤされるのが嬉しかった私は、ただ笑っていて、怖いくらいに技術の習得に集

中していた英ちゃんは、全然笑っていなかった。

他の人は違う解釈をするかもしれないけれど、私には笑っていないようにしか見えなかった。

「英ちゃん、将来の夢はなんや?」

「父を超えることです」

「そっかー。うちはな、大女優!」

「……」

「10代の内に有名女優、20歳で大女優になりたい！」

「……なれるかもしれないね。湯島さんなら」

「ほんま!？」

「ええ」

英ちゃんは、自分に嘘をつく時、核心的な言葉を避ける。

後になってから、よく分かったことだった。

当時の私は、全く分かっていないことだった。

いい夢ですね、とも英ちゃんは言わず。

なれますよ、とも英ちゃんは言わず。

英ちゃんは私の才能を何一つ信じられないまま、自分に嘘をついていた。

次第に、歯車に噛み合いが悪くなっていく。

色んなことが上手く行かなくなっていく。

私が夢見た私と、現実の私が離れていく。

私に向けられる褒め言葉が減った。

私の耳に届く褒め言葉の量は変わらなかった。

周りの人、私の後輩への褒め言葉を聞く機会が増えた。

同期、後輩が、私より売れていく。

最初は負けへんでって気にもなった。

でも、途中からどんどん、どんどん、怖くなっていった。

小学校の頃に好きで買っていた現役人気女優の特集雑誌が、怖くて買えなくなるこ
が増えた。

「英ちゃんはお変わってるんか変わってないんか、時々よう分からんなあ」

「湯島さんは美人になりましたよね」

「やーもう、お世辞ばっか上手くなって！」

笑笑。

笑笑、私。

落ち込んでてもどうしようもないから。

下を向いても何にもならないから。

辛いことがあったわけでもないんだから、せめて前を向いていかなくちや。

焦る。

『子役』というブランドがなくなって、『湯島茜』が評価されるようになって、どん
どん売れなくなっていくって、焦燥感だけが増えていく。

焦る。

幼い頃は自分の才能を無条件で信じられて、子役じゃなくなっても私はわたしを信じていて、でも心のどこかで”私は特別じゃない”って思うようになって。

焦る。

英ちゃんは天才だった。

私が天才だと信じてる。

じゃあ、私は？

「天才なんて呼ばれたんわ子供の頃だけや。

チャホヤされたんもあの頃だけ。

あとは、天才に負ける側で……

頑張っても上手く行ったんは子供ん時だけで……

今は、毎日頑張るのが当たり前で……

頑張っても、上手いかなんのが当たり前で……

……ああなんかなっさけないなあ、ごめん、英ちゃん」

なんで私はあの頃に、自分が天才だなんて、身の程知らずに思っていたんだろう。

「今日は休んで、また明日から頑張りませんか？」

なんで英ちゃんは天才でもない私に、優しくするんだろう。

決定的な痛みは、あの日。

両親と少しだけ話したあの日。

売れなくなった私に、両親は優しい声で、こう言った。

「何か一つのことには固執しなくても、生きる道は自分で選んでいいのよ、茜」

「……親の都合で勝手に子役にして、何も考えずに褒め続けてごめん、茜」

悔しかった。

『あなたには才能がある、頑張つて』と言つてくれなかったことが。

子供の頃には言つてくれてたのに。

今は、絶対に言つてくれない。

それが悔しくて、辛くて、悲しかった。

“これ”が、他の皆の、子役の頃ちやほやされてた子供達の心を折つたものなんだと、唐突に理解できてしまつて、ちよつと泣きそうになつて。

役者辞めようかなと、通つている高校で、時折思うようになった。

役者の道を諦めないことは、私が自分のことだけを考へてるのと、どう違うのか。

他人のためなんかじゃない。

ならきつと、これは私のためでしかない。

でも“私のため”だけで役者を続けられるほど、今の売れてない私の心には余裕がな

くて、今の私には自信がなくて、今の自分を肯定できない。

いつそのこと、もう細かいことなんか何も考えられないくらい割り切つて、どっかの天才に本気で憧れることができたなら、それだけで楽になれそうなのに。

ある日の仕事で、辞めようか、辞めないか、それを迷いながらスタジオを散歩してみた。

後輩の真咲ちゃんが悪戦苦闘してる。

私を子役の時に採用してた、今は見向きもしないプロデューサーがいた。

私より後に芸能界に入つて、今はスターズで大成功してる後輩の女優がいた。

ちっちゃい頃、見上げるしかなかったカメラがあつた。

三脚の高さがやや低めで140cm。

今はもう、見下ろせる。

私が女優であることを許されていたのは、このカメラより背が低い時だけだったんじゃないかって、そんなことを、ふと思った。

私は、百城千世子のようにも、町田リカのようにも、星アキラのようにもなれない。

「あ、英ちゃんやん」

そんな中、友達を見つける。

途中から撮影に加わつた英ちゃんは、通行人役の私に“ひと味”加えるために、ちよつとした物を作っている最中だった。

「湯島さん、湯島さんを引き立てるネックレス作りますけど、ご要望はありますか？」

「せやなー。要望はあるけど、英ちゃんに全部お任せするわ」

「え」

「英ちゃんが一番似合うと思ったやつでお願いな？」

私に辞めろと、英ちゃんは言わない。

辞めた方が良いとも言わない。

でも”大女優になれるかも”と可能性の話はする。とつても、残酷なことに。

私が辞めたら、英ちゃんはきつと悲しむに違いない。

百城千世子や星アキラみたいになれなかつた子役達が、一人、また一人と辞めていくたび、誰にも見えないところで泣きそうになっている英ちゃんを見たことがある。

英ちゃんはどんな大人になるんだろう。

泣かない大人か。

泣く大人か。

泣いている英ちゃんはきつと心臓に悪いから、絶対に泣かない大人になれるなら、そうなってほしいとすら思う。

子役時代から約十年、ずっと売れてない私のことを、英ちゃんは売れると信じようとしてて……本当は、私の才能の上限も見切ってる。

だから、大女優になれるって一度も言わない。

大女優になれるかも、とは言う。

なのに、私に女優を辞めてほしくない、多分思ってる。

私のことを信じようとしているこの人は、きつと一番私に厳しく、一番私に残酷なんじゃないかと……そう、思った。

「任せてください。俺の全力を尽くします」

私が辞めたら英ちゃん悲しむなら、もうちよつとだけ頑張ってみようかと、そう思う。

私は、女優だ。

その気概まで失ったら、きつと私に価値はない。何の価値もなくなってしまう。

私は湯島茜。18歳。オフィス華野の所属女優。

好きなものは洗濯、アイロン、日曜の晴れた公園……それと、応援してくれるファン。

私は女優だから。

ファンの声は力になる。

ファンの声を裏切りたくないと思う。

子役の時から、ずっとそれが私の力。

私のファンの天才に、ちよつとくらいは応えたい。

女優を諦める理由が欲しくて、デスアイランドに応募した。女優を続ける転機が欲しくて、デスアイランドに応募した。

どっちつかずの今を終わらせたい。

どこかに行きたかった。

なにかになりたかった。

今のままじゃ、嫌だった。もつと胸を張れる何かになりたかった。

私は、この仕事が好きだから。

この仕事が好きなままでいたい。

芝居と舞台のこの世界を、好きなままでいたい。

何もかも嫌いになってこの世界を去ることだけはしたくない。

演技が飛び抜けて上手いとか。

天才だとか。

そんなことは言われなくてもいい。

全ての撮影を終えて、オールアップの花束を貰った時に。

皆の感謝の言葉と拍手に包まれて、達成感に包まれて。

”ああ、やりきった”と思えるあの瞬間を、何度でも噛み締めたい。

好きだと思えるこの仕事を、ずっとずっと続けていたい。

たとえ私に、それ相応の力が無かったとしても。

頑張りたい。

頑張れる理由が欲しい。

私の演技を好きだと言ってくれる人がいるなら、そのために頑張りたい。

頑張れる、力が欲しい。

だから、このオーディションに賭けた。

上手く行つてほしい。

できれば、共演者にも仲良くやってほしい。

普段以上の自分の力を出せて、それで受かるならそれでもいい。

どうか神様。私がこのオーディションに上手く行くなら、なんでもします。

だから、お願い。

色んなことを考えながら、オーディション会場で柔らかく笑う。

いつもの陽気で明るい私を演じられてるだろうか。

ふとした時に、真面目な顔をしてないだろうか。

普段の自分を演じて、セットの上で上がろうとして、その時、英ちゃんとすれ違った

時。

「頑張ってください。応援してます」

私だけに贈られたエールが、心強かった。

男の子としてはすごく、すごーく、どうかと思うけれど。

英ちゃんは私の友達だ。ずっとずっと、私を応援してくれている。

私を愛しているからこそ、私を応援しなかった両親より、きっと応援してくれている。

その優しさと残酷が、今はとても心地良い。

今の私に余裕がない自覚はある。

緊張して、気負いしすぎて、固くなってて。

それが少し抜けて、少し楽になった。

振り向いて、英ちゃんにかっこよく言ってやろうとする。

「見ててな、英ちゃん。

英ちゃんには業界でどう成功するか、みたいな悩みもあるんやろうけど。

そもそも業界に残れるかどうかも分からん……そんなみそつかすの意地、見せたる

！」

でもなんだか気恥ずかしくなって、結局私は思うだけで言えないのであった。

それにしても、私の隣で芝居の前準備に寝転がった夜風ちゃん。

不思議な振る舞いの、あまりオーデイションのことも知らなそうな初々しい子。

この子はなんで今、英ちゃんが私に呼びかけた時、一緒に反応したんだろう？

きつと上手く行くと、何の根拠もなく、夢を見ていた

俺は本当は、俺の予想を裏切ってほしいのかもしれないねえ。

俺の評価が過小評価だったと、誰かに思い知らせてほしいのかもしれないねえ。

世の中は、こんなクソガキの予想通りに動いてないんだと、人間には無限の可能性があるんだと……そう、教えてもらいたいのかもしれないねえ。

湯島さんも、アキラ君も、子役の時から知ってる。

今じゃ数少ねえ、子役時代からの知り合いになった。

子役って業界に何人いるんだ？ 何%が大人になっても残ってる？

正直なところ、俺にもよく分かってねえ。

ただ、例に使える数字ならいくつかある。

例えば毎年9000人以上の子役が集められ、1999年には1万人から1人の適役を探すオーディションをやった『アニー』国民的ミュージカル、と言われることもあるミュージカル。娯楽が氾濫する現代では知名度が下がったが、毎年9000人を超える子役がオーディションを受けに来る大型コンテンツ。子役限定であるにもかかわらず、主役を狙うなら倍率一万倍と正気でない数字。とかな。

あれを受けに行く子役とかが、大雑把に毎年1万人。受けようとする子役の年齢幅が大雑把に五歳分くらい。

すると、平均取ったら同年齢に2000人つてとこだ。

毎年この枠に収まらなくなった『子役卒業』が2000人。

『子役新入り』も2000人。

ただのミュージカルの、ただ一作の子役オーディションですらこうなんだぞ。

業界全体なら、この入れ替わりも当たり前のように万人単位だ。

たくさん入って、たくさん消えていった。

湯島さんやアキラ君より才能があった人間、センスがあった人間、動きにキレがあつ

た人間……色んな奴がいたが、もうこの世界にはいねえ。

皆、途中でどっかに行つた。

皆、どっかで気付いたんだ。

この業界に自分の幸せが無いことと、ここじゃない場所に自分の幸せがあることを。

俺がアキラ君に向ける感情と、湯島さんに向ける感情は、どっか同じように根本の部

分でなんか違う気がする。

湯島さんを、アキラ君と同じに見たことはねえ。

アキラ君の苦しみは、湯島さんには分からねえ。

湯島さんの苦しみは、アキラ君には分からねえ。

そして役者でも何でもねえ俺には、きつともつと分からねえんだ。

何も、何も。分かりやしねえ。

あの苦しみは、あの人達だけのもんだ。

だけど、俺の奥深いところは期待してる。

あの日、役作りで”江戸時代の創作した自分”にすら、他人にすらなりきった景さんに。

いつかは”無力感に打ちひしがれる凡人”の心境ですら、完全にトレースしてしまうかもしれない景さんに、期待してる。

もし、そんな人の気持ちや演技すら景さんが自分のものとしたなら——俺は、俺は、きつと喜ぶ。複雑な気持ちすら押しつけて、素直に喜んじゃう。

俺は、そういう人間だと思う。

「景さん……俺が予想したどの方向にも行かねえか、これは」

感覚で分かる。

あと数秒で審査が始まるこの瞬間に、景さんは俺が想定したどこでもないところに、一直線に行こうとしている。

飛行機で落ちたことなんてねえよな。

無人島に行ったこともねえはずだ。

そんな景さんがどうすんのか、考えただけでワクワクする。

夜風景。

湯島茜。

源真咲。

からすやまたけみつ
烏山武光。

四人中三人が俺の知り合いだが、さてどう転がるか。

セオリー通りのやり方で合格するのは無理だろうな。

例えば、「この将棋の盤面を5分で攻略して勝ってください」と言われて、バカ正直に攻略して勝つ奴か。あるいは「じゃあ対戦相手の棋士を殴って勝ちますね」とやれる奴か。

そのどっちかなら受かるぞ、みたいな話だ。

高い能力か、強い個性か。

この四人には、何がある？

景さん言うまでもねえ。

湯島さんと源さんは俳優事務所の所属だ。

セツトの上で、カメラの前で、一定以上の解答は見せられるはず。

鳥山さんは……へえ、資料を見ると、劇団遊劇座原作の遊劇座は劇団遊劇社か劇団遊劇体だと思われませんが、この二次創作では劇団遊劇体がモデルという体で進みますか。

この人は、どうだ？

実は即興劇は舞台俳優に有利だ。

NGと撮り直しができるテレビ俳優より、失敗を無かったことにできねえ舞台俳優の方が、即興性と対応力において優れてることが多い。

加えて、舞台俳優は大仰な身の振りに、観客席の奥にまで届く音量がある。

インパクトにおいてはテレビ俳優を逆に食っちゃうレベルだ。

だが逆に、舞台俳優のよく感情が伝わってくる演技は、テレビや映画に最適化されてねえっていう弱点を時に露呈する。

大仰で感情的な演技は時にネタにされることすらある舞台俳優として演技を確立させた藤腹竜など。ただしネタにされるだけで評価は高く、観客はその演技に感情を伝えられているため、ファンも多く、進んで使う監督も多い。

んで、手塚監督はテレビ畑・映画畑の人だ。

単純に受けで言うなら、湯島さんと源さんに有利な気もする。さて。

ぼちぼち開演の時間だ。

俺も四人の思考のトレースと、推察に集中しよう。

深く潜るように、四人の思考を追う。

「準備は良いですかあ？ 私がカチンコを打ったらスタートですよー」

セツトに寝転がり”気絶していたけど今起きた”の準備を四人が始める。

見た限り、景さんは……俺の予想のどれとも違う道に行く気がする。

つか何も考えてねえ気がする。

他三人がどうする、どうするって必死こいて何かしら考えてる中、景さんだけ解決策を何も考えてねえような感じだ。

考えてる様子が見て取れねえ。

それはそれでまあ間違っちゃいねえ。

自分を制御出来てねえ景さんじゃ、いくら考えても無駄だ。

役に入ったらその瞬間に、それまでの思考吹っ飛ばしな。

”役そのものになりきったような迫真の演技”しかできねえ景さんには、リアルな別の自分を作り上げることしかできねえ。

これはこれで、現状の正解か。

むしろ、問題は。

何も考えてなさそうな景さんより、色々と考えてる様子の湯島さんのことを心配しちまってる、俺の方が。

……自分の心を制御できてねえのは、俺も同じだ。景さんを笑えねえ。

カチン、と音が鳴る。

スタツフがストツプウオッチのスイッチを押し、5分のカウンtdownが始まる。

審査が始まった。

「……………(ハ)は(ハ)だ……………!?!」

お、鳥山さんが最初に起き上がり、最初に声を上げたか。

最初に声を上げる役が被ったら変な空気になるし、芝居全体に滑稽な空気が広がっちゃうだろうに、”最初に声を上げる役被り”を恐れねえ良い勇気だ。

この審査は事前の打ち合わせとかできねえから、最初に起きる役を誰もやろうとしなくて、最初の時間を無駄にした組とか結構いたしな。

おかげで審査開始から最初の数秒、十数秒が完全に無駄にならなかった。

俺が審査員ならこの勇氣に加点する。

「他のクラスの皆はどこだ!?! 俺達だけか!?!」

鳥山さんが続けて、自然な形で説明セリフを入れ、作品の雰囲気を作る。

いいぞ。

作品の“入り”を完全に烏山さんが作った。

俺にもこれ以上丁寧で素早いスタートは思いつかねえってレベルだ。

お、源さんが起き上がって、頭を振る演技をしている。湯島さんも起きようとしているな。

「クソツ」

「おいっ、皆起きろー!」

源さんが起きて悪態をつき、烏山さんが起きかけの演技をした湯島さんと起きる気配が全くねえ景さんに呼びかける。

いい感じだ。悪くねえ。

それぞれの動きが、ほぼ初対面の四人組にしてはいい感じに噛み合ってる。

特に烏山さんの呼びかけは、起きる演技をしようとしてた湯島さんに、『クラスメイトに起こされた』っていう『設定』をくれた。

なら、どう起きるかの選択肢が全部排除され、湯島さんは起こされた演技をすりや良いわけで、演技が相当楽になっただろうな。

サンキュー烏山。

加えてこれで、自発的に起きたのが男二人。

烏山さんの“起きろ”で起きたのが女二人。

起き方のバランスがかなり良くなって、かなり自然になった。

こういうバランス取りは結構重要で、映画では“複数人が気絶してたが起きる”っていうシチュエーションでは、最初に起きた一人が周りの人を次々起こしていったり、起こしている最中に他の人が自然と起きたりする。

それが王道の開幕になる。

それこそが自然な流れに見えるからだ。

いいぞ、このバランスのいい起き方二種類は、俺としては評価してえところだ。

「他の皆の姿は見当たらない。俺達だけがこの無人島に漂着したのか……」

「なっ……嘘だろ!」

おっ。

源さんが状況を明確化して、烏山さんがいいリアクションした。

流石源さん。イケメンだぜ。

原作有り作品だと原作を読み込んでからオーディションに挑むタイプの源さんは、言っちゃえばこの中で”一番に状況を把握してる”かもしれねえ人だ。

その人が明確化したセットの上の状況は、かなり『デスアイランド』らしい。

咄嗟に呼吸を合わせた烏山さんも悪くねえ。

素人だと相手の会話の呼吸が読めなくて、相手がまだ会話の台詞を続けようとしてるのに返事しちまって、相手の台詞遮って気まずい……とかあるんだが、流石に舞台慣れ

してる俳優は呼吸を咄嗟に合わせるのが上手いな。

湯島さんが動く。そうだ、会話に入ってアピール、アピールだぞ。

「あんたのせいよ！」

湯島さんが鳥山さんに、怒りの表情で掴みかかる。

ほほー。

一気に、速攻で不和を撒きに行つたか。

いいなあ。

湯島さんのこういう行く時は行く演技、俺好きだぞ。

5分で殺し合いに持っていくには、周りに喧嘩を売るキャラと演技が必須だ。

湯島さんはこのタイミングまで一言も喋ってなかった。

状況に合わせてどんなキャラで行くかを決めるまで、断固として一言も喋ってなかった。

だから、いくつか台詞を喋つちまつてた源さんや鳥山さんと違って、『ちよつと何かあるとすぐパニックになって周りに食つてかかるヒステリックな女』を演じる権利が、湯島さんには残されてたつてわけだ。

時々ドラマで湯島さんが演じてる穏やかなキャラ付けを完璧に捨て、初見の審査員に『ヒステリックな女』の印象だけを与える。

いいぞ、器用な立ち回りだ。

「あんたがあの時非常口を開けたから一気に海水が流れ込んできたのよ！」

へえ。設定追加か。烏山さんに迂闊なことをした設定を追加し、『的』にしにいった。

「そのせいで私達は……！」

「何だど!?!」

よし、烏山さんが湯島さんの演技を受けた！

セットの演技の中心が、『こいつのせい』というヘイトを集める、烏山さんに移行する。

湯島さん達の演技に烏山さんっていう『軸』が出来た。

話の焦点が、”烏山さんが悪いのか？ 周りはどう思ってるのか？”にピントを合わせ

る。

「どちらにしろ機内は浸水してた！ 今更何だよ！」

烏山さんが湯島さんの怒りの演技を、逆ギレの演技で受ける。

いいぞいいぞ。「俺が悪かった」とか一言でも言っちゃいけねえもんな。

ここはその演技で、どんどん喧嘩腰に持っていくのが正解だ。

そこにクールな様子で、源さんも”湯島さん側で”会話に入ってくる。

「いや！ 確かにあんたは早計だった！」

「お前まで何を……！」

いいね。悪くねえ。

責める湯島さん&源さん、逆ギレする烏山さんの二対一つて構図になってきた。

分かる、分かるぞ。

この短時間で色々考えてんなお前ら。

主演烏山、助演湯島、助演源つて形で推移してる。

ここだけ見ると烏山さん優位……と思いきや、実はそんなでもない。

湯島さんと源さんにはアドバンテージがある。

半ば偶然、半ば必然で、『同じ事務所の仲間と一緒に審査を受けている』つてことだ。

合格枠が一つなら同じ事務所の仲間でも敵同士だが、合格枠が12あるこのオーディ

ションにおいては、倍の戦力を使えるに等しい。

湯島さんは源さんに合わせられるし、源さんは湯島さんに合わせられる。

『流れ』を作りたい人達からすればこれほど恵まれたこともねえだろ。

事実。

烏山さんは始点を作った。

源さんは最初に冷静な状況把握キャラを演じた。

湯島さんが『ヒステリックなキャラ』を演じ、つつかかった。

そして源さんが湯島さんに追従して、烏山さんを二対一で追い込む形に持っていつ

た。

最初に冷静な状況把握キャラを演じた源さんは、ここで『自然なキャラ演技』を選択するなら、「落ち着け」と湯島さんを宥めるのが妥当。

だがそうしなかった。

冷静に判断しているキャラという一貫性を捨ててまで湯島さんが演じてるキャラに賛同したのは……二対一のこの構図を作りたかったからだろう。

ここから先、演技の常道を鑑みりや、行き先は二つ。

烏山さんが二人を殺そうとする流れか。

二人が烏山さんを殺そうとする流れか、だ。

当たり前のことだが、芝居においては『殺す側』と『殺される側』がきっちり区分される。

殺す演技の達人、殺される演技の達人がいるくれえだ。

例えばウルトラ仮面なら、ウルトラ仮面のスーツの中の人は『倒す動き』をかつこよくできるスーツアクターがいいし、怪人のスーツの中の人は『倒される動き』を見事にできる人がいい。

かつこいい飛び蹴りができる人と、無様に転がってフラフラ立ち上がり、最後に爆発して死ぬ演技をする人は違えんだ。

んでもって、エチユードでは殺す側と殺される側が、その場のフィーリングでコロコロ変わることがある。

「流れで判断して」ってやつだな。

だとすると、今の流れでどっちが殺されるかは、このエチユードの出来不出来に直結する。

今、話の主導権は……烏山さんか。

さーで、どこまで状況を把握できるかな。

烏山さんが『殺す側』の演技が得意なら、押せ押せの演技が最適解だ。

怯まずガンガン押して行って、殺す気満々なところを見せて行って、湯島さんと源さんに「死ぬ役やってくれ」と暗に示し、誘導するのがいい。

会話には起承転結がある。

『烏山が殺す』っていう『結』に持っていこうとする会話ってのは、一定の形になる。会話してりや、それは湯島さん達にも伝わるはずだ。

そういう流れになると、オフィス華野の二人の連携が生きる。

そうだな、烏山さんが湯島さんを襲う真似をして、源さんがそれを庇って死ぬ……とかがベタだろうか。

二対一の構図がこれで活きる。

湯島さんと源さんは自分の死亡演技を魅せながら殺され、烏山さんの独白と後悔で終わり……これで、おそらく五分。ギリギリだな。

これが烏山さんが殺し役に回ったパターン。

逆に、烏山さんが『殺される側』の演技が得意だった場合。

烏山さんは隙を見せにいくはずだ。

周りに喧嘩を売りつつ、湯島さんや源さんに怯える演技、怯む演技を織り混ぜて見せ、『殺される人間』を演出し、舞台俳優が得意とする大仰で印象的な死に方で魅せようとするだろう。

で、ここでも湯島さん達二人の連携が生きる。

殺しに至るまでの会話の連携、殺害しようとする時の動きの連携、更には殺した後の『殺害を後悔する二人の会話』でも、息を合わせられる。

演技は相当にしやすいはずだ。

後はこの過程でどこまで目立てるか、どこまで個性を出せるか、だな。

三人は全員、全力で演技しつつ、演技しながら様々な演技プランを考えて、考えながらの演技とかいう難しいことをやっている。

部屋に入ってから演技開始まで2分弱、演技開始から現段階まで約30秒。

2分半で思い付ける演技プランなんてそうそう多くねえ。

俺が推察してる三人の演技プランと、彼らの脳内に大差はねえはずだ。彼らの挙動、言動、選択から、更に深くまで読み取り、推察する。

俺なりに、彼らの脳内のプランを把握していく。

鳥山さんの言動行動からは、原作デスアイランドの匂いが全くしねえ。

おそらく、自分の能力にかなり自信があるタイプ。

自分の演技力だけで上手くやれる自信がある奴だな。

この自信が、自分から状況を動かそうっていう行動力、主導力に直結する。

自信相応に演技力もあり、声量など目立つ要素もある。好きな監督はとことん好きになるタイプで、目立つ以上オーデイションって分野ではかなり強い。

媚びのない自分自身の強みの魅せ方。

あえて強引に例えるなら、素の笑顔があまりにも爽やかで元気で明るいものであったために、その笑顔を見た監督達が「この男にこんなキャラは似合わない」とキャラ設定レベルから書き直したという、福土蒼汰仮面ライダーフォーゼ主人公、如月弦太郎役。さんのようなやり方。

源さんは、原作デスアイランドのキャラの仕草をさりげなくやってんな。

原作まだ読んでねえ手塚監督にはイマイチ通用してねえが、原作ファンほど唸る基礎演技を確立してる。

ここを売りにしに来たか。

おそらくだが、スターズ組が『俳優のイメージ』、オーディション組が『原作のイメージ』を基点にしてる以上、原作に演技を寄せてる源さんは、正式に採用したならかなり使いやすいコマになるはずだ。

目立つ演技や行動はしてねえけど、手塚監督の目に留まる演技力か個性が見えれば、かなり合格候補に近い。

このオーディションが『原作読み込んでオーディションに臨んだ俳優がそんなに有利じゃない』っていう特殊オーディションじゃなけりや、合格候補No. 1 だったかもしれねえとすら思う。

悪く言えば媚び、良く言えばリスペクトに溢れた姿勢。

あえて強引に例えるなら、子供の頃から大好きだった仮面ライダーBLACKに憧れるあまり、その愛でとうとうオーディションにて本家仮面ライダーの主演を勝ち取り、監督達から仮面ライダーBLACKを思わせる専用の形態を与えられ、仮面ライダーBLACKをリスペクトした専用の変身ポーズを考案した俳優……桐谷漣仮面ライダーW主人公、左翔太郎役。のようなやり方。

湯島さん。

湯島さんも悪くねえ。

かなり上手に、丁寧な演技が出来てる。
悪くねえ、悪くねえぞ。

今のところ目立った失敗も欠点も見当たらねえ、湯島さんの能力からすりやこれ以上を望むのがバカだつてくらいが出来だ。

あとは、何か、手塚監督の目に留まる何かがあれば。

もうすぐ一分。

クソ。

手塚監督、もう止める気満々だ。

適当な気持ちで見てるのが感覚で分かる。

ここまでの演技の中には、手塚監督の目を引くもんは何もなかったらしい。

クソ！

何かねえのか、何か！ このまま終わったら採用の目は薄いぞ！ 何かねえのか！

「このままじゃ皆餓え死によ！ 全部あんたのせいよ！

こんな無人島でどうやって生きていけばいいのよ!？」

湯島さんのいい感じの演技に興味も持たず、手塚監督が終了の合図を出そうとする。

何か、何か、来い！

「はい、終わ——」

何か！

「？ 皆、何言ってるの……」

静かな、大きくない普通の大きさの声だった、と思う。

自信がねえ。

だって俺はその時、景さんのその声がいやにハッキリ、聞こえてたんだ。

「奥に人里があるかもしれないのに」

「――」

手塚監督の動きが止まった。

湯島さん達三人の台詞も動きも止まって、景さんを見た。

他の審査員も、撮影スタッフも皆揃って、景さんの大きくもない声にすぐに反応して、景さんの方を注視してやがる。

そうだな。確かにそうだ。

海辺で目覚めて数秒でここが無人島だと把握すんのは無理だよな。

ここが無人島だって前提で話してるのはおかしいよな。

流石メソッド演技。

”より自然な演技”を求めて開発された演技法だけはある。けれど、そこじゃねえ。

今俺が震えてるのは、そこじゃねえんだ。

なんで、一瞬前まで怒鳴りあつてたのに。

大きな声を出してもない景さんの声が。

怒鳴り合つてた奴らの会話をすぐさま止めてんだ？

おいおい。

おい、マジかよ。

熱の入った演技つてのは、周りの声が聞こえなくなりがちだ。

感情の熱が耳を遠くさせるつてもあるが、人間の耳つてのは自分が喋つてる時、周りの音が聞き取りづらくなる。

人間が自分の滑舌の悪さを自覚できない理由の一つに、これが挙げられることがあるな。

怒鳴り合つてる時はなおさら聞き取り難い。

自分の声が大きく、相手の声が大きいで、会話を続ける限り周囲の音がどんどん聞こえなくなっていく。

だから、怒鳴り合いを止めるには、もっと大きな声を上げて割つて入んなきゃならね

え。

漫画でもドラマでもあんだろ。

口喧嘩してる二人の間に、誰かが大声上げて割って入って、口喧嘩止めるってやつ。

あれがルールだ。

ああしなきゃならねえんだ。

人間ってのは、そうしなきゃ言い争いを止められねえように出来てる。

なのに。

なんで大声上げてもねえのに、離れたところで普通の声量で疑問を口にしただけなのに、全員の意識を引っ張り込んで、怒鳴り合い止めて、セツトの上の芝居を一瞬で自分のものにしてんだ。

それまで外野だった奴が、なんでこんなに静かに、なんでこんなに僅かな台詞で、怒鳴り合ってまで空気を作ってる人達の作った話の流れを、綺麗に粉碎できてんだ？

前の景さんの演技と同じだ。

よく通る声、よく耳に残る声、目を引く所作、人の意識を引く異様に質感のある演技。

皆が、景さんを見る。

皆が、景さんしか見ない。

他人の意識を引きずり込むような、異様な吸引力。

光を引き込んで二度と出さない、夜の闇みたいな、意識の吸引力だ。他の誰かなら。

景さんじゃない誰かが、「なんでここが無人島だと思ってるの？」なんて同じように言ったところで、三人が作った流れを止められたわけがねえ。

あの加熱した演技に、普通の声量で割って入れるはずがねえ。

その台詞が無視されて終わり、つてのが関の山だろう。

”景さんの台詞を誰も無視できなかつた”。

”景さんの台詞が聞こえなかつた人が誰もいなかった”。

それが、全てを破壊する。

「あ……あるはずないでしょ、人里なんて……」

あ、バカ、湯島さん……考えてから喋れ。

なんで無根拠にそう言えんだ。

ここに人里が有るか無いかは、あんた知らないのが当たり前のはずだろ。

そこでそんなこと言っちゃまったら不自然だろ。

ああ、クソ。

湯島さんの演技から、メツキが剥がれるみたいに質感が剥がれていく。

源さんは動揺してるが、考えがまとまるまで口は開いてねえ。

致命的なことは言っていない。

セーフだ。

烏山さんは気付いている。

”景さんが一番自然な芝居をしてる”ことに気付いている。

……有能だなこの人。

思考の瞬発力もかなり高かったが、状況把握能力も高く、何より見る目がある。

俺が見る限り、多少程度にしか見る目がない源さんや、見る目がほとんどない湯島さんよりはかなり有能だ。

この人がいればまだ、『この先』が繋がる気がする。

「ちゃんと調べてもないのにどうしてここを、無人島だと知ってるの?」

空気が変わった。

湯島さん達が作った芝居の流れが壊れていく。

メソッド演技が過去の自分をリピートし”本当のこのことのようにしか見えない演技”を生み出すものなら、それすなわち、彼女の演技は『現実感の無い演技』の存在を許さねえってことだ。

そうだ、これだ。ここまで喋ってなかったが、ようやく動くか夜風景。

また俺を心底ワクワクさせてくれ。

焦がれるように、君を見る。

「勝手に決めつけて喧嘩して、あなた達……どうしたの？」

ここからは、景さんのためだけのステージだ。

それまで積み重ねられた演技の流れが粉碎されて、皆が景さんを見て芝居が再開される。

圧倒的な吸引力から、一人だけずば抜けた説得力の芝居。

三人が作っていた世界観が、景さん一人の作った世界観に、完全に当たり負けしていた。

相変わらず演技のパワーが桁外れだな、景さん。

さつきまで技巧戦してた皆がバカみたいじゃねえか。

これに当たり負けしねえ奴、数えるほどしか知らねえぞ俺。

皆、景さんの台詞に反応しちまった。

景さんの主張を聞きちまった。

なら、一番妥当性がある景さんの台詞をもう二度と誰も無視できねえ。

全てが景さんを中心に回っていく。

「歩いてもないのにどうしてここを、無人島だと知っているの？」

「ど……どうしてって、そんなの……」

『よく分からない思考と言動をしている三人』を見て、困惑の表情を浮かべる景さんは、完全に役に”入って”いた。

「凄え。もう景さん以外、全員脇役だ。」

審査のことなんて全部忘れて、本当に無人島に漂着した人間みてえな反応。リアリティと説得力が、他三人と比べ物になつてない。

「気味が悪いね」

審査員席の手塚監督が、ぼそつと言った。

「悪くねえ反応だな。なんとなく手応えがある。」

もう景さんの合格は、手塚監督の中で六割くらい決まつてる感じがする。

「漂流して浜で目が覚めたとしてもそこが無人島とは限らない……はは、一本取られたね」

「笑い事じゃないですよ。」

正確に演じられたら確かにそういうことになります。我々のミスでは？」

脚本が笑って、プロデューサーが真面目な顔をして、そんな風に話していた。

「いやいやいや。」

この程度のことで我々のミスとか言い始めんなよ。

普通演技のお題なら、このくらいの”ちよつと不自然だと解釈できる部分”なんていくらでもあるだろ。ケチなんて付けようと思えばいくらでもつけられるもんだぞ。

普段のあんたなら、んなこと言わねえだろプロデューサー。

いいんだよ、あんたら特に間違つてねえんだよ。

景さんに引きずられて「我々がミスしてたのかも」なんて思い始めんなよ。

下手な役者だったら「お題を曲解してるんじゃない」って言つてるとこだろあんた。

景さんのリアルな演技に「確かに」って思つちまつたせいで、微妙に引きずられてんな。

分かる。

景さんの演技つてリアルだから、自分が認識してる何かの時々信じられなくなるんだよな。

あの時の時代劇で、歌音ちゃんの生死が誤認されたのと同じように。

ん？ 源さんが動くな。

「目的^グ地^{アム}までの航路をフライト時間から逆算すれば……

おそらくここは北マリアナ諸島の更に北。

終戦後、多くの無人島が点在するエリアだ。この島も無人島と見て間違いないだろ

う」

……！

こいつは。

「町田さん」

「英二君も分かる？」

あれ、原作の秀才キャラの台詞だね。

それも一字一句同じ台詞。

ただのオーデイションにここまで原作読み込んで来る姿勢は、かなり評価できるよ」
だよな。

これは才能って言うより、努力の証だ。

源さんはこのオーデイションに向けて、今ここにいる四人の誰よりも堅実で効果的な努力を重ねて、必要な知識を積み上げて臨んだってわけだ。

俺も今日はもう40人以上候補者を見るが、多分源さんがその中で一番、真面目に原作を勉強して来てるなこれ。

好感が持てるし評価できる。

合理と知識で、景さんの演技を論理的に自分達の流れに戻そうとしてる。

いいぞ、こりゃいい。こういうのは好きだ。

「英二君、知識を才覚で使いこなす人好きだよねえ」

「百城さんの武器がそれですからね」

「つか、漫画のこの長台詞を、一字一句違ってないと判断できるレベルで完全に記憶してる町田さんもたいがいだぞ。」

「これ原作では男の台詞ってことは、町田さんが演じる可能性が0の役の台詞ってことだよな。」

「なんで自分が演じる可能性もない役の、脚本でどんくらい採用されるかもまだ決まらなくてねえ台詞を、一文字単位で覚えてんだあんな。」

「自分が演じる想定のカラの台詞覚えてる源さんとは訳が違うぞ……?」

「スターズのおっそろしいところは、こういう優秀な人の数段上に優秀なところを、さらさらと見せて来ることなんだよな。」

「……そんなスターズの中でも、俺が景さんと渡り合えると思えるのは一人。」

「そんな景さんと普通の俳優レベルが混ざったオーディションは、これの結果は、多分……」

「わ……私も見たわ」

「そうだな。源さんがいいこと言ったなら、そこから繋ぐのは湯島さんの仕事だ。」

「飛行機からこの島が見えたの。」

見渡す限り森だったわ！　ここは無入島よ！」

源さんのここが無入島だっていう台詞から、湯島さんが綺麗に繋ぐ。ふむ。そんな悪くない演技だ。

景さんを自分達の演技に巻き込もうって意志は、まあ伝わってくる。

「……なんだか皆で口裏を合わせてるみたいだわ。何が目的なの……」

「——」
うわあ。流石景さん、“湯島さんの演技”を見て、“演技して騙そうとして何が目的なの？”って結論に到達するか。

いや、これはリアルかもしれない。

景さんにこう言われると、湯島さんレベルの芝居は、『女子高生の自然な振る舞い』っていうより、『演じてることが見えて分かるレベルの演技』にしか見えん。

演技してるようにすら見えん景さんと比べりゃ、雲泥だ。

相変わらず質の基準値が高くて凄えや、景さん。

「ははは、そりゃ演技だもんな」

「あの子悪質ですね。」

ふざけて審査ごとぶち壊すつもりですよ。止めてください監督」

「……いや」

プロデューサー達が何か言つてて、手塚監督が失格をやんわり止めてる声が聞こえる。

皆景さんから目が離せねえのに、景さんの演技を色々自分なりに解釈して、景さんの演技の見解が分かれ始めた。

離れたところから見てるからか、手塚監督くらいしか全体を詳細に見れてねえな。

共演してる三人はまだ景さんに引つ張り込まれてなくて、自分達が作った流れにしがみついていられてるが、景さんの演技の内実が理解できたら、その瞬間に景さんの演技の流れに引つ張り込まれちまうだろう。

ふざけてる、とか解釈してんじゃねえよプロデューサー。

景さんはふざけて芝居を壊してえんじゃねえ。

自然な演技をしてんだ。

自然に、その役に相応しい女の子を演じてるんだ。

彼女はこう思つてんのさ。

このよく分からない状況を理解して、友達な彼らをまた信じたい、つてな。

信じる理由を探してんだ。

当たり前のように。

だけどな。

湯島さん達の演技のレベルが低すぎるから騙されない。

ただ、それだけなんだ。

三人が景さんレベルの迫真の演技をしてたら、景さんはここで騙されてくれてただろう。

湯島さん達の演技の流れに、乗ってくれてただろう。

”景さんが演じてる女の子”なら、そのレベルの演技できつと騙させてたはずだ。

まあそうならなかった以上、別の何かが必要になる。さあどうする？

景さんの口から、怯えた声が漏れた。

「どうして皆黙ってるの……？ 皆……どうしちゃったの……？」

分かる。

ずっと手塚監督の方に思考の形合わせてきたからか、今ここに限って言えば、手塚監督が景さんに向けてる感想が分かる。

『夜風景の演技が最も説得力が有る』。

『相対的に他三人の芝居の説得力の無さが際立つ』。

『構図が変わった』。

『下手な企てで一人の少女を惑わそうとする三人と、それに勘づき怯える少女の構図』。

『夜風景の演技が自然すぎて、三人の演技がもう不自然なものにしか見えませんが、夜風景の演技は無人島に漂着した少女のそれにしか見えない』。

多分、こんなところだろうな。

三人が作つてた世界観に認識のチャンネル合わせてたプロデューサーとかは、イマイチ景さんが今作つてる世界観に乗り切れてねえが……まだ3分ある。

景さんの作つた世界観の中に飲み込むには十分すぎる時間だ。

それにしても、凄まじい。

景さんの芝居がリアル過ぎて、他三人の演技が下手な芝居にしか見えなくなつてんだな。

さつきまで普通に上手な芝居に見えてたつてのに、だ。

それは烏山さんとかは自覚してるだろうぜ。

ははっ。

こりや、凄え。

周りの芝居と演技が全部、飲み込まれてる。

これだからこの人は主演しかできねえんだよな、現状。笑つちまうくらい素敵だ。

他の三人が真面目に演技してんのに、景さんと比較で並べられた結果、演技の未熟な部分が自然と目についちまうんだ。

だから、少女（景さん）を騙そうと演技してる三人に見える……三人が自然な振る舞いのつもりでやってる演技が、”見てるだけで演技だと分かってしまう演技”に格落ちさせられてる。

三人の演技は変わってねえのに。

パねえなあ。

「どうしたって、俺達はただ——」

おつ、烏山さん、”黙ってたら駄目だ”と判断して動くか。

いい判断だ。黙ってたら全部持ってかれるぞ。

この人は最初からずっと『自分から動いて狙った方向に事態を動かす』ことが出来るな。

そんな烏山さんの台詞を遮って、湯島さんが怒鳴った。

「あんた——いい加減にしいや！」

さつきから訳分からんことばっか何のつもりやねん！」

……はあ。

いけねえ、思わず溜め息吐きそうになった。

馬鹿野郎、湯島さん応援に来てんだろうが。絶対にやるんじやねえぞ、俺。受かつてほしいなら、何も出来なくてもせめて心底応援しねえと。

今の湯島さんの叫び、いい感じの怒声だったな。

子役時代の素直に感情を乗せた叫びと、長年の訓練で身に着けた発声の技が、なんかいい感じに混じわってた。

迫力はピカイチだったぜ。

……ただ、なあ。

今、演技忘れてたろ。

余裕無いのは分かってる、分かっているんだが……湯島さんはそういうところで感情任せになるから……先と周りが見えなくなるから……だからあなたは……いや、止めだ。

これ以上は考えたくねえ。

どうする。

このままじや湯島さんは失格一直線だ。

芝居を忘れて、景さんに対して本気で怒ってる。

そんな女優が失格以外の結果をつかめるわけがねえ。

頼む、周り見えてる烏山さん、事務所仲間の源さん。

それに、景さん。

どうか湯島さんを助けてくれ……頼む。

「その通りだ！ お前さつきから変だぞ！ どうしたんだ！」

おおっ！ 源さん！

源さんが湯島さんの怒りの演技に合わせて台詞を選び、”夜風が変で周りの皆がそれに怒ったり戸惑ったりしてる”って意図の演出だと、そう思わせる方向にフオーロした！

いいな、今のはかなりいいぞ。

湯島さんの演技を忘れたガチギレが、『おかしなこと言い始めた子にヒステリックに怒った』演技にちよつと見えてきた。

ナイスフオーロだ。

しかも源さん、オーデイション撮影用カメラに映らねえ死角に腕を通して、湯島さんの肩を軽く叩いて冷静になるよう促しやがった。

カメラには何も映ってねえだろうが、ワンアクションで崩壊寸前の撮影を立て直しやがった。

景さんの演技を前にしても、余計なこと考えてねえし、冷静さも失ってねえ。

視野も広いし、機転も利く。

こりやあ強えや。

源真咲。演技力や演技分け能力だけ見りや、そこまで優秀に見えねえかもしれねえが……こいつを撮影に出したら、安心感はかなりのもんだろうな。

三人と景さんがにらみ合うような構図になって、景さんが怯えた演技で一步後ずさる。

湯島さんの感情がよく乗った怒声と、その後の源さんのフォローがいい感じに噛み合った。

本当は「どう考えても自然なのは夜風の方で、どう考えてもおかしいのは湯島達の方で、よく考えればそれで夜風を変な子扱いで怒るのおかしくね？」って思われてもおかしくねえ流れだ。

だが、勢いで流した。

勢いでなんとなく疑問点に着目させなかった。

あつぶねえ、こええ、今の湯島さん相当綱渡りしてねえか？

「朝風君、何を見てるの？」

「すみません町田さん。今ちよつと集中させてください」

今の景さんは一挙手一投足が次の動きへの伏線だ。

そして一つ行動するたび、周囲の空気を自分の演技で“寄せ”ていく。

さあ、どうなる？

どう転がる？

……頑張れ、湯島さん。

そこそこ離れたところにいる手塚監督は、景さんが「心から『本物』になりきっている」って理解してたっぽいのに。

共演者の鳥山さんは、景さんの演技を理解して、どこかで協調できる部分を探してるのに。

源さんも、余計なこと考えないで芝居を破綻させねえよう頑張ってるのに。

湯島さんだけが、景さんのことを微塵も理解できてなくて、怒っちゃってる。

そうだ、確か。

最初のオーディションの時もアキラ君が、景さんの演技が理解できなくて、「冷やかしながら帰ってくれ！」って怒ってたんだっけ。

才能によって決定される、本質的な理解力、生来の感受性。

訓練によって身に付けることが不可能な『見抜く力』。

天才への無理解が、湯島さんの無才を証明する。

景さんをずっと見ていけば、俺から懇切丁寧に説明されれば、湯島さんは景さんを理解できるかもしれねえ。

最初のオーディションで景さんを全く理解できてなかった、アキラ君と同じように。だけど、もう。

湯島さんは自分自身でも気付かないまま。

『夜風景の足下にも一生届かない自分』を、証明しちまった。証明しちまった以上——バカ、やめろ、俺。

俺の目を抉り出したい。

こんな事実を一瞬で見抜く俺の目が、憎たらしくてしょうがない。

もう能力の天井が見えてる人と、能力の天井が見えない人がいると、つい後者に目が行って、俺は目を奪われて……いつの間にか、後者の方しか見ていない。

最悪だ。

誰か、俺の目が節穴だったと証明してくれたらいいのに。

「っ」

！

景さんが逃げ出した。

三人が『自然体に見えないから』『下手な演技をしてるようにしか見えないから』不自然さが怖くなって、逃げ出したか。

「えっ!?! 何!?! どこに……!」

困惑する湯島さんが見つめる先で、景さんが三人から森の方へと逃げて——俺がせつせと絵を描いた壁に、激突した。

バカ! 当たり前だろうが!

10m×10mのサイズでしか作ってねえんだからそうなるわ!

倒れなくてよかった。撮影セットの背景は軽いものなら数kgくらいの重量しかねえ。

景さんの体重で思いつきりぶつかれば、それは数十kgのハンマーでぶつ叩くのと同じことだ。

俺が頑丈に補修してなかったら、補修前のこのセットの壁の強度と耐重量だったら……可能性レベルの話でしかねえが、ぞつとする。

考慮しておくべきだった。

役に”入った”景さんは、そこに壁があるっていう当たり前のことですら、簡単に忘れちゃうっていうのに。

もつと、俺の頭の中を、景さんのために最適化するくらいの割り切りが要る。

「うっ……」

壁に全力でぶつかっていった景さんの鼻から、血が垂れている。

顔を抑え、涙をこぼす景さんは、演技がどうこうというレベルでなく痛そうだった。

砂浜の絵の床板を踏みしめる湯島さん達が、痛そうに壁に寄りかかる景さんになじり

寄る。

……!

良いな。

この三人の立ち位置、良いぞ。

手塚監督はどうか知らんが、俺はこいつを評価する。

このセットは右・左・奥・床の四方向がパネル絵の撮影セットだ。

照明は上からのものと、監督達がいる手前側からのものしかねえ。

三人は鳥山さん・湯島さん・源さんの順に並んで立ち、手前側から景さんを演技の流れに組み込もうとにじり寄ってたが、立ち位置の間隔が絶妙だった。

景さんが壁に寄り添い、手前側から三人が近寄るってことは、三人は手前側の照明を背にしながら壁側に向き合ってるってことだ。

ここで三人が間隔を空けることで、景さんにもちゃんと手前側の照明が当たる。

景さんの表情が、手前側から壁側に伸びる三人の影に隠れちゃうってことがなくなる。

ナチュラルにやってんなこの三人。

撮影や舞台のやり方が肌に染み付いてる証拠だ。

三人が自然に間隔を空けてくれてるおかげで、景さんにちゃんと手前側の照明が当たって、オーデイション撮影カメラにも景さんがちゃんと映ってる。

今撮影カメラには、三人の体から伸びる影が景さんに当たってない構図、湯島さんと

源さんの間を通して景さんの姿が映ってるこつたろう。

悪くねえ。

本当に悪くねえ。

ただ、こういった技術より『迫真の演技』の方が評価されるのがこの業界の常。現に俺も、景さんが次に何をするかにはばつか心が向いている。

景さんが、鼻血が垂れる鼻を抑えて涙ながらに叫んだ。

わけがわからない、と言わんばかりに。

怖い、と言わんばかりに。

その振る舞いが、周囲の空気と雰囲気のを塗り潰す。

「来ないでー」

痛ましい、怯えおののく少女の演技。

一瞬、源さんや烏山さんの表情に罪悪感が浮かんだ。

何も悪いことしてねえのにな。

景さんの演技に心が引つ張られたか？

”これじゃまるで俺達が悪者だ”くらいは思っちゃったか？

こんなややこしい状況だったのに、景さんの演技に感情を引つ張られたか。

ここからどう話を作る？

もうあと二分ねえぞ。いや、もうあと一分か。

動くとしたら、ここまでの流れで自分が動くことで状況を動かそうとし続けてきた

……やっぱりあんたか。烏山さん。

「クククク……はははは……そうだよ夜風」

”悪役笑いな”？

……そうか。

景さんのここまでの疑問を逆利用して、そういう展開に持つていく気か！

烏山さんが悪役笑いをしながら、悪役のように振る舞いながら、自然と位置を調整する。

「すべて、俺達の仕業だ」

「――」

「皆殺した。残りはお前だけ」

悪役演技。

景さんの「なんでこの人達は、全然自然に見えない、こんな不自然な演技を？」という積み重なった疑問に、最高に腑に落ちる答えを与えてやったんだ。

景さんの疑問を逆利用した。

演技中の景さんの思考が”そうだったんだ”と自分で納得できる答えなら、演技中の

多少判断力が下がってる景さんの思考じや、怪しくも思えねえ。

この『思考の瞬発力』……烏山さん、ここだけ見りや確実にスターズクラスだ。

景さんの表情の恐怖に怒りが混ざる。

生きようとする想い。友達を殺された怒り。迫る死への恐怖。

全てが混ぜこぜになった感情が景さんの顔に浮かんで、景さんが撮影セットの木の枝を掴んで折って、武器にして駆け出した。

通常俳優が手に掴んで折れるような高さの木の枝なんてセットにはあんまねえが、湯島さんの身長158cmの頭に当たらない高さに設定しておいた木の枝は、身長168cmの景さんからすれば掴み取りやすい高さにあつたらしい。やつべ。

木の枝片手に、景さんは悪役の演技をしている烏山さんの頭を狙い、ひた走る。

烏山さんの狙い通りに、烏山さんの演技でコントロールされた景さんが、襲いからんとする。

すっげ。

やるなあ。

景さんの演技はいつも通り、目を奪うほどに見事だが……この烏山さんの器用さ、評価してえ。

今回のオーデイション、景さんの次にこの人を評価したくてたまらん。

いや、”景さんを使いこなした助演”としての評価だけどさ。

まさか劇毒に近い景さんをコントロールして、合格を獲りに来るとはなあ。

ともすれば一分終了しそだったこのオーデイションに、景さんの破天荒で破壊力のある演技が『リアルな説得力』を与え、暴走する景さんに振り回されるその状況を、景さんを曲がりなりにもコントロールした烏山さんが着地させて見せた。

この審査は一から十まで景さんのための舞台になつて、最後に景さんが烏山さんを殴り倒して——設定的には殴り殺して——終わりだろう。

とてつもなく目立った景さんをコントロールして引き立てた助演つてだけで、烏山さんはかなり有能さが印象付けられた気がする。

つか、悪役の演技しながら烏山さんが何気なくした移動が、舞台俳優らしい移動ながらも、実的に確で素晴らしい。グッドと褒め称えてえ。

今までの構図がこうだった。

〔夜風〕

〔烏山〕〔源〕〔湯島〕

そして、烏山さんが前に出て、こう。

〔夜風〕

〔烏山〕

〔源〕〔湯島〕

あんまりにも自然な動きだったんで、気にしてる人は大していねえ。

だがその後の展開を見りや分かる。

景さんからすりや、三人全員悪者だ。

だから自分に近い順に殴りに行った。

当然だな。

そこまで予想してた烏山さんは、悪役の演技をする前に、二人の前に出た。

自分の演技の結果、怪我する奴を自分以外に一人も出さないために。

女の子の湯島さんを傷付けさせないために。

男だ。間違いなく。

今棒を持って迫り来る景さんを見ながら、烏山さんは怯え一つ見せてねえ。

景さんは景さんにしかできねえことをしてる。

烏山さんは飛び抜けた演技力があるわけでもない。

だが他人にもできることを、最適なタイミングでこなす優秀さが見える。

俺は烏山さんには見惚れねえが、景さんの異常な天才性に隠れるこの優秀さを評価しないってわけじゃねえ……スターズの大半に、俺はこの感情を抱いてる気がすんな。

景さんが木の枝を振り上げる。

一番前に出た烏山さんは不遜に構えたまま。

そうして、今回の審査を確実に成功にまで持っていくであろう、『殺し合い成立の証拠』になる全力の一撃が、景さんの手によって振り下ろされて――

「なんでこんなメチャクチャできんねん！」

――沸騰した怒りをそのまま全身から吹き出させたような湯島さんが、それを止めた。

景さんに飛びかかって、押し倒して、馬乗りになって抑え込む。

湯島さんの方が体は小さいのに。

湯島さんは、とにかく必死で、とにかく懸命だった。

「皆必死やのに！ 真剣やのに！」

ハッ、と。

俺の心と景さんの心が、元の位置に戻る音がした。
気が、した。

「人の気持ちに分からんなら、役者なんかやめてまえ!!」

息が、止まった。

俺。

俺、何やってんだ?

なんで俺今、人が思いっきり殴られるって分かってて、止めなかったんだ?

「あー、終わっちゃった」

町田さんの零した声が、静かに響いた。

「はい、終わり。テキパキ出てっつてね、次の審査があるから」

手塚監督の無情な宣言が通る。

ここまでだ。

”殺し合い”は、始まらなかった。

そこでようやく、湯島さんが我に帰る。

「……あ」

怒りで少し上気していた顔色が、さあつと青くなつた。

……湯島さん。

考えるな。

余計なこと、考えるな。

湯島さんの目が、源さん、烏山さんの方を見る。

考えなくたつて、俺には何思つてるか分かる。

友人だから。

”私のせいで皆が合格するチャンスも一緒に消えた” つて……多分、考えてる。

「あ」

バカ、一瞬で考えすぎだ。クソ、俺が何か言う暇もねえ！

「ごめつ……つ……」

謝ろうとした湯島さんが、自分が押し倒していた景さんを見る。

景さんはなんでか、俺の方を見ていた。

なんでか分からないが、俺に何かの言葉を求めていた。

それを見て湯島さんは何か、変な反応をした。

「——つ」

駆け出し、控室に逃げ出していく湯島さん。

追おうとした瞬間、呆然とする景さんの姿が俺の目に入った。

呆然とした景さんの口から、言葉が漏れる。

「人の気持ちか……わからないなら……」
っ。

ショック受けてる。

放っておけねえ、だけどどうする！

景さんの方に行ったら、湯島さんの方は、だけど……！

「なにやってんスカ」

源さん？

「こつちじゃないでしょう、あつちでしょう、あんたは。」

茜さん、ダチが応援してくれてたから、その分気張って、余裕なかつたんじゃないん
スカ」

「……っ」

「行ってください」

「俺は」

「行けよ！」

迷いを、力尽くで押し切られた気がした。

踵を帰して、湯島さんを追う。

またここに戻って来ねえと、景さんが心配だ。

だけど今は、湯島さんを！

「英二く——」

景さんか、誰かの声が聞こえたような気がした。気のせいだったかもしれない。

ドアを閉めた音のせいで、誰の声だったかも分からん。

今はとにかく、走らねえと！

審査の前に俺は、景さんより湯島さんの合格を祈っちまった。

景さんの合格を確信しながら、湯島さんの合格を願っちまった。

俺の心は、湯島さんを好みながら、景さんを信じてた。

多分、四人の中で景さんの合格だけを信じてて、湯島さんの合格だけを祈ってた。

なのに。

俺、湯島さんの応援に来てたはずだったのに。

一番に応援することを約束してたのに。

景さんの演技に見惚れてた時だけは……その約束を、忘れてた。

他の誰もできないことを景さんがして、胸躍っている時だけは、湯島さんのことを忘

れた。

何やってんだ、死んでしまえ。自分が嫌いで嫌いでしようがなくなる。

景さんが木の枝を握って、最後のクライマックスに向かった、あの瞬間。

俺は、そもそも、あの瞬間に。

『湯島さんが景さんに殴られる心配』を、しなくちゃならなかったんじゃねえのか？

友達の心配より……名演の質を分析してた俺は、俺は。

クソつ。

俺はこの業界が好きだ。

様々な人と組み、多様な現場に行き、無限の可能性を追求できるこの世界が好きだ。

その中でも、特別な輝きを持つてる人が好きだ。

でも、時々。

ほんの時々。

才能が天才と比べて無いってだけで、報われない人達を見てみると、その涙を見てみると……この業界が、嫌いになりそうになる。

それに最適化してる自分が、嫌いになりそうになる。

——この業界において、優しさは頻繁に無価値にされるものなのよ

——観客はアキラの優しさを、アキラの演技の評価点になど加えない

アリサさんの言葉が、脳裏に甦る。

アリサさんみたいに割り切って、すっぱり心を切り替えられたなら、いつそ楽だったかもな。

だけど割り切れねえ。

割り切れるか。

割り切ったら俺の中でアキラ君はどうなるんだ？

だけどどうにもならねえことなら、割り切る以外に解決法は何もねえんだ。

俺はこの人達がなんで百城さんや景さんになれないかも、なんで俺がこの人達の成功を祈ってるかも、よく分かっている。

分かっている、分かっているけど。

それでも湯島さんは、優しかった。

湯島さんはなんで、あのタイミングでどうしようもねえくらいにキレたのか。

それは、景さんが本気で烏山さんを傷付けにいったからだ。

人が人を自分勝手に傷付けようとする。

その行為にこそ、湯島さんはどうしようもない怒りを覚えた。

一回源さんになだめられて、意識的に自分の怒りを抑えていたはずの湯島さんが、抑えきれない怒りを覚えたのは、隣人を守ろうとする優しい心があったから。

オーデイションをちゃんと成功させることができなかつた原因の怒り。
クライマックスの流れを壊してしまった怒り。

殺し合いの成立を邪魔してしまった怒り。

その怒りは、あの場で誰よりも優しかつた湯島さんだからこそ湧いたもの。

優しいからこそ。全部、台無しにしちまつたんだ。

あの人は、俺よりずっとずっと優しいからこそ。

俺が黙って見てるだけだつた、人が殴られるその瞬間を。

本気で、必死に、止めに行つたんじゃねえのか？

湯島さんがオーデイションを台無しにしてしまったのは、優しいからであつて、それで湯島さんが落とされたりすんのは、絶対におかしいことなんじゃねえのか？

なんでさっきの流れで、俺に一つの不利益も発生してねえんだ？

人でなしは……優しくない、人の気持ちから分らない人でなしは。

俺だけだ。

茜ちゃんの叫びが、耳に焼き付いている。

——人の気持ちに分からんなら、役者なんかやめてまえ!!
呆然とした私の頭が、動かない。

夜風景は天才だつて、そう言われた。

でもとてもそんな風には思えない。

こんな私が天才だなんて、全く思えない。

自分を制御することすらできなくて、周りにも迷惑をかけて。

こんな私に、どんな価値があるんだろう。

——人の気持ちに分からんなら、役者なんかやめてまえ!!

私が、私にしかねないのは。

私が、他の人みたいに赤の他人になれないのは。

私が、他人の気持ちを分かってないからじゃないの？

じゃあ、私、役者じゃない。

茜ちゃんが言う通り、役者なんて名乗れない。

でも。

役者じゃない私は、家族にも受け入れてもらえない。

——役者さんにならないなら、おねーちゃん怖い

レイが泣きながら私にそう言ったことを、私は忘れない。

家族にちゃんと認めてもらうには、私は役者で居続けないと。

役者じゃない私は無価値だ。

役者じゃない私は、家族にも許容されない。

だから、役者以外の人生は嫌だ。

役者になったら、皆が笑って、拍手してくれた。

あんなの初めてで、私の人生には他にあんなの何もなかった。

嬉しかった。

楽しかった。

映画を見ていつも辛いことを忘れていた私が初めて、自分が何かをして褒められて、その喜びで何もかも忘れられるかもしれないと、そう思えた瞬間だった。

「英二くん」

呼んでも、彼は振り向かなかった。

茜ちゃんを追って行ってしまった。

……彼も、私が役者失格だと思ったのかもしれない。だって、そうだ。

彼は役者としての私が大好きだって、それは分かるけど。それ以外の私が好きかどうかなんて、全然分からない。

だからなんとなく思う。

私が役者じゃなくなったら、彼はきつと私の友達ですらなくなるんじゃないかって。

——あなたの演技に一目惚れしました。

英二くんは直球だ。

いつもちやんと、伝えたいことをちやんと言葉にしてる。

伝え方に問題が有る時もあるけれど、英二くんが私をどう見てるかは、ちゃんと分かっているつもり。

だから……だから。

私は本当に、役者失格なのかもしれない。

「……あ」

ふらふらと立ち上がろうとして、気付く。

演技をしていない状態で、押し倒された姿勢から立ち上がって、普段の私の視線の高さじゃない高さ……茜ちゃんの視線の高さを私の目線が通過して、その時気付いた。

このセツト、茜ちゃんの身長に合わされてる。

普段の私の視線の高さだと気付かないけど、この高さを通過する時は見れば分かる。

……ああ、そっか。

——俺はその友人を一番に応援しています。

英二くん、私と茜ちゃんの傍をすれ違う時、一回しか応援言つてなかったね。

——頑張ってください。応援してます

なんで、私に言われたことだと思つたんだろう。

なんで、こんなことになつちやつたんだろう。

私は……私を応援してくれた物作りの友達を、傷付けてしまったかもしれない。

最低だ。

最悪だ。

私は。

私はもしかしたら、取り返しのがつかないうことをしちやつたんじゃないかって、そう

思つた。

どうしよう。

そうだ、この感情は忘れよう。英二君へのこの想いは忘れよう。

忘れた。

良かった。これで私はまた元気になれる。

英二くんにも、明日またちゃんと謝らないと。

せめて英二くんには、ちゃんとした役者だと認められたい。

茜ちゃんに言われたことと思つた感情はそのまま残つてる。

そうだ、茜ちゃんにも謝らないと。茜ちゃんに認められないと。

じゃないと私……きつと、役者を名乗れない。

親の死から逃げた天才の少女、親の愛で役者になった非才の少女、親に――

あれは、いつのことだったか。

私はいつ、あれを見たんだっけか。

「湯島さん」

「……何？」

「今日ですね、湯島さんが落ち込んでる理由……」

「湯島さんが自分のことを才能が全く無いと思い込んでいる愚考を、壊しに来ました」
「えっ」

「本日の俺の自主的お仕事は、湯島さんの中に自信を作ることです」

「英ちゃんが持って来たのは、レンタルショップで借りられる、私が過去に出演していた作品全てを研究したものだっけ」

「つまり、この2008年度と2009年度の映画における湯島さんの演技の成長が顕著で――」

呆れと嬉しさが混ざり合った気持ちを、今でも覚えている。

「2011年度のこの時の撮影では、オールアップ時に監督から湯島さんがお褒め頂き
」
今なら分かる。

英ちゃんは私を説得する言葉を繰り出せるほど、口が上手くなかった。

だから”説得材料を作るしかなかった”んだって。

「——つまり湯島さんは毎年、役者としての技能が確かに成長しているんです！」

「英ちゃん、それが言いたかったん？」

「俺は俳優さんじゃありません。」

自分の言葉に演技で説得力を持たせられないんです。なら、論拠を並べるしかないで
しょう」

「へー、ほー、そうやったんかー」

演技が徐々に上手くなってるとっていう論理的証明。

あんまりにもあんまりで、つい笑ってしまった。

英ちゃんも自覚してたんだ。

自分が、湯島茜の才能を見切ってることに。

その上で、自分に嘘をついてまで褒めていたことに。

……私が、湯島茜が、そんな英ちゃんの褒め言葉をあんまり真に受けなくなってきた

ことに。

だから、論拠を持って来た。

説得材料を作った。

私は、私が思う以上に単純な女だったみたいで、こんなことで、勇気を貰ってしまった。

「英ちゃんはほんま、一生懸命やなあ」

ああ、この人、私の演技好きなんやなーって思つて。

私は心強くなって。

うちはもうちよつと頑張らないとなつて考えて。

頑張る理由ができてしまった。

女優を諦められるだけの確信か、女優を続けられるだけの自信が欲しかった。

夜風ちゃんは、多分英ちゃんの知り合いだ。

あの目を見れば分かる。

じゃあ英ちゃんにとっての夜風ちゃんは……そこは、聞くのが怖い。

英ちゃんは時々、ああいうよく分からない人を熱心に褒める。

大人でも、子供でも。

そして欲しい、英ちゃんの見ると目は正しい。

私が下手だと思つて英ちゃんが変に褒めてた子役は上に行った。

私が褒めてて、英ちゃんが変に褒めてない子役はすぐに伸びなくなつて辞めた。

そして……英ちゃんが私より褒めてた子役も、どんどん辞めていった。

英ちゃんと付き合いを続けるコツは、英ちゃんのやな部分を見ないことだ。

彼は結構ややこしくて、面倒臭くて……残酷なところがある。

でもそういうところを見ると、英ちゃんのイメージがそつちに引つ張られすぎる。

英ちゃんの優しさが見えなくなる。

「英ちゃんはキチガイじゃない」と思うより、「英ちゃんはどこかキチガイだけど優しい常識あるし良識的で、うちの友達」と思つておく方がいい。

それがコツ。

英ちゃんدةこういう癖を付けておいた結果、面倒臭い人に度々出会つてしまふ芸能界での人付き合いがそこそこ上手くなったのは、英ちゃんに感謝しておくべきなのかもしれない。

うーん。

素直に感謝しきれない。

だから、英ちゃんが変わな考えをしても、友人は流してやるべし。

じゃないと英ちゃんがずぶずぶ引きずる。

私と英ちゃんの関係で、苦惱が大きいのはなんだかんだ英ちゃんな気がするから。たとえ、私が、業界で成功してる天才の英ちゃんに思うところがあっても。

恵まれた人間が上から目線で、好意と手助けを恵んでる……そんな風に見えても。笑おう。

陽気に笑おう。

英ちゃんが私の笑顔が好きなのは、なんとなく伝わってくるから。

どこかズレてる人であっても、悪い人ではないんだ、英ちゃんは。だから。

英ちゃんが『チヨコ』とかの長所を熱っぽく語った後でも、カメラの前では笑おう。

売れない子役のままこの歳になった私を、後輩が嘲笑の目で見てても、笑おう。

オーディションの大失敗も引きずらずに、笑おう。

笑えない女優に、きつとそんなに価値はないから。

でも、今日の大失敗を理由に女優を辞めてしまえば？

もう、辛い思いをしなくて済む？

じゃあやめたい……そんな風に、思ってしまったて。

「湯島さん！」

思ってしまったその時に、彼が来た。

息を切らせて、追つて来た。

子供の頃。

両親は私を子役にして、ちやほやしなから、「勉強ばかりしているとつままない人間になる」なんて言つてたかな。

見てる？ 二人共。

私、つままない役者になつちやつたよ。

つままない俳優とつままない俳優が見分けられる英二君。

君は私に辞めるべきじゃないとか言うけど、本当はどうなんだろう。

私はもう分からない。

「英ちゃん、ちよつと聞いてええかな？」

「え？ は、はい。なんでしようか、なんなりと」

「英ちゃん、私の天井が見えとるやろ」

「――」

「お世辞の『好き』とか、もうやめてくれへんかな」

言った。

言つてしまった。

辞めるか辞めないかの瀬戸際だから？

私に余裕がないから？

オーデイションで皆に迷惑をかけたことで、まだ冷静じゃないから？

英ちゃんの前でかっこつけておいて、大失敗したから？

どう話せばいいか分からなくなっちゃったから？

ああ。

……こんな表情をさせたかったわけじゃ、なかったのに。

本当は、子役からやってるのにさっさと上にも行けなかった、才能が無い私が全部悪いのに。

何もかも、私が壊してしまった。

武光君も、真咲君も、茜ちゃんも、私をコントロールしようとしてくれたのに。

お芝居中の私はそんなことに気付けないまま、周りを振り回して、お芝居の流れを全部台無しにしてしまった。

映画で例えるなら。

私が崖から落ちそうになって、暴れて、三人が私を引つ張り上げようとして、それでも暴れた私が皆と一緒に落ちちゃった形。最悪だ。

英二くんとの約束まで、破ってしまった。

——— できればいいんですけど、景さんに周りを見てから演技してもらいたいです

英二くんが言ってたことは、正しかった。

——— そういうことになったら、景さんまで失格になってしまいます。

——— それどころかオーデイションの他の人が怪我してしまいかねません。

——— デスアイランドには俺の友人も参加しています。

——— 俺はその友人を一番に応援しています。

——— 景さんがその人を怪我させ、景さんが罰されたりすれば、俺はどういう顔をす

ればいいのか

少し思い出すだけで、胸の内側をかきむしりたくなくなる。

英二くんは、時代劇の時の私を見ていたから。

こうなるかもしれないって分かってたんだ。

……私が英二くんの友達を傷付けるかもしれないって分かった上で、英二くんは私を

応援してくれた……あんなお菓子まで作ってくれた。

英二くんの目。

私を信じ切ってる目。

あんな彼が私に頼み事までしてたのは、私から友達を守りたかつたから。

もしかしたら英二くんは、私のことを何も信用してなかったのかもしれない。

どこにもいなかった。

私みたいな、共演者を攻撃する人は。

どこにもいなかった。

——うん、約束する。私、誰にも迷惑をかけずに受かつてみせるわ

——周りの人にも迷惑をかけずに受かる……うん。ちゃんと覚えたわ

なんで私は、あの約束を、私が守れると思つたんだろう。

英二くんに役者失格と見られて当然だ。

私、こんなで役者なんて名乗れない。

武光君を殴ろうとしてしまった木の枝を拾って、握ると、その感触に罪悪感を思い出

して、潰れてしまいそうだった。

一度、頑張つて、その感情を忘れようとしてみる。よかつた、結構忘れられた。

そうしていると、司会進行をしていた綺麗な女の人が話しかけてきた。

「あ、その枝、ここに置いてくださいいね。うちの朝風が直しますから」

「…………え」

「うちの朝風の傑作なんですよ、それ。」

事故で壊れても、断面が危なく尖らないようになってるんです。

擬似的なブロック構造……なんだっけ……とにかく、ハイテクで。

本物の木にしか見えなかったでしょう？

今後は壊さないでくださいね、仕事時間に基本タダでやってくれる彼以外に頼むと高いので」

ふと、作り物の森を見て思う。

英二くんはこれにどのくらいのお金をかけたんだろう？

英二くんはこれにどのくらいの時間をかけたんだろう？

私が何の罪悪感もなく折ったこの枝って、直すのにどのくらいお金と時間がかかるんだろう。

英二くんは普段特撮でお仕事をしているらしい。

木も作るし、森も作るらしい。

毎日彼が作ってる木って、どのくらいの値段？

……考えたこともなかった。

どんな気持ちで英二くん達がセットの準備をして、撮影の準備をして、オーデイショ

ンの準備をして、本番に望むのか……英二くんや茜ちゃんは何を考えてるのか、想像もしてなかった。

——人の気持ちが分からんなら、役者なんかやめてまえ!!

最初のオーディションの時はよく覚えてない。

CMの時は私一人だった。

時代劇の時は……そもそも撮影を完遂できなかった。

いつも私は。

周りが私のことを考えてくれていても。

周りのことを考えられてない。

——俺は、景さんがこの世で最も幸せな役者になれるかもしれないと、そう思っ

います

英二くんが私を褒めてた理由が分からない。

黒山さんが私を拾い上げてくれた理由が分からない。

終さんが私を認めてくれていた理由が分からない。

他人が分からない人間に——他人になる役者を名乗る資格なんてあるの？

この感情。駄目だ。考えがまとまらない。

切り替えて、忘れないと。

映画が見たい。

映画が見られれば、すぐにどんな感情でも忘れられて、喜びの感情を思い出せるのに。

「どう思うよ、武光。今日のオーディション」

「はっはっは！ 悪いことばかりではなかったと思うぞ真咲！」

「へーへー、そうかよ」

「ただ、真面目に考えるなら、俺達に合格の目はあるまい。」

真咲も俺も上手く立ち回れず、全体としての出来も良いとは思えなかった」

「だよなあ……クソ、もうちょっと冷静に考えてりゃ、あいつらのフオローもできたつてのに」

同じ控え室の離れた場所で、武光君と真咲君が話している。

武光君が豪快に。真咲君はクールに。

熱い喋りと冷たい喋りがぶつかっているのに、そんなに不快じゃないのが不思議だった。

ああ、もしかして、これが喋る訓練をちゃんとしてきた人つてことなんだろうか。

「茜さん、大丈夫かな……衝動的に事務所に辞表出したりとかしてねえといいんだが」

え？ 辞める？

真咲君の発言に、武光君が返答を返す。

「さあな。だが、俺達は役者を辞められん。

辞めたとしても、おそらくは一生大なり小なり苦しむだろう」

「なんでだよ」

「芝居は麻薬のようなものだからだ。俺達は、分かった上でそれに浸かっている」

……麻薬。

茜ちゃんは辞める？ 辞められない？ 私のせい？ 分からない。考えがまとまら

ない。

真咲くんは優しい。

芝居の時も、芝居が終わっても、ずっと他人のことばかり考えてる。

今は、茜ちゃんのことを本気で心配してる。

武光くんは勇ましい。

芝居の時も、芝居が終わっても、割り切った豪快さがある。

今は、茜ちゃんのことを心配してる真咲君を気遣ってるように見えた。

私も心配で、心配で、思わず言葉が口から漏れる。

「……茜ちゃんは？」

真咲君が、複雑な感情を精一杯消した表情で、私の問いに答える。

「……帰ったよ。審査結果は後日だし」

時計を見る。

審査が終わってから、もう一時間くらいが経っていた。

英二くんが茜ちゃんの後を追ってから一時間。

私が見限られてから、一時間。

胸が痛い。

私がどのくらい迷惑をかけたのかを、想像したくもない。

「どうせ確実に落ちてるしな」

真咲君の取り繕わない一言が、胸に刺さった。

茜ちゃんだけじゃない。

武光君も、真咲君も。

私を責める資格があつて……でも、責めない。

だからこのくらいの言葉で済ませてもらえないことは、幸運なんだ。

「茜さんは高校辞めて、上京して、バイトしながら女優目指して……」

真咲君の言葉が、胸に刺さる。

「……今回のオーディションにかけていたんだ」

真咲君の声が優しい。

これは、私を責めるための言葉じゃない。

そうだったらもつとトゲトゲしく言うはず。

真咲君が優しいから……それだけだと思っただけでいいことじゃ、なくて。

真咲君は、きつと擁護してるんだ。茜ちゃんを。

人の気持ちに分からない私にも、さつきからずつと茜ちゃんのことを心配してる真咲君を見ていれば、流石に分かる。

茜ちゃんが押し倒した私の中の茜ちゃんのイメージを、良くしようとしてる。

茜ちゃんが必死だった理由を、私に教えようとしてる。

夜風景の中の湯島茜のイメージを、少しでも挽回しようとしてる。

暴走してめちやくちやにしたのは、私だったのに。

本当は、私だけが悪いのに。

真咲君が教えてくれなければ、私が何を壊したのかも分かってなかった私は……本当は、茜ちゃんが言った通りの人間だった。

英二くんが作った大事なセツトを壊して、武光君に殺す気で殴りかかって、茜ちゃんの大切なオーディションをめちやくちやにして、真咲君に教えてもらわないと分かりもしない。

駄目だ。

ダメだ。

私、このままじゃ駄目だ。

「夜風」

武光君に呼びかけられても、顔を上げられない。

「結果的に俺達は『殺し合い』の芝居をするに至った。

あれは初めからそういう狙いだったのか？」

顔を上げないまま首を振る。

狙いなんてなかった。

一生懸命、どうしよう、どう演じよう、そう考えてる皆の横で……私だけが、『役に入る』ことだけしか考えてなかった。

英二くん。

——役そのものになりきれぬ人は、新しい役を得るたび、別の人生を生きるといいます

——それで自分の人生を見失ってしまう人もいます。

——でも、それでも、見失わなければ……

——あなたは役の数だけ人生を生きられる、この世で最も幸福な者になれます
どうして私が、そんな人間になれると思ったの？

私はこんなにも簡単に、自分を見失ってしまうのに。

「殺し合いの芝居なんて、初めから難しいと思つてた。

知らない自分を上手に演じ切れることもできないのに……ごめんなさい」

「ごめんなさいって、マジでそんなことあるのかよ」

変わらないと。

変わらないと。

変わらないと。

嫌いな自分、逃げたい現実があつたら、映画を見ればよかつた。

今の自分を忘れてしまえばよかつた。

抱えた感情を忘れてしまえばよかつた。

現実から逃げてしまえばよかつた。

大好きだった母が死んだ時の感情も。

父に捨てられた時の感情も。

お母さんが死んでお父さんはいなくて、弟妹はいつも泣いていて。

家の外では皆幸せそうに笑っていて。

映画の中の世界は幸せそうで、楽しそうで。

全部全部、映画を見て感情を思い出して、今の自分を塗り潰してしまえば、忘れられた。

私が何も幸せじゃない時も、映画の中の人達は幸せそうで。

映画を見て幸せな過去の感情を掘り出せば、私も幸せな気持ちになれて。ルイとレイの前では私は明るく笑っていないといけないと。いけなくて。

—— 役者さんにならないなら、おねーちゃん怖い

そうだ、だから、感情を頻繁に入れ替える私を、妹は怖がっている。

私は役者にならないといけないと。いけなくて。

でないと家族と一緒にいれなくて、家族の笑顔を守れなくて。

役者でいれば私は幸せで。

そこにくらいにしか、私の幸せも喜びもなくて。

役者になった私を、妹も弟も笑顔で肯定してくれて。

私達を捨てた父が送ってくるお金は使いたくなくて。

だからずっと、辛くてもバイトで三人分の学校と生活のお金を稼がないといけなくて。

役者をやっているだけで、きつとそれも解決できて。

忘れたい？ 私は、忘れたい？ 現実のこと全部忘れて映画の世界に逃げたかった？

駄目だ。この感情は忘れないと。

この思考は忘れないと。

きっと、この想いはよくないもの。忘れよう。忘れた。

私は一点の曇りもなく家族を愛してる。

前向きな気持ちを思い出そう。

後ろ向きな気持ちだけじゃ駄目だ。

過去から前向きな記憶を思い出して、前を向く。

よし、できた。少しは前向きになれた。

英二くん。

――俺は、景さんがこの世で最も幸せな役者になれるかもしれないと、そう思っています

――そうなれたら、素敵ね

英二くんはとても素敵なことを言ってくれた。

なれるだろうか、私に。

……役者も名乗れそうにもない私に。

なりたくないなら、変わらないと。

今日みたいなことを二度と起こさない私に。

茜ちゃんを二度と怒らせない私に。

「私はこのままじゃいけないんだわ」

沈黙が流れて、武光君が口を開いた。

「確かに、お前の芝居には冷や汗をかいたが……」

「いつかもう一度お前とまともに芝居がしてみたいと、俺は思ったよ」

え？

「おい、正気かよ」

「正気だとも。テレビに出てる君らの界限は知らんが……」

「しがない舞台俳優でしかない俺は、舞台の上には、こいつの同類がいるのを知っている」

？ 同類……？

「はあ……はあ……すみません、今戻りました！」

「！ 朝風さん!？」

—— 英二くん。

「朝風さん、茜さんの方はどうにかなったんスか？」

「大丈夫です。あの人は聖母か何かですね」

「は?」「は?」

は?

えー……??

無才。

自分のやりたいことと、できることが噛み合っていない人を、そう言う。

無能。

自分のやるべきことと、できることが噛み合っていない人を、そう言う。

天才。

自分のやろうとしていることと、できることが噛み合っている人を、そう言う。

不幸。

自分のやりたいことと、やるべきことが一致していない人を、そう言う。

幸せな人。

自分のやりたいことと、やるべきことが一致している人を、そう言う。

天職。

自分のやりたいことと、やろうとしていることと、できることが一致している人を、そ

う言う。

天才つてのは、なんなんだろうな。

料理の天才がサッカーの世界に行ったら、天才じゃねえ。凡才になる。

逆にサッカーの天才が料理の世界に来て、凡才になっちゃうだろう。

天才つてのは絶対的指標か？

俺は、違うと思う。

活躍する場によつて天才が凡才に、凡才が天才になったりもする。凡才の中で頭一つ抜けた奴は間違いなく天才で、飛び抜けた天才の前で普通の天才は凡才に墮ちる。

俺は天才とか大袈裟に言われることもある。

景さんは天才だ。

百城さんも天才と言っちゃまっていいだろう。

だが俺が俳優をやったら、景さんが物作りをやったら、確実に凡才扱いだ。無才。

何かをやるうとしてて、やりたいことがあつて、才能がなくてできることが噛み合っていない……一度しかない人生で、もうその願いが叶わないと決まってる人。

応援してるつもりだった。

願いを叶えてほしいと思つてた。

なの……一番に応援するって約束を、破っちゃった。

約束破りのクソ野郎だ。

俺が約束を破ったことは誰にもバレてなくても、俺の心が知っている。

俺がクソなことは俺が一番よく知っている。

全部、俺が悪い。

「英ちゃん、ちよつと聞いてええかな？」

「え？ は、はい。なんでしようか、なんなりと」

「英ちゃん、私の天井が見えとるやろ」

「――」

「お世辞の『好き』とか、もうやめてくれへんかな」

目を逸らすな。

心が痛くても、湯島さんと向き合え。

楽な道を選びたいなら、自分のためだけだったなら、ここに来なかつただろ、俺。

嫌われてもいい。

否定されてもいい。

俺はどうなつてもいいから、せめてこの人には笑ってほしい。

今は、作り笑顔は要らねえ。

作り物の顔は要らねえ。

本物の笑顔が欲しい。

「お世辞なんかじゃないです」

「どうだか」

「いいえ、本当です。聞いてください湯島さん。俺は、湯島さんに謝らないといけないこ

とが」

「ストツプ」

ええ？

「経験則的に分かる。この英ちゃんの話は私が聞いたらへこむやつや」

「えっ」

「やから聞きとーない」

ええ……そうきたか。

「で、でもですね、俺はとても酷い……」

「何のことかさっぱり予想できんけど、これ以上へこみたくないや。」

大丈夫や、私英ちゃんが生き方へタクソなこと知つとるし。

聞いてもどうせ英ちゃんの評価は変わらん。ただ私がへこむだけの聞き損や」

「は、はあ」

「私は聞かん。英ちゃんも話すな。ええな？」

謝らなきやならんことがたくさんある。

でも謝つちやいかん。

……ああクソ、湯島さんにここまで言わせてどうすんだ。

分かつてんだろ俺。

気を遣われてんだよ、俺は。

どん底の状態でも他人を気遣える女の子に、気を遣わせてんだよ。

「でも私、そんな心広くあらへんから。

やーなことされたと思たら、ふつーに不快になるんや。

英ちゃんはちゃんと反省すること。

英ちゃんをよく自分を責めるから、それでじゅーぶん罰になるはずやし」

「……俺が十分な罰になるくらい、自分を責めないかもしれませんよ」

「英ちゃんを信じる。それでええやん」

湯島さんは、精一杯の作り笑顔を浮かべていた。

「――っ」

情けなかった。

励ましに来たつもりだった。

慰めに来たつもりだった。
ところがどうだ。

湯島さんはなけなしの心の力を振り絞って、俺を氣遣つてる。

”湯島さんに最悪なことをしちまった”と気にしてる俺を、逆に氣遣つてきた。

……応えてえ。

この友情に、応えてえ。

そうだろアキラ君。

俺みたいなクズはいつつも手遅れになつてたりするが……ちゃんとその心がヒーローやつてるアキラ君なら、ここまでしてくれた人を、ほつとかねえだろ。

俺も、アキラ君みたいに、かつこよく他人に優しくしてえ。

アキラ君が持つてる”当たり前”を少しだけ、足りないものだらけの俺に貸してくれ。

この人をせめて、ちゃんと笑顔にしてえんだ。

「じゃあ、もう少し、信じてもらいます」

「？」

「湯島さんは悪くないと言いたかった。」

あなたの演技が好きだと言いたかった。

でも、多分、今言っても信じて貰えないと思います。

だから、今まででしたことがなかった話をします。それで信じていただければ」

「何の……？」

「俺が心で好きになったものつていうのは何か、つて話です」

近場の自動販売機を操作して、紅茶のボトルを二本ほど買う。

片方を湯島さんに渡した。

詳細まで話すと、少し長くなる話だ。

それに……俺もあんましたい話じゃねえ。

俺はもう乗り越えてる。

俺はもう気にしてない。

俺はもう忘れてるも同然。

俺はもうちゃんと心で消化してる。

もう心の一部見てえなもんだ。

だから、平静的な気持ちで語れる。

”好きだから”という話を。

「湯島さんは、お父さんが好きですか？」

「んー、まあ、好きやな。あんま嫌いになる要素あらへんし。」

私を子役に入れて人生決めたんは、ちよつと思つてこあるけど」
親父の話ができる。

真咲さんも、武光さんも帰つた。

オーデイションはまだ地味に続いている。

俺は休憩室の自動販売機を操作して、お茶を二本買った。

……あ、一時間くらい前に飲んだばっかだった。飲みきれつかな。

片方を景さんに渡す。景さんは、自動販売機横のソファで膝を抱えていた。

「いめんさい」

景さんが謝る。

片っ端から謝る。

俺が予想してた謝罪も、予想してなかつた謝罪もあつた。

「謝るのは俺の方です」

俺も謝る。

片っ端から謝る。

景さんが謝つて、俺が謝つて、互いに”こつちが全部悪い”の平行線。互いに譲らん。

ええいクソ、強情なやつめ。

ここまでネガティブな人間だとは思……いや、俺は心のどこかでは思ってたか。メソッド演技は、過去の自分を今の自分に上塗りするやり方。

精神医学的には、過去と現在の自分の混同の危険さえ指摘されてる。

それを天然で身に着けられるやつが、幸せなわけがねえ。

前向きに、ポジティブな心の持ち主であるはずがねえ。

心は弱く、過去には現実逃避の連続だったはずだ。

強情で、向こう見ずで、突っ込みがちで、前のめりなのに、気にしないでネガティブ。

辛いことを引きずらない陽のキャラに見えがちなのは、定期的に感情を忘れてるから。

『切り替えが早い』と『前向きでポジティブ』は同一の性質に見られがちだが、景さんみたいに切り替えの早さしか持ってねえ人もいる。

だから、支えねえといけねえんだが……人を支えるってのは、本当に難しい。

「英二くんは、強いわ」

景さんが、いたわるような、褒めるような、そんな声色を出す。

「……失敗して、人を傷付けて、辛い想いをして、私みたいに落ち込みすらしない……」
なんだそりゃ。

俺がそんなに強く見えるか。

こんなに情けねえやつ、そんないねえよ。

「落ち込む時間の余裕があつたら落ち込みます。でも、今はそうじゃありませんから」

「……」

「俺は自分の心の状態を理由に、何かを損なつてはいけません。」

「そうなる前に立ち上がらないと。それが母から貰った、造型屋の正しい資質ですか
ら」

「……お母さん？」

「はい、俺の母です」

景さんは立ち上がろうとしてる。なら、俺のおふくろの話がちつとは役に立つかもしれない。
れん。

ソファアの景さんの横に腰を下ろす。腰を据えよう。

詳細まで話すと、少し長くなる話だ。

それに……俺もあんまり話じやねえ。

俺はもう乗り越えてる。

俺はもう気にしてない。

俺はもう忘れてるも同然。

俺はもうちゃんと心で消化してる。

もう心の一部見てえなもんだ。

だから、平静的な気持ちで語れる。

”何をもつてして『創る者達』は失格なのか”という話を。

「景さんは、お母さんのことが好きですか？」

「好きよ。」

私をとても大切にしてくれたから。

もう死んじやったから、好きだった、つて表現になるけど」

おふくろの話ができる。

「俺が父親を殺した時の話を、少し聞いてくれませんか」

「俺の母親が、俺を許さないまま、俺の前で首を切った時の話を、少し聞いてくれません

か
」

湯島茜。

夜風景。

二人は英二が、今まで踏み込ませなかった部分にまで踏み込むことを許した気配を、なんとなく感じていた。

愛はあった。そこに、彼の周りに、きつとあった

事故が起これば、人は死ぬ。

「お前は才能が無いな」

親父はそう言っていた。

才能の定義は多く口も人それぞれ。

少なくとも親父の定義においては、俺は才能が無い奴だったらしい。

親父よりも才能が無い奴だったらしい。

俺も、そう思う。

「何故他人の技術ばかり模倣する？　それがお前のやり方ならそれでもいいが」

そこに技術があるからだろ。

「それは凡人のやり方だ。」

お前はその辺の人間よりは才能がある。

技術とはなんだ？

天才の模倣だ。

物作りも、科学技術も医療技術も同じだ。

他者より優秀な人間が研究し、試行錯誤し、ひらめく。

そうして生み出された技を凡人が真似できる方法論にし、技術となる」

知ってるよ。

「お前は生み出す側だ。技術体系を”創る”側だ。何故先人の真似ばかりする？」

俺は親父にはなれねえからだよ。

「お前は踏み切れてねえだけだ。必要なのはきっかけだけだろう」

どうだか。

「絵でもいい。スーツでもいい。撮影セットでもいい。

物を作ることの幸福ってやつをお前は分かってない。

芸術は言語だ。

何かが伝わってくる芸術だけが後世に残る。

何も伝わってこねえ芸術は後世に残ったりしねえ。

才無き人間が絶対に使えない俺達だけの言語を、俺達は持っている。それは、幸福だ」

分かってる。

「伝える。

感情を伝える。メッセージを伝える。

『かつこいい』『優しい』『悲しそう』を見た人間に思わせる。

一の造型で千の言葉を超える。

じやなきやお前は、依頼されても消費者に訴えかける広告ポスター一枚すら作れん」

この前、”主人公の心の成長”をスーツの造型だけで表現してた親父らしい言い分だな。

そりやそうだ。

怪獣スーツだのヒーロースーツだのはファンタジーだ。

本来『強そう』って連想できるわけもねえんだが、俺達は『強そう』って思わせなきやならなかった。

人間の脳は、既存知識から連想する。

ライオンを見せりや、ある程度は『強そう』と思う。

完全創作の動物を見せても、大抵の場合は『強そう』と思ってもらえねえ。

え。ただど完全創作の怪物でもなきや、『ライオンより強そう』だなんて思ってもらえねえ。

そして、俺達はそれを作らなきやならねえ。

同時に、優しそうなスーツとかもファンタジーだ。

怪獣やヒーロースーツなんて、地球のどの生物とも違う。

優しそうな人間の顔の真似はスーツじゃできねえ以上、”優しさを連想させる造型”なんて本当は不可能を可能にするような所業なんだ。

俺達は、幻想を作ってる。

心を伝える幻想を作っている。

俺はその分野において、親父に到底及ばねえ。

「言語の使い分けを覚えろ。

どうせ”美しいもの”には好き嫌いがある。

物を作る時は、相手の嗜好を読め。

業界の詳しい奴に向けた、分かる奴にだけ分かる作品。

一般人にも分かる、バカにも分かる作品。

芸術という言葉は、相手に伝わる言語を選べ。

芸術でいいこと言っても、伝わらなきや意味ないんだからな」

わーってるって。

親父にとって、『芸術を他人にも分かりやすく説明するためのフォーマット』は、『言語』。

言語に例えることで、親父の感覚的な芸術論は他人にも分かるようになる。

本物の天才の感覚は、そうじゃないやつには分からねえ。

親父が感覚全開で語れば、俺が分からねえのと同じように。

本物の天才の前で、天才って呼ばれてるだけのガキは妥当に凡才に墮ちる。

俺はそうだった。

「クライアントの脳内を読み取れ。

できる限り深くまで潜れ。

そうすれば、気に入らん奴のトラウマを掘り起こして勝手に像にすることすらできる」

できねえに決まってるんだろ、そんなの。

「やれ。できなきゃどうせいっまでも二流だ」

へーへー。愛する女と出会って覚醒した親父と俺はタイプが違うってんだよ。

「俺にできることはお前にもできるはずだ。俺より時間をかければ、いつかはな」

無理じゃねえの。

「あるいは出会いがお前を変えれば、ってところか」

想像もできねえな。

「少なくとも、お前は俺とは違う出会いを重ね、俺から離れた存在になっていつている」

……。アキラ君のこと言ってるのか？

「お前にとつてはいい友人だろうな。」

だが、進みたい道と才能が一致していない無才との付き合いは勧められん。

あれは執着だ。

母親と同じ道を進もうとする執着だ。

諦めきれない道と無才の狭間で苦しむ運命だ。

そうそう” ああいう人になりたい” っ て執着は捨てられん。

でなければ全て諦めるか、無才の自分にいつかすり潰されるかのどちらかだろうな”
うるせえな。

「本質的な意味で星アキラはお前の理解者にはなれん。

むしろ、あいつに合わせすぎたお前の成長が頭打ちになる方が怖い。

自分より速く先に進む人間を探せ。

そいつに歩調を合わせろ。

『本物』になるコツは、未熟な成長前の自分より格上の人間を常に探し続けることだ」

二度も言わせんな。

あんたにどう言われようが、もう決めたことだ。揺らぐかよ。

「……それでいい。今の俺の問いに『はい』と応えるようならそれまでだ」

試すようなこと聞くんじゃないやねえよクソ親父。

「強気でいろ。」

誰にも合わせな。

凡人を好きでいるのもまあいい。だが、凡人に歩調を合わせれば痛い目を見るぞ」
あん？

「何より凡人の方が、天才に歩調を合わせられることに屈辱を覚えるだろうからな」

まあ、そういうのは、なんとなく分かる。

言っちゃなんだが、レベルが低い人とレベル高い人つてのはいるよな、この業界。
レベルが高い人とは仕事がやりやすい。

レベルが低い人は懇切丁寧に説明しても分かってもらえねえことあるし、余計なこと
されて俺がフオーローしないとイケねえ時もあるし、嫉妬で足を引つ張られることもあ
る。

まあ、だから親父より格下なんだろうな、俺は。

『自分を高めるんじゃないやなく自分より高い所にいる人の足を引つ張るのが分からない』
その時点で、俺は誰の気持ちでも分かる親父には及ばねえ。

10代半ばも超えれば、多少はマシになるだろうか。

「自覚を持って。お前が俺より凡才なのは、自覚的に才能を使いこなせてねえからだ」

そうかよ。

「資格がある奴なら天才は『成れる』」

お前も見えてきたはずだ。

才能があつても業界を辞めていった奴らを。

まず、才能があるか。

次に、己の才能を理解し使いこなせてるかどうか。

この両方をクリアした人間だけが最後まで残る天才だ。

途中で心折れて名を残す前に消えた天才なんざ無才となんら変わりはない」

厳しいな、親父は。

「だからいい仕事をしたくないなら、信頼できるキチガイを探せ」

信頼できるキチガイ、ね。

「自分基準でおかしいと思うくらい、頭がおかしい奴を探せ。」

それでいて、信頼できる好ましい人格の人間を探せ。

どうせ一人でできることなんてたかが知れてる。

大勢で集まって作る番組や映画の質を上げたいなら、仲間は選べってことだ」

大変な条件だな。

「分かってもらえなかったが分かってもらえた、になる瞬間は劇薬だ。」

そいつは俺達みたいな人間を劇的に進化させ、同時に死に近づける。

共感者には気を付けろ。正解はない。

古今東西……芸術家は自分の理解者の影響で、人生の多くを決めてきた」

知ってるよ。

親父とおふくろを見てきたんだからな。

親父の下で色々とする。

一週間寝ないで物を作り続けるのが楽しかった。

ヘトヘトになつても集中力で体を動かして、最小限の動きで無駄なく素早く丁寧に物を作つていく技術が身に付いていった。

作つて。

作つて。

作つた。

物心ついた時から、気付けば物作りをやっていた。

気付けば物作りが好きだった。

時間があれば物を作っていたかった。

誰よりも優れたものを作つてみたかった。

暇さえあれば、手を動かしていた。

……父のことも、好きだったから。親父と一緒に物作りする時間は、特に好きだった。親父が納品する作品の一部を、俺が担当した覚えもあった。

だが俺がたまに出す格別に出来がいいやつを除けば、親父は基本的に俺の作品の出来には失望した顔を見せてた気がする。

親父は常に親父と同等の仕事の出来を俺に求めて、それができなきやガツカリしてた。

「はぁ」

しかも、溜め息までつく。

まあ分かる。

悔しいし辛いがしょうがねえ。

俺の作品の出来が求められてるラインに到達してねえのは、俺が一番よく分かっている。

頑張らねえとな。

俺がこのくらいじゃへこたれねえと分かってんだろ、親父。

「まあ、お前の才能ならこんなもんか」

うるせー。出来のことは言うな。

もう10日合計で3時間しか寝てねえんだぞ。

計算して寝てなきやとつくにグロッキーだったの。

親父は起きてる時に複雑な手作業やって、寝てる時に簡単な手作業や設計イメージ構築とかやってるからな……リーヴ・ハドウィン2018年現在44歳の芸術家。4歳の時に夢遊病を発症し、寝ている間に絵を描くようになった異端の芸術家。起きている間は絵も描けず絵に興味もなく、けれど寝ている時に半自動で描いた絵は非常に高い評価を受けている。絵一枚が一千万を超えることもあるとか。医者は幼少期の酷い人生経験が彼の精神に大きな障害を残したからでは、と分析している。かてめえは。

「他の奴に任せるよりはマシだ。お前に任せる。質を上げながら作成速度も上げろ」
へーい。

せこせこ親父の仕事を手伝う。

親父は小遣いをくれるが、そもそも職人肌過ぎて儲からん仕事ばっかやって、しかも料金設定も低いもんだからうちには常に金が無え。

金が無えのは親父がたまに私的にたっけー工作機械買ったりするのも原因だが。こういう人間にはならないようにしよう、とちつと思っちゃまった。

親父の工房は色んな物が動いてる。

工作機械に、コピー機に、その他諸々。

親父はそれら全ての稼働状況を把握してて、流れるようにそれら进行操作してる。

だから親父の仕事は速い。

親父は機械任せにするとこは全部機械任せにして、機械を無駄なく動かすことで仕事を圧倒的高速化してるからだ。

俺も負けてらんねえな。

ノルマ作り終えたらとりあえず寝て、そつからだ。

そう思つて、一步を踏み出した時。

足が、滑つた。

転びそうになつた俺が突つ込む先は、工作中的の機械。

子供だった俺の体格だと、間違いなく即死する角度。

ヤベえ。

駄目だ、間に合わない。

何もできねえ。

そんな俺の手を掴んで、引つ張つた親父が、入れ替わりに俺の代わりに――

子供の頃はやってた一週間寝ずにの物作りをやらなくなったのも、ここからだろ
う。

あれからもう結構な時間が経った。

親父を知る人はそれぞれが全然違うことを言った。

殺人だったとか、自殺だったとか、事故死だったとか、運が悪かっただとか。

親父、別に死んでなかったけどな。

腕が無くなっただけで。

でも、俺は親父はあの時死んだんだろうなとは思う。

親父は物作りが人生の全てで、物作りが生きる価値そのものだった。

物を作る神域の腕を失った親父の命に、既に価値は無かった。

……無かったんだよ。無かったんだ。無いに決まってる。だから親父は俺が殺したんだ。

このことは、事件がややこしい事情であんま有名にはならなかった。

俳優みたいに記事が売れるわけでもねえ、造形師の事故。

だから週刊誌とかも嗅ぎつけて嘔み付いてこなかった。

業界でも詳細は一部の人間しか知らねえ。

本当の意味で全部知ってるのは、おふくろと一緒に現場に一番に来たアリサさんくらいか。

だから俺の親父の評判だけ知ってて、その末路まで知らねえって人は多い。

自殺だったと言つてた人がいた。

親父は伸び悩んでたらしい。

おふくろの影響で一回とんでもなく壁を打ち破つたものの、その先がなかったとか。自分の頭の中ではもつと先に行けるはずなのに、才能と感性がついて来ない……そんな苦悩を周りに語つてたことがあつたようだ。

天才の親父が。

親父こそが。

自分の無才に苦しんでいた。

自分の命すらどうでもよくなつてそうなくらいに、思いつめてたらしい。

事故死だったと言つていた人がいた。

俺と親父、両方が疲れてたからこそこうなつたつて。

分かる。

いつもの親父なら、俺の命と自分の腕を引き換えにするわけがねえ。

きつとそうだ。絶対そうだ。

だから気の迷いで俺を助けちまつた以外にありえねえ。

疲れのせいで、親父は俺を助けたら腕がなくなるつて判断できてなかつたんだ。

親父は珍しく、間違つた。

運が悪かったただけだと、巖爺ちゃんは言った。

誰かが悪いわけじゃないと。

お前が悪いわけじゃないと。

運が悪かったただけだと。

人生つてのはそうやって割り切っていくもんなんだと。

少し、涙が出た。

おふくろは「あなたのせいね」と穏やかに言った。

その通りだ、と俺は思った。

親父は両腕がない姿で、何も言わなかった。

本当は俺にも、何もかも、分かってねえ。

親父の腕を奪った原因が、本当は何なのか。

でも俺が殺したんだ。

よく分かってねえ。

親父が考えてることなんて、俺は本当は分かってねえんだ。今になつても。

足でペンチを持つても、口で筆を持つても、腕の機能を完全に補うことは絶対に不可

能。

腕を失えば、職人は死ぬ。

物を作れなくなれば、俺達は死ぬ。

何かが飛んで来て、目に入った。

目を拭つて、前が見えなくて、それでようやく気付く。

右目に当たったのは親父の肉片。

左目に入ったのは親父の血の塊。

肉片が目の中から落ちて、右目は見えるようになったが、粘性の高い血液が入った左目は相変わらず見えなかった。

工作機械が動き続ける。

親父の腕を削り飛ばし続ける。

親父の腕が、鉛筆削りに入れられた鉛筆みたいに見えた。

「つ……い……」

親父は機械に片腕を消し飛ばされ、もう片方の腕もギリギリ繋がってるだけで、それでも歯を食いしばって機械から離れる。

親父は一度も情けない声を出さなかった。

小さな痛みの呻き一つすら漏らさなかった。

「お……親父！」

親父に駆け寄る。

腕がない。

あの素晴らしいものを作り出す腕が。

俺のせいで。

いや、このままじゃ、本当に死ぬ……!?

「なんで、親父、なんで俺なんかを！」

「なんでだろうな」

親父はくつくつくと、笑った。

「俺はお前の才能は認めてたつもりだったが、それを抜きにしても、お前が好きだったの
かもな」

「合理なんて、どこにもなかった。そういうもんだ」

好き？

好きだから？

親父として、息子の俺を？

それだけで？

それだけで、ここまで、したのか？

他人の才能の上限とか、他人の可能性とか、きっちり見切れるあんたが。

だからこそそれを絶対視するあんたが。

自分が物作りしていられれば、それだけでいい、自分だけで幸福を完結させられるあんたが。

”その人が好き” って感情だけで——こんな、バカなことを？

親父が立ち上がり、血まみれで作りかけの作品に向かう。

「ば、バカ親父、何を……！」

「この腕はもう少しで動かなくなる。

感覚で分かる。もう元には戻らんだろう。あと数分で、最後の仕事を完成させる」

「まずは病院だろ！ バカか！」

「忘れるな」

親父が残った腕で、スプレー缶と金属ヤスリを握る。

「作ってくれと、俺達は言われる。

できる、と俺達は言う。

それは金のやりとりで行われる契約で、人と人との約束だ。裏切るな」

それが俺の見た、” 生きている親父の腕 ” の最後の仕事。

「これは、俺達の命よりも大切なことだ」

親父は製作を完了した。

残った腕も病院に運ばれ、後に切断。

納品を完了し、契約を完了。

親父はただの一度も、仕事で約束事を破らなかつた。

おふくろは元は巖爺ちゃんのとこにいた女優だ。

舞台俳優から映画女優になって、その後引退した。

引退の理由は『脳の病気』だ。

よく分からなかつたが、おふくろの頭の中にはとてもゆつくりと大きくなる腫瘍があつて、それが徐々に大きくなっていったらしい。

それに伴つて少しずつ変になつていったんだらう、つて医者は言つていた。

大きくなる速度がゆつくりだつたために心に与える影響の大きさもゆつくり変化す

るもので、検査をしても手遅れの大きさになるまで気付けない。

そういう病気があったんだそうだ。

アリサさんが何かに気付いて、医者がそこから検査して発覚した時には、もう手遅れだった。

その時にはもう、”そう考えてみると”という視点で見れば、おふくろの性格は昔のそれとは似ても似つかないものに変貌しきっていた。

おふくろはただ一度、普段の自分とは似ても似つかない演技をして、親父を射止めた。その後も数回の演技を見せて、この一連の流れをワンセットとすると、このワンセットで親父は劇的に進化して、それで二人は結婚した。

んで俺が生まれて、おふくろの病気が発覚、病氣引退。

この流れを見て、アリサさんは何か気付いたらしい。

「ああ、だからあの一度だけ、演技が……そういうことだったの」
まあそうだろうな、と俺も思う。

あのおふくろにそんな突然才能が生えてくるわけねえし。

脳腫瘍のおかげで名演……いや、怪演って言うべきなのか？

とにかくあの名演が成立したと考えると、しつくりくる。

過去のおふくろの演技の録画全部見たが、あんな急に積み重ねる秀才型から深く潜る

天才型にシフトするわけがねえ。

派手な動きとか柔らかい関節で演技を見せるタイプとかじゃねえ、感情を伝えることで観客を震わせるタイプの天才の強さは、極論脳から生まれるもんだ。

脳が行う微細な操作が、体を通して観客に感情を伝える。

頭がおかしくなっていて初めて、おふくろは親父を見惚れさせる演技を完成させた。

親父を進化させたのは、脳に大きな腫瘍を抱えた名女優が魅せる、他の人間には絶対にできない見事な名演だった。

アリサさんは、こう言っていた。

「あの子は……あなたのお母様は、あなたのお父様を惚れさせるために、奇跡を起こしたのかも」

まあそうかもな、と俺も思った。

無才のおふくろが親父を射止めるにはこの道しか無かった。

そういうことがあったとしてもおかしかねえ。

俺の記憶に最初に映ってたおふくろより、俺の記憶の最後のおふくろの方がおかしいんじゃないかと言われたら、確かにそうだと俺も頷く。

そして、親父が腕を失ったことで、おふくろの頭は更におかしくなっていた。

親父はおふくろの全てだった。

おふくろは人生の全ての意味を親父に見るくらい、親父の腕に惚れ込んでいた。それが失われた。

絶望、悲嘆、心折。

親父は、おふくろの頭がおかしくなりきらないように止めるストツパーでもあったらしい。

腕の喪失は、おふくろの頭の病気の進行を加速度的に引き上げていった。

「無事で良かったわ、英二。」

あなたの方が死んでいればよかったかな、と思うけど。

その上で言うわ。あなたが無事で良かった。怪我の一つもないことが、本当に嬉しい」

「——ありがとう、母さん。うれしいよ」

俺の命は、おふくろにとって、親父の腕一本ほどの価値もなかった。

なのに間違いなく、おふくろは世界で二番目に、俺を愛していた。

頭がおかしくなりきったこの状態になっても、俺が小さな怪我をすれば心配し、俺が不幸になることを許さず、俺を誰かがいじめたら激怒し、俺の幸せを全力で祈っていた。だってそうだろう。

この人にとっては、俺は愛する息子。

世界で二番目に大切な家族なんだ。

それでも俺の命は、おふくろにとって、親父の腕一本ほどの価値もなかった。

おふくろは俺を愛している。

俺の幸せを願ってる。

でも俺が親父を超えようとは思ってなかった。

俺にさしたる期待もしてなかった。

俺の未来に興味が無かった。

家族としての愛や慈しみがありませんが、俺に対する期待や興味がほとんどなかった。

俺に幸せになってほしいと思ってるから、俺がねだったものは何でも買ってくれたし、俺に業界で注意しておくべきところをことあるごとに教えてくれたし、俺を優しく抱きしめてくれた。

でも俺に興味が無えから、俺に将来の希望を聞いたことは無えし、俺の普段の生活での行動を一回も俺や俺の周りに聞いたことが無えし、俺を大して心配もしない。

興味の無い愛。

それは、おふくろが親父に夢中だったから。

いつも興味、好奇心、注目の全てを、親父に向けていたから。

人は一つのものに本気で注目すると、他のものが目に入らなくなる。

おふくろはまさにこれだった。

親父にばかり目を向けているから、他が目に入らねえ。他に興味が無い。

おふくろは俺の頭を撫でている時も、近くに親父がいれば、撫でている俺のことは見ずに親父のことばかり見ていた。

俺の愛する母親は、一途な女だった。

作った。

作って作りまくった。

おふくろの頭がおかしくなるのを親父の腕と作品が止められてたなら、俺の腕が上がつていけばもしかしたら、俺の作品がおふくろの脳の症状の進行を止められるかもしれねえ。

それに、もしも、もしもだけでも。

親父と同じくらいの出来だと、おふくろに認めてもらえたら。

普通の親子みたいに、愛してもらえるかもしれない。

作った。

とにかく作りまくった。

親父は腕がねえし、おふくろは病院から出られねえ。

俺が稼いで、二人を養うんだ。

もつともつと成長したら、もつともつと腕を上げたら、きつと。

親父を超えられたら、俺が欲しいものが手に入る。きつとそうだ。

あと数年で俺も20歳。大人だ。

できれば20歳になるまでに認められてえところだな。

ワクワクしてきた。

物を作る腕の動きがなめらかに、速くなっていくのが分かる。

物を作つて、おふくろに見せて、おふくろにダメ出しされて、また作る。

前には進んでいる。

おふくろのダメ出しが少なくなってきた。

もう少しだ。

このまま腕を上げていけば、おふくろのダメ出しが0になって、合格が貰える。

そうして、俺は会心の出来の最高傑作を抱えて、病院で横になったままのおふくろに会いに行つて、意気揚々とそれを見せて。

おふくろは俺の腕を見て、静かに失望した。

「お父さんみたいにはなれないのね、あなた。代わりの腕になるかと思つたのに」

「……え」

「彼の指示で動く新しい腕になってくれるかもしれないと、少しは思ったのに……」
そうして、気付く。

俺はもしかして、”成長してはいけなかった”んじゃない？

俺がなるべきだったのは……おふくろが求めてたのは……親父の、コピー？

「それは要らないわ。どうでもいい。」

明日また来なさい。あなたに大切なものをあげないとね」

おふくろのために作って持って行った最高傑作はゴミのように突き返された。

大丈夫だ。

胸は痛くない。

まだ大丈夫。

なるほど、分かった。

おふくろは俺に親父の腕の代わりになってほしかったんだな。

俺が親父の頭で考えた通りに考えられれば、親父の言う通りに物を作っていけるなら、親父の腕が無くなったところからでもリカバリできる。

おふくろの愛した親父の作品が戻って来る。

そうなれば、俺が消えたことに目を瞑れば何もかも元通りだ。

やっぱり俺は、おふくろの中で親父の腕一本ほどの価値もなかったらしい。悪意はないんだろうなあ。

おふくろにとつて、親父は世界一の造形屋だ。

何でも作れる。

どんな美しさでも彩れる。

そんな人間の腕になるつてことは、世界一の一部になるつてこと。

おふくろは、息子にとつての最高の幸せを提供しただけだ。

俺の幸せを考えてるおふくろのまま。

目を見れば、話していれば、俺への愛が伝わってくる。

でもこの愛も……頭の状態を考えれば、いつまで残ってるかも分からん。

間に合うか？ 俺の腕の修正は間に合うのか？

俺が、親父のコピーになることを考えてれば、間に合ったのか？

その時おふくろは、俺を愛してくれたのか？

親父の代わりにされた。

嬉しかった。

嬉しかった？

みじめじゃなかったか？

いや、嬉しかった。

嬉しかったなあ。

おふくろが俺の幸せを望んでくれてたんだ、嬉しかったよ。

だってさ俺、親父のこともおふくろのことも大好きだったし。

これが、俺の母が、俺の将来にただ一度だけ期待してくれた日のこと。

俺が、母親の期待にも応えられなかった日のことだった。

翌日、母の病室に向かった。

今日こそ、おふくろをどうにかしてみせるぞ。

意気込んで病室に踏み込んだ俺が見たのは、俺の加工刀——何ヶ月か前にどこかで落

としたと思つてたもの——を片手に持ったおふくろの姿。

……え？

「英二。芸術家においてもつともしてはいけないことはなんだと思う？」

待て、おふくろ、何考えてんだ？

「私ね、自殺をする天才がずつと憎かったの。」

天才俳優も。天才音楽家も。天才画家も。

色んな人が天才ゆえに自殺した。

……そして、死後に評価された。

彼らが自殺しなかったら、この世に残っていた名作はもつと沢山あったはずなのに」

近寄れない。

こっちの動きが読まれてる。

足の指を一本靴の中で動かしたただけで、靴の表面に出た僅かな動きを察知して、おふくろがピクリと動く。

駄目だ、近寄れねえ。

「なんでそんな、もつたいたいことができるの？」

私が焦がれて焦がれてたまらないものを、どうしてそんなに簡単に捨てられるの？」

「母さん、何を」

「それはね、彼らが普通の人と違ったから。

普通の人とは、大切なこと”の尺度と定義が違ったから。

普通の人は、思うように絵が売れないだけで、演技の評価を気にしただけで、自殺はしない」

待て、何考えてんだ？

おふくろの考えてることが分からねえ。

「死を選ばなければ、もつと偉大な功績をいくつも残せたかもしれないのに。これは有名人に限らないわ。」

埋もれたまま目の目を見なかった天才なんて、いくらでもいる。

本当は評価されたはずなのに自殺してそこで終わりになってしまった天才は、いくらでもいる」

それは、そうかも、しれねえけど。

「でもね、業界は天才だけで回っていない。」

天才じゃなかったはずのクリエイターが山ほどいる。

あなたのお友達の星さんの息子さんに、湯島さんみたいなのがある」

「……何が言いたいんですか、母さん」

「辞めていった天才より、成功を積み上げる凡人がいる。」

それはね、彼らは本当に大切なものを持っているから。

才能しか無かった人間が持つていかなかったものを持つていたから。それは、『諦めない心』

諦めない、心？

「負けを認めない心、ではないわ。」

折れても負けても、また立ち上がって、再起する心の粘り強さよ。

泣いても挫けても、迷って転んでも、また起き上がる”終わらない心”よ。

どんなに才能があっても、折れて立ち上がれなければそこで終わり。

逆に才能が少なくても、みつともなくしがみつき、粘り強く這い続ける気概があればいいの”

……諦めない、心。

「業界の隅でみじめな姿を晒しながらも、好きな仕事を続ける覚悟。

作品を作り続け、世に残し続ける覚悟。

自分の才能が信じられなくても、筆を置くことだけはしない覚悟。

格上の女優がいても、腐らず積み上げ少しずつでも成長していく覚悟。

諦めない、ということ。

それが、あなたが関わっているいくつもの番組で、ヒーローが教えているものの本質」

「諦めない、心」

「努力しても何も結実せず。

積み重ねても成長は微々たるもの。

有望な新人には啗われ、先は見えず。

憧れた高みには届かないと何度も思い知らされる。

私の人生は……長い間、ずっとそうだった……でもね。天才は、勝手に消えるのよ」

おふくろの表情が、その時。

「星アリスさんのように、勝手に消える」

とても、怖かった。

「天才が勝手に消えれば、私達みたいなのは繰り上がりで一つ上に行く。それでいいの怖かった表情が、夢見るような、高みを見上げる表情に変わった。

「いつかは努力が結実するかもしれない。そういうこともあるから、それでいいの」
おふくろ、何、考えてんだ？

「ごめんなさい、英二。」

あなたの中には半分、私なんかの血が混じってしまっているの。

その分だけ、きつと純度が下がってしまっているんだわ。

「ごめんなさい。私がこんな、あの人の才能に見合わない女だったから」

「そんな……俺、母さんの息子であることを、誇りに思ってます！」

「だからあなたも、きつと何度も負けを味わうわ。」

何度も折れることもあるでしょう。

でもそのたびに仕事から逃げていては、きつと何もできなくなる。

あなたに必要なのは、強い心の足よ。どんなに心が傷だらけでも、立ち上がる心の足」

「……………心の足」

「だから」

だから？

「ここで慣れておきなさい。

折れては駄目よ。慣れなさい。

この先に辛いことがあっても。

『あの時よりは辛くないな』と思えるように」

！ 喉に、加工刀を……！

走って……駄目だ！ 微妙に距離が！

「愛してるわ、英二。」

あなたはお父さんとは違う方に行きなさい。

これが私の最後の贈り物。

命の使い途がなくなってしまうって、困っていたの。

どうしようかと思つたから、よく考えて、愛する子のために使うことにしたわ」

喉に、刺さる。俺の道具が。

「やめっ——」

「私もう、あまり生きてる意味が無いから」

刺さつた。刺さつて、横に押し出された刀が、ブチツと首を切る。

吹き出した血が、止めようとした俺にかかった。

からん、と、母の手から加工刀が床に落ちる。

俺が母のために彫刻を彫るような手付きで、母は俺のために喉を彫った。

なんだ。まるで親子みたいだな、俺達。

おふくろは親父の事故に関して『あなたのせいじゃない』とだけは、言わなかった。

それだけは絶対に言わなかった。

何度言葉を交わしても言ってくれなかった。

おふくろは。

母さんは。

最後まで俺を許してはくれなかった。

許さないまま、死んでいった。

俺は、俺のおふくろにとって、最愛の人の腕を奪った憎い男のままだった。

ありがとう、おふくろ。

俺のことが憎かったのに。

俺のことを許してなかったのに。

どんどん頭がおかしくなる中、俺を愛したまままでいてくれて。

それからは、よく覚えてない。

なんだっけ。

あ、そうだ。

お医者さんが俺の携帯電話見て、アドレスの大人から目星をつけて連絡したんだ。

この状況をどうにかするため。

そして、俺をどうにかするために。

んで、連絡された中でアリサさんが一番に来た。

「——これは」

アリサさんが来たその時、ちょうど俺の血化粧が完成したんだ。

母さんは喉を搔つ切つてたから、見るも無残なグロになつてた。

だから、整えなくちゃならなかつたんだ。

血まみれのシーツを切つて、白い部分を整えて、ボール状に加工。

見舞いの花も飾つて、血を模様に見えるよう整えて。

顔を拭いて、花びらと血化粧で美しさを整える。

おふくろの黒くて長い髪、綺麗だよな。

ずっとそう思つてたけど、こうして整えると更にそう思う。

ほら、アリサさんも見ろよ。

綺麗だろ、おふくろ。

俺の大好きなおふくろは、俺は世界で一番の美人だと信じてるんだ。

親父には敵わないかもしれないけれど、綺麗で美しい造形になってるだろ？

「アリサさん、どうですか？　綺麗ですよね？　綺麗ですよね？」

天下の星アリサに認められたとなりや、きつと十分合格点だ。

「母さん、綺麗ですよね？」

「……ええ、綺麗よ」

よし！　よつしや！　良い出来確定！

「……だから、その涙を拭きなさい」

なんで？

大丈夫だ。

何があっても、俺が折れたままにいることはねえ。俺は必ず立ち上がる。

俺は今日、心だけは造型屋として完成した。きつと明日から、俺は無敵だ。

俺は無敵になったが。

親父は、無敵じゃなかったらしい。

親父はもはや、妄執だけで生きる人間になっていた。

物作りに執着するだけの人間になっていた。

口で筆を咥え、筆先で塗料を捉え、筆で動かして塗装する。足で機械を操作し、足で彫刻刀を操る。

腕がない親父には、もうそのくらいしかできてなかった。

それでもそれなりの出来になってたことは間違いないねえ。

人の死体のミニチュアの作りとか、まだ俺より上手いくらいだった。

だけど、親父の古巣に完全復帰するのは、絶対に不可能と言える出来だった。

親父の苦悩が伝わってくる。

苦しみが、絶望が、憤りが、全部伝わってくる。

それでも俺は、おふくろの死を伝えないといけなかった。

「そうか。なら、もう終わりにするか」

……親父？

いや、まさか。

まさか。

「親父にとって、一番大切な人は、おふくろだったのか」

「ああ」

「じゃあ、おふくろが死んじまった今」

「ああ」

親父。……なんだよ、そりや。

「あいつに一途でいるために、随分多くを切り捨ててきた。……それも、終わりか」

おふくろの生きる理由は、物作りをする親父で。

親父の生きる理由は、名演を見せたおふくろで。

二人は多分この地球上で、一番に互いを理解し、寄り添う関係だった。

「俺の道具、持っていていいぞ。英二」

「えっ……蘭丸造作専用の大工道具シリーズ。彫刻や家具作りに使える。ワンセットで一ー万円ほど。とか？ これまで俺に触らせもしなかったのに」

「いいんだ」

そう言つて。

「……親父、何を」

親父は、家を出ていった。

最後の最後に、色んなことを片付けにいった。

しばらくして、俺は届けられた親父の死体を、淡々と葬式に並べた。

死因は聞いた。だがどうでもいい。

死因すらどうでもいいことだった。

事故死だろうと、飛び降りだろうと、溺死だろうと、焼死だろうと、変わらない。大切なことは、そこにはなかったから。親の死因すら、どうでもいいことだった。

俺は成長した。

親の死を糧に成長した。

その成長自体は、きつと喜ばしいことだ。

親が火事で目の前で焼け死んで、それから造型の才能が開花したっていう親父と俺はきつと同類なんだろうな。

そこには血筋を感じて、少し嬉しく思わないでもない。

自分すら騙して走り続けてきた。

自分の全てに正直なまま、走り続けてきた。

俺は俺の心のままだ。やりたいことをやってきた。

アラヤさんは、前に俺が臭うと言っていた。

あの人が、自分に嘘をつく奴は臭わないと言っていた。

自分の気持ちに分かるがゆえに他人の気持ちに分かる者は臭い、自分の気持ちに嘘をつくがゆえに他人の気持ちも分からない人間は臭わないと。

俺は俺の心に正直であるはずだ。嘘はねえ。

全て噛み締めて、抱きかかえて、ここまで来た。

いつも俺は、俺の心をそのまま口にしてきた。

好きだと。

惚れ込んだと。

俺がそうしたいからそうしてるんだと、言い続けてきた。

自分の気持ちに嘘がつけねえから、湯島さんを応援している時も景さんに対して湧き上がる想いがあるから、俺は苦しい。分かっただよ、そんなことは。

だけど、俺の中にある沢山のこの気持ち全部が、俺なんだ。

まだ進まなくちゃならねえ。ここで止まっていられるか。

親父を超えよう。大丈夫だ、俺ならいつかきつと超えられる。

俺は好きなものに対して正直だ。俺は必ず立ち上がる心を持った。忘れてねえ。大丈夫だ。

親父とおふくろからもらったものは、まだ俺の胸の奥に息づいている。

そんな、俺が転んだせいで親父から全てを奪ってしまつた話を。

親父が”好きだから”で俺を命がけで助けてくれた話を。

俺がそれを、親父の気の迷いだつたかもつて思つてる話や、おふくろの話も多少は混ぜて、湯島さんに聞いてもらつた。

「要約しますね、湯島さん」

「う、うん」

「俺の中には、”好きだから”で死ぬるかもしれない親父の血が混ざつてることです」

「!？」

「正直に言うと、何もかも分かつてないんです、俺。

親父が本当に好きだからつて理由だけで俺を助けたのかすら、疑つてて……

だからこういう時だけ、”あの時の親父は本当にそうだつたんだ”つて思えるんで

す」

俺が好きなもの好きだと思って、合理性とか能力の計測とか無視して、ただ友達を助けようとする時……俺は、あの時の親父の言葉を、信じられる。

——それを抜きにしても、お前が好きだったのかもな

——合理なんて、どこにもなかった。そういうもんだ

アキラ君が俺と友達になろうとしてくれた時の気持ちにだって、合理はなかった。

俺が冷たくしてもアキラ君が歩み寄ってくれたことに、合理はなかった。

あれは、アキラ君がいいやつだった。それだけのことだった。

才能が友情より重いだなんて、誰が決めたんだ？

「俺は、俺の心が好きだと思っただけのものに、正直でいたいんです」

俺の言葉を信じてくれ、マイフレンド。

大女優になれるとは言わねえ。

だけど大女優になれないとも、絶対に言わねえ。

なれるかもって、そう言い続けるから。

いつかあんたが大女優になるか、あんたが辞めると決める日まで、俺をあんたの戦友

でいさせてくれ。

「俺の心が、ああ、この人好きだな……ってそう思ったから。」

それが理由の全てだったんです。

合理なんてありません。だから、本当に理由なんて説明できないんです。

でも湯島さんには信じて欲しい。俺は女優としてのあなたが好きなんです」

湯島さんのおかげで、過去の俺を見つめ直せた。

俺の気持ちをまた一つ整理できた。

俺が気付いてなかった気持ちにも気付けた気がする。

新しく見つけた俺を、ずっと湯島さんの戦友として寄り添ってた俺を、そのままぶつ
ける。

「嘘はつきません！

俺がつついっつい凄いとそうでない人に褒めの差をつけてしまうことはありません！

でも！

だからって、俺が湯島さんを好きだって言ってるこの言葉が、嘘になるわけがない！」
湯島さんが怯んだ。

今だ！ ウルトラマンならトドメのスペシウム光線を撃ち込むチャンス、に等しい畳
み掛けるチャンス！ ここで決める！

「好きなんですよ！ めっちゃ好きです！ 好き好き好き！」

「だあーつやめいっ!!」

「納得するまで何度でも言いますよ！」

「恥ずかしゆうて顔が発火するわ！」

「先に俺の言動をお世辞だなんだのと言ってきたのはそっちでしょう！」

「お世辞言われたら押せ押せで倍返しって何考えとるねん！ アホか！」

だからそんな、自分を嫌うなよ。

自己嫌悪すんなよ。

オーデイションで失敗して周りに迷惑かけたって気にしてんのは分かってる。

だけどな、俺、あんたのああいう優しいとこ好きだよ。

誰の血も流させせない、血が流れば人が悲しむことを知ってる湯島さんが好きだ。

「あーもう」

深く、深く、湯島さんが息を吐いた。

「俺、確信してるんです。

湯島さんっていいお母さんになるって。

女優やってもやってなくても素晴らしい人だと思っんです。

だから気楽に考えつつ、けど真剣に自分の将来を模索してですね……」

「なんや、その評価」

「子供ができたら溺愛する、なんかいいお母さんになると思っんですよ」

え、なんだその顔。

待てなんだ。

俺今の会話の流れで何か変なこと言ったか？

「はあー……」

「なんでここで俺の頭を撫でるんですか？」

「んー、英ちゃん元氣出るかなって思って」

意味の分からん行動はやめろ。

「いいですか、俺は湯島さんを励ましにきたんです。

湯島さんが俺を全力で励ましてどうするんですか。

思いっきり落ち込んでも、俺に愚痴吐いても問題ないので、遠慮なく……」

「アホか！ この流れでうちが落ち込めるわけないやろ！ 常識で考えんか！」

えー。

「……お互いに、難儀な人生送つとるなあ」

「でも俺、間違いなく幸せな人生ですよ。

毎日楽しいですし、好きなこととして生きていけてますし」

「好きなこととして、か」

湯島さん、落ち込んでるといふか、引きずつてたはずなんだが。

彼女の心の中にあつた淀みは、何も解決してないはずなんだが。なんか、笑ってるな。

自然に笑ってる。

よく分からんが、どつかで心の整理が付いたのか。

トークで狙った通りに他人の心情を計画的誘導ができん俺は、いつも行き当たりばつたりだ。

反省しよう。

「私も好きなこととして……女優として、芝居して生きていきたいなあ」

何か、吹っ切れた顔をしている。

やぶれかぶれで女優を続けるとか、自暴自棄になつて女優を辞めるとか、そういうのはもうなさそうな気がするな。

多分だけどさ。

「……あ、そや」

ん？ 何？

「今話してて思ったんや。私達、フォレスト・ガンブ1994年アメリカ映画。頑張る男の子の、前に進み続ける物語。主人公は知恵遅れや身体障害を持ち、いじめ、戦争、家族の死、旧友との軋轢など多くの困難を乗り越え、成功していく。最後には成功者と

なった主人公と、落ちぶれた子供時代からのヒロインが、ヒロインの劣等感ゆえに一度別れるものの、主人公の不屈の愛で二人は結ばれる。のあれを忘れちゃならんて」

「ああ、あれですね」

良いこと言うな、湯島さん。

そんな、俺がおふくろから一番大事なものを奪ってしまった顛末の話を。おふくろが最後に”天才に勝る不屈”を俺に命がけで教えてくれた話を。

俺がそこに、途方もない感謝を覚えていることと、親父の話も多少は混ぜて、景さんに聞いてもらった。

「肝心なのは立ち上がることです。

大失敗したと思っても立ち上がろうとしている景さんは、間違ってます。才能があつて、辛くても立ち上がる心の足がある。

女優に大切なものをあなたは既に持っています。

反省して、投げ出さず逃げ出さず、変わろうとするその心が、きっと価値有るものな
んです」

ん？ なんだその反応。

「否定はしたくない、したくないけど」

景さんは難しい顔で、言いくそような言葉を、絞り出すように言っていた。

「そういうのを『いいお母さん』って言うのは……何か違うと思う」

「俺にとつてはいいお母さんですよ。それでいいじゃないですか」

「よくない」

良いんだよ。

俺のおふくろも。

アキラ君のお母さんも。

景さんのお母さんも。

全部違う、それぞれの母親だ。それだけでいいと、俺は思う。

「英二くんは、もつと運命とか、そういうのを呪つてもよかったはず」

「俺を聖人か何かと勘違いしてませんか？」

思つてゐることは色々ありますよ。

抱えてゐることもたくさんあります。でも、どうでもいいんですよ、そんなこと」

「どうでも……う？」

「うじうじしててもしょうがないですからね。

俺は物を作るために生まれてきたんだと思います。

だから一番多い機能は物作りで、うじうじする機能とか多分比較的少ないですよ」
だから平気なのさ。

俺は無敵だから。

何度負けても何度折れても、すぐ立ち上がれる。おふくろがくれた俺の強さだ。

「その言い分は、英二くんがちゃんと悲しみを隠せる人じゃないと、無理だと思う」

「……」

「英二くんは、役者になれそうにないわ」

「そうですね。その通りだと思います」

駄目だなあ、俺は。

すげえなあ、景さんは。

こんなにも付き合いが短いのにさ。

「よかったです、景さん」

「？」

「ほら、ちゃんと人の気持ち分かってるじゃないですか。景さんは優しい人ですよ」

「——え」

「景さんは役者が向いてる人だと、俺は思ってます。前も、今も、きつとこの先も」俺より人でなしになる確率がずっと低そうで、本当によかった。

その時景さんが震えた、ような気がした。

「英二くんが考えていることは、他人のことばかりね」

「八割くらいは物作りのこと考えてますよ。相対的には、かなり人でなしです」くすつ、と笑う景さん。美人だなあ。

「俺達は過去は変えられません。」

未来しか作れませんからね。

でも、過去は変えられなくても、その意味は変えられると思います」

「意味？」

「俺も景さんも、過去の意味は変えられます。」

何か、酷い失敗をした過去も……

俺達のこれからで意味は変わります。

俺の母は死にました。

俺が無価値に死ねば無駄死にです。

でも、俺が大成すれば、母が間違ってたなかつたと俺が証明することができる」

あ、嫌な顔した。

そんなに気に入らんか俺の母親。

愛はあったって言うてんだから分かれよなー。

「景さんの失敗も、まだ意味は変わるかもしれない。」

今のままでは、景さんは失敗としか思えないかもしれない。

でももしかしたら、ここからの景さんの行動と選択次第で、笑い話になるかもしれない。」

「なるかしら……」

「それは、景さん次第です」

「……うん、がんばる」

あ。

「そういえば。」

芝居していない時の景さんの素の笑顔、少し俺の母に似てますね。

ほんの少しだけ、ですけど。

顔の作りはかなり違って、俺の母は景さんほど美人ではなかったんですけど……」

「英二くん」

「なんででしょうか」

「重いわ」

「でしようね！」

しまった！ 今のは言わなくてもいい、かなり余計なことだった！

「私、まだ役者を名乗れるかな」

「名乗ってください」

「え」

「もったいないですよ、景さん」

いいんだぞ、誰だって役者名乗っても。

「なりたい自分になるのが俳優。」

それができないのが俺達。

だから憧れるんです。違う自分になれるあなた達に」

「……」

「俺はどうやっても、俺以外になれない。

過去から逃げることもできないんです。

本質的には何も変わってないですよ。

ただ、俺の本質の上に積み上げたものをどう組んでるか、だけが違うだけで」

違う自分になるっつゝ手法だけで別人になる景さんが、本当に羨ましい。

まるで恋い焦がれる気持ちみてえだ。

時々、ここまで熱中するのはどうかって思うこともある。

それでも焦がれる。

それでも心奪われる。

頭で考えてたことを、見惚れた心が蹴つ飛ばす。

恋に振り回されて自分を見失う恋愛映画の主人公の気持ちだが、分かった気がした。

「俺はあなたが芝居を続ける限り、永遠にあなたの戦友です。

呼ばれれば行きましょう。

寝るなど言われれば不眠で従います。

俺が作るものは俳優あなたを輝かせるためにあります。でも大切なのは、あなたの気持ちで

す」

お姫様に忠誠を誓う騎士とかの気持ちだが、分かった気がした。

「湯島さんも、景さんも。

俳優を続けるかどうかは、二人の意志が決めること。

舞台の上で浴びるスポットライトも称賛も、辛さも悲しみも、その人だけのものです。

俺は、二人に続けてほしいと思います……やっぱり大切なのは、その人の気持ちなんです」

だから。

「お芝居、好きですか？」

誰もわざわざ確認していなかったそれを、彼女に聞いた。

景さんは目を閉じ、自分の内に問いかけるような所作を見せ、目を開ける。

「……好き」

それが彼女の答えなら。

「なら、大丈夫です。名乗りましょう、役者を」

きつとこの先、何があっても大丈夫……じゃねえかもしれないねえけど、周りが景さんを頑張って助けりゃ、きつとどうにかなる。

俺、デスアイランド後は景さんを助けられなくなるかもしれないねえけど。

スターズから離れられなくなるかもしれないねえけど。

多分、助けになるようなこと、なんかするさ。

アリスさんも裏切らねえで、景さんの助けになる何かをする。

ひつでえこと考えてる自覚はあるが……それができるように、なんか頑張る。

そのなんかの内容思いついてねえけど。今はそういうことにして、自分を納得させよう。

「きつとあなたは、世界で一番に幸せな役者になれます」

景さんが、いい笑顔を浮かべた。

「そうだったら、素敵ね」

話すべきことは話せた。

つつても、俺が景さんに自分のことを分かってもらえて、会話を通して景さんの中にあった何かが解きほぐされた実感があるだけだ。

根本的な問題は何も解決してねえ。

景さんの技能はそのまんま。

三人と景さんの間の微妙な空気もそのまんま。

湯島さんと景さんの間のトゲトゲしい嫌な空気もそのまんま。

オーデイション結果なんてほぼ落ち確定、って四人には認識されてる。

だが俺は、ここから好転しないとは思ってねえ。

俺と湯島さんも。

俺と景さんも。

話している内に、今までにない繋がりが出来るのを感じていた。

そして、それが力になった。

”俺達はまだこつからやるべきことがあるはずだ”と、俺達は立ち上がった。

”前を向かないでいるのはここまでにしよう”と、無言で通じ合った。

”こいつに情けない姿は見せられない”と、少しばかり気合いが入った。俺はそうだったから、二人もそうだったと信じてえ。

「俺はこれから仕事があります。申し訳ありませんが、送っていきません」

「そこまで世話になれないわ。ちゃんと一人で帰って……頑張ることにする」

景さんがスカートのシワを伸ばして、パンパンと叩いてホコリを落とす。

「あ、そうだ」

その最中に、景さんは何かに気付いたみたいで、俺が前に贈った指輪を取り出した。なんかすっかりお守りみたいになってんなそれ。

「英二くんのこの指輪、ただの綺麗な指輪だと思ってたけど……もしかして、色違う？」

「——」
心臓が、止まるかと思った。

「……なんで、そう思ったんですか？」

「この指輪、英二くんなら白く作るかなって、ふと思ったの」
バカじゃねえのか。

お前。

なんで予備知識もねえのに、感覚だけで分かるんだ。

……痺れるな。

感覚論だけで、”色合いだけが変”って気付いたのか。

パズルでピースが一個だけ変なところを見つけるみたいに。

「その花は、月見草です。」

小説家太宰治の短編小説・富嶽百景にはこうあります。

『ちらとひとめ見た黄金色の月見草の花ひとつ、花卉もあざやかに消えず残った』。

月見草は白い花です。

黄金色なわけがありません。

なのでこれは待宵草である、と専門家は研究しています。

景さんのその指輪の裏モチーフは、その月見草です。現実に存在しない、幻想の花」

「小説にだけ出て来る、現実に存在しない花ってこと?」

「そうです。現実に存在しない黄金色の月見草。」

夜にのみ咲く、夜を映えさせ、夜に映える花です」

「私、覚えてるわ。」

『現実には存在しない美しい花を作るのが、俺の仕事です』。そう言ってたから」

「はい」

月見草。

夕方に咲き始め、夜に咲き誇り、朝が来るとしぼむ花。

朝の到来によって色を変えるが、その鮮やかな白はとても印象的だ。

あー、なんだ、この感じ。

嬉しい。

ちよつとした仕込みを感覚的に完全に理解されると、なんかめっちゃ嬉しい。

理解されてるってことが、嬉しい。

親父。

あんた、これでおふくろにやられたのか？

——分かってもらえなかったが分かってもらえた、になる瞬間は劇葉だ。

——そいつは俺達みたいな人間を劇的に進化させ、同時に死に近づける。

——共感者には気を付けろ。正解はない。

——古今東西……芸術家は自分の理解者の影響で、人生の多くを決めてきた

あんたの気持ちがあつちまうのが悔しいわ。

「月見草の花言葉は、

『無言の愛情』『ほのかな恋』『自由な心』『移り気』

ですね。なんとなく猫っぽい自由な景さんには合ってるかもですよ」

「え……私、猫っぽい？」

「シチューCMの時に黒さんに抱き上げられていた時とか特にそんな感じでした」

「あ……あれは、黒山さんのせいだからー」

俺が笑って、景さんがあわあわとしてる。

なんだろうな。

なんか、普通の友達の距離感になってきた気がするわ、俺達。

景さんも同じことを考えてくれていたらしい。

「今日また少し、英二くんとちゃんとしたお友達になれた気がするわ」

「ですね」

悪くない気分だよな。つか、ぶつちやげ嬉しい。

「ほら、カサブランカ1942年アメリカ映画。ハードボイルドの体現者ハンブリー・ポ
ガート主演。今では誰もが知る「君の瞳に乾杯」などはこの作品が元ネタ。報われなく
てもいいと自分に言い聞かせ、惚れた女のために銃を握った男の物語。のあれ」

「ああ……ロマンチストですね、景さん」

「すぐ“それ”だつて分かる英二くんも、人のことは言えないと思う」

「ごもつとも」

「あのシーンで、二人は本当の友情が始まる瞬間に、こう言うのよ」

ああ、そうだ。

湯島さんが言う。

景さんが言う。

俺の目の前でその人が言う台詞が分かっていたから、俺はその人の台詞に被せた。

「人生はチョコレート箱、開けてみるまで分からない」

それは、湯島さんが好きな映画『フォレスト・ガンプ』を象徴する台詞。

「これが、私達の美しい本当の友情の始まりだ」

それは、景さんが好きな映画『カサブランカ』の最後を締める台詞。

「どうなるか分からんのが人生、精一杯頑張る以外にないんや」

「ですね」

「今後もよろしく、英ちゃん」

「はい。よろしくお願ひします」

湯島さんが笑顔になる。

「私達の友情はここからよ！ ……打ち切り漫画？」

「何故自分で言って自分で突っ込みを……」

「よろしく。物作りが得意な、私のお友達」

「よろしくです、役作りを始めたばかりかの、俺のお友達」

映画好きってのはいい。好きな映画で語り合える。

映画を撮る側の人間同士なら、なおさらに、だ。

「英ちゃんは、一生懸命なだけや。手先が器用なだけで、器用に生きられないだけや」

「英二くんは物作りでしか生きられない人だと思っから。」

役者としてしか生きられない私は、きつと英二くんを尊敬してるの」

「この私には紅茶奢っておけばいいみたいな飲み物チョイスからもそれは窺えるんや」

「このとりあえず私にはお茶なら無難かなって感じのチョイスからもちよつと分かるもの」

そんなこと言われて。

そつかなー、そうかもしれん、と思いつつ。

クソう無難チョイスから俺の性格読まれてんのなんかやだな、と思いつつ。

俺はその人から離れて、行くべき道へと歩き出していった。

後日。

手塚監督が直々に、電話で合格者のことを俺に教えてくれた。

「あの四人が全員合格、ですか」

『おや、驚いてないね』

「ここ数日はずっとデスアイランドの準備してますので。」

手塚監督の思考をずっとトレースしていたので、なんとなくそうなるかなと」

『怖いこと言っていない?』

「でも、美術に監督が指示出さなくていいのは楽じゃないですか?」

『そりやそうなんだけどさ』

手塚監督が準備段階で動かしてるもので、一番大きいのは人事。

クソ忙しいスターズ12人のスケジュール調整、各分野の人間を集めつつ振り分け、人手が足りてるか多すぎないかのチェックなど。

まあ要するに、撮影開始前の”人と物を集めて整理する”段階なわけだ。
が。

ここでさつさと動かさねえといけねえもんがある。

照明とか、カメラマンとか、音響とかの『撮影開始と同時に動く人達』だ。

極論言っちゃえば、編集班とかは多少人が足りてなくても撮影途中で足せばいいしな。

んで、その辺でやべーのが俺達美術。

何せデスアイランドは原作に準じた舞台セットと、原作に準じた学生服を全部美術が作らなきゃならねえからな。

仕事の始動ははえーし、撮影開始前もクソ忙しい。

こういうところに監督の意を把握してる助監督一人付けると仕事が捗るんだが、俺は美術監督兼助監督みたいなもんだ。

俺が手塚監督の意を汲んで勝手にやって、適宜報告を手塚監督に上げた方が速え。

手塚監督に文句を言われる筋合いはないはずなんだが。

「それにしても、良いんですか。あの四人は特大のトラブルだったでしょうに」
『いいんだよ。』

夜風景は面白い。

鳥山武光は勇ましいが、思い切りに思慮が伴ってる。

源真咲は周りがよく見えていて、原作らしきが出てくる。

それに、湯島茜はホラ、最後のアレがよかった。心に響く怒声だったね」
「え、アレが合格理由ですか？」

『あれはいいね。』

演技だとしても言われた方が動揺するレベルだ。

ちようどさ、千世子ちゃんがやる主役を責めるキャラいたじゃない？

あそこにキャスティングして、千世子ちゃんという演技見せてほしいなって』

驚いた。

景さんの暴走が湯島さんの暴走を引き出して、景さんを押し倒して怒声を叩きつけた
湯島さんの演技が、”原作のあのキャラにぴったり”って判断を後々されるとは。

いや、なんつーか……人生万事塞翁が馬だな。

手塚監督、オーディション時点だと原作読んでなかったからな。

湯島さんの怒声聞いて何か使えないかと思つて原作読んだか、脚本かプロデューサー
あたりがびったりだつて言つて、それで原作読んだかのどつちかか。

何にせよ、景さんが引き出した一面が合格に引つかかるフックになつたつてわけだ。

ありがたやありがたや。

「ありがとうございます、手塚監督」

『お礼言うのは何か違うんじゃないかな。』

僕は俳優を自己判断で選んだだけで、君に何かしてあげたわけじゃない』

「それは、確かに。ええと、それじゃあ……いい目してますね監督」

電話の向こうで、笑い声が聞こえた。

なんだよ。

今の返答の何が面白かったんだオラ。

『面白いよね、夜風景。』

あの子は周りの俳優のポテンシャルを引き出してた。

それでいて、全てを壊していった。

彼女がいなかったら、他の三人の良さは出てなかっただろう。

彼女がいたからこそ、彼女らの芝居の全ては壊れた。

素直な意見を言う……夜風景がいなければ、僕は彼らを採用しなかっただろうと思

う』

「かもですね」

そうだ。

景さんの大暴走のせいで全員脱落の危機、という風にも見えたが。

あのオーディションは実質、景さんが芝居に付加した説得力だけで保っていたもんだ。

そもそも景さんがいなけりや、あのメンツは一分脱落組に入つてた可能性が高え。500人全員見たわけじゃねえが、それでも分かる。

湯島さん達、普通に演技する分には、あの500人の中じや目立たねえよ。

景さんはただそこにいるだけで、周囲に劇的に影響を与え続ける。

『つまらない俳優だと思つてたんだ、三人共。』

でも途中から、夜風景の……

引きずり込むような演技力に、様々な才能や能力を引きずり出されていた』

「普段表出するようなもんじゃないと思います、あれは」

『メソッド演技は色んな意味で舞台を荒らすからね。あれは、そういうものなんだろう』

む。メソッド演技だと既に分かつてるか。

それでも採用するとか、手塚監督の普段のやり方を考えると随分珍しいな。

『注意してね』

「大丈夫です。」

景さんのセット破壊は既に計算に入れています。

撮影にも予算にも影響なく、景さんの破壊を撮影の流れに組み込めますよ」

『いやそういうことじゃないんだけど……まあいつか。よろしく頼むよ』

なんやねん。

それから数日後。

正式に通知が回り、各事務所に俳優合格の報せが届いた。

スタジオ大黒天から終さんのよかったよかった連絡が来て、オフィス華野から感謝のメールが……いや待て、こっちは本気で何か分からんぞ。

源さんと湯島さん何か吹き込みやがったか……？ 俺何もしてねえぞ。

とりあえず特に何かしたわけじゃないですよと返信。

色々作業したら、湯島さんからウキウキのLINEが来た。

分かりやすいやつだな。

嬉しさが伝わってくるぞ。

俺も嬉しいけど。

『お祝いに茜って呼んでくれてもええんやで？』

……。LINEでこういうこと言うのか……湯島。

面と向かって言えないシャイな一面が伝わってくる。

かわいいなお前。

文章なら比較的楽に言えると思ったか。

まあいいけどさ。

『茜ちゃんでもいいですか？』

送信。

……返信こねえな。

即返信したから見てねってことはねえと思うんだが。

そうして、20分後。

『ええけど』

4文字！

1文字5分！

なんだお前。

『冗談です。では、茜さんで』

送信。

あ、今度は5秒で返って来た。

『くたばりや』

5文字！

1文字1秒！

なんか楽しくなってきたな。

茜さんはもう源さんに謝ってて、烏山さんにも謝る予定らしい。

景さんの名前入ってないのが暗雲漂ってるが、まあどうにかなるだろ。

『十年くらいずっと言えへんかったこと、ようやく言えたわ』
ちよつと懐で温め過ぎじゃねえかな？

ふつと笑つて、俺はスマホをソファーに投げた。

俺が親父を殺した。

間接的にはおふくろも。

当時の俺は、現実から逃げるように物作りに没頭した。

とはいっても、俺は景さんみたいに異能を発現させたりはしなかった。

現実逃避が力になるってこともなかった。

ただ、物作りをする時間の長さや密度が上がっただけ。

寝ても覚めても物作りな俺基準でそうなるってことは、睡眠時間とか食事時間とか休憩時間が削られるってことを意味する。

作った。作った。作った。

家に来る人も結構いた。

今、業界ではあることないこと噂が広がってるらしい。

有能だった親父が、よく分からん事故とよく分からん死を迎えた。

昔知る人ぞ知る名優だったおふくろが、よく分からん死を迎えた。

そういうことで、気にしてる人が増えてるらしい。

業界内に情報が行き渡らず、どつかで誰かが情報を止めてるらしいって話だった。

知ったこつちやなかった。

作った。作った。作った。

作っては積み上げ、作っては積み上げ。

積み上げた造作物の中で一息吐いた俺の目の前に。

その爺さんは現れた。

「こういうのを、昔の演劇の舞台じや冥府魔道に堕ちたと言うんだがな」

巖裕次郎。

あの人が、どこまで知ってあの時俺の家に来たのかは知らねえ。

いや、今でもあの人どこまで知ってるのかはさっぱり分からん。

分からんが、何故かあの人は何かを嗅ぎつけて俺の家に来た。

顔を上げる俺の前で、巖爺ちゃんは問いかける。

「プロとして見られたいか、子供として見られたいか、お前が選べ」

この時、「プロとして見られたい」と俺は言った。

巖爺ちゃんは俺が積み上げた物を一つ一つ見て行って、片っ端から落第点を押しつけていった。

「これも出来損ない、これも出来損ない、これも出来損ないだ」

親の死から逃げるようにして作ったものは、一つ残らず巖爺ちゃんの御眼鏡に適わないような出来損ないばかりだった。

「親父の猿真似してんじゃねえ。」

お前が親父の物真似しても、親父の記憶を思い出すだけだ。

死んだ親の思い出を思い返すためだけの作品に何の価値がある？」

その言葉は正しくて。

俺はただ、自分の情けなさを恥じるばかりだ。

「かろうじてこいつだけが及第点だ」

一つだけ、認められた作品があった。

無数に作った作品の中に一つだけ、合格点を貰えるだけのものがあった。

それは天使の絵。

心の中が感情でいっぱいになって、何も考えられなくなった時、自然と走った筆が描き上げたもの。

「……………え……………」

俺の仕事が認められた。

その嬉しさが、俺の心にしみ出る。

今思えばそれは、”人のために物を作り、他者に認められる”っていう造型屋の本能がようやく目覚めた感覚だったのかもしれない。

現実逃避のような作品作りが、その時、確かに終わりを告げていた。

初めてだった。

巖爺ちゃんに仕事を認められたのは、これが初めてだった。

だけどラツキーパンチみてえに出来の良い一品が認められた運頼りの一発もんだっ
たんだ、なっさけねえ。

ふん、と鼻を鳴らして、巖爺ちゃんはこう言った。

「死んだ親父を超えろ。できるな？」

できる、と俺は言った。

今になっても、俺はずっとそう在る。

”できるかどうか分かりませんがやってみます”とか、”やれるだけやってみます”とかはできるだけ言わないようにして、”できます”と言っている。

まあ絶対にできないことは流石に「できない」と言ってるがな。

できるかと言われたら、できますと努めて答えるようにしている。

あの日、俺に期待してくれた、俺の未来の可能性を信じてくれた、あの人にそう答えよう。

巖爺ちゃんの台詞から、「親の死を完全に乗り越えろ」って意図を汲めないほど、俺はだらしのない無能じゃなかった。

その絵は事務所の倉庫に入れている。

今の俺の力量からすりゃ大したもんじゃねえが、親父の作った未発表品と一緒にしまってある。

いつだったっけかな。

その絵を、百城さんが見てた時があったっけか。

俺はその時、手入れ中の俺の天使の絵と、手入れ中の親父の天使の絵を並べていた。

同じ技術体系の俺と親父の絵に、基本的に白が基調になる天使の絵とくりゃ、使われ

る顔料も同じになる。

手入れは一緒にする方が楽だった。

百城さんは二枚の天使の絵の前でじっとして、その目でじつと絵を見ていた。

「上手い方が俺の父の絵です。良い出来でしょう?」

「いいよこんなの」

「え?」

あの時の俺は。

「こんなのより、私は君の作品が好きだから」

「……て、照れますね」

驚きと嬉しきで、どもつちまった覚えがある。

親父の絵より、俺の絵の方が好きだと言ってくれた。

親父の絵より俺の絵の方が上手い、とは言ってくれなかったが。

だからこそ、あの時の百城さんの言葉が正直な本音だったって、信じられる。

——「どうせ”美しいもの”には好き嫌いがある。」

——「いい仕事をしたなら、信頼できるキチガイを探せ」

「……ははっ」

「……ははっ」

好きだと言われたことが、嬉しくて。

俺が自分が作った天使なんかじゃ、この天使の美しさには敵わないと、そう思った。だって物には、心の美しさが無いからな。そりゃ、当然だろ？

ラーメン男列伝

俺は初心者には仮面ライダーやウルトラマンやスーパー戦隊を勧める時、大体数個に絞ってオススメしている。

仮面ライダーW、ウルトラマンオーブ、獣電戦隊キョウリュウジャーとかがそれにあたる。

電王とかもそうだな。

あんまクセがなくて、王道仕立てで、面白さの総量が多い作品が初心者向けには良い。ただ、あんま裏事情は知るもんじゃねえなとも思う。

初心者には裏事情は知らず素直に作品を楽しんでほしいもんだ。

例えば仮面ライダーNEO電王最新の仮面ライダー電王としてデザインされ、後の劇場版などで活躍した青い電王。紺色に金を組み合わせる、という色バランスがこの時点で美しい。

あれの色合いは黒倉プロデューサーの提案で決まって、最終的に某プレミアム缶ビールのカラーリングを参考に決定された。

どうかと思わんでもない。

子供向けヒーローのカラーリングの参考がビールって。

まあ出来上がったスーツはデザインも色合いもかなりかっこよかったが。

缶ビールのデザインを参考に……：こういうのが自然に出るのは、成人してる大人の特権って感じがすなあ。

少なくとも未成年の俺には馴染みがねえや、ビール缶。

プレミアムと金ってなんだ。

技術でも、年齢だけはどうにもならん。

「すみません、ビールでも差し入れしようかと思っただんですが、やっぱり買えませんでした」

「いいんだよ！　そういう気遣いは！」

打ち上げ用にビールを買ってこようとしたが、駄目だったのでサイダーを買ってきた。

そんな俺を、亀さんがツツコミ入れつつ笑いつつ、俺の髪の毛をクシャクシャにしながら迎えてくれた。

やめろや。

やめろ！

身長差を見せつけるな青田亀太郎！

本日の俺のお仕事は舞台演劇のお人達から。

なんと西映主催の、結構なごった煮大型イベントであった。

舞台演劇とテレビ番組の距離は遠いのか？

アニメと特撮って遠いのか？

答えはノーだ。

少なくともエンタメ・オブ・エンタメの西映で、その心配はねえ。

たとえば、西映太秦映画村京都府・京都市・右京区・太秦東蜂岡町にて、今年で開園から43周年。昔は剣を振り回す侍で子供達を夢中にさせ、今は仮面ライダーの握手会などを開いて子供達を夢中にさせる、ドラマ・特撮の聖地。時代劇の撮影にびったりな、村規模撮影セットの一つ。なんかを例に挙げてみつか。

ここでは毎日子供向けの刀剣侍指南イベントをやってる。

アニメ分野では、ゲゲゲの鬼太郎の大型イベント。

特撮分野では、ジオウ仮面ライダージオウ。スーツは造形的にアトラクション用スーツ。&ルパパト怪盗戦隊ルパンレンジャーVS警察戦隊パトレンジャー。劇場版限定か、劇場版の後にテレビに出るかと思われていたものの、映画の後は舞台演劇の方に出なかつたルパントリコロールのスーツ。西映特撮の劇場版の撮影準備開始は本編一話より前であることすらあり、発注から決定までの時間が非常に短い。『8/31に

夏休みの宿題が初出題される』というレベルのことすらザラ。なのに最終的にこういうリアルイベントにしか出られなかったりと、中々に不憫である。のジョイントイベント。

ジオウ&ルパパト&ハグプリHUGつと！プリキユア。着ぐるみを見ると「CMで見た」と言う人が時々いる。の握手会なんかもある。

かと思えば手裏剣大会とかやってるし。

演劇屋が忍者時代劇やったりもする。

今回のイベントは西映主催だが、共催は事実上の名前貸しも含めりや数十社つてレベルだ。

入り口でパンフレットを貰って広げると、会場の東西南北色んな所でやってるショーが、タイムスケジュールごとにズラツと並んで、わくわくする。

大型ステージを借りるような有名演劇一座とかも呼ばれてるんだぜ。

劇団天球も、その中の一つだった。

まー公演があるわけじゃねえけどな。

顔売り、つてのが一番正しいんだろうか。

有名な劇団は、公演の後や公演の前にこういう仕事が終わってることがなくもねえ。

公演の後の挨拶、次の公演の宣伝ってやつだな。

寸劇見せたり、ファンと触れ合ったり……まあやることは色々だ。

イケメンを売りにしてる劇団は劇イベントの即売所でCD売って、そのCDに握手会参加券を付属とか普通にやってんだよなあ。

TKBチークービー48。国民的アイドルグループと呼ぶも呼ばぬも人の自由の握手券商法が業界に残した影響は大きいぜ。

亀さんに案内される最中、劇団天球の人数分買ってきたサイダーを渡す。

「お、サンキュ。お前こんなもの持って来なくても皆歓迎するぞ」

「気持ちですよ。ねぎらいたい気持ちです」

「生意気なこと言いやがって」

ぐあああ！

かき混ぜるのはいいが上から頭を押し込んでくるんじゃねえ！

身長が縮むだろうが！

そうこうしてる内に、俺が辿り着いた場所には、立派な演劇用の甲冑があった。

「じゃあ仕事入りますね。この鎧の色を変えれば良いんですか？」

「ああ、頼む」

「一時間……いえ、40分ください。間に合いますか？」

「余裕余裕。わっりーなー、それ複数の劇団が使うやつだからさ」

「いえ、仕事ですのて」

ふむ。

ほー。

いいなこの甲冑。

布部分の生地は黒く、鎧部分は黒と赤と金。

ちよつと麻っぽい生地が入ってるのもアクセント入ってる感じで悪くねえ。

だが、デザイン以外の部分に細かな仕事が結構入ってんな。

黒地の布部分を一部切り取って、メツシユ生地を貼り直してる。

生地の向こうが透けて見える用なメツシユ生地は、外から内側が見えちまう欠点があるが、このメツシユ生地は周りの客に見えない角度と生地面積をきっちり計算してる。

いい仕事だ。

フォーゼスーツ仮面ライダーフォーゼ・ベースステイツのスーツは、アップ用からアクション用の製造過程で、通気性が良くなるメツシユ生地を一部採用した。計算され尽くされた構造の巧みさにより、スーツをどの角度から見ても中身が見えないようになっている。を少し思い出すな。

お、これ、真珠に見える装飾、パールカラーのシートの上に半球状のレジジン樹脂のこ

と。メーカーによつて天然樹脂をレジンと言うこともあれば、合成樹脂をレジンと言うこともありややこしい。英二が前に表情の変わる空の絵を書く時に使つた紫外線顔料の別名がUV（紫外線）レジン。を乗せてんのか。

……仮面ライダー電王・ストライクフォームの体表面の宝珠表現技術じゃねえか！
流石西映イベント。

特撮分野で見た技術がこんなところにもまで見られるとはな。

ん？

いや、待て、腕のここの造型……まさか！

オリジナルの造型の甲冑だが、腕部分だけが伊達政宗所用の黒漆五枚胴具足！伊達政宗を象徴する、真っ黒な鎧に額の下でかい三日月が目立つ、ロックンロールの具現化のような鎧。そのあまりにも印象的なデザインは海外で参考にされ、スター・ウォーズのダース・ベイダーの鎧はこれをモチーフにしたとされている。

そうか。

鎧を着て中の人が動けば、一番動く腕が目に入る。

立っている時なら額、顔、胴体とかがまず真つ先に目に入るが、動き出せば動いている腕がよく目に入る”注目の逆転”……分かる奴が分かればいい、っていう仕込みだな。

憎い仕事さがされてやがる。

こういう名も無き職人の仕込みに気付くとちよつとテンションが上がるな。

まあとりあえず色変え色変え。

悪いなこれ作つた人。

今日のクライアントはこの甲冑の色合いが今回のイベントに似合わんと思つてるらしくてな。

よし。

「亀さん、できましたよ」

「おお、速いな」

印象がちよつと電王ロッドフォーム的つつーか……まあ子供向けな感じになつたぞ、亀さん。

「かなり色合い変わったな。時代劇の甲冑が一気に子供向け特撮っぽくなった」

「表面にカットティングシート芸術家からの需要と評価も高い『貼るペイント』。そのままでも使いやすいが、表面をスプレーなどで加工して持ち歩く、あるいは完全自作のカットティングシートを持ち歩くことで、状況に合わせてシートをカットして貼るだけで、造作物表面の色合いやデザインを変えることも可能。メジャーなタイプの表面基材は塩化ビニル系樹脂、粘着剤はアクリル系と、どちらも英二にとっては馴染みのあるもの。自作も容易。を貼り付けただけです。」

装甲の寸法を測って、ハサミでシートを切り分けて……

それを甲冑の各色部分に貼って別の色に見せてるんですね。

表面にシール貼っただけみたいな感じです。

仮面ライダーネガ電王『劇場版 仮面ライダー電王&キバ クライマックス刑事』に登場する劇場版限定の敵。色違いの邪悪な仮面ライダー電王・ソードフォーム。インターネットではデジタル合成で紫にしたと言われているが、本当は紫等のカッティングシートを表面に貼り付けて全く違う色に見せかけている。スーツ写真集でカッティングシートは当時本家がカッティングシートを貼って剥がしてソードフォームに戻したことが書かれているので、ネガ電王オリジナルがカッティングシート式なのは間違いない。おそらく「ネガ電王のスーツはない」という部分がどこかで曲がって伝ったのだと考えられる。の「スーツ作成方法と同じ手法です」

甲冑のフォームマットは、特撮ヒーロースーツのフォームマットとは違い。

その最たる違いは、”顔が出てる”ってことだろう。

スーツアクターは、顔が売れねえ。

スーツのせいで顔が出せねえ。

動けるイケメンアクション俳優は、だからスーツアクターの仕事を嫌がるもんだ。

顔を見せれば、顔を覚えてもらえる。

顔を覚えてもらえば、ファンになってもらえる。

ファンになってもらえれば、最終的に自分が売れる。

こいつが顔を売る俳優、ってやつだ。

全身を包むヒーロースーツと違って、甲冑は顔が露出してる。

顔が売れる可能性はあるってことだ。

まあ髪とかは隠れちまうことが多いから、実はこれでも覚えてもらうのには苦勞する。意外と甲冑着てる人の顔は印象に残らねえからな。

一旦そいつは脇に置いて、と。

今回の仕事の依頼主はイベント主催だ。

俳優事務所じゃねえ。

俳優事務所からの依頼だったなら、鎧を比較的目立たねえようにして、俳優の顔を覚えやすくしてたが……そうじゃねえから、鎧にはバリバリ手を尽くした。

甲冑表面の光の反射率は高けりや『鏡みたい』って感想、程よく高けりや『艶がある』、程よく低けりや『渋い輝き』って感想が来る。

今回はしつとりと艶を出す感じにした。

よくよく考えると面白話だよな。

なんだよしつとりとした光沢って。

光沢に湿度はねえだろ。

ただ本当に、”しつとり”以外の表現がしつくり来ねえんだよなあ、こういう艶。

造型つてやつの本質はまだよく分からねえし、奥が深え。

「でも悪い、今日俺達15時まで仕事ねえんだわ」

「何故!？」

「なんか俺の”喉乾いてるだろうから”って差し入れサイダー微妙に空振ってんじゃん!」

「運営の手違いでちよつとな。

伝達ミスだから依頼料は拘束時間分だけ増やしてくれとか言ってたけどよ」

「太っ腹ですねえ」

主催が普通のとこだと、夜に三時間仕事してもらおう劇団を伝達ミスで結果的に十時間くらい拘束することになっても、特に依頼料を上げたりしねえ。

”余分の金を払う余裕”がねえからだ。

だからよそに負担をおつかぶってもらおう。

ポスター作りとかやってた頃、これで負担押し付けられてやべーことになった会社いくつか見た覚えあるわ。

大手はこういう時『金をケチって信用を失う』ことを避けるから、本当にいいこつた。

大手と仕事できるっただけでハードル高えが、だから大手の仕事は鉄板になる。

劇団天球も大手にさらっと仕事に誘われるあたり流石だぜ。

「この鎧は使うところに回しとく。お前これから暇か？」

「んーと……事務所に帰って依頼の物を作るくらいですね。」

早めに片付けようとしてはいますが、急を要するものはないです」

「そっか、んじやあ」

「亀……あ、朝風だ」

「阿良也？」

「おはようございます、阿良也さん」

アラヤさんだ。

そっか、あと数時間暇だから劇団天球の人、思い思いに時間を過ごしてんのか。

今日はイベントなどで公演がねえってことは、公演直前まで集中力を高めてメンタルを最適な状態に持っていく、とかもねえだろうし。

「朝風、フランクフルト食べる？」

「あ、いただきます」

「珍しく気が利いてんな阿良也。ゴチになります」

「亀の分はないよ」

「なんでだよ！」

俺地味にこういう阿良也さんの会話の呼吸に合わせられてる亀さんやるなって思うよ。

「あ、このフランクフルトケチャップ容器付いてますね。」

亀さん、これ一本しか無いみたいですし、賭けをしませんか？」

「うん？」

「俺がこのフランクフルトをケチャップで彩ります。」

亀さんが感心したら俺が貰います。

そうでなかったら亀さんのものです。ゲームですね」

「ほー？　なんか面白えな。やってみろよ」

こういうのは、心にはいくらでも嘘がつけるもんだから、亀さんのポジションにいる人が感心しなかったと嘘をつけば成立しねえ。

だからまあ、信頼が前提にねえと駄目なわけだ。

亀さんが信頼できねえ人だと、こいつは成立しない。

信頼できる人との遊びってやつだな。

つと、出来た。

「はい、イエスキリスト・オブ・フランクフルトです」

「フランクフルトにケチャップで描くもんじゃねえ！」

「へー、朝風、筒の表面に描く絵がまた上手くなつたんじゃない？」

「あ、アラヤさん分かりますか。」

絵つて筒に描くのと平面に描くのだいぶ違うんですよね。

特に俺が昔柱に描いた絵とか遠近感が微妙な感じで……

平面の絵を柱に巻いてもリアルにならない。

筒状の物の表面に描く絵は独特の嘘が必要。

習得したのはそこそこ前ですが、ようやく身に付いてきた気がします」

こういうフランクフルトをクルクル回すと初めて見える絵とか結構好き。

「まあいいか、ほれ食え英二」

「ありがとうございます」

やーりい。合格だ。

しかしイベントの時に食うフランクフルトは何故こんなに美味しいのか。

うめえ。

「朝風、マスタードで描かなかつたんだ。なんで？」

「え……特に理由はありませんけど」

まーたよく分からんアラヤ節だよ。

「朝風つて微妙にケチャップ避けてるところあったじゃん」

「…………え」

「赤いケチャップも、赤い塗料も、何か苦手だったでしょ。」

ケチャップとマスタードがあつたんだから、今までの朝風ならマスタード選んでたはず。

仕事に影響出したことはなかったけど、それでも朝風は赤色の液体何か嫌いだったよね」

——愛してるわ、英二。

「別に嫌いではないですけど…………何か俺の仕事で気になるところでもありましたか？」

「だから朝風がそれを仕事に影響出したことは無かったつてば。」

ケチャップが大嫌いつてわけでもなかったでしょ。

なんか例を挙げるなら…………ああそうだ、仕事外で気を抜いた朝風が作つてたオムライス」

ふと、アキラ君にオムライスを作った時のことを思い出した。

——事務所にあキラ君を招いて、オムライスを出す。

——まあ普通レベルだ、俺の作る飯は。

——強いて言うならケチャップ一切使つてなくて、ライスはコシヨウを利かせたチ

キンライス、卵の上に味を調整したデミグラスソースが乗っていることくらいか。

ふと、ルイ君にオムライスを作ってあげた時のことを思い出した。

——あー！ 俺が気合いを入れてルイ君に贈ったケチャップ製平等院鳳凰堂のオムライスが！

その、違いは。

「朝風は変わってきてるんだよね、色んな意味で」

……。

変わってきてるんだろうか。

景さんと出会ったあたりから、今まで以上に急速に俺は変わってる気がする。

俺の中のものが色々と噛み合ったり、変わったり、増えたり減ったりしている。

今までずっと目指してた道の進み方が分かってきた、というか。

アラヤさんは前に言っていた。

——ちよつと見ない間に人間になってきたね。巖さん、今の朝風の方が好きなんじゃない？

天才の見える景色は凡才には見えず、天才ごとに見える景色は違うとも聞いた。

アラヤさんの景色は他の誰にも見えねえ。

ゆえにこそ、演劇界の怪物。

なら、この人の目に俺はどう見えてるんだらうか。

「朝風はトラウマがトラウマにならないくらい、自分を制御してたけどさ。

普通に見てると分かんないくらいケチャップ使えてたけどさ。

こう……うん。

オムライスの中の見えないライスが、赤く染まってなかったけど、もう赤く染められる。

朝風の心の中って赤く染まってたけど、もう染まってないから、ケチャップは大丈夫だと思う」

亀さんが、目をしばたかせていた。

「いいことだと思っようよ」

「阿良也、お前……」

「最近変化してきた……いや、成長してきたって言うべきなのかな、これって」

心配かけたくなえな、って。

そう、思った。

「アラヤさんは勘違いしてらっしやるんですよ。

ポール・マツカーシー現在73歳の異端の現代芸術家。現代に旋風を巻き起こし、カリフォルニア大学で教鞭をとり、多くの生徒を育てた。29歳の時、全身を塗料、ケ

チャップとマヨネーズ、生肉とウンコで彩り、ビデオ作品として残す。31歳の時には、教室の全てをケチャップで塗りたくり、己の意識が混濁して発狂し自傷を始めるまでパフォーマンスを続けた。そのパフォーマンスの最中に嘔吐を繰り返し、人形を尻穴に入れ、されど彼のこの行動は『発狂』ではなく『芸術』の一つに数えられたという。頭おかしいんじゃないの……？ 『普通』を捨て、『普通』の押しつけを否定する」ことに素晴らしいものを見出した芸術家。だって言ってたじゃないですか。

『皆アートを言及するときケチャップと血の大きな違いがあるということを考慮しない』
って。

「俺だって血とケチャップの見分けくらいつきますよ、アラヤさんの見込み違いです」
「そう」

「でも、ありがとうございます。変わることは、いいことだと思いますから」
俺がどんな道に行くか、正直分からねえ。

「だけど、どの道を選ぶとしても、後悔だけはしねえようにしよう。」

「飯食おうぜ飯。」

「さつき言おうとしたんだが言いそびれちゃった。」

「まだ朝って時間帯だが、ラーメン食おうぜラーメン！ 英二もまだだよな朝飯？」

「はい」

「奢ってやるよ。この会場、ラーメンの出前ならめっちゃ早く来るんだ」

「え、そんな、亀さんに奢ってもらわずとも俺には俺の財布が……」

「どのラーメンにする？俺とんこつチャーシューメン大盛りで」

聞いちゃいねえ。

「じゃあ俺はネギ醤油ラーメンで……ありがとうございます」

「ありがとう亀。俺白味噌胡椒バターラーメン大盛りで」

「あれ阿良也も奢られる気満々?! いや別にいいけどよ」

注文してる亀さんを見ている内に、俺はふと疑問に思った。

「アラヤさん、他の人は何してるんですか？」

「変装してイベント回ってたりしてるよ。」

巖さんとかは知り合いに会いに行った。七生は時間出来たから眼鏡屋行ってくつて

へー。

そこで注文を終えた亀さんが会話に入ってきて来て、俺に耳打ちした。

「なあ英二、女ってなんでコンタクトに行くんだろうな、メガネのまんまでいいのに」

「それ俺がどんな返答しても面倒臭いことになるやつですよね」

「男でも女でも、メガネの方がシャレオツだろ？」

「答えなくても話が面倒な方向に！」

なんだかなーもう！

「造型屋としては、最近伊達メガネ作る機会が無いなあ、くらいしか言えません。

強いて言うなら表面にゴミが付きやすいメガネよりコンタクトの方が……」

「お前もメガネ派閥に来自い……来自い……」

「ゴリ押してくる！ いや違う！ これ押してるんじゃないやなくて引つ張り込もうとしてるやつ！」

「朝風、最近俺のイヤホン調子悪いんだけど直せない？」

「あ、アラヤさんは平常運転ですね……」

アラヤさんの方の話題に乗って亀さんの話題を流したれ。

どれどれ、イヤホンを拝見しますつと。

ふーん。

一部のコードの中身がくたびれてんのかな。

そういやウルトラマンの目の部分を光らせる配線用の予備パーツがポケットにあつたな。

これならさつきと直せるか。

「海外の映画で時々驚くんですけど、SONYとかのイヤホンって造型に使ってるんです

よ」

「イヤホンが？」

軽く配線交換しつつ、バッグをゴソゴソ。お、あった。

「ほら、こんな感じに……」

イヤホンからコードを引っこ抜いて、イヤピースを取って、メタリックに再塗装とするとこういう風に見える。

SF映画の機械パーツとか、ハイテクデバイスとか、額にくっつけて洗脳装置、とか
な。

「脳に埋め込む洗脳装置みたいに見えるんですよ」

「へー」

「いいなこれ、確かにそれっぽく見える」

「海外は良いですよねえ。」

日本だとういうのやるのはちよつと怖くてできませんし。

バレたらシユールなんてもんじゃないですから。

アメリカあたりの製品でこういうのに使えるのあったらいいんですけどね」

海外の商品買って、弄って再塗装して利用。

これが低予算映画では本当につえーんだ。

メタルマン2008年にアメリカを震撼させたクソ映画。今年で後悔から……公開から10周年。スーツの出来が玩具を組み合わせて弄っただけのレベルなチープさ。の仮面ライダーカブトのベルトルシエドの脚注解説読むより知的風ハットさんの動画見た方が面白いし分かりやすいと思います。とか、キングスパイダーVSメカデストラクター2005年公開のクソ映画。主役ロボの出来が玩具を組み合わせて弄っただけのレベルなチープさ。のライダーゼロ知的風ハットさんの動画を見た方が（ryとか。日本の特撮界ではあんま使われてねえ手法が、海外の低予算特撮とかで使われてるの知るとちよつとワクワクするよな。

メガネの話から、イヤホンの話に行っただんで、バッグからボタンを取り出して見せる。「日用品って意外と色々使えるんですよね。」

たとえばほら、このボタン。

革製品に使われるボタンですが、ウルトラマンタロウの胸や頭のそれと同じものです。

金色のボタンですね。

タロウの頭や胸をズームで見ると見えるのが、これです。 銚びょうってやつですね」

「あ、これ俺が前に使ってた革靴のボタンと同じやつだ」

「ボタンは色々な素材で出ています。」

ウルトラマンタロウのスーツに使われた金属ボタン。

今アラヤさんが着てる服の、牛乳から作られるカゼインボタン。

亀さんが今着てる服の、石油から作ったポリアミド樹脂を加工したナイロンボタン。

石油から作った不飽和ポリエステルを加工した、俺の服のポリエステルボタン。

巖さんが前に着ていた服だと、かなり歴史を感じる木製ボタン。

七生さんは地味な服でもマザーパールの貝ボタンの服で、さり気ない女子力を感じま

すね」

「英二」

「はい、なんででしょうか」

「お前、女が着てる服の素材とか値段とかひと目で見抜きそうだな」

「? ええ、そのくらいなら」

「……お前とデートできる女子とかあんまいねえ気がするぞ。」

服の値段見抜かれたら嫌だし、お前に服に言及させないままデートするつてのがまず
困難だ」

えええ……?」

「とはいっても、服の良さとか見抜けるに越したことはないと思うんですが。」

服の良さが分からないと正確に褒められないじゃないですか。」

服の良し悪し見抜いちや駄目なら、正解はどうすればいいっていうんですか」

「ノーコメ」

「ノーコメントで」

役に立たねえなこのあんちゃん達。

「つーか英二ってデートとか行つたことあんのか？」

「朝風って本質的には仕事より大切なものなさそうだよ、なんか」

「失礼な。……天使みたいに可愛い子と行つたことありますよ」

嘘は言つてねえぞ。いやデート行つたつてのは嘘だけど。嘘はなかった。俺は正直。

「話盛つてない？」

「なんでノーコメントのところはハモンねえのにそこだけハモるんですか！」

「ラーメンお持ちしましたー！」

さて、食事タイムである。

「そーいや英二ってラーメンの具面白く作れねえの？」

亀さんがラーメンをすする。

跳ねたラーメンの汁が亀さんのメガネに当たつてくっついてた。

ばかめ。メガネ派に落ちた天罰だ。

「俺は面白いナルトもどきを作るくらいですな」

俺もネギ醤油ラーメンをすすする。

あつっ！ 跳ねた汁あつっ！

「お城みたいなの作れないの？ ラーメンの上に」

アラヤさんが白味噌胡椒バターラーメンをかき混ぜ、バターを白味噌スープに溶かしていく。

あつ、美味そう。

今度食う時は俺もあれ頼もう。

「俺の仕事において造型の基本って、

『熱して柔らかくして冷やして固める』

なんですよね。樹脂を溶かして型に入れて固める、とかで」

ラーメンすすって、噛んで味わい、飲み込み、話を続ける。

「このラーメンの構成要素は大雑把に……

焼成した器。

色んなものが溶けたスープ、浮かぶネギ。

練り上げられた麺。

上に乗ったチャーシューと卵とナルト、で出来ています」

一つ一つ、俺のラーメンの丼の中のを、箸で示して説明する。

「まずこのどんぶりですが、重さと手触りからして磁器です。

高温で焼成された、爪で叩くと金属音がするものですね。

大まかには1200度以上で焼かれたものだと考えられます。

となるとラーメンの熱で変形しないのも当然ですね」

チン、と俺が箸で叩いたどんぶりが、小気味のいい音を立てた。

「このスープは、スープにダシや油を溶かしたものです。

造型において、”AをBに溶かして塗る”というのは基本中の基本です。

絵画が顔料を油に溶かして筆で塗るのと同じですね。

スープの表面にはネギが浮く。

これは俺の普段の仕事で言えば、塗料にアルミ粉を混ぜて浮かせて塗るのと同じでしょうか」

塗料の表面に銀粉が浮かんで綺麗なんですよ、と言いつつ、レンゲでスープを飲む。

美味い。

スープ飲みながらネギ噛むとシャクシャクするし別の美味さが出てくるな。

「麺は基本的に、”練るとまとまる”性質を利用して成形されています。

造型でもよく使われているテクニクですね。

練ってまとめたものを、圧力をかけて麺状に押し出して成形。これが麺です。

練つてまとめたものを、圧力をかけて熱して固めると、硬い装甲になったりするわけ
です」

練つてまとめる。

これ大事。

粘土を練つてまとめて、軽く焼いてフィギュアみたいなモデル人形にしたこととか
あつたつけなあ。最近はあるまやんねえけど。

「チャーシュー・卵・ナルトは、加熱製品ですな。

肉を加熱して、チャーシューを作る。

魚肉のミンチを加熱して固めて、切り分けてナルトにする。

生卵を加熱してゆで卵にする。

だからラーメンの熱にも結構強いんです。

タンパク質は加熱すると不可逆の変化を起こし、脂は加熱で溶けるのでこうなるんで
すな」

俺、チャーシューと麺一緒に食つたり、麺と卵一緒に食つたり、チャーシューと卵を
一緒に食つたりすんの好き。

「ラーメンも基本原理レベルで見れば俺の普段の仕事とそこまでは変わりません。

問題は熱・水・食感なんですよな。

例えば飴細工を乗せても溶けてしまいます。

スナック菓子を乗せてもスープを吸ってふやけてしまいます。

ラーメンの具は大抵柔らかく噛み切りやすいので、硬すぎる食感などはまた駄目です
し」

「お城は無理か。残念」

「いやまあできますけど」

「できんのかよ!」

「ラーメンの上に組むなら、ラーメン二郎風に野菜で城組む感じになりそうです。

ただ、俺自身料理の腕が大したことないのと……満足する作品が作れなさそうなんですよね」

「熱・水・食感か」

「そういうことです。

ここはどうしようもないんですよ。

それならまだアート分野で技術が発達してるお菓子の世界の方が楽です」

ラーメンつてのは結構気楽な料理界限のはずなんだけどな。

お菓子やパンみたいな”アート分野での技術”が発展してねえのは、ラーメンでアートのやんのはめっちゃ難しいからだと、俺は思う。

食うのに時間かかると伸びるし。

「まあ、そうだよね」

アラヤさんがずっとラーメンをすすする。

「専門分野外の英二にあっさりどうにかされたらラーメン専門の人が泣くよ」

「それは……確かに」

「たとえば、亀の食ってるとんこつラーメン」

「これか？」

「これだって昔は日本に無かったものでしょ。」

じゃあラーメン界の英二みたいなやつが見つけて、作ったんじゃないかな。

で、それが美味しかったから皆真似した。技術ってそういうもんじゃないの」

ううむ、正論だ。

「でしようね。俺も先人の天才や親父の技術を、こうして受け継いでるわけですから」

うめえなあ、ラーメン。

このラーメンに、いったい何人が生み出した技術が溶け込んでるんだろうな。

安くて美味しいラーメンは、低予算で面白く作った映画みてえな良さがあるのだ。

「英二、さっきの技術解説講座の報酬にチャーシュー一枚やるよ」

「いいんですか？　ありがとうございます、亀さん」

「いいってことよ」

あざす！

チャーシューが一枚増えるだけで嬉しい。

あ、このチャーシューとんこつ風味だ。ラッキー。うまうま。

「そういうえば、俺しばらく事務所も空けます。」

拘束時間が長い仕事は受けられないので注意してください」

「朝風は仕事？」

「です。ね。」

南の島に行つて一ヶ月撮影にかかりつきりです。

本土に戻つて来ることもありますが、基本は時間のほとんどをそつちに使うかと」

「忙しいやつだなお前も。……そういうや英二、前に島の危険な撮影の話しなかつたか？」

「仮面ライダーV3対デストロン怪人1973年、劇場版仮面ライダーV3。当時の仮面ライダーの爆発的な人気もあつて、警察との協力によって白バイ護衛のパレードが組まれたほどの熱狂があつた。のことでしょようか」

「そうそう、それぞれ」

「あれ、火薬を用意しすぎたんですよね。」

火薬をたくさん四国現地に用意しすぎて、持つて帰るのが怖くなったんです。

当時は軽トラに山積みにするしかありませんでしたから。軽トラの荷物つてたまに落ちますし。

ちよつとぶつけたらその火花で火薬に引火しますし。

だからこう……ドカン、と。島で大量の火薬無理に使い切ろうとしちやったんですよ
ね」

「ドカンと」

「ドカンとです。」

島の海岸線の地形が変わり、島にはヒビが入りました。

あまりの轟音に市民は通報、官公庁が動く事態に。

俳優は命の危険を感じたと言いつつ、自分が本当に吹っ飛ばされてる画が撮れたと笑い話に」

「いい俳優だね。共感できる」

「アラヤさん!?!」

いやいや、共感はすんなや。

仮面ライダーV3・風見志郎役の宮外洋さんみやもとひろしとか、『Gメン、75』の撮影であんま安全対策してねえトラと絡まされてるからな！

「番組の中の設定ではトラと友達って設定なんですけど、実は初対面でいつ襲いかか

られるか分からなかったんですよ(笑)」とか言ってる人だからな仮面ライダーV3の宮外さん!

野獣の前に一人で行くとか普通死ぬからな!

ああいう人に共感だけは絶対すんなよ!

「島撮影だし、島での火薬使用も視野に入れて、それっぽい撮影させようとしてんじやね?」

まつさかー。

「あの時代の危ない撮影なんてさせませんよ。

島は地盤が緩いんです。少し無理させたらすぐ地滑り、死人が出ますから」

「真面目だなあ」

「当然のことです。亀さんは軽く見過ぎですよ。

俺は明日メインのキャスト24人と正式に顔合わせ……なんですけど。

スターズの方の12人は何人来れるかいまだにハッキリしてないんですよ」

「けっ、大手事務所は仕事が山程あって、忙しそうでかわいそうなこと」

スターズは忙しいんだが、それにしたって手塚監督にスターズのスケジュールと合わせようとする気が見えねえ。

何考えてんのかねあの人。

……正直言うとあんま読めてねえ。

一般オーディション側の俳優の性格把握しねえと、手塚監督の目論見は読めてこねえな。

あ、LINE。

百城さんからだ。

『前に言ってたケーさんって夜風景さんのこと?』

お、百城さんも景さんのオーディションの演技とか見たのか。返信返信。

『そうですよ』

ラーメンも食い終わった。

どうすつかな。

帰って仕事するか、劇団地球のイベント見てくか。

公演じゃないなら帰ろつかねー。

「英二、暇潰しに付き合えよ」

「いいですけど、何するんですか?」

「このスマホアプリのゲームをだな……」

「俺が入れてないやつですね」

「いいんだよ、今入れりゃ。ほらスマホ貸せ」

「亀、ほどほどにしときなよ」

どんちゃん騒ぎになる一歩手前の、その空気。

その空気を、カツン、という音が押しつける。

コンクリートを杖が叩く、そういう音だった。

振り返ったそこに、巖爺ちやんがいた。

「仕事終わったガキ引つ張り込んで、仕事前に遊んでんじやねえ！」

「うわあああああすみません！ すみませんっ！」

「ぶん」

マジごめんなさい。

俺は道草食わずにそそくさと帰宅した。

夜風” 天使” の顔が、一瞬視えた。とても怒っている」

うちの事務所の茜さんはちよつと面倒臭い人だ。

他の人と比べて相対的に面倒臭い人、とかではなく。

普段竹を割ったようなさつぱりした性格してる分、時々ちよつと面倒臭くなると倍面倒臭い女に見える人だ。

人生損してる人だとも言う。

「真咲ちゃん、どこ見とるんや」

「空ですよ。ちよつと空気が湿気つてたので雨降るかなと思つたんですが、大丈夫みたいです」

「ふーん」

茜さん、機嫌悪いな。

受かった時は嬉しがってたが、今になつて” なんで受かったか分からない” って疑問が湧いて来たんだろうな。

そのせいで不安が出て来たんだな。

分かるよ。自分の実力で受かったって確信がないと、上手くできるか不安になるし、

受かった理由が分からないと自分も騙せない。

俺も自分が受かった理由がよく分からない。

何か良い演技見せられたとは思わないんだが、どこが引つかかったのかよく分からない。

夜風は……万歩譲ればまあ分かる。

あんな演技してる奴は他には見たことがない。

武光も分かる。

後から振り返ってみると、あいつだけは最後まで”ここからどう殺し合いに持つていくか”の具体案を練ってた気がする。

オーデイション前にあいつと俺で言い争いになったことを思い出す。

俺は原作を読み込んでオーデイションに臨むタイプで、あいつは全く読まず臨むタイプだった。

——あくまで俺達は演技力と人柄で勝負すべきだ！ 作品に媚びても仕方ない！

——役への順応性や努力を「媚びる」って表現してんじゃねえ

——あんたガチのバカだったのかよ。手前てめえの不器用さ正当化してるだけじゃねー

か

——君はオーデイションで「昔から原作と監督の大ファンです」とか

——聞いてもないこと語り始めるタイプだろ！ 実力で勝負しろ！

——実力で勝負してるわ！

——ガチでファンになってからオーディションに挑んでるだけだ！

——それも役作りの一つだろうが！

……有言実行されると腹立つな！

オーディション終わった後は、『原作を読み込むのも君の実力の内かもしれない』とか俺に言ってきたのも腹立つ。

最終的にはお前の方が正しかったのかもとか一瞬でも思った俺がバカみたいじゃねえか。

やっぱオーディションは事前に原作読み込んでファンになってから行くのが正しいと思う。

……思う、が。

それが理由で受かったんだと浮かれてねえあたり、俺も納得はしてないんだろうな。スターズ事務所歩いて向かう途中で、茜さんの視線が少し横に逸れた。

その視線を追ってみると、そこには『朝風総合美術』の六文字。

ははーん。

あんたうちの事務所より高そうな土地に事務所構えてんだな、英二さん。

つかスターズ事務所近いな英二さんの事務所。

英二さんはイマイチよく分からん人だが、あそこで茜さんを追ってくれたのはブラボーだと言いたい。

受かった理由が分からない……って言ってる茜さんだが。

俺は英二さんのコネゴリ押し説をちよつと推してる。

『朝風英二』の名前でググるとインタビュー記事も顔写真も出てこないが、美術とか造型で参加した作品の Wikipedia ページがズラつと出て来た。

……俺より関わってる作品多い人じゃねえかこれ。

あの歳でこれか。

こんだけ露出少ないと、取材とか断って、その分の時間を全部技術習得と仕事に費やしてるとかありそうな気もする。

いやどうなんだろう。そもそも取材とか来てないのか？

俺、造形屋のその辺の慣習しらねえからなあ。

造形屋の中には出世して結構テレビ局とかに影響力持つてる人もいるとか聞いた。

うちの社長が言ってた。

じゃあ英二さんがコネで通した可能性ワンチャンあるんじゃね、とも思う。

俺は受かったんだからラッキー、くらいに割り切れるが、茜さんならどうなんだろう

か。

理由が分かって吹っ切れるのか。

友人の鼻屑になんか落ち込むのか。

分かんねえな。

分かんないなら触らぬ神に祟りなし。

分かんないなりに距離取って気遣うしかない。

茜さんがこんな不機嫌なまま現地入りしたら、流石に監督の心象悪すぎる。

英二さんの事務所の脇通って、スターズ事務所に裏口から入っていく。

スターズ事務所に入っても、茜さんは一言も喋らないままだった。

「顔合わせか……やっぱ星アキラも来るんスカね」

無視。

茜さんの返答なし。

うっ、心が痛い。

あーもーめんどうかせー。

「俺アイツの芝居好きじゃないんスよね。ね、茜さん」

無視。

「茜さん？」

無視。

いじけんよな、もう。

かといってほっとけねえ。

これほついたら今後の茜さんの仕事に響く失態しそうだ。

「茜さんちよつと、いつまでいじけてんスカ」

「だって私なんで受かったんか分からんやんか、釈然とせんわ」

茜さんが足を止め、振り向く。

イライラ……というか、不安そうに見えるな。

この業界長いと、ただの善意と好意で選ばれたとは思えないもんな。

じゃあ裏があるんじゃないかって思えて、裏が見えないことが怖くなって……その気持ちは分かるんだが勘弁してくれ。

”あの事務所の俳優はちよつと”みたいな印象付いたら誰も幸せになれないんだからさ。

「やっぱ辞退すべきやったやろか」

「何言ってるんだよオーディションなんてそんなもんでしょ、勘弁しろよ」

マジ勘弁。

どうすつかな。

仮に俺の推理通り英二さんのコネゴリ押しとかだったらどうしよう。

英二さんがそう言っていないってことは、恩を売りたいわけじゃないんだよな？

あの人生き方不器用そうだし。

じゃあ茜さんにそういうの察されたら困るよな……」オーデイションなんてそんなもの”みたいに納得してもらって……疑問持ってもらわないのが一番だよな。

ギスギスはマジでやめてくれ。

こっから顔合わせってことは、24人で仲良くしてくださいみたいなこと言われるんだぞ。

茜さんを悪目立ちさせないためには……えーっとどうすりゃいいんだ。

「そっだぞ湯島！」

うおっ!?

「役者なら常に胸を張れ！ 自信を持って！ 俺達は選ばれたんだ！」

武光っ！ 声でけーんだよ！ ここどこか分かってんのか！ スターズ事務所だぞ！

「うるせーよ、声でけえよ。あんたも受かったのかよ」

「ああ！ 君が受かって俺が落ちることはないだろ！」

「ああ!？」

この野郎！

受かったならそれでいいと全力で喜んでる武光。

なんで受かったのか分からなくて腐ってる茜さん。

そもそもプラスにもマイナスにも、そこまで大きな感情持ててない俺。

そして。

「……てことは、もしかして」

来たよ。

そもそも受かる気があったのかすら怪しい、夜風。

「あ」

夜風景は、いつの間にかそこにいた。

セーラー服着てんな。学校の制服か？

服装の感覚がまだ業界の基準に慣れてないのか。

いやそもそも、俺達の年齢層は高校行ってるのが普通だが、俺達の年齢層で高校行き

ながら役者やってる人間ってなると、ぐっと少なくなる。

多くの仕事と学生生活を両立できるやつ、っていうのがもう天才の領域だしな。

だから大抵のやつは、高校行く時間があつたら生活費稼ぐバイトか、レッスンで技能

向上にあてたりする。

逆方向のやつもいるけどな。

有名高校や有名大学に進学して、理知的なイメージ付けて、そういうのが好きなファンを固定層として獲得するってやつ役の芦原愛菜など、『偏差値70超えの有名名門私立中学に合格』が後々売りになるだろうと見られており、子役レベルでも学歴は強みになると見られている。学歴が良いと知識系のバラエティのオフアーも来やすく、『頭の良い美女』『頭の良いイケメン』はそれだけでファンが大勢獲得できるからである。

ただ、夜風はあんま頭良いように見えない。どちらかというとかバカに見える。

制服も有名な高校のじゃない……と、思う。

何かのアピールっぽくは見えないな。

そういう視点で見ると、こいつにそういう小細工は無い気がする。

やっぱ業界に入って間もないやつって見るのが妥当か。

オーディションの時はかなり迫真の演技だった気がするが、こいつどういいう経歴なんだ？

「夜風！ やっぱり俺達皆受かってたんだな！」

「だから声デケーよ！」

うるせーな！

「……」

ん？ 夜風どうした茜さん見て……あつ。

「あ

やーべ。

武光はなんか元気だが、夜風と茜さんの間の空気が氷点下だ。

茜さんの目が冷たい。

夜風のキョドった感じがちよつと小動物みたいだ。

「茜ちゃんこの前はごめんなさい……私……」

無視。

茜さんは夜風に背を向け、夜風の謝罪も弁解も聞かず、すたすたと立ち去っていった。

あーもう、身内以外にそういうのはやめろつて！ 心痛むから無視は！

反省して謝ってんなら許してやろうぜ茜さん。

無理か。

無理だな。

倫理めっちゃしつかりしてる茜さんは、あの時の夜風に悪気があつたのかなかつたのかも分からなくて、何もかもよく分かってない夜風が許せない。

当事者の俺でも、夜風がどういうやつなのかはいまいちよく分かってないから、茜さ

んもきつとよく分かってないんだ。

分からないでもないけどな。

怪我人が出てたかも、って思うと。

「ちよ、茜さん」

呼び止めても止まらない。

あ、俺への無視も再開された。

ちくしよう、夜風見てあの時の感情が蘇って、夜風も受かっていると知って”合格基準が分からない”って疑問と不安がぶり返したのか？

あーもう、話してもらわなくちゃ茜さんの内心なんて全く分かんねえっての。

「悪い夜風！ あとでな！」

「……………うん」

茜さんに無視されてしょぼんとしてる夜風を置いて、茜さんの後を追う。

後ろ髪引かれる思いだ。

演技の場じゃなくて、こうして普通に話していると、自分が過去にしたことをちゃんと反省してる女の子にしか見えない。

なんか思い出しそうだ。

なんだっけ。

この状況に何か……あ。

これ、あの時の英二さんの行動と同じだ。

夜風に後ろ髪引かれるような感じで、でも茜さんの方を追うんだ。

あー、あん時は英二さんに偉そうに言っちゃって悪かったな。

英二さんは気にしてない風だったけど。

機を見て謝っておこう。

「私がんばる。今度は皆でお芝居できるように」

茜さんと俺の背にかけられた夜風の言葉が、夜風の反省の意を示していた。

まあ、いいんじゃないねえの。

反省してるなら、同じことは二度ないって信じてやるよ。

とりあえず、だけどな。

お互い頑張ろうぜ。

一人で先に進んでいく茜さん呼び止める。

「茜さん！ 謝罪くらいは聞いてやってもよかったんじゃないんすか」

立ち止まり、振り向いた茜さんの表情は、何とも言えない感じが漂っていた。

多分、茜さんは良い人だから、全部夜風のせいにして嫌ってるとかじゃない。ただ……あいつがよく分からない内は、どうしようもないんだろう。

「私、夜風ちゃんが分からないねん。どうしたらええんやろ」
ほらな。

「どうしたらつて、そりや……」

どうすりゃいいんだ。

「……英二さんに洗脳装置でも作ってもらうとか」

「英ちゃんにも不可能ってあると思うんやけど」

「ですよね」

一瞬「できるかも」って思っちゃまったせいで、なんか変なこと言っちゃまった。

「英ちゃんが気に入る人間の基準、私には分からへん。」

ただ英ちゃんが気に入った人間が無価値ってことはないはずなんや」

「でもその価値が分からないので混乱すると」

「ただ性格悪いクソな人なら分かるんやけど……」

謝りに来たあたり単純にそうでもなさそうやし……英ちゃん何が気に入ったんや
……」

夜風ダメージは深刻だな。

「英二さんも男ですし、単純に夜風の外見を他の誰よりも気に入ったとかじゃないんすかね」

ちよつとからかうつもりで俺が言った台詞を、茜さんはすぱつと切り捨てた。

「英ちゃんがそんなキチガイ味の無い気に入り方するもんやろか……?」

「キチガイ味」

「英ちゃんちよつと、無整形美人より整形美人を気に入る時あるからなあ。」

『なんて高い整形技術なんだ……素晴らしい作り物の顔!』みたいな感じで」

「それ本当に美人を気に入ってるんですかね」

「気に入るとしたら、こう……」

いい表情を”作る”俳優さんやと思うんやけど、夜風ちゃんそういうタイプやったやろか」

「さあ。俺達暴走してるところしか見てないっすよ」

まあ俺達は皆受かったんだ。

500人で奪い合った12個しかない枠を、4人揃って手に入れたんだ。

そいつは凄えことなんじゃないか? ってちよつと思ったりもする。

俺達がお互いのこと知らなくても、撮影中に嫌でも知ってくんじゃねえかな。

「追いついたぞ二人とも!」

「だから声でけえよ！」

「真咲ちゃん、あんたもデカイ」

しまった。

演劇畑の野郎の一部は、遠い客席まで声を届かせるために、デカイ声がデフォオのやつもいるとか聞いてたが……俺までつられて同類に……！

しかしついてくんなよお前。

「朝風先生から預かり物があつてな。これを」

飴？　つていうか。

「なんだ朝風先生って。朝風英二さんだよな？」

「ああ。あの人は舞台演劇に時々来る人でな。

本当にたまにだが仕事をしていく人なんだ。

最近だと『表情が変わる青空』……

それと、『茜色の空の幻想風景』がとも良かった。

大御所の巖裕次郎が使ってるんだ、半端な質じゃない。

それと新人が高い舞台道具を壊した時、こつそり直してくれることで密かに有名なんだ」

英二さんはのび太くんに泣きつかれるドラえもんか何かか。

「茜色の空なあ」

「どうしました茜さん？」

「どうなんやろなーって思てな」

あんたがどうなんやろなだよ。言いたいことが伝わらないぞ。

「昨日はなんと、彼の仕事の甲冑を俺が着る機会があつてな！

着心地も良く、注意書きと付属された制汗剤と消炎鎮痛剤が実に助かった！

甲冑を着込んでも涼しく、制汗剤と消炎鎮痛剤のおかげで更に涼しい！

しかも俺がたくさん汗をかいてしまつても、外に出る汗の臭いが消臭されていてな

！」

「うるせえ声量抑えろ！」

「それで今日見かけたので、挨拶に行つたんだ。

そうしたら逆に撮影に向けての激励と、この飴を貰つてしまった」

なるほど、それで飴か。

「朝風先生曰く、精神安定効果と喉に良い効果があるはちみつのだと飴らしい」

「マメな人だな、あの人も」

「夜風にはもう渡した。後はお前達二人の分だ」

それなら、ありがたくいただいておくか。

あ、甘い。

結構好きな味かもしれないぞこれ。

「英ちゃんらしい感じやわ」

茜さん、それ絵の感想なのか飴の感想なのかよく分かんねつす。

「朝風先生はスターズで来れそうな人間を迎えに行つたそうさだ。」

この撮影でも美術監督を務めると聞いたぞ。後で四人で挨拶でもしに行くか？」

「お前声は野獣そのものなのに意外と礼儀正しいやつだな……」

「英ちゃんおらんのかー」

お、茜さんの精神がそこそこフラットに戻つてる。

サンキュー英二さん。

あとは……そうだな。

席順が自由だつたら、さり気なく茜さんと夜風の間座つとくか。

それで今日一回くらいはなんとかなるだろ。

おそらく。

そうさ、困つた時は英二さんを間に入れたり、盾にすりやいいのか。

早く戻つてきてくれ英二さん。

女の怒りを受け止める最強の壁になつて俺を守つてくれ。

緊張する……ような、気がする。

いやしてないかな。

私、緊張してない。

ちゃんと緊張した方がいいのかしら。

緊張する映画を見た記憶でも思い出して、メソッド演技をした方がいい？
茜ちゃんにはごめんなさいも聞いてもらえなかった。

まだ私はちゃんと謝れてない。

共演者として認められてもない。

頑張つて、認めてもらわないと。

ここはスターズ事務所の会議室……だと、思う。

私は映画でしか会議室を見たこと無いけど、多分そう。

座る椅子はそんな柔らかくない、ちよつと安っぽい感じ。

そこは映画とは少し違うかな。

右を見れば、真咲君、茜ちゃん、武光君、それと監督さんが座っている。

左を見れば、私と同じオーディション組の人が八人座っている。

皆、私と同じくらいの年齢だ。

デスアイランドの登場人物は皆同い年のクラスメイトだって聞いたけど、年齢も揃えたい。

私は今日、天使に会える。

私と全く違う芝居をする天使に。

百城千世子に会ってみたくて、私はここまで来た。

どんな人なんだろう。

芝居を見ていると伝わる、得体の知れなさ。

綺麗な芝居に、見えない素顔。

とても、とても綺麗な仮面。

人を夢中にさせる芝居をするのに、誰も彼女の素顔を知らない。

きつとあはれは、私に無いものだ。

だから会えるのを楽しみにしてた……だけど、誰も来てない。

オーディション組の12人も、監督も来てるのに、スターズの人が一人も来てない。

どうして？

「ごめんね皆！

せつかく時間通り顔合わせに来てもらったのに。

スターズ^ちの俳優がまだ一人も到着してないんだ」

監督がにこやかに笑ってそう言った。

英二くんが凄く重い男の人なら、この人はとても軽い男の人って感じがする。

「皆多忙でね。

もしかしたら一人も間に合わないかも。

ま、よくあることだし気にしないでね。どうせ現場で会えるから」

天使に会えると思ったのに……残念。

大変よ英二くん。

芸能界は嘘つきがいっぱいだわ。

そういうえば、英二くんは天使と親しい知り合いだったりするのかしら。

見る目がある人なら、英二くんの作る綺麗なものを気に入ると思う。

なら友達になっていてもおかしくはないわ。

もしかしたら、とっても仲が良いのかもしれない。

黒山さんは、『盗めるもん全部盗んでこい』と言っていた。

天使は盗みがいがあるとも言っていた。
盗めるとしたら、何を盗めるんだろう。

技術、姿勢……あとは何？

盗むっていうと、天使が大切にしているものってイメージがあるけど。

天使が大切にしているものって、なにかしら。

「じゃ、台本を渡そうか。台本読みでもする？」

監督が台本を取り出した、その時。

ドアが開く、音がした。

「ごめんなさい遅れてしまつて。それでも撮影急いで巻いたんだけど」

皆が、そちらを見た。

目を引く仕草。

目を引く姿勢。

目を引く所作。

何の役の演技もしていないはずなのに、皆の目を引き、夢中にさせる。

顔合わせのために用意されたこの部屋の『中心』が、一瞬でその人に移ったのを感じた。

「私以外誰も来てないじゃんスターズ。

こんな日に『顔合わせ』なんてしたら駄目だよカントク」

上下左右前後どこから見ても、この人はきつと綺麗に見える。

何故か、それが私にも分かった。

13人の人がここにいて、天使に13の視線が向けられていて、そのどこから見ても綺麗に見える……たぶん、そういう立ち回り。

とても綺麗な立ち回り。

なのに、その目は。

私を見ていたその目は。

今は綺麗で優しい目をしている天使は、さつき。

ドアが空いた瞬間だけ、刃物のような目をした天使が、こちらを見ていた気がした。

少し、浮かれていたのかもしれない。

「千世子。朝風をスターズに引き込めるかもしれないわ」

アリサさんがそんなことを言っていたから、浮かれていたのかもしれない。いつものように、研究をしていた。

その日の研究は『デスアイランド』の共演者達について。

私の次のお仕事で共演するスターズ11人、それ以外の12人についておさらいと新規研究を開始した。

これを苦に思ったことはない。

12時間仕事をして、8時間一息に使い切って、4時間寝る。

美容に悪影響が出ないラインを見切って、睡眠時間を削って、一日の活動時間を確保し、仕事の時間・技能向上と情報研究・睡眠の時間をバランスよく計算する。

睡眠不足でクマが出たー、なんて言ってる人がいるけど、そんなのただの怠慢だ。

クマはそもそも多少なら化粧で隠せる。

睡眠時間のコントロールで防げる。

そもそも寝なくても、クマは防げる。

茶っぽいクマは紫外線、目の擦過が原因。日当たりと目の扱いを考えてればまず出来ない。

黒っぽいクマは表情筋の衰え、肌の劣化。表情訓練と肌の手入れで防げる。

青っぽいクマは血行不良。普段から顔マッサージや適度な運動による血流調整で防

げる。

顔にクマが出来てる時点で、結構な怠慢だと思う。

女優なら、一睡もせずに共演者の研究もしつつ、目の充血や目の下のクマなどの”低評価要素”を片っ端から排除して、女優の顔を作るくらいはすべきのはず。

だから英二君なんて、いつものように私に見惚れてる。

英二君は目がいいから、私が私の仮面を作るために費やしている労力を見抜けるからだ。

誰よりも正確に、過大評価も過小評価もせず、私を褒める。

彼の目は本当に正確だ。

少し、アキラ君が羨ましくなることもある。

今アキラ君が俳優として発揮してる能力から見れば、英二君がアキラ君に向けている評価は過大評価なくらいに高い。

それはきつと、友情の分だろう。

可愛い男の子達だ。

ただそうなると私は、過大評価も過小評価もされずに英二君の中で上限いっぱいくらいに評価されることが、少し寂しくなる。

もしも、女優じゃない百城千世子がいたら。

もしも、女優が向いていない百城千世子がいたら。

その時は、英二君は友情で、私の評価に下駄を履かせてくれたりするんだらうか。

その時私は、素直に喜ぶのか、喜べないのか。

想像を働かせるのは少し楽しくて、少し怖い。

私はどのくらい本物で、どのくらい偽物なのか。

アキラ君は『本物の俳優』にこだわってる。

本物って何？

例えば似たような女優が多くいたとする。

それなら、一番上の女優が『本物』と言えるだろう。

一番上の女優以外は、一番の劣化コピーの『偽物』でしかない。

たとえ、小さな個性がいくらあろうとも、きつとそうなる。

少し前の時代には、格別に人気な女優が『本物』扱いされて、過激なファンがそれ以

外を『偽物』扱いするなんてこともあったらしい。

個性がいくらあっても、そうだったらしい。

そのカテゴリの中で一番が、本物。

そういう考えがあるというのも事実だ。

私はどのくらい本物で、どのくらい偽物なのか。

それまで一番の本物だったものも、本当の本物がくれば、二番目に落ちて本物でなくなる。

一番目が本物、二番目が偽物でも、一番目がいなくなってしまうえば、二番目が偽物のまま本物になる。

芝居の上下で『本物』を決めるってのはそういうことだ。

アキラ君は、たぶんそうと分かってないんだらうけども。

そして。

少なくとも私は、現役時代のアリサさんに自分が勝っていると思ったことはない。

私はどのくらい本物で、どのくらい偽物なのか。

夜風景さんはどのくらい本物で、どのくらい偽物なのか。

デスアイランドの共演者達のオーディション時の録画を、分析・研究した。

目に止まったのは、夜風景という子の演技。

私とは違う、一切取り繕わない演技。

『嘘』がまるで無いように見える演技。

いわゆる『迫真の演技』を落ち着いた会話でも、激しい感情を見せる場面でも、安定して行い続けられるという異常な演技。

目が眩むような、個性の塊をぶつけてくる芝居だった。

ああ、これが、英二君が見惚れた人なんだと。名前を再確認する前から、ひと目で分かった。

「どうやってるんだろう、これ」

いくら研究しても、真似できない。

いくら分析しても、やり方が分からない。

夜風さんの演技を百回見直したところで、私は焦りを覚えた。

『本当の本物』は。

『それまで本物だったもの』を。

時に『無価値な偽物』に変える。

メソッド演技の歴史を、私は知っている。

メソッド演技の流行は、それまでの演技全てに『偽物』のレッテルを貼った。

新人は猫も杓子もメソッド演技を学びたがり、『本物』になりたがった。

時代の流れでメソッド演技もかつての熱狂を失うが、そういう時代があつたのもまた事実。

ねえ、英二君。

「……私の演技と、この人の演技……仮に『どちらが本物か』を決めるとしたら、それは

……」

私が前にした質問を、君にもう一度したら。

私が曖昧なはぐらかし方を許さなかったら。

私が一番信頼してる審美眼を持つてる君は、どう答えるのかな。

私は英二君を信じてる。

絶対に私の味方であると信じてるんじゃない。

英二君の目は正しく物事を見抜くということを、信じてる。

その目を信じてる。

だからこそ、英二君の目に、私と夜風さんが並んでいるところを見て判断してほしい。

「でも」

でも、もし。

「もしも、英二君が夜風さんの方に、『百城千世子より素晴らしいもの』を見てしまえば

……」

私はそれを、どう受け入れられるだろうか。

いやそもそも、受け入れられるだろうか？

英二君の目を信じて、夜風さんが上だと認めるのか。

それとも、私は英二君を信じている自分を捨てて、自分の心を守るのか。

……夜風さんと話したこともない今の段階じゃ、分からない。

会つて、話してみないと。

英二くんが私と彼女を比べるかどうかも、彼女が私より格上かどうかも……

いや、英二君は人によつて違う個性を愛する人でもある。

たとえば私の上位互換の人が現れても、私の評価は下がらないと思う。

だから私と違うタイプの夜風さんが現れても……夜風さんが、英二君の中で一番に素晴らしい女優の席を勝ち取つても……私への評価は変わらない。変わらないけれど。

そうした場合、私は彼の中で二番目以下の女優になる。

私が世界で一番だと思ふ造形屋に、二番目以下にしか見られない女優になる。

私の中で、私にも抑えきれない、少し負けず嫌いな自分が唸り声を上げた。

英二君は、デスアイランドが終わればスターズに来る。

その後はずっとアリサさんや私の犬だ。

……ちよつとあれな表現になつたけど、まあ間違つてはないと思う。

そうなつたら、アリサさんの性格からして、夜風さんを助けるチャンスを英二君に与えることはもうないだろう。

そして、私は常に英二君に助けてもらえる。

英二君が傍にいれば、私は負ける気がしない。

なんでも作れる英二君なら、なんでも彩れる英二君なら、時に作品で他人に成長を促せる英二君なら、スターズ全体の今のレベルを格段に引き上げられるはず。だからきつと、これが最後だ。

私の演技のやり方と、夜風さんの演技のやり方が、等しく英二君の整えた舞台の後押しを受けながら、同じカメラの中に映るのは。

見極めてみたい。

この、よく分からない夜風さんの演技を。

何か他の人にはできないことをしていることだけは分かる、この演技を。

この人の演技を見てみると、何故か湧いて来る胸の奥の感情の正体を、私は知りたい。そうして、私は過去を思い返す思案をやめて、瞳を開いた。

「起きましたか、百城さん。いいタイミングですね、もう少しで着きますよ」

「寝てたわけじゃないよ?」

「あれ、そうでしたか。すみません」

右を見れば運転してる英二君。

遠くを見れば、スターズ事務所が遠目に見える。

空を見てみると、茜色の空があつて、何故か無性に癪に障った。

私は、目を閉じて考え事してただけ。

だから英二君の運転が、私が目を閉じた途端に優しくなったことも分かつてる。途中一回止まって、英二君が私に毛布を掛けたことも分かつてる。

掛けられた毛布とその気持ち、とても暖かい。

多分、到着した頃に毛布を取って、何気なく起こすつもりだったんだろう。

英二君はこういうところがずるい。

「あとののくくらいで着くかな」

「5分か10分ですね。拙い運転で申し訳ありませんでした」

「下手とは思わないよ。迎えに来てくれただけで嬉しかったし」

あえて毛布に言及しないと、ちよつと内心慌てるのが手の動きや目線の動きに出る英二君が可愛い。

「ありがとう。英二君はいい人だね」

「……いえ、当然のことですので」

褒めると照れた。

英二君は英二君だなあ。

役者にはなれなさそう。

”女はいくつもの顔を持つ”なんて言うけど、こうまで自分の表情を使いこなせない

男の子を見てると、これを言ったのって英二君みたいな男の人だったんじゃないかな、なんて思う。

助手席の人を飽きさせないための小型テレビの電源を切る。

英二君が私を飽きさせないために流していた映画は、『フォレスト・ガンプ』だった。『そういえば、なんでフォレスト・ガンプなの?』

「最近見直す機会がありました、車に置きっぱなしだったんですよ」

「そうなんだ」

フォレスト・ガンプの主演は、コム・ハンクス俳優・監督・小説家と幅広く活躍する名俳優。その名演はあまりにも評価が高く、文化的に評価されたため最高位勲章である『大統領自由勲章』を受章したほど。他にこれを受章した者は、ウィルト・ディズニー、マイザー・テレサ、ヘイレン・ケラーなど。

彼とスピルハンバーグ監督は、時に相棒関係のように語られる二人だ。

コムは役に入り込む憑依型俳優で、その評価は極めて高い『本物』。

監督は、コムをこう評価していた。

『コムが私の監督作品に出演するのはこれで5作目だが、コムは毎回私を驚かせる』

『コムはどんな役にも合うよ。個性的で素晴らしい役者だから』

『最初にコムのごことで気付いたのは、演技をしている姿を見たことがないってことなん

だ。

あたかも脚本が無いかのようにセリフを口にしていた。

まるで監督も存在せず、照明も無いかのように、僕にただ話しかけているかのようだったんだ』

役に入り込み、自分も忘れるような役者は。

どんな役でもできるし、いつでも監督を驚かせているらしい。

……らしい。

昔から、ずっと私が言われていることがある。

『役ごとに演じ分けてない』

『この役は百城千世子に合っていない』

『安心感はあるが、驚きはない』

『良くも悪くも』上手く演じてる人”でしかない』

他人に見える自分を、意識して作り続けた。

周囲の視線を把握し、理解し、自分の振る舞いに反映した。

撮影に使う全ての物を理解し、時に英二君の目を借り、カメラに映る自分を計算した。新しいカメラが出るたびに、それを計算の内に組み込んだ。

SNSに掲示板と、エゴサーチで統計を作り、周囲に与える私の印象を修正し続けた。

仮面を作り、偶像を作り、千世子を作った。

最初の私がどこかに行つてしまふまで、私を作り続けた。
観客が望む私の姿を、作り続けた。

子供の頃から今に至るまで、ずっと、ずっと。

それでも、私には作れない私というものが、確かにあつて。

「英二君。実力派俳優つて呼び方、どう思う？」

駐車場が落とす影が顔にかかる。

私は運転している英二君に、そう問いかけた。

「そうですね……」

商業的に良いものだと思います。

実力派俳優という称号に、決まった数字のラインは存在しません。

実力派俳優に資格ありません。

でも一般の人は、『実力派俳優』と聞くと実力はあるんだろうと感じます。

これは舞台における観客の動員や、俳優のファンの獲得に作用します。

この称号が俳優の実力を確実に示すわけではありませんが、商業的には有用ですね」

「役そのものになりきる、憑依型俳優タイプがこう呼ばれることが多いよね」

「そう……ですね。」

多彩な表現力によって一つのキャラクターを売っていく俳優より……

多彩な役を演じられる俳優の方がそう呼ばれやすい気がします。

総合力で言えば百城さんより低い人でもそう呼ばれることはあると思いますよ」
全部が全部そうじゃないけどね。

そういう傾向はある。

技術が高い人と演技力が高い人はイコールじゃない。

高度な演技の技術を使っていた人が、才能に由来する演技力の高さに負けていくところを、私は何度も何度も見てきた。

「英二君は、ああいう役に入り込む演技法は好き？」

私には、なれないものがある。

私には、できないことがある。

「俺が好きなのは色々あります。

『人間らしい演技』も好きです。

ああいうものが評価されるのも理解できます。

自然な演技だから、というのが一番大きいでしょうね。

自然に観客の感情を引き出せるのは本当に強いと思います。

というか俺は、『人間らしい演技』なら大体好きですよ。一番好きです」

「——うん。私も、ああいう演技を求める人の気持ちは理解できるかな」

……ああ、そうだ。

英二君の視点が、私の考えを補完する。

私は英二君が夜風景の演技に惚れ込むかもと、感覚的に分かっている。

私は自分の演技が人間らしい演技じゃないと知っている。

夜風景の演技が人間らしい演技だと、録画を見て知っている。

だから。

私は。

「ありがとう英二君。私、先に顔合わせに行ってくるね」

「俺は少し後から行きます。今回の共演者は良いですよ、期待していいと思います」

「そうだね。私もそう思うよ。とつても、とつても個性的な人がいたから」

英二君と別れて、スターズ事務所の階段を登る。

心のどこかが高揚していて、心のどこかが冷静で。

胸の奥が熱いような、冷え切ったような、不思議な気持ちだった。

「ごめんなさい遅れてしまって。これでも撮影急いで巻いたんだけど」

ドアを開けた瞬間——夜風景さんと、目が合った。

「私以外誰も来てないじゃんスターズ。」

こんな日に『顔合わせ』なんてしたら駄目だよカントク」
冷静を保つ。

普段の振る舞いを保つ。

「ま、『顔合わせ』なんてしなくても作品に影響ないからね」

「大アリだよ！ 酷い監督だな。第一皆に失礼だよ、これじゃ」

部屋の中の空気を、私の言動と振る舞いで少しずつ和らげていく。

席に座るつもりはないから、歩きながら監督と話すフリをして、全員の視線を計算して立ち位置を調整。

全員から見やすく、全員に笑顔を見せられる位置を計算する。

ここ。ここだね。

天井の蛍光灯の光の当たり具合も、ここならきつといい。

それで、このタイミングで明るい笑みを見せる。

「改めまして、遅れてごめんなさい。

百城千世子です、よろしくお願いします」

反応を見る。

笑顔を返してきた人は友好的だ。

反応が無いのは何もする気がない人だから、とりあえず何もしなくていい。

私を値踏みする視線は、私の普段の振る舞いを見せておけば何も問題はない。

目を細めて、私に對抗心を持ったことが読み取れる人。

そこがこの顔合わせで問題になるかもしれない人だ。

12人の中で、その反応を見せたのは1人。

源真咲君か。

うん、コントロールしやすい流れかな。

「あ、源真咲君」

「え……」

「『ザ・ナイト』の劇場版観たよ！

ツカサ役すごくハマっててちよつとタイプだった！ なんてね。

でもドラマ『春の歌』の生徒役の時と印象あんまり変わらなかったね！

演じ分け苦手なタイプ？ 私と一緒にだ」

真咲君の表情が変わった。

心象も多分変わった。このくらいでいいかな。

”知られてる”って、重いでしょ？

私、英二君ほど自分を過小評価してないんだ。

『この年代で一番売れてる若手の大女優』に、『何故か自分の過去作品までチェックさ

れて好意的に感想言われる』って、無視できるほど軽くないでしょ？

”もうそれを無視できなくなる”でしょ？

よくいるんだよね。

『俺達はいいつらの眼中にないだろうけど、一泡吹かせてやる』って人。

でもそういう感情って余計だから、ここで捨ててもらった方が後でコントロールしやすく、皆楽になるんだよね。

意識的に、私の仮面を使いこなす。

台詞の長さ、テンポ、息を入れるところを間違えないように。

会話の最中も、自分を制御することも忘れずに、言葉を紡ぐ。

真咲君への台詞の後、ほんの一瞬間を入れて、隣の湯島さんに会話をずらす。

今の私の言動が、真咲君の制御だったと悟られないように、複数人に会話をシフトしていく。

「あつ、湯島さんも真咲くんと同じ事務所だったよね！

子供時代からの出演作全部観ちゃった！

どんどん上手になってくから！ 面白くて！」

昔英二君が無自覚に私によくやってたけど、専門用語をある程度分かりやすくして、ハキハキと聞き取りやすい発声で、聞き取りやすいテンポで怒涛の台詞を並べると、相

手はその長い台詞をちゃんと理解しようとする。

でも台詞が長いから、本当にほんの一瞬、その台詞を噛み砕くための『間』ができる。その『間』を上手く使えば、複数人が会話に混ざれる状況だと、会話のコントロールはとても簡単になる。

私は英二君より会話のテンポ、聞きやすい発声、分かりやすい言葉選びを心がけてるから、これは私が英二君の個性を盗んで、自分の技にしたと言えるのかもしれない。

私と英二君の合作だ。

呼吸を読む。

皆に何も言わせないまま、言うべきことを言う。

私の発言が、相手の反応を潰すように。

かつ、次の思考をコントロールするように。

”スターズの奴らは俺達なんて眼中にない” っていう認識をまず取り除いて、スターズの方からオーデション組への好意があるという認識を、根付かせる。

芝居好きの話好きキャラを演じ、柔らかな表情を作って、好意的な笑顔を浮かべる。笑顔は、相手の好感を得るために一番使いやすく効果的な武器だ。

”あの百城千世子が私達のことをちゃんと認識してくれてる” っていう喜びが、オーデション組の間に広がり始めてるのが、表情の変化から見て取れた。

「てゆうか武光君ナマで見ると本当に大きいんだね！ あはは。

舞台DVDで観たよ、存在感あってすごく目立ってた。ちよつと目立ちすぎなくらい！」

一番先に話の対象にした真咲君には大きな驚愕、湯島さんや武光君にもちよつとの驚愕が先行してるけど、それだけ。

基本的には皆好意的になってくれたかな。

”皆を軽く見てるつもりはない”って意思表示みたいなものだからね、これ。

一番驚愕が先行してる真咲君も、もう私に対する対抗心は見えない。

敵意も無いかな。

これで、対抗心から余計なことをしかなない共演者が皆、上手く制御できる味方になってくれた感じかな。

あとは顔合わせの中で、あるいは撮影中に、追々調整していけばいい。流れは掴んだ。

もうここから余計な言動、余計な行動は出ないはず。

好意的な接触でも、敵対的な接触でも、”お前のことを知ってるぞ”っていうカードは切りどころを間違えなければ、会話の流れを強く誘導できるんだよね。

もうこの場の空気は、私の手に掴まれている。

私を観察してる人。

私の次の言動を待つてる人。

私の今の言動から、色々考えてる人。

手塚監督を入れた12人が、そういう状態になった。

そうやっていないのは、ただ1人。

透き通った黒水晶みたいな目で、ずっとじっと私を見つめるその人だけ。

「あ。夜風景さん、オーディションの時の映像見せて貰ったの。まさに迫真、つてやつだった」

夜風さん。

夜風景。

私がこの人の演技を見てみると、胸の奥に湧き上がる感情。

これは一体、なんだろう。

「でもあれお芝居じゃないよね。一体どうやってるのアレ？」

この感情の正体が分からないと、私はきつと私自身を制御しきれない。

「お芝居にしては、不自然なくらい自然過ぎたから」

夜風さんはごく自然体で、口を開く。

「私も聞きたいことがあったの」

こっちの質問には答えなくて自分の質問はぶつけてくる、か。少し気に入らない応対だけど、ここは流しておく。

天使の微笑みを、意識して維持して。

「お芝居中の自分をフカンして、コントロールする技術。

”天使”さんなら出来るってきいたんだけど本当？ 幽体離脱」

何言ってるんだこの人。

「……は？」

オーディション組の中から、困惑の反応が出始めてる。

そりゃそうだよ。

「……ああ。」

私、実は天使じゃないから。

ぶかぶか浮いたり出来ないよ？」

私がおどけて、空気を和ませる。

こういうのはあんまり真面目に真意を測るより、こうして少し茶化せる空気にした方がいい。

よく分からない、意図が伝わりにくい発言の真意を知ろうとして問いかけを繰り返すと、結果的に空気が最悪のものになりやすいから。

しかし夜風さん、会話のリズムが独特だ。

手綱を握るのが難しいタイプかな。

”入ってる”時の英二君が、ちょうどこういう感じになる。

「あははは」

「何あいつ」

「夜風、お前今日も変だぞ。大丈夫か？」

ただ少し、怖くはある。

技術的な何かがあるわけでもなく、計算で何かしてるわけでもないのに、今のよく分からぬ一言で自然とこの場の中心が夜風さんに移った。

天然に自然でやってるなら、恐ろしい。

この人には、周囲の空気を中心となる才能がある。

さつきまで私だけを見てた人達が、今では夜風さんを見て、夜風さんの言動で笑い、夜風さんに声をかけている。

人の目を引く、というのはこういうことなんだよね。

「ごめんなさい、あなたなら本当に出来るのかもって……」

良く評価されるのは嬉しいけど、こういう奇妙な良い評価をされるのは初めて。

何を考えてるんだろう？

「あはは、なんでそう思うの」

「だって」

夜風さんが、まっすぐに私を見てきて、そして言った。

「テレビで観たあなたも。」

今日の前にいるあなたも。

とても綺麗で。

なのにどちらのあなたも顔が視えないから……人間じゃないみたいだなんて」

ねえ。

それ。

私に喧嘩を売ってるってことだよね？

そうして、私は。

———というか俺は、『人間らしい演技』なら大体好きですよ。一番好きです

少し前に英二君から聞いた一言を思い出して、苛立って、そして納得した。

私が、何を思っているか。

何故私が、この人に怒りを覚えたのか。

こんなにも私の胸の奥で———冷たい怒りと、燃え盛る冷酷さが、激しく沸き立って

いたのか。

他人に見える自分を、意識して作り続けた。

周囲の視線を把握し、理解し、自分の振る舞いに反映した。

撮影に使う全ての物を理解し、時に英二君の目を借り、カメラに映る自分を計算した。

新しいカメラが出るたびに、それを計算の内に組み込んだ。

SNSに掲示板と、エゴサーチで統計を作り、周囲に与える私の印象を修正し続けた。

仮面を作り、偶像を作り、千世子を作った。

最初の私がどこかに行ってしまうまで、私を作り続けた。

観客が望む私の姿を、作り続けた。

子供の頃から今に至るまで、ずっと、ずっと。

それでも、私には作れない私というものが、確かにあつて。

私は夜風さんにはなれなかつた。

大衆はそれぞれが違う姿を望む。

その最大公約数を突き詰めたのが私だ。

だけど私は、その過程でいくつもの”大衆の理想”を切り捨ててきた。

例えば、男。

私は男にはなれない。男を望む理想は実現できない。

例えば、高い身長と太い筋肉でアクションをこなす女優。

私の体格では、それは努力をしても絶対に不可能なこと。
例えば。

『人格』と役になりきるような女優』。

アリサさんがそういうのを嫌っていたというのもあったけど、私はどんな女優を参考にしても、夜風さんのような演技を身につけることはできなかった。

夜風さんの演技を何度も繰り返し見た。

何度も真似しようとしてみた。

繰り返し、繰り返し、自分の演技に取り込んでみようとしてみた。

けれど、録画一回分の演技すら無理だった。

エゴサーチの統計作業の最中で、何度も繰り返し見た言葉。

『百城千世子は役になりきれないんだろう。そこは本当に駄目だな』

大衆の望むものを統計にまとめ、常に自分に反映してきた私が、自分に反映したくてもできなかった唯一の声。

私がいくら欲しがっても、手に入らない唯一の技能。

仮面を作り心に被る私とは対になる、自分の心の素顔を改竄するような演技。

私は本当は、その演技技能を取り込んだ上で、理性的に制御して初めて完成する『スターズの天使』なのに……それが手に入らないから、いつまでも足踏みを続けている。

夜風景さんは、私が欲しいのに手に入らないものを持っていた。

そして私を、人間じゃないみたいと言った。

人間らしい演技が、さも当然であるかのように。

それは私の演技の否定。

夜風さんは私が欲しがっていたものを持っているのに、私が今まで積み上げてきたようなものを一切持たず、その状態で役者として独り立ちしている。

そんな夜風さんに、私の演技が人間じゃない、なんて言われたら。

私は。

私の演技は。

全て、夜風さんに否定されたも同然。

私が持つてるものを全部要らないとばかりに持つてなくて、私が持つてないものを持つてる夜風さんが『人間らしい』なら。

それが、コム・ハンクスのように、全ての役を演じられる俳優に繋がる道になるなら。

私なんて要らないってことになる。

夜風さんという『本物』が、私を『偽物』にしてしまう。

「……夜風、それはどういう……」

「え、あつ……ごめんさい、悪い意味じゃ」

真咲君に話しかけられた夜風さんが、弁明しようとし始める。
ねえ夜風さん。

私は知っている。

何千時間、何万時間かけても、手に入らないものがある。

ずっと前、芝居にかけた時間が一万時間を超えたあたりから、それを確信してる。

あなたが持つてるものが、きつとそれだよ。

私が身に付けられたものは、あなたにも身に付けられる。きつとね。

だって私の技能は、熱心に時間を費やせば身に付けられるものだから。

芝居が好きで寝ることも忘れるくらい没頭できる人なら、研究と分析で食事も忘れてしまいうくらい芝居が好きなら、誰にでも身に付けられる技術だから。

だから、あなたは私になれる。

私はあなたにはなれない。

私は、そう思うよ。

自分の心も素顔も書き換えられるあなたになんて、技術で成れるはずがない。

「ううん」

軽やかに、艶やかに、跳んで夜風さんの前に行く。

「！」

夜風さんの目を見つめる。

息を呑んだ夜風さんが、少し体を後ろに引いた。

「あなたの芝居はちゃんと人間だったよ。私と違って」

私には私が信じてるものがある。

だからあなたの在り方は、肯定できない。

私はあなたに、負けられない。

「幽体離脱が何のことかよく分からないけど、一つだけこつそりアドバイス」

『皆が望む百城千世子の仮面』を作ってきた私と、『自分が望む素顔の自分』に成ろうとするあなたじゃ、きつとぶつかり合うしかない。

「私達俳優の使命は、観客を虜にすること。

素顔を晒してありのままに演じることを人間と言うなら、だったら私は人間じゃなく

ていい」

私はきつと、あなたが好きになれないと思うよ。夜風景さん。

「これでいいかな？ 夜風さん」

でもね。

英二君があなたに惚れ込む理由は、十二分に分かったよ。

嫌になるほどに。

デスアイランド、開幕

大型の電気ポットと人数分の茶飲みを持って移動している俺の目に、百城さんの姿が映る。

あれ。

今日一応夜まで交流とか台本読み合わせとかする予定じゃねえの？

「お茶持ってきたんですが……」

「大丈夫だよ英二君。今日の顔合わせはこれで終わり、ってことになったから」

「あれ、そうなんですか」

「スターズの皆が来てないからこれを長引かせても皆の時間取っちゃうだけだよ、って監督にね」

「なるほど。百城さんの忠告を手塚監督が聞いた形ですか」

忙しすぎんだろスターズ。

オーディション組呼んどいて来ないとか、オーディション組視点クソ失礼なクソ野郎では？

忙しいんだからしょうがねえんだけどさ。

普段めっちゃ働いてるから仕方ねえつても分かるんだけどさ。

一人二人は、「疲れたから急いで事務所に戻って、サボってもいい顔合わせわざわざしたくない」とか思ってるやつもいそうだ。

何気に俳優を削るのが移動時間だ。

ぐつすり休めず、寝ても完全には疲れが取れず。

なのにロケ場所次第では、数秒のシーンを撮影すのに何時間も移動しなきゃならねえ。

たとえば仮面ライダージオウで主役の常磐ソウゴ演じるのは前野壮さん。親が芸能界では有名人で、1年間バレエを習っていたがあまり芽が出ず、高校は中退し、芸能界でデビューして一年でぐんぐん成長し仮面ライダーの主役になった『自分の道を見つけた元無才の天才』。バレエの身のこなしや、不思議な雰囲気の主役採用の理由だと言われている。この作品的に言うと、『天才になれたアキラや茜』タイプ。のライバルであり仲間として、二号ライダー・ゲイツを演じる引田岳引田さんは早稲田大学の現役大学生で、アクションもすっかりできるといふ逸材。前野さんが俳優になって一ヶ月か二ヶ月で仮面ライダーの主役となった天才なら、引田さんは俳優になって一年でドラマやバラエティに出演、二年目に仮面ライダーの準主役となった天才である。また、子供の頃からバレエしかなかった人間が俳優になって大成功した前野さんと、勉強や人間関係も

非の打ち所が無いほどに上手くやり、俳優に必要なダンス技能を十年以上で積み上げてきたなんでもできる引田さんは、そういう意味でも対になっている。さんは、朝から二時間かけてロケ地に移動、現地で五時間撮影待機、数秒のシーンを撮影し、二時間かけて帰宅。帰った頃にはもう夜中。

そして数秒のシーンだから、とテレビ本編では完全にカットされたとか。

うーんいつもののだ。いつものテレビ撮影のナチュラルな酷さ。

でもそういうこともあるから、仮に忙しい人達が『疲れた』でこういう顔合わせサボったとしても、ちよつと大目に見て欲しい。

大きな声じゃ言えねえんだよなこういうこと。

社会人はこういう顔合わせにもちゃんと出るのが礼儀みたいなどこあるし。

スターズの方が俳優として格上じやなきやチクチクなんか言われてただろう。

でも俺は……こう……裏方だから、ちよつと休ませてやってくれと思つちまう、スターズ俳優の心情的な味方なのである。

俳優の移動時間を仕事時間に含めて考える概念持つてねえ人は、死ねくたばれとちと思ふ。

「あ、そうだ。

夜風さんがさ、

『お芝居中の自分をフカンして、コントロールする技術。

”天使”さんなら出来るってきいたんだけど本当？ 幽体離脱』

って言うってたんだけど、英二君は意味分かる？」

幽体離脱？ んー、なんだろう。百城さんに変なこと言ってるねえだろうなあの人。

「黒山さんあたりの入れ知恵でしょうか……」

たぶんですけど、景さんのメソッド演技のコントロール法かと。

景さんの上から見下ろす俯瞰視点を後付けしたいんじゃないかと思えます」

「ああ、俯瞰ね。発音変だったから全然分からなかったよ」

幽体離脱、か。

おそらく『幽体離脱みたいに演じてる自分を外から見下ろしコントロールする技術だ』とか、黒さんが景さんに教えたんだろうな。

黒さんらしい。

何がらしいって、”分かる奴には分かる”ことだな。

物の例えとしちや良くねえが、色々読んだり聞いたりしてる俺みたいなタイプとか、黒さんみたいなタイプだと分かるつちや分かるもんだ。

ハリー・ポッターのスピノフ『ファンタステック・ビースト』でダンブルドアを演じたジュール・ロウは、撮影を「幽体離脱をしているような経験」と言った。

観客の目線と、登場人物の目線、その二つが重なって自分自身を俯瞰で見つめることで、奇妙で特別な感覚を覚えた、と。

時をかける少女2010年版。実写映画。2006年に大ヒットしたアニメ映画で主人公の声優を務めた中里依紗さんが、主人公を演じる。で主演を務めた中里依紗はかなりデープな亜種メソッド演技派だ。

しかも「演技の時はいつも幽体離脱したみたいになる」とも言っている。

冷静な自分と、役に入り込んでいる自分が分離してるから、そう見えるんだそうなの。

また、役者以外にも、今新潟で教授をやってる、元体操選手の六十嵐久人さん。

彼は1976年のモントリオールオリンピック・体操男子団体の金メダリストだ。

彼は金メダルを取った時、その人生で最初で最後の『幽体離脱』をしたそうだ。

演技をしている自分がいて、それを見下ろしている自分がいた、らしい。

『幽体離脱』って単語を使ってる有名人は、国内外に結構多い。

技巧の一つだから、役者だけでなく画家や体操選手なんかも同じようなことを言うてる。

だから自然と黒さんが幽体離脱って単語使って、それをそのまま景さんが使っちゃって、他の人にはあんま分からなかった……そんな感じか。

景さんが個性的だから、その現場見てねえのに実際に見たかのように分かる。

あの人は面白えからな。

百城さんも気に入ってくれてたら嬉しい。

「英二君は夜風さんのことをよく分かってるんだね。心が通じ合ってる感じ」

「いえ、そんな大袈裟なものでは」

「私じゃ全然分からなかったよ」

「強いて言うなら、少しずつでも仲良くなれたからでしょうね。」

最初は何考えてるのかはよく分かってなかったもので、いい友人になれたんだと思います」

「仲良いんだね」

「大事な友人です」

百城さんが微笑む。

俺の友人関係のことを自分のことのように喜んでくれてるんだろうか。

俺この最高純度の作り笑顔好きなんだよな。

可愛い。

メソッド演技の特徴である自然な笑顔は、人が日常の中で浮かべるごく自然な笑顔であり、だからこそ視聴者の共感を生む。

百城さんはその逆。

自然ではない造形物の方向性を持ち、だからこそ誰が見ても美しく可愛らしく見えるという最大の長所を持つ。

だから、とても良いんだ。

「景さんは百城さんから技術を盗みに来たんじゃないでしょうか。」

景さんはまだ未熟ですからね。

対し、百城さんは高度な技術の塊です。

多くの人から学び、多くの物から学び、自分なりに消化し、昇華しています。

百城さんの演技は有用なテクニックの塊ですよ。

俺から見ても技術力と表現力において、百城さんは業界でもトップクラスです」

百城さんは一瞬、俺の方をちらつと見た。

「———そっか、だから、私から盗みに来たんだ」

百城さんの瞳に、仮面を押しつけ熱い感情が浮かんだような気がした。

景さんの影響は、早くも顕れてるようだ。

さてこの影響は、どういう方向に流れて行くのかな。

「私は帰るけど、英二君はどうするの？」

「景さんをスタジオ大黒天か自宅まで送って行こうかなと。

ほら、百城さんは送ってくれる人ならたくさんいそうだし。

でも景さんは一人ですからね。最近物騒ですから。

百城さんもお気を付けてお帰りください。

あ、何かあつたら電話で呼んでください、何かあつてもすぐ駆けつけますから」

「……そっか」

百城さんが微笑む。

「英二君は優しいね」

「いえ、そんなでもないですよ」

百城さんの作り笑顔の下の感情は、俺にも読めねえ。

何を考えてるかたまりに察せても、すぐに読めなくなる。

ただ、なんだ。

この笑顔が好きだから。

この人にはいつまでも笑顔でいてほしいと、そう思った。

で。

「なんで俺これに呼ばれたんでしょうか、黒さん」

「頭数欲しかったんだよ。」

「お前デスアイランドに備えて仕事早く片付けすぎて、暇だったんだろ」

「何故かまさかのボウリング……」

「お前を前にボウリング連れてったのいつだっけ？ 覚えてねえや」

「数年前ですよ。あの時は楽しかったですね」

顔合わせが半端に終わった数日後。

「なんでか俺は、スタジオ大黒天と夜凧家合同のボウリングトーナメントに参加させられていた。」

黒さんの発想は俺にも読めん。

なんでだろうなあ。

「エージ、お前今は何やってんの？ デスアイランド」

「衣装合わせ中ですね。」

「俳優さん達の体型を採寸して、原作漫画の衣装を再現してます」

「女子の体型チェックか。いやらしいやつだな」

「えっ、ちよっ、違っ」

何言ってるんだこのヒゲオヤジ。

「そうよ黒山さん。英二くんは私の採寸する時だって、過剰なくらい気を使ってたもの」
「えっ……エージお前、冗談のつもりだったんだが、ガチでお触りに行ってたのか」

「違います！」

景さんの採寸の日だけ、女性皆休みだったんです！

俳優それぞれ皆さんスケジュールが違うので採寸の日が違うんです！

百城さんとか茜さんとかの時はちゃんと女性スタッフの力借りたんですよ！」

「結局触ったんじゃないか」

「ちが……いや、そうではありますけど！」

「英二君は採寸してる時、物作りの人の目になってたわ。

私の体のサイズからどんな物を作ってるかだけを考える、そういう目。

黒山さん、英二くんはそういう時に、変なこと考えるんじゃないと思うの」

「まあそうかもな」

「えっ」

「黒山さんは英二くんをからかいすぎよ」

「いやなんか面白くてよ」

こいつ！

しかし景さん、すっかり俺に慣れてんなあ。

なんかもう男として見られてる気がしねえ。

ペットの犬くらいの距離感じゃねえのこれ。

……いや、でも、戦友としては見られてるか。

黒さんの狙いは、多分景さんの人生経験増やして、メソッド演技の引き出し増やそう、とかだと予想する。

一緒に仕事してる時ならともかく、黒さんの視点は高すぎて広すぎて、どうにも俺じゃ読み切れんのだ。何考えてんだこのヒゲ。

「エージ」

「なんででしょうか？」

「ちよつと話がしたくてな。まあ気軽な話だ。今の段階の夜風の演技をどう思う？」

「景さんの演技……俯瞰を持たせようとしてる、って話ですか？」

「分かってたか。なら話は速い」

景さんと柊さんがルイ君とレイちゃんと遊んでるのを尻目に、俺は最近見た、スタジオオ大黒天で演技の練習をしていた景さんの姿を思い出していた。

「俺、あれを見て『ある崖上の感情』思い出しましたよ」

「なんじゃそりゃ」

「1928年の、梶井基次郎の短編小説です。」

見る自分と見られる自分。

崖の上から見下ろす自分と、崖の下で見下される自分の視点。

二つの視点を二つの人格と表現し、自分を見下ろす”上の自分がいる”ことを書いた話です」

「……ほう」

「『俯瞰の視点』で街を見下ろし人の営みを書いた、古典つてやつですね」

言いたいことは分かるよな。

なんで俺がそれを連想したのかも。

「この小説の評価って色んなのがあるんですよ。」

『自己を喪失した状態』とか。

『その果てに自我と世界が一体となっている』とか」

「小難しいこと考えるやつは感想も小難しくしていけねえな」

「ただこれ、そのまんま景さんですよ。」

景さんは演技の時、通常の自己を喪失します。

自分が演技をしていることすら忘れる、ということとは……」

「そうだ。『自分をコントロールできる夜風』がいなくなる」

「でも、もし。」

『幽体離脱』と言っていた、それができれば。

景さんは二つの視点を持ちます。

芝居をする自分と、幽霊のように上から自分を見下ろす自分に、意識を分けられる」

「そうだ。『全力で演技をする夜風』と……」

『全体を俯瞰して夜風景の暴走を制御し操る夜風』の二つが出来る」

「黒さんはどういう教え方したんですか？」

「目を瞑って天井に目を付けて部屋を見てみる、って教えた。

あいつは本当にややこしいな。指導が実に面倒だった。

こうでもしないと俯瞰視点も持てないとか、一技術教えるだけで「苦労だ」

「なるほど、天井に景さんの目を付けて、そこから見るイメージを与えたと……ん？」
待てよ。

「完全主観での俯瞰視点なんですか？」

「ああ」

小説とかには、一人称と三人称ってやつがある。

主人公の視点、二つの目玉に見えるものと主人公の思考だけで、構築されるのが一人称小説。

神の視点、全てを見通し把握する者の目玉に見えるもので、構築されるのが三人称小説。

今黒さんから聞いた話を引用し、たとえるなら、景さんの俯瞰視点は一人称で、百城さんの俯瞰視点は三人称だ。

景さんは”自分の目で見ているもの”の範囲を絶対的に逸脱しねえまま俯瞰してる。

百城さんは”視点を増やして周囲にあるものを空間的に把握して”俯瞰してる。

……これは。

なんだこの、特異性。

百城さんは多くの視点をイメージし、全ての視点から見えるものを把握し、周囲の全体像を把握する俯瞰。

景さんの場合は、『そこにもうひとりの自分を作る』俯瞰だ。

一人称を極めた結果の三人称。

主観性を極めたメソッド演技に客観性を持たせて、マルチな汎用性を持たせようとしてる、つてとこか。

見下されている景さんが演技し、見下されている景さんが暴走しそうになれば、見下

ろしている景さんがそれを止める。

これ出来たらメチャクチャとんでもねえメソッド演技者が出来るな。

海外でも客観性のあるメソッド俳優は強いが、景さんの演技深度を考えると、これが実現できたら映画史に残るレベルの演技が実現できるかもだ。

だけど、これ。

「さっきお前が小説について言ったことがピッタリハマるな。

上から見下ろすこの視点は、メソッド演技のあいつにとつて、二重人格に等しい」

「黒さん。分かってますよね、そういう認識で習得させたこの技術の危険性」

「ああ。夜風じゃなきや、習得させるのに躊躇したかもな。

最終的にこういう俯瞰しか習得できないってのが夜風らしい」

「演技している自分がある。それを見下ろす自分がある。

演技している自分を過去の感情と記憶で塗り潰す。

そうして、自分でなくなった自分を、見下ろす冷静な自分が制御する。

……これはもう、意識的にやっているだけで、二重人格と何も変わりません」

もしも、一瞬でも、景さんがこう思ってしまったら。

『あれ？ 演技をしている私と、見下ろしている私、どっちが私？』

そう思ってしまったら。

”戻って”こられない可能性が、グンと増す。

そもそもだな、景さんは役者になる前から演じることに夢中になると自分を忘れてしまいそうになってた、とか言ってる人だぞ。

どっちの自分が本当か分からなくなった経験が積み重なればなるほど、後々に自分の心にかかる負荷はデカくなっていく。

そういうもんだ。

俯瞰だつて、楽な技術じゃねえ。

つか、自分が見てる範囲を正確に認識するのは楽なんだ。

俯瞰視点は360°。全てを認識しなくちゃならねえが、人間が普通に立ってる時の視界は上側60°・下側70°・左右合計120°。つてとこだ。

三次元的に見りゃ、せいぜい俯瞰視点の1/10程度の情報しか認識してねえんだよ。

サッカーの司令塔なんかを見てると分かる。

司令塔は、頭を使うから務まる人間ってのがかなり少ねえ。

加えて、サッカーの司令塔にあたる選手は、他の選手と比べると明らかに首を動かしてフィールド全体を見渡す頻度が高えし、フィールド全体を見てる時間が長え。

通常視点が俯瞰視点の1/10程度と考えりゃ、俯瞰視点が処理する情報量は10

倍、頭の負担も10倍ってことだ。

それが常に出て来る百城千世子は、だからこそこの世代の頂点たりうる女優なんだ。だからこそ俺は、もうずっと何年も、あの人が演技をするたびに、目を奪われている。足元に何が有るか。

カメラがどの範囲を撮影範囲に収めているか。

周りの人はどこに立っていて、どう動いているのか。

その他諸々。

それら全てを頭の中で処理しながら行動するのは、かなり頭に負担が来る。

カメラの前で不自然にならないよう、周囲全てを目で捉える所作を心がけるのも、かなりやっべえ負担だ。

完璧に周囲全てが視えてるレベルの俯瞰技能になると、百城さんクラスじゃねえと努力してもおそらく習得は不可能だろう。

正直に言うと。

この分野で景さんが百城さんに勝てるとは、全く思わねえ。

まあだから正直に口には出さねえんだけど。

あれはもう、百城さんだけの異能に近い。

百城さんが教えても後進が習得できねえなら、そりゃもう技術の域を超えてんだよ

な。

景さんがそいつに無理して追いつこうとすれば、二重人格による障害が発生しかねない。

「悪いなエージ。撮影にまで俺はついていけねえんだ」

「景さんを見張っておけ、ですよ。分かりました」

「いや、お前はお前がやりたいように好きにやれ。」

何か迷ったら心に従え。たぶんそいつが、一番上手く噛み合うだろうからな」

「? わかりました」

口は悪くてぶっきらぼうだが、この人から何かしらの形で夜風さんのサポートを頼まれるたび、この人にちゃんと認められてる気がする。

なんだかんだ俺は、昔からこの人にある程度認められてたのかもしれない。

そして今、新たに認められてる最中なのかもしれない。

確証あるわけじゃねえのが、ちよつとあれだが。

「エージくん、ちよつといい?」

「はい柊さん、なんででしょうか?」

「なんかこの辺のが新しいボールらしいんだけど、どれが良さそうかな」

柊さんに呼ばれてそつちへ。

ボール選びか。

しかし良いなこのボール。

これだけで良い怪物が一体作れそうない素材が並んでる。

あれこれカーバイドこの場合は炭化カルシウムのこと。ボウリングにおいてはテクスチャー系と呼ばれる表面素材。ボールの表面に使うと、いい感じに曲がるボウリングの球になる。？ カーバイドだな。

タングステンカーバイドの超硬カッタータングステンカーバイド、コバルト、ニッケルなどを高温高压で固めた合金。車が切れる。特撮ヒーローの武器に使えるレベルの工作刃物。つて、これより硬いのは自然界にはダイヤモンドくらいしかねえのに、硬いだけでなく強度も高いめつちや優れた刃物なんだよな。

そしてこいつは、炭化タングステンカーバイドタングステンカーバイドならぬ、炭化カルシウムカルシウムカーバイド。

ボールの説明にはカーバイドとしか書かれてねえが、持てば分かる。

表面が炭化カルシウムか。

ふむ。

いいなこれ。

これで工作してえ。

でも柊さんにおすすすめすんなら別のがいいか。

「この辺がいいんじゃないでしょうか」

「初心者用？」

「安価な初心者用ボールつて中に特殊なウエイトブロックが入ってるんですよ。

指で掴むところの周り辺りですね。

特撮の武器造型と同じです。手元を一番重くしておくが一番扱いやすいんです」

「へえ、そうなんだ」

逆に手元が軽くて剣先が重いかは、無茶苦茶扱いにくくなる上、ちよつとした重量でも使い手が振り回されるからアウトだ。

「それと、初心者用ボールは軽いです。

だから重量の調整も利きにくいんですよ。

指を入れる穴の分だけ軽量化して重量が偏っちゃうこともあるんですよ。

そういう場合、指の穴の分だけ足りなくなった重量を、このウエイトブロックで補うんです」

「そう言われると、なんとなく理に適ってる気がするね」

だからこういう初心者用ボールは、指を入れる穴の周りが重いわけなんだ、が。

「ただやっぱり、重心が中心に寄ってないんですよこれ。

なので初心者向けボールは曲げにくかったり、逆にまっすぐ行かなかつたりするんで

す。

中級者向け以上のボールは中心にコアが入ってます。

これがアンバランスな重心を作って曲げやすくしたり、逆に真っ直ぐ行かせるわけですね」

「軽い、重い、くらいしか気にしたことなかったな」

「特撮もボウリングも同じです。」

『重心』のことを考えない仕事は、絶対にしっぺ返しが来ます。

ライダーのてんこ盛りスーツや怪獣スーツで、重心が上すぎて転んだことが何度あったやら」

重いスーツを着て転んだら立ち上がれないってのは、重心が変なところにあつたからっていうのも原因のひとつなのだ。

重心大事。

同重量でも重心次第で、まるで違って感じるわけだぜ。

「ほら、こう持って振ってみると、内部重量の偏りが手に伝わってくるでしょう?」
レンタルのボールを持って、右に左に振って見る。

右に振った時と、左に振ったときで、両手にかかる荷重の具合が違う。

中身の重量バランスがアンバランスに仕上げてあるってことだな。

この微妙な違いこそが、このボールの中身を判断する基準になるってことだ。

終さんは、ボールを持って振りながら、微妙な顔をしていた。

「エージくん、わかんない」

えー。

「まあともかく。今ボールを触った感じ、ボールは表面処理なんかも気を使ってますよね」

今触れたカーバイドの感触から、感覚的にだが色々分かった。

「摩擦が強ければ回転をかければ曲がりやすくなります。」

摩擦が少なければ、曲がるタイミングを手前ではなくピン前に調整できます。

泥道でカーアクションさせる時、タイヤの摩擦を計算するのと似たようなものですね」

「エージくんは摩擦計算とかもよくやってるよね」

「計算は一番大事ですから」

その時、ボールを選んでいた景さんがバツと振り返った。

「え、私が一番大事……?」

「数字の計算です!」

「あ、そうなんだ」

なんだかなーもう。

平然としてる景さん見てると、一瞬ドキつとした俺の方が情けない気分になる。クソが。

少し周りを見る。

黒さんはルイ君とレイちゃんと話してるな。

何話してるんだろうか。

「お前らの姉ちゃん、恋人に手を握られてドギマギしてもすぐ冷静な顔しそうだな。

自分を制御できないくせに、自分を塗り潰すのは得意ときた。

今の自分を忘れて、別の感情持つてる自分を演じられるってそこまで便利だったか」

「クロちゃん、どういうことー?」

「よくわかんない」

「分かんないやわかんねえでいいんだぞー」

仲良さそうに話してるし、あつちは放っておいていいか。

ボール選びながら、ボールの素材の分析でもしてみよう。

「柘さん、触れてみてください。」

ほら、今のボウリングのボールの主流素材はウレタン現在のボウリングのボール素材の主流は、リアクティブウレタンとプロアクティブウレタンとも言われている。ただ

し、日進月歩であり、様々な混ぜものがされたウレタンが使われている。みたいですよ。仮面ライダーや戦隊のスーツで使ってるやつですね。

見てくださいよこの表面。

ガラスバルーンFRP（繊維強化プラスチック）販売店などで取り扱われるガラスビーズの一種。非常に軽く小さく、一つが50マイクロメートルほど。物質整形の時に混ぜ込むことで、軽くしたり、断熱効果を高めたり、摩擦力を高めたりできる。1968年のアメリカ特撮SF映画『2001年宇宙の旅』では、これのみっしり貼った板を反射板に使用した。を使ってますよ。

軽くする目的じゃないのなら……摩擦調整でしようね、おそらく」

「エージくん何か飲む？ 何が良い？」

「あ、すみません、紅茶でお願います」

この人途中から聞いてなかったなこれ。

終さんから紅茶を貰って、ボウリングが始まる前にそっと床に触れる。

ボウリングの床には、オイルが塗ってある。

非力な人の力でもボールを滑らせるため、そしてボールの摩擦から床を守って長持ちさせるためだ。

僅かなオイルが、俺の指先に付いた。

広いレーンに垂らされたオイルの総量は、おそらく15 mlから30 ml。大きじ一杯から二杯くらいのオイルを薄く広げてる感じだな。

指についたオイルを、指先をこすって性質を見切る。

粘度は30未満……29? 30?

そのくらいか。

スマホでちよつと検索をかける。

俺はスマホを扱うのがそこまで得意じゃねえが、オイルの種類はだいたい分かった。

メジャーなオイルのナビゲート(粘度29.6)、あるいはプロデューサーMV(粘度2

9.7)あたりか。

これなら、摩擦係数も十分に計算できる。

俺はこの中で唯一、ボールがどう滑るかを計算できるってことだ。

完璧だな。

俺が誰よりも状況を知っているというこの有利。このアドバンテージ。

このボウリング……勝った!

「そうだ、エージ」

? 黒さん、どうした。

「なんででしょうか?」

「お前デスアイランド終わったらスターズ専属になるんだってな。

じゃあ俺達とは仕事できなくなるわけだが、何か考えてんのか？」

「今のところは何も言えませぬね。」

アリサさんからは多分景さんを絶対に手伝うなって言われるでしょうし。

ぶつちやけて言っつてしまえば、デスアイランド後にどうなるか見えてないんですよ」

「事実上の身売りか。……実はそこまでするとは、思っつてなかつたんだがな」

「罪悪感でも覚えてるんですか？」

黒さんは何も悪くないじゃないですか。

俺が自分の判断で選んだことですし。そのおヒゲに似合いませんよ、そういうの」

「何がヒゲに似合わないだ、このバカガキめ。前ほど自由に仕事できなくなるだろうに」

「なるようになりませよ。きつとね」

ゴン、と音が鳴る。

なんか俺の後ろで、景さんがボウリングの球を落としていた。

あつぶねえな！

自分の足に落としたらどうすんだ！

心配させんなや！

つて、ああそうか。景さんにも言っつてなかつたっけ、デスアイランドが俺達最後の一

緒の仕事になるかもしれん可能性。

「お……お別れ？」

英二くんのお仕事これが最後？

いえ、そもそも、身売りつて……」

「深く考えないで大丈夫ですよ、景さん」

「深く考えないと大丈夫じゃないことだと思ふの」

「そうですかね」

「そうよー」

なんだかなー。重く受け止められると、俺が申し訳なくなってくるんだが。

変に気を遣わせてごめんなさい、みてえな。

ん？

おいヒゲ。

その悪巧みしてそうな表情はなんだ。

「夜風、お前が大女優になりや、契約更新のタイミングで英二を引っ張り込めるかもな」

「！」

「だってそうだろ？ 個人の職人はより良い条件に走るもんだ」

何吹き込んでんだこのヒゲ！

「黒さん、あのですね……」

「あのババアもお前を一生縛り付けておくつもりもねえだろ。」

お前が出て行きたいと思った時、さらっと出て行けるように雇用でも契約でも考えるはずだ」

む。

……それは、そういう気もする。

あの人は何もかもギチギチにコントロールしようとするタイプじゃねえ。

アキラ君のことも最初は俳優辞めさせようとしたが、それも最初だけで、途中からは社長として妥当な手助けをしつつ、自由に俳優をやらせてた。

あの人にはどこか、完全に徹底しきれない甘さみてえなものが見える。

「つーわけだ夜風。」

お前が大女優になりや、スターズに身売りしたこいつを引つ張り込める。

大女優の財布なら無理矢理契約切らせて、違約金払ったりもできんだろ。

身売りしたこいつをスターズから取り戻せるかもな、もしかしたらの話だが」

へーい黒さん。

あんた豪快な話好きだな。

俺その話にも、”大女優になった夜風景が正面から星アリサを殴り倒す”ってイメージ

が付随して仕方ねーんだけど。

「囚われの王子様を取り戻してみろよ、野猿みたいなお姫様」

凄え例えしてきたな！

あれ、何か気合い入った感じっすね景さん。

「わ……私、頑張る！ 英二くんの自由は、私が取り戻すわ！」

「いや、あの、そんな、気負わなくていいですよ」

「あと誰が野猿よ！」

くつくつく、と黒さんが笑っている。

「楽しんでます？」

「楽しくないわけねえだろ」

この人マジで人生楽しそうだな。

これだから天才肌の映画監督ってやつはもう。

「さしあたってはデスアイランドで一番になればいいのかしら、英二くん」

「主演百城さんなので、一番目立つのも一番活躍するのも無理だと思います、景さん」

「墨字さーん、さっさと始めましょうよー」

「おう。レーン二つに人分けりゃいいよな、これは」

かくして誇りと意地のポウリング大会が始まった。

二つレインを使つての、小さな背丈の双子も加えた六人によるバトルロイヤル。

小さい子二人がいる以上ドベはないが、他三人は強敵だろう。

俺は圧倒的有利。

既に分析を終えた俺は地の利を得ているアナキンは死ぬ。

最大のアドバンテージは、もはや俺の手の中だ。

そして！

結果は！

「英二くん。一番ボールに詳しくて、オイルにも詳しくて、それでなんでドベなの……？」

うるせえ。

「にーちゃんへたくそー！」

「にーちゃんへたねー」

うるせえ！

そしてまた、数日が経ち。

衣装合わせが終わったら、その翌日から撮影に入るのがスケジュールだ。

俺達のような裏方や、スターズ組と違ってスケジュールに調整が利くオーデイション組が、先に撮影に入ることになっている。

かくして、島の土を踏み。

「さて、俺の腕の見せどころだ。

台風が来る前に撮影を終わらせるため、どこから手を付けるかな」

俺は、島を照らす太陽を見上げていた。

「鳥山さん、源さん、茜さん、景さん……皆いるな、よし」

今日から約一ヶ月。

俺達はここで、映画を一本撮影する。

「気合入ってるね、二代目」

「手塚監督」

「映画の制作費でも見て気合いが入ったかな？」

「6億円でしたっけ？ いえ、このくらいならそんなに」

「慣れてるねえ。そのフラットさは頼もしい」

「目標興行収入18億でしよう？ 気は抜きませんよ」

一般にも、この辺の話を知ってる人はそこそこいる気がする。

西宝の取締役の人が語った大作基準が、『制作費10億円で興行収入30億』。

他にも西宝の漫画実写化の脚本の人が、「制作費は興行収入の1/3を目安にする」「制作費のだいたい三倍の興行収入で黒字になる」と言っている。

制作費の三倍の興行収入がその映画の成功ライン、だってことだ。

そしてそれは、手塚監督が常に制作費の三倍の興行収入を叩き出してきた傑物だったことを意味する。

この人が作った作品、全部当たってるからな。

漫画実写化も、そうでないのも。

デスアイランドの制作費は6億円。

黒字ラインは興行収入18億ってことになる。

興行収入18億ってどのくらいだ？

今年の2018年と言えば、デッドプール2、キングスマン、劇場版ヒーローアカデミア以上。

クレヨンしんちゃんとかがちょうど18億くらいだったはずだ。

去年の2017年と言えば、最後の騎士王、ダンケルク、クレヨンしんちゃん以上。

カーズとか、ドクター・ストレンジとかが18億くらいだったはずだ。そこまで行って初めて、この映画は成功になる。

そこだけ見ると、絶対に不可能な高いハードルにしか見えねえ。

だが手塚監督は、こういうハードルをいつも越えて来た。

上がボンと投げた人気原作と、上が用意した売り出した俳優を使って、最終的にそいつを売れる映画に仕立て上げちまうんだ。

この人は今回もそう越えて行くと信じて、俺は全力を尽くすだけだ。

「監督！ ヤバいです！ ヤバいですって！」

プロデューサーが撮影協力社の展開要望、今になって送ってきました！

ねじ込みですよねじ込み！ 脚本にない展開がねじ込まれてきたんです！」

「オツケーオツケー、承ったと言っついて。」

あ、二代目。ちょっと来てくれるかな、君に結構無茶言うと思うから」

……。

クソアー！ 全員死ね！

女の子が決して手に入れられないすてきなもの

デスアイランドのあらすじは、こうなってる。

事件は突然だった。

修学旅行中の24名の生徒を乗せた飛行機が、嵐に遭い海に落ちた。

無人島の浜辺で目を覚ました12名の生徒達の傍らには、海に流されたはずの各々の

スマホがあり無人島にあるはずのないWi-Fiが繋がっていた。

しかし、なぜかすべてのアプリは起動せず、島外への連絡手段は皆無。

唯一起動するアプリは、インストールした覚えのないものだった。

名称は『death island』。

アプリ『デスアイランド』からは定期的に奇妙な指令が下る。

理解の及ばない事態の連続に混乱する生徒達だったが――

主人公カレンの先導の下、『デスアイランド』が示した地点、森林の中の不自然な校舎を前に、残りのクラスメイト12名と遭遇することになる。

ここからクラスメイト24名でのデスゲームが始まることを、彼女達はまだ知らなかった。

生き残るまで殺し合え！

つてな感じだ。

ネタバレすると、最後まで生き残るのは主人公のカレンだけ。

こいつを百城さんが演じることになる。

他の俳優は時に劇的に、時に無残に、時に無意味に、時に悲痛に死ぬのが役目だ。

他の人間が悲しみ、狂い、人殺しを始め、友人同士で殺し合う中、最後まで諦めず誰も殺さず生き残ろうとする……それが、主人公のカレン／百城さんの役目。

言い換えるか。

最後まで『綺麗であること』が、彼女の役目だ。

少し海外の映画の王道も混ざるが、これは「生き残る女主人公」や、「最後に死ぬ女主人公」の王道と言えるものでもある。

男との性描写がなく。

デスゲームに流されず。

最後まで殺し合いにのらず。

清く優しく美しく、人間らしさを失わず。

そうして最後まで生き残るっていう、お約束の人だ。

キャビン英二が以前オススメしていた映画。たくさん映画を見てきた人ほど楽しめる

る熟練者向けの傑作。的に言う『ホラーで処女は最後まで残る』ってやつだな。

だからこそ、綺麗で清廉なイメージを持たれてる百城さんこそが相応しい。

そういう人間が最後に生き残るのは、観客が納得できるからだ。

他人の足を引っ張る奴や、平気でクラスメイトの友達を殺す奴が最後まで生き残ると、普通の倫理を持った観客はもやつとする。

話の出来が良くてももやつとして、ちよつと最高評価しなくなる。

逆に脚本の出来にアラがあつても、視聴後感が良ければ観客は最高評価を下すことが多い。

観客は『展開で驚かせてほしい』とも思ってるが、『生き残ってほしいキャラに生き残ってほしい』とも思ってるんだ、こういう作品では。

生き残ると思わせたい奴を殺せば、観客はショックを受けて、先が読めなくなつて、映画を見ていてドキドキする面白さが出る。

生き残ると思わせたい奴を殺せば、観客は応援してるキャラが減つて、もう誰が生き残ろうと死のうとどうでもよくなつて、作品への興味が薄れる。

デスゲームつてのは意外と難しい。

書くのはそんな難しくねえし、びっくりさせるのも難しくねえが、読んでる人観てる人を最初から最後まで夢中にさせるのがクツソ難しいんだ。

その点、原作のデスアイランドは凄え。

流石大ヒットコミックだ。

ちよつと抽象的な表現すると、読者全員に右向かせてから、左から奇襲する、つていう意識誘導テクニックとかがかなり上手え。

意識誘導の計算と、読者の意表を突くセンスが群を抜いてる。

その上で、読者の予想は裏切るが期待は裏切らない、読者の予想の裏をかくことだけ考えて話がしよぼくなるっていう失敗が無い、読者をがっかりさせないバランス感覚を持つてる。

これは『デスゲームものを書くのに最も必要なもの』なのかもしれん。

だから、まあ。

この映画化つてのは、割といい一手だとは思うんだが。

原作と脚本見比べて、俺はちよつと首をかしげた。

ベンチに一人座る手塚監督に、俺は一人で——皆に聞かせづらいことも聞き出すために——話しかけた。

「手塚監督」

「なんだい？」

「景さんの役のケイコってキャラ、監督が脚本変えて入れたらしいですね」

「そうだね」

露骨すぎねーか監督。

景でケイコって。

「原作のメインキャラクターは24人です。

だから百城さんが一般に募集かけた時も24人でした。

ケイコはオリジナルキャラクターです。

だから……原作のキャラクターが一人リストラされて、その分シナリオが改変されてる」

「そうだね」

「俺が見た限り、初期案の脚本の出来はさしていいものじゃありませんでした。

これによって脚本が改良されたか、更に悪くなったかは分かりません。

ただ原作キャラを一人削って、オリジナルキャラクターを一人入れるというのは、そ

の」

「僕らしくない?」

「そうです」

「いいじゃない。たまにはこういう冒険して見るのも楽しいでしょ?」

手塚監督は、原作ファンも俳優ファンも取り込んで、一定以上の売上を出すことに長けている監督だとも言われる。

オーデイション組に原作に忠実な演技、スターズ組に俳優ファンを狙った演技を指示してるところからもそれは窺える。

が。

景さんだけが、そのやり方の中で明確に浮いている。

オリジナルキャラクターが、原作のファンに受けるもんか。

景さんはスターズ所属でもねえから、俳優ファンの動員も見込めねえ。

原作ファンが怒り狂うのが分かってても、映画オリジナルキャラとして名が知れた俳優や芸能人をぶっこむのは、そいつを目当てにした客の動員を目論んでるからだ。

だけど景さんは、今のところそういう要素が全くねえ。

この映画の撮影終わってから公開までの間に景さんが舞台演劇で大活躍するとか、そういうことでもねえ限り、宣伝効果は完全に皆無だ。

というか、キャスト発表の時点で原作ファンが一定数離れちゃうのは間違いなくある。

原作キャラリストラでオリキャラ追加だぞ。

そりややべーよ。

手塚監督はこっからでも黒字に持っていける自信があるとは思うが……いや、思いうえが。

もし、そうでないのなら。

「俺達お互い、景さんに強く影響されてて苦労しますね」

「……」

手塚監督は、無言の返答。

「……」

計算の上でやってるわけじゃねえ、か。

景さんを見て……強烈に影響された人が、ここにまた一人。

えーじゃあどうすんだこの映画、どうバランス取ってくんだ。

「映画の舵取りは、何か考えがあるんですか？」

「ま、それは追々分かるよ」

「ふむ。」

「ごまかしてるが、俺には言えないことってところか。」

俺が知ったら俺が邪魔してくる事柄とかか？

俺の地雷は……結構あるな。百城さんも景さんも茜さんも一同に介してるし。

和歌月さんや堂上さんもいる。

亜門さん達とか石垣さん達とも仲は悪くねえ。

手塚監督の目論見がどこにあんのか、いまいち読めん。

分かってんのはこの撮影の中心に百城さんが据えられてることと、手塚監督が景さんを何やら気に入ってることくらいか。

「安牌だと、思ってたんですけどね。」

漫画原作は、基本は既定のストーリーラインに既存のキャラを乗せるものです。

どのキャラを演じるにしても、景さんがそのキャラに成り切れればよかった。

景さんは最高のクオリティで、そのキャラの皮を被った自分を演じきっていたでしょう」

「だろうね」

「でも、オリジナルキャラクターです。」

景さんがキャラを掴むために参考にできるものは、ぐつと減りました。

原作の漫画を読んでそのままそのキャラに没入する、つてことができなくなっただけです」

「かもね」

「そしてこの脚本。」

明らかに景さんの性格に合わせた当て書きです。

つまり、景さんに役の演技をさせるのではなく、役を景さんに合わせた。

これじゃまるで、作品の都合ではなく、景さんの都合に合わせたみたいですよ」

「ははっ、そりゃ考え過ぎじゃないかな？」

「……」

ここまで景さんに合わせるのはなんでだ？

監督の意図が見えねえ。

いや、そもそも。

景さんに作品の方を合わせた結果、この監督の望む何が得られるってんだ……？

「失礼します、手塚監督。先に撮影場所に行ってます」

「よろしくねー」

まいったな。

監督の指示に従わねえといけねえのに、監督の指示を盲信してたら痛い目を見そう
だ。

デスアイランドの舞台は、北マリアナ諸島北の無人島だ。

だが、そんなところで撮影なんて出来るわけがねえ。

こういう無人島撮影の場合、どこかの海の海岸線と山を組み合わせたリ、国内の南の島を部分的に使って撮影したりする。

デスアイランドは後者だな。

国内の南の島を部分的に撮影して、後は俺と俺の下に付けられたスタッフがああだこうだと工作して、無人島にいるかのように観客に錯覚させて、この作品は完成するってわけだ。

こういう撮影場所として有名なのは、長崎県長崎市の端島——通称軍艦島とかかね。

いいよなあ軍艦島。

ちよつと動画とかググるだけで最高の撮影スポットだって分かる。

冒険者カミカゼ1981年日本映画。撮影ロケ地に軍艦島を使用。日曜朝ヒーロー番組の西映が撮影し、後にニチアサに多くのスーツアクターとアクション俳優を排出した大御所JAEの創設者・万葉真一が主演であるなど、現代のヒーローものの源流が多く詰まっている。車アクションやハンググライダーアクションなど、多様なアクションが十種ほど詰め込まれた冒険アクション活劇映画。とか0072012年イギリス映画、『007 スカイフォール』のこと。ただし爆薬や俳優の安全を考慮すると、軍艦島

での撮影は危険であると判断され、実際は軍艦島でロケハンを行い、軍艦島を模したセットをロンドン郊外に作成して撮影された。そのため、軍艦島で撮影が行われると報道されたものの、実際は軍艦島での映画撮影は行われていない。とか進撃の巨人実写映画、進撃の巨人 ATTACK ON TITAN。この映画もまた、軍艦島をロケ地に使用している。みてえに、軍艦島撮影に参加してみてえよなあ。

ああでもなあ。

クソが。

軍艦島って、2015年に世界遺産登録されちまつてんだよなあ。

だから撮影が、撮影スケジュールが、そもそも企画段階で面倒臭えってなって通らねえ……クソあ……軍艦島は一般の知名度はそう高くなくても最高の撮影ロケ地だっていうのに。

ただなあ。

世界遺産登録のために頑張ってた人達のことと思うと、”よかつたな”って気持ちだが、世界遺産登録されたことに対して湧いて来ちゃうんだよな。

ユネスコが「軍艦島を世界遺産登録するよ」って勧告したら韓国のそういう人達（婉曲表現）とか、韓国大統領とかが猛烈に反発してきたから。色々苦労した人もいるんだ。

本当よく頑張ったな世界遺産登録しようとした人達。

おかげで実写進撃の巨人の前編公開が2015年8月、後編公開が2015年9月、
んで軍艦島の世界遺産登録が2015年7月って感じになった。

すげえなこの滑り込みセーフ！

それでも私欲全開で言いてえ。

俺が撮影するまで、そういうゴタゴタが続いてほしかった……！

せめて、一度くらいは、あそこで仕事やりたかった……！

ちくしょう。

世界遺産登録後にあそこで派手に撮影する方法ねえかな。

無理か。

爆薬とか使ったら全部崩れそうだしな……うん。

対し、この南の島はいい。

撮影許可も出てるし、そこそこのいい廃墟に森に海がある。

面倒な申請くぐり抜ければ爆発物の使用もOKと来た。

自由度の高い島はともよろしい。

まあ島での爆破って実際あんまりたかねーけどな。

本土ほど地盤とか頑丈じゃねえし。

爆音は島中に響くから苦情くる可能性高えし。

南の島の多くは観光地になつてゐるから、観光客とかが爆発音でビツクリして苦情言つてくる。パターンを嫌がつて、現地の人か、そもそも許可くれねえこともあるし。

大人しい撮影すんのが一番だ。

そんなことを、撮影中に、ふと思つた。

目の前には、島特有の不揃いな地形による8mほどの壁の如き斜面……いや、もう背が低いだけの崖か、これなら。

隣には手塚監督。

周りには俳優の皆様方。

少し離れた場所では、カメラなどが準備されている。

「このほとんど直立の壁みたいな崖を、スタントマンに走つて登らせたいんですか？」
「そういうこと。」

駆け上がつて足回りを撮りたいんだよね、リアルに。

カメラがスタントマンのすぐ後ろをついていきながら、胴と足元を撮る感じで。

それを最終的にカット繋いで、アキラ君が走つてよう見せかける予定だね」

「監督。通常の撮影機材でここを撮るのは無理です」

「そうかな？」

「そうですよ。どうやってカメラにスタントマンを追いかけさせるつもりですか？」

テレビで走る人の映像を見たことが無いって人はいねえはずだ。
じゃあそういうのはどう撮影するのか？

大まかにわけて、普通の地面を走る人を撮影するパターンは、レール車型とタイヤ車型がある。

レールの上に車を乗せて、その上にカメラを載せるか。

カメラカーを走らせて、その上にカメラを載せるか。

この2パターンがほとんどだ。

現代なら、タイヤでどこでも走るカメラカーの上に運転手を一人、カメラマンとカメラマン補助を一人ずつ乗せた三人体勢が一番メジャーかね。

だけどな。

こいつじや斜面は駆け上がれねえ。

斜面を駆け上がる人間をカメラで至近距離を保ちつつ追う、なんて無理だ。

レール車もタイヤ車も平面しか走れねえんだよ。

かといって、カメラマンがカメラ持ったまま後ろをついて行けるわけもねえ。

カメラ重いし、確実に落ちる。

カメラを接続して、電動で動かせる機械の腕をカメラクレーンって言うんだが、これも動く速度はかなり遅え。

カメラは重いから速く動きすぎればカメラクレーンが折れたり、カメラが吹っ飛んで行ったりするし、カメラに殴られて怪我人が出かねえからだ。

カメラクレーンでスタントマンさんの後追っかけるのも、速度不足で無理。

落ちるシーンなら楽なだけだな。

人も物も、下方方向に移動させるだけならいくらでも方法はある。

ただ、駆け上がりさせるってなると、どうにもな……妥協してもらいたいところだが。

「カメラの角度を85。ほど傾けて、スタントマンさんを……」

いえ、平地を走るならスタントなしで、アキラさんが走っているの撮っては どうでしょう。

カメラを傾ければ地面は壁や崖に見えます。

重力の向きはアキラさんの体に固定帯を付けて20kg分ほど引き上げれば表現できますよ。

あえてこの崖を登るように撮らなくても、撮り方は他にいくらでも……」

「でも、リアルさは大いに損なわれるよね」

「……」

痛いところ突きやがるぜ、手塚監督。

「そこはあんまり妥協したくないかな。」

「……」
ここのリアルさが、映画の評価に繋がってくると思うから

そう言われると納得するつきやねえ。

元より決定権があるのは俺じやねえ、監督だ。

“こうしよう” って決めんのも監督。

やるだけやって” これは駄目だね” って決めんのも監督。

俺は従うだけだ。

この人が望むものを作る、器用な手足でいよう。

さすてどうすつかな。

こういう撮影は、撮影現場ごとに現場ごとの対応してることが多いんだよな。

だから安定したやり方のフォーマットがねえ。

西映や西宝の倉庫あたりなら使えるものあるかもしれないねえが、この撮影はスターズ主催で、多分倉庫にすら使えるもんはあんまねえ。

経験豊富な西映のおっさんスタッフチームみたいに、『こんなこともあろうかと！』つて車に色々積んでたもんから何か引つ張つて来てくれるつてこともねえ。

あんのは普通の撮影機材だけか。

どうすつかな。

今あるもの、今あるもの。

俺が出来るのは物作り。

一から作るとしたら何で、組み合わせるとしたら何だ？

触手みたいに、アキラ君の代わりに壁を駆け上がるスタントマンの後を追えりやあな。

……いや、待てよ。

触手？

西宝では確か、怪獣の触手を表現するために、ゴム製の触手の中を玩具の電車レールを通してたはずだ。ガメラのイリスとか。

レールはしなるから触手表現に最適で、長く伸ばすのも容易、そして地面に敷くだけじゃなく上に向けて伸ばすことだってできる。

この崖の斜めな地面表面にレールを敷くか？

いや、無理だ。

今回持つて来たレールじゃ、このデコボコした壁に近い急斜面に設置なんてしても、その上をカメラなんて走らせられねえ。

レールが固えからデコボコ斜面に沿った固定ができねえし、デコボコのせいで地面とレールの間にデカイ隙間が何箇所も出来ちまう。

地面自体はそこそこ柔らげえから、カメラの荷重がかかったところで、地面のデコボコに応じた振動がカメラに伝わっちゃまう。

……木だな。

斜面の横の木だ。

いい感じに木が並んでるその側面に、レールの平面をペタツと貼り付けるように固定。

その上をカメラを走らせりゃ、後方斜め上からアキラ君の代理のスタントマンを撮り続けられるだろう。

カメラ用のスライダレールは、カメラをネジやボルトで固定できる。

カメラは壁走りみてえに木の側面に敷かれたレールの上を走ることになるが、これなら落ちる心配もねえだろう。

木の表面にレールを敷いて、カメラが壁走りできる足場を作る。

これならカメラの荷重も『木の表面を滑り落ちる方向に』かかるから、余計な振動がカメラに伝わることもねえ。

後はこのカメラを上を持っていく動力の問題くらいか。

モーターじゃちよつとすぐには用意できねえ。

第一生半可なモーターじゃ馬力が足りねえ。

だとすると、もう少し頭捻る必要があるが。

……うーん、そもそもの話、レール設置がクツソダルそうだ。

「朝風君、あまり無理はしないようにね」

ただなんか、完成映像でのシーンでは、壁を走って駆け上がっていることになっているアキラ君が、俺にそんなことを言ってきたので。

「大丈夫です。なんとかかしてみせます。アキラさんを観客に魅せてやりましょう」

つつい胸を叩いて、堂々と言い切っちゃった。

さーてどうするかバカな俺。

もう後には引けねえぞ。

とりあえず頑張つて、アキラ君（のスタントマン）が映像の中で駆け上がる予定の少し横、木が並んで生えているところをよじ登っていく。

下から上に登りつつ、レールをベルクロ面フアスナーのこと。財布のマジックテープなどと構造と仕組みは同じ。吸着力が高く、仮面ライダーWのメタルシャフトやトリガーマグナムはこれでライダーの体に固定されている。日本製品がマジックテープで、アメリカ製品がベルクロ。で木にまず仮固定。

木の一本一本に、レールをベルクロで外れないよう固定していく。

そして、急斜面の上の平面地帯にまで登り終わった。

レールの仮留めはこんなもんかな。

「ふう」

片道4分か。

もうちよい速くやろう。

撮影停止時間を10分以上長引かせたくねえ。

俳優達はもう談笑モードに入っていた。

「おお、器用だなあ、朝風君」

「英二君が夢中で作業してる時の横顔って、時々子供みたいだよね」

「千世子君以外は皆朝風君の手元見てるんじゃないかな」

上からロープを一本垂らして、急いで下に降りる。

特撮でビルが壊れるシーンは、壊したいビルのミニチュアの中に糸を何十本も通して、それら全ての糸の端をロープに結びつけ、ロープを何人もの力で一気に引く。

そうしてロープと一緒に糸が豪快に引かれ、大きなビルのミニチュアが倒壊するんだ。

このロープは、そのロープと同じもの。

下に降りて、レールにカメラを固定、カメラ基部にロープを固定する。

これで、斜面の上の平地でスタッフ数人が一緒にロープを引けば、レールに沿ってカ

メラが一気に上に移動する。

壁を駆け上がるが如くスタントマンの疾走も、余裕でカメラはその後を追えるはずだ。

人力最高。

昭和の時代から、カメラを押ししてスタッフが全力疾走とかはいつもやってたんだ。

頑張つて皆さん数人で引つ張つておくれ。

そんなことを考えながらも一度急斜面を、ウォールクライミング気分に登りつつベルクロを外して大型の結束バンドホームセンターで買える馴染み深い結束バンドだが、種類によつてはたった一本で数百kgの重量にも耐えることが可能。金属製の頑丈なものは航空機や輸送船の応急処置にすら使われるとか。で固定していく。

固定していったのだが。

やべつ、滑つた。

「うわっ」

「危ない！」

落ちつ、地面にぶつか——らなかつた！

俺がふらつとした瞬間に動き出してたっぽい人らが、俺が滑り落ちた瞬間に回り込んでキャッチしてくれたらしい。

ナイスキャッチ。

しかし四人がかりでのキャッチとは。俺も初めての体験だ。

鳥山さんと、源さんと、堂上さんと、アキラ君による共同キャッチ。

何だお前らかっこいいかよ。

イケメンの化身どもめ。

俺の命助けてくれた借りは必ず返すからな、覚えとけよ。

「ありがとうございます、皆さん」

「俺この状況でお前が一番平然としてんの腹立つんだけど」

あだだ、頬抓んな堂上イ！

なんか今日まで顔合わせすらまともにしてねえスターズ二人と、オーデイション組二人の間で、初対面なのに名コンビネーションを見せてしまったがゆえの気まずい空気が

出来ていた。

何言やいいんだ、みたいな。

「お、おつかれ」

「ど、どうも」

無難な挨拶をしてそそくさと離れる。

うーむ、やっぱ顔合わせ必要だったんじゃないかねえかな。

何思つて顔合わせカットしたんだ手塚監督。

堂上さんが俺の体の脇持つて、地面にすんと降ろして立たせる。

「お前こんなちつせえ体してんだから無理すんなよ」

「体の大きさはあんまり関係ありませんけど、ありがとうございます」

今に見てろよ高身長どもめ。

町田さんとか、他のスターズの人とかにも心配かけちまったな。

顔見りや分かる。

心配してない風の顔してる人達がありがたい。手塚監督とか。

全員に心配かけたとかだったら、罪悪感で胸が痛かった。

周りに心配かけないようちゃんと気を付けねえと。

「良かった、朝風君……千世子ちゃんあなた、朝風君落ちた時すごい顔してなかった？」

「気のせいじゃないかな」

「……そう言われてみると、そうだったかも」

大人しく後ろに下がるところ。

撮影スタッフが斜面の上に行つてロープを持つ。

アレをスタントマンの疾走に合わせて引つ張りや、監督が撮りてえ画の撮影完了だ。

「じゃあ撮影入ろつか。二代目も頑張つてくれたしね。それじゃスタントマンを……」

「スタントマンですか？」

僕自身が演じた方がアングル誤魔化さずに済みますよね。やりますけど」
おいおめー何言ってるんだ。

要らん危険はいいだろ、要らん危険は。

アキラ君が俺の肩に手を乗せる。

「大丈夫」

やめろ、と言おうとしたが、言えなくなる。

「君の頑張りに、応えてみせる」

かっけえな、オイ。

痺れるよな、つたく。

あー、止めてえ。

壁みたいな急斜面の前で屈伸とか始めたアキラ君止めてえ。

ただなんか、あとちよつとで声が出ねえ。

もし怪我したら、つて思うところなにも怖えのに。

「朝風先生」

「烏山さん？」

「朝風先生も、たまには友人を信じてやるのもいいのではないかな」

「……」

そんなこと言ってる烏山さんを、源さんが力任せに俺から引き離すように引つ張った。

「心配するくらい良いだろ別によ。武光が余計な口出すことじゃねえだろ」

「うむ、その通りだ。つつい口を出してしまった」

「つつく」

撮影が始まり、アキラ君が軽やかに壁を駆け上っていく。

危なげなく。

いつものように。

カメラに追われるように駆け上がっていく。

俺から見えるアキラ君の背中が、きつと子供が夢中になるヒーローの背中だった。

「うっわ！ マジかアキラ！ 手使わず3メートルは登ってんぞ！」

俺が滑って落ちる斜度を、アキラ君はまるで平地のように駆け上がって、平地のように駆け下りて来た。

子供の頃のアキラ君はできなかったこと。

けれど、努力したアキラ君にはできること。

降りてきたアキラ君の前で俺が片手を上げると、爽やかに笑んだアキラ君も片手を上

げる。

俺の頭より高いところで、俺達の手がぶつかって、パン、と小気味の良い音を立てた。

「ナイスラン」

「君の物作りには負けるよ」

さーで、結束バンド切ってカメラとレール回収すつか。

今度は滑らないよう気を付けて、と。

「まったく」

歩き出した俺の視界の中で、俺とアキラ君を見てた百城さんが、少し呆れた風に笑っていた。

そういう顔も可愛いな、百城さん。

特に台詞もなく森を歩くだけの平和な撮影

現在、撮影準備して皆揃って森にいんぞコラ、って感じ。

木々。

森。

国土面積の67パーセントが森林である日本の撮影において、なんとなくでなく、意識的に軽視しねえよう気を付けねえといけねえもんだ。

葉は季節によって色が変わる。

落葉は地面を腐葉土にして、ふにやふにやにしたりふかふかにしたりして、撮影車両やカメラの三脚を地面にめり込ませる。

火薬は火が着き、火事になり。

木々そのものはその土地の所有者の保有財産なんで、迂闊に傷付けられん。

それらに巢食う虫は羽音などで思わぬ雑音をマイクに残し、カメラの前に張り付かれると一発で撮り直し確定だ。

だから俺は個人的に、森撮影の時は虫除けとか色々やったりもする。

デスアイランドは意外と海岸付近のシーンが少なく、森近くの撮影やら校舎セット

の中の撮影が地味に多い。

「デスアイランド俳優は半分が女の子なんで、その辺は普段以上に気遣うべきだ。

嫌いな人は本当に嫌ってるからな虫。

「殺虫剤定期的に撒いてねえ森は、”顔を刺す虫”とかいう俳優の天敵がうようよいやがる。」

撮影日時が30日と決まってる、決まった日程しか来れねえ忙しいスターズ俳優の顔に、1日や2日で消えねえ虫刺されの腫れが出来たらどうなるか。

ハッキリ言ってる、虫はこの世から絶滅しろって気分になるだろう。

だから俺はこうして、百城さんの白い肌に虫除けスプレーを吹き付けるのだ。

なんか本当に肌綺麗だなこの人。

他の女性と同じ生物か時々怪しく見える。

「百城さん、次の森のシーンで要望ってありますか？」

「監督はあの辺りで撮影したいみたいだけど、採光量建築基準法などで考慮される、窓から部屋の中に入る太陽光の量のこと。自然な部屋の中の明るさ。この場合は木々の葉の間を抜けて入ってきた自然光が、撮影の意図した基準に達しているかどうか。人間の目とカメラが拾う光の量や範囲は異なるため、自然光のみで森の風景を撮影する場合、少し計算が必要になる。は大丈夫だと思っ？」

「百城さんや監督の意図次第ですね。」

どのくらいきの光量の画を想定していらっしやるんですか？」

「監督と私は——」

ふむふむ、なるほど。

会話を重ねることで、俺はより鮮明に監督側・俳優側が作りたい画を理解していく。

そしてより正確に、彼ら彼女らが望む画を『作り上げ』る。

「——なるほど、分かりました。」

それだともう少し自然光が欲しいところですね。

自然な木漏れ日が一箇所に集まるよう、細工しておきます」

「うん、お願い」

「状況次第で、レフ板とか使って太陽光も足しますので、多分想定通りにはなりますね」

「ああ、そういえば英二君、前に人工の木漏れ日技術のこと熱く語ってたっけ？」

「はい。後は植木で少し背景の景観を調整相模湖ピクニックランドなどで使われていたテクニク。相模湖ピクニックランドは1972年に設立され、森や山があり、レジャーもキャンプも映画撮影もできるところであつたが、経営難で2007年に『富士急ハイランド』で有名な不死急行に事業譲渡。現在では昔そのままの撮影はできなくなっている。します」

「それは必要?」

「必要だと思えます。」

この作品の特徴は黒い学生服と、その中で目立つカレンの白カーディガンです。

周りが黒い服を着る中、一人だけ白い印象を受けること。

周りが手を汚す中、一人だけ綺麗でいること。

そして終盤のクライマックスで、この白い服が泥などで汚れること。

その辺りが印象的だと俺は考えます。なら、その『白』が印象に残る背景にしたいです」

「そっか。じゃあそれをお願い。」

そうだ、英二君また補色色相環で正反対に位置する関係の色の組み合わせのこと。Aの補色をBとすると、Aを背景にしてBを置くと際立ってハッキリと見える。クロマキー合成の際に語られたように、人間の肌の色の補色にはブルーやグリーンが使われる。英二がやろうとし、千世子が見抜いたのは、森の緑による補色計算。を気にしてたりする?」

「そうですね、少しは」

「あんまり気にしなくていいよ。」

英二君は私がやりやすいように合わせすぎないで大丈夫。

より自然な形を目指すか、英二君らしいやり方でお願い。

私が英二君に全く合わせないで仕事やっていると、調子狂いそう」

「そうですか？ その方がいいなら基本方針はそうします」

「いつもみたいに相互に合わせるくらいが良いよ。

逆に私の方に何か要望はある？

私にやりたい演技があるように、英二君も魅せたい画があるんじゃないかな」

「そう……ですな。

先程言った百城さんの服の白さですが、これは欠点でもありません。

アツプだと汚れが目立ちやすいんです。

食事の汚れや泥の汚れ、だけでなく……

椅子の背もたれにくっついていた小さな虫をうっかり背中で潰した、レベルでもです。

汚れ取りも俺の仕事特撮のスーツ洗濯は会社によって違うが、美術や造形や操演などが担当する。ちなみに千世子の服は白で汚れが目立ちやすいが、白い服やスーツは泥などに気を付けていても、汗や皮脂・紫外線などで変色してしまう。シャツが黄ばむのと同じ原理だ。なので仮面ライダーの白いスーツは定期的に、洗濯機にそのままぶち込んで洗濯する。千世子の白い服の扱いも基本は同じ。ですが、できれば汚さないでいた

けると嬉しいです。

カメラに映るあなたが常に綺麗であればあるほど、後に作る画の意味が変わると思います」

「うん、分かった」

軽く言うなあ。

だが、本当に頼りになる。

水ぶちまけて、泥巻き上げて、殴り合い殺し合うこの作品で、草地の上をカレンが転がるシーンすらあるこの作品で、服の汚れを抑えることがどれだけ難しいことか。

他の女優なら” 背後に人がいるのに気付かず泥を引つ掛けられてしまった” とかありそうだが、百城さんならそれはねえ。

この人の立ち回りの精度は、常軌を逸してやがるからだ。

「では作業に入るので、木の下から離れてください。

俺がもしまた落ちたら、百城さんが怪我してしまいますから」

「じゃあ私は木の下にいるから、絶対に落ちないでね」

「え……あ、はい」

木に登って、枝を掴んで寄せて、紐で結ぶ。

こうして木の枝の位置を調整すりゃ、葉の位置もまた連動して動き、今空高くでギン

ギンに輝いてる太陽の光を、好きな形の木漏れ日に加工できるってわけだ。

これで、自然な木漏れ日が集まって百城さんを照らすっていう森林のステージが出来る。

周囲の木に生えてる枝の位置と葉の位置全てを把握しておけば、どこの枝をどのくらい動かしやいいのかくらいは分かる。

木を操り、木に光を当てるアート。

木の形そのものを加工して作るアート。

俺の頭の中には、大量の”先人達が作った前例”のデータが入ってる。

やってやれねえこともねえ。

本当は枝を切り落としていたいところなんだが、それは駄目だ。

許可を得ず枝を勝手に切り落とすと、後で結構な苦情が来ることがある。

「撮影に貸してるだけで自由に切り刻んでいいとは言つてない！」とか言われるんだよな。

だから枝を引っ張って、紐で縛るだけにしておく。

「大丈夫？ アサっち落ちない？」

「足元気を付けなよ、アサっち」

「お二人とも、百城さん連れてもうちよつと下がってもらえませんか」

「えー」

「えー」

スターズの双子、姉の亜門一葉さんと弟の亜門二葉さんが木の下に来る。えーじゃねえよ。

百城さん引つ張って安全圏に……なんで三人で木の下に留まる！

俺の動きが落ちないようおっかなびつくりな動きになって、仕事速度が落ちるだろうが！

一葉さんと二葉さんはこの撮影の最年少組の三人の内の二人だ。

スターズの一葉さんと二葉さん、そしてオーディション組の木梨かなさんを加えた三人が15歳の最年少組になる。

一葉さんと二葉さんは顔の造りがよく似てるが、一葉さんが女の子らしい長いサイドテールにしてるんで顔だけで見分けんのは難しくねえ。

一葉さんと二葉さんがこっちを見てニヤニヤしている。

「それにしても相変わらず朝城コンビネーション抜群ですよねお二人、ヒューヒュー」
「ねー」

「一葉さん？ 二葉さん？ あんまり変なノリ続けるならまた親御さんに報告しますよ」

「あ、ちよ、ちよっと」

「それ勘弁」

この年頃の子は割とクソガキ寄りが多くて困る。

まあプロ意識もあるんでそこは信頼してるが。

木の枝をささつと結んで、木から降りる。

結構汚れちまったな。

意外と木の上つて汚れてんだよな。誰も葉の表面とか掃除しねえから。

砂埃や土埃が葉の表面に降り積もつて、雨が降つても土砂が溶けた雨が葉の間で止まつて、晴れた日に乾いて固まつたりもする。

うへー、枝と土埃と葉つばまみれになつちまった。

「朝風君、そこで立ち止まつて。枝と葉を取るから」

「すみません、アキラさん」

気遣いマンだなお前。

ありがとう。

「私も」

「わ、景さん?」

「こうして泥をはたいて落としてると、ルイのお世話をしてる気分」

「……小さい子扱いですか」

あ、これは女の子に世話されてものに嬉しくねえやつ。
でもありがたい。

俺の体のゴミを取りながら、アキラ君と景さんが話し始めた。

しかし何気にやるなアキラ君。

お前今のところオーデイション組と仲良さそうに話し始めたスターズ組第一号だぞ。

「ねえウルトラ仮面、いつもこうなの？」

「アキラ、ね。いい加減名前を覚えてほしいな夜凧君。こうつて何が？」

「千世子ちゃんと英二くん」

「ああ、そういうこと。」

二人はいつもこうだよ。

僕から見れば万能な二人だけど……二人からすると違うらしい。

俳優と裏方でそれぞれできないことがあるらしいからね。だから、助け合ってるんだ」

「ふうん……」

「二人が言葉を尽くして分かり合っていると、不思議な安心感があるよね」

まあ、なんだ？

百城さんが主人公級なら俺はオートバジン仮面ライダー555のバイク。普段はバイクだが時に人型に変形し主人公の敵を殴る裏の相方。みたいな。

煌めく人がいてこそだよな、俺は。

「なんだかんだ、一緒に仕事しやすい人っていうのはいるんですよ。百城さんがそうです」

景さんがあんまり感情の読めない表情で自分を指差そうとし、けれど指ささずハツとして、肩を落としてガクツとした。

え、何今の一連の動き。

「……私、客観的に見ても一緒に仕事しにくい役者だわ」

「そんなことはありませんよ。俺が合わせればいいだけですから」

「でも千世子ちゃんや英二君に合わせてたわ。」

周りに合わせてもらうだけじゃ、私はまだ役者として駄目なのよ」

「うっ」

「二人の息もピッタリだったし、二人は仲が良いのね」

ぐぬっ、くそっ、聞かれてたのかさっきの百城さんとの会話。

しまったフォロー入れようとしたのが裏目に出た！

これならフォロー入れない方がマシだったか！

撮影初日からやらかしちまうとは、俺としたことが。どうか軟着陸させねえと。

景さんはフラットなメンタルが強みでもあるし、俺のせいで余計な劣等感とか覚えさせるわけにはいかねえ。

「仕事で一緒なことが多かつたんですよ。」

百城さんは優しい方で、俺も何度も助けてもらいました。

俺が心の底から素晴らしいと思える俳優さんの一人です」

「……」

「ほら、今撮影が始まりますけど、振る舞いが綺麗でありながら可愛い人なんですよ、ほら」

森の中で、百城さん／カレンとクラスメイトが喋りながら歩くシーンの撮影が開始される。

こうして自分がやるべきことやって、見てるだけの状態になると、俺の心はすっかりファンモードになっちまう。

百城さんは相変わらず視点が広いな。

「何気ないああいう歩き方が強いんですよ。」

”考えないで踏み出す一歩”が無いんです。

ドジっ子を売りにしてる類の女優なら、初めて歩く森では転びます。

地面に目ではほぼ見えない窪みがあったり、木の根があったりするからです。

百城さんはその真逆です。

転ぶ気配がない。転ぶイメージが湧いてこない。

周辺の木や根や地面の凹凸もきっちり把握した上での立ち回りです。

だからこそ百城さんはあらゆる状況でNGが無く、その足取りは軽やかなんです」

「……それは、確かに」

「あれこそ百城さんだけの個性。

俺ああいうの見てると好きだなあって思うんですよ」

俺の目はよく見える。

使われてる技巧も。そこにかけられた歲月も。

習得までにとのくらい汗が流された技なのかも。

だからこそ、見ているだけで夢中になれる。

「景さんは綺麗に演じると美人に見えますけど、百城さんは綺麗に演じると可愛く見えますね」

「そうね」

「んー、うーん……駄目だ、僕には肯定的なことも否定的なことも言えない……」

いや、言いたいことあるんなら言えよ星アキラ。

ここの撮影自体は、数秒のカットの撮影にて終わる。

この森の中を歩くシーンは、平均で4人1組なんで、3人組や5人組のところもあるが、全部で6組。つまり撮影すんのは6カットになる。

ただ使えるスタツフが少なけりや、1カットの準備にも相当な時間がかかったことだろう。一時間くらい平気でかかったた可能性もあるんじゃないやねえかな。

百城さんの組が終わって、他の組の撮影が始まる。

だから撮影前に気合を入れすぎんな双子。

「アサつち、綺麗にお願い！」

「アサつち、綺麗にお願い！」

「ええと、ちよつと待つてください、小細工を考えます」

綺麗に華麗につてなんだ。

えーとどうすつかな。

そんな気合入れる場所でもねえし……校章使うか。

原作デスアイランドでは、制服に**びょう**型の校章が付いている。

百城さんの役なら左襟に。

景さんやアキラ君の役なら左胸に。

それぞれ光の反射だけなら金属と同じように見えるものがくつついている。

カメラに映る角度考えて、光量を調整した白色のレーザーポイントで照らしてみるか。

キラツ、といいタイミングで光らせられたら、面白い魅せ方できるかも。

演出担当に提案してみよう。

「英二君、英二君」

「はい、なんでしょう景さん」

「英二君、あれだけど」

「はいはい、あれですね」

色々考えながら、景さんが気にしてる地面の穴をスコップで塞いで均し、地面を掘り返した跡が目立たないように地表を加工する。

こりや深いし見辛いな。

メソッド演技中の景さんなら確実に足取られて、最悪足首骨折しそうだ。

森はこういうのがあるから困……ん？

あれ。

なんで今俺、景さんが言いたいこと分かったんだ？

景さん”あれだけど”しか言ってなかったよな。

やべつ、他のこと考えてたせいで今の俺の思考プロセス分かんねえ。

「よく」あれ”で私が言いたいこと分かったわね」

「よく」あれ”で俺に言いたいこと伝えられましたね」

「え？」

「え？」

「……」

「……」

「英二くんは何が言いたいの？」

「景さんは何が言いたいんですか？」

「おいこの二人の会話誰か止めろ！」

何か今、物凄いことをやれたのに、奇跡的にできた一回を物凄い無駄遣いしちまった気がする……気がする！

仮説は立つ。

演技のこと考えてた景さん。

仕事のこと考えてた俺。

”伝える才能”をまだ使いこなせてねえ景さんと、”依頼者の望んでるものを読み取る”能力がまだ発展途上な俺。

なんか今、俺と景さんが互いを見てなかったからこそ、奇跡的にどっか噛み合ったんだ。

さつき百城さんと話してた時と同じくらいの情報量交換があった気がする。

「アキラ君、英二君と夜風さんって付き合いどのくらいの長さだっけ？」

「千世子君、何故僕に……ああ、分かった、分かったから。半年はなかったと思うけど」

「数ヶ月？」

「そのくらいだろうね。顔を合わせた頻度は、どのくらいか分からないが」

「アキラ君と英二君だどのくらい？」

「ええと……大まかには十年くらいだと思う」

「そっか」

とりあえず仕事だ。

目の前の作業に集中しよう。

一葉さん、二葉さん、景さん、アキラ君が森を歩く準備に入る。

「一葉さん、二葉さん、ネクタイも少し締めましょう。その方が原作っぽくなります」

「言葉尽くして話し合っつて分かり合おう友達と。」

言葉なくても通じ合う友達と。

それってどっちが仲良いんだろーね。永遠の謎だ」

「さあ。双子でも互いの考えてること全部分からない私達じゃね」

「真面目にやりましょうお二方。お仕事ですよ」

「はい」

「はい」

スターズは余裕あるな。

流石は現役若手スター共。

年若い頃からこの業界で売れてて、多くの撮影に参加し、現場慣れしてるがゆえのナチュラルな振る舞いは見てて安心できる。

景さんも余裕ある……というか、最初のオーディションからずっと、この人はまるで緊張って概念がねえ生物みたいに振る舞ってる。

自分の感情を塗り潰せるからか、現状を深く考えてねえからか。前者だな。

逆にオーディション組の動きが固え。

どーすっかなー。

何かできることあるかね。

このままだと、動きが固いまま撮影終了もありえなくはねえ。

茜さん達がそういう終わり方すんのは俺が辛い。

なんとかしてやりたいとこだが。

「英二君、隣座っていい?」

「いいですよ、どうぞぞ」

百城さんが隣に座ってきた。

オーデイション組の動きが固い理由は明白だ、緊張してるからだ。

結構な予算をかけた映画の参加経験に乏しいからだ。

となると緊張するなって言っても無駄中の無駄。

リラックスしてもらうには、どうしたもんかな。

オーデイション組も悪くねえもんは持つてると思うんだが。

「考え事? 私に手伝えることかな」

「あ、いえ。」

少し俺が気にしてるだけがあるだけで……

百城さんの手を煩わせるほどのことじゃありません」

「そっか。あ、撮影始まるよ」

お、森の中の移動シーンだ。

森をちよつと歩くだけで足を挫くだらしねえ仮面ライダー俳優もいるが、アキラ君の足腰だと森を歩いてる時も安心して見てられるな。

亜門姉弟も双子の特徴を上手く活かして森を進めてる。いいぞいいぞ。

そして……景さん。

うーむやっぱいいな景さんの演技。

今回は目立つところがねえが、これは分かる奴には分かる演技だ。

「さつき地面の穴埋めてた時、英二君と夜凧さんの息ぴったりだったね」

「大事な友達ですからね」

「……」

「ほら、見てくださいあの穏やかで歩いてるだけの演技ですけど、ほら」

景さんの演技は今んとこ、過去の自分をトレースした感情的な演技こそが真骨頂だが、シチュエーションの時みてえなしつとりとした演技も俺は好きだ。

質感がある穏やかな演技は、周囲に伝わりにくい上質な質感が出る。

こうして自分がやるべきことやって、見てるだけの状態になると、俺の心はすっかりファンモードになっちまう。

景さんは相変わらず没入度が桁外れだな。

「景さんの強みですよね、ああいう歩き方。」

”取り繕ってない自然な一歩”と言いますか。

初めて来た森では、人は自然に躓きます。

木の根に足を引っ掛け、地面の窪みに足を取られ……

そういった『自然な演技』をごく当たり前にやってるんです。

観客が自然と感情移入する演技。

森を歩いたことのない人に”森は歩きにくく走りにくい”と伝える演技。

だからこそ景さんの演技は、映画として完成を迎えれば強い感情移入を生むと思いま
す」

「そうだね」

「あれこそ景さんだけの個性。」

俺ああいうの見てると好きだなあって思うんですよ」

うおおお……景さんと百城さんの演技、ここ繋いだら相当面白くなるぞ。

誰もが多少程度に、森の中を歩きにくそうにしてる中。

観客に歩きにくさがそのまま伝わってきそうなの、演技していることすら忘れてる景
さん。

観客に歩きにくさを全く感じさせねえ、軽やかで平然とした歩きの百城さん。

これを一連の流れで見りや、ケイコ（景）の森の中を進むのにすら苦勞する凡人つぷ
りと、カレン（千世子）の『主人公つぷり』が強調される。

景さんの演技が、百城さんの特別性をじんわりと感じさせ。

百城さんの演技が、景さんが演じてるキャラの無個性凡人という、無特徴な特徴を際

立たせる……予想外の効果だこれ。

まるで景さんという夜が、百城さんの輝きを引き立てているような。やっぱそうだ。

今んとこ、百城さんは景さんに当たり負けしてねえ。

それどころか属性が違う二人の全く噛み合ってねえ感じが、互いの良さを結果的に引き立ててる気すらするぜ。

あー、いいなこの二人。

絶対に相性抜群だぞ。

まだ二人が直接絡む場面の撮影予定は先だが、どうなるか俺にも想像がつかねえ。

あ、カット終わった。

「お疲れ様です、景さん」

「……ああ、そうだった、私、夜風景だったわ。

台詞を一切言わない自分を掘り出すのって意外と大変ね」

「あー……景さんはそういう問題もありますか」

「どこか変じゃなかった？」

「どこも変じゃありませんでしたよ。

明日は景さんの初セリフで茜さんの初共演です。頑張ってください」

「うん、頑張る」

大変だなメソッド演技は。

普通の人なら、台詞が無いシーンは黙ってるだけでいい。

だがメソッド演技だと、『黙ってる自分』を作らなくちゃならねえ。

そのシーンで黙ってる合理的理由が無けりや、景さんのメソッド演技は黙ってるってことができねえからだ。

このシーンで自分はこうこうという理由で喋らない、とまず頭の中で組み立て。

その理由も込みで、掘り出した感情で自分を作る。

”自分はこういう理由で喋ってなくて、こういう理由で森の中にいるケイコだ”という思い込み……いや、自己催眠に近いそれで、景さんは喋らずにカットを乗り切った。

この人本当によく分かんねえところで苦労してんな。

よく頑張ってる。

応援してえ。

「アキラ君さ、私と夜風さんならどっちの方が英二君に似てると思う？」

「それは……強いて言うなら、夜風君だと思うが」

「だよ。絵に描いたような天才肌だし」

「アキラさん、百城さん、俺の話ですか？」

「気にしないで、英二君。ちよつと頭の中で色々整理してただけだから」

えーなんだよ。俺も会話に混ぜろや。仲間はずれはクツソさみしくなるだろうが。

「アサつち、アサつち」

「なんですか一葉さん」

「デリカシーって知ってる?」

「熟知しています。」

デリカシー。心配りや細やかさを示す名詞。

デリケートの変形だと考えると分かりやすいですね。

相手をいたわる優しさと言うより、相手を傷付けない気遣いの方がニュアンスが近いです。

また、実際は和製英語に近い属性を持っています。

英語圏では「デリカシーは”美味しい食べ物”という意味もありますからね。

だからこそ『おデリいシしヤいス』にも発音が近いわけです。

また、同じラテン語の語源を持つドイツ語の『デリカテッセン』もあります。

これは美味しい食べ物を意味し、ドイツでは惣菜屋さんを示す言葉でもあります。

日本にこれが輸入された結果、コンビニ弁当がコンビニデリカとも呼ばれますね。

こうして生まれたコンビニデリカの空箱を加工することで、特撮番組では——」

「知識じゃなくて認識の話なんだけど」

抽象的で分かり辛いことを言うな。

「二葉は言葉が足りてないんだよ。」

「ごめんねアサつち、ちよつと話ややこしくしちゃった」

「いえ、構いませんよ」

よつしや、ここは年上の男らしくたしなめつつ導くとかやってみるか。

「一葉さん。言葉が足りないってのは結構大変なことです。」

いいですか？

間違った言葉選びだけが人を傷付けるわけではありません。

間違っただけでなく、足りない、ということも人を傷付けるのです。

言葉が足りない。

配慮が足りない。

足りてないなら、無いも同然です。

言葉も、配慮も。

足りないということこそを、人間である俺達は気を付けるべきなんです。分かります

か？」

「アサつちがそれ言う？」

「アサつちがそれ言う?」

あれー?

「俺、どこか言葉足りてませんでしたか?」

「私アサつちは脳味噌足りてないと思う」

「ひ、酷い!」

「あと悪気も足りてないと思う。というか無い。悪気が無い」

「うん、わかる」

オイコラ。

そこまで言われるようなことお前らにした覚えはねえぞツ!

私だけを見てろつつったのに五秒で他の女優見る男

まだ初日だが、スターズの売れ筋若手俳優12人を一気に集めて映画に投入、とかいう無茶は着実に無理を蓄積させていた。

デスアイランドは言っちゃえば他の映画での主演級12人の一斉投入だ。

となると、最低でも十数個の他現場、最悪数十個の他現場のスケジュールとすり合わせなきゃならず、どこか一つでトラブルが起きると最悪数十個の他現場全部に不具合が出る。

よって、融通が利かねえところは楽だが、融通が利くところはキツくなる。なんかそうなる。

つまりよその要求が聞けねえくらい余裕が無いところは予定外の無茶振りをされず、無理をする余地があるとところは予定外の無茶振りをされるってことだ。

なんかそうなるんだ。

たとえば北海道で撮影を終えたばかりの俳優に、「沖縄にすぐ来い」と言っても間に合うわけがなく、無理。

これが『融通が利かないところ』になる。

「納期は今週いっぱいだって話だったけど明後日までに仕上げろ」と言うのは、職人を二日徹夜させりやあ何とかなることもある。

これが『融通が利くところ』になる。

そういう無理が利く部分の一つとして認識されてたのが、俺だった。

「スケジュール調整……なるほど」

「できますか、朝風さん」

「なんとか、そのくらいなら」

まあなんてことはねえ。

よそのドラマでトラブルが起きて、デスアイランドに影響が出そうだってだけの話だ。

だからまず、スターズが撮影主体の他のドラマ現場に、俺がそこで使う衣服を作って送る。

その現場は俺が送った衣服で他のカットを先に撮影しておく。

それでその現場は撮影の順序を前後させて、スターズ俳優のスケジュール調整を行う……まあそういう話になったわけだ。

服送ってやるからスケジュール融通しろや！　ってわけ。

スターズ傘下の現場同士だとこういう調整がいつもアリなのが新鮮だ。

デスアイランドはあんまりにもスケジュールカツカツなもんだから、スターズ俳優はオールアツプが終わったら速攻で東京に帰還、以後島に戻って来ねえ。

常識的に考えると目を疑うレベルのカツカツさだ。

オールアツプ後も現場にちよくちよく来てた私沢ユウキ仮面ライダーW、園咲霧彦役。さんみたいいはいかねえんだな。

桐谷漣仮面ライダーW、左翔太郎役。さんは仮面ライダーWでデビューしそこが初演技・初ドラマ・初主演という菅口将暉仮面ライダーW、フィリップ役。さんのことを思つて事あるごとに飯を奢っていたが、そのせいでお金がなくなり、オールアツプ後にもちよくちよく現場に来てた私沢さんに金を借りてたとか。

オールアツプ後にスターズ俳優がさっさと帰るデスアイランドじゃ、絶対に見られなさそうな光景だ……長期撮影ドラマはやっぱ俳優同士が仲良くなるんだよなあ。

つーわけで、まだ初日だが、撮影と並行して服作りを始める。

日中に少しでも仕事進めて、かつ日中は俺の平常撮影業務もやって、夕方過ぎに俳優さん達の撮影が終わったら本格的に始めるとすつか。

クソが。

仕事で無茶振りするやつ全員死ねとも思うが、仕事を押し付けられることよりも撮影スケジュールが破綻することの方が嫌だ。

よつて黙々と作業を進める。

まあ流石にそこまで無理するつもりはねえ。

やることはシンプルで、向こうのドラマ現場で使われた衣服作成用の型紙データを送って貰い、デスアイランド用に用意してた生地で一着仕立て上げ、スターズ事務所に生地補充を連絡しておく……こんなとこだ。

俺はデスアイランド用の専用服はかなり手が込んだ仕立てにしたが、他のドラマに送る分には既製服よりちよつと出来がいいくらいで良いだろ。

接着芯地式第二次世界大戦以降に流行した、服飾の革命。表地の布と裏地の布の間に、接着剤で芯地を接着する。服の大量生産に大いに貢献した。で作って送っておこう。

「朝風君。生地収納箱持つて来たよ。ここに置いておけばいいかな」

「あ、ありがとうございます。」

休んでてよかつたんですよ。まだアキラさんには午後の撮影があるんですから」

「いいんだよ。カメラの前でなければ、僕は君を手伝いたいだけのただの友達だから」

くあーかつこいいい。

このイケメンめが。

でもありがてえ。生地持つてくる手間が省けた。

アキラ君と話しつつ、手も動かしつつ、俺は廃校舎設定の建物内での撮影を眺めた。

「千世子君と話してただけど、君は夜風君の影響を受けるとメンタルがブレるらしい」

「え、百城さんがそんなことを……」

「言われてみるとなんとなくそんな気もするよ」

「どんな感じにですか？」

「え、具体的にと言うと、どう言ったものか……」

……千世子君に手を握られて慌てふためか、そうならないかとか？」

「それ慌てふためかない人いないと思うんですが……」

「ごめん、今のは僕の挙げた例が悪かった。朝風君はそうだった」

「なんで俺に限定するんです？」

なんつーか、あれだな。

「他人の心が分からなくなるとか言ったら言いすぎかもしれない……的確に言えないな」

「いいんですよアキラさん、無理に言葉にしなくても」

こうして真剣に向き合ってくれる友人がいるってのは、幸せなことだと思う。

「俺と景さんは互いに影響与え合っていると認めますけど……」

俺からすれば、景さんの方が随分印象変わったと思いますよ」

「夜風君が？」

「はい。前の彼女の演技は現実逃避の一種でした。

でも今は、素晴らしい芸術になろうとしているサナギです。

彼女の人生そのものなんですよ、彼女の演技は。

夜風景がこれまでどう生きてきたか、その結晶なんです。

だからこそ、役者としての自覚を持った彼女は、心の姿勢からして違うんです」

「心の姿勢……」

「今の景さんは多分、生きてることが楽しいんだと思うんですよね」

いいことだ。景さんは友達だ。友達には幸せになつてほしい。

「いいことです。役者になつて人生が変わつたのなら、天職だつたつてことでしょうか」

「ら」

「……人間の目は自分は見えてなくても他人は見えてる、とはよく言うね」

「かもですね。」

自分のこと把握するより、他人を見る時の方が正確に分かる時もあります。

それは俺がクライアアントの頭の中のイメージを形にする職種だからかもしれない
が」

俺はいまいちトークが噛み合わねえ時があるからな。

コミュ力、トーク力、もっと欲しいわ。

今のところ周りの人が仕事上で何を望んでるか察する察知力と把握力しか伸びてねえし。

私的な考えてなると、ダチの景さんのことすら内心が読めてるとは言えねえんだ俺は。

「景さんにおいては、友人として見守っていたからというのもあります。」

やっぱりこう、友人とそうじゃない人だと、見守る気持ちに差ができませんから」

「朝風君らしい。……でも本当は、夜風君の才覚に何か感じ入るものがあつたんじやないか？」

アキラ君は本当に俺のことよく分かっている気がする。

この距離感が、理解が、俺達の友情だ。

「常に目が離せないんですよ、あの人。」

芝居も良いんですが、芝居してない時もなんだか危なっかしくて」

「うん……なんだか分かる気がする」

「百城さんは百城さんで逆の意味で目が離せないですよね。」

「日常から撮影まで、周りにどう見られるかを意識して振る舞っているのか」

「ああ、朝風君の中では夜風君と千世子君はそういう感じになっているのか」

「百城さんは安定してますけど、景さんは逆に急成長中なので見てると楽しいですよ」
ふむ、とアキラ君が腕を組む。

今日の撮影の流れの中の景さんの姿を思い出してんのかね？

「まだ初日だからでしょうけど、知り合いのアキラさんと景さんでもほぼ話してませんね」

「到着してから撮影に次ぐ撮影で、少し話せたけど改めて挨拶もできてないからね、僕と彼女」

「アキラさんは本当律儀です」

撮影前挨拶とか儀礼的なものにこだわるあたり、筋金入りだ。

アリスさんはこういう性格じゃなかったが、この愚直さはアキラ君の個性でもある。欠点かもしれねえし、長所かもしれねえ。

真つ直ぐであることは、曲者で在れと言われるこの業界ではどう働くもんかな。

ま、アキラ君にも景さんの雰囲気の変化とか感じ取ってほしい。

今日ちよつと会話できたのが奇跡だったみてえだが、午後の撮影もあるし、明日以降の撮影もあるしな。

改めて印象見てほしい。

「あ、そうだ朝風君。」

僕明日早朝には東京に戻って別撮影の準備して、明日いっぱい別撮影だから。

明日の夕方になるまでこっちに戻って来ないから、頭の片隅に入れておいてくれ」
「了解です」

あ、明日は駄目なやつだった。

しかし忙しいなスターズ！

俺も東京とここ往復して仕事することになってつから人のことは言えねえけど。

「おーい英二いー」

「あ、堂上さん」

「昼飯持ってきてやったぞ。おにぎり注文してたんだろ？」

「すみません、俺の手は今作業中なので口の中に放り込んでいただけますか？」

堂上さんが俺の口の中におにぎりを入れてくれる。

サンキュー堂上さん。

目は撮影中の皆を見る。

手はよそのドラマ撮影に送る服の凝った襟を作る。

口はおにぎりを食う。

無駄なく自分の体を制御・運用していこう。

「朝風君の手、もう一時間以上一秒も止まってないんだよこれ……」

「器用な奴だな本当に……」

「ふやぐふえ……くくん。」

ありがとうございます、堂上さん。

手と口と目は別々に動くんですから、せつかくですし」

現在13時前。

予定の撮影終了予定時刻は18時。

ビルとか山とかが沈む太陽を遮らねえ夏の南の島の日没は、だいたい19時くらいだ。

できればハプニングが起きないまま、早めに終わってほしいところだな。

俺は部下に付けられたスタッフさん達を動かしつつ、撮影の流れ全体に目を走らせ、ミシンを使って服の縫製を一気に進めていた。

服を一から作つてると、どうしても手作業じゃねえとできねえ・遅え・雑になるところと、機械に任せてガーツとやった方がいいところに分かれる。

俺は指示出しに徹し、指示に使う頭と口を仕事に振り分け、指示に使わねえ手と足を服作りに回していた。

人手が何よりも大事な単純作業は、俺が普通の人の十倍の速度で仕事やるより、普通の人が二十人いる方が確実に速え。

ただまあ、そんなのは理想論だ。

慣例的に、特撮映画の美術スタッフは10人以下。

たとえば『ガメラ 大怪獣空中決戦』1995年、平成ガメラ第一作。後の時代に大きな影響を与えた怪獣映画。では特撮ユニットの三池監督曰く、最初は特撮美術を3人で作ってたはずだ。

3人。3人である。

パンフレットを見ると10人以上で作ったように書かれてるが、3人だ。

ひつで。

続編の『ガメラ2 レギオン襲来』1996年、平成ガメラ二作目。その王道な話の作り・秀逸な人間と怪獣の描写・視聴者を夢中にさせる戦闘シーンのクオリティで、平成ガメラ最高傑作、20世紀終わり際屈指の名作と言われることも多い。では前作が売れたことも鑑みられて、事実上の4人スタート。

やったね1人増えたよと言うべきか、大差ねえよと言うべきか。

前作同様途中から少しずつ手伝ってくれる人も増えたが、焼け石に水。

だが皆の頑張りもあって、ガメラ2は大ヒットで大好評。

前作が興行収入5億だったのを興行収入7億まで伸ばした。

特撮美術スタッフは「次こそは六人体制で臨むぞ！」と気合と期待を胸に秘めたという。

目指せ六人、というひつくいハードルからも撮影環境の辛さが窺える。

そして続編、『ガメラ3 邪神覚醒』1999年、平成ガメラ第三作にして三部作シリーズの最終作。『街を守る巨大な存在がいても、その戦いに巻き込まれている死者はいるのでは？ 人を守る戦いに巻き込まれ殺された罪なき人はいるのでは？』というテーマを正面から取り扱った意欲作。

ここでなんと、特撮ユニットの監督入れて三人＋新人が一人という体制に。

前作より人を増やすどころか事実上三人になったので減ってしまった。

なんでやねん。

何もかも現場の貧乏が悪い。1996年ウルトラマンティガ、1997年ウルトラマンダイナ、1998年ウルトラマンガイアの撮影チームと、平成ガメラは撮影スタッフを一部共有する。よって多くのリソースをそちらに持っていかれてしまった。

三人じゃ撮りたいものも撮れやしねえ。

なので当時西宝の美術部から一人辻村という人が招かれた記録が残ってたりする。

ちなみに、シン・ゴジラの美術は六人。デザイナを無理に入れても七人パンフレッ

トを見ると違った人数にも見えるが、監督が熊本城プロジェクトのメイキングでデザイナーを入れても美術は七人とはつきり明言している。だ。

『六人体制』って特撮界限じゃ結構な高望みでもあるってわけだな。

他の撮影でも大まかにこうなんで、美術スタッフは万年忙しく、他のところのスタッフに手伝いを頼んだりもするのである。

その前提で見ると、この撮影はすげえ。

俺を入れて美術スタッフ一人。

スターズマネーと社長&プロデューサーの手腕によつて揃えられた最高の軍団だ。

単純作業以外は難しいって人が多いものの、この数はぶつちやけ頼りになりすぎる。

サンキューありがとうアリサ社長。

大好き。

指示を出しつつ服を縫っている俺の横に、景さんが座った。

「英二くんが言つてた通り、周りをよく見てる千世子ちゃんも本当に森で躓かないのね」

その目は百城さんを捉えている。

いい感じに意識してるみてえだな。

互いにいい影響与え合つてるといいんだが。

「人間一人の目玉に見えてるものなんてたかが知れています。

だからこそその三人称視点……俯瞰視点です。

映画というジャンルも基本は三人称視点で構成されるものですね。例外もありますが」

「POV? Point of View Shot。略してPOV。要するに一人称視点の映画。「この映像はカメラマンが撮影した実際の映像である」などの導入から始まり、映画本編がずっと、カメラマンの視界にカメラが撮影してる一人称視点の映像として撮影されることが多い。この技法を用いたモキュメンタリー（フェイク・ドキュメンタリー）は数多くの後追い作品を生み出し、映画界に見たこともない形のうねりをもたらした。」

「ですね」

一人称小説と三人称小説。

POVと通常カメラ映画。

ゲームのFPSとTPS。

見えている範囲が違おうと、見えている世界ごと違おう。

きつと百城さんには俺には見えてねえ世界が見えてんだらうな。

俺が見えてる範囲なんざたかが知れてる。

俺に見えてねえものもたくさんあるだらう。

そういう、俺に見えてねえたくさんのものを、百城さんの視界は捉えてるはずだ。

「次は24人が一堂に会する、映画序盤の盛り上げどころです。」

台詞は茜さんと百城さんしかありませんが……

景さんは間近で見れると思うので、注目してみるといいですよ」

「千世子ちゃんに？」

「千世子ちゃんに、です」

あ、やべ、つられて千世子ちゃんとか言っちゃまった。

「成長のコツは嫉妬で終わらせないこと、そして渴望することです。」

あいつはいいな、で終わらせない。

羨ましいな、妬ましいな、で終わらせない。

どこかで嫉妬になりそうな感情をプラスの原動力に変えると自分を高められます。

あくまで今の俺個人の生き方の論理ですけどね。これが結構大事なことです」

「嫉妬……」

「どんな形でも自分の中に強い感情があると、原動力に変えられますからね。」

あの人の技能が欲しいな、つて思ったら全力で盗もうとしてみるのも手です。

俺も15年くらいそれ繰り返し返して周囲の人達の技能片っ端から喰ってきた人間です

から」

「！」

「景さんの凄いところは二つあります。

一つは、見惚れるほど凄い演技をすること。

もう一つは、そんな景さんですらまだ発展途上だつてことです」

景さんの目を覗く。

その心の状態を覗く。

景さんの信念、決意、想い……そういったものに、やる気という燃料が注がれたのが見えた。

「俺も、父親への嫉妬を力に変えられるまで、そこそこかかりました。

父は俺が欲しがつても手に入れられないものを、全部持つていましたから」

最高の才能とか。

おふくろからの一番の愛とか。

最大の理解者になつてくれた女性とか。

まあ、いろいろ。

「百城さんをお食つてしまう勢いで、敬意を持つてぶつかるといいと思います。

景さんが百城さんと共演するのはステージ上結構先ですけどね。

できれば友達になつたりしてくれれば、見守つてる方も安心できるんですが」

「それは……よく分からないわ。私、千世子ちゃんのことまだ何も知らないから
そうだな。

その気持ちはきつと、百城さんも持つてるものだ。

14:30。

ちやくちやくと、廃墟を校舎つぼく見せる準備も整った。

もうただの廃墟つてか、不気味な廃墟校舎にちやんと見えるようになったか。

俺が服作りながら指示出し、細かいところを俺が仕上げつつも、美術担当チームを手
足のように……いや手足のようにには動いてねえな。

マジックハンドぐらいの感覚で動かす。

こっからの撮影はこうだ。

まず、主人公カレン（百城千世子）が11人のクラスメイトを引き連れて校舎前に来
る。

そして茜さんが演じるキャラが同じように11人のクラスメイトを引き連れて来る。まー分かりやすいが、スターズ組とオーディション組で12人ずつだ。

再会を喜ぶ両集団の代表の百城さんと茜さん。

さあ24人一緒に島から脱出しよう、と主人公の百城さんの掛け声でカット一区切り。

登場人物が出揃い、予定された通りの演出だとここで登場人物達の下に名前とかのテロップが一気に出て、さあ物語が始まった！ 感が出る。

手塚監督はここでタイトルロゴをドゴンと出して、重低音のBGMを流し、一気に雰囲気を出して観客の心を掴みてえらしい。

いいね。

そういうのは好きだ。

よく分からねえ状況から、死んだと思ってた友達と再会して、全員の顔を順に映しつつ名前紹介がテロップで入って、全員で生き残ろうと決めたところでタイトルロゴがドゴン。

王道だぜ。

流石に映画初見の人はここで全員の名前は覚えられねえだろうから、後の展開で追々覚えてもらう形。原作ファンにはここで原作と実写の顔を脳内照合してもらうわけだ。

まあ皆死ぬんだけどな！

特に茜さんと景さんはこつから重要な展開があるんで、集団の先頭に立つてもらおう。茜さんは後々、友達でありながらも百城さんと仲違いするポジション。

景さんは基本的に一貫して何もできねえが、最後の最後で主人公の百城さんを庇って死ぬっていうポジションだ。

オリキャラが大活躍のシーンとかは全くねえ。

ここも原作ファンの賛否分かれそうだなあ。

最後のシーンで百城さんを輝かせられるかは景さんにかかって、景さんの印象を強く残せるかどうかは百城さんにかかってるわけだが。

「百城さん、景さんと友達になれると思いますか？」

「共演者として上手くやるつもりだけど、それだけじゃダメ？」

「いえ、それだけで十分だとは思いますが……」

ハッキリ言って百城さんの普段の人間関係って非の打ち所ねえんだよな。

親しい仲は数えるほどだが、誰とでも仲良くはやってる。

スターズというコミュニティの中でも上手くやって、撮影現場で上手くやれないことはほぼなく、初めて一緒に仕事する人ともそつなく助け合える。

皆と仲良く仕事やれんの、ドラマとかで誰かの恋人役やろうとも、役に引つ張られ

ず熱愛報道とかも皆無。

人間関係を疎かにせず、されど他人と深すぎる仲にはならず。

まさしく理想の女優だ。

めっちゃ好き。

そのスタンスが好ましすぎる。

百城さんは観客に理想を売ってる自覚があつて、スキヤンダルでそいつを損なつちまう可能性をきつちり考慮してる。

だからこそ、強え。

「夜風さんを随分心配してるんだね。

でも、その発想は正しいと思うよ。

あの人、自分の延長でしか芝居ができない人なんですよ？

だったら私から友達になれば……夜風さんも、私のことを友達だと思えるわけだ」

「……はい」

「ケイコがカレンを友達だと思うように、ね。夜風さんを助けたいの？」

仲良くしてもらいてえのも本当なんだが、やっぱ打算とか計算とか混ざつてると、百城さん相手には高確率で見破られるな。

「なつてあげようか？ あの子の友達に。」

英二君のお願いなら、別に聞いてあげてもいいけど」

「いえ、いいです」

「ごいごい？」

「景さんのために、百城さんにそういうことを強いるのはちよつと……」

今のところ景さんを百城さんより優先する気はないです。

百城さんの心に嫌な不快感が溜まるようなことを頼むつもりは無いですから」

「……そうなんだ」

俺は言葉選びもヘタクソで、仕事での対人能力と比べると仕事外での対人能力がゴミカスみたいな男だが、それでも気を遣えるところでは遣いてえ。

うっかり発言、うっかり発言に気を付けよう。

クライアントが作りてえ物のイメージを理解するのはできるが、やわやわふわふわしてる女子のメンタルを理解するのは高難易度だ。

景さん差し置いて百城さん優先するのは心痛えし。

逆に百城さん差し置いて景さん優先すんのも心が痛え。

この辺は「先に約束してた方を優先する」とかそういうことがねえ限り、優先順位とかつけねえようにしよう。

「茜さんと百城さんの次のシーンも、俺は服飾作業しながら見てますので、それで……」

百城さんが微笑む。

「呼び方茜さん、なんだ。別にいいけどね」

「？ ああ、何がいいんですか？」

「英二君だから、そこはちよつとね」

「ああ、呼び方変わってることが気になったんですか。実はこういう経緯があつて……」

「いいよ、興味無いから」

ニコツと笑う百城さん。

可愛い。

まあ撮影前に無駄な長話する必要もねえか。

いつもの百城千世子の合理的な選択と振る舞い。

この人が被ってる仮面と似たようなその生き方が、とても好ましい。

百城さんが、撮影準備をしているスタッフ達がまるで目に入っていないかのように、自

然な所作で木々を見上げた。

「右手に校舎。

左手に森。

「この木は背が高いよね……ねえ、英二君」

その瞬間、俺は思わず、木々を背景に木々を見上げる百城さんを、スマホで撮ってい

た。

思わず、反射的に撮ってしまったほどに、その時の百城さんは綺麗だった。とても綺麗な立ち姿で、とても綺麗な横顔だった。

「百城さん、百城さん」

「何？」

「今凄く綺麗に撮れたんです。

見てくださいこれ、凄く綺麗です。

芸術品ですよ、これもう。

この美しさ、俺の手でも類似品すら作れないやつです。

スマホの待ち受けにしてもいいですか？ 百城さんに言われたらすぐ消します」
やべえ、ちよつとテンション上がってる。

声が僅かに上ずって、言葉のテンポも僅かに早まってる気がする。

つか失礼だな俺！

無断撮影から待ち受けとか！

普通怒られるわ！

……でもなんか、今の百城さんが、俺の深い所にビビッと来たんだ。

今物作りしたら、凄え良い物作れる気がする。

百城さんは、呆れたような表情を浮かべていた。

「まったく、もう」

勝手に撮ってマジでそこはごめんなさい。

「いいよ」

「ありがとうございます！ あと勝手に撮ってすみませんでした！」

心が広い！ 天使！

「英二君は本当に、そういうのが好きだね」

「人が作り出す美しいものは大好きです。」

目に見えるものも、心みたくない見えないものも。

泥まみれでも、何気ない一瞬でも、全部そうなんですよ。今何考えてたんですか？」

「人に教えると価値がなくなっちゃうこと、かな」

そりゃ繊細そうなやつだな。

今の百城さんが綺麗に見えたのは、何か心の動きがあつたからか、百城さんの技術が上手い感じに噛み合つたからか。

親父だったら、それが何か分かつたのかもな。

でも俺にはさっぱり分からん。

ただ今、百城さんは奇跡の一瞬みたいな何かを見せた。

普段から『百城千世子』を演じてる百城さんのことだ、何かの仮面を被ったんだと思うが。

「はい、集合ー。カメラ回すよ、配置について」

おっと、撮影始まるか。

百城さんとの会話中も進めてた服作りもあんま進まなかつたな。

美術チエック、美術チエックと。

俺の指示通りに10人のスタッフが単純な美術作成作業をやってくれたかを確認する。

ここでの撮影は4カメラ。

4方向から主人公のカレンにカメラが向けられ、百城さんが撮影される。

その内2カメラは建物の中まで見通す視点なんで、この2つの視点のカメラに『リアル』を見せるために、建物内部をある程度整理・加工する必要があった。

校舎の表面の壁の加工は、撮影開始前の期間に俺がやった。

森の中歩いていい感じのツタや植物引っこ抜いて、剥離が容易な接着剤で校舎（廃墟）の壁表面にいい感じに貼り付けて、寂れた廃校舎感を出した。

いい感じの緑がどうしても足りねえ場所は、青のりと緑に着色した綿をちよつと継ぎ足して、自然な感じの緑を校舎表面に演出、これで完了。

”謎の廃校舎”って感じがバリバリ出てるぜ。

だから部下を使ってカメラに映る一階校舎部分を指示通りに調整させた、調整させたはずなんだが……一箇所、室内の壁の色が指示した通りになってねえ部屋があるな。

なんか、雑。

俺の指示をこなせてねえなああの部屋の中。

今年度入って来たっていう新人に任せた部屋か、あそこは。

「朝風さん、どうでしょうか」

「……なんかあの部屋だけ少し質悪いですね」

「うっ」

「カメラで撮るとあの部屋だけ目立つかもしれない。壁で隠しましょうか」

「すみません……」

「いえいえ、俺の責任でもありません。

俺がスケジュール調整に服飾やってたのも大きいですから。

俺の指示が悪かったんでしよう。

第一、俺が指示出しだけでなく手出しもしてれば防げた問題ですからね。

監督の想定した絵面を作れなければ、それは美術監督の責任ですから」

「本当にすみません！」

いいんだよ、気にすんな。

人使う技は熟練じゃねえ癖に、想定が足りてなかった俺も悪いんだ。これからどうにかすつからさ。

部屋の中をカメラに映したくねえなら、色々方法はある。

カーテンを仕込む。

部屋の内に壁を立てる。

カメラワークを融通してもらおう。

カメラマン側に美術側の失態で変更を強いるのはけっこう心苦しいし、他の窓が割れガラスくらいでしかねえのに、そだけカーテンや壁があんのは気になんな。

俺の感性での判断だが、カーテン一つあるだけで統一感が薄れる気がする。

じゃあいつそ全部の窓にカーテン付けるか。

いや、それだとカーテン一箇所が目立つてことはなくなるが、逆に元々あった廃墟感が薄れちまう。カーテンがねえからこそその廃墟感つてのがあったんだ。

つか、そんな沢山カーテンねえよ。

「壁か、だったらどうするかな……」

どうしようかな、と思つてた俺の肩を、二人が叩いた。

振り返ると、和歌月さんと堂上さんがそこにいた。

……景さんの代わりにスターズオーデイションに受かってから、すっかりレッスンと現場こなしてきたのか、すっかりスターズらしい雰囲気か身に付いたな、和歌月さん。嬉しい限りだぜ。

「僭越ながら、私も手伝います。存分に役立ててください」

「俺達に任せろ。なーに、難しいこっちゃねえはずだ」

「和歌月さん、堂上さん……」

「私がこの辺りに立って……」

「俺がこの辺りに立つ」

俺の身長が177で、和歌月の身長が175に少し届かないくらいだったな。

俺達の身長がありや、部屋の中をカメラから隠す壁に使えるはずだぜ。

校舎の窓を移すかもしれねえカメラは二つ。

俺達二人が立ち位置調整すりや、部屋一個分くらいはどうにか誤魔化せねえか？」

「だったら僕も使つてほしい。二人より三人だ。三人いれば十分じゃないかな」

「アキラさん……」

その通りだ。

三人いれば十分隠せる。たまんねえぜ。感謝する、偉大な俳優さん達。

「……すみません、お願いします！ 頼ります！」

「おう、頼れ頼れ」

堂上さんが俺の側頭部を小突いて来た。

こんにやろう。

まあいいか。

地面に紙でバミリ演劇や番組撮影などで、人が立つ場所やマイクのスタンド・演劇の家具などを置いたための場所に、テープで印を付けたもの。演劇ならビニールテープを貼って自分を見失いがちな憑依型の移動の目印にしたり、屋外のテレビ撮影ならヒーローの立ち位置にガムテープを貼ったりする。この撮影場所は土の上なので、紙を置いてその上に重し用の土を被せたものがバミリとして使われた。を置いていく。

24人の俳優が、指示された通りの立ち位置に移動していく。
よし。

サンキュー、和歌月さん、堂上さん、アキラ君。

撮影の流れに熱気が入り、撮影直前に指示の怒号が飛び交い始める。

緊張をほぐすためか、会話を始める俳優まで出て来た。

「英二君が昔他の学園ドラマでしてた仕事、ちよつと思ひ出したよ」

「百城さん。……お互い、あの頃と比べれば成長しましたね」

「そんなに？」

「しましたよ。百城さんはこれまでも、これからも、成長です。まだ若いんですから」
「夜風さんほどには伸びないかもしれないよ」

「いいえ、百城さんはまだ伸びますよ。景さんの強みを盗めばいいんですから」

「……え？」

俺は親父にはなれなかった。

だがな。俺は親父の強みを沢山盗んでいったんだよ。

百城さんが景さんになれなくても、景さんの強みをいくつか盗むくらいはできるはずだ。

そう信じてる。

ずっと信じてる。

あんたが、百城千世子だからだ。

その仮面に見えるあんたの素晴らしさを、信じてる。

景さんが百城さんを、百城さんが景さんを、もつと最高に美しいものに変えてくれると信じてえ……いや、信じてる。

何故ならば。

1 + 1 = 2。

俺が見惚れた二人を足し算したら、なんかよく分からん内にすげーことになって、

もつと素晴らしいものが生まれるに決まってるからだ。

「俺は百城さんの能力を理解してます。」

現段階でも最高です。いくつ褒め言葉を並べても足りません。

でもそれは、百城さんの良さがもう天井に辿り着いてることを意味しません。

百城さんはもつと素晴らしくなれます。

俺はもつと百城さんを好きになります。

と、いうか。

百城さんがこの程度の高さの実力で満足して足踏みしてたら、ガツカリじゃないですか」

「大丈夫です。自分を信じて。百城さんはそんな情けないことにはならない人ですよ」

百城さんが一瞬、すつと真面目な顔をして、呆れた風に微笑む。

「英二君はさ、精一杯走ってる馬の尻叩いて、

『お前の限界はこんなところじゃない、もつと速く』

つて言いそうな人だね。根性論、精神論じゃなくて、才能論で」

「もつと速く走れない馬にそんなことは言いませんよ。」

ただ、遅い馬にも期待はします。俺の見切りを超えてくれたら、きっとそれが最高で

す

「優しいんだか、残酷なんだか」

最高の俳優になる、と確信して俺が見惚れてる人がいる。

最高の俳優になってほしい、とすがるように俺が祈る人がいる。

どっちも好きなんだよ俺は。

ただ、百城さんとか景さんとか、そういう人の演技は……本当に、心奪われる。

だから、きつと特別なんだろうな。

「私が情けないことになるかどうかは、私だけを見てれば分かるよ。きつと」

百城さんがバミリの位置まで移動する。

それと向き合う位置に、茜さんが移動していた。

おいおい。

茜さんがガチガチに緊張してやがる。

あれじゃあ演技もトチるぞ。

肩の力抜けよ、つたく。そう思って、茜さんに話しかけた。

「茜さん、頑張ってください」

「ん、お、おお、もちろん、頑張るやんで」

「言葉遣い変になってますよ。リラックス、リラックスです。俺も見守ってますから」

「せ、せやな……落ち着いて、落ち着いて……」

駄目だこりや。

ん？ どうした百城さん、肩叩いて。

「英二君は優しいよね」

「え？ いえ、百城さんほどでは」

「私はそんなに優しくはないから」

「ご冗談を。百城さんは演技抜きにしたって優しい人ですよ、俺の目は誤魔化せません」

百城さんが何やら言い淀む。

え、何その反応。

何やら言い淀んだ百城さんが、少し悩んで言葉を選び、一言にまとめて言った。

「英二君が見誤らないのって、才能と能力だけじゃないかな」

えー。いや百城さんの性格評は絶対間違ってるねえって！ 信じろや！

百城さんが、視線を俺から茜さんに向け直し、握手を求める手を差し出す。

「よろしく湯島さん。これが初日最後の撮影になるだろうから、いいカットにしようね」

「よろしゅうな。『スターズの天使』の胸を借りるつもりでやるわ」

「私が天使じゃないことは、私が一番よく知ってるんだけどね」

「……？」

茜さんが握手で応えて、百城さんが軽くトークを始める。それが茜さんの緊張を少しずつ抜いていくのが分かった。

流石天使。

トーク力は俺の一万倍だな。

やっぱ優しい人だっであんた。

俺はぼちぼちカメラの邪魔になるんで、少し退がって22人のクラスメイトに囲まれたそこで始まる、百城さんと茜さんの初共演を見ることにした。

しかし服飾作業進まねえ！

撮影の平常業務こなしながらじゃたかが知れてんな。

撮影が終わってから、夜になってから本腰入れよう。

っと、助監督が俺呼んでるな。何用だ？

「朝風さん、千世子ちゃんがああいうことするの珍しいですね」

「そうですね？」

「何か思うところでもあるんじゃないですか、湯島さんに」

「前に百城さんが別の撮影で別の女性にしたの見たことありますし、普通じゃないでしょうか」

「そうですね。じゃあ俺の勘違いですね、多分」

何に違和感持ったんだあんた。
まあいいや、二人の共演をじっくり見守ろう。

撮影に参加してる女優のスリーサイズを全て把握しているのは控えめに言っただけで変態では？

不気味な廃校舎を背景に、カメラが俳優に向けられる。

よし、この角度なら堂上さん、和歌月さん、アキラさんのおかげで部屋が隠れる。

サンキューベリマッチ。

お前らがこの先一千万くらいの何か壊しても、何が何でも駆けつけて、俺の手とポケットマネーで直すことを心の中で約束しておくぜ。

「本番、よーいつ」

カチン、とカチンコの音が鳴る。

台詞があるのは百城さんと茜さんだけ。

カメラも基本はこの二人を映す。

だけど。

こういつた一瞬一瞬にも、景さんは“友達を想う学生の自分”をメソッド演技によって引き上げ、『ケイコ』って役を作ってやがる。

景さんが“入った”のが、少し離れた俺の目にもよく見えた。

「良かった、皆生きてたんだね」

撮影が始まり、百城さんが茜さんに歩み寄る。

『カレン』は清廉でコミュ力が高え、周りから好かれるキャラだ。

誰とでも仲良くできるそのキャラが、主人公として真つ先に共に歩み寄るのは自然なこと。

お、演技の嬉し泣きだ。

百城さんの目から、”皆が生きてたことを喜ぶ涙”が流れ落ちる。

撮影で使う涙は二種類ある。

偽物の涙と、本物の涙だ。

偽物の涙は、目薬を差したりして使う。

とはいえ、直立不動で泣いてない人の顔をアップでカメラで撮って、一回止めて、目薬差してから撮影再開してもズレが出る。

1mmも顔ズラさねえで撮影再開とか無理だからな。

だから俳優をうずくまらせる動きさせて一回カット切って、目薬差してから撮影再開、みたいな風に『涙を流し始める瞬間』ってやつを動きで誤魔化さなくちゃならねえ。

逆に言やあ、そういう誤魔化しができる以上、涙を流し始める瞬間に動きを入れりゃいいだけなんだから、涙を自在に流せる技術の価値は相対的に減っちゃった。

これは純粋に技術の蓄積と進歩だな。
先人の恩恵だ。

昔はあんまできなかつたことだろうし。

だがこうして立つたまま、ワンカットの中で泣いてねえ表情から嬉し泣きして涙を流す表情に数秒でシフトできる百城さんは、やっぱり非凡な存在としか思えねえ。

涙を流す技術つてのは、これまた二種類に分かれる。

身体制御か、感情移入。

そのどっちも凡人にはできねえ、かなりの才能を要される方法だ。

感情移入は、景さんがやってるやつだ。

悲しみの感情を思い出し、それで涙を自然に流す。

んでもって悲しみの感情は理性で制御して、悲しい思い出を使つてのに嬉し泣きの演技をする……とかするわけだ。メソッド俳優は。

感情で心の中が大変なことになるんで、精神安定剤とかが必要になってくる。

人間の心は脆く、簡単に自分を見失いかけるからだ。

プロでもそうなのに、薬が必要じゃねえ景さんのメンタルマジでどうなってんの？

誰もが知る海外の伝説的女優、アリン・モンローとかですら、自分の精神状態が不安定になること承知で、自分の人生で最も辛かったことを思い出して泣いてたんだ。

自在に涙を流す手法は、この感情移入が主流。

感情移入で自在に涙を流せる俳優を除外すると、自在に涙を流せる俳優ってもうほとんどいねえってレベルに、希少になるんだぜ。

役に感情を入れ込まねえ百城さんの涙は、完全な身体制御。

”自分をコントロールする”っていう異能だ。

試しに目を動かして泣いてみようとしてみりやいい。

目なんて眼球運動とまばたきと焦点合わせしかできねえもんだってのに、涙を自在に流すなんて無理に決まってるだろ。

目をずっと開けっ放しにして乾燥で涙を流すとか、撮影中にカメラとかの前でやった絶対バレルんだ。乾燥もしてねえ目を意識だけで涙出させるとか、本当に信じられねえことしやがる。

百城さんのこれは、景さんでも同じやり方じゃ真似できねえし、茜さんじゃどんなやり方したって真似できねえ。

景さんは感情を思い出さなきゃならねえし、茜さんは目薬差すとか目を乾燥させるとかのワンアクションと時間が要るからだ。

そして、悲しい記憶を思い出して泣く俳優と違って、悲しみの記憶を呼び起こしてねえ百城さんは、より”それっぽい”嬉し泣きができる。

ほんの僅かな悲しみすら混ざってねえ、本物の嬉し泣きを演じられる。

「生き残ったのは私達だけかと……本当に良かった!」

茜さんに歩み寄って、百城さんが茜さんの手を握る。

高い表現力によって、観客までじんわりと伝わってくる”友達が生きていて嬉しい”
”っていう主人公公カレンの心中。

序盤からこういう演技がありや、観客は十分に映画の流れに乗れるんだよな。

百城さんの演技を見ると、観客は感情が伝わってくる。

景さんの演技を見ると、観客はその感情が自分のことのように感じられる。

百城さんは表現で、景さんは言わば再現だからだ。

最終的に実現に至るのは同じだが、景さんの中の表現力を使いこなせてねえし、演技単体で見りやまだ百城さんが格上か。

涙を流す百城さんが、良演技で茜さんに話しかけ続ける。

「大丈夫!? ケガはない?」

あ、つられた。

あーやだやだ。

茜さんの意識がつけられちゃったな。

百城さんの演技に合わせようとして、思考がそつちに幾分か割かれて、緊張もあつて

茜さんの思考が一瞬悪い形で止まったのが見えた。

茜さんの呼吸が、撮影の呼吸とズレる。

「うっ、うん。私達は大丈夫」

ほら、どもった。

何してんだよつて気持ちと、茜さん頑張つて気持ちと同時に湧いて来る。

”ここでこういう台詞を言つてこういう演技を見せて”みたいに考えてた茜さんが、0・1秒にも満たねえ思考の停止のせいでもり、そのせいで頭の中真っ白になつたのが見えた。

それでも茜さんが台詞を忘れず続けられたのは、茜さんが脚本をしっかりと読み込んでこの本番に臨んだからだろう。

茜さんは努力を怠る人じゃねえからな。

だけど。

「皆こそ——」

そこまですな。

「私達も大丈夫！ 皆で協力すればきつとこの島から生きて帰れるよ！」

どもった茜さんをフオーする形で、百城さんが茜さんの台詞を遮り、振り返つて背後の人物に呼びかける演出を加える形で、自分の台詞で今の一連の流れを完成品に仕上

げた。

百城さんが一気に畳み掛けたんで、どもったことは目立たなくなつた。

茜さんの台詞を遮つて百城さんが台詞言つたんで、今の一瞬がかなりのハイテンポになつて、どもつたのが結果的に目立たなくなつた形だな。

百城さんはさり気なく足を動かし移動して、『百城さんの後頭部』と『茜さんの顔正面』を映していたカメラの中央に自分を据え、茜さんを自分の体で隠すような位置取りで、自分を映した。

茜さんが隠れたことで、結果的にそのカメラには百城さんだけが映る。

振り返つて背後の仲間に呼びかけるような百城さんの動きは、そのカメラに最高の形で映されたことだろう。

何せ百城さんだけ顔が全部映つてる形だ。

視聴者は画面のどこ見りやいいのかわかる。ハッキリと分かる。良い画だつてことだな。

周囲にある4カメラがどこにあるのか、何を映してるのか、どこからどこまで映してるのか、その全てを理解してやがる。

だからこそ、最高の画が撮れる。

他人のNGを自分を映えさせる一要素に昇華させやがった。流石、百城千世子。

「うん、OK」

「カット！ OKです！ OK！」

カメラが止まり、監督がお疲れ様と、周囲に声をかけ始める。

15:20。撮影一日目、予定より三時間早く終了。

「ん、あれ？」

俺の脳内に疑問が湧く。これで今日の撮影終了？

……はて。少し監督と話してみるか。

こりやなんか、ちよつとどうかと思う。

いやそうする理由も分かるけどな。

流石に裏方スタッフが全員スターズ側で、オーディション組の味方が一人も居ねえつ

てのは、あんまりにもかわいそうだろ。

現在、18:30。

「何の成果も掴めなかった……美術監督の権力弱え」

監督と話して、梨の礫で、とりあえず仕事片付けて、また監督と話して、梨の礫。なんでもできずに戻って来ちまった。

茜さんにとりあえず謝ろう。

あークソ。

期待されてんだろうなあ。

朝風英二なら交渉してくれるはず、とかそんな風に。

気が重え。

俳優さん達が寝泊まりしてるロッジに移動する。

「はあ、あかん」

お、茜さんの声。

「完全にやっでもうた。

台詞どもったんをOKされるなんて……

ただでさえ私達オーディション組は見せ場少ないのに」

「いつまで言っただよ。

気にし過ぎですよ、千世子……さんがフォローしてくれてたし、目立ってないって」

「スターズ……ナメてたわ。

真咲ちゃんも見たやろ。アキラのシーン」

「……」

「私かてそれなりに現場慣れしてるつもりやったけど。」

撮影の規模と雰囲気は飲まれて、自然な芝居もできひんかった」

あつちだな。声が聞こえる。

「一方、スターズ俳優はともかく撮影がスムーズすぎる。

踏んできた場数の違いを思い知らされる……ただの美男美女ちゃう」

茜さんと源さんの声も聞こえたな。会話中か。

「このままじゃ残りの撮影もスターズ組に飲まれて終わってまう。

私達は元々期待されてへん。爪痕残さな、ほんまに引き立て役やで」

茜さんもやっぱ、そういう空気は感じてたか。

「まだ初日だろ。ここからスよ俺達は」

その意気だぜ源さん。

あ、いたいた。

手すりによっかかって海見てたのか、二人とも。

「こんばんわです、お二方」

「あ、英ちゃん」

「英二さんじゃないスか。お疲れ様つす」

二人にまず、頭を下げた。

「すみません、監督に提言したんですが百城さんの判断の方を優先されてしまいました」

「え？」

「え？」

「え？」

ん？　なんか話が噛み合っていない感じがすんな。

「あの、今日の茜さんがどもってしまったあそこでのことなんですけど」

「……あ、あー、たはは、情けないところ見せてもうたな、英ちゃんに」

「いえ、そういうこともあるかもしれないとは思ってました。」

緊張されてましたからね。どうかお気になさらないでください」

「でも英ちゃんは、千世子ちゃんは信頼してるやろ。」

私に対してしとるみたいな心配はしとらんし、不安も持つとらんかったはずや」

「そうですね。百城さんならそういうことはなかったでしょう。」

でも茜さんは茜さんで、百城さんではありませんし。子供みたいなことは言いません

「よ

「……」

「俺はいつも茜さんを応援しています。それは変わりません」

茜さんが溜め息を吐いて、源さんが俺の頭を掴んで脇に抱えてきた。

おい何さらす。

「そこは嘘でも何か、百城千世子より茜さんが上みたいに言えよ」

「俺そういう嘘はすぐバレる上に毎回口くなことにならないんですよ、なんでか」

「ああもうっ」

離してくれた。

あのなあ。

才覚や能力に感嘆せずにはいられねえ俺が、薄っぺらなお世辞並べてどうすんだ。

正直に、誠実に接して、その上で友情を理由に応援する。

それ以外に何が出来るっつてんだ。

俺はな、茜さんの演技が好きだったのも嘘じゃねえんだよ。

それが嘘じゃなくて本当だって信じてもらえてるから、俺達はダチやれてんだ。

「ともかく、すみません。」

茜さんの今日の撮影、撮り直し頼んでたんですが駄目でした」

「えっ、英ちゃんそんなこと頼んでくれてたん？ 嬉しいけど……」

「はい。茜さんと百城さんが喧嘩する可能性もあつたらと思うと、それが怖くて」

「え？」

「え？」

「え？」

何か噛み合ってねえな。

「だって、今日の撮影三時間早く終わってたじゃないですか。撮り直しの余裕絶対ありますよ」

「——あ」

あれ、気付いてなかったのか。

そこまで緊張してたのか？

余計なこと考えてる余裕がなかったのか？

……オーディション組の感情部分をかなり読み違えてたみてえだな、俺。

「撮影はテスト、本番、NG出たら撮り直しの三段階です。」

NG込みで撮影スケジュールは組まれています。

NG一回くらい出しても撮影時間的には問題ないんですよ。

「現に、今日は茜さんのNGで撮り直ししなかった分、三時間早く終わったわけですから」

「ああ、そや、確かに！」

「明日からはちゃんと認識しておいてください。」

今日は緊張で失念してたかもしれませんが……

茜さんも監督に撮り直し要望するのもいいと思います。

今日みたいに、百城さんの名演でOKが出されてさらっと流されるかもですから結構重症だな。

そこに疑問を持ってねえのはちと危険だ。

茜さんがどもったのに、それをNGにされず、撮り直しもなく、OKされたこと。撮影が予定より三時間早く終わったこと。

そこは無関係じゃねえんだよ。

おかげで茜さんのどもったシーンが全国の劇場で流れることは現状ほぼ確実だ。

百城さんの名演はおかげで引き立ったが、見るやつが見りや茜さんのミスはひと目で分かる……だから、俺は監督に撮り直し頼みに行ったんだよ。

駄目だったけどな。

クソ。

「千世子の奴、そうなるって分かってて、撮り直し言い出さないでスルーしてたのか……!？」

源さんが、怒りを露わにした。

「源さん。最終的にOKを出すのは監督です。百城さんではありません」

「っ」

「茜さんがミスをしようと、しまいと。」

百城さんがそのフォローをしようと、しまいと。」

最終的にその瞬間を映画に使うかの判断は、監督がします。」

茜さんに芝居やり直しの機会を与えるかの権利も。」

百城さんのフォローの結果出来た予定外の映像をOKにするかの権利も。」

監督にしかありません。」

そして、OKにしてしまうか、NGにしてしまうか、手塚監督は選択しました」

「……」

茜さんに挽回のチャンスを与えるんじゃないかと、茜さんのミスを百城さんがカバーした流れを、映画本編に使うと、そう選択した。」

「その理由は……」

「オーディション組をスターズの引き立て役にするためでしょ。分かってんすよ、そんなこと！」

怒るエネルギーがあんなら、芝居に噴出させとけ。」

この逆境を正しく認識して、あがけ。」

そうでもしなきゃきつと、この状況で、あのスターズを相手にして、敵うわけがねえ

ぞ。

「ただ、百城さんはより良い映像を求めます。」

かつ私情で動かず、広い視点を持つてる人でもあります。他に理由もありそうですね」

なんだかんだ負けず嫌いで。

自分一人が撮影を支えてるって自負があつて、気負つてて。

それが空回りせず、良い映像に直結させられる技能がある。

百城さんは、一番多くのプレッシャーを背負い、一番多くのものを見て、一番多くのことを考えてる人だ。

「他に理由があるつての何かよ。英二さんから見ると、別のものが見えてるんすか？」
「いくつか理由は考えられますね。」

百城さんの撮影を巻く撮影を予定より早く終わらせることだが、撮影日程は基本極端にクオリティが下がらない限り、早く終わらせるほうが理想的。それは不測の事態に対応する余裕になり、映画全体のクオリティアップに使える最後の時間にもなる。癖とか。

オーデイション組を引き立て役にするのは企画レベルでの意向なので……

百城さんは監督やPが予定通りに作品を作る助けをした、とも考えられます。

フオローしたのは確実に”撮影仲間を助けよう”って意識があったと思いますよ。百城さんが自分の損得抜きで共演者を助けるのは、いつものことですね。

何より、監督がOK出すかNG出すかのラインを見極めつつ、周りに周知させたかったのかと」

「はあ……色々考えてるんですね」

「『この撮影はこういうのも監督がOK出しちゃうよ』

って周りに伝えようとしたものの、伝わってなかった可能性があります。

オーディション組の緊張の度合いは百城さんもまだ測ってる最中なのかもです」

色々考えてると思うんだよな。

”オーディション組をスターズ組の引き立て役にして撮影する”ってのは、スポンサーやプロデューサーの要望を聞いた監督の意向で、百城さんはその意向を綺麗に拾ってたと思うし。

実際、茜さんのミスのせいで、その直後の百城さんの名演が目立ったのも確かだ。

「英ちゃん、千世子ちゃんのこと深いところまでよく分かるとるんやな」

「一緒の仕事をこなした数が多いと互いのことが大体分かってくるからね」

「ふーん」

「おかげであつちも俺のこと分かってくれてて助かります」

「私は売れんかったからな。」

英ちゃんとも付き合い長いだけで現場一緒だったのも数えられるくらいや。

今一番売れとる女優の方が、そら英ちゃんの理解度は高くなるんかもな……」

「何言ってるんですか。」

茜さんはここから売れるんですよ。

ここから大女優になるんでしょう？ 俺はいつも信じて見守ってますからね」

「うっ、ちっさい頃の話を引き合いに出すのは卑怯やん……」

へこたれてんじゃねー。

頑張れ、気張れ、マイフレンド。

百城さんほど仕事に来てねえ自分に劣等感覚えてしよげたりしても、変に落ち込む必要とかねえんだって。

そうなっても、俺は必ずあんたを励ましに行くぞ。

「千世子の巻く癖か。俺はその辺りがデカそうな気がするんすよね、なんとなくですけど」

「俺が予想してる理由全てが複合してるって可能性もあります。曖昧に見定めましよう」

「私が単純に千世子ちゃんに気に入られとらんとかもあるかもやしなあ」

茜さんの性格で嫌われるってあんまねえ気がする。

アキラ君とか茜さんとか、昔から付き合い合がある人は皆性格良いと俺は思ってるしな。

……あれ？ これ俺が無意識に鼻肩してたりすんのか？

「茜さん」

「なんや真咲ちゃん」

「英二さんの言ってる”理由”は九割がた間違ってる気がします。」

なんとなく、そう思うだけですけど。

ただ、それだけじゃねえ気がします。

俺が百城千世子を見た限りでは、そう思わざるを得ないんですよ」

「なんや、はつきり言い」

「『茜さん』で、『百城さん』だったじゃないですか」

「ん？ 何言……あ、あー、あー……なるほど、せやんな」

「お、源さん視点の見解ですか。聞かせてください。」

「こういうのが多数人チームの醍醐味ですよ、違う視点の合議というか」

「……えー」

「俺は何も言えねえです。フェアじゃねえんで」

「あれ？」

「千世子ちゃんにちよつと負けた気がしてたんやけど……」

なんかしょーもないことで負け犬感薄れたわ。もうちよい頑張れそう」

「オフィス華野専用の暗号でもあるんですか？」

同じ事務所の二人だけで分かり合ってる感じになられるとちよつと困る。

「つたく、妬けるぜ。」

だが、茜さんの業界での味方ってちゃんといえるんだって思えて、少し嬉しくも思えるんだよな。

友人が一人だと心配になって、友人に友人がいるとほんわかして安心するもんだ。

「あ」

お。何か気付いた顔したな、茜さん。

「英ちゃん、今日のお仕事終わったんやな」

「はい。とりあえず東京に送る服も完成しました。」

明日の撮影の準備も完了し、島のミニチュアの作成に入ってます。

今日は結構夜更かしするつもりだったんですが、早く眠れそうです」

「ああ、なんかこれが一番の理由な気がするわ」

「どれですか？ どの理由だと思ったんですか？ 流石茜さん、俺が気付かないことに

も……」

「これ言うのは、なんか悔しいから言わん」

「あれっ?」

「……あー、俺も前言撤回。」

千世子さんがああした理由の一番が癖でそうやったのかもって発言、撤回します」

「真咲ちゃんも分かるかー。いや本当あれ何考えてんのか分からん子やな」

「英二さんが一見常識人に見えてとんでもない人だからじゃないんすかね」

「ああ、千世子ちゃんも普通の人と同じ感覚で制御するのが無理になつとんやな……」

「二人ともわざと俺に分からないように話してません?」

「まさかまさか」

「そんなそんな」

分からねえように話してんだろ! 海に沈めんぞコラ!

「英二さんが悪いってわけじゃないんですけどね……」

俺も第三者だから分かつてるみたいなどこありますし。

ただなんつーか。

英二さん頑張つてというか、夜風と千世子さんの扱い頑張つてというか」

「ああ、そこは大丈夫です。何も心配要りませんよ。俺に任せてください」

「そこで根拠なく迷いなく断言できる英二さん本当羨ましいつす」

根拠はあるぞ。

俺がその人を大切に想つてる。

その人が俺を大切に想つてくれる。

これで上手いかねえわけがねえだろ？

「うち、百城千世子のことあんま嫌いや無いんやな。今なんか、ふと思つた」

「ですよね！ いい人なんですよ百城さん。」

優しいですし、可愛らしいところもありますし。

芝居や仕事抜きでの百城さんの良さももつと周知されてほしいところです」

「私はどうなん？」

「そりやもうめっちゃ大好——」

「ああ、言わんでええ、言わんでええて。前に一生分言われたからもうええわ」

「えー……」

ちえつ。

「大変スね、英二さんも」

「あんま俺をからかうようだと、源さんの制服もバージョンアップしてあげませんよ」

「え」

「皆さんの服作ったのも、それを手入れするのも俺なんですから」
「そうなの!？」

「衣装担当扱いで女性の方と男性の方を配置してもらってますけどね。」

肩書き上はそうでもありませんけど、事実上衣装・美術・造型は全部俺の傘下です」
「ああ、なんで衣装合わせの時にいたのかと思つたら……色々やってんすね。すっげ」
「色々やってると、他に活かせるんですよ。」

服作りはスーツ作りに活かせます。

怪獣の体の硬いトゲを作る技術で、ミニチュアの街を作ったこともあります。
美術で撮影セットを作った時に弄った布で、服を作ったこともあります。

技術とは多分野を混ぜると壁の突破ブレイクスルーが生まれやすいんですよ。

俳優を支えるなら、全力であれ、真摯であれ、多様であれ、つてことですね」

ちよつと親父の受け売りだけだな、これ。

「今日、あんたが斜面に登り始めた時、スターズが誰も何も言つてなかつた理由が分かつた」

「?」

「英二さん、信頼されてんすね」

「……そうですね。そこは本当に、ありがたいことです」

俺は監督や俳優に信頼されてねえと、俺が撮影に関われやしねえからな。

若造が、と俺を侮る人がいる。

若すぎる、と俺に仕事を絶対に振らねえ人もいる。

俺が撮影に関われんのは、監督とか俳優とかが俺を信じ、俺の腕を求め、俺が作る何かを望んだ時だけだ。

スターズの若手俳優達は、皆俺を信頼してくれてる。

嬉しいよな。

最高だよな。

歳が近いってのもあるが、誰も俺を見下してねえ。誰も俺の仕事を疑わねえ。

それでいて、転がり落ちた俺を受け止めてくれたりと、俺をちゃんと助けてくれる。

そういう人達こそを、俺は輝かせてやりてえと思うんだ。

「俺は物を作ります。

物を作ることでしかできません。

だから、絶対に必要なもの、なくてはならないものが二つあります」

その二つがなけりゃ、俺は絶対的に無価値だ。

「俺が作ったものを見て喜んでくれる人。

そして、俺が作ったものを使って、輝いてくれる人です。茜さんや、源さんのように」

茜さんがにっこり笑う。

源さんが気恥ずかしそうにして、頬を搔く。

何でも作るさ。

服も。

舞台も。

小道具も。

報酬は、輝いてる茜さんや源さんの姿でいい。

「さあ、パワーアップイベントといきましょう。

今日一日で24人分の動きを見せていただきます。

身長、体重、筋肉、骨格、技能。

現段階での24人全員のデータは把握できました。

撮影衣装を皆さんが脱いだ今夜の内に、明日から皆さんが着るこの衣装を強化します」

「出た出た、英ちゃんの長期撮影特有のアレ。待ったよ」

「おいおい、マジかよ」

「明日までに源さんのその服で出せる50m走の記録、1秒は縮められるでしょうね」

「どういう改良するかは、明日朝改めて説明すりゃいいか。」

とりあえず撮影疲れたろ。俳優さん達、ゆっくりお休み。

「カメラが動く時間の外側は、俺の時間です。皆さんの良さ、引き出してみせますよ」
飯は食った。

さーで、24人分の服アップデートして、俺もさっさと寝るか！

「茜さんの撮影衣装ここに畳んであるやつですよ。じゃ、持っていきます」

「あ、ちよ、ちよい待ち！ 今うちが脱いだ撮影衣装、下着が間に……！」

「え、あ、う、す、すみません。一回ここ離れます」

「うーわド変態！ 何を持ってこうとしてんだよ！ 朝風エロ児！」

「源さん！」

うるせえな！

特撮で言えば強化イベント（なお登場人物全員が強化されるため相対的に見た場合に他の人より強化された者は一人もいない模様）

あれ。

夜間散歩してたら面白いもん見つけたな。

烏山さんと景さんだ。

浜辺で烏山さんがスマホのカメラで景さんを動画撮影してやがる。

何やってんだあれ。

撮影初日の夜くらいぐっすり寝ときゃいいのに。

「どうかしましたか、お二方」

「あ、英二くんだわ」

「どうも、朝風先生。夜風の特訓に付き合っているとところです」

「その先生というのはあまり……まだ俺には相応の実力が無いですし」

「はっはっは、ご謙遜を！」

「いい声してますよね烏山さん。近くにいと耳が少しキーンとします」

「ありがとうございます！」

いい声量してやがる。

耳が痛え。

しかし特訓か。何やってんだ？

「そうだ英二君、目を携帯のカメラに入れる方法って何かある？」

「切り刻むか乾燥させるかですね。」

特に眼球はその20%がジェル状の液体なので、その水分が真っ先に飛んで……」

「えっ……あ、ううん、眼球をカメラに入れる方法じゃなくて」

「視点の話ですか？」

「そう、それ。」

黒山さんが千世子ちゃんのことを、

『自分の目玉を捨てて自分を俯瞰する無数の目玉を選んだ』

って言ったの。それって、カメラのことなんじゃないかなって」

……ほう。

やるな、初日で気付いたか。

あれ百城さんみてえな撮影現場俯瞰タイプでも気付くのに時間があるもんなんだが。

全く別タイプの人間が頭の中で処理してるだけのテクニクを、観察だけで気付くとは、景さんには見る目や理解力の才能もあんのかもしれない。

大半の人間は、百城さんの俯瞰能力を認識すらしてねえからな。
「なるほど、分かりました。」

だから烏山さんにスマホのカメラで撮ってもらっていたんですね。

スマホのカメラの視点を得るために。

自分の目をカメラに付ける感覚を得るために。

カメラが映す範囲に綺麗に自分を映す技術を習得するために。

百城さんの脳内技術を見て盗み、身に付けようとしていた……そういうことでしょうか」

「私はこれが良いと思ったんだけど……」

自分をカメラの中に入れることができて、少しズレが出てしまうの」

「俺も良いと思います。この方針は間違っていないと思いますよ」
たまげたな。

もう『メソッド演技とカメラ視点認識の両立』は問題ねえのか。

メソッド演技とか、感情移入が激しすぎる演技法の弱点は、熱中しすぎちまうことだ。

他俳優に蹴り入れてた景さんとか、まさにそうだな。

熱中しすぎたせいでカメラの撮影範囲からついフレームアウトしちまう、とかのNGだつてあるのが困りもんだ。

だからこそ、役になりきる俳優には、自分を客観視して制御する技能が要る。

景さんはもう、メソッド演技で役になりきる自分と、そんな自分にカメラの撮影範囲を認識させる客観視の自分を両立できてるってことだ。

もはや、『二重人格の自分』を使いこなせてると言つても過言じゃねえだろう。

百城さんだな。

あの人の影響が、あの人から盗んだ技術が、景さんにガッツリはまった。

百城さんが素晴らしい教師になつて、景さんがしつかり成長して、俺も鼻が高え。

黒山さんは『幽体離脱した幽霊のように上から見下ろす視点』を提示した。

百城さんは『カメラ等、周囲から自分を見る無数の視点』を使つていた。

景さんは後者を選び、身に着けようとしてる。

自分に何が必要なのか、目の前に並べられたものの中から何を選んで自分に付けるべきか、それを本能的に分かつてる証拠だ。

たまんねえな、本物の天才つてやつは。

この技術が、完全に習得できれば。

景さんは自然に飛び回り走り回つてののにカメラの撮影範囲から自然に出ていかな

い……なんていう、矛盾したようなとんでもねえ演技も可能になる。

百城さんから盗んだ技術で、それが出来る。

そいつは、『極めて自然な演技』を“理性的に使いこなす”っていう最強コンボの第一歩だ。

「どうしても私だとほんの少しズレてしまうの。」

私の目玉が、どうしてもカメラレンズの中に綺麗に入らないの。

千世子ちゃんはどうして、あんなにも沢山の視点からズレなくものを見れるのかしら」

「ああ、それなら俺分かりますよ。百城さんと一緒に仕事するのもそこそこ長いですから」

「えっ、そうなの？ 英二君、教えてくれる？」

「烏山さん、景さんを撮っていたそのカメラを貸してもらえますか？」

「どうぞ、朝風先生！」

カメラの前でぴーすぴーすしてる景さんの録画映像を確認する。

しかし綺麗な服着てなくても、普通のシャツ着ても、景さんは素材が良いから普通に美人に見えるな。

今は残念美人臭が強いが。

「……朝風先生、ひよつとして夜風のシャツを選んだのは朝風先生ですか」

「いえ、違いますよ。」

何故そう思ったんですか、烏山さん」

「夜風が『アサガヤ』とだけ書いてあるシャツを着ていて。」

朝風先生が『753』とだけ書いてあるシャツを着ているからなんです」

753Tシャツは着てるとリラックスできるし塗料で汚しても罪悪感ねえんだぜ。

「俺はそもそも自分が着るシャツにあんまりこだわらないというか……」

気楽なのがいい、シンプルなのがいい、つてタイプなので。」

753Tシャツは結構お気に入りです。」

趣味物なので2500円くらいはしますけどね。」

あとはそうですね、もしかしたらシャツの趣味が景さんに近いのかもしれない」

「ほら烏山くん。」

私を知る限り最もハイセンスな英二君に近いんだから、私のシャツもきつとハイセン

スなのよ」

「えっ……いやその……それはどうだろうか……」

いや夜風のシャツがハイセンスだとは断じて認められん」

よし、映像チエック完了。」

「景さんはどういいうイメージで撮影範囲を認識していらっしやいますか？」

「イメージ……？」

「距離感というのは重要です。」

たとえば一般人に『5mを視界の中で区切つて』と言つたとします。

でもこれができる人はほとんどいません。

普通の人は、視界内の全てをm単位で正確に脳内で区切る、ということができません。

だからこそプロは、目で見つたものを頭の中で処理する時、専用の定規を使います」

「定規？」

「それは人によって違います。」

『目に焼き付いてる1辺1mの立方体』であつたり。

『頭の中で長さを測る紐』であつたり。

『感覚的に理解している空間の体積』だつたりします。そうですね、このスマホだと……」

鳥山さんのスマホを調べつつ、瞬時に計算。

「イメージセンサがAPS-Cで3.2%撮影基部がどうなつてるかを説明している。」

撮影時は横向きに使つたので……

イメージセンサー水平が4 m m。

イメージセンサー垂直が3 m m。

カメラ内の焦点距離が3.99 m m。

今してた撮影だとカメラ（烏山）被写体（夜風）間の距離が5 m m。

この距離でカメラが捉える範囲は……

水平方向5 m l c m 2.53 m m。

垂直方向3 m 7 5 c m 9.4 m m。

対角線6 m 2 6 c m 5.66 m m、ですね。これが俺や百城さんに見える世界です」

「全然わからないわ」

「すみません、ここから説明入れます」

木の棒を拾って、地面にカメラが捉える範囲を描く。

「夜風、これは大変な人を頼ってしまった感じじゃないか？」

「覚悟の上よ」

「しかし、朝風先生は夜風寄りの人だと思ってたら、もしかしたら百城寄りなのか」

「うん、そうなのかも」

「どういう解釈だ。」

まあいいけど。

「はい、書きました。この砂浜に書かれた線の範囲が、カメラが捉えている範囲です」
「意外と狭いのね」

「ですね。」

このスマホのカメラだと、デフォルトで水平63°、垂直50°。
ズームだとカメラ被写体間距離がそのままスライドしていく感じです。

人間の目の視界が上側60°、下側70°、左右合計120°です。

カメラは人の目に近いですが、上側が110°、下側が120°、左右合計値で120°
ですね。

広角カメラ等でない通常のカメらは、人間の目より少し見える範囲が少ないんです」

「あ」

「おわかりになりましたか。」

そうです、それが景さんがおっしゃられていた、『ほんの少しのズレ』の正体です」
おつそろしい話だ。

この人、自分の目玉がカメラレンズの中に入りきってなかっただけで、自分の目玉を別の場所に貼っつけて正確に見るって部分だけは、極めて正確にやってやがった。

だからこそ、指導が難しい。

黒さんがとにかく現場で経験積ませようとするわけだ。

どこで躓いてんのか分かり辛えこの美人さんは、本人が自分で勝手に壁を乗り越えて来るのを待つのが一番楽な気がしないでもねえ。

「百城さんにズレがないのは、あの人が理性の人だからです。

カメラ性能とレンズのサイズを把握してるあの方は、全てを計算しています。

本来、カメラの撮影範囲というのはあやふやです。

俳優がしっかり意識していてもm単位のズレが出ることがあります。

多少であってもカメラを意識できる俳優さん達は、その時点で有能なんですよ。

でも、カメラの性能を把握しておけば、今の俺のように精密な撮影範囲計算ができる

んです」

「……すごいわ、千世子ちゃん」

「だからこそ、百城さんは動き回っても常にカメラの中心にいるんです。

リアルタイムで全てのカメラの撮影範囲を把握する。

それを彼女は、徹底した下調べと計算によって成立させています」

「私には、できそうにないわ。どうしよう」

「そうですね……手っ取り早いのは、動かない撮影です」

「動かない撮影？」

「動く俳優を、動くカメラが撮る。

そういうシーンでカメラの撮影範囲を精密に把握するのは困難です。

どつちも動いてますからね。

でもカメラと俳優が動かないシーンなら、方法はあります。

カメラマンさんに頼んで、撮影前にカメラをじっくり使わせてもらえばいいんです。

カメラの視点で見えるものを、撮影前に頭の中に叩き込んでおけばいいんですよ」

「あ、なるほど」

「これなら、カメラが映す範囲を見間違えることはありません。

それと、そうですね。

こうしてカメラの映す範囲を理解できたなら……

それを景さんなりに昇華して、動きながらの撮影もできれば最高だと思えます」

「カメラの撮影範囲は見れば覚えられるかもしれないけど、その次は難問だわ……」

カメラの撮影範囲は一回見りゃ覚えられる自信があるか。

とんでもねえなこいつ。

「ワイアーズ・ラポプロ俳優、プロモデルの職業訓練とメンテナンスを行う為のアクティ
ングレックススタジオ。熟練の現役俳優が主宰している。だと、アンカーポイントとい
うのを使ってみましたね」

「ああ、俺もアンカーポイントは使ってますよ、朝風先生」

「本当ですか？ では烏山さん、景さんに教えてあげてください。」

「お願いします。裏方の俺が教えるよりも、烏山さんが教えた方がいいでしょうから」

「お願い、武光君」

「ふむ。俺のはやや我流だが、まあいいか」

「役者なら、技能は役者から盗むもんだ。」

「夜風、サイコロの中にいる自分を想像してみろ」

「うん」

「サイコロの頂点はいくつある？」

「八つあるわ」

「その頂点がアンカーポイントだ。」

「お前は今、その八つの点に囲まれた中心にいる。」

「目を開けてても、イメージのサイコロがうつすら見えるか？」

「うん、分かるわ。ちゃんとイメージのサイコロも見える」

「やっぱ実経験者の説明は分かりやすいな。いいぞ烏山。」

「こうして空間に点を打つことを、アンカーポイントと言う。」

「目に見える景色に、頭の中で点を打つんだ。」

これで大まかなカメラの撮影範囲が分かる。舞台の上では立ち回りにもかなり役に立つぞ。

何せアンカーポイントは床にも打てるからな。

点を打って、点と点を線で結んで、空間で把握する。

演出でライトをほとんど付けてない時、これができると舞台から落ちずに済むこともある」

「アンカーポイント、アンカーポイント。覚えてたわ」

「まあ暗い舞台だと蓄光テープ使うから誰も落ちないんだがな、最近の舞台は」
「えっ」

まあ便利な道具使った方がいいよな、基本は。

「アンカーポイントは、舞台の上では活動範囲の調整においても多様だ。

例えば、三人の舞台俳優がいるとする。

主役一人に舞台上の真ん中八割を駆け回らせる。

脇役二人に、左右を一割ずつ割り当てる。

割り当てた範囲が広い一人が主役だと、観客は一人で理解するんだ。

この空間の計算にも、アンカーポイントは使える。

空間に点を打ち、点と点を線で結ぶ……合わない人もいるが、有用な技術だと思うぞ」

「あ。そうだね。カメラの撮影範囲を、点と線で視界の中に作れば……」

お、よし。景さんが感覚的に”自分に使える何か”を身に着けたな。

「そうです、そのとおりです、景さん。」

ありがとうございます、烏山さん。景さんは何か掴めたみたいですよ」

「いえ、朝風先生の頼みですから。」

それに俺も、こいつの演技がどこに行くのか、どこまで行けるのか、見てみたいんですよ」

「視界の中に、赤い線と赤い点を付けて……うん、私、なんだかいけそう」

「いけそうみたいですね、景さん。」

視点を増やして俯瞰する技術、その実用が。

烏山さんの手元のスマホが僅かに動けば、それに合わせてアンカーポイントを動かす。

カメラはズームもするので、それも把握してアンカーポイントを動かす。

こうすれば、カメラの撮影範囲を常に意識できます。あとは、景さんの才覚次第ですね」

「二人とも、ありがとう」

「夜風、アンカーポイントはあくまで思考の補助だ。」

こいつだけでカメラの映す範囲を精密に理解できるわけがないが……

明日の撮影、俺も脇で見ることにする。お前の演技を楽しみにしてるぞ」

「うん、頑張る」

視界の中に点を打つ、線を引く。

烏山さんからしても、秘蔵の技術でもなんでもねえ、そのレベルの技術なんだろう。

基本をおろそかにせず、細かなミスを防ぎ、自分を次のステップに進ませるための意識の持ちようを、俳優に根付かせるための技術。

つまり、「凄腕の初心者」である景さんに、「凄腕の名女優」である百城さんの技術を固着させる繋ぎの技術になるってわけだ。

きつとこいつは、基本レベルだからこそ役に立つ。

「英二くんはこれが全部数字の計算でできてしまうなんて、本当にすごいわ」

景さんが言う。

思わず笑った。

笑っちゃまった。

「なら俺にできないことができるあなたは、俺よりもつと凄いですよ」

明日の撮影楽しみにしてるのは、烏山さんだけじゃねえんだぜ。

撮影二日目、開始。

千世子ちゃんはまだ遠く。

茜ちゃんとも仲直りできてない。

撮影スケジュールもまだ1/30しか消化してないけれど、まだ俯瞰視点というもの
を使いこなせてるかも分かってない私が、残りの29/30で何ができるのか。

少し、不安になる、

でもそれ以上に、ワクワクもする。

初めての長期撮影は、なんだか楽しくて、私の知らないことでいっぱいだ。

靴を脱いで部屋に上がって、服を着替えて、部屋を出る時に靴を履き替える。

ふと、今の私は私用の靴も撮影用の靴も、英二君製だということに気付いた。

——随分ボロボロですね、その靴。姉弟三人分揃いの靴、作ってきますよ

使うお金で削れるところを削っていくと、どうしても靴は買い換えなことが多かつ
た。

それが、英二くんの目に留まったらしい。

というか、我慢ならなかったらしい。

あつという間に、私とルイとレイの靴が用意されていた。

なんだかかっこいいやつ。

私達三人で色違いだったけど、お揃いなことは造型を見てるとよく分かる、そんな

かっこいいスニーカーだった。

いつ私達の足のサイズを知ったんだろう、と疑問に思つて、聞いてみたら。

——まあ、ボウリングの時に他人をよく見ておくと、靴のプレゼントはしやすいで

すから

マメな人だ。

そう思った。

私だけじゃなく、ルイとレイの靴のサイズも見ていて、三人お揃いのを贈ってくれたあたりに、特にそう思う。

きつと好きな人が出来たら、素敵な物を毎日のように作つて、贈る人なんだと思う。

英二くんに好きな人が、できたら。

あんまり余計なことは考えないようにしておこう。

こう、あれだ。

映画とかでよくあるやつ。

女主人公に女友達がいる、女友達に彼氏が出来て、疎遠になって寂しくなるやつ。

ああいう気持ち私を襲うかもしれないのはちよつと怖い。

でもそういうこと考えてもしようがないから、忘れておこう、今は。

英二くんの作った靴は、私用のやつと撮影用のやつで、少し履き心地が違う。

軽さとか、履き心地とか。

英二くん曰く、いい靴というのは、何十年も使える長保ちする靴とか、どんな場所でも転びにくい靴とか、軽くて動きやすい靴とか、色々あるのかなんとか。

私達三人が英二くんに貰った靴は、靴ずれしにくくて、釘とかを踏んでも怪我しないようになつてて、それでいて軽いものだって言つてたわ。

靴に防刃素材とか仕込んであるのかなんとか。

……。

確証があるわけじゃないけど。

感覚的に、英二くんが作った撮影用のものより、英二くんに貰った靴の方が高価な気がする。

——いいですか。怪我しにくい靴、転びにくい靴つてのはあるんです

英二くんが初日夜に手を入れたらしい私の撮影用の靴は、随分動きやすくなつてい

た。

英二くん曰く、強度をそのままに軽量化する手入れをしたらしい。

軽い軽い。

改良前の靴を一日履いてたから、どのくらい軽くなったのか歩くだけですぐ分かる。
あ。

真咲君と英二くんが話してるわ。

「ま、マジで動きやすくなってる……」

「どうですか源さん、結構改良になったと思いますが」

「え、これどうなってるんですか？」

「関節部分に手を入れました。」

源さんが少し動きにくそうだと思いますので。

ジーンズとか、硬い素材の服は裁断段階から関節を計算して作ってるんですよ。

なので一回バラして、関節に一仕事入れてアイロンを入れて調整しました」

「アイロン？」

「アイロンは一般家庭レベルではシワを伸ばして消すためのものです。

ですが、生地を伸長させて立体的に布を組み立てられるものでもあるんですよ。

オーダーメイドの服だと、こうして個々人の関節の形に最適化するんです。

でなければスポーツ選手の太い腕などに対応できませんからね。

源さんの撮影衣装で手を入れたのは主に肘と膝の関節です。なので走る時の動きが
……」

「ああ、分かる。動きやすいつすわこれ。

服自体が元々軽かったから、これなら確かにかなり速く走れるかも」

私の靴も調整されて軽くなってたけど、他の人も改良されてみたい。

「英ちゃん、スカートいい感じになってたで。あんがとさん」

「スカートの重しウェイトを調整したので、激しく動いてもめくれませんよ」

「たはは、そこ気にしとったの見抜かれてたんやなあ」

「そう思ってるかもな、と思っただけです。

なんかもう……もう！ って感じですよ、デスアイランドの女子制服。

百城さんのスカートと茜さんのスカート、丈が倍くらい違いますよ。

原作は漫画ですから気にしなくていいんでしょうけど、原作再現するともう……」

「おつかれさん。ありがとね、英ちゃん」

「この映画の方針を考えると、パンツが見えるつてのは良くないですから。

スカートの内側は全員見えないようになってます。

皆さんの筋量と運動能力、関節の曲がる角度は見て読み取りましたので。

スカートを手で持ってたくし上げるとかしない限りは、中身は見えないはずですよ」
オーデイション組はほとんど戸惑ってて、スターズ組は慣れた様子で喜んでるように見える。

茜ちゃんも、慣れた様子で喜んでたわ。

やっぱり、とつても仲良いのかな。

「着心地また良くなつたんじゃない？ 町田さん大満足よ」

「服を着て動きやすいかは、

『生地がどれだけ柔軟に伸び縮みするか』

『生地がどれだけ余裕が想定されてるか』

『縫い付けやアイロンかけなどの仕事がどれだけ入ってるか』

等々の要素によつて決定されますからね。結構動きやすく作つたつもりですよ」

「良いね良いね。私この服の内側の肌触り、めっちゃ好きよ」

「ただほら、町田さんはそういうのいいですけど、雨降りシーンとかあるじゃないですか」

「……あー」

「服を軽くする。」

服の裏地、あるいは生地裏側の肌触りを気にする。

よく伸び縮みする素材にする。

そういうのになると、痛みやすくなったり、その、濡れ透けしやすくなったり……」

「うんうん、その女の子への気遣いはグッドよ」

「夏場の南の島だから熱いんですよねここ。」

だから通気性良くしないと皆さんヤバいくらい汗かくんですが……

薄手の生地になるとやっぱ汗や雨の演出で透けるので……男性の方が本当楽でした」

ふと遠くを見ると、色んな人と話してる英二くんの横顔を、お気に入りの玩具を見るような目で見ている千世子ちゃんがいた。

見るだけで楽しいんだろうか。

私もベンチに腰を降ろして、英二くんを見る。

色んな人と話してる英二くんを見る。

……これはこれで、楽しいかもしれない。

「おい英二、動きやすくなってるのはいいけど、襟どうなってんだこれ」

「堂上さん。気に入りませんでしたか？」

「いや、めっちゃよくなってるわ」

「襟の中の芯を変えたんです。」

現在日本の衣服は、使用芯地の90%が接着芯地だと言われています英二が余所のド

ラマの服を作るのに使っていた、世界大戦以降に一気に普及した、接着剤付きの芯地。これを表地と裏地挟んでアイロンをかけるだけで、接着剤が溶けて固まり素早く簡単に堅牢な作りのスーツを作ることができる。服の大量生産の革命。

ただこの服は非接着芯地にしておいたんです接着芯地とは違う、縫製によって縫い付けられる芯地。かつては強度面・着心地・高級感など多くの面で接着芯地に勝っていたが、生産性や価格面で非接着芯地服は接着芯地服に敗北しており、近年の接着剤樹脂の改良によって、強度面でも接着芯地と非接着芯地に大差はなくなつた。

芯地をよりフィットするものに変えて縫製したので、首周りの感触が改良されたんです
すね」

「着心地だけか？」

「いえ。堂上さんが演じるキャラは、堂上さんの性格に近いです。

自由奔放、ともすればだらしない。

気楽で肩の力が抜けていて、常にごく自然体。

24人の中でも、ネクタイを付けず制服の胸元を開いているのはなかなか印象に残ります」

「だな」

「だから柔らかく、奔放な印象を受ける襟にしました。気に入らなければ、いつでも戻せ

ます」

「いや、気に入った」

英二くんもプロだけど、皆プロなんだわ。

英二くんの意図を聞いて、互いの認識をすり合わせてる。

こうして意見をすり合わせてると、英二くんが細かな調整をしてくれて、皆も英二くんの意図を演技に反映したりできるのね。

「和歌月さん、どうですか？

俺なりに改良してみたんですが。

和歌月さんのキャラは制服の上にジャージを着ている、常に袖まくりキャラ。

アクションのたびに、まくった袖が戻ると大変でしょう。

まためくり直す必要がありますし。

ジャージにベルクロを仕込んで、マジックテープ感覚で留められるようにしておきました」

「助かります。私はクラスメイトを殺すために刃物を振り回すキャラですからね……」

「暑さはどうですか？

制服の上にジャージって、結構暑かったでしょう。この季節の南の島ですし」

「はい、かなり涼しくなりました。生地が変わったんでしょうか、これは」

「はい。昨日百城さん見てて気付いたんですが、皆さん服装変わらないんですね。皆さん原作通りの服装のまま変わらない。

和歌月さんも原作通り、ジャージは脱がないわけです。

なので思い切つて、背中側の生地の一部を黒い綿麻のメッシュシャツの素材は絹・綿・麻などが有名だが、冬に暖かい絹に対し、汗をよく吸う綿とシヤリ感が出る麻は夏に向く。乾燥地域の夏向きなのが綿、湿度が高い夏向きなのが麻。二つを合わせメッシュの網目状に仕上げた綿麻メッシュは、その中間でより汎用的な夏向け生地。通気性第一の生地が選ばれたので、デスアイランドのような黒制服でなければ、普通に下の下着が透ける。に変えました。

和歌月さんがジャージを脱いで背中をカメラでアップにしない限り、バレないでしょう」

「背中側によく風が通る感覚があります。昨日とは雲泥の差ですよ」

こうして、英二くんの視点を得ていくと面白い。

英二くんは私とは違うものを見る。

私が気付かなかったことに気付いている。

英二くんの視線を追えば追うほど、英二くんが普段からどのくらい周りを見ているのか、周りに気を遣っているのか、周りの人に何をしてあげているのかが分かる。

これは、優しさだ。

仕事の中じゃないと見えない、英二くんの優しさだ。

俳優みんなに振りまかれてる、彼の優しさなんだ。

英二君は24人分の撮影衣装全てに、ほんの少しの手も抜いてない。

「和歌月さんみたいに、制服の上にジャージやカーディガンを着てる人は他にもいます。

漫画ですからね。そういうところで特徴を出していたんでしよう。

ですから他の人の制服にも和歌月さんと同じ処置を施しました。

上着を脱がないと見えないところに生地張り替え処置を……あ、木梨さん。どうです

か？」

「う、嘘みたいに涼しいです。制服の上にパーカー着てたから、昨日は本当に暑くて」

「すみません、気が回らなくて。」

制服にパーカーは暑かったでしょう。

昨日の撮影中、木梨さんの発汗量は他の人より多かったですからね。

でも今日からは、服による暑さは他の人と変わらないと思いますよ」

「あ、そ、その、ありがとうございませす!!」

「いえいえ、どういたしまして。」

あ、鳥山さん！ 鳥山さんが廊下歩くシーンありますよね。

あそこで烏山さんの靴にこのパーツを取り付けられるようにしておきました。廊下を歩くと『コツ、コツ』といい足音が鳴るようになるパーツです。

「この廃墟、どうやら半ば腐ってて普通に歩くといい音が出ないみたいなので、これを……」

英二くんの愛は、この場だけ見ても全部違うものが24種類はあるわけね。

千世子ちゃんも英二くんの横顔を見てた理由が、ちよつと分かった気がした。

私の目には、英二くんが作ったものは、一つ残らずキラキラと輝いて見える。

英二くんが物を作ってるのを初めて見た時から、英二くんもキラキラ輝いて見える。

なんでだろう。

英二くんを、その周りの皆を見ると、ワクワクしてくる。

「監督！ このアクション、撮影に取り入れませんか？」

「いいよいよよ、入れちゃおっか」

英二くんが服や靴を最適化して動きやすくして、動きやすくなった衣装で、スターズ……堂上さん？ 若狭さん？ 石垣さん？ 名前覚えてないスターズの男の人がバック宙する。

監督がそれを見て、それを映画に取り入れることを決めていた。

いいのかしら。

皆で、映画を作ってる。

互いに影響を与え合いながら、一人がした良い仕事が波及して、映画全体に大きな影響が伝わっていく。

黒山さんは、私にこれを見せたいって気持ちもあつたのかも。

でもなんだか違和感。

ああ、アキラ君がいないのね。

英二くんもしかして、一番の友達がいなくなつて寂しかったりするのかしら。

そうだとしたら、英二くんが寂しく思つてゐることは、私だけが気付いてたりするのかも。

なんて。

「ひゃああああああ!!」

「わっ」

突然、近くから聞こえた絶叫。

そこではパーカーの……木梨？ 林梨？ 森梨？ 名前を覚えてないオーデイション

組の女の子がすごい顔で絶叫していた。

ホラー映画の、死ぬ直前の可愛い女の子みたいなの、そんな顔。

「な、生首が！ 朝風さんの道具ケースの中に！」

「ああ、それは俺の作り物です。驚かせてすみません、木梨さん」

「いやこれ絶対本物ですよ！」

「首を切られた女性の首つてこういう感じになるんですよ。吐き気がするほどリアルですよ？」

英二くんが、珍しい顔をした。

ほんの一瞬、一秒にも満たないくらいの時間、本当に嫌そうな顔をした。

英二くんの顔をじっと見ていた人だけが気付けるくらいの、本当に一瞬。

その生首に通じる嫌悪感を、英二くんが顔に浮かべた、そんな気がした。

「映画なら、本物の生首より怖い作り物の生首にしてこそ、ですからね」

「英二くん……」

「ゆ、夢に見そう……」

「すみません木梨さん。俺の下手際です。」

でも今日の最後の撮影で使うので、木梨さんはそこでもう一度見ると思えますよ」

「ひええ」

英二くんが生首をしまう。

作り物の生首がちよつと見えたけど、ちよつと度を過ぎてくるくらい怖いわ。

「グロさは抑えめにしたつもりなんです……映画のレイティング原作デスアイランド

には首を切断された女性の死体シーンが普通に登場するため、普通にそこを撮ってしま
うとレイティングが上がり、最悪子供や青少年が年齢制限で見られなくなってしまう。
よって、興行収入が大幅に減ってしまう。R15+判定をくれば、15歳未満視聴禁
止に仮面ライダーアマゾンスのように地上波放送時に大幅規制を受けてしまう。R1
8+判定まで食らってしまうと、18歳未満視聴禁止に広告・宣伝・地上波での放送も
ほぼ不可能になる。レイティングを低く抑えるためには、直接的なグロ描写を減らす必
要があり、そういうものを減らしていけば映画の味付けが薄味になって魅力が減ってし
まう。そのため、造型担当はグロを抑えて映画倫理委員会の審査をぐり抜けつつ、か
つ観客にショックを受けさせる生首を作る超高度の技術を求められる。上がるのも嫌
ですし」

「英二くん、レイやレイにはそういうもの見せないでね」

「見せませんよ。子供には刺激が強いですし。」

でも、あの二人は愛する姉の出演作見たいと思いますよ。どうするんですか？」

「……どうしましょう」

生首を見る。

怖い。

でもグロテスクじゃない。

ただただ、リアル。

吐き気を催しそう。

「英二くん、ゲロ吐く女の子をどう思う？」

「え？ そりやちよつとどうなんだろう、とは思いますが」

「そう、それなら、ちよつと我慢するわ」

とりあえず、今は我慢して。……どうしよう。

ええい、なるようになれ、だわ。

広がる夢の中 小さな虫の話をしようぜ

頼りになる監督、頼りになる演出、頼りになる俳優ってのはいる。

同様に、頼りになる会社ってのもある。

例えば、ウルトラマンの棘谷。

例えば、ゴジラの西宝。

例えば、仮面ライダーや戦隊の西映。

この辺はかなり人材揃ってるし、よそからの人材集めも手早く秀逸、無名の人でも有名監督の助監督経験がある人だったりする。

特に特撮分野・演出分野では、これらの会社の人は相当に強え。

あとあれだ、西映とかは早稲田とか東大とかの出身の人が結構多いのも強い。

やっぱり学生の頃からちゃんと勉強してたタイプの人は良いな。

地頭が良い。

理解力が良い。

学歴が全てじゃねえけど、学生の頃から努力の癖が付いてる人達は、やっぱり能力の平均値と仕事の姿勢の平均値が高え。

俺は中卒だしな。

素直に尊敬する。

好きなことだけやってきた俺より、好きじゃねえことも頑張つて学んできた人達だろうし。

生まれつき理解力が低い人だと頑張つても有名な大学には入れないとかあるんだろ
うか。

その辺は調べたことねえから知らねえなあ。

かといって、学歴主義な会社ってわけでもねえんだよな。

西映とかは映画全盛期に素早く実力主義の非大卒者採用を進めて、そのアドバンテー
ジを以後も保ったタイプのところで、他もそれ真似したんだし。

娯楽の世界って実力のある製作者が面白えもん作るって構図が成立してねえと、長い
目で見りや必ず死ぬからな。

やっぱ長くヒット作を出し続けてる会社ってのはいい人材が揃ってるもんだ。
が。

スターズ主宰の映画となると、やっぱ特撮面・演出面の人材が少し弱くなっちゃう。

俳優管理、スケジュール管理、契約交渉とかの部分は強いんだけどな。

特にデスアイランド企画なんざ、『撮影不可能』を『ギチギチスケジュールなら可能』

まで持って来てんだし、スケジュール調整能力は頭一つ抜けてる。ただなあ。

やっぱ特撮畑の俺からすると一長も一短もよく見える。

特に、スポンサーやら、プロデューサーやら、企画レベルでの関係者やらからの要望が来て、その要望にスタッフが応えられねえと悲惨なことになる。

この手の事案で、現場をよく知らん偉い人が時々言う台詞があつて、そういうのが出てくると俺は全てを察するんだ。

「うちのCMやつてる俳優にこういうのやらせて」とか、「私が好きな映画のこれやつて」とか、「あのヒット映画みたいなの作って。真似すればいいよね、できるよね」とか！

色々と、色々な方向から色んなのが来る！

無茶振りを断れねえプロデューサーは無能！

でも無茶振り断るプロデューサーがイコール有能ってわけじゃねえのが面倒臭え！

無茶振り断らず実現するプロデューサーは上司やスポンサーからの信頼が増して、引つ張れる予算や企画実現力が跳ね上がるからな！

無茶振りの中でできそうなものを選んで受けるテクとかも要る！

だから俺にプロデューサーは無理だ。

あつちは交渉と計画と調整の世界だからな。なんで無茶振りパターンは割と殺意が湧く。

クソがあ……八つ裂きにしてやろうか……って気分になる時もある。今がまさにそれだった。

朝の内に始めた演出責任者のオッサンとの会話中に、そいつは首をもたげてきたのだ。

「ネズミが思うように動かせない、ですか」

「そうなんですよ。」

ほら、撮影の最初にねじ込まれた展開あるじゃないですか。

企画段階でやらないって決めてた、原作のネズミ大行進シーンです。

学生達がネズミの登場で怯え逃げる不気味な校舎のシーンですね。

企画でやらないって決めてたのに結局ねじ込まれるなんて……いえ、愚痴は置いときます」

「ですね。お疲れ様です。問題はどこですか？」

「ネズミが思ったように走ってくれないんです。」

想定されたルートを想定した感じに走ってくれなくて。

やっぱ生き物ですね。難しいです。

事前に想定してたネズミのコントロール法は全滅してしまいました」

「やっぱりそうですか……ネズミですかあ……」

「えっ、なんですかその反応。」

「いや私達もネズミが予想以上に扱いにくいことは理解しましたが、何かあるんですか」

「大群獣ネズラかつて天下を取っていた大映画会社の一角・小映が1964年に公開しようとしていた。歴史的な大失敗の果てに未公開。多くの映画製作者のクリエーター生命が即死・瀕死に追い込まれたほどの作品。の再来をここで味わうとは思いませんでした……」

「最強獣誕生ネズラ超弩級クソ映画に挙げられるものの一つ。2002年東京国際ファンタスティック映画祭にて公開された。されてしまった。悪い意味で恐ろしい出来に国際的に悪評と酷評が集まり、世間一般的な知名度が高くないにもかかわらず、映画フリーク達から凄まじい罵倒の嵐を浴びせられた。監督の田川幹太はこれ一本の悪評で監督生命を絶たれかけたという。？」

「それは世界的に酷評されてる方です」

ネズラ……そいつは、呪われた名だ。

俺はその名前を聞いただけで身構える。

つーか後年出た方はなんでこの名前付けたんだ。

「大群獣ネズラは、ヒッチコックアルスレッド・ヒッチコック。視聴者の恐怖や緊張感を魔法のように操り、『サスペンス映画の神様』と呼ばれたイギリスの伝説的映画監督。後年の映画監督がヒッチコックの人生や撮影風景をモデルにした映画が沢山あるほどの支持層を持つ。黒山が英二に言っていた『映画作家は何かを言うのではなく、見せるだけだ』は、フランソワ・トリュフォーがヒッチコックを褒める時に使ったセリフである。の『鳥』動物パニック映画の始祖。後のモンスターパニックの多くがこの映画が生み出したフォーマットを使用している。『鳥が群がって人をつつき食い殺す』というこの映画のフォーマットの『鳥』を、虫やモンスターに入れ替えるだけで、現代の多くのモンスターパニック映画の画作りと似たものになるといふあたり、この映画が後の時代に残した影響力は恐ろしい。を参考にしています」

「ああ、あの歴史的名作のグロいやつですか」

「ただ、ネズラの対抗馬想定だったのはゴジラだったんですよ。」

小映は西宝のゴジラ大ヒットに便乗し、かつそれを超えようとしていました。

そのために企画されたのが1965年公開のガメラで、1964年公開予定のネズラでした」

「ガメラなら知ってますけど……大群獣ネズラ……？」

「七木一族当時から特撮の裏側を支え続けてきた天才の一族。2018年現在、造形会社最大手の一つ・エクスプロダクション社長が七木功。功の父・七木正夫はガメラを生み出した天才。功の叔父・七木康栄はゴジラ撮影のメインスタッフであった天才。功の祖父・勘寿はゴジラスーツ造形に関わり、棘谷英二と共に『ミニチュアの映画を見たGHQが本物の戦争を録画していたと勘違いした』という逸話が残るほどの技術を作り上げた天才。ちなみに功の兄も映画に関わっていないだけで造形芸術家である。の正夫さんがガメラの方に行っちゃったんですよ。」

同時期の製作の弊害ですね。

ゴジラとその後追い映画を見て、製作にも少しの焦りがあつたのかもしれない。

ネズミ怪獣の着ぐるみが作れなくなったので、逆転の発想で企画にテコ入れが入りました」

「やめてくださいよテコ入れ。」

朝風さんは平気かもしれませんが、俺達はテコ入れとか聞きたくもない単語ですよ」

やめろよいい歳したオッサンだろあんた。

「テコ入れによって、ネズミの着ぐるみの代わりに、生きたネズミを使うことになりました」

「うわあ」

「ここで引いてるとついてこれねえぞ。」

「後の時代でも主流にはなれなかった、生きた動物を演出の核にする手法。

低予算でリアル、ゆえに撮影前は映像手法の革命だと思われたそうです。

現在の生物を使う撮影はヒッチコックの『鳥』のイエロー合成グリーンバックやブルーバックではない、イエローバックとナトリウムライトによる撮影合成。かの有名なマッキーマウスのドウィズニーによって生み出された。人間の肌ではなく、鳥の羽毛の色に合わせた補色背景撮影技法。の影響かもですね」

「そういえば、生きた動物をそのまま撮影に使うっていうのはあんま見ませんね」

「小映は撮影準備に先駆け、ネズミを一般の人に募集しました。」

映画館で一匹50円で買い取ること始めたんです。

更にはトラックで各地を周り、宣伝しながらネズミを引き取っていききました。

駆除技術が発達していなかった当時のネズミの総数は、そりやもう凄かったとか。

野山にも家にもわんさかいたらしいですね。

これらの小映の活動は、大群獣ネズラの宣伝としては、最高の効果を得ていたと思います」

「現代だと保健所が色々言いそうですな」

まったくだよ。

「そして問題が連続発生します。

まず、ノミやダニなど大量の害虫が発生しました。

ネズミですからね。皮膚もフンもヤバイ虫だらけです。

撮影現場の地獄はまず第一段階へと到達しました」

「うわあ」

「ダニによつて美術担当の三下陸男仮面ライダーの生みの親の一人。この人の美術能力と低予算高品質に仕上げる腕がなければ、初代仮面ライダーは成功していなかったと言われる偉人。さんはアレルギーで緊急入院。

凸山亨仮面ライダー生みの親の一人。有能なプロデューサーとして数多くの特撮作品を手がけた。初代ウルトラマンなどのデザインを手がけた天才とは下の名前が同じだが、別人。さん曰く、ガチで三下さん死の直前まで行ったそうです。

三下さんは特に怒ってる発言を公的には残してませんけどね……凸山さんが、その「

うわあ」

「だからなんですよ。

1971年の初代仮面ライダーにネズミの怪人がいないの。

三下さんはネズミにトラウマ持つちゃったんです。

なので別のデザイナーさんが来るまで、ネズミ怪人作れなかったんですね」
「うわあ」

「殺虫剤を撒きましたが、そのせいで撮影場所は殺虫剤だらけに。
病原体の媒介の虫。

吸ったら死ぬ濃度の殺虫剤。

撮影スタッフは皆、ガスマスクを装着して撮影に臨んだと聞きます」

「うわあ」

「大量のネズミはフンの処理もままならず、病気になって死に。

殺虫剤の影響で弱ったネズミも死に。

死体は病気の感染源や、虫が湧く苗床になっていきます。

更には餌管理も適当で、ネズミの餓死と共食いが多発していきました」

「うわあ」

「そして始まります、脱走です。

管理が適当だったネズミが逃げ出したのです。

一匹50円で買い取りしてた映画館からも。

映画館から集積してた撮影所からも。

ドツ、とネズミが逃げ出しました

その被害はモロに撮影所と映画館の周辺住民の民家が喰らいました」

「うわぁ」

「当然、苦情の嵐です。」

近所が動いて、保健所も動きました。

クソ撮影のせいで労働組合も動いて内部崩壊です。

保健所がネズミの全処分を命じ、諸説ありますが焼却処分されたとか。

あんまりにもいっぱい殺してしまったので、寺で供養したそうですよ小映の撮影所は後にK A K O K A W Aに吸収されるが、旧小映撮影所は東京都調布市多摩川にあった。日本典礼寺院協会が近辺にあり、京王線を挟んで2 k m以内に寺社が二桁あるという寺社密集区。一昔前は罰当たりなことも多くしていて、供養や厄落としをちよくちよくしていた一昔前の人間からすれば、ここはそういう意味でも理想的な立地であった。」

「うわぁ」

「ともかく、これでネズミの企画は死にました。」

多くの人材はガメラ撮影に行ったそうです。

だから基本ガメラ関連のインタビューでしか語られないですよこの映画。

頓挫の結果、助監督さん達は責任取って辞めて他の会社に移りました。

監督やP相当の人は普通にそのまま会社残って映画撮り続けたんですけども……」

「えっ」

おふくろが言つてたことがよく分かる。

責任取つて潔く辞めるやつより、しぶとく意地汚くしがみつけるやつの方が、未永く作品を作つていける。

心の足が強いやつは、めげねえわけだ。

まー辞めた人も辞めた人で、テレビ業界に行つて成功したりしたんだが。

「撮影中止に至るまでも、撮影はロクにできてなかつたそうですよ。」

ネズミがあつちこつち行つたり。

ドブネズミは薄明薄暮の薄暮性薄明薄暮性とは、太陽の光が少しだけある時間帯に活動する動物のこと。夜明けの頃と日没の頃の時間帯に活動する動物を指す。光が無いと遠くが見えないが、かと言つて日中動くとは動物に食べられてしまう小動物に多く見られる。です。

ノネズミは夜行性です。

小動物は他の動物に食われる生物ですから、見つかりやすい昼間は動かないんですよ。

でも撮影には照明が必須です。

なので、照明をつけると四方八方に逃げてしまい……

しかも逃げる距離や逃げる方向もバラバラになっちゃうんですよ。

加え、ノズミとドブノズミが一緒くたに送られて来たので、光からの逃げ度合いにも差が」

「ああ、なるほど」

「ネズミは当初、プレートに電気を流してネズミを誘導するつもりだったようです。

動物は、電気が流れるものに触れると逃げ、触れないようにします。

小動物だと電気が体に流れることで狂乱に近い状態にもなります。

これでネズミを暴れさせ、指定ラインを走らせようとしたようですが……

ネズミは体が小さく動けなくなった上に、そのまま感電死してしまっただけです」

「あ、それはうちもやりました」

やったのかよ！

流星に50年以上前のことになる、大失敗した反面教師としての記憶も、そこから得られた教訓も、業界全体から消えてくもんだな。

悲しみ。

「備品リストも今チェックしました。

とりあえず殺虫剤と虫除けを衣装の予備から回しておきます。

多分この数だと心もとないで、俳優さん用のを使いましょう。使用前には俺に連絡

を」

「ああ、そういうえば千世子ちゃんに虫除け吹き付けてましたね」

「ペットショップで買ってきたネズミなんですよね？」

種は同じだと思います。後で種類チェックしますので、場所教えてください」

「はい。紙に書いときます」

「ああ、そうです。プロア送風機。ガーデンング用なら落ち葉や虫を拭き散らすのに、工業用なら金属屑や木のカスを拭き散らすのに使うことができます。2004年の映画『ULTRAMAN』では、これを使ってネズミの動きを操作した。ってありましたっけ？」

「いえ、ないです。買ってきましようか？」

「できればありもので片付けたいですね。二日目から予定外の予算は使いたくないです」

とりあえず備品リストとにらめっこだ。

あるものでどうにかしよう。

どうにかならなかったら何か俺がありものを改造すりゃいい。

準備期間が慣例通りの分しか無かった上に、やる予定なかったからなあ、このシーン。

『ウイラード』1971年のアメリカ映画。なんと驚くべきことに、ネズミ500匹を一年かけて調教し、自由自在に動かすというとんでもないことをした。凄えなアメリカ

！「ヒッチコックの鳥に影響を受けた」という大失敗ネズラと対照的に、ウイラードは評論家から「ヒッチコックの鳥を完全に超えた」と評価されたという。みたいにはいかねえや。

「ああ、そうです。ネズミ、絶対に脱走させないでくださいね。

俺がそつちにも関わる以上、毎日終わりにネズミの数をカウントします。

一匹でも数が変わっていたら、俺は即座にそれを大問題にします。

島外から持ち込んだ、下手したら外来種のネズミが、島で繁殖する危険は分かります

よね？」

「りよ、了解です」

「いいですか。

ネズミ一匹でも逃がせば、俺が上に報告すると思ってください。

その覚悟でやってください。

自分の将来賭ける覚悟で慎重に扱ってください。

俺と皆さんで連日連夜島中を休みなく回り、ネズミを駆逐するくらいじゃ済みません

よ」

「皆に肝に銘じさせときます。文字通り、ネズミ一匹逃しませんよ」

オツケー。

信じるぞ。

そんなこんなで数時間後。

午前の撮影が終わらない内に、昼飯前最後の休憩時間に、俳優の皆に聞いてみることにした。

「ところで皆さん、ネズミ大丈夫ですか？」

俺が質問の意図を説明するまでもなく、皆が答えてくれる。

「うちはちよつと、そういうのは」

「私は大丈夫……だと思おう」

「私はダメです！」

「俺は平気だな」

「ハムスターみたいなもんだろ？」

「僕は……撮影なら我慢しますが」

「私は絶対無理！」

スターズ12人は以前からそうだったが、オーディション組12人からも少しずつ信用してもらえてるみてえだ、俺。

まだ二日目なことを考えれば好調だな。

あるいは、察しのいい俳優は俺の振った話の意図を察してたりすんのかな。

各々の反応を見て、俺は監督に話を振る。

「監督」

「うん、分かったよ。ネズミのシーンの登場人物、少し脚本に手を加えて調整しておく」

「ありがとうございます」

よし。ネズミが苦手な人はこれで撮影から除外してもらえるかな。

あ、石垣さんがこっち来た。

スターズ男性、20歳。高校生やるにはギリギリの年齢。

デスアイランド原作のやや老け顔の高校生を演じている人だ。

「どういふことかな、朝風君。ネズミの好き嫌いなんて聞いて」

「それなんですけど……」

「そこからは私が説明します」

あ、演出部の人だ。説明ってなんだよ。

「え、俺何も聞いてないんですけど」

「朝風さん、本土から資料が送られてきて、演出は皆気合いを入れてます。」

我々も知恵を絞って、朝風さんが全力を出せるプランニングを進めてるんですよ」
資料が送られてきたのか。

それで演出の仕方を、皆頭捻って考えてくれたってことだな。

これで俳優、美術、演出の足並みが綺麗に揃うか？ いやまだ分かんねえな。
「原作のネズミに追い立てられるシーンですが……」

2カメラ分の演出が考えられます。

まず、我々が廃墟の廊下をネズミ一匹漏らさない一本道に加工します。

そこで、走るネズミをカメラが追う追い視点。

逃げる俳優をネズミが追いかメラが撮る追われ視点。

この二つなら、我々がある程度ものを作ればどうにかできると思うのです」
「ほー」

「具体的に言いますと。」

ネズミに香りの強いピーナツバターを与えます。

ネズミがピーナツバターの香りを覚えます。

靴にピーナツバターをたっぷり塗って俳優が走ります。

ネズミが追いかけます。俳優が逃げます。撮影します。以上です」
「ほおっ!？」

び、ピーナッツバター!

ダヌエル・マン監督舞台俳優から映画監督となり、テレビ監督も務めたアメリカの監督。きらびやかな受賞歴も派手な演出もしなかったが、しつとりとした演出、人と人の会話を重要視する作風で、高評価こそされないが知る人ぞ知る映画監督として知られる。その作風は、文学的な作風を基とすると評される。が使ってたネズミ操作術じゃねえか!

良い資料送ってもらったみたいじゃねえか。

俳優がかじられる危険性を度外視すれば。

「ちよ、ちよっと待ってください! 俺聞いてませんよ!」

「大丈夫です。スターズの俳優の肌をネズミになんてかじらせません。

ですが念の為、ズボンの下のプロテクターなどを朝風さんに用意していただきたく

……」

「……ああ、なるほど。確かにそれなら俺の得意分野です」

ネズミの歯が立たねえ長靴下とかなら、俺にも作れる。

「アキラさんがいない日で良かったです。」

あの人は安請け合いしそうですし。

ネズミ撮影は予定上三日目でしたね、確か。

それまでにそのシーンに使う人を選別して……」

「おい英二！ アキラはダメで俺達はいいつてのか！ 鼻貞だ鼻貞！」

「堂上さん。」

”人が嫌がることを進んでやる”人は、いい人だと思いますが……

たまにはそういう人が背負うものを、他の人がやってもいいんじゃないでしょうか」

「いい子ちゃんが進んでやるなら任せといていいんじゃないかな……」

ダメに決まってるんだろダボが。

俺は割と私情塗れの人間だからな。

ネズミにかじられる可能性が0.00001%でもあればアキラ君以外に回すぞ。

その上で、他の誰かが怪我する可能性も、手を尽くして0%にする。

そう決めてんだ。

あーもう演出め、ほんの僅かでも怪我人出そうな演出考えやがって。

それとも、俺が信頼されてんのか？

俺がいる限り、ズボン・靴下・靴の防御をネズミが抜ける可能性は0だと認識されて

んのか……そこんとこどうなんだろうか。

「英二くん」

「景さん？」

「私、脚力には自信があるわ。走る身体測定の時はいつもいい成績出してたの。だから」

「ダメです」

「え、なんで？」

「映画撮影経験の無い人に任せる気はありません。これでいいですか？」

「む」

景さんほど、先が読めねえ女優もねえ。

そんな人に、ほんの僅かでも危険性があることさせる気はねえよ。

多少なりとも動ける人で、意識的に自分を制御できてる人がいい。

あと、そういうの抜きにしてもネズミの群れの中に景さん放り込むのは何故か気が引ける。

「英二君。主人公だし、私がやろうか？」

「論外ですよ百城さん。」

主役だからこそ、カメラに映る回数も多いんです。

万が一にもあなたに傷はつけられません。

時系列順に撮ってないんですよ、俺達。

三日目のネズミの撮影であなたが傷ついたとします。

四日目に以降に、映画内時系列における、ネズミに出会う前の撮影をします。

ネズミに出会う前から、ネズミにかじられた傷があることになってしまいますよ」
「だね」

「あなたの綺麗な肌は、終盤まで傷一つもつかない。それがこの映画では良いんです」

百城さんは微笑み、退いてくれた。

よかった。

周りの人は今、俺が語った理屈に百城さんが納得して、百城さんが立候補を取り下げたと思っただろうな。

だが、違う。

ネズミの歯の大きさを考えりや、噛まれてもその傷は小せえ。

メイクで隠せなくもねえし、ソックスもあるから隠せなくもねえ。

挽回不可能ってわけじゃねえんだ。

それは、俺と百城さんの間に当然のようにある共通認識でもある。

百城さんはごまかせることを知ってるし、俺がごまかせることを知った上で百城さんの立候補を止めたことを知っている。

俺が個人的私情で、百城千世子の危険を排除したことに気付いている。

っか。

こうなると分かって今立候補したんじゃねえのこの人。

クソ、俺の心を弄ぶひでえ人だ。

俺の心を振り回してそんなに楽しいか？

そんなことを考えてたら、”しようがねえな”と言わんばかりの顔で、堂上さんが俺の肩に手を回してきた。

「はっ、まあ俺に任せとけって」

「堂上さん。お願いできますか？」

「俺は夜風とか千世子とかより頼りになるもんな？」

「はいはい。そういうことにしておきますから、頑張ってください」

ったく、こういう性格だから憎めねえんだよなこの人。

この人がピーナツバターを塗った靴でネズミ引きつけながら走る。

俺は、万が一にもこの人が怪我しねえよう、最強の衣装と、アクシデントが起きた場合、この人を無傷のまま助けるための……そうだな、ネズミ避けの強ライトの準備しておくか。

勝負は明日、三日目だ。

午後の撮影の仕事と並行し、明日のための準備と手配を始める。

「夜風さんができなくても、私ならどうでしょうか」

「和歌月さん？」

「私が元アクション倶楽部のアクション俳優だということをお忘れですか？」

「単純にアクションだけなら、私はこの中の誰よりも上だという自負があります」

「ああ、それは一理あるかもしれませんが」

「竜吾さんでいいなら、私でも……」

「ダメです」

「っ」

俺の人生18年。

撮影の現場にいた時だけなら15年。

仕事上での対抗心ならいくらでも見てきた。

だから、分かる。

「オーディションで景さんに対し“敗北を確信してしまった”劣等感を拭いてえなら、また別の機会にしてくれ、和歌月さん。」

「和歌月さあ。お前原作通りにしてたら、足首すら露出してるショートソックスだろ。」

「足が丸々露出してるスカートとショートソックスで、英二がお前にOK出すと思うか？」

「？」

「……………」

「そこは私が行きたいです、じゃなくて、堂上竜吾さん頑張れーって言うところだろ」「すみません和歌月さん。これに限っては堂上さんが正しいです」

「ま、俺に任せとけって。こういうのは男の仕事、男性俳優の見せ場ってやつだ」

「そういうことはないと分かっているんですが……」

「こういう時は、自分が男だったら選ばれていたのか、なんて思ってしまうですね」

「えーそりゃあもつたいないだろう。鏡見ろよ」

「それは流石にもつたいないですよ。鏡見てくださいませ」

「なんで全然違う台詞言ってるのに二人してハモるんですか!? どうやったんです!？」

「なんかそうなった。」

「ネズミはチェックしてきました。」

「実験動物の医療実験用無菌ネズミと同じやつですね。」

「噛まれても病気にはならないと思いますが、細心の注意を払ってください。」

「俺も最大限に気を遣って準備をしますので、堂上さんも明日はご注意を」

「おう、とりあえず信じといてやるよ」

「こいつめ。」

「このだらけたツラ、俺が作るものを信用しきって完全に油断したツラだ。」

適当にやっても怪我しないと思ってやがるな、こいつめ。
ん？

なんだ景さん、俺の服引っ張って。

「英二くん、トキソプラズマ世界中で見られる感染症系の寄生虫。ネコやネズミなどを媒介に感染する。あまりにも小さい虫で、症状も小さいため、健全な人間の場合症状が認識されない。そのためそもそも知覚されないが、世界中の人間の1/3が感染しているとも言われている。に感染してない？」

「えっ……景さんそういうのよく知ってますね」

「黒山さんが言ってたの。」

昔、英二くんと組んでネズミを撮影に使った時、うるさいくらい注意されたって」

……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：～
……：：：：：：：：：～

「トキソプラズマってそんなに怖いのかしら」

「トキソプラズマは一説には感染した人間やネズミの脳を操る寄生虫ですからね」
「え」

「男性は反社会的になったり、女性に嫌われる性格になったり。

女性は社会的になったり、惚れっぽくなったり。

ネズミの場合はネコに食われやすくなり、ネコに寄生虫が移りやすくなるそうです。

妊娠中の母親が感染すると、子供に障害が出たり、流産や死産もしやすくなるとか」
「黒山さん笑って話してただけど……」

「未だ色々研究中の寄生虫ですけど、結構怖いネズミの寄生虫です。」

一説には全人類の5割が感染していて、フランス人の8割は感染済みだとか。

人格に影響が出るとも言われていますが、今回のネズミに限ってはその心配は皆無で……」

「あ、でも、英二くんはそういう風に変わってるように見えないわ。安心ね」

「あ、はい、そうですね」

「私もそんな社交的じゃないし、きつと安心だわ」

「男性に媚びを売るのがトキソプラズマの女性症状らしいです。」

景さんはそういうところが全く無いので、安心していいと思いますよ」

「え……じゃあ社交的な性格をしてる千世子ちゃんは……」

「いやあの人は……映画評論家とかに、

『演技が観客に媚びている』

とか言われてるだけですからね！

黒山さんあたりの言動真に受けちゃダメですよ。

というか百城さん実はあれで寄生虫に詳しいんですから、そういうこと言っちゃダメ

です」

「そうなの？ 意外」

「世間一般的には、寄生虫が寄生してるみたいな性格とか言ったら、気分害しますよ」

「それは……私も言われたら、きつとムカツとしてしまおうと思うわ」

「でしよう？ そのつもりがなくても、そう思われるような言動は控えましょう」

いつの間にやら和歌月さんと話していた堂上さん、考え事を始めた景さんから離れて、ふうと一息つく。

誰かが俺の肩を叩いた。

あれ、百城さん？

「百城さん、どうかしましたか？」

「私以外と寄生虫の話してる英二君、初めて見たよ」

「ああ、確かに。百城さんとだけする特別な話題、みたいな感じでしたね、これまでは」

「……そうだね」

百城さんは柔らかく微笑んでいた。

また虫の面白い知識溜めとくから、楽しみに待つてるよ。百城さん。

百城さんの好きな話題のために、普段興味持つてねえ分野の知識集めんのは、不思議と苦じゃねえんだ。

と、その時。

「あ、茜ちゃん……」

「……」

景さんが話しかけて、茜さんが無視して、二人が離れていった。

オーディションの時の確執、まだ残ってるのか。

話す機会すら貰えてねえっぼいな。

頑張れ景さん。

こっから応援してるぞ。

優しくしてやれ茜さん。

茜さんが優しい人だと知ってるから俺は信じて待つだけに徹するぞ。

現状、この撮影における最も警戒すべき危険な女性の対立関係は、景さんと茜さんの

これだろうな。

この二人の間に散ってる火花こそが、唯一にして最大の爆弾。

今日の撮影の最後には景さんと茜さんが共演する。

なんとかしてえところだが……クソ、どうする？

駄目だ、思いつかん。

いい策が思いつかなくて、自分自身をぶっ殺してやりてえ気分だ。

撮影とは！ 1日目に残り29日の準備をし、2日目に残り28日の準備をするものである

二日目はアキラ君が離脱中、俺は校舎内撮影準備、景さんとかなら初台詞の撮影になる。

三日目になるとネズミ撮影、スターズが三人離脱、景さんは和歌月さんに追い込まれて崖から落ちる（フリ）の撮影。

四日目はスターズが全員揃うんで一気に撮影を進める。

五日目と六日目は俺が抜けて、六日目は亜門姉弟と堂上さんが抜ける。

七日目に百城さんが抜けて、海岸線での撮影を一気に進める。

初週における、これから数日の流れは大まかにこんな感じだ。

人が抜ける日付は当初の予定通りならこうなるが、どうなるかは確定じゃねえ。

デスアイランドは初日から予定変更してるからな……スターズが撮影するタイミングも、はてさてどうなることか。

特に俺が抜ける日は最初は不安じゃなかったが、日が進むごとに不安になってきた。大丈夫か。

いや大丈夫だと思っただけ。

いざとなりや俺が飛んで戻ってくるけど。

こういう時に不安になっちゃうから俺は半人前なんだよなあ、ああやだよ。

そんな不安を、百城さんと一緒に昼食を食べている時に、ポロツと漏らしちゃった。

「何かあっても私がフォローするよ？」

「な、なんて頼りになる優しい一言……！」

こいつ天使かよ。

天使だった。

「すみません、もしもの時は俺への連絡と対応をお願いします。」

……なんか、どうにも手塚監督が怪しくて。

他のフォロワーまで安心して、信頼して、心の底から任せられる人、百城さんしかないな

いんです」

「私だけかあ」

「はい」

「私だけ？」

「？ はい」

「そっか」

百城さんが笑顔で食ってるサンドイッチ美味そうだな。
サンドイッチにすりやよかったか。

いや俺が食ってるこのビーフカレーも美味しい。
肉がデカイからな。

これはこれで満足だ。

「あ、そうです。

喧嘩起きそうだったら止めてください。

ちよつと俺の友人の間に確執があつて……」

「私もあのオーディションは見たよ。

武光君が受け入れてたつてのがミソだよね。

一番被害者になりそうだった人がもう夜風さんを許してる。

でも夜風さんが怪我人出しそうだったのは事実。

それと、普段の姿を見てる限り、夜風さんっていい子みたいだしね」

「ですね。だからなんというか、対応決めかねてる微妙な距離感になつてるわけです」

「単純に良いとも悪いとも見れない人が一番対応に困るんだよね」

百城さんも認識してたか。

もう一つ問題なのは、景さんがあの時茜さんに言われたことが正しいと、そう思つて

るってことなんだよな。

まーそれは俺も思う。

相手の気持ちに分からないなら役者やめろ、か。

耳が痛えよなあ。

俺も痛い。

景さんが演技をしながら周りの人の気持ちを考えて、他の演者の気持ちを受け止めながら、他の演者に合わせた演技が出来るのはいつになることやら。

「本当は、俺が友人として仲裁するべきなんでしょうが……」

なんででしょうね。

俺が景さんのフオーロー懸命にしても、あんまり真に受けてくれないんですよ。

……想定してなかったわけではありませんでした。

俺が景さんを無理に擁護してる景さんの味方だと見られてる、という可能性も。

その場合は、茜さんに向けて景さんの擁護をしても効果は薄いだろうということも。

ただ、そういうことだったと考えるても、茜さんがあそこまで頑なになるのは珍しくて

……」

「なんでだろうね」

なんでだろうな。

だが茜さんのことだ。

その裏には俺が把握できてねえだけの深謀遠慮が……何か、彼女らしい理由があるはずだ。たぶん。分からんから、とりあえずは友人のことを信じておく。

「英二君が夜風さんに惚れ込んでるからだったたりして」

「景さんに惚れ込んでるのは事実ですけど……」

それなら茜さんが百城さんに対しては友好的な理由が説明つかないと思います。

俺、百城さんに対する気持ちと評価は周囲に対して隠してないはずですし」

「英二君また夜風さんの方にメンタルが寄ってない？」

「はい？」

「ま、それはいいとして。」

湯島さんが理解できる私と、理解できない夜風さんの違いじゃないかな」

「なるほど……？」

なんだ景さんの方にメンタル寄ってるって。

最近普通の女の子らしさが増えてきた景さんに寄ってるってどうなんだろうかそれ。

はむ、と百城さんが可愛らしくサンドイッチを食んだ。

「ともかく、俺は喧嘩とか対立とかなくしたいわけなんです」

「深い意味もなく私に『喧嘩をなくしてほしい』とか、英二君は感覚が天才だよね」

「え?」

「英二君の選択が間違つてないってこと」

「はい。百城さんを選んだことは間違いないと確信してます」

「そうなんだ」

百城さんは微笑んだ。

可愛いなこいつ。

俺もカレーを食つていたら、見覚えのある白髪が多いオッサンが話しかけてきた。

「すみません、朝風様でしょうか」

「あれ。この辺の宿泊施設のオーナーさん……でしたよね」

「百城様との楽しいげな時間を邪魔して申し訳ありません。少し良いでしょうか」

「いいですよ。仕事の話ですよね多分。百城さん、ちよつと席外していいですか?」

「私が駄目つて言つたら私の方を優先してくれる?」

「えつ……あ、ええと、そうですね……」

「冗談だよ」

この女ア!

「大変ですね、朝風様」

「……ご用件はなんでしょうか。さつきと処理してしましましょう」

オーナーさんは笑っていた。何笑ってんだ海に沈めるぞ。

「実は――」

要件は、一言で言っちゃまえば廃品回収だった。

以前からこの南の島のあるホテルには、ウルトラマン人形の自動販売機があつたらしい。

左太腿に百円を入れると右膝から玩具のカプセルが出て来る自動販売機だとか……まあ、ガシャポンの一種だな。

ただ、この特徴を聞いた時点で、俺はピンと来ていた。

もう完全にぶつ壊れたそのウルトラマン人形を粗大ゴミに出すと、金がかかる。

だがもういい加減塗装は剥げ、表面は汚れ、この南の島の観光地イメージとかけ離れてる人形を置いておくわけにはいかない……そこで、プロデューサーから俺の話の聞いたらしい。

俺が引き取ってくれるかも、と思ったそうだ。

なんで？

いや、引き取るけど。

オーナーが運んできた引き取ってほしいというものの現物を見て、俺は自分の推測が間違つてなかったことを理解した。

「し、信じられない……壊れてるとはいえタカトク・ジャンボキャラクター現存品……!?!」

「あ、もう一つあります」

「しかも二つ!?!」

嘘だろ!?!

2014年に岐阜県羽島市で奇跡的に、ウルトラマンエースのタカトク・ジャンボキャラクター人形の生き残りが見つかったって話が、ファンコミュニティで報告されたって話は聞いたことがあるが……まさか、こんなところでも見つかるとはな。

2mのウルトラマンジャック人形二つ。

その太腿と膝には自動販売機システム。

たまんねえな。

昭和40年台に日本の覇権を握っていた、ウルトラマンや仮面ライダーのジャンボ人形がまさかこんなところで見られるとは……とんでもねえ。

百城さんが首をかしげる。

「珍しいの?」

「マニアなら最低百万円は出すかもしれません」

「!」

「ただ、現在でも買うマニアがそもそもいるかどうか……
需要が寿命死してるかもです。」

当時の購入価格でこの自動販売機は30万円。

ええと、昭和40年代の物価は企業指数で49.2、消費者指数で24.4ですから……

現在の貨幣価値なら60万円から120万円つてところでしょうか。雑把な計算になりますか」

「高いねえ。これだけ大きいならそりやそうか」

「修理できる人間がいないと売るのは無理ですからね。俺も修理するなら苦労しそうです」

「え、できるんだ」

「この人形は販売していたところそタカトクタカトクトイス。かつて存在していたが、1984年に事業停止してしまつたおもちゃメーカー。鉄腕アトム、鉄人28号、ウルトラマンの良質な玩具を生み出しブームをいくつも作り上げていった。ロボ分野に強く、ヤッターマンやマクロスなどの人気もここが支えたと言われている。だがバンダイ傘下での『仮面ライダー商品展開権』争いに敗北し、東映とバンダイからの仕事の多くを失った後は凋落の一途を辿り、業界から消えていった。ですが……」

実際に作っていたのは日本娯楽機 Wikipedia にも載っていないような、陰の伝説。現在日本の『アミューズメント』の始祖の一つ。別説もあるが、屋上遊園地の始祖、パチンコの始祖、ゲームセンターアーケードゲームの始祖、現在の形の自動販売機の始祖、街中遊園地の始祖と呼ばれることもある、『遊べる大型機械』の造り手が一つ。現在はニチゴという遊園地会社の一部となっている。です。

技術体系としては失われた技術とかではなく、現在に繋がる系譜の一つであるはず……」

いざとなりや棘谷の倉庫に行きやいい。

確かいくつか保存してんじやなかったかなこのウルトラマン人形の自動販売機……

参考サンプルがいくつかありや、それで直せないってことはないはずだ。

「凄かったんですよ、この人形と作ってる会社。」

日本娯楽機の社長が100歳超えても社長やっていたり。

娯楽で国に貢献したと認められて旭日章を叙勲したり。

この当時三十万円のウルトラマン自動販売機も爆売れしたんです」

「そうなんだ」

そうなんだぜ。

しかし、そうなるってこのオーナーさんもこの人形手放すの少し躊躇うかね。

「引き取っていただけるのなら、それだけで嬉しいです。

価値が分かるという朝風様に貰っていただけるなら、なおさらに」

「分かりました。では、ここで俺が引き取ります」

それでもなかった。

まあ修理できる人探して、修理依頼して、いるかも分からん買い取り手探して……つてのは普通に手間だよな。

では引き取ります。しゅつ。

「綺麗にして俺の事務所の前に置いとこうかな……」

「英二君すつごくイキイキしてるね」

「え、そうですか?」

「うん」

昭和11年1936年。二・二六事件とかあった年。の日本娯楽機の商品目録とか見ると楽しいぞ。

日本だと自動販売機が生まれたのが大正13年(1924年)、全国的に普及したのは昭和40年代だって言われてる。

100円と50円の新硬貨が発行されたのが昭和42年だからな。

ところが日本娯楽機は商品目録見る限り、昭和11年時点で遊園地のゴーカートの原

型とか、小型のメリーゴーランドとか。

筐体型のシューティングゲームとか、パンチングマシンとか、卓上サッカーゲームとか、対戦ゲームとか、お菓子景品のパチンコマシンとか。

食券自動販売機とか、切符自動販売機とか、映画を映す映写機とか、おみくじ自動販売機とか、菓子と飲み物の自動販売機とか、生年月日入力するとその日の運勢吐き出す機械とか。

そういうの全部一社で作ってたんだ。

なんだこいつ。

娯楽の化物か……? S O G A か……?

そこが作ったウルトラマンや仮面ライダーの人形型の自動販売機だから出来もよく、全国的にそいつらの人気に貢献したってわけだ。

当然ながら、こういう自動販売機の外見は俺と同じ造形屋が作ってる。

俺の先人の作品ってわけだな。

現代でもこのタカトク・ジャンボキヤラクター人形の系譜は続いてて、4mのウルトラマンメビウスとウルトラマンマックスの像が、JBSの放送センター前に悠然と立ってる。

倍のサイズになってんぞすげえ。

この4 m像、あんま掃除してねえのが気になるが、デカイのはいいことだ。たまりに子供とか親御さんとかが見に来てる。

とまあ、最近のウルトラマンではあんまねえ仕事だが、造形屋はこういう巨大人形や人形型自動販売機を作るのも仕事だってことだ。

「あ、そうだ百城さん。これ撮影に使っちゃいましょうか。」

確か和歌月さんに追われて景さんと茜さんが崖から飛び降りるシーンがあったはずです。

そのシーン撮影が明日あるので、人間の代わりにコーティングしたこれ落とすとか……」

「これ人間に見える?」

「表面にテープ巻いて肌色に塗装して、衣装着せれば見えると思います」

オーナーのオツサンは帰ったんで百城さんと飯を食いながらちよつと仕事の話をする。

「遠景カメラなら、見ただけじゃ人形と分からないと思います。」

何よりこれ、重いんですね。

島外から運び込む関係上、持ち込んできたマネキンが軽い物だけ撮影用マネキンは人の服を着せて運用するが、崖から落とすものなどのほとんどは、持ち運び投げ落としや

すいように軽く作られている。表面生地トリコット、内部発泡スチロール、支柱ウレタンのタイプなら女性マネキンの本体重量4.3kg。男性マネキンなら4.7kg。内部に空気を入れるエアマネキンなら総重量400gを切る。そもそも重いマネキンに撮影界限における需要がなくなりつつあるため、取り扱っている工場・商店が減少し消滅しつつある。だったんですが……

これなら崖から投げ落とした時、海面にいい水飛沫が出来ます。

遠くからカメラで崖と海を映しても、カメラによく見える水飛沫になりますよ」

「へえ」

「マネキンにこっさり重り付けて落とそうと思ってたんですが、望外の幸運です。

この人形の表面テープでぐるぐる巻きにして、塗装して、服を着せて落とすしちやいましょう」

100円を入れる穴と商品が出て来る穴を塞いで、表面をテープで覆えばまず浸水はしねえ……と思う。

確か岐阜県で見つかったタカトク・ジャンボキャラクター人形もそうして穴塞いで、自動販売機じゃなくてただの立像として使ってるのが発見されてたはずだ。

こいつを、景さんと茜さんの代わりに落とす!

人形は後で引き上げりゃいい。

重いからそこで少し手はかかるかもしれないねえが。

「あそここの崖あんまり近付かないでくださいね。」

目算ですけどあそここの崖、水面まで10mくらいありますから。

高さ5mから人間が水面に落ちた時の速度は時速35.65km。

高さ10mから人間が水面に落ちた時の速度は時速50.417km。

だから娯楽での安全着水高度は6mだと言われています。

「危険だが緊急時には仕方ない」という着水安全限界が10mだと言われていますね」

「落ちたら……鍛えてない女の子だと、大変かもね」

「そうですよ。」

下は海ですが、崖の上での撮影です。

ふざけて足を滑らせたら大変です。

たとえば、守護神2006年公開、アメリカ映画。アメリカ沿岸警備隊と、救難士養成校を舞台にした、海で人の命を救う男達の物語。海は容易に人の命を奪うこと、そこで人を救い続けることがどれだけの地獄であるかを描く。でのセリフで言う……

『私達は、4.5mから6mを飛び降りるトレーニングをしている。
You fall from 50 feet, that is like hitting concrete.

高さ15mを飛び降りれば、コンクリートと同じだ。

You fall 80 to 100 feet: you die.
24mから30mを飛び降りれば……死ぬ。』

ってところですね。あそこ10mくらいですから、本当に危険な高さですよ」

どうせマネキン落とすしかねえんだから、重い人形が見つかったのは幸運だったな。

「各俳優さんに配った台本と予定表にも危険があるということは書いておきました。

危険場所の記載は撮影の慣例ですが、慣例ゆえに軽く見られることもあります。

俳優間でも意識を共有しておいた方がいいと思います。

あそこでの撮影は明日ですので、百城さんからそれとなく危ないことを仄めかせてください」

「うん、わかった。英二くんは優しいね」

「……何度言われても、百城さんにそう言われるとむず痒くなりますね。

もしかして、そういうの分かってて俺にそう言ってます? からかっています?」

「英二君はどう思う?」

からかっていると思っているぞ。

言わねえけどな。

「たとえば、景さんの体重を目算で計測し、落下エネルギーの計算をします。

この場合は落下エネルギーは4903Jです。

拳銃が300J、ライフルの弾丸が2500Jなので、景さんの体格における衝撃は……」

「英二君」

「え……あ、すみません。」

景さんの体重は逆算しないでいただけると助かります。

申し訳ありません。今のは女性の体重を勝手に他の人に話す軽率な行動でした」

「よろしい」

いかんいかん。

心配だからって冷静さを欠いてたな。

ただな、裏方はどうにも俳優さんを心配しがちだつてこと、ほんのちよつとでも俳優さんには認識しておいてもらいてえもんなんだ。

その点百城さんは、なんつーか。

安心できる。

この人は『自分という価値ある商品を守る』。

『死にたくない』じゃねえ。

『痛いのは嫌だ』じゃねえ。

『百城千世子という商品の価値を損なつてはならない』で自分の体を守ってくれる。

この人にとつて、自分の商品価値と作品の出来というものは自らの命より重く、ゆえにこそこの人は自分の顔や命をととも大切にしている。

この人ほど、自殺しそうにない女優は見たことがねえ。

だから、安心して見てられる。

だから、好ましく思える。

俺は自分の気持ちに鈍感じゃねえ。

なんでこの人に自分がそう思うのか、その理由もちゃんと分かっている。

作品の完成に命を懸けられるこの人は俺の親父のようで、かつ自分の価値を理解し自分を大切にするこの人はあまりにも、俺のおふくろから遠い女優だ。

だから。

作品を大切にしながらも、時に無茶をしながらも、作品の完成に妄執の如く前のめりになることがあっても、自分を大切にできるこの人が好きだ。

「今日始めたら、明日には周知されるかもね。」

分かった。あの崖が危険だって、皆にそれとなく広めておくよ」

「お願いします。助かります」

少し、安心できる。

俺がいる以上は、僅かな危険性でも排除していきたくからな。

「ただ危険はいいとしても、喧嘩はどうかかな」

「なんででしょうか？」

「どうしても合わない人っていると思うよ。

まだ夜風さんと一緒に撮影は二日目だけど、スターズには合わない人も多いと思う」
「……むむ」

「私にも好きじゃないものつてあるからさ。たとえば、心配されてることに気付かない人とか」

そういうこと言われるとな。

俺もあんま色々言えなくなるぞ。

百城さんは信頼できる。

俺が百城さんのことを何もかも分かってるとは思わん。

むしろ知らんことの方が多いだろう。

その内心だって、俺が外側から把握してるだけだ。

仕事で齟齬が出てねえし、才能の器は見切れてるし、たぶん百城さんの内心をそれな

り以上には理解できてると思うが……それでも、知らねえことは沢山あるだろうな。

アキラ君や茜さんに対してすらよく分かってねえことは多いんだ。

内心が読めねえことが多い百城さんの内心なんて、読めねえことの方が多い。

むしろ、百城さんの俺に対する理解度の方が高えだろう。

あの人の考えてることなんて俺に推し量れるもんじゃねえ。

けど、信頼できる。

俺があの人のことを全部分かってなくても。

あの人があんたのことを気遣ってくれてるのは分かっているから。

百城さんの考えてることがほとんど読めねえ時も、信頼できる。

逆に、景さんのことは百城さんよりも分かっている気がする。

あの人は分かりやすいし、時々相当に明け透けだから。

夜風景を理解するのは難しいことじゃあなかった。

けど、芝居で次の一瞬に何をするか分からん景さんは、百城さんと比べると信頼しにくい。

何をするか分からないってことは、見てて楽しいってことだ。

何をするか分からないってことは、俺の予想を超えてくるってことだ。

何をするか分からないってことは、その時俺はその人に見惚れるってことだ。

何をするか分からないってことは、たぶん、百城さんよりかは信頼できねえってことだ。

あくまで、比較でしかねえけどな。

けど、大まかに言えば、俺はこの撮影に参加してる多くのやつを信頼してる。

ガキの頃、アキラ君が言ってた。

——その人の考えてることが分からないと、信頼できないのが嫌いな人で

——その人の考えてることが分からなくても信頼できるのが、友達じゃないかな
まったくもってその通りだ。

俺のマブダチはとて面白いことを言う。

俺はアキラ君も信じてるし、アキラ君が言ってることも信じてる。

つまりダチってことだ。

それは百城さんに対しても同じ。

俺の百城さんへの信頼には、多分に友情ってやつも混じってんだろうな。

だから。

今また、もう少し信じてみるぜ。

景さんと茜さんが仲良くできるって、信じてみよう。

俺が作った作り物の生首と、作り物の死体を前に、廃墟校舎の中に作られたセットの

中で、和歌月さんと堂上さんがワンカットの撮影を行っている。

周りには待機中の俳優と、数多くのスタッフ達。

日常から切り離された”映画の空気”がここにある。

「お前だ！ お前のせいでリンは死んだ！ お前がアプリの指令を無視したから！」

「ぐ、偶然だよ！ 『デスアイランド』にそんな力があるはずないだろ！」

「私はやめろって言ったはずだ！ 全部お前のせいだ！」

リンが死ぬくらいなら、お前が死ねばよかったんだっ——」

「やつ、やめ……」

和歌月さんの叫ぶ怒りの演技と、堂上さんの怯え戸惑う演技が噛み合う。

さすがスターズ。

呼吸合わせは完璧だな。

”生真面目で追い込まれると何するか分からない”女キヤラには和歌月さんがあてがわれ、”チャラくてあんま深く考えてない自然体のお気楽”男キヤラには堂上さんがあてがわれている。

キヤステイングの妙だな。

違和感全然ねーわ。

「うわー、なんて」

……堂上さんがふざけた声とふざけた演技で倒れる。

真面目にやれや堂上！

「カット！」

「ちよつと！ 真面目にやって下さい！ 竜吾さん」

「どうせ切られるところは次のカットで撮るんだからいいじゃん。和歌月真面目すぎ」

「そうだね、OK」

監督がOK出した。うひゃあ。

……『ここでこのカットを撮り、そこでそのカットを撮る』って撮影レベル・編集レベルで理解してるやつ手の抜き方は、本当に熟達してんな。

力の抜きどころ知ってるやつって、長期撮影スケジュールの最後あたりでもバテねえし、無茶なスケジュールにも余力で対応するし、気持ち病気離脱率も低い気がすんだよな……逆に『頑張り過ぎちまう』真面目な人はコロツと離脱することが多い。

一長一短かもな、この辺は。

俺が好きなのは頑張りに頑張りを重ねる百城さんタイプだし。

堂上さんの今の適当な演技で、緊張でガチガチになつたオーデイション組の緊張が少し抜けたみてえだ。

やるな堂上。

褒めるぞ堂上。心の中で。

まあ堂上さんはそういう効果あんま狙ってねえ気がするけど。

「じゃ次、竜吾君が和歌月さんに切られて、それを目撃した3人のシーンを貰うよ」

「はいっ」

「はい」

「はい」

監督に呼び出された木梨さんが元気に、茜さんが落ち着いて、景さんが撮影に気分が入った様子で返答する。

カメラのフレーム内に入る三人。

さて、本日最後の撮影だ。

カメラマンがカメラを覗き込みつつ木梨さん、茜さん、景さんに位置を指示する。

「木梨さん、もう少し前に出てもらえる？」

「は、はい！」

「あ、前に出過ぎ。靴二つ分くらい後ろに下がって」

「す、すみません！」

「湯島さん、木梨さんが移動したからもう少し右に……そうそう、そこね」

「はい」

「夜風さんは……その位置がいいから、そこから動かないでね」
「はっ」

木梨さんにはカメラマンや助監督の指示が何回か必要みてえだな。
撮影に慣れてる茜さんは流石だ。

カメラの撮影範囲を大まかには理解してるから、最初からいい位置に立ってて、一回指示されれば最適な位置に立ってる。

手がかからなくていい俳優だな。

そして、景さんはカメラマンや助監督に立ち位置の修正を一度もされてねえ。

……ああ、いいな。いい感じだ。いいぞ景さん。

緊張してるらしい木梨さんが、景さんに話しかける。

「うー、初めての台詞緊張するね、がんばろ」

「……うん」

ん？

あれ。

今気付いたがひよつとして、手塚監督が俳優の初顔合わせの時にオーディション組だけ揃えてスターズ組揃える気が全く見えてなかったのって、こういうことか？

オーディション組という『枠』を強固にして、オーディション組を『負けるか』って

想いで一丸にして、撮影中に仲間意識で結束させるつもりだったのか?

思った以上にオーデイション組の仲間意識が強え気がすんな。

いや、今は撮影中だ。そつちに集中しねえと。

「茜ちゃん。私、頑張るから」

景さんが茜さんに、宣誓するように言う。

返答はなく。さりとして拒絶もなく。景さんの方から茜さんに歩み寄っていく。

周りを見渡してみた。

源さんがいる。烏山さんがいる。百城さんもいる。

カメラの撮影範囲には殺されそうな堂上さんと、殺しそうな和歌月さんと、それを目

撃してしまう普通の女の子三人。

カメラ数は三。

堂上さんと和歌月さんのアップ撮影カメラが一つ。

殺人を目撃してしまった女の子三人アップ撮影カメラが一つ。

五人を一画面に収めるためのカメラが一つ。

カメラの位置を考えて、俺は反射板^{レフ}の角度を少しズラして最適な位置にした。

「はいテストオ!」

「テスト!」

撮影が始まる。

いつも通り景さんが集中して、役に入り、練習してた二重人格のメソッド俯瞰視点に景さんの心が”入って”……い・か・な・い・の・が、見えた。

あれっ。

『夜風景』が『ケイコ』になってないのが、振る舞いから見て取れた。

あれー？

ゲロ女、降臨

あーダメだ、全然役に”入って”ねえな景さん。

止めるか？

いやどつかで止まるか、これなら。

「リンが死ぬくらいなら、お前が死ねば良かったんだ！」

「やつ、やめ……うわああー！」

和歌月さんが刀で切る演技をして、堂上さんが切られる演技をして、堂上さんが倒れる。

血も出てねえし服も切れてねえが、今回の撮影は後々編集で血などを合成する形式なんで、これでいい。

実際に切れた服と血糊を用意する撮影じゃなくて、合成だからな。

切られた結果服の数が減ったりとか、事前に用意する”最初から切れてる服”の分の予算がなくていいとか、予算に優しい撮影だ。

まーリアルな血が吹き出す合成素材は特撮で言う操演、この映画で言うところの美術が用意しなくちゃならん……つまり俺が用意すんだけど特撮の合成など、『合成素材』は

特撮や美術の担当が撮影期間中に用意しておく。なので編集担当から事前に「なんか便利に使える合成素材用意しておいて（はあと）」などと曖昧に言われることもある。

この刀は中々の自信作だ。

何せ中盤のハラハラシーンの要、和歌月さんの抹殺ブレードだからな。

軽い！ 総重量200g！

頑丈！ 細パイプを芯に、その周囲にウレタン刀身を構築することで強固に！

安い！ 工業商路のまとめ買いウレタンにやすしいパイプ、レジン塗料で塗装したんでどう高く見積もっても500円！

風雨に強く、血糊でベチャツツとしても変質しねえし、太陽光や皮脂とかの劣化要素にも表面塗装で長年耐えられる。

しかも外見的には、本物の刀より本物っぽいつきだ。

撮影の財布に優しく、が俺のモットーだけ。

「キヤアア！」

木梨さんが叫ぶ。

割といい声出すな。

”普通の子の悲鳴感”が出る。

体の所作がついてってねえやや棒立ち演技気味なのはどうかと思うが、撮影の緊張が

まだ抜けてねえのかね。

「あんた達もこいつとグルなんじゃないの!？」

「ちっ、違うよ!」

「信じられない、証拠はあるの!？」

「来……来ないで!」

和歌月さんが正気を失った様子で、狂乱の演技で刀を振り上げる。

恐れおののく三人が順繰りに発言し、最後に景さんが『逃げて』と言う。

皆が逃げて、カット、終わり。

んで、映像は学校の外に移り変わって、崖に追い込まれて斬り殺される木梨さん、崖から飛び降りる景さんと茜さん、崖上で海の中に落ちた二人を見失う和歌月さん、となる。

学校シーンと崖シーンは別撮りで、飛び降りシーンも東京のグリーンバックで別撮り。

だから誰も死んでねえし、実際は時間は連続してねえし、誰も飛び降りねえ。

あ、そうだあの崖、撮影の時以外は注意の張り紙貼つところ。

普段は県庁が責任もって自治体が監視しつつ落下防止杭とロープ張ってたんだが、撮影の時だけ除去してもらってたんだよな。

確か崖の高さが1mか2mでも、『海の中から陸地に戻れなくなるから』ってことで、そういう落下防止の何かしらが必須になってたから。

役所に連絡して、普段あそこに貼ってるロープに注意書きを貼る許可貰ったところ。

……さて、撮影に意識戻すとして。

撮影の空気が留まってるのが見えた。

景さんが自分の台詞のところ、台詞を言えなくなってる。

いや、台詞を言うのを忘れてる。

あーあ。

「？」

「ん」

「……あれ？」

「うん？ 夜風ちゃん？ 次、君の台詞。『皆、逃げて』だよ」

ハツとした景さんの意識が戻って来た。

危ねーことしてんなー。

今景さんの意識、現実にも役の中にも無かったぞ。

カメラの客観視点と自分の体の主観視点がちやごちやになった挙げ句、どっちの視点の認識も失って、自分の意識がどこにあるか分からなくなってたな。

舞台演劇の練習で傷害事件を起こした人が”我を忘れて” って言ってた時、少しこれに近い状態になってたんじゃなかったか。

「台詞飛んじやった？」

「すみません」

「あはは、緊張しちゃったかな。いいよ、テストはそのためにもある訳だし」

景さんが謝り、監督が笑って許す。

普段の景さんなら何も言ってねえ自分に違和感持ってただろうし、役に入ってる景さんならそれこそ何も言わねえなんてありえねえ。

周りは緊張で台詞忘れたんだと思ってるが、実際は『自分が誰なんだか忘れた』っていう表現をすんのが正しいだろうな。

それに気付いているのは今ここにいる人だと……俺と、烏山さんと、百城さんと……もしかして、手塚監督もか？

今『緊張』って単語出したの、緊張で台詞を忘れたと周囲に誤認させて、笑い話で流しちまおうって狙いか？

駄目だ、分からん。あの監督グラサンは表情隠しに本当役立ってるな。

けれども、面白くなってきた。

木梨さんが緊張する自分を制御して、なんとか役をこなそうとしてる中。

茜さんが場馴れしてる女優なりに、スターズの作る場の空気に飲まれないうようにしつつ、自分の演技を見せようとしてる中。

景さんは、自分の内側にしか目を向けてねえ。

自分の中にある意識を二つに分割し、片方をカメラの視点に、片方を役になりきる自分に振り分ける、二重人格に近い技法……その成立にしか心の目を向けてねえ。

意識を置いている位置、って奴が他の人とは違えな。

緊張や動きの硬さがまだ抜けてねえオーディション組の中で、一人だけ違う。

だから景さんのそういうところは、百城さんの目にも映ってるはずだ。

影響し合ってほしいもんだな。

百城さんからすりや、”自分をコントロールできてない”ことの象徴みたいな今の一幕は、マイナス評価対象かもしれねえけど。

「ごめんなさい、うまく集中できなくて……」

景さんが申し訳なさそうに、茜さんに謝る。

この距離からでもその瞳を覗き込むと、茜さん達がした真剣な演技を無駄に終わらせてしまったことを、景さんが申し訳なく思っていることが分かる。

『撮影』を見る視点が広くなってるな、景さん。

時代劇エキストラの時よりもはるかに、”周りの迷惑”をリアルタイムで分かるよう

になつてゐてえだ。

確かあの時は俳優蹴つてNG出されて、最初は監督に怒つてたくらいだったんだよな。

なんでNGで自分が怒られてたのかつて。

景さんは確実に成長してる。

”能力が伸びる”とかそういう成長じゃなくて、”撮影という環境に最適化される”という形の成長を繰り返してる。

自分を、使いこなせてきている。

そんな景さんの本当に申し訳無さそうな謝罪に、茜さんが返答した。

「カメラ前は緊張するもんやから」

……うむ。

茜さんらしい。

そういうところ俺むっちゃ好き。

景さんが話しかけても無視してたんだがなあ。

景さんが緊張で台詞忘れたと思つたから、景さんが失敗で大なり小なり落ち込んでると思つて、ついついフォローの台詞言っちゃまったんだろう。

カメラ前は緊張するのが当たり前だ、つて。

茜さんの主観じゃ仲良くする気ねえだろうし、まだ仲直りもしてねえし、景さんを見直す機会もなかっただろうに。

カメラ前で失敗して落ち込んだ風の景さんを見たら、フオローせずにはいられなかった。

だから景さんをずっと無視してたのに、つい言っちゃまったんだな。

無視し続けたのが終わって、そこからの第一声が景さんへの罵倒じゃなくて、景さんの失敗を責めねえための一言だったのがめっちゃ茜さんらしい。

いいぞ。

そういうとこ俺はクツソ好きだぞ。

かっこいいし優しいぞマイフレンド！

「どんまこ」

「めんなさいこ」

木梨さんが景さんに親指立てて、励ましの言葉をかける。

景さんは木梨さんにも謝り返したが、罪悪感は相当薄れてるように見えた。

いいぞ木梨さん。

この子は普通にいい子だな。

君も頑張れ。

「監督く、俺達の芝居は問題ないでしょ。次本番にしようよ」

「な……それじゃテストの意味ないでしょ。」

竜吾さん、地べたに倒れる芝居少しでもしたくないだけじゃないですか」

「んー」

堂上さんが適当なこと言い出して、和歌月さんが反論して、監督が考える。

普通、テスト撮影に使う時間を一回二回分減らそうがデメリットはあつても、メリツトはほぼねえんで、この申し出を受ける理由はねえんだが。

今の手塚監督なら、多分。

「……そうだね」

ほら、受けようとしてやがる。

手塚監督本人にすら、どういう画が撮れるか分かってねえはずだ。

何せ景さんだからな。

景さんという特大爆弾を撮影に綺麗に組み込む最適手は、『テストを重ねる』ことだ。

本番は練習のように。

練習は本番のように。

それこそが、撮影の世界における基本だ。

景さんはどうせテストでも役に入り込む。

役に入り込んだ景さんがどう動くかをテストで見極めて、周囲の俳優やカメラの動き方を調整して、景さんに合わせて撮影する。

これが一番自然な撮り方だ。

だが、テストをやらさず、景さんがどう動くかも想像できねえ一発撮りなら。

景さんの動きには誰も合わせられねえ。

場合によっちゃ、誰にも予想できねえ景さんの動きが、映画本編に採用される。

おいおい。

景さんの演技法が理解されてねえからか、誰も疑問に思つてねえのか、この流れ。

「……」

百城さんとか何か勘付いた顔してんぞ。

何考えてんだ、手塚監督。

「夜風ちゃんどう？ 次本番でいけそう？」

「はいー！」

「じゃ、本番で」

一瞬景さんが不安そうな顔をしたが、すぐに即答。

あ、今の返答、俺の『できます』みたいなニュアンスだったな。

「やってみます」とか「全力でやります」とかの『努力を約束する返答』じゃねえ、『で

「きることを約束する返答」。

俺が変な影響与えた結果とかだったら嫌だな。

きつぱり言うとな周りは多少なりと安心するが、女優初心者なんだから多少不安な返答したっていいんだぞ。

「本番！」

「よーい！」

カチン、とカチンコの音が鳴る。

『入った』。今度こそ、景さんの心が役の中に入り込む。

あとは……撮影中、カメラからの視点を、最高の集中力で併用できるか。

「リンが死ぬくらいなら、お前が死ねば良かったんだ！」

「やっ、やめ……うわああ！」

「キヤアア！」

そこからの演技は、ただ一瞬。

「——皆……逃げて！」

見惚れた。ただ見惚れた。俺まで吐き気がするほどに見惚れた。

ただ一言の演技。

一秒から数秒程度の、ほんの一瞬の演技。

カメラを覗いていたカメラマンを除く、ほとんどの人間が驚愕しただろう。

和歌月さんが堂上さんを切る演技をして、堂上さんが倒れる演技をして、木梨さんが悲鳴を上げて……景さんが、嘔吐した。カメラにだけは、映さないように。

嘔吐した景さんはそのまま演技を続行し、青い顔で台詞を吐いた。

予定にない順序の台詞。

他の人の台詞より先んじて発せられたその台詞は、他の人の台詞の機会を奪い、脚本の流れを無視したものだだったが——とても、とても、自然だった。

人が人を殺す瞬間を見てしまった人間の台詞、そのものだった。

「

誰もか、目の前の光景を疑った。

一瞬前まで健康体そのものだった景さんが、一秒足らずの間に顔を真っ青にして、嘔吐して、なおも芝居を続ける。

そこにいるのが、景さんなのか、ケイコなのか。

その人が健康体なのか、病人なのか。

演技なのか、そうでないのか。

誰もが、自分の目で見た現実を疑い、どちらが現実なのか一瞬分からなくなっていた。
「カット。OK」

カチンコの音が鳴り、カメラが止まると同時に、景さんは崩れ落ちるように倒れた。
カチンコの音が鳴り、カメラが止まると同時に、俺は走っていた。

ドアの前にいた百城さんを優しく押しつける。

邪魔だ、どいてくれ。

「どいてくださいー！」

「あ……」

周りの人を押しつけて、景さんに駆け寄る。

「茜さん、そこどいてー！」

「う、うん」

戸惑っている茜さんもどけ、景さんに歩み寄る。

嘔吐している景さんを、まず横向きにし、回復体位気道確保に使われる、意識がない人間に取らせるべき体勢。を取らせた。

「景さん、景さん」

意識がねえ。

俺のお母さんの症状と、同じ。

「触らないで、無理に起こさないでください！」

「え、何、なに？」

「美術班！ 俺の荷物の場所分かってますよね！」

簡易担架組めるキットが入ってるんで持って来てください！」

「は、はい！」「了解！」

「え、病気？ 夜風さん大丈夫？」

「病気ではありません。」

命にかかわるものでもない……とは、思います。

カメラが回るまでピンピンしてたの見たでしょう。多分、これは……」

「げぼっ」

意識が無いまま、景さんが嘔吐する。

体を支えてた俺にかかる。

知ったことか。

気道確保を再確認。

そのまま横に向け、口内の吐瀉物を、景さんを刺激しないようかき出す。

気絶時の嘔吐は喉に詰まり、窒息に繋がり人を死に至らしめる。

『嘔吐』と『気絶』はどっちか片方ならまだしも、両方セットでは死にかねえ。

しかも仰向けにしてると、気絶時に舌が喉側に倒れ込んで、やはり窒息死する。

連続して嘔吐する可能性がある人は、横向きの回復体位を取らせなきゃならねえ。気道は、なんとか確保した。

「担架セット持つてきました！」

「俺の横に置いてください！」

手早く、素早く、俺の手製の担架セットを組み上げる。

……数十秒経った。

心因性の神経失神は、神経の混乱による低血圧が原因だ。

横になってれば血が巡って、ほとんどの場合は数十秒以内に目覚める。

人間の体はそうなっている。

今まだ目覚めてない、ってことは。

「アキ——はいなかった。堂上さん！」

「お、おう！」

「ベッドまで運びます！俺が担架の片方持ちますので、もう片方持つてください！」

「何が何だか分からねえが、大体分かった！」

景さんの口元を拭いてやって、担架を持ち上げる。

大丈夫だ。

大丈夫のはずだ。

これが、あれなら。

この人は自分の演技に酔った、それだけだ。

それだけのはずだ。

おふくろみたくにはならないはずだ。

少しは理性で考えろ。余計な不安を抱えるな。今は景さんに手を尽くせ。

「カメラ止まった?」

「は、はい、監督。ですが……」

「いい画が撮れたかもね」

監督。

予想外のこと混乱して景さんを心配する気持ちと、予想外のこと喜んで撮れた画に期待する気持ちと、両方が顔に浮かんでるぞ。

景さんは、和歌月さんが堂上さんを切った時、飛び散る血から、堂上さんが死んでいく瞬間まできっちりイメージしてたんだろう。

景さんは最初から口に手を当ててた。

あれは、『飛び散った堂上さんの血が口元に当たる』目と肌の感覚まで、景さんの演技の中には含まれていたからだ。

あれは嘔吐を抑える所作で、口元の血を拭う所作だった。分かるさ。

俺もあの時、親父の血が口元にかかってたから。

景さんの動きのリアルさは、俺にはとてもよく伝わった。

肌の感覚と目に見えているもの、その全てにおいて人が殺される感覚をリアルにトレースしたからこそ、景さんはあの瞬間に嘔吐した。

その演技は、俺が作った血の合成素材を、編集さんがあの場面にちゃんと合成すれば、極めてリアルだったってことが分かるだろうな。

吐き気がするほど、リアルだった。

目の前で人が死んだ瞬間の人間、そのものだった。

人が死ぬところを目の前で見たことがある俺が、太鼓判を押してやらあ。知ってる。

知ってた。

俺は、分かってたはずだ。

野犬を見たことがねえ景さんが、野犬を見たことがねえ弟妹に、野犬を見せた。

それが景さんの芝居だ。

だから。

現実で人が死んでいくのを見たことがねえ景さんが、映画知識しかなさそうな景さんが、映画知識でしかねえとしても俺に”人が斬り殺される瞬間”を見せられたのは、当然のことだった。

人が殺されたところを見たことがねえ景さんが。

こんなにもリアルに、人が殺された瞬間を見た自分を、具現化した。

景さんは順調に、アクターズが生み出したテンプレート的なアクターズ流メソッド演技の卒業を成し遂げ、アクターズノット・アクターズに非ずの成長を遂げてるってわけだ。

そこは。

そこだけだは、ちゃんと喜んでやらねえとならねえ。

危なかった。

景さんの芝居の中に”死の実感”があつたら、俺も完璧に引き込まれてたかもしれない。

一瞬の芝居だった。

秒数に直せばおそらく一秒か二秒。

だからこそ”引き込まれた”人は少なかったが、百城さんは景さんの本質を掴みかけてたし、和歌月さんはあのオーデイションの時と同じ劣等感に飲まれた顔をしていた。

手塚監督も、景さんがなんで倒れたか理解してるみたいなの振る舞いで、おそらくは理解してるだろう。

俺が血の合成素材を作って、映像編集担当に送って。

そこでポストプロダクション。撮影後作業。撮影映像を編集し、音をつけて、特殊効果を追加し、画を合成し、上映時間に合わせて映像を切り削って時間内に収め、映画館上映用のフィルムや店頭販売用のDVDなどの製作もポストプロに含まれる。デスアイランドでは大型機材を設置する部屋を借りれなかったからか、夜になってから森の中にパソコンを設置して監督達がせっせとポストプロをやっている。かなしい。一ヶ月の撮影であれば撮影完了から五ヶ月ほどのポストプロを経て、劇場公開用フィルムは完成する。して合成して。

その映像を見りゃ誰もが理解する。

今のところ、デスアイランドで一番の名演を見せてるのは景さんだ。

なんだよありゃ。

一秒足らずだった。

『景』から『ケイコ』に移り、血色の良かった顔が青くなって、一気に嘔吐した。ソフトするのに、一秒もかかってなかった。

本当に、全てが一瞬で切り替わって、数秒の中にありえねえくらいのものが詰まっていた。

しかも、顔を青ざめさせて、その場でしゃがんでゲロ吐いた。

カメラの撮影範囲ではゲロ吐いた瞬間の景さんの顔は映ってねえから、景さんがふらついて、すぐ立ち上がった演技したようにしか見えてねえんだろうな。

何故カメラがゲロを映さなかったのか。

それは、景さんがカメラの撮影範囲の隙間にゲロを落としかつたからだ。

狙撃手のように冷静に、正確に、撮影範囲の隙間に滑り込んでそこにゲロを落とした。ただただ普通の女の子のように、恐怖し、怯え、真つ青な顔で嘔吐した。

本心から普通の女の子になりきりながら、緻密な計算でその行動を制御する。

まさに、二重人格。

もはや景さんは。

俺や百城さんのようにカメラの性能やレンズサイズを把握した上で計算せずとも。

感覚と才能だけで、なんとなく正確にカメラの撮影範囲を理解してやがる。

化物だ。

後々教えるつもりだったカメラごとの撮影範囲の特徴、まだ教えてねえんだぞ。

しかも現段階でも、自分の目の主観視点とカメラ三つ、合計四つのマルチタスクをこなしやがった……昨晚、カメラ一つにも苦勞してた奴が、だ。

それなら普通、今日はカメラ一つの視点を得るのが精一杯だろ。

なんでいきなりカメラ三つの視点を理解しながらの演技に成功してんだ。

なんだ、この成長力。

今回、景さんが台詞を言うのは、少し早かった。

そのせいで、予定されてた他の人の台詞は言うこともできなかつた。

だが、それこそが”自然”。

リアルさを求めるなら、『友達が目の前で切られたけど他の俳優達の台詞がまだ言われてないから自分は口を開かない』、なんてやっていいわけがねえ。

人が切られたその瞬間、ケイコは叫ぶべきだ。

だからこそ景さんは、予定より早く、堂上さんが切り捨てられたその瞬間に、他の人の台詞を上塗りしてまで叫んだ。

ゆえにこそ、リアル。

だからこそ、名演だった。

思い返すたびに、わけがわからなくなる。

俺は景さんの心配だけしてんのか、それとも——

「二代目。どう、夜凧ちゃんは」

「手塚監督。……何時間経つても、景さんは目覚めませんよ」

監督だ。見舞いか？ マメな人だな。

「あーら。日没になつても目覚めないと、重症だね」

「医者呼びました。この島の医者はちようど出てるそうで、明日朝来るそうです」

「先走つて個人的に呼ぶなんて心配性だね。それとも愛かな？」

「愛つて言つたらもう少し気をつけてくださいますか？」

「んっ、んんんっ!？」

「冗談ですよ。何動揺してるんですか。」

お願いですから、もう少し監督として気を遣つてください」

「あ、ああ、そうなんだ。ビックリした」

冗談なんてあんたが普段から言つてることだろうがこのダサグラサン。

俺は今結構怒つてんだぞ。

どうなるか分からねえ俳優を使う時は、せめて気を遣つた配慮してくれ。

じゃねえと、こうなるんだよ。

「特に理由もなく倒れたんだから、特に理由もなくさっさと起きてくると思ってたんだけどね」

「漫画じゃないんですから。」

人間が倒れるメカニズムには当然理由があります。

突然何の理由もなく意識が吹っ飛ぶような生物なら、人間とつくに滅びてますよ」

「ん、それは確かに」

「あれは血管迷走神経性失神だと思われます。」

神経調節性失神症候群、とも言いましようか。

恐怖やストレスが、脳貧血などの失神原因を引き起こすんです。

子供が学校の朝礼で倒れることがあるでしょう。

あれです。

神経バランスが変わりがちな子供は、あの時期だけ朝礼中に起立性の脳貧血を起こすんです。

通常、この症状は過度のストレスや恐怖などが原因となります。

景さんは役に入り込みすぎるあまり、殺人を目撃したショックで神経反射を起こしたのかと」

「ああ、ありそうだね」

……驚いてねえな。

驚くフリすらしてねえ。

”人の死を見る役に入り込みすぎて嘔吐・気絶した”くらいは推測してたつてことか。

クソが。

「この症状は、あまりにも役に感情を入れ込んだ結果発生したものであり……」
「そうだね。君の母親がよく起こしてた症状だ。」

親のために色々調べて、結果的に詳しくなった君は、息子の鑑だと思うよ」

「——母のことは、関係ないでしょう」

「かもしれないね」

大事なのは今の景さんのことで、それが全てだ。

「多くの場合、この症状は横になっていれば回復します。」

脳や、脳に血液を送り出す心臓に血液が戻るからです。

それでも意識が何時間と戻っていない景さんは、相当『深く』まで役に入っていたよ
うです」

「なるほど、君が焦って医者を呼ぶわけだ」

「景さんの体に問題はないと思います。そこは確信しています。」

でも、念の為です。撮影に影響が出るスクヤンダルにはならないよう、気を付けてます」

「うん、ありがとう」

百城千世子にスターズの人気俳優1人だ。

下手に医者でも呼びやあ、港を見張ってる週刊誌の記者あたりがあることないこと書き散らすに決まってやがる。

医者がここに来ただけの話が、『速報！ スターズ撮影で重大事故か!? 隠される傷害事故!』くらいの見出してスクープされることは想像に難くねえ。

景さんはもう何時間も起きてねえ。

ここが本土なら、俺は焦って医者に連れてったこつたろう。

だがここは島で、十分な医者が常備されてるわけでもなくて、島と本土を行き来する定期便は数えるほどしかなく、交通は週刊誌に見張られてる。

迂闊は、映画の死を招く。

それは週刊誌とそれの読者以外誰も望んでねえ結末だ。

監督以外の来客も来るかもしれねえ、と思ったんで、景さんの髪を優しく撫でて、髪の毛に付いてた癬を優しく直してやることにした。

手を動かしながら、会話を続ける。

「そもそもですね、監督」

「ん、なんだい？」

「前に時代劇の撮影があつたんです。

景さんはその時に見てるはずなんですよ。

他俳優の切る真似をする演技も。

役の目に映る、切り捨てられる子供も。

なのに、その時は吐かなかつた。

なのに、今回は吐いてしまつたんです。なぜか」

「へえ、それはちよつと面白い話だ」

「理由はいくつか考えられます。たとえば、マルチタスクが脳に負担をかけていたか」

起き上がった時、景さんの体とベッドの間に挟まれた景さんの髪が固定されて、髪の毛が抜けることにならないよう、そつと髪的位置を調整してやる。

「あるいは、成長によつて役に潜る深度が増し、感情移入しすぎていたか」

髪をさらりと流して、掛け布団を肩までかける。

気温は高めだったから、室温は冷房で相応に下げて、心地よく眠れるように。

「……仲間と、隣の茜さんと仲直りするために、気合いを入れて深くまで役に潜りすぎたか」

前髪を整える。

美人がブサイクに見えないように。

仰向けだから、起きた時に前髪が目に入らないように。

「朝見た俺製の生首見て、吐き気を抑えていたのが効いたか。つまり、俺のせいか……」
俺のせい、かもな。

景さんの髪からそつと手を離すと、手塚監督が笑っていた。

「君のせいってことはないんじゃないかな」

「さて、どうだか。分かりませんよ、本当のところなんて」

「やれやれ」

「本当はこういう危険性が見える撮影は全力で止めるべきなんでしょうね。でも……」

「でも、君は見惚れた。彼女が演技してた時は、素晴らしいとすら思ったはずだ」

「——」
「我に帰ってからの君の行動も、実に人道的だったと思うよ」

……ああ、そうだよ。

見惚れたよ。

心の底から。

おふくろのことを思い出しながら、おふくろのことを忘れそうなくらいに強く、目で

見て耳で聞きこの記憶に刻んでた。

今の夜風さんの演技の姿勢を、俺の本心は肯定的に捉えてる。

その果てに死んだ母親を知ってるのに、その上で、否定できねえ。

「君は自分の命と『素晴らしい作品』なら、自分の命を下に置くんだろうけど……」

それは、そうだが。

「それは、君の中にとても強い良心があるから成立していることだ。

他人の命を自分の命より上に置く君だから成立していることだ。

もし、当たり前の人間のように、君が他の人の命を自分より下に置いたら……」

……！

「君の中で、その他人の命は、素晴らしい作品を撮るための犠牲にしてもいいものにな

る」

「——なりませんよ、大丈夫です」

うわっ。

すげえ薄っぺらい宣言になっちゃった。

俺自身が信じてねえ断言なんて、こんなもんか。

ろくな人間じゃねえよな……俺は。

「夜風ちゃん見てると、末期の君の母親を少し思い出さない？」

全然似てないけど、何故だか少しだけ思い出すよね。

あの子が危ないことをすると、君は色々思い出して、自分を戒めるんじゃないかな」
「息子から言わせてもらおうと、そんな似てませんよ」

この人は。

周りの人に聞かれりや、俺の親父もおふくろも好ましく思ってたと言うだろう。

大人だから。

笑って平気で嘘をつけるから。

だけど、息子の俺にその辺の嘘が分からねえわけがねえんだ。

「手塚監督は、俺の母親が嫌いでしたね」

「ははっ、父親も嫌いだよ。」

君には申し訳ないけどそこを隠す気はないかな。

有能だったから、同僚としては信頼してたけど……

僕は心情的には君寄りだから、子供を残して消える親はちよつとね」

「そうですか。でも俺は大好きな親ですし、今でも愛してますよ」

「君にとつてはいい戒めだろうからね。」

あの二人が残したものは君の中で、良い意味で大きいんだろう。

良い影響も多く残してるんだろうね。

でも僕は本当のところ、信頼してただけであんまり好きじゃないんだよ、あの二人」
この人はただ、特に深い理由も因縁もなく、俺の親と俺のどつちが好きかといえば俺の方が好きだというだけのこと、心情的に俺の味方をしてくれている。

俺が好きな親をこの人が悪く言っても、だからか悪い気はしねえ。

「ありがとうございませう。俺のために怒ってくれて」

手塚監督が口元を一字に結んで、サングラスを指で押し上げた。

「好きな親をバカにされたら、怒っても良いんだよ、君は」

「いいんです。皆さん、優しい人ですから。俺も親も、ろくでなしですから」

先人バカにされたら俺も怒るさ。

単にバカにするつもりなら俺も怒る。

でも、そうじゃねえだろ。

撮影中、俺はずっとあんたの思考を拾ってる。

あんたの頭の中の作りたい映画を形にするため、俺はずっと手足に徹してる。

手足を気遣う頭に向かって怒るやつがいるか？

いねえだろ。

だからさ。

景さんがとんでもねえことするの喜んでねえで、景さんのことも万が一を考えなが

ら、氣遣ってやってくれよ。

なんとなく。

なんとなくだけど。

あんた、景さんをとんでも頑丈な、何かにぶつけて対象をぶつ壊す何かだと思ってるか。

「でもやつぱり、人が死ぬのは嫌ですよ。本当に」

ああ、これが俺の本音だな、と他人事のようにしみじみと感じられた。

「……ああ」

「監督。時には独断で俳優の安全対策をする許可をください。」

安全対策をした後には、必ず監督に報告すると約束しますから」

「ああ、もちろんだ。予算もいくらでも使ってもいいよ。そっちは僕が調整する」

「ありがとうございます」

監督には監督のやりたいことがあるんだろうさ。

でも俺にも、万が一にも壊れてほしくねえってもんはあるんだ。

景さんの服が汚れねえよう、俺の腕で吐瀉物を受け止めたりしてたが、それでもやっぱり衣装は汚れちまった。

今洗濯にかけてるが、明日までに乾くかどうか。

デスアイランドの学生服はベースが真つ黒だから、ゲロのシミは目立たねえんだが……ネクタイの白地にガッツリゲロが染み込んだしまった。

ちよつと変色してるかもなあ。

クソツ。

染料つてのはpH酸性かアルカリ性か。例えば木綿や麻などのセルロース繊維を染色する場合で、これを直接染料で染色する場合、一般に酸性側で染色率が高く、アルカリ側で染色率が低い。ただし染料を溶解させる溶媒はアルカリ性の方が好ましく、人間の体も弱アルカリ性のため、一般的には中性やアルカリ性で染色される。にかなり左右される。

天然染料とかはエグいレベルで影響される。

人間の胃液つて塩酸以上濃塩酸以下とかいうとんでもねえ酸性だからな。

胃液の中の酵素を塩酸の中にぶち込んで死なねえんだぜ。

そりや大抵の菌も死ぬわ。

凄えな人体。

まあそういうわけで、ゲロは結構シミになりやすい。

洗濯終わってもネクタイにシミが残ってたら、新しいの作らねえとなあ。

外見が同じやつも一本。

景さん明日も撮影あるし。

ねえと明日からの景さんが困る。

ただ、ゲロで発生した困り事は景さんの服が汚れたかも、つてことじゃなかった。

その、なんだ。

景さん着替えさせねえといけねえことがだな。

女性の手を借りないととても困ったことになった。

つーわけで、茜さんに景さんの服を着替えさせてもらったわけだ。

ゲロ着たままじや流石に借りてる宿泊施設のベッドに寝かせんのは気が引ける。

茜さんは景さんの演技に何か思うところがあつたようで、景さんのお世話に献身的になつてくれた。

景さんが倒れて、茜さんが着替えさせて、茜さんを先に休ませて俺が看病してて、そこに監督が来て、茜さんを残して俺と監督が離脱して、茜さんが看病に入つて。

俺は何時間か景さんの看病に回ってた分やってなかった仕事を終わらせて、ついでに景さんのネクタイの使うかもしれないねえ予備を作って、仕事を続けた。

そして翌日。

朝起きたばかり風味な俺の下に、景さんが茜さんの手を引いてやってきた。

「仲直りしたの、私達!」

「おはよ、英ちゃん。ちよいとお邪魔するで」

「あ、そうだね。おはよう、英二くん」

「朝の挨拶より優先とかよっぽど嬉しかったんですね……おはようございます」

よかったよかった。

なんか仲直りできたのか。

まあ互いにちよつと認識のズレがあったただけだしな、よかった。

「どう仲直りしたんですか?」

「あのオーデイションで、私が悪かったから」

「あのオーデイションで、私が悪かったんや」

「……!」

「……!」

「いや、私が!」

「いや、私が！」

「俺朝飯まだなんでお二人も一緒にどうですか？ いやー楽しみだなー今日の朝ご飯！」

「あ、うん」

「せやな」

……流石に、話を中断させるにしても大根演技すぎたか。

生暖かい視線を感じる。

こっち見んなや。

「英二くん、仕事してたの？」

「はい、ちよつとこの先使うので」

景さんが俺が一分前まで弄ってた偽物の木を拾い上げ、言った。

「作り物がいつばいだわ……何時から作ってたの？」

「六時から今お二人が来るまでずっとですね」

「六時から……早起きさんだわ」

なんか景さんが十二時間くらい勘違いしてる気がするがまあいいや。

突っ込んででも藪蛇だし。

いやー仕事進んだ進んだ！

今日は早く寝れるな。

健康的な睡眠計画が立てられる。

景さんが先に進む中、その後を俺と湯島さんがついていく。

「英ちゃん、せめて昼寝とか取らんといいんな人にチクるで」

「……はい」

バレテラ。お前読心能力者か何かかよ。

「六時からなら英ちゃんの仕事した量があんなに多いわけないやん」

「ごもつともです」

「英ちゃんはなあ。徹夜でゲームしとる子供みたいでほつとけんわ」

「俺に母性アピールして何をするおつもりですか」

「しとらんわ!」

好きなものが洗濯とアイロンって時点であんたの母力は大概だぞ。

「……夜風ちゃんにな、悪いことしてもうたわ」

「夜風さんが許してるならそこで終わりです。違いますか」

「せやかてな。夜風ちゃんの演技を私が理解出来てれば、問題なかったはずなんや」

あれ理解しろってのはキツくねえかな。

少なくとも俺はそれを茜さんの失態とは思わねえぞ。

「英ちゃんなら、ひと目で見抜いてたんやろ、あの子の演技の本質」

「……それは」

”物の価値が分からん愚か者”とか言うやん？　うち、それやったんやろな」

「茜さんは愚か者なんかじゃありません。」

景さんの演技は大抵の人が見ても分かり辛いものですから」

「ええんや。夜風ちゃんに悪気はなかったんやから、許さんかった私が悪い」

あーもう。

いい人だなこの人は。

”しようがないことだった”で許しに行つて、謝りに行つたのか。

誤解とかなくても景さんのあれは許せねえ人、そこそこいるつて。

茜さんが、俺と景さんを交互に見て微笑む。

「夜風ちゃんは私と違って、英ちゃんと同じ景色も見えるんやろな」

「……ははっ、なーに言つてるんですか。今、俺と茜さんは同じ景色を見てますよ」

「——」

茜さんの言つてることが、分からねえ俺じゃなかった。

その意図が汲めない俺じゃなかった。

それは茜さんだつて分かつてる。

その上で、俺は会話をズラした。
変な劣等感持つなって。

……その劣等感が俺のせいなら、俺はいくら謝ったって謝り足りねえ。

同じ作品の撮影してて、同じ集団に居て、同じ景色を見る。

今は、それでいいだろ。

「英ちゃんは、周りに甘えとるな」

「……自覚はあります」

「ええんやで、甘えても。」

私はここにおける内は、頑張つとるから。

辞めたいと思つた時、辞めんで踏ん張る沢山の理由の一つに、英ちゃんも使つたる」

「……」

この業界から友人に消えてほしくねえつてのは、俺のワガママだ。

じゃあ、友人がそのワガママ聞いてくれてるつてのは。

沢山ある辞めない理由の一つに、俺のワガママを聞くつて要素を入れてくれてんのは。

この人の好意だ。

この人の優しさだ。

まったく。

なんで客観的に見て、茜さんより業界で食っていく才能に恵まれてる俺が、精神的には茜さんの舎弟みたいになってんだらうな。

たまげるわ。

「うちもまだ大女優諦めてへんからなー！」

「その意気です！ バックアップは任せてください」

「夜風ちゃんとも仲良くなれるとは思つとらんかった。」

世の中思いがけないことなんて沢山あるもんや。そう……」

俺の方から息を合わせて、声を合わせた。

「 人生はチョコレート箱、開けてみるまで分からない 」

楽しく笑って、朝飯にゴー。

茜さんに席取ってもらって、俺と景さんと三人分の飯を取りに行く。

ここの食堂の飯は美味い。

ついベーコンレタスサンドとサラダと野菜スープの野菜づくしを選んじまった。

特に好きなメニューってわけじゃねえけど、まだ食ったことのねえメニューが気に入って仕方ねえんだ、これは男のサガだ。

景さんと飯を運びながら、言葉を交わす。

「茜ちゃんには、とても酷いことをしてしまったの」

「茜さんが許してるならそこで終わりです。違いますか」

「でもやっぱり、皆が私のフォロワーしてくれてたのに、私だけ暴走してたのは……」

「気持ちは分かりますけどね。謝り合ったならもういいんじゃないでしょうか」

「うん、そうよね。茜ちゃんともっと仲良くならないと」

……切り替え速えな。

俺、なんつーか。

複雑な感情を抱えつつ嘸み締め、頑張つて笑つて前に進んでく茜さんと。

基本ネガティブな癖に、感情を人格ごとコロコロ排出したり装填したりしてるから、

さっさと気持ち切り替えられる景さんと。

見比べてるところ……筆舌に尽くし難い感情が湧いてくる！

そうだよな！

この先喧嘩とかしたとしても、感情切り替えられねえ茜さんがむすつとし続けて、感情サクリ切り替えられる景さんが仲直りしようとして、今回と同じ構図になるのがあるありと見える！

これちよつとズルくねえ!?

「早速芸能界で女優の友達が出来てしまったわ。」

英二くんは……女優の友達とっても多そうね」

「あの、言葉にトゲがないですかね」

「無いわ」

「無いんですか……いや俺の知人は中年男性が多いですよ。」

特撮の名の知れた有能なスタッフさんは大体そうですしね」

「そうなの？」

「話が合う人とは仲が良くなりやすいものです」

「そうね。私も、茜ちゃんや……千世子ちゃんと仲良くなつていけないと。」

茜ちゃんやつと仲直りできたんだもの。ここからちゃんと、本当の友達にならないとね」

一息、間が空いた。

景さんが俺を見て何かを思い出すような顔をする。

景さんが何言うか、なんとなく分かった。

「これが、私達の美しい本当の友情の始まりだ」

景さんがキョトンとして、一瞬後に、とても幸せそうな笑顔を浮かべた。

本当に美人だよなあ、この人。

「英二くんって、本当に私の気持ちを分かってないの？」

「分からないことは分かりませんよ。そうですね。

今の景さんが、初めて出来た同年代同業者の友達に、喜びを感じてることくらいでしようか」

景さんが照れ臭そうに微笑む。

分かるさ。

夜風さんにとっての茜さんが、俺にとってのアキラ君だったから。

ガッツがある優しい友達ってのは、才能も能力も抜きで大切に思えるもんだろ？

「いい友達になれると思いますよ、二人とも。

芝居が好きで、一生芝居をして生きていたいと思ってる二人ですからね」

友達と友達が仲良くすれば。

応援してる俳優と俳優が仲良くすれば。

それだけで、嬉しい。

舞台の上で輝く人達の間には、絆があってほしい。

こいつも俺のワガママだが、できればそうであってほしいと、いつも祈ってる。

シン・ゴジラ

現在撮影三日目、14:20。

「いい海ですねえ」

「いい海だねえ」

「朝風君、千世子君、やることないからって観光気分になつてないか」

アキラ君は真面目だな。

しかしいい海だ。

南の島の海は本当に汚れてねえんだなあ。

青空や太陽とベストマッチの美しさだ。

そんなことを、崖の上から海を見下ろしつつ、思った。

「というわけで、こいつが景さん達の代わりに投げ落とす人形です」

「あんま似てないけど、朝風君にしては珍しい」

「元々あつたでかい人形にテーピングして塗装して、服着せただけですからね。

ただ問題はないと思いますよ。

カメラは遠くのあそこで、撮影範囲は……。

結構広いですよ。加え、撮影範囲のほとんどは背景ですから気にしなくて大丈夫です」

少し遠くの、崖をカメラで映す岸のカメラを指差して見せた。
アキラ君と百城さんがそちらを見る。

「意外と遠いね」

「この辺り、崖と滝と海だけですからね。」

海側から崖を撮影しようとする、海上か離れた岸にしかカメラ置けないんです」
「海上の船にカメラ置いても波の振動でブレるからね……」

「ただ、悪いことばっかじゃないです。」

俺にとっては、ですけど。」

カメラ位置が遠いので、崖と滝と海と背景を収める引きの画で撮るらしいんです。つまりこの人間に似せたウルトラマン人形は結構遠くから撮られるわけですね。

1 mの距離から見れば人間との違いも分かるかもしれないですね。

でも100 mなら、違いは1/100に。300 mの距離からなら1/300の大きさにしか見えません」

「遠くのカメラからなら違和感も持てないかもね」

「劇場で気付かれないレベルの違和感になってくれればもう大丈夫でしょうね。」

DVDやBDをテレビ画面で再生した時には、おそらく1mm以下の差異でしょうから」

遠くの作り物は見分け難い。

色んなものに混ざっていると更に見分け難い。

動いてると更に見分け難い。

100倍離れりや違いも1/100の大きさでしか見えねえ。

サツカーや野球の観客席の中にマネキンがポツンとあつても、フィールドに立つてる選手の目には見つけられやしねえ。

服着せて物凄い勢いでぶっ飛んでるものと、人間とマネキンの区別はつかねえ。

だから、カメラから見て遠くの崖を急速落下してるものなら、人間と人形の区別はほぼつかねえ……ってわけだ。

今日はここの崖でまず撮影。

和歌月さんが木梨さん、景さん、茜さんを刀持って追い立てて、木梨さんを切る。

景さんと茜さんは逃げて海に飛び込む……ふりをする。ここでまずワンカット。

刀持った和歌月さんが刀持って崖から海を見下ろし、佇むシーン撮って、ワンカット。

原作だと和歌月さんが演じてるキャラも飛び込んでるが、今のところ演出や監督と話し合った結果、とりあえず海飛び込みの合成はしないで撮影しようって話になってる。

展開的にあんま飛び込む意味がねえのと、合成はすればするほど合成が目立つ可能性が上がり、観客が白けちまう可能性が高まるからだ。

そして俺が人形投げ込んで撮影、海に落ちる景さんと茜さんの(偽)シーンでワンカット。

んで最後に、和歌月さんから逃げる木梨さん、景さん、茜さんが校舎から出て来るシーンを最後に撮影して終わりだ。

映画は、時系列順に撮るとは限らねえ。

例えばこの場合、『海が見える崖は太陽が落ちてきたことが目に見えすぎる』っていう問題が表出しちまう。

12時に撮った撮影の後に、17時に海沿いの崖で撮影したら、時間の経過が太陽の動きでバレバレになっちまって台無しだ。

だから、海の撮影の後、森の中の校舎で撮影をする。

森の中での撮影は太陽が木々に遮られ、撮影時間の調整が効くからだ。
まず海。

次森。

室内に至っては、実は夜中にも締め切った雨戸の向こうに強力なライトを置くとかすれば、昼間の撮影ができなくもねえ。

開けた場所ほど時間の誤魔化しは利かねえんだ。

そういう意味で、撮影をいつも巻いて終わらせてくれる百城さんの安心感は半端ねえ。

次の撮影のため一人で色々準備してた俺に、アキラ君が耳打ちしてきた。

なんだ、内緒話か？

「朝風君、千世子君に何かしたかい？」

「僕が島を出る前より不機嫌になつてる気がするんだが」

「不機嫌、ですか？」

「なんとなく不機嫌な気がするとか……勘なんだけどね」

「幼馴染特有の勘ですか。」

「アキラさんがそう言うならそうなんでしょうね」

百城さんの内心なら、俺よりアキラ君の方が理解してる気がする。気がするだけだが。

「俺の心当たりは……おそらく……景さんですかね」

「何かあったのかな？」

「昨日、景さんが百城さんのテクニクをかなりのレベルで盗んで名演したんですよ」

「え？」

「あれ、アキラさんは昨日のあの撮影を録画で見たんじゃないんですか？

景さんがカメラの撮影範囲を認識して立ち回っていたでしょう。」

複数のカメラの撮影範囲の完全認識は百城さんの専売特許でしょう」

「あ」

「ライバル意識がメラメラと燃え上がるとか、そういうことが起きてるんじゃないかなと」

「なるほど、それで朝風君が千世子君を明確に夜風君の下に置いたと……」

「え？」

「え？」

「そんなことするわけじゃないじゃないですか。何故そんなことを……？」

「だって、千世子君の良さを吸収した夜風君だろう？」

想像もできないが、そんな人間が居たとしたら……

「少なくとも君にとっては、他の女優が要らなくなるほどの存在になるんじゃないか」

「あ」

「その辺深く考えてなかったのか。千世子君は確実にそう考えてると思うよ。」

君の評価基準における”一番素晴らしい女優”が夜風君になった、って。

千世子君もあっさりと自分の技術を盗まれたことに思うところもあるだろうし……」
「そういうものでしょうか。」

技術は教え合えれば高め合えるものです。

百城さんは自分の技術を盗まれたくらいで不快感を持つイメージが無いんですが」
「千世子君は少しそう思っても顔に出さなだけでよ。」

千世子君が他の人より気にしてないってのは確かにそうだと思うけどね。」

朝風君は、ほら。」

周りの大人の技術を片っ端から盗んできた人じゃないか。」

だから自分の技を盗まれることをほとんど気にしてない。」

たぶん、夜風君もそういう気にしないタイプだと思うけど、それはきつと特殊なんだ」
「それは……そうかもしれないね」

「あとほら、千世子君はああ見えて負けず嫌いなところがあるから」

「監督やPに『百城千世子』を求められたら、共演者に絶対競り負けませんからね。」

「周りが個人的私情で目立とうとすると、全技巧でそれを抑えて上に行く人ですし」

「女優として、役者として、女として、『百城千世子』として。」

「絶対に負けたくないと思う相手……それがきつと、夜風君だったんだらう」

「良いライバルになると思ったんですが、失敗だったでしょうか」

「僕も良いライバルにはなると思うけど……どうだろうね」

現実に、百城さんは不機嫌になってるらしい。

その理由は俺も気付いてた通り、景さんが先に百城さんの芝居を盗んだから。

アキラ君にはそんな俺以上に見えてるものが多いからか、俺の雑な推察に的確な補足をしていたってくれた。

「どうやっても互いの『個性』までは喰らえないと思うんですけどね、あの二人」

「? 個性……?」

「喰らえるのは一定の技術までってことです。

リザードンが水鉄砲覚えてもカメックスにはなれませんし。

逆にカメックスが火炎放射覚えてもリザードンにはなれないでしょう?」

「ああ、なるほど」

「第一格上が百城さんで、挑戦者が景さんなんですから、気にする必要もなさそうなんです」

「だから朝風君がまた夜風君にだけ見惚れるとかしたんじやないかと思っただが」

「あ、だから最初に俺に『何かしたか』って言って……ひどい。

俺が見惚れたからって何かあるわけじやないと思うんですが。

百城さんが何よりも気にしてるのは、俺の視線ではなく大衆の視線でしょう」

「いやそれは……あ、そうか。そういうことか」

「何か気付きましたか？」

「朝風君は夜風君の演技に見惚れる。

夜風君は朝風君のために最適化してない演技をしている。

だけどその未加工の演技が、既に朝風君の好みにどストライクなんだ。

対し、千世子君は大衆の好みに最適化された演技だ。

未加工でなくて、もう朝風君の好みに最適化する余地がない。

よって朝風君という審査員の前では、千世子君は夜風君に必ず負ける運命にある……
？」

「考えすぎじゃないでしょうかね」

「ええっ」

「だって俺、あの二人の演技は同じくらい愛してますよ」

「……あ、ああ、そうか」

「あ、すみません。言い直します。

愛は流石になんか最適な言葉選びじゃないですね。

大好きと言ひ換えます。めっちゃ好きです、あの二人の演技」

「……普通の恋愛ドラマだと『愛してる』『大好き』は同義なんだが。

君はなんだかその二つの間に越えられない大きな壁がありそうだ……」
「あるかもですね」

結局なんかよく分からん感じになったな。

百城さんは体調不良の人に駆け寄るために押しつけられても、気にしない人だ。

あの人は心が広いからな。

たとえば俺がアキラ君助けるために百城さん押しつけたって、笑って許してくれる人だ。

昨日あの後、俺が押しつけたことを謝っても笑って許してくれた。

天使だな。

今思うと、いつも周りを見てる百城さんがあの緊急時にドアの通り道塞いでるとか、珍しいこともあったもんだ。

ぼーっとしてた？

あんまなさそうだな。

通り道を塞ぐ理由があつた？

いや、あの人そんな性格悪くねえし、景さんの体調を思えば景さんに対しそんな仕打ちする理由は百城さんにはねえはずだ。

だとしたら、百城さんもまた——百城さんの技術を取り込んだ景さんの演技に、目

を奪われてたか。

俺が懸念してた景さんと茜さんの間の確執も解決された。

三日目で問題が大まかに解決されたのはでけえ。

撮影はこっからスムーズに進む……と、思いてえところだが、さてどう転がるかな。

「あ、朝風先生！ お疲れ様です！」

「うるせえな！ お疲れ様です、英二さん」

「お疲れ様です、烏山さん、源さん」

「昨日夜風に例の件で謝られたんですが、

『あの時は武光君を本気で殴り殺そうとしちゃってごめんなさい』

と言われて、思わず笑ってしまっただですよ！ あいつは本物ですな！」

「いやそれで笑ってるお前はおかしいっつーの。」

撮影前にうるさくしてすみません、英二さん」

「いえいえ、俺はこの音量あまり嫌いではないですから」

揃ってきたな、人。

あそこにいんのは、木梨さん、景さん、茜さんか。

「私頑張ります！ 夜風さんみたいな演技ができるように！」

「え、あ、うん。頑張って」

「夜風ちゃん初映画で同業者をファンにするとかホンマ半端ないわ」

「ちよつと、茜ちゃん」

……木梨さんがいつの間にか景さんのファンになってる。

あれ、いつからだ。

昨日最後の撮影で木梨さんと景さんが一緒の時はそうなつてなかったよな。

朝俺と景さんと茜さんと烏山さんと源さんと飯食つて、俺だけ先仕事で抜けて。

そこから午後の仕事まで景さん見てなかったが……どつかでなんかあったのか。

あつちには堂上さんと和歌月さん。

なんかマジでナチュラルにスターズ組とオーディション組分かれてんな。

殺す側の和歌月さんが殺される側の景さん達と打ち合わせしてんの一度も見てねえや。

「竜吾さん昨日でもうクランクアップ撮影終了のこと。作品そのものの撮影終了がクランクアップ。俳優単位での撮影終了がオールアップ。ただし、撮影慣れしていない新人や、特定の会社の撮影現場においては、クランクアップをオールアップと同じ意味で使うこともある。また、略称としてただ単にアップとだけ言うこともある。例えば仮面ライダー俳優のTwitterや個人ブログを追っていると、同じシリーズの俳優であるのに、それぞれが「今日オールアップしました」「本日クランクアップです」とそれぞれ

違う言い回しをしていることが分かる。でしょ、何してんですか」

「昨日のシーンの続きだろ、今日。」

お前がそこまで言うなら夜風の芝居もう一度見て帰ろうと思って。負けんなよ、和歌月」

「あ、当たり前です」

堂上さんは景さんを小馬鹿にしてるみてえだな。

和歌月さんは景さんを過剰なくらい意識してる。

けど、二人とも景さんを見る。

皆、同じだ。

他のスタッフや俳優も同じだ。

皆、昨日の景さんの演技を見て、ある人は動揺し、ある人は理解できず混乱し、ある人はバカにし、ある人は感嘆し、ある人は今日改めて見極めようとしている。

各々景さんを見る時の感情こそ違えが、皆が最低一度は景さんをチラ見してる。

撮影の中心は今、景さんだ。

ある人は信頼してる目で、ある人は不安たつぷりな目で景さんを見る。

誰も、景さんから目を離せねえ。

しかし堂上さんは本当に使いやすい俳優だな。

作品序盤で死ぬ俳優で、堂上さんの撮影を序盤に集中させてた、とはいえ。

スケジュール30日予定の撮影で2日でオールアップ完了とか、撮影に無駄もNGもねえって証拠だと言える。

NG出したら後に食い込むわけだし。

テストすらカットしようとするだけの實力はあるってわけだ。

序盤に死ぬちよい役でも印象に残る演技をする、つてのは結構難しいんだぜ。

『スパイダーマン ホームカミング』でもロバーツ・ダウニーJr有名シリーズ『アイアンマン』の主演トニー・スタークを演じる名俳優。元メソッド演技俳優であり、後に「メソッドや演技派にはもう飽きた」と自分の個性を売り出す個性派俳優となり大成功した。つまり、タイプとしては『百城千世子になった夜風景』。当時、メソッド演技によるストレスがロバーツに繰り返し麻薬を再飲用させていたのでは、という分析もある。もたつた8分の出演を、最高の名演だと賞賛されたりもした。

まあ一説にはその時のロバーツ・ダウニーJrは、1分100万ドル(約1億1000万)のギャラでスパイダーマン映画に出てたとも言われてるだけだな。

すげえなアメリカ。

短時間でも名演すりゃ十分な金出すんだな。

もう怖えレベルだ。

「ちよつと撮影時間押してるから、今回もいきなり本番で行けるなら行っちゃおうか」
手塚監督？

「手塚監督、テストは入れるべきでは……」

「ちよつと巻きたいからさ。二代目はちよつと待ってて」

おい。昨日の撮影見て、何期待してる？

……見たことがないものでも、景さんが見せてくれると思ってるのか。

「はい、本番いきます」

「よーい」

カチン、とカチンコの音が鳴る。

所定の位置から、景さん、茜さん、木梨さんが走り出す。

その後を、刀を持った和歌月さんが追う。

刀を持っている分、重量と腕が振れないというハンディで、和歌月さんは普段より遅く走ることしかできねえと言える。

が、基礎身体能力のレベルが違い。

それでもなお和歌月さんの方が速えから、追われる三人は全力で走ってても、和歌月さんには多少手を抜いて走る余裕がある。

「マズイよ、追いつかれる、殺される！」

息を切らせながら言葉を吐く迫真の演技。

まー音声は後で吹き込みになるだろうけどな。

「待てー！」

「行き止まりだ……！」

逃げる三人を海沿いの崖に追い込む和歌月さん……姿勢いいな。

この四人の中だと、景さんと和歌月さんの走る姿勢がツートップで綺麗だ。

”この人は走るの速いんだな” っつてのは走る姿勢からも伝わってくる。

特に和歌月さんの刀を構えながらの走る姿勢は、かなりサマになってる。

これができるねえアクション俳優ってのは結構いるんだ、これが。

「飛び込んでー！」

はい、最後の台詞終了。

ここで監督がカチンコ鳴らして、カットだ。

「飛び込む瞬間は東京で別撮りするからこの風景の動画を撮っておく。グリーンバックブルーバックでジャンプする俳優の姿を撮る。この二つの映像を合成すると、この崖からジャンプする映像が完成する。崖の上を走る映像、合成で作った映像、海に人形が落ちていく映像を繋げると、自然な落下シーンになる。」

本当に飛び込まないでね、あはは、なんて——うん？」

あ、飛び降り——飛び降りた!? 景さん!?

「あら」

ウワアアアアアアアア!

お、お前ツー!

「え……」

「! 消えた!」

「いや飛んだぞ!」

「あいつ、正気かよ」

反射的に、俺とアキラ君が飛び出そうとしていた。

「僕が助けに!」

そんな俺達を、監督が手で制する。

「待って。」

カットかけるの忘れてた僕のミスだけど。

カメラ回ってるし勿体無いから続けて貰おう」

一旦止められて、俺も冷静になった。

俺が手ぶらで焦って降りるより、それより、何か浮くものを!

馬鹿野郎!

ここ数年で何人も映画撮影で溺死2013年にジョニー・デップ出演の『ローン・レンジャー』でスタッフが溺死、2014年に香港映画『SKIPTRACE』の撮影中にカメラマンがボートから海に投げ出されて溺死。少し古いところでも、アリサさんの世代の『東方見聞録』の溺死例など。1983年のアメリカ映画『ブレインストーム』では、女優が元夫を含む撮影チームに暴行された後に海に突き落とされたと思われる死に方をし、殺人疑惑で再捜査が開始されたが、2018年2月段階で容疑者は聴取を拒否している。してんだぞ、知らねえのか！

ここ海水浴場じゃねえんだから水面下には足に絡む海藻とかある可能性も……あークソ、ポリタンク、ポリタンク！

「えいー！」

茜さんまで飛び降りた！

クソボケがあああああッ！！

「はっは、夜風にあてられたな！」

「何してんだよ茜さんまで、マジかよ」

鳥山ア！ 源オ！

お前からあんま動じてねえけど、お前からより景さんや茜さんとの繋がりが薄いアキラ君が今、めっちゃ焦った様子で助けに行こうとした理由ちよつとは考えろや！

「うっ」

「クツ……待……待て！」

和歌月さんが木梨さんを切り捨て、木梨さんが倒れるや否や、飛び降りた。

あーもう嫌だ。

皆死ね。

自分の命を大事に出来ねえやつは死んでしまえ！

だが、ここで溺死することなんざ許さねえからな！

「はい、カット！」

「どこで張り合ってたんだよ和歌月まで……合成で済むシーンだろ！」

「はっはっ」

「早く様子見てきて！ 何かあったら大変だよ！」

「は、はい！」

「フフフ。オーディション組、気合入ってんね」

「スケジュール乱れるよ、何やってんの」

「和歌月ってあんな子だっけ？ 熱いなー」

周りが色々言ってたが、カメラが止まった瞬間にはもう、俺も海に飛び込んでいた。

「英二いー！ お前まで行くなあー！」

堂上さんの声が聞こえたが、知らん。

できる限り思い切り踏み込み、海側に跳ぶ。

かつ、横にズラして飛ぶ。

景さんが”海に落ちた後のことを一切考えてない思いっきりの踏み込み”で跳んだ以上、景さんだけはかなり陸から離れてることは確実だ。

かつ、俺が着水したところに人がいたら、最悪衝突して海にいる三人の誰かの首が折れる。

だからこういう撮影の時は、最初に飛び降りた人と、後から飛び降りる人がぶつからねえように事前に緻密に位置を計算して調整する。

しなきや死人が出る。

だがさっきの三人はおそらくノリで跳んだから、位置は絶対に計算してねえはずだ。

だから、俺の方が計算して落ちる。

ポリタンクを四つ抱えて。

落下中、嫌なことを思い出した。

景さんが好きな『カサブランカ』。

あれを撮ったカーティス監督は、アマチュア時代から色んな映画を撮ってて、その映画は一番古いのだと1912年とかだからほとんど記録に残ってねえ。

だからこそ、映画名とスタッフと出演俳優くらいしか記録に残ってねえ、けど人伝に伝わる逸話だけが残ってる作品ってのがある。

それが、カーティス監督の『ノアの方舟』。

カーティス監督は、いい作品のためなら人命を軽視する監督だった、と言われる。リアルにするために人命を軽んじる監督だった、と言われる。

彼は大洪水が全てを押し流す作品を撮ろうとした。

だが、ミニチュアがリアルでないと嫌がった。

だから、『大量の水』を役者達に向けて流した。

死亡者三人。

怪我人多数。

足の切断者あり。

そう、三人溺れ死んだんだ、その時の撮影では。

三人、溺れ死んだ。

安全対策がしつかりしてねえ撮影では、そういうことが普通にある。

人は、とても簡単に死ぬからだ。

『ノアの方舟』は初公開記録も残ってねえんで、お蔵入りしたとも言われる。

監督は「事故だった」ってことでお咎め無しだったそう。

1928年に、そうして三人の人間が死んだ。

今じゃもう、伝聞とそれを記した本の中にしか残ってねえような、そんな逸話だ。

撮影つてのは、三人くらい、簡単に溺れ死ぬ。

そう思いながら、海に落ちた。

まず近くに、計算通り景さんがいた。やっぱり陸から遠い。

「景さん！」

「英二くん、待ってて、今助けに行くから！」

「逆うー！」

俺が助けに来たんだよ！

「ポリタンクです！ここに掴まってください！」

密封されてるんで中の空気で水に浮きます！

海上水難救助で求められるのは体重の1/10の浮力。

皆さんの体重だと2Lペットボトル一本の浮力だと足りませんが、10Lポリタンク

なら……！」

「え、なんで私の体重を……？」

今そんなこと話してる場合じゃねえだろ、顔は良くても頭は悪いのか！

今俺は余裕ねえんだよ！

「茜さん、茜さん、これに掴まってください」

「み、水飲んだ、せ、背中うった、息できない」

「落ち着いてください。」

すぐに呼吸は戻ります。

パニックを起こさないように、落ち着いて。息を吐くことに集中して」

「はっ、はあー……あ、あんがとさん」

「浮くものを持つてる限りは溺れ死にはしませんから、しっかりと持つていてください」

ポリタンクの持ち手を茜さんに握らせて、和歌月さんの下へ。

……位置が悪い！

っていうか、和歌月さんが波を受けながらも片手で刀握りつばなしなせいで、上手く泳げてねえし、泳ぐのに必死に片手使ってるからポリタンクに手を伸ばせてねえ！

このバカ！

一説には海に着衣で投げ出された人間の死亡率って80%だぞ！

刀持つてなくても死ぬわ！

だから……映画の撮影過程で死ぬ人も出るんだよ！

「朝風さん、私は大丈夫です、それよりこの刀が潮に流されて失われることの方が……」

「また作りやいいい！でも、命だけは作れない！」

「水中で思いっきり蹴って、和歌月さんの手の刀を蹴り飛ばす。

刀が海に沈んでいく。」

和歌月さんの手に、しっかりとポリタンクを握らせた。

「……刀、自信作だったって、言ってたじゃないですか。私なら、大丈夫でしたよ……」

「人の命より上等な自信作を作ったことは、一度もないです」

「っ」

「すみません。」

皆さんなら大丈夫だったかもしれない。

海も高さも、致死ラインというわけではありませんでしたし。

俺はひよつとしたら、必要以上の心配で余計なことを……」

「謝らないでください」

和歌月さんの表情から、景さんへの対抗心が生んだ険みたなのが消えて、徐々に申し訳無さそうな顔になって、その目が真っ直ぐにこつちを見た。

「心配性なことが欠点だなんて、私は思いませんから」

ほどなくして、他スタッフがボートを回して俺達を拾ってくれた。

……やけに手回しがいいな。

なんてことを、思ってたんだが。

陸地に辿り着いた頃には、俺はもうそんなことは忘れてて。

飛び降りたバカどもへの怒りも忘れてて。

思わず、景さんと茜さんに抱きついてた。

「……………よかった……………」

なんかもう、色んなことがどーでもいーわ。

生きててよかった。

死ぬよ自分の命を大事にしないバカども。何事も無くて、本当に良かった。

「……………ごめんなさい」

景さんが、なんだか申し訳なさそうに言う。

「ごめんな」

茜さんが、なんだか照れ臭そうに言う。

俺は二人から離れて、至極当然にムカついてきた。

「……………早く着替えてください。お二人とも、この後撮影あること忘れてますよね」

「あ」

「あ」

「三人分の衣装が一気に海水濡れになったんで、予備がちよつと足りません。」

だから洗濯して乾燥させないといけないんですが……

この衣装を変質させない温度で乾燥させるとすると、今日の撮影スケジュールにはもう」

「英二！ 和歌月！」

「朝風君！」

堂上さんとアキラ君が来た。

わあ、スターズ俳優の足速え組だ。

崖の上で、俺達を拾ったスタッフのボートがここに来たの見て、走って来たな。

「おい、大丈夫かよ」

「竜吾さんが心配するようなことは何もありません。大丈夫です」

「そうか。まあ、和歌月も英二もいつも通りの生意気なツラだな、安心した」

「ちよつと竜吾さんどういう意味ですか？」

その次に……あれ。

百城さん？

三番目に来るのが百城さんとか、意外だ。

そこまで健脚じゃねえ人なのに。走り出したのが他の人よりも早かったのか。

「はい英二君、タオル」

「ありがとうございます。」

あ、百城さん、ちよつとお願ひしてもいいでしょうか。

多分目算だと景さん達の衣装準備が間に合いません。

なのでここからやる予定だった撮影は明日に回すと思います。

代わりに、明日やる予定だった撮影を一つ、ここから撮ると思います。

死ぬ気で調整しないとねじ込みも無理で、普通にやったら何時間も後に食い込みます」

「分かった。調整すればいいのかな？」

「助かります。俺も手早く着替えてすぐ撮影に復帰しますので」

よし。

これで景さんの暴走から始まった一連の流れのフォローができる。

スケジュールが乱れると、その原因になったやつに敵意が向く。

特にスケジュールがカツカツなスターズ俳優や、スケジュール調整やってるプロデューサーからの心証が悪くなりやすい。

だが逆に言えば、”スケジュールの辻褄が合ってるなら”敵意は向けられねえはずだ。

発端の景さん、続いちまった茜さんと和歌月さんはこれでそこまで責められねえ……

と、思う。

百城さんは、いつも通りに微笑んでいた。

「英二君は、本当に英二君だよね」

「はい？」

「君はそのままが良いんだよ、きつとね」

百城さんが景さんや茜さん、和歌月さんにもタオルを渡していく。

他の人もぞろぞろ集まってきた。

町田リカさんが、俺の前に来て何やら難しい顔を始める。

「あ、町田さん」

「あのさ、朝風君」

「なんででしょうか？」

「あんまり心配させないで。私達にも、千世子ちゃんにも」

「……すみません」

反省せんと。

”そういうところで”、親父みたいになりてえわけじゃねえんだ、俺は。

「わんぱくもほどほどにしとけよ、英二。和歌月にもそう言っとけ」

「はい。気を付けます、堂上さん」

? 堂上さんが今、怖い目で景さんを見たような……??

「朝風さん! 車乗ってください、ロτζジまで送ります!」

「ありがとうございます!」

気の利く助監督さんに運ばれ、ロτζジに行つてシャワー浴びて着替え、現場に復帰。

結局この日は、無茶苦茶になったスケジュールの調整と、後に響かせないための撮影

順序の入れ替えがあり、撮影は後ろに食い込みまくつた。

百城さんがいんのにこんな風になるのって何年ぶりだ?

まさに破壊者だな、景さんは。

「英二くん、英二くん」

「どうかしましたか、景さん」

「さっき他の俳優にシン・ゴジラって言われたの。なんでかしら」

「……さあ」

ゲロ吐きながら何もかもぶつ壊していくからじゃねえかな。

撮影三日目、予定より3時間遅れて終了。

手塚監督の望むもの、その一つ

景さんの変化は、割と面白い。

時代劇の時とか、デスアイランドオーディションの時の景さんが周囲にかけた迷惑は、景さんが自分を制御できてないからこそ起こったもの。

つまりは、景さんの未熟さゆえのものだった。

が、今回の撮影への悪影響は、景さんの演技に茜さんや和歌月さんが影響され、引きずられてそれぞれの対抗心を見せちまったことが原因だ。

つまりは、景さんの優秀さゆえのものだった。

ぶつちやけ、景さん一人ならどうにかなったんだ。

海水濡れになる衣装は一着だけで、それなら撮影に遅れが出るって可能性さえ無かった。

三人まとめて落ちたから最終的に三時間の遅れが出たわけだ。

景さんが最初のオーディションから見せてた”引き込む力”が、二人の女優を引き込み、撮影全体に影響を及ぼし始めてやがる。

やがてどこかで、制御不能になるかもしれない。

それは監督の撮ろうとしてる映画が撮れなくなることを意味し、誰も予想してなかった映画が完成することを意味する。

それを手塚監督が分かってねえはずがねえ。

分かった上で、采配してるはずだ。

今回の崖上の撮影だって、テストを一回やってりや避けられた事態のはずだと、なると。

「二度、俺の記憶と判断を、客観的に整理してみる必要があるな」

あの時の俺は、あまりにも動揺しすぎてた。

記憶を精査する必要がある。

そもそも俺は、飛び降りの可能性を考えてなかった。

この撮影でそうなるわけがねえと、景さんの能力と人格をある程度読んだ上で判断してたはずだ……景さんの外側に、景さんの暴走の理由がある？

景さんはカメラの客観視点を得ていた。

俺もそんな景さんを見守っていた。

景さんの性質は、手塚監督も把握していた。

スタッフは驚いてたが、皆が崖から落ちてから助けに行く流れは、とてもスムーズだった。

——あら

景さんが飛び降りた時、手塚監督はそれだけ言った。

驚きもなく。

動揺もなく。

想定、していた？

——カットかけるの忘れてた僕のミスだけど

俺は手塚監督がカットかけるの忘れたところ、一度も見たことねえぞ。

あれだ。

あれが、俺の予想と景さんの想定を揺るがせた。

いや、そもそも。

——カメラ回ってるし勿体無いから続けて貰おう

”続けて貰おう”？

いや、これ、茜さんが飛び降りねえなら撮影続ける意味ねえだろ。

茜さんや和歌月さんが飛び降りねえなら、二人は崖の前で立ち止まるだけなんだから

よ。

景さんが飛び降りたところは撮れてんだし、茜さんが飛び降りるシーンは合成で済ま

せられるってことは分かってんだ。

” 続けて貰おう” は……『期待』？

続いて飛び降りてくれるかも、つていう期待？

「撮影記録だ。チェックしねえと」

撮影記録をチェックした。

岸側から、海越しに崖と滝、そして飛び降りる景さん・茜さん・和歌月さんが映つた。

おい。

おいコラ。

なんで撮影されてるんだ、これ。

カメラは回してなきや撮影されねえ。

かつ、撮影時しかカメラは回されてねえ。

だからこのタイミングでカメラが回されてるはずがねえんだ。

飛び降りる景さん達が撮影されてるわけがねえんだ。

景さん達が飛び降りる予定はなかったんだからな。

監督に指示されたカメラマンがそこでカメラ回してるとかでもなければ。

……焦つてた俺がいて。

焦りの欠片もなかった監督がいた。

カチンコの音で役に入り、カチンコの音で現実に戻る景さんは、その生殺与奪の権利と自分自身の操作権を監督に握られているも同然。

あの瞬間。

景さんが飛び降りるか飛び降りねえかの選択権は、手塚監督の手の中にあった。

手塚監督は景さんが飛び降りることを確信してたのか、してなかったのか。

どっちなのかは分からん。

どっちもありそうだ。

証拠はねえ。

だから確信してたか、してなかったか、どっちかだと言いつ切るのは無理だ。

だが、景さんが飛び降りることは確実に想定してやがった。

すぐさま下の海に拾いに行けるくらいには。

あの這い上がる気配もねえ崖下の海で、死人出さねえ自信があったくらいには。

その飛び降りの瞬間を撮影できるくらいには。

……舐め腐りやがって。

——先走って個人的に呼ぶなんて心配性だね。それとも愛かな？

あの時のあんたの台詞は。

今日のここまで想定に入れて、俺に探りでも入れてたのか？

手塚監督に話に行こうとしたら、監督と景さんと茜さんと和歌月さんが話してた。

反省会か。

もうこんなことがないように、っていう話し合いだな。

少し待とう。

景さんが謝りながら、何を思ってああしたかを説明してる。

「ごめんなさい。」

カットがかかったらお芝居が終わると思っていただけ……かからなかったから……」

だよな。

景さんにとつちや、カチンコの音だけが、同時に響くカットの掛け声だけが、現実の自分と作り物の自分を仕分ける境界線だ。

監督がカチンコ鳴らしてカットをかけなきや、景さんは戻って来れねえ。

元の自分に戻れねえ。

最初に頭の中に設定した思考回路に準じた形でしか思考できねえ。

それは命綱みてえなもんだ。

景さんが監督を信頼して預けてた命綱。

監督の手の中に預けた景さん自身の生命線。

手塚監督は、そいつを巧みに操り弄った。

景さんは”自分が思っていた以上にケイコを演じすぎて自分の意志に反し飛び降りた”。

いや、飛び降りさせられたわけだ。

良心的な監督なら絶対にカットかけて、景さんを飛び降りさせなかつただろうしな。

怖え。

いや、本当に怖い。

景さんはよくこんな危ねえ演技法を躊躇いなく実行できるな。

その頭のどこかがイカれてる感じ、何故か好感が持てる。

黒さん、自分の手で完成させてえなら、早めにこの人を女優として完成させてくれ。

百城さんと違って、この人は見ると時々本当に怖くなる。

信頼できるのに、怖え。

景さんが大女優になって、目障りだと思つた会社の監督が景さんに”そういう”役を割り振つて、役に入りきつた景さんの演技中に意図的にカチンコを忘れれば……多分、簡単に事故死に見せかけて殺せる気がする。

”役に入り込みすぎた女優の判断ミスによる事故死”とかで。

「夜風ちゃんが飛び込んで、私が飛び込まん訳にもいかんかなつて。

……なんか悔しいし……すみません」

茜さんが、そう言う。

景さんに敗北感や劣等感だけじゃなく、”負けるか”つて競うそのガッツは評価してえ。

……あーなんか、茜さんは色眼鏡を外したつもりでも鼻真目で見ちまうな。

色眼鏡と鼻真目のダブルで見てる普段の俺は相当駄目くせえ気がする。

対抗心。

あとは、友情か。

『友達が勇気出したんだから自分がビビつてられない』みたいな感情があつたのかもな。

対抗心と友情の共同意識が混ざつてんのは、とても普通の人らしいと思う。

「合成なんかより本当に飛び込んでしまった方が良いかと……」

役者としての私の意思です！ スミマセン」

和歌月さんはより良い映像を求めるプロ根性が飛び降りた理由か？

いや、それだけじゃねえな。

茜さんと同じ対抗心、されど茜さんより大きな対抗心。

”あいつにだけは負けてられない” っていう競争心か。

最初の出会いとオーディションの結果は、景さんと和歌月さんの関係性をかなり強めに固定してると見たぜ。

”とりあえず飛び込みの合成無しで撮る” って通達より、”飛び込み合成はそもそもないよ” ってキツパリ通達して何度も何度も念押ししてた方が良かったか。

……俺のせいだったのかもしれない。

ここまで想定して、監督達が言っただけでも俺が和歌月さんにそういう通達してれば、少なくともリスクはまだ軽減できた……はずだった。

まだまだ、俺も二流か。

前例あんだよなあ。

こういう、微妙な認識の差異が後々に響くやつ。

伝説の名作、宇宙刑事ギャバンの主演・太葉健二旧JAC、現JAEの一期生。アクシオンクラブ出身の名俳優という意味で、和歌月の大先輩にあたる。『アクシオンズ

ター』の擬人化のような、骨太な男の中の男。さんは、ギャバンの撮影の時、ロープを持って15mほど落下し、15m分の衝撃を腕力だけで支え、ターザンのように移動などの撮影を行ったって話だ。

だが、太葉さんにとつてギャバンの撮影はむしろ比較的優しいもんだっらしい。

太葉さんがもつともヤバかったと言つてた撮影は、ギャバン系のインタビュで明かされた、セスナでの撮影だった。

時速120kmで飛ぶセスナとヘリ。

セスナから吊るされた縄梯子から、ヘリから吊るされたロープへ飛び移る撮影。

高速で飛んでるせいで音も聞こえねえセスナの中のスタッフがジェスチャーし、太葉さんは「飛び降りろつてことか。マジかよ」と解釈。

「いや、自分を石にすりゃいい。水切りと同じだ」と思い切り、飛び降り、水面でバウンドしながら50mほど吹っ飛び、全身打撲で医者の世話になったとか。

それを見てた偉い人は「死んだ」と確信したらしい。

ところが太葉さんは死ななかつたどころか意識すら失わず、全身打撲で海に落ちながらも泳いでたんで溺れ死ぬこともなかつたらしい。

なんだこいつモンスターか？

極めつけは、その顛末。

スタッフは「絶対に降りるな」とジェスチャーしてたらしい。つまりただの勘違いだったってわけだ。

ひっでえ。

スタッフと俳優に認識の差異があると、そいつが思わぬやらかしを生む。

特に俳優は、主体者だ。

その人自身が望めば、いくらでも危険なアクションをされる。

そして根本的な話、俺にそれを止める権利はねえ。

危険なことをやると決めたのはその人だからだ。

思い切りが良いアクション俳優って意味じゃ、和歌月さんは太葉さんの系譜をしっかりと受け継いでるのかもしれない。

あんま喜べねえことだが。

景さんは役に殉じ。

茜さんは対抗意識と友情を持ち。

和歌月さんは対抗心にプロ意識を上乗せした。

三人の謝罪を受けた手塚監督が、内心の読めない軽薄そうな笑みを浮かべている。

「ま、今日はケガもなかったし良い画が撮れたし……

元はと言えばカットかけ忘れた僕のミスだしね」

監督が自分の非を認め、自分の責任であることを公言する。

こういう主張を監督がする限り、プロデューサーや事務所は監督を責めることはできても、俳優側を責められん。全責任は監督にある。

その辺察したのか、茜さんや和歌月さんは申し訳無さそうな顔をしつつ、感謝の意を表して頭を下げた。

”カットかけ忘れた僕が全部悪い”でこの話を締めるのは、本当に曲者って感じがすんなこのダサグラサンめが。

ただ、本当のことを言わないだけで、責任取る気があるのは伝わってくる。

この監督の嘘と偽装は、保身のためという要素が微塵もねえ。

恐らくは、全員無事なまま良い映画を撮る、そのためだけのもの。

だがまだこの監督の目的が全部見えねえ、監督の本心はどこにある？

「しかしカットがかかるまで芝居を止めないなんて、3人共役者の鑑だねえ」
けらけらと監督が笑う。

軽薄だから伝わりづらいが、本気の賞賛が混じってんな、これ。

「何言ってるんすか監督」

あ、堂上さんが会話に入っていった。

一瞬こつちをちらつと見た。

何故？

「身体張る必要のない場面で身体張る役者なんてただのバカだ。

怪我でもしたら撮影中断だろ。金も時間も無意味になるでしょうが」

うわあ言っちゃった。

心情的にはこつちの味方したくなるぞ。

こういうイライラは珍しいな、堂上さん。

「竜吾さん、私に負けるなって言っただじやないですか」

”この人にだけは負けられないんですよ私は”と言わんばかりに、和歌月さんが不快そうな顔をする。

「度胸試ししろとは言ってねえよ」

堂上さんが怒りを露わにする。

和歌月さんへの……いや。今の一瞬の視線の動き。

和歌月さん以上に、景さんへの怒り？

”仲間を危ないことに巻き込まれた怒り”か？ 和歌月さんと堂上さんやっぱ仲良いな。

「つたく、こんな素人のゲロ女に感化されやがつて」

「なっ……」

「ちよつと失礼でしよー」

景さんが小馬鹿にされて茜さんが怒り、和歌月さんが怒って立ち上がり声を上げた。

おい和歌月、オーディションで景さん相手に敗北感味わって、以後ずっと対抗心持ってて、景さんが馬鹿にされると怒るって、お前ベジータか何かか。

ちよつとワクワクする反応を見せるんじゃないやねえ。

だが、流石にこれ以上は看過できねえな。

撮影チーム内にあんま対立構造を作りたくねえ。

堂上さんが止めて、たしなめようと俺が一步を踏み出した瞬間。

監督が周りの人に見えないよう、俺を手で制した。

……。

撮影に必要なのか？　これが？

「また言った、ゲロ女って……」

「気にせんでええから」

景さんが落ち込んで、茜さんが景さんの頭を撫でて慰めている。

木梨さんが景さんのファンになってたのを、ふと思いついた。

スターズとオーディション組の二軸状態だったところに、景さん派閥とそれ以外って

二軸状態が出来始めてる？

だとしたら、これが監督の目的なら……『撮影チームの中で衝突する状況』を作りた
いわけだから……誰かと、景さんをぶつけたい？

ぶつけることにより、何かが得られることを期待している？

殺し合いの空気を作って、演技の迫真性を引き上げ、本気でぶつけ合いたい人間がい
る？

だとしたら。

「スターズとオーディション組の二軸」、「不確定性と確定性の二軸」、「夜風景に影響さ
れた者とそれに反発する者の二軸」、なら。

この軸で景さんと必ず対立する人間は。

監督が景さんをぶつけて、監督が何かしらの目的を達成しようとしてる相手は。

——百城さんか？

まだ確定じゃねえし、うっすらした推測だが、そうなのか？

「夜風……だっけ？ 俺は認めねえよ。お前みたいな役者」

瞳に怒りを浮かべて、座る景さんを見下ろす堂上さんを見て。

一瞬口元に笑みを浮かべた監督を、俺は見逃さなかつた。

百城さんは周囲に内心を読み切らせず、景さんは自分の先の行動を周りに読み切らせねえ。

”計り知れない女優” ってのは相応のポテンシャルを持つてるってのがよく分かる。二人は対だ。

だからおそらく、最も向いた撮影環境も違う。

景さんは不確定要素が多い方が強く、百城さんは不確定要素が少ない方が強い。

何が起こるか分からねえ状況に、景さんは素早く的確に対応する。

また、ギチギチに固めてねえ撮影の方が景さんの強みは出やすい。

1000の予算が100の出来にも1000の出来にもなりそうな撮影で、2000の出来の映画を作っちゃまいそうなのが景さんだ。

不確定要素が増えるほど、メチャクチャな景さんが有利になる。

百城さんは、”何が起こるか分からない”となる要素を一つ一つ除去していく。

不確定要素の排除と、それによる安定した売れる作品の製作がこの人の強みだ。

1000の予算で145から155の出来の映画しか生み出さねえのが、あの人の真骨

頂。

不確定要素が減るほど、いつも通りに芝居ができる百城さんが有利になる。

まるで、物語における主人公と敵組織みたいだな。

ヒーローと悪の組織とか、勇者と魔王とか、ああいうの。

敵組織は長く時間をかけて計画を立てるが、正義の味方はその場のノリでぶち壊す。

魔王は邪魔になりそうな人間をちまちま排除して不確定要素を減らすが、勇者は仲間と不確定要素をガンガン増やして最後に奇跡を起こす。

ボスキャラ達は計算と計画で、主人公達は熱意や奇跡を目標達成に使う。

主役は挑み、敵はそれを受けて立つ。

不思議な対立構造だ。

ただまあ、景さんも百城さんもどっちも悪じゃねえんだが、景さんが挑戦者ということもあってこの対立構造は割としっくり来る。

百城さんがいつも作ってる安定した撮影環境をぶっ壊してるって意味じゃ、景さんの方が大魔王かもしれないねえけど、そいつは脇に置いてこう。

もしも推測通り、監督が監督という最上位の立ち位置からバックアップし、景さんを百城さんにつつけようとしているなら、百城さんでもどこまでいつも通りに撮影ができるか。

秩序の塊に混沌の塊をぶつけるようなもんだ。

どうなるか、俺にも分からねえ。

「手塚監督。話があります」

俺は部屋で映像を確認している手塚監督に会いに行き、全ての推測を叩きつける。

監督は景さんが飛び降りるかは「そうなるかも」程度にしか思っただけでなかったと言っていたが、他は大まかには肯定した。

「気付いたのは君と千世子ちゃんだけだね。それもまた、必然かな」

「百城さんも、ですか」

「よく周りを見てるよ彼女は。この件で僕を問い質してきたスターズは彼女だけだね」

「でしょうね。あの人なら気付いていても何もおかしくはないです」

だから、信頼できる。

「もっとリスクを極力排除しろ……って言っても、聞いてもらえないんでしょうね」

「リスクは極力排除してるよ。君が推測した通り、海に落ちた場合の想定もしてたからね」

「……正しい準備と想定でした。」

最初から海に本当に落ちる撮影の予定だったなら、あれでOK出る撮影も多いと思います」

俺はリスクを恐れ、排除しようとする人間で。

この人はリスクをコントロールする人だ。

リスクを極限まで減らそうとするのは同じ。

だが根底が違う。

俺は知ってる人の『事故死』を恐れ。

この人は『売れる作品に事故でケチがつかないこと』を求めている。

俺は逃げ、この人は求める。

その結果として、俺もこの人もリスクを削ろうとしている。

けど。

最後の最後で、俺は僅かなりリスクを恐れ、この人は僅かなりリスクを許容する。

『どんな撮影でも事故の確率を完全に0にはできない』。

少し危険な程度の撮影なら、それで撮影事故が起ころ確率より、交通事故に遭う確率

の方がよっぽど高えよ。

分かっている。

分かっているがな。

それでも俺は、0に近付けて、0にしていきてえんだよ。

「決定権は監督にあります。俺に何かを変えさせる権利はありません」

「君はそういうところ本当に真面目だよ。だから大人受けがいいんだろうけど……」
だから俺は。

ネズミの撮影のあれも。

抗議繰り返して撮影を中止させるんじゃない、リスクを0にするのに手を尽くした。
ふう、と手塚監督が、深く息を吐いた。

「僕はね、いい加減君を『二代目』以外の呼び方にしたいんだよ」
「はい？」

「君の親は良いものも悪いものも君に残していったんだろう。」

ほら、ああいう性格の人達だったしね。

でも僕は、その『次』も見てみたいんだ。それも僕の本音なのさ」

「それと、手塚監督の方針が関係あるんですか？」

「ぶっちゃけて言うとかあんまり関係無いかな」

「え……何故関係ない話をこの流れで？」

「方針に関しては君にしても仕方のない話だからだよ。」

僕がそこで期待してるのは、君でも天使でもなく夜凧ちゃんだからね、正直に言えば」

「……いいんですか、そこまで明かして」

「いいんだよ。それもきつと、良い結果に繋がるから。」

夜風ちゃんは期待できるけど何するか分からないから、信頼できるかと言えば微妙だから」

「?」

「真面目に舵取りしてくれる人がいて初めて許容できる、つてやつさ」

そうか。

分かった。

じゃあ俺はきつと、あんたの目的の邪魔になるだろうな、きつと。

忠実な手足が時々頭の意向に逆らうかもしれないねえが、いいのか？

それも許容済みとか、何考えてんだこの人。

薄っぺらく、陽気な笑みを監督が浮かべる。

「君の能力は非常に高いと思う。」

君の得意分野で君に勝てる人を僕は知らない。

もう君の父親と比べても遜色ないと僕は思う。

信用できるし、君がいればそれだけで仕事が格段に楽になる……でもね」

でも？

「ただ僕にとつての君は、まだ『信頼できるキチガイ』には少し足りないかな」

「」

……。

ああ。

なるほど。

あんたは確かに、親父の同僚だ。

親父やおふくろが撮影の世界で大暴れしてた頃に現役だった人だ。

俺に効く台詞を、よく分かってやがる。

少し待ってろ。

親父だって……俺は超えて……あんたに”父親を完全に超えたな”って言わせてやる。

「君が僕の予想なんか超えてくれると期待してるよ。」

夜風ちゃんがどんなに大暴れしても、君がいれば一人の怪我人も出ない、ってね」

ただ、なんか。

”その人に自分の予想を超えてほしい”って気持ちは、痛いほどに分かった。

この人は周りの人に、自分の予想を超えてほしい人だったんだろうか。

「……あなたは、全ての責任を取る気があるだけの無責任な大人です」

「だろうね。君の両親にもこんな曖昧な無茶振りしたことなかったよ」

「……」

「どうしちやっただらうね僕。夜風ちゃんの影響受けすぎかな？」

俺も、深く息を吐く。吐かずにはいられなかった。

「しようがないですよ。見惚れるようないい女に振り回されるのは、男のサガです」
方針は決まった。

監督の意を汲みつつ。

景さんや他の俳優さんが演じやすい状況を作りつつ。

安全な撮影を形成してくれそうな百城さんなどと協力し、撮影の最後の一線を守らせる。
る。

やるっきやねえな。

でなけりや、この撮影、どこかで必ず破綻する。

「良い画を撮りたいというのは僕の意味だ。

でも、願うものは君と同じさ。

一人の死人も出さないで、皆で笑ってクランクアップの日を迎えたいよね」

「はい、監督」

やってやるよ。あんたが監督で、俺は裏方だ。あんたの手足だ。

だからその願い、必ず叶えてやる。

「失礼します。また明日」

「うん。また明日」

部屋を出て、ドアを閉めようとした、その時。

「君が自分の作品より人の命を優先する姿は、親に似てなくて少し安心する」
声が届いて、俺はドアを閉めるのを止めた。

「君が、千世子ちゃんに合うような造形屋になるにしても。

夜風ちゃんに合うような造形屋になるにしても。

心のどこかで一線を越えないような人間になつてくれたら、不安はないさ」
それが、監督の最後の言葉だったようなので。

俺はドアを閉めて、自分の部屋に戻るべく、歩き出した。

「あ、英ちゃんやん」

「茜さん」

「夜風ちゃん落ち込んだから、後で励ましに行つたげてな」

「分かりました。これから行きます」

「……」

「茜さん？　なんで俺の頭撫でてるんですか？」

「英ちゃん元気出るかなーと思って」

あーもー。

いつそめんどくせーこと全部投げ出して、この人だけの味方になっちまおうかな。そんなことを、冗談めかして頭の中で考えた。

百城さんしか頼れる有能な味方はいなそうで、怪我人出さねえように気を遣って舵取りしなくちゃならねえ。

多少の寝不足もあつて、つい弱気なこと考えちまった。

でも、駄目だ。

万が一にも百城さんを孤軍奮闘させるわけにはいかなえ。

「ありがとうございます。でも子役時代のノリをいつまでも引きずっていいんですか？」

「……あー、まあ、ええわ。今は柵に上げとく」

「あれま」

つたく。景さんがこれ以上暴走して、スケジュールが狂って、堂上さんみたいにスターズで景さんを嫌う人が増えたら、監督の意図のせいで景さんがスターズの面々に嫌われるとかいうことになっちまう。

スケジュールが崩壊すりゃ、茜さんがせっかく取れた映画の仕事が幻と消えちまう。

結果、皆に景さんが嫌われかねえ。

俺が、俺と百城さんが、やるしかねえか。

じやなきやきつと、全員笑って終われねえ。

夜風が見た息合う二人

人と人、会社の繋がりがりつてのは、見ようとしなければ見えねえ。

社会つてのは全てが繋がってなのに、適当に生きてる限り、なんもかんもがその繋がりを見せねえもんだ。

たとえば、山木化学工業株式会社。

2000年ほど前に回船問屋として開業したっていうクソ長え歴史がある素材会社だ。

ここで作ってるスーツ素材を使ってる映画はウルトラマン、バットマン、トゥームレイダーと錚々たる顔ぶれが並ぶ。

更にはこの素材で作られた高速水着『バイオラバースイム』は世界50ヶ国で採用され、トライアスロンのシエア90%だとか、世界水泳大会やオリンピックで次々と世界記録を打ち立てたとか、強いことしか書いてねえ。

むしろスポーツ分野の人の方が「え、あそこで作ってるものって特撮映画に使われてたの!」って驚きやすいかもしれねえな。

『大怪獣バトル ウルトトラ銀河伝説 THE MOVIE』のスタッフロールの1:3

3:33の『協力』のところ見るとちゃんと山木化学工業株式会社の名前がある。

「このゴムがウルトラマンスーツには欠かせねえんだ。

良い素材は特撮にもスポーツにも使われてるぜ、つてことだな。

繋がりには、見えねえところにある。

「おはようございます。木梨さん」

「あ、朝風美術監督。おはようございます！」

「好きに呼んでいいですよ。長いでしょう？ 朝御飯と一緒にしてもいいですか？」

「はい！」

「撮影には慣れましたか？」

「少しは慣れました。でも——」

「何気なくした木梨さんとの会話の途中にも、それまで見えてなかった繋がりが見えてきた。」

「え、木梨さんって文華高校の学生さんなんですか？」

「あそこの高校出の人を服陪栄養専門学校西映特撮の食事分野で撮影協力をしてくれている専門学校。俳優は意外と料理ができない人が多いので、フランベなどの高等技術は指導してもらわなければならない。現在放送中の番組だと、ルパンブルー／宵町透真を演じる浜正悟さんがこの学校の協力で指導をしてもらい、撮影に必要な高度調理スキルを獲得している。で見たことありますよ」

「あ、それ私の先輩かもしれません！」

演劇部の先輩が、先輩の先輩がそこに行つたつて言つたの聞いたような気が……」

「文華高校の演劇部の存在は初めて知りました。」

木梨さんがいるなら高校演劇でもかなりレベルが高い方なんじゃないですか？」

「えへへ、そうでもないです」

意外と、高校演劇でも頭角を現すやつつてのはいる。

学生時代から撮影にバイトで来まくつてて実戦経験積みまくつてるやつもいる。

けれども、高校生相当の年齢で優秀なやつつてのは結構見るが、現役高校演劇部で映画に出るほどの能力を持つてるやつつてのはそうそう見ねえ。

高校でピークを迎える早熟タイプか、飛び抜けた才能があつて成長も早え大器晩成型か。

まあどつちかだな。

木梨さんはまだ伸びしろがありそうに見える。

この人はまだ自分の才能の上限にまで来ちゃいねえ。

「朝からの撮影では私出番ありませんが、見学してたくさん学ばせていただきます！」

「それがいいと思います。」

欲を言えば木梨さんの死亡シーンはもつと後が良かったかもですね。

他の人の死亡時演技を見て覚えてからのの方が色々改善できたでしょうし」

「え……わ、私、何か演技マズかったですか？」

「合格点は超えてると思いますよ。」

演技が駄目だと思われたらNG出されてるでしょうし、大丈夫ですよ」

「ほっ、よかった」

ま、オーディション組の演技合格点は、スターズと比べると相当に低く設定されてる気もするが……それはここで言う必要のねえことだな。

「さて、撮影行きましょうか。と言つても、木梨さんの出番があるわけではないですが」

「あ、荷物運び手伝います」

「いいんですか？ ではすみません、軽いものをお願いします」

助かるわ。

「朝風さん、これなんですか？ 鞭……？」

「ですね。そこに入ってるのは全部鞭です。使うのは一部ですけど」

「鞭に見えないものがあるような」

「ああ、それは合成用です。」

柄だけの鞭なんですよ。

後で合成素材の鞭を柄に合成してくっつけるんです」

「合成……プロ感ありますね！」

「高校演劇部の方から見るとそう見えるのかもしれないね」

たとえば、鞭の両端を二人で掴んで持つて動かす。

グリーンバックで、緑の糸で鞭を操る。

鞭をブルーバックで上から垂らして、揺らして撮影、90°傾ける。

こうして『柄を除いた鞭の動きの合成素材』を作っておいて、柄だけを持つて振っている俳優さんの映像に合成、実際に鞭を振ってるように見せかける。

西映式の鞭描写術だ。

特撮大手の西映には、こういう技術が武器造形面でも蓄積してる。

このため、『劇場版仮面ライダー電王 さらば電王 ファイナル・カウントダウン』の敵キャラである仮面ライダー幽汽／死郎仮面ライダー幽汽にはTV版主役が変身するスカルフォーム、ボスキャラのハイジャックフォームが存在するが、この場合はハイジャックフォームの鞭のこと。ハイジャックフォームの武器は独楽と鞭なので、『紐を巻いて投げて回す』独楽がモデルなことは分かりやすい。の鞭は実に四種類が用意された。

長短二種、人間状態の手持ち用の一種、んで柄だけの物が一つ。

仮面ライダー幽汽の鞭は、独楽を回す紐イメージの造形。

よって、柄はFRP（繊維強化プラスチック）、柄から先端までは柔らかい芯材にウレタンを巻いて造形されている。

けれども仮面ライダーサガ仮面ライダーキバに登場する『運命の鎧』。サガはプロトタイプでありながら、飛翔体を除けば仮面ライダーキバの最強フォームである『黄金の鎧』エンペラーフォームに比肩する力を持つロマンの塊。教会をモチーフにした造形、ステンドグラスを模した胸部分、ベルト部分の特殊ギミックなど美麗でかつ面白いデザインが多く見える。の鞭とか、造形の目標によって鞭の質は一気に変わる。

仮面ライダーサガの武器はジャコウダーという柄に赤い棒状のフロップを装着することでロッド剣型のジャコウダーロッド、短いビニールロープを装着することで立ち絵状態の鞭ジャコウダービュート、長いビニールロープを装着することでアクション用ジャコウダービュートとなる。

ビニール。ビニールだ。

こちらの鞭には『硬くも柔らかくもある』『刺し貫くこともできる』というイメージを持たせたいことがよく分かる。

仮面ライダーオーズ シャウタコンボシャチ、ウナギ、タコのメダルで変身する水生生物コンボ形態。コンボはどれも軒並み強いが、シャウタだけは微妙に不遇。にも鞭はある。

真つ白なウナギの触手って言うのが正しいかもしれないねえが。

こつちは水を撒くホースにウレタンシートを巻いたもんだな。

ともかく、鞭は柔軟じゃなくちやならねえ。

かつ、監督の撮影意図に合わせなくちやならねえ。

死神博士初代仮面ライダー達の宿敵にしてシヨツカー大幹部。創作などで多用される長いロープのような鞭ではない、中国などでメジャーな硬質な棒状の鞭を持つ。の鞭みてえに天木英世死神博士を演じた俳優。この俳優さんの、仮面ライダー好きの大人に對してしていた「世の中にはもっと大切なものがある」という発言は中々に胸に痛い。さんがエジプト旅行で買った私物使うみてえなこととしてもアレだしな。

ってわけで、デスアイランドの撮影に使う鞭は結構軽く柔らかい振る用と、重量感を感じさせる手持ち用と、柄だけの合成用と三種類を作った。

重量感を感じさせる鞭を、立っている時に持たせる。

これで”アレで叩かれると痛そう”と観客に思わせることができる。

そして軽く柔らかい鞭は、振る時に手に余分な負荷がかからねえ。

人間の目ってのは不思議なもので、一回重量感を見て感じ取ると、軽々と振るつたシーンで多少の違和感は自然と無視してしまい、「腕力凄え」と感じやすくなるんだとか。

目の錯覚ってやつだな。

これで鞭シーンの見せ方はパーペキだ。

更に、鞭の表面には毒という設定でしつかり油を塗った。

原作デスアイランドでは、鞭から毒の雫が滴るシーンがあるのだ。

事前に飲んでおくと毒が効かなくなる解毒剤とセットで鞭が置かれていて、「ほー、確かにこれなら毒が飛び散る鞭でもこういう毒の演出ができるんだな」とちよつと感心した。

この油が安全装置になる。

人間に当たってもぬるつと滑るぜ！

重い鞭、使いやすい鞭、合成の鞭。

的確に使い分けりやあ、もはや言うことなしのリアリティが出せるってこった。

森中での撮影に備え、森中での撮影準備中の集団の端っこにドスンと箱を置く。

「あ、木梨さん、そこでいいです。ありがとうございます」

「よい、しよつと」

「後で飲もうと思つてたアクエリですが、二本あるので片方あげます。お礼です」

「え、そんな、悪いですよ」

「熱中症起こさないように見学するなら木陰がオススメですよ。それじゃ」

アクエリ押し付けて、仕事を開始する。

さっさとこの鞭も渡さねえとな。

「九条さん、これが例の鞭です。扱いは練習してきましたか？」

「ちよつとはね。あ、軽い」

「スターズの皆さんは筋肉の量も把握してますので、武器の重量は最適化してあります」

「わあ気持ち悪い」

「えっ」

「冗談よ。もう慣れたから」

九条百合さん。

12人のスターズ俳優の一人だ。

動的な印象を受けねえ、やや落ち着いたタイプの人でもある。

スターズ女優は五人で、百城千世子さん、町田リカさん、和歌月千さん、亜門一葉さん、んで九条百合さん。これで五人だ。

ちなみに俺と同じ年の18歳組だとスターズの星アキラ君、若狭翔馬さん、オーディシオン組の湯島茜さん、烏山武光さん、リー・チャンさん、小西透さんで五人だ。

生首になって死んだのがリー・チャンさんで、それで怒る役が和歌月さん。

途中のクライマックスの一つで百城さんを怒声と共に追い詰めるのが茜さん。

九条さんに殺されんのが一葉さんと若狭さん。

若狭さんと殺し合うのが烏山さん。

源さんとかと殺し合うのが小西さんだな。

流石デスゲーム映画。

二時間弱の間にめっちゃポンポン死ぬんだよなこいつら。

「ちよつとアサエイ、これ私が振って人にもし当たつちやつても大丈夫？」

「ある程度なら大丈夫ですけど当てないように注意してください」

「こえー」と言ってるんな九条さん。

つと、亜門姉弟に服引つ張られた。

「ちよつとアサつち」

「要望聞いてよアサつち」

「私達、鞭が当たっても我慢はするけど油濡れはちよつと嫌かなーつて」

「見えないバリアとか僕ら二人の周りだけでも作れない？」

「収束気流で見えないバリア作ったことはありますけど鞭は無理です。仲間を信じましょう」

「「えー」」

予定ではこうなってる。

九条さんが鞭を振る。

亜門姉弟やアキラ君、百城さんは一步も動けないが、その周囲の地面に鞭が当たる。恐怖に一筋の汗が垂れ、百城さんのこめかみから滑り落ちる。

これが、今回の撮影だ。

つまりそれっぽく鞭を振る技術と、迫力ある猛烈な振り方をしつつ人に当てない技術の両方が必要になる。

絵コンテ見る限りスタント入れるのも無理そうだ。

九条さんの技量を信じるしかねえ。

が、どうすつかな。

亜門姉弟の不安、何とか解決する方法はあるか？

安全の確保が一番手堅いだろうけども。

あ、百城さん。

「あなたはそつち、あなたはこつち。

あ、カメラはもう少し引いた方がいいかも。

九条さん、鞭を振る時は余分な一步を踏み出さないようにね」

百城さんが俳優の立ち位置と、カメラの位置を調整していく。

「こつちなら、カメラからは鞭が当たるように見えても、絶対に当たらない位置だから」

結果、九条さんが鞭を振るえば確実に当たるように見える位置に。

かつ、九条さんが鞭を振るっても確実に当たらない位置に。

九条さんの肩・肘・手首の可動域、鞭のリーチと軌道変化可能範囲、それぞれの人とカメラの立ち位置を把握した百城さんによって、完璧な安全と臨場感のある画が両立されていく。

極めて安全に、危険に見えるリアルな鞭の攻撃シーンが次々と撮影されていく。
あ。

柄だけの鞭使った。

……百城さんと一葉さんの間を鞭の先が通過していくシーンとか、鞭が万が一にも当たるシーンを的確に合成シーンにしていく気か！

現場判断による勝手なシーンの編集だが、監督もNG出してねえ。OKか。

編集に多少予定を変えさせることになるだろうが、最終的な映画の完成度は増して
る。

後は俺だな。

百城さんがマリオネットの如く動かしてる九条さんの、柄だけの鞭。

あそこに合成する鞭の映像作成調達を、俺が頑張りやいい。

余裕があつたら柄から先の鞭の合成素材をもうワンセット作っておくか。

「千世子、脚本のこの辺の動きどうする？」

「こことか、動きながらの鞭を振るう動きだと……」

やがて、百城さんは動きのある面のクオリティも上げ始めた。

「英二君、この辺の木を加工できる？」

あと、この辺りの草も自然な形で、かつ私達も動きやすくできるかな」

「分かりました。造形しておきます」

「ありがとね」

「それと百城さん、こちら次の撮影で使う地面の加工図面です。」

その地面を鞭が当たると中のバネが動いて、地面が弾けるようになってます。

鞭の破壊力を自然に大きく見せる細工ですね。

踏まないように気を付けて、周りの人にも踏ませないように気を付けさせてくださ

い」

「うん。ああそうだ、ここの撮影、ほら三ヶ月前の撮影の使えそうじゃないかな」

「ああ、あれは使えそうですね。さすが百城さん」

俺が物を造り、百城さんが映画を作る。

いいもの、いい画、いい映像を作れば、監督はOKしか出さねえはずだ。

百城さんの得意分野で、百城さんに息を合わせる。

俺の得意分野で、百城さんに息を合わせてもらう。

森中での撮影が終わったら、海の撮影へ。

今日の空模様なら、森中の開けた広場と、空がよく見える海の撮影はしておきてえところだ。

俺がここまで運んできた荷物はスタッフの車両に載せりやそれでいいんで、荷物を載せてもらう代わりに運転の仕事も俺が代わる。

「車回しますよー。俺のとこ乗る方いらつしやいますか？」

「あ、じゃあ僕が」「俺乗せろ」「私乗っていい？」

「英二ー、お前バッグに菓子持ってたよな」「運転中肩でも揉んであげようか！」

「私乗せてもらえる？」「僕は助手席で」「コーホー」「英二君の運転が一番好き」

「アサつちー！ 二席用意して二席！」「二席な！」「あ、メガネ予備その車に置いてた」

「アサエイ、私化粧したいからバックミラー貸して」「仕事の打ち合わせしながら運転を」

「一斉に喋ったせいで全員何言ってるか分からないやつ！」

突き出される無数の腕。

これこそがスターズの1/3くらいに定着している暗黙のルール。

じゃーんけーん、ぼん。

勝ち残った七人だけがこの荷物と人を積み、大人が一人も乗ってねえ超お気楽なこの

車に乗る権利を得る。

そして、勝ち残ったのは！

席順に見ると。

助手席町田さん。

一列目席、景さん、アキラ君、百城さんの順。

二列目席、烏山さん、茜さん、源さんの順。

割と親しい知り合いが固まったな。

「アキラ君、女の子二人に挟まれていい気分だったりする？」

「えーとね、僕は助手席に行きたかったかな」

「アキラ君は英二くんの隣が良かったのね。友情だわ」

「あそこが一番気楽だなあとも思うけど、僕はここに座ってるべきだとも思うよ」

景さん、アキラ君、百城さんの順に並んで座るのがバックミラー越しに見える。

あの三人は仲良いな。

つか羨ましいぞアキラ君め。

代わってほしいくらいだが、その位置に座ることが許されるのはアキラ君レベルのイケメンだけだろうな……美人の隣に居ても見劣りしないイケメンっぷりは流石だ。

羨ましい以上に、あんたがその位置が似合う男であることが誇らしい。

景さんは百城さんと距離を縮めてえ様子。

だが百城さんは距離を詰められたくない様子。

アキラ君はその間で距離を縮めたい子、距離を縮められたくない子の思惑の合間で、緩衝材と中継地点として使われているようだ。

「アキラ君、千世子ちゃんが好きな物って何かある?」

「えーっと、それはね」

「マシユマロだよ。ねえアキラ君」

「……そうだね」

「アキラ君、英二くんが好きなものって何かある?」

「えーっと、それはね」

「海外の造形技術者の技術本だよ。ねえアキラ君」

「……そうだね」

後ろを見ていたら、俺の横の助手席で町田さんが苦笑いを始めた。

「私よりもっと助手席に相応しい人間がいたのでは……? 私は訝しんだ」

「助手席に相応しいも何もないでしょう、町田さん」

「ノリで席選ぶもんじゃないなあ」

「助手席の脇に立ててあるアクエリはお客様用なので飲んでください。」

あ、それと、そこに置いてある俺のバッグの中にお菓子入ってます。

好きなの取って、後ろに回してください。保冷剤は食べられませんけど」

「あ、溶けてないチョコだ。気が利くねえ。私は飴貰っちゃうけど。ありがと」
バケツリレーの如く後ろに回されていくバッグ。

それが最後列の茜さん達の手元にまで渡った。

「ほら真咲ちゃん、前に言ってた通りやる。

英ちゃん差し入れの中に必ず一個はこれ入れとるんや。

三個のガムの中で一個めっちゃ酸っぱいやつが入ってるやつ」

「うわっ、マジだ、友達多い小学生かよ……」

「はっはっは！ いや悪いことではないだろう！ 朝風先生！ 一つ頂きます！」

「うるせえんだよお前は！」

車の中だつてこと分かってんのか！

他の人の迷惑を考えて音量選べ、俺を見習え！」

「まーまー真咲ちゃん、武光君、このガムをお食べ。めっちゃ酸っぱいハズレは一個や」

「感謝する！」

「だからうるせえ。つたく、密室で周りに人がいる時くらいは静かに酸っぱええええええ

え!？」

「真咲ちゃんうるさい」

「うるさいぞ真咲」

後ろの方うるせえな。

とんとん、と運転中の俺の肩を、誰かの指が軽く叩く。

その細く綺麗な指が、ほんの一瞬、優しく俺の頬を撫でた。

バックミラーで見ると、案の定百城さんだった。

ちよつとドキつとした。

「英二君。二年くらい前に常備してたあの透明パネルって使う？」

「海の撮影ではバージョンアップした物を使います。」

あの時よりもずつとシズル感シズルとは、揚げ物や肉が焼ける音を意味する英語。転じて、消費者の購買意欲を刺激する広告業界での手法を意味する言葉になった。更に転じて現在では、消費者がつい買いたくなるほどに美味しそうな食品表現のことを意味するようになった。マーケティングにおける造形調整テクニクスの重要要素。肉であれば表面に油を塗って輝きを増し、ドライアイスを使って湯気を増量し、上にチーズを乗せてトロトロにとろけさせてから撮影すると、写真の広告効果が数倍になる。この『実体のない実感をもたらすもの』を作る技術は特撮分野でも特に需要が高く、美味しそうな食べ物を出演する技術と、特撮を造形演出する技術には、かなり近いものがある。と

いかド直球に、シズル感を出せる人間というものが、撮影会社の求人条件に出されていることもある。増しなのが作れましたから。

今は水中撮影だとそっちの方を作ったり、既製品を撮影に持ち込んだりしてます」

「学校で使ってた大型扇風機は？」

「ああ、ネズミの誘導に使ったやつですね。

あれは12日目に百城さんの撮影で使いますから、一回箱にしまいましたよ」

「そうなんだ。あのネズミ、よく操れたね」

「ネズミは光が苦手ですが、光当てるとばーっと散っちゃうんですよ。

しかも手で驚かしても、単純に自分の反対方向には逃げません。

単純に脅威の180。逆方向に逃げたら歩幅の差ですぐ食われると分かっているんでしょね。

だからライトとレフ板で光を満たして、進行方向の逆が一番強いライトを置きます。

そして風を吹き付けるんです。

ネズミは風を怖がりませんが、体が小さいからか風にあまり逆らわないんです。

吹き飛ばされないために、風に流されるまま走って……だから、誘導できるんですね」

「へー」

「ULTRAMAN漫画原作じゃない方。最近では検索すると漫画原作の方が上に出て来

る。2004年のウルトラマン映画ながら、ドラマ面でも特撮面でも現代大人向けで通用する高品質を持っている。大人のウルトラマン入門に薦められる映画の一つ。の技術です」

「じゃあ、あの大型扇風機も出そうと思えばすぐ出せる……と」

思考材料が増えると百城さんの計算と調整はますます冴え渡る。

俺が百城さんに教えられる撮影の情報をも10とすりや、百城さんが活かせる情報はその中の1か2だろうが、教えることそのものに意味があらあな。

百城さんが助手席いたらずつと仕事の話してる気がするわ。

「それにしても百城さんこういう時のじゃんけん何故か本当に強いですよね」

「気のせいじゃないかな」

「スターズで勝ってる人見たことないですよ」

席選びとかもじゃんけんだったらまた百城さんが助手席取ってたりしてな。

流石にそれはねえか。そうする必要もねえし。

「ULTRAMAN、ってウルトラマンの映画っすか？」

「そうですね、源さん」

最後列席から話しかけてくるとか中々にブレイバーだな。

「ああいう特撮って子供向けに見られがちだと思っすんが。」

そういうの嫌ってあの手の界限離れる人も多たって聞きますね。

英二さんの腕と評価ならそういうところからも離れられるんじゃないんすか」

「はは、確かに。そういう人もいらっしやいますね」

見る目がある人が俺を見れば、その辺は一回は考えるんだよな。

「ガメラの銀子監督がおっしやられてましたね。」

『中高生ともなると巨大な怪獣というものの自体に幼児性を感じてしまうかもしれないけど、

小六の12歳ならまだ怪獣というものが許せるかもしれない。

でも一方で、12歳はかなり大人なところもあつて、

ただのおとぎ話ではなくてSF的なリアリティがないと許せない。

でもやっぱり怪獣も好きという(笑)

自分は大人だと思ってるけど、大人から見ると子どもという存在。

『ガメラ』は、そんな大人と子どもの境目にいた頃の自分に向けて作った映画なんです』

と。俺がメインで動いてる界限は、そういうものを作っているところなわけですね」

「あー、俺もそのくらいに離れた気がすんな。鳥山は？」

「俺はそもそもさして熱中したことも離れたこともなかったな。見る機会があれば見た」

「真咲君、私は最近見始めたわ。

ウルトラ仮面がとて面白いの。

明日の日曜日はおっきなテレビで一緒に見ましょう」

「見ねえよ。つか夜風には聞いてねえつつうの」

「皆さん、仲良いようで俺は何よりです。

子供も楽しめる。大人も楽しめる。

それが今の特撮の鉄則です。

昔は子供と大人の合間も狙って作品を作っていました。

ですが今は、子供も大人も狙う作品作りをしているわけですね」

「へえー」

「俺の父が、大人に握手を求められていたのを見たことがあります。

ニツチなスタッフまで見ている重度なマニアだったそうです。

何十年もずっと、俺の父の作る作品のファンだったそうです。

その人を見せ、父は俺に……どこか誇らしげに、こう言いました」

もつと言い方あったんじゃないかねえかな、と今でも思う。

「『そいつの人生の大半が俺の作品に支配されてるなんて、たまんねえだろ』と」
「うわあ」

「実際そのマニアさんは、年齢一桁の頃からずっと父の造形のファンだったそうです」
親父はいつだか、「好きということは好きになったそれに支配されてるのと同じことだ」と、俺やおふくろを見ながら言ってたことがあった。

好きということはそのことを考えてるってことで、そのことだけを考えてるってことは、好きなそれに支配されてるも同然じゃねえか、とも。

「分からなくもないんですけど、父のそういう気持ちも。

一生愛されるコンテンツ。

一生愛される作品作り。

どこかの誰かに、子供の頃からお爺さんになるまでの長い期間愛される。それは……」

少し、車のアクセルを踏む強さを弱める。

少し、車のハンドルを切るのを緩やかにする。

少し、車を立てる音が静かになった。

「それはとても、『愛されてる実感』があると思うんですよ。

俺はまだたったの18年しか生きてないので、ただの想像ですけどね」

武光さんが、最後部座席で立ち上がる。

「いいと思いますよ朝風先生！ 素晴らしいことかと！」

「だからお前はうるせえ！」

「武光君、私あなたの前の席だから耳がキーンとするわ」

「うちも夜風ちゃんと同じくキーンとしたわ、堪忍してほしーわこれ」

「朝風君、私今気付いたけどさつきまで朝風君の口と耳は千世子ちゃんが独占してたんじゃ」

「まあまあ。真咲君も武光君も夜風さんも、喧嘩しないで」

「皆！ とりあえず座ってくれ！」

千世子君と湯島さん以外、一人もまともに椅子に座ってないのは事故が怖い！」

危ねえなお前ら！」

止めに入った百城さんと、座らせようとしてるアキラ君と、ちゃんと座ってる湯島さん以外誰も安心して見てられねえ！」

そんなこんなで到着。海。見渡す限り海。

少し周囲を見渡せば、さつきまでいた森がちよつと遠くに見える。

海の撮影の準備を始めよう。まず荷物降ろしだ。

「荷物降ろし、手伝うよ」

真つ先に、アキラ君が荷物降ろししてる俺の横に来た。
イケメンに気遣いの天井はねえのか。

「わ——」

「私も！」

「——たしも、手伝うよ」

「ほな、うちも」

「茜さんが行くなら俺も」

「力仕事は俺に任せろ！ 自信がある！」

「あーこれスターズのアキラ君と千世子ちゃんが参加してる以上、私も参加必須のやつ」
百城さんが「私も」と言いかけて、それを台詞の途中でぶった切るように景さんの「私も」が飛んできて、百城さんが一瞬台詞を止めて景さんの台詞を通し、景さんの台詞に被らねえよう台詞を続行して言い切った。

その選択に、茜さん達も続いてくれた。マジでありがてえ。

しっかしこの突貫ぶりは景さんらしいし、他者発言を気遣う譲りの姿勢は百城さんらしいぜ。

声帯の制御力でもやはり百城さんが勝る。

景さんのこの猪突猛進ぶりはもはや長所だが、百城さんの呼吸に合わせられてねえか

ら台詞を被せちまったのは少し難点か。

手塚監督はこの二人をぶつけたがってるが。

演技の場でこの二人がぶつかっても、現状の実力だと百城さんが景さんの演技の手を引いて行く以外になさそうな気がするぞ。

だが、『未知数』『可能性』の塊の景さんなら、あるいは。

そんなことを考えつつ、一人でカメラ組み立ててた俺に、百城さんが話しかけてきた。「色々考えてたんだけどね。私やつぱり、夜風さんの演技は盗めないや」

「え」

「私きつと、あの子のこと好きじゃないと思うんだ。あ、夜風さんには言わないでね？」

「そりや言いませんが……一体何故……？」

「あの子の演技を見てて、ああいう風になりたいって、あんまり思えない。」

でも見下してるわけじゃないよ？ むしろ……素顔を愛されるあの子は……」

百城さんが、微笑んだ。

いつもより、少し下手な笑顔だった。

「本物の自分をいくらでも変えられる人は。

どんな形の”好かれる人”にも、自分自身を変えられるから。

いつだって、どこでだって、どんな時だって自分自身が皆に愛される、そうは思わな

い？」

「……それは」

「羨ましいけれどああはなりたくない、っていうのが正しいのかな」
「百城さんの方がそれに相応しいでしょう。」

皆の望むものを研究して作り上げた、誰からも好かれる仮面。

それはきつと景さんでも作れない、一つの芸術だと思います」
「かもね。英二君が言うならそうなのかも。」

だから夜凧さんと技を盗み合ったり、高め合ったりしてほしかったんだろうけど
……」

百城さんが、横顔を見せる。

とても綺麗で強固な仮面。

どこから見ても百城さんの素顔が見えねえ仮面。

仮面を被った横顔が、そこにある。

この仮面こそが『百城千世子』で。

この仮面の下にも『百城千世子』はあって。

『百城千世子』をこの仮面が隠している。

「でも英二君。『素顔での芝居』が怖いと思う人もいるってこと、覚えておいてね」

何も言えなかった。

この仮面がどれだけの労力で作られてるか。

どれだけの尽力で維持されているか。

それが分かる俺には、何も言えん。

景さんだけが技術を吸収して成長していつちまうかもしれないねえが、それで百城さんと景さんのバランスが崩れるかもしれないねえが、それでも何も言えなかった。

自らの素顔を引つ剥がして新しい自分を貼り直すような景さんの技術が、百城さんにとっては何の役にも立たないと言われたら、何も言えなかった。

二人が見た二人の絆

シズル感。

「広告業界における」購買意欲を煽る要素”であり、現代日本だと大体の場合”食べ物”をめっちゃ美味しくそうに見せる”もの。

こいつが出来るとフードコーディネーターでもやっていける……らしい。

『夕方の飯時ゴールデンタイムに見せつけるように美味しい飯屋の紹介してるTV番組』の撮影に参加した時、ちよつとそういう話を聞いたってだけだが。

このシズル感を強調した仮面ライダー群がいる。

そう、仮面ライダー鎧武2013年放映仮面ライダー。果実と武者・騎士をモデル融合したデザインが特徴。そこまで大仰には評価されないが、果実と武者のデザインを高度に融合させ、果実が変形して鎧に変わる構造まで組み込むなど、『前例がない画期的なデザインの実現』をやったこの作品の造形は間違いなく天才の産物である。の新世代アーマードライダーだ。

鎧武は初期の仮面ライダー達が果実をモチーフにし、その必殺技などで果汁をモチーフにしたが、新世代アーマードライダーはそこに『炭酸を加える』という共通のモ

チーフによってそのデザインを完成させている。

なのでよく見ると、目の部分や透明装甲部分に透明な泡が見えるんだな。

一定以上のレベルの造形プロならこれを作るのはわけねえことだ。

たとえば肩なら、着る人間の肩のラインを想定し、複数の人が着回せる内側のラインを意識し、外から見たフォルムが綺麗になるよう外側のラインも設計する。

んで、装甲部分は反射シートを敷き、その上に内側に小さな半球突起を付けた色付き透明樹脂のカバーを付ける。

すると、反射シートが色付き樹脂カバーの色を反射し、更にカバー内側の小さな半球突起も反射し、肩装甲は『まるで炭酸の泡が入っている』ように見えるわけだ。

突起を泡に見せかける、ってわけだな。

しかもこれ、装甲の中に気泡が入ってねえんでクソ劣化に強い。

気泡が入ってねえことで強度低下もねえ。

決められた形状の透明素材の中に気泡を均等間隔で入れるのって結構難儀する上、製造コストも上がりやすいくせに狙った形にもし難いんだが、この方式だと炭酸の表現がめっちゃ安く高質に仕上がるってわけだ。

鎧武の撮影において、この炭酸にこそシズル感が求められた。

『美味しそうな泡』は『綺麗な泡』と表裏一体だ。

清涼飲料水のCMにおいては、コップや缶の表面に綺麗な水滴を付けること、飲み物の中で綺麗な気泡を動かすことで、購買意欲を増させることができる。とされる。

綺麗で、リアルで、だからこそ美味しく見える。

シズル感がある気泡ってのは、食事CM以外に使っても案外上手く行くもんだ。

俺も親父に、透明素材の中の泡の作り方は、散々叩き込まれた。

気泡を操れる、透明板に気泡を仕込める、ってことは、水中撮影に色々仕込めるってことだ。

たとえば止め絵の連続みたいな演出をするとしたら、カメラの前に気泡を仕込んだ透明な板を置いておくだけで、海中の水泡位置まで完璧に調整できるってことだ。

また、この泡入りの板は合成素材にするとクソ便利になる。

ブルーバックを背景に気泡入りの透明板の写真を撮っておけば、編集担当がこの合成素材を少し震わせながら上昇させていくだけで、かなりリアルな水中の泡表現の出来上がりだ。

しかも水中撮影時に何度も試行錯誤しなくちゃならねえリアルの泡と違い、こつちの合成の泡は発生場所も、水の中を上がっていく軌道も、全て計算通りにできる。

これは他にも複合できるぜ。

ブルーバックの前に水槽を置いて、その中を作り物の魚を泳がせ、撮影して合成素材

を獲得し、海中に見えるセットでの撮影に合成する。

こういう合成素材と泡入り透明板の合成素材組み合わせりや、水中で撮影した映像にいくらでも魚や泡を自由自在に付け足せるってわけだ。

この技術で、『水中に落ちた茜さんが海中で目覚めて、海の底から海面を見上げ、景さんと一緒に必死に海岸に這い上がる』シーンを撮る。

海中で目覚めた茜さんの目に映る魚、水泡、海面越しの太陽がこのシーンの肝だ。

最高に出来がいいシーンにしねえとな。

更にデスアイランド撮影では手塚監督の発案で、海中で目覚めた茜さんの目覚めの表現で、多少海中での視界がぼやけるように表現されるらしい。

良かった！

『合成のアラとか絶対出ないくらい徹底的に君達頑張つてね』とか言われなくて！

主観視点が多少でもぼやけてんなら、合成しまくりでも多分クソリアルに見えるぞ！

サンキュー手塚！

「海中撮影終了ですーすー！」

「お疲れ様ですー！」

お、海中撮影が一区切り付いたか。

後は海岸線での撮影をいくつかやって、午前の撮影は終了だな。

俳優さんにはゆっくり休んでもらって、俺達はパパッと飯食いつつ海撮影セットの撤去と、午後からの撮影の準備を昼休み中に終わらせねえとな。

本日四日目。

スターズが全員揃ってる今日中に、撮りてえ画を一気に片付けねえと。

「英二君、本当に水泡表現のシズル感出す腕上がったね」

「でしよう？ 百城さんにああいう仕事の腕を見せる機会中々無かつたんですよね、最近」

海を見てると一回くらい水着デザインしてみたくなるな。

百城さんとかモデル体型だし花っぽい水着とか着せてみてえな、フリルとか付けて。

決していやらしい気持ちはねえ。

決して。

不純な気持ちは一切ねえ。

純粋な気持ちで綺麗な人の水着姿を見たいと思っただけのことだ。

「英二君やらしいこと考えてない？」

「……いえ、服の造形について考えてただけですよ」

「嘘はついてないけど私の指摘も当たってるやつだよねそれ」

なんで分かるんだテメー。

「翔馬君の靴、あれ大丈夫かな」

「若狭さんの靴ですか？」

俺が話を逸らす方法を色々考えてると、百城さんから話を逸らしてくれた。

ありがとう。それとマジでごめん。余計なこと考えないよう気を付けます。

しかし若狭さんか。

スターズ男優にして、この撮影に二人しかいねえメガネ俳優……というかデスアイランドは俳優24人も出てんのに原作の関係で、男優二人しかメガネかけてねえから俺のメガネ小細工の余地がねえ……つてのは一旦置いといて。

あれ、なんだあの靴。ああいうの履いてたっけか。

今日までの撮影のカメラ角度的に、若狭さんの靴は一度も映ってなかったはずだから、靴履き替えるのは撮影的には別に良いとは思うが。

「あ、俺が渡した靴と別の靴使ってますね」

「あれ見覚えあるよ。翔馬君と契約してるスポンサーのスニーカーだ」

「あー、スポンサー絡みですか。なら仕方ないですね」

スポンサーが金を出すのは、何か自分が得してえからだ。

デスアイランドに出演した俳優が履いてた靴ともなれば、そこそこ宣伝効果はあるだろうし、雑誌が映画ファッション特集とかしたり、インタビュの時の全身写

真とかでもその靴履いてたりすりや、宣伝効果は更に上がる。

俳優と大手企業の契約つてその辺色々あんだよなあ。

CMに積極的に出てれば後は自由、とかいうのもある。

この期間内はうちの作品の宣伝積極的にしてくださいね、つて契約もある。

若狭さんの独断じゃできねえし、靴の履き替えは監督やプロデューサーも知つてると見ていいだろうな。

「確かに俺製の靴ではないですね、あれ。

あの靴を履いたままだとアクションで靴ズレしてしまうかもしれません。

よく気付きましたね百城さん、大金屋ですよ。ありがとうございます、助かります」

「ほら、英二君が本気で演者の足に合わせた靴つて、何より足に優しいから」

違和感見える時はかなりはつきり見えるんだよ、と百城さんは微笑んで言った。

百城さんから離れ、彼女に促されるまま、若狭さんに歩み寄る。

撮影全体を調整してる彼女の手足にされてる感はあるが悪い気はしねえな。

「若狭さん、その靴ですけど」

「う」

「大丈夫です、大まかな事情は推測してます。

靴を貸してください。

靴インソールの中敷きを入れて調整します靴の中にインソールを入れて身長の底上げ、身体バランスの調整などをする者はいる。ただし特撮では造形分野の人間が用意する物よりも、スーツアクターなどが私物のインソールで身長を調整する。パターンの方が比較的多めな印象を受ける。

中敷きを靴の形に調整するのに少し時間を頂きますが、靴はすぐにフィットさせてみます」

「……すまない」

「いえいえ、こういうのも俺の仕事ですから。」

そしてそれが若狭さんの仕事だということも分かっています」
気にすんな。

俺達や技があってもデカいこと出来るだけの金がねえ、金だけ持つてる会社の命令にはあんま逆らえねえ者同士だ。

悪意があつてやつてたつてわけじゃねえのは分かっている。

靴を履き替えるくらいなら、と判断したのも分かっている。

けれども申し訳ねえ気持ちになつて俺に言い出せなかつたつても分かっている。

仕事の思考だ、そういうこともあるさ。

だからこうして心の中で「これだから現場を分かつてねえ金だけ持つてるクソジジイ

どもは！」と憎むだけで声には出さず、精神の安定を保つのが吉なんだ。

「はい、調整したインソール入れて調整しました。」

動き回っても靴ズレが起きる可能性は無いと思います」

「ありがとうございます」

「お礼なら百城さんに言っておいてください。」

あの人が普段してる沢山の気遣いが礼を言われる機会って、ほぼ無いんですから」

「……ああ」

若狭さんが俺と百城さんを交互に見て、何故か一瞬呆れた顔をした気がした。

なんじゃその表情。

変に深読みすんなよ。

「見てましたが、朝風さんと百城さんもすごいですね……」

「木梨さん」

「夜風さんはすごすぎてよく分かんないくらいなんです、百城さんも同じなんですしよ
うか」

「木梨さんは同じに見えますか？」

「違うように見えるんですけど、同じようにすごく感じて、ええと、言語化できない……」

違いが分かるのは良いことだ。

そういう人はよく伸びる。

さて、言語化が苦手な人にこういうのを説明するにはどうするか。

「あそこに景さんがいらっしやいますね、木梨さん。

そこには百城さんが座ってらっしやいます。

お二人とも、撮影を見ながら、カチンコの度に集中して撮影を見つめています」

「みたいですね。すごく集中してるのが見ても伝わってきます」

「自分が参加する時の本撮影とは違う心持ちで、外側から眺めてるんでしよう。

ああやって自分が演技する時のことを考えてるんだと思います。

……考えてる内容は真逆の方向だったりするかもしれないが。さて」

シンプルに、わかりやすく、現役高校生演劇部の人に、小難しい理屈抜きで感覚的にあの二人の違いを理解させるには、どういう形がいいか。

こうすんのがいいかな。

カチンコが鳴るのを待って、撮影を外野から眺めてる景さんに呼びかける。

「景さん」

景さんは反応しない。

木梨さんが首を傾げた。

俺はもう一度景さんに呼びかける。

「ケイコさん」

「はい、何？」

「お茶の差し入れです。どうぞ」

「ありがとう」

木梨さんがぎよつとしたのが見えた。

続き、百城さんにも呼びかける。

「カレンさん」

「役の名前で呼ばれても、私の方は困るかな」

「紅茶の差し入れです。どうぞ」

「ありがとう」

木梨さんの顔を見ると、心底納得した顔をしていた。

「ほら、なんとなく分かるでしょう？」

「私には理解できても実践できない感じですね……」

全くもってその通りだ。

「木梨」

「あ、烏山さん！」

「お疲れ様です、烏山さん。次のカットで出番ですよね、頑張ってください」

「ありがとうございます、朝風先生。」

木梨、確かお前バッグに原作の単行本を入れていたな。

ちよつと撮影が始まるまでの間でいいから貸してもらえないか」

「はい、いいですよ。今取つてきますね」

木梨さんがとてと走り去つて行つた。

はて、烏山さんが原作を改めて読み込もうとしてる？

烏山さんの演技面での精神的傾向は、原作に芝居が引つ張られることや原作に媚びることを嫌いがちな、脚本と演技指導にのみ忠実にやる、自分の実力で勝負する派のそれだつたはずだが。

「原作をここから読み込むんですか？」

「原作をちゃんと読め読めとうるさい奴がいますからね」

源さんか。

烏山さんは、朗らかに笑う。

「夜風ですら頑張つて周りに合わせてるので、俺も少し見習おうかと」

景さんの影響は、周囲に伝わる。

良い影響も、悪い影響も。

俺はその影響を抑えて、撮影を安全に運ぶ百城さんの補助に尽力してるが。

こうしていい影響が伝わってるのを見ると、やっぱり心が踊っちゃまう。

「持ってきました！ どうぞ、烏山さん」

木梨さんが持つて来たコミックスを、烏山さんが読み始める。

「……朝風先生。演出予定にない、原作通りの演出というのではありませんか」

「できますよ。俺も原作読み込んできましたから、いくつから今からでも」

流石にネズミとかは準備してなかったけどな。他なら、いくつかは、なんとかできる。

「このシーンなんですが」

開かれたページは原作のワンシーン。

烏山さん演じてる役の漫画のキャラが、地面に落ちてる刀を踏むように蹴り上げ、跳ね上がった刀を握って若狭さんが演じるキャラに斬りかかるシーンだ。

ほほう。

ここをやりてえと。

オーディション組が演じる役のキャラの見せ場は、この映画の方針的には削られがちで、演出予定表ではカットされてたシーンだな。

「たまには夜風のように、良い意味で周りをギャフンと言わせてみたいじゃないですか」

「源さんをギャフンと言わせたいんですか？」

「驚かせられれば、それで満足です」

こいつめ。

「できますか？」

「できますよ。ちよつと待つててください、ちよつと相談してきます」

こつちを見てた監督を横目で見る。

いーよいーよ、とばかりに笑つてこつちに手を振っている。

演出と助監督にはこれで話を通るな。

まず百城さんに話通して、次に助監督呼んで全体に話し通すか。

百城さん呼んでかくかくしかじか。

「これなら安全だし、映画の質をより上げられそうだね。

良いと思う。でも英二君、ちよつとうっかりしてないかな」

「なんですか？」

「これやるならあの刀の重量が最適、というかあれがないと辛そうだけど。

英二君が皆に助け舟出す時に、あの刀蹴り飛ばしちやったんじやなかったかな」

「……あー」

しまった。時間見つけて探そうと思つてたけど、あの刀今は無いんだった。

こういう、武器を踏んで跳ね上げて眼前で掴むとか、武器を蹴り上げて眼前で掴むと

か、そういうクソかつこいいいシーンは様々な技術で撮ることが可能だ。

有名なのは平成ライダーの始祖・仮面ライダークウガの28話か。

海岸線波打ち際での戦いで、クウガが足元の枝を蹴り上げてキャッチしつつ、敵の攻撃を前転跳びで避けながら強化変身、立ち上がると同時に強化変身完了・手に持った武器が金色の槍に変化、敵にその切っ先が突きつけられるってシーンだな。

金色の刃が生えたロッドがとても印象的で、アクションの見事な魅せ方にめまいがしそうなレベルの名シーンだ。

この28話シーンはよく見ると、背景の光量がかなり増してあり、光量を調整して背景が一切映らねえようにしてるシーンと、光量が多いが海がちゃんと見えるシーンを織り交ぜ、『光量を増して色々見えなくしている』ということ気付かせねえようにしてる。

これによって例えば、鞭の先を透明な紐で操作したりしても、棒を紐で引つ張り上げたりしても、棒を砂中の装置で跳ね上げても、画面の多くが光でぼやけてるんで見えねえ。

実際、放送されたこのシーンでは飛び上がるCGのクウガが背景の光で誤魔化され、かなりリアル寄りに見えてんのが肉眼でも見て取れる。

更に、棒を足で蹴る瞬間・棒が跳ね上がっていく瞬間・クウガが目の前の棒を掴む瞬間

間を別々のカットにしておくことで、撮影難易度を著しく低下させてるんだよなこれ。クウガが棒を蹴り上げるカット。

紐で上から引くか、下から装置で跳ね上げるかで棒が跳ね上がる瞬間を撮るカット。カメラに映らねえよう足元に寝転がった人が、棒をリアルな速度で持ち上げて行つて、クウガの上半身だけしか映らないほどに近付いたカメラの前で、クウガが棒をキヤツチするカット。

そして、三つの映像を連続させ接合する。

こんな感じに三カットを分けて撮れば、一定以上の力量があるプロなら誰でも、『棒を蹴り上げてかつこよく目の前でキヤツチするシーン』っていう、様々な漫画や特撮で多用されるかつこいいシーンを真似して撮影できるって寸法よ。

他の撮影でも使えるぞこれ。

こういう『撮影難度を下げる撮影構成の工夫』を上の人間がやってくれると、実際に現場で撮る人間はすっげー楽で助かるんだわ。

背景光量が増してるから、多少の変なところは肉眼じゃ分かんなくなってるしな。

撮影背景の光量を増してくれる映像編集のテクニクが、CG班や特撮班の撮影を、めっちゃくちやに楽にしてくれてるってわけだ。

さて。

んで、烏山さんの撮影にこれを使えるかっていうと、かなり微妙だ。烏山さんの撮影をカットで分割する予定はねえ。

刀を踏むように蹴り上げる漫画っぽいこのカットは、ひと繋がりの流れで撮らなくちゃならねえ……となると、相当に誤魔化しが利かん。

ただまあできないわけじゃねえ。

海岸線の、あの辺りの草地の地面の中に刀跳ね上げ装置を仕込めばいい。

どの角度から撮影しても、草の上の刀は見えても、草に隠された地面に仕込まれた装置は肉眼で見えるわけがねえからな。

跳ね上げ装置は即席で組み上げて、シンプルな木製デコピン式にする。

木製のちよつとパワーに差を付けた複数のデコピン装置が、複数同時にデコピン時の指の如く動いて、刀をそこそこの勢いで叩き跳ね上げる仕組みだ。

凝った操作システム作んのは時間的にも面倒臭いんで、遠隔操作可能なモーター複数を使って離れた場所からモーター操作できるようにしとく。

TVシリーズ・ウルトラマンティガに登場する戦闘機・ガッツウイングの飛行シーンを魅せる時と俺が操作できることは基本的には同じだな。

あれもリモコン操作できるモーターにピアノ線を結んで、そのピアノ線に戦闘機を繋げて、モーターを動かすことで戦闘機の飛行描写をしたりしてたんだ。

俺がリモコンを操作すれば、モーターが動いてぐぐぐつと木製デコピン装置に力が溜まり、力が解放されて刀が上にぶっ飛ぶ。

が。

俺の仕事を理解してる百城さんはここまで瞬時に読んでたわけだが、俺がさつくりやろうとしたこの仕込みは、刀が重いと成立しねえ。

んでもって、和歌月さんに渡してた刀は俺の傑作で、一番軽いやつ。

あれを使うことを前提にして、今一瞬だけうっかり計算してたわけだ。

危ねえ危ねえ。

じゃあもうちよつと重い予備の刀を跳ね上げる前提で、全く別の機構を組み上げるとなると……ちよつと時間が要るな、そいつは困った。

木製デコピン装置とモーターだけなら、木を切つてありもの組み合わせるだけだから、本当にすぐ出来るんだが、こいつは困った。

「お困りのようですね、朝風さん」

「あれ、和歌月さん……どうしたんですか、そういう撮影もないのに髪が濡れてますが」「手の空いているスタッフさんに付き添ってもらって、朝の内に見つけてきました」

「！ 海に消えた刀じゃないですか！」

水流に流されて見つからねえと諦めてたのに！

無茶すんなお前！

「海に潜って探してきたんですか……無茶しないでください」

「私は夜風さんと違って、自分がした失敗を挽回する気があります」

「……うん？」

「朝風さんが全力で作ってくれた傑作。

それを取り戻そうとする分だけ、少しは夜風さんに勝っているはずです」

「……あ、そ、そうですね。ありがとうございます。」

でもこれからは危険があるかもしれないことは、極力避けてくださいね」

「刀の回収の際にはスタツフの方に見張ってもらい、万全の安全を期しました」

どうすつかなー。

ちよつとくらい無茶して周囲のプロの仕事が無駄にしねえのがプロ意識なのか、徹底してリスクを回避すんのがプロ意識なのか。

いや、和歌月さん視点だとスタツフ巻き込んでまで安全確保してたんで、海に潜って刀探してたのは主観的にはリスク0だったのか？

だとすると心配しまくつちまった俺のことを気遣って、俺を安心させるために普段以上に安全対策を考えて行動してくれたのか？

いや、そうかもしれん。

今、和歌月さんは刀を探して海に潜ったと言うよりも先に、手の空いてるスタッフに付き添ってもらったと言ってた。

自分が何したかを言う前に、自分が安全を確保してたことを言った。

それは、俺とかを安心させつつ事実を告げるためか。

あーもう強く言えねえじゃねえか。

ありがとう。

……マジでありがとうな。

俺が全力で作った物を大切にしてもらえんのは、素直に嬉しい。

海水濡れの刀を和歌月さんから受け取り、握り締める。

「本当に助かります。ありがとうございます、和歌月さん」

「……そうまつすぐにお礼を言われると照れますね」

「海で刀を探して、海の撮影にスムーズに合流してくださいだったのは、狙ってですか？」

「この撮影でこの刀かその予備を使うことは、演出予定表に書いてありましたから」

海辺での撮影だということ把握して、海で刀を探して、超速でここまで来てくれたんだな。

もーなんか、海に潜って探してくれたことは、バカかよとか、真面目すぎかよとか、ありがとう誠実な人！ とか色々言いたいことあつたんだが。

頭の中に撮影に必要なことを全部叩き込んでるところは、本当にスターズ感あるな。「じゃ、やりましょうか。」

百城さん。ちよつと助監督や監督への伝言役と、俺の意図の伝達お願いできますか」「うん、いいよ」

「烏山さん。地面から仕込みでオートで刀を跳ね上げます。」

刀はほんの僅かに回転しながら跳ね上げますので、テスト一回で軌道を覚えてください。い。

跳ね上げた刀の軌道はテストと本番でズレを1cm以内に抑えます。

烏山さんの優れた運動神経の数値はもう動きを見て把握しています。

この仕込みで跳ね上がった刀を烏山さんが掴むのは、初見でも九割成功するはずですよ」

「承知しました！」

ありがとう和歌月さん。やや重い予備刀使わなくて良いのはマジで助かる。

さあ、本番だ！

このシーンで動く人は二人。

声がデカイ烏山さんと、メガネ男の若狭さん。

このシーンに使われるカメラは三つ。

一つは真横からのアングル。

草地で対峙する二人を真横から撮る。

一つは斜め前から烏山さんを撮るアングル。

刀を跳ね上げ掴み、切迫した様子での烏山さんを斜め前正面から撮り、烏山さんが若狭さんに切りかかっていく流れで、固定位置からカメラを回して烏山さんを追い、最終的には若狭さんの腕を切る烏山さんの後ろ姿を撮る。

一つは斜め前から若狭さんを撮るアングル。

刀を持つ烏山さんを恐れる若狭さんの表情と演技を撮りつつ、カメラクレーンで上に移動し、上から見下ろすアングルを撮影する。

この三つで撮影した映像を切り貼りし、最高のワンカットを完成させる、ってわけだ。

まず烏山さんの正面を映すアングルから。

これが撮り、烏山さんが友達を切るほどに正気でないことを示す表情の演技をし、同

時に足元の草地に刀が落ちていている事実を画面に映す。

次に真横。

真横から撮影するアングルだと、靴や刀が草地の草に飲まれて消えるんで、烏山さんが本当は足で刀に触れてねえことも、仕込みで刀が跳ね上がってることも肉眼じゃ分かんねえ。

ここで、跳ね上がった刀を烏山さんがキャッチする。

刀を眼前で掴んだ瞬間、烏山さんを正面から撮るカメラの画も使う。

刀を握った烏山さんを見てビビる若狭さんを斜め前から撮り、烏山さんが一気に斬りかかるのを三カメラから撮って……って感じだな。

「俺は生き残りたいんだ！」

「お、落ち着け！」

「デスアイランドの指令に逆らって俺が死ぬか、俺がお前を殺すか、二つに一つ！」

あーいい。

いい感じ。

演劇畑の人の剣殺陣はやっぱいいな。

元アクションクラブの和歌月さんみてえなテレビ映える動きとはまた違う、舞台映えする印象的な動きだ。

昨日和歌月さんの人斬りを見た後だから、余計烏山さんの人斬りが映えるな。

つか、うん。

やっぱ『地面に落ちてる刀を立ったまま足で跳ね上げて手でキャッチ、敵を切る』ってのはかつけえな！

好きだ！

これだから撮影の裏方ってのはやめられねえな！

「はいカット！」

「OK。良かったよ若狭君、烏山君。

テスト一回本番一回で終わっただし、映像の出来も予定より良くなったね」

「監督、次の撮影に移ります」

「うん、お願いね」

監督はニコニコしていつも通りのOK。

若狭さんもいい演技見せつつも、烏山さんの演技といい感じに引き立てあい、切られ役の名演を見せてくれたな。

さてさて次の撮影に……ん？

若狭さんが何か烏山さんに耳打ちしてる。

なんだろうあれ。

聞いてみつか。オラ教える烏山！

「烏山さん、若狭さんに何か言われましたか？」

「あ、いえ、大したことでは。」

『朝風さんの不思議マシンによく合わせて、いい動きしてた』

と褒められましたな。朝風先生の仕込みに初見で合わせられると思われてなかった
ように」

「ええ……でも良かったじゃないですか。」

「これからの撮影でもいい協力できるかもですよ。何か学べましたか？」

「はい。一流と呼ばれるスターズの上澄みの演技、見ていい勉強になりました。」

そりやよかった。

そんじやま、次の撮影の準備準備。

「……」

「あれ、源さん。撮影の準備はもういいんですか？」

「あ、ああ、そつすね」

「源さんは次の連続カットの次ですよ。どうか準備は万全に。けれど肩の力は抜いて、
です」

「うす」

次は爆発シーンだ。

この撮影俳優の中で最年長、20歳の石垣さんがなんやかんやあつて爆死する。デスゲームの華らしいな。爆死。

「フッフ、朝風君。できるだけ派手にね」

「石垣さん、派手具合によつてはギャグになっちゃいますよ。」

派手すぎなくてもギャグになるので、ほどよくします。

死体が残らない爆発規模で、グロ要素は排除し、かつ派手に、ですね」

「僕の腕も吹っ飛ぶんだろう？」

「はい、こちらです。」

前に型取りさせて頂いた石垣さんの腕の型を元にリアルな腕を作り上げました」

「うわあ、凄い本物感」

「まず、爆死直前までの怯えた石垣さんを撮ります。」

そして、石垣さんがどいたその場所で火薬を爆発させます。

死体なんて残らないと思えるくらいの規模の爆発を、火薬とガソリンで表現します。

そして爆発の表現で飛んで来る腕（偽）。

吹っ飛んでいった腕が、生きたいという執念の賜物か、町田さんの服を掴む……とい

う流れ」

「怖いよねえ。どんだけ死にたくなかったんだらうね、原作のキャラ」
「執念で死後に腕が生者の服を掴むくらいですからね。」

そりやもうヤバい、つて度合いだと思えますよ。

だからこそ名演と造形の両方が必要です。

石垣さんは死の瞬間に、強烈な妄執を見せる。

そして俺は、本物にしか見えない腕を作る。石垣さんの腕にメイクをしてでも、です」
「何度聞いても仕組みがあんまよく分かんないよねえ。」

こっちの生身の腕をわざと血や泥で汚す。

作り物の腕の方も、1mmのズレも無く同じ形に汚す。

すると、完成した映画で偽物の腕が本物っぽく見えるとききた。フッフ

「人間は」分かりやすい目印のマーク」で物を見てるんです。

脳が勝手に誤解してくれるなら、そうなるよう仕向けるだけですよ」

仮面ライダーオーズにおける主人公の相棒、腕だけの赤き怪人アंकその出会い、主人公との関係と物語、そして終盤の展開と最終回の物語から、人によっては平成仮面ライダー最高の相棒関係とも呼ばれた『掴む腕』。オーズの最終回は信じられないほどの情報量を一話に詰め込んだテクニクで関係者を大いに驚かし、視聴者には感動のラストに泣いた大人も多くいたという。

腕だけのアंकは、人間と一体化し、その人間の体に乗っ取ること動く。

よって体のほとんどが人間だが右腕だけが怪人、というのが、この番組における相棒・アंकの描写の仕方だった。

実際の撮影では、俳優の腕にアंकの腕セットを装着し、右腕だけ怪人の人間という風に見せている。
が。

このアंकの腕セット、実は二種類ある。

片方はグローブのようなフル造形。

怪人の腕そのものなグローブ状のセットであり、付けるだけで間近で撮影しても何ら問題のない腕となる。

ま、アップ用だな。

アクション用はもう片方の方だ。

そのもう片方の中には、『人差し指と中指がねえ』。

放映中、視聴者の多くは気付かなかったが、アंकの手は『変身用のメダルを投げるアクションをする』という関係上、指周りを器用に動かす必要があった。

それこそ、グローブ状の生地越しじゃ駄目なくらいにな。

だから、人差し指と中指の部分は造形せず、そのまま露出してる指につけ爪と指輪装

着と特殊メイクを施した。

で、アップ用の方の人差し指と中指の部分も、この指に合わせて造形したってわけだ。指が露出してらんで、カメラ越しだと怪人の分厚い腕グローブ付けてるように見えるのに、すっげー細かな動きができてるように見える。

オーズのアンクにおいては、この特殊メイクも造形の仕事の一端って言っても良いのかもしれない。

んで。

これこそが、『腕』を映画で魅せる最高の錯覚テク、ってやつだ。

当時仮面ライダーオーズの視聴者はほぼ誰も気付かなかった。

指が覆われてる時と、覆われてねえ時があるなんてな。

これもまた、錯覚と思いつみ。

人差し指と中指が微妙に違っていたとしても、それ以外の部位が全部同じデザインだったから、この二本の指が同じであるように見えた。

同じに見えるよう、ほんの僅かな違和感も脳が勝手に補正した。

俺が今、石垣さんの腕にメイクを施してしてんのもそれだ。

本物の指と作り物の指を見分けられねえよう、視聴者の脳を騙したように。

本物の腕と作り物の腕を見分けられねえよう、メイクを調整する。

「フフフ。不思議な気分だねえ。僕の腕が沢山あるみたいだよ」

メイクを施すのは三つ。

石垣さんの生身腕と、爆発シーンで飛んで来るところで使う手が開いた腕と、町田さんの服をギュッと掴む手が握り締められた腕だ。

作業中に、作り物の開かれた手の指紋が、僅かなミスで石垣さんの指紋のそれと違う指紋になってることに気が付く。

素早く針先で彫って修正。

そして、本物一つと偽物二つを、「今日の」石垣さんの腕を基準に、寸分違わねえ造形にして揃えていく。最終調整だな。

「朝風君の腕の動きは、まるで機械だ。ほんの少しのズレもなさそうだねえ」

「大事なものは計算です。計算ほど大切なものはありませんよ」

計算して、計算通りに手を動かす。

仕組みは機械と同じだが、機械にできねえ作業を機械のように素早くできるからこそ俺のこの仕事に意味はある。

単純に布を服にするだけなら、俺の手よりミシンの方が速えだろうしな。

俺の横に、お茶と紅茶のペットボトルが落ちた。

あれ、これ景さんと百城さんにやったやつ。

と思つて、顔を上げると。

「え………？ 私が一番大切………？」

「へえ」

「この流れ前もやりましたよ！ 天井！ 天井です！ 誤解です！」

黒い髪を揺らした景さんと、白い髪を揺らした百城さんがいた。

黒っぽい天才も白っぽい天才も間が悪いんだよ！

このカットに映る俳優は四人。

爆死する石垣さんと、飛んできた腕に掴まれる町田さんと、その後ろに二人。

町田さんの後ろの二人は、デブキャラにキヤステイングされたデブの小西透さんと、背が高く坊主頭で坊主頭キャラにキヤステイングされた小寺童子さん。

オーディションで坊主頭のキャラで受かりたいがために坊主頭にしてきたとかいう噂は、果たして本当だろうか。

いやそういう俳優は時々マジでいるけどな。

ファンがかなり離れるから売れた俳優は坊主頭にし難えんだ、これが。石垣さんが、迫真の演技を見せる。

「い……嫌だ、死にたくないっ！」

景さんほどじゃねえが……いやこの考え方は駄目だな。

それでも、十分に感情が伝わってくる演技。

「カット！」

「はい、OK。じゃ、爆発シーン行くよ。皆そのままそこで動かないでね」

石垣さんがどいて、火薬の扱いにも長けた俺が火薬を仕込む。

火薬をどのくらいの量にするか？

ガソリンをどのくらいの量にするか？

火柱はどの方向に伸ばすか？

着火時の閃光はどのくらいの大きさにするのか？

ほんの一瞬だけだが、カメラに爆発の瞬間、そこに石垣さんがいないと映るかもしれないねえ問題はどようするのか？

その辺を、知識と感覚で処理する。

とりあえずガソリンは辞めた。

万が一くらいの確率で怪我しそうな距離だと俺の勘が判断したからだ。なのでガスナパームを使う。

プロパンガスと空気を混ぜて、高い圧力をかけて吹き出させ、これに火を点けるのだ。ガスはどこまでも広がるから危ねえと一見思えるが、これがガソリンナパーム爆発より安全だつてんだから世の中は不思議なもんだ。

ガソリンは近くの人に意外と引火しやすいからな。そしてマグネシウム。

火をつけるとごわっ、と光が拡散するマグネシウムの塊を仕込む。

こいつがめっちゃ光を出すと、光でカメラがハレーションを起こし、強い光を中心に画がややぼやける。

これで爆発の瞬間石垣さんがいねえことには肉眼じゃ気付かねえはずだ。

あとは12日目まで使うつもりなかった大型扇風機をセット。なんか思ったより距離の関係で皆の服が揺れねえ。

だから爆発と同時に町田さん達三人に扇風機の風を一秒ほど当て、あたかも爆風で服が揺れたかのように見せかける。

”爆発の際にはピカッと光が出る”みたいなイメージを持つてる人は、だいたいどっかの番組でこのマグネシウムフラッシュを見たことがある人だろう。

燃えるガスとマグネシウムのピカツ。大型扇風機ゴワツ。

よし、上手い感じに爆発が撮れた。

爆発の瞬間の光と、発生した少しの爆風（扇風機）が、カメラが撮っている三人の姿をより臨場感あるものへと仕立て上げる。

目の前で人が爆死したことで、三人の顔には演技の驚愕が浮かんでいた。

「カットー！」

「OK。じゃ、後でこの爆焰に吹っ飛ぶ腕合成するとして、次」

さーて更にもつかいカットだ。

今度は爆発で飛んだ腕が、空中を飛んで行って町田さんの服を掴むまでだな。

しっかしこういう一連の流れを次々撮っていく撮影はテンポよくて楽しくなる。

それまで背景は森だったが、巨大な青い布が数人がかりで広げられ、背景が真っ青に染まる。

そして全身青タイツを着たスタントマンさんが、石垣さんの腕を拳の先に装着した。

うーむ何度見てもすげえ。

仮面ライダーオーズのアングの、『怪人の腕が飛んで行く』合成と同じことやってるだけなんだが……絵面の破壊力強え。

ブルーバックの上で青タイツを装着した人間が動く、透過処理の時に人間も完全に

消える。

青タイツは撮影形式によつちや全身でもいいし、腕だけでもいい。

ともかく、青タイツを装着した人間が石垣さんの腕を持って走れば、石垣さんの腕がすつ飛んでるように見えるってわけだ。

けど、手を持つて走つてただけじゃ、爆死者の腕は情けねえ速度しか出せねえ。

だから加速させる。

仮面ライダーカブトのクロックアップ形式仮面ライダーカブトは時間流を操る戦士達の物語。仮面ライダー達からすれば周囲は止まって見え、周りから見れば仮面ライダー達の速度は目にも止まらない、そんなハイスピードバトルを基軸にした仮面ライダー作品。でな。

ちよつとばかり、カメラマンさんに聞く。

「レートフレームレート。『1秒間に何コマあるか』の基準数字。どんくらいにしますか?」

「監督が同じアングルでいいって言うてるからカメラごとに変えて撮つてみるよ。」

カメラ1が20コマ。カメラ2が16コマ。カメラ3が12コマ。取り直しもあるかも」

1秒間に、何コマ撮影するのか?

これが、時間を加速させるライダーである仮面ライダーカブト達の能力『クロックアップ』の撮影形式の一つだ。

たとえば、映画では、通常慣例的に1秒間に24コマ撮影している。

つまり普通の映画は、映像を1秒間に24コマ流して映す速度でフィルムを回している。

ここで1秒12コマで撮影し、映画で流せばどうなるか？

1秒24コマのペースで流しているため、12コマは0.5秒しか流れない映像となり、1秒の映像は0.5秒に圧縮される。

そして、戦闘は超高速になる。

これがカブトの敵味方が持つ加速能力『クロックアップ』の見せ方だ。

通常映像の撮影が1秒間に24コマ。

加速能力・クロックアップ発動時が1秒間に18コマ。

で、クロックアップを超える超加速・ハイパークロックアップの場合、1秒間に4コマ。

この疑似加速撮影状態の中、スーツアクター達は少しゆっくり目に動き、撮影に臨んでいたっつー話だ。

つまり仮面ライダーカブトにおける『残像を目で追うのがやっと』という速度、及び

クロックアップの基準速度が、だいたい約1.3倍速。

ハイパークロックアップで約6倍速ってことだな。

俺の場合、カブトのこういう数字を映像の加速の物差しに使うことが多い。

カメラ1が1秒20コマ。大体1.2倍速。

カメラ2が1秒16コマ。大体1.5倍速。

カメラ3が1秒12コマ。大体2倍速。

カメラを見てる感じ、1.2倍速がほどほどにリアルな感じするわ。

そうして、加速される予定の腕の飛来シーンが撮影完了し。

青タイツのスタントマンが作り物の腕を操作して、町田さんの服をガシツと掴ませた。

よし、このカットはここまでだな。

「カット！」

「OK。順調だね。それじゃ最後のカット行こうか。リカちゃん、いけるね？」

「はい！」

で、最後のカット。

「キヤアアアアアアアアアアッ!!」

服を死体の腕／作り物の腕に掴まれた町田さんが、混乱と狂乱を感じさせる叫び声を

上げた。

町田さんの後ろにいた小西さんと小寺さんが、役を演じて「落ち着け」と呼びかけつつ、町田さんに寄り添っていった。

友達を励まし、慰め、落ち着けようとするクラスメイトの友情描写。

まあこの三人も後で全員死ぬんだけどな。

デスゲームだし。

本当に酷えなデスゲーム！

「カット、OK！ いいよいいよ、皆スムーズに行けたね」

「監督、次ラストです」

「はい皆、次のカットで今日の撮影は終わりみたいだよ。気合い入れようね」

カット一つ目で石垣さんの演技を見せ。

カット二つ目で石垣さんの爆死を見せ。

カット三つ目で飛ぶ腕を見せ。

カット四つ目で死体の腕に掴まれるとかいうホラー展開に、町田さんの感情がこもった最高の悲鳴が添えられた。

このカットを繋げることで、石垣さんが死んでその腕がすっ飛んで、原作の人気ヒロインの一人を演じる町田さんがホラー展開にビビる映像が完成する。

なんかここで町田さん担当の原作キャラが泣いて悲鳴上げるところが人気らしい。原作ファンってサド多いんだろうか。

涙目に興奮する人って多いんかね？

四日目も終わりが見えてきたな。

スケジュール4／30消化、撮影予定カット数は大体15／100完了。

あんま早くねえな。

もうちよつと巻いていきえてえ。

「英二君」

「あ、百城さん」

「カメラマンさんの方をずっと手伝ってただけどね。」

「次の撮影を撮るためにカメラの三脚を立てる適度な台が要るんだって」

「台ですか？ ……ああ、あそこのカメラマンさんですか。」

「必要な高さは…‥なるほど、分かりました。」

「半年くらい前に食品のCMで百城さんのために作ったやつが車の中にありますよ」

「ああ。あれなら大丈夫そうだね」

「10分ください。パーツにバラしてあるんで組み立てます」

「お願いね」

百城さんの口元が、俺の耳元に寄る。

「英二君のかつこいいところ、もつと皆に見せてあげたら？」

「……からかわないでください」

「英二君ってこの手の台詞にいつまで経っても慣れないね。冗談でもそうじゃなくても」

「百城さんの冗談は心臓に悪いんですよ……」

「じゃ、半年前のあの台をお願いな」

せかせか台を組み上げる。

三分で出来ちまった。

カメラマンと百城さんに渡して、俺も次の撮影の準備を開始する。

さーて本日ラストだ！

あれ、源さん。何か用？

「英二さん。その……ああいう会話、いつもしてるんスかね」

「源さん？ 何がですか？」

「何年前とか、あの時の仕事がどうか」

「五年以上付き合っている人とは時々する会話ですね。」

「アキラさんとするのが一番多いと思いますが……」

「あれなんですけど、ほら、あんたと夜風とか付き合い浅くて、夜風はその……」
「？」

「……やつぱ辞めました。俺がやるようなことじゃないっすわ、これ」

「ええ……」

「俺が言えるのは、百城千世子ってかなりの腹黒なんで気を付けてってことです」

「俺百城さんの悪口言われると結構怒りますよ」

「も、もう怒ってるじゃねっすか！」

「なんだかなーもう。」

まあ行動が大体打算と計算によって成り立ってるって意味じゃ、打算抜きの行動がほぼねえ百城さんは腹黒なのかもしれん。

だがそうだとしても俺は「その腹い黒が出てますね」とその色を褒めるんだぞ。

言う相手を間違えたな。

「次が本日ラスト、四日目最後のカットです。何か要望はありますか？」

「……要望は、ありますけど」

「？」

「歯切れが悪いな。」

「かつこよく魅せてえんすよ、この原作、好きになっちゃったんで」

「物作りで俺にできることならなんなりと言ってください。原作愛を形にしてみますよ」

「あざす。……本当に、思いつきなんですけど。」

鳥山みたいに、尺の都合でカットされてる原作のワンシーン、やれますかね」

「できますけど……源さんのキャラでねじ込めるの何かありましたっけ」

「七巻のあれです」

「!」

「そうです。今の脚本だとバツサリカットされた原作エピソードです。」

「この脚本だと俺は原作よりもずいぶん早くに死にます。」

カットされた部分の見せ場を、無理矢理に序盤のシーンにねじ込めば……」

「どこにねじ込むつもりですか?」

「ここだけの話ですけど、この映画の脚本はあまり腕が良い人じゃないです。」

要望出しても綺麗なねじ込み方をしてくれるとは……ああ、今から撮るカットにです

か?」

「どう思いますか、英二さん」

「言われてみるとかなり綺麗に入るかもしれませんね。」

「この脚本、『ケイコ』が入った分のズレがあるんです。」

そのズレを、源さんのこのねじ込みで修正できるかも……」

「ですよね！」

「流石は源さん。原作読み込んで、原作愛で、脚本の改良案を持つてくるとは」

「へへっ」

「でも、原作通りの話からまた離れそうですね。いいんですか」

「原作そのまんまやるのが原作愛つてわけじゃねえと、ちよつと思つたんです」

まさか、源さんが原作に忠実な演出を変更してもらおうとしてくるたあな。

源さんの演技面での精神的傾向は、原作付き作品の場合原作を徹底して読み込み原作のファンになり、その原作を極力改変しないで最高の再現を魅せるつてタイプだったはずだが。

「原作通りにするのはやめたんですか？」

「原作に引つ張られず自分の最善探せとか、実力で勝負しろとかうるさい奴がいるんですよ」

鳥山さんか。

源さんは、溜め息を吐く。

「夜風ですら頑張つて周りに合わせてたんで、俺も少しはそうしてやろうかと」

「――」

景さんの影響は、周囲に伝わる。

良い影響も、悪い影響も。

俺はその影響を抑えて、撮影を安全に運ぶ百城さんの補助に尽力してるが。

こうしていい影響が伝わってるのを見ると、やっぱり心が踊っちゃう。

「たまには夜風のように、良い意味で周りをギャフンと言わせてみたいっすからね」

「烏山さんをギャフンと言わせたいんですか？」

「別にあいつがどうかという話でなく、高い評価を得て次の仕事に繋げたいだけですよ」

「いっつめ。」

「できますか？」

「できますよ。ちよつと待っててください、ちよつと相談してきます」

百城さんと話してた監督に相談に行く。

「いーよいよよ、やっちゃって」

よし、これで助監督以下全体に話を通るな。

ぶつちやけ源さんの要望聞いて、実質仕事増えんの監督と俺だけだしなあ！

「百城さん、それでこれなんですけど……」

「分かってるよ。カット減らせるって話だよね」

この人の把握力凄えなあマジで。

「真咲君のこの要望聞けば、真咲君の長台詞がいくつか入る。

そうすると、真咲君と会話するスターズの皆の台詞も増える。

結果的にここのカット繋げたシーンが長くなる。

映画の時間は決められてるからね。

真咲君達が明日撮る予定だった、このカットの次のカットをいくつか省ける。

上手くやれば撮影数回分の尺をこの撮影一回で撮り終われるかもね」

「そこまで見抜かれてると、俺に言うことは無いですね」

「あるでしょ」

「?」

「『俳優の立ち位置とカメラの位置調整したいので手伝ってモモちゃん』、とか」

「あなたの能力を信頼してます、どうか力を貸してください、百城さん」

「ひねくれ屋」

てめえもな。

「私次の撮影に入る人達に声かけてくるね」

「じゃあ俺、ちよつと源さんと話してきます」

百城さんのフィールドを俺が手助けし。

俺のフィールドを百城さんが手助けする。

調整利かねえ時なんてねえ。

俳優の要望も。

景さんの暴走も。

俺達は全部ひつくるめて受け止めて、加工して、この映画に取り込める。

「源さん！……何してるんですか？」

「いや、ほら。」

原作のシーンだとちゃんと巻いてたネクタイしゅつと外すじゃないですか。

なんかこのネクタイ固くて。

というか普通のネクタイで練習もしてみたんすけど、すつと抜けなくて」

「そりゃ漫画みたいにはいきませんよ。」

引つ張ればするする抜けると思いますが、一瞬で全部抜くのは無理です。

油塗ってるわけじゃないんですから、ネクタイとシャツの摩擦ですつとは抜けません

よ」

「ど……どうしろと！ そうだ、英二さんが最適なネクタイをササつと作れば！」

「造形でなんでもできると思ったら大間違いですよ？」

「そんな……英二さんでもできないなんて……」

「いやまあできるんですけどね」

「紛らわしい反応してんじやねえぞオラア！」

「小粋なジョークでも入れたら緊張取れるかなと思ひまして」

「無粋なジョークだったんですけど！」

「まあこの会話は実は時間稼ぎです。」

源さんに話しかけてた時点で俺の手の中で縫つてたこれ、見えてますよね。

というわけで完成です。引つ張るとヤクルトの蓋のようにすつと抜けるネクタイ、どうぞで」

「……??？」

「ネクタイは芯地、表地、裏地で出来ています。」

このネクタイは襟の中を通る部分の表地だけ、別の生地に変えてあります。

合成繊維低摩擦化処理剤を含めた、低摩擦のフッ素合成繊維シートです。

摩擦を減らす表面処理もしてあります。

あ、数分そのシャツの襟もいじらせてください。

襟の内側の摩擦少し減らして、繊維の向きも整えます。すつと抜けるはずですよ」

「あ、はい、そつすね」

「それとこのネクタイ、襟を通す部分だけ芯地を柔らかくしてあります。」

もちろん接着剤も使つてません。

相当柔軟になってるので、襟からかつこよく抜く時も、紐の感覚で抜けますよ」

「……原作通りできますね！」

「できますね！」

源さんの見せ場はこうだ。

武器を持つて迫るクラスメイト。

源さんが長台詞をいくつか吐いて、啖呵を切る。

その台詞のラストで、それまでキリツと締められてた源さんのネクタイを、源さんがしゅつと抜いて横に振る……原作コミックでは見開き2ページ使つてクソかつこよかつたシーンだった。

あれを源さんが全力で演じてくれんなら、手伝つた甲斐があるつてもんだ。

源さんはこの先三人くらい一気に殺して、百城さんとタイマンで対峙するシーンがある。

源さんの存在感を増しておくのは悪手じゃねえ。

全ては、最後に『一人生き残る主人公』を引き立てる。

監督もその認識を持つてつから、ここで許可を出した面もあるはずだ。

しつかし、源さんは原作を読み込んで、どこが盛り上がるかを分かつてんな。

意外といるんだよなあ。

原作読んでも、原作ファンと同じ視点と感覚が持てねえせいで、いまいち原作ファンを喜ばせられるシーンが分かってねえオッサンとか。

その点、源さんは原作ファンになってからその原作の実写化に出演するっていうタイプだから、一般的なファンが好きなシーンをよく分かってやがる。

そこが感覚的に分かるから、こういう撮影改善案を出せるわけだな。

分かってない人は、こう。

”大コマ使ってるんだからここでファン盛り上がったんだろ?”くらいの浅慮で作品撮ってるじゃねえかと思えるやべー撮り方してたりすんだよな。

しかもこの手の失敗作は、大炎上もせずひっそり興行収入爆死したりしてる。

ちよつと前に俺や百城さんやスターズ入る前の和歌月さんで撮った、セカイ系怪獣映画とかその気配がしてたんだよな所々。

いや、あの映画はそこその出来にはなったとは思うが。

源さんには、熱意がある。

景さんの影響で出て来た熱意かは分からんし、烏山さんの影響で出て来た熱意かもしれん。

この熱意が演技に、ある程度でも反映されれば。

「原作通りにはいきませんよ、源さん。」

あるべきでない場所にあるべきでない台詞入れるわけですからね。

源さんの役者としての解釈が問われ、その表現力が試されると思います」

「承知の上です。やってやりますよ」

「気合いが入ってますね。いいことです」

「原作に媚びてるだけとか言われたくねえんすよ。原作愛の欠片もないバカには！」

源さんがずんずんと進み、カメラの前に立つ。

百城さんが助監督と相談しながら、そんな源さんに立ち位置と動きの指示を出している。

お？ 烏山さんじゃないか。

そのこの木陰にずっといたのか。

じゃあ今の話全部聞いてたんだな。

「あいつ、バカですね。朝風先生」

「烏山さんにそう言われてると知ったら憤死しそうですから言わないでくださいよ……」

烏山さんはさあ、自分が言ったこと全く気にしてねえんだらうけど。

源さんは『原作に媚びるな、実力で勝負しろ』って言われたらずっと覚えてる性格の人なんじゃねえかなあ、アレ。

その後源さんが見せた演技は、俺が今日まで見てきた源さんの演技の中で、最高のものだった。

「ほら、源さんが自分の演技力で、高い実力を見せてますよ」

「? 真咲には原作に媚びず実力で勝負しろと言ってますが……」

真咲のやつに実力がないと思つたことは一度もありませんよ、朝風先生」

「……なんだかなーって感じですよ」

源さんは『実力で勝負しろ』と言われるだけで、実力が低いだとか実力を誤魔化してるとか言われてると、そう思ってるわけ。

その上で、源さんは烏山さんが嫌いではなく、烏山さんは源さんが嫌いではないわけ。

もうお前らずつと喧嘩してろ。

四日目撮影終了。

片付け中、座って荷物をまとめてる俺の横に、景さんが座ってきた。

なんで。

もう休んどけよ。

「英二くん、今日の武光君と真咲君の演技、よくなってなかった？」

ああ、そういうことか。

「間違いなく良くなりましたね。自分以外の俳優の良さってやつを取り込んでました」

「やっぱり」

「アレもライバルって言うんでしょうね」

「ライバル？」

「敵ではありませんよ。」

競い合う同業、ゆえにライバルです。

俳優は皆ライバル同士みたいなものでもあります。

助け合い、競い合い、時には蹴落とすことすら求められます。

俳優は『同じ作品を撮る仲間』と『負けられない相手』が両立することもありますから

「負けられない相手……」

景さんが思案する。

誰かの顔でも思い浮かべてんのかな。

「勝ちたい人がいたら言ってください。」

俺も助力すれば、あるいはそのライバルに勝てることもあるでしょうから」

「――！」

「ひゃっ」

て、手を握られた！ 景さんに！ 不意打ちで！

しまった不意打ちだ！

不意打ちは強え！

とにかく強え！

俺のメンタルが奇襲されたモンゴル軍のごとく混乱の極みに！

綺麗な手だ！

色んなバイトしてきたことで手の皮の一部が厚くて、傷もあって、でも綺麗な手！

落ち着け！

ただのタンパク質だ！ いや、手の中には骨がある、カルシウムがある！

ただのタンパク質じゃねえ！ じゃあ落ち着けねえじゃねえか！

落ち着け、落ち着け。

こんなことで一秒以上思考を混乱させるな。

もう一秒経ったがまだ二秒目がある。

二秒に到達する前に落ち着け、落ち着け。

100%思いつきで行動すんな景さん！

動きが読めなくなるだろ！

こえーよこの子。

「英二くん、ふつふつとやる気が湧いてきたわ。明日は私をかつこよくお願い！」

「え、あ、いや、俺明日と明後日は島出てますからいませんよ」

「えっ」

「えっ、じゃないですよ。スケジュール表に……」

「あ、俺美術監督だから俳優さんに配られた方の予定表には書いてなかったんですけど」
「えっ」

「そ、そんな。ドラ英二もんがいないの……？」

「俺がいなくなってもジャイアンに勝てるくらい頑張るんですよのび太君」

「せ、せめて何か英二くんの秘密道具を置いてって……」

「えー……今手元にあるのって無病息災のお守りくらいですけど、どうぞ」

「わあ、これで病気になるなくて済む……撮影の役には立たなそう」

「俺も今渡してから思いました」

あ、これ俺がおふくろに渡そうとしたけど受け取ってもらえなかったやつだ。まあいいか。

今は俺よりおふくろより、この人に無傷無病でいてほしい。ちよつと、危なつかしすぎるからな。

天才、無才。

有能、無能。

そこそこの期間監督をやってきた僕は、色んなものを見てきた。だから知っている。

感覚やセンスは努力では手に入らない。

でも、計算や戦略は努力しないと身に付かない。

そして、理性面における怪物が努力で身に付けたものは、凡人には達成不可能な努力量が必要であるがために、凡人には決して身に付けられないものだ。

だからこそ。

僕は知っている。

天性のものを多く持つ夜凧景と、努力と膨大な時間で身に付けたものを多く持つ百城千世子は、等しく天才であることを。

何故ならば。

『努力しないで成長する』のが天才じゃない。

『他の人にできないことができる』のが天才だからだ。

「天才だから努力しなくても成長してるんだ」という凡才のやつかみで、どうにもずつと天才というものが誤解されがちだと、僕は思う。

「手塚監督、朝風君の報告メモです」

「ありがとね。彼はもう本土に行った？」

「はい」

情熱と結果は比例しない。

あれはもう、何年も前のことだったか。

僕は初監督作でNGを繰り返して、女優を泣かせたことがあった。

おかげで最高の演技が撮れたが、後日女優の事務所から入ったクレームで、僕は五年間干され……アリサさんのスターズに拾われるまで、何の仕事もできなかった。

映画を撮りたくて入った世界で。

より良い映画を撮ろうと尽力して。

結果、僕は何の映画も撮ることができなくなった五年間があった。

今の僕にある価値は……スターズが、アリサさんが指示した映画を作ることだけだったりするのかもしれない。

後になって、程よく手を抜いた僕の監督映画が大ヒットした。

売れる要素をよく分析して、あてがわれた有名原作と、用意された俳優、用意された脚本に見慣れたプロデューサー、それらを采配して、大成功した。

映画誌が皆して僕を「原作愛と情熱のある監督」と持て囃した。

同じ雑誌で、僕とは違ってちゃんと原作が好きな監督が、ストーリーの破綻やしよぼくれた演出で、原作愛の無い世紀の駄作と叩かれていた。

ファンの反応も、軒並み同じ。

君達の言う情熱はテクニクで代用できるのかな、と、ふと思ってしまった。

その翌年、多くの俳優やプロデューサーがスターズ俳優を使って、結構な大規模映画企画が動き出した。

プロデューサーは熱意で人を集め。

俳優もやる気があり。

監督も脚本も演出も全力だった。

けれども、信じられないくらいに酷評がされ、興行収入も極めて低く終わった。何故か関わりのない僕が苦々しい想いを覚えたことを、覚えている。

現実を見れば分かる。

情熱なんてものは、面と向かって相手に話しても伝わらないことすらある。

観客は情熱で映画を評価しない。

素晴らしい映画か、面白い映画だけしか、評価しないのが当たり前なのさ。

情熱と結果は比例しない。

千世子ちゃんはクールな子だ。

周囲の過剰な熱意を不確定要素と取り、それが度が過ぎないように抑え込む。

夜風ちゃんは無表情が多いが、芝居にかける情熱はとても熱い。

その熱が、僕にも予想できないものをカメラの前で見せてくれる。

けれどもきつと、安全な撮影と安定した映画の作成を徹底するなら、きつと情熱というものは無い方がいいんだろう。

制御できない感情は、いつだって想定外の事故の原因になるから。

千世子ちゃんが映画にかける想いを絶対に揺らがず壊れない『冷たい鋼鉄』と喩えるなら、夜風ちゃんは周囲を熱で変形させていく『燃えるマグマ』だろうか。

朝風二代目なら、また別の解釈をするのかな。

あの二人に対する彼の評価を、少し聞いてみたいとも思う。

ま、それはいつでもできることか。

「こりやまいった。嬉しい誤算と言つていいのやら。」

夜風ちゃんが全力で暴れ続けても、最終日まで危険のきの字もない撮影になりそう
だ」

「いいことじゃないですか、監督」

「かもしれないけどね」

30日の間に夜風ちゃんが千世子ちゃんと共演することは何度かある。

ただ、なんとなく、感覚的に予想できた。

朝風英二と、百城千世子が揃っている限り。

大暴れする夜風景を、監督である僕が最大限に後押ししていても。

最大のクライマックスの最終日まで、夜風ちゃんは千世子ちゃんには敵わない。

「……二人揃つてると監督でもどうにもできない裏方と俳優のコンビって、凄いなえ」

「は？ 何言つてるんですか監督」

「僕が存外、二代目と千世子ちゃんを好きだったって話だよ」

「はあ」

参ったなあ。

千世子ちゃんの仮面を愛してる子がいる、っていうのがもうねえ。

……。

ちよつと楽しくなってきた。

意外と、千世子ちゃんが二代目の力を借りて夜凧ちゃんを飼いなすなんてことも、あつたりするんだらうか。

「カントク」

「あれ、千世子ちゃんどうしたの」

「ロビー大騒ぎだよ。荷物運搬の業者が荷物全部ぶちまけたつて」

「ありやりや、そりや大変だ」

「で、これ誰の持ち物か分からない？」

誰のか分からない持ち物がいっぱい出て、私達で持ち主探してるんだ」

「ちよつと待つて、持ち物は島に来た時に紙に各々書いてもらつてあるから。」

ええとそれは……花の指輪、お守り代わりだつて書いてあるね。夜凧ちゃんのだ」

「……そつか。じゃ、届けてくるね」

リストをチェックしつつ、千世子ちゃんの方を見ないまま僕は答えた。

気遣いもするしマメだなあ。百城千世子らしい。

「監督、英二くんどこ行つたか知つてませんか」

「何？ 夜風ちゃんも荷物ぶちまけ事件で人探してる系？」

「あ、そうです。英二くんなら、この青い花の髪飾り、誰のか分かると思つて」

「あー、それは千世子ちゃんのだね。付けてるの見たことあるよ」

「……え、あ、そうですか」

「英二くんは二日ほど島には歸つてこないよ。東京の方で沢山仕事してもらうからね」

「そうですか……」

念の為リストをチェックしつつ、夜風ちゃんの方を見ないまま僕は答えた。

そうだ、別の話でも、と思つて顔を上げると、千世子ちゃんも夜風ちゃんもいない。

オッサンは若い女の子と話すことでエネルギー貰つてるんだぞー、と心の中だけで呟く。

こんなの口に出したら懲戒免職だ。

セクハラは許されない。

「あー、安定を吹つ飛ばす嵐とか来ないかな」

「やめてくださいよ監督。今普通に台風シーズンなんですから、来たらヤバいですよ」

大丈夫大丈夫、プロデューサーが台風一回来たくらいじゃビクともしないスケジュール組んでるらしいから。

大型台風が狙ったように調整と挽回の利かない撮影終盤になって、二個以上連続で来るとかいうミラクルでもない限り大丈夫らしいから！

デスアイランド：五日目：英一離脱初日

一つ。

たったひとつだけ。

このデスアイランド撮影で、俺が『俳優の仕事に比肩する』と思えるくらいに重要な仕事割り振られてる。

俺は撮影開始前にもかなり進めていたその仕事を一気に進めるため、この二日という時間を与えられていた。

これこそが、俺がこの仕事に採用された最たる理由なのかもしれん。

『造形』の本領。

物を造り撮影の根幹を造る、小を造ることで大と見せる技……ミニチュアの作成。すなわち俺の仕事とは——『デスアイランド作り』だ。

当然のことだが、デスアイランドなんて島はねえ。

だが俺達は、観客にデスアイランドって島があるかのように思わせなきゃならん。

観客は気持ちよく騙されたがってる。

俺達は気持ちよく騙さなきゃならねえ。

だからこそ俺は、小を大にするってことをしなきゃなんねえわけだ。

ミニチュアだと意識すらさせねえデスアイランドのミニチュアを造るなら、全縮尺1/1000で島を隅々まで作らなくちゃならん。

大体縦2m×横3mの島セットだ。

海込みだともっとデカいが。

上から見下ろすようにこのミニチュアを撮影し、デスアイランドという架空の島を実物のように観客の頭に認識させる。

これが、第一の”小を大にする”。

で、現実の南の島で撮影した森での映像、海での映像なんかは、それだけだと『南の島での映像』でしかねえわけだが。

この島のミニチュアを一回でも映しておけば、「あ、この島のここからここに移動していったんだな」というイメージが持ちやすくなる。

転じて、「この島のここでのこのシーンは展開されてるんだな」という、実感を伴うイメージが完成する。

ミニチュアという小さな物を、俳優と撮影セットというやや大きなもののイメージ補正に使うってわけだ。

これが、第二の”小を大にする”。

そして、嘘で観客を騙す。

カメラをズームするような映像編集をして、『空から島に近付いていくカメラが島の片隅にいる登場人物を映す』っていうカメラワークをやる。

あたかもマジで島があつて、そこに人がいるかのように！

ミニチュアを本物の島だと誤認させ、俳優が演技している場所を島の一部だと誤認させ、世界観レベルでの嘘を作る。

後はそうだな。

CMでもこのミニチュアを使いまくって、観客の深層心理に、この視覚的嘘を染み込ませておけばいい感じになりそうだな。

他にも回想シーンの学校セットや、飛行機内に見えるセットでの撮影も組み合わせ、島の中も外も全部『漫画準拠の世界』だと観客に認識させる。

小せえ嘘を組み合わせて、デカイ嘘にして、世界観レベルの大嘘にして、観客が気持ちよく騙されることができるとつけえ虚構にする。

これが、第三の”小を大にする”。

つてなわけで。

俺は最高レベルのミニチュアを、最高レベルの別途成功報酬で依頼されていた。

ちよつとビビるレベルの高評価である。

「おはようございます」

「おはようございます」

俺は挨拶して現場に入る。

ミニチュア作成の現場には、スターズが募集かけて集まった美大の学生さん達と、東京の美術館の学芸員さん達が集まっていた。

まーバイトだな。

一定以上の技術が要される単純労働力だ。

学生さんとは言うが、全員俺より年上である。

大学生はもう大人にしか見えんなあ。俺の目から見ると、だが。

この人らは撮影参加チームとは別だ。

あくまで、別途に集めたバイト。

だから予算もデスアイランド撮影とは別に計上されてる。

その代わり、他のスターズ撮影現場に必要なものも、こっちのチームで作ってる。

なんて言うのが正しいんだろうか。

臨時招集型：スターズ撮影バックアップ美術造形チーム？

俺達物作り分野の人間は俳優とは違い。

撮影開始前から動ける。

俺はデスアイランドに行く前にミニチュアの雛形をここで作っていったし、基本設計書もデジタルとアナログ両方で残していったし、見本も残していった。

この人達が設計書通り、見本通りの物を作ってくれてたらいいんだが。

「朝風さん、今皆を集めてきます。各作業してますので、10分あれば集まります」
「お願いします、チーフ」

現場チーフが人を集めてくれるらしい。

名義上は今はこのチームのトップ俺だからなあ。

こっちの作成にあんま参加できてねえ俺が敬われてると居心地が悪い。
仕事しよう。

ちよつとでも仕事すりや罪悪感が薄まる。

気がする。

「朝風さん、集まりました……何してるんですか」

「模造の木のチェックと選り分け終わりました。

こっちは合格、こっちは失格です。

失格は後で俺が手直しして、また別の撮影に使うと思います」

「え」

「すみません、お手本のミニチュア木と設計図だけ置いて、

『同じもの作ってくれ』

とだけ言つて、島の撮影の方に行つてしまつていて。

この本数の単純作業は皆さんの人数でも結構手間だったでしょう?」

「いえ、それはいいんですが。3000本よく数え終わりましたね」

「こう、模造木の山に手をつ突つ込みます。

突つ込むと同時に五本の指で四本の木を挟みます。

そしてすぐ引きます。引くと同時に木の出来を確認します。

腕を振りながら指を動かして、4本の木の中から出来が悪いものを投げ捨てます。

出来がいいものはこつちに積みみます。

これなら手をつ突き出し、引き、振る。3動作で合計1秒。両手合計なら1秒8本。

10分時間を貰えたので600秒、3000本チェックしてから一服する余裕はあり

ますよ」

「……先生10分あつたらなんでもできそうですね」

「何でもは無理だと思いますけど」

「どうしても“作る”は腕動かさなきゃならねえが、“見る”は要するに光の速度だし

なあ。

手で物作るより、目で出来を見る方が速え。

あー光の速度で手を動かしてえ。

”お前手の器用さより目の良さの方が優秀そうだな”とか言われたらもによりそう
だ。

しっかし皆優秀だなあ、この木の出来を見る限りよ。

「いや、でも大したものですよ。」

正直言つて期待以上です。上に皆さんの給与に色つけておくよう頼んでおきます」

「そ、そうですか？」

「当初の予定だと、現段階では進捗2000本の予定でしたからね。」

でも3000本ありました。手直しが必要そうなものもたつたの500本です。

実は俺、1000本あればいいと思つてたんですよ。

それが完成品2500本です。もう木は作らなくて良いかもしれませんよ、すごいで
す」

「ありがとうございます朝風さん。その言葉が励みになります」

「時給アップに相当する仕事ですとも。」

二日じゃ間に合わないと思つてたんですが……

皆さんほどの能力でこの数が揃つていれば、十分間に合いそうですね」

いやー嬉しい。

デスアイランドに数人連れて行きてえくらいだ。

でもそうすると宿泊費とかの計上が面倒臭そうだ……無念。

「皆さんが優秀でとても助かります。」

少し余裕が出来た分の時間で礼に何かしますよ。何が良いですか？

「スケジュール前倒しでいいんじゃないでしょうか」

「じゃあ後で皆で飯食いに行きましょう、朝風さんの奢りで。なーんて」

「後で私のイラストとか見てくださいい！」

「はい、了承しました。では細かい進捗確認しましょうか」

と、俺が進行しようとする。

「こつちにまとめたいだよ」

「はいありが………終さん!？」

「おはよ、エージくん」

「あ、はい、おはようございます。……あれ、大黒天の受け持ちでしたっけこれ？」

「ピンチヒッターだね。」

来てるのは私だけだよ。墨字さんは来てない。

スタジオ大黒天は今ちよつと、かなり危険な財政難に苛まれててね」

「……ああ。本来の制作会社に仕事代わってもらったんですか」

「その通り。悲しい私の出稼ぎです」

「おつらいですね……でも、心強いです。柗さんの撮影なら百人力ですよ」

予想外なところで少し不安だった要素が補われた。

俺が作る。

柗さんが撮る。

パーフェクトだ。

俺が上手く作ってもカメラ周りがへボだと必要な映像が全く用意できねえが、柗さんが来てくれたならもはや隙はねえ。

勝ったな！

「あ、そうだ。けいちちゃんはどう？」

「元気にやっていますよ。」

成長率も凄まじいです。

もう安心していいと思います。

あとは多分、俺が全力フォロワーすれば……って段階ですから」

「そうなんだ。よかったあ」

「なんだか、すっかりお姉ちゃんですね」

「そ、そう？」

「優しいお姉ちゃん感ありますよ。」

「ずっと自分の方が姉をやっていた景さんには新鮮なんじゃないですか？」

「どうだろ。けいちゃんとおんまりそういう話しないから」

「俺には露骨に姉ぶってたことあるのに、景さん相手に尻込みする理由無いでしょ」

「あ、あれは……エージくんがしょんぼりしてたから」

「なら景さんがしょんぼりしてた時も同じようにしてあげてください。」

あ、いや、特に何か考える必要もないかもです。

いつも通りの柵さんなら……少なくとも俺は、話しかけてもらえて嬉しかったので
気遣われるのは、心が暖かくなるからな。

スタジオ大黒天で、年上と仕事で絡む景さんを俺は見た。

デスアイランドで、同年代と仕事で絡む景さんを俺は見た。

見比べた俺には分かる。

親がいない景さんにとって、友達と放課後に遊ぶ時間も惜しんでバイトして弟妹を
養ってきた景さんにとって、その二つは大分違い。

年上に甘えられる仕事場と、同年代との気安い仕事場つてのは違いんだ。

どつちが上かとか、そういう話じゃなく。

「ずっと”姉でいるしかなかった”景さんに対し『面倒見のいいお姉ちゃん』みたいに

振る舞ってくれる同事務所身内って、この人しかいねえんだよなあ。

「仕事場にいいお姉ちゃんがいるってのは、景さんにとつていいことなんですよ、きつと」

柘さんは頬を搔いて、照れ臭そうに笑う。

「けいちゃん泣かせちゃダメだよ、エージくん」

分かつてるって。

ヒゲのオツサンと美人のお姉さんがいる事務所から景さんが離れてる間は、俺が気を遣う。

ダチだからな。絶対に守るさ。

「もちろんです。景さんを泣かせるいかなる要素からも、俺が守ってみせます」

「……まあいいや。いい、エージくん、けいちゃんを泣かせちゃ駄目なんだよ」

「はい」

何か台詞を飲み込んだ感じがした。

今、柘さんがなんかの台詞を飲み込んだ。

え、なんだ。

”俺に言ったら何かがもつと悪化しそう”みたいな台詞がなんかあったのか？

それとも俺を傷付ける台詞か。

何にせよ言わない方がいいって終さんは思ったわけだよな。

えー、なんだよ。

「泣かれると本当困りますからね。」

本当に困るのは、女優は嘘泣きくらいならお手の物なんだってことですが」

「エージくんは墨字さんをほんのちよつとくらいは見習い……やっぱ見習わなくていいや」

「ひんぐ」

会話しつつ、ささつとお互いの認識を共有する。

気心知れた相手だと、業務連絡はより速く、より楽に、より正確になるもんだ。

終さんがいてくれて、すっげー助かる。

俺は、現地での撮影状況や何かしらの変更を伝える。

それによって、ミニチュアの予定完成図にも少し調整が入ることが、終さん達に伝わ
る。

俺は終さんの報告を聞く。

そしてその報告を元に、多少なりとスケジュールを調整する。

一番やらかしちやならねえのは、例えば、撮影現地の調整や思いつきでアクションが撮影された広く長い道が、ミニチュアの島の方には存在しない……とかの齟齬と差異

だ。

報告、連絡、相談。これはどこまでも徹底的にやんねえとな。

あ、手塚監督と百城さんからLINE来てる。

返信しねえと。

柗さんに断つてから、二人からのメッセージを確認する。

『この辺予定より予算抑えられないかな?』

監督からのメッセージ。

僅かに質が落ちますよ、と返信しておく。

『夜風さんって大切なものとか執着してるものとかある?』

こっちは百城さんだ。

お、良かった。俺がない間に少しは仲良くなれてるっぽいなこれ。

好きなもの聞くつてことはそういうことだ。

美味しい食べ物とか好きみたいですよ、前に俺が作ったお菓子の城とか好評でした

し、と送信しておく。

『英二くんは夜風さんが私的に好きなものとかよく知ってるんだね』

そりゃお互い大事な友人ですしね、と返信。

『ありがとう』

百城さんからの返信が来て、仕事に入ったのかそれっきりだった。

手塚監督との連絡も終え、終さんとの仕事の話に戻る。

「このCM用の絵コンテだけどき、これならこういう海の作り方にしない方がいいかも」

「どういうことですか？ 終さん」

「海の光の反射率上げてき、南の島感を出すんだよ。」

後は、カメラは定点固定じゃなくて、島の周りを回るようにしよう。

島の全景を360°から映す感じにして。

エージくんの腕なら、どの角度から見ても質は一定以上でしょ？」

「それは、そうですね」

「でもやっぱり、ミニチュアはミニチュアだからね。」

カメラ一箇所固定だと島に違和感持つプロ寄りの人はいるよ。

だから、作り物の海の反射率を上げて、輝かせて、僅かに目を眩ませる。

カメラを動かして一点を注視できなくさせる。

こうした方が、よりミニチュアが本物の島っぽく見えるんじゃないかな」

「！ 確かに」

「島の周りをカメラ円周させて、1周5秒パターンと1周10秒パターンで撮ってみよっか、後で」

なるほど。良い案だ。

俺がよく考えてる”作り方”の妙案じゃねえ、”撮り方”視点での妙案だな。

海の粗を隠す、キラキラの海か。

「エージくんはリアリティとクオリティを思いつきり上げる人だからね。

そつちに集中していいよ。

”いい塩梅に細かいところを見えなくする”ってジャンルの方は、私がやつとくから」

「助かります」

「映像編集もこつちが受け持つから。

……というか、今日と明日、エージくんがやる予定の仕事多すぎじゃない……?」

「後で不都合が起きた時のため、早めに色々終わらせておきたいんです」

「仕事人の鑑……! でもやっぱこれ流石に無茶だつて!」

「いつものことです。無茶振りこそが特撮撮影現場の日常ですよ!」

「思わず私も姉ぶつて仕事止めてやろうかと思うレベルだよこれ!」

「いつまでも弟みたいに扱わないでください。

自分の限界や体力残量を認識する能力はしっかり身に付いてますから」

チーフも呼び、色々と仕事の算段をつける。

んで、俺は仕事に入った。

とりあえずは海からだな。

海。

それはかつて、特撮の凄まじさの代名詞だったもの。

そして今は、特撮のかつての凄まじさと、現代の技術の素晴らしさを示すものになった。

昔々。

特撮の神様・棘谷英二達が作った海戦のミニチュアは、あまりにもリアルだったために、GHQに「いやこれは本物の海戦撮った記録映像だろう」と検閲されたという文庫の「円谷英二の言葉―ゴジラとウルトラマンを作った男の173の金言」にて、棘谷で技術を学んだ一人である映画監督・左田昌万さんが語っている。ちなみに左田さんのテレビデビュー作は『電光超人グリッドマン』。

俺の名前の元ネタの神様はすげーな。

寒天を敷き詰め、表面を加工して波などがあるように見せかけるその技術はあまりにも画期的なもので、当時の映画界隈に大きな影響を与えたそうだが。

これも、当時の映画だからこそ通用した手法なんだよな。

その頃と違って、もうカメラはカラーになった。高画質になった。だもんで、昔のままの技術だと粗が見えちまうようになったんだな。まず波。

海の表面で波が動いてるように見えねえとアウト。

次に質感。

プールとかに小さな船を浮かべても、海に本物の船を浮かべた時とはなんか違う。

で、総じて言えるのが、水の張力などに由来する『本物っぽさ』。

これが一番厄介だ。

水は張力とかの関係で、水の粒の大きさがいくつかの種類と同じ形にしかならねえ。

リアルにするなら、小さな人形の体の表面に着く水滴と、人間の体の表面に着く水滴と、デケえビルの表面に着く水滴の大きさは、同じじやなきやいけねえ。

現実ならそうなるからだ。

だから小さな人形がミニチュアのビルを壊すシーンを、雨の中って設定でやると、水滴の大きさでくっそバレやすくなるわけだな。

こういう張力などの水の形質は、波にも出る。

プールに波立てて撮影して、海を撮影したものと見比べりゃいい。

波の質が全然違え。

プールに精巧な玩具の船浮かべて撮影したのと、海に本物の船浮かべて撮影したのじゃ、海への沈み込み具合・水面での揺れ方・海面の光の見え方が何か違うんだよな。

『海』は、小さくすればするほどに本物っぽさが失われていく。

船はまるで木の葉みてえになっていく。

海は広大さも奥深さも失われていく。

いくら試行錯誤してもそうだった。

だから、棘谷英二のお孫さんは、いくら試行錯誤してもこの問題を完璧に解決できねえ祖父を見て、日経カレッジカフェのインタビュにてこう表現した。

——『火』と『水』だけはミニチュアにできない。

まさに、大問題ってやつだ。

だが、デスアイランドが海の上で浮かぶ島である以上、俺は海を模した偽物の現実を最高レベルで作らなくちゃならねえ。

この映画を、成功させるために。

海外の有名映画だと、最高レベルのCGで海を作ってる。

もはや人間の目じゃ見破れねえ……が。

高い。

無茶苦茶に高い。

高い技能を持つてる人間を長期拘束して作らせるから、めっちゃ金がかかるんだよな。

例えば『GODZILLA』2014年ハリウッド大名作映画。多くのジャンルのファンの需要を満たした。怪獣VS怪獣、怪獣の足元で逃げ惑う人間の意地、画作りから世界観まで、全てを極大のスケールで作り上げた。なら制作費170億円以上、『パシフィック・リム』2013年ハリウッド大名作映画。多くのジャンルのファンの需要を満たした。怪獣VS巨大ロボ、人類に残された数えられるほどの生存圏、数えるほどしかない巨大ロボという希望、迫り来る怪獣達、最後の防衛戦から奇跡の反攻戦。絶望的でも諦めない物語。なら制作費は200億円にも迫る……なんだこの金額！

「デスアイランドの制作予算6億だつてめっちゃ多いんだぞ！
分かってんのか!？」

「こんな金は出せねえわ、流石に。」

「だからミニチュアで、高くなりすぎねえように作らねえとな。
さて。」

「ここで考えるのは、現実とミニチュアの違いを意識する、つてことだ。」

「答えはミニチュア風写真、つていうジャンルにある。」

「10年くらい前に写真好きの間でガツと流行ったヤツだな。」

今だと、チルトシフト写真とか言うんだっけか？

現実の風景を特殊なカメラで撮る、あるいは撮った写真を少し加工することで、現実の風景をあたかもミニチュアのように見せかける、ってジャンルだな。

写真家やデザイナーが時々これをやってる。

俺が普段やつてるミニチュアを本物に見せるっての逆をやってるってわけだ。

写真の上下などをぼかし、写真に通常の風景じやありえねえ歪みを作ること、人間の脳を騙して現実の風景をミニチュアに見せかける。

そいつがミニチュア風写真だ。

俺の仕事と、ミニチュア風写真の仕事。

ここに共通点を探す。

すると見つかるのが、『視差』、『被写界深度』、『脳内情報』の三点だ。

まず、視差。

人間の目は右目と左目で違うものを見る。

なんで、右手側にある物と左手側にある物、近くの物と遠くの物を見る時じや、左右の目に見えてる風景に差異が出て来るわけで……これで人間は、遠くの風景・近くのミニチュア・眼前の写真などを見分けられる。

ここを意識して映像を作り、錯覚させれば、実際の映像に見えやすくなる。

次に被写界深度。

視差の時にもあつた、”遠くと近くのものを見分ける”目の機能の、メイン機能みてえなもん……つて言うのと正しいんだらうか？

人間の目はレンズだ。

だから、『街の風景』を遠くから眺めると、風景全体にぼんやりピントが合う。

なので街全体を見られるが、街の片隅で人が転んだりしても気付かぬえ。

『街の風景の写真』を見ると、手元の小さな写真だけにピントが合う。

だから街を注視して見られるが、写真が置いてある机の汚れには気付かぬえ。

遠くを大まかに見る時と、近くの一つのものを集中して見る時で、人間の目は全然違

う動きをするため、『遠くの風景っぽい写真』と『目の前のミニチュアを撮ったっぽい写

真』つてのは、写真加工・ミニチュア加工・視覚情報加工で作り分けることができるつ

てえわけだ。

で、脳内情報。

人間は頭の中に情報を持つてる。

”これはこのくらいの大きさなんだ”つて認識を持つてる。

ゴジラがビルを壊すシーンを入れる。

すると、”ゴジラはビルより大きいんだな”と脳が錯覚する。

人間が怪獣を見上げるシーンを入れる。

すると、”怪獣はこんなにも大きいんだ”と脳が錯覚する。

映画『ULTRAMAN』とか凄えぜ。

1 / 2サイズのセットで、身長166cmの岩木さん（スーツアクター）が入ってる怪獣を歩かせ、身長3m強の怪獣に見せかけ、脳を錯覚させたり。

1 / 5スタジアムセットを作って、そこでスーツアクターが中に入ったウルトラマンと怪獣を戦わせ、10m規模でのウルトラマンVS怪獣だと見せかけ、脳を錯覚させたり。

完成した映像ではマジでそのサイズの怪獣達に見えるからたまげるわ。

『これはこういうサイズなんだ』っていう脳内情報が生む錯覚を使うからこそ、ウルトラマンやゴジラなどの巨大特撮は作れるってわけだ。

この三つを意識し、ミニチュアを本物の風景に見せる。

だが今回、俺は撮り方分野ではこういうのをあんま考えなくていい。

本物に見えるミニチュアの作り方だけ考えて、本物に見える撮り方は終さんの方に任せときゃあいいからだ。

らつくうー。

クツソ楽。

ありがとう佟さん。

一緒の仕事やっているとホント助かるっすわ。

「佟さん、とりあえず第一方針です。

加工樹脂で海の表面を作ります。

後でミニチュアに海をはめ込みますので、そのつもりでお願いします」

「うん、わかった。カメラの方を動かして、海が動いてるように見せかける、でいいのかな」

「ですね。カメラが島を映しながら、島の周りをぐるりと回る。

カメラがかなりの速さで回転すれば、撮影範囲内で海も相対的に動いて見えます。

後は俺の腕の見せ所でしょうか。

波の形を工夫して、カメラが動いてるだけなのに海面で波が動いてるように見せかけます」

仕事仕事。

あ、またLINE。

助監督と景さんだ。

『手塚監督が何か考えてるか聞いてません?』

ぼちぼち助監督あたりも違和感強まってきたか。

まあ景さんがあれで、監督がそれに肯定的だとなあ。

……この助監督は監督に逆らうほどの度胸はねえ。

変につつついても監督の隠した目的の味方が増えるだけで、監督の狙いに利するだけか。

何も言わんでおこう。

何も知りません、と。

『英二くん、千代子ちゃんのお誕生日にお菓子のお城送ったって本当？』

お。

なんだ、地味に仲良くなってるみたいだな。

百城さんが景さんにあれのことを話すとは。

いや、俺としても多くの西洋城を組み合わせた『城』のケーキを『百城』さんの誕生日に贈るとか、芸がねえとは思ったけどな。

その分造形の芸を込めた。

百城さんに洋式の城ケーキ作って、景さんに初めて作った和式お菓子の城贈って、あれでようやく菓子造形もののコツを掴んだったっけなあ。懐かしい。

『写真見せてもらったけど、あの時見たお菓子のお城より立派だったわ』

そりゃ百城さんの誕生日だし思いっきり時間もかけて気合いも入れますよ、と返信。

すっかり誕生日の話をするくらいの中にはなったか。

もうそろそろ友人か、それとももう友人か。

次の百城さんか景さんの誕生日にはまた新作お城ケーキでも作ってやるかな。

友人同士一緒に食べればほんわかった空気になりそうだ。

『千代子ちゃんが好きなものって何かある？』

最近お前らの間でそれ流行ってんの？

いや、でも、そうか。

百城さんは撮影を円滑にするため、景さんは百城さんの友達役を演じるため、友達関係があった方が楽だしな。

それなら、相手の好きなものを知るのが一番だ。

悪くねえ手だぜ。

そういえば。

百城さんは子供の頃、現実から逃げるために好きな映画に没頭してたって聞いたことがあるな。

断片的な話でしかねえが。

そこは、景さんと同じだな。

景さんも好きな映画に没頭して、現実逃避からあの技能を身に付けたんだ。

そういう意味じゃ百城さんと景さんは、同じ気持ちと同じ過去から生まれた、正反対の二極化した俳優なのかもしれないねえな。

二人とも、一時期は現実の世界より映画の世界に行きたがってたはずだ。

『映画好き』。

これだな。

二人の話もここでピッタリ合うだろ。

送信送信。

『映画が好きなんだ、千世子ちゃん』

そうですとも。送信。

『何が好きなんだろう』

花とアリス短編フィルム・長編フィルム・漫画・前日譚映画など、多くの作品展開がされた隠れた人気作品。西映との繋がりがとても深い。この場合は2004年の長編映画。『嘘つきの女の子』と『嘘をついていない女の子』の二人を軸に、嘘つきの女の子が嘘で一目惚れした年上の男の子の気を引こうとするものの、男の子は嘘をついていない子の方に惹かれていって……というストーリー。とても暖かに終わる作品。とかだった気がしますね、と送信。

『見たことあるわ。嘘つきの女の子が男の子に一目惚れする、ちよつとややこしい話』

荒井花と有栖川徹子の花とアリスコンビが、ちよつとややこしいながらもいいコンビで、見てて楽しくなりますよね。と送信。

俺の個人的な想像だけど、あれ作中の登場人物の選択次第で、女の子のどっちがあの子の子とくつついてもおかしくなかったよなあ。

『ありがとう英二くん。』

千世子ちゃんは怖いけど、友達にならないと役が作れないから、頑張る』
どういたしまして、つてな感じに送信。

『芝居って大変ね』

ん？ と思った俺の指が止まると、数秒後に続けてメッセージ。

『私の中にこんな私がいるなんて、思ったこともなかったわ。ありがとう』

それを最後に、景さんのメッセージは止まった。

また新しい自分でも見つけたのか？

いいことだ。

景さんはそういうことを繰り返せば繰り返すほど、役の幅がぐつと広がる人だからな。

さて仕事仕事。

パツパツと造形を進めていくと、またLINE。

今度は堂上さんかよ。

『お前いつ帰ってくる?』

今日がデスアイランド撮影五日目で、明日も俺は島に戻らず、七日目に戻ると返信。つて、まただよ。

今度は誰だ。

あ、亜門二葉さん。双子の弟だけがメツセージとは地味に珍しい。

『アサつちいつ帰ってくる?』

まーたかよ!

同じ内容には同じ返信でいいや。

堂上さんにしたのと同じ返信をする。

『うちの姉、撮影予定明後日まで無いけど、服破つちやつたみたいで』

えー、マジかよ。

じゃあ戻ってすぐに直す……いやこっちの現場に送ってもらって仕事の合間に俺が直して、すぐデスアイランドに送り返すか?

いや。そこまで急ぐ理由はねえな。

無茶に仕事詰めなくていい。

今は、二日でこっちの仕事を終わらせてからだ。

だからこつちに集中して集中してつてまたかよ！

一時間前に二葉さんに返信したばつかだぞ！

誰だ！

つまんねえ用ならぶつ殺すぞ！ 許さんぞ！

あ、アキラ君。

まあいい。

許してやろう。

『朝風君、仕事延長する予定があつたりしない？』

大丈夫だよ、こつちは心配要らないから。

いたつて順調だから、そういう予定があれば焦つて帰つて来なくてもいいよ』

なーに言つてんだこいつ。

明後日帰りますよ、と返信。

アキラ君達に何かお土産……差し入れ買つてくか。東京ばな奈とか。

食えるもんがいいよな。

30個以上入つて皆で分けられるお菓子とかだつたら最高だ。

もう日が暮れる。

夜になる。黙々と仕事を続けて、就業時間を終えて帰つていく人達を見送る。

時計の短針と長針が同時に12の数字を指して、電子時計の日付が変わった。
デスアイランド撮影、五日目終了、って感じかね。
あー、今頃皆何やってんだろ。

デスアイランド：六日目：英二離脱二日目

さてデスアイランドスケジュールで言うところの六日目、朝八時。

昨日から大体24時間作業機に向かいっぱなしなことになる。

全力を尽くしフルの集中力と、フルの肉体稼働率を維持してたせいで、結構体がガタガタになってきた。

普段は仮眠や休憩を挟むんだが、ちつと気合いを入れすぎたかな。

今日中に一度しっかり寝ところ。

かなり消耗が激しい。

使いすぎた金属はへろへろになって、折れやすく千切れやすくなるもんだ。

仕事キリいいとこまで進んだら休憩室で寝かせてもらおう。

何かあつたらすぐ起こしてくれて周りに言つてからな。

あ、石垣さんからLINEだ。

どうしたデスアイランド俳優最年長。

何かあつたのか。

『朝風君、ヤンキー漫画読んでことあるかい？』

服の下に雑誌を入れて包丁に刺されても腹を守るようにしてたりね。

フフフ、あれ漫画の絵にも映えるし結構いいよね。腹を守るのが特にいい』
どうしたんですか、と返信。

いや本当にどうした。

『いや、こっちで特に何かあったわけじゃないけどね。

ただ包丁防ぐにはそういう有効な手段もあるよ、とアドバイスさ』

ありがとさん。

よく分かんねえけど何かアドバイスされてんな俺。

でも刃物物ならアラミド繊維の服で防いだりとかした方が良さそうですね、と送信。

間髪入れず、特救指令ソルブレイン1991年放送開始、メタルヒーローシリーズ。警視庁の救急所属のヒーロー、という、当時着目されていた救急や消防にヒーロー要素を足す形式の特撮。スーツ造形は独特で、未だに熱烈に支持しているファンも多い。スーツの素材は普通に通気性と重量を考慮した布だが、特撮番組の設定としては、アラミド繊維を使った戦闘服を使っていることになっている。のアラミド繊維防弾チョッキの材料。銃弾もナイフもガンガン防ぐ頼れるヤツ。アラミド繊維の材料費は、手袋を作る程度なら千円、服一着を作るなら一万円は欲しいところ。逆に言えば、たとえば二股かけた男が女性から包丁で刺されても無事に終われるような服を作るには、余裕を

持つて二万円あれば十分作ることができる。ですよ、と追記も送信。アラミド繊維はいいぞ。

こいつで作ったロシアのコンバットスーツとかは、特撮でよくやる爆発のど真ん中に人放り込むとかやっても、中の人無傷だったくらいだぜ！

リアル特撮ができるレベルだ！

俺はやらねえがな。

つか周りがやろうとしたら止めるわ。

これでリアル特撮やんのはちと怖すぎる。

『朝風君はそうそう死にそうにないね、フッフ』

いえいえ俺そんな頑丈でもないですよ、と返信。

ついでに島で俺がいない間に仲良くなってるっぽい人がいるかどうか、聞いてみた。

『最近は和歌月ちゃんと堂上君が仲良さげだね』

うーん、百城さんと景さんは目につくほどじゃねえか。

あるいはどつかで何かが噛み合わなくて仲良くなるのに失敗したか。

早めに帰りにえなあ。

心配になってきた。

ダチを傍で助けてやりてえ。

とは思うものの、二日で島ミニチュア完成つてのもかなりギリギリのラインだし早く帰るなんてどだい無理な話だ。

俺がいなくて大丈夫ですかと、つい遠回しに石垣さんに聞いちまう。

石垣さんと柘さんは同じ年だから、俺も無意識の内に、同じように年上として頼っちゃまつてるのかもしれないな。

俺もさつさとハタチになりてえや。

『大丈夫とは言えないかな。君がいないと、ほら。

やる気が消える人増える人、寂しさで闘志が増える人減る人、色々いるから』

ほー。

なんかむず痒いな。

『ほら。君が居ない間頑張ろうって人とか。

君が居ないと仕事で融通利かせてもらえないからやる気減ってる人とか』

ふむふむ。

『あと、堂上くんもずつといるね。撮影で島抜けることもあるけどずつといるよ』

それは割と本気でなんで？ なんであの人帰ってねえの？

まあいいか。

もうちよい詳しく、皆が大丈夫かどうかを掘り下げて聞いてみる。

『でも君が心配するほどじゃない。皆、プロだからね。一線は守るよ』

少し、安心した。

色んな人から多角的な意見を貰ってまとめるのがやっぱ大事だよな。

そういうのが結局、一番『一般的』で正解に近い解答になる。

集団の強みだわ。

『今、問題になりそうなのは夜風ちゃん周りの派閥形成かな』

ほほう。

景さんの才覚と芝居に惹かれてる人が増えてきてるのは分かってたが、石垣さんの目から見てもそう見えるか。

じゃあもうこれスターズ俳優が共通で持つてる危機感なんじゃねえの？

気になるな。

もうちよつと聞いてみるか。

俺が居ない時に景さん周りに問題が出るようなら、百城さんとかにフォロワー頼まなくちゃならなくなる。

『スターズ俳優の多くは夜風ちゃんに大なり小なり悪い印象を持つてると思うよ、フフ』

やっぱか。

アキラ君と百城さんくらいか、景さんの味方になってくれそうなのは。

和歌月さんは景さんの味方ってわけじゃねえし、景さんを芝居で超えてやろうって気概が伝わるが、景さんの悪口は許さねえっていうベジータ。

堂上さんは夜風景なんて認めんぞっていうベジータ。

アキラさんは景さんの能力に憧れてるけど敵わないと内心気付いてるベジータ。

百城さんは対等のライバルとして競い合うベジータだな。

どこもかしこもベジータベジータ。

生い茂るベジータ祭り。まさにベジータの森だ。

『さらばだブルマ、トランクス』とかここだけ台詞切り取ると下着泥棒みてえだな。

ドラゴンボールは西映のアニメだから、意外と西映特撮と人材の交流があるんだよなあ。アニメでも特撮でもノリが同じな音楽分野は特に。

俺の場合は実物造形だからあんま仕事で関わりねえけど。

石垣さんに、じゃあスターズ俳優の皆さんと景さんの間取り持たないといけなそうですすね、と送信。

『ただこれもそんなに問題無い気がするね。スターズのオールアップはもう始まつてるから』

あー。

石垣さんはそう読んでんのか。

スターズはオールアップを迎えた端から撮影を離脱していく予定だ。

堂上さんとかもうオールアップ迎えてるのにまだ島にいるが、あの人は……スターズでも個人的（婉曲的表現）だから例外として。

”破天荒な俳優にスケジュール狂わされたくない”スターズ組からの悪感情があつても、スターズ組が抜けてくなら、結果的に景さんへの悪感情は減っていく。

デスアイランドの撮影形式が、幸運にも景さんの味方してやがるのか。

『千世子ちゃんが表立った喧嘩はしないようにしてるからね。

スターズの反夜風みたいな子達が抜けていけば、自然と夜風派が多数派になるんじゃない？』

時間は俺達に味方してくれてるわけだな。

アキラ君あたりを頼るか？

一番不安定くさい景さん周りと、俳優で一番負担が大きそうな百城さん。

この辺気遣ってもらうか？

百城さんにストレスを与える人、景さんにストレスを与える人を、あの二人のために遠ざけてもらうとか？ そんな奴が今いるか知らんけど。

……でもそうするとアキラ君の負担も増えねえかな。

そういうのはあんまよろしくねえ。

困るとついアキラ君を頼る心持ちになっちゃうのは俺の悪い癖だな。

アキラ君の負担も計算して色々考えねえと。

撮影は一人でやってんじやねえんだ。

特別な奴だけいければそれでいいわけじやねえんだ。

俳優全員に気持ちよく撮影を終えてほしいもんだぜ。

『千世子ちゃんは何考えてるか全く読めないんだよね。

ちよつとでも読める朝風君が結構な特別なんだよ、フッフ』

読めねえよなあ。

でも信じられる。

だからそれでいいんじゃないかな。

『これで君が女の子の心の機微においても優秀だったらなあ。苦勞しないのに』

難しいですよね、と凄まじい速さで文字打ち込んで送信しちゃった。

『ほどほどでいいのさ、ほどほどで。』

女の子だって分かってほしい心とそうでない心もあるだろうから。

第一内心を隠してるのが女の子の意志なら、それを正確に知る方が失礼じゃない？』

うっわおっとなー。

スターズ俳優はスキャンダル避けるために恋愛事案も避けるって人が結構多い——
避けない人は隠す——が、この人恋愛経験ありそうな雰囲気がある。

これで雰囲気があるだけで適当なことほざいてるだけだったらどうしよう。

それ信じたら俺もかなりバカみたいだが。

『後で代金払うから酒のおつまみのピスタチオ買ってきて』

なんだかなーもう！

石垣さんも終さんも今年から20歳になったからって、今年になってハタチになつてからナチュラルに酒飲み始めやがってよオ！

時々疎外感覚えるだろうが！

六日目昼。

店屋物主に飲食店に頼んだ出前のこと。撮影所の近くに安くて美味しい出前してくれる店があると多用される。ホカホカの飯が届いてよろしい。ただしテレビ撮影などの場合は基本、ロケ弁という安い・そこそこ美味い・一気に沢山頼める弁当が人数分注文されるのが慣例。英二のこの現場がロケ弁を頼んでいないのは、デスアイランド制作費

内訳にこの食費を含めず、かつ食事代を経費として上に回すため。が並ぶテーブルを挟んで、俺は終さんと向き合って飯を食っていた。

俺が頼んだカツ丼定食セットがとても美味い。

分厚いなこのカツ。

卵と甘いソースがよくカツに染みてやがるぜ。

昔の映画年鑑とか見りやちよこ書いてあるが1953年版キネマ旬報社出版『映画年鑑』29ページ目など。昔の本の制作費は当事者が残した情報でありながら間違っていることがあるため、別書籍にて数値が修正されたものが転載されていたりする。昔の映画って接待費も堂々と制作費の中に計上してあんだよな……凄え世界だぜ。

まー映画売るための接待だしな。

ここに計上しなくてどこに計上すんだって言われたら少し返答に迷うが。ともかく。

映画作りしてる人達の飯代を会社側が出すのは筋つてもんだ。

遠慮なく食って計上すりゃいい。

でも高え飯を頼むのは少し気が引ける。

高くて1000円から1500円の間で収めてえとこだ。

理想は500円から1000円だけだな！

一般人の人は大して気にしてねえけど、ロケ弁の値上がりとか結構死活問題だぞ……クソあ……俺の腕でどうにもならねえところで制作費高騰の原因出来やがって……!

弁当1個50円値上がりされたらスタッフ40人で2000円上昇、三食用意する撮影だと6000円上昇、30日スケジュールだと仮定すると最低18万円の上昇だぞ……おのれ。

18万ありやそこそこの特撮スーツ一個作れそうだぞ。

近年はちよくちよく弁当が値上がりしてて困る。

そんなことを思いながら、柘さんの見てる前でカツを頬張った。

うまい。

「そういえば自分の家いつ帰るの、エージくん」

「俺が帰るのはデスアイランドですよ」

「つまり、この二日はここで寝泊まりすると。通りで朝早くから現場にいるわけだ」

「シャワーもあるんですよ。俳優のみだしなみ整えるために」

「んもー」

柘さんが呆れた顔をする。

いやすんません。

でもしょうがねえんだよ。

俺は元々、東京で一睡する予定もねえんだ。

東京で活動できんのは二日しかねえが、理想的に撮影を進めるならこの二日でCM撮影に使えるだけのミニチュアは、絶対に完成させとかなきゃならねえんだ。

スターズの超大作ともなりや、早けりや公開の一年前から配給と劇場に予告映像トレジャーを入れることを要求されることもあるし、ミニチュアも相応に早く作つとかなきゃならねえ。

デスアイランドの場合、公開の半年前にはトレーラーを納入する予定になつてる。

となるとミニチュアも早く作らなきゃならねえわけだ。

このスケジュールは、デスアイランド本撮影分……つまり一ヶ月分後に食い込んだらかなり渋い顔をされるレベルだと言つていい。

だから、この二日できりあえずでも完成させとかなきゃいかねえんだよ。

東京行きの船で寝て、二日寝ずにミニチュア作成、島行きの船で寝る。

これが俺のパーフェクトプランだ。

睡眠時間は移動中に確保する。

ただ作業に夢中になりすぎて、食事も後に回してた俺が、終さんにとつちやどうにも腹立たしかつたらしい。

怒られた。

座らされた。

で、飯を選ばされて、奢ってもらっちゃった。

嬉しいが、大変申し訳ねえ。

「ご飯くらいちゃんと食べなよ」

「すみません、ありがとうございます」

「無理矢理連れて来ちゃったから、私の方が謝らないといけなそうだけどね」

「飯食うの忘れてた俺が悪いんですよ」

俺のはカツ丼定食セットなんで、サラダとスープとデザートがおまけについてきた。

……：そういや、柘さんは甘いものとネバネバしたものが好きだったか。

いやもうすっかりうろ覚えだな。

ええいままよ。

柘さんが要らねえなら要らねえでいいや。

「柘さん、デザート要りますか？ 杏仁豆腐みたいですけど」

「わ、いいの？ じゃあ貰おうかな。ありがとっ」

「あはは、柘さんの奢りなんですから、お礼言われることはありませんよ」

「なんか前にも似たようなことあったねえ。あの時は私がチョコ貰ったんだっけ」

「ああ、そういえば、そんなこともありました」

「エージくん、食べ物も他人と分け合おうの、もしかして好きだったりする？」
「特にそういうことは無かったと思いますけど」

ただ……こうして、他人と一緒に飯食うのは好きだ。そこは否定しねえよ。
だって、家族みたいで楽しいだろ？

「じゃあお礼にこのアンコウ揚げあげる」

「ありがとうございます。あ、美味しい」

揚げアンコウ定食セットとかおもしろーもん頼んだよなこの人。
美味い。

深海魚ってあんなグロいのになんでこんな美味しいのか。

いや、美味いから食われねえためにグロい見かけしてんのか？

グッピーとかアロワナとかニシキゴイとかちよつと美味そうだもんな。

「そういうえば、アンコウってあんまり深海魚じゃないらしいですね」

「え、そうなの？」

「市場に一番流通してるのはキアンコウって言うらしいです。」

水族館の深海コーナーにいるやつですね。

コイツに発信機を付けたところ、一年のほとんどは深海でなく浅い海にいたそうなんです」

「へえ。深海魚じゃないじゃん」

「『アンコウ』と言えば深海魚ですからね……」

でも店で食べるアンコウは大体深海魚じゃないわけです。

それどころか水族館にいる自称深海魚の大嘘アンコウ野郎も深海魚じゃないわけ
です」

「深海魚とは一体……」

「ほら、いるじゃないですか。」

バラエティとかで『元スターズ』だけが売りみたいなき芸人さん」

「あーいるいる。」

それしか誇るものないの？ って時々思うね私。

元スターズのイケメンとか中身ないなあ、って印象受けちゃうともう好きになれない
わ」

「アレと同じなんじゃないでしょうか」

「『深海魚ブランド』的な？」

「そうですそうです、『スターズブランド』的な」

「深海魚って個性が無いと価値が薄れちゃうアンコウも大変だね……」

「ブランドは大事ですよ。スターズはまさにそういうものを作ろうとしてる会社です

し」

「それは分かるけどねえ、うーん」

「例えば、俺がその辺で布を千円で買ったとします。

この時点では千円の価値しかありません。

でも、大手の有名服飾メーカーが服に仕立て上げ、それを宣伝したら？

スターズの百城千世子がこれを着て、スターズが宣伝したら？

有名服飾メーカーの製造と、スターズの名前、二つのブランドが付随されたら？

きつと、一万円でも飛ぶように売れると思います。

これが『付加価値』。これが『ブランド』ってやつでしょう、柘さん」

「私そういう名札だけ立派になって中身が無いのはちよつとねー」

この人、中身の無い会話する男が嫌いって前に言ってたっけなあ。

実が伴うものが好きってのはめっちゃ柘さんらしい。

「エージくんはさ、作るもの全部質が伴ってんじゃない。

制作担当の人間としてはああいうのが好ましいんだよ、ああいうのが」

「ありがたいございます。そう言っていただけだと嬉しいです」

「アンコウはイケメンじゃないし、エージくんもイケメンじゃないけどさ。

こう、中身はいいものじゃん。アンコウは中身が美味しいし、エージくんは中身があ

るし」

「あつ、傷付く」

「映画だつてそういう風になればいいんだけどね。

『スターズ』のブランドがなくても。

『〇〇賞受賞』みたいな名札がなくても。

『□□監督作品』みたいな宣伝がなくても。

映画の質とロコミだけで大ヒット、みたいな映画作れたら最高じゃない？

大事なのは中身中身！

ましてや英二くんはアンコウみたいブサイクじゃないから、きつといけるはず！」

「あつ、嬉しい」

「エージくんは俳優になれるほどじゃないかもしれないけど、顔悪くないし。

あの無表情がデフォオのけいちゃんにきやーかつこいー！　って言わせることだつて

！」

「それはもう一度ビッグバンが起きても絶対に言わないと思います」

「うん、言わないわ。ごめん」

「言わねえだろ景さんは。」

そもそもあの人が芝居以外で誰かに惚れた風になるところがあんま想像できねえわ。

芝居の上でならいくらでも想像できるけどよ。

……あーでも、最近はそうでもなかったか。

普通の女の子らしさも増してきたよなあ、あの人。

「でも深海魚のあの外見にも良いところは多くあるんですよ。」

平成ガメラシリーズの樋田監督シン・ゴジラの監督に、近年では進撃の巨人OP担当監督と、特撮とアニメ両方で大きな活躍を見せる樋田真嗣監督だが、当時共に仕事をしていた操演担当は彼を『アニメのように特撮を、特撮をアニメのように撮る』という印象を受けている。特撮みたいなアニメ、アニメのような特撮を撮ろうとすることで、彼の周りには多くの新技術が生み出された。の話ですけど……

樋田監督は子供の頃、怪獣が好きすぎて親に禁止され、その代わりに深海魚にハマったとか」

「怪獣の代わりに深海魚でいいんだ……」

「深海魚と虫は怪獣のモチーフには最適ですからね。」

個性的で、気持ち悪くて、多様性があつて、邪悪が表現しやすいですから」

「……確かに、そう言われてみると」

「ジュネツスブルーウルトラマンネクサスの強化形態の一つ。非常にスピーディでダイナミックな動きをする。特に夕日の中での怪獣ガルベロスとの戦いにおける、防衛隊

チームとの連携はウルトラシリーズの中でも屈指の名場面と非常に評価が高い。もモデルに使ったものの一つに深海魚ありますしね。だから——」

そんなこんなで、二人での飯の時間は過ぎていった。

このままいけばどんなにトラブルが起ころうが、ミニチュア制作作業は予定通り終わる。

他のスタッフ次第だが、もしかしたら最後に結構時間の余裕ができるかもしれない。

二時間か三時間くらいは。

島への移動前に寝て、予定してた睡眠時間をもうちよい長めにとつてもいいかもな。

あれ。

あの姿は、ルイ君とレイちゃん。

景さんの家族じゃねえか。

デスアイランドに行ってる間、景さんが安心して仕事に専念できるよう、黒さんがあれこれもろもろをやってるはずだが……責任持つて預かっているオッサンはどうした。

柘さんがこつちで仕事してるってことは、あのオッサンが居場所把握してなくちゃならねえもんだろ。

何やってんだヒゲ！

「あ、にーちゃんだ！」

「こんにちはー」

「こんにちわ、ルイ君、レイちゃん。黒さんはどうしたのかな？」

「受け付けで手続き？　してるよ」

疑つてごめんなさい黒さん。

子供だけ先に走つてきたのか。

置いていかれた黒さんはむしろ被害者かもな。

「にーちゃんかたぐるまー！　かたぐるまー！」

「はいはい」

ルイ君を肩車してやる。

しっかし何があつて黒さんこつち来たんだ？

子供達から目を離れたくねえからここまで来るのに一緒に連れて来た、つてのは分かる。

じゃあなんかこつちに用があつたと思うんだが。

なんだろうか？

「おにーちゃんいつ、お休みしてんの？　いつもお仕事だね」

「動けなくなったら休むよ。心配してくれてありがとう、ルイ君」
「クロちゃんはいつ働いてるの？」

「あの人はあの人で働いてる時は働いてるんだよ、レイちゃん」

この歳の子に完全に舐められてるつてのは、それはそれで凄いで黒さん。

俺に対してすら、年上のあんちゃんに対する見上げ目線と僅かな敬意みたいなもんは
持つてるからなこの二人。

「おねーちゃんと電話したんだよなー」

「ねー」

「おねーちゃんの芝居に惚れ込んだなら浮気しちゃ駄目だぞー！」

「クズ男になっちゃうよ？」

「あ、あはは……ごめんな。」

一人に専念して支援してたら駄目な仕事なんだよ、今の仕事。

俺はまだ、君達の立派なおねーちゃんに相応しい能力の裏方じゃないのかもしれな
い」

まいったな。

この二人にとつちや、景さんこそが一番大切な人。

だからこの二人にとって理想的な裏方は、大好きな姉だけの味方になるような人なわ

けだ。

でも俺はそういう風になれねえからなあ。

道理0感情10割で語る子供を、大人の事情で納得させられるわけがねえ。

無理に納得させようとしても泣いちゃう。

だからちゃんと謝って、子供心に何かしら納得させてやらねえと。

「おねーちゃんを安心して任せられないよな」

「ねー」

「ご、ごめんな。君達のお姉さんを助けるのは全力でやるから、それで許してくれ」

ぐあつ。

胸に刺さる。

た、確かに友人としちや頼りねえところもあるかもしれないねえが。

友人として、景さんの心労減らす努力はしてるぞ！ 守る気概もある！

時間くれ時間！

”朝風英二は惚れ込んだ女優にはこのくらいする”ってことを景さんにしつかり認識させて、景さんを安心させて見せるから！ な！

ルイ君とレイちゃんに『この人はお姉ちゃんと硬い友情で結ばれたいいい友達だから、安心して任せられる』って思われるようになるのはいつの日か。

俺の頼り甲斐はこの二人に大分疑問視されてる気がするぞ。

「安心して任せるにはにーちゃんちよつと背が低いよな」

「私やルイでもすぐ追い越しちやいそう」

「……そ、そこはどうにもならないから」

ぐっ。

身長か。身長が足らねえと頼りになる男に見えねえのか。クソあッ！

身長を補つて余りある頼り甲斐が欲しい。

ナイスガイになれねえならせめて頼り甲斐が欲しい。

俺160cm。

景さん168cm。

残酷な身長差が胸に痛え。

家族が……景さんの身長を見慣れた家族が……俺に身長の指摘を入れて来るんじや

ねえ……！

身長は作れねーんだよ！

「朝風さん、ちよつといいで……子供？」

「身内です。気にしないでください」

「は、はあ」

あ、事務員の人。

普段スターズで事務してるけど今はこっちの島ミニチュア関連の事務担当してくれる田中さんじゃねーか。

この前俺と百城さんで車のCM撮った時も担当だったな。

何用だ？

俺が肩車してるレイ君と手を引いてるレイちゃんのことには気にすんな。

「朝風さんは一昨日、スターズ協賛のドラマにスキャンダルがあつたことを覚えてますか？」

「ああ、スターズ女優が何人か参加してましたね。」

ドラマの規模が大きかったので騒ぎも大きかった覚えがあります。

「確か参加女優の一人が監督と不倫してたんでしたっけ……それがどうかしましたか？」

「週刊誌の記事が発端で、共演したスターズ女優数人にも疑惑がかかっています」

「え？ 本当ですか？ それは知らなかつ……待ってください。俺に言うつてことは」

「はい。デスアイランドの撮影に多大な影響が出ます。かなり大きなものが」

ウツソだろ。

これだから色恋沙汰は！

色恋沙汰が悪いとは言わねえがな!

せめて女優が恋愛感情抱かないようにプロとしてちゃんと振る舞うとか色々あんだろ!

何やってんだよ!

恋愛感情は理性でどうにかできねえからしょうがねえ、つて部分があるのは分かっているが、分かっているんだが……あーもう。

眉根を寄せる俺の髪を、肩車された状態のルイ君が引つ張る。

「すきやんだる?」

「俳優さんはね、恋愛しちやいけないんだ。恋愛して色んな人に怒られたつてことだよ」

「え……おねーちゃんも?」

「景さんもだよ。隠れてするなら、バレない限りは許されるけどね」

「あ、なんだ。かくれんぼしながらなら、していいんだ」

なんかニューアンスが微妙に違えなあ。

まあいいか。

しかし女優の恋愛がかくれんぼつてのは言い得て妙だな。

この子も割と役者のセンスあつたりして。

「では話を続けますね、朝風さん。」

スポンサーの一つが難色を示しました。

現在ネット掲示板を中心に大騒ぎで、そのスポンサーは少しスターズと距離を取りたいと」

「もう撮影始まっていますし、それを盾に現状維持を要求してはどうでしょうか？」

「前にスターズが借りを作った会社みたいなんです。

その時の借りの精算込みで、その会社はデスアイランドから離れようとしているようですよ」

「……と、いうことは」

「一社、出資取り止めです。このままだとデスアイランドの方の予算が足りなくなります……」

「うぎやあ」

やめろよお前本当やめろよそういうの。

「お気を確かに、朝風さん。」

それと、スターズのアリサ社長から伝言を受け取っています」

「……なんでしょうか」

「『こっちはこっちで何とかするから8000万円分のスポンサーを見つけておいて』と」

「あの人は俺を何だと思つてやがる」

あ、やべ、つい素が。

え、何？

俺、こつからミニチュアの仕上げとスポンサー確保やんなくちやならねえの？

今は撮影六日目14:00。

島への出発が撮影七日目07:00の予定だったから、あと17時間か。

17時間で8000万かー。

嘘だろ!?

「にーちゃん、かくれんぼしよーぜ！」

「スポンサーがかくれんぼしちやったからちよつと無理かな、ルイ君」

「えー」

えーじゃないが。

俺が言いてえよ「えー」つて。

ええええええええ……？ 俺はどの方向を向いて『ぶつ殺すぞ』つて言えばいいんだ

オラあツ！

interlude : スポンサーゲッターズ

禪と骨2017年日本映画。主演俳優にウインツ瑛士など。恐ろしいことに、Aさんの人生を描いたドキュメンタリー映画にもかかわらず、映画撮影のための取材対象のAさん本人すらスポンサー確保のために駆り出された。企画の松長Pが言葉巧みにスポンサー集めに借り出したらしい。凄いな口車。ちなみにこれを撮った上村監督は11年ぶりに監督となったが、その11年前の作品『ヨコハマメリー』もまた評価された独特な作品であり、撮影当初監督とカメラマンの二人しかいなかったため、二人でスポンサーを探し回ったという。を、ふと思いついた。

さて。
目標を達成するには、手段、計画、考慮が要るな。

冷静に考えてみるか。

アリスさんは無茶なことやらせてえ時はちゃんと会話して言う。

ゴジラの時がそうだったな。

伝言な時点で、俺に期待はしてくれてるものの、俺ができなきや失望するとかそういうことじゃあねえ気がする。

俺に話振ってる時点でスターズのどこもかしこもカツカツなのは伝わってくるしな。ダメ元つてとこか？

んでもつて。アリサさんは有能だ。そこは疑わん。

俺に成功させる目があると、アリサさんは考えてるわけだな。

成功率がどんぐらいだと見込んでるか分らんが、10%でも1%でも0.1%でも、俺がスポンサー引つ張ってくる可能性はありと見てるわけだ。

俺の、どこにだ？

あるとすりや、俺個人の人脈への期待か。

基本的に、スポンサーは金出して分偉い。

今回はスターズ主催だ。

金の多くはスターズが出し、脇を固める会社がいくつかあるって状態だ。

主催なら基本半分以上の制作費出すからな。

スターズが一番偉い顔できるもんだが、脇固めるスポンサーがねえと、金額的バランスとか、商品展開とかでアヤがいついちまうことがある。

金出してる会社にも上下があるわけだな。

会社間ですら上下関係があるが、スポンサーとスタッフ間だと更に明確な上下関係がある。

スポンサーの機嫌損ねて監督が飛ばされるとか、十分ある話だな。が、逆のことも言える。

スポンサーに気に入られてるスタッフは……例えば、スポンサーに気に入られてる俳優と反目したスタッフが更迭された、つっし話は真実から噂話まで山のようにある。

良い意味でも、悪い意味でも、人と会社の繋がりがつてやつにはパワーがあるってこつたな。

例えば百城さんだ。

百城さんは、存在自体がスポンサーを引つ張れる要素の塊と言える。

その名前だけで集客効果がある上に、人当たりがいいからスポンサー側にファンがめっちゃいるからだな。

それと比べりゃ、俺の人脈なんてゴミカスみてえなもんだ。

ただ、スターズや俳優の持つてる繋がりと、造形分野の俺の繋がりは随分違い。

そこか？ 何か期待されてるとしたら。

”別ルートならあるいは”的な。

例えば手塚監督。

あの人は作れば売れる人だ。

スポンサーに対しては、名前出せばけっこうな確率で金引つ張れる……気がする。

俺の方が持つてる繋がりで、それを打診する。

色良い返事が帰ってきたら、スターズ事務所に繋ぎを取る。

スターズとその新スポンサーの間で交渉が始まり、契約内容が決まって、新しいスポンサーが出来る。

よし、これだ。

この流れで行こう。

俺が売りにするのは手塚監督、スターズの人気若手俳優12人、スターズ主宰で大幅黒字が見込める、という三つの点。

特に手塚監督と百城千世子の名前はでけーはずだ。

特撮畑のスポンサーなら、俺の名前もちつとは足しになるか？

金があつてて手広くスポンサーやっているとこなら、玩具系の会社も良いかもな。

パンダイあたりは造形で一緒に仕事してること多いし、8000万くらいは意外と出してくれるような……気がする。気がするだけだが。どうだろうか。

知り合いのプロデューサーに打診してみつか？

……親父の名前出したら、俺の仕事分野から遠いスポンサーも、受けてくれる可能性あるか。

そういう手もあるっちゃあるんだよな。

どの道、利益が見込まれなきやスポンサーは金出さねえ。利益が出ると思いうから金出してくれるわけだしな。

スポンサーの金出し相場と見返り相場は、状況次第でかなり変わってくる。

例えば、その映像作品で商品の宣伝して、商品を現実で売るってスタイルなら、スポンサーは金で多くの見返りを求めるわけじゃねえ。

玩具屋が仮面ライダーの番組に制作費を渡して、番組が武器をかつこよく魅せて、玩具屋が武器の玩具を売る、って感じにな。

逆に、商品の宣伝するわけじゃねえなら、映画の興行収入の何%をスポンサーが貰う……って感じに利潤を得る。

デスアイランドに8000万出してもらうなら、こつちになるだろうぜ。

8000万出してもらうなら、追加スポンサーへの見返りはどんくらいが妥当だ？

1億？ 1億6000万とかは絶対無理だろうしこの辺のラインか。

デスアイランドが制作費6億だから、黒字ラインは興行収入18億。

”興行収入の6%を〇〇社に見返りとして支払います”って契約が妥当か。

大ヒットしたらそのスポンサーはボロ儲け、爆死しても制作は興行収入の6%だけ払えばいいから払えないってことはありません、みてえな。

今日中にスポンサー候補とスターズの交渉に持っていくんなら、金持つてる会社で、

スターズ・手塚監督・百城さんを強く信用してるところがいい。

かつ、スターズのツテよりも俺のツテが強えところがいい。

俺との繋がりよりスターズとの繋がりが強えとこで、すぐスポンサーになつてくれそうなどがあるなら、アリサさんそもそも俺頼らねえだろうからな。

となると。やっぱ特撮畑に金出してるところか。

さてどつから電話かけるかな。

金あるところ。

フットワークが軽いところ。

とりあえず電話帳に登録してるところに片っ端から連絡取つてみるか。

「もしもし、今ちよつといいですか？」

しかし芳しくねえ。

どこも返事がよろしくない。

急ぎのスポンサー確保なのもあつて、『せめてもうちよつと相談出来る時間があれば』って返事が多い。

プロデューサーレベルでもこの金額は、上に打診して企画通さねえと駄目だろうからな。

大手ほど金を出しやすいが、大手ほどフットワークは軽くねえし。

こんな急な話通せんもの西映の黒倉プロデューサーくらいじゃねえか。俺には無理なのかもしれん。

「うーむ、これはキツい」

しかし俺、いつの間にこんな評価されてたんだ？

アリサさんがスターズに俺を取り込もうとした理由、分かってなかったわけじゃなかったが、ここまでは。

「朝風さんが参加してるなら」「ですが何分急なのが……」みたいな反応をこんなにされると思わなかったな。

時間があつたら、さくつとスポンサー招けてたかもしれない。

いや、それは流石に思い上がりすぎか。

過小評価もあんま良くねえんだよなあ、自己評価においては。

自分の非常に高め商品価値を僅かなズレもなく把握してる百城さんが、どれだけ優れた隙の無い人かって話だわな。

……いかん、俺の認識があちこち不安になってきた。

一回途中経過の報告も兼ねてアリサさんに報告しよう。

つか早くスポンサー確保まで行かねえと、ミニチュアの方を完成させる時間ねえんだけど！

『できなければできないでいいわ』

「あれ、そうなんですか？」

『ただ、手塚は一度こちらに戻してもらおうわ。』

スポンサーが抜けたことで生まれた問題の処置でこちらは手いっぱいだし……

もちろん手塚が抜けてる間に撮影を進めることはできないと思つて頂戴』

手塚監督引つ張られるか！

……ちつと困るなあ。

いやめっちゃ困るわ。

いやいやいや。

数日でも抜けられたら俺一週間の徹夜してもカバーしきれねえぞ！

最低十日徹夜しても間に合うかどうか！

30日って日程がギツチリ決まつてる撮影で監督何日も引き抜かれてたまるか！

百城さんのスケジュールはこの30日逃したらもう調整利かねえし、出番一番多い百

城さんが一番出番減らせねえんだぞ！

この30日だけで終わらせないと最悪お蔵入りになんぞデスアイランド！

6億円の無駄撃ちとか、その悪影響想像したくもねえわ！

「このスポンサー抜けでスターズ結構大変なのは」

『ええ、そうね』

「多分大変な部分のほとんどはスターズ本社で請け負ってますよね」

『あなたが気にすることでもないわ』

「……分かりました。俺は俺で尽力します」

『ええ、お願いね』

どんぐらいやべーことになってんだらうか。

抜けたスポンサーに配慮してた（過去形）広告とか全カットで、抜けたスポンサーに許可貰ってた権利利用とかも無かったことになるから差し替えて。

申請のスポンサー欄全部書き直し、完成してた分の広告やCMは全部再検討。

後あそこのスポンサーはディスク製造委託もやってもらったからスポンサーがDVD & BDの製造工場を持っていて、映画制作会社がDVD等の制作をスポンサー傘下の製造工場に依頼する、という契約でスポンサー契約が結ばれることがある。例えば、UHDのブルーレイディスクを製造できる世界で四つしか無い製造工場の一つ・メモリーテック御殿場工場を運営するメモリーテック株式会社は、映画分野にもアニメ分野にも強く、『ローゼンメイデン』『戦姫絶唱シンフォギア』『Re:ゼロから始める異世界生活』のスポンサーになり、各アニメに使われるDVDやブルーレイを売るという強者スタイルを維持している。新しい円盤販売委託先も探さねえとな。

予算は全部リセットと再計上準備して……あ、税金処理の仕事量とかヤバそうだ。今回抜けたスポンサーの出資金ってどう扱われてたっけ。

協賛金？ 広告宣伝費扱いだっけ？ 今回帳簿とか見てねえからなあ俺。

あ、トレーラー制作費は宣伝費の中に含まれて計上されてんだった。

あれこれ結構ややこしい計算になるか？

スポンサーは払う側だから、全額損金扱いになって、法人税計算過程で差し引く数字になって、これがスポンサー撤退で差し戻しになって、これがスターズの払われる側から見ると……あれ、源泉徴収税額込みで報酬額決めてたんだっけ？ 今回どうだったっけ。

めんどくっさ！

税金めんどくっさ！

しかもこの面倒臭え帳簿上のあれこれとかでも、ほんの一部でしかねえよな。

スポンサーが抜けると、スポンサーが所有権持ってた放送枠テレビの『この時間に放送できる権利』。テレビ局に金を出して枠を買う。30分枠、1時間枠、CMの15秒枠に30秒枠など。使う権利は購入者にあるので、購入した人と喧嘩したせいでそこに予定していた広告が流せないというパターンはある。また、スポンサーがテレビ局側と揉めたことでスポンサーが放送枠を放棄し、テレビ局が慌てて放送枠を売りに出すという

問題発生。パターンも。本屋響子さんなどはこれで曲をCMするチャンスを得て、成功したタイプである。とか、広告枠広告を出す枠。チラシや雑誌の広告掲載枠など、その種は多岐に渡る。2018年度週間少年漫画誌の裏表紙広告は、その98%がソシヤゲ会社・サイゲームスのソシヤゲ広告だったらしい。効果的すぎない!? 独占強すぎない!? もはやここまで来ると独占禁止法さんが出てこないか心配になりそうなレベルである。とか、どっか行っちゃまうこともあるからな……どうなんだ、どうなってるんだろうか。いや、信じてスターズの人らに任せとくしかねえ。

百城さんとか景さんとかが撮影してる裏で、ホント色んな人が苦勞してんだよなあ。俺も裏方として、やることやっつけていかねえと。

スケジュール問題だってある。

デスアイランドの水際で止めとかねえとな。

スポンサー問題で30日で撮影終わらなくなり、無理してデスアイランド続けようか思ってたなら、スターズ12人のスケジュールも破綻する。

それなら、撮影続けねえ方がまだマシだ。

客からの信用も失う覚悟で、穴だらけスカスカ超駄作でも仕上げてリリースする勇気か。

映画お蔵入りにして6億ドブに捨てる勇気か。

じやなきや、スケジュールの連鎖破綻で、6億で済んでたかもしれないねえ被害が60億、600億、つて膨らんでいつちまう可能性もある。

かのジュニアーズの年商も1000億つて言うしな。

アリサさんなら6億の損失くらいは受け入れそうな、そんなイメージがある。でも俺はちよつと……いやかなり気が引けるわ。

なんかできりやあいなんだが。

「俺にこの案件を振ったことに理由はあるんですか？」

『あなたにとつては楽な話かもしれないわ。あなたにとつては、だけど』

「……？」

『この件はできなくても気負う必要はないわ。自分の仕事と体調を一番に考えなさい』

電話が切れる。

俺にとつては？

俺に限定？

ふむ。

もうちよつと考えてみるか。

俺に可能なこと。俺に話が振られた意味。

あとアリサさんが奥歯に何か引っかけたような言い方してた意味。

アリサさんが俺に言い辛いこと、何かあんのか？ はて。そこにヒントがあるか。

しっかしアレだ、これが女心とか把握せにやならんものなら、結局俺には分からん可能性も……いや、とりあえず考えよう。

俺にしかできないこと。

アリサさんができると思ってること。

「クラウドファンディング、とか」

クラウドファンディング。

ここ数年、映画やアニメで流行ってる資金調達方法だ。

クラウド
群衆。

ファンディング
資金調達。

なので、クラウドファンディング。

インターネット経由で、一般の人達から制作費を募る方法だな。

色んな分野に色んな形のクラウドファンディングのやり方があるんだそうな。

昔から、映画は撮ろうと思った監督が走り回って制作費集めることから始める。

金出してくれるスポンサーが見つからなきゃどうにもならねえからな。

だが、クラウドファンディングがある現代は違え。

映画のサンプル画像、作品コンセプト、目指すもの内容、そういったものを公開し、

ネットで制作費の提供を求める。

そうすりや、琴線に触れた人が制作費をくれる。

金をネットで調達できるんだな。

で、クラウドで金を出してくれた人に、限定品のクリアファイルとか、フィルムの一部とかをお返ししたりもするわけだ。

支援してくれてありがとう、つてな。

こうして見返りを見せることで、資金提供の受け皿を広くする……いや、つかこれもう、金出して貰う代わりに見返りを用意してもらおう普通のスポンサーに近くなってきたるじゃねえか！

クラウドファンディングは、世界最新のスポンサーシステムってわけなんだな。

だから普通にクラウドで金出してる一般人をスポンサーって呼んでるところもある。

一般人がスポンサーってことは、映画の概要説明次第じゃ、出して貰える金が0から無限大までいくらでも変動する。

可能性は無限大だぜ。

しかも、自由度も高え。

そういう意味でも可能性が無限大だ。

スポンサーは「うちは金出すんだから口も出させろ」と、撮影にあれこれ口出しして

くるし、その権利がある。

だがクラウドならそれもほぼねえ。

監督達が好き勝手作品撮れるってわけだな。

まーこれが悪い方向に噛み合うこともあるけどな。

仮面ライダーやスーパー戦隊の玩具だって、玩具屋・造形屋・特撮屋で合議して、売れない武器は玩具屋が却下し、安く丈夫に安定して沢山作れねえものは造形屋が却下して、かつこよくねえものは特撮屋が却下して、それで良いものが作れてんだ。

少なくとも俺は、話し合いして中央値取りてえタイプだなあ。

ただし、クソスポンサーがいる場合は消えるクソがと思う。……場合によるな。

クラウドで俺の名前で80000万集めたら……？

「いや一般の知名度ねえ俺がやっても10円も集まらねえだろ」

無理だな絶対に。

俺の仕事を知ってる社長さんとかは俺に金出してくれるかもしれんが、一般人は俺に一円も預けようとは思わんだらうぜ。

これもまた、クラウドファンディングの個性だ。

客からの一般知名度こそが、スポンサーからの集金力、撮影の資金力に直結する。

通常のスポンサー集めの場合、業界でのコネ、過去に作った作品の興行収入と純利益、

各社の偉い人に自分からぶつかっていく能動性が必要だ。

偉い人に当たって行って、自分の手で金集めるわけだからな。

クラウドの場合、テレビ出演などによる一般知名度の増大、過去に作った作品の収入がなくてファンの評価値の高さ、金が集まるのを広い受け皿でじっくり受ける受動性が必要だ。

過去の実績を撒き餌にしてページ作って、後は待つわけだからな。

例えば『売れる作品を安定して沢山作ってる』手塚監督は、通常のスポンサー集めの方が適してるはずだ。

小銭出してくれるライトファンは多くとも、多額の金出してくれるヘビーファンが多くなえ監督で、映画黒字がほぼ確実な手塚監督は大抵のスポンサーから絶大に支持されてる。

逆に『日本では無名だが海外の超有名映画祭の数々に入賞してる』黒さんは、海外のスポンサーとかも想定しつつクラウドファンディングやっても、相当な額が集まりそう
だ。

日本国内じゃほぼ無名な黒さんは普通のスポンサーが集まり難い。

だが重度の映画ファン、海外の映画スポンサー常連社は、黒さんがネットでスポンサー募りや確実に食いついてくる。実績があるからな。

金を集める。

こいつは、映画を作る上で絶対に必要な能力だ。

普通スポンサーを集めたりすんのは企画担当やプロデューサーだが、本当にどうしようもなくなりやそれ以外も走る。

美術監督もせつせと走る。

いいよなあジブリの美術監督は。

ジブリって頭に付けてりやクラウドでサクリ金集められたりするんだぜ。

ちえみとチェリー一部劇場でのみ公開され、数年後にイオンシネマ限定とはいえ全国での公開がなされた人形映画作品。最初は全国公開もままならず、公式サイトで映画公開場を募集する程度の規模であったが、映画ファンの中の口コミで広がり、県境を二つ三つ越えることを苦にしない映画ファンによって支えられた。海外の映画祭などでも評価され、タイプとしては手塚監督作品より黒山監督作品の方が近いと思われる。とか、クラウドで美術監督の名前だけを売りに献金求めてたことあったからな……ファンディングのお願いのページタイトルに、美術監督の名前しかなかったぞオイ。

あれで翌月全額達成してたのが凄えわ。

俺に売れるような名前がありやあなあ。

テレビとかに出て名前を売りつつ、悪感情を抱かれないよう完璧な振る舞いをしつ

つ、観客や視聴者の好感だけ得る……百城さんのあれは俺には到底無理そうだ。
「はあ」

もう少し、冷静に考えたら、何か正解出るか？

いつそ仕事再開すつかなあ。ミニチュアの。

頭に負担はかかるが、仕事と対策に脳味噌を半分ずつ回していつもの倍の速度で頭回せば、まだ何とかなるかも……仕事してる時が一番頭回ってる人間だしよ、俺。

「よう、苦労してるみてえじゃねえか」

「！ 黒さん!?!」

屋上で佇んでた俺にかかる声。

その声の方に顔を向ければ、そこには黒山墨字がいた。

さてはちつちやい子らの世話を終さんに任せて……いや待て、なんであんたがこつちに？

「話は聞いたぞ。ところで色々電話かけてたらな、8000万出してくれそうなところがあつたぞ」

「ゆ……有能！ 信じられないくらい有能！ ありがとうございます！」

「気にすんな。デスアイランドに夜風をねじ込んだ時といい、お前には借りがいくつもある」

速え！

話が速え！

「協力してやるよ」って声かけから始まるんじゃないかと、「最高の手土産持ってきてやったぞ」から話始めんのマジで速えな！

有能。

「どこです？」

「西芝」

え、西芝？ マジかよ、いいところの家電じゃん！

あそこなら確かに8000万くらいはサクッと出せるか。

後で払われる見返りが9000万くらいでも、あそこくらいの手前ならこれでスターズに恩売って、未永く稼ぐこともできらあな。

あそこがスポンサーになってるドラマは、特撮畑の人間がそこそこいる。

今度やる予定の『下町ロケット』とかも、スポンサー西芝で制作が丁BS、音楽はアニゴジの人、プロデューサーは実写あしたのジョーとか企画プロデュースした人、演出は特撮オタクの日常だけでドラマ作りてえ！ 本物怪獣スーツも借りてこよう！ な人だったりするしな。

黒さんのアポ次第じゃ、特撮畑の俺の心証良さそうな偉い人もいそうぞ。

「ただし、確定の話じゃねえ。

自慢じゃねえが俺はこの手のコネはねえからな。

話届けたのはこの手の管理やつてる専務までだ。

西芝の担当者は、後はエージと直接話して、それから決めてえんだつてよ」
「なるほど、面接ですね。

分かってます。

今日中に話を通そうとしている時点で難度が上がっていることは。

ですが、無茶は承知。

話を繋いでくれた黒さんの名にかけて、必ず勝ってきます！ だから——」

「ダメ押しもしとけ」

「え？」

「俺が巖のジジイと知り合いなのは前に言っただけか？」

「はい、前に聞きました」

何の話だ？

「俺が通したのは加賀経由作中時間は2018年の台風シーズン。2018年度6月の加賀東芝まつりで西芝と西映に繋ぎが取られ、仮面ライダービルドのヒーローショーなどが行われたばかり。だが……」

その時にちよつと話振られてな。巖裕次郎さんに繋ぎ取れませんか、つてよ」

「お前も聞いてんだろ、ドラマの演劇化企画の話だよ」

なるほどそうか。

例を出して、思考を整理してみつか。

今予定されてるドラマ『下町ロケット』のメインスポンサーは、大手電機メーカーの西芝。

制作はテレビ局の丁BS。

スタツフチームは半分くらいが『半沢直樹』『倍返しだ』のフレーズを爆発的に拡散させた2013年人気ドラマ。瞬間視聴率46.7%、最終回視聴率が平成以降民放ドラマ一位、水戸黄門最終回到次ぐ民放ドラマ史上三位という怪物。半沢直樹のアクションコーディネーターは特撮畑の人間であり、スーパー戦隊の中の人やゴジラの軍人モブをこなした後、アクションコーディネイターとして侍戦隊シンケンジャーや仮面ライダー鎧武の馬アクションの馬アクション指導などもやりつつ、多くの映画やドラマでのアクションコーディネーターをこなしていった。のスタツフ達だな。

半沢直樹然り、下町ロケット然り、西芝と丁BSが組んでる事柄は今、いくつかある。例えば今度やるっていう、百城さんがメインで出る作品とかな。

詳しい話は聞いてねえが、百城さんがメインで出るって話は聞いてる。他にも、進行中のテレビドラマの舞台化企画とかあるって話は、前に聞いたことがある。

『大奥』『踊る大捜査線』『さくら』あたりはもう舞台化してたんだけか？

ドラマをアレンジして舞台でやる、ってのは結構あるんだよな。

丁BSは今、これで何かドラマを舞台化する話があるとかいう話だ。

巖爺ちゃんは今元々テレビと映画の監督を結構な数やってた人だし、演劇演出家がテレビ監督やった例はかなりあるし、巖爺ちゃんと繋ぎ取りてえってのは多分これだな。

丁BSの人気ドラマの舞台化の企画。

それと、近年のドラマで人気を勝ち取ってる舞台俳優の発掘、採用。

そのために演劇畑の重鎮の、巖爺ちゃんと繋ぎ取りたがってんのか……放送局の製作チームと、スポンサー会社の企画に金出す部署の人間が。

西芝の人と面識はあんまねえんだよなあ俺。

丁BSはドラマ・CM・ウルトラマンで関わるから現在ウルトラマンを放送しているのはテレビ東京だが、TBSは現在もウルトラマンフェスティバルや旧作ウルトラマンの企画など、ウルトラマン系の仕事を多く持つ。顔見知りそこそこいるんだが。

撮影に理解ある西芝の人と話せそうにねえなら、丁BSの人連れてくか？

間にそういう人が入ってくると俺クツソ楽になるわ。

……いや、そうか。

そういう”朝風英二に付属させる人間”に、黒さんは巖爺ちゃんを挙げてんのか。

百城さん達引き合いに出そうと、『俺』にスポンサーは金出さねえかもしれねえ。

だけど、『俺+α』ならつてことだよな？

「巖のじいさんに頼んでみる。

西芝の仕事受けてくれるかもしれねえぞ。

西芝との交渉でそれ使ってみりゃいい。

巖裕次郎と仕事の交渉ができるつてなりや、かなり良い返事が貰えんじやねえか？

しかも代金は、デスアイランドに8000万出す手堅いバクチに参加するだけとき

た。軽いな」

「それは……そうかもしれませんが」

「お前はスポンサー受けてもらえる。

西芝はデスアイランドと演劇分野両方に手堅い出資ができる。

巖の爺さんは仕事して金貰う。誰も損してねえんだ、いいことだろ」

「ですが、流石にそこまで頼るのは……」

「いいんだよ、あのジジイは性根が腐ってるからな。」

契約しても責任取らなくていいってこと知ってたんだよ。

どうせお前のためなら、そんなぐらいの卑怯はするだろうさ」

「?」 責任取らなくていい?

仕事を受けたら、責任持つてそれを果たさないとイケないと思いますが……」

「……あのジジイがどうせその内話す。気にすんな」

はて。

なんか超大型の仕事でも入ってたのか?

西芝の仕事を後回しにしても許される、くらいの仕事か。

じゃなきや巖爺ちゃんでも、受けた仕事をやらねえとか、適当にやるとか、投げ出す

とか、仕事に対して無責任でいることが許されるわけがねえんだが。

仕事は完遂してこそ仕事だ。

ミスったり投げ出したりすると、信用は損なわれちまう。

” 演出家としてこの先も生きていく” なら、絶対に大手企業との仕事で適当とか無責

任とかできるわけがねーんだが。

「ジジイは孫代わりのガキには甘えんだよ。エージは知らねえかもしんねえがな」

「……どうでしょうか、黒さんが思ってるほど、思われてはないような気がしますけど」

「でも好かれてねえとも思ってたねえだろ」

「それは、まあ」

「んじや後は好意の大小の問題だつて話だ。」

電話してみる。あのじいさんから思われてることの確認も兼ねてよ」

へっ、いいだろう。

確かに俺はあのじいちゃんに氣遣つてもらつてるし、大事にしてもらつてるが、仕事面でも甘い顔されるほどめちやくちや大切に思われてるとは思わねえぞ！

電話コール！

繋がった！

ちよつと久しぶりだな爺ちゃん！

かくかくしかじか！

説明終了！

『ごごご』

……。

あーもう。

嬉しいな。

すぐ快諾すんなよジジイ。ボケたか？ ボケたのか？ 判断力落ちたのか？

……

判断力落ちてねえなら、なんか、その、なんだ。

あー。

こういう場面でこういうこと言われて、こんなに嬉しくなるとか、想像もしてなかった。

俺、こんな人間だったっけ？

『その代わりと言っちゃなんだが、一つ仕事を受けてくれねえか』

「何でも言ってください」

『俺達の次の公演準備も、公演も、じき終わる。』

次の次の公演で合流してくれ。演目は——” 銀河鉄道の夜” 』

宮沢賢治の童話か。

珍しいな。

巖爺ちゃんと言えばシェイクスピアのイメージがあるし、『銀河鉄道の夜』は演劇舞台用にシナリオが組まれてるわけでもねえから、相当に弄った脚本が必要になってくる。

元々の銀河鉄道の夜が未完成品な上、編集者によって度々改稿されてきた作品だ。

間もやや間延びしがちな『旅』の話で、短い時間で『魅せる』演劇とはイマイチ相性が悪く、人気になった『演劇・銀河鉄道の夜』は、脚本担当の才能が光るものになっている。

巖爺ちゃんが納得するレベルの脚本はもう出来てるか、あるいは他の演劇で使われた

脚本をそのまんま持ってきたか……：どうだろうか。

ともかく、次の次なら秋から冬にかけてってところか。

そんなら大丈夫だな。

『舞台のちよつとしたもん作らせるってだけだ。

拘束期間はそこそこだが拘束時間を長く取るつもりはねえ。

他の仕事も平行できるだろう。

どうだ、古い先短え老いぼれの頼みと思つて、聞いちやくれねえか』

問題があるとすりや、デスアイランド後には俺がスターズ専属になつて、フリーみてえな仕事の受け方はもうできねえつてことだな。

ま、アリサさんもこれなら受けてくれるだろ。

巖爺ちゃんの話受けりやスムーズに話進むわけだしな。

今回だけは許してくれるはずだ。

一応確認の連絡だけは送っておく。

アリサさんは、とある理由から内心で巖さんに敵意を剥き出しにしてる。

スターズに入つたら、俺はもう巖爺ちゃんの仕事を受けられなくなるかもしれねえ。

そうなつたら。

この、次の次の公演の仕事が。

俺にとつての、巖爺ちゃんとの、最後の仕事になるかもしれないねえ。

「分かりました。期間も多分大丈夫です、受けます」

『おう、頼んだ』

老い先短いとか言ってるんじゃないぞ。

長生きしろよジジイ。

電話を切る。

「どうだ、上手く行ったか？」

「いやもう、本当にありがとうございませう黒さん。

スポンサー探して、窓口までこじ開けてくれて。

巖さんまで引き込んで突破口作ってくれて。なんとお礼を言っているのか」

「借りを返したただけだって言つたら？」

「そうだな、夜風のデスアイランドねじ込みに協力してくれたのとチャラにしとけ」

「ありがとうありがとう。」

「ありがとうハゲてないヒゲのオッサンと、ハゲてるヒゲのジジイ。」

「心から感謝してるし大好き。」

「超感謝してる。また何か機会あったら助けに行くぞ。」

「……ん？」

あ、そうか。

だから伝言なのか。

アリサさんが俺にスポンサーの件振った時、なんで伝言だったのか——なんで俺との会話避けたのか——分かった。

アリサさんこの二人嫌い寄りくせーからなあ。

ああいう伝言を残しておけば、俺が思索の果てに、必ずどこかで巖じいちゃんとか黒さんとかにぶち当たると予測して、俺がそうやってこの問題解決すると期待して……そんな感じか。

大当たりじゃねえか。

いや、そうか。

俺が最終的に周りの大人頼ることも、どっかの誰かが大人として俺を助けることも、可能性として考慮してたわけだ。

かつ、アリサさん自身はこの二人を頼ってねえ。

上手なことやるな。

俺がこうやって活路を見出すことも、活路を何も見い出せねえことも、どっちも想定して話進めてたような気すらする。

上手い感じに誘導されちゃった気がすんな。

「ともかく、ありが——」

「そいつはもういいからエージ、柗のところに一旦戻んぞ。夜風の弟達にも顔また見せてやれ」

「あ、はい！」

歩き出すオツサンの後についていく。

黒山墨字。

この人礼儀は頻繁に忘れるが、恩は忘れねえんだよなあ。

ものすつげえレベルで傍若無人だが、恩知らずでも品性下劣なクソ野郎でもねえ。

そう、傍若無人なんだ、この人は。

スポンサーに媚びる監督やプロデューサーは多い。

監督がスポンサーに逆らえば、そのまんま追放されて監督すげ替えられるなんてこともありえねえわけじゃねえ。

逆に媚びりや、制作費が増えてできることがいくらでも増える。

媚びを覚えりや、能力が低い監督でも金が入る。

不器用な監督やプロデューサーは、金を集められねえどころか、最悪撮影の流れから叩き出されちまう。

もしも。

スポンサーに一切媚びず、省みず、好き勝手することが許されるなら。そいつは自分の能力に自信があつて、その自信に相応の能力があつて、自分が撮りたい作品を撮るだけで、他人に合わせる気が全くねえのに、それがスポンサーに許される奴だろう。

例えばこの、黒山墨字のような。

好き勝手生きて。

偉い人に媚びる気が無く。

誰のためでもなく自分のためだけに作品を作り。

その中で自分の内なるものを表現し。

不敵に笑い。

傍若無人に振る舞い。

スポンサーに媚びるための愛想笑いが顔に全く無い。

監督の顔に貼り付きがちな、”映画を撮らせてもらうための媚びた笑顔”が、無え。

アレの痕跡ですら微塵も無えってだけで、この人は凄えんだ。

スポンサー探しの苦労を知れば知るほどに分かる。

この人が、ここまで自分勝手に生きながらも、映画の業界で評価されて認められてるっていう、その事実の凄まじさが。

『誰にも媚びないことを許される』ってことが、この業界ではどれだけ化物なことなのか。

色んな監督とこの人を見比べる度に、思い知らされちまう。

黒さんも景さんも、自分勝手好き勝手に作品作りに邁進しても、出された結果と生まれた作品だけで全ての困難を突破しそうな印象があつて。

それがなんだか、見ていてワクワクする。

黒さんが景さんを選んだ理由は、二人を見てると本当に実感できんだよな。

いい監督と女優のコンビだと思う。

「そういえば黒さん、西芝と巖さん周りの情報よく掴んでましたね」

「ちよつとな、あの辺で仕事創出しようと思つてな。劇団地球周りで」

「へー………ん？」

今のスタジオ大黒天が？。

今のスタジオ大黒天は、監督の黒さん・女優の景さん・製作の柘さんを抱える制作会社だ。

ただし単独で映画を作れるって状態でもねえんで、現状は景さんのレベルアップを兼ね、女優・夜風景をマネージャー・柘雪がマネジメントし、責任者・黒山墨字が各現場に派遣する………って形態でやってるはずだ。

景さんの法的立ち位置はまだ個人事業主じゃねえから、契約は景さん個人じゃなく、スタジオ大黒天側で一括管理してるはず。

その黒さんが劇団天球の方で仕事を作ろうとしてる、ってことは。

次の景さんの仕事の話か。

景さんが巖爺ちゃんの方で仕事できるよう、話を始められる機を伺ってる？

景さんがデスアイランドから戻って来る前に次の仕事を確定させる気か。

随分急いでんな。

これまでの仕事のどれより急いでる気がする。

巖爺ちゃんの下で一刻も早く景さんに学ばせてえ理由でもあんのか？

「デスアイランドの次は劇団天球ですか、景さん」

「分かるか。まあ、そういうことだ」

ふと、そこまで話して、ふと気付く。

また、景さんが学んで俺が万が一のバックアップに付けられてる、この構図。

巖爺ちゃんの舞台でまた俺が景さん周りの美術を仕上げられる位置にいる、この構

図。

ちよつと待て。

どこからだ？

どこからどこまでがこの人の計算だ？

……ここならいけるぞと、スポンサー勧められた時からか？

うわあ、黒さんの掌の上で踊らされてた感が出て来た。

俺も、アリサさんも、巖爺ちゃんも、皆各々自分らしく最善を選択しようとした。

結果、景さんを成長させてえ黒さんの思惑通りになつてる。

うっへえ。

景さんを使つてほしいって話、巖爺ちゃんにもうしたんだらうか？

してねえ気がすんな。

してたら、巖爺ちゃんのカヤラだと俺に電話でその話してた気がする。

でも、今の爺ちゃんクセつえーからなあ。

俺みたいに途中で気付くんじゃなくて最初から気付いて、「俺を利用して良いとこだ

けもつてこうつてか？」とか脅しかけそうな気がする。

海千山千の猛者の巖爺ちゃんを手球に取るのは黒さんには無理な気がする。

勘だけだな。

「んな顔すんなよエージ、悪い話じゃねえだろ」

「はい。俺は黒さんにはありがとうしか言えませんとも、はい」

あークソ。

スポンサーに四苦八苦する自分をさっさと卒業してえ。

スポンサーに媚びなくても好き勝手できるこの人みたいになりてえ。

でなきや、スポンサーって要素を自分の望みの達成に使えるようなこの人みてえに、駆け引きしてやつができるようになる気がしねえ。

「これがあのじいさんとの最後の仕事だと思つてやれよ、エージ。悔いの無いようにな」
「分かつてます。俺、スターズの方に行っちゃいますからね」

もうアリサさんが距離取つてる以上、あの劇団と一緒に仕事はできねえかもな。

最後の仕事のもりでやんねえと。

「俺が皆さんに話し通して、それから西芝に向かいます。黒さんはどうしますか？」

「暇だからな。ここで待つてるさ」

黒さんと別れて、ミニチュア作成チームが屯たむろしている区画に向かう前に、西芝にアポを取る。

すぐに来ていいってよ。

応対良いなあ。

電話を切った俺のスマホに、一通のメールがやって来る。

差出人は、百城さん。

「え？」

俺が今ぶつかつてゐる事案のことを、アリサさんあたりから聞きつけたのか？

メールに添付されていたファイルを開くと、そこにはスマホで開ける形式の簡易資料。

その内容は多岐に渡つた。

西芝の最近のスポンサー傾向。

西芝スポンサーでヒットしたドラマのリスト、つまりは西芝受けする作品傾向。

百城さんが企画段階で話したことのある、西芝のドラマ等に関わる人間の性質。

株主総会の公式発表から類推される、西芝傘下のドラマ等作品傾向、すなわち西芝の映像作品スポンサーとしての商業戦略への推測まで入つていた。

知つていた。

百城さんが、自分を見る目は全て分析していることも。

研究を重ね、統計でまとめていることも。

”誰から見ても綺麗に見える自分”を作つてることも。

そして、自分が参加した作品の撮影を完遂し、売れる作品にするためならば何でもする、そんな執念を持つてゐることも。

だからこそ、スポンサーからも『百城千世子』が重用されてゐることも。

だが、改めて思う。

あの人は、怪物だ。

ゾクゾクする。ワクワクする。

百城さんがまとめた情報の羅列が、こんなにも俺を魅了する。

俺をあの人に入れ込ませ、惚れ込ませる。

メールには資料の他に、本文がたった一文のみ書かれていた。

『がんばって』

ああ。

頑張るぞ。

だから、裏方がやるべきことは任せろ。

どうか、スポットライトが当たる表舞台で、存分に輝いてくれ。

「世界最高に良い女だな、あの人は」

これで俺は初めての単独スポンサー交渉で『うっかりやらかす』ってことがなくなつた。

百城さんのやり方を真似する、っていう最高の手立てを得た。

ぐんと、成功率が上がった気がするぜ。

感謝の意を、百城さんにメールで伝える。

例えば俺は、百城さんが車のCMを撮る時、それを手伝うくらいしかねえ。

『車のCM』としてしか俺は関わってこなかった。

だが、百城さんは違え。

CM出してる会社……ドラマとかのスポンサーになってくれる会社の看板を背負ってる。

そして、スポンサーの偉い人とかとも顔を合わせて交流してる。

ニユースとかだと、スポンサーの社長と女優が握手してたりする写真が載ってるが、ああいうことを百城さんはしてるわけだ。

きつと、俺がこんなにも苦戦してるスポンサー集めも、百城さんなら数日で億単位の金なんて簡単に集めちゃうんだろう。

少なくとも、俺はそう信じてる。

だからこそ、この分野で俺を助けることもできた。

こいつはきつと、景さんとかにはできねえこと。

百城千世子の、本当に強え部分だ。

その強さを分けてもらって、俺は一人の造形屋として、スポンサーを勝ち取りに行く。

あ、黒さん。

「黒さん」

「おう、どうした？」

「こう……映画とか作品を作る時、本当に信頼できる人がいるってのは、いいですよね」
「何当たり前のこと言ってるんだ。今更だろそんなこと」

黒さんが鼻で笑って、俺の背中を叩く。

いってえ。

「だからとびつきりに信頼できる仲間を探してんだ、映画おれ製たち作者はな」

実感湧いた言い方してんな、おい。

……いい映画撮るために、信頼できる女優をとことん探してた人が言うど流石に違えな。

信頼できる女優は良いよな。うっかりすると恋慕しちまいそうで困る。実に困る。

デスアイランド：七日目：英一離脱三日目突入

西芝で俺の対応に来たのは、結構なご老人だった。

テレビ局番組関連では結構な年のジジイが、年齢相応の白い髪に年齢不相応のエネルギーギツシユさで活動してるのをよく見る。

この人がその類であることは、ひと目で分かった。

いい大学とか出ていい会社入って、以後何十年もそこで働き、派閥闘争などにも勝ち抜く。

種類は違うものの、そういうジジイは大抵妖怪じみてやがる。

味方に付けて頼りになるかは別として、敵に回すととんでもなく面倒臭え、つてのがこの手のジジイに対する、俺の個人的評価だった。

「良い話をありがとうございます。」

私どもも、そちらへの出資を行う方向で検討させて頂いております」

微笑む爺さんの肯定的な反応に、心が浮足立つのを感じる。

が、ここで油断すんな俺。

肯定的な反応は撒き餌だと百城さんの資料にも書いてあったぞ。

「ですが、一つ」

ほーら来た。

ちよつと期待持たせてから要求通しに来た。

” いい感じの反応だしちよつと西芝の要求聞いてでも話通した方がいいな” っと思わせるための戦略だコレ。

メンドクつせ。

「当方は、そちらの百城千世子さんを起用した作品の撮影を予定しています」

「はい」

「こちらをざ覧ください」

爺さんから手渡されたドラマの企画書を見る。

ん？

あれ、これ百城さんにやらせんのか？

ちよつと待て、ミスキャストイングじゃね？ キャラと俳優が合ってねえぞ？

「これまでであった百城さんのイメージと、かなり違うものになりますね」

「はい、その通りです。」

なので先日、企画会議で疑問の声が上がりました。

これはこのままやっても、作品として失敗するのではないかと」

「当然の懸念だと思います」

「だからこそ、朝風さんにもこの撮影に参加していただきたいのです」

「俺ですか？」

「私どもとしても、百城千世子の起用は売りの一つ。

ここは決して外せません。

ですが懸念も無視できません。

そこで丁BSさんのプロデューサーに話をしたところ、あなたの名前が出たのです」

「俺ですか？」

「はい。百城千世子と朝風英二を組み合わせれば撮れない画は無い、と。絶賛されてい

ました」

「……過分な褒め言葉、恐縮です」

「そこにタイミングよく黒山さんから話が来たのです。実に渡りに船でしたよ」

なる。

そういうスポンサー内部での話合いがあったわけか。

西芝に俺を推してくれたプロデューサーの名前を聞いて、納得した。

何度か、俺と百城さんをセットで使ってたプロデューサーだった。

そういうや、俺が前に百城さんの車のCMでマジョーラ使った時、あの時のプロデュー

サーも、確かそのプロデューサーだったはずだ。

一回か二回は直接話したことあったと思う。かなり前だが。

そうか、あの車のCMの時のプロデューサーが助けてくれたのか。

あ、そうだ、西芝は確か自動車保険もやっていた。

それでテレビにもCM出してたんだけか。

電機メーカーの西芝と、車のCM出す自動車メーカーは、共同で金出して丁BSのプ

ロデューサーにCM作らせる……ってことがあるんだな。

うっすらだが繋がりが見えてきたぞ。

「つきましては条件に、百城千世子参加のこの撮影に、あなたの参加も加えて頂きたいのです」

なるほどな。

西芝&丁BS側としても、この撮影においてスターズに求めるものは無え。

だが、俺に求めるものはある。

これなら、スターズ側の交渉で色良い返事を返す気が無くても、俺に対しては色良い返事を見せる理由になるわけだ。

内々の話だったから、西芝は俺がスターズに移籍するって話を知らねえんだな。

アリサさんあたりがその話が広まらねえようにしてたんだろうか？

だから、こういう勘違いが起きた。

”朝風英二はスターズに移籍してる頃だから、特に交換条件を出さなくてもこの撮影には来る”と認識されてねえ。

”朝風英二はスターズじゃないから個別に交換条件出して引き込まないといけない”って認識されてんだな。

こつちに都合が良いから黙っておこう。そのまま勘違いしたままスポンサーになつてくれ。

うっわ、ワリいことしてんな、俺。

罪悪感湧いてきたわ。

映画必ず成功させてスポンサーに利益が返るようにしとこう。

「大丈夫です、いけます。この撮影期間なら、自分は参加できるはずですから」

「ありがとうございます朝風さん。それともう一つ、こちらはできればいいのですが」「なんででしょうか？」

「デスアイランド後、どこかのインタビューで良いのですが……」

そこで『百城千世子の撮影予定作品』として、この作品の名前を出していただきたいのです」

「何度も、となると難しいと思いますよ？ あの前百城千世子ですから」

「一度だけで構いません。」

代わりにこちらにも出す番組広告を増やそうと考えています。

お互いにこの作品に入れる力を増そうという打診、と受け取って頂ければ幸いです」
「少し確認を取ります、時間を頂いてもいいですか？」

「どうぞで」

スターズ本社に連絡。

OK出しといてください、と返事が来た。

よし良さそうだ。

”朝風さんお願いします。頼りにしてます。こっちは目を覆いたくなるほどの修羅場です”とか言われちゃった。電話の切り際に。

大変そうだなあんたら。

そんなに多忙か。

いやあ一併優事務所が、スターズ12人ぶつこんだスケジュールギチギチの、ただでさえ調整きつつい撮影のスポンサー抜けて、8000万の抜けが出て、でも現場責任者の監督を一日でも撮影現場から離すのは無理っぽいつて言われたらこうもなるか。

まあ任せとけ。

造形分野と違って自信は0だが、だからといって投げ出すほど無責任じゃねえぞ。

「できれば処理の関係上、こちらとスターズは、今日中に協賛を約束していただきたいです」

「少し厳しいところですね。何分、急な話ですから
ですすよねー。」

「ですが私に任せて頂ければ、今日中にスポンサー契約は結べるでしょう」

「！ 本当ですか!？」

え、マジで？

今日中にスポンサーゲット半ば諦めてたんだが。

よっしゃー！

これなら、撮影スケジュールに一時間も影響は出ねえ！

予定通りにやれるぞデスアイランド！

「ですが、それならもう一つ、追加の条件を聞いて頂きたいですね」

ほーら来た！

餌で釣って条件追加して俺を踊らせんのやめろ！

「我が社の関係者には、『光速エスパー』のことを覚えている者がそれなりにいます」

！

ぐっ、まさかのところが来やがった。

光速エスパー。

1967年の西芝マスコットキャラクターにして、西芝スポンサーのSF特撮テレビドラマだ。

”光速エスパーとかで経験を積んだ会社が後にサザエさんを企画立案した”っつー話は、60代以上の重度特撮ファンで知らねえ奴はいねえ。

怪獣ブームによって子供達がデカイものに憧れるようになった時代に、等身大の子供とSF性を強調して人気を獲得した稀有な作品。

また、日本における『力を持った強化服を着ることでヒーローとなる』という概念は、この特撮から生まれたとかいう話があるくれえだ。

各店舗に等身大エスパー人形が置かれ、全国的に人気が高まり、各店舗からの人形盗難が続発したとか。

カラーテレビの普及に大きく貢献したとかなんとか。

古い作品だが、特定世代からの評価はクツソ高え作品だな。

1995年にVHS化。

2001年にDVD化。

2011年にデジタルリマスターDVDBOX化。

2015年にBD化したくらいの人気作品だ。

……いや何度再ソフト化してんだよ!

西芝の偉い人にこの特撮ドラマを推してる人がいるだろうってのは想像してたが、まさかこんな話になるとはな……驚いた。

光速エスパー放映当時は西芝のパワーがめっちゃ強くて、光速エスパーの制作会社には『西芝分室』っていう専用の製作チームがいたんだよな。

製作過程も一貫して、ずっとスポンサーの影響が強かったはずだ。

そういや西芝は最近疎遠だが、結構特撮で儲けてたんだよな。

初代ウルトラマンからウルトラマンガイアまでがつつりCD出してたし。

ウルトラマン一作品につきサウンドトラック一つだったりもする最近のウルトラマン見ると、『ウルトラマン一作品でサウンドトラック四つ出す』とかやってた90年台のアレウルトラマンダイナサウンドトラックなど。は、本当に儲かったんだろいうなあと思おうわ。

「こちらには特撮関連の人に対し、内心悪い想いを持ってない人間も何人かいるのです」
「!」

「朝風さんが実力を見せられれば、なんとかなるかもしれません」

そうか、俺の名前が地味に通った感じなのか、これ。

西芝の特撮推しの一部から悪くねえ反応引き出せたのか?

それを使えるかもこの爺さんは言ってるわけか。

四ツ木清隆光速エスパ―主役・東ヒカルを演じた主演俳優。当時14歳でデビュー。当時はほとんど学校に行けず、三日徹夜でも名演を求められるのは当たり前。眠くなったら撮影所の隅に戸板を敷いてその上に布団を置き、二時間くらい寝ると叩き起こされていたという。光速エスパ―の撮影に慣れた四ツ木さんは、以後どんな撮影も乗り越え、50年以上現役を継続している。『特撮の主演で高く評価されながら、以後のドラマではバイプレーヤーとして活躍した』というタイプの俳優。おそらくその演劇の才能は、星アキラに似る。さんとかがスポンサー募つても金が大なり小なり集まりそうだ。

「具体的な話をお聞かせください」

「この作品のイメージビジュアルをあなたに一品、作つてみて頂きたい」

「イメージビジュアルですか」

「朝風英二の個性を出しながら、百城千世子を活かすように。」

グロテスクでもない、幅広い層に受ける綺麗なものでありながら、死を連想させるものを」

「それで他の西芝の方を説得する、ということでしょうか」

「はい。」特撮畑の朝風”の価値を、西芝内でプレゼンするのです。

そうすれば、今日中にイメージビジュアルを作ることが出来れば……

今日中に、私が”これなら説得に十分だ”と判断できれば。

極めて困難な道ですが、今日中に協賛契約を申し込むお電話を、スターズにできると
思います」

「分かりました。今日23時に、商品をお持ちします。

業務時間外で失礼ですが、その時間に確認だけでもしていただけますか？」

「……本当にできるんですな、朝風さん。

言った私が言うのも何ですが、今日中に作れると返答されるとは。

朝風さんの仕事の速さは聞いていましたが、実は今の今まで半信半疑でした」

「今日中にスポンサー確保したいというのは、紛れもなく自分の本音ですから」

「結果がどうであろうと、イメージビジュアル一作分の報酬はお支払いいたします」

「え、いいんですか？　ありがとうございます」

ありがとさん。

23時の確認なんていう非常識な急ぎ仕事を受けてくれただけじゃなく、依頼料まで
くれるか。

こりや、遅刻はできねえな。

各所に連絡して、一回俺の事務所に帰って、素材準備して作業開始して16時前か。
移動時間込みで考えて、許される作業時間はおそらく6時間半。

大型撮影セットを一つ作るのと同じくらいの時間か？

出来る。

出来るが。

質はある程度犠牲になるかもな。

この作業時間でイメージビジュアルを一つ作るなら、像でも、絵でも、映像でも、質がどつつかで犠牲になりかねねえ。

何か、この土壇場で覚醒する要素とかねえかな俺に。

俺が覚醒できればなー。

無理か。

「死を連想させるもの、でいいんですよね？」

「はい、朝風さん。その撮影は、殺人が主題に入る予定ですから」

「では今日中に。何かありましたら、スターズか自分の携帯に連絡をお願いします」
「あなたはアートでなくデザインを評価されたと聞いています。期待していますよ」

おう。

そういうのが望みなら、そういう傾向で一本仕上げてやるさ。

アートとデザインは違う、つて意見は昔からずつとある。アーティストは創造者だ。

今までに無いもの、皆が見慣れていないものを創る。

斬新であり、表現が出来ていれればいい。

一般人に何を伝えたいかが伝わらなくてもいい。

だからこそ、美術館に飾る絵や像、足り得る。

デザイナーは生産者だ。

普遍的な傑作、見慣れているものを造る。

効果的なもの、メッセージが伝わるものであればいい。

一般人に何も伝わらないのは失敗作だ。

だからこそ、チラシやCMでの広告、足り得る。

アートは個性。

世界の誰にも媚びないことこそが強み。

デザインは普遍。

消費者に媚びるパワーこそが力となる。

アートは美のために。

デザインは金のために。

アートはバカの理解を求めねえから、バカには分からなくていい。

デザインはバカを騙せるように、バカにも分からないと駄目。

アートは自由だ。美しいものを目指し、何でも描いていいし彫っていい。

だからこそ、芸術を作る生き様そのものになる。

デザインは制限だ。注文された通りの美しさを、決められた予算と期間で作り上げる。

だからこそ、それは仕事というカテゴリに入る。

アートは極めれば、芸術家という職業になる。

デザインは極めれば、広告代理店のアートディレクターとかの職業になる。

どっちにも行かねえで、俺みたいな映像業界の美術監督やる人とかもいるわな。

芸術品はその人にしか作れねえ一つがあればいい。希少であることが価値になる。

チラシは誰にでも作れるもんがいい。普及した大量生産品であることが価値になる。

誰も真似できねえものを作り上げる景さんの演技は、強いて言うならアートで。

誰が見ても綺麗なものを作り上げる百城さんの演技は、強いて言うならデザインだ。

手塚監督の映画の作り方はアート要素のあるデザインで。

黒山監督の映画の作り方はデザイン要素のあるアートだろう。

俺も、タイプとしてはデザイナーだな。

けど、親父や巖爺ちゃんの影響もあつて、最近はそのどちらでもある自分を強く持つてる……そんな気がする。

いや。

違うな。

俺に最近最も影響を与えた人間は、きつと景さんだ。

表現するののか？ 伝えるののか？

個性的か？ 普遍的か？

アートか？ デザインか？

誰も作ったことのないものを目指すのがいいのか？

過去の売れた作品の真似をして、売れるものを目指すのがいいのか？

ま、それなら俺は百城さんや手塚監督よりのデザイナーナータイプに分類されるわな。

「いつものように、ただしいつもより速く。6時間しかねえんだ」

俺の事務所にももる。

作成素材も作成機材も、俺が使い慣れたもんがたっぷり揃つてる事務所だ。

ここで燃え尽きるくらいの勢いで、全力を尽くす。

いつものペース管理は、一旦止める。

無茶する時より、更に加速する。

普段の撮影じゃ中々キツイが、やる気が入ってる今の俺と、俺が使い慣れたこの事務所環境があれば、かつてねえほどに加速できる！

あと6時間！

一気に仕上げる！

他のことをやってる暇なんざ……着信！

誰だよ！

邪魔すんなやクソが死ぬ！

あ、柊さんの番号が表示されてる。

じゃあ死ぬな。

作業中断して電話に出て、と。

『だいいじよーぶ？』

「ルイ君？」

あれ、柊さんの携帯の番号なのに、ルイ君の声？ 携帯借りたのか？

『お仕事大丈夫？ 大人がみんな、心配してたよ』

「うん、大丈夫だよ。

ルイ君達も早めに寝るんだよ。

俺はまだちよつとお仕事あるからね。寝る前にはちやんと歯を磨くように」

『はーい』

短い会話を交わして、電話を切る。

あつちの撮影現場もにわか騒ぎになってんのかもな。

俺を心配する声とかも出てんのか？

……心配されてんだな。

いけねえ。

こつちの仕事さつさと終わらせてミニチュアの方も終わらせねえと。

「よその都合で損なんてさせねえよ、誰にも。」

スポンサー逃げたデスアイランドの皆にも。

責任者の俺が他所で仕事始めるとかクソなことしてる……

デスアイランドミニチュア作成チームの皆にも。

よその決定のツケなんて払わせねえさ、絶対に、絶対にだ」

作業開始。

何で作るか。絵？ 像？ ムービー？

ま、造形だな。

実物作る方向で行くか。

三次元工作機を使おう。

仮面ライダーの目の部分は、特殊なデザインの複眼とかは完全均等間隔の工作が難易度高かったりするんで、こういうので製造する。

表面の加工は手作業で後からでもやれるしよ。

悩んだが、音・絵・流れで多角的に魅せられるムービーを作ることにした。

倉庫を漁って、過去に作ったものをいくつか持ってきて、流用する。

「どうすつかな、吐き気を催さない、死の描写か」

血は血糊を作りゃあいい。

死を感じさせるムービーなら、暗いミニチュアの中で血を見せるだけでそれっぽくなる。

普段通りに血糊の赤に黒を混ぜるより、暗いミニチュアに合わせて対極的に血糊の赤っぽさと鮮やかさを増しといた方がいいか？

それとも暗いミニチュアに合わせて同調的に黒度合いにするか。

魅せる物次第だな。

死の実感で、手軽なのは内臓なだけだな。

例えば、塗料にグリセリンを混ぜて水風船の中に仕込む。

これにリモコンで火薬を爆発させる弾着か、火花を出して火薬を爆発させる電点電気式点火装置。をセットし、スーツに仕込む。

リモコンで操作すれば、人間の攻撃を受けて血を吹き出す仕込みの完成だ。

人間の体に怪物の体から吹き出した青い血とか緑の血がかかるシーンとか、こういうので表現できたら最高に良いんだよなあ。

ブルーバック然り、グリーンバック然り、この二色は人間の肌と対になる補色だから映像の上でめっちゃ映える。

赤い血液よりずっと映える。

しかし、百城さんが出る西芝&丁BSのこのドラマに、殺人者は出ても怪物は出ねえんだ。

無念。

怪物なら血糊を水風船に詰めて破裂させるが、人体から血が吹き出す描写なら、特撮現場の慣例的にはコンドームを使う。

程よく伸び縮みする。中に血糊を詰めても液体がとことん漏れねえ。破れた後は人間の破けた皮膚に見える。

最高の血糊。バックだぜ！

んでもって、こういうゴムの風船系の入れ物の中には、色んなものが詰められる。潰したナタデココ。

着色した糸こんにゃく。

血肉に見えるヨーグルト。

肉片に見えるゴム。

「死んだー!」と思わせるなら、この辺やってみるのがいいか。

さーてどうかな。

グロくなりすぎないように。

かつ誰の目にも明確な、心に伝わる、ショッキングでインパクトのある絵面を作る。

ガメラのイリスではできなかったガメラ3の敵怪獣イリスの描写で、模造内臓の繊維が入ったコンドームが破裂することでありアルなダメージ描写をしようとしたものの、当時の技術問題で断念されたという経緯がある。ことも今ならできるしな。

……。

駄目だ、試行錯誤してもグロさを抑えられん。

死の実感、か。

殺人を扱うドラマ・ストーリーなら、殺人と死を上手く魅せる画作りは必須なんだろうさ、そいつは分かる。

クツソ、商業レベルを見慣れた西芝の偉い人を納得させられる質の作品つてなると、かなり悩ましい。安易なもんは作れねえ。

百城さんには綺麗なイメージがあるから、そのイメージも維持しなくちゃならねんだ

よな。

綺麗な死って、『らしい死』から離れんだよなあ。

”まだ生きてるように見える綺麗な死体”とかその最たるもんだ。

バラバラになつてる死体を作るのが一番楽な死の見せ方で、規制で血を一滴も映せなくなつた作品で死の描写は途端にクソ難しくなる。

そういうもんだ。

「死の、魅せ方」

親父が得意だったやつだ。

俺が親父に明確に追いつけてねえやつだ。

いや、きっと、親父の足元にも及んでねえ。

どうすつかな。

あ、また電話。……景さん？

「はい、英二です。どうかしましたか？」

『あ、今大丈夫？』

「大丈夫ですよ」

『ごめんなさい、英二くんお仕事で戻つて分かつてるのに。』

あ、こつちでは英二くんに迷惑かけないように電話とかは控えようって話してて。

でもルイとレイがこっちに電話かけてきて、その時ちよつと気になることを言つてたから……』

「え？ ルイ君が？」

『英二くんなら文字での会話くらいだと誤魔化しちやいそうだなつて。大丈夫？』

何言つたんだあの子。

いや、ちよつと迂闊だったな。

ルイ君とレイちゃんにとつちや、景さんは最も信頼し愛する家族だ。

あの二人が見たり聞いたりしたことは、そのまんま景さんに伝わると考えた方がいいのか。

余計な心配かけてたまるか。

俺が目指すは何の問題もなく進む撮影だ。

「何言われたか知りませんが、大丈夫ですよ。明日には島に戻ります」

『今は作業中？』

「ですね。手近なフックで耳にスマホくつつけて、作業しながら話しています」

話しながら作業して、試行錯誤、試行錯誤。

「ちよつと苦戦してます、死の表現で」

『英二くんはあんなにリアルな死体の人形を作つてたのに？』

「はい。というか、死体を出さないで死を表現している感じですね」

『いいことだわ。あれ、ちよつと……というかかなり食欲がなくなるから』

「あはは、すみません。撮影は上手く行ってますか？」

『うん。茜ちゃんや真咲君達が色々教えてくれるから。』

上手演劇では客席から見て、撮影ではカメラから見て、右側を示す言い回し。一般には知られていない言い回しのため、夜風も最初は知らなかったはずだが、当作52話・原作アクターズジュエリー3話で夜風が使っているため、夜風は画面外でかなり勉強し、頑張つて周囲から学んでいると考えられる。と下手上手の逆。客席・カメラから見た左側を示す言い回し。とか。

ホリゾントスタジオの背景のこと。とか。

内トラ撮影スタッフや、スタッフの家族がやるエキストラのこと。撮影スタッフが多ければ多いほど用意しやすく、急場しのぎの人員が多いスタジオ大黒天が用意できない、スタジオ大黒天の弱点というべき部分。スタジオ大黒天は撮影スタッフとその家族でエキストラを賄えない。とか。

たくさん学んだから、もう黒山さんに素人だなんて笑われないわ』

「笑われたんですか……」

『素人のゲロ女だなんて竜吾君にも笑われたから、そつちも撤回させないと』

「無理して気張らないことも選択ですよ。

役者は癖者が多いですからね。

景さんは役者です。語るより見せる方が説得力あると思います。あなたの場合は

……」

『演技を見せる、ね』

「その通りです。

周りを見ながらなら個性を出していつてもやっていけるとは思います。

あ、でも危険なことは駄目ですよ。

茜さん達以外とも仲良くやれてますか？ 百城さんとか、あの辺りの人達とか」

『千世子ちゃんは——怖いわ』

「あ、そうですか……」

『初対面の時からなぜかずっと怖かったわ』

「いえ、基本的に可愛い人なんですよ、九割は可愛いで構成されてる人なんです」

『可愛く笑ってても怒ってるみたいで怖いから、本当に怖い』

「いや、まあ、その」

『英二くん、目を覚まして。千世子ちゃんは怖い人だわ』

「景さん、百城さんを悪く言われると俺気分悪くなるんです。

悪く言ってるわけじゃないのは分かります。景さんは怖いって言ってるだけですからね。

でも俺は景さんの口からそういうの聞くと、悲しくなります。控えて頂けると嬉しいです」

『……そう』

はよ帰らねえと。

初対面の時からあつた景さんの中の“怖い”が膨らんじまつてるみてえだ。

『でも、英二くんが造形で苦戦してるって聞く度に驚くわ。』

そしてそんなことに驚いてる私自身にも驚くの。不思議な話ね』

「死の表現って、難しいんですよね。

特定の経験があると邪魔になつたり。

特殊な経験があると質が上がったり。

俺に出来る表現と、出来ない表現ってがあるのかもしれない」

『……あのね、英二くん』

「なんですか？」

景さんの言葉を待つ。

数秒の沈黙。

急かさず、景さんの言葉を待つ。

『お母さんは好き？』

その問いに、すぐに答えた。

「はい、好きです」

俺は、母さんの死体よりショッキングな造物を作れるのか、作ることが許されるのか

——ふとそんなことを、何故か思った。

『私も、大好きだったお母さんが目の前で冷たくなつて……悲しかった』

「……」

『私も、英二くんを演じられるようになったら、英二くんの気持ちが分かるかな』

「きつと、もう分かつてるんですよ」

『え？』

「声だけでも分かれます。」

景さんは俺を分かってくれてます。

あなたは他人の気持ちがちやんと分かる優しい人です。

死を理解できる、心ある人です。だから景さんがいて、俺は救われてる部分もあるん

です」

『英二くん』

「景さんのおかげかも知れません。

母が死んだことがとても悲しかったと、素直に言えるようになったのは。

境遇も人生も違う俺達ですけど、悲しみの形は同じだったのかもしれない。

それが幸運にも、奇跡的に、偶然とめぐり合わせによつて、こうして出会えたのは

……」

そうだな。

「まるで運命みたいです」

』

きつと、そいつは、とても素晴らしいことなんだ。

『……英二くん、きつと大丈夫』

「何がですか？」

『その仕事も、きつとパパつと片付くわ』

心強えことを言ってくれやがる。

景さんがそう言うのと、実際にそうな気がしてくるから困る。

『黒山さんが、私にした最初のアドバイスに……』

”バカでも分かるように演じる” っていうのがあつたの』

「ああ、それで最初の景さんはあんな演技だったんですね」

『あれはきつと、バカでも分かるようにやればそれだけで大丈夫だ、ってことだと思っ
の』

いいアドバイスだ。

『お前の演技は分かってももらえれば絶対に認められる』って、最大の評価の言葉だと
思うの』

アート、デザイン。

芸術、娯楽。

映画の分野における多くの要素に刺さる、簡素かつ究極的なアドバイスだろうな。

『だから言うわ。英二くん、バカでも分かるようなものを作れば、あなたなら大丈夫』
「……ありがとうございます。なんとかなる気がしてきました」

良いこと言うぜ。

「バカにも分かるように最適化すれば最強な演技」をしてる奴が言うと言説力が違
え。

『あなたを分かっている私がここににいるから。

ここで待ってるから。

英二くんが帰ってきたら、落ち着いてお母さんの話をしましょう』

「——。はい、喜んで」

電話を切る。

俺の手が、異様な速度で動き始める。

先程よりも速く、更に速く。

思考の壁を越えたように、俺の思考が今までに無い発想を生み出し始める。

己の限界を超越するように、今までの俺が今の俺に踏み越えられる。

たかだか数分の会話が。

俺の心のあり方を変え。

発想力こそが最も寛容な造形の能力を、一気に引き上げる。

決められた時間の中で、俺が作れるものの質の上限ラインを、一気に引き上げる。

……それは、きっと。

親父の死と、おふくろの死に、俺の心が違う向き合い方を出来るようになったから。

同じように親がいなくなっても頑張ってるあの人と出会わなかったら、俺はどうなっ

てたか。

そんなもしもの世界で、この年、この月、この日、この時間の俺は、どんな性格をし

ていたか。

思いを馳せる。

そんな自分が想像できなくて、笑いがこみ上げた。

何気なく思い、想う。あの人になら、魂を売ってもいいと思った。

現在、23時過ぎ。

俺が作り上げたミニチュア舞台の『薄暗い世界で血塗れのナイフが落ちる』というシンプルなムービーは、一回の再生で、西芝の合格を貰った。

「この短時間でこれとは。想像以上です。」

以前から何ヶ月もかけて作っていたものではないのですか？」

「デスアイランドのスポンサーになっていただければ、もつと素晴らしいものをお見せします」

「ほほう」

「もちろん、それは西芝がスポンサーの作品で、です」

「素晴らしい」

素材は既造物の改造流用。

音楽は既存のものそのまま流用。
演出もプロの真似。

俺が個性を出したもんなんざ、造形の部分だけだ。

だがそれでも、合格は貰えたらしい。

俺と百城さんのコンビはこれで、スポンサー獲得相応に評価されたと言っている。

「では、これで」

「はい。朝風さん、よろしくお願いします」

「『人を殺したことを隠して友人と遊ぶ女子高生』も、十二分に彩りますとも」

「これまでの百城千世子とは違うキャラ付けですが、お願いします」

ああ、任せてくれや。

巖爺ちゃんの銀河鉄道の夜と平行になるが、真面目にやりきってみせるさ。

現在、00:18。

「日付変わっちゃったわ」

デスアイランド撮影七日目。

余裕があったはずのミニチュア作成スケジュールは、完全に破綻していた。

「……ミニチュア終わってねえのに七日目突入しちゃった」

大丈夫大丈夫。

もう皆帰っただろうけど俺がこっから頑張りや大丈夫。

こっから朝まで頑張りや大丈夫。

全力集中して、フルスロットルで仕事した後で、徹夜二日目に突入だから結構キツく
なってきたが、俺ア頑丈だから大丈夫だと自己暗示だ。

一人でも頑張ろう。

あークソ、朝の島行きの便に間に合わせるにはどんだけ超特急せにやなんのか。
いや頑張ればきつと。

自分を信じろ。

この二日でミニチュア終わらせねえと結局後に食い込むぞ。
今日頑張った意味がなくなる。

頑張れ俺。

徹夜が昭和の人間の頑張り方だとかいう考え方を超越してみせろ！

「あれ？」

電気がついてる？

なんでだ？

ミニチュア作成は、俺がないから止まってるはずなんだが。

なんで電気がついて、中から何か作ってるみてえな物音と、人の声が聞こえるんだ？
作成所に入る。

部屋角のソファで寝かされてるルイ君とレイ君が見えた。

静かになっているその辺りのソファの正反対の角に、スタッフと話している黒さんと柗さんの姿が見えた。

なんで。

なんで、誰も帰ってねえんだ？

黒さんがこっちに気付いて、俺に声をかけてくる。

「よう、遅かったな」

「おかえりなさい先生！」

「早かったですね！」

「朝風さん、後でチェックお願いします」

「なんで、皆さん……」

「エージがない間も作業進めておいてあげるんだって聞かなくてな。

だからそんなこいつらに頼まれて、俺もやる気なかった仕事してるってわけだ」

そうだ。

スタジオ大黒天は、登録上、このミニチュアを使うCMの撮影制作担当だった。

ここでの作業に自然な流れで参加するのは、非常に容易。

そして、俺がいなけりや、それだけならこのミニチュア作成は止まるが。

黒さんがいれば動く。

この人も、単純作業の監督と、出来上がったミニチュアの各部分の採点くらいは、余裕で出来る人だからだ。

そして、この人には肩書きがある。

やる気がある人達の上に立って、俺が突然抜けた部分を臨時で埋めるには相応しいくらいなの、そんな肩書きが。

俺が居ない間、皆、ずっと仕事してくれたのか。

俺が勝手に抜けたのに。

俺が抜けた穴を埋めて。

黒さんっていう総指揮を見つけ出して、据えて、そうやって作業続行してたのか。

「英二さん、頑張ってたじゃないですか。俺達だけ帰れねえなって」

「仕事完遂できないの気持ち悪いんで」

「僕らがやった作業の完成形、見たいんですよ」

「指示ください！」「私の絵とかまだ見てもらってませんし」「あー眠い。もうひと頑張

り」

「この辺傑作なんですよ!」「俺の出来の良い岩見てくださいよ」「コーホー」

「大丈夫ですよ、この労働もバイト代出るのよ」「本当にお疲れ様です。コーヒー飲みます?」

「皆さん……」

感謝の気持ちが大きすぎて、感謝の言葉が出てこなかった。

「ありがとうございますっ!!」

それでも、無理矢理に絞り出した。

感謝の言葉を無理矢理に絞り出した俺の背中を、黒さんが強烈に叩く。

「あでっ」

「知らねえのか、英二。撮影は全員でやるもんだぞ」

黒さん。

「そしてそれはな、

『この人は見捨てられない』

『この人と一緒に仕事をしたい』

って気持ちがないけりや、絶対に成立しねえんだよ」

……ああ、まったくだ、まったくもってそうだ。

至極納得できる。

さあ、ラストスパートだ！

ありがとうと皆！

これで朝までに、きつと間に合う！

デスアイランド：八日目：朝風英二の帰還

俺は『それ』を最初、理性的に、論理的に理解していた。

ただアキラ君は感覚的に理解していたんだらうなと思う。

俺は撮影というシステムを理で分解し、アキラ君は心で理解していた。

多分、心のスタート地点と、目指したものの違いが理由だらうな。

俺は『完成品』という美しいものを目指し。

アキラ君は、共に演じていた人達を見ていた。

だから、『それ』に深く思うこともなかったんだらうぜ。

あれは、そう。小学校か中学校か、多分そんなくらいの歳の時にした話だ。

「朝風君。僕らの撮る映画とか、その原型の舞台演劇とかって、総合芸術なんだって」

「そうですね。アキラさんの言う通りです。」

テレビ番組や映画など媒体の違いもありますが、これらは芸術を総合したものなんです
「すね」

「でもイマイチ、ピンと来ないな」

『総合芸術』の四文字でピンと来ない感性は、アリサさんは心底見下すだらうな。

あの人感性鈍い人をナチュラルに格下に見るからなあ。
しやーねえ。

アリサさんがアキラ君の評価落とさないよう、ちつと補足しとくか。

友人が母親に何か言われて落ち込む姿とか見たくねえ。

「現代の演劇は、どうやって成り立ったと思いますか？」

「それは……誰かが思いついたからかな」

「そうですね。アキラさんのそれも正解です。でも、『総合芸術』なんですよ、あれは「？」

「音楽芸術家が、音楽を作り、発展させました。

絵画芸術家が、絵画を作り、発展させました。

彫刻芸術家が、立体を作り、発展させました。

歌手というものが、音楽に歌を付けます。

演者というものが、体の動きで何かを表現する技術を育みます。

服飾職人が作った服は、やがて舞台の上のきらびやかな服を作る技となります。

小説家、戯曲家と、『物語』を文字で作り上げる人間が現れ、舞台を作っています」

「……あ」

「先人の技術を習い、背景を書きます。

庭職人のように草花を彩り、舞台を作ります。

彫刻のように素晴らしい立体のスーツや木岩を作ります。

作った音楽を流し、合わせて用意した歌手が歌を歌い……

芸術の服が、芸術の背景の前を跳ね回ります。

そして、先人の技術に倣って、洗練された脚本の通りに役者が物語を紡ぎ上げます」

「総合、してる?」

「はい、まさにその通りです。

テレビで何気なく見る番組。

劇場で何気なく見る映画。

あれはですね、人類の積み上げてきた芸術の総まとめなんです。

人類がずっと作ってきた”素敵だと感じられるもの”の集大成なんですよ」

「ああ、だから総合芸術なのか!」

「はい。そこに『機械』という多くの先人の作った技術に詰め込まれたもの。

『カメラを使う技術』という多くの人達の研鑽と研究が詰まったもの。

照明、合成、特撮……多くの各分野の人達の技術が詰まったもの。

それらを更に総合した総合芸術こそが、テレビの番組や劇場の映画と言えるのです」

映像の構成要素。ああいうのは、感覚で理解ができる。

今の番組一つに流れる血脈に、何千年前の人間の技が、何百年前の人間の想いが、一体どのくらい流れてんのか想像もつかねえ。

宇宙のどっかに宇宙人がいても、地球の演劇やら映画やらと同じもんがあるとは思えねえ。

だつてそうだろ。

演劇や映画は、遠い昔から”素敵なものを見たり聞いたりしたい”つて思つた人達が作つた、数々の全然違う芸術が、奇跡的に全部一体化したようなもんなんだぜ。

特撮で言う、てんこもりフォーム！

地球人類史そのものみたいなこれが、他の星にもあるとは思えねえな！

「俺は造形です。

俳優さんと同じことはできません。

音楽と同じことはできません。

ちよつと手伝う程度のことならできますけどね。

俺達は皆で違うことをしながら、同じものを目指してゐるってわけです」

「映画は総合芸術、か……深いね、この言葉は」

「ですね」

そうだぞ。

主役も脇役も、表舞台の俳優も裏方も、皆で力を合わせてんのさ。
「だから、一人じゃ撮れないんですよ。」

天才一人で作れない映画つてもものがあるから、『これ』は面白いんです
アキラ君と話したことだ、忘れてなんかいいえ。

忘れたことなんてねえ。

周りに助けられる度、そいつを思い出している。

そんな思い出を抱えながら、俺は今日も作り続ける。

現在00:32。

デスアイランド七日目の撮影が始まる朝の挨拶まで、10時間も残ってねえな。

人が動く。

人が走る。

皆が助けてくれて、それでようやく仕事を間に合わせられる、それが俺だった。

「皆さん！ 朝までに必ず仕上げますよ！」

「はい！」

「はい！」

「がんばりますー！」

俺が居ない間、皆が進めてくれたおかげで助かった。

”やる気があればできる作業” っつてのと、”やる気があってもできねえ作業” っつてのはある。

作成難易度と作成必要時間つてのは分けて考えなくちゃならねえ。

例えば、千羽鶴とかなら小学生でも作れるが、プロでも作るのに時間がかかる。

千羽鶴ならプロが徹夜するより、小学生一クラス分が作った方がはえーかもな。

俺が戻って来たところで、必要な時間が多いもんが丸々残つてりやヤバかった。

そうなる必要になんのは技術じゃなく、人手と時間だからな。

その辺りも計算に入れて、黒さんが『人手と時間の要る単純作業』から優先的に片付けた方がいいとアドバイスしてくれてたらしい。

やるなヒゲ！

尊敬すつぞ！

ロボットが出て来る創作で例えるなら、俺以外の人達がパーツ作りや仮組みまでやってくれていて、後は最後に技術の要る本組みと最終仕上げだけだ！ っつてなってる状態だな。

移動時間も考えりや、残り六時間。

そんだけありやあ十分終わる。

皆が作ってくれたミニチュアの構成要素を、俺が最後に完成品に仕立て上げ、微調整を加えりやいい!

俺が”予定より速くたくさん木を作り終えてたことを褒めた人達”は、俺が抜けてる間も変わらずその技能を發揮してくれてたってわけだ。

有能。

分からないことがありや折を見て俺に聞きにくるのも好感触だけ。

「朝風さん、島のこの部分、ここの空間って意味あるんですか?」

「ああ、そこは多分爆破すると思います。」

実際に火薬仕込んで爆破するか、合成になるかは分かりませんが」

「爆……!?!」

「島での撮影が全部終わり、CMや宣伝の撮影が全部終わってからになりますけどね。

もしかしたらもう使わなくなった島の引きの爆破シーン撮ろう、ってなるかもです。爆弾の爆発シーンをリアルに見せるための一演出ってやつですよ。

俳優の近くで爆薬大爆発。

そしてミニチュアの中で小爆発。

二つの映像を繋げて、リアリティを出すんです。

それが提案されたら、以後追加の撮影もできなくなるので、俺は反対すると思いが
「が」

「ああなるほど、朝風さんはそっち側なんですネ。

でもなんでそんな勿体無いことしようとするんでしょう。

ミニチュアは残しておけばまた何かに使えらると思うのですが」

「残しておきたくないんですよ、きつと。

爆破すればそのミニチュアはゴミとして計上できますから」

「え？」

「こういうミニチュアとか、特撮スーツとか、そういうのって倉庫に保管してらるんす。

でもスペースには限りがありますよね？

だからどこも結局、レンタルの倉庫を借りてそこに色々置くんすよ。

倉庫を借りる金が勿体無いと思ってる人、倉庫のスペースが残ってないことを知る人

……

そして、そういう偉い人の下でその意向を反映する人。そういう人もいたりするわけ

です」

「ああ、なるほど……なんて世知辛い」

「使い途少なそうなものは保管したくなく、倉庫もレンタルしたくないのです」

「朝風さんが反対意見は出すと言いつつ、否定的に言っていないのはそういうことですか……」

「こういうミニチュアを保管しておく倉庫のレンタル費や維持費だつてタダじゃないんですよ」

会社保有の倉庫だと土地代、施設代、諸々の税金と施設維持費、とか。

レンタル倉庫だと掃除にかかる手間にレンタル料、とか。

そんな感じに、”昔作ったものをずっと持つておく”つてだけで金はかかんだよ。

クソ面倒臭え。

元西映で現フリーの制作やつてる山寸幸司さん最近は『響』小説家になる方法』の実写映画に参加。『響』の制作は西宝なので、スタッフは特撮アクションヒーロー系の人や、戦隊系の制作、ライアーゲームやハンターハンター劇場版の制作など多様である。原作漫画の主人公・響は容姿は可愛いが性格が怖いくらい可愛くない系の究極系のような子。が言つてたな、なんだっけ。

そうだ、『テトリス』だ。

フリーになつたら、保有してた撮影用備品があんまりにも多くて、詰め込んでたらまるでテトリスだとか言つてたっけ。

今年レンタル倉庫借りてそこに荷物移したとか言つてたな、山寸さん。

個人倉庫に特撮セット用具とかギツチリ詰まってるとか。

面白い撮影企画があったらその企画のために倉庫の一角貸すよ、とかも言ってた。やっぱいいよなレンタル倉庫。

金しか面倒がねえってのはいい。

俺も事務所の倉庫には相当な量の物しまつてっからなあ。

デスアイランドのミニチュアが最後に倉庫にしまわれるか、廃棄されるか。

俺にも分からん！

だが撮影までは全力を尽くし、最高の映像を撮ることに集中すべし。

後のことは後に考え、今は今やるべきことに集中しねえとな。

「ん？」

連絡だ。

スマホが震えるとかちょっと身構えるな。

監督か助監督が助け求めてきたら、つてもしもを思うとクツソ怖え。

ん？

真咲さんだ。

めっずらし。

LINE番号教えといてよかったな。急用か？

と、思ったら。

俺が室内展示装飾用に縫い上げて、撮影現場に置きっぱなしだったドレスを来た茜さんの、顔真つ赤な写真が送られてきた。

え？

なんじゃ？

「……???
???

綺麗だがどうしたんだコレ……」

ドレス着ると本当に綺麗だなとかそういう話は脇に置いて。

なんだ。

どういう流れでこれ送られてきたんだ。

『本日の撮影でポカやらかしたアカネさんへの罰ゲームっす』

真咲イ！ 真面目に仕事してろ！ いい写真をありがとよ！ やるじゃねえか！

『ちなみに写真送るのは罰ゲームの中にはなかったんすが俺の自主的な努力というやつで』

何の努力だよ！ よくやった！

とりあえず感謝の返信をしたところで、茜さんの方からメッセージが来た。

『無しや、今の無し！』

えー。

いやまあ恥ずかしいか、これ。

そりやそうか。

『消せ！ 消すんや！ せんかったら絶交やからな！』

絶交は嫌だな。

消しとくか。

消しましたよ、と送信。

なーんか色々起きてんなあ、デスアイランド。

しかし良いもん見ちまった。結構集中して見ちまったが、そんなら許して欲しい。

「朝風さん、デスアイランドの方から連絡ですか？」

「いえ、ちよつとしたことです。手塚監督の時のように、折り返し電話しなくて良さそうです」

「あの、島の北東側の木の並びなんですけど……」

「ああ、あそこに気付きましたか。

そこは原作デスアイランドの方に設定があるんです。

下に色々埋まっているため、木の並びが変なんですよ。

置いてある岩の右二番目の木のあたりの裏を見ると、仕込みがあります。

ほら、そこにはこの木を植えてくれと指示しておいたところですよ。あそこです」

「おお……あの辺私達も作ってたんですが、よく覚えてますね」

「集中して見たものはそうそう忘れませんよ。頭の中に写真みたいに保存されています」

「……黒山さんも同じようなこと言っていました」

「俺の場合はあの人の真似なんですよ。あっちがオリジナルです」

「デアスアイランドの仲間の近況を見て、気合がみなぎった。」

「気がする。」

02:12。

いい感じだ。

進捗悪くねえぞ。

『30日に720の仕事を終わらせろ』より、『1日に24の仕事を終わらせろ』より、

『5時間で5の仕事を終わらせろ』って言われる方が緊迫感と焦りが出る。

飯食つてる時間でさえ、無駄な時間費やしてるように感じるからな。

緊迫して焦ると、手元が狂う奴も出て来る。

逆に「時間を区切ってもらえると、その時間だけ頑張ればいいと思えるから全力で集中できる」って人もいるから、ここは向き不向きだな。

その辺のスタッフ個々人の向き不向きは、粗方見極めて黒さんや柘さん達にも伝えてある。

おかげで仕事の割り振りもサクサクだ。

俺が手が離せない時でも簡易の指示なら黒さん達が出してくれる。

うーわ楽。

予定されてた制作会社じゃなく、スタジオ大黒天が代理で来てくれて助かったわ。と、思ってたんだが。

「エージくん、コンテの決定稿ってない？」

「コンテの完全完成稿ですか？ まだないですね」

はて、コンテと来たか。柘さんは求める立場だよな、そう言われてみりや。

しっかし睡眠時間削ってまで長時間ハードな作業続けると、どんな美人でも化粧が落ちてクマが見えてきて美人度下がるもんなんだが。

この人常時美人だな。

容姿が良いのもあるが、タフなんだ。良いこったぜ。

タフな美人は、作業の現場じゃ頼りになる。

「コンテあつたら、もうこのミニチュアは仕上げでいいと思うんだけどね」

「あれ、コンテ無いと駄目ですか？」

前に予定されてた制作の人は、ミニチュア完成してからコンテ切るって言ってたんですが」

「やり方次第かなあ。

その制作って、ちよつとの粗は気にしなかつたんじゃない？」

ただ私の場合、コンテ切って一回撮影しないと、予想外の粗が見えないと思うから

……」

「あー」

こだわらってやつか。

いやでもそうだな。

俺もコンテが完全に完成してからの方が、ミニチュアの完成度は上げられる気がする。

柗さんの言う通り、コンテ決定稿切って、その通りに一回撮影して、それからミニチュアの調整してみた方が万全か。

絵コンテは映像の設計図だ。

カメラにどういう画を映したいかを走り書きし、画面の絵の構図、そこで流れるBG
MやSEなんかを設定し、映像を絵で雛形に起こすもんだ。

仮面ライダーとかなら、コンテは用紙とシャーペン一本ありやあ十分描けるもんだ
な。

OP描いて、撮りたい展開描いて、合成素材の構図を描く。
んで他のスタッフが更にそこにメモ書きしたりすんだよな。

仮面ライダーのコンテは大体そんな感じで作られてるってえわけだ。
でも今はコンテねえしなあ。

書ける手塚監督とかも島だし。

ねえもんをねだつてもしかたねーだろ。

ん、黒さん？

「エージ、ちよつと待つてろ、絵コンテ書いてやる。

どうせこのミニチュア使うシーンなんざ本編と宣伝の一部だろ。

テレビCM分と、ネットCM分と、映画館の予告分でいいんだな？」

「え、いいんですか？ 撮影の後に手塚監督か助監督に描いてもらおうと思つてたんで
すが」

「おう」

「ではすみません、お願いします黒さん。」

出来上がったら手塚監督とプロデューサーの方に送って申請しますね」

よっしや助かる！

黒さんの絵コンテならどこに出しても「これがあるならこれ使おう」ってなるぞ！

しかもCMの出来も予定以上に良くなるぜ。

何せ黒さんが書いた絵コンテだからな。適当にやつても質は高えはずだ。

こいつあデスアイランド成功要素になってくれそうだ……最高だな。

「エージくん、私の方をなんで見ないの？」

「俺は柘さんの絵、好きですよ」

「私は何も言っていないよ」

「絵ってというのは、そこに込められた魂が重要なんですよ。俺の信条です」

「エージくんも墨字さんも絵上手いし綺麗だけど、私ド下手だもんね……」

「柘さんは美人だからセーフ、セーフです。」

ほら、美の総合値でセーフラインに入ったみたいな」

「美の総合値とか生まれて初めて聞くレベルの造語をありがと。あー、多芸な人はい

よねえ」

終さんがちょっとふてくされている。

美人というより、少し子供らしい、可愛らしい表情の動きだと、そう思った。自分にできることをすりやいいんだよ。

それが制作だろ。

さて、撮影進めるか。

03:20。

「エージ、出来たぞ」

「え、めっちゃ速いですね……黒さんどうなってますか」

「短時間しか流さねえCMとトレーラーにんな時間かからねえよ。」

ましてや俺の映画でもねえのに、そんな悩んで最善なんか目指すと思うか」

「ごもつともです」

はっえーなあ、オイ。

仕事速えだけの雑な仕事ならぶつ殺すぞ、と一瞬思ったが。

そもそもこの人がそこまで低レベルなもん出してくるわけがねーわな。

と、思いつつ、絵コンテを拝見し。

俺は、息を呑んだ。

「なんだ、これ。うわっ、分かるやつには分かるやつ。

分からなくても、分からないなりに出来の良さが伝わってくるやつだ。

デザインじゃねえ。

アートだ。

誰が見ても分かるような。

デザインの良さがあるアート。

カメラワークと画の作り方が尋常じゃねえ。

忌避される奇抜さがねえのに、新鮮さを鮮烈に感じさせられる画面の構図。

この絵コンテの通りに撮影して、予定されてるCMや本編の引きのシーンに組み込めば……作品自体のレベルが、ワンランク上に行くぞこれ。

手慰みでこんなレベルのもん出してくんじゃねえよ……血が騒ぐだろうが。

ちよつと疲労でボケてきた頭が、完全に覚醒するだろうが。

もう絶対に、ほんの僅かにでも手が抜けなくなっちゃまったじゃねえか。

「いいですね、これ」

「じゃあ俺はちよつと見回りしたら寝る。夜風の弟と妹が俺より先に起きたら起こして

くれ」

「はい。ありがとうございます」

おう勝手に寝ててくれ、おやすみ。

まあしゃあねえな、ちみつこ達もとうにおねむの時間だ。

しつかしなあ、十時間かけても仕事終わらなくて徹夜してる人もいりやあ、こうして一時間ちよつとありや最高の仕事して寝始めるオツサンもいる。

要領つてやつは肝要だと思ひ知らされるぜ。

今まさに徹夜してる俺が言うのは本当になんだけどな！

絵コンテのデータ送って、スターズ事務所にいたプロデューサーから一発OK出たところ、この絵コンテが本採用って前提で話を進め始めた。

手塚監督の性格はよく知ってる。

自分より偉い人の命令には逆らわんのがあの人だ。

事務所に先に話通しとけば、朝監督が起きてそこで話通るだろう。

手塚監督と黒さん知り合いだったはずだし、その話通るのもスムーズそう。

……スポンサーに数時間前まで振り回されてた俺が、今は監督振り回す立場にいるってのが、もうなんか世の複雑さを自己証明してるみてえだな！

しかしこの時間までプロデューサー事務所にいたな。

スポンサー入れ替わりのアレの件の残業だろうか？
プロデューサーも大変そうだ。

黒さんの絵コンテを何度も読み込み、それを参考に軽く試し撮りしてくれた柗さんの映像を参考に、ミニチュアを調整していく。

「どう？ 海の反射調整できた？」

「ちよつと表面を削つて均ならしい感じにしました。

海の表面は波ですからね。

波の形状は、特定の角度から当てられた光を、どの方向に反射するか、になります。仮面ライダーとスーパー戦隊のマスク加工の応用ヒーローのマスク技術の進歩は、マスクに如何にして光を反射させるか、という技術の進歩と同義でもある。人は無意識の内に、光を反射する鏡や綺麗な金属に美しさを感じるからだ。仮面ライダーウィザードのように『宝石』を連想させたいならば、ミラーによつて複雑に乱反射させた光を、ミラーの上に被せたポリカバーに当てて表現している。特命戦隊ゴーバスターズであれば、各ヒーローのゴーグルを作る際、各々のカラーに合わせたパーツにミラー処理を施し、ハーフミラーで作られたサングラスを連想させる鏡面光沢を実現している。かつ、これらのミラー系マスクは、ヒーローを正面から撮るカメラを極力映さないように光反射方向を計算した工夫がなされている。で少し光の角度を調整しました」

「うん、いいね。」

海面の光の反射がいい具合にミニチュア感を消してる。

さつき撮った時はほんの僅かに光の反射が見るのに邪魔になってたけど……それも

もう無い」

「よっし！」

「私の仕事は大体これで終わりにしてもいいけど、エージくんはまだやる？」

「もうちよつと調整しながら、質を上げて行きたいと思います。」

想定してたミニチュアのレベルには、まだちよつと届いていないので」

「そっか。じゃ、私も最後まで手伝うよ」

「ありがとうございます！」

集中。本気で集中。周りの声が聞こえなくなるくらいに、集中。

「墨字さんは、本当にもう……エージくんのこと考えてます？」

「考えてるぞ。こいつが俺達みたいなの人種にとつての幸せってやつだ」

「そういうもんですかね」

「本気で夢中になれるもんなんて、世の中の大半の奴が見つけてねえんだ。」

俺達みたいなのはそいつらよりずっと幸せだろうし、ずっと恵まれてんだらうよ」

「エージくんが道を踏み外したら、って時々心配になるんですよ、私は」

「事あるごとにそれだな、お前らは。アリサのババアとかもすぐそれだ」
いやーいいもん見た。

あの絵コンテ見てから、疲れ切ってる体に心の力が漲って仕方ねえ。

HPが残り1になっても『HPを10消費する』スキルを何度でも使えるみてえなアレ。

パワーが湧いてきやがるぜ。

こいつがモチベーション、ハイテンション！ 気力が体力の枯渇を凌駕してやがる！
なんか深夜テンションになってんな俺。

疲れてんのか？ いや、疲れてるけど疲れてねえみてえに頑張ってる状態か。

へっへっへ、限界がねえみてえだ。

もう周りの声も、LINEの音も聞こえる気がしねえぜ！

「決めんのはエージだぞ。

どんな映画を撮るかの自由も、どんな人生を生きるかの自由も、邪魔すんのは良くねえ」

「そりやそうかもしれないけどね」

『幸福の正解』も、『人生の正解』も、『映画の正解』も。

たったひとつの正解以外は認めねえ奴は、絶対どっかでコケるぞ」

「エージくんが好きなことやってるのは分かるんですよ。

横顔見ると楽しくて楽しくて仕方ないってのも分かるんです。

でも、なんというか。

弟がゲームに嵌って毎晩徹夜してて、体調が心配になる気持ちってこういうのなのか
なってる」

「姉か、お前は」

「姉じゃありませんよ。

家族じゃないから、エージくんは私達の忠告あんま真剣に聞いてないんじゃないか
な」

「はっ、こいつがそんなタマか。

家族の忠告もお前の忠告も同じだろうよ。

お前がした忠告はちやんとこいつの頭の中に入ってるはずだ」
「だといいですけどね」

終さんが飯抜きを許さない人であってくれたおかげで、助かった。

じゃなきゃ、とつくに脳味噌動かすガソリンが尽きてたかもしれねえ。

まだ俺の体には、脳味噌を動かすガソリンが残ってる。

あ、そうか、この絵コンテ。

イマジナリーライン撮影における『想定線』のこと。例えば、『□』の形の領域があり、北西と南東の角にカメラを一つずつ、北東と南西の角に一人ずつ俳優を置くとする。この状態で俳優に口喧嘩をさせ、撮影するとする。北西のカメラから見れば、左に見える俳優が右に見える俳優を罵倒しているように見えても、反対側のカメラからは右に見える俳優が左に見える俳優を罵倒しているように見える。カメラの位置次第で、俳優が左右完全に逆に見えてしまうのだ。人間の脳はこういった左右逆転処理にも多少負荷をかけられてしまうので、こういった逆転は極力避けた方がいい。この北東と南西の俳優を繋ぐ線を『イマジナリーライン』と言い、カメラは基本的にここを越えて映すべきではないとされる。それを逆手に取り、意識的にイマジナリーラインを越えさせる場合もある。アクタージュの場合、夜風が嘔吐した時の撮影で、俳優の左右が逆転しないよう、夜風を上手から映すカメラと正面から映すカメラのみであり、イマジナリーラインを越えた左右逆転が起きないようにしている。の魔法か？

後で人を撮った映像を差し込むと超映えるやつ！

なら、ここの木を調整して……うおお、ぐっと良くなった。
やっぱー。

黒山監督のパワーに引つ張られて、俺の頭も良い発想が浮かぶ状態になってやがる！
良いぞ、俺今調子良いぞ。

残り時間フルに使って、ミニチュアのクオリティ上げられるだけ上げてみるか！

「こういう世界に居させていいのか、こんなところに居ていいのか、不安に思ったりもします」

「お前怪物映画の冒頭で主人公の言うこと信じず食われて死ぬババアみたいなこと言ってますな」

「なんで墨字さんはそんな的確にムカつく言い回しができるんですか!？」

あー楽しい！

やる気がありや睡眠時間の不足も体力の枯渇も関係ねえな、こりや！

06:36。あー、終わった！

疲れて、眠くて、もう死にそうだ。

だが、とてもいい気分だ。

楽しかった。他の人達も皆、なんだかんだやりきった達成感を覚えてたつぽい。

これで上が働いた時間の分の給与払ってなけりやいわゆる『やりがい搾取』だろうが、タイムカードの通りに金が払われることは確約されている。

皆がタイムカード提出して、俺がハンコ押せばいいだけだからな！

残業に金を払わん構図を作る気はねえぞ、責任者の俺は。

「じゃあ俺、これからデスアイランド撮影七日目に参加してきます」

「移動中に少しは寝ろよ」

「はい。皆さんお疲れ様です！ ゆっくり休んでください！ ありがとうございます
！」

皆が口々に、呻くように俺に返答してくれる。

つーか一人たりともまともな言語発してねえ。

サンキュー皆。

夜通しフル稼働で力貸してくれて助かった。

徹夜でマラソン続けたようなもんだよな。だけどおかげで完成したぜ。

デスアイランド撮影終わったらまた改めて礼しに戻って来るからよ、またな。

「電車と船に揺られてるだけで寝ちまいそうだ……」

いかにいかに……

今変なところで寝落ちしたらどこに行っちゃおうか分かんねえぞ……」

今、俺が運転したら確実に事故る。

だから電車とか駆使して移動しようと思ったんだが、ヤベえ、予想以上に消耗してる。寝るな、寝るなよ俺。

よし、船乗った。

……ん？

いや、待てよ。この船は本土出発で島到着の一本道。

到着したら船の人が起こしてくれるな。じゃあ寝ていいか！ よし寝よう。

誰か俺の睡眠邪魔したら海に沈めて藻屑にしてやんぞ、じゃあおやすみ。

って、仕事の電話ー。

ウルトラ仮面の仕事の電話だ。

クツソ、無視すると後で俺に直球のツケが来るやつだこれ！

はいはいもしもし。

『それで、ここはC案ですね』

「こんなのでどうでしょうか。今没にしてた企画案送りました」

『いいですね。あ、星アキラ君、どんな感じですか？』

「いい感じに演じてますよ。今のところは順調に見えます」

『怪我しないようにちゃんと見張っててくださいいね。』

ウルトラ仮面撮影チームからすれば、アキラ君を守ってくれそうなのあなただけなんですから』

「はい、肝に銘じておきます」

『こつちとしては心配なんですよ。』

スターズ主催って、芸能事務所主催ってことじゃないですか。

安全管理もどの程度のものなのか怪しいもんです。あ、そうそう、こつちで今日ですね……』

電話で一通り話し終えた頃には、島に到着していた。

やつべ。

眠い。

疲れた。

結局寝れなかった上に、黒さんの絵コンテに対する興奮でドーピングして滅茶苦茶無茶してたせいか、ドーピング切れた体がドチャクソ重え。

いけねえ。

これ宿泊施設まで辿り着けるか？

「こんな感じかなあ、って思ったんだよね」

ん？ 誰だ？

やべつ、疲れ目で離れたところに目のピントが合わねえ。

頭の中身がぼやけてて、思考が上手く動いてねえ。

「英二君つてさ、他の人はそうじゃなくても……」

私の着信とかLINEとか見逃すことつてめつたに無いよね。

『大丈夫？』つて聞いても、嘘言うこともあるから本当にあてにならないけど。

『大丈夫？』つてLINE送つて気付いてないようなら、大丈夫じゃないつてすぐ分かる」

あ。

天使がいる。

あ、違え、天使じゃなくて百城さんだ。

「フラフラだね。ご飯食べた？」

「はい。美味しかったです……つて、何故ここに」

「友達を迎えに？」

「そんな暇な人じゃないでしょう、あなたは」

「暇じゃなくても時間を作るのが友達つてもんじゃないかな」

言うなあこいつ。

寝不足テンションなせいで泣きそうだぞ。

いつけね、クラクラしてきた。

眠い。

寝てる？

誰かに支えられた？ 受け止められた？ 抱きしめられた？ 俺は倒れた？ 安心

した？

なんで今、疲労困憊で寝不足だった俺の体を立たせていたはずの、俺の心の緊張が、一
気に消えたんだ？

なんで、今俺は安心して、俺の体から緊張は消えたんだ？

駄目だ。

眠い。

「お疲れ様。ゆっくり休んでいいよ。大丈夫、私がいるから」

囁かれて、もっと安心して、もう俺の頭は八割がた寝ていた。

あー。

安心する。

親に愛されて大事にされてる小さい子って、こういう気持ちなんだろうか。

暖かい。

心安らぐ。

なんだか何もかもどうでもよくなって、このまま夢に落ちて行きたくなる。

「安心した？」

ああ、なんかよく分からんが、とても安心する。

とっても、心地良い。

「たまには英二君の何もかも、私に委ねちゃっていいんだよ。私はちゃんと預かるから」

暖かい。

体が何かに包まれて暖かい。

心が何かに包まれて暖かい。

そのまま、俺は眠りに落ちた。

そして、俺は跳ね起きる。

「やべえ仕事あんのに寝ちまった！」

起きる。

時間すぐ確認。

00:48。日付は既に変わっている。寝過ぎだー!?

なんでこんなに寝たんだ俺!?

普段から寝すぎねえように睡眠時間計算してんのに!

なんでこんなに安心してぐっすりクソ長時間寝てんだクソ野郎か俺は!

もうデスアイランド撮影八日目じゃねえか!

「私、英二君ほど仕事が生きがいの人って見たことないわ……」

「あ、景さん」

ん、あれ? 寝る前の記憶だと、百城さんと会ってたような……あれ、景さんだったっ

けっか……駄目だ、寝起きに記憶探ると記憶が曖昧で適当になる。

「お腹空いてない? おにぎりあるけど食べる?」

「あ、いただきます」

あ、めっちゃ腹減ってる俺。

なんだかんだ20時間くらい何も食ってねえのな俺。

……!

うまつ!

美味いぞこのおにぎり!

「景さん、このおにぎり作った人を褒めてあげてください。」

めっちゃ美味いですよこれ。

味も良いんですが、焼き明太子の具合がめっちゃ俺の好みです。

作った人は天才的な人か、愛情が隠し味とかのたまう人か……

ともかく、めっちゃ美味しいです。できれば沢山お礼言いたいくらいですね」

「……ん。そのおにぎりを握った人は、英二くんにそう言われて喜んでると思うわ」

「つて、そんなこと考えてる場合じゃないですね。」

撮影どうなりました？

俺がほぼ一日寝ちやつてたみたいですすみません。

撮影に不備は起きてませんか？

二日も離れていたのに、その上一日も寝てて、もう本当に申し訳ないです」

「特には何も起こってなかったと思う。」

手塚監督が皆に事情を説明してたわ。

皆、英二くんを心配してた。お疲れ様、ルイとレイのこともありがとう」

「何もしてませんよ俺は。」

強いて言えば撮影所に居る許可を出したのと、二人のご飯代出したくらいです」

本当にちよつとしたことしかしてねえからな。

礼言われることは何もしてねえって。

「でも、私は……」

「あ、そうです。母親の話とかする約束でしたね」

話逸らし。

約束してたことだし、まあいいだろ。

景さんはキョトンとして、俺の真意を見抜くように俺をじつと見て、呆れたように微笑んだ。

「もう夜遅いけど。お話する？」

「景さんの明日の仕事に響かない程度なら、いくらでも」

その時、俺は。

友達に対し心を開き、無防備に自分の内面を見せ、気安い友人に心の距離を詰める時の景さんの表情ってやつを、初めて見た。

とても素敵な表情だと、素直に思えた。

「私は、私の知らない私を知りたい。」

まだ知らない私を、私の中に見つけたい。

それと同じくらい、私の友達の……私の知らない英二くんのことを、知りたいわ」

「そうですね。俺も友人のことを、もっと知りたいと思います」

じゃあそうだな。

俺から、色んなことを話していくか。

「俺の母親は、結構優しいところもあつたんですよ。あれは、ある夏の日のことですけど

——」
楽しい時間だった。

お互いを知る時間だった。

俺はベッドの上で体を起こして語り、景さんは椅子の背もたれを前にして語る。

親しい友のように語り合う。

月が空で少しばかり動くまでの間、俺達はずまらないことから自分にとって大切なことまで、色んなことを話して、その夜を過ごした。

英二「家城茜って知ってます？　ゴジラ×メカゴジラの
女主人公でメカゴジラ搭乗者です。城で茜ですよ？　こ
う、好ましく思ってる友人の名前の合体感が最高ですよ
ね……あの二人も仲良くしてくれたら嬉しいです」

俺が寝不足で倒れたみてえな話は地味に広がっていた。

地味に気遣われてる感がある。

むず痒いな！

よっぽどヤバえスケジュールで、気合い入れすぎた俺がフルスロットルで全力尽くす
とかでもねえなら、十日寝なくなつて俺は仕事できるつうの
が。

これに関しちゃ全面的に俺が悪い。

体調管理つてのは周りに余計な気を遣わせねえためにもやるもんだ。

かつ、倒れるほどの疲労は万が一の事故にも繋がりがかねえからな。

俺の頭が”大丈夫だ”と判断したからといって、大丈夫だとは思えねえ。

念には念を。

事故を起こさねえよう気を遣わねえと。

ただまた納期がアウトギリギリラインになったら、同じこと繰り返す気がすんだよな
あ。

作品の完成と仕事の完遂は何より大事だしよ。

……もつと腕上げねえとダメか。

作業速度の上昇は全てを解決する。もつと動作の無駄削れねえか試してみるか？

「おい、英二」

「はい、なんででしょうか堂上さん」

「よく寝てたなお前。見ろよ食堂の皆の視線を。」

自分の手元の朝飯と、ぐっすりおネムだったお前を交互に見てるぜ……？」

「うっ」

堂上さんが、サンドイッチを頬張って笑う。

「はっはっは。めずらしーよな、お前のああいふポカ。」

これに懲りたら小学生でもやってる早寝早起きでも徹底しとけよ」

「その件は、大変申し訳なく思います。すみません」

「そこは『すみません』じゃなくて『もうやりません』じゃねーの。倒れるとかバカか」
「デスアイランドのスケジュールだと、まだ安心できないんですよ……」

「お前は余裕なさすぎなんだよ。もっと俺を見習え俺を」

「撮影2日目でオールアップしてますよね、堂上さん。」

10日目の今でもここで、スターズの金で飯食つてる図々しきは見習いたいです」

「おいおい褒めんたって」

「誉めてな……いや確かに、一面的に見れば褒めてはいますけどー」

図々しいな！

いや、こんくらいの方がいいのかもな。

デスアイランドに参加してる役者の中で、俺が「上手く力を抜いてやってんなあ」って思えてんのは、この人がぶつちぎりが一番だ。

手を抜く上手さだって才能だ。

和歌月さんあたりは『適当に生きてるだけです』とか言うかもしんねえけどな。

仕事片っ端から受け入れてギチギチになってる俺よりは、無理しねえで程良く仕事やってるこの人の方が、個人レベルで見りや圧倒的に優れてる。

堂上さんが過労で倒れる未来とか想像できねえもんよ。

そいつは、凄え才能でもあるんだ。

「まあいいタイミングで、いい戻り方したよお前は。」

お前見て俺ら思ったよ。もうちよつと意識して協力しねえとって」

「あ、スターズ組とオーデイション組の間の空気の改善、気のせいじゃなかったんです
ね」

「そう、それぞれ。」

それだけじゃあねえけどな。

他にも色々やや和解した空気になつてたぞ。

とりあえず、俳優側でも色々手を尽くさねえといけねえんじやねえかって空気は出来
た」

「？ 詳しく聞かせてください」

「そりやお前……」

第三国を我がものとするために敵国と手を組むとか。

狙った宝玉を手にするためにライバル同士が一時休戦したとか。

いがみ合つてた奴らでもお前を見張るために手を組んだ、とかのアレだよ」

「何かあつたんですか？ 俺を見張る？」

……助監督達あたりでしょうか。

確かにドラマ畑のセカンドセカンド助監督。チーフ助監督（ファースト助監督）の次。

二番目に偉いアシスタントディレクター、とも言い換えられる。日本映画界だと衣装部の総指揮の役割もやる人が多い、英二に衣装の作成指示を出すポジション。と西宝畑のサードサード助監督。セカンド助監督の次。三番目に偉いアシスタントディレクター、とも言い換えられる。小道具や美術の担当として英二に指示を出すポジションの助監督。の相性は懸念していたところでしたが……」

「……あー、まあ、なんだ。」

そういうのがあったとかなかったとかどうでもいいんだよ。

問題はそこじゃねえんだって。

おめーがトラブル引き起こしてたら、お前自身が撮影止める原因になるじゃねえか」

「それは……確かに」

「お前がしっかりすりゃいいんだよ、しっかりすりゃ」

「そうですよね。反省します」

「お前のためじゃなくて撮影のために、絶対倒れないようにしろって話な」

「はい」

うーむ。

普段より心配されてる。

信頼じゃなくて心配向けられてんのは居心地悪い。

2001 英二「家城茜って知ってます？ ゴジラ×メカゴジラの女主人公でメカゴジラ搭乗
す。城で茜ですよ？ こう、好ましく思ってる友人の名前の合体感が最高ですよ……あ
も仲良くしてくれたら嬉しいです」

嬉しくはあるが。

「こいつはどんなに無茶させても壊れない鉄人だ！」くらいに信頼される男になりてえ。

「ただやっぱ、お前が戻るなり倒れたのが、色々撮影を改善した感じはあるぞ」

「と、言いますと？」

『30日もある』って余裕ぶつてたやつも。

『30日頑張ろう』って日数計算してなかったやつも。

『30日しか無いんだ』って思ったみたいだぞ。

お前見て、ミスつても挽回回くほど期間に余裕ないと思いつたみたいだな」

「ああ……そういうこともあるんですね。

確かにデスアイランドは数日の融通も利かない撮影ではあります」

「必死に撮影スケに影響出さねえよう走り回ってるお前見たら誰だつてそう思うだろ？」

あー。

なるほどな。

スターズ組とオーデイション組の対立構造が弱くなってるように感じた原因はそこか？

” 撮影のため、余計なこと考えるのはやめよう” っ て気持ちちが各々の中に大なり小なり出て来た……のか？

ただまだ対立構造は残つてる気がすんだよなあ。

「僕らにできることは多くない。」

それぞれの撮影に、最高のコンディションを整えて挑み、今の自分の最高を見せる。

そうしていくしかないんじゃないかな。悩んでも解決しないことつてのはあるものだから」

「アキラさん」

「とりあえずはご飯。それが今一番大事なことじゃないかな？」

「そうだな、飯だ飯」

やって来たアキラ君が、俺の横に座る。

俺も堂上さんも朝飯を食うのを再開し、三人揃つての朝食が開始された。

ホットドッグとサラダを頬張る俺。

堂上さんがハンバーグサンドイッチオムライスセットを食う。凄え欲張りセットだ

な！

アキラ君は唐揚げ定食セットであつた。

他愛のないことを話しながら飯を食っていると、アキラ君が唐揚げをこっちの皿に乗

2003 英二「家城茜って知ってます？ ゴジラ×メカゴジラの女主人公でメカゴジラ搭乗す。城で茜ですよ？ こう、好ましく思ってる友人の名前の合体感が最高ですよね……あも仲良くしてくれたら嬉しいです」

せてきた。

「唐揚げあげるよ」

「ん？ そんじゃ俺はミニハンバーグやるよ」

「ありがとうございます。でも、俺そんな食い足りないってわけでは……」

「いいからいいから」

「いいからいいから」

いや、何考えてんのか大体分かるけどな！

そういう体調の心配の仕方は要らねえんだよ！

上を見上げれば、真昼の太陽。

10日目も問題なく撮影が進んできた。

大体進捗は全カットの内40/100くらいが終わった感じだな。

撮影に使える日数も10/30が消化完了ってところか。

もう1／3終わったとも言える。まだ1／3しか終わってねえとも言える。個人的にはもうちよい余裕を持たせてえ。

景さんがいると、とんでもなく撮影が早まるパターンも、とんでもなく撮影が遅れるパターンもどっちもありそうだ。

島での撮影が終わった後は、一部俳優が東京で合成素材の撮影と、アフレコの吹き込み声がちゃんと視聴者の耳で聞き取れるよう、撮影時に撮った画に別途音声と、録音スタジオで録音した俳優の声を吹き込む。特にデスアイランドや特撮ヒーローものでは全力疾走中でもハキハキと聞き取りやすく喋らないといけないために、アフレコ無しでの現地録音だと死ぬ。天装戦隊ゴセイジャーのゴセイイエロー／モネ役のにわみきほさんは、週に五日の撮影に参加し、週に二日のアフレコを行い、毎週一本の番組を完成させていたという。え？ 休日はどこ？ 一年間ほぼ休日はなかったらしい。凄えな！ やってそんで終わりだ。

ただ、オーディション組の動きの硬さは随分と取れてきたように見えんな。

「自分に上手くできるか？」とか「上手くやらなくちゃ」とかの意識が薄れてきた。

スターズと比べられたことで、敗北感が良い塩梅に対抗心や気負いを削いでくれたのか？

「スターズに勝てるわけがなかった」っていう割り切りと開き直りで、オーディション

組の萎縮が無くなってきたってことだな。

緊張が抜けりや、皆の能力も伸びてくる。

あともうちよつと緊張が抜けりやあ、全員フルスペックでやってくれそうだな。

「木梨さん、初日と比べると随分動きがよくなりましたね。撮影に慣れましたか？」

ショートヘアの少女に話しかける。

木梨さんは短いくせつ毛気味の髪さをいじって、あはは、と笑った。

最近この子、ちつと景さんの演技に影響されてるが、景さんのレベルには全然近付け

てねえし、景さんの成長スピードのせいかな差は広がるばっかだ。

まあ、そりやそうか。

この子の才能程度じゃあそこまでは行けねえ。

優秀なんだけどな。

間違いなく優秀だ。

俺じゃ百年演劇習ってもこの子ほどにはなれねえだろう。

だから、景さんみたいになろうとしてるこの子は、致命的に間違ってるんだが。

今はまだ、その景さんを目指す気持ちさがプラスに働いてる。

茶々入れることもねえだろう。

第一、この子は高校生の演劇部だ。

門外漢の俺が余計なこと言うよりは、高校の演劇部の顧問に指導とかは任せられた方が良
い……気がする。多分。

俺高校行つてねえから高校演劇部の顧問のレベルって全然知らねえんだよなあ。
今度調べてみつか。

「今でも本番前は緊張しきりですよ。本当に心臓バクバクです、私」
「笑顔の演技が柔らかくなりましたよ。」

ああいうのがあると違うんです。

木梨さんは和歌月さんに殺される役ですからね。

和歌月さんに心許した笑顔の演技ができると、かなり映えると思います」

「殺されるためにですか!？」

「殺されるために、です。」

どうでもいい人は死んでもしょうがないんですよ。

可愛らしく好感が持てる人が死なないと、作品評価にかかわります」

「せ、責任重大ですね……!」

そういうことだ。

頑張れ。

クソあつつい太陽光の下、カメラの前に躍り出ていく木梨さんを見送る。

2007 英二「家城茜って知ってます？ ゴジラ×メカゴジラの女主人公でメカゴジラ搭乗す。城で茜ですよ？ こう、好ましく思ってる友人の名前の合体感が最高ですよ……あも仲良くしてくれたら嬉しいです」

「どうも」

おんや。

今度は小西さん。

オーディション組が連続してこっち来るとは。オーディション組の俺の認知度が地味に上がってるってことか？

この季節に脂肪着てると暑いだろ。

あとでアイス仕入れるから頑張ってくれ、小西さん。

地味にぼつちやり系の映画俳優って最近地味に貴重だから頑張つて欲しい。

細かいイケメンが売れるから皆そこ目指すんだよなあ。

映画監督からすりゃ売れるから細身イケメン俳優使いたいのも本音だが、デブを始めとする色んなタイプを置いてえってのも本音だつてのに。

顔が悪くなくてデブで行くことを決めた映画俳優は、多分今の映画監督達にとつちや値千金のお宝に等しいぞ。

ちよつと売れると痩せに行くやつとか、人気があんま伸びねえから痩せてイメチェンするやつとか、そういうのもいるからデブい人は減るんだよな。

デブも個性だつてのに。

個性なら人気や金にはなるってのに。

デブで売るっていうフォーマットが業界に育ってねえから、受けることが分かってる細身のイケメンを目指す人の方が、圧倒的に多いっつーこの問題。

どうにもならねえんだよなあ。

しかも、ストレス問題がな。

意外と消費者ってデブをデブと呼ぶことに躊躇いねえんだよな。

『クズ』とか他人に言う時ほど、『デブ』って言う時に躊躇いや罪悪感持ってねえって
いうか……言っちゃ悪いことだと分かっている人も確かにいるが、気楽に言う人もいるっ
つーか。

芸能人の周りって万人単位の人がいるから、一部の人がデブデブ言ってるだけでも数
百人の人がデブデブ言ってるように見えるんだよな。

そのストレスはやべーもんがある。

美人女優な人でも、何かの形で消費者のヘイト買うと、ネットですつとブサイクブサ
イクと大勢に言われ続けたりするくれえなんだ。

わかりやすい身体的特徴は、かなり厳しい逆風になる。

俳優のメンタルにかかる負荷は想像もつかねえ。

『情報化社会』は、ぼっちゃり系映画俳優ってジャンルには逆風だ。

デブデブ言ってる人が自分に合うコミュニティ見つけて、そこで皆と一緒にデブデブ

2009 英二「家城茜って知ってます？ ゴジラ×メカゴジラの女主人公でメカゴジラ搭乗す。城で茜ですよ？ こう、好ましく思ってる友人の名前の合体感が最高ですよ……あも仲良くしてくれたら嬉しいです」

言つて、デブデブ言うことに慣れて罪悪感覚えなくなつて。

んで、他のところでも罪悪感なくデブデブ言つたりすんだよな。

そりや痩せること目指す俳優も増えるわ。

つか、百城さんが化物なんだつての。

なんだあの怪物。

目立てば目立つほど悪口言われやすくなんのが俳優だつてのに、この情報化社会で、なんで消費者の悪評で何のダメージも受けてねえんだあの人……？

他の俳優は一々こういう風評に四苦八苦してんだぞ……？

マジにオンリーワンだわ、あの人。

心底信頼できる。

小西さんはぼっちやり系だし、ぼっちやり系が売りになるバラエティやお笑いの世界に行つちまうかも知れねえが、できれば映画俳優としても成功してほしいところだ。

デスアイランドにいる間は、サポートもしっかりやんなくちやあなあ。

「質問なんですけど」

「いいですよ。美術の俺に答えられることなら、なんなりと」

「これあるじゃないですか。」

人殺しに使われる西洋剣。

昔舞台で見た剣とどこか違うような……

違いがあるなら教えてください。扱いに気を付けるところがあつたら気を付けます」

「ああ……それはですね、わざと反射を落とした舞台小道具だつたんだと思います」

「わざと反射を？」

「高校演劇だと気にしないことも多いですが……」

昔ながらの演劇だと、舞台の上に光を反射するものは置いてはならないとされてました。

強い照明の下だと、観客の目に不快感を覚えるほどの反射光が行くことがあるからです。

そうでなくても、俳優に視線を集中させたいのに、背景が光つてそつちに注目が……なんていう想定外のことまで起きてしまうわけです。

だから光る面にヤスリをかけたたり、別素材に付け替えたりするわけですね、はい「へー。あんまり気にしてませんでした、そういうの」

「気にしなければ気にしないいいことではありますからね。」

映画俳優さんだとなおさらです。

演劇舞台やオペラなどなら、客席から舞台上まで一定の距離があります。

なので光らないように細工してる道具でも、気付かれないんですよ。

”近くで見えてない”わけですから。

「お客さんもそこまで気にしませんしね。でも、映画の撮影なら、話は変わります」
「カメラが寄り添うから、ですね」

「はい。」

カメラが近くから撮ることもあるから、です。

舞台と違い、刃物がギリギリと光れば最高の表現になります。

また逆に、舞台と違って刃物や鏡の表面にカメラやカメラマンが映るリスクもありま
す。

『光の反射をいくらでも演出に使っていい』。

『けれど、鏡面にするなら注意すべき』。

これが演劇の世界と違う、映画の世界の小道具のルールの一つでもあるわけです」

近年は撮影技術も進化したもんだ。

編集で画面を暗くして、色彩を黒に寄せて編集したりすることで余計なもんを画面か
ら消す、とかやってんのはレジェンダリーズ・ピクチャーダークナイト、ウオッチメン、
パシフィック・リム、ジュラシック・ワールドなど、時代に変化をもたらすほどの大傑
作の数々を生み出してきたアメリカの映画会社。だったか。

鏡面になるくらい磨き上げられたガラスのグラスにカメラが映り込み、撮り直しもで

きねえからそのまま上映する……ってのは、昔の映画では時々あったって話だが。今は、映像編集でそれすら消せる。

C3POスター・ウォーズの全身金ピカロボ。監督のこだわりで表面がピカピカに磨き上げられ、そのせいで360°全方向に対し『カメラや機材を反射して映す可能性がある』という最悪の危険性を身に付けてしまった、並の撮影監督には扱えない逸材。の問題はもう完全に過去だぜ。

なら、『反射しないよう表面が加工されてリアル感が損なわれた小道具』より、『輝かんなばかりの高級感の銀食器やグラス』の方が遥かに観客の印象に残るから良い、ってなるわけだ。

おかげで、舞台演劇ではできねえ『綺麗なガラスの器や、鉄の剣の表面に、俳優の顔を映してそれをカメラで撮る』みたいな技術も、映画では発達していったわけだ。

こっちでは『反射』は武器になんだから。そりやそうもなる。

「あー。なるほど。それでこんなに綺麗に……ありがとうございます」
小西さんが納得した様子を見せる。

ま、そこに気付ける目があるなら十分だろ。

「なので気を付けてくださいな。

2013 英二「家城茜って知ってます？ ゴジラ×メカゴジラの女主人公でメカゴジラ搭乗
す。城で茜ですよ？ こう、好ましく思ってる友人の名前の合体感が最高ですよ……あ
も仲良くしてくれたら嬉しいです」

カメラの方に太陽の反射光を当てる時と当てない時は計算してやった方がいいです。
普段、剣の光の反射をカメラに映さず……

殺す直前の殺意を見せるシーンで、反射光をカメラに当ててキラリと光らせて見せれ
ば……」

「あ、いいですねそれ。それなら——」

「いい発想です。でしたら——」

ちよつと話して相談して、小西さんと別れる。
はてさて。

反射、鏡面、演技をするフィードの違い。

その辺をきつちり認識してる俳優さんは意外と多くねえみてえだな。

『照明がある場所での反射するものの扱い』とか、『太陽光の下での反射するものの扱
い』とか……ああそうだ、『夜間撮影で照明の前で反射するものの扱い』もそうか。

あの辺の技術と知識が地味にねえ人がちらほらいる。

演劇畑でしかやったことねえから映画撮影が分かってねえ、って人もいるな。

いや、当たり前か。

デスアイランド俳優の年齢上限は石垣さんの20歳。

俳優平均年齢は百城さんに合わせた17歳。

最年少の亜門姉弟&木梨さんに至っては15歳で、演技経験は十年もねえって俳優の方が多い……そんな感じだ。

経験値が薄い。

ま、そりゃそうだ。

じやなきやオーディション組があんなに動き固くなったりしねえ。

十代半ばで既に歴戦の勇士に等しい経験値を持つてるスターズが異常なんだ。

なら、俳優さん達は演技に集中させ、余計なことは裏方の俺達が考えておくべきだろうな。

「でも、無能はいねえんだよなあ」

思わずポロツと、俺の口から言葉が漏れた。

よく考えなくても分かる。

オーディション組は、手塚監督のあの「五分でいい演技を見せてね！ダメなようなら一分以内でアウトだよ！」のクソオーディションを乗り越えてきたんだ。

この12人に『凡庸』も『人並み』もいるもんかよ。

飛び抜けた技能、他にない個性がこの12人はある。

その中の1人……景さんが、飛び抜けてるから他があんま目立ってねえだけだ。

第一次審査と第二次審査で絞って500人、その中から手塚監督が選んだ12人だぞ

？

對抗馬が景さんでなけりや。

對抗馬がスターズでなけりや。

そう思わずにはいられねえくらい、光るもんは持つてんだ。

通常のオーデイションじゃねえあのとんでもねえオーデイションで選ばれたんだ、通

常の観点で言う『優秀』はあんまいねえと言つていいかもな。

普通のオーデイションみたく、各能力値に保有技能の高さ、そして該当役にピッタリ

かどうかなんか見てねえ。

何せ、オーデイションの時には手塚監督は原作も読んでなかつたんだ。

監督が見つけた”面白そうな人間”を12人選んで、そいつらを原作の各キャラに

キヤスティング、原作らしい演技をさせてる……つてのが実情だ。

だから。

俺と百城さんのすべきことは、相当ややこしくなつてやがる。

俺としちゃあ、景さん達の個性、強みは伸ばしてやりてえ。

だが『個性的な俳優が自分を出していく』と段々撮影はまとまりを欠いていく。

作品の完成形に統一感が出ねえ。

そうなつたら最悪だ。

例えば、理知的な真咲さんが静かで恐ろしげな空気を作り、繊細で思わず唾を飲み込むような雰囲気を作って、ホラー風味の空気を作ったとする。

その後にもし景さんが凛々しくも熱い、情感たつぷりの演技をしたら、まず確実にそっちの空気は当たり勝ちしちまう。

そうしたら、真咲さんの演技が完全に無価値になっちまう。

しかも映画は演劇みたいに時系列順にやるわけじゃねえから、このパターンで景さん↓真咲さんの順に撮影しちまう場合がある。

そうすつと、景さんが調整する余地がねえ。

こういうのを防ぐためには、演出や監督と普段から話したり、予定表を見たりして、監督の視点で見て演技プランを調整する……つてのが必要になるわけだが。

景さんはまだそこまで行けてねえんで、『事故』がいつでも起こり得る。

そうなるよ、どうすんのか？

決まってる。

百城さんが調整すんだよこういうの！

百城さんの視点は広え。

上手い具合にこういつた差異が事故にならねえよう埋めてくれてるが、当然限界はある……だろうと思う。

2017 英二「家城茜って知ってます？ ゴジラ×メカゴジラの女主人公でメカゴジラ搭乗す。城で茜ですよ？ こう、好ましく思ってる友人の名前の合体感が最高ですよね……あも仲良くしてくれたら嬉しいです」

俳優っていうポジションから、臨機応変に周りを景さんに合わせ、景さんを周りに合わせる事ができる人なんざ他にいるかよ。

おかげで撮影10日目にして未だ完全な撮影の崩壊はどこにも出てねえ。

これを百城さんは、『芝居の温度を調整する』とか『作品のバランス調整』とか言ってる。

作品のバランス。

そう、作品のバランスだ。

どうすつかな。

俺は基本的には百城さんのスタンスに追従する形でやってる。

となると、俺もバランスを取りに行つて、撮影の危険性を抑えに回りにえところだ。

撮影が無茶苦茶にこそなつてねえが、撮影のバランスは確実に崩壊を始めてる。

改めて思い知るな。

”特定のフォーマットに特化させる” つつスターズのやり方の強みが。

不安定感がねえ。

危険性が遠い。

予想外、予定外、つてもんがねえ。

景さんの演技には一種博打みてえな危うさと妖しい魅力があるが、工場で商品を安定

生産するみてえなスターズの方向性はやっぱ強え。

何故なら、特定の方向性で統一した『売れるスターの大量生産』ってのは、何が売れるのかをこの世の誰よりも理解できてなきやできねえからだ。

ま、同時に、飽きられるつつー危険性もあり、多様性を損ないやすいって欠点もあるが、スターズ俳優が皆同じ演技をしてるってわけでもねえ。

そこはスターズの社長とか、プロデューサーとかが何か考えてんだらう。

ともかく、スターズの安定感は強え。

だからこそ、だ。

オーディション組は飛び抜けた能力か個性が何か一つ手塚監督の目に留まり、それを武器に戦えればあるいはこの映画でも目立てる奴らだ。

俺の仕事はその個性を引き立てること。

だが原作のキャラに準じた配役がされてるオーディション組が、自分の強みを出してつたら……その分だけ、作品全体のバランスは崩れる。

これが直球で百城さんの負荷になる。

現場でこれを調整できるのなんて百城さんしかいねえからな。

かといって、百城さんは全員が演技を縮こまらせて映画の出来が悪くなることも望んじゃいねえだらう。

2019 英二「家城茜って知ってます？ ゴジラ×メカゴジラの女主人公でメカゴジラ搭乗す。城で茜ですよ？ こう、好ましく思ってる友人の名前の合体感が最高ですよ……あも仲良くしてくれたら嬉しいです」

俺のすべきことは？

百城さんの『より良い映画を撮りたい』という意を汲み、『他の俳優も含めて調整する』っていう百城さんの負荷を減らすことだ。

どうすつかな。

「お疲れ様でーす」

「お疲れ様でーす！」

10日目の撮影が終わる。

さて片付け片付け。

「ちよつといいですかね、朝風先生」

？

おや、八代積木さん。

オーディション組唯一のメガネ男子の。

この撮影メガネ男子が二人しかいねえのと、スターズとオーディション組に一人ずつしかいねえのとで、割と印象に残ってた少年だ。

スターズの方のメガネ男子の若狭さんは、烏山さんが刀を蹴り上げて掴んで切るシーンでいい演技が出来たと思ったのか、最近の演技にいい具合に気持ちに乗ってきたな。

それは烏山さんも同じで、演技がどんどん良くなってやがる。いいこった。しかし、何用だ八代さん。

いい伊達メガネでも作ってほしいのか？

「実はちよつと、オーディション組で集まって話してたりしてたんですが……

その、最近、分からないことが多くあつて。

オーディション組で話し合つてもよく分からないことが出てきたんです。

なので助監督に皆で聞きに行つたんですが、『朝風の方が適任』と言われまして」

「何故俺に？」

「チーフ助監督が『感覚的なことを言葉にするのは彼が一番得意だから』と」

「む……チーフ経由ですか。分かりました、俺はどうすれば？」

「ありがとうございます！ ロッジ前に今何人かいるので、そこに来ていただければ」

てくてく移動。

お、いるいる。

太つちよの小西さんと、丸坊主の小寺さんと、ポニテ女性の一色さんと、皆と並ぶと

ひとときわ高身長が目立つ烏山さんと、多分俳優24人の中で一番無個性な佐藤さん。

メガネの八代さんも合わせて六人。

全員オーディション組か、当たり前だが。

2021 英二「家城茜って知ってます？ ゴジラ×メカゴジラの女主人公でメカゴジラ搭乗す。城で茜ですよ？ こう、好ましく思ってる友人の名前の合体感が最高ですよね……あも仲良くしてくれたら嬉しいです」

しっかしリアル鬼ごっこで『日本で一番多い無個性名字』って多くの人に周知された佐藤の名字の少年が、一番地味な外見の俳優ってのは中々に因果だな。

『オーデイション組の輪』か。

ちよつと部外者感があるが失礼して混ぜてもらおう。

輪になつてる人達に混ぜてもらおうようにして、俺も輪の一部になる。

しかしちよつと新鮮だ。

オーディション組で俺がよく話すのつて景さん、茜さん、源さん、烏山さんの四人だからな。

烏山さんしかいねえのがなんか新鮮だわ。

「朝風先生、それで……」

「周りに憚ることなく好きなように呼んでください。」

俺は烏山さんや小西さんと同い年の、皆さんの同年代です。

こちらがそちらに敬意を払うことはあつても、逆は必要ないんですから」

「何を言うんですか朝風先生！ 俺はこの呼称で徹底しますよー！」

「うるせえ烏山！ お前もう夜だつて分かつてんのか！ 寝てる奴が起きたらどうする

！」

「すまん」

「じゃあ私、あの双子に倣ってアサつちでいいかなー」

一色笑子さんの順応性高えな。

スターズでもアサつちとか呼ぶのあの二人しかいねえんだが。

まあいいか。

「アサつち、『テレコ』って何指すの？」

「……あー、大体分かりました。」

今回の撮影スタッフだと、そりゃ混乱しますよね……」

俺が納得した顔で頷くと、六人は我先にと質問しようとして、けれど仲間に質問の権利を譲り、結果的に一人ずつ俺に質問を投げかけてくる。

なんだ。

いい感じに仲間意識出来てんじゃねえか。

まずは烏山さん。

「音響の方が『テレコ巻けよ』と言ってたんですが、あれは一体？」

「テープレコーダー巻けよ、ですな。」

昔ながらの音響屋とその弟子が使う用語です。

昔はテープで現地の音を録音していました。

テープを巻く、つまり最初から録り直しだったことですね」

2023 英二「家城茜って知ってます？ ゴジラ×メカゴジラの女主人公でメカゴジラ搭乗す。城で茜ですよ？ こう、好ましく思ってる友人の名前の合体感が最高ですよね……あも仲良くしてくれたら嬉しいです」

鳥山さんが納得したような様子を見せると、小寺さんが坊主頭を掻きながら、問いかけてくる。

「サード助監督が」

『テレコに流すみたいなことできればいいんだけど』

って言うってんですけど、あれってなんですか？」

「サードが？ それならスカパーですね。」

衛星放送のスカパーの番組情報検索サービス『テレコ!』です。

流すっていうならおそらくこれで間違いないと思います。

デスアイランドは地上波と衛星放送に流す予定もあるので、必要なものなんですよ」

「なるほど」

佐藤さんが地味に、控え目に、手を挙げる。

「美術の人が言ってたんですけど、『装飾テレコってどれだっけ』というのはなんでしよ
うか」

『テレコ生地』のことです。

夏の肌着のフライス生地よりも、更に伸びが良いものです。

韓国映画の映画俳優さんがイベントで着てたりしたのが有名ですね。

デスアイランドの装飾に使ったやつは確か廃棄予定のを回収したものの応用ですけ

ど

小西さんがふとつちよな体を揺らし、首を傾げながら聞いてきた。

「手塚監督が言っていた『このカット脚本のこことテレコで』っていうのは？」
「カットの前後を入れ替える、という意味ですね。」

順序の整理です。

手塚監督が

『脚本のこことここを入れ替えた方が出来がよくなる』

と判断したので、記録スクリプター管理者がメモを取り、編集が後でそうするということですよ

「おお」

「手塚監督のそういう判断は大体間違ってますから、質は上がったと思いますよ」

一色さんがポニテをかき上げ、からっとした女の子らしい笑みを浮かべて、手を上げる。

「はいはい。それじゃあ、演出さんが『この展開テレコでしょ』って言ったのもそれ？」

「ああいえ、その台詞言われてたのは俺ですが、そうじゃないです。」

そもそも『テレコ』というのは歌舞伎用語なんです。

二つの異なるストーリーを、交互に見せて演出する。

これを歌舞伎の世界では『てれこ』と呼び、演劇の世界にも広まっていきました」

「あー、漫画や映画の演出でよく見るやつ……」

百城千世子と私の視点を交互に映す予定だったから、テレコってこと？」

「はい、その通りです。」

交互であること。

前後が入れ替わること。

互い違いであること。

そういったことを『テレコ』と呼ぶ下地が、日本にはあったということですよ」

八代さんがメガネを押し上げ、納得したような表情を見せる。

「じゃあセカンド助監督が言ってた『テレコの声優さんもう来たの？』もそうなんですよ。ね。

歌舞伎のてれこが語源で、それが転じた何かの意味が使われていたと、そういうわけですよ……」

「あ、それは略称使いたがるあのセカンドの癖だと思います。」

『アテレコ』の略です。デスアイランドのアプリ音声を声優さんが吹き込むことですよ。ね」

「……あ、ああ、なるほど。声優って言うてるならそういうことなんですよ……」

ごつめんな。

今回の撮影スタッフだとういうこと起こるよな。

「企画段階だと『この脚本のここテレコじゃないか』みたいな言及もありましたね」

「ええと、台詞の順序が逆になってたとかですか？」

「おお、もうすっかり使い方マスターしましたね、八代さん。」

皆さんもこれで混乱しなくなつたなら幸いです。混乱があつていいことはないですから」

「ありがとねアサっち。ほら皆もお礼！」

一色さんの呼びかけで、皆が口々に礼を言ってくる。

なんかむず痒い。

今回のこれはおっさんどもが自分の定義で、”その相手に意味が伝わればいいから”ってノリで、それぞれ同じ言葉を違う意味で使つたのが問題だったただけぞ。

俺が礼言われる筋合いねえぞ。

「他に何か聞きたいことはありませんか？」

時間が許す限り、俺が知る限りであれば、極力お答えしますよ」

「英二さんも忙しいでしょうに、本当にありがとうございます」

「俺の仕事は、皆さんが気持ちよく演技できるフィールドを作ることですから」

色々と、皆と言葉を交わした。

彼らを持った疑問を説明し、俺が応え、皆の不理解を俺が見つけたなら、俺はそこで
ついでに皆の不理解を解説で解消していく。

意外だったのは、景さんも周りに理解されてねえってことだった。

「——というのが、今日の夜風景さんの演技の内実だったわけです」

「え？ じゃあ、あの時の夜風さんの足の不自然な動きって……」

足元に首を切られた人の血が飛んできたことを想定してたってことですか？」

「皆さん距離があつたから分からなかったのかもかもしれませんね。」

近くで見えていたらきつと、血の飛沫の幻覚が見えていたかもしれないよ」

「まっさかー……そんなもん見せられる俳優なんているわけじゃないですよ」

「機会があれば話聞きに行ったりするのはどうでしょうか？」

実際に腰を据えて話したことがあるかどうかで、結構違うと思いますよ」

「お、そりや名案。」

明日は俺達撮影入んのはえーし、終わりはおせーし……明後日だな。

明後日の朝飯時ならゆっくり夜風と話せるかもしれないねえ。

小西、佐藤、一色、八代、鳥山。行けるか？ あいつに話し聞きに行こうぜ」

「皆行けるでしょ。明後日に朝早いのスーツだけだし」

「ごめん、スターズの見学に行く予定入れてもう許可貰っちゃった」

「俺は夜風のこととはもう分かっている。俺と八代は行かん、四人で行ってくるといい」

「なんでえ、付き合い悪い奴らだな。小西、佐藤、一色。明後日の朝飯の時だぞ、忘れんな！」

んでもって。

話してる内に気付いたが、百城さんへの理解も足りてねえみたいだった。

まーあの人の細けえテクニクや立ち回り、気遣いは分かりにくいからな。

俺が景さんの凄さを解説した時も半信半疑だったオーディション組だが、百城さんの姿を解説しても八信二疑くらいだった。

景さんよりも凄さが受け入れられてるのは、景さんが才能のもんで百城さんのそれがテクニクだからなのと、百城さんのネームバリューが凄えからだろうか。

『有名な凄い人の凄さの解説』と、『無名天才の凄さの解説』なら、前者の方がずっと受け入れられんのは当たり前話ではある。

髪がねえ小寺さんが、後ろ髪のパニテがもっさりしてる一色さんを小突く。

「百城千世子そこまで考えて動いてんのか……」

おいどうすんだ一色、お前女優として髪の長さくらいしか勝ってないぞ」

「ぐっ、す、スリーサイズなら勝ってるし……」

2029 英二「家城茜って知ってます？ ゴジラ×メカゴジラの女主人公でメカゴジラ搭乗
す。城で茜ですよ？ こう、好ましく思ってる友人の名前の合体感が最高ですよ……あ
も仲良くしてくれたら嬉しいです」

「は？」

「百城千世子のスリーサイズは綺麗すぎるから、サバ読んでるって専らの噂だし……
それなら、スタイルの良さでは私が勝ってるはずだし……はずだし？」

「何故疑問系」

「自分でも信じられてないんだろ」

「女のマウンとの取り方怖っ」

「スリーサイズの数値の大ききなら僕に勝てる人いんの？」

「ぼっちゃり系がマウント取りに来たぞ！」

「ぐっ」

男達の怒涛の反応が一色さんの自尊心を削る！

「いえ、百城さんの公表身長・体重。スリーサイズにほとんど虚飾は無いですよ。

スリーサイズ公表が随分と前のものなので、その分だけズレはありますけど」

「えっ」

「百城さんは誤魔化さなくてもモデル体型で、綺麗な体型を維持してるので……」

「スリーサイズ把握してるとか」

「もしや美術と俳優で深い関係が……」

「おいおい、昨日の恋バナのアレは冗談めかして言ったんだぞ俺は」

なんでやねん。

「皆さんの服作ったの誰だと思ってるんですか？」

「あー」

「あー」

「なるほど」

スリーサイズ把握してねえわけねえだろ。

「というか、百城さんにそういうマウンツの取り方する女性初めて見ました……」

「だってよ一色。朝風英二の太鼓判だぞ」

「うっさい！」

『美しい体型』って意味じゃ、多分百城さんと景さんのツートップだぞ。

比べんな比べんな。

美人度がカンストしてそうじゃねえかあの二人。

「百城さんに対抗心持ってぶつかり、競い、比べるのはオススメしませんよ」

「まあ、でしようね」

「あの人役者として満遍なく優れてるタイプでもありますから」

「声量なら負けません！　そして、役の掘り下げにおいてもですッ！」

「うるせえぞ烏山！」

確かにそうだ。

百城さんはデスアイランド俳優の役者能力総合値において頂点に立ってる人、ではあ
るが。

何か一つの能力であれば、百城さんに勝てるかもしれねえ。

それがお前ら、オーディション組だ。

「そうですね。」

皆さんには皆さんの個性、それぞれの長所があります。

それを引き立てるのも俺の仕事です。たとえば、そうですね……」

各々には各々の強みがある。

強みになる、個性がある。

そいつを引き立てりやあいいい。

声一つ取ってもそうだ。

景さんにはリアルな声作りがあり。

鳥山さんには舞台俳優特有のよく通る大声があり。

茜さんの感情を込めた声には伝達性と迫力があり。

『オペラ俳優はデブでなければならぬ』とか言われるように、『声を響かせる』とい
うポジションにおいてぽっちゃり系の小西さんは有利で、体型の問題でデブしか出せね

え声もある。

俺は一人一人の個性に言及し、見抜いた各々の特性に合わせたプランを伝え、今後の撮影に反映することを約束した。

各々が各々の驚きを見せていたが、俺はまだ、お前らを深く理解できてねえ。

百城さんを支える時ほど、お前らを補助できてねえ。

それじゃあ駄目なんだ。

俳優を支える造形美術として、そいつじゃ足りねえんだ。

お前らを高めて超一流にできるくらいじゃねえと、俺はアキラ君を押し上げられねえ。

あの人の友情にちゃんと応えられる俺になれねえんだよ。

「まだ俺のサポートは最適化できると思います。あと20日、頑張りましょう」

「……マジっすか」

同じ作品を完成させようとする仲間だろ？

手助けすんのが俺の仕事だ。

一色さんがやる気を出した表情をして、けれどすぐにくてつとして肩を落とす。

「あーでも、私百城千世子に勝てるまでは思えないわ……」

「一色さん。なんでクリエイターは面白い物が作れない老害になると思いますか？」

2033 英二「家城茜って知ってます？ ゴジラ×メカゴジラの女主人公でメカゴジラ搭乗す。城で茜ですよ？ こう、好ましく思ってる友人の名前の合体感が最高ですよ……あも仲良くしてくれたら嬉しいです」

「へ？」

「『熱量』です」

一番大事なことを忘れんなよ。

「どうにも、一般の人はクリエイターの熱量を軽視しがちです。

彼らは言います。

何故作品が途中で止まるのか。

何故自分がリクエストした作品を気軽に書いてくれないのか。

技量があればいくらでも作れるのではないのか。

経験を活かせば流れ作業で作れるのではないのか。

有能な人間なら、いつまでも安定して面白い作品を作れるのではないのか。

そんな風に思っている人は一定数いて、時折どこかで、そういうった主張が顔を出しま

す」

一番大事なもんは、お前の胸の中にある。

「若い時より、歳を取った後の方が技量は上です。

でも何故か、歳を取る前の作品の方が面白いクリエイターはいます。

技量が成長し、経験が増えたなら、普通作品は面白くなっていくなのに。

若い時にあつて、歳を取ると減ってしまうことがあるもの。それが、心の『熱量』で

す

「！」

「はつきり言いますよ。」

『数ある仕事の一つでしかない』スターズ組。

『滅多にない大舞台でたった一度のチャンス』な皆さん。

熱量の平均値で言えば、皆さんはスターズにも勝っているかもしれませぬ」

皆が息を飲む音が、聞こえた。

「熱意は態度じゃなくて、演技に出るものだと思います。少なくとも景さんはそうです」

熱量がなくちや良いものが作れねえ。

熱くなりすぎりやあ事故が起きる。

俺達は、俳優も、造形屋も、難儀な宿命の星の下に生きている。

「そして俺は、皆さんの演技をずっと見ています。」

カメラマンと監督の更に後ろで、ずっと。

皆さんに必要な物を作りながら、皆さんをそうして評価しています」

頑張れよ。

「頑張ってください」

俺がここで、皆の良いところを、頑張りを、ずっと見てつから。

「いつか皆さんが、百城さんの熱量を感じられたなら、俺は嬉しいです」

皆はまだ、景さんの本質も、百城さんの内心も、何も分かってねえ。

けど、皆が成長してそれを分かるようになったなら。

景さんが演技を誤解されて怒られることも、百城さんの努力と熱意のほんの一部しか周りに理解されねえってことも、なくなるんじゃないやねえかと、俺は思った。

撮影11日目、11:30。

ようやく、って感じだな。

「亜門一葉さん、亜門二葉さん、クランクアップです！」

クランクアップ……というか、オールアップだ。

ようやくと、島を離れるスターズ組が出て来た。

「頑張つてね、アサつち！」

「千世子ちゃんと上手くやるんですよー」

「お二人とも、お疲れ様でした」

別れの挨拶をして、帰路につく双子を見送る。

本来なら堂上さんも帰ってたはずなんだが、堂上さんは時折東京に戻って仕事しながら、基本はこの島にいて観光と休暇を満喫してる。

なんだこいつ。

まあ堂上さんがいればちよつと撮影の融通利くところもあるっちゃあるし、撮影終了してるこの人の宿泊費が撮影を圧迫することはないが……マジでいつまでもいるなお前！

つてなわけで、島を離れる第一陣は亜門姉弟となった。

サンキュー亜門姉弟。

いい死に様だったぞ。

「朝風君、この剣ちよつと重くない？」

「そうですね。中に撮影に必要なギミックが入ってますから」

さて仕事仕事。去った人にばかり気を向けてられねえ。

アキラくんと呼ばれて、殺し合いの演出に使われる小道具の説明を始める。

「縮尺・重量・素材はライドヘイセイバーと同じで内部に機械があるFRP製の110c

m……あ」

「ライドヘイセイ……何？」

「すみません、失言です。忘れてください」

「そうした方がいいなら忘れよう。他の仕事の話？」

「ええ、まあ」

仮面ライダージオウで、新武器ライドヘイセイバーが出んのいつだったけ？

そうだ、今年の12/9だ。次回予告に出んのが12/2、玩具発売が12/8。

あつぶね、関係者からの事前ネタバレ情報流出とかよろしくねえ。

気を付けねえと。

うっかりするとジオウ20話以降に登場する新ヒーロー・仮面ライダーウオズの武器

とかすら、ネタバレしかねん……夜風ルイ君とかが楽しみにしてるニチアサのネタバレ

が、身内からうっかり漏らされるとか、そういう最悪なことにならねえようにしねえと。

そういや仮面ライダーウオズの武器・ジカンデスピアって設計書だと140cmで作

られてっから、ルイ君の身長と同じくらいあんのかアレ。

割とでけえなあ。

いつけねえ、気を付けねえと。

アキラ君と二人で話してるとどうにも時々気が抜けるから困る。

「オーディション組の一部、一気に動きが良くなつてないかな？ 朝風君が何かしたと

見た」

「いや、ここまで良くなるとは思ってませんでしたよ」

「夜風君と合わせようという気が出て来たように見える。」

それと、僅かにあつた千世子君主導の歩み寄りに反抗的な部分が消えたよ」

「元から大なり小なりは合わせてましたけどね。」

でもやっぱり、景さんへの不理解と、大女優への反抗心もありましたし……

アキラさんが景さんに友好的に接してくれてたのも大きいですよ。

オーデイション組に友好的に接するスターズが一人でもいたのは、本当にいいことでした」

「それはそんなに影響あつたかな……?」

脇に置いておこうか、それは。

それはそれとして、オーデイション組が裏方含めて広い視点で動いているのはいいことだ」

アキラ君が、広場での撮影で殺し合い寸前の空気を醸し出している小寺さんと小西さんを見て、その動きを分析していた。

「朝風君は自分の目の一部を周りに少しだけ分けるのが上手いからね」

「そうでしょうか?」

「オーディション組がカメラマンや裏方の動きをよく見るようになってる。

ああやって周りを見てる人が増えれば、千世子君が手綱を握るのも楽なんじゃないか」

「そうなってくれてたら嬉しいんですけどね」

今日は百城さんが主演らしくある撮影だ。

ほとんどのシーンに百城さんがいる。

小寺さんの坊主頭は、小寺さんの体格もあつて活動的な印象を受ける。

彼が力強く動き、男らしい体格で百城さんの横に並んだりすると、小柄で華奢な百城さんの魅力が際立つ。

そいつは小西さんにも言える。小西さんはぼつちやりしてるからな。

身長高めの小寺さんと百城さんが『縦幅の差』で互いを際立たせるなら、小西さんと百城さんは『横幅の差』が互いを印象付ける。細身の美少女と、太めの男性キャラ、つてな。

佐藤さんはあんま目立たずほぼ台詞もねえが、だからこそ脇役として理想的に立ち回れる。

主演として強く印象に残る百城さんと、主演助演の役割分担が出来てる。目立つポジションと引き立てるポジションでの二極化はかなり理想的だ。

一色さんは明るく活動的な女性を演じて魅せてんな。

魅力的な振る舞いだが、だからこそ『普通にいい子』な百城さんが演じるカレンの、静かな部分や落ち着いた部分を相対で際立たせてくれる。

八代さんが理知的な演技を見せりや、それに賛同する百城さんの立ち位置も良くなる。

『カレン』は頭脳派キャラじゃねえが、愚かな選択をしたキャラは観客からの好感度が減っちゃう。百城さんはそんな愚行はしねえ。

頭が良い設定じゃねえキャラに正解を選ばせるには、頭脳派キャラに同意させりやいい。上手く周りのキャラと噛み合わせて、キャラに一貫性を持たせたままキャラの好感度を維持したか。

鳥山さんの巨躯、堂々たる立ち振る舞い、大きな声量が百城さんの演技によく噛み合う。

大きな声は繊細で小さな声を印象付け、鳥山さんの隣に立つ百城さんは相対的に小動物のような愛らしさを感じられ、ほんの少し見せたカレンの弱気が、とても魅力的に見える。

悪くねえ立ち回りだ。

ん？ どうしたアキラ君。

なんか嬉しそうな、寂しそうな、そんな感じの顔してどうした。

「本当に、君と千世子君を見てると、母さんが君を千世子君の横に置きたがる理由が分かる」

「何がですか？」

アキラ君はずっと、百城さんとその周りの俳優を見ていた。

「君が高めて、千世子君が手綱を握るのが、だよ。」

君が成長に導いて、千世子君が共演しやすい人が出来ることが、だよ。

まるで……小さなライトを手入れして、大きなライトの周りに並べてるみたいだ。

小さなライトは綺麗に輝き、より強く輝く。

そして、小さなライトは、大きく綺麗なライトの輝きの脇で、その大きな輝きを引き立てる」

「その人がその人にしかできない輝き方をしたなら、それだけで——」

「ああ、君はそう言うんだらうね。」

君は全部の輝きを等しく尊んでるから。

個性つてものを愛せるから。

でもこうして見ると、本当に思い知らされるよ」

アキラ君が、空を仰ぎ見る。

「『君達』が作る『主役の百城千世子』は、本当に『本物』だ」
諦めたようで、何も諦めていない顔。

「湯島君だったかな。彼女と君が会話をしてるのを見ると、他人を見てる気がしないんだ」

「茜さんを？ それって……」

その会話の最中に、近くを茜さん、源さん、景さんが通りがかった。

「気合入ってますね茜さん」

「明日は初日以来、初めての千世子ちゃんとの共演や。」

会話シーンもようやく二回目、って感じやな。

スケジュール的には、私の最後の見せ場……これが最後のチャンスやから」

「ぎゃふんと言われてやってください、茜さん。応援してるから」

「せやな、頑張らんと！」

景さんが、源さんに激励された茜さんを更に激励する。

「頑張つて茜ちゃん、千世子ちゃんに勝ちちゃうくらいに」

「……ん、夜風ちゃんにそう応援されたんなら、百人力や」

二人に激励された茜さんと、俺の目が合った。

「どうもごんにちわ、皆さん」

「英ちゃん、今日明日は私の撮影多いんでよろしゅうな？」

「はい、全力を尽くします」

明日は茜さんの最後の見せ場。

主人公・カレンを演じる百城さんとのぶつかり合いだ。

売れてない女優の茜さんと、今若手で最も売れてる女優の百城さん……その衝突に、茜さんが軽い気持ちで望むわけがねえ。

その瞳の奥に、“絶対に何がなんでも負けたくない” って熱意が見て取れる。

……だけど、俺は。

俺は。

アキラ君には分かってんだろう。

俺が、心のどこかで冷めた気持ちで、ライオンに戦いを挑むアリを見るような気持ちで、茜さんを見ることも。

競う気持ちでぶつかるなら、勝とうとしてぶつかるなら。

茜さんは絶対的に、百城さんの引き立て役にしかなれねえと、俺は認識していて。

そうなることを、俺は肯定していて。

その結果、いい映像が撮れることも分かっている。

俺の心は茜さんを応援してる。

茜さんの成功と、誰にも負けねえことを願っている。

百城さんの体調不良とかの可能性も0じゃねえから、茜さんが競って勝つ可能性もあるってことが分かかっていて、だからこそその僅かな可能性に祈りを込めてもいる。

茜さんと百城さんが衝突するなら。

俺は百城さんの勝利を信じ、茜さんの勝利を願う。

俺の心は茜さんの勝利を信じてねえし、茜さんの敗北を望んでねえからだ。

信じてえ。信じてえんだよ。

その上で。

俺は。

茜さんが百城さんに競り勝つとは微塵も思ってたねえ。

俺は百城千世子を信じている。

彼女が主演という席を与えられたなら、彼女は誰にも負けねえ。

どんな人の演技にも負けたりはしねえ。

絶対に誰の芝居も超えて、自分が最も目立つ名演をすることで、作品を完成させる。

脇役に演技の質で負けるなんてありえねえ。

百城さんを信じて裏切られたことなんて、一度もねえんだ。

そんな俺を理解した上で、全身全霊で百城千世子に打ち勝とうと、この子には絶対負

けないんだと……そう思いながらぶつかっていかうとしているのが茜さんだ。

茜さんは俺のことをよく分かつてる。

良いところも。

悪いところも。

付き合い長えからな。

そんな俺と茜さんの会話を、横でアキラ君が見ている。

茜さんの後ろから、景さんがじつと見ている。

明日、茜さんは競り勝つくらいのつもりで、百城さんにぶつかっていく。

『なんでそんな無駄なことを』と心の片隅で思ってる俺が、嫌だった。

茜刺す少女

子供の頃の私は、心も体もまだ子供で。

今の私とは違う考え方をしている。

未来を、とても楽観的に見ていた。

あの頃の私は……湯島茜が、今の私を見たら、どう思うかな。

臆気に覚えてる。

思い出したり、忘れてたりしながら、今も時々夢に見る。

子供の頃の私が、子役の中に混ざってる。

子供らしい緊張が私達の間を広がって、そこでオーディションが開かれてた。

周りには大人がいて。

父親の横にちよこんと座った英ちゃんがいた。

「英二君。君ならこの役に相応しい子役は誰が良いと思う？」

監督らしき人が、英ちゃんに問いかける。

英ちゃんのお父さんらしい人が、まだ早いと釘を刺していた。

英ちゃんは昆虫みたいな目でじっと私達を見て、子役一人一人を品定めするように見

て、私と目が合った。

そして、私を指差す。

「あの人が一番綺麗です」

あれ。あの時、私は何を思ったんだったか。

嬉しいって気持ち以外にも、何かを思ったはずだったけど。

英ちゃんみたいに機械じみた記憶力が無い私は、人並みに色んなことを忘れる。

「そうだね。あの子にしようか」

監督が英ちゃんと同じ判断をしたらしく、私が選ばれた。

そのドラマに使われる子役が私に決定して、選ばれなかった子供達が部屋から出て行く。

私の視界から消えていく。

消えていく。

選ばれなかった人は消えていく。

それがこの世界。

選ばれた人だけに価値があって、選ばれなかった人は有能も無能も、比較的天才でも比較的無才でも一緒に無価値になる。

”選ばれなかった無名の人達”の中に、一緒くたに放り込まれる。そんな世界を、私はずっと見てきた。

「よろしく。湯島茜さん」

「よろしゅうな、うち、頑張るから」

「？」

英ちゃんから挨拶されて、気持ちの入り方を宣言したら、首を傾げられた。

素直に、”あの人が一番”と言われて、嬉しかった気がする。

いや、嬉しかった。

間違はなく、飛び上がるくらい嬉しかった。

同時に、分かってもいた。

『一番』と『特別』は違うことも。

私は私以下の人達と一緒にいる時にしか『一番』には見られない。

英ちゃんが上に行けば行くほど、私がこの世界に残れば残るほど、『湯島茜以下』は引退して消えていき、私は相対的に下に行く。

だからもう、私がああのように『一番』と言われることはない。

後悔はない。

後になって悔いる、にはまだ早すぎる。

まだ終わっていないなら。『後』になっていないなら。
諦めきれない私は、まだ頑張れる。

知った顔が景さんと一緒に朝食を摂ってるのが見える。

おお、一昨日話してたやつ、早速行っただのか。

俺はちよつとそつちにや混ざる気ねえが、景さんに友人が増えるのはいいことだ。

オーデイション組に囲まれてチャホヤされてる景さんを見てると、完全無名だった頃から応援してたファンとして誇らしくなる。

けれど同時に”その人にずっと前から俺は注目してたんだぞ”みてえな、傲慢極まりねえ気持ちがあふつふつと湧いてくる。

ついでに”後からファンになった新参がよお!”みてえな気持ちも湧いてくる。

……面倒臭えファン心理だこれ!

まあメンタル切り替えてパパッと捨てとこう。

小せえ上に要らねえ気持ちだ。

朝から塩ラーメンを食ってる俺は健康に良い飯を食ってるのか、健康に悪い飯を食ってるのか、判断が分かれるところである。

ここは四人席。

俺の左隣に烏山さん、向かいに茜さん、左斜め前に源さん。

源さんが軽めの和食、烏山さんがガッツリとカレー食ってるのを見ると、男の朝食に相応しいものはなんぞや？　と思うな。

「あーあ、夜風組が形成されてきてんで、大丈夫かよ」

源さんが頬杖ついて、景さんを見ながら言う。

彼がまずすんのは心配。

悪目立ちのデメリット、スターズとの関係悪化進行を考える。

「良くも悪くも目立つからなあいつは。だがいいじゃないか」

烏山さんがカレーを素早く食いながら、景さんを見ながら言う。

彼がまずすんのは肯定。

源さんとは違う視点、演劇役者の視点……『明神阿良也を見慣れた者の視点』から、景さんを見ている。

いい視点だよな。

「楽しそうだ」

「そうか……?」

オーデイション組に囲まれてあわあわしてる景さんを見て、鳥山さんはどこか景さんの成長の展望をにじませ、源さんは景さんが周りに衆目されて右往左往してる姿を心配してる。

だが二人共、景さんを見てることは変わらねえ。

茜さんも会話にこそ加わってねえが、その目は景さんをじつと見ていた。

面白えよな。

百城さんも景さんも、自然と人目を引くのは同じだ。

だが、人目の引き方が全然違い。

例えば百城さんは人目を引く引かねえを立ち振る舞いや変装でコントロールできるが、景さんはそういうコントロール全くできてねえから、注目されてテンパってるわけだしな。

自然と人目を引く者。

自然と輝く者。

他の者には無い輝きを持ち、凡夫には届かない高みに在る者。

そいつを昔の人間は、『スター』と表現した。

『スターズ』は、そいつを作ろうとしてる会社だ。だが、そいつは。

”スターになれなかった者達”っていう蔑視に近え評価も生み出してきた。夜風ちゃんに負けてられへんな。

今日は初日以来の千世子ちゃんと共演の日や。

私の最後の見せ場……私かて堂々と演じたる」

茜さんが、自分に言い聞かせるように言う。

「英ちゃん、悪いけど付き合ってや」

「茜さんのお願いとくればいくらでも。車回してきます」

「あんがとさん」

さて、手伝いだな。

子供の頃、大女優・星アリスの名演を見た。

テレビの中のスターは皆キラキラしていて、星のように輝いていた。親は恨んでいない。

私が決めたことだから。

周りも恨んでいない。

「関西弁直さんと名女優にはなれんで」と言われたけれど、今は皆応援してくれている。

でも。

あ・あ・い・う・風・に・は・な・れ・な・か・つ・た。

子役は皆、心のどこかで自分の可能性を盲信してこの世界にやってくる。

ある子は自分の意志で、ある子は親の意志で。

そしてその盲信を失い、夢から覚めるようにして消えていく。

子役上がりの多くは、成功しない。

子役の時からずっと大当たりしていない俳優は、先がない。

本当に大女優になれるような人なら、十代で着実にステップアップしていく。

私は、そうはなれなかった。

上に行きたい。

でも、一段も上がれない。

前に進みたい。

でも、一步も進めない。

そんなイメージが自分に纏わりついてくる。

” 子役の時からずっとやってるのに今や端役しか与えられない” 女優の気持ちは、成功している人にも才能がある人にも、きつと分らない。

粘り気の強い泥の中で、沈みながら延々と歩いている気分。

上に行こうとしても、上がれない。沈んでいく。

前に進もうとしても、進めない。その場に留まることしかできない。

なのに周りは、私にこう言う。

「茜ちゃんはいつ、百城千世子みたいになれるんだい？」

誰にも悪意はない。

誰にも悪気はない。

でも皆、気軽にそう言う。

なれるわけがない。

ないのに。

同年代だから、比べられる。

百城千世子に町田リカと、私と同年代の成功株と、比べられる。

ごめんなさい。

期待に応えられなくてごめんなさい。

私、走るのが遅くて、ごめんなさい。

後悔はない。

後になって悔いる、にはまだ早すぎる。

まだ終わっていないなら。『後』になっていないなら。

諦めきれない私は、まだ頑張れる。

『同世代であること』ってのは、地獄だ。

俺の目には、少なくともそう映る。

そいつはスポーツでも、学問でも、普通の出世競争が激しめな会社でもそうだろう。

歳が近いと、世に出るのが同期だと、周りはどうしても比較してくる。

自分より速く成長する奴。

自分より速く出世する奴。

自分より速く成功する奴。

そういう奴らと、比べられる。

例えばアキラ君だ。

アキラ君の同年代の実力俳優とアキラ君が比べられて、『星アキラは親の影響力で成功したに過ぎない。実力は高くない』とか言われる。

ゴシップ誌は、こういう言い回しが好きだ。

こういうクツソくだらねえ批判を受けても揺らぐがレねえアキラ君の心は、強え。逆にアキラ君の同年代の若手男性俳優とかは、アキラ君と比べられる。

親に「あんたと同年年のアキラ君みたいにやれないの」と言われ。

友達に「お前アキラと比べると駄目だよな、ドラマに全然出ねえし」と言われ。

近所の人に「早くアキラ君みたいにならねえし」と言われ。

周囲に「アキラ君みたいになるためにもっと頑張らなきや駄目よ？」と、今の自分の努力を全否定され、同世代のアキラ君に比較され続ける。

映画に出て。

大成功してすら。

「あなた主演の映画の興行収入って、アキラ君主演の映画の興行収入の半分なのね。

もつとがんばらないと」と言われる地獄。

この重圧に耐えられねえなら。

とても、この業界には居られねえ。

……だから、俺と友人だった俳優もたくさん、そりやもうたくさん、辞めていった。
茜さんの、この世代は地獄だ。

特に女優は地獄だ。

こつから先の時代に、確実に地獄になる。

何故なら。

常に同じ時代に、同じ世代に、同じ年齢層に、百城千世子と夜風景がいるからだ。

常に比べられる。

常に比較される。

姿勢を。能力を。役幅を。個性を。

”今の十代の女優なら千世子か夜風を使いたいよね”と全ての監督が思うようになったら、同年代の女優はどうすりやいいんだ？

そうなる可能性は、決して0じゃねえ。

誰だって、自分が使いてえ俳優を使いてえ。

対戦ゲームと同じだ。

飛び抜けて強いキャラがいるなら、誰もがそいつを使おうとし、弱いキャラを使おうとするやつは目を覆いたくなるくれえに少なくなっちゃう。

しかも、歳を取る速度は皆同じだ。

十年後。

『20代のいい感じな大人の女性』を使いたくなつた監督が、「じゃあ夜風か百城のどっちかにしようかな」って二択になつてる可能性もある。

二十年後。

熟女の選択でも二択だったなら。

三十年後、四十年後、五十年後……何年経とうが、この世代の女優はずっと『夜風景と百城千世子の同世代』だ。

世代は、年齢層は、そのままスライドする。

無論、ここまで極端なことになることはねえだろう。

有名じゃねえ俳優を使ったがる監督もいるし、有能な女優を選ぶより女優を有能に育てるのが好きな監督もいるし、低予算映画で有名女優が使いねえ監督もいる。

この二人だけが仕事独占するってこともねえ。

だが、常に比較される。

スポーツの同世代みてえに。

会社の同期みてえに。

優秀劣等がきつちり分かれてる対戦ゲームのキャラみてえに。

『あの人は凄いいんだよ』と誰かが言っても。

『でも、○○ほどじゃないんでしょ?』と言われる関係性が、永遠に残る。

銀メダル、銅メダルを握りながら、いつも金メダルを取っている人の顔を、いつものように見上げる関係が何十年も続きかねえ。

最優秀賞をいつものように取るその人を、負け犬の気持ちで眺める関係が続きかねえ。

「この世代を代表するのはこの人ですね」と、テレビで紹介されているその人達を見つめながら……「私もその世代なんだけどな」と呟く日々が続きかねえ。

そういう毎日と現実には耐えられず、何人もの奴らが辞めていった。

歴史に残りそうなレベルに優秀な奴の同年代にいるってことは、そういうことだ。

アリサさんの同年代。

百城さんと景さんの同年代。

ぶつちやけ、後者の方が『比べられる』苦しきはでけえだろう。

アリサさんの世代だって、決して楽じゃなかったのに。

俺は歌音ちゃんを現役子役の中でもトップクラスの芝居の才能があると思ってるが、

それが俳優として成功する最たる条件ってわけでもねえ。

俳優には他にも必要なもんがある。

『心の才能』だ。

タフであること。

諦めねえこと。

踏ん張り続けられること。

批判や嘲笑で心折れねえこと。

そいつもまた、俳優に必要なもんなんだ。

——あなたに必要なのは、強い心の足よ。どんなに心が傷だらけでも、立ち上がる

心の足

俺は随分と恵まれてる。

おふくろが、俺がまだガキだった頃に一番大事なものをくれた。

アキラ君や茜さんには、心の才能は十分にあるように見える。

だからこそ、二人がなりたい自分になるための才能がもう少しありや、景さんや百城

さんとも正面からぶつかれたのに……と思わずには居られねえ。

二人にはなりてえ自分がある。

その自分になるための才能が不足してやがる。

この先どうなるか……そうだ、この先だ。

今、少し先の地獄を想像できてる女優は何人いんだろうか？

百城千世子はどここの撮影にも引っ張りだこ。

百城さんがNG出さねえのもあって、百城さんは毎日のように仕事仕事、圧倒的な仕事消化速度で仕事をこなしてる。

その表現力の高さ&汎用性に、『百城千世子』そのものが売りになるつつー特性もあって、金稼げてえだけの企業は百城さんに仕事を集中させる。

夜風景は、未知数だ。

正直言っつてどう転がるか全く分かんねえ。

だが、景さんは自分にしかかなねえが、逆に言やあ自分を広げれば誰にでもなれるし、全く違う自分にもなれる。

自分を殺す演技まで覚えりや、もはやできねえ役はなくなるだろうな。

こいつらが多くの仕事をかつさらって、多くの賞をかつさらったら、同年代が獲れる仕事や賞つてのは残り物つてことになる。

そうでなくても。

ゴシップ誌や映画誌は、同年代・同世代をこぞって比べる。

そういう雑誌の比較記事で、大きく扱われる百城さんや景さんの横で、いつも小さく

しか扱われねえ自分を見て、その世代の女優達は何を思うのか。

景さん達の十歳年上の世代、十歳年下の世代の代表格が、景さんや百城さんの同世代の四番手五番手くらいだったりするかもしれないねえな。

”生まれるのが後十年遅かったら国民的大女優だったかもしれない”って評価されてる人、いないわけじゃないんだぜ？

同年代、同世代に圧倒的格上がいたから影に隠れちゃった、そういう悲劇の名俳優ってのは時々話題に上がるもんだ。

茜さんは分かかってんだらうか。

この先を。

業界に生きていくなら、”常にライバルと対抗馬が百城千世子と夜風景”の時期も来る。

その二人と被らねえ需要を探して、二人と競いながら、ぶつかり合う地獄が待ってる。百城さんも景さんも、こつから十年、二十年と成長して芸幅を広げていきそうなのだ。

成人後の人気俳優が消えてく大きな理由の一つが、まさにこれだ。

自分の上位互換が現れる。

自分の仕事のシェアが他の奴に奪われる。

「そうして仕事がなくなっていく。パターンの果てに、引退……そんな大人を、何人も見てきた。」

応援してる。この業界ですっと一緒に仕事していてえから。

心配になる。俺は一人の友人として、茜さんが苦しむのが嫌だから。

正解つてのがどこにあんのか、時々分からなくなっちまう。

分かんねえから。

今は、茜さんを全力で手伝うしかねえんだ。

「——というわけで。そこでそう動くことが、観客受けと監督受けがいいと思います」
今日の撮影に使う砂浜に俺と茜さんはフライングで到着し、フライングで茜さんの演技プランを二人協力して立てていた。

「雨の影響ってどないなるんやろ」

「今回は海の撮影です。」

海辺に立つ百城さんと茜さん。

一対一での会話シーン。

放水車から水を撒き、雨を演出。

ネズミの撮影や爆炎の撮影に使った大型扇風機で、『雨』を『風雨』に。

砂浜表面には、ロサンゼルスハリウッド仕立ての小細工を少し施してあります」

「ハリウッド?」

「ロサンゼルスでの撮影時、雨がないう撮影でも路面を濡らしているというところはご存知ですか?」

「へ、そうなん?」

『雨が降ったシーンが無いのに道路が濡れてるな』

とハリウッドの映画で思ったことがあれば、まず間違いなくこれです。

『人が立つその場所を濡らしておく』というテクニックですね

「ほー」

「路面を濡らすことで、路面に質感を出す。

路面に水面を作ること、光を反射させる。

例えば、コンクリートは濡れていた方がそれっぽく見えます。

車の走行シーンは、車のライトを路面が反射した方が臨場感が出ます」

「ああ、乾いた路面より、濡れた路面の方が光反射するんやな」

「その通りです。」

俳優の姿を路面の水面に反射させたりもしますしね。

「画面内部に水濡れで光のメリハリを作ると、俳優もくつきり見えるんです」

「ふむふむ」

「今回の撮影においては、島の反対側の砂浜から砂を持ってきて撒いてあります。

砂色は問題無いでしょう。砂の色はイメージをかなり左右する。茶が混ざった砂浜は日焼けした肌に合い、真っ白な砂浜は青い海と合わせれば非現実感を出すことが可能で、ピンク色の砂浜というものも存在する。この場合は、英二がややグレー味が出るように砂浜の色彩を微妙に調整し、デスアイランドにおける『制服の黒』と『千世子の白』と『俳優の肌色』が埋没しないようにしつつ、デスゲームの暗い雰囲気や砂浜の乳白色が相殺してしまわないよう、砂浜表面の暗さを調節したことを指す。

そして撮影直前に足跡を均して消す予定です。

スタツフが歩き回った足跡が残っていたら大変ですから。

あ、放水車のタイヤ跡も消しておきます。

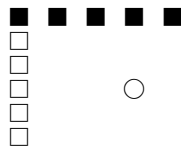
監督の要望でそこそこ暗いシーンの撮影になるでしょう。

照明はかなり拡散し、広めに照らし、砂浜と茜さんを照らす形になると思います」
「気を付けること、なんかあるかな」

「良くも悪くも雨、ですね」

俺は木の棒で砂浜に絵図を書く。





■が海岸線に並ぶ放水車。

□がカメラやら照明やら監督やら。

○が向き合う百城さんと茜さん、と説明した。

「いいですか、この放水車から水を飛ばして雨を降らせます。

雨はそのままだとカメラにも目にも見えにくいです。

なので拡散させた光を、照明側から雨に当て、反射させてカメラに映します」
「せやな」

「今回の撮影は、相当に雨の質感にこだわってます。

そのためにカメラを俳優から離し、かなりの広範囲に雨を降らせてます。

放水車六台ですよ？

ニチアサ特撮だと劇場版でもホース2、3本で雨シーンやるんですよ？

この広範囲雨で出す質感とか、なんとも羨ましいと言うか、こだわりが見えるというか……」

「英ちゃんの羨ましい話はどうでもええねんて、もう」

「あ、すみません」

「ええて、英ちゃんは英ちゃんらしくてええんや」

「本当すみません、話続けますね。」

なので、カメラは結構離れたところから引きの画を取って、ズームします。

離れたところからのズームです。

近くのカメラから撮るんじゃないやありません。

なのでつまり、茜さんとカメラの間に入る雨粒の数が増えるんです。ぼやけが出ます」

「あー」

「おそらく、普通のドラマの顔アップシーンで使われる

『眉の僅かな動き』

『唇の僅かな動作』

などでの感情表現は、この豪雨の中だと通じにくいかな……と思います」

「それやと私有利で千世子ちゃん不利やないか？」

私が千世子ちゃん糾弾する役の分、千世子ちゃんの方が繊細な表現必要やろ」

茜さんは、死んでいった仲間のことで百城さんを責める演技をする。

百城さんはその糾弾を受け止め、反論し、茜さんとの関係を決裂させねえままだに皆で生きて帰ろうと再度呼びかける演技をする。

やがてその流れは、クライマックスへと繋がっていき……つて感じだな。

確かにまあ、動的なアクションを追加する余地がある茜さんの方がやりやすいか。

「百城さんは俺のこういう心配は要らない人なんですよ」

茜さんの眉根がピクリと動いた。

「私は千世子ちゃんと違って、心配要るくらいの未熟もんやからな」

「友達の心配をするのに理由が要りますか？」

「おっ、おおう」

「百城さんと演技力で競って勝つくらいの気持ちなんでしょう？　しつかりしてください」

「……ん、せやな」

「服は透けません。」

熱い気候に合わせた通気性ですが、透けないように作ってあります。

雨の存在感を出す照明は、砂浜を照らします。

質感を出し、そこに立っているお二人の存在感も引き立ててくれるはずです。それと海風も。

海風は昼は海から陸、夜は陸から海に風が吹きます。

夜の風の方向に惑わされないように。撮影中は海の方から雨が流れてきますので「これでもかかって心配しとるなあ。

ん、まあでも、英ちゃんは誰に対してもそんなくらい心配して、対策立てとるしな」

「友人サービスは結構多大に入ってますよ」

「ふふっ、せやったか」

茜さんが微笑む。

撮影準備開始まで、あと30分くらいか。

スタツフがぼちぼち集まってきた。

「準備は万全です。」

茜さんと……その、百城さんも、最大限に引き立ててくれます」

「英ちゃんほんま公平やな」

「すみません」

「ええんや。実力で百城千世子にぶつかって行くこと思う。」

「こんな開けた砂浜で、小細工なんてできるはずもないんやしな」

「俺も何かを仕込めるところはないでしょうね」

「うっはー、百城千世子に一回でも競り勝って瞬間的NO. 1になれば、自慢できそうやな」

……茜さん。

「一番になれたら嬉しい。そう思うことは、何も変なことやないはずや」
「ですね」

茜さんが笑って俺の顔をじつと見る。

「そう、一番に……」

瞳を閉じて、何かの気持ちを含み下すようにした茜さんが、瞳を開く。

「一番に」

前とは違い。

何かが違い。

自分の壁を一つ越えたような茜さんが、そこにいた。

「茜さん？」

「本気でぶつかって、それで負ける度に悔しいんや。

他と比較されて下に置かれる度に悔しいんや。

でも、頑張ってきた。できることは全部してきた、そのつもりや」

「はい。俺はそれを見てきたつもりです。頑張ってください」

その頑張りが報われてほしいと祈る。

その頑張りが報われるとは信じられない。

どうしても、そこだけ変えられねえのが、俺だった。

茜さんが困ったように笑う。

「こういう時、英ちゃんに無条件で信じられるのが、一番の特権なんやろな」

「すみません」

「謝らんでええて。英ちゃん責める気になんてなれへんし」

俺が無条件で信じられる人なんて、何人いるのか。

……百城さんと誰かが競い、その誰かの競い勝ちを俺が信じられるような、そんな人が数多くいるはずもねえ。ねえんだ。

だから、俺は。

「うちもな。同情やなくて、能力で信頼される女優になりたい」

「――」

力強く、茜さんは笑む。

ガッツがあること。それが、この人やアキラ君にある強さ。

天賦の才に恵まれた人以外で『負けるか』と踏ん張れる人が、どれだけ輝いているか。

それを知らしめてえ俺が一番、茜さんやアキラ君に対して失礼な感情を持っている。

英ちゃん気にしすぎやろ、と言葉が浮かんでは消える。

そういうのが英ちゃんやって知つとるがな、と言葉が浮かんでは消える。

英ちゃんの”技能抜きで他人の心を好きになる”つての、受ける側からすれば悪い気持ちやないんやで、と言葉が浮かんでは消える。

もう、本番が始まる前だから。

それを英ちゃんに言いに行く時間の余裕がない。

たくさんの観光客が、千世子ちゃんをひと目見ようと撮影現場の周りに集まっていた。

今皆の中心にいる私が英ちゃんに話に行きでもしたら大騒ぎだ。

「千世子ちゃんあん」

「こっち見てー!!」

「天使ー！」

「千世子ちゃんー！」

周りを見てみると、緊張で徐々に心をやられてしまいそうだ。

今は、目の前の千世子ちゃんに集中する。

私と目が合った千世子ちゃんが優しく微笑む。

気を張っている私とは対照的に。

競い勝とうとする私とは対照的に。

湯島茜なんていうものを歯牙にもかけない、上位者の微笑み。

百城千世子が競り負けるなんて、微塵も思っていない微笑み。

それが少し、癪に障った。

「千世子ちゃんって、私らの世代の代表……『一番』で居続けるの、辛くないんか？」

少し揺さぶりをかけようとした気持ち半分。

この大勢のギャラリーのの前でもほんの僅かな緊張すら見えないその心が、一体どんな構造をしているのか、ちよつと気になったというのが半分。

自然と、私は目の前の千世子ちゃんに問いかけていた。

「大変だよ。誰か一人の中でだけでも、『一番』で居続けるのって」

「……せやろな」

「全ての人のとつての『一番』になれる人間なんていないんじゃないかな。

それができるなら、狙った人の『一番』で居続けるのも簡単な、洗脳能力みたいなものだし」

「ん、わかる」

含みがある言い方だった。

含みがある言い方で返した。

互いに、一の言葉に二つ三つの意味を持たせる。

素の表情を全く見せないような“完璧な表情を運び”を見せる千世子ちゃんの内心は全く読めず、撮影時に一心同体の動きを見せる英ちゃんがどうやって心情を把握しているのか、私には全く分からなかった。

「皆、大変なんやな。一度一番になったら、落ちるの怖かったりせえへんの？」

私だったなら、一度でも『若手俳優を代表するNo.1女優』なんて芸能誌に書かれるような千世子ちゃんの立場になってしまったなら、そこから落ちるのが怖くてたまらなくなる。

一度でも自分を一番だと見てくれた人が、他の一番を見つけたら。

そう思うだけで、怖くてたまらない。

子役でチャホヤされた人は、いつからか自分を一番だと思ってしまうようになって、そんな思

い込みと現実のギャップで潰れる……なんて、話がある。

真咲ちゃんですら、スカウトされて有頂天になって、自分が一番だと思いこんでいたのに鼻っ柱を折られて、今の芸風になった子だ。

自分が一番でないことに耐えられること。

そこから立ち上がれるガッツがあること。

そのくらいしか、私には千世子ちゃんに勝てそうなものがない。

そんな私に、百城千世子は微笑みかける。

「そうしたら、また取り戻せばいいんじゃないかな？ その人の中の一番を」

「――」

まいった。

この人は、ちよつとやそつと折れたくらいじゃ、終わらない。

成功者であること、失敗者であることが、この世界を抜けることに直結しない……英ちゃんと同じ。

才能以上に、人生全てを一つのこと懸けているから強い人。

英ちゃんを見ていたから、それが分かる。

やめてほしい。

ガッツでも、諦めない気持ちでも、私の上を行かないでほしい。

勝てるどころがなくなってしまう。

千世子ちゃんを褒めちぎる英ちゃんの話も、冷静に聞けなくなってしまうたら、もう駄目だ。

英ちゃんがそうで、千世子ちゃんも同じなら、もしかしたら、夜風ちゃんも？

「千世子ちゃんって、夜風ちゃんのことどう思ってるんや？」

その名前を出しても、千世子ちゃんは特に反応は示さない。

英ちゃんはどうやって心情を読んでいるんだろう、とますます不思議に思う。

「湯島さん、内緒にしてくれる？」

「ん。約束する。私は約束は破らんやつや」

ただ、乙女の勘だと、友達になろうとする夜風ちゃんから距離を取り続ける千世子ちゃんは、夜風ちゃんが嫌いなんじゃないかと思う。

「あんまり余計な影響与えてほしくないんだよね。責任取る気もないくせに」

「何にや？」

「やだな、分かってるくせに」

手塚監督に？

撮影現場に？

英ちゃんに？

……何を考えているのか、さっぱり分からない。

顔に浮かんでいるのは、可愛らしい笑顔だけ。

責任を取る気？

「私の人生で友達になれないと思ったのは夜風さんだけだよ。これでいい？」

「……そうなんかもな、とは思っとったけどな」

うん。

駄目だ。

駄目だね英ちゃん。

仲良くできそうにない。

「私、千世子ちゃんよりは、夜風ちゃんの方が好きみたいや」

千世子ちゃんが、柔らかに微笑む。

「で、それは夜風さんの真似？」

私に剥き出しの激情をぶつける役作りはできた？」

「……ん、まあ、せやな」

司会みたいなおことをしてる町田さんの声が聞こえる。

「ご覧下さい！ この人の数！」

千世子ちゃんをひと目見ようと、大勢の観光客の皆さんが押し寄せています！」

観光客の声はどんどん大きくなっていき、千世子ちゃんに向けて大きな声が上げられ続け、もはやライブステージの観客じみたものになっていた。

「半分宣伝目的なんだと思う。ごめんね、集中できないよね」

千世子ちゃんが優しく語りかけてくる。

心配してくる。

上位者が初心者の手を引くように、私の緊張をほぐそうとしてくる。

私は対等の立場ではなく。

千世子ちゃんは私の緊張をほぐそうとするくらいには、私より上で。

上から目線でないそれすらも、どこか上から目線に感じられてしまつて。

ほんの僅かに、腹が立った。

それは私が、千世子ちゃんに負けたくないと思つているからだろうか。

一度、深呼吸。

落ち着いて、リラックスして、横目で夜凧ちゃんを見て、千世子ちゃんの『ごめんね』に返答する。

「……ううん」

私も、夜凧ちゃんのように。

「今日は、大丈夫」

ただ夢中に、ただ一心に。

「そっか」

夜風ちゃんみたいに、と思っただけで、心がすつきりとする。

と、同時に、千世子ちゃんが私の様子に何かを感じたのか、あまり好印象ではなさそうなる反応を見せた。

夜風ちゃんみたいな演技、そんなに嫌？

自分らしく、じゃなくて。

夜風ちゃん、らしく。

百城千世子の心を揺らしていた夜風ちゃんらしく。

私が凄いと思った、夜風ちゃんのあの演技のように。

英ちゃんが惚れた、惚れ込んだ夜風ちゃんの演技のように、自分に埋没する。

そのせいか、私の口から、つい心に浮かんだことがポロツと漏れてしまった。

「後から来てすぐの夜風ちゃんに追い抜かされそうなら、私らどっこいどっこいやないかな」

「――」

一瞬。

たった一瞬だけだったけれども、千世子ちゃんの目に、本気の光が宿ったのが見えた。

ああ。

なるほど、今の一瞬だけは、英ちゃんが千世子ちゃんを『根が可愛い人』って言った意味が分かるような気がする。

「テストはなしで。雨に濡れるシーンだ、2人に負担はかけさせたくないからね」

監督の声が聞こえる。

「本番！」

「お静かにお願いしますー！」

助監督や町田さんの声が、観客を静まり返らせていく。

耳に優しい町田さんの声が通り過ぎると、後に残るのは沈黙だけ。

「本番ですー！」

集中。

もうほとんど周りの声も聞こえない。

カチンコの音にだけ集中して、それが聞こえたら、役に入る。

全力でぶつかろう。一番になれないと自覚していても、負けたくない、そう思えるか

ら。

英ちゃんも夜風ちゃんも私の大切な、大切な……だから、この人にだけは負けたくない。

い。

後悔はない。

後になって悔いる、にはまだ早すぎる。

まだ終わっていないなら、『後』になっていないなら。

諦めきれない私は、まだ頑張れる。

茜の世界

カチンコの音が鳴る。

茜さんが役に”入る”のが見えた。

百城さんが役を”作る”のが見えた。

皆で協力して生き残ろう、と呼びかける『主人公』を百城さんが演じる。

けれどもその過程で多くの友達が死んでいった『脇役』を茜さんが演じる。

それは『人間らしい綺麗な善』で居続ける百城さんの演じるキャラと、『醜くもどこか人間らしい』茜さんが演じるキャラの衝突。

ここには、人間の強さと弱さの両方がある。

強い人間として観客に憧れと尊敬を向けられる輝きの部分と、弱い人間として観客に共感と同情を向けられる醜さの部分の、両方がある。

”二人で演じる”からこそ、その二極性を観客に見せられる。

追い詰められても揺らぐが『人を殺してはならない、友達を蹴落としてはならない』という在り方を貫く、強い者のみが持てる綺麗な人間らしさ。

追い詰められたことでメッキが剥がれ『死にたくない、他人を蹴落としても生きる

「この何が悪いのか」と叫ぶ、弱い者が見せる醜い人間らしさ。

それが、このシーンの肝になる。

「カレンはいつも綺麗事ばっか！ 私達に死ねって言うの!？」

茜さんが叫ぶ。

……お、いいぞ。よく通る声。感情が乗った言葉。感情に沿った身振り。

悪くねえ。

いや、良い。

過去最高の演技だ。

数年分の成長を先取りしたような劇的な成長。

スターズと違って成長前の能力値が低めだった分、その成長は殊更劇的に見える。

景さんの影響で一気に自分の殻を破ったか。

茜さんの能力は……デスアイランド前は、光るものはあっても十把一絡げの女優に埋もれる危険性を無視できねえ、そのくらいのレベルだったが。

今はもう少し何かを積みめば、スターズクラスに肉薄できるレベルにある。

いいぞ。

もつと壁を越えろ。

この瞬間のこの演技のレベルを一回だけの奇跡にすんな。

まぐれ当たりですんな。

自分に定着させろ。

一回だけの奇跡的な最高の演技なんてもんに、価値はねえんだ。

……ねえんだよ。

続けて、茜さんが百城さんに叫びを叩きつける。

「あなたの綺麗事を鵜呑みにして一体何人が死んだ!? 皆で生き残りたいなんて嘘ばかり!」

茜さんがぶつけるのは怒り。

『カレンの言う綺麗事』で死んでいった人達のことを語りながら、怒る。

だがその裏には悲しみ、絶望、自己嫌悪がある。

友達が死んだ悲しみ。もう先がないという絶望。何もできなかった自分への嫌悪。

その全てを、茜さんは演技一つで具現化する。

怒りの言葉。

怒りの声。

されどその怒りの裏に、確かに感じられる悲しみ。

俺や一般人みたいな奴らができねえ、『二つ以上の感情を一つの演技で観客に誤解なく伝える』という超絶の技巧。

これができる女性を、人は『女優』と言う。

最後に生き残るのも『主人公』。

最後に得て終わるのも『主人公』。

そうでないキャラは死ぬ運命にある。それがデスアイランドだ。

死ぬ運命にあるからこそ、この叫びには悲嘆が乗る。

死んでいく犠牲者達の一人であるからこそ、この表情には感情を揺らす力が乗る。

茜さんが演じるキャラは、最後の勝利者でないことが約束されている。

『クラスメイト』という『その他』であることが約束されている。

『主人公でない』ことが約束されている。

『特別でない』者の叫びであるからこそ、この叫びは観客の胸に響く。

「カレンはいつもそうよ！」

周りとは違うみたいなの振る舞いで、いつも綺麗で……

あなたみたいになれないと思うと、みじめな気持ちにさせられて！

友達を殺さないって言い続けてるあなたがどれだけ綺麗に見える！

生きるために殺し合いをしようとしてる私達が、どれだけみじめな気持ちか分かる

!?

雨が演技の熱量を遮断しきれてねえ。

突き抜けるような感情の奔流が、ピリピリと伝わってくる。手塚監督は無言のまま見てる。

いい演技が出来てる時、この監督はこういう見方をする。

撮影現場を囲んでた観客も、皆茜さんを凝視してる。

声一つ漏らしてねえ。茜さんの演技の迫力に手に汗握ってる、ってとこか。

雨のカーテンの向こうから感情を伝え、観客の心を動かす。

まさに、いい女優の真骨頂ってとこだ。

一発本番の撮影に、過去最高の演技を持つてくるか。

”持つてる”な、茜さん。

俺も思わず口角が上がる。

これは劇場公開すりゃ”湯島茜”を評論家が評価する内容になりそうだが。

ちつと、どうかな、これ。

監督・演出が伝えてた予定と随分違えぞ。

当初の予定だどこまで激しい芝居にする予定はなかった。

百城さんが言い返さねえといけねえからな。

茜さんが百城さんを糾弾して、百城さんが毅然とした態度で言い返して、茜さんが心

情的に百城さんの味方に付き、殺し合いを止めようとする流れが再始する、って流れだ。
『感情の流れ』は自然じゃなくちやならねえ。

それまで普通の様子だった人が突然激昂したり、人を殺しそうなほど怒っていた人が突然落ち着いたりすると、違和感がありすぎて全く自然に感じねえからだ。

作中のキャラの感情は、観客が自然に感じる推移のさせ方をさせなきゃならん。

映画だとそういうのは「脚本の都合で動かされてる」「脚本のせいで頭おかしい人みたい」とか言われる。

感情の移り変わりに共感できる脚本にしろ、ってことだな。

ただここがまた難しい概念だ。

脚本の先の先まで読む名俳優は、自然な感情の流れを計算して演技の流れを組み立ててくれるから、監督や脚本がゴミでも感情の流れが自然に見える。

逆に監督や脚本が、台本に細かく演技の流れを書いて指示しても、感情表現がど下手な俳優だと自然な感情の流れが表現できねえんで、「突然キャラが豹変するゴミ脚本」とか観客に言われちまったりもするわけだ。

感情の流れは、自然じゃなくちやならねえってのは、そういうことだ。

茜さんが激情をぶつけてる以上、こいつを軟着陸させんのは難しい。

ここまでの激情だと、カレンの言葉に耳を貸すのも、カレンに歩み寄るのも、カレン

の心情的な味方になるのも不自然だ。

むしろ、ここでカレンを殺しちまう方が自然に見える。

景さんが役に入りきってこのポジションにいたら、カレン突き殺してんじやねえか？
軟着陸させるには、激情が収まっていき、カレンの言葉に耳を貸し、カレンの心情的な味方になる……って流れと芝居を作らなくちゃならねえが。

茜さん、そこまで考えてねえよな。

『景さんみたいに』演技に夢中になって、最大熱量で百城さんにぶつかりに行つてやがる。

このままだと、百城さんが予定通りの言い返し方をすりやあ、茜さんの激情の演技と真正面から衝突して、喧嘩になつちまう！

喧嘩別れになつちまったら、脚本が全て破綻する！

脚本が破綻しなくても芝居の流れが破綻するぞ！

どうする？

俺に何かできるか？

茜さんは海岸線と放水車に背中を向け、百城さんと向き合う立ち位置。

百城さんは陸と野次馬観客に背を向け、放水車と茜さんを視界に収める立ち位置。

それを横からカメラが撮ってる。

……放水車の後ろから回り込めば、カメラに映らねえで二人に近付けるな。急げ！
「カレンになんてついて行かなければよかった！」

そうすれば、死ななかつたかもしれない人もいたのに！

カレンに憧れてて、その後をについていったあの子は、もう、もう……！」
茜さんは感情が乗ったいい演技をしてる。

だからこそ、生半可な演技じゃ当たり負けする。

料理に大量の唐辛子をぶち込んだみてえなもんだな。

インパクトは強まった。刺激も強くなつて面白みも増した。

だが、最初に予定された完成形からは遠ざかり、調整は一気に難しくなった。

湯島茜の最高の演技が、湯島茜の評価の上昇が、作品の完成度と一貫性を損なう。
景さんの演技が、そうであるのと同じように。

放水車の間に辿り着いた。

放水車の合間でホースを持ち、吹き出した水で雨を降らせている人に頭を下げる。
どっちだ。

茜さんと百城さん、どっちのサポートをする心持ちで立つ？

どっちをカバーすりやりカバーできる？

と、その時。

百城さんが、向き合う茜さんと、放水車の間でホースを持つのを手伝い対応策を練る俺を、同時に見た。

百城さんの立ち位置ならば、首も動かさずに俺達を同時に視界に捉えられる。眼球のほんの僅かな動きで、俺達二人を同時に見ることができる。

俺達を見ながら、百城さんは口を開いた。

「ごめんね」

とても、静かな演技だった。

台本通りの台詞だった。

だがその一言で、茜さんが作った流れが、微細に変わる。

その百城さんの作った声を、表現を、なんと云えばいいのか。

そうだ。

雪だ。

”雪が降り積もる音” っつてのがあるのなら、多分今の百城さんの声はきつと、それに近え。

静かで、微かで、綺麗で、優しい。

そんな発声の演技。

茜さんが作った『激情による怒りと悲しみの糾弾の流れ』が損なわれ、当初予定され

ていた百城さんが強く言い返す流れが、どっかに行く。

だが茜さんは、演技に一貫性を持たせた。

「謝らないで！ 死んだ人は帰ってこないのよ、カレン！」

雨のカーテンを貫くような、強烈な感情を叩きつける芝居。

罵倒じみた言葉の攻撃。

10m、20mと離れた位置にいる野次馬達が茜さんの声量に驚き、迫力に気圧されて小さく一歩引いたり、上半身を後ろに引いたりしてんのが見える。

そのくらいに、今の茜さんの演技には破壊力があつた。

目の前にいる百城さんにかかっている圧力はやべーもんがあるだろう。

百城さんの代わりにあそこに木梨さんを立たせたら、迫力ある怒りの演技と砂浜を揺らすような怒声に気圧されて、台詞も忘れて固まっちゃまいそうだ。

”怒声をぶつけられる”ってことが脳や神経系に悪い影響を与えるってのは、脳科学の分野でも確認されてるもんだからな。

怒鳴られて台詞を忘れる、くらいは撮影の舞台じやかなり見る。

だってのに。

百城さんは、綺麗なままだった。

「でも私は、諦められない」

綺麗な演技。

静かな演技。

穏やかな演技。

声を張り上げているのは茜さんなのに、何故か静かな百城さんの方が印象に残る。

印象に残る派手な色を塗りたくったキャンパスの中で、唯一残った綺麗な白地が、逆に印象に残るような。

どこもかしこも爆発している戦場で、唯一全く爆発していない領域が目立つような。

うるさいメタル・ミュージックが響く中、綺麗な高音と綺麗な低音を組み合わせた上
等な音楽が逆に目立つような。

派手で激情的な声よりも、静かで優しい声が目立つ。

百城さんに勝とうとする茜さんの演技と声が、百城さんの演技と声の引き立てに回っ
ていく。

茜さんの演技にあつた迫力とインパクトが、全て百城さんの演技を引き立てるための
踏み台へと変わっていく。

激辛料理の合間に出された甘い優しいデザートが、激辛料理の『インパクト』を踏み
台にし、それ以上のインパクトを残すかのよう。

インパクトがあるものを、インパクトがねえはずのものが踏み台にして、自らの演技

の一環へと取り込み、自らの演技をより印象に残るものにした。

ヤベえ。

これ、見た覚えがある。

オーディションの時のやつだ。

景さんが静かな声で、大声で口喧嘩していた茜さん達の演技をぶつたぎったアレと同じだ。

百城さんはあのオーディションを見ていたと、確か言ってやがったな。

だが、同じなのは結果だけだ。

あの時の景さんは、景さんの演技のやり方で、役に入り込んで全てを破壊するぶつかり方をし、リアリテイによって茜さん達の芝居の流れを粉砕した。

今の百城さんは、百城さんの演技のやり方で、役に入り込んで芝居の流れを破壊しようとする茜さんにぶつかり、芝居の流れを守るために茜さんの演技を粉砕した。

まるで……百城さんが、”こういうのはこういう風にやらないと”と景さんに言うてるかのようにすら感じられる。

『静かな演技で大声の派手な演技を粉砕する』という演技のリバイバル。

茜さんが、景さんの時と同じやり方で演技の上を行かれるっていう、再演。

真逆のやり方で、あの時のことが、繰り返されてやがる。

「誰にも死んでほしくないんだ。

誰にも殺してほしくないんだ。

私は、自分が絶対に正しい人間だなんて思っていないよ。

でもね。これが正しいことなんだと思いたい。これが正しいと信じたいんだ」

もう誰も、茜さんの方を見てねえ。

茜さんは激的で、百城さんは静的なのに、皆揃って百城さんしか見てねえ。

茜さんの演技を柔軟に受け止め、自分の演技の引き立て役として利用して、観客の視線を全て集めた百城さんを見る。

観客のほとんどに百城さんは背を向けてるつてのに。

それでも視線を集める百城さんが、化物じみてやがる。

他人を自分に夢中にさせる天才。努力によって自分を天才にし続けている頑張り屋。

いつ見ても、惚れ惚れする。何度でも夢中になっちまいそうだ。

景さんにできねえことだと俺が常々思ってる、”相手の演技を受け止め柔軟に相手に合わせる”って技巧を、百城さんは難なくこなす。

自分をコントロールできれば最高になれるのが景さんなら。

他人すらもコントロールできる最高なのが百城さんだ。

「私にとっては、あなたも友達だから」

「……………」

「これが正しいことだっという確信があるわけじゃない。

でも、友達に殺されそうになると悲しいし、友達を殺したらきつと泣いちゃう。

だから、友達に殺せないし、友達同士が殺し合おうとしたら、止めたいんだ」

茜さんが激情の芝居で、当初の芝居の流れの予定を粉碎した。

百城さんが静かな芝居で、その芝居を受け止めた。

茜さんの激情の芝居を誘導し、静かな芝居で受け止めながら調整し、当初の予定と同じ場所に着陸させていく。

”茜さんが激情の芝居をしなかった場合と同じ着地点”に持っていく。

とても、可憐に。とても、秀逸に。とても、綺麗に。

台本と一字一句変わらない台詞を言ってるだけなのにな。

演技と芝居だけで全てを調整し、他人の演技で自分の演技を引き立てた。

芝居に使う仮面の性質を精密に調整し、静かに調整することで、自分を変えて完成図を戻すという、まさに神業。

「それが、私の願い」

作品の完成度の欠損による、作品の評価の低下を防ぎ、作品のクリエイター自己満足化を防いで作品の完成度を維持する。

天使が人に囁くような、ほんの小さな調整による、最大限の効果の獲得。
「だから、あなたも生きて」

「……うん」

” 予定通りの着地点 ” に到達したことで、手塚監督は満足したような、少し期待はずれだったような、そんな表情で動いた。

「カット!! OK!!」

すっげ。

いつものことながら、すげえ。

だから信頼できんだよ、百城さんは。

想定外・予定外の激情を、静かな芝居で軟着陸させやがった。

思いつきり突っ込んできた茜さんのパワーを上手くいなして、自分の演技を引き立てるのに使って、最終的に自分を最も目立たせてみせた。

『百城千世子』の俳優イメージの維持、作品の完成度の維持、今後の撮影に負担をかけるないようにする計算に加え、茜さんの見せ場を丸々残してみせやがった。

茜さんを踏み出しにしつつ、茜さんの良さは残した。

それは茜さんの見せ場を残しても、自分の演技は十分魅せられること、そして茜さんが最高の演技をしても自分の見せ場は食われないって確信があったってことだ。

茜さんの最大の演技が自分の演技の引き立て役止まりだつて、正確に見切つて、冷静に処理したつてことだ。

何故なら。百城さんは全く競う気もなかったし、成長もしてねえからだ。

流石に誰かと全力で競えば、百城さんだつて本気になる。成長も見せる。

地味に負けず嫌いなどころがあるあの人は、まだ未熟だった頃に、他の俳優と本気で競つて撮影中にも自分を成長させていた。

成長してねえつてことが、茜さんが対等にもなれなかったことを証明する。

百城さんの仮面より生まれる最高の演技は、茜さんの全力で播らぎもしなかった。

「……影響を与え合う、か」

景さんはすげえ。

百城さんが周囲をコントロールするなら、あの人は周囲を成長させてる。

正直に言えば、茜さんがこのレベルに到達すんのは早くても数年後だと思つてた。

俺の予想を超える景さんは、景さんの周りの人間ですら、俺の予想を超えさせる。

だが、それすら、百城さんを超える人間の量産には直結しねえ。

景さんの規格外の才能が引き出した湯島さんの能力、かつてないほどに高質な演技を見せる覚醒した湯島さん……それが足元にも及ばねえくらいに、百城さんは凄かった。

撮影中に覚醒して急激に演技を上達させた湯島さんの存在は、事前に共演者を徹底し

て研究する百城さんにとつちや奇襲みたいなもんだっただろう。

予定外で予想外。

その能力の伸び幅も鑑みれば、湯島さんが百城さんの想定を超えて競い勝つことが可能だったのは、湯島さんの一生でただ一度、この一瞬だけだったはずだ。

それでも、百城さんをほんの僅かに揺らすことすらできなかった。

百城さんがいついかなる状況あらゆる分野において常に95点を出す怪物なら。

今この瞬間、普段60点平均の湯島さんが覚醒して、瞬間的には100点を出して。

百城さんがそれを柔軟に受け止め、自分の演技に取り込んで、195点を叩き出した。湯島さんの激しい演技がなけりや、百城さんの静かな演技は際立たねえ。

ここまでいい演技には見えなかつただろう。

役に入り込む景さんの熱さ、その熱さを真似たような茜さんの熱さ、それを自分の丁寧な演技の引き立て役とする。

もしかしたら。

もしかしたら、だが。

百城さんは……最高の状態の景さんの演技すら自分の演技に巻き込んで、加工して、今みたいにコントロールできるのかもしれないねえ。

いや、どうだ？

景さんは俺の予想をいつも超えてくる。

百城さんは揺らがず信頼に応えてくれる。

茜さんじゃあ駄目だったが、景さんの方の役に入り込む演技まで、百城さんに競い負けずには限らねえ。

百城さんは、景さんの真似をした女優くらいなら余裕で捌いてみせた。

でも景さん本人なら？

茜さん程度じゃ駄目でも、景さんなら——い、や。

いや、待て。

何考えてんだ俺は？

放水車のホースを引っ張って、頭から水をぶっかける。

興奮気味だった頭が冷えて、服の内側に滑り込む水がめっちゃ冷てえ。

「うおっ、ど、どうしたんだい!」

「すみません、頭冷やしたくて」

茜さんを応援する。

百城さんのバックアップをして、撮影を順調に進める。

そうだろ。

そのはずだ。

一時の感情に流されんな。

「ごめんね。皆に夜風さんみたいな芝居して貰う訳にはいかないんだ」

百城さんが、茜さんと俺を一緒くたに視界に収める。

濡れたままでも、彼女は綺麗で。

綺麗な微笑みを浮かべ、茜さんにひと声かけてから、ファンがいる方へと向かっていく。

「私が主人公じゃないといけないから」

ファンに歩み寄り、綺麗な愛想笑いを浮かべる百城さんを見て、茜さんはその場に座り込んで、弱々しく砂浜を拳で打った。

「……せやな。私は、主人公やれるような奴やないわ」

「茜さん」

「英ちゃん、ちよつとほつといてくれんか。」

落ち込んでるわけやないけど……なんか、一区切りついた気がする」

「え？」

「また後で、な」

茜さんはふらふら立ち上がり、女性スタッフに体を拭かれに行った。

濡れた服のまんまじゃ風邪引きかねえ。

女性スタッフの準備、すぐ着替えられる準備、体を拭く準備は、助監督達と俺で手配しておいたもんだった。

あれ、景さん？

茜さんと百城さんを見て……茜さんの方に行くかと思ったら、俺の方に来た？

どういうことだ？

「英二くん」

「なんですか？」

「私、もしかしたら、千世子ちゃんの友達を演じられないかもしれない」

……そいつは。

「私、初めてかもしれない」

景さんが、主人公たるカレン／百城さんの、ファンに今まさに絶賛されているその人の、雨に濡れた背中を見つめる。

「英二くんが心底好きなものを、私が好きになれないのは」

……駄目か。

仲良く、なれないか。

撮影が終わり、夕方になって、茜さんを探しに出た。

島から見える水平線に夕日が沈む。

綺麗だな。

『これ』と同じものを作るには、俺はどれだけ腕を上げりやいいんだろうな。

あ、散歩中の九条百合さん発見。

「九条さん、茜さん見ませんでしたか？」

「湯島？ 源と一緒にあっちの海に居たけど」

「ありがとうございます」

「好感度稼ぎがマメな男だねーあんたは」

「へ？ いやいや、源さんもいるなら、そういう話にはならないでしょう」

「男の好感も得に行く？ 強欲な……」

「あのですね……」

「この撮影さ、私が抜けた後に撮影中止の可能性とか、0じゃないと思うわけよ」

九条さんが柔らかそうな長い髪を揺らして、大きく溜め息を吐く。

「私明日オールアップなんだから。」

『千世子と朝風に任せておけば大丈夫』って安心した状態で島を発させてよ?」
「尽力します」

「ま、本当は全然心配してないんだけどね。」

アキラもいるし。あんたら仲良し三人組揃ってりや大丈夫でしょ」

「仲良し三人組って」

「興行収入ズツコケない三人組」

「九条さんおいくつで?」

「あんたと同い年よ」

「ごもつとも。」

「第一知識で年齢疑われるならあんたはどうなのよ」

「ごもつともです」

「全くだ。」

「あ、そうそう、あの鞭貰っていい?」

次の撮影でも鞭使うらしいんだけど、あの鞭がよく手に馴染んじやったから。

他の使い辛い撮影用鞭なんてもう、練習でも使いたくないくらいなのよ」

「大丈夫だと思いますよ。」

あれ使うシーンはこの作品でも原作でも一回だけですから。

あ、でも手塚監督と、スターズの事務への連絡は忘れないでくださいね」

「りよーかい」

一人、また一人と、スターズは島を去っていく。

ある人は俺達に後を託し。

ある人は俺達に心配してないと言葉を残し。

完了していない撮影に後ろ髪引かれながら、撮影現場から去っていく。

俺達が撮影を完了させなきゃ、映画は完成しねえし公開されねえし、金も入ってこね

え。

撮影のために良い演技をした人達は、俺達に後を託していくしかねえ分、心配な気持ちもあつたりすんだろう。

ずっと島に残ってる俺や百城さん、アキラ君に景さん……そういうメンツには分からねえ、島を撮影途中で去る人達の気持ちちつてのがある。

その人達は。

信じて、俺達に撮影と後を託していく。

「がんばんなよ」

「はい。九条さんも次の現場、頑張ってください」

「はいはい」

一人去る度に、一つ託される。

一つ託される度に、一つ重くなる。

それはこの撮影に参加した人達が一人一人持っていた、責任感っていうものの重みだ。

撮影は一人でしてるんじゃない。

忙しい中頑張つて時間を捻出してくれて、デスアイランドの撮影に数日来て、その数日で全力を尽くしていった人達……その人達の想いも、いつもずっと傍にある。

俺達の想いは一つ。

良い作品を、売れる作品を、心に残る作品を作る。皆の力で。

あ、いた。茜さんと源さん。

「あー、すつきりした。完全燃焼や、綺麗に負けた」

「……。芝居に勝ち負けとかないだろ」

「あつたやろ何その気遣い。キモイで」

茜さんは笑っていた。

波に少しずつさらわれていく砂と、静かに流れて来る波の中に、素足を置き立つて伸びをしている。

源さんは真面目な顔をしていた。

言葉の選び方、声色が優しい。

茜さんは開き直った様子で、源さんは傷跡に触れるように言葉選びに気を付けている。

その源さんの在り方を、優しいと。

その茜さんの在り方を、綺麗だと。

俺は、そう思った。

「……どうして俺らオーディション組なんか、やけに千世子との共演が多いのか分かったよ。

共演者、皆喰っちまうんだなアイツ。共喰いは避けたかった訳だ、スターズとしては」
本当に気遣いの男だな、お前。

” スターズの奴らですら百城千世子と共演すれば喰われるんだから気にすんなよ
” ってところか、その言葉の裏の意味は。

俺も茜さんも、遠回しなその励まし、分からねえ奴じやねえよ。

茜さんが複雑な感情を噛み潰すような表情で、源さんに返答する。

「私らよりキツイのは夜風ちゃんや。

覚えてるやろあの子の役。

最後千世子ちゃんと、クライマックスで共演や」

源さんが嫌そうな顔で後頭部を搔く。

オーディション組の、それも知り合いが百城さんの引き立て役のように扱われることに、源さんはとても嫌そうにしている。

一種割り切った表情の茜さんとは、対照的だ。

二人を指して歩いていた俺の足音を聞いて、二人が同時にこつちを見る。

「英ちゃん」

「英二さん」

「どむ」

話すことを考えながら、砂を踏みしめる足音と共に俺は近づく。

砂浜に腰を降ろしていた源さんが立ち上がって、俺とすれ違いどこかへ行こうとする。

すれ違う時に、源さんは俺の肩を叩き、一言ささやいていった。

「うちの先輩は、頑張ったんすよ」

「分かっています」

優しいってのは、頑張った人に報われてほしいと思うことも、含まれてんのかもな。波に足がさらわれそうでさらわれない、波に足を当て立っている茜さんと向き合う。

茜さんと、背景が重なる。

南の島の青い海、青い空が、夕日で『茜色』に染まっただけで綺麗だった。とても、綺麗だった。

「お疲れ様でした。いい撮影だったと思います」

「ありがと。ん、ま、でもなあ」

茜色の空を背景に、少し悔しそうな顔を俺に見せてくる。

「……百城千世子の壁は、厚いわ高いわでどうにもならんかったわ」

「あの人はもう、大女優になった後の人みたいなものです。」

一朝一夕でどうにかなるものでもないですよ。

全ての挑戦者に受けて立って勝ち抜いたボクシングチャンピオンみたいなもんです」
「せやな」

茜色の日差しが溶け込む海面を、茜さんが蹴り飛ばす。

ばしゃん、と心地良い音が鳴る。

飛び散った海の水の飛沫が、茜色の陽光に照らされ、キラキラと輝いていた。

茜さんは、どこか開き直ったような、満足したような顔をしている。

俺はこういう顔に見覚えがある。

やりきった者の顔、今の自分が出せる全てを出し切った者の顔だ。

この顔に、俺は見覚えがあつて、それは嫌な記憶と共にある。

売れなくなつたりフアンの声が面倒になつたりして、どこかの映画でやりきつて、満足して、満たされた人は、もういいか” っと思う。

そして、辞める。

『辞め時を見つける』 っをやつた。

病気や事故で死ぬとかでもない限り、俳優はそうやって、どこかで満足して、やりきつた気持ちで引退を表明する。

もしも。

もしも、茜さんが、これで全力出しきつて完全燃焼して、満足してしまつていたら。

「あの……茜さん。まだ、女優、続けてくれますか……？」

俺は今、どんな顔してんのか。

下を見んのが怖え。

下の方見たら、海に俺の顔が映つちまうかもしれないねえ。

今の俺がどんな顔してんのか、自分で見るのが怖え。

だから、下は見ねえ。

そんな俺を見て、茜さんは笑つた。

「なんか子犬みたいやな、英ちゃん」

「ちよつと、真剣な話を」

「もう決めたことや」

「……!」

決めたつて、何を?

何をだ?

まさか、辞め——

「私、ずっと女優続けるわ」

「人気のうなつたら辞めなあかんけどな。それまでは、頑張ることにした」

え?

何故?

茜さんはずっと、売れないことや現状の継続を嫌がつて、辞めるか辞めないかの間で揺れてて、結局辞めずに続けることを選んでた、そんな人だったはずだ。

辞める理由が増えたら、すぐ辞めちまいかねえところに居た人だったはずだ。

辞めるつて言うなら分かる。

茜さんが辞める理由ならいくらでもある。

辛くなったら、茜さんには辞める自由がある。

そいつを止める権利は俺にはねえ。

だけど。茜さんが辞めねえって決意を固めた理由が、俺にはまるで分からねえ。

「何か心境の変化があつたんですか？」

「開き直れたんかもな。夜風ちゃん、千世子ちゃん見て」

もうプライドの欠片も残ってへん、と茜さんは苦笑した。

ちゃぶ、ちゃぶ、と水音を立て、波と砂浜を交互に踏むように茜さんが歩き出す。

その後を追い、俺も歩き出した。

茜色の海辺の世界は、昼の世界とも夜の世界とも違う色合いで、どこか優しげであるようにすら感じられる。

「英ちゃんが物作って、監督が掛け声して、カメラマンが構えて、私が演じて……」

茜さんが、空に手を伸ばす。

「やっぱ私、好きなもの詰まつとる、『ここ』が好きや」

空に輝く夕暮れの太陽にも、夕方に姿を現し始めた空の星にも、黒に染まっていく夜

空にも、その手は届かない。

けれど、茜さんは手を伸ばし続けた。

「苦しかったら辞めりやええんや。私の自由やしな」

「茜さん……」

「比べられんのは辛い。

敵わないんは悔しい。

届かないことが嫌や。

辞めちゃえば楽になれるんやろな。

続ければ人並みの幸せとかも得られんのかもしれん。

私は幸せを諦めながら女優続けとんのかも。

でもな。

それでも。

私は女優を続けたいと思うんや。英ちゃんに昔言ったように、凄い女優になりたいん

や」

「――」

「辞める。辞めない。その自由が私にはある。

でも辞めないのは、私がそうしたいと思ったから。

辞めるまですつとずつと比べられて、ずつとみじめな気持ちのままでもええ。

そんななんつても辞めないのは、私がそうしたいと、そこに居続けたいと思ったから」

息が止まったかと思うくらいに、強く、深く、息を呑んだ。

胸の奥を強く打たれた、そんな錯覚があつたくらいに、俺の心は打たれて揺れた。
「前にな、噂で聞いたんや。」

私と同期の子役の子。

当時は私より演技上手くて、一年くらいで子役辞めてった子や。

その子がテレビで私を見て、言つてたそうや。

『あの子、私より演技が下手だったんだよ。私の方が上手かったんだから』
「それは……成長する前の茜さんと比べていたから、です」

「せやな。」

もう何年も自分を磨いてる私の方が上かもしれへん。

でもな、その人の中では私はずっと”自分より下”なんや。

その人は誰にも追い越されなまま、子役で一番のまま、一年で引退しおつた。
だからその人の中ではずっと、”自分は一番演技が上手い俳優”のままなんや」

「……」

「きつとそれが賢いんやろな。」

引退すれば、誰にも追い越されない。

引退すれば、負け星も増えない。

自分がもうこれより上に行けないと思つたら、すぐ辞めりやええ。

そうしたらその時点で持つとる自尊心だけは抱えたまま、辞めていける」

でも、茜さんが、そうしないのは。

「私はずっと悔しいかもしれん。辛いかもしれん。

でもそれは、私が……

『あの凄い子達と同じ舞台上で本気で競つてる』

ことの証明や。

負けるか、って叫び続けていることの証明や。

それはきつと、途中で辞めて英ちゃんの前から消えてつた人達が、持つてないものな

んや」

ああ、そうだ。

だから、俺は。

足りないものがあると分かっているながら、なりたい自分になれないまま、諦めず折れず、普通の人らしい心を頑張つて奮い立たせて、前に進み続けるアキラ君や茜さんが好きだ。

その心を。

俺の心が、美しいと思つたから。

俺の手では作れねえ美しさを、そこに見たから。

「女優としてここにおられるんなら、一生辛くてもええ。そう……思えたんや」

」

一生辛くても、一生幸せがなくてもいい、という覚悟。

天才にとって、一生芸能の世界に居続けることは、一生幸せであるということだ。

百城さんや、景さんや、黒さんがこれにあたる。

でも、そうでない人にとっては、そうじゃねえ。

一生苦しみ続けることすら覚悟し続けなけりやならねえ。

演劇で主演の役を割り振られたとしても、そういう人間の心は癒やされねえだろう。

それは作品で例えるなら、『永遠に主人公の引き立て役で居続ける脇役』の人生を生きるようなものでもある。

一番になれねえことが確定している人生は、一番と常に比較され続ける人生は、芸術と芸能の世界においてはありふれている。ありふれた地獄だ。

だがありふれてるだけで、絶対に軽くなてねえ。

かつて朝ドラ女優だった人が脇役の仕事しか来なくなり、引き立て役でしかねえ脇役の仕事に絶望し、自殺したなんつー話すらちらほらある。

だけど、もし。

その全てを覚悟の上で、普通の人の幸せを諦めることすらも決意し、一生を役者としての自分に懸け……『辞めるよりその方が良いと思えたから』で、立ち上がれる茜さんがいるなら。

同じような想いを抱える、アキラ君がいるなら。

足掻き続ける人に、俳優ではない裏方の助けがいるなら。

俺が助ければ、その分だけ出来た余裕で、普通の人らしい幸せを得られるかもしれない人達が、この業界にいるのなら。

——俺は、そんな人を助けるために、この世に生まれてきたんだと。

——そのために、技を修め、今日まで生きて来たんだと、そう思えた。

俺達造形が見てえもの。

俳優と芝居を劇場に見に来た人が見てえもの。

物語と世界を劇場に見に来た人が見てえもの。

『その人だけの心』。

その俳優だけが見せられる、そのキャラクターだけが魅せられる、その作品でしか見られねえ、人間っていう生き物が持つ、他の何も真似できねえもの。

それが、心。

それを見た時、俺達の心に沸き立つもんがある。

その人の心を、かっこいいと思う気持ち。

その人の心を、優しいんだと思う気持ち。

その人の心を、とても強いと思う気持ち。

人間が登場し、人間の心が描写されるからこそ、心こそが作品の中で魅せられる。

製作者の心から生まれ、登場人物の心として描写され、観客の心を動かす。

それが、作品の心臓となる心。

心は作品の一部であり、どんな作品も最初は誰かの心より生まれている。

作品が人の心を動かすならば、作品を生み出す人の心もまた、人の心を動かすもの。

だからこそ、茜さんの心は俺の心を動かした。

だからこそ――

「わ。ぷっ」

茜さんが足元の海水を掬って俺にぶっかけてきた。何してんだテメツ！

「なにすんですか！」

「あ、いや、難しい顔してたもんやから。

英ちゃんって余計なこと考えてドツボにはまっとること多いし……」

「それは否定しませんが……」

「ほれ、第二撃！」

ぐあああつ！ 二連撃だと！ そこを動かすなためえツ！

俺が作った服でもねえお前のシャツなんざ海水一発かけたらスケスケだぞツ！ 後

悔しろ！

「カウンターツ！」

「わっ、なんやそれ!?!」

「手の平に乗せた水を狙った形で撒く秘技にして手技……」

特撮畑の人間が、水の魅せ方を研究してないと思いまわぶつ」

「長々説明をしがちなのは英ちゃんの弱点やな、ふはは」

「カウンターツ！」

「回避！」

あつたんねえ！ なんて俺の動きが……いや、心理が読まれてる!?

「ほーれこつちやこつち」

「ええいちよこまかと海岸線を逃げて……!」

「私に追いつけんと仕返しすぶ濡れアタクは成立せんとちゃう?」

「言われなくてもへぶつ」

「あ、コケた。しまらんやっちなあ」

「ペっ、ペっ、クソっ、親父の転倒遺伝子が……」

「……最近の英ちゃん、過去のあれこれネタにできるんやなあ。

や、私に親の話を明かしたりとか、傾向はあつたと言えばあつたんやけど」

「隙あり！ 海水を食らってください！」

「当たらん当たらん、そんなんじやうちを捕まえられんよ？」

「ぐぬぬ」

「へいへい、追いかけて来いや！」

待つてろよ！ 追いついてせめて一発は海水ぶち当ててやるぜ！

ぶほっ！ くそっ、またコケた……ふざけんじやねえぞ砂浜死ね！

またあんな遠くに……絶対に追いついてやる！ 待つてろや！

お芝居に心はいらないんだよ

13日目撮影終了。

百城さんと茜さんの真つ向共演があつた昨日とは違つて、今日はかなりサクツと終わった。

朝九条さんが最後にちよこつと撮影を終えてオールアップ。
そして13日目夕方。

石垣丈さんと小澤牡丹さんが、オールアップを迎えた。

「石垣さん、小澤さん、オールアップです！」

「お疲れ様でした！」

「お疲れ様でしたー！」

亜門姉弟、九条さん、石垣さんに小澤さんと、これでスターズの半分弱、24人俳優の5/24が島を離脱することになる。

撮影日数も13/30を消化したんだから、まあ妥当か。

石垣さんとはいい仕事ができしたが、小澤さんとは結局あんま話できなかつたな。

……あれ？　つてかこの撮影の俺、一番優秀で一番責任と苦労抱えてる百城さんと、

一番スケジュール破綻させそうな景さんとその周りに、費やしてる労力が多いな……？

「お疲れ様です、石垣さん」

「ありがとう朝風君。後は任せて、先に行くよ」

「はい、後は任せてください」

「君、この撮影が終わったらウチの専属になるんだろう？ 楽しみにしてるよ」

「え、もうご存知なんですか。耳が早いですね」

「フフフ。プロデューサーから聞いてね。」

秘密の話ってやつさ。

あ、そうそう、プロデューサーも後半に島に来て、こつちに集中するらしいよ」

「え、そうなんですか？ 初耳です」

「プロデューサーを巻き込めば君も撮影をコントロールしやすいかもね。」

ほら、手塚監督が今回少し変だから。君が変えたい部分もあるんじゃないかな」

「！」

気付いてたのか。

流石この撮影の俳優最年長。

俺より二年長く生きてんのは伊達じゃねえな。

あ、そういや。

石垣さんって手塚監督の作品に出た回数も結構多かったんだっけな。それでか？
「そうですね。」

手塚監督が何か危なそうなこと考えていたら、プロデューサー巻き込むのもいいかも
です」

「ちよつとカマかけてみたらどうか。例えば——」

ほう。

……それが手塚監督の？

うーん、マジかよ。カマかけてみて、確認すんのが一番かね。

そうでないことを祈っとくか。

「お疲れ様です、小澤さん」

「ありがとう。英二さんも頑張ってる。……結局大して絡まず終わっちゃったなあ」

小澤牡丹さん。

スターズ組で地味に景さんと同い年だったが、誰ともぶつからず、特に何か問題や危
急の事態を引き起こすこともなく、普通に撮影を終わらせていってくれた。

もちろん、撮影の演技のクオリティにも言うことはねえ。

問題起こさねえなら造形屋としての俺、美術監督としての俺、どっちも必要としねえ
わけだから絡みがねえのも当然だ。

「いえ、それが助かりました。

今回はスターズの皆さんも、全員予定通りに演じてくれたわけではないですし……」

「ああ、和歌月とか。大変そうだね、融通が利いちやう裏方ってのは」

マジでそう思うぞ俺は。

俳優24人全員が景さんだったら、もうとつくに修正不可能になってる。

何事もねえ人がいるってことが。

俺の補助が全く必要じゃねえ人がいるってことが。

本当に助けになる、ってことはあんだ。

”手のかからない俳優”がインタビューに監督で褒められてるのとか、ちよくちよく見るしな。

「小澤さんにも遠回りにですけど、助けられました。

何事も無いことが助かりました。

俺の手が全く必要ないことが助かりました。

平穩無事が一番ですよ、どんな撮影でもそうです。今回は特にそう思います」

しみじみ言う俺を見て、小澤さんが苦笑する。

「ああ、うん、頑張つて。今は台風シーズンだから、ちよつと嫌な予感がする」

「……そうなんですよね」

そう、その通りだ。

ボチボチ島に台風が来んのが怖くなってきた。

スケジュールはギチギチだ。

一回台風が来るともう日数がキツくなる。

となると、30日の間に一回も台風が来ねえことを祈るしかねえ。

何面サイコロかとはもかくとして、サイコロの出でほしくねえ面が一度も出ねえことを祈りながら30回サイコロを振る……みてえなもんだな。

出てほしくねえ面（台風）が複数回出たら俺はもう笑うしかねえが。

超大手事務所のスターズで大人気若手俳優やつてる12人を同時投入、なんていう無理無茶無謀を実現させた対価として、台風シーズンにしか撮影ねじ込めなかったのは分かってたが。

いざこうなつてくると、撮影中止が怖くてたまらねえ。

石垣さんと小澤さんが島を離れていく。

さらば最年長。

さらば四人しかいねえ景さんの同い年組。

あ。

そういや、和歌月さんも景さんと同い年組だったっけか？

「英二くん」

「あ、景さん。どうしました？ 今日の撮影は終わりましたけど、何か壊しましたか？」

「え、……わ、私、そんなイメージで固定されてる!？」

「撮影が間に合わなくなるとかでもない限り、俺が何度でも直しますよ。」

だから俺が治せない体の怪我だけは避けてください。

撮影のために、綺麗なあなたそのままにいるのも仕事ですよ、景さん」

「……ん、そうね。私何か壊したわけじゃないけど、英二くんにお願ひがあるの」

「なんででしょうか？ 俺にできることならなんでもしますよ」

「特訓したいの。『ケイコ』を演じるために」

特訓？ 烏山さんと海でコツコツやってたあれと同じか。

「どういう技能を習得したいんですか？」

「私、どうしても千世子ちゃんを好きになれない。」

だからお友達だと思えないの。

このままじゃ、千世子^{カレン}を友達^{ケイコ}だと思う私になれない」

……結構致命的なこと言ってるな。

それはイコールで、”この作品のクライマックスにあたる部分を絶対に演じられない”
”ってことだぞ。作品にとっての致命傷になりかねねえ。”

「特訓、ということとは、打開策は見えてるとお見受けしますが」

「私は千世子ちゃんを好きになれない。」

でも他の人なら好きになれる。

他の人なら、友達だと思えることができる。

体験を代用して千世子ちゃん／カレンを、私の友達とすることができると思っている

好きな女優二人が仲良くなれねえのは見ててクツソ辛えが、その気持ちは脇に置いていて。

「ああ、なるほど。」

自分の中にある要素をパズルみたいに組み替えて新しい自分を作るんですね。

” 友達が好きな夜風景”。

” 過去の自分を抽出して作ったケイコ”。

二つを一度バラバラにして組み合わせ、理想的な『ケイコ』という人格を作ると「うん、そういう感じで」

代用。

代用か。

もう気持ち単位での組み換えができるようになったんだな、景さん。

成長が速え。

好きになれねえものを好きになれねえまま、それを好きになれる人格を創造して、その人を嫌いなまま”私はこの友達が好きだ”と思いつ込み、そう振る舞おうとするところまで来たか。

しかし今の景さんのスキルでできるか？

できねえ気がするが、景さんだしな。

俺の予想を超えてなんぼの人だ。

どうなるかはさっぱり分からん。

『どうしても好きになれないし友達だと思えない』人間に対し、『好きになれるし友達になれた人への感情』を利用し、『好きになって友達になる』。

演技に必要なだからその人を好きになろう、を技術的に実現させようとすんのは、冷静に考えりやイカれてるんだがかなり妥当な思考でもあるわな。

「間違ってるかしら。私、私じゃない私になるみたいだけど……」

「いいえ、間違つてませんよ。」

四浦雅士さん文芸評論家であり舞踊研究者。舞踊やダンスを中心に、様々な『芸術』についての考察や研究を行っている。曰く、

『人間とは他人になることを覚えた動物』

『自分になることと他人になることとは、一つのことであって二つのことではない』
だそうです。

同族の気持ちを考えることは、同族の他人になりきるといふこと。

他人の気持ちに分かるようになったことが、猿と人の最大の違いなんだとか。

景さんは他人の気持ちが分かる人です。

なら、他人になれる人です。

自分になれる景さんなら、そうして他人になることもできると思います。きつと

「ごめんなさい、話が小難しくくてちよつと」

「……きつと成功しますよー！」

「ありがとう」

こいつ本当に今の話分かってなかったのか？

からかっているとかねえよな。

真顔でジョーク言いそうなどこあるからなこの人。

しかし特訓って何すんだ？

「うーっす」

「あ、真咲くん。遅いわ」

「どうも源さん。今日の撮影もお疲れ様です」

「うっせ夜風。悪かったよ、約束の時間に遅れて。英二さんもお疲れ様です」

源さん？

……ああ、『代用』か。

「二人共、そこに立っててね」

「源さんはともかく、俺はいいんですか？」

「英二くんは確かに千世子ちゃんとは似てないけど……」

「こう、千世子ちゃんっぽさを成分として一番沢山含んでるのは、英二くんだと思うの。」

「千世子ちゃん一人に含まれる千世子ちゃんっぽさは、英二くん千人分くらい？」

「百城さんっぽさはビタミンCか何かなんですか？」

「沢山、千世子ちゃんっぽくなくてもいいの。千世子ちゃんの代わりになれば」

「まあいいですけど」

「言いたいことは分かるけどな。」

「え、つてか、俺のどこに百城さんっぽさを……え、どこだ？」

「車で跳ねたらへし折れそうな体格とか？」

「源さんはどう思ってたんだこの展開。」

「つか特訓の協力頼まれてOKしたのかお前。」

「人の良さは烏山さんと同じくらいなんじゃねえの？」

「源さん、どう思います？　これ」

「俺を英二さんだと、英二さんを俺だと思っただって言っちゃいましたよ。」

意味分かんねっすよね……ん？　あれ？　もしかして、英二さん分かるんですか？」

「まあ大体は」

「ええええ……変人コンビ……」

誰が変人コンビだ。

「そういやこの前バラエティでやってた『変人二人』を咄嗟に見て『恋人二人』に見える確率とかいうの面白かったな。」

「俺と源さんだと……ほら、景さんとの関係とかが違うじゃないですか。だからですよ」
「更によく分かんなくなっただんすが」

ごめんな。

「えーと、俺を英二さんと、英二さんを俺だと本心から思おうとしてるってことスカね」
「そう、その通りです」

「そうそう、そういうこと。理解力あんじゃねえか！」

「俺はどうしても俳優になれない以上、源さんほどにはなれないですから」

「え？」

「え？」

「……ううん、それはそれ、これはこれ、ってことでいいのかもしれねっすけど」
変な空気になったが理解してくれたみたいでよかった。

景さんがこつちを見て、源さんと俺を見る。

「真咲くん」

「ん？ なんだ」

「英二くん」

「はい、なんででしょう」

俺達の名前を呼んで、”入って”いた景さんがハツとして、”戻って”来る。

そしてまた、自分の内側に潜っていった。

駄目だな。

今の感じだと、景さんがコツを掴むのはそこそ先になりそうだ。

「英二さん、夜風ってこれでいいんすか？」

「急場しのぎならこれでいいと思いますよ」

「はー、これが何になるんだか……よく分かんないっつーか」

「なんて言えば良いんでしょうね。」

普通の人は地道に鍛錬して能力や経験を積んでいくと思うんですよ。

年単位に技術を積み上げる、みたいな感じで。

ただ、それが万人に最適なやり方ってわけでもないわけです。景さんのように

「こいつが普通じゃないってのは、良くも悪くも最初からずっと思ってたよ」

「あはは……」

景さんに必要なのはきつかけなんです。

『一年努力を続けたからできる』じゃないですよ、景さんは。

『上手い俳優を見たり話したりしてコツを掴んだ』でサクサク上行く人なんです」

「……これ、コツを掴もうとしてるってことなんスか？」

「その通りです。例えばですけど……」

俺はオフィス華野に所属する、茜さんを除いた源さん達数人の、俳優をやってる年月を『何年目か』っていう大雑把な推測で、言ってみた。

お。

当たりか。良かった、七割くらいしか当たんねえからなこれ。

「どうですか？」

当たってますか？

オフィス華野で子役時期から一緒に仕事してるの、茜さんしかいませんからね俺。動きと演技を見て判断するしかないの、実は今ちよつと博打でした」

「……マジかよ」

「積み上げた年月は樹木の年輪みたいなものです。

見れば見るほど分かるものってのもあります。

源さんに関してはデスアイランドでよく見てたので、ちよつとズルしたようなものですね」

「なんじゃそりや……」

「でもですね、俺は多分、景さんみたいな人に『これ』やっても絶対成功しないんですよ。景さんの成長速度は著しいです。

俯瞰視点という超絶技巧を、百城さんの使ってる形式で、一晩で習得。

一度誰かと共演すれば、技術の言語化もしないまま基礎技術も盗む。

そんな人が何年俳優やってるかなんて、どこをどう見たって読み間違えるに決まっています」

「……」

「俺だつて分からない時があるんです。

景さんが何やってるのか分からない時は、分からないなりに付き合つてやってください。い。

色々試行錯誤してるんですよ、この人なりに。

そしてカメラ視点の獲得同様、技の習得のために特訓する人でもあるんです。

……何よりですね。意外と寂しがり屋なこの人の周りには、人が居た方がいいと思うんです」

源さんは目を丸くして、吹き出した。なんで？

「あんた、こいつの兄かなんかかよ」

「兄貴分気取ったことはありません。友達ですよ、友達」

「いいんじゃないスカね。」

夜風の近くに、夜風の周りには人が居た方がいいって真顔で言う人、必要だと思いませんよ」

それはまあ分かる。

ただそれは、俺じゃなくてもいいんだよ。

源さんでも、茜さんでもいい。

黒さんでも、柊さんでもいい。

とにかく誰かいてくれと、俺はそう思うわけだ。

お前は結構優しいナイスガイだと俺は見てる。頑張ってくれ頼れる男。

景さん見てるところ、なんでか色々思い出して、人間は簡単に事故死するんだってことと思ひ出して妙に不安になるんだこれが。

「茜さんは夜風の姉貴分みたいなのところあるんすけどね」

「ああ、ありますね……」

「夜風の茜さんへの接し方って、” なついでる ” って表現が一番近い気がしません？」
「確かに」

あの人は母力も姉力も高えからな。

「改めて。あん時は茜さん元氣付けに来てくれて、ありがとうございます」

源さんが俺に頭を下げてきた。

えー。

俺は茜さんに何も言っただけ。

茜さんが自分で見つけた答え、自分で見つけた道を、その道を行くっていう覚悟を、友達として聞いて受け止めたただけ。

「いえ、こちらこそ。ありがとうございます」

俺の友達が元氣を取り戻してくれたのは、源さんのおかげでもあります

俺も頭を下げる。

なんでそこできよとんとした顔をすんだコラ、源真咲。

「え、いや、俺は何も」

「俺どうにもトークが下手なので」

源さんが先に話してくれてたのがいい感じに作用したんじゃないですかね」

「えええー……」

「源さんが茜さんを励まそうとしてたことは茜さんにも伝わってたと思いますよ」
源さんが頬を掻く。

素直に湯島茜友人代表として礼を言う俺の感謝を受け止めろよ。

いいかー、お前なー、同事務所の後輩が気遣ってくれることがどんだけ励ましになる
んのか分かってねえのか？

同事務所の俳優仲間がいねえ景さんにはねえんだぞ、ああいうの。

いつか景さんに同事務所の後輩ができるとしても、今はいねえんだからな。

「あの」

「はい?..」

「前にゴキブリとか失礼な言って、すみませんっした!」

ん?

んんん?

……あー、なんかそんなこと言われた気がする。

何だお前、そんなこと気にしてたのか。

気にすんなよそんなこと。

「お気になさらないでください。俺は気にしてませんから」

「本っ当に、すみません！」

まいったな。

ゴキブリみたいな動きって言われたからって、ずっと気にするわけもねえんだが、と、その時。

景さんが顔を上げて、俺達の名前を呼んだ。

「真咲くん」

「ん？ なんだまたかよ」

「英二くん」

「はい、なんでしよう」

俺達の名前を呼んで、”入って”いた景さんがハツとして、”戻って”来る。そしてまた、自分の内側に潜っていった。

もうちよつとか？

「夜風、こいつラリってんじやないですよね」

「同じ映画撮ってる仲間になんてこと言うんですか!？」

聞いてた第三者の俺がびっくりするわ！

「いや、映画俳優にはそういうやつもいるって聞いたことが……」

「日本でやったら違法なんですよああいうのは！」

夜風さんの演技を麻薬で再現するのは……いや可能性レベルで言やあできなくもねえのかもしんねえけど、日本じゃ違法だろうが！

「景さんは、こう、自分が夜風景であることも忘れようとしてるんですよ、今」

「ラリってんじゃないですかねやつぱり」

「これがラリってるならサラリーマンは名前からしてラリってると言ってもいいですよ」

「ラリってるの適用範囲を広げんじゃねーぞ。」

「こういうところ見ると、夜風に影響受けてる茜さんが心配になるんすよ」

オフィス華野の後輩は大変だな。

俺とは違う位置からの視点で心配続けてて。

「なんだかんだと言っても、最終的には落ち着くところに落ち着くと思うんですよ。」

「アキラさんが百城さんを見る目と、茜さんが景さんを見る目は似てる気がしますから」

「へ？」

「どこか割り切って。」

「どこか開き直って。」

「こうはなれないな、とどこか諦めていて。」

でも、嫉妬よりも親愛の情の方が大きい。

憎しみが湧くよりも先に、友情を強く感じる。

そしてアキラさんは景さんに、茜さんは百城さんに対抗心を強く持つわけです」

「……英二さんの目に何が見えてんのか、俺にはさっぱり分かんないんすよ」

「感覚的な話、それも俺の個人的な感覚の話ですからね。

アキラさんは百城さんみたいになろうとはせず、景さんを目標とする。

茜さんは景さんのようになろうとしつつ、共演では百城さんと競おうとする……」

「ああ、分かります。

親しい気持ち湧きすぎて、追い越そうとか競おうとか思えなくなるヤツ」

「それが近いですね」

景さんと険悪だった頃も仲良くなった後も本気で競わねえで、百城さんに本気でぶつ

かって行った茜さん見てると分かる。

周囲をコントロールする百城さんと、周囲に変化と成長をもたらす景さんは完全な別

カテゴリだが、そこにアキラ君と茜さんを加えると連立的な対構造になる。

仲良くなれねえってことはねえと思うんだがな、なんかこじれてる。

「英二さんって星アキラのこと認めてたんすね。

お二人のこと深くは知らなかったんで、あんま仲良くないもんかと」

「なんでそう思ったんですか？」

「ああいう小奇麗でそんな魅力無い芝居って、英二さんからも受け悪いと思ってたのでうるせーな。」

正しい指摘すんじゃない。

何も言い返せねえし、つい”こいつ宣伝に流されねえ良い目してんな”って思っちゃまうだろ。

ぶっ殺すぞ。

でも良い目してんなお前。

「明日もあります、今日はアキラさんの良いアクションありましたよね。見てましたか？」

「あー、あいつアクションは結構いいんすよね」

「あれ、単純にセンスじゃなくて練習量の賜物なんですよ。」

アキラさんが何度も繰り返し練習して習得した動きなんです。

だから安定して成功し、イケメン俳優としてもアクション俳優としても売れるんです」

「へえ……」

「そりゃ、天才じみた人は凄いですよ。」

ルパパト快盗戦隊ルパンレンジャーVS警察戦隊パトレンジャー。のノエル役、元本聖也は日本で七人しかできない空中技が使える人です。

仮面ライダー鎧武の葛葉紘汰役、佐原岳さんは、大会で優勝し俳優最高跳躍記録を持つ人です。

他にも挙げようとすれば、日曜朝には超人じみた人達が沢山います。

その全てがキラキラと輝く、主役の演技ができる人達です。

そういう人達と日曜朝に並べられ、子供達を夢中にさせてるんです。

これ、凄いことじゃないですか？

アキラさんがそのために積み上げている努力の量は、もうこれでもかってほどですよ」

「言われてみれば、って感じですね」

そうだよ。

”言われてみれば”だよ。

本当に耳に痛え良いこと言ってるんなお前。

言われなきや気にしねえんだよ、そんな努力なんて。

お前が思った”魅力無い芝居”って評価は、別にそこまで間違ってるわけじゃねえよ。

俺が「なんとかその主張変えさせねえと」ってこんな風にムキになるくらいで、お前と同じ評価してる人も少なくともはねえ。

観客は、俳優の努力じゃなくて、演技の質で評価すつからな。
だからさ。

源さんの口から、アキラ君の演技の悪口そんな言わねえでくれよ。

アキラ君は成功しちゃったことに苦しむ茜さんみてえなもんで、茜さんは成功できなかったことに苦しむアキラ君みてえなもんだろ。

”演技の魅力”ってやつには、あの二人はどっちも辛い思いをさせられてきたんだ。随分違いのは分かっているし、俺の心の持ち様の問題だつてのは分かっている。

けどな、身内だから茜さん応援してるだけです、みたいに感じられちゃって、なんかちつと辛いもんがあんだよ。

「てつきり英二さんが、アキラに対する情で評価を上方修正してんのかと思ってました」
「心だけでそんな評価してるわけでもないんですよ」
心。
心、な。

大事なもんではあるさ、それは。

茜さんがそうだったように。

そして、景さんがまた、顔を上げる。

「真咲くん」

「はい、なんでしょう」

「英二くん」

「え……夜風？」

景さんが俺を見て源さんの名を自然に呼び、源さんを見て俺の名を呼ぶ。
よし。

特訓、ひとまず完了、だな。

心。

心ってなんだろう。

私にとって、心とはなんだろう。

私以外にとって、心とはなんだろう。

英二君にとって、心とはなんだろう。

撮影14日目が、終わろうとしている。

「千世子君、ぼーっとしてどうかしたのかい」

「なんでもないよ、アキラ君。この先の撮影のことを考えてただけ」

「そうか」

「アキラさん、百城さん、お疲れ様です。どうぞ、お茶持ってきました」

「ありがとう」

「ありがとう」

あ、私の好きなお茶。

英二君は技をささつと盗んでしまうから年上に嫌われる……ように見えて、いつもこ
うやって下働きがすることを率先してやって、敬意を持って周りに接する。

だから、年上の受けはいい。

子供の頃からずっと現場にいて顔見知りも多いから、デスアイランドの監督や助監
督、お歳を召した編集の人達にも信頼され、可愛がられてる。

おじさん達が英二君を好ましく思っていることを、私は英二君以上に理解している。
でも、少し、思うところがないでもないかな。

アキラ君。

百城さん。

ずっとそうだ、この呼び名は。

敬意を持つて接されても、こういうところでちよつと引つかかってしまう。

それは英二君の氣遣い不足というより、私が気にし過ぎなせいだろう。

一緒に居た時間は、私よりアキラ君の方が長い。

最初に会つた日から数えた年月なら……どうだろう？ そつちなら、私が勝つて……分かつてる。

そんなところで比べて勝つても、意味はないんだつて。

でも、英二君とアキラ君。

アキラ君にとっての一番の親友、英二君にとっての一番の親友が、いつの間にかこの二人の相互関係になつていて、もうそこは私にもどうしようもない。

英二君より早くアキラ君に私が会つていたとしても、アキラ君より早く英二君に私が出会つていたとしても、この二人にとっての一番の親友は、この二人だから。

この二人が仕事終わりにハイタッチしているのを見ると、なんだかも……私が女の子な時点で、この二人の間には入れないような気がしてきてしまう。

だから英二君の”アキラさん”は許す。

私が”百城さん”でも許す。

アキラ君だし、しょうがない。

そもそも私に、英二君の他人への呼称を強制する権利はない。

だから何も言わない。

何も言えない。

ただ、寂しくて。

悔しくて。

悲しいだけだ。

それは私の仮面で隠して、無かったことにすることができる感情でしかない。

私は、”百城さん”で十分だ。

「さつき鳥山君と話していたみたいだけど、何を話していたんだい？」

「演技の心、みたいな話をしました。」

もともと鳥山さんの話は、演技の心構えみたいな話で……

俺はどちらかというと、好感が持てる俳優の精神性みたいな話でしたけど」

「それは……僕には同じもののように見えるが」

「ええと、例えばですね。」

俺は鳥山さんの演技に自分の全てでぶつかると心構えは好ましく思います。

でも、オーデイションに原作読まないで行く精神性はどうか、って思うんです。

百城さんはごく自然な状態でも、俳優として理想的な精神性です。

逆にアキラさんなどは、撮影前に徐々に理想的な精神状態に持っていきますよね。

特定のルーチンで体を動かし、徐々に精神を集中させ……いい心構えで臨んでいると

思います」

「そう言われると少し照れるよ、僕も」

あ、嬉しい。

「景さんなどはまた特異ですよね。」

自分の心ごと入れ替えるような演技です。

心を加工し、自分を別人だと思い込み、過去の自分の記憶から引き出した感情を貼る

……

心構えとか精神性とかいうレベルじゃないですよね。

もう心に関する全てを一から創るレベルと言うか。あれはもう、本当に凄いなと思います

す」

……あーあ。なんだかな。気分良くない。顔に出さないようにしないと。

「心で演じるからこそ心に響く。理想的なメソッド俳優でしょうね、景さんは」

気持ち悪い。

「英二君は、俳優の心が好きだよな」

「そうですね。」

その人だけの心が好きです。

アキラさんのそれも、茜さんのそれも。

その人の心があるからこそ出来る演技、つてのはあると思つています」

「でも、夜風さんは今苦戦してるんじゃない？ 私の友達になろうとして」

「……それは、確かに」

「つまりそれは、心が無いとできない演技の弊害だよね。」

夜風さんは心で演技をしてるから、できないことが多くある。

でも撮影はスケジュールの通りに進めないといけないから、これって厄介じゃない

？」

「おっしやる通りです」

英二君は私の仮面が好きだよね。

仮面つて、心が無くても価値があるものなんじゃないの？

心が無くても、英二君は“これ”をととも素晴らしいと思つてくれたんじゃないの？

思うだけだよ。

役に入り込んだ天然の芸術の心と、心に被せる演者の仮面。

心を加工した女優と、加工したものを心に被せる女優。

英二君はどっちの方がより素晴らしいと思ってるの？

ねえ。

「演技には役者の心なんて不確定なものを使わない方がいいんだよ。

台本を読んで、監督の指示した通りの性格と心を“演じ”ればいい。

演じる技、だから演技なんだよ。

演じてる自覚すらなくなるなら、演じる技じゃないよね。

第一、そこまでなりきる必要はある？

なりきっちゃったせいで起きたトラブルだらけだよ、デスアイランド」

「……」

「お芝居に、心はいらないんだよ」

英二君が瞳を閉じて、考え込む。

夜風さんは芝居に心を必要とする。

英二君は俳優が芝居の中で見せる心の輝きを見る。

私は、芝居の不確定要素として、自分の心を徹底的に排除してきた。

だから。

私は。

私は。

私は多くの技術を習得して、多彩な表現ができるようになった。色んな感情を私は多様に表現できる。

でも、私は「一般大衆が求める理想的な少女」の像としての『百城千世子』を作つて、それを磨き上げすぎた。

私は、私以外になれない。

夜風さんとは違う意味で、私以外になれない。

英二君が誰かの『心』に惚れ込んでしまったら、私はその『心』を真似できない。

夜風さんは、真似できるかもしれないけど。

だから。

私は。

私は。

だから。

私と同じように、お芝居に心はいらないって、言つてほしい。

お芝居に心はいらないと信じて、『百城千世子の心』を削り落として、理想的な演技に最適化してきた私の人生を……全否定なんて、しないで。

「あ、そうだ。そういえば」

……アキラ君はさあ。

「朝風君、夕食もう食べた？」

「いえ、まだですね。アキラさんも百城さんも、撮影出ずっぱりでまだだと思えますが」
「そっか。じゃあ三人で食べに行こう、そうしよう」

アキラ君は幸せになれると思うよ、うん。
人が良いもん。

アキラ君が不幸になりそうになったら、周りがほつとかないよ。

私が、英二君が、きつとほつとかない。

しょうがないなあ。

ここは幼馴染の下手な演技に乗ってあげよう。

頑張ってるのに頑張った量ほど上達しないアキラ君には本当に困る。

下手な演技に、私に向けられた気遣いに、ちよつと癒やされた気持ちになっちゃった。
さて、また英二君をからかっちゃおうか、それとも、どうしようかな？

「英二くん、昨日約束した……あ」

「あ、景さん。今日も撮影お疲れ様です」

「」

夜風さん。

声がして、英二君が私を見るのをやめて、そっちを向いて。

私が夜風さんの方を見ると、夜風さんがビクつとした。

なんだろう？

島に来る前、スターズが誰も来なかった顔合わせの時、初めて顔を合わせた時からずっと、夜風さんは私を見ると時々怯えたような顔をする。

「お、おつかれさまっしたあー!？」

夜風さんが自分でも何を言ってるのか分からない様子で、英二君の手を引つ掴み、強引に英二君を体ごと引つ張っていく。

……あ。

「え、ちよ、景さん!？」

英二君の体格、身長、体重じゃ、不意打ち気味に夜風さんに引つ張られたら抵抗できない。

夜風さんは身長高いし、身体能力も高い人だったから。

私と違って。

……あーあ。

あー、あ。

なんだかな。

気分悪い。

小柄な私にはああいうこと、できないんだよね。どんなに頑張っても。

「……千世子君？」

「どうしたのアキラ君？」

しようがないよね。

私達二人だけでご飯食べに行こっか」

「……………そうだね」

心という芸術よりも綺麗なものは、あるんだろうか。

あるとして、それは私に作れるんだろうか。

作れたとして、それは夜風さんの心ごと自分を加工する芸術に敵うんだろうか。

ねえ、英二君。

心って、そんなに俳優にとって大事なもの？

嵐の前兆

大丈夫かなあ、とも思う。

面白くなってきた、とも思う。

それは僕がデスアイランドの監督として、外野であり当事者であるからだろう。

映画の失敗や責任は全て僕にのしかかる。

映画一本で一生を棒に振ることもあるのが映画監督だ。

だから、僕は当事者であると言える。

俳優の暴走や、勝手な現場判断を抑え、撮影の現場を俯瞰し、世界を見下ろす神様のようコントロールするのが監督である僕の仕事だ。

そういう意味では、僕は外野であると言える。

ただまあ、僕はちよつとその暴走を後押ししてる側なんだけど。

僕が夜風ちゃんをオーデイションで採用したのは、期待があつたからだ。

皆の予想を超えて、周りの皆を変えて、暴走しながらも”誰も見たことがないもの”を生み出していく。

僕は見ただかつたんだ。

そうして、百城千世子の仮面が壊れる瞬間を。

ずっと、その微笑みを見てきた。

完成された綺麗な微笑みを。

ずっと、同じやり方でやってきた。

売れる映画の作り方を一度完成させてしまったら、僕の映画撮影は以後流れ作業になった。

ずっと、同じものを見て、同じやり方でやってきた。

僕は”その”百城千世子に飽きていて、何よりも僕自身に飽きていた。

何もかも変えてくれるなら。

見たことのないものを見ることができるなら。

夜風景に賭ける価値はあると、そう思っていた。

「手塚監督。監督の目的は、作品の完成より、百城さんの仮面を壊すことですよね」

「……ああ、バレちゃったか。流石二代目」

でもそれも、ここまでみたいだ。

僕の意図を完全に把握された上で彼が千世子ちゃんのカバーしたら、もうどうにもならない。

「いつから気付いてたのかな？」

「100%確信があつたわけではないです。

確信を得たのは今、監督の反応を見たからですな」

「おお、僕相手にカマかけ？ 成長したね君。

手先は器用でも口先と生き方は器用じゃないと思つてたのに」

「監督が俺を買い被り過ぎなんですよ。

何が『流石』ですか。俺がそんなに万能な人間にでも見えてたんですか？」

む、確かに。

僕は君を信頼しすぎていたのかも。

こんなカマかけに、しかもトークが得意つてわけでもない君のカマかけに引つかかるなんて、いつの間にか僕は朝風英二を思つていた以上に信頼していたのかもしれない。

それにしても、だ。

二代目の観察力でも、こんなに早く、こんなに正確に見極められるとは思つてなかったけど……彼の周りの誰かの入れ知恵あたりかな？

気付くと確信が予想以上に早い。

二代目を警戒しすぎたのと、二代目の友人関係を甘く見すぎたのが失敗の要因だろうか。

「分かつてますよね。

俺は百城さんの味方です。何があろうと。

あの仮面を剥がそうとすれば、百城さんは嫌がるでしょう。俺はそれを許しません」
「だから君にバレたくなかったんだよ」

まあーつたく。

使いやすいようで使いにくいようでやつぱり使いやすい君は本当に厄介だ。

一度惚れ込んだら面倒臭いところは少し父親似だね。

「そもそもなんで百城さんの仮面を壊したいと思っただんですか？」

手堅く危ない橋を渡らない作風の手塚監督らしくもない。

第一、それで得をするとは思えません。

何も得をしないままリスクだけを増やしてる……そんな風にすら見えるんですが」

あー。それ言っちゃうか。

他の誰でもない君が。

「君がいたからだよ」

「……俺が？」

「君はきつと見てないんだろうけどね。

ひよつとしたら、僕の見間違いかもしれない。

僕の勘違いだったら、それはそれでいいのさ。でも……」

千世子ちゃんはさ、君の近くで、君に見せないまま、一瞬だけ仮面を外している時があるような……そんな気がする。

気がするだけだ。

それっぽい一瞬を見たことがあるというだけで、本当はあの仮面の下に”百城千世子の素顔”なんてものがあるかどうかすら、確信は持ててない。

でも、一度そう思うと、気になって仕方がないんだ。

その仮面の下には、素顔があるのか？

それともやっぱり、その仮面が素顔なのか？

僕はその仮面の下を見たことがなかったから。

そこに、見たことがないものが、あるような気がしたから。

「見たことがない百城千世子を見たい、って気持ちには、抗えなかったんだ」

僕は、百城千世子という個人をとてても評価していた。

君がそこに、僕の想像力を働かせた。

そして——夜風ちゃんが、僕に決定させた。

君達の誰か一人が欠けても、僕はこんな気持ちを抱かなかつただろう。

見飽きたものじゃない、僕の心が揺れるもの、それがそこにあるのなら……そんな風

に思ってたんだけど、こりゃ駄目か。

「それを百城さんが嫌がる限り、俺は絶対にその邪魔をし続けますよ」
「だろうね。君はそういうやつだ」

うん、詰みかも。

こりやあもう僕が何しようと思目な奴だ。

夜風ちゃんが僕の予想も二代目の予想もまとめて超えていくのを期待するしかない。
不思議な気分だ。

百城千世子と朝風英二が組んでればもうそこは不動、って僕の心は思ってるのに。

”それでも夜風景なら”と思ってしまう。
なんだろうね？

本日撮影15日目。

日数も既に折り返し地点。

撮影には僕個人の個人的な暗雲が立ち込めていた。

あー、見たこともない千世子ちゃんの顔が見たいんだけどなあ。

撮影16日目。

カチンコの音が鳴る。

「夜風ちゃん？ 夜風ちゃん！」

茜ちゃんの声が聞こえる。

そうだ、私はケイコじゃなくて、夜風だった。

クラスに夜風なんて子いたかな？ なんて思っちゃった。

しつかりしないと。

ケイコの感情と想いを、頭の片隅に置く。

そこに置いておいた夜風景の感情と想いを取ってくる。

そうやって入れ替えないと、私は夜風景にちゃんと戻れないし、次の撮影の時にちや

んとしたケイコに戻れない。

なんだっけ。

英二くんが前にどこかで言ってたやつ。

そうだ、演技の一貫性だ。いつかんせー、いつかんせー。

カットの区切りを越えても感情は連続させる、だっけ。

「どうしたの、茜ちゃん」

「中々返事せえへんのやもん、心配もするわ」

「ごめんね」

ふう、と息を吐く。

主演じゃなくてよかったわ。

今の私だったら、こういう撮影で主人公をやったらちよつと混乱したかもしれない。

撮影は、カットつていう小さな単位で区切られてる。

そして、時系列に関係なく、その場で撮れるカットは一気に撮ってしまふ。

移動時間を極力抑えて、同じ場所で撮れる映像は一気に撮っちゃつて、撮影時間を極限まで圧縮するテクニク……つて、茜ちゃんが言つてた。

同時に、私の芝居を理解して欲しい茜ちゃんは……ううん、英二くんから私の芝居を解説されてるらしい茜ちゃんは、私のことを心配してた。

ケイコは最初怯えてるだけで、次第に周りに流されて、自分の意志もなく動き始めて、友達が一人死ぬ度に違う表情を見せる。

自然な感情の流れを作つて、最後には友達のカレンを助けないといけないうんだけど……感情の流れを意識すると、カットごとの分割がちよつと大変。

最初の撮影で、笑顔の少し怯えてるだけのケイコを演じる。

10分休憩入れて、友達が一人死んだ後のケイコを演じる。

10分休憩入れて、クライマックスの友達がほとんど死んだケイコを演じる。ちよつと移動して、別の場所でまだ友達が死んでない時のケイコを演じる。

私は人格を入れ替え、カットの度に細かく記憶も入れ替えれる。

カットごとに大切な友達が死んだことを忘れて、別のカットで大切な友達が死んだことを思い出して、無垢に笑って、悲しみに暮れて、希望だけ持って、絶望だけ持って、演技する。

時系列順に私を管理する。

じゃないと、”映画撮影”の慣例的なやり方の中で、私は上手くお芝居ができない。

「夜風ちゃんそれでメンタル壊れへんの？」と茜ちゃんが心配してくれてたけど、やってみると意外と楽だったわ。

台本が頭の中に入っていると、私はこの時点でのケイコだ”と思いつくのがとても楽。

『私は夜風景だ』ということ綺麗に忘れてしまえば、余計なことは全部忘れて、必要なことだけを覚えたケイコでいられる。

私が私であることは忘れられる。

役の私の心を表に出して、全部忘れて、1を0にすればいいだけだから。

でも千世子ちゃんの友達にはなれない。

友達だと思える気持ちが無いから、0を1にするのが難しい。

壊すのは簡単だけど創るのは難しい、っていう話が本当なんだってよく分かるわ。

「それにしても、夜風ちゃんまた迫真の演技やったな」

「そう?」

「一色ちゃんが完全に気圧されて、テストで二回も台詞どもってたやん。

夜風ちゃんの感情こもった演技はすごいわ。

前に立つにはそこそこ気合要りそうやん。

殺人鬼の演技なんかした日には、警察にうっかり通報でもされるんとかやう?」

「殺人鬼の演技……したことがないわ。

殺人鬼になりきつちやうのも少し怖い。茜ちゃんはしたことがある?」

「木っ端役でならあるけど、中心人物級で演じたことないわ」

そうなんだ。

でもそうね、うっかり人を殺してしまいそうで怖いし、殺人鬼役は皆嫌がりそう。

巷のドラマで殺人鬼役をしっかり演じてる人達はどうかやってるんだろう……?」

「あ、英ちゃん」

え、どこ?」

茜ちゃんの視線を追って、英二くんを見つける。

英二くんは川の傍から森にかけての領域を、撮影に相応しい場所へと変える作業中

だった。

色んな人が英二くんの指示で動いて、英二くんの采配を待っているみたい。

「では次のテストで液体窒素5L瓶を使い切る予定でいきましょう」

「分かりました。朝風さん、本番は10L瓶ってことでもいいんですよね？」

「はい、満タンの10L瓶で。」

どうにも美術スタッフの皆さん、屋内セットの癖でやってる気がします。

液体窒素もドライアイスも使う量が抑えめですね。

でもここは屋外ですから、もうちよつと思いきりが欲しいです。

” 思いっきりやっていいですよ” と皆さんに連絡をお願いします。ドツと煙を作り

ましょう」

「はい、分かりました。」

おーい、テストで液体窒素とドライアイスで白煙思いつきり出すぞー！」

何やってるのか分からない。

ただ、何か巧みなことをやっていることは分かる。

英二くん達が撮影場所に手を入れると、同じ撮影場所の森なのに、全然違う形に見える。

だから監督は、森の二箇所での撮影を組み合わせて観客に「背景が全然違う。移動し

たんだな」と思わせたい時、『別の場所に移動させるか』と『英二くんを森を加工させるか』を選べる。

重い機械を沢山遠くまで運ぶには、車とお金と時間と人手がいるんだとか。

でも、英二くんが森を加工すればそもそも移動しなくてもいい。

移動するか加工させるかを、手塚監督は巧みに使い分けてるみたいだった。

ふと、しゃがんで、足元の草に触れてみる。

私の手に触れた草は、短く切り揃えられていた。

英二くんが、切り揃えた草だ。

昨日の内に人の肌を切り裂くような葉は全部刈り取っていたんだわ。

私達がうっかりして、足を切り裂かないように。

この一つ一つが、英二くんの愛だと思う。

誰も気付かないような、草葉の陰の愛。

俳優を大切にしてくれるその心遣いに、つい胸の奥が暖かくなる。

俳優に事前に声をかけておけば、普通の俳優はきつと、こういう肌を切る草の周り

には近付かないと思う。

対策なら、それだけでよかったかもしれない。

でも、私がいいたから。

自然な芝居をする過程で、きつと草で足を切りかねない私がいたから。

英二くんは私に恩を着せず、私からのありがとうも求めず、ただ私の安全を考えて、陰ながら小さな気遣いをしてくれた。

茜ちゃんと言った、ゲロを吐いちちゃった後の私に、そうしてくれたように。

顔を上げて、英二君の方を見る。

あら。また他の人を助けてるわ。

「作業遅れ気味ですな」

「すみません、カッターの刃が随分ボロボロです」

「あっちのダンボールに俺の私用のスピードブレード英二が以前、アキラとバイクを作っていた時に使っていた黒刃の一種のこと。めっちゃよく切れる上級者用カッターナイフの刃。薄い木の板がスパスバ切れる。の刃の替えが入ってます。」

刃換えてきちゃってください。俺達が遅れると、撮影全体が遅れてしまいますから」
「すみません！」

「いえ、ここから一緒に遅れを取り戻しましょう。チームですから」

「……はい！」

英二くんはあっちこっち走り回ってる。

自分より偉い人にも、自分より偉くない人にも敬語を使う。

誰かの話を聞いて、それを他の人に伝えて、自分の仕事にも反映して、助けながら仕事をやる。

だから、齟齬が減っていく。

英二くんがいると撮影の流れ、話の流れがスムーズになっていく。

英二くんが人と人との緩衝材になりながら、便利屋をやってるからかな。

色んな人の困ったことを解決しながら、お願いや要望を聞いて、それを自分の仕事や他の人の仕事に反映させてる。

そっか。

英二くんは皆が仕事しやすい空間を『作って』るんだ。

でも、物作りが得意な英二くんが、撮影全体に良い影響を与えるためには、それを影で支えられる人が必要なんだわ。

だから、もうひとり、俳優の側から同じことをしている人がいて……その人にも英二くんの支えが必要で……その人は、きつと。

「水落ち事故起きないように気を付けてください。

川の側ですからね。

俺達美術班は撮影中は基本的に手が空いています。

いざという時は撮影中に起きた事故には俺達に対応するくらいの気概で行きましょう

う

「はい！」

「あ、撮影前ですよ。」

撮影中の事故死って結構な割合で撮影してない時に死んでますからね。

撮影前と撮影後は人の気が抜けます。気を付けてください」

「はい！」

「皆さんが気合入ってて助かります」

「そういえば朝風さん、昔の有名俳優やスタントって泳げない人多かったってマジですか？」

「マジですよー。もうずっと昔、昭和の仮面ライダーの時代のことですけどね」

「へー」

うっ、私がしたことのでいで英二くんが水周りの安全にすごく気を遣ってるのが分かる……ごめんなさい……とつてもごめん英二くん。

「なんかそういうのに理由あったんですか？ 泳げないのって」

「団塊世代が子供の頃、小中学校にプールあんまなかったんですよ。」

だから水泳の授業も全然無くて、泳ぎの技能が無い人が多かったんです」

「……………ああ！」

「今の時代はナチュラルに恵まれてますよ。

一般人の方が海に落ちてても自力で戻って来れることありますし。

泳げない俳優さんが希少なレベルです。

漫画や映画でもカナヅチキャラは時代にそぐわないので随分減りました。

下手すりゃ泳げないから水場撮影NG、となることすらありますからね。

70年台には泳げない俳優が海や湖に放り込まれ、死を覚悟したという事例がいくつもあります」

「はえー、いい時代になったんすね」

「全くですよ。俺もいい時代になったと思います」

「というか僕、血縁者以外に団塊世代の知り合いとか一人もいませんね。

なんかもうちよっとファンタジー入ってる存在です、団塊の世代」

「えーまあそれは……」

俺達の世代だと大体定年迎えてる方達ですしね……

俺はギリギリその世代の方からも指導受けてますけど……」

あ。

英二くんと、目が合った。

作業中の英二くんが一旦仕事の手を止めて、私と茜ちゃんの方に来て、折りたたみの

椅子を広げて置いて、飲み物を置いていった。

「どうぞ、座って待っててください。撮影までまだちよつと時間がありますから」

英二くんが笑つて、また仕事に戻つていく。

なんだろう。

元々あつた中途半端な演技をしたくないっていう気持ちだが、ぐつと膨らんだ気がする。

「夜風ちゃんは女優やな」

？ 茜ちゃん？

「何が？」

「周りを見て、撮影に本気で挑もうとできるなら、その人はもうちゃんと女優や」

その言葉に、私は茜ちゃんに言われた、「変わらなきや」と思うきっかけになつた言葉を思い出した。

——人の気持ちに分からんなら、役者なんかやめてまえ!!

私、変われてるかな。

私、成長できてるかな。

そうだといいな。

英二くんに聞いてみたら、どう答えるだろうか。

ちよつと想像がつかないわ。英二くん、こつちに気を遣つてきそうだから。

「やから、どこまで本気なんか分からん子は反応に困る。

どこまで熱意持つとんのか、どこまで本気なんか。

どこから演技で、どこから演じとんのか。

分からんと、どうにも、判断つかんなあ……英ちゃんのいい人判定はあてにならへんし」

茜ちゃんが首を傾け、視線を動かす。

その視線の先を追つて、私は茜ちゃんが誰のことを言っているのか理解した。

「……千世子ちゃん」

デスアイランドに来る前は、とても綺麗な芝居だと思った。

実際に見て、画面の向こうに居るみたいな、手の届かない綺麗さを感じた。

でも茜ちゃんの熱意を受けても何も変わらないそれに、人形みたいな綺麗さを感じて

……初めて『合わない』って、なんとなく思ってしまった。

私は人形みたいなあの人が、どうしても好きになれない。

なんで英二くんは、ああいうのが好きなんだろう。

撮影17日目。

今日も私は、皆が望む百城千世子を演じる。

残りは13日。

撮影進捗を%に直すと65%くらいかな。

もうちょっと早めたかったけど、スターズ組のスケジュール調整があつたのにこのペースっていうのは十分早い。

序盤でスターズ何人かの撮影を一気に終わらせたからかな？

余裕が無いわけじゃない、つてとこだよね。

今島に残ってるスターズは七人。

翔馬君は英二君が何かして武光君と共演してから、オーディション組に良い感情を持つてて共演も良くしてる感じ。

和歌月さんは夜風さんに露骨に対抗心持つてそう。

町田さんもなんだか湯島さんに対抗心持ち始めてるっぽい。

竜吾君の夜風さんへの敵対視は本物で、佐和君がそれに付和雷同って感じかな。

アキラ君は問題なしで言うことなし。

このまま行けば、あと一時間くらいで予定通りに今日の撮影も終わる。皆いい仕事してくれたね。

そうだ、皆のスケジュール表は頭に入ってるから……うん、やつぱり、英二君今日はもうこれで仕事一区切りだ。

アキラ君も誘って三人でご飯に行こう。

なんだかんだ言って、アキラ君も英二君の親友だもんね。

一緒にご飯食べたら楽しいし、嬉しいはず。

アキラ君も頑張った。

英二君も頑張った。

楽しい時間、心休まる時間が二人にあったっていいはず。

二人が何も考えず喋れるような時間を、三人でご飯食べに行行って作ってあげよう。

そう、私が思った瞬間。

演技に深く”入って”いた夜風さんが、思いつきり槍を振り回してコンクリートの壁に当て、槍が真ん中からへし折れた。

カットが入り、カメラが止まり、OKが出る。

……監督？

「ちよつ、それ壊しちゃ駄目でしょ!？」

「え? ……あ」

槍が壊れることは予定になかったはず。

台本を読んで、常識的に考えればそれは分かる……でも、槍を折った夜風さんの演技を見ていた人達も、監督も、夜風さんが折って初めて気付いた。

このシーンは、夜風さんが槍を振り回して折った方が遥かにリアルだつてことに。

「(づ)めんなさい!」

「いいんですよ景さん。」

最高の映像が撮れたと思えば必要経費です。

折れた槍はこつちにください。俺ならちよちよいのちよい、朝飯前ですよ」

「本当……?」

「ええ、本当です。あつという間ですよ」

「よかつた……」

嘘。

結構手が込んでたやつだったよね、あれ。

英二君、自分が作った物壊されると、大体心の中で絶叫してるけどね。

分かつてるのかな夜風さん。

……分かってないんだろなあ。

だから、もう『申し訳ない』って気持ちで表情から消えてて、『ありがとう』って気持ちで表情がいっぱいになってるんだろなあね。

正解だよ。

英二君つてごめんなさいって言われるより、ありがとうつて言われる方が好きな人だから。

もう夜風さんのことは完全に許しちゃってるんじゃない？

ああ。

やだな、こういうの。

これ、追加の仕事になる。

撮影が終わった後に英二君が黙々とする仕事になる。

私達が食事に誘ってゆっくり談笑とかしたら、その分だけ後の方に時間が食い込む。

そうしたら、英二君の寝る時間がまた減っちゃう。

邪魔をしないで、英二君が撮影終了後に一人で集中して槍の修理に取りかかれるようにして……私が何もしないのが、英二君にとって一番いい。はず。

「英二くん、私にできることはない？ 私が壊しちゃったから……」

「特には……あ、あのおにぎりあつたじゃないですか。」

とても美味しかったあのおにぎりです。
あれなら作業中でも食べられます。

槍の修理は夜まで食い込むと思うので、作業しながらあれを食べたいんですが

「! うん、分かったわ。前より美味しいのを持つてくから、部屋で待つてて」

「おお、それは楽しみです」

——私は。

大丈夫。

手鏡を見る。

私はいつもの微笑みを浮かべている。

褒められた仮面は、まだ私の顔の上に張り付いていた。

「千世子君」

私の隣に、人がやって来る。気遣うような足取りで。

「アキラ君」

「僕に分かるのは、幼馴染のことくらいだから」

「……ありがとう」

人一人分くらいの間隔を空けて、アキラ君が私の横で足を止める。

これが幼馴染の距離。

私が英二君だったら多分、アキラくんは肩が触れるか触れないかくらいのところまで足を止めたと思う。

それが親友の距離。

私とアキラ君の距離はいい友人の距離で、遠ざかることも近づくこともない。それがほつとする。

英二君と私が仲良くなることを素直に応援してくれるアキラ君は、私の肩の力を抜いてくれる。

「我儘言ってもいいんじゃないかな。千世子君は少し、我慢をしすぎる」

その上、私が望んでいることを言ったりもしてくれる。

「朝風君は君の我儘を喜ぶと思うよ」

だろうね。分かるよ。

睡眠時間削つてでも夜一緒に話して、なんて言ったら英二君は喜んで受けてくれると思う。

でもそういうの、私好きじゃない。

「そんな自分勝手に好き勝手できないよ。夜風さんじゃないんだから」

私にだって、”同じになりたくない人” ってのはいるんだよ？

「私がワガママを言つて、英二君が聞くのは。」

英二君がワガママを言つて、私が聞くのは。

いい作品を作るためだよ。

英二君が作品と関係のないワガママでも私に言うようになつたら、話は別だけどね」

あれ。思つてた反応と違う反応……アキラ君が、驚いてる。

「どうしたの？」

「ああ、いや。」

千世子君の知らない一面を見てビックリしたんだ。

仕事でも、仕事関係ない私的なことでも、朝風君に頼られたかつたのか、千世子君」

「……そういうこと言つてるんじゃないんだけど」

「そういうこと言つてるんだと思うんだけどな」

「……」

なんだかなあ。

常識を身に着けて、気遣いを身に着けて、多くを見通せる目があるわけでもないのに、基本的に優しいから女心が分かるアキラ君。

クライアントの内心を読み取りより正確な造形をする能力を極めて、超人的なくらい

に人の内心が読み取れるようになってきているのに、仕事に必要なから女心は全く読み取れない英二君。

二人はほんつとうに良い関係してるなど、私は思うよ。

「撮影開始10分前です！ 皆さん、定位置についでください！」

撮影が始まる。

さあ行こうアキラ君。

支えてね英二君。

私は今日も、ちゃんと『百城千世子』だから。

撮影18日目。

「和歌月」

竜吾さんと朝食を摂っていた私に、竜吾さんが語りかける。

「なんででしょうか？」

「今日は初めての千世子と夜風のタイマン共演だな」

「……忘れてたんですよ、私は、今まで」

「忘れんな忘れんな」

「忘れようとしてたんですけど」

「忘れてても今日千世子と夜風がガチンコすることには変わんねーぞ」

分かつてますよ。

竜吾さんは今でも、夜風さんを軽んじて見ている。

あの普通でない芝居の凄さは、とても分かり難いという側面もある。

ある意味当然だが、ちよつとスターズとしてどうなんだろうとも思う。

夜風さんの演技は本物だ。

役に入れば、揺るぎなく。

だからこそ、あまり歯牙にもかけられてもいない現状が少し辛くもある。

私はあの時、夜風さんと対等の場所にいた。同じオーディションにいた。

夜風さんに負けるか、と奮起してもいる。

芝居の中で対抗心を見せてしまったりもした。

けれど夜風さんは、私を全く意識していないように見える。

夜風さんにとってのデスアイランドのライバルは……千世子さんに、なるんだろう

か。

正直なところ、悔しい。

私は夜風さんに善意も敵意も向けられていない。

仲間として必要な人間とも、共演に忌避感が出るほどの競争相手とも見られていない。

極端な言い方をすれば、私はあの人の眼中に無いんだ。

私は夜風さんが落とされたオーディションに受かったんだから、夜風さんより優れていなければならぬ……そう思っても、現実の方がついて来ない。

悲しいことに、私は夜風さんのライバルに相応しくないらしい。

『ケイコ』に武器を持つて挑むも相手にされず、その後を追いながらも追いつけず、その背中に追いつけないまま終わる役。それが、私の役だ。

そんな気持ちを飲み下しながら、今日も私は撮影を頑張っている。

「どうなると思いますか？　夜風さんと千世子さん」

「夜風が千世子にゲロぶちまける」

「真面目に答えてください」

「ふざけ半分真面目半分だったの。そうなっても変じゃねえと俺は思ってるってことだ」

竜吾さんはそのくらいには夜風さんが千世子さんを嫌つてると思つてるといふことだろうか。

どうだろう。

そんなに敵意はあつただろうか。

夜風さんと千世子さんの間にある感情は、ちよつと読み辛い。

私が考え込もうとすると、食堂に朝から元氣な朝風さんがやつて来る。

「おはようございます！ 今日もいい撮影をお願いします！ 俺達も尽力しますので！」

ああ、もう。

俳優に対する信頼とかそういうので溢れた表情。

千世子さんが自分の感情を隠してゐるからこそ、彼はこういう表情ができるわけだけど……そう考えると、彼の笑顔は千世子さんが守つてゐる？

いや、これは流石に理論が飛躍し過ぎだろうか。

能天気な笑顔を浮かべる朝風さんを見て、私と竜吾さんは顔を見合わせた。

「朝風さんは本当に朝風さんですね」

「こいつはこれでいいんだよ。」

めんどくせーヤツがこいつの周りに居ると面倒臭くなるんだ」

「え？ 何かありました？」

「いや別に」

む。私と竜吾さんの息がピッタリ合ってしまった。

不覚。

「あ、そうそう。」

もう残り12日じゃないですか。

だからどつかのタイミングで皆集まって集合写真とか撮りたいなって思ったんです。

どつかのタイミングで集まれませんか？

スターズは次々本土に戻っちゃってますからね。

島に残ってる組で集まって、同じ撮影に同じ気持ちで臨んだ記念に、と撮影したいんです」

「んー、悪くねえとは思うが」

「でしよう？ これから景さんと百城さんにも声をかけに行くつもりです」

……良い人なんだけどなあ。

良い人なんだけど……うーん。

駄目だ。

私には道理に反してないこの人を悪いとは思えない。

だつてこの人、基本的に善意と誠意だもの。

「声かけに行く順番は千世子、夜風の順に行けよ？」

「なんでですか？」

「俺を信じろ」

「理由を聞いたのに……!? とりあえず、信じてそうしておきますけど……」

この人「俺の言うことが信じられねえのか？」とか言われたらとりあえずで信じて行動しそうなチョロさがある気がする……いや実際にそうなのは分からないけれども。

しかし竜吾さん。

夜風さんが嫌いというか、千世子さんの味方というか……私は特に何も言いませんよ、どっちの味方とありませんから。

「最近忙しい百城さんみたいな人には、忙しい時の励みになります。

オーデイション組みみたいな駆け出しには、人気が出るまでの誇りになります。

少しでもそういう助けになったら、と思うんですよ。

小さい写真立てでも作って皆に配ろうかなって思ってます。思い出の品、ということ
で」

マメな人だ……マメな人なのに。

「それに、こういうのの作成をきっかけに、人は仲良くなることもありますし」

撮影してる人達が、とりあえずでも仲違いせず仲間としてやっていけるように、色々考えてる人なのに。

この人が渦中の中心点じゃなければなあ……はあ。

朝風さんが去っていく。

あ、ちゃんと千世子さんの方から行ってる。

良かった……同じ部屋に千世子さんと夜風さんがいて、朝風さんが千世子さんから声かけるとかという事態にならなくて。

って、朝風さん、千世子さんにからかわれてる。

メンタルの力関係はああなのに。なんというか本当にもう。

「外野から見てる分には楽しいよな、あれ」

「たまげること言いますね竜吾さん」

脳味噌どういう構造になってるんですか？

「英二はなんだかんだ無難なところに着地させるだろ。心配0つつつたら嘘になるがな」

「はあ。信頼してるんですね」

「まあ、それもあるが」

それもあるが？

「どうせ千世子が勝つだろ。どんな奴にも負けねえよ、あいつは」

「あいつが俺達の代表だ。なら、なんであつても負けやしねえつて」

朝風さんへの信頼。

千世子さんへの信頼。

スターズに入ったばかりの私と、新人でもない竜吾さんの間には、天と地ほど離れた何かがある気がする。

それが”共に同じ世界を仲間としてくぐり抜けてきた信頼”っていうものであるのなら、きつとそれは私にも……そして、夜風さんにも無いものだ。

私は夜風さんに負けられない。

負けたくない。

だけど今の私には、最初の数日ほど競う気は無くなっている。

千世子さんを押しつけてまで夜風さんと競うのは、少し怖いから。

夜風さんの対面に千世子さんが立った時点で、私は脇に控えている。

今日、初めて、千世子さんと夜風さんが衝突する。

夜風景 千世子は抱く 殺意かな (5・7・5)

——これが、私達の美しい本当の友情の始まりだ

友情。

友情ってなんだろう。

私知ってる友情の九割くらいは、映画で見たものだ。

私と英二くんの友情も、ちゃんと始まったのはこの映画の言葉から……だった、気がする。

友達。友達。自分に問いかけてもスパッと一つの答えが出てこないのは、きっと私が私自身のことを全て分かってはいないから。

どうしよう。

でも、頑張らないと。

ルイ、レイ、お姉ちゃん頑張ってるからね。

私は友情を創りたい。

特定の誰かに友情を抱く自分を創りたい。

そのためには友達が……俳優の友達への想いが何かを考えないといけない。

英二くんじゃ駄目。

この前の特訓で分かったけれども、私は英二くんの代わりの誰かかっていうものを、あんまり考えたくないみたいだから。

「ねえ、もしかして私達って……友達？」

朝ごはんの時、茜ちゃん、武光君、真咲君にちよつと恐る恐る聞いてみた。

「今更何やのこの子……」

「友達というより仲間だな」

「どう違うんだよ……」

あつ、今失言した気がする、どうしよう、どうしよう。

「もしかしてまだ友達じゃない……？」

「友達や友達！」

「なんで不安げなんだよ」

ほつ。良かった。

茜ちゃん達、優しいわ。

”ネガティブだな”と言わんばかりの顔でくつくつと笑ってる武光君がちよつと腹立たしい。

「良かった……」

私、昨日考えたのだけど。

もし茜ちゃんやんが殺されそうになったら、きつと身を呈して助けると思うの！

これって友達だからよね!？」

「なんで私が殺されなあかんの」

「重えなお前の友情」

大切な友達が殺されそうになったら、命の危険があつても、私は飛び込むと思う。

思えば、私は前からずっと英二くんのためなら死ねたかもしれない。

そんな気がする。

そのくらいの想いはあつた気がする。

きつとこれが、私の友情なんだわ。

ケイコは、カレンを庇って死んでしまう役。

私の中にこういう感情があるんだから、千世子ちゃんを庇って死ぬる私になることと、千世子ちゃんの友達になることはイコールのはず。

演技のためにちゃんと、友達だと思えそうにない千世子ちゃんを友達だと思わないと。

私は役者だから。

「だから私、千世子ちゃんと友達になろうと思うの！」

「……」

沈黙が痛いわ、みんな。

「……へえ、え、なんで？」

真咲君の困惑した声が胸に痛い。

また正確に伝わってない感じがする。

英二くんだと一言えば10分かってくれたりするからこういう説明が楽なのに。

武光君も話しやすいし、私のこと分かってくれてるし、私が言いたいこと分かってくれてないかな……？

「役作りって訳か」

「薬作り？」

「聞いたことねえのかよ、どうなってんだお前」

黒山さんからそんなものしたこと聞いたことないもの。

……あ、でも、聞き覚えがある。

どこで？

ええと、黒山さんじゃないなら……

——よろしく。物作りが得意な、私のお友達

——よろしくです、役作りを始めたばっかの、俺のお友達

あ。

英二くん。

そうだね、他にも教えて貰ったことがあつて……そう、英二くんが言つてたことは。

■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■

「景さんならできます、きつと。」

今日あなたは、役作りを覚えまして。

自分の中から掘り出した過去をそのまま使うのではなく、ちゃんと役を作つたんです」

「あなたは役を作る。俺は物を作る。」

自分を作るあなたと、自分以外を作る俺。

俺はあなたが作り上げるものを、自分が作り上げられる物で、全力で支えます」

「ようこそこちらの世界へ。歓迎します、夜風景さん」

■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■

時代劇の時。

”江戸時代の町民として生きた私” っていう、他人の私を作つて演じた時。

そうだね。

あの時の私の演技を、英二くんは役作りつてちやんと言つてた。

私であつて私でない私、他人のようで私である私、それを作ることはあの時にもうやつてた……：そういう風に考えれば、思ったよりもずっと簡単に出来そうな気がする。

手塚監督には先週に千世子ちゃんのこと好きじゃないなんて言っちゃったけど、千世子ちゃんを好きな私になる方法、道筋が見えてきたかも。

「これ、役作りつて呼んでいいのね」

「ああ。一流はそうやって役を作る。

俺達は舞台の上で使う心を、時間と労力をかけて作る。

お前ほど極端に役に入り込む人間は数えるほどしかないがな。

役作りのせいで、役に人格を引つ張られる者も少なくはない。

お前はまあ……：問題無いだろう。百城千世子と友達にでもなつて、役を作ればいい」

「うん」

ありがとう、武光君。

私役者として、ちゃんと『ケイコ』を演じるため、千世子ちゃんと仲良くなつてみせるわ。

仲良くなれば英二君も喜ぶ……：と思う。

それならなおさら、私は千世子ちゃんと友達にならないと。

撮影18日目の朝、千世子ちゃんを探して、見つけた。
ちらつと後ろを見る。

茜ちゃん、武光君、真咲君はいる。

うん、頼んで来てもらってよかった。心強い。

保護者同伴とか言われるかもしれないけど、心強いのは変わらない。

そこは、撮影現場に使われた広場。

撮影スタッフさん達があちらこちらに走り回り、英二くんが一刻も早く撮影開始がで
きるよう、縦横無尽に走り回っている。

チラチラとでも英二くんの姿が見えると、ほつとする。

逆に英二くんがこつちを見る目は、どこか心配そうだ。

なんだかちよつと悔しい。

千世子ちゃんに対してはあんなに揺るぎなく、信頼の目で見てたのに。

千世子ちゃんは広場の片隅にあるベンチに座って、森を見ていた。

何をしてるんだろう。

何もしてないのかな。

時間を無駄に使わない千世子ちゃんが自然を見るだけで何もしてないなんて珍しい。

あ。

千世子ちゃんが見てるところ……英二くんが背景に使うために、手を入れた森だ。英二くんが作った加工済みの自然の森を、千世子ちゃんは一人で眺めてる。

人気者の千世子ちゃんが一人で森を見てた理由が、少し理解できた……ような、気がする。

「ち……千世子ちゃん」

私名前を呼ぶと、千世子ちゃんがこちらを向く。

綺麗な微笑みを私に向けて、千世子ちゃんの瞳が私を見る。

なんでだろう。

可愛いのに怖いのは、なんでだろう。

大丈夫。

千世子ちゃんに会う前に、千世子ちゃんが怖い気持ちと苦手な気持ちはできるだけ置き去りにしてきたから、大丈夫。

感情は忘れてくればちよつとは大丈夫になるはずだから。

「(イ)……(イ)に座つてもいい？」

「うん、もう座つてるね」

よし、隣に座れたわ。

千世子ちゃんも何も言っていない。座ることは許してくれてる。大丈夫。

「千世子ちゃんのこと……千世子ちゃんって呼んでもいい？」

「うん、もう呼んでるね」

よし、第一関門突破！

名前で呼ぶことをちゃんと許してもらったわ。

これで一安心。

英二くんが千世子ちゃんのことを他人行儀に全然名前で呼んでなかったから、千世子ちゃんは滅多に名前を呼ぶことを許していないんじゃないかって、ずっと心配だったから。

はあ、心臓が、緊張でずっとドキドキしてる。

あら？

じゃあなんで、英二くんは名前で呼んでないのかしら……？

あれ？

もしかして、千世子ちゃんより私の方が、英二くんと仲の良いお友達だったりする？
そうだったら嬉しいけど……でも私なんかきつと、英二くんと千世子ちゃんほどには……名前で呼ばれてなくても全然気にしてなさそうな千世子ちゃんは、何を考えてるんだらう。

英二くんはどう思われてても、本当は大して気にしない人だったりするのかしら。でも、そうだとしたら。

本気で千世子ちゃんに惚れ込んでる英二くんの気持ちが一番通行みたいで、英二くんから受けた好意を千世子ちゃんが全然返してないように見えて、私は嫌な気持ちになつてしまう。

茜ちゃんの心の演技を心で返さず、利用して終わらせたあの時みたいに、千世子ちゃんは貰った分の想いを返してないように見える。

……少なくとも私は、想われたら本気で応えないとつて思うのに。やっぱりと千世子ちゃんは正反対な気がする。

千世子ちゃんは顔に出ないから、その本心がどうなのか、分かったつもりでもすぐに分からなくなつちやう。

掴みどころがない。

人間が手を伸ばしても捕まえられない、空を飛ぶ天使みたい。

この人はいいい人なのかそうでないのかも、私には分からないわ。

「もしかして私と仲良くなりに来てくれた？」

「え」

「そりや想像つくよ。」

夜風さんは芝居に”心”を必要とするんだもんね、きつと」

「?」

え、待って。どういうこと?

なんで私の個性みたいに言うの?

「役者は皆そうなんじゃないの……?」

「」

芝居に心を使えない人なんて、いないんじゃないの?

だから皆どこかで、お芝居に心を使うんじゃないの?

千世子ちゃんもそう見えないだけで心を使ってるんでしょう?

「私達は友達にはなれないよ」

……え。

「——って、言ったらどうする? 演じられなくなる……?」

千世子ちゃんがベンチを立つ。

私と話してるのが嫌、って言ってるみたい。

私の近くにいるのが嫌、って言ってるみたい。

千世子ちゃんは他人との関係を大事にするから、話の途中で強引に話を打ち切つて席を立ったりしないって、前に英二くんが言つてたのに。

まだ撮影は始まつてないから、移動する意味だつてないはずなのに。

千世子ちゃんはベンチを立つて、私に顔を見せないようにして、私から離れて行く。

「だからお芝居に、心はいらないんだよ」

いい人じゃないのかもしれない。

そう、私は思つた。

勇ましい心で演じる役者が好き。武光君がそうだった。

優しい心で演じる役者が好き。真咲君がそうだった。

綺麗な心で演じる役者が好き。茜ちゃんがそうだった。

画面の中の映画の俳優達の多くも、各々の心を使って演じていた。

英二くんが「心はいらない」なんて言う千世子ちゃんと仲が良い理由が、分からない。

「心はいらない」なんて言う千世子ちゃんの気持ちは、私には全然分からない。

分からないから、友達になれない。

心で演じる私を褒めてくれた人がいるから。

私の好きな役者に、心で演じる人がいるから。

私は千世子ちゃんと言葉を素直に受け入れられない。

「友達になれなかったわ、どうしよう」

「つーか友達ってあなるもんじゃなくね？」

「そんな落ち込んで、共演までまだ日もあるし」

落ち込んでしまって、立ってられなくてしゃがみこんでしまう私を、真咲君や茜ちゃんがそれぞれの言い方で励ましてくれる。

こいつ切り替え早いのに意外とネガティブだな、と真咲君がぼそつと呟くのが聞こえた。

そうだわ。

落ち込んでられない。

すぐ頭の中身を切り替えないと。

「でも私今日少しだけ千世子ちゃんと共演するし、困ったわ」

「対策がギリギリ過ぎんだよ、お前は」

「だつてずっと千世子ちゃん怖くて近づけなくて……」

真咲君が呆れた顔をしている。

武光君はこつちを心配もしてなくて、撮影中の町田さんと千世子ちゃんを見てる。

時々こうやってスターズの人から盗める技がないかを探している武光君は、本当に熱い人なんだなあって思う。

熱い人がいて、熱すら感じられない人形みたいな綺麗な笑みを浮かべる人がいる。

役者が一人一人違うなら……皆は何を、胸に抱いてるんだろう？

「皆はどうして役者になったの？」

「な、なんだよ突然」

私が聞くと、真咲君がうろたえた。なんで？

「真咲ちゃんはスカウトやもんな。」

最初生意気やったけど、鳴かず飛ばさずで悔しかったんか真面目になつてった」

「う、うるせーよ！

スカウトされたら期待しちまうだろ、自分の才能に！」

あー。そういう？

「私も似たようなもんですよ。」

親に子役やらされて、チャホヤされて。

売れんくなつてきた頃にはもうやめられんくなつてた」

どこか、辞められなくなったことを誇らしく思うように、茜ちゃんが言う。

「芝居は麻薬みたいなものだからな。」

夜風、お前は？ どうして役者になったんだ？」

「……私は」

——おねーちゃん役者さんじゃないなら、怖い

「妹が……私に」

妹に言われた言葉を思い出す。

妹にすら怖がられたことを思い出す。

私は役者にならないと生きていけなかった。

父は私達を捨てて、母は私達を置いて死んでしまつて、家族のために毎日必死に働いて、自由な時間もなくて、私の毎日は辛いことばかりで。

毎日のように映画の世界に逃げ込んで、全力で現実の私を忘れようとした。

色んなことから逃げるように、スターズのオーディションを受けた。

——お前は役者になるために生まれてきたんだ

「向いてるって言われたし……」

黒山さんに言われた言葉を思い出す。

私に生まれた意味があるって、言ってもらえたことが嬉しかった。

黒山さんは私を見つけてくれた。私を引き上げてくれた。今も育ててくれてる。

そうして、英二くんとも出会った。

黒山さんに引つ張られるようにして、女優の道を歩き出した。

——いつかもう一度お前とまともに芝居がしてみたいと、俺は思ったよ
武光君に言われた言葉を思い出す。

今のままの自分じゃ駄目だって、そう思つて、頑張つて変わろうとした。

現実から逃げるために女優になろうとするんじゃないやなくて、黒山さんに流されるまま女優をするんじゃないやなくて、もう私は、自分の意志で女優をやつていた。

自然と、役者を名乗るようになっていた。

自分のためだけにじゃなくて、周りの人のためにも芝居をやつていた。

——あははっ

「……」

茜ちゃんと仲直りできた時に、茜ちゃんと笑いあつたことを思い出す。

芝居をしていくだけで分かり合えることが、幸せだった。

頑張つた結果として、友達や仲間が出来ることが、幸せだった。

——サインを下さいっ！

「……」

かななちゃんにサインを求められた時のことを思い出す。

私にできることをしていくだけで、周りの人に認められていくことが、嬉しかった。

父が捨ててしまえるくらい無価値だった私にも、ようやく価値が出来た気がした。空っぽだった私に、価値が出来た。

先が見えなかった私の人生に、未来が出来た。

家族のために毎日毎日をお金稼ぎのバイトだけに費やして、やりたいことをする時間も、やりたいこと自体もなかった私の人生が、好きになれた芝居だけを毎日になった。

好きなものが、好きな人が、たくさん出来た。

目を閉じれば、英二くんが私にくれた言葉が、耳の奥に蘇る。



「そうです。

本当は、善性だけの人間が素晴らしいんじゃないです。

可能性に満ちた人間もまた、素晴らしいんです。

だから酷い自分を見つけられた人もまた、素晴らしいんですよ。

善人にも。

悪人にも。

暴君にも。

聖人にも。

本当は人は、心持ち一つで何にでもなれるんです。

どんなものにもなれる人は素晴らしい。

舞台の上で役者は、絢爛なお姫様にも、七つの海を股にかける冒険家にだってなれます」

「役そのものになりきれぬ人は、新しい役を得るたび、別の人生を生きるといえます」
「それで自分の人生を見失ってしまう人もいます。

でも、それでも、見失わなければ……

あなたは役の数だけ人生を生きられる、この世で最も幸福な者になれます」

「大袈裟なんかじゃありません。

この世の誰もが、一つの人生しか生きられないという制限を持っています。

でも本物の役者には、そんな制限はありません。

なりたいたいものになり、生きたい人生を生きる。望むまま、思うままに。それは、きつと……」

「それが、一生役者として生き続け、その中で幸せを得ていくということだと思えます」
「俺は、景さんがこの世で最も幸せな役者になれるかもしれないと、そう思っています」



そうなれたら素敵ね、と、私は答えた気がする。

幸せになれるって、英二くんは言ってくれた。

英二くんは私を見捨てないだろうって、何故か思えた。

この人は私を幸せにしてくれるって、不思議と信じられた。

良い友達と出会えたことが、私の幸福。

「なんでそこで笑うんだよ」

「私は慣れてきたわ、夜凧ちゃんのこの感じ」

私は自然と、笑っていたらしい。

真咲君が怪訝な表情で私を見ている。

—— 映画の成功は主演にかかっている。彼女は一人ですべてを背負っているんだ

英二くんや千世子ちゃんに内緒で、監督が私にした話を思い出す。

六億の制作費も、撮影に関わった全ての人の想いも、デスアイランドという映画にかけた全ての人の願いも、千世子ちゃんは背負っているらしい。

まだ新人の私でも、ここに来るまで色んなことがあったわ。

千世子ちゃんはどうなんだろう。

ここに来るまで、どれだけのことがあったんだろう。

英二くんはそれを、どれだけ見てきたんだろう？

「千世子ちゃんは、どうして役者なんだろう」

千世子ちゃんは、きつと聞いても答えてくれない。

英二くんは、千世子ちゃんが秘密にしたいと思ってるなら、きつと答えてくれない。

英二くんと千世子ちゃん以外の人に聞いてもどうせ知らないから、それを私が知る方法はない、と思った。

町田さんがカメラの撮影範囲からどいて、カメラなどの撮影機材が、その広場の北を背景にする撮影から、その広場の南を背景にする撮影にシフトする。

これで、カット単位だと別の広場での場面に見える……らしい。

広場から見て東西南北全ての方向の森をパパッと整えた英二くんの手腕が、撮影に活きてる……らしい。そう茜ちゃんが言っていた。

町田さんの代わりに私が入る。

町田さんと千世子ちゃんの一対一から、私と千世子ちゃんの一対一へ。

千世子ちゃんの前に行こうとする私に、手塚監督が耳打ちしてきた。

「次のシーンは夜風ちゃんだったよね」

「はい」

「ちよつといいかな。今回は何も考えず思い切り演じてね」

「！」

え？

私に俯瞰視点で暴走しないようにするのをやめろ、つてこと？

「でもそれじゃ、私また迷惑かけてしまうかも知れ——」

「そのくらいのもりでやってよ。」

全力で演^やらないと、喰^やわれて終わるよ」

喰^やわれて、終わる。

茜ちゃんの時の芝居は、あれは、茜ちゃんの芝居が食べられちゃったつてこと？

茜ちゃんみたいに……私の演技も飲み込まれて、千世子ちゃんの引き立て役にされる

？

あの時は、茜ちゃんが引き立て役にされて少し嫌な気持ちでした。

私も、そうなってしまったとしたら。

じわりと冷や汗が出る。

どうしよう。

監督の言う通りにしていいんだろうか。

そうしたら、また周りに迷惑をかけちゃうんじゃないの？

迷う私が、監督の方を見る。

監督の横に、英二くんが居た。居てくれた。

私と英二くんの目と目が合う。

英二くんが真面目な顔で、いつでも飛び出せそうな姿勢で、私が折った槍を完璧に直したものを傍らに、私の目を見て頷いていた。

目と目だけで、伝えたいことを伝えられた。

”いざという時はお願い”と私が伝える。

”物ならいくら壊しても俺が直します”と伝わってくる。

撮影序盤にも、こんなことがあった気がするわ。

深呼吸。

大丈夫。

私が暴走しても、英二くんが止めてくれると信じて。

私が物を壊しても、英二くんが直してくれると信じて。

「ありがとう」を胸に抱いて、私は、英二くんが好ましく思ってくれた、私の芝居をする。

私より、私のことよりずっと、千世子ちゃんのことを好きそうな英二くんが——千世子ちゃんにだけは、絶対に怪我をさせないと、そう信じて。

何の枷も付けずに、役に入る。

集中。集中。

でも、やっぱり変わらない。

やっぱり……どうして、顔が、視えない。

千世子ちゃんの心が、視えない。

どうしよう。

視えないなら、どうすればいいの？

視えないものを視えるようにするには、どうすればいいの？

もっと視える何か……たとえば、英二くんみたいな眼が、私にあつたら。

英二くんみたいな眼がある私にさえ、私になれたら。

「夜風さんは、お芝居が好き？」

千世子ちゃんが、突然問いを投げかけてきた。

やっぱりそうだ。

千世子ちゃんの中には英二くんがいて、英二くんの中には千世子ちゃんがいる。

だって、二人して似たような質問をしてくるんだもの。

英二くんはあの時、私を役者として成長させるために問いかけてくれた。千世子ちゃんは、何のために私に問いかけてきたんだろう。



「俺はあなたが芝居を続ける限り、永遠にあなたの戦友です。

呼ばれれば行きましょう。

寝るなど言われれば不眠で従います。

俺が作るものは俳優を輝かせるためにあります。でも大切なのは、あなたの気持ちです」

「湯島さんも、景さんも。

俳優を続けるかどうかは、二人の意志が決めること。

舞台の上で浴びるスポットライトも称賛も、辛さも悲しみも、その人だけのものです。

俺は、二人に続けてほしいと思います……やっぱり大切なのは、その人の気持ちなんです」

「お芝居、好きですか？」



好きと、私は答えた。



「なら、大丈夫です。名乗りましょう、役者を」

「きつとあなたは、世界で一番に幸せな役者になれます」



そうだったら素敵ね、と、私は答えた気がする。

答えは決まってる。

迷うことはないわ。

私は役者。

私の友達が、そう言ってくれたように。

「うん。好きなんだと思う」

「……そっか、ごめんね」

「？」

なんだろう。

なんで謝ったの？

「本番！」

「本番！」

本番が始まる。

カレン 千世子を友人だと思えないと、私はきつと台詞すら上手く言えない。

でも大丈夫。

演じられる方法が今の私にはある。

友達たいけんを代用して千世子カレンを創造しろ。

武光君のように勇ましく。

真咲君のように優しく。

茜ちゃんのように綺麗な。

カレン 千世子は私の、大切な友達だ。

あ。

あ、カレン！ 無事だったのね！

死んだ人もいて、離れ離れになって……良かった……あなたは生きてたんだ……！

ずっと心細かったの。怖くて、怖くて。

カレンちゃんが見つかって、本当に良かった……嬉しいわ。

ベンチを立つた。

夜風さんから離れたかったから。

夜風さんに背を向けて歩き出した。

夜風さんに顔を見られないように。

よく言えるよね、夜風さん。

何も分かってないから言えるんだろうけどね。

英二くんが本気で気に入ってるなら、あなたは優しい人なのかもしれない。

人を傷付けたり攻撃したりする言葉を喜んで吐くような、世の中に沢山いる人達みた

いな人じゃないのかもしれない。

でもそうなら、あなたは単純に私のことを何も分かってないんだと思う。

本当に、私に、凄いこと言ってくるよね。

——役者は皆そうなんじゃないの……？

そういうつもりで言ってるんじゃないだろうって、想像はつくけどさ。ねえ、それ。

自慢？

皆そうじゃないよ。

私はそうじゃないよ。

当然のように言わないで。

私は私にしかねれず、他の心を持った他人になれない。

ずっとずっと、『百城千世子は百城千世子しか演じられない』って言われてきた。

そうだよ、夜風さんが言ってる芝居ができないからだよ。

生まれて初めてした芝居でアリサさんの目に留まったような夜風さんと、一緒にしないで。

二回目のオーディションで英二君を見惚れさせるようなあなたと一緒にしないで。

私は寝る間も惜しんでずっと研究と研鑽を繰り返して、それでようやく英二君の目に留まるような人間で、それまでは目にも留まらないような有象無象の一人でしかなかったんだから。

あなたにできることが、私にできるわけじゃない。それが、辛い。

「……本当、やめてよ」

夜風さん。

私のこと好きじゃないって、伝わってくるよ。

だって私のこと少しでも好きになれたなら、メソッド演技を極めてる夜風さんは、その時の好感を思い出して演技すればいいだけだもんね。

英二君から聞いたよ。

他の人への友情を代用して、私を友達だと思えるようにする特訓してたんだって？

凄いし、駄目だよね夜風さんは。

私を好きになれないと普通に演技もできないし、だから私を好きになれないまま、私を好きになれる人格を作っちゃえるんだもんね。

過去の感情を引っ張り出せる夜風さんが、私のことを友達だと思えないってことは、今日に至るまでただの一度も私を好きになれなかったってことだよね。

メソッド俳優が演技でも好きになれないっていうことは、そういうことだもの。

いいよ別に。

私もあなたに好かれようとは思ってないから。

でもさ。

『あの子と友達になれないなら、他の友達との友情を代用しよう』って考えるような人と、私は友達になりたくないかな。

芝居に必要なから友達になろう、つて寄つて来る人と、私は友達になりたくないかな。友情は、あなたの芝居のための道具？

私はね、ありとあらゆる打算抜きで、芝居や仕事に利用する気が全く無い、損得抜きの友達やつてる英二君とアキラ君を見てきたから。

互いのことが友達として好きになつて、親友になつた二人を見てるから。

英二君もアキラ君も、大事な友達だから。

私と友達になろうとして、なれなかつた後に「でも私今日少しだけ千世子ちゃんと共演するし、困つたわ」なんて言つてる人と、友達になりたくない。

残念に思う理由がそれつて、本当筋金入りだよね。

悪意が無いのは分かるよ。

悪気が無いのも分かる。

私と友達になつたら、仲良くなつて友達らしいことをしようとする人でもあるんだよね、夜風さんはきつと。

その上でこうなんだ。

まるで、心も魂も、芝居の世界で生きていくためだけに出来てるみたい。

夜風さんは真つ当な友達関係の概念にすら、芝居の概念が浸透してる。

時々、”芝居のために”という思考の下地で、ごく自然に考えてる。

怪物の精神性。

どこか何かがおかしい、本物の天才らしさを持った心。

英二君が惚れ込むのも分かるかな。

むしろ、夜風さんの心の深いところまで覗き込んで『いい人』って言い切る人、英二君以外に何人くらいできるのか、私にはちよつと分からない。

夜風さんも英二君も、自分の才能を使える世界でこそ幸せに生きていける人達だ。

だから、きつと——英二君を夜風さんに渡してしまえば、二人揃って、もう二度と手が届かない高い所まで、酷いところまで、行き着いてしまう気がする。

いっそのこと、夜風さんが”羨ましい”と欠片も思えないようなゲテモノか、私と正反対のタイプじゃなければ良かったのに。

いっそのこと、夜風さんが男の子だったら良かったのに。

いっそのこと……もつと年上か、もつと年下だったら良かったのに。

でも、そうじゃなかった。

だから私は無視できない。

ベンチから去る時も、私は夜風さんに言わずにはいられなかった。

——私達は友達にはなれないよ

『友達になりたくない』って言いそうになった私を私が必死に抑えて、言いかけた言葉

を途中で出来る限り柔らかい表現に言い変えた。

——つて、言ったらどうする？ 演じられなくなる……？

台詞の内容だけでも冗談めかして聞こえるように、付け足しの台詞も付けた。そうして、夜風さんから離れた。

——まとめあげてくれる？ いつものように夜風さんごと

監督が言っていたことを思い出す。

あんなこと言ってたけど……役者の顔してるよ、監督。^{ウツッキ}

「ひと雨来そうですね。夏のこの辺りは天気変わりやすいから」

「マズイですよ、ここ撮り逃がすとスケジュール調整のきかない俳優が出てきます」

「うん、困ったね」

天気を見て、英二くんや監督達が話し合ってる。

嫌な天気。

今にも、南の島特有の豪雨が降ってきそう。

英二君の方を見ると、英二君は既にカメラの前に立っている私に見えるよう、私が欲しい情報を記載した大きな手持ちホワイトボードを抱えていた。

最新の天気予報、降雨情報、現在の湿度、風速。

隅っこには英二君が大まかに計算した降雨開始までの時間も書かれていた。

ありがとう。

目と目で通じ合うとかそういうのじゃない、より多くの情報をよりの確により早く伝え合うために使われる道具。ホワイトボードなどはまさにそれだね。

私には欲しい情報があり、英二君はそれを理解してる。

英二君は検索をかけて、私が撮影してる最中だろうと、ホワイトボードに書いてカメラの裏で掲げてくれる。

互いが互いを理解してるから。

私と英二君の間の情報交換に、齟齬も不足も誤解も無い。

だから、安心して演じられる。

夜風さんの暴走も特に怖くはない。怖いのは、天気の方かな。

映画にイレギュラーは当たり前。

だから撮影は常に巻くべき。

「大丈夫、本番から始めようよ」

演者が私と夜風さんだから、この提案は確実に通る。

私はNGを出さないから、いつ一発本番を撮っても問題がない。

夜風さんは、監督を味方に付けてる。

「じゃあそれしようか。ごめんね二人共、いきなり本番で行くよ！」

ほら。

こうなった。

手塚監督とその手駒よなぎさんの関係を加味した上で、撮影をどう誘導すればコントロールできるかは大体分かってきたかな。

英二君がカメラの後ろで、俳優に傘や雨合羽を配っているのが見える。
大丈夫。

今は余計なところまで気を配らなくていい。

英二君が、私の意図を把握した上でやってくれる。

「夜風さんは、お芝居が好き？」

「うん。好きなんだと思う」

「……そっか、ごめんね」

「？」

ごめんね、夜風さん、英二君。

私は、夜風さんの芝居を全部潰して加工してしまうかもしれないから。

先に、謝っておくね。

夜風さんが目を閉じ、役に入っていく。

友情を代用するなんて本当にできるのか？

できたとして、それで芝居が成立するのかわからない。

でも、別にいい。

この子がトチつても、私がカバーすればいいだけだから。

夜風さんはきつと、嘘を現実にするのを芝居だと思ってる。

でもそれは間違いない。

現実はえてして美しくないから、嘘は美しく加工しなければいけない。

芝居は商品なんだから。

だから私はあなたの芝居ごと、加工しないとイケない。

「全部……全部、私任せなんでもんなあ」

いいよ、それなら。

私の芝居が夜風さんの芝居の上に常に立ってればいい、それだけの話でしょう？

カチンコの、音が鳴る。

「ケイコ、良かった無事で……他の皆は？」

「分からない……夢中で逃げているうちに離れ離れになってしまつて……」

「そつか……ケイコだけでも無事でいてくれて良かった」

予定通り憔悴した様子を演じる夜風さんが、予定通りの台詞を口にして、予定通り私

を嬉しそうな表情で抱きしめる。
うん。

「本当に良かった……カレンちゃんが生きていて」

へえ……すごいな。

ちゃんと台本通り適応してきている。

良かった。もしいつものように暴走されたら、この子の芝居を殺さなければいけな

」

油断した。

夜風さんが、泣いてる。

予定にない唐突な涙。

いつもの夜風さんの演技じゃない。

一瞬前までは予定通り再会の喜びを顔に出してたんだから、普段の夜風さんの演技なら喜びから悲しみへの移行にワンクッションは入れたはず。

あまりにも突然な感情の移行。

さつきまで笑っていた人が、一秒後に悲しみの表情で泣いてたら、絶対にそれを見た観客の人は違和感を覚える。

マズい。

このままでと撮影のバランスが崩れる。

芝居の熱量と湿度のバランスが崩れる。

何か台詞をアドリブで……いや、それよりも。

一回落ち着いて、カメラに映ってない死角にある私の目を動かして、英二君を見る。

”夜風さんの意図したものじゃなく事故”と書いたホワイトボードを掲げてる英二君がいた。

うん、ありがと。

これが夜風さんの意図的な芝居じゃないって分かっただけありがたいよ。

つまりこれは、感情で演じてるだけ、ってことだ。

私も一瞬で涙を流す。

夜風さんより後出しで、夜風さんより速く涙を溜めて、夜風さんよりも綺麗な涙の流し方をして……夜風さんの涙の一瞬を、私が飲み込む。

夜風さんの涙で、私の涙を引き立てる。

そして、夜風さんを抱きしめ返した。

なんとか。これで、なんとかになった。

油断も隙もないなこの子は。

感情で演じるから芝居の温度を勝手に上げたり下げたりする……作品のバランスが崩れる。

元々の予定では、再会を喜んだ二人が、友との再会を喜びながら歩き出していくという、悲劇の中のからつとした希望のシーンだった。

でも、涙を流すなら話は別だ。

”再会” 自体はそこまで重く扱わず、サラッと流して”再会後の再出発”を印象的に見せるはずのシーンなのに、涙を流してしまえば”再会”を重く扱うしかない。

涙を流して再会を喜ぶケイコをカレンがさらつと流せばカレンの観客評価は下がるし、何よりキャラが崩壊する。

カレンのキャラを維持するには、咄嗟にケイコに合わせて涙を流し、「二人は同じ気持ちで嬉し泣きました」というシーンに改変するしかない。

この後のシーンでカレンとケイコの再出発シーンを後にズラした形で入れるか、それともそもそも二人の再出発シーンをカットするか。

脚本の調整を監督と話し合わない。

感動点も増えた様々なローカルの呼び方があるが、感動させる展開のこと。例えば、王道の映画の中に泣ける場所を一箇所作ると、観客は素直にそこで感動し涙を流すことができる。しかし映画一本で泣ける箇所を百箇所も作れば、観客は「はいはい」としか

言わずどこでも泣かない。感動のシーンは少ないと感情が集中し、感動シーンをあまりにも多く詰め込みすぎると白けてしまう。キャラが百人死ぬ映画よりも、キャラが一人死ぬ映画の方が、人一人の死の衝撃は大きい。から、調整も話し合わないといけない？いや、そもそも。

この状況の原因……やっぱり、監督にありそうな気がする。

「カット、OK！」

カチンコの音が鳴る。

よかった。

とにかく、手綱は握れた。

クライマックスのシーンもこうやって手綱握れたらいいんだけど、正直ヒヤリとした。

危なかったかな。

「お疲れ様、良かったよ」

英二君にお疲れ様と相談内容を言おうと歩き出した私に、すれ違いざまに監督が言う。

軽薄な笑顔。

しれっとした発言。

怒った顔は見せないよ。私はあなたにも微笑むだけ。

「私と夜風さん、どっちも煽つてどういうつもりかな？」

返答は無し。

無言は肯定つてことでいいよね。

ねえ監督。作品を無事に完成させる気があるの？

なんだかどつと疲れた。

体じゃなくて、心が。

でも顔には出さないように。あ、英二君。

お疲れ様。さて、なんて声をかけようかな？ 初手でからかうような話題でも楽しい

かも。

「夜風ちゃんびつくりしたよすごかった！」

あんな繊細な芝居ができるなんて知らなか——

え……夜風ちゃん？

夜風ちゃん大丈夫……？ まだ涙とまらん？」

「お芝居の……途中で……カレンの顔が……」

そう、思つてたのに。

私が英二君に声をかけるより先に、夜風さんが、妙なことを言い始めた。

「千世子^{カレン}の顔が崩れていつて。

そこにあつたのはいつもの”天使”の顔で——

あれが仮面……??

ごめんなさい。びつくりしてお芝居を途中でやめてしまった……」

「? お芝居で泣いてたんちゃうの? じゃあどうして」

「……あんな仮面を被り続けている、千世子ちゃんが可哀想で」

——あんな仮面? 可哀想?

今。

夜風さん、私になんて言った? 私の何を、なんて言った?

あんな仮面? 可哀想?

顔を見れば分かる。

私を哀れんでるね。

夜風さんは私に同情してるんだね。

”あんな仮面”を付けてるから。私が可哀想だから。

ねえ、ふざけてるの？

私は足を止めて、振り返り、夜風さんを見る。

鏡を見なくても分かる。今の私は、ほんの僅かにニコリとすらしていない。

抽象的な私の仮面表現。何を見た？ 何を視た？ 何が視えるようになった？

私は芝居の途中に何か変わったことはしてない。隙も見せてない。

なら、変わったのは夜風さんだけのはず。

夜風さんが演技中に急成長した？ 何かのコツを掴んだ？

顔が視えないと言っていた私に対して、深いところまで見えるようになった？

他人の何かの技能を盗んで、それを今使えるようになった？

そうだ、この抽象的表現になる眼は——英二君の。

感覚の眼。

本能の眼。

普通の人間に見える景色とは全然違う、英二君だけに見えるいた人の本質的な部分や深い部分まで見通す、英二君だけが持ってた眼。

ああ、そっか。

持ってなかったはず。

夜風景は、そんな技能は持っていないかったはず。

持っていたのは役者としての天性の才能、周囲を引きずり込むブラックホールみたいな演技、そして極めたメソッド演技という特性だけ。

『異能じみて眼が良い』なんて個性は、本来の夜風景には無かったはず。

だからここまで、私の深いところまで見抜けていなかったんだから。

盗んだ。

盗んだんだ、英二君から。

あるいは……夜風さんを見出したって言う黒山墨字さんや、手塚監督からも。

でもやっぱり、私の深いところまで覗き込んで来たなら、それはやっぱり英二君の眼だ。

私から俯瞰の眼を盗めるなら、英二君の眼だって盗める。そっか、そうだよね。

黒山墨字さんあたりから、デスアイランドで周囲から手当たり次第盗めども言われた？

ああ。

なんでだろう。

私の技能を盗まれるより……英二君の技能を盗まれる方が、癪に障る。

なんでだろう。

バカにされるより、可哀想と哀れまれた方が、癩に障る。なんだろう。

なんで、ただの仮面を”あんな”と言われただけで、こんなに苛立つんだろう。ただの仮面なのに。

実際にある仮面でもなく、私の技能がそう呼ばれてるだけなのに。

ああ、そっか。

私のこの仮面を好きだって言ってくれた人がいたからかな。

私がこの仮面を作るのに、結構頑張ってきたからかな。

人生をかけて作り上げてきた『百城千世子』っていう名前の仮面が、これだから。

こんな風に言われて初めて気付いた。この仮面は、私の誇りだったんだ。

私が人生をかけて作り上げてきた仮面を、英二くんが私の人生ごと肯定してくれていいことを改めて嘯み締めながら、夜風さんを見る。

もしかしたら、睨みつけているかもしれない。

夜風さんほどの程度かは分からないけど、英二君に近い視点を手に入れた。

英二君レベルの才能を完璧に模倣できたとは思えない。

それでも、一部だけでも模倣できたなら十分。

夜風さんは、この世界で唯一の、英二君の最大の理解者になれる。

だって、同じ景色を見ることができるとだから。

……渡さない。

他の誰かでも、英二君を幸せにできるなら、英二君の何もかもを独占してこの業界から消えたって、私に止める権利はない。

親友でも、相棒でも、恋人でも、仲間でも。

英二君が誰か一人を選ぶならいい。

でも。

——…あんな仮面を被り続けている、千世子ちゃんが可哀想で

英二君が夜風さんだけのものになることだけは、絶対に許さない。

このデスアイランドで、夜風さんが私の上に行くことも許さない。

心で演じるあなたが、そうでない私に競い勝つことも許さない。

もしも映画の邪魔になるなら。あなたの芝居は、全て殺す。絶対に。

「監督の言つてた意味が分かった……もう一度やりたい。やらせて下さい」

もう一回やり直したいんだ、夜風さん。

私を見て怯えることもなくなつたね。

私の仮面、そんなに気に食わない？

いいよ別に。

何度でも受けて立ってあげる。

本番なのに、撮影の途中でびっくりしてお芝居やめちゃったんだっけ？

そんな人に、私は負けない。

自分の芝居に自信がなくなるまで、時間が許す限り、叩き潰し続けてあげてもいいよ。

「うわ、来た」

突然に現れる雨音。……ああ、これは駄目だ。

雷が落ちてきて、一瞬で豪雨が降ってくる。

雨粒一つ無かった天候は一気に、地面の表面すら押し流すくらいの雨天に変わる。

これで撮影続けるのは無理だね。

「……今のOKでいいよね」

やり直しはなし。

夜風さんは芝居ができなくなって泣いちゃったって言ってたけど、これ撮り直しできるような時間的余裕はないんだよ。

私は無言のままの夜風さんの横を、微笑みながら通り過ぎる。

「仮面の強度が上がれば上がるほど、千世子ちゃんは孤独を感じないの？」

「夜風さんに同情される謂れは無いかな」

仮面は私の素顔を隠す。

もう仮面が私の素顔になるくらいに、私は『百城千世子』の仮面を磨き上げてきた。

仮面の強度が上がれば上がるほど私は孤独になっていくような気はする。

でも、私を孤独にしない人がいると、私は確信もしてる。

ああ、そっか。

今の夜風さん、英二君と似たようなものが視えてるんだっけ。

だからそんなこと言っちゃうわけだ。

うん、分かった。

英二君が私を尊敬してたり、私に優しくかったりするのって、そういうところにも理由があつたのかな。それを教えてくれたことだけは、感謝してあげる。

雨の中一人でいたら、強引に上から雨合羽を被せられた。

あ。

英二君。

「何してるんですか！ 早く宿泊施設に戻って下さい！」

皆さんに傘などはもう配りましたよ！ 百城さんが最後です！」

「……この雨合羽、英二君のじゃない？」

「俺のは俺のでありますからさっさと宿泊施設に戻って、暖まって着替えて下さい！」

本当に嘘下手だなあ英二君。

愛用の雨合羽とかでもない限り、こんなに英二君の匂いしないと思うよ。

「それとも車回しますか？」

俺は今至急の片付けやってるので、車の暖房でちよつと我慢していただきますけど

……」

「英二君」

「はい、なんですか？」

「私を、かわいそうだと思う？ どんなことでもいいんだけど」

英二君は、すぐに答えた。

「思いません」

考える様子すら見せない。

それは、英二君にとって私がどういう存在なのかを、如実に私に理解させた。

うん。

私は、綺麗でいよう。

私は、凜としていよう。

この仮面はやつぱり、私にとって大切なものだ。

「かわいそう、ってなんかこう。

上から目線気味というか……

恵まれた者が、恵まれてない者を見る時に言われるのが基本というか。

貴族が乞食にかわいそうって言うことはあつても、逆は無いですよね、多分」

そうだね。

「俺、上から目線で百城さんを見たことありましたっけ……？」

……そうだね。

英二君はいつも見上げるように見ながら、怖いくらいに平等だ。

才能が無い人と才能が有る人の評価に上下を付けながら、大体見上げるように見
る。

うん。

大丈夫。

英二君が私を可哀想だと思つてないなら、私は大丈夫。

私は仮面を付けてるから可哀想なんじゃない。

私は仮面を付けてるから誇らしいんだ。

「ないよ。英二君、私をいつも見上げるように見てるもんね」
良かった。

私はまた笑える。

まだ微笑みの仮面を付け直せる。

また夜風さんに仮面にヒビを入れられそうになったら、英二君に笑顔を貰いに来よう。

英二君なら笑顔をくれると、信じておこう。

英二君の車の中に私を置いて、英二君は急に降り出した雨の中走り出す。

雨合羽の中で私が体を丸めると、英二君の匂いがした。

私に着せるまで英二君が着ていたからか、英二君の暖かさを感じる。

暖かい。

「美術監督！ あなた自分の分の傘と雨合羽どこやったんですか！」

「……他の人にやっちゃいました！」

さつさと片付けて戻りましょう！

あつたかい季節と一言ど流石に長居してたら風邪引きそうです！」

「僕の雨合羽使ってください！」

美術スタッフには代わりいますけど、朝風さんに代わりはいないですよ！」

「……すみません、借ります！ ありがとうございます！」

「あーもう、なんで美術の一番偉い人が傘も雨合羽も無しに雨の中片付けに奔走とか！

そういうのは下っ端にやらせとけばいいんですよ！ いい加減立場に慣れて下さい
！」

車の外から、喧騒が聞こえる。

外の小さな声は私には聞こえず、私の小さな声も外にはきつと聞こえない。

雨合羽にくるまって、私は呟いた。

「分かってたつもりだったんだけどね」

心に浮かぶ人は、ただ一人。夜風景。

こんなにも友達になれそうな人と、私は出会ったことはなかった。

なんでこんなに反発するのか。

理由はいくらでも考えられる。

でもなんだか、私が気付いていない別の理由がある、そんな気もする。

私の手が私の頬に触れ、頬をなぞる。

不可視の仮面。

私の顔に貼り付いた仮面。

触れないはずのその仮面をなぞるように、指を動かす。

「私、自分で思ってた以上に、英二君に『これ』を褒められるの、気に入ってたみたい」
夜風さんには分らない。

素顔ですら付け替えられる夜風さんには、分からない。

私はあなたになんてなれない。あなたみたいな好かれ方は、できないんだから。

仮面なき素顔を愛される者は自分と比較し、心無くとも演じられる者は自分と比較した

人の代わりに海に投げ込んだウルトラマンだが、アレも泳ぎが得意なスタッフの手によって回収され、今は別の役割を与えられていた。

そう。

台風が到来した島で、屋外撮影に使うもののあるこれを守る大型シートが吹っ飛ばされないよう括り付けられる、重しである。

やるじゃねえかウルトラマン！

「すげえなウルトラマン……」

雨合羽で俺と一緒に片付けをしたスタッフが、台風の圧力からもシートを守るウルトラマン人形の重さに感嘆の声を出した。

まー分かる。

「ウルトラマン人形と言っても自動販売機ですからね、要は。

中身は機械、重量も十分です。

最近はやカメラも軽いので、大型カメラよりこのウルトラマンの方がよっぽど重そうで

す

ヒーローの立像つてのは、種類にもよるが重い。

立像自体が重い場合も、立像とセツトの土台からキャスターを外すと滅茶苦茶安定感があつて、その重い土台にすっかり固定できたりもする。

基本的に”子供が思いつきり飛びついても倒れて事故が起きないように”つてのがあつから、数十kgの体当たりにも耐えられるつてわけだわな。

中身が機械ならなおさらの安定感。

流石だぜタカトク。この重量、パーフェクトだ。

ここは南の島で、俺達は撮影に使うフィールドと宿泊施設を借りてるにすぎねえ。

倉庫とか持つてるわけでもねえんだ。

となると、一部の撮影に使うだけーもんはどうしても屋外に置いとかなくちやならねえ。建物入り口をそもそも通過できねえからな。

放水車何台も島に持ち込んでこの撮影は、当然でけーものなんかも結構持ち込んでるわけで……そういうのを嵐から守らなくちやならん。

車の中に入れられるもんは車の中に詰め込んで。

人間が個人で持ち運べるもんはスタッフの宿泊部屋に持ち込んで。

どうしようもねえもんはビニール袋やビニールシートで包んで、一箇所にまとめて、

クソデカブルーシートを被せる。

んでブルーシートに重りウルトラマンを括ったり、軽トラのタイヤにブルーシートの端っこを踏ませた上で固定したりする。

やっぱり風が強い時は、ビニールシートの端っこを車に踏ませて固定すんのが中々に効くな……普通自動車免許クソ便利で助かるわ。

俺は声を張り上げて、暴風雨の中片付けしてくれたスタッフさん達に頭を下げる。
「皆さん、片付けお疲れ様でした！」

あの規模の撮影撤収が一時間以内に終わったのは皆さんのお陰です！」

「いや、朝風先生が人間離れして手が速かったおかげっすよ」

「こつちこそ助かりました」

「雨が降り出す数分前までカメラ剥き出しで撮影してましたからね……」

「さつきチェックしましたけど、どれも壊れてませんでした。バッテリー周りは怖かったですね」

「雨ん中を皆で必死になって駆け回るのはもうしたくないですわ」

いやマジで助かった。

俺が動かせる部下の美術スタッフが異例に多い、この撮影じやなきやどうなつてたか。

撮影前に傘とかを俳優の人数分準備することすらできなかつたかもな。

美術スタッフを始めとする、台風風の風雨の中でも片付けをやってくれた数十人のスタッフが、俺の視界の中でホツとした顔をしていた。

今、島は台風に飲み込まれてる。

撮影は中止するしかねえし、明日以降に出る影響がどのくらいになるのかも分からねえ。

恐れてた事態になつちまつた。

急場しのぎにシートで撮影用具を屋外で守ることができるようにはしたが、この人数でもやっぱこの撮影規模だとちつと撤収に時間かかっちゃう。

次に同じことがあつた場合、今回ほど上手く行くかどうか……次は、怪我人が出るか、カメラや照明が壊れるかするかもしれん。

「自分、台風での撤収つて初めてなんですけど、風ヤバイですね」
「そうなんですよね」

そう、それだ。

雨は良いんだ雨は。

カメラの上に傘させば普通に雨の中の撮影成立したりすつから。

上から下に降るだけの雨なら良いんだよ。

だが台風だと、横から風に殴られる。

どうしようとかカメラのレンズは雨粒まみれ、照明や反射板は風に殴られてぶっ倒れ、監督のために置いた折りたたみ椅子は陸地から海の彼方まですっ飛んでいく。

木や看板は倒れて人を下敷きにするし、飛んで来た木の枝が俳優の肌に刺さりや事務所も巻き込んだ大問題、俳優の目になんか刺さって失明でもすりや世紀の大スキャンダルになる。

建物や背景ごと作る屋外セットが、強風でバキバキにされ、一から作り直しになったのを俺は見たことがある。

暴風で木が折れちまって、”かつてその男女が初めて出会った場所で最終回に告白し結ばれる”っていう演出をやるために必要な背景が崩壊して、俺が木一本でつち上げたこともある。

豪雨で地面がぐちゃぐちゃになっちまった上、丘の上から白砂が流れ込んできたせいで地面の色が代わり、「連続するシーンなのに急に地面の色が変わるわけないだろ」ってことで、地面を調整するまで撮影続けられなくなったこともある。

台風つてのは、破壊者だ。

景さんとは違う意味で破壊者だ。

撮影に最適化した森とかも、俺達が調整した部分は全部パア。

また撮影するならもう一回調整し直しになるかもしれない。

この島、地面の土質を考えると、豪雨の後はしばらくグチャグチャになってるところもあるはずだから……乾いた砂か土撒くとかも考えとかねえとな。

「急に来ましたよね、台風」

「南の島近辺だと急にこういうものが発生することもありますから」

「え、そうなんですか？」

ん？ スタッフの中にはそういう認識の人もいるのか。

つか、表情を見ると3、4人はいるな。

台風の発生を”電車が止まるから嫌い”くらいにしか思っただけな人もいるか。

「石垣島・那覇間で発生する台風も定期的にあります。」

那覇・九州間にももちろんあります。

九州南端で発生した台風も事例にはあるくらいですよ」

「はー、マジすか。」

台風にずっと南の海で発生して日本に来るイメージ持っていました。

いつも関東でテレビの台風天気予報見てるだけだと駄目なんですね……」

「確か東京の八丈島の西で台風発生した事例もあったと思います」

「ひえー」

天気予報には俺も気を配ってた。

……けどなあ。

結局のところ、天気予報だけの話じゃねえが、ああいうのは『最大多数のためのもの』にある程度最適化されてんだ。

『本州や東京に来るかもしれない台風』つてのは精密にチェックされ、毎日ニュース番組で情報が流され、台風到達の数日前から警告されまくる。

ただ日本の端っこをかするだけの台風つてのは、それらより扱いが小せえ。

”台風になるかもしれないねえ低気圧”に至っちゃほぼ見る機会もねえ。

「台風になる可能性のある低気圧が突如南東沖に発生しましたー」とか言ってるニュース速報とか見たことねえぞ。

南の島で突然発生するかもしれないねえ台風つてのは、いつ俺達の首筋に刺されるかも分からねえナイフと同じだ……クソツタレが、こんなんどうしろってんだ？

「どうしますか、朝風美術監督」

美術スタッフの一人が、恐る恐る聞いてきた。

「俺も台風の情報はチェックしておきます。

皆さんもチェックしておいてください。

撮影スケジュールの相談は、監督間で話し合おうと思います。

どんな形であれ変更はされるでしょう。何せ、この規模の台風ですから「分かりました。スタッフ間で情報は共有しておきます。」

あ、照明やメイクとか片付けに参加してなかった他のスタッフとも認識は共有しておきます」

「お願いしますね」

助かる。

自主的に動いてくれる、かつ指示に忠実、でも余計なことはしない、つてのは人を使う側に熟達してるわけでもねえ俺には最高の助けだ。

「あの」

ん、どした？ 俺になんか質問か？

「なんででしょうか」

「今進捗7割行つてませんよね撮影。」

今日はもう無理、明日も多分無理です。

台風が過ぎ去るのは明日夜遅くだそうです。

じゃあ撮影再開できるのは明後日から。

……撮影間に合わないんじゃないですかこれ」

「撮影再開は明後日朝からになると思いますが……厳しいでしょうね」

良い勘してるな。

いや、確信はなくて”間に合わないかも”って不安になったただけか？

正解だ。

お前の不安は、的中してるよ。

撮影つてもんが入り組んでるから分かり難いが、カット数にすりや現在の進捗率は68%。

今日が撮影18日目だから、撮影前半にかなり急いでおかげで1日あたりのカット撮影スピードは約3.8%つてとこだな。

ただし。

撮影後半には、早く終わらせられねえ撮影がいくつもある。

俺の概算だと、1カットあたりの撮影にかかる時間は一気に増える。

おそらくカット撮影スピードは、半分の1日あたり1.9%くらいまで落ちるだろうぜ。

仮に20日目から撮影再開するとして、使えんのが11日分。

撮れるカット数が20.9%。

最終的に揃うカットは、当初の予定の88.9%。

まあ無理すりや30日目に95%以上まで行けるかもしれねえが、流石に一割以上が

撮影できねえってペースになると、『絶対にどこかのシーンは削除しないといけない』ってラインになるな。

プロデューサー達の間で、もうどこかは削ろうって話になってるだろう。

今日、18日目の夕方に台風さえ来なければ。

明日の夜まで台風が島を包んでるって、予報で言われてなければ。

多分、確実に1.5日以上は稼げた。

いや、18日目夕方にはややっこしい撮影も予定されてたから、純粋にカットごとかかる時間換算なら、二日分相当くらいにカットは進められてたかもしれない。

そうなってるや、カットの進捗は+3.8%。

無理して頑張りや、30日目にはシーンほぼカット無しで撮影終了、ってとこまで持っていけたはずだったのに。

百城さんがいりやあ、後半急かせばどうにかなってたはずだった。

台風が一回来た時点で、この撮影のスケジュールはもう崩壊しちまってやがる。

こういう風に一日何カットって感じに計算して、撮影ペースを計算して、間に合わないようなら途中で対応策を練る……っていう風に考えんのは、特撮番組でもよくやるやり方だ。

特撮番組だと、ここで別班結成・スケジュールの過密化と加速化・最終手段として新

規外注とかの手段を考える。

ここが西映の撮影で、プロデューサーとかの融通が効くなら、俺は監督複数緊急投入からの撮影二班体制とか色々提案して、監督達に選んでもらってただろうな。

が。

ここはスターズ主催の映画撮影現場だ。

西映とかのフォーマットの撮影はやれねえ。俺は経験で知ってる。

クソがあッー！

いや、冷静になれ。

平成ガメラ三作目なんて「1日3カット余裕ですよ！」で仮スケジュール組んでたのに、1日2カットずつしか撮れず、残り15日くらいで残り90カットとかいうことになつてたじゃねえか。

しかも「え？ 今ウルトラマンダイナの本編撮影と、ウルトラマンガイア第一話の作成開始する予定だから援軍は無理というか……あ、ガメラ撮影から人持つていくね」とかいう状況でだ。

んで裏技の応酬で間に合わせた。

手段を選ばなけりやどうにかする方法は……あるはずだ。あると思う。

そんなハードな状況超えんのが特撮だ。ここで諦めちゃ先人に顔向けできやしね

え。

ほら見ろ。

周りのスタッフが皆不安そうにしてるじゃねえか。

俺が牽引しなくてどうすんだ！

「大丈夫です、皆さん。俺を、俺達を信じてください」

皆を安心させる。

スタッフロールに名前が出るだけのこの人達が、映画の授賞式に影も形もねえようなこの人達が……映画を作る、基礎にして土台。

皆が頑張ってくれりゃあ、間に合う可能性はある。

皆が頑張ってくれなけりゃ、俺や百城さんや監督がいくら頑張っても間に合わねえ。

諦めんなよ。

俺はまだ諦めてねえぞ。

「映画は必ず完成します。

俺を信じて下さい。

ですが完成させるには、皆さんの尽力もきつと必要になります。

皆の力でこの映画を……デスアイランドを、完成させるんです」

皆が雨に濡れたまま、姿勢を正すのが見えた。

「皆さん、今日は休んでいてください。」

先に謝っておきます。

皆さんをこれからこき使うことになりました、申し訳ありません。

これからおそらく、大して休みも取れない終盤戦とその前準備が始まりますよ」
皆が力強く頷く。

男も女も。

若い人も老人も。

新人もベテランも。

フリーも専属も。

照明も、美術も、制作も、撮影も、編集も、録音も、メイクも、助監督も、他にも。
俺達の想いは一つだ。

この作品を、必ず完成させる。皆の力で、最高を目指す。
ありがとよ。

お前らが気合の入ったスタッフであるってことが、何よりも最高の希望だ。

俺も着替えて、考え事をしながら歩いていると。

「あ、おかえり」

「お疲れ様です」

「町田さん、和歌月さん。お疲れ様です。」

配った雨合羽は不快ではなかったですか？ 濡れてなかったらよかったですか？」

「はい、おかげさまで」

スターズのお二人さんだ。

とりあえず今日の撮影中止は、俳優に風邪引いた人も怪我した人も見当たらねえのが、何よりも幸運だと思おうべきか。

じみーに百城さんと合わせられてる女優二人。

ま、他の比較対象が景さんやオーディション組だからってのもあるが……こういう同性同事務所同年代の女優が合わせてくれると、百城さんの負担も減るってもんだ。

良い女優は画面のメインでもサブでも良く映えて、見てて心地良い。

雨なんかで体壊すなよ？

「朝風君は20：30からロビーで軽く会議だつて。監督からの伝言」

「ありがとうございます、町田さん。

和歌月さんはもう着替えたんですか？

今夜の宣伝誌面用インタビューまでは、まだ一時間以上あると思いますけど」

「撮影が台風で中止になったので前倒しです。

インタビューも早くやってしまえるなら早くやってしまおう、と」

「ああ、なるほど」

ほー。

今日は予定されてた撮影が終了したらすぐに、百城さん、アキラさん、和歌月さんがインタビューを受けることになっていた。

このインタビューは映画誌と映画専門サイトのインタビューページに掲載され、宣伝になって映画の成功に直結してくれる。

ありがたえありがたえ。

現在一番人気の若手女優、ニチアサのヒーロー、三万分の一のオーディションを勝ち抜いたとあちこちで話題になった和歌月さんのインタビューだ。

そりゃあ効果は高えつてもんよ。

「聞いてよ朝風君、和歌月さんのライバルって夜風さんだったみたいなの」

「ちよ、町田さんー」

「ああ、それは知ってますが……もう共演もほばないんですね。和歌月さんと景さん」
「……そこは本当に心残りです」

台風が去る頃には、撮影残り日数は1/3になってる。

もう、和歌月さんと景さんが同じ画面に映ることはあっても、目立つようなぶつかり合い共演をするシーンはねえ。

この撮影で和歌月さんが景さんに挑戦するようなことはもうねえってことだ。

「私も挑戦者の気分ですが、夜風さんもまた挑戦者のようで、少し不思議な気分ですね」
ま、景さんにも「百城千世子」っていう挑戦対象がいるからな、今は。
でもなあ。和歌月さんも劣等感だけ抱いててもしやあねえと思うぞ。

「俺が見る限り、完全ノースタントのアクションと演技を両立できているのは2人だけ。
この撮影では、アキラさんと和歌月さんだけです。」

景さんは身体能力があってもちよつと例外ですしね。

「スタントマン要らず」と言えるのはやっぱりアキラさんと和歌月さんだけですよ」
「……朝風さん」

「自信を持ってください」

「自信はありますよ。」

大丈夫です、撮影に支障はきたしません。

でも自信があれば夜風さんに何も思わないというわけでもないんです」

和歌月さんは割り切ったような、割り切つてないような、そんな顔をしていた。

「こうやつて一生繰り返していくのかもしれないね。」

勝ちたい、勝てた、勝てない、と思うということを……私達、俳優は」

そうなのかもな。

でもそう思える俳優を、俺はかっけえと思つたりもする。

町田さんが半目で、嫌そうな顔で髪の毛の先を弄つていた。

「忌々しや伸び代マン……つて感じだね。成長速くて見てんのが嫌なこと嫌なこと」

ん？ あれ、町田さんにもそういう人いたのか、この撮影。

「朝風君の旧友つて時点でもうちよつと警戒しとくべきだったかな、湯島茜」

「え？ あれ、町田さんつて茜さんに何か思うところあつたんですか？」

マジかよ。ノーマークだった。

「あんなに伸びられるとね……」

ほら。オーデイションの時も千世子ちゃんとの共演の時も私司会だったでしょ？

だから見てて成長がよく分かっちゃったのよ。

よく伸びたわ、あの子。

あの分野で伸びてこられると、私はちよつと面白くないなーなんて思つちやうなあ」

「む」

「あー、羨まし。」

私もあのくらい一気に伸びたいんだけどねえ。

ダメダメ、あそこまで急に伸びる気がしないわ」

まあそりゃスターズでみっちり鍛えた人と、大舞台の経験が比較的少なえオーデイション組だと伸び代の量つてのは違いに決まってるわ。

でも伸び悩むと気になるんだろうな。オーデイション組とかの急成長。

スターズ組もオーデイション組も10代だからまだまだ伸び盛りだとは思うんだが。

オーデイション組は撮影を経て格上のスターズを自然と見上げるようになり、スターズ組はオーデイション組の成長に対抗心や嫉妬心を持つようになることも出て来た。

和歌月さんは景さんに。

町田さんは茜さんに。

若狭さんは烏山さんに。

堂上さんが景さんに。

俺が知らないだけで、他にもそういう人はいるかもしれないねえ。

……百城さんと景さんの間にも、それっぽいもんはある。

「町田さんは百城さんなどには対抗心を抱かないんですか？」

「私は自分より上の人間は別にいいや。

千世子ちゃんずつと私の上にいるだろうし。

でも下から突き上げてくんのはハラハラするから苦手なのよ」

「……なるほど」

「新人と格下に追い越されるのが一番胸に来るの、本当に。朝風君には分からないだろうけど」

えー。いや確かに俺には分かんねえが。

新人とか若手とかに追い越された、とか感じたことねえしなあ。

俺はいつも先人の技を覚えて先人を追い越そうとする側の若造だしよ。

正確に理解できてねえ気がすんな、町田さんの”追い越されたくない”って気持ち。

全力で努力すんのは当たり前で、自分の才能に全力の努力プラスして、その結果超えられる人と超えられない人がいるだけじゃねえの？

これ足し算で絶対値を求める数学の問題みたいなもんじゃねえかな。

努力して到達できる能力の限界値って人それぞれに決まっちゃまってるし。

茜さんが絶対的に町田さんより上ってこともねえだろうし、町田さんが羨ましがらるほどのこたねえと思うんだが。

ただ、まあ。

羨んだ相手に本気で勝とうとする気持ちは分かる。

競う相手の上に行こうとする気持ちは分かる。

その気持ちは応援できる。

茜さんに刺激されて町田さんが更に成長としかしたら、そいつはきつといいことだ。

「でもお二人は対抗心から撮影に影響を出さないでいてくださってるので、助かります」
「撮影は撮影ですからね。」

え、というか、私情で撮影を台無しにする人っていらつしやるんですか……?」

「人間ですから、私情はなくせないものだと思いますよ。」

マイティジャック1968年特撮ドラマ。破格の予算、初代ウルトラマンなどで有名なデザイナー、特撮の神様・棘谷英二率いる円谷が制作など、『ウルトラマンではないウルトラマン』が目指されたが、問題が連発し26話の予定が13話で終了した。の主演の方周りの話などがそうですね。

子供向け特撮番組で防衛隊の隊員服を嫌がった当時、子供向け番組俳優のイメージが固定化されてしまうことは、半ば死を意味した。当時の子供向け番組への見下しや風当たりの強さは現在の比ではなく、特撮ヒーローを演じたことでイメージが固定化され、仕事が減る危険性は非常に高かった。これがいわゆる「ジャリ番を嫌がる俳優」である。有名な子供向けヒーローを演じた者が後に他ドラマで悪役を演じ、固定化されたイメー

ジの払拭と、自分の役の幅広さをアピールしようとすることも少なくない。主役マイティジャック主演・三谷英明は子供向け番組に主演で登場しながらも、子供向けの防衛隊の隊員服を着ることを嫌がり、背広での出演でなければ出ないと要求。これは隊員の服や武器の玩具を売り、隊員服などで子供達を夢中にさせたい制作サイドの意向と致命的に噛み合わなかった。監督との溝も深まり、ウルトラマンのデザインを完成させた男が特撮を離れる決定的な要因になった、とも言われる。当時既に大スターの一角だった三谷英明からすれば、子供向けな隊員服や顔を隠すヘルメットは、自分の顔売る機会を損ない、自分のイメージを損なうものだったのではないかと推測されている。の影響で崩壊した撮影ですし」

「ええ……」

おめー、私情抑えられる人ばっかだと思うなよ。

仮面ライダー響鬼の時のメインライターとか、数年後の仮面ライダーディケイド放映時になってから自分のブログで公然とプロデューサー批判しだしたしな。

海賊戦隊ゴーカイジャーとか、過去のスーパー戦隊が皆登場するお祭り作品だからって、ライター同士で殴り合いの大喧嘩寸前の激論になったからな。

「私が執筆したジェットマンのブラックコンドル旧来のファンが安易な復活を望まないくらい見事に死んだ人。復活なんて許せるかー!」「アバレキラー旧来のファンが安

易な復活を望まないくらい見事に死んだ人。やドラゴンレンジャー旧来のファンが安易な復活を望まないくらい見事に死んだ人。の復活やってんだからいいでしょう!」「なんであなたが書いてた作品の死人であれば復活いい、これは復活駄目って分かれてるんですか!?!」とかそんな感じに。

どんな人間とも対立しねえ人間なんていねーしな。

心の中では対立してても、それを飲み込んで作品を作ろうとする人ってのは偉大なんだよ。

「対抗心あっても喧嘩するほどじゃないでしょ。それがプロなんだから」
「町田さん」

「だいつきらしい俳優とのラブシーンもやったことあるわよ、私」

町田さんは嫌そうにしながら、おどけて笑った。

……プロだよな。

嫌いな人ですら愛する人のように扱って、撮影期間中は不快にさせないように愛想よく振る舞って、作品をちゃんと完成させる。

嫌いな人でも、演技の上ではちゃんと愛せる。

本当に愛しているように観客が見えるようにする。

景さんができてねえことで、俺ができねえことで、プロじゃなきゃできねえことだ。

「朝風君は周りを善く見すぎ。

アキラ君はちよつと心配しすぎ。

堂上君は夜風ちゃんに食つて掛かりすぎ。

でもま、千世子ちゃんは千世子ちゃんだから、大丈夫それで良かったわ」

「百城さんは今どこに？」

「あ、それなら私がさつき食堂で見えます。

私とアキラさんと千世子さんでインタビュウを受ける予定ですから」

へえ。

ちよつと様子見てくるか。

景さんと百城さんの衝突が、俺の目にも見えて激しくなってきた。

今のところ撮影に影響はねえ……と思つてえところだが、景さんと百城さんからも話

を聞かなきゃ正確なところは分からん。

時間見つけて会いに行こう。

「お、朝風先生！ 今日もお疲れ様でした！」

「あ、鳥山さん。お疲れ様でした」

「傘ありがとうございました！ お返しします！」

おかげで俺と夜風は濡れずに……俺は濡れずに済みました！」

なんで言い直した？

「あの、なぜ言い直……」

「そういえば星アキラがあなたを探していましたよ、つい先程のことです！」
すげえ。発しようとした俺の台詞が鳥山さんの声に飲まれてかき消えた。

こいつ尊敬した相手の前だと常に大声になってそうだな。

「アキラさんが、ですか。ではちよつと失礼します。」

和歌月さん、インタビュー頑張つて下さい。俺も雑誌買って読もうと思います」

「はい。恥のないものにしようと思います」

「アキラ君によろしくね」

町田さんと和歌月さんと別れて、アキラ君を探すべく俺は歩き出す。

言い忘れてたことがあった、といった様子で、鳥山さんがついてきた。

「夜風にも会いに行つてやつてください」

「景さんですか？」

「あいつ、海に繰り返し飛び込んでたんですよ、さつきまで」

「な、なぜ……？」

「頭を冷やしたかったようで」

「……台風襲来中の海に？」

「台風襲来中の海にです」

あの人一々こえーな！

やめろよお前！

そういうのマジでやめろ！

なんで何やるにしても”他の人ができないこと”してんだお前！

「俺も一人で海に飛び込んでる夜風を見た時は思考止まりました。次見たら止めときます」

「すみません、お願いします」

「あ、そうだ。」

夜風のやつが珍しいこと言ってましたよ。

『台本通り演じられなかったのにOKテイクにされてしまった』と」

「……へえ」

「分かりますか。」

湯島の時と同じだと、頭が冷えた夜風は気付いたんでしよう。

台本通りに演じようとしたのに、そうできず、百城千世子の演技でOKにされた……

あの時の湯島の悔しさと屈辱、やり直したくても許されない憤り。それを感じたわけです」

ややこしい関係になってきたわけだ。

湯島さんは最初に台本通りにやろうとして、台詞どもっちまって台本通りにできず、百城さんのフォローでOKテイクにされちまった。

で、景さんの真似をした。

景さんは台本通りにできず、ゲロ吐いたりとか、途中で泣き出したりとかして、今回百城さんのフォローでOKテイクにされちまった。

だけど、目指したのは茜さんが景さんの前で何度も見せた、『周りに迷惑をかけず演じきる自分』だったはずだ。

『台本通り演じられなかったのにOKテイクにされてしまった』って一言に、景さんの万感の想いと彼女の成長が感じられる。

その一言だけで、伝聞だつてのに景さんの悔しそうな顔が目には浮かぶようだった。

「台本通りにできなかつたことが悔しい、と思うのは、景さんの変化なんでしょうね」「俺もそう思います」

「景さんが台本を壊しても何とも思わない人だと、そう思ってる人もいるでしょうし」奇妙奇天烈な話だ。

景さんは頑張つて台本通りに演じようとしていた。

そのために、百城さんを友達と思ひ込める自分の人格を作るため、懸命に必死に、自

分の全てでぶつかっていった。

百城さんは作品の完成度が損なわれず、それが完成されることを望んだ。

だから百城さんは意外とアドリブみてえな動きや台詞がちよくちよく混ざる。

予定にねえことが起こった場合、百城さんがアドリブで軟着陸させるためだ。

だから百城さんが本当が一番、『予定にないこと』を自分の意志でする気満々でいる。よつて、今日の最後の撮影。

あれは景さんが一番に”予定通りの演技をやるう”としていて、予想を超えに超えてくる景さんを矯正するつもりで百城さんが一番に”予定通り演技をする気がなかった”。

景さんは”途中で演技をやめてしまったが指示された通りにのみ演技し”、百城さんは”指示されていない演技を勝手にやった”ってことになる。

なのに。

『夜風景のせいで予定通りの画は撮れず』、『百城千世子のおかげである程度予定通りに近い着地点に持っていけた』っつー結果となった。

夜風景。

百城千世子。

あの二人は遠く離れてるって意味じゃなく、裏表って意味での正反対。

だから見比べてると、似てるようで正反対な二人に対し、不思議な気持ち湧いてくる。

あの二人が正反対だからって『水と油』だと思ってるやつはそこそこいそうだな。『磁石』なんだけどなあ。

共存できねえ正反対と共存できる正反対、はたしてその違いはどこにあるのやら。

「やはり夜風が百城千世子に劣るとは思えません。俺も少し何かしてみてもいいです」
「お願いします。」

俺もボチボチ余計な小細工する余裕なくなりそうです。

喧嘩なく競い合ってくれれば一番だと思っただけですけど、中々それも難しいですから」
「それは確かに」

「景さんと百城さんが仲良くできないわけないんですけど、どうしてこうなったんだか」
あの二人は衝突しても最後には仲良くなれる。

頭で色々考えても、俺の心がそう言っている。

なーんか仲良くなるのに時間かかっているが、俺の目に見えてねえ、あの二人が仲良くなるのに邪魔になつてるクソヤロウでもいんのか……？

「他の人と見比べているとつくづく思います。」

朝風先生はどこかズレてますね。

特に、競争している人を見ている目が俺達とは違うように感じます」

「そうですね？ なにかあるとすれば、そうですね……」

親父の顔が、頭に浮かんだ。

「俺は一生勝てない相手に、勝ちたくない相手に、絶対に勝ちたいんです。超えたいんです」

親父を超える。

俺にデカい目標があるとすりや、それだけだ。

死人とは競い合うことなんてできねえけど、そこはしようがねえ。

百城さんみたいな映画制作への執着とか、景さんみたいなお芝居がただ楽しいって気持ちとか、ああいうのとは違い。

俺のこの気持ちは、すげえ女優に成りたいっていう茜さんとか、本物に成りてえっていうアキラ君とか、多分あっちの方が近え。

俺はずっと、俺の心の中の親父に挑み続けている。その背中を超えるために。

「俺がその人に勝つ、その時は……」

俺が成長して。

俺が変わって。

俺が俺の中にある想いに打ち勝って、今までにない俺になれた時なんです」

いくら自分の実力を高めても、俺が親父を超えられたと思えたことなんざ、今日までの日々の中で一度もねえ。

他の誰でもねえ俺自身が、親父を超えられてねえと思おうとしている。

俺が、親父を超えたんだと納得できてねえんだ。

納得できねえから、比較がある。

芸術的な映画は嗜好品でしかない娯楽映画に勝ると叫び。

娯楽映画は興行収入が多いから芸術的な映画に勝ると叫び。

私はあの人より優れていると齒ぎしりし。

僕はあの人に劣つてないと拳を握り。

俺があの人を超えただなんて思いたくない、と自分に言い聞かせる。

負けている、劣っている、と誰かが思う限り比較は終わらん。

優越感、勝利の快感、そういうものを求める限り比較は終わらん。

あの人がいると自分の生き方が全否定されると思う限り、その他人が自分の上位互換だと思ふ限り、その人物が自分より下等だと思ふ限り。

人間の心は、自然に自分と他人を比較する。

他人と自分を比較しなくていいのは、『一番』くらいのもんだ。

その異性に一番愛されてる人とか、そのジャンルで一番上手い人とかな。

だからまあ、争ったりするわけで。

「人間は、自分以外の命になれないまま、演技で自分以外の存在にもなれる生き物です」
だからまあ、納得する以外に、この気持ちからは抜け出せねえんだよな。

「役者は、自分以外の何にでもなれます。

でも、できないことはできません。

何にでもなれるけれども、何でもできるわけではない。ちよつと矛盾みたいですよ
ね」

「朝風先生は、俺達役者のことを語る時、少し羨ましそうに見えますな」

「自分以外になれる人なんて、そりや尊敬して当然ですよ」

俺はな、役者には絶対なれねえから、役者が皆羨ましい。

最近、茜さん見てて気付いたんだ。

俺が役者の皆を見る目は、きつと茜さんが景さんや百城さんを見てる目と似てる。
なりてえがなれねえし、なりたいたいも強くは思わねえ。今の自分に納得できてる。

百城さんに全力で挑んで、負けて、悔しい表情じゃなくてすつきりした顔をした茜さ
ん。

アレだよ。

あれが大切なんだ。

あれがきつと、自分の価値観基準で比較して百城さんの仮面を否定した景さんと、自分の価値観基準で比較して景さんの心の演技を否定した百城さんがまだ抱けてねえ気持ち。

比較の果ての、納得だ。

茜さんは景さんとも百城さんとも本気でぶつかって、今の自分の演技と目の前のその人を比較して、そして負けても、納得した。

納得して終わらせた。

もうあの人は劣等感にはそうそう潰されねえだろう。

納得して、感情に一区切り付けてるからだ。

自分の芝居と生き様を全否定してくるような相手を受け入れられねえと思うのも、負けれねえと思うのも当然かもしれねえが……負けを受け入れて進んだ奴は、そういうのとは別になる。

今日の撮影で、そこは見えた。

景さんは百城さんの仮面に納得できず、百城さんは景さんの心を晒すやり方に納得できかねえ、だからぶつかるとしかねえんだ。

少なくとも、今は。

「だから納得しないといけないんですよ。本当は。

俺達にはできることと、できないことがあります。

努力と成長っていうのは、何もできない自分から、才能の限界へ到達するまで旅路です。

他人と競おうと競うまいと、最後に辿り着ける実力の上限は変わりません。

人間は頑張っても裸で飛翔は不可能でしょう？

俺は烏山さんにはなれませんし、烏山さんが俺になることはできません。芝居以外では

納得が大事だ、そいつは分かっている。なのに。

俺は、親父を超えたと自分を納得させられなくて。

業界に残るなら才能に溢れた奴だけにするのが一番だと分かっても、そうは在れなくて。

撮影に危険があっても、予算や時間に制限がある以上それが必要なら撮影は決行しなくちゃならねえと分かっても、そうは割り切れてなくて。

一番何もかもにも”納得”できてねえのは、俺だ。

「他人と自分の比較を終わらせられるのは『納得』だけです。そういうものだと思いますよ」

親父が死んでからずっと、俺は俺と親父を比較してる。

納得できねえ。こんなんでも納得できるか。

”これだけの実力があれば親父が俺の代わりに死んだ意味はあつた”と俺が思えるくらいの実力にならねえと……納得できるわけがねえ。

こいつは俺のケジメで、俺が今でも最高の職人だったと信じてる親父に捧げる、最後の手向けの花なんだ。

少しだけ、話が終わるのを待っていた。

待っている時間は、苦にはならなかった。

英二君が話している相手は、武光君、アキラ君、プロデューサーとコロコロ変わって、彼と話そうとしている人が何人もいたということが分かる。

ま、この台風だもんね。

英二君と話していたアキラ君と合流して、インタビュールに出て、夜風さん達の交流会の枕投げの参加を断って、まだプロデューサーと英二君が話してるのを確認して。

人が途切れたのを確認して、私は彼の前に現れた。

「百城さん」

「少し、話そつか。今時間大丈夫？」

「大丈夫です。百城さんはインタビュもう終わったんですか？」

「そうだね。今夜風さん達の枕投げ大会を断って、部屋に戻ろうとしていたところ」

「枕投げ大会……？」

英二君が怪訝な顔をした。だよね、そういう反応が普通か。

私もどうなんだろうとちよつと思つたから大丈夫。

屋内連絡通路を通つて、英二君に割り当てられた部屋にお邪魔する。

部屋の中で男の子と二人きり。

普通、私は女優なんだから、警戒しないといけない場面。

でもまあ英二君だし？

こんなに安全な男子もそう居ない。

性欲が無いというわけじゃなくて、英二君は極端に社会性が高いだけだけ。

社会性が低いとちよつとした性欲でもやらかすけど、その女の子を凄く好きになつちやつてたとしても、社会性が強いと相手の気持ちを考えたり後々の問題とかを考え、ぐつと踏み留まってくれたりする。

それが、信じられるってこと。

私は英二君が私をどのくらい好きかは把握してるつもりだけど、その上で英二君が何もしないだろうと確信してもいる。

私が”誰のものにもならない百城千世子”の価値を重んじて、大切にしている限り、この人はその価値を永遠に守ろうとしてくれる。

その部分を疑ったことは、一度も無い。

「ちよつと聞きたいんだけど、いいかな」

「何でも聞いてください。何でも答えますよ」

なんでもとかそんな気軽に言っちゃいけないと思うな、私は。

なんでもやるとかも気軽に言っちゃいけないと思うよ、私は。

「英二君は、女の子に恋をしたことはある?」

空気が、変な感じになった。

英二君が目をパチクリさせる。

恋愛っていうものを概念的にさえちやんと分かってない朴念仁はこれだから困る。

恋っていうのは……こう。

死んだら一緒に双子に生まれようねとか、男女で約束するやつだよ。

恋愛以上の関係まで望んじゃって、今生では無理だけど来世には遺伝子レベルでその

人と完全に同一になってみたいとかちよつと思つちやうくらいのやつ。

そういうあれが恋だよ。多分。

ま、私にもお付き合いの経験なんて無いけど。それは脇に置いておこう。

うん。

草加雅人は乾巧を心底嫌いつつ心底信賴していた

物事には、表と裏がある。

ここ数年の仮面ライダーのスーツに使われてるテクニックもそうだ。

俺はあんま関わってねえが、完全に関わってねえわけでもねえ仮面ライダージオウで年末年始に登場予定の仮面ライダーウオズ。

あれはベーススーツを銀色に設定したものの、アクションもさせてえたためにスーツ背面を伸縮性に富むストレッチ素材に換装してある。

『他人に見える前面の見栄えを良くして背面をいじる』ってのは、和歌月さんとかの制服の背面を弄った俺の技術を成立させた概念でもあるな。

物事には、表と裏がある。

目に見えるものにも。

目に見えねえものにも。

目に見えるもんだけが全てじゃねえが、俺達人間は、自分に見えてるものしか見られねえ。

そいつを、時々難儀に感じる。

アキラ君を見つけて、烏山さんと別れた。

烏山さん曰く「そろそろ夜風が着替え終わつた頃だと思うので」とか。

景さん達と何するつもりだあの入。

アキラ君が俺探してた理由を聞いたら、一回様子見に行くか？

「お疲れ様です、アキラさん。俺を探していたと聞いたんですが」

何用だ、アキラ君。

「お疲れ様。朝風君……少し、聞いてもいいかな」

「なんででしょうか？」

「朝風君は基本的に仲良くしてほしいんだと思う。」

千世子君と夜風君の二人に対してもそう思つてる、これは合つてるかな？」

「合つてますね」

「その上で、多分あの二人が仲良く出来る理由があると思つてる。これは合つてる？」

「合つてますね」

「そうか。やっぱりか」

うーむ。

そんなに分かりやすかったか俺。

いやアキラ君だからよく分かってんのか？

「僕には分からないんだ。君には何が見えているのか。教えてくれないか」

「俺の私見ですよ？」

「君の私見を僕は信用してる」

うっわーこっ恥ずかしいけど嬉しいこと言いやがってこのこのこの野郎。

つつてもな。

俺は自分で何か判断する時に自分を信じるようにしてるだけで、他人様にガンガン広めて行けるような絶対的に正しい話なんて持ってねえんだが。

まあいいか。

「あの二人は磁石なんですよ」

「磁石？」

「そうです。どこか似てて、正反対にもなつて、反発したり引き合ったりもする二人です」

「似てる……？ すまない、僕にはあの二人は正反対に見えるんだが」

「だから正反対で真逆で、その上で似てるんですよ」

アキラ君が首を傾げる。

なんつーか、ややこしいんだよな、あの二人。

「アキラさんもあの二人は正反対に見えるんですよ。」

「ということはあの二人は、『いかなる役者の演技も同じようにできる』わけじゃないんです。」

『極めて汎用性の高い一つ演技』があるだけなんですな。

道具を十本持つてるのではなく、道具十本分の万能ツールを持っている感じでしょうか。

できることがあり、できないことがあり。

能力に長短があり、個性がある。

だからこそ正反対に見えるわけです、全能や万能だと無能以外に正反対がいまさら」

「ああ、分かる。確かにそんな感じだ」

「本質的な話をすれば——」

景さんと百城さんは、完全に違うと言えば完全に違う。

この上ない類型と言えばこの上ない類型だ。

「——あの二人は、『自分にしかかなれない』同類で、重ならない平行線でもあります」
「え？」

どんどん感覚的な話になっていくが、アキラ君の感受性で理解できるまで、なんとか言葉を重ねてみつかかな。

「でもですね。」

『自分にしかなれない』のに、あの二人は『自分以外にもなれる』んですよ。

あの二人の演技に見飽きるこつてないでしょう？　いつも多様ですよね？」

「……それは、確かに」

「百城さんは『百城千世子』という自分を一貫させます。」

景さんは自分が『夜風景』であることを完全に忘れます。

でもそのために、百城さんは『百城千世子』という女優でない自分を捨てました。

そして景さんは、自分を捨てながら過去から新しい自分を表出させます。

自分を捨て、自分が自分であるという部分を一貫させ、自分という商品を完成させる。

多分前回の衝突で、二人共強烈に反発しながら、それを部分的に理解したはずですよ」

「二人は自分を捨ててるのに、自分らしい……？」

お、そうそう。俺の目にはそう見えんだよな。

「部分的に見ればあの二人は正反対なんですよ。」

でも、総体としては似てるんです。

……俺も、確信を持ってそう見るようになったのは最近ですよ。

十円玉の裏表も『正反对』ですけど、二つを見比べると違う所はあれど似てるでしょう?」

「それは……そうかもしれないが」

正反对の似た者同士。

違うのに両立する矛盾の二対。

だからこそ俺は、夜風景と百城千世子が高め合った時の可能性に期待せずにはいらねえ。

「俺はこのデスアイランドに参加した24人の役者全てと話し終えました。

世間話や何気ない雑談もしました。

皆さんの好きな映画なんかも聞きました。それを思い出してたら、ふと気付いたんです」

「何をだい?」

『ローマの休日』を好きな映画に挙げてた人、景さんと百城さんしかいないんですよ」

「……え? 本当に?」

「見たことある人なら多いんでしょうけどね。

好きな作品を数個挙げた時にあれが入るのは、二人だけでした」

俺も好きだぞ、ローマの休日。

現在の恋愛映画の祖。

21世紀のこの時代の恋愛主題作品なら、影響を受けてねえことはありえねえってレベルの名作。

男女の出会い、ボーイ・ミーツ・ガール、出会はずがなかった二人の恋愛っていう、恋愛映画の教科書みてえな古典の1953年映画。

あれの新聞記者でしかねえ男が、高嶺の花の王女様を見る色んな気持ちの混ざった気持ちは、不思議とうつつすら共感できる。

”見上げてる”からかね？

「勘ですけど……」

あの二人はいくつか好きなものを挙げれば、その内の一つが重なるタイプだと思いうです。

違いは多く、挙げた好きなもの全てが一致することはないでしょう。

でも、その中の一つ……何か一つを一緒に好きになつたりする、そういう正反対かど「勘？」

「はい、勘です」

あの二人は、同じもんを好きになれる。

好きな演技も、選ぶ演技も、生き方に据えた演技も正反対でも……同じ作品を好きに

なって、同じ作品のために全力を尽くせる。

直感の話でしかねえけど、俺はそう確信してる。

「断片的に聞いた話なんですが……」

ちよつとはぐらかし気味に言う。

二人の昔の話をペラペラ喋るのはなんか気が引けた。

「百城さんも景さんも、昔色々あつたみたいなんですよね。」

百城さんは横顔を見られるのが怖くて。

景さんは現実を見るのが怖くて。

映画の世界に没頭して、おそらくその時に、強い個性を得たんだと思われま

「個性……」

「あの二人、多分周りの現実や自分を心底嫌いになった経験があるんだと思います。」

そしてその時の想いを今も忘れてはいない……幸せでなかったことを覚えてるんですね」

「……え？」

「現実逃避の繰り返しですら素晴らしい演技の肥やしとなる。それが芝居の世界です」
役者の人生に起きた出来事は、プラスでもマイナスでも、芸を富ませる。

『……ではないどこかへ行きたい』

『嫌いな自分とは違う何かになりたい』。

『今の自分を忘れて、別の人生を生きたい』。

これが、とても優秀な役者を作り上げる原動力になる。

正反対の人間でもそうだ。

「前はどこかで朝風君が言っていた……未知の感動と、既知の安堵、だったかな」

「夜風さんと百城さんの演技の傾向ですか？」

はい、あの二人はその解釈がピッタリはまっていく対の二人ですね」

「ああ、やはりそうなのか。だからあの二人は、周りにも認められるんだな……」

景さんの演技が百城さんの個性を、百城さんの演技が景さんの個性を引き立て、相互にその強みを明確化する。

俺が感覚的な話や概念的な話をしたことがある人なら、アキラ君みたいに生来感受性が低い人でも、自らの演技を際立たせていく景さんと百城さんを見て、肌身に染みて理解する。

ぶつかり合おうが、手を取り合おうが、競い合おうが、二人は高め合う。

できれば仲良くしてほしいと思うし、そのためならなんだってするけどな、俺は。

特撮で言えば、皆が何度も見てきた王道の展開をするのが百城さん、視聴者の予想を派手に裏切った展開で驚かせるのが景さんだ。

単純にタイプで分けるとそうなる。

「あの二人は、似てるけど似てません。

同じような部分があっても完全無欠の正反対です。

以前に、現実から逃げるように映画に没頭し……

百城さんは自分の外面を捨てて、『仮面』を得て。

景さんは自分の内面を捨てて、『メソッド』を得ました。

そして『役者』になったんです。普通の女の子から、役者に」

ふと、普通に話してるつもり俺の声に少し熱がこもっていたことに気が付いて、抑える。

「周りを見て、周りにどう見られているかを気にして、究極の汎用になった百城さん。

究極の汎用ゆえに、彼女が見せる役の形は『百城千世子』の一つのみ。

自分の内に潜り、自分の過去と側面を見つめて、究極の特異になった景さん。

特異な個であるのに、彼女が見せる役の形は『与えられた役』全て。

でもですね。

それは現在そうであるだけなんです。あの二人の可能性は、そこに留まらないんです」

「……!? あの二人はあれでまだ、成長の余地が？」

「そりやもう、たつぷりと。」

十年先、二十年先も見据えれば、あの二人の伸び代は本当に途方も無いくらいですよ。あの二人の能力があればこの業界にも長く残ると思います。

となると、どこかでぶつかっていた可能性は高いので、ここでぶつかったのは幸運……

とまでは言えませんが。

友人と友人が仲良くないってのは見ててあんま気分良くないですし。悩ましいんですよね」

一つ一つ挙げりや、不倶戴天の大敵で。

総体として見りや、『なるかもしれない』自分かもしれないねえ、そんな相手。「作品のために自分が捨てられる。」

自分を心底嫌う、という気持ちはまだそこに原動力としてある。

現実の醜さと、作り物の世界ならば美しくできることを知っている。
映画好き。

本質的に自分にしかかなれず、自分以外というものを外面か内面に貼り付けている。

正反対のままこれ以上の同類な人っていないもんですから……こりやもう、運命でしよう」

負けたくねえとか、勝ちてえとか、あの人の技が欲しいとか。

俺が親父に対して抱いた気持ちみてえなもんを抱ける、同年代同性同業のライバルがいてくれるんなら、それがきつと人を成長させる。

それは、幸運なんだ。

ライバルを得られなかったとびつきの天才が、一人ぼっちのまま高め合うことができなかったことが、歴史の中にいくつあったことか。

出会いに恵まれる。

人間にとって、それ以上の幸運なんてあるわけねえ。

景さんは黒さんに、終さんに、百城さんに出会い。

百城さんはアリサさんに、アキラ君に、景さんに出会い。

俺も、色んな人と出会った。

出会ってきた人達が、送ってきた人生が、俺達をそれぞれ違う人間に仕上げた。

そんな俺達皆が力を合わせて作るからこそ、映画は『総合芸術』なんだよな。

「百城さんと景さん。二人が出会えた運命と幸運を、俺は心底喜んでるんですよ」

おう、知ってるか、星アキラ。

てめーを見てると、俺は何度でも思い出すんだ。

「この世界で仕事してる時、隣に信頼できる友達がいるってこと以上の最高は、無いです

から」

” 出会えてよかった” っと思える、同年代同性のダチを得られた、この幸運をな。

「羨ましいよ」

だから羨ましそうな顔すんなって。

「君にそう言われるあの二人が。互角にぶつかれるあの二人が。認められる、あの二人が」

悪いな、本当に。

俺はなんつーか……アキラ君と茜さん、百城さんと景さんを褒める時、その言葉にこもってる熱意が違うらしくて、そこは本当に悪い。

それを許してくれる、受け入れてくれる友人を得られた幸運を、いつも俺は感謝してる。

『理解者』。

俺達の心を支えてくれるもの。

景さんと百城さんが今ぶつかってるのは、二人が互いを理解し始めてるからだ。

あの二人はきつと、俺じゃ絶対になれねえ『女優としての理解者』に、互いになれる。そう思えるから、俺はあの二人に仲良くしてほしいんだがな。

「羨ましいで終わらせちゃ駄目ですよ。」

同年代ってことは、ずっと一緒の画面に映り、助け合い競い合う同業者なんですから」
「ああ、そうだね。僕も君が信じてくれる限り……頑張らないと。うん」

アキラ君ほど『納得』で色んなことに折り合いつけながら、『本物になれない自分』に『納得できない』ままにいる人は見たことがねえ。

だからこそ、俺は支える。

俺もまた、納得できないものを抱えながら生きてるから。

百城さんは、景さんは、一体どんな『納得』を迎えるのか。

それとも、何も『納得』しないまま、撮影の終わりを迎えるのか。

正直言つて俺にも分かんねえが……それでも、いい結末であつてほしいと思う。

仲良くなつて撮影が終わつてほしいというか、いい気持ちで撮影の終わりを迎えてほしいんだろうな、俺は。

対立ENDよか、友情ENDの方がいい気持ちで終われる。

あの二人がどこか幸せな気持ちになれたなら、俺も同じように幸せだ。

「それにしても」

ん？

「千世子君と夜風君の友好関係を『作る』ことに失敗した君を見ると……」

君が万能なのは基本的に物作りだけだと思えて、なんだかちよつと安心するよ」

うるせーな。

……うるせーな！

笑ってんじゃねえ！

「何気なく思ったけど、僕ら千世子君と夜風君の名字と名前の呼び方逆だね」

「……あ、本当ですね。」

「そういえば、俺心の中での二人を」

『千夜物語コンビ』

「って呼んでるんですよ。アキラさんもそう呼んでたりしません？」

「いや、それはないかな」

「……あつ、そうですか」

「どうか千世子と夜風で千の夜のアラビアンナイト千夜一夜物語。アラビアンナイト。狂った王シャリヤールは夜な夜な女性を闇に呼んでは、朝になると殺していた。」

それを止めるべく王の下へ向かったのは大臣の娘・シエヘラザード。夜に王に呼ばれるたび、シエヘラザードは一つの物語を紡ぎ、王の心を惹きつける。そして「今日のお話はここまで。明日の夜にはもつと素晴らしい話を」と締めくくる。千の夜を越え、シャフリヤールとシエヘラザードは結ばれ、そして……って安直な……

あれ、アラビアンナイトって千夜一夜じゃなかったっけ？ ドラえもんの時に見たよ
うな」

「現在残ってる最古のアラビアンナイト写本は9世紀の『千と夜の物語』なんですよ」
「へー」

「300年後くらいには『千一夜物語』になつてたそうですけど」

「1増えたんだ。なんで……？」

「なんででしょうね……？ 最初は千夜個ちよこの物語だったんですが。

そういえばアラビアンナイトを古い時代の芝居と見る人もいるらしいですね。

シエヘラザードのそれがもう、多くの人物を演じる芝居に通ずるものだからとか」

「そういえば朗読俳優というのもいたね。どこかのパンフレットで見た覚えがある」

「途中からはシエヘラザードの妹が姉のサポートに入りますからね。

主演と助演と見るか、俳優とサクラ運営側、主催側が仕込んだ、俳優の言動や行動に合わせて反応を見せる客のこと。と見るかは人によって変わりそうですけど。

あれは解釈次第では最古の『演劇で人の心も国の運命すらも変えた逸話』とも言えるんです」

「へえ……」

「百城さんと景さんはですね……千どころじゃない物語を紡げると思ってるんですよ俺……」

「君もうすっかりただのファンじゃないか」

結局最初から最後までアキラ君と『千』と『夜』の話をして、別れた。

アキラ君と話していると、俺の頭の中で色々整理が付く気がする。

多分あれだな。

この上なく気楽に話せるのと、アキラ君に理解してもらうために自分の頭の中で理屈を捏ねくり回すからだ。

インタビュールに向かったアキラ君を見送り、アキラ君と話してる間にスマホに来ていたラインを確認した。

「あ、プロデューサー。」

そっか、石垣さんも言ってたが今日ならいるのか……

台風が来たから島から東京に戻る船も無くなったのか……?」

プロデューサーに呼び出され、雇われの身で逆らえる道理もなく、とつとつと行く。

とつとと行く太郎。

嫌な予感しかしねえ。

現場の人間から見ると頼りになるのは計画的なプロデューサーで、やりやすいのは好きにやらせてくれる適当なプロデューサーで、一番やり辛えのはスポンサーの意図を汲むのに現場には結構厳しい有能なプロデューサーだ。

具体的に言うと、作品の出来を犠牲にして路線変更させに来るプロデューサーだ。このプロデューサーはそういうことやる。

台風が来たこのタイミングで呼び出されんのは嫌な予感しかしねえ。

そう思つて、行つたんだが。

「夜風景つて子外してもいいんじゃない？」

「俺はそれに領けません、プロデューサー」

「千世子ちゃんとの共演に不安があるらしいじゃない？」

「……ないわけではないですが」

「露骨に口喧嘩とかの衝突してないって言ってる人もいたけど……」

正直、ちよつとでも不安要素あるなら要らないんだよね、こういう新人。

そもそも入れるほどのメリットある？

そこまで現場に無理させる価値と能力無くない？

この映画は百城千世子のための映画だよ。邪魔になる新人がいるなら除外すべきでしょ」

クツソ、誰から聞いた？

手塚監督か、助監督か？

いや、ここの撮影のスクリプターとか、スターズ事務所のデスクアイランド担当事務もこのプロデューサーとは仲が良かったはずだ。

情報ソースはどこからでもありそうだな、クツソが。

景さんの好き勝手とかが許されてんのは、ここの現場の暫定トップが景さんの味方の手塚監督だからだ。

だがその上にはプロデューサーがいる。

プロデューサーの明確な意見ともなると、真つ向から反抗できんのは、スポンサーがプロデューサーと同格レベルに尊重し配慮してる百城さんくれえだろう。

このプロデューサーには、景さんを映画から蹴り出す権利が、そうでなくても景さんの見せ場を全部取っ払っちまえる権利がある。

景さんは前から百城さんが好きじゃねえとまで言ってたが、今はもう可哀想と言うまになっちまってる。

百城さんは景さんの演技が合わねえと思ってたらしいが、今はもう景さんの心の演技

を顔を合わせたところで否定し、景さんに貼り付けたような微笑みが見せられねえ時まで出て来た。

改善する可能性はある。

この先どうにかなる可能性はある。

だが、現段階じゃ、スタツフの中にも若干不安を感じてる奴も数人はいるってことだ。

「だから僕個人としては、この夜風景って子は要らないと思うわけさ」

「俺は映画の完成度のために、反対したいところですけどね」

「台風が来たんだよ。もう予定通りには無理だ」

つーわけで、このプロデューサーは、景さんから見りやなんか偉いメガネのオッサン程度の存在だろうが、俺から見りやデスアイランド初の“景さんを蹴り出そうとする人”である。

「最悪、この子の出番全部カットしてクライマックスまで調整対象に入れてもいいかも」

「なんとかします。もう少し待つてください」

「いいけど、監督とは色々相談するよ?」

「はい、構いません。その時は自分も呼んでください」

「あんまりねえ、こういうのはやりたくないんだよね。」

出番減らすくらいに留められたらいいんだけどさ。

ほら、君の顔も立てたいし？

アリサさんがあだから、撮影に支障出るようなら対処しちゃうのが鉄板なんだよね」

「……恐縮です」

プロデューサーが俺のこと気遣ってんのは分かるんだが、「夜風景要らなくない？」感がひしひしと伝ってくるの本当に嫌だな。

撮影も終盤だが、スタンスが分かってきた。

プロデューサー、手塚監督、俺。多分他の裏方スタッフも。

俳優陣の中ですら、まだ対立軸はある。

俺は窓外を見た。窓外には、皆の意見を別方向に向かせた台風。クソが死ぬや……クソう。

意見がバラバラなままじゃ撮影は続けらんねえ。

バラバラのままなら一番権力強えプロデューサーの意見が通る。どうすつかな。

プロデューサーに変な印象与えないように、かつ景さんの心証を上手い具合に改善しようとして会話を続けて言葉を尽くしたが、全く上手くいかん。

時間だけがただ無駄に流れる。

あー！

俺にはトーク力がねえー！

「じゃ、また後で。20:30、忘れないでね」

「はい、また後で」

プロデューサーと離れ、歩きながらちっと思案する。

どうすつかなー。

手塚監督推すと、景さんの出番減らされねえかもしれないが百城さんに不利になる。

プロデューサー推すと、百城さんがやりやすくなつて、景さんの出番がなくなる。

何より、誰の味方するにしても、この台風の影響で脚本かスケジュールを大幅に変えなくちゃならねえから……脚本削つて安全策か、脚本削らねえで無理するかになるんだよな。

せめて今が18日目夜じゃなくて17日目夜だったら、と思わずにはいられねえ。

誰か腹案持つてりやなあと思うが、さてどうなるか。

ん？

あ。

「百城さん」

笑顔で小さく手を振つてこっちに来る百城さん。今日も綺麗だな。

百城さん達のインタビューはもう終わったのか。
ちよつとプロデューサーと長く話しすぎたか？

この陰りのない素敵な笑顔が俺の判断を狂わせる。魔女だなこの人は。

「少し、話そつか。今時間大丈夫？」

「大丈夫です。百城さんはインタビューもう終わつたんですか？」

「そうだね。今夜風さん達の枕投げ大会を断つて、部屋に戻ろうとしていたところ」

「枕投げ大会……？」

え、いや待って待て。

何やってんの？

何起こつてんの？

どういふことだよ!?

景さん達の枕投げ大会に百城さんが誘われたつて時点で意味分かんねえよ!

「ちよつと聞きたいんだけど、いいかな」

聞き返そうとしたが、聞き返す前に聞かれちゃった。

こういう風にされると、俺は自分の疑問よりも百城さんの疑問を優先すると分かつて、こう言う風に聞いてやがるんだこの人。

俺の手綱が握られてる感強え。

「何でも聞いてください。何でも答えますよ」

「英二君は、女の子に恋をしたことはある？」

え、なんじゃそ……ん？

この問い、百城さんらしくねえな。

発言の裏を読むべきか。

恋？

恋。

こういう事聞かれるとちつとドギマギする。

変な回答して失望されたくねえなあ。

職人として、この人の期待に過不足なく答えてえ。

「英二君が惚れ込むのって、横から見てると分かるようで分からないんだよね」

惚れ込む？

ははーん。

よし、大体分かった。

「もしかして、さっきの俺とアキラさんの会話聞いてましたか？」

百城さんが目を少しだけ細めた。

当たりか。

俺が”惚れ込んだ”二人の話。百城さんと景さんの話。

そして、二人が好きだったというボーイ・ミーツ・ガール映画の『ローマの休日』。か細いヒントから、正解に辿り着いたぞ。

つまりは、そういうことだ。

恋をしたことがあるか……その発言の裏を読む。

そして、百城さんが俺に求めている答えと言葉を探し出す。

百城さんに認められたままでいるにはそれっきゃねえ。

さっきのアキラ君との会話を聞いていた。

とすると、百城さんと景さんの比較の話。

二人が正反対でありながら同類だって話だよな。

恋。惚れ込む。恋つてのは俺が惚れ込んだことの婉曲的表現か？

ここから総合的に推測するに、百城さんが俺と話そうとすること、俺に言われて嬉しいであろうこと……それは、俺が百城さんに惚れ込んだ部分？

景さんと被らない百城さんの特別性。

よし、多分これだな。

「仲良くしてほしいのも本音です。」

似ていると思ったのも、正反対だと思ったのも本音です。

ただ、百城さんに無理をしてもらうつもりもありません。

仲良くなれないと思っただなら、ストレス抱えてまで無理に歩み寄る必要は……」

「夜風さんいたら私要らなそうな気がしてきそうだよ。英二君はどう思う？」

何言い出すんだこいつ、思春期か？

「似ているところはあっても、結構違うと思いますよ。」

というか全然違いますよ。

景さんの芸幅がいくら広がっても、百城さんと差別化はできるんじゃないでしょうか」

「あんなに似てるところがあるって言うてたくせに」

「百城さん。ダイヤモンドが綺麗だからそれだけで価値があるとしても思ってるんですか？」

「……え」

「ダイヤモンドは綺麗で希少だから価値があるんですよ。」

綺麗なだけの大量生産品のガラス製品の価値は低いです。

希少なだけの石ころも価値は低いです。

綺麗で希少。だからこそ他よりも高い価値がある。

あなたはこの世に一つだけの“百城千世子”という美しい宝石だから価値があるん

です」

「疲れてるんでしようね。ちよつとその辺座って休んでてください。今お茶入れます」
「……うん、ちよつと、疲れてたかもね」

疲れてんのかなこの人。

疲れを顔に出さねえから疲れ度合いが本当に読めねえ。

でも、主演だ。

茜さんや景さんの暴走、監督の好き勝手を修正しながら、俳優の中で一番多い撮影と一番多い出番をこなしてんのがこの人だ。

疲れてねえわけがねえ。

せめて俺は、友人としてこの人の心休まる時間を”作って”やらねえと。

せめて俺は、友人としてこの人の心休まる時間を”作って”やらねえと——あたり

かな、今の英二君の思考は。

それにしても、”百城千世子という美しい宝石”、か。

うん。

うん。

英二君は私の内心を深いところまで理解してるようで、時々全然理解してないけど、理解してないままこういうこと言ってくれるのが嬉しい。

もーしよーがないなーとしか思えない自分が悔しい。

「こういう時、英二君はアキラ君みたいな気遣いの人じゃなく気遣いの人だっと思うよね」

「え？ あ、あの、すみません、何か気分を害してしまっただでしょうか」

「ううん、嬉しかったよ。」

英二君の優しさも感じられたし。

私の思わせぶりなだけの台詞に対する返答としては100点じゃないかな」

相手の心の表面を深くまで理解して、乙女心の裏面を全然理解しないまま、相手のことを深く思ってた言葉が表にも裏にもヒットする。

これはキチガイって言っていていいと思うんだよ、英二君。

英二君の目に私がどう映ってるのか、一度この目で見てみたいよね。

アキラ君いわく、何かでイラツとしても許せてしまつて、翌日になつたらもうほとんど忘れてしまえるのが友達関係というものだとか。

それは男友達特有じゃないかなアキラ君、と思つたりもする。

私は結構根に持つし、一度覚えたらもう忘れないから。

「とにかくですわね。

百城さんは今のデスアイランドでは自他共に認めるNo. 1です。

変なこと言つてないで胸張りましょう。

明後日から再開でしょうから、明日はゆっくり休んでおいてください」

英二君に言われたことも忘れない。

英二君が夜風さんに言ったことも忘れない。

だから分かることもある。

今日まで頭の中でこつそり取つていた統計で、今、私への称賛の言葉の数が、夜風さんへの称賛の言葉の数を超えた。

統計は嘘をつかない。

純然たる数字だから。

その結果は粛々と受け止めればいい。

今まで飲み込んでいなかった気持ちを、今まで飲み込めていなかった気持ちを、今な

ら少しずつでも、飲み込める気がした。

「したかった話なんだけど、撮影の方針でちよつと話したいことがあつて」

「俺で話し相手になれるのなら、喜んで」

「クライマックスはカットして、全体を調整して別のクライマックス考えた方がいいかもね」

「え」

「私と夜風さんのクライマックスが要らないかなつて話だよ。分かつてるよね」

あ、ちよつと意表を突かれて驚いた顔した。可愛い。

「今日、露呈したよね。」

夜風さんに『ケイコ』は完全には演じられない。

私を友達だと思えないから、途中で演技すら辞めてしまう。

台風で予定日数が削れた今、夜風さんのために余分に使ってあげられる時間はないんだよ」

私は売れる作品を完成させないといけない。

台風が来た以上、これまで予定されてた撮影全てをキャンセルして、無理して撮影スケジュールを詰めないといけない。

どこかのシーンを削らないと、撮影がギチギチになってしまう。

一度の失敗すら許されない撮影スケジュールは、俳優にもスタッフにも緊張感を与えてしまうために、最悪の場合緊張のせいで連鎖的に撮影が失敗する可能性もある。

そもそも、撮影期間を無駄に長引かせたい人なんてほとんどいない。

だからほぼ全ての撮影現場でのスケジュールは、最適なスケジュール配分で最高効率の時間の使い方をし、極力最短で撮影を終わらせるようになってるんだよね。

短縮の余地はほとんど無い。

だって、スケジュール組み上げた時点で無駄は極限まで省いてるんだもんね。

ならそれ以上に無駄を削るなら、余裕を極限まで切り詰めて、休む時間も減らして、失敗してやり直す余裕が無い中、他のスタッフや俳優が絶対に失敗しないと信用して撮影する必要はある。

そこに、あのアクシデントの塊みたいな夜風さんが加わる。

夜風さんが加わると、作品のバランスが非常に崩れやすい。

作品のまとめまりが悪くなると、夜風さんの演技の良さと作品全体の出来の悪さが両方に付きやすくなってしまふ。

夜風さんが作品の出来を犠牲にして自分らしい芝居を完遂してしまふ。

映画が、夜風景の引き立て役になってしまふ。

「彼女の演技は良かったが作品の出来は良くない」と評論されかねない。

私は、それが怖い。

しかも夜風さんは、撮影の2/3が終わりそうなこのタイミングでも自分を制御できていない。

私との共演中に、それも本番撮影中に勝手に芝居をやめたばかりだ。なら、もう。

私と夜風さんによるクライマックスの撮影は、極大のリスクでしかない。

夜風さんは、どう頑張っても私を『友達』だと思えないからだ。

私のことを好きになれていないからだ。

であれば、『カレンとケイコ』を演じることは絶対にできない。

……傷付かないわけじゃないけど、私が顔に出さなければいいだけのこと。

百城千世子は、夜風景に何を言われても、表情を動かすこともない鉄面皮。

そう振る舞わないと。

第一、先に夜風さんの演技を否定したのは私だ。

撮影のことを考えれば言わなければ良かったのに、言わずにはいられなかった。

我慢、できなかつた。

だからこれは、きつと私の自業自得なんだと思う。

そう思ってもやっぱり、私と夜風さんのクライマックスはカットしないと、と思う。

「三幕構成分かりやすく言うと、起承転結の類の脚本構成の一種。設定、対立、解決の三幕によってストーリーを構築する、映画を中心に使われる脚本作成技巧。デスアイランドの場合キャラと舞台についての説明で『設定』を観客に理解させ、デスゲームによって登場人物達が『対立』し、最後にカレンがデスゲームの本拠に突撃することで『解決』される。が成立しませんよ」

「大丈夫じゃない？ 英二君だって分かってるよね」

「……」

「ケイコはただの映画オリジナルキャラクター」。

特に何の活躍もせず、次々起こる理不尽に翻弄されるばかりの脇役。

そんな脇役の唯一の見せ場が、クライマックスで“カレンを庇って死ぬ”こと。

じゃあそれカットしても何も問題無いんだよね。

三幕構成なら『ケイコ』は別に要らない。

だって第一幕と第二幕で全然目立たず、何もしてないんだから。

三幕でだけ目立たせる必要性はないよ。

第一原作にいないオリキャラでクライマックスって、それだけでファンの心証悪くなるよね？」

クソつメチャクチャ正論吐きやがって、みたいなこと考えてそう。

作品の良さを損なうことも言いたくない、でも夜風さんの味方もしたい、けれど私のことも大好きだからその意見を否定したくない……英二君の思考は、読むのに慣れれば凄く分かりやすい。

「手塚監督の妙な采配は、ここに来て裏目に出たのかもね」

「……確かに、景さんの役は、ここまで大きな役目は何も果たしてませんが……」

「じゃ、除外しちゃってもいいよね。」

クライマックスつて極論私だけでも成立するんだよ。

原作ではカレン一人でやってたシーンだから、ケイコがいなくても問題なし。

クライマックスごと削除しても、夜風さんの役割だけ削除したっていい」

「うっ」

「私は作品をより良く、絶対に完成させたいんだ。知ってるよね」

そう、英二君は知ってるはず。

私の望むものを。

その上で作品のため、夜風さんのため、作品に参加した皆のため、私のため、英二君はできる限り全員が納得する結末を模索する。

だいたいこういう時は、私が譲るか英二君が譲るかして、譲った方が相手に合わせてなんやかんや力合わせて……って感じになる。

さてさて。今度はどっちが譲るかな。

私に譲る気は全く無いけれど。

やっぱりこの作品をより良くするならば、夜風さんもオリキャラも削って台風に奪われた日程を取り戻すしかないと思うんだよね、私は。

「一つ、百城さんに確認なんですが」

「なーに？」

「景さんとの共演自体をやりたくない、ってわけではないんですよ」

「そうだね。私の今の提案は、作品の質を上げるための改良案でしかないかな」

「共演自体はやってくださると思っただいんですよ。無理強いはしたくないです」

「その方が作品の質が上がるならそれでいいよ。」

私は夜風さんとの共演もしっかりやる。頭もちゃんと冷やしてきたからもう大丈夫」

「ああ、良かった。一つ懸念が消えました」

そう、私はプロだ。

熱くなっても、ちゃんと頭冷やして、ほんの僅かにでも撮影に悪影響を与えないようにする。

嫌いな人と共演ができないようじゃ、女優はやれない。

個人的私情で撮影現場に悪影響を与えることは許されない。

許せない芝居とも共存しないといけない。

私達は、役者だから。

それでも私と夜風さんがどっちも譲らなかつたら、私は作品のために夜風さんの芝居を加工しようとして、夜風さんはそれが間違つてないと信じて私の仮面を砕きに来るだろう。

だから、クライマックスはできない。

できないはず。

なんで、英二君はそんなに夜風さんを信じられるんだろう？

なんで、いい結果になるはずだと信じてるんだろう？

そんなに……夜風さんのことが好き？

「景さんは、友情と友達を代用してまで、百城さんを友達だと思おうとし、失敗しました」
「結構ナチュラルにとんでもないことするよね、夜風さん。あれあんまり好きじゃないかな」

「友情というものを、心ごと玩具にしてるように見えましたか」

「その解釈で合ってるでしょう？」

「景さんは百城さんと同じだったんですよ。」

今日の夕方の共演、あの瞬間、景さんと百城さんの心は一つだったんです」

「……う？」

心が一つだった？

私と夜風さんが？

どこが？

何が？

「百城さんはあのカットの撮影、作品の完成のため、真摯で誠実でした」

「うん」

英二君は私のことをよく見てくれている。

「景さんもまた、作品のために真摯で誠実でした。」

あの人が百城さんを好きになれないまま友達だと思える自分になろうとしたのは

……

作品を完成させたかったからです。

周りに迷惑をかけたくなかったからです。

百城さんに迷惑をかけないようにして、一緒に台本通りのものを作り上げたかったか

らです」

「え」

……そして、夜風さんのこともよく見ている。

「あの人は自分勝手ゆえに失敗したんじゃないんです。

作品と百城さんにしつかり向き合おうとした結果、失敗しただけなんです。

夜風さんはさつき、台本通りに演じられなかったことを悔いていたみたいですよ」

「台本通りに演じられなかったことを悔いていた？ 夜風さんが？」

「はい」

私に対する『可哀想』ばかりが印象に残っていたけど、そんな気持ちもあつたんだ。

……そっか。だから、夜風さんは、私に。

「景さんはまだ付け焼き刃の心でないと百城さんを友達だと思えないんだと思います。

そんな状態で、心を造ってでも、友情を代用してでも撮影を成功させようとしたんです。

す。

本気だったんです、あの人は。

真摯で誠実だったんです、あの人は。

百城さんを不快にさせたことはきつと良くなかったんでしょうけども、俺は肯定して

あげたい」

「ああ、そういう思考で動いてるんだ、あの人……私全然理解してなかったんだね」

「友情というものに対して誠実だったのではなく、作品と百城さんに対し誠実だったんです」

あーもう。

英二君は本当にもう。

他人の良いところを理解できる言葉に言語化して好感度上げるの、やめてほしい。

夜風さんの色んなこと許して、私まで好ましく思ってしまったそうになる。

「それは百城さんが何よりも望み、何よりも尊んだものじゃないですか」

「……うん、そうだね」

私を好きな人は大勢いる。

そういう風になるように、私はこの仮面を作った。

フアンという存在が私を好きな人と定義するならば、私はとても多くの人に好かれて
いるんだと思う。

でも、私を好きな人はいても、私に対して誠実な人はあまり多くない。

お金を稼ぐために私と契約したり仕事したりする人達の中にすら、私に誠実でない人
はそこかしこに結構多いから。

ううむ。

悔しく思いつつも、納得しちゃう。

英二君が夜風さんに惚れ込んでる理由が分かっちゃってしまうのが悔しい。

「景さんの心を信じられないと考えるか。」

景さんの能力が最高の映画に相応しいと信じるか。

この問題はその二つの選択肢があるからこそであると思います」

「そうだね」

「俺としては、助け合い、信じ合い、最高の共演と最高の結果が見たいところなんですけど……」

「じゃあ、私に『お願い』しないといけないんじゃないかな」

「今、ちよつと迷ってます」

「？」

「俺がお願いしたら、百城さんは頑張つてそれに応えようとしてくれてしまう気がして」

うん、よく分かっているね。

私達がぶつかつてゐるの見たせいで、君はそのお願い言えなくなつちやつたわけだ。

分かりやすい生き方してるなあ、私の友達は。

「台風でスケジュールがギチギチになる可能性が高いです。

となると、百城さんの負担も一気に増します。

プロデューサーも監督も、百城さんの出番を減らすことはしないでしよう。

俺としては百城さんの負担を減らしたいんです。そう思うと、やつぱり……」

本当に分かりやすい。

「英二君は、このクライマックスを予定通りにした方が良いと思ってるんだよね」
「ぶっちゃけ、ここ原作では漫画だからカレン一人でも映えたんですよ。」

主人公が敵本拠に向けて一人走るシーンですから。

でも映画だと、ここで一人死ぬくらいじゃないと展開がのっぺりしちゃうというか。

典型的な”そのまま実写にしてはいけなところ”なんだと思うんですよ。俺の私見ですけど」

「……うん、それはそんな間違っていないかな」

「となると、映像として映えさせるにはまた百城さんに負担がかかりそうです。」

百城さん一人のクライマックスやるにしても、別のクライマックスでつち上げるにしても」

「私なら大丈夫だよ?」

「……それなら俺は。」

このクライマックスという重荷を、景さんと百城さんで半分こしてほしいわけです」
「なんだかなあ、もう。」

想われてるなあ、私。

夜風さんもこの一連の台詞聞いてたら、また何か違うかもしれないのに。

英二君に信じられて、信じられた上で予定外の何かをして信頼を裏切って、でも英二

君が裏切られたと微塵も思っなくて、夜風さんは今も信じられてる。

今もまだ、英二君は夜風さんがクライマックスで最高の芝居を見せられると信じてる。

数時間前、本番中に勝手に芝居を止めて泣き出した人を、信じてる。

私はプロ。

私は百城千世子。

頭を冷やせば、冷静にメリットとデメリットを計算できる。

夜風さんはもう、使うにしても使わないにしても大きなデメリットを伴う人だ。

だから、私の判断基準にするべきことはシンプルだ。

夜風景を信じられるか、信じられないか。

その心を信じないか、その能力を信じるか。

私が一度決めたことを信じるか、英二君を信じるか。

可能性を信じるか、リスクを避けるか。

台風が日程を削った以上、何かを選ばないといけない。

「夜風さんが暴走してまた日程を潰す可能性を英二君が考えてないわけないと思うけど

……

そこんところどうなの？ 怖くないの？ どう思ってるのか、ちよつと聞きたいか

な

「今日、芝居を途中で止めた景さんですら扱いきつてみせたじゃないですか。信じてます」

「あー、もう。」

私を全力で助ける気満々のくせに、そういうところは全部私任せなんだから、もう。裏方の英二君はどうしてもそうするしかないから、歯がゆく思つてそうな気がする。信じてる、か。

確かに今日、私は夜風さんの予想外の動きも何とか加工できた……それをクライマックスでも同じようにできるかどうかは、私にも分からない。

……ああ。

そうか、私は、不安だったんだ。

夜風さんの芝居を全部加工してしまうことができるか、少し不安だったんだ。

夜風景というかなり大きなリスクを選ぶか、クライマックスの消滅か大幅改変というそこそこ大きなリスクを選ぶかという選択で、夜風景というリスクを選びたくなかったんだ。

「俺に百城千世子を信じさせてるのは、今日までのあなたが積み重ねてきたもの、全てで

す」

だから英二君が後押ししてくれて初めて、一つ覚悟を決めることができた。

冷静に。

冷静に、リスクとメリットを天秤にかける。

夜風さんとのクライマックスを残すデメリットだけじゃなく、メリットも冷静に比較する。

女優わたしが撮影の場所で考えるべきなのは、目の前の人を好きか嫌いじゃない。

目の前の人を信じられるか、信じられないか。それだけ。

私は夜風景を信じられるか？ その心の在り方を、その能力を。

心はいらない。私は彼女にそう言った。

心を制御できない、心がなければ芝居ができない、そんな欠点さえなければ、きっと彼女は女優の理想像の一つだろう。

私じゃなれない、理想的な女優の形を体現できるだろう。

けれどその心は本当に不安定で、信頼なんてできたものじゃない。

その心に関する部分さえなければ、と惜しく思う。

能力だけなら、信じられる。その能力の高さにはもう疑いようがない。

なら、私は、夜風さんを――

枕投げを抜けて、千世子ちゃんの部屋に向かった。
夜風さつさと戻ってこいよ、という声を背中に受けて、一直線に千世子ちゃんの部屋
に行く。

「……」

ノックしても、返事がない。

「部屋にいない……?」

千世子ちゃん、なんて言ってたっけ?

——ごめんね、今日疲れちゃった。部屋戻るね
部屋に戻る、って確かに言ってたはず。

千世子ちゃんの部屋じゃない?

じゃあ誰の部屋?

困った。

千世子ちゃんの部屋じゃないなら、誰の部屋に戻ったのか分からないわ。

「ふう」

自動販売機の横のベンチに腰を下ろす。

近くの窓を見ると、台風の豪雨が窓を叩いていて、静かな廊下では雨音しか聞こえなかった。

少し、自問自答を始める。

千世子ちゃんに会う前に、何を話すか考えておかないと。

手塚監督は言っていた。

千世子ちゃんはスタツフの想い、大衆の期待、費やされた時間・労力・金額の全てを背負って、そのために天使になったって。

英二くんは、まるで千世子ちゃんを理解するための参考書みたい。

撮影のたびに起こるトラブルに対応して、撮影に間に合わせるために超特急で仕事をしている内に英二くんは、ああいう速くて汎用性のある腕を手に入れたんだと思う。

なんとなく、見てて分かった。

千世子ちゃんも同じだ。

英二くんと同じ。

環境が、今の千世子ちゃんを作った。

今もみんな、千世子ちゃんが『天使』であることに感謝して、その力に助けられてる。千世子ちゃんの仮面の奥に、仮面が見えた。

カレンの仮面の下には百城千世子っていう仮面があつて、その奥に……その奥に、素顔はちゃんとあるの？

全部仮面だつたら、つて考えると。

私は怖くてたまらない。

千世子ちゃんが椅子で仮眠を取っているのを見たことがある。

仮眠から目覚めた千世子ちゃんは、いつも通りの千世子ちゃんだつた。

でも、あれが仮面だと分かつた今、私にはそれが怖くてたまらない。

”百城千世子”の仮面を付けたまま寝て、”百城千世子”の仮面を付けた状態で起床する癖を付けるまで……どのくらい、練習したんだろう。

”百城千世子らしい寝ぼけまなこの演技で起きる”癖が付くまで、どのくらいやったんだろう。

私には分からない。

ああはなりたくない。

なれつて言われてもきつと無理。

あんな千世子ちゃんを、どう思えば良いのか分からない。

でも何故か、千世子ちゃんに対して私が一番強く抱いた想いは、『可哀想』だった。
ねえ。

あんな風にならないと、撮影を支えられないのに。

あんな風にならないと、出演作品全てを売れる作品にできないのに。

一番身軽に飛び回ってるように見えた天使が、一番多くの重荷を持つてるのに。

なんで周りの人は、可哀想だと思わないの？

私は思う。

仮面が、顔が、あんな風になってしまいうまで千世子ちゃんが頑張らないといけないことを、可哀想だと思う。

何かしてあげたいと、そう思う。

せめて、重荷を代わってあげられたら。

せめて、仮面を外して素の千世子ちゃんですぐに休める時間も作ってあげられたら。

せめて、仮面じゃなくて、その奥の本当の千世子ちゃんが皆に褒められるようにできたら。

でも、私は不器用だから。

千世子ちゃんの仮面を壊してしまいうくらいの気概で、思いつきりぶつかって行くしかない。

あの心さえ隠してしまう仮面は、まかり間違えてしまえば、千世子ちゃんを一人にしてしまう。

そんな、気がした。

勘だけど。

仮面を壊したいっていう手塚監督の願いに、ようやく共感できるようになったわ。

今になって思う。

あの人が本当に壊したかったもの、本当に見たかったものは、なんだったのかしら。

「あ……英二くん」

私が気付くと、彼も気付く。

台風の中ずっと片付けしていた英二くんが、いつの間にか帰って来てたみたい。

ベンチに座ったまま、私は彼が歩み寄って来るのを待った。

「どうも、景さん。雨で体は冷やしませんでしたか?」

「大丈夫。さつきまで体動かしてたから。英二君もお疲れ様」

「ありがとうございます」

台風の中、俳優を先に帰してずっとお片付けしていた英二くん。

本音を言えば、お疲れ様と伝えて早く休ませてあげたい。

でも今の私は、今日千世子ちゃんと初めて一対一で共演した私は、英二くんに聞きた

いことがたくさんある。

「英二くん、聞きたいことがあつて——」

あの仮面があまり好きになれなかつたこと。

千世子ちゃんを可哀想だと思つた理由。

仮面の上に仮面を重ねて、本当の自分をどんどん孤独にしていってしまひそうな千世子ちゃんに不安を覚えたこと。

色んなことを話した。

胸の内にある気持ちを全部片つ端から言つた。

英二くんはその全部を受け止めて、彼らしく応対してくれた。

「英二くんは、辛いことも苦勞することも背負わされてる人を、可哀想だと……」

「思いません」

……そうなの？

「俺はあの人の戦友だからです。」

あの人の重荷は俺の重荷です。

俺はあの人の重荷であり、あの人は俺の重荷です。

互いに対して寄りかかりあつてゐるから、そうなるんです。

可哀想だと思つたことはありません。誇らしく思つたことは、何度もあります」

戦友。

「もちろん景さんとも戦友です。」

どんなに厳しい状況も、力を合わせて乗り越えていく戦友です。

いつでも寄りかかってきてくださいね。俺はその重みを喜びますから」

「ええ。気が向いたらそうすることにするわ」

胸を叩く英二くんにも、とても、とても頼り甲斐を感じる。

「でも、よかった」

「何が？」

「本当に良かったです。」

景さんのその選択はきつと正しいと思います。

初めてじゃないですか？

景さんが百城さんのことを理解するために知っていかうとしたのは」

「え」

「最初は百城さんと共演しよう、って気持ちだけだったんですね。」

そして途中から、『ケイコ』を演じるために友達になろう、って思ったんですね。」

景さんはそうして今、百城さん個人のことを知ろうと、そう思い始めたわけです」

「……うん、そう。私は、気付いたの」

「百城さんのことを全然知らないということに、ですよね」

こくりと、私は頷く。

「黒さんはあれで有能な人です。」

本当に大事なことは断片的にでも教えてるはずです。

知らないものを知ろうとし、知ること喜びを得て、役を富ます。それは……」

「……『不知の知』?」

「そう、それです。流石ですね、自分で気付きましたか、景さん」

時代劇のエキストラで撮影をやった日に、ちよつとだけ柊さんと黒山さんが言っていた、あの時の私が発覚的にしか分かってなかったもの。

不知の知。

私は今日、千世子ちゃんのことを全然知らないということを知った。

私の知らない私がいるように。

私の知らない千世子ちゃんもいる。

人間の内側にはたくさん側の側面があつて、私のことすら全部は知らない私が、千世子ちゃんの全てを知っているわけがないんだわ。

「百城さんの仮面と重荷を理解し、それを当然のものだと思わず……」

優しい心で、自分らしい結論を出す。そんな景さんと友人であることが、少し誇らし

いです」

「……大袈裟だわ」

「大袈裟なものですか」

いや絶対大袈裟だわ。

だって私、こんなに恥ずかしいもの。

頭の中を、私の心を、感情を、カチカチと切り替えて照れそうになる私をどこかにやる。

「嫌いな相手の苦労を見た時の感想は『ざまあみろ』。

どんな形でも好ましい相手の苦労を見た時が『可哀想』でしょう。

悪人の苦労にざまあみろ、子供の苦労に可哀想、と言うように。

百城さんの仮面の一端を見た時から、多少ではあっても、景さん好意的じゃないです

か？」

「——あ」

「可哀想、って言葉には多少なりと対象の未来の幸を願う気持ちが入りますからね。

同情ってそういうもんです。

百城さんを絶対に好きになれないと思つてた時と、今の景さんは違うように思えま

す」

私は私自身が気付かない内に、千世子ちゃんに対する感情を変化させていたらしい。英二くんがそれを教えてくれる。

「『可哀想』は……」

『好きになれる』と『好きになれない』なら、『好きになれる』寄りの感情だと思いますよ」

——私、千世子ちゃんのこと好きじゃないんだと思う

手塚監督にああ言ったのは私なのに。

あれは、間違いなくあの時の私の本音だったのに。

いつの間に私は、千世子ちゃんに対して持っていた感情を変えてしまったんだろう？

「あまり時間は取らせません。少しお話ししましょうか」

英二くんが、ベンチで私の隣に座る。

「千世子ちゃんのこと、教えてくれるの？」

「はい。百城さんのことが知りたいなら、俺が知る範囲で簡潔にお教えしますよ。」

今なら以前の景さんとは違う受け止め方もできると思います。そうですね、まずは

……」

英二くんはとても誇らしそうに、「最高の戦友」について語り始める。

この人に、こんな顔で語られる人間になってみたいと、ふと思った。

「出来れば仲良くしてほしいですけど……」

それができないなら、せめて仲間として、同じ場所を目指してほしいです」

英二君／英二くんにそう言われた。

だから、自分にできる範囲でそうしてあげようかと、ちよつと思つた。

でもあの人が私を嫌うなら、少し難しいかもしれない。

英二君と別れた後、外の雨足を確認してから、室内に戻つた。

もうそろそろ英二君達がロビーで話し合いを始める時間で、気が早いプロデューサー

は英二君が行く前にはもう話を始めているかもしれない。

少し早めに、ロビーに向かう。

「脚本変えるしかないですね。」

クライマックスのこのシーン。

夜風さんだっけ？ この子との共演なくせば？

元々原作にもなかったシーンでしょ、これ変えちゃいましょう」

「！……あはは」

プロデューサーの声が聞こえる。

相手は手塚監督かな。

外で台風が暴れてるせいで、雨音と風音が少しうるさく、遠くから聞こえてくる声が少し聞き取りにくい。

声がる方向へ、私は進む。

「何言ってるの、ダメですよプロデューサー。クライマックスなくしちゃうなんて」

「そもそも原作にない展開をクライマックスにつてファンからの印象悪いですし。」

これ以外方法な——」

「駄目だ！」

わっ、

手塚監督の怒鳴り声だ。

初めて聞いたかな、手塚監督の怒鳴り声。

昔は「そういう監督」だったらしいけど、もうずっと熱の無い監督でやってたらしいのに。

沈黙が広がる。

誰も言葉を発しない時間が流れる。

ロビーに足を踏み入れるのは、ちよつとやめておこう。

少し様子を見てからの方がいいかも。

私の視点からも、手塚監督の地金と思惑を見ておきたい。

「だってほら！……ここ感動的なシーンじゃない？ 僕気に入……」

「監督」

監督が並べようとした与太を、プロデューサーが途中で遮る。

「らしくないですよ。」

急に脚本変えたり、夜風さんをキャストイングしたり、何考えてたのか知りませんが。

あなたの仕事は拘りを追求することじゃない。

売れる作品を完成させることです。

そんなの釈迦に説法でしょう。どうしてしまったんですか監督」

「……そうですね」

監督は納得する様子を見せて……あ。夜風さん？

「私と千世子ちゃんのシーンなくなっちゃうんですか」

プロデューサーが、なだめるような口調で語りかける。

「……ああ。見せ場削られるの悔しいのは分かるけど、こればかりはね」

「違う。まだ私、何も出来てない」

——何もできてない。そうだよ。ここでクライマックスまで削られたら、夜風さ

んがそう思うのは当然だよ。

ああ。

もう。

なんで。

初めての映画の時の私と同じ気持ちまで、なんで。

私が初めての映画の撮影に臨んだ時、撮影が終わったところで私も同じことを思った

よ。

何かしようとして。

沢山プランを立てて、やりたいことをリストアップして。

でもしようとしたことは何もできなくて、私は“何もできなかった”って少し悔しい

思いをしながら、オールアップを迎えちゃった。

そうだ。

そこで、悔しい思いをした私が漏らした言葉を英二君が聞いてて。

——何もできてない？　あなたは頑張つて、俺は見えました。ちゃんとできてたじゃないですか

そうだ。英二君はそう言つて……思い出しながら、つい笑っちゃう。

英二君、そういうところは全然変わつてないんだなあ。何年経つても。

夜風さんも同じこと言われそうだね。

何もできなかったつて夜風さんが落ち込んでたら、英二君はすぐ励ましに行きそう
だ。

でも、分かるよ。

その悔しさは分かる。

だから。

「よくあることなんだ。天気には勝てない」

「……監督。私、千世子ちゃんと演じたい。今度は必ず——」

「だめだよ」

夜風さんの援護をするような言葉を、夜風さんを援護するようなタイミングで言いな

がら、私もここで皆の会話に加わった。

「最小限のリスクで最大限の利益を……でしょ？ 余計なリスク背負えないよ」

夜風さんの言葉を否定するような紛らわしいタイミングで言ったのは、ちよつとした意地悪。

このくらいのいじわるは、この妬ましい気持ちに免じて許してほしい。

「主演が一番分かつてるね。」

そうだよ、僕達の仕事は売れる映画を撮ること。時には諦めることも必要」

「うん。台風だろうと何だろうと、このシーンは撮らないとダメだよね」

「え……」

ごめんねプロデューサー。

プロデューサーが言ってることの方が正しいよ。

このクライマックスはカットした方がリスクは減らせると思う。

でも、もしも、夜風さんが、私が思う以上に、英二君が思ってる通りに、結果を出せたなら。

これまでのどの芝居をも超える会心の演技を見せられたなら。

デスクアイランドを、傑作にできるかもしれない。

「後2日早ければ改稿のしようもあつたかもだけど、もう遅いよね」

「いや……」

「三幕構成くらい守らないと流石にお客さん騙せないよ」

「でも、千世子ちゃ……」

詭弁使つてる自覚はあるよ。

だからプロデューサーは私の主張に一理あるとすら思つてないし、全く納得してないしね。

でも納得してね。

スポンサーが私をお気に入りにしてるから、私の意見はあんまり無碍にはできないでしよ？

私はもう一度、私かなれない形の女優としての芝居を見せるこの人を……ほんの少しだけ、この撮影の間だけ、信じてみたいと、そう思つたんだ。

私にできない芝居は、私には生み出せないもの。

私にできないことを夜風さんがやって、夜風さんにできないことを私がやる。

それは夢物語みたいな理想論だけど、それができたら、きつと一番理想的だから。

「私なら巻けるよ。全然間に合うよ。撮ろうよ」

英二君がいる。

私も覚悟を決めた。

なら、大丈夫。

台風で潰れた日程の分の遅れは、私を取り戻す。

「……」

不思議そうな顔で、夜風さんが私を見ている。

「誤解してるよ夜風さん。」

私は売れる作品を作るためなら何だってする覚悟があるだけ。この場の誰よりも
さ、夜風さん。

「嫌だつて言っても最後まで付き合つて貰うよ、夜風さん」

どう答える？

「……うんー」

この問いを投げかけて、夜風さんが肯定の返事を返した時点で、私も腹を決めた。

夜風さんの目を見る。

嫌だ、なんて気持ちは欠片もない。

私との共演を嫌がる気持ちもなく。

私への敵意もなく。

何故か夕方にはあつたはずの、私を可哀想と思う気持ちも薄れていて。

私に対する敬意と、私と共に作品を完成させようとする決意が見て取れた。

私は夜風さんを誤解してたのかもしれない。

この目ができるなら、もうちよつとだけ強く、夜風さんを信用できるかも。

”好きになれない人とも頑張って共演してみせる”と夜風さんが頑張ろうとしているのなら。

私も一人の女優として、あなたと同じ頑張りをしてみせる。

あなたと同じように、”好きになれない人と友達であるかのように”手を取り合う努力をしよう。

好き嫌いが基準でなく、信用できるかどうかを基準に考えて、相手に合わせる。

どうしても合わない相手でも、自分から合わせていこうと努力する。

英二君が0円で怪獣スーツを作らなければならなかった時の撮影で、やり方が全然合わない監督に合わせて、最後にはあの監督の信用を得たように。

私も、頑張ろう。

最悪、私があなたを好きになれないまま、あなたが私を好きになれないまままで構わない。
い。

私達は、同じものを好ましく思い、同じ作品を完成させようとする、戦友だから。

夜風景さん。

あなたが作品作りに真摯に、誠実に在ろうと知っていることを知った今。

私はきつと、あなたのことがまだ好きになれないけれど、嫌いじゃない。

奴らは俳優でないがために（ノット・アクターズ）

18日目夕刻、夜風と千世子の初一对一共演撮影、台風襲来。
んで現在、19日目朝。

俺達は台風がうるせえ屋外とはうってかわって静かな部屋で、話し合いを始めていた。

「では今後の方針を考えましょうか」

司会進行はチーフ助監督。

話に加わりながらホワイトボードとかを運んで来る他の助監督、上座に座ってる監督にプロデューサー、照明やら編集やらにスタントマンの代表といった各部門のトップ、ついでに百城さん……といったメンツが席についてる。

さーて。

こっつからが面倒臭えんだこっつからが。

「朝風さん、何が重要だと考えてますか？」

「無駄省くだけでどうにかなるもんでもないですね。

根本から改造が必要だと思います。

スケジュールは全部見直し……それでもやっぱキツいかと」

元々のスケジュールだって、スターズ人気若手12人集めた時点でクツソギチギちなスケジュールだっただろうが。

いやこっから更に加速ってキツくね？

「一人ずつ意見か腹案があつたら言っていきましょうか。ではまず自分からお、アクション監督。」

各俳優のアクションシーンの責任者視点ではどう見える？

「英二君と前に話しましたが、ここの島の土質はこうなってます。」

参考元は役所が三年前に公開した資料です。

するとですね、この豪雨の影響が一部ちよつとマズいです。

地面がぬかるんでアクションが無理なところが出て来ると思いますね」
そうなんだよな。

「よつてプランを整理しました。」

乾くのが速い土壌での撮影を20日目に。

それ以外を21日目、22日目以降に回すことを提案します。

幸い島です。砂浜などは雨の直後でも撮影はしやすいかと」

「異議なしです」

「それと、アクションごとに濡れた地面でもしやしいものを先に回す方がいいかと。地面を走るものは転倒のリスクがあっても、最初から転ぶ予定のものならば——」
近年、大抵の映画には何かしらのアクションがあり、そいつを管理する人間がいる。この意見は重要だ。

「照明担当です。一部照明機材には防水機能に不安があります。

また雨が降ってきたらちよつとシヨートが怖いですね。

前回の撤収作業は間に合いましたが、次は間に合うかどうか。

英二君に細部を守るカバーとかパパッと作成してもらいたいんですが」

「どう？ 英二君」

「今日中に時間を見つけてそっち回ってみます」

オツケーオツケー。

ま、一時間もありません。状況に合わせた小物作成でしかねえしな。

「アクション監督や照明も話したと思いますが……」

千世子ちゃんと僕も話しました。やはり俳優視点でもスケジュールが厳しいという判断です」

「助監督……」

そう、そうだ。

今会議がこんなにスムーズに進んでんのは、百城さんが事前にそれぞれの人と話して、それぞれの人の意見を言って、それぞれの考えをまとめてきたからだ。

だから今ここに百城さんがいて、俺の隣に座って会議に参加してても、誰も文句は言わねえ。

会議がスムーズに進んでんのは、台風の後の対策案を沢山考えてた百城さんの力でもあると、皆分かってるから。

百城千世子はいざとなりや、撮影全体だろうとも支配し、改善する。

「こちらとしてはカット結合を提案します。

いくつかのカットを結合して長回しにしましょう。

それと脇役の台詞整理はやはり必要です。

一つのカットが数分に伸びる分、千世子ちゃん以外にはミスリスクが出ます。

千世子ちゃん以外がミスするリスクを減らすため、台詞が長く多いのは千世子ちゃんだけに」

「カット数減ってる分オーディション組にスポットが当たりにくくなりそうですね」

「影響は少しです。オーディション組には我慢してもらいましょう」

「助監督のこの提案はどうしましょうか？ 結構大きいと思いますが」

「うん、いいんじゃないかな」

カットは撮影の最小単位だ。

カットを短くしてこまめに撮影を区切るっていうのは、ゲームで言えば細かく細かくセーブしていくようなもんだ。

一度のミスで失われる撮影範囲損失を最小に抑えることができる。

逆に言えばカットを結合して長回しを増やせば、その分かなり早く撮影を終えられる。

「英二君、何かある？　大幅に時間早められそうなの」

「大幅に、というほどではありませんが……」

お、よし、俺の出番だな。

「18日分の現地での蓄積情報を反映します。

例えばこの海砂浜撮影とこの森撮影……

これらはA地点とB地点での撮影予定でしたが、C地点での撮影を提案します。

ここでなら東を向けば海砂浜撮影、西を向けば森の撮影に見えます。

撮影現場の移動の時間を極限までカットできると、俺は考えますね」

「……おおー」

「もつとも、ここ以外だと流石に撮影イメージが乖離しすぎて無理だと思えます。

なので、今日朝から美術は作業を開始しました。

今日一日を撮影に必要なものの造形や情報集めにあてます。

ダンボールの上に予定使用日時を書いて、ダンボールごとに物を仕分けする予定です。
す。

その日ごとに日付が書いてあるダンボールを現地に運搬していただければ幸いです
「ありがとう、助かるよ」

「あと、これは俺の個人的予定ですが……」

予報だと今夜には台風は過ぎ去ります。

一部の撮影機材を夜明け前から撮影予定地に運び込もうと思つてます。

20日目の早朝から撮影開始できるようにしておけば、時間に無駄がないかと。

美術の人間は今日一日仕事の予定なので、夜くらいは休ませてあげたいですね」

「ああ、それなら私も手伝おう」

「僕も行くよ。何人か連れてく」

「いいんですか？　ありがとう（ございます）」

ありがとうよ、助監督！　スタントマン代表！

「ちよつといいかな、再確認になるけど」

「プロデューサー」

「交渉したけど、やはり千世子ちゃんがネックだね。撮影期間の延長は無理だった」

だよなー、クソ。

「広告代理店や配給の意見はやはり強固だね。

一定以上の期間を広告宣伝に使いたくてたまらないようだ。

百城千世子主演に、脇を固める11人のスターズ人気俳優……

予想以上に彼らは期待していて、頑なになっている部分も否めない」

「でしようね……」

「で、ちよつと思ひ出したんだけど。

英二君から前に聞いた”第二班”の話と、和歌月さんが海に落ちた刀を回収しに言った話」

「え?」

「ええと、特撮系ではありがちなんだっけね。

物拾いとかもするやや便利屋気味の班とか、そのの班に付け足す別班とか」

「ああ、はい。確かにそういうのはいますね」

「英二君が一番便利屋じゃない? ころ」。

じゃあ英二君の手足増やしたり、英二君の個人負担減らしたり……

そういうのができれば、撮影の柔軟性増やせそうな気がするんだよね。

もうこうなったら雑多でも人増やすしかないでしょ? この撮影。

でも有能な人間を急に増員するのは日程的には不可能だ。

単純作業くらいしかできないさそうではある。

だから、増やした人間を英二くんの下に付けようかなって。かなりの荒業になるけどね」

おいおいマジかよプロデューサー。

つまりあれか、俺を使い潰すくらいの勢いで多用するってことか？

責任重大……いや、期待重大ってどこか。

「監督」

「なんだい？ プロデューサー」

「英二君を助監督にしましょう」

「えっ」

「えっ」

「え？」

はい？

「名目上や書類上は美術監督のままでもいいですし、兼任でもいいです。

ともかく、フォース助監督でもいいので、そういう位置に彼を置いておきましょう。

正直言つて彼に美術だけやらせておくのはあまり得策ではないと思います。

メイクや簡易編集もできるんでしょう、彼。何でも屋の位置にまで上がってもらわな
いと」

……ああ、別班監督って意味での助監督か。

『特撮ユニット監督』や『B班監督』など呼び方に違いはあるが、色んな撮影に存在す
る、監督の手足にして独立した班を指揮する個別頭脳。

そういうものの一つにまで俺を格上げするって話か。

「あ、じゃあ自分をフォースに格下げしてもらってもいいですか？

その数の人使うとなると朝風さん最低でもサードに上げた方がいいと思います。

俺はフォースに降りて、状況を見て朝風さんの指揮下に入る感じでどうでしょうか」

「いいね、じゃあそうしようか。

今日までのサード助監督はフォース助監督に移行。

英二君はとりあえず美術監督兼サード助監督で」

「え、マジで俺明日からサード助監督なんですか？」

「違うよ、今日からサード助監督だ」

うがア！ 仕事が増やされるだけの実務上の昇格ッ！

「名目上は美術監督だから映画の美術賞を受ける権利はそのままだよ」

「……はい」

「あと、報酬は二役職で二重取りできる扱いにしておくから、その分頑張って」
「……はい」

「人員増やすのは今日明日については無理だけど、数日中には来るから準備だけしておいてね」

給料二人分頑張れってかクソア！

やってやるよ！

金なんざもらわなくても元からそのくらいは頑張るつもりだったつーの！

会議は踊る、んで進む。

「皆さん、頑張りましょうね」

話し合いの終わり際に、皆にちよつとしたことを話した。

「さっき俺は、撮影場所を変えることで複数の撮影を一箇所での撮影に統合する話をしました。」

ですがこれは、今年度入った新人の方の提案なんです。

撮影の最初の方、廃校舎の一階の一室の内装美術を失敗した、あの新人です」

「ほう」

「彼は撮影初期の方で確かに失敗し、堂上さん達にフォローされました。」

ですが、それを反省し、『ここはカメラにこう映る』をずっと研究してたんです。

島の色々な場所を携帯で撮影し、独自に研究していました。

『カメラにどう映るか考え失敗しないようにする』、を彼なりに頑張ってたんです。

昨日、美術の人間で一回話し合いをしました。

その時、カットごとの撮影を統合すればという俺の案に、彼は最高の提案をしてくれました」

「なるほどなあ」

「彼のおかげです。彼は同じ失敗がしたくなくて、カメラに映るものを気にしてたんですね」

皆、頑張ってくれてる。

「今、新人の方まで頑張ってくれています。

裏方全体のモチベーションはかなり高いです。

もはやこの撮影固有の強みと言ってもいいでしょう。

ここからは無茶な撮影になると思いますが……この強みを活かせれば、きっと成功しますよ」

隣の席の百城さんが笑うような、そんな気配がした。

20日目。

しやあつ、晴れた！

今日はスターズの若狭さん、そしてオーディション組の八代さんがオールアップだ。オーディション組のオールアップは初めてだな。

スケジュールギリギリなスターズ組を最初の方にできるだけ片付けちまおうって話だったからそりやそうなんだが。

しかしこれでデスアイランドのメガネ男は全員オールアップか。

メガネ男全滅だなあ。

島を離れるのは次の仕事入っただけで、俺を前に俳優との話し合いに誘ってくれた八代さんは島に残るから、撮影に戻ろうと思えば戻れる状態をキープされるんだが。

若狭さんが話しかけてくる。

「ちよつと今日は、こっちも君もスケジュールギリギリだから、島出る時は会えないと思うんだ」

「ですな」

「だから今の内に言っておくよ。後は任せた」

「はい」

おう、任せろ。

よし、いい感じだ。

昨日一日台風はずつと島にいたが、その御蔭で室内での物作りに一日使えた。

カメラを乗せる高さ調整の台を作り置きできたおかげで、撮影中に高さが合わなくて間に合わせの台を作る必要とかもねえ。

森の奥に広げて張ることで、森の中に望んだ感じの背景を展開できる背景用シートなんかもいざという時のために作成済みだ。

撮影は加速できる。

トラブルがあっても足止めされねえ。

美術造形分野においては、少なくとも昨日、24時間分のアドバンテージを作れた。もう起こるんじゃないやねえぞアクショント！

21日目。

20日が消化され、撮影予定日程を2/3を使い切っちゃった。

あと10日。

だが相変わらず、日程に余裕はねえ……というか、全然日数足りねえ。

「英二君、この先一週間、私が個人的にどうしたいかを書き出しておいたから見ておいて」

「分かりました。百城さんと一心同体になるつもりで行けばいいんでしょうか」

「うん、そういうこと。私の思い通りに動いて、私の意に反しないでくれると嬉しいな」
「分かりました。俺は撮影終わりまであなたのものです」

百城さんの意向に自分を最適化する。

じゃねえと、俺が全力尽くす程度じゃ間に合わねえ。

百城さんは撮影全体をコントロールして加速させることすらできるが、それは百城さんが万能だつてことを意味しねえ。

百城さんにも服や背景は作れねえしな。そういうところは俺がカバーしねえと。

百城さんは息をするように、化物みたいなことをやってのける。

複数のカットを繋げて、NGを出さねえでワンカット撮影で完了させる。

本来ちよつとずつ撮影して、撮影した映像を接合して完成させるはずの映像を、ひと繋ぎの撮影一回で完了させて、ミスもやり直しもねえ。

NGが全く無い、つてのが異常過ぎる。

NG絶対に出さねえ俳優なんて他に見たこともねえ。

監督達の脳内イメージってのは皆で見ることなんて不可能で、けれどそれにそぐわねえ芝居はどんなに上等でもNGになるからだ。

他人の脳内を把握する技能がある程度なけりや、NG完全0は達成できねえ。

おかげで早く終わるのはいいが、これは他の人には真似させられねえな。

百城さんと10人の俳優が現場にいる。

1人の俳優と百城さんが共演すると仮定し、共演一回に時間1、休憩に時間1を使うと仮定する。

10人との俳優と一人ずつ共演して撮影していったら、全部が終わるまでに使う時間は10、撮影の合間に休憩一回ずつ取って9回、撮影と休憩の合計で使う時間は19。

ところが百城さんは、この休憩のカット削減を提案し、俺達裏方も乗った。

10人の俳優は9休んで1出る。

百城さんは10出っぱなし。

そうすれば、百城さんが芝居に疲れさえ出さない限り、倍近え速度で撮影を完了できる。

もちろん裏方の俺達も10出ずっぱりでハードな撮影になるが、カメラマンや照明でローテを組めば休憩できなくもねえ。

本当に出ずっぱりなのは便利屋のサード助監督業務についた俺、椅子に座って撮影の総指揮ずつとやってる手塚監督、そして百城さんだけだ。

百城さんだけには、代わりはいねえ。

百城さんの立ち位置だけは、ローテーションが組めねえ。

主役だからこそ出番も極端に多く、百城さんの出番が終わる気配も全くねえな。

百城さんの撮影を先に詰めて撮っておけば、たとえば30日目終了時点で撮影が全部終わってなくても、百城さんを島から帰して31日目の撮影ができるかもしれません、と提案したのは俺だ。

だがこうして見ると、百城さんにかかる負担は予想以上で、それに余裕で耐えてる百城さんの耐久能力も予想以上だった。

ミスが出ねえよう百城さん以外の台詞を極力削り、百城さんが長回しの演技と長台詞を完璧にこなし、NG無しゆえにカットが恐ろしい速度で消化されていく。

百城さんの能力の高さも目につくが、地味に景さんの成長も凄まじい。

「夜風さん、なんだか芝居の迫力を維持したまま台本通りの芝居をするの上手くなりましたね」

「そっ？」

「そうですよ！　なんだかちよつと、スターズの女優さんみたいです」

「ああいうのもあるんだな、って思ったから」

景さんフアンの木梨さんがまた景さんの演技に感銘を受けてる。

ま、そうだよな。

言語化し難いような細かい技術を他の役者から吸収してる景さんは、小さな振る舞いの一つ一つのクオリティが加速度的に上がってる。

よく見ねえと分からねえが、よく見りゃ一目瞭然なレベルにだ。

プラモデルのパーツの切り取り跡にヤスリをかけるようなクオリティアップによって、景さんのレベルはかなり百城さんに近いところまで来てる。

あとは景さんの心の姿勢一つ、だな。

「A班移動しますよー！」

「え？ でも朝風さん、まだこっちの撮影が終わって……」

「テンポよく撮影進めるために次の撮影現場に行つて俺達が場を整えます。

撮影場所の”美術”を完成させられるのは俺達だけですからね。

大丈夫です、向こうでも俺が指揮執りますから。時間ありません、行きますよー！」

「はー！」

現場離れる前に「百城さんを移動させる時は車の中でゆっくり休ませてあげてください、お願いします」と一言だけ言い残して行く。

心残りにもほどがある。

正直現場には全部居てえが、俺が先行しなきゃ最高テンポで撮影はできねえ。

百城さんに美術指揮は無理だし、百城さんの体は一つしかねえから、撮影中に次の現場に先行して撮影を加速させることもできねえ。

こいつは俺がやるべきことだ。

百城さんが俺達を信じて多くを任せ、無茶な加速を要求する。

俺達は信頼に応える。

俺はこの現場と残った少しの美術仕事を、他の人達と一部の美術に任せる。

仲間は信頼に応える。

予定になかった無茶を他の人に要求してる時点で、俺達の仕事は、互いを信頼し、信頼に応え合うために全力を尽くすということでは成立しないものになっていた。

22日目。

俺は平気になってきたが、ぼちぼちスタッフに疲れが見えてきた。

30日目を降に規定の休日を回してもらってるからな。

休みなく働き続けてもらうようなもんだ、こうなるのも仕方ねえ。

今日明日の午前午後を四つに分け、それを八つにわけ、チームを八チームに分割。今日と明日で一回は、午前の半分か午後の半分を休めるようにしよう。

南の島でゆつくり休んでくれ。

チームの人数が7/8になるくらいなら俺の尽力でカバーできる範囲だし、問題はねえはずだ。

「お疲れさん」

「あ、茜さん。源さんに烏山さんも……お疲れ様です」

「お疲れ様です！」

「ずっと動き回ってて疲れないんすか、英二さん」

「休む時に休んでますから、大丈夫ですよ」

気遣いサンキュー。

頑張ってくれよ。

前半部でスターズが頑張って結構早く撮影終わらせてくれたってことはな、後半はオーディション組にガンガン頑張ってもらわねえといけねえってことだ。

「夜風ちゃんと千世子ちゃん、どっちにも完璧に合わせるのって大変そうやなあ」
茜さんが明るく笑う。

心の中で一区切り付けてからのこの人は、本当に朗らかに、自由に見えるな。

「百城さんは忙しいですし、景さんは鈍感主人公みたいな人ですしね。苦勞はあります」
「は？」

「ん？」

「そうですね、全くです」

あれ、鳥山さんにしか正確に伝わってねえかな、俺の発言意図。

「まあ、あれはあれでいいんだと思います。

ほら子犬とか小動物とか、ああいうのって人間に愛されようって思っていないじゃないですか。

毎日本能的に精一杯頑張ってる、その結果として愛される。

愛される自分を作るとか、周りに病的に気を使うとかもない。

景さんは百城さんの正反対なので、そういうタイプである側面もあると思うんですね。

”愛される努力をしてない”属性みたいな。

あの人は自然にやってるだけで愛されるというか。こっちの気も知らないで罪な人ですよ」

「……あー、うん、まあ、夜風ちゃんは異性に好かれても気付かなさそうな子やな」

「でしよう？」

ただあの人が鈍くてもいいんだ。

鈍いところを好ましいとも思えちまうし、抱いた好感が損なわれる気は全くしねえ。あばたもえくぼとは言うが、こいつは惚れ込んだ俺の弱みだな。

「第一、他の人気にしてる場合ですか。

皆さんも他人事にしていいことじゃないですよ？

120%の力出してください、120%の力！ ほらほら撮影に戻って！」

「はい！ 俺達の演技に悪いところがあればピバシ言つて下さい！」

「はあーもうなんだ、残り1/3切ったと思つたら、俺ら急にキツくなってなんだこれ……」

「シヤキツとし、真咲ちゃん！ うちの事務所の看板に悪評付けちゃいかんで！」

頼むぜ俳優陣。

分かつてると思うが、百城さんが失敗しなくても、他の俳優が失敗したら撮り直しだ。百城さんがNG出さなくても、あんたらがNG出したらNGだ。

百城さんが長台詞を失敗しなくても、あんたらが長いシーンで一つでもつつかえたら終わりだ。

映画は、一人じゃ撮れねえからな。

『一回もNGを出さず息をするように高難易度の長台詞を連続で成功させ続ける』つ

ていう化物じみた百城さんの強さが目に見えるのは、それが周りの失敗で台無しになつてねえのは、あんたらが優秀な証明だと、俺は知ってる。
他の誰が褒めなくても、俺は心の中で讚え続ける。

23日目、夜。

「……」

もう、溜め息しか出なかつた。

外には雨が降り。

ネットの最速情報を確認したところ、台風は明日この島に上陸するとのこと。

クソが台風がよオ！ ぶっ殺すぞテムエー!!

ああああああ間に合わねえッー！

24日目、早朝。

分かつてたんだよ。

分かつてたんだ。

クソ。

このタイミングでこの台風が来たなら、そういう提案をするだろうってのは分かっていた。

「気づいてるんだよね？ 撮ろうよ。撮るしかないよ」

「……一体何のはな——あでっ」

「あ、ごめんなさい。予定の時間過ぎてるからまだ撮らないのかと思って」

「クライマックスシーン、台風を利用して撮っちゃおうよ、今日の内に」

百城さんが、台風の中でのクライマックス撮影とかいう、頭のおかしなことを言い出すことは分かっていた。

だから、すぐさま否定した。

「ダメです。百城さんのその意見には明確に反対させていただきます」

何故か周囲がざわめく。

なんだ？

百城さんの意見に俺が真っ向から反抗したら変か？

「夜風さんも撮るのに賛成だよね？」

！

百城さん、景さんを味方に付けにいきやがった。

景さん驚いてんな。気持ちちは分かる。

「え、ええ。私も台風があつても撮っちゃった方がいいと思う」

……百城さんと景さんの二人が息を合わせて、意見を合わせて、俺の意見に反対する。監督もちよつと百城さん達の側か。

プロデューサーは冷静になりや台風撮影反対派なんだろうが、今は流され気味に見える。

この部屋にいる他の人達は傍観に回つて、俺の味方は0か。

まあいい。

知つたこつちやねえんだよ。

百城さんが俺に微笑みかけ、語りかける。

「英二君は反対なんだ？」

「はい、危険すぎます」

「でもこれやらないと映画がちゃんとした形で完成しないよ。代案はある？」

「ありません。最悪、映画が駄作になつてもいいです」

百城さんの目が細まった、気がした。

景さんが何を言えればいいのか分からないようにオロオロしている。

ま、そうだよな。

百城さんからすれば自分が参加した作品が駄作になるってのは許せねえことのはずだ。

とにかく作品の完成を。

とにかく売れる作品を。

とにかく作品で名演を。

百城さんのその作品への執念を、忘れたことはねえ。軽んじたことはねえ。だがな。

俺は絶対に、こんな事故死の確率が高え撮影の実行は許さん。

なら駄作でいいだろ、と言いきってやる。

「そういうの、あんまりよくないと思うな、私」

「じゃあ俺は絶対によくないと思います」

百城さんは作品のため。

俺は景さん百城さん、危険を背負うかもしれないねえ全ての人の無事のため。

絶対に譲らない。

「俺も、台風内での撮影が過去に全く無かったとはいいません。

台風のニュースでは台風の渦中のニュースキャスターさんがよく撮られていますしね。

でも」

俺は論理を組み立てる。

「日本史上、台風被害が減ったのは街規模の対策と個人の対策によるものです。ですが、ここは島。

本土のように雨風で崩れない路面で撮影できるわけじゃないですよ？

舗装されてない道も多くあり、数日前に豪雨が降ったばかりで、今も豪雨です。

地盤は相当緩くなっていて、大きな規模で土砂崩れが起きる可能性も高い。

「そこで“危ない場所には近付かない”っていう個人の対策までなくしてしまえば……」

島が大雨で土砂崩れとか前例が無いとでも思ってたのか？

「こういった台風時の脅威は、挙げていけばいくらでも挙げられます。俺は絶対に反対です」

「で、でも、朝風君の技術がないと台風内での爆破なんて……」
「あのですね。」

俺が言うまでもなく、『強風中止』は爆破の基本です。

撮影に限らずナパーム爆破もセメント爆破も厳重に規制されてるんですよ。

自主規制、法の規制、両方で色々規制されてるんです。

晴れた日だろうと強風であれば火薬の使用は厳禁ですよ。

何故なら……爆破は、人が死ぬからです。とてもあつさりと死ぬからです」
「甘く見んなや。爆破だぞ？」

「知らないんですか？」

近年の特撮番組全部見てください。

爆破の煙や炎が風で横に流れてるやつがありますか？

徹底して風が無い日を選んでるんですよ。

撮影スケジュールが致命的な状況でもなければ、絶対に強風の中じややりません。

いや……どんなに撮影スケジュールが致命的でも、絶対に普通はやらないんです」

よく分かってねえ新人がいるなら、ちゃんと聞いとけよ。

「風があれば爆破が制御できなくなりますね。」

風は吹いたり吹かなかつたり、強くなつたり弱くなつたりしますから。

爆破で何かが飛んで俳優に当たる可能性も排除できませんね。

ガスやガソリンの炎が伸びていく方向も制御できません。

ナパームの紅蓮の炎が俳優飲み込んで大火傷もあるんじゃないですか？

爆破で飛んだ燃える油は多少の水でも鎮火せず、皮膚に付いたら中々取れませんから

ね。

豪雨の中で皮膚が燃えてる俳優の姿がカメラに録画されても何ら不思議ではないと

「思います」

死ぬんだぞ。

分かってんのか。

死ぬかもしれないんだぞ。

「デスアイランドのどの撮影もカスにしか見えないくらいの危険度だって、分かってんのか？」

台風の中女優二人が走って、その地面が爆発するんだぞ？

「そもそも地面の石すら完全には拾えてないんですよ？」

爆破で飛んだ石は手足に刺さるんです。

「なんで特撮番組でキャラに暑い時期にも長袖長ズボン着せてると思ってるんですか？」

手足の露出が多いキャラの周りの爆破シーンを、スーツを着た変身後にしたり。

「小さい石を拾い終えた広場でのみ撮影したりするのは、なんでだと思ってるんですか？」

「英二君」

「なんだ、百城さん。」

「私の心が決まってるって分かって、無駄に言葉を尽くすのは、時間の無駄ってやつだ」

よ

「——っ」

あーもう！

クソ頑固！

知ってた！

この人の信念の強固さ疑ったことなんてねーよ！

だから景さんとぶつかってたんだからよ！

「ですけどー！」

思わず声を張り上げる俺と、百城さんの間に、景さんが割って入って来た。

「待って。二人が喧嘩するのは……その……私、なんだか嫌だわ」

う。

……申し訳ねえ。

まさか、景さんに百城さんとの衝突を仲裁されるとは。俺も冷静にならねえとな。だけどなやつぱ、作品のために事故死つてのは納得いかねえ。

「まあまあ、熱くならずには。二代目もさ、ちよつと冷静になつて考えてみてよ」

手塚監督？

「君が安全対策してくれないと、危険な撮影に二人が行くことになるかもよ？」

ああ、そういうアレか。

手塚監督からすりゃ”朝風英二に安全対策させたなら危険度はぐっと下がる”って認識があるのかもしれないねえな。

台風でも撮影できれば、っていう監督としての判断。

危ないことさせたくないっていう監督個人の思い。

台風内での撮影を強く望む女優二人。

俺が安全対策すれば、撮影にGOサイン出せる勇気が湧いてくるかも、って思ってるわけだ。

信頼されてんな、俺も。

元々、台風の中撮影するなんて予定も準備も無かったもんな？

台風用の安全対策も全くしてねえから、皆そもそも台風内での撮影を想像すらしてなかったはず。

堂上さんあたりなら「台風の中撮るなんてどうかしてるぞ」くらいは言いそうだ。

監督からすりゃ、この撮影に俺の能力はおそらく必須。

「もっと根本的な部分の問題があるでしょう。俺はそれに言及できません」

「根本的な問題？」

「雨の中爆発させるセットは特殊です。」

仮に俺に黙って誰かが非雨天用の爆薬をセツトしていても……

台風が来てからそう予定を変えたなら、雨天用の仕込みは無いはずですよ。

ならば俺が時間を見つけて爆薬を地面に仕込むしかありません。

その技術を持つてるのは俺しかいないはずですよ。ならば、俺が拒めば撮影はできな

い」

「っ」

「俺が協力しなければ危険な撮影になる、じゃないですよ。」

そもそも俺が協力しなければその撮影は不可能でしょう？

流石にそんな交渉では騙されませんよ。

強風の中で爆薬を扱う技術は、人命が軽かった時代の希少技能ですよ」

法整備と安全対策が徹底された現代で、台風の中での爆薬使用なんて昔の危険な撮影

時代のレトロな技術持つてる奴が多く居るもんかよ。

絶えた技術ってのはな。

相応の理由があつて消えていつてんだよ。

誰も使わなくなつたとか、危険すぎるとか、な。

俺も使う気はねえぞ。

軽い気持ちでやろうとしてる人がいるなら、俺は絶対に否定する。

だから。

軽い気持ちじゃねえと分かる百城さんと景さんの目を見ると、決意がグラつく。

この二人は、この撮影で死なねえだなんて樂觀、持つてねえ。

作品のために死ぬる——それが、分かっちゃまう。

だから事故死の危険性に近寄ってほしくねえんだよ。

「危険なのは英二君じゃなくて私達だからいいじゃん、つて言っても、やっぱダメかな」

百城さんはさあ。

おめーマジで……いや、これが百城さんの良さでもあるわな。

「百城さんと景さんの命は俺の命よりも大切です。大事な人です。傷一つでも嫌です

よ」

「……うん」

何バカなこと言っただこのバカ娘。

正気か？

アホか？

いつペン頭冷蔵庫に突っ込んで冷やしてこい。

「私に協力してくれないんだ？」

「はい。今この瞬間は、俺はあなたの味方を辞めます」

そうだ。

あんたの主張の敵だ。

俺がいる限り、あんたの主張は通らねえ。

俺と百城さんの視線がバチバチとぶつかり合い、間に景さんが割り込んでくる。

「喧嘩はめつ、よ」

「……すみません、景さん」

「私は千世子ちゃんに賛成だけど、喧嘩はよくないわ」

あんた弟と妹の喧嘩止めるのと同じ気持ちで割って入って来てねえか？

まあいいや。

席を立とう。

なんかここにずっといたら、俺の決意がもつと揺らいじまう気がする。

事故死はダメだ。

事故死出したい奴がいるか？

いねえよな？

過去に事故死者出した奴らもな、誰も事故死者なんて出したくなかったんだよ。

気を遣って、危険を考慮して、対策してて、その上で予想外なことが起きて死んだん

だ。

予想外がいくらでも起きるのが撮影の世界と言える。

俺の心の深いところには、父と母の死に方に、死に至るまでの”美しいものを求めた道筋”に、否定的な気持ちがある。

「どうせなんとかなるだろう、と思ってるんじゃないですか？

危険な撮影の前には一度自分を省みてください。そして、自戒してください」

俺は席を立て、部屋を出て行った。

揺らいでいた。

俺は本当は、揺らいでいた。

だから徹底的に否定した。

危険な撮影なんて絶対にさせねえ、って。

そのせいも、景さんと百城さんが同意見で息を合わせて俺を説得しに来ていた。

本格的に説得に入られてたら、俺はヤバかったかもしれない。

輝いていた。

あの二人は普通じゃない輝きを持っていた。

普通じゃねえ才覚、普通じゃねえ人生、普通じゃねえ思考、普通じゃねえ芝居。

嵐の中の命がけの撮影に、何の躊躇いもないその姿が、眩しかった。

その決意が輝かしかつたから。

台風の中で撮影を、やらせてやりたいって気持ちもあった。

だが、こんな撮影にOKを出しちまったら、俺は今よりもっと、人でなしになっちまうような……そんな気がした。

そうだ。

俺はあの両親が、好きだったんだ。

色々あった後の今でも、ちゃんと愛してる。

……自分の命より、どんな倫理や常識より、芸と能の世界での作品の完成を重んじるその在り方は……死人さえ出なけりや、俺が憧れる在り方だった。

死人さえ、出なけりや。

残された奴の悲しみつてもんを知らなけりや、俺はその在り方を素直に肯定できていた。

俺は。

俺は、素晴らしいものと人の命、天秤にかけたらどつちを選ぶのか？

迷うまでもねえ。

人の命だ。

目の前で人が死ぬのは本当に辛くて、苦しかった。

俺は人の死が嫌いで、素晴らしいものが好きだ。

それが不可分なシチュエーションが来たら……俺は。

人の死の危険があるが素晴らしいものができるかもしれない選択と、危険も格別素晴らしいものが生まれる可能性も共に無い選択と。

一体、どつちを。

……分かんねえ。

でも。

命を懸ける百城さんと景さんの覚悟を見た上で、撮影に参加する自由を無理矢理に取り上げた俺の選択は、きつとどこかが間違ってる。

俺はあの二人に死んでほしくないって気持ちだけで、あの二人が撮影に命を懸ける自由を取り上げちまったんだ。

それを、悔いていると言えば悔いている。

クソ。

受け入れられないものがあつたのに、自分を納得させて受け入れられないものとの共存を果たした百城さんと景さんを見てて、これか。

あの二人に偉そうにあれこれ言つといてこれか。
情けねえ。

死にたいなら、死なせてやつたつていい。

百城さんの命は百城さんのもの、景さんの命は景さんのものだ。

その命の使い方は、それぞれの人間の自由だ。

好きに使つて良いんだ。

その自由を個人的な理由で邪魔するつてのは独善で、相手のことなんて本当は何も考えてねえ、自己満足だけの生き方の押しつけなんだ。

だけど。

……ルイ君とかレイちゃんとか、残される家族がいると分かつてると、俺は……ダメだ。
クソツツ！

ダメだ、何も割り切れてねえ、何も吹っ切れてねえ。

納得できねえ。

自分が正しくねえつて分かつてんのに。

そもそもこの撮影に参加したって死ぬと決まったわけでもねえのに。
俺は、俺を捨てられねえ。

部屋を出て行つた英二君を探すべく、私も部屋を出た。

私よりも少し遅れて、夜風さんも部屋を出て来るのが見えた。

……皮肉だなあ。

英二君が言つてたように、私と夜風さんには近いところもあるらしい。

それを初めて実感できたのが、私と夜風さんに共通の意見を英二君が全否定してきて、私と夜風さんが一緒に英二君に立ち向かつたこの瞬間だったなんて。

台風でも撮影続行を望める夜風さんは本物だ。

本気で撮影を完遂しようとしてる。

なら、もう少しだけ、信じられる。

「……いないなあ」

探しても見つからない。

夜風さんの方がもう英二君を見つけてるかも？

あのよく分からない凄さの夜風さんなら、それもありそう。

どの道英二君を説得しなければ撮影は続けられない。

面倒臭い男の子だ、英二君は。

それでもあんまり嫌いにならないのは、私達のことを想ってくれていることが伝わってくるからなのかもしれない。

「あ……いた」

英二君を見つけた。

夜風さんはいない。

私先だったか、夜風さんが先だったか、ちよつと分からないかな。

英二君が迷つてるように見えるから、尚更分からない。

英二君が座っているベンチの英二君の横に座ると、俯いていた英二君がこちらを見る。

「私がそんなに信じられない？　大丈夫だよ、たかが台風なもの」

英二君の目が私を見る。

外側に貼り付けた仮面の奥まで見透かされそうな、透き通った目。

こつちの真価を測られているようで、少し怖くなる。

「信じたいですよ。分かるでしょう？」

でもですね。百城さんが無事に帰って来ると信じて、帰って来ないことが、怖いです」
臆病な英二君。

優しさから生まれる気持ちは、彼の中に矛盾を生む。

そこに苦しみがあるなら、どうにかして取り除いてあげたいと思いつつ、今の英二君を苦しめているのは私の無茶な提案が元だから、少し罪悪感も覚える。

でも、しようがないよね。

私は……作品に対する執念だけは、捨てられないから。

「英二君は私に何をしてほしい？ どうしたら私を信じられる？」

私を見て、英二君が何かを思い出す所作を見せる。

何かを思い出して、過去の何かを参考に、英二君は何かを決めようとしてる。

これは私が過去に何を成したか、何を話したか、何ができるようになっていったか……それを採点されてるんだと、ふと、思った。

そこそこ長い付き合いだけど、私はどのくらい、この人の信頼を勝ち得ているのかな。

「信じられます、信じられますよ、でも……」

信じたいけど信じられない。そんな迷いと苦悶に満ちた表情を、英二君が見せる。

英二君を縛る鎖が、一瞬だけ見えた気がした。

この『でも』こそが私が倒すべきものなんだって分かった瞬間、私の口は動いていた。

部屋を出て行つた英二くんの後を追つて、千世子ちゃんの次に私も部屋を出た。

ドアに近かつた千世子ちゃんの方が早くて、私は二番手。

千世子ちゃんと英二くんつて、喧嘩するんだ。

そういうの想像もしてなかった。いつも仲が良いイメージだったわ。

私と黒山さんみたいなものなのかしら。

喧嘩するほど仲が良い、喧嘩しているとところを見たことがないほど仲が良い……相反する二つの話を聞いたことがあるけど、どっちが正しいのか。

私と英二くんは喧嘩した覚えが無いから、どっちが正しいのか本当によく分からない。

ああいうのを見ると、ちよつと喧嘩してみたいとも思つてしまう。

「いはいわ」

探しても見つからない。

千世子ちゃんの方はもう英二くんを見つけてるかもしれない。

千世子ちゃんくらい凄いと、それもあるかも。

英二くんが私達の撮影に納得してくれないと、撮影は続けられない。

心配性な男の子だ、英二くんは。

英二くんは間違ったことは言わない。分かっている。

心配されてる感覚はむず痒い。嬉しい。

それでも私は撮影したい。

この作品のちゃんとした完成のためなら自分の命を懸けられるこの想いに、千世子ちゃんみたいに、正直でいたい。

「見つけた」

英二くん発見。

千世子ちゃんはいない。

あれ、私の方が先？ 千世子ちゃんはもう話して帰った？ どうなんだろう。

英二くんが迷ってる顔してるけど……その理由次第かしら。

英二くんの隣に座ったら、下を向いてた英二くんの目だけが、こつちを向いた。

「私、台風でも大丈夫。

家族のため、台風の中でもずっと走って新聞配達してきたから。

英二くんは心配してるけど、私なら大丈夫。私なら平気。信じられない？」

英二くんの目が私を見る。

私の中にある沢山の私を見極められているような、透き通った目。

こつちの真価を測られているようで、頑張る気が出て来る。

「信じたいですよ。そこは分かかって欲しいです。」

でも、俺は、ルイ君とレイちゃんの下に、無傷のあなたを帰してあげたいんです」

気遣いの英二くん。

優しい人は心配することが多くて大変そう。

こんなにルイとレイのこと心配してくれてる人は新鮮で、それが嬉しい。

いや。

……私も本気で心配されてて、それもなんだか、嬉しい。

「私がどうしたら、私は無事に帰って来るって、英二くんに信じてもらえるかしら」

私を見て、英二くんが何かを思い出す動きを見せる。

何かを思い出して、過去の何かを参考に、英二くんは何かを決めようとしている。

これは私が過去に何を成したか、何を話したか、何ができるようになっていったか

……それを採点されてるんだと、ふと、思った。

短い付き合いで、私はどれだけこの人の信頼を勝ち得ているんだろう。

「信じられます、信じられますよ、でも……」

信じたいけど信じられない。そんな迷いと苦悶に満ちた表情を、英二くんが見せる。英二くんを縛る鎖が、一瞬だけ見えた気がした。

この『でも』こそが私が倒すべきものなんだって分かった瞬間、私の口は動いていた。

「私はあなたのお父さんみたいに絶対に事故死しない。私を信じて」

「私はあなたのお母さんみたいにあなただを置いていかない。私を信じて」

俺は、息を呑んだ。

百城さんの言葉に息を呑んだ。

景さんの言葉に息を呑んだ。

俺が今までずっと壊せなかった心の中の壁が、ガラガラと音を立てて崩れていく。何か、何かが、俺の中で変わっていった。

そうだ、俺は——きつと、この言葉を、言ってほしかったんだ。

死ぬかもしれないと過剰に不安に思う度、その不安を拭ってほしかったんだ。

信じたかった。

この人は死なねえと、信じたかった。

その人のために危険を減らすため手を尽くして、それでもなお心配で心配で仕方ねえとかじゃなくて、そうしたことでその人を心底信頼したかった。

死なないでほしかった。

俺を置いて行かないでほしかった。

それを、言葉にして約束してほしかった。

「皆で一一緒に、皆の想いが詰まった、この撮影を成功させるために」

「皆で一一緒に、皆の想いが詰まった、この撮影を成功させるために」

百城さんと景さんの中にある『共通する部分』が、俺の胸を打つ。

二人は強くて、綺麗で、美しかった。

その心がだ。

どこまでも自分が信じるものを貫いていて、周りに流されることもなく、俺が何を言っても信念を変えずに、それでいて周りのことをちゃんと見ていた。

皆と一緒に頑張って作ってきたこの映画を、最高の形で完成させること以外、この二人は何も考えていなかった。

この二人にとってそれは、自分の命を懸けてもいいほどに大切なことだった。

——だからいい仕事をしたのなら、信頼できるキチガイを探せ

親父が残した言葉を思い出す。

それはもしかしたら。

『リスクを絶対に避ける人』とも違う。

『この人が怪我してしまおうと半ば確信してしまおう人』とも違う。

キチガイみたいに命がけで、いつだって全身全霊で、作品に全力で挑んでいて、その上でこの人は最高の作品を作ると、この人は死なないと、信頼できるような。

メリットデメリット、リスクの有無を全て計算して、自分の命すらもただの一要素としか考えずに天秤にかけ、リスクが好きなのでもねえのに危険な撮影に挑んで必ず成功させ、最高の作品を仕上げる……そんな人の、ことだったんだろうか。

だとしたら。

いつの間にかに。

俺の中でこの二人は、信頼できるキチガイになっていた。

俺は心の何処かで、台風の中で爆薬を使う命知らずな撮影の開始を自分から提案するキチガイなこの二人を、信頼してる。

”無事に帰って来てくれるはず”と何故か信頼してる。

”この人なら”と、俺は確かに信頼してる。

それはきつと。

この二人の奥にある、『優秀』とは全く異なる性質の、『執念』や『覚悟』というカテゴリーに入れられる『特別な強さ』を見てきたからだ。

屈強な肉体の巨漢が諦めて死ぬ瞬間でも、きつとこの二人は諦めない。諦めないから、どんなタフガイよりも作品作りの過程で死ににくい。

『自分が死ねば作品が公開できなくなるから、この人は死なない』という理屈で、信じられる……そんな人間がいる。

俺の目の前に、二人いる。

信じていたつもりだったが、更に信じてみようかと、そう思える。

二人を信じる気持ちで、二人を危険に晒すことを決めちまった俺は、人でなしか。

だけど、人でなしに成り果てても、信じてえと思えるものがあつた。

この二人の覚悟に、“この二人なら”という信頼で、応えたかつた。

「……」

少しずつ、俺はデスアイランドの撮影の中で変わっていた。

病的に危険を嫌っていた自分を捨てて、危険がある程度受け入れられるようになった。まって、その危険を自分の力で極限まで消そうと思うようになった。

危険を自分の技術で消すことが自分の役割でもあると、強く自覚するようになった。

そして今、一つの境界線を越えた。

これが成長なのか、悪化なのか。俺自身にも分からねえ。ただ、どこか心地良い変化であることだけは、間違いなかった。

かつて危険な撮影に役者を送り出してきた裏方の人達は、こんな気持ちだったんだろうか。

多くの先人がいた。

誰もが怪我を望まなかった。

けれども、危険な撮影が行われたことも確かなことで。

先人の裏方もまた、俺と同じように俳優の覚悟に突き動かされたんだろうか？

その熱意に、心動かされたんだろうか？

見上げるように、尊敬の目で見ていた役者に願われ、役者が命がけの撮影に望む背中を見送り……役者がせめて怪我しないようにと、全力を尽くしたんだろうか？

矛盾だ。

役者の無事を願いながら、役者の安全対策をして、役者を危険な場所に送り出す。役者の安全を徹底視してるんだか、役者の命を軽視してるんだか分かりやしねえ。俺も今は、矛盾している。

「皆さん、聞いてくださいい！」

サード助監督としての俺の下に付けられたありったけの撮影スタッフ、特に最も多い美術スタッフが、雨合羽を着て雨の中、俺の指示を聞いている。

現在、朝5時過ぎ。

撮影予定時刻は14時。太陽が高い内じゃねえと雲で暗くなりすぎて視界が潰れる。だから残り9時間。

安全対策に8時間、道の途中に爆薬を仕込むのに1時間。それが俺自身の時間配分。だが俺以外の人間にも、俺とは違う仕事を与えなくちゃならねえ。

「チーム分けを覚えておいてくださいい！」

皆さんの半分はここで、撮影準備！

残り半分は俺と一緒に、斜面の安全対策と地面の爆薬設置です！

撮影準備班は19日の準備資料を読み返して、道具を最大限に台風用最適化してくださいい！」

俺が作った資料を最大までコピーして配った。

俺が居ない撮影準備班は、独自に頑張ってくれんことを期待するしかねえ。

もう残り時間一杯使って、道具をできるかぎり台風内撮影に最適化するしかねえんだ。

最善の状態まで最適化できるだけの時間は、もうねえ。

「特に撮影車両のタイヤを交換して、放水車のタイヤを付けることは絶対忘れずに！

豪雨で泥にぬめる路面に適応してるタイヤはあれだけです！

漏電事故の回避は徹底をお願いします！

イントレ、カメラ、バッテリー、照明、録音！ 電子機器担当勢は特に気を付けてく

ださい！」

「「はっ！！」」

注意喚起ですら長々とやってる時間はねえ。

手塚監督やプロデューサーにこの場を任せて、俺は斜面に向かう。

このクライマックスの撮影は、車が何台か並走できそうな未舗装の土の道を、台風の
中百城さんと景さんが走ることで行われる。

道の左右には木々が生えた森。

その奥には奈落到落ちていくような急斜面がある。

一部は逆に、崖みてえに登っていく急斜面がある。

木々の根つこが支えてる地盤と、その上にある広い一本道、って感じだな。

撮影の都合上、カメラに映らねえところに安全対策のネットを張る必要があるが、そうなると斜面にガツチリネットを張らなくちゃならねえ。

転がり落ちていく可能性を考慮すりゃ、斜面に張るネットは何重にもしなくちゃならねえ。

「え!? 朝風さん、斜面にネット張るのを一人でやるって……無茶ですよ!」

ああ。だから、俺一人で張る。

「俺が一人でやります。

申し訳ありませんが……」

俺が完全に安心して任せられるほどに非常に実力が高い美術スタッフは、一人もいません」

「っ」

「皆さん、どうか未来の自分を守って下さい。

未来の皆さんならいざれ高度な作業もできると思います。

でもそれは、今じゃない。今するべきじゃないんです。皆さん、死にかねませんから」
俺が腰に命綱を付けて、斜面上に車を待機させて、命綱を車に結びつけて斜面を降りながらネットを張る作業をする。

安全も考えると、この形式しかねえな。

「斜面には滝みてえに雨水が流れてるところもある。

木も表面は雨のせいでクソ滑りやすそうだ。掴むのは困難だな。

こんなんじや、命綱付けてても俺以外には任せられねえ。

「俳優が死ぬかもしれない撮影で、俺だけ後ろに引っ込んでるつもりはない。

……一言で言うなら、そういうことです。

演者アクターにだけ危険を押し付けて後ろでのうのうとしているくらいなら……」

周りの美術スタッフが、俺を見ている。

「俺に、生きている意味はないと思います。

役者が死ぬかもしれない撮影なら、せめて俺も命を賭けましょう」

「……美術監督」

「やめましょうよ！ 他に方法がありますって！」

「そもそも台風になつてから台風内撮影が決定されて！」

台風対策にしかならないような斜面ネットを台風の中張ってるのがおかしいんです

よー」

「おかしくなんてありません。皆、この映画を完成させるために命を懸けてる。それだけです」

クライマックスに必要な時間は、一説には十数分と言われる。

クライマックスが短すぎると、シリアスな場面でも呆気なく終わりすぎてギャグか？とか言われちゃうからだ。

かと言ってクライマックスが長すぎると、どんでん返しを何個も入れなきやならん。この撮影も、クライマックスは十数分ワンカットの長回しと決まってる。

百城さんがやってた5分以上の長回し撮影の数倍の長さで、失敗が許されねえ長回し……こんなの百城さんと景さんでもなけりやできねえ。

他の人なら、晴れた日の普通の撮影でも高確率でNG出すつての。

30000m競歩女子の世界記録が11分35秒。

50000m中距離走女子の世界記録が14分11秒。

十数分の疾走つてのはそもそも、km規模の移動をして然るべきもんだ。

ノーカット撮影なら当然、その移動距離と撮影範囲は桁違いに跳ね上がる。

このクライマックスの撮影もまた、十数分のクライマックスを激動の疾走で盛り上げるために、3km前後の下り気味の道を走ることになってる。

まあワンカットなら妥当な長さだ。

この長さの道なら、クソ長いネットを一枚貼って終わり……なんてわけがねえ。

そんな長えネットあるわけねえ。

木に括り付けたネットの保持力を考えりや、小せえネットを道の左右の森、それも道の端向こうにある木が大量に生えた急斜面に、大量に張る必要がある。

木々が等間隔で生えてねえことと、俳優がネット一枚を越えちまつた時のことも考えりや、ネットは道の左右に二重以上……欲張るなら、三重にセットしてえところだ。

ネット一枚につき幅5m×10m。平均7.5m。

撮影に使う範囲はどう見ても3km以上だが……3kmと仮定して、3000m、だから、片面400枚。

二重に張るとして800枚。

安全確保に三重に張るとしたら1200枚。

道の左右両面に貼るとして2400枚。

使える時間はもう8時間を切ってる。

1時間300枚、1分で5枚。

……安全を犠牲にしてネット一重でも、1時間100枚。1分で1.7枚だ。

俺の腰に命綱を付けて斜面を降りて、安全確認しながら台風の中急斜面を降り、雨でグチャグチャになってる斜面をゆっくり降りながら、台風と森のダブルパンチで明かりもほとんどねえ斜面の中、そこで木と木の間にしつかりネットを結びつけて固定する作業。

普段の俺がこれを部下にやらせるなら、一時間に一枚以上は張らせねえ。作業を焦らせたなら、死ぬ。

数km。

『映画のクライマックス』をワンカットで撮影すんなら、そんなくらいの距離が要る。そんなくらいの距離の斜面を安全対策すんなら、俺は数ヶ月はかける。

台風の中撮影するってんなら、そのくらいは絶対に必要だ。

景さんと百城さんにゆっくり走らせて距離を短くするってのも無理だ。

このクライマックスに手を抜いた走り方をさせりゃあ、そいつはカメラにもろに映る。

走る速度を緩められるわけがねえ。

何より、景さんの演技の性質上、本気で走る以外の選択肢がねえ。

ワンカットゆえに時間を縮められず。

景さんの性質と、映画の完成度問題ゆえに、走行速度は下げられず。だからこそ、撮影範囲が直線的に伸びに伸び。

『安全対策』が極限まで難しくなる。

ワンカットじゃなけりゃ短いカットの短い距離の対策だけで済むんだが、無いものねだりだ。

いや、そもそも。

十数分のクライマックスに使うこんだけの距離をカバーしようと思えば、三重の完全安全対策を取っても俺一人で安全重視にやった場合、4000時間。

晴れた安全な日にだけ俺と一緒に部下を9人降ろして10人での並行作業でやったって、400時間……30日間フルに使っても、1日15時間作業しなきゃ最終日に撮影時間が残らねえ計算だ。

どだい無理がある。

安全が、俺の能力じゃ、絶対に成立させられねえ。

これがクライマックスじゃなければ、せめて数分で済むシーンなら、ワンカット長回しじゃなければ——そう思わずにはいられねえが。

ただの美術監督兼助監督でしかねえ俺には、何もできねえ。

俺には、物を作ること以外、何もできねえ。

「クソつたれ」

元々が台風なんて来てねえ日に、何回ものカットに分けて撮影して、それを繋ぎ合わせることで完成させるつもりだったシーンだ。

この道の左右にも、安全対策なんてするつもりは無かった。

そんな余計な安全対策に時間使ってたなら、どんな撮影だつて間に合わねえ。時間は有

限だ。必要なところにだけ必要な安全策を施すのが、撮影に求められる安全対策ってもんだ。

晴れた日に放水車で雨を降らせて後で編集で曇りに見せかけるか、曇りになった日に放水車で雨を降らせてそれで済ませるか、の二択だったはずだったんだ。

安全対策なんて、慣例通りのもんだだけでいいはずだった。

でも、そうならなかった。

だからしようがねえんだ。

「俺がなんとかします。

皆さん、バックアップをお願いします。

ただし危険なことほしなないように。

なんとかか、どうにかしてみせますので」

地面を踏み締める。

雨でグチャグチャ。

泥でぬるりと滑る。

地表の砂が雨で流されて、地面で普通に踏ん張れねえ。

晴れた日に海からの風で陸地に舞い上がってきたこの砂が、俺がよく転んでた海の砂になるんだと、感覚的に分かった。

崩れやすい島の斜面。

平たい道の左右に木々が生えた急斜面がある場合、それはその地面がかつて崩落して、崩落した斜面に木が生えて仮留めされたみたいになつてゐるから……なんて話もある。

雨が降りや、鉄砲水が出る可能性だつてある。

そうならなくても、土石流が起きりや人は死ぬ。

雨で地盤が不安定になつた木が、風に押されて倒れて人を押し潰した事例なんぞ、日本じゃ珍しくもねえ。

俺が定期的にやつてた小石拾いも、この台風のせいでもつた意味はもうなくなつた。

暴風と泥で転べば、その先に鋭い石、傷口から入る雑菌だらけの泥水が待つてゐる可能性は非常に高え。

”普通の地面”つてのは、小石やら何やら、転んだ人間を怪我させるもので溢れてて……転んだ人間が怪我しねえ『撮影用の地面』なんて、手を尽くさなきゃ作れねえからだ。

小石だけだと思つてゐる俺は、随分樂觀してゐるけどな。

以前の撮影で雰囲気出すために放置されてたそこそこの岩はそのまんまそこにある。転んだ先にそいつがあれば、それで頭を打てば、人間なんざ簡単に死ぬ。

この道ですら、完全に安全かは分からねえ。
なにせこの道、舗装されてねえからだ。

いつ崩れてもおかしくねえ。

土砂崩れなんか起きたら百城さんと景さんが一環の終わりになるところか、追いかけてた撮影車両が、このあたりの地面ごと地すべりで持って行かれる可能性すらある。

「……クソ」

落ち着け。

道の下手側の大部分は、斜面にはなつてねえ。

島の内陸部側、高台側に繋がってる。

こつち側から土石流が雪崩込んでくる場合……ダメだ、対策できねえ。

雨によって生まれた土と石混じりの濁流は、人を飲み込めばそのままミンチ、あるいは溺死に持つていく。

普通対策しなくちゃならねえ。

だが時間がねえ。

土石流対策の強固なネットまで張ってる時間がねえ。

急斜面を転げ落ちる俳優を捕まえる程度のやわいネットを張るだけでも、時間が足り
ん。

土砂災害が起こるかどうか？

6割大丈夫……そう判断する。

4割のリスクすら『低リスク』だと自分に言い聞かせて無視しないといけねえのが、本当にクソで、自分を許せなくなりそうだ。

溜まった雨は、どんな災害を起こしても不思議じゃねえつてのに。

「……19日目に朝風さんが地層情報とか集めてたのが役に立ちましたね」

「こんなことのために使うつもりじゃなかったんですよ。」

18日目に来た台風の豪雨のせいで土砂崩れとか起きないか、それが心配だったんですから」

19日目にやっといた情報収集が活きているように生きてねえ。

つかマジで時間が足りん。

改めて計算すると、俺個人の安全のことなんて考えてるようじゃ絶対時間足りねえし、ネットを一枚ずつ張るような堅実なやり方でも間に合わねえ。

じゃあない。

ここは選択のし時だな。

「予定変更です。俺は、命綱の使用をやめます」

「……えっ!？」

「俺のリスクは増えますが、それだとネットを張る速度が足りません。景さんと百城さんが危険に晒されます。」

俺の安全性を考えてたらあの二人の安全性が確保できません。なので、その代わりに……」

俺が新しいやり方を提示して、部下に指示を出そうとした俺を。

「それはチーフ助監督として許可できないな、サード助監督」

『その人達』が、止めた。

「……え？」

なんで、あんたらが、ここに？ そう思って、俺の思考はショートして、すぐ復帰した。

「ち……チーフ助監督！」

それに他の助監督に……PV用のミニチュアを手伝ってくださった皆さん!？」

そこには助監督全員と、デスアイランドのミニチュア作成を共にやってくれた人達がいいた。

「ミニチュア仕事はもう終わってましたけど、プロデューサーに再招集されたんですよ。台風に気付いてなかったマヌケな早朝便が一本だけあったんです。」

それに乗って朝イチでここへ。今度はミニチュアじゃなくて本物の島で一緒に仕事

ですね」

「皆さん……」

「朝風さんの下に付けっって言われてます。指示ください」

この人数がプラスされたんなら、台風用に道具を最適化させる作業も、間に合うかもしれん。

「斜面作業は十人でやろう。朝風に九人加えて十人だ」

「現場経験が十年近くある人だけを抜粋しました。使つてやりましょうよ」

「転げ落ちる急斜面をネットでカバーするだけなら400枚で行けるんじゃないか？」

「8時間400枚。60分で50枚を10人で分担してやれば、台風の中でも間に合うだろ」

「私達を使つてください。十人の命知らずが揃ったなら、なんとかなるんじゃないですか？」

ありがとう、と言いつうになった。

でも、ぐつところえた。

皆を命の危険に晒すのが、怖かった。

「分かつてないようですから言います。」

これから斜面にネットを張りに行くのは、そこを転げ落ちたら死ぬからです。

転げ落ちたら死ぬ場所に、あなた達はネットを張りに行こうとしています。それが、撮影の前準備です。

海外では最近でも、撮影の前準備の段階で、大作映画でも人は結構死んでるんですよ？

事前準備で死んで、ボートから落ちて死んで、事故で照明に押し潰され死んで……怖がつてる俺は、きつとバカだった。

「皆さん、そのお気持ちだけ受け取っておきます。」

今ここで死ぬとも思っていない甘い考えは捨てて、自分の持ち場に戻ってください」「死なないとは思ってませんよ。」

でも、分かるんですよ。」

朝風先生、このままほつといたら、役者さんを生かすために死んじやいそうだって」

「ほつとけないじゃないですか」

やめろよお前。

台風で顔が濡れてるからバレねえだろうし、俺泣くぞ。

『俳優が死ぬかもしれない撮影で、俺だけ後ろに引つ込んでるつもりはない』。

シビレましたよ、朝風監督。

朝風監督が死ぬかもしれない準備で、俺達だけ後ろに引っ込んでるつもりはありませ
ん」

「――」

「やってやりましょうや。」

予定にない台風。

予定にない台風の中での撮影。

予定にない台風の中での準備。

力を合わせた人間の数が増えれば増えるほど、背負わなきゃならない危険は減るはず
です！」

映画は一人で作るもんじゃねえ。

映画は一人じゃ作れねえ。

分かってたつもりだった。

「二人に危険背負わせたくないんですから、一人で何もかも背負い込んでください！」
俺は本当は、分かってなかったのかもしれないねえと、思った。

俺に命の危険があることを許さねえ人が、俺の周りにこんなにもいることにすら、気
付いてなかったんだから。

「ノルマは皆さん、一時間に三枚です。」

安全第一でお願いします。

初めてでしようし、最初は台風の中ネットを結ぶのに苦労すると思います。ですが最終的に一時間に三枚ずつのペースになってくだされば十分です。

9人なので1時間に合計27枚。8時間弱で大まかに合計216枚張って下さい」頼むぜ皆。

皆で笑って終わるために。誰も死なせず終わるために。

「あとは俺が、200枚張ります。

安全対策上、これ以下の枚数では絶対に安全は確保できませんから」

1時間に25枚。

これ以上、俺のノルマは削れねえ。

それは景さんと百城さんの危険へと直結する。

怖えな。

怖えのに嬉しい。

誰も死ぬなよ。誰も大怪我するなよ。

皆が来てくれて嬉しかったこの気持ちも、後悔させないでくれ。

「頼りにしてます、皆さん！一緒に頑張りますよう！」

台風の雨音と風音が一瞬消えるくらいに大きな声で、皆が返答してくれる。

俺達の心は、
一つだった。

芥に非ず

声を張り上げる。

「投げ落としてくださいー！」

腰に巻いた命綱で車に吊られる形で斜面に立っていた俺に向けて、筒状に巻き固められた安全ネットが投げ落とされる。

俺はそいつをキャッチし、素早く木の一本に一端を縛り付け、逆の端を掴んで別の木に向かって跳んだ。

斜面に生えた木から木へと飛び移り、手で木を掴むんじゃないくてネットを木に引っかけないようにして木にしがみつく。

素早く木にネットの端を縛り付け、右端と左端が木に固定されたネットが完成した。

「次をー！」

ポンポンとネットを投げ落としてもらい、それをキャッチして木に結んでいく。

俺のノルマは1時間に25枚。

飛び移る時間も考えりや、2分に1枚ペースで進めていきてえところだ。

逆に言えば斜面上の道では、台風の中ネットを次々車から出す人、ガンガン俺の手元

に投げ落とす人、撮影用具集積所からネットをガンガンここに運び込んで来る人がいるわけで、そういう人らの能力と尽力がなけりや俺もここまでハイテンポにはできねえ。本当に、助かってる。

雨が目に入るから、ゴーグルを付けて来た。

長靴を履いてきたが、もう雨水と泥とジャリが入りまくってて何がなんだか分からねえ。

斜面の泥はよく滑るし、流れ落ちる豪雨の流水が俺の足ごと地面を持つていく。

滑り止め付きの作業用グローブを付けてるはずなのに、木の表面は滑って掴もうとするにも一苦労だ。

台風が持つてきた分厚い雲と、鬱蒼と生い茂る森の葉のせいで、遮られた日光は俺の手元に全く届かねえから、電灯付きヘルメットを被ってなんとか光源を確保する。

ネットを木に固定するのは、斜面の下の方に行けば行くほどにキツイ。

「だが、急がねえとな……!」

今日中に撮影に時間のかかるクライマックスの撮影を終わらせられるから、間に合うんだ。

今日中に撮影できねえんならどの道間に合わなくなっちゃう。

台風が持つてきた分厚い雲は太陽光を遮ってるが、それでも光がねえわけじゃねえ。

朝風の頃、夕風の頃には真つ暗闇になっちまう。夜中だともう完璧な暗黒だ。

太陽が天頂高くにあつて少しでも明るい時間じゃねえと、照明を何百個並べようが撮影現場の光量が圧倒的に足りなくなり、百城さん達は足元すら見えなくなる。

そうなりや。

絶対に、最悪の事故は起こる。

5時から安全対策等始めて、14時の撮影開始がタイムリミット。

もう三時間使っちゃってる。

ネット張りに使えんのが残り五時間、それ以外に一時間。急がねえと。

風は強くなってきた。

雨も強くなってきた。

雨が大量に降ったことで地面が緩くなって、斜面の下の方で細い木が一本倒れていった。

俺の腰に吊った連絡用無線に、他の作業者からの連絡が入る。

「はい、こちら朝風です！」

『すみません！ 風が強くなってきてネットが広げられません！』

風を持つていかれてネット落としちゃったくらいです！ どうすればいいですか！』

「片方結び終えるまでネットは広げず束にしたままで！」

そしてネットを広げてからもう片方を結び終えるまでの時間を最短に！

難しいようならダルドン・ダルドンでも全箇所を一応結び終えてください！

全箇所結び終えた後に、再度結び直してネットを展張し直してください！」

危険作業中はこういう無線が本当に効果的だ。

雨と風がどんなにうるさかろうが、声が届く。

雨でも衝撃でも壊れねえ。

そしてどこでどんな作業をしてる最中でも、指示が出せる。

かつて労働災害防止のためにテレビ・映画撮影の現場に導入が提案されたものだけある。

……危険を勇気でくぐり抜けるやつは勇敢だ。

輝かしい、とも思う。

でも賢くはねえ。

賢い人間ってのは、そもそも危険に近寄らねえ奴、危険を発生させねえ奴だ。

俺は過去に怪我しないための心得を文章にして残した人、危険を発生させないためのシステムを構築した人間を心底尊敬する。

だけど。

人間はどうやら、トラブルを未然に防ぐ人間より、起きたトラブルをその場で解決し

ていく奴の方を凄えと思うもらしい。

『映画の主人公』は、危険やトラブルを勇気で突破する奴じゃねえといけねえ。何故なら。

危険を未然に防ぐ主人公より、そっちの方が人の心を動かすからだ。

人間の心は、そういうものに動かされるように出来てるからだ。

命を粗末にするか、心を粗末にするか、作品を粗末にするか。

俺達映画作成に関わる人間の人生は、選択の連続だ。

そんな俺達の心も……輝かしい勇氣に、動かされちまうことはある。

他の誰かなら却下できても。

”あいつならやつてのけるかも”と思わされちまうと、動かされちまう。

「が、ふっ!？」

いてえ。

足を滑らせて、斜面に体を打ちつけちまった。

命綱を縛り付けてる腰に全体重分の衝撃がかかる。

打ちつけたところは痛く、無理がたたって衝撃で骨が歪んじまいそうさ。

だが、こんなところで時間使ってる余裕はねえ。

昔、俺はこの作品に命を懸けてる、と叫んだ映画監督がいた。

社会の生活保障とかは昔に行けば行くほど薄くて、映画の制作費をヤクザなどところから得ていた人間だつて少なえわけじゃなかった。

監督やプロデューサーにあたる人が借金して映画の制作費を得て、人生台無しになるかどうかには賭けた例なんざ、枚挙にいとまがねえ。

そいつは現在でもそうだ。

手塚監督はさして大作でもねえ映画で女優の機嫌を損ねただけで、何年も干された。プロデューサーは昔大作映画を大コケさせたせいで、業界から消されかけたことがある。

命がけだ。

何の危険もねえ撮影ですら、人生かけてやってんだ、あの人らは。

作品の命があつて、役者の命があつて、役者生命とか監督生命つてもんがあつて。

最大限の努力をしても、『事故』一つで全て死ぬ。

「面白くなかった」の感想で全て死ぬ。

とても簡単に、時には誰かに気付いてもらふことすらできずに、死ぬ。

「負けるか……負けるかあッ！」

人も、作品も。何もかも死なせねえために。

他の人にできねえことを

もつと——もつと速く！ もつと上手く！ もつと確実に！

速度と安全性を引き上げるために、もつと俺の能力を引き上げる！

やつてのけられねえなら、俺が造形屋やつてる意味はねえんだよツ！！

撮影初日に、俺はいきなりやらかした。

朝風さんに言われるまでどこをどうミスしてたか分かってなかったのも、その後堂上さん達にフオローしてもらったのも情けない。

分かってる。美術スタッフの中で、俺が一番レベルが低い。

朝風さんのバカみたいなスピードに付いて行ける人達な時点で優秀で、そんな人達をこの数集められたプロデューサーも優秀なんだ。

それでも朝風さんから見りゃ、きっと俺達全員そう能力は高く見えねえんだろう。

俺から見れば、皆能力は高く見えるのに。

「チーフ」

俺はチーフに声をかけた。

朝風さんがサード助監督に上がった時に、役割上必要だったことで用意された、美術チームのチーフだ。

PVとかのためのミニチュアを作ってたチームのチーフとか、今はこっちにいくつかあるチームは何人かのチーフが指揮を執っている。

朝風さんは安全対策の方に行ってるから、ここにはいない。

俺達は朝風さんが安全対策してる間に、こっちで撮影機材を台風你最適化しないといけない。

台風やばい。

前見てるだけでも雨が目とかに入ってくる。

物は倒れるし、吹っ飛ばし。

強風が雨合羽を不意打ちで叩いて来るとそれだけで倒れちやいそうな気がする。

「なんだ」

「撮影車両の重さが足りないそうです。」

このままだと風のせいでもまっすぐ走れないとか。

カメラを乗せた車が真っ直ぐ走れないなら撮影は論外だと言われました。

撮影車両を役者に並走させるため、車の軌道がブレては最悪だと……」

「……画面範囲がブレるし、最悪役者轢きかねないしな。よし、ウルトラマン積み」

「う……ウルトラマンを!?! あのウルトラマンの自動販売機のやつですか!?!」

「重すぎてもダメだしな。あれで多分ちようどいい重さになる」

「すごいっすねウルトラマン」

「だろ、凄いなだウルトラマンは。他には?」

「あ、イントレ鉄パイプなどを組んだカメラ台の一種。カメラ位置を高くして高所からのアングルで撮影するために使われる。英二が夜風のシチューのCMの時に作っていた平台・箱馬の同族。映画『イントレランス』を名前の由来とするという説が一般的だが、本当のところ真偽は定かでなく、正式名称もない。通称がイントレで、店舗での取扱名称もイントレだが、あくまでそう呼ばれている以上のものではない。大別すると、校長先生の朝礼台のようなものと、背の高いやぐらのようなものの二種に分けられるもです。

あつちも風で倒れるからどうにかしてほしいと言われました」

「台風……というか、強風の中でイントレ使わないのは常識だからな。

強風の中でダンボールを縦に十個並べてその上に人が立つようなもんだから。

……よし、朝風さんが用意してたポリタンク使おう。

手が空いてる技術のない新人に水を片っ端から詰めさせる。

車に積んで運搬して、各イントレの足元に縛り付けて重さで固定しちまえばいいんだ」

「ああ、あの朝風さんが水難事故防止に使った……重さ足りるでしょうか？」

「3 m イントレでも重さは60 kg 程度とこだ。」

足四本に20 L ポリタンク四つで140 kg まで底上げできる。

安全を期すならもうちょっと欲しいところだがそこは追々調整だな」

「なるほど」

「まあどの道ポリタンクはイントレ全部カバーするには数足りないけどな」

「え」

「俺達美術は撮影準備終わったら手が空く。」

撮影始まったらイントレの足元掴んでやぐら倒れないようにするぞ。60 kg 分の重りにはなる」

「マジですか」

「マジだよ」

人手も物も余裕ねえなあ！

「とにかく仕事探せよ。」

今はサボってるやつ探して仕事指示してる余裕も無いんだ。

それぞれが仕事探して自分から仕事していつてもらわないと」
「ですね、行つてきます」

チーフと別れて歩いてると、色々声が聞こえてくる。

「美術が命張つてんだぞ、照明の俺達もやってやろうじゃねえか」

誰も手を抜いてないってことが分かる。

「頼むゼイントレ。」

道具に言うのも何だけど、台風からもブルーシートで頑張つて守つてやったんだ。

倒れないでくれよ……お前にシート被せてくれた朝風監督にくらいは恩に報いろ」

無茶苦茶な撮影でも、なんとかなる気がしてくる。聞こえてくる皆の声が、そう思わせる。

「え？ 僕らの技術で弾着撮影で弾丸などが人間などに当たった効果を演出するもの。怪獣スーツの皮膚に巧妙に隠した火薬を爆発させ、ミサイル着弾を表現するものなどがこれにあたる。デスアイランドの場合は、地面にミサイルが当たる大爆発の他にも、銃弾が地面に当たった弾着の表現が必要になる。できるんですか？」
「間に合わせですけどね。」

ほら、英二さんが刀を跳ね上げる仕組み作つてたじゃないですか。

あれを地面の中に仕込んでおけば地面が弾けます。

重火器でカレンとケイコの足元が撃たれて弾けるシーンはあれでいけるはずですよ」「ああ、なるほど！

そういえばあれデコピン式で、複数同時に起動するものでしたね！」

「あれを地面に埋めて泥を被せます。ちゃっちゃと終わらせましょう」

こうして歩いてると、朝風さんの普段の姿と、中央労働災害防止協会が制定した『映画、テレビ番組等の撮影現場等における労働災害防止』のためのガイドラインを思い出す。

この業界に入る前に、熱意のあまり何度も何度も読み返してたから、暗唱もできる。

ガイドラインだと監督は、『作業の危険防止措置』『部門間の連絡と調整』『作業場所の巡視』が義務付けられていた。

朝風さんが普段からやってたことだ。

部屋にこもって仕事に集中すりゃいいのに、物作りながら現場を見て飯食ってるなんてことまでしてた。

飯食う時くらい休めばいいのに。

自分の目で撮影をずっと見てたのは、いざという時自分を使わせるためだ。

千世子ちゃんと、千世子ちゃんの裏方に徹してた朝風さんによって、色んな部門が流れるように連携できてたから、撮影は加速できてたんだ。

あの人はずっと、そういうことをやってた。

「この高さのイントレ、上で照明やったら僕ら風で落ちませんか？」

「この高さだと死ぬかな……」

「台風の中高所で照明作業とかロックですね。照明掴んでたら照明ごと風で落ちそう」

「手すりさえないじゃないですかここ！」

「え、掴まれるところないここで？ 作業するんですか？」

「イントレのてっぺんってあそこ、周りの森の木より高くないですか？」

「あ、そうか。私達が今立つてるここ、森に守られてるんだ」

「イントレのてっぺんは木が風を遮ってないから千世子ちゃん達以上の暴風を受ける

……」

「あの高さやっぱりヤバいんじゃないですか!？」

「英二君から気休めだがこれを借りてきたぞ」

「え、チーフ、なんですかそれ」

「紫外線で超高速に固まる樹脂接着剤だそうだ。

「こいつや他道具を応用してお前達の靴の片方をイントレの頂点板に固着させる」

「マジですか!？」

「両方固めるとどうにもならなくなるからな。」

だが片方の靴はこれでガチガチに接着しておくぞ。

照明の足元もこれでガチガチに固定する。

時間がない、作業は急務だ。一刻も早く、照明の準備を整えるぞ！」

「イントレの改造といい頭が上がらねえっすね、美術監督には」

高所での安全対策。これもガイドラインで求められてた内容。

機材の落下防止、操作者の安全衛生の確保。これもガイドラインの内容。

制作作業に使用する道具の点検、及び補修と改善。これもガイドラインの内容。

「カメラレールどうする!？」

台風の中、撮影車から伸ばさなきゃダメだろ！」

「アキラ君が急斜面駆け上がった時の撮影で朝風さんが使ってたやつあるだろ！」

あれ朝風さんが補修してるから強度は十分だ、延長ならあれ使っとけばいい！」

「カメラ、照明、バッテリーのレインカバー防護完了しました！」

「よし。うちのリーダーが19日に朝風さん達に作らせたのがまさかここで役に立つ

とは……」

機材の強度確保、感電防止のための安全措置。これもガイドラインの内容だ。

監督部門、制作部門、演出部門、撮影部門、照明部門、録音部門、美術部門と、全ての分野におけるガイドラインを制覇する勢いで、朝風さんは労働災害防止の手を徹底し

て打っていた。

ダメだったのは……高所からの飛び降りとか潜水とかは技能習得者にやらせろとか、台風の中で撮影しなければならぬ時は安全第一、とかのガイドラインくらいだな。

こういう危険な撮影にまず反対してたあの人も、撮影に参加するとなったら安全対策に全力尽くすのも……あの人が今日まで積み上げて来たものが、あの人が今日まで作ってきたものが、ピンチになって初めて『皆の安全』を守るものになってんのも、あの人らしい。

皆の安全をずっと考えながら千の物を作ってきた人だから、1000の内の20や30は、朝風さんがいないところでも、人の命を守ってくれる。

朝風さんが大切に思う千世子ちゃんと夜凪ちゃんの安全を、少しでも底上げしてくれる。

凄えよな。

あの人はただの一度も手抜きをしなかった。

全ての造形に、『あの人のために』『この撮影の安全のために』っていう愛があった。

「まったくカメラマンまで酷使しやがって……しようがねえか、あんなに熱いとな」

「ですね。今日はカメラ以外も持ちましようや」

「そーいや朝風のやつ、遺書書いてたらしいぞ。」

この作業の責任は全て自分にあります、ってやつ。

何かあったら責任全部自分でおつ被って、映画の公開だけはさせるつもりみたいだ」
「えっ……本当ですか!」

「おう。昔の映画にあった、”逮捕され要員” っでの参考にしたらしい。

全ての罪を朝風が引き受けてる間は映画は無罪で公開もできるだろうって腹積もりだな」

「……なんか、嫌つすね」

「だろ? 調子乗ってんだあいつは。

何もかも自分が背負ってりやいと思ってるんだ気持ち悪い。

いいか、何も問題起こすんじゃねえぞ。

あいつの望み通りになんかしてやるな。

完全無欠に何も問題起こさず撮影終わらせて、罪なんて背負わせず終わらせてやれ」
「いいつすねー、それ」

「19日目にあいつら滑り止め追加した長靴大量に作ってたらしいからな。

作業がある程度終わったら俺達もそれに履き替えて、試し撮りだ!

台風内で狙い通りの画を撮るにはいつも通りじゃ絶対ダメだ!

台風内で必要な角度と必要な光量! あと数時間で検証を完了させるぞ!」

「はい！」

カメラマンも……それに、監督も。台風の中、ずぶ濡れになりながら駆け回ってる。
「手塚監督……大丈夫なんですか、この撮影」

「信じるしかないね」

「信じるしかないって……テストも練習もしてないんですよ？」

なのにクライマックス、つまり映画の最も盛り上がる十数分です。

ぶつつけ本番で成功するかどうか以前に、台詞にミスが出ますよきつと。

短いカットと比較すればこのワンカットの時間は百倍近いです。

ということは台風が無かったとしても、このカットでミスが出る確率は百倍近いんですよ？？」

「うん、まあ、そうなるかな。

僕は夜風ちゃんを信じてるけど、他の人はそうでもないだろうからね。

だから君達は千世子ちゃんを信じるといい。

あの子が僕や二代目の期待を裏切ったところなんて、一度も見たことないからさ」

「……千世子ちゃんを信じる……夜風景の手綱も握ってやりきってくれ、とっ！」

「いつでもそうだ。

どこでもそうだ。

『俳優』じゃなくて『スタッフ』で『裏方』な僕達の宿命つてやつかな。

やるだけやって、準備するだけ準備して……本番が始まれば、あとは俳優に任せるしかない」

「……」

「俳優を信じて、カメラを回して、信じて待つことしか、僕達にできることはない」

「……そう、ですね」

「大丈夫だ。やり遂げてくれるさ」

「分かりました。」

信じます。

真に映画を作る主演、映画を完成させられる中心……俳優達を」

色んな人の声に耳を傾けながら、俺は様々な部門の人達を助けに助け、何時間も休まず動き続ける。正直キツかったが、休みたくなかった。

この流れの中で、じつとなんてしていられなかった。

「！」

遠くに戻って来た朝風さんが見えて、俺は駆け出した。

どうやらネットを斜面に張り終わったらしい。

周りの人と話してる朝風さんが見える。

「爆薬はどうします?」

「俺の指示通りに単純作業してください。」

爆薬は資格持ちの俺がやりますが、爆薬を埋める地面の穴などは皆さんにお願いし
ます。

俺と息を合わせて皆さんがどれだけの確に作業できるかが、スピードに直結しま
す。今回仕込む爆破は三種です。

紅蓮の炎を上げるナパーム、色付きのセメントを吹き上げるセメント、そして弾着で
す」

「はい! 掘る穴の種類は把握してます!」

「ナパームは俳優からかなり遠ざけます。」

爆薬設置位置は綿密に管理し、ミスが無いように。

俳優を爆発に巻き込まないように。

撮影者を爆発に巻き込まないように。

爆発設置位置は精密に記録して、俳優と監督にミスなく連絡してください。

それと夜風さんです。

夜風さんは爆薬の設置位置を教えても演技が始まると忘れてしまいます。

百城さんがある程度走るルートを調整してはくれますが……

夜風さんがそういう人間だということを念頭に置いて爆薬を設置しますので、お気を
つけを」

「了解つす」

「ナパームはガソリン抑えめで。」

セメント爆破は土砂と同色に着色してありますので、土砂の爆発に見えるはずで
す。カラーセメントですね。俳優近くの爆発はこれでいきます。

あ、俺が作ったセメント爆破セットは細心の注意を払って地面に埋め込んでくださ
い」

「? 気を付けるのはガソリン使うナパームの方では?」

「特撮現場で灰色の煙が勢いよく伸びる爆発見たことありませんか?」

あれがセメント爆発です。よく見ると爆発が尖つてますよね?」

あれ、尖らせるためにセメントを踏み固めてるんです。

特撮ヒーロー物で発達した技術なんですよ、あれ。

俺が踏み固めた容器内のセメントが崩れると、おそらく思ったように爆発が伸びませ
ん。

百城さんと景さんを守るため。

かつ、見栄えのいい爆発をさせるため。セメントの扱いこそ、特に気を付けてくださ

「い

「……ああ！なるほど！」

朝風さんの作業の援軍に行くべく、俺は走る。

あの人の頑張りは全て、俳優の栄光に変換される。

画面に映らねえ裏方でしかねえ朝風さんの尽力は、画面に映る俳優のためにある。

オレには俳優の誰がどんな性格なのか、どのくらい愛想振りまいてて、どのくらい素の性格が悪いのかも分からねえ。

だけど、覚えておいてほしい。

俳優が覚えてくれてるかも分からないけれど、一人でも多く覚えておいてほしい。

人が死ぬところを見たくない、そんな優しい思い一つで何度も徹夜して撮影の安全性高める物を作りまくってたような、そんな奴が一人いたことを。

垣間見えた、彼の悪夢。

まだ彼の心に刺さつてゐる楔。

私が私の意志で望み、臨んだこの撮影で、私が生きて帰るだけで、英二君／英二くんが悪夢の一つから解放されるなら。

私が命がけで撮影に挑む沢山の理由の一つに、その理由を加えてもいいと、そう思えた。

私に、英二君／英二くんは言った。

見習うところが、吸収できるところがあると。

競い合つてほしいと。

私と夜風さん／千世子ちゃんを見ながら言った。

そこに複雑な想いを抱いたこともある。

でも、今はそうじゃない。

私は私であればいい。

私らしく演じて、私らしくやり遂げて、私らしく期待に応えればいい。

私は、役者だから。

最高の自分になろう。

英二君が私に望んだことは夜風さん／千世子ちゃんになることじゃない。

最高の私になることだ。

夜風さん／千世子ちゃんのコピーではなく、最高の百城千世子／最高の夜風景になるう。

「ワンカット長回し一発撮りで行く！」

危険な撮影だがこれでも僕らはプロだ！

君達のことは必ず僕達を守る！ 宜しく頼む!!」

手塚監督がらしくなく、声を張り上げている。

裏方のスタツフ皆を代表するように。

監督として、皆の想いを代弁するように。

周りを見る。

駆け回る人達が、私達の安全のために皆して全力を尽くしてくれている。

プロと自称するだけで無責任に大したこととしてない人の言葉じゃなくて、プロを名乗る人に相応のことをしてくれていることは、分かっている。

大丈夫。

信じられる。

「はい……い！」

「はい」

強い決意を滲ませて、夜風さんが私の隣でそう言うのが聞こえた。

いつも通りに、平然とした千世子ちゃんが私の隣でそう言うのが聞こえた。色々とあった。

色々な感情を、この人に対して抱いた。

でも、今は少し違う。

共演できると、このクライマックスを共に駆け抜けられると、少しは信じられたから。そういう人間なんだって、教えてもらえたから。

この映画の心臓を作るために。私はこの人と駆け抜けよう。

カメラの方を見る。

全身青アザと擦り傷だらけで、切り傷から血を流した英二君／英二くんが撮影準備と安全対策のラストスパートをかけながら、こつちを見て親指を立てていた。

「幸運を祈る」と言わんばかりに。

それに、思わず笑ってしまう。

——本当に優しいのね。人のためばかり考えている

ふと、『ローマの休日』のとある台詞を思い出す。

彼に言ったら全否定されそうだ、なんて思いながら。

私は、自分の外側に仮面を貼り付けた／自分の心の内面を掘り出した。

百城千世子の『アクターズ』

好きになれないと、そう思っていた。

いつも綺麗に笑っている千世子ちゃんを、人形みたいだと思った。

心の無い演技を。

他の人の心ある演技を、そうでないものに加工してしまう演技を。

好きになれないと、思っていた。

私の芝居の心を否定された時、友達になれないと思った。

私は何も知らなかった。

英二くと手塚監督は知っていた。

あの仮面は、千世子ちゃんの映画への執念そのものなんだって。

だから英二くんはそれを守ろうとして、手塚監督はそれを壊そうとした。

手塚監督はそれ以外のものが見たい人で、英二くんは友達が大切になっているものを同じように大切にしている人だったから。

私は何も知らなかった。

千世子ちゃんのその勇ましさを、その優しさを、その美しさを。

英二くんが守ろうとしていたものを。

多くの人の羨望と、期待と、信頼を向けられる千世子ちゃんのその強さを。

それを知った時、私は初めて千世子ちゃんを好きになれた。

私じゃきつと同じにはなれないその美しさを尊敬して、初めて好きになれた。

だから『カレン』。私はあなたを、大切に想っている。

「よーい、スタート！」

皆死んでしまった。

皆いなくなってしまった。

残っているのは私とカレンだけ。

「森の中のあの建物に、きつとこのゲームの主権者がいるんだわ。

直接会ってちやんと話し合うの！ きつと分かってくれるはず……！！

大丈夫、ケイコは私が絶対守るから。こんなの捨てちやおう」

カレンが私の手を引いてくれる。

流されるだけだった私の手を引いてくれる。

それがいつも通りで、とても気楽で、でも申し訳なくて。

私にできる何かは無いかと探しても、何も無い。

私は結局最後まで、“流されるだけのケイコ”だった。

カレンは、とても綺麗だ。

キラキラしていて、遠くを見ていて、本当は誰よりも優しく、皆から憧れられる存在。

その周りにはいつもたくさんの方が居て、いつだって皆を引っ張って行く。強く綺麗な憧れの気持ち、カレンに対してだけは抱ける。

カレンは本当に、天使みたいに綺麗だった。

「時間がない。夜明けまでに見つけないと！ 行くよ、ケイコ」

「うん」

だから思った。

私も必ず、あなたを守る。

”カレン”。あなたを守る。

夜風さんは、私を好きになれない人だったんだと思う。

でも明確に嫌いかと言うと、また少し違う感じだったんだと思う。

夜風さんから私に対する感情は、どこまでいっても”好きになれない”止まりだった気がする。

でも私は、初対面の時から……夜風さんが少し嫌いだった。

きつと私が一千時間かけても、片鱗すら掴めないような演技。

私が一万時間かけて得たような力量を、鼻歌混じりに獲得する才覚。

これは嫉妬？ もつと醜い感情？ もつと綺麗な感情？

私は英二君ほど言語化が上手くない。

でもきつと、今ここにあるこれは、憧れと言つていい感情だと思う。

何も知らなかったから。

私は、夜風さんのことを何も知らなかったから。

懸命なことも、必死なことも、生真面目なことも知らないで、勝手に知った気になつ

てた。

色んなことが羨ましくて、妬ましくて……他の人の前ではちゃんと被れていた仮面

が、夜風さんの前では度々外れかけてしまった。

だから、ちゃんと手を引こう。

あなたの手を引き、必要ならその芝居を加工しよう。

この作品に、私に向き合おうとしてくれてるあなたに伝えるために。

私とあなたでこの撮影を最後まで走り切るために。

夜風さんは、とても綺麗だ。

キラキラしていて、遠くを見ていて、本当は誰よりも優しく、皆から憧れられる存在。

望んでもいないのに自然と人を惹きつけて、いつだって皆を引つ張っていく。

今なら素直に、その芝居に憧れていた自分を受け入れられる。

夜風さんは本当に、夜空のように綺麗だった。

「時間が無い。夜明けまでに見つけないと！ 行くよ、ケイコ」

「うん」

行こう、夜風さん。

この作品を、私達二人で完成させるために。

千世子ちゃんと一緒に走っている私がいる。

そんな私と千世子ちゃんを、少し離れて眺めている私がいる。

私は一人で、私はたくさん。

私の心はたくさんあって、私の視点はたくさんある。

黒山さんはこれを、俯瞰と言っていた。

千世子ちゃんを本気でカレンだと思い、千世子ちゃんと一緒に走っている私を、カメ

ラに貼り付けられた目玉の私が見ている。

それを見ながら、私はふと、英二くんがぼろつとこぼしていたことを思い出した。

『俳優の俳の字は、神事などで仮面を付けて踊った人のことを指したものだそうです。

仮面を付け、人の顔を捨て、人に非ざる者になる……

やがて歌舞伎、演劇の祖になったものが、その仮面を付けた舞踊であるとか』

千世子ちゃんは今日も仮面を付けたまま。

仮面を付けた千世子ちゃんと私が、台風の中、暴風雨の中を駆けている。

『日本におけるその手の神事は、アメノウズメ……

アマテラスの岩戸の前で踊った踊り子が起源だと言われています。

だから”人に非ず”と書いて、”俳”なんです。

日本における俳優、演劇というものの祖は、女優と言うこともできるのかもしれないませ

ん』

なんて綺麗に走るんだろう。

雨の中、風の中、靴は泥だらけで、跳ねた泥水が足に着いてるくらいなのに。

髪は雨に濡れて、風で乱れて、服もぐしょ濡れになって髪と一緒に貼り付いてるのに。

綺麗にしか見えない。

全然汚れてるように見えない。

まるで、人間じゃないみたい。

千世子ちゃんを周りの人が天使って呼び始めた理由が、よく分かった。

『人に非ず、ゆえに俳。』

俳にして優れている者こそが”俳優”。

もしかしたら、昔は俳優というものは……

人間じゃないように見えるくらいに優れた人を意味する名称だったのかもしれない
ん』

千世子ちゃんを見てると、英二くんが言ってたことに納得できる。

仮面を付け、人じゃなく見えるくらいに美しく、手が届かない高さまで上がっていき
そうなくらいに綺麗に、巧みに泥の上を・風雨の中を駆ける千世子ちゃん。

その姿は、こうなりたいつていう憧れと、こうはなれないつて諦めを同時に抱かせる。

冷静さの怪物だ。

私は懸命に、千世子ちゃんに並走した。

いつも通りの綺麗な表情で私の一歩前を常に走り続ける千世子ちゃんは、やっぱり凄
い。

『カレン』は私の友達だから、それが当然のことだった。

英二君が前に言つてた……人に非ず、だっけ。

夜風さんを見てると、この人こそがそうなんだって思い知る。

私は色んなものを研究して、色んなものを技術として取り込んできた。だから分かる。

これって、人間に可能なものなの？

地面には穴や凸凹がたくさんあつて、泥の水たまりにぬかるんだ部分、草が生えた部分に樹木の根っこが露出して部分まである。

私みたいに事前に徹底的に検討し、足場の調査もしていたなら分かる。

でも夜風さんは、そんなことはもちろんしてないし、それどころか自分が今お芝居をしていることすら忘れてる。

なのになんで、一度も転びすらしなの？

完全に主観視点で走っているはずなのに、しっかりと周りが見えてる。

照明の光を頼りに、分厚い雲のせいで光がほとんどない暗いこの道で、地面の凸凹に足を取られることすらない。

映画としては、それが当然。

でもリアルな芝居をする夜風さんなら、一回くらいは転ぶのが自然だ。

なのに転んでいないのは、夜風さんが転ばないようにしてるから。

それは夜風さんが、自分をコントロールしない芝居をしながらも、自分を俯瞰して視てコントロールしているっていう矛盾だ。

良い視力で地面を捉え、高い反射神経で素早く反応し、リアルな動きで地面のぬかるんだ部分などを回避して、私が走った場所へ安全に走れる場所と認識し記憶し、的確に走る。

泥臭い芝居なのに、転ばない。

なんて人間らしい、人間離れた芝居。

脚力が勝る夜風さんと私が並走できているのは、私がこういう状況でどう走るかを十分に練習してきた人間で、どのルートを走るかを事前に考えて、計算し尽くした無駄の無い走りをしているからだ。

夜風さんはその場で反射的に最善の走り方・足の踏み場・走行ルートを選択している分、本気で走っていても私ほど全力を出し切れていない。

逆に言えばその前提で初めて、私と夜風さんは互角だったということだ。

熱意一つで全て乗り越えられる、人に非ざる優れた者。

一緒に演技しているだけで思い知らされる。

その姿は、こうなりたいたってという憧れと、こうはなれないって諦めを同時に抱かせる。

熱意の怪物だ。

私は懸命に、主人公として、夜風さんの前を走り続ける。

芝居の途中でも成長を続ける夜風さんの一歩先を走り続けるだけで、私は精一杯だった。

「A地点通過しました！」

「あいよ」

「この雨でちゃんと点火してくれますかね?!」

「なめんな」

聞こえる。

夜風さんには聞こえてないかもしれないけど、周りさえ見ていれば、私達の撮影を支えてくれている裏方の人達の姿も見える。その声も聞こえる。

カメラに映ってない範囲を駆け回ってる英二君の姿も見える。

来る。爆発だ。

どおん、と地面が爆発する。

英二君のテクニックで”尖った”爆発は、私が事前に言っておいたルートを走る限り、絶対に私に当たることはない。

私は芝居をしながら予定ルートから誤差1cm以内で走り、英二君も爆発位置と爆風

の通過範囲を誤差1cm以内に抑える。

私達は互いを信頼し、互いの信頼に応える。だからこそ怪我也事故もありえない。

英二君の本領はウルトラマンの光線が当たった怪獣が爆発する瞬間を表現する人形の爆発らしいけど、地面を爆発させても彼は一流だ。

私は走るルートを調整し、身振り手振りの動きを加えて、私と一緒に走っている夜風さんの走行ルートをコントロールして、爆発に当てないようにする。

役に入れ込みすぎる夜風さんだとうっかり爆発に巻き込まれることも……いや、最悪、ミサイルに当たる自分の方がリアルだと判断して、爆発をそもそも避けないかもしれない。

芝居をしながら、爆発の合間を抜けて、夜風さんをコントロールして、全力で走らないと。

それにしても夜風さん。本当に、怪物だ。

このシーンは、ミサイルが空から飛んで来て、走る私達の近くの地面が爆裂するシーン。

夜風さんはこのシーンに合わせて、爆発の直前に空を見上げる仕草を見せた。

後で英二君が作った模型のミサイルを空に合成すれば、爆発の直前に空を見上げた夜風さんの動きのおかげで、随分リアルに見えるかもしれない。

でもこれは。これまでの夜風さんの演技とは、決定的に違う。

目の前に殺人者がいて、それに妥当な反応を見せるなら分かる。

目の前に崖があつて、そこに妥当に飛び込んで逃げるなら分かる。

役に入り込んだ夜風さんの目に見えて、耳に聞こえたんだから、反応するのは当然な
んだから。

でも今、夜風さんが空を見上げる理由は無かつたはず。

空には何も無いし、空から何も音はしなかつたんだから。

爆発の直前だったから、何も起こつてなかつたはずなんだから。

なのに夜風さんは、空にミサイルを見つけたかのように、空を急に見上げた。

何も起こつてない爆発の直前に、夜風さんは空にミサイルの幻覚を確かに見ていた。

”私はカレンと一緒に走っている夜風さんだ”と思ひ込んで走つていて、芝居をしてい
ることすら忘れていた夜風さんがいた。

自分をケイコだと思ひ込んでいる夜風さんを、俯瞰視点で見ている夜風さんがいて、
その夜風さんが、自分をケイコだと思ひ込んでいる夜風さんにミサイルのイメージを見
せた。

幻覚を見せた夜風さんと、幻覚を見せられた夜風さん。

二重人格じみた一人二役。

「そうでもしないと、夜風さんがミサイルの幻覚を見て空を見上げるなんて出来やしない。」

なんて、異常。

自分の思い込みで、芝居をしている自分にとっての現実を捻じ曲げて、それを見ている周りに人にすら一定の錯覚を生みその人達にとっての現実まで捻じ曲げてしまう。

私達の周りで続いている爆発より、こっちの方がずっと怖い。

私まで夜風さんに飲まれてしまったら。

夜風さんがこの場面の主役になって、私が主役でなくなって、作品が破綻してしまう。

「あ」

小さく漏れた夜風さんの声が爆発に飲まれて、私は夜風さんに押し倒されるように、夜風さんに庇われた。

予定にない演技。

けれど”ケイコが爆発からカレンを庇う”というワンシーンが成立して、カメラ視点だと最高のワンカットになったことが、感覚的に分かった。

予定にない芝居は、私がコントロールしないと。……流れが、不味い。

「カレン！ 大丈夫!?!」

——ああ、そっか。そうなれたんだ、そう思えたんだ、夜風さん。

「伏せて！ 遠くから狙われてる！ 私達を近づかせないつもりだわ！」

理由は分からない。でも確かにこの子は、私をカレンだと認識し始めている。厄介だ。

「ありがとうケイコ。行こう」

役に入れば入り込むほど、夜風さんの芝居の質は上がる。

周りを引き込むものになる。

私を本当に友達だと思えたなら、その時こそ夜風さんは最大の能力を發揮して……夜風さんの最高の演技と、最高の見せ場が揃ってしまう。

端役止まりのシーンならまだしも、ここでそれをやられたら。

……そうだったら、あまりよろしくないかな。

早めに芝居を仕上げて……え？

夜風さんが、座り込んだまま私の手を無言で掴んでる。

——”カレンに傷付いてほしくない”って感情が、伝わってくる。

これは、凄いなあ。本当に。思わず歯噛みしたくなる。

夜風さんは何も言っていないのに、感情が伝わってくる。百の言葉が伝わってくる。

カメラ横の手塚監督にも、画面を見てる他の俳優さん達にも、きつと無言のままの夜

風さんの気持ちは伝わってるだろう。

カレンに傷付いてほしくなくて、怖がってて、こんなことをしてるんだって気持ちだが、誤解なく全員に伝わってるだろう。

カメラ越しにも絶対に伝わる。

どんな人間にも共通の見解を伝える。

たった一つの解釈しか許さず、カメラ越しにも観客に伝える強烈な伝達力と演技力。

ケイコはこの場面なら絶対にこうする、と他の人も皆頷くような、場面に合った妥当で最適なアドリブ。撮影の破壊行動だ。

私も一瞬、夜風さんがケイコにしか見えなかった。

生半可な芝居をしても、こうなったら夜風さんは動かさない。

中途半端な芝居をすれば、夜風さんの芝居に引つ張られてもう前に進む流れには戻せない。

全ての裏方と俳優が作り上げた一連のストーリーを、夜風さんの芝居が持つ破壊力と説得力は覆してしまいかねない。

それを止められるのは、私一人。

うん、そうだ。

やっつてやろう。

手塚監督は私の仮面が夜風さんに壊されることを……夜風さんが私に勝つことを期

待してるみたいだけど、少なくとも英二君は、私の方を信じてくれているらしいから。

「ケイコ。大丈夫」

夜風さん——喰わせないよ。

「行こう」

私は夜風さんの頬に手を当てて、『大切な親友同士のように』、優しく語りかけた。

千世子ちゃんは凄い。

どんな人生を生きて、どんな選択をして生きてたらそうなるんだろう。

私はきつと、千世子ちゃんのそれには及ばない。

私はずっと逃げていただけだ。

映画の世界に逃げて、逃げて、逃げた先で黒山さんに拾われて、女優になっただけ。

私より千世子ちゃんの方が素敵なことは、私が一番よく知っている。

父に捨てられ、母は死に、ルイとレイのために毎日余った時間を全てバイトに費やした。

そんな現実に向き合いたくなくて、映画を見て架空の世界に逃げ込んだのは、私の弱さだ。

英二くんだって、きつと千世子ちゃんだって、楽なだけの人生を送ってたわけがない。少なくとも、私が見てきた凄い人達は、私がしてこなかったような努力をした人達だった。

「ケイコ。大丈夫」

もう知っている。その仮面の意味を。

「行こう」

それはあなたの、映画への執念そのものなんだと。

「うん、行こう」

立ち上がって、千世子ちゃんに手を引かれて走り出す。

千世子ちゃんに出会えてよかったと、素直に思える。

この人となら、どこへでも行ける。

英二くんが俳優同士高め合うことを願っていた理由が、少しだけ分かった。

自分一人では行けなそうな場所にも、千世子ちゃんに”行こう”と言われると、千世

子ちゃんと一緒にならと思うと、行けると思える。

千世子ちゃんに対して”負けるか”と思うと、たくさん力が湧いてくる。

私の少し先を走っている千世子ちゃんが、私を引っ張って、もっと高めてくれる。

英二くんが時々言ってた『戦友』っていうのは、きつとこれだ。

私達俳優は。

役者で在り続ける限り。

きつとずっと、ひとりじゃない。

それはきつと、とても幸せなことなんだわ。

夜風さんから不安が消えるのが、見て取れた。

「うん、行くこう」

夜風さんの手を引いて、立ち上がった夜風さんを先導するように走り出す。

よし。

なんとかなったかな。

最初は面倒臭いとか、厄介とか、そんな風に思っていたけど……手がかかった分だけ名演を見せてくれる夜風さんのコントロールが、ちよつと楽しくなってきた気がする。

ほんのちよつとだけだ。

「動き始めました、B地点通過。後30秒ほどでそちらへ着くかと」

ちらちらと、裏方の声も聞こえる。

後少しだよ。裏方の人達も、もう少しだけ頑張つて。

夜風さんは凄い。

どんな人生を生きて、どんな選択をして生きてたらそうなるのかな。

私はきつと、夜風さんのそれには及ばないだろう。

私はずっと逃げていただけだ。

映画の世界に逃げて、逃げて、憧れを理由に女優になって、天職を見つけただけ。

私より夜風さんの方が素敵なことは、私が一番よく知っている。

横顔を見られるのが怖かった。

自分の横顔を見られることを怖がらない、夜風さんとは対照的に。

現実から逃げるために映画を見て、架空の世界に逃げ込み、自分を捨てた。

自分を使い、自分を見せる、夜風さんとは対照的に。

とても、とても生き辛かったから、横顔を他人に見られないように、仮面を被せた。

色とりどりの横顔を他人に見せる夜風さんとは対照的に。

夜風さんはいい人だね。

私の友達を演じられるということは、私のことを友達だと思えるようになったということ。

ことで、私のことを仮面ごと大切に思ってくれるようになったこと。

それが、嬉しい。

「来た、隠れてケイコー！」

地面が弾着で小さく爆発する。

怪獣のスーツの表面に銃弾が当たる表現と同じものが、英二君の技術によって地面上に発生している。

そこに本当に銃弾が当たっているかのよう。

私と夜風さんは作りもの大岩の影に隠れて、迫真の演技を続けた。

「やっぱり脅しだわ！ 当てる気ないみたい！ どうして!？」

「仲間同士で殺し合わせたいだけなんだ！」

「酷い……！ 何のために!？」

なんて迫真の演技。

リアリティを求める芝居なら、役に入り込む芝居なら、感情が乗った演技なら、もう夜風さんのそれを私が超えることなんてできない。

表現力と立ち回りで夜風さんより目立つことはできるけど、それだけだ。

夜風さんをもっと私の芝居を引き立てるために使えるように、調整しないと。

岩陰の演技は走らなくていいから、芝居をしながら一息つく。

……本物だ。夜風さんは、本物だ。

私の芝居と違って、夜風さんの芝居には魂がこもってる。

きつとモニター越しにお芝居を見てる俳優の皆も、私の芝居じゃなくて夜風さんの芝

居にばっかり言及してるんだらうな。

見なくても、なんとなく分かる。

画面越しに魂を揺さぶるパワーは、夜風さんだけが持っている強烈な個性だ。

——美しい作り物は魂がこもってるものだけだと、母さんが言ってた

ああ、なんで小学校の時に英二君が言ってたこと思い出しちゃうんだらう。

夜風さんは自分全てを加工する。

心も、体も、魂も、全身何もかもその役になりきるかのような芝居をする。

魂のこもった仮面を被るのが私なら、全身全てで演じてその全てに魂がこもってるのが夜風さんで……それがとても、羨ましい。

——良いと思うよ。俺は美しいと思う。だって、魂込めて描いたつてことは伝わってくるから

——……あ、あー。もしかして絵の子？

英二君もすっかり忘れてるような、私はすっかり覚えてること。

私と英二君が少しの間だけ、同じ小学校に通っていたことも。

私が描いた絵を褒めてもらったことも。

あの時の私が、今のままの私じゃ英二君の友達にもなれないと思つたことも、忘れな
い。

全部、私の大切な思い出だ。

彼は魂がこもった作り物が好き。十年前も、十年経つてもそうだった。私の仮面も、夜風さんの芝居も。

そして、好きにあんまり上下を付けない人だつてことを、私は知っている。なら私はこの仮面を付け続けよう。

夜風さんの芝居が私の芝居を喰つて主役になりかねないと分かっている、胸を張つて仮面を付け続けよう。

最後まで。

最後まで、千世子ちゃんと駆け抜ける。それだけを胸に走り続ける。

ケイコとしての私。

現場を見下ろす俯瞰の私。

ケイコは大事な友だちだと、夜風景は大切な戦友だと、そう思ってるから。

そんなことが起ころうと『その作品を完成させるといふ自分の役目を完遂する』つていう、執念つて言い換えてもいくらいの強い想い。

それが、千世子ちゃんと英二くんにはある。

それが、私にはまだないのかもしれない。

執念。

妄執。

あの二人には自分の命より大切なものがあって、同じものを大切にしているんだ。

私が大切にしているものを、英二くんが同じように大切にしてくれているのと同じように。

天使は、なんでこんなに綺麗でいられるんだろう。

なんでこんなに、どんどん綺麗になるんだろう。

千世子ちゃんに追いつこうとしても、追い越そうとしても、私の芝居を1良くするたびに千世子ちゃんの芝居は1綺麗になっていく。

このワンカットの間に、千世子ちゃんの芝居はどんどん綺麗になっていく。

どんどん手が届かないような高みにまで昇っていく。

本物の天使が飛ばたい、空高くまで行くように。

「やっぱり脅しだわ！ 当てる気ないみたい！ どうして!?!」

「仲間同士で殺し合わせたいだけなんだ!」

「酷い……! 何のために!」

スターズの天使・百城千世子。

なんで彼女が私達の世代のトップなのか。

なんで他の天才がどんなに努力しても、千世子ちゃんには敵わなかったのか。

なんで私が千世子ちゃんを参考にして技術を吸収してるのに、追いつけないのか。

その理由が、分かった気がした。

「攻撃の止んだ今のうちに！」

「うん！」

英二くんが仕込んだ弾着の起動が終わって、私の目に見えていた銃撃が止んで、銃撃が止んだ嵐の中を私と千世子ちゃんが走り出す。

滝のような雨。

壁のような逆風。

飛び散る泥水。

光の無い周囲。

そのどれもが、千世子ちゃんの綺麗さを損なわない。

「ああ」

嵐の中でも、闇の中で光り輝く天使のように、千世子ちゃんの芝居は光り輝いていた。

「見えてきたよ、ケイコ」

思わず、千世子ちゃん的笑顔を横から見ていた私は、笑顔になってしまう。

千世子ちゃんの芝居につられて、つい笑顔にさせられてしまった。
なんて素敵で、綺麗な笑顔。

苦境の中でこそ輝く天使……まるで、神話的一幕でも見てみたい。

「……うん！」

私はケイコ。

カレンは私の友達だ。

あそこに見える施設に全ての黒幕がいる。だから、私は——

「」

——。水——？

増水？ 洪水？ 鉄砲水？

カレンが水に足を取られた？

カレンの足が浮いてる。踏ん張れない？

——カレンが流されて——そっちは斜面——カレンが死——死——？

「カレン！」

考えるより先に、カレンを掴んで、引き戻して、代わりに私が斜面に落ちた。

うん。

これでいい。

洪水に流されながら落ちていって……私はここで死ぬけど、これでいい。

私はここまで、何もできなかった。

友達が死んでいくのを見ているだけだった。

カレンみたいに何かを提案して皆を引っ張って来れなかった。

でも、何もできない私が最後に、カレンを助けられたなら。

きつとそこには、意味があると思うの。

「行つて」

凄い勢いで、体が斜面を流れ落ちていく。

私の頭を下にして、私の体が流れ落ちていく。

速いウォータースライダーつて、時速40kmくらいあるんだっけ？

もう助からないと思った私の目には、景色が流れるのがゆっくりに見えて、のんきな

ことが頭に浮かんできってしまう。

凄い角度の斜面。

私、きつと助からないかな。

こんな天然自然の急斜面に、助かる理由なんてあるわけないし。

「ケイコー！」

カレンの声が聞こえて、私はやがて来る痛みが怖くなって、目を閉じた。

その叫びは。

「ケイコ！」

きつと、百城千世子のもので、カレンのものであった。

私を助けてくれた夜風さんへのもので、私を助けてくれたケイコへのものであった。

咄嗟に役の名前が出たのは、夜風さんの命がけの行動が……ケイコという芝居が、仮面で演じる私でさえ、心の底から『カレン』にしてしまったということ。

友達が、私の、代わりに。

台詞が出てこない。

言え台詞を。

作れ仮面かおを。

それが私の仕事だ。

いつも私が一人で支えてきた。今回だって。

「ありがとう」と、最後の台詞を。

いつものように。

いつもの仮面かおで。

いつもの仮面かおで――

「ありがとう」

いつもの顔が出来てなかったことは、自覚できていた。

いつもの仮面が作れていなかったことは、自分でも分かっていた。

夜風さんのように、役と自分の境界が無くなって、百城千世子として／カレンとして夜風景に／ケイコに、『ありがとう』と言っていた。

本物の涙が、溢れ出そうになっていた。

行つてと言われた。肯定的な返答を返せなかった。行けなかった。足が動かなかつた。

二人分のありがとうを言つて、そのままそこにへたりこんでしまった。

「カット、OK」

私が、皆が、走り出す。

「急げ！ 林の向こうに落ちたぞ!!」

「千世子さんも避難させて!!」

思わず、声を張り上げていた。きっと今の私は、仮面なんて全く被れてない。

「お願い！ 急いで!! 夜風さんを助けて!!」

夜風さんの体一つをさらってしまいうくらい、川の増水による水の濁流。

増水した川から流れ込んできたものだから、水の流れはまだ止まってない。

濁流が通り過ぎた斜面は全部ドロドロかヌルヌルで、足を踏み入れたら確実に滑る。

そんなことにすら、私は気付いていなかった。

「あ」

夜風さんを身一つで助けに行こうとした私の足が、斜面で滑る。

迂闊で愚かな私の行動は——私の怪我という結果には繋がらず、私の体は優しく抱きしめられるようにして、落ちないように支えられていた。

「危ないことしないでください、百城さん」

「……英二君!」

「要救助者を何の準備もなく助けに行こうとして、自分も要救助者になる人っているんですよ」

英二君は私を抱えながら、斜面をロープでするする降りていく。

その過程で、色んな人に指示を出していた。

「助監督!」

レフ板でもなんでもいいです、板状のものを立ててください!

景さんを流した濁流を一回止めてください！

手の空いてる人医療班に連絡！

汚れた水が傷口に触れてたら破傷風までありますよ！

チーフ！ 前に景さんがゲロ吐いた時に使った簡易担架キット準備！

美術班！ 車のウィンチからロープ垂らす準備は完了してるはずですが、こつち垂らして！」

指示は冷静だけど、声色はとても焦っていて、英二君にとって夜風さんがどのくらい大切なか伝わってくるかのようだった。

私なんて降ろしちやえばいいのに、夜風さんが心配でたまらないくせに、降りるスピードが遅くなると分かっていても私を大事に抱えながら降りていく。

英二君にとって私がどのくらい大切なのか伝わってくるかのようだった。

「いた！……よし、ネットだ！ ネットに引っかかっている！」

頭から突っ込んで……よかった、ネット以外のものにぶつかってなくて……！！

英二君が心底安堵した声を出して、私を降ろしてくれる。

私は無我夢中で、夜風さんに駆け寄った。

「夜風さん!! 夜風さん大丈夫!」

夜風さんがうつすらと目を開けて、こつちを見た。

「千世子ちゃん。私……顔、ケガしてない？」

——ああ。

今の私、仮面すら付けられてない表情で、とつてもいい顔で笑ってる気がする。

自分の命の心配より、自分の顔に傷が付いていないか、撮影に影響が出ないかを気にする女優。

私と同じ考え方ができる女優。

「役者さんだもんね。大丈夫。綺麗なままだよ」

滑らないように、木を掴んだり地面の凹凸に足を引つ掛けた人達が、次々降りてくる。皆心配そうに降りてくる。

沢山の人が降りて来る。

凄いやね、夜風さんは。

いつの間にか芝居一つで、裏方の人達にもこんなにも沢山、好かれてたんだから。

「朝風さん。斜面上で担架組めました」

「じゃあ景さん、ちよつと失礼しますよ。

俺が抱えて、俺と夜風さんをセットで上の車が引つ張り上げます。

ゆっくり引つ張り上げますので、痛い所があったりどこかが引つかかっただら言ってください」

「うん、わかったわ」

「では」

「ひゃっ」

「あ、夜風さんお姫様抱っこだ」

女の子の夢。

「え、英二くん……別のやり方で……」

「どこが怪我してるか分からないんですから、動かないでください」

「英二君、夜風さん抱いてる手付きがやらしくくない？」

「いや全然やらしくないと思いますけど」

「やらしいよね、夜風さんもそう思うよね」

「う……そう言われるとそんな気がしてきたわ……英二くんのドスケベ大魔神……」

「二人まとめて斜面に投げ捨てていきましょか？」

うっわー英二君余裕ない。

やっぱ余裕なくなってたか。

……私も人のことは言えないけど。

でも英二君、どこか心の問題に決着が付いたような表情してる。

作品のために命をかけて、無事終わらせた。

宣誓してから、英二君の前で、事故で死なない姿を、英二君を置いていかない姿を見せた。

きつとそれは、英二君にとつて小さなことじゃないと思う。

？ 英二君がこつちをじつと見てる……う？

「あ」

「どうかした？」

「あ、あー。あー！ 思い出した、思い出しました！」

「何を？」

私見て思い出すことなんてある？

「小学校の時に一つ学年下だった絵の女の子！ お久しぶり……つて言うのも今更ですかね」

「」

——。完全に、不意打ちだった。

「なんで、今……」

「景さんのおかげでしょうか？」

俺、芸能界で百城さんに会ってから初めてですよ。仮面完全に外した百城さん見たの」

「……あ」

「仮面の下に素顔があることは知ってました。

仮面越しに見てもいました。

でも仮面を完全に外した顔を見たのは初めてでしたから」

英二君は、私なんかのことは忘れていたと思っていた。

でも、そうじゃなかった。

小学校で会った時の私は普通の女の子な私。

芸能界で私より先に人気番組に関わる人間になっていた英二君と、私が一緒の仕事を
するようになる頃には、私の仮面は完成していた。

再会した時の私は、既に仮面を被っていた。

そうだ、そういえば。

—— ええと……ごめん、名前なんだっけ？

—— ……あ、あー。もしかして絵の子？

あの頃も英二君は、忘れてるんじゃないかって、思い出すきっかけがないだけだった。

「よく覚えてたね、英二君も」

「絵に魂がこもってましたから。」

そうですね、あの頃から百城さんの作品には魂がこもってたんですね」

「……うん」

「あと笑顔も可愛い子だったなど。絵とセットで覚えてたので、連鎖的に思い出しました」

「うん」

「言ってくればよかったのに、なんで黙ってたんですか？」

「私の方だけ覚えてて、英二君は忘れてるって、ちよつと悔しかったから」

「それはその、すみません」

「いいよ、許してあげる」

夜風さんは本当に凄い。

私が心の奥にしまっていたわだかまりを、ものついでみたいに破壊しちゃった。

ああ、そっか。

私、思い出してほしかったんだ。

”私の思い出”じゃなく。

”私と英二君の友情の思い出”にしたかったのかな。

「あははっ」

「なんで笑うんですか？」

笑うしかないよ。今は仮面付けてられないから、素直に素顔で笑うしかないんだよ、私。

「ばーかつ」

あーもう。もう本当に英二君は。本当にもう。

「えっ、な、何ですか!？」

「言いたくなっただけ。だってもう、これ以外に感想の言葉言えないよ」

なんだろう。

もう、言葉に出来ない。

でも、ああ、そうだ。

もう一度、この気持ちを口にしておこう。

この気持ちだけは言葉にできるし、胸から溢れてしまいたいそうだから。

「夜風さん。ありがとう」

英二君にお姫様抱っこされた夜風さんが、こくりと頷く。

感謝の言葉を言われる理由が分からないといった風に、曖昧に笑う夜風さんがおかし

くて、私まで思わず笑ってしまふ。

ああ、良かった。

クライマックスの撮影を、私も夜風さんも、英二君も皆も、笑って終えられた。よかった。皆、ありがとう。頑張ってくれた皆、本当にありがとう。

映画の心臓、完成したよ。だから、何度でも言わせてほしい。

ありがとう。

百城千世子の『ファン』's

電話は文明の利器だよな。

撮影のやり方も、作品作りも、『携帯電話』って概念が登場する前と登場した後で随分変わったって話はよく聞く。

俺も十五年前の撮影の様式は覚えてるから、その辺の変化は分かる人間の一人だ。

昔はスマホとかなかったもんだよ。

俺のこの手の中の携帯電話が、遠くのスターズ事務所の電話に繋がってるとか、よく考えなくても便利にもほどがあるぜ。

『じゃあ、大丈夫だったんだ』

「はい。すみません石垣さん、心配して電話までかけてもらってしまって」

『フフフ、いいんだよ。』

こつちが勝手に心配しただけなんだから。

朝風君達がちゃんと撮影を進められているのなら何よりだ。あと数日、頑張って」

「はい」

『こつちの都合でスターズは途中からどんどん東京に戻ってしまったからね。』

オーディション組に恨まれてないか少し心配だったんだよ。大丈夫だったかな」

「24日目に百城さんと景さんが名演して以来、完璧にそういうのはなくなりましたね」
『ああ、なるほど。』

僕は見られなかったけど、「あの二人には敵わない」ってなったのかな。

それとも、スターズ組にもオーディション組にも凄いやつはいると認識されたのか」
「両方でしようね。」

とてもいい名演でした。

……景さんが寝込んでしまったのが、ちよつとケチついてしまった感はありませんが」
『高熱出しちゃったんだっけ?』

「はい。傷口から何かよくないものが入ってしまったみたいで……」

『でも医者は薬投与で良いって言ってるんでしょ? なら大丈夫なんじゃないかな』

「だと、思いたいですね」

『医者信じなよ、心配性。』

破傷風土中の破傷風菌を病原体とする急性中毒。最悪、菌が入ってから数時間で死に至る。死亡率50%。破傷風の免疫は予防接種をしても10年程度で減弱してしまうため、土木作業従事者などが要注意しているもの一つに挙げられる。普通に生きていくと怪我をした部分に泥は付きにくい、泥と傷だらけでなければならなかった一昔

前の撮影では、発症のリスクも0ではなかった。でもなかったんだし、君が事前に色々想定してたおかげさ。胸を張ろう』

「……はっ」

そう言ってくれるとちつとは気が楽になるがな。

やっぱ気が重いわ。

女優がかすり傷とは言え怪我して、そこから何か入って、高熱出した……なんて、サラツと流して良いことじゃねえと思う。

反省して、もう起こさねえようにしねえとな。

……ん？

電話の向こうがなんかうるさくなってきた。

『いいから代わってよ、私今日を逃したら事務所にはばらく帰ってこないんだから』

『えーもううるさいなー』

『私と二葉は姉弟だから二倍話すこと許してよ』

『何言ってるんだこの人』

『はいはいちよつと電話前だから押さないでねー、フッフ』

「……楽しそうですね。俺もすぐ戻りますよ。」

「デスアイランドが終わったら、皆さんの仕事を回ったりするかもです」

『あ、そうなの？　じゃあそうならよろしく頼むよ』

本日、撮影26日目、朝。

景さんは高熱出して寝込んで、他の皆は気合十分。

撮影日数、残り五日だ。

おめーら初日からそういうのやれ、とちよつと思つた。

そんならいオーディション組の動きがよくなつていた。

もうオーディション組のほとんどは自分が死ぬシーンを撮り終えて、一部はオールアップまで終えていたが、撮影終わり際になってから皆なにかしらの成長を遂げていた。

百城さんと景さんの名演がよつほど刺激になつたらしい。

デスアイランド中は無名の俳優レベルでしかなかった、彼らだが……数年後、十数年後にどうなってるか、ちと楽しみだ。

「あ、英二さん！ どうでしたかさっきの私！ 夜風さんにちよつとは近付けてましたか!？」

「成長の跡は見られましたよ、木梨さん」

「あ、やった！ 英二さんにそう言われるとそうなんだって信じられます!」

夜風さんに憧れてた木梨さんも、随分演技の質感が増した。

もうそろそろ高校演劇部レベルの世界じゃなくて、プロの世界でもちゃんとやっていけるレベルになるかもな。

真つ先に景さんのファンになったこの人の目は、正しかった。

「私今日でオールアツプです。今日までありがとうございました!」

「いえ、こちらこそありがとうございます。お疲れ様でした、木梨さん」

「色々と助けてもらって、とつても助かりました。」

映画の裏方ってこんなに沢山のことにするんですね……」

「あー、それはですね。」

俺が心配性で凝り性だからなのもあります。

ちよつとくらいは手を抜いてもいいんですね、撮影って。

でも俺の場合、安全性や快適さのために余計なことまでしたくなるというか」

「でもでも、それが夜風さんを救ったんじゃないでしょうか?」

「ネットを張ったのは皆でやったことですよ」

「でも英二さんが頑張ったおかげだと思っただけですよ！ わっかりませんか!？」

この子テンションたけーな。

とかいいつの間にか距離詰められてた気がする。

「夜風さんを助けてくれてありがとうございます！ 英二さん!」

「それでお礼を言われる筋合いはありませんよ。」

俺一人でやったことでもなく、俺は当然のことをしただけですから」

「当然のこと……? そうですかね?」

「彼女は友人です。友人の命を守ることは当たり前のことでしょう? だから……」

「……いい人ですね、英二さん!」

「あーもう、じゃあそういうことでもいいです」

元気な人だな。

いや、そうか。

元気なだけで、普通に明るく、普通にいい人な、普通の子なんだな、木梨さんは。

きつと、キチガイからは程遠い。

26日目、夕方。

「では本日の撮影はここまでです。皆さん、お疲れ様でした！」

「おつかれさまっしたー！」

今日も一日が終わる。

「朝風さーん、これから皆で飲み……あ」

「すみません。時々言われるんですけど、俺まだ18なので。」

食事に誘ってもらえたのは嬉しいんですが、お酒があるならパスでお願いします」

助監督とか各部門スタッフとか、色んな人をたくさん引き連れた演出の人が俺を誘ってくれたが……酒はな。ちよつとごめんなさいするつきやねえ。悪いな。

「惜しいな」

「しょうがねえな」

「じゃあそうしよつか」

「……あれ？ 皆同じこと考えてる」

「俺達の気持ち……一つに……？」

「無駄に心を一つにするな」

「？」

なんぞや。

「今日は皆酒無しで行くぞー。英二君に合わせてやろうや」
「え」

「どこ行きます？ やっぱ肉？」

「英二君の分私が払いますよー」

「朝風君抜いた大人全員で割り勘でいいんじゃない？」

「俺こういうとこのラーメンは美味いって知ってるんですよ」

「食ベログ機能してなくてちよつと笑っちゃった。流石南の島」

「いや南の島でしょ？ 鳥豚牛より魚の方が絶対美味しいですって」

うおお、なんか俺に合わせてくれる。申し訳ねえ。嬉しい。

「しょうがないねえ」

「て……手塚監督……？」

「今晚は交流会ってことで、皆の晩御飯は僕が奢ってあげよう」

「て……手塚監督！」

「俳優の前じゃ言えないこととか色々あるよね。パーツといこう、パーツと」

手塚監督！ ずつとついていくぜ！

腹一杯まで食わせてもらった。

わさび入り醤油でびたびたにした白身魚と赤身魚とタコでご飯食べるの美味しい。

ネギトロ美味しい。イクラ美味しい。アラ汁美味しい。

ありがとう手塚監督。

ブラボー手塚監督。

お腹いっぱいになったら全てを許せそうな気持ちになってきたぞ。

27日目、朝。

30日目で終わりだから、もう残り日数もほとんどねえな。

が、実は撮影しなくちゃならぬ日数もほとんどねえ。

十数分のクライマックスは相応に沢山のカットが必要で、よって日を跨いだ数日の撮影が必要だったが、それが一日で終わったんで逆に余裕ができたんだな。

だが。

「撮り直しですか?」

「うん。オーディション組の芝居がよくなってきたから、差し替えもいかなかった」

まさかここにきて、百城さんから再撮影と撮影内容差し替えの提案があるとは。

たまげるわ。

いや、時間ギリギリじゃねえなら、より良い映像に差し替えるってのはいい案なんだ

が。

「クライマックスを一日で撮り終えたから、まだ余裕あるよ」

「マジですか？ やつちやいます？」

「やつちやおう、ね？」

監督に直訴して、了承された。

うへー。

こりや楽しくなってきたぜ。

27日目、昼過ぎ。

すげえ。皆めつちやスムーズに撮影するようになったな。

百城さんとかが潤滑油にならなくても、百城さんが最低限のことするだけで、流れるように撮影が進んでいく。

俳優が裏方を理解してる。

裏方が俳優を理解してる。

スターズ組とオーディション組の間にわだかまりもなく、そこにも相互理解がある。

これが、一ヶ月近くを共に過ごし、共に駆け抜けた結果……ってわけだ。

まるで一つの生き物みてえだ。

互いが互いを理解してきた今日までの積み重ねが、撮影の流れを淀みなく組み立てる。

助け合い、支え合い、フォローし合う、撮影っていう集団。

……ニチアサで一年やってると自然とこうなるんだが、一ヶ月でこうなるとはな。

俺もちよつと驚きつつも嬉しい。

「芝居しやすくってええわ」

「茜さん」

「あ、英ちゃん。ちよつと相談あるんやけど」

「どうぞどうぞ」

茜さんの言う通りに背景の建物壁を調整しながら、茜さんと雑談する。

話は自然に、嵐の日のクライマックス撮影のことになった。

「あれちよつと悔しかったわ。」

私と共演しとる夜凧ちゃんも、私と共演しとる千世子ちゃんも、全力じゃなかったん

やて」

「あれは……しようがないですよ」

「私達の芝居が未熟だったせいやろなあ。」

千世子ちゃんのおんな芝居も、夜風ちゃんのおんな芝居も引き出せんかった。

あー悔しい！ 大女優になりたいわあ、もうホンマ悔しゆうてな」

「笑って話せるなら、きつと大丈夫ですね」

「ん、大丈夫や。これは笑って話せる嫉妬やから」

本当に成長したな、茜さん。

精神的にも、技術的にも。

あと数年はかかると俺が思ってた予想は、景さんの影響によつて簡単に覆された。

この歳でこの技量なら、きつと得られる仕事は一気に増えるだろう。

「デスアイランド公開後の”湯島茜の周りの評価”がどうなるか、楽しみだ。

「もう終わった気になるんわ早いけど、ええ経験になった。私はもつと精進せんとな」

「応援してます。手が空いたら……これまで通りとはいきませんが、助けにいきます

よ」

「英ちゃんやと休みの日に休日返上で来そうやなあ、あはは」

スターズが助けに行くの許さなかったら、有給でも取つて個人として行くさ。

俺達、ダチだろ？

……？

茜さんが、俺の顔をじつと見てる。

「英ちゃん、前がそやなかつたわけやないけど……表情、優しくなったんとちゃう？」
「そうですか？」

「せやせや。英ちゃんの表情のプロの私には分かるんや」

「妙なプロにならないでください……」

何言つてんだこいつ。

しっかし表情ねえ。俺もなんか、変わったのかな。

27日目もあと数時間で終わる。

南の島の夜は、街らしい喧騒がなくて静かで、風の音や波の音が穏やかだ。

静かじゃないが穏やかな夜、つてのはなんか面白い。

俺は景さんの部屋に見舞いに行っていた。

高熱は引いたがまだ熱が出たり引いたりしてるそう、景さんはずっと寝込んでる。

心配でたまらんが、医者は大丈夫と言ってる。

医者を信じるしかねえな。

「いんぼんぼん」

返事はない。

寝てるのか？

俺は部屋に失礼して、目を閉じてベッドに横になってる景さんを見る。

ベッド脇には、空の皿と空のペットボトルがあった。

食欲がねえつてわけでもないそうなので、俺は時々ここに飯を置いていつている。

景さんは気ままに寝て、気ままに起きて、腹が減ったら俺が置いていつた飯を食う。

病気の対策にはしつかり飯食うことが一番、なんて言う人もいるからな。

今日はおにぎりとかアクエリアスである。

夜風さんの顔を、少し眺めてみる。

「綺麗だな」

景さんは目を瞑ってる。

本当にお疲れ様だ。

こうなったのはあの時の撮影のせいで、あの時の撮影で景さんが本気でやつてくれたからこそ、作品はいい形で完成できる。

目を瞑っている景さんの額が汗ばんでるのを見て、お湯に漬けて絞ったタオルで、優しく汗を拭いてやった。

熱のせいかな、少し顔が赤い。

昔、おふくろにこんなことしてあげた覚えがあるな。

病人の扱いなら、俺はそこそこ得意だ。

少し赤い顔の汗を軽く拭いてやるくらいなら、俺も手慣れたもんだぞ。

「聞きましたよ、茜さんから。あれ景さんだったんですね」

幸い景さんはあのクライマックスでオールアップだ。

あともうすることはねえ。

ゆつくり休んでくれ。

「おにぎり、美味しかったです。ありがとうございます」

景さんに頭を下げて、俺は空の皿とペットボトルを持って部屋を出て行く。

しかしあれだな。

役者として演技してる時以外だと、あんた寝たフリも微妙にヘタクソっつーか……考

えてることが顔に出やすい人なんだな。

それとも俺の観察力がまた伸びたんだろうか。

そこは、俺の知ってるアリサさんとは全然似てねえわ。

芝居はかなり近いタイプだと思っただが。

……案外、景さんはアリサさんとは、全然違う道に行くのかもしれないねえな。

28日目。

烏山さんと源さんが共演し、演技をぶつけ合っている。

うーん、いいな、なんか。

熱意を迸らせ、熱いキャラが向いてる、舞台俳優の良さを出していく烏山さん。

知的で冷静で、クールなキャラが向いてる、テレビ俳優の良さを出していく源さん。

二人は違うからこそ、互いの良さをカメラ越しに観客へと魅せられる。

いいなこれ。

もつとこの二人共演させても良かったんじゃないの？

景さんのオーディションの時に、こんだけきっちり属性が正反対な男二人が一緒だっ

たつていうのは、幸運だったのかもしれない。

「前からお前が、気に入らなかったんだ！」

「奇遇だな、俺もだ！」

「はい、カット！ OK！」

うむ、いいな。

結構ガツシリとした体格で身長182cmの長身の烏山さん、細身ですらりとした体格で身長169cmと平均以下の身長源さんが向き合っていると、対比で輝くが……クソ。

俺にもその身長分けるや……!」

169cmで平均以下の低身長扱いとかキレそう。

「お疲れ様です、お二人とも。飲み物どうぞ」

「ありがとうございます朝風先生!」

「あぎす、英二さん。いつも貰っててなんか申し訳ないっすね」

良いんだよ、飲み物くらい。

「おう烏山、次は俺との共演だな」

「竜吾! ああ、その通りだ」

「殺し合いが始まる前のワンシーンだが、まあやってやろうぜ」

「ああ!」

堂上さんと和歌月さんが来て、烏山さんと源さんに合流して……なんだこれ。

「なんか知らない内に仲良くなってますね……和歌月さん、何か知ってますか?」

「あの二人、枕投げしてから仲良くなったんですよ」

「まくらな……は? え、ちよつと待ってください、どういう流れでそうなったんですか」

「流れは説明できませんが、仲良くなった理由までは説明できませんよ。」

何故かあの二人だけ格別に仲良くなったんですから。……男の人って分かりません

ね」

「……まああの二人のことですから、何か通じ合うこともあったんですよ、きつと」
よく分かんが分かった。

つて、こつち来たぞ堂上さんと烏山さん。

「おう英二、お前も枕投げ来りやよかつたんだよ」

「そうですね。交流会に朝風先生も来てくれていたら倍楽しくなっていたことでしょう」

「お二人はなんで修学旅行時の中学生みたいになつてるんですか？」

楽しそうだなこいつらの人生。

いや、逆か。

共演者と分かり合いながら進めていく撮影と、それがあある人生は、楽しいんだな。

芝居があるから、戦友が居るから、楽しいのか。

「あ、朝風さん発見」

ん？

あ、オーディション組だ。

地味の佐藤さん。メガネの八代さん。ポニテ女子の一色さん。ぽつちやりの小西さんに坊主頭の小寺さんに……前に俺に『テレコ』のこと聞きに来た組だな。

「アサつちー、よければ私達と一緒に昼食食べない？ 奢るよ」

「それは構いませんが……何用ですか？」

「前に『テレコ』の話したじゃない。」

あれみたいになる話また聞きたいなって。

もう私達の撮影は終わるけど、私達の役者人生はこの後も続いていくからね。

アサつちの目から見た私達の演技改善案とかあったら聞きたいなーって話にもなつてさ」

「なるほど、分かりました。俺に出来ることなら」

「やたつ、あの百城千世子の美術相方のアドバイスだつ」

まったく。

オーディション組とスターズ組で仲良くなったり。

オーディション組で仲良くなったり。

一ヶ月弱の間に、色んな関係ができたもんだ。

「あ、夜風さんファンの木梨さんだ。あの人も誘わない？」

「大所帯の昼飯になりそうですね」

それぞれの人に、違うライバルがいた。

それぞれの人に、違う仲良くなった人がいた。

それぞれの人に、違う目標がいた。

それぞれの人に、信じる自分の芝居があった。

それぞれの人に、譲れない何かがあった。

24人の俳優と、無数の裏方で進めてきたデスアイランドの撮影が、もう少しで終わる。

撮影29日目。

本日の撮影も終了。

あと明日、海岸線でアキラ君が死んで百城さんが看取るシーンとか撮って終わりだ。いやーすんげー余裕。

こんな余裕だと逆に不安になって何度も再確認しちゃったわ。余裕ありすぎても不安になるもんなんだな。

「もうボチボチ終わりですわねー」

「そうだね」

「夕日が綺麗ですよアキラさん」

「見納めに島を回るってのもいいものだ……あ、カニ」

「カニですね」

「食べたら美味しいんだろうか……」

「……今日の晩飯カニ食いに行きましようか、アキラさん」

「いいね。それなら千世子君も誘おうか」

「夜風さん達も誘いましょう。楽しそうですし。いいですか？」

「あー、うん、いいんじゃない？ 夜風君誘っても」

俺はアキラ君を誘って、散歩もどきのドライブに出ていた。

どうせ明日夜にはアキラ君帰っちまうからな。

南の島を最後に堪能していつてもらおう。

イエーイ友達と南の島巡りー。

しかしこういうのは彼女と行くもんじゃなからうか。でも俺彼女いねえしな。アキラ君は女には困らねえ人だけど根が真面目だからスキャンダル絶対回避マンだし。

俺もアキラ君も彼女欲しい気持ちが無いわけじゃねえけど、ずっと先の話になりそう
だ。

「まだ終わったわけじゃないけど、今回も一緒に仕事で助けてくれてありがとう。朝風君」

「いえいえ、好きでやってることですから。」

他の人の多くとは仕事でやってることで……

アキラさんの手助けは基本的に好きでやってるんですよ、俺」

「それは嬉しいね……あ、ストップストップ。土産屋発見だ」

「地元民しか知らない土産屋オーラがピンピンに出てますね……

……あ。

タカトク・ジャンボキヤラクター人形！ ウルトラマン！ ウルトラマンじゃないか

！」

「この島一体何体生息してるんだウルトラマン人形ッ！」

土産屋行つて、二人でちよつと楽しく土産屋物色して、俺が運転する車の帰り道。

アキラ君が、ぼそりと言った。

「そうだ、聞きたいことがあつただけどき」

「なんですか？」

”君の友達としての星アキラ”が気にすることは、一つしかないよ」

アキラ君はいいやつだ。

「朝風君。この撮影は、楽しかった？」

目の付けどころも。

気にするところも。

心配するところも。

基本的に、いいやつだ。

俺がこの人のことを助けたいと思う理由は、これだけで十分過ぎる。

「はい。辛いことも多くありましたが、楽しかったと思います」

アキラ君は、安心したように微笑んだ。

「君が楽しくやれてるなら、楽しく生きられているなら、それ以上は君に望まないよ」

”この撮影を君が辛く思ってたんじゃないかと思ってた”と、思ってるのが分かる。

”君が良いならそれでいい”と、思ってるのが分かる。

あーもうなんだ。

この人はなあ。

俺がデスアイランドで作業してるのずっと見てて、俺の負担とか苦悩とかずっと見て、ずっと俺のこと心配してくれてたんだらうな。

だらうと思つたよ。

だから俺は、斜面でどういう作業すんのか、アキラ君には伝わらねえようにしてたんだ。

言ったら止められてややこしくなっていただろうしな。

「それが一番、大事なことだからね」

親父。

信頼できるキチガイ探せって言ってたよな。

キチガイじゃねえ信頼できる人も、俺の人生にとつちや大切だったよ。

色々あったけど、俺の人生は今、楽しいと思う。

もう撮影29日目が終わったか。

僕は監督やって長いけど、こんな撮影は初めてだった。

長かったような、短かったような。

激動の撮影だった。手塚監督のせいじゃん、って言われたら否定出来ないけど。

……昔を思い出すな。

二代目の父と……朝風と、一緒に仕事した時のことを。

一度、打ち上げの時、朝風の隣の席に座ったことがある。

周りの大人から技術を際限なく吸収していく二代目を見て、朝風は一人の父として嬉しそうに、一人の造形屋として戦意を持って、息子を見ていた。

『あいつは皆の作品だな』

作品？ と僕が問い返す。

『映画と同じだ。』

映画は皆でその作品を愛し、皆でそれを作り上げる。

あいつはな。

きつとこの先、周囲のあらゆる技術を吸収して成長する。

周りの大人に教え指導されて進化する。

……映画と同じだ。

お前達は、皆で力を合わせて最高の物を作ることを喜ぶ人間だ。

そんなお前達が映画を作るように、最高の子供を作っているように、俺には見える』

考えすぎじゃないか、と僕は言った。

『いずれ、お前達皆があいつを……朝風英二を作るだろう。』

あいつは周りの大人に愛されている。

子供のように愛され、孫のように愛され、作品のように愛されている。

あいつがそれに気付くかどうかは知らんがな。

あいつは作る者という意味でも、作られた者と言う意味でも、最高の造形の象徴になる』

父親の台詞じゃないな、嬉しそうに言ってるように聞こえるぞ、と僕は言い。

ああ、と朝風は答えた。

『映画黎明期のジジイの技術まであいつは取り込んでる。

昭和の遺物まで英二に技を教える。

英二の中には多くの人の技があり……その中には、俺の技もある』

朝風は死んだ。息子を庇って死んだ。あいつらしくもない死に方だった。

『あいつが生きている限り、俺は生きている。そんな気がするんだよ』

今なら分かる。

朝風は、自分の息子について100語れば、その内の1つくらいは、あいつらしくないことを言うやつだったんだと。

「手塚監督」

「やあ、二代目」

過去の記憶に浸っていた僕の心が、現実に戻還する。

「明日が最終日ですね。」

撮るカットももうほぼありませんが、油断せず行きましょう」

「うん、そうだね。ああそうだ。明日、夜風ちゃん復帰だつてさ」

「本当ですか？」

「熱が下がってきたし、顔色も良くなってきたんだつてさ。ま、もう撮影はないけどね」
「それでもよかったです。このまま寝たきりだったら、どう責任を取ろうかと」

責任取る気だったんだ。

まったく、生真面目な。

親の遺伝子をちよつと感じちゃうよ。

少し、沈黙が流れる。

気まずい沈黙。

何かを言おうとして言い出せない沈黙。

数秒の沈黙の後、僕は口を開いた。

「君は怒って良いんだよ。」

君が大切にしてた千世子ちゃんの仮面を壊そうとしてたのが、僕なんだから」

「いえ、怒る気はありません」

「君は優しいね。慈悲深さに涙が出ちゃいそうだ」

「いえ、優しさとか慈悲とかではなくてですね」

うん？

「手塚監督の思考って……」

百城さんが好きで好きでたまらないファンのそれだったじゃないですか。

それもちよつと面倒臭いタイプの。

だつてそうでしょう？

手塚監督は、百城さんの仮面の下に素敵なものがあると、信じて疑ってませんでした」

「――」

「手塚監督は、百城さんがあの仮面だけじゃないと信じてました。

仮面を外せば見たことがない素晴らしいものが見られると信じてました。

醜悪が出て来るとも、情けない演技が出てくとも思つてませんでした。

信じてたんですね、監督は。

百城さんをとことん信じてました。

百城さんの仮面を見飽きて、他の女優に行くでもなく、百城さんの新しい顔を見た
がった」

そうか、僕は。

「手塚監督、俺と同じくらいには百城さんのファンじゃないですか。

途中で気付いちゃつたらもう、単純に嫌つたり憎んだりできないですよ」

「君は本当に……他人の本質を見抜くというか、怖い目をしてるね」

「ぶつかり合う理由があっても、同じものが好きで同じ作品に尽力するなら、俺達は戦友です」

まったく。

彼をこの撮影に引き込んで、本当に良かった。

千世子ちゃんには僕の知らない千世子ちゃんの顔があつて……僕の中にも、僕が知らない千世子ちゃんへの気持ちがあつたみたいだ。

そうだね。

僕はきつと、彼女のファンだったんだ。

「第一、手塚監督は徹頭徹尾百城さんしか見てなかったじゃないですか。

景さんをこの撮影に引き込んだのも百城さんの仮面を壊すためなんですよね？

景さんをデスアイランドで目立たせるとか、名演が見たいとかじゃないんですよ？
手塚監督が見たかったのは仮面を壊した百城さんで、他全部そのための要員じゃないですか」

「あはは、そう言われると僕も結構恥ずかしいよ」

「仮面なしの百城さんをカメラに撮りたかった監督の期待に、景さんは応えてくれたんです」

「分かってるよ。あの子は本当に僕の期待によく応えてくれた。感謝してる」

「後で百城さんに怒られるくらいは覚悟しておいてくださいね」

「……はい」

監督手塚の尖兵夜風景は最高の働きをして、天使百城千世子は素顔を引き出された……わけだけど、まあ後で謝つとかなんといけないよね。

「でも俺も、あんま色々は言えませぬ。」

得るものも多かったですし。

……両親の死をきっかけに抱いていた恐れを、ようやく克服できた気がします」

夜風ちゃんをこの撮影に引き込んでよかった。改めて、そう思う。

「本当に、夜風ちゃんには頭が上がらないな」

「え？」

「正直言つて、君が夜風ちゃん達の影響で変えられたことは、予想外だったよ」

二代目は変わった。

恐れが拭い去られている。

両親が死んで、その死を二代目が乗り越えて、後に残ったのは事故死を恐れる心、自分が置いていかれる死別を恐れる心……そういったものが残っていた。

それが今はもう、だいぶ薄れたように見える。

けれど、ここ数日を見る限り人の命を軽んじるようになったようには見えない。たとえるなら、崖だ。

崖から崖に飛び移る時は、落ちることを怖がる者よりも、落ちることを恐れない者が……恐怖を持ちながらもそれを克服した者の方が落ちにくい。

人が傷付き、死ぬことを恐れた二代目がかつていた。

その恐怖を克服し自らの糧とすることを覚えた二代目が今はいる。

あの瞬間、流された夜凧ちゃんが生還したことが、彼の心に“一区切り”を与えたんだらう。

死んでいった親が彼に必要な恐怖を与え、生還した夜凧ちゃんと千世子ちゃんがその恐怖を乗り越えさせ、彼の中で一つの気持ちりが完成した。

危険な撮影を恐れず、けれども俳優の危険を限りなく0にし続ける者。

「全てのしがらみを越えた上で人の命を尊べる君なら。

心に巣食っていた恐れを乗り越えた今の君なら。

そうだね……もう病気や交通事故くらいでしか、作品作りで人と死に別れることはないと思う」

周囲を変化させ、成長させていくのが夜凧景の輝ける形質なら、朝風英二もまた、その影響を受けて変わっていつている者の一人。

「英二君」

「！」

「君はもう、父親のやり方と技術を受け継いだだけの二代目じゃない。僕はそう思う」

君が、自分が父親を超えたんだと思えるのは、まだ先のことかもしれないけれど。

僕は僕個人の見解として、そう思うよ。

君はもう二代目なんて呼ばれる筋合いのない——父親を超える、一人の男になつたつて。

「君はあいつにとつて自慢の息子だ。

それは断言できる。

何せ僕は、君が知らない君の父親の顔を知つてる男だからね」

「——」

「いい息子を持った彼が羨ましいよ。僕はもう、君は父親を超えてると思う」

言葉に詰まつた英二君の表情に、沢山の感情が見える。

懊惱、憤怒、悲嘆、感激、嫉妬、優越、歡喜、後悔、懺悔、親愛、思慕。

ぐるぐるとめまぐるしく感情が変わつていつて、それぞれ混ざつていく。

親を超えたいという気持ちと、親をまだ超えていないという気持ちが混ざつてる。

いいんだ。

君はそれでいいんだよ。

親の背中を追うことは間違いなんかじゃないと、僕は思う。

「ありがとうございます」

絞り出したような言葉には、英二君の万感の想いがこもっていて。

僕の耳には、少し救われたような気持ちがかもっているように聞こえた。

「この仕事が終わったらまたいつか呼んでください。」

何度呼ばれても、どんな現場でも、誰も死なせませんから」

「あはは。また君を後ろに控えさせて、天使と破壊者の共演撮ってみたいよねえ」

「良いですね。楽しそうです」

うん。

明日が最終日だけど、僕らの人生は、仕事は、まだまだずっと続いていく。

また一緒に仕事をする時もあるだろう。

その時は……僕が信じた朝風よりも、ずっと信じられると思えた君への想いを、裏切らないでいてくれると嬉しい。

いつか君にだけ見せる千世子ちゃんの表情とか作品に使えたら良いな……なんて、僕は思ってるからね！

あつはつは！

許してね千世子ちゃん。

先に謝っとくね。

「手塚監督。俺は基本的に百城さんの味方ですよ」

「うん、そうだね」

「余計なこと考えてたら、分かってますよね？」

「……うん、そうだね」

なんだかなあもう。

女絡みの余計なところだけ分かりやすく朝風二代目なんだからなあ。

百城千世子の素敵な素顔独り占めは独占禁止法に引っかかると思うよ、僕は。

独り占めするなら時々にするんだよ。

さて。明日はようやく、最終日だ。

アクタージュ act-age

景さんと出会ってから、俺も随分変わった気がする。

百城さんも、景さんも、周囲の人間を引き立て役にする芝居だと思っていた。

最初に景さんの芝居を見た時、それで黒さんに対し色々なことを思ったこともあった。

だが、正確には違った。

夜風景は破壊者だった。

創造の前の破壊をもたらず破壊者だった。

茜さん達のような役者にもいい影響を与え。

スターズの何人かにも大きな影響を与え。

ただ撮影に参加して芝居をしているだけで、周囲から尊敬と敵意を集めた。

そして最終的には、島の撮影を抜けたスターズを除けば皆に認められていたように思える。

夜空を夜空で塗り潰すように、周囲の役者を「私は『本物』になれない」と次々潰していく役者になりかねねえと……そう、思っていた。

だが、そうはならなかった。

景さんの周りの人達は、景さんに引つ張られるようにして成長し、輝いていった。不思議な話だ。

景さんは周りを成長させようとしてるわけでもねえのに、景さんの周りでは人の劇的な成長が多発する。

運命力でも持ってやがんのか？

それはまるで、星々の一つ一つが集まって、景さんの周りで更に輝く物語のよう。

夜風景の周りには、他の星を消し去る太陽の物語じゃない。

多くの星から始まる、多くの星が輝く夜空の物語。

俳優も、監督も、美術の俺も。

多くが変わっていくデスアイランドの撮影が、終わる。

30日目、撮影終了。

「カット、OK！」

「これにてクランクアップになります！ お疲れ様でしたー！」

終わった。パチパチと、拍手の音が聞こえる。

まだ太陽は彼方にあるが、これにて全てのカットは撮影終了。

これで、終わりだ。

「あつ、夜凪ちゃん！ 具合良くなつたん？」

「うん」

「丁度良かった。夜凪ちゃん、降りて来て」

あ、景さんだ。

これにて全員オールアップで、全員クランクアップ。

と来れば、撮影の慣例をやらなきゃな。

「百城千世子さん、星アキラさん、そして夜凪景さん。クランクアップです!!」

俺と、手塚監督と、チーフ助監督で、花束を持ち、三人に渡す。

俺は右端の百城さんに。

手塚監督は真ん中の景さんに。

チーフ助監督は左端のアキラ君に。

”お疲れ様”の意を込めた花束を、手渡した。

花束を渡したタイミングで、百城さんがこっちに微笑みかけてくる。

俺だけに見える角度の微笑み。

ちよつとドギマギする。いや結構ドギマギする。

仮面を外した微笑みを使いこなし始めてんの、ちよつとやめてくれ。

「……お花。私に？」

ずっと昔。

演劇でカーテンコールが終わりを告げた時、役者に花束を贈る慣習があった。

それはオールアップ時に贈られる花束となったり、他のものを贈る慣習にもなり、テレビや映画の撮影に今も受け継がれている。

ま、お約束ってやつだな。

「映画やドラマの習わしでね。

クランクアップした役者さんには贈り物を渡すものなんだ。

君はあの晩からずっと寝込んでいたからね」

手塚監督が微笑み、語りかけ、手塚監督と景さんの視線が合う。

「お疲れ様。夜風ちゃん」

景さんが無表情なまま、音もなく息を呑んだ、そんな気がした。

「知らなかった。こういう時、こんな気持ちになるなんて」

ほろり、ほろりと涙がこぼれて、景さんがそれを拭う。

拭っても拭っても涙は溢れ、こぼれ落ちていく。

「ありがとう。すごく嬉しい」

涙ながらの景さんの『ありがとう』を、横合いから百城さんが眺めていた。

”成し遂げられた実感”が、景さんの瞳から流れ落ちる涙を止めず、後押しし続ける。

ブサイクな顔だと思う人もいるかもしれないねえが、俺はその涙を、宝石のようだと思っ
た。

「……綺麗だな」

思わず、俺は眩いていた。

ふと、考える。

自分は幸せなのかと常に考える人と、自分は幸せだという結論を出してそれ以上何か
考えることもない人、どちらの方が賢いんだろうか。

多分、今の景さんは後者だろうと思う。

景さんはきつと、今の自分が幸せであることを疑ってねえ。

役者になれて幸せになれたんだと、景さんは信じ切っている。

役者になって不幸になった人がいて、役者になれなければ幸福になれない人がいて、
役者として生きていなければ幸せを感じられない人がいる。

不幸から幸福へと転じた、景さんのように。

俺が幸せにしたわけじゃねえし、俺が幸せにできてたんなら、もつともつと嬉しかった
たかもしれないねえけどさ。

景さんが幸せと喜びを感じていることが、めっちゃくちや嬉しくて、めっちゃくちや暖か
い気持ちになれた。

こつちまで、幸せになつちまいそうだった。

予定より半日早く撮影の全過程は終わり、打ち上げBBQが開始だオラア！
いやー悪くねえな。

和歌月さんも町田さんも食ってる食ってる。

堂上さんはなんかギター引いてる。

アキラ君はスターズ組や裏方と楽しげに話してる。

オーディション組もわちやわちや楽しんでるな。

景さんは……いつもの茜さん、烏山さん、源さんと四人で固まってるか。

百城さんは？

「私が許してもアリサさんにバレたらヤバイと思うよ」

あ、いたいた。

手塚監督と話してる。

「……助監督時代に生意気な後輩が言ってたんだ。

『俺達映画監督は呪われている。』

見たことのないものを撮るためなら人の道を外れることも厭わない」

話に加わろうとも思ったが、やめといた。

きつとあれは、大切な話だな。

「僕は僕に少し安心した。僕はどうしても君のまだ知らない顔を撮りたかったみたいだ」

「……！」

二人から離れて、俺は裏方勢と絡みに行く。

「次また僕がプロデューサーやる時は呼ぶから、その時はよろしくね」

「英二さん監督やらないんですか？ やれますよ、やりましょうよ」

「あ、いいねそれ。その時は私が助監督で」

「僕は英二さんの下だと過労死スケジュールやらされそうで怖いんで遠慮します」

「朝風は上に立つより現場で手足動かしての方が有能だつて！ もつたいねえよ！」

「コップ空いてるじゃん朝風君。何飲む？ 取つてこようか？」

「コーホー」

「いやあきつつい撮影だった……台風とか特にな……つれえわ……」

「分かる」

「スターズの撮影つて無茶しないのが基本なのにあれですしね」

「あはは」

人に囲まれて、楽しく話してたが、ちよつと疲れてきた。休もう。

いや、なんだこれ。

どつと疲れが出てきたぞ。

……ああそうだ。俺30日間まともに一回も休んでなかったんだった、そういえば。撮影スケジュール終わってから休めばいいや、つて思つて。

丸一日爆睡してたから睡眠時間も十分だろ、つて思つて、それ以外休み取つてなかったんだ。

役者のローテ組んで、出ずっぱり百城さんにどう休日取らせるかばっか考えてたから、自分のこと後回しにしてたんだった。

一時間くらい寝るか。

こつそり寝よう。

車両の荷台とかで。

起きたらまた皆を労おう。

皆よく頑張つてくれた。

その分のありがとうとか。

言わねえと。

言つて——

——まどろみの中にいた。

起きてるような、寝てるような。

周りの音が聞こえてるような。夢の中の声を聞いているような。そんな時間。

「あの夜に撮った映像、夜風さん観た？」

「ううん。ずっと寝てたから」

「私、夜風さんのこと思わず『ケイコ』って呼んでいた。

夜風さんはああいうのを『芝居』と呼んでいたんだね。

自分でもびっくりしちやったよ。あの時の私の顔、ぐしやぐしやで超不細工なの。

——でも案外、私の横顔も綺麗だった。

私の芝居はもつと上手くなる。夜風さんの芝居を盗んじやったから」

「……うん、私ももつと——」

まどろみの中で、景さんと百城さんに仲良くしてほしいと願ったことを思い出して、二人がもつと仲良くなってくれぬことを祈った。

まどろみの中、揺蕩う。

心地良い眠りだった。

そして、目覚める。

「私のもっともつとずつと一生！ お芝居を続ける!!」

景さんの大きな声が、俺を呼び覚ました。

「んっ」

スマホを見る。

よし、ジャスト一時間。

疲れもちよつとは取れた。

さて、皆に頑張ってくれてありがとうでも言つて回るかな。

つたく、景さんは破天荒だな。

俺が受けてる影響は何においてもありそうだ。今こうして、起こされたみてえに。

なんかどうやら流れ星を見つけたらしいな。

周りが続いてんのが見える。

星がキラキラと輝く夜空に、流れ星が流れ落ちたのが見えた。

「俺は必ずブロードウェイに立つぞオオ!!」

「売れますように売れますように売れますように」

「彼女欲しい彼女欲しい彼女欲しい」

ちよつと、眺めていたいと思った。

皆が仲良さそうにしているのが、皆が楽しそうにしているのが、好きだった。

立ち上がるのをやめて、何かしようとするのをやめて、ぼんやりと皆を見ていた。

俳優も、裏方も。

主役も、脇役も、新人も、古参も。

照明も、演出も、美術も、制作も、撮影も、編集も、録音も、監督も、助監督も、メイクも、スタントマンも、マネージャーも、みんな、みんな。

楽しそうだった。

”頑張った者”だけができる顔。

”やりきった者”だけがしていい顔。

皆で力を合わせて一つのものを作り上げたものだけがする喜びの顔。

俺でも一人じゃ作れねえ顔が、そこにあつた。

ぼんやりと、その表情の一つ一つを眺めていた。

「英二くん」

そして、彼女が俺に語りかける。

彼女が最後に俺と話そうとすることは、なんとなく分かつていた。

最後に英二さんと話すことだけは、心に決めていた。

皆がサインを書き込んでくれた私のシャツがオシャレで嬉しい。

英二くんも褒めてくれないかな、これ。

あ。ウルトラ仮面。

そういえば今日一度も話してないし、シャツにもサインしてもらってないわ。

「……えと、僕もサインした方がいい？」

「してくれたら嬉しいわ」

「うん、まあ、いいけど」

アキラ君も私のシャツにサインしてくれる。

よりパーフェクトなサインだらけシャツになったわ。

「これでよし、と」

「ありがとう、ウルトラ仮面」

「アキラね」

サインを書いてくれたアキラ君の視線が、車の荷台の方に向く。
なんだろう？

そう思って視線を追うと、車の荷台の上に、とても優しい表情で、とても優しい眼差しで、皆を見ている英二くんがいた。

あれ。

私、あの表情に、あの眼差しに見覚えがある。

あれは……そう、私を見る時のお母さんの顔。

……ああ、そうだ。

あれは、『愛』ってやつだわ。

きつとそう。

「英二くんは……時々、何考えてるか分からないわ」

何を思って私達を見てるんだろう。

そう思った私の前で、アキラ君が苦笑する。

「朝風君に優しくされて、気遣われて君は何を思った？

『嬉しい』？

『安心した』？

『幸せ』？

思い出してみるといいよ。君が思ったそれが、朝風君が君に贈りたかったものだ」

「自分の中を見れば、朝風君はそこにいるよ。彼の想いの答えはいつもそこにある」
深い理解。

間違えない解釈。

英二くとアキラ君の間にある強い友情を感じる。

なんだか……素敵だなんて、そう思えた。

「アキラ君は、英二くんを下の名前で呼んだ方が良いと思うわ。ずっとちゃんとして親友だもの」

「あはは、ちょっと呼び方タイミング逃しちゃってね。色々あったんだよ」

「ふーん」

「行くのかい？」

「うん」

「そっか。朝風君によろしく」

アキラ君と別れて、英二くんを目指して歩く。

なんだろう。

なんてこともないのに、ドキドキする。

理由は分からないけど緊張する。

気持ち切り替えよう。この気持ちは、忘れておかないと。

英二くんを前にしていつもの私じゃいられなくなってしまったら、英二くんが惚れ込んだいつもの私じゃなくなってしまおう。

そうなったら、好かれなくなってしまおうから。

「英二くん」

英二くんに話しかけて、その隣にちよこんと座った。

座り方、変じゃなかったかな。

「凄いシャツですね。高く売れそうです」

「凄いシャツでしょう？ 凄くオシヤレ」

英二くんが褒めてくれた。

じゃあやつぱり間違っていないんだわ、このデザイン。うん。

「あれ、百城さんのサインまである……よく貰えましたね」

「千世子ちゃんとお話したわ。」

私の芝居を盗んだ、なんて言われちゃった。

私も千世子ちゃんのお芝居を盗んじやったから、おあいこかしら」

「俳優なんて互いの違いたがを盗んでなんぼですよ」

うん。黒山さんもそう言ってたわ。

「見てて分かります。ちゃんと答えに辿り着けたんですよね」

「私、千世子ちゃんにはなれないわ。でも私は私になる。それでいい？」

「はい。それがきつと一番良いんです」

英二くんがいい笑顔でこつちを見てくる。

何故か、ちよつとだけ緊張した。

——あなたの演技に一目惚れました。

——作品完成を前提に、あなたの仕事にお付き合いを申し込みます

英二くんは私に夢中。

私は知ってる。

だから、駄目なところはあんまり見せたくない。

千世子ちゃんも、そういう気持ちを持つていいのかしら。

それともこれは……ファンの前で駄目なところを見せたくないっていう、役者がみんな持つてくる気持ちなのかしら？

「画面の向こうの世界に憧れていた景さんは、もうどこにもいないんだと思います」

「……うん」

「あなたは憧れの人のようになりたい、ではなく、最高の自分になりたい、でいいんです

「よ」

そうね。

うん。

そうだね。

「あなたがかつて憧れたその映画の物語より、あなたはもつと幸せになれる人です」

「……なれるかしら」

「なれます」

「……英二くんがそういうなら、私、ちよつとは信じてみる」

「はい」

英二くんは最初からずっと、私に『世界で一番幸せな役者になれる』と言ってくれる。
そのフレーズがなんだか心地良くて、そう言われるのがなんだか嬉しい。

……あれ。

そういえば、なんで英二くんは、そこにこだわってるんだろう。

「幸運である人と、幸福になれる人は違います。」

幸福になれる人つてのは中々見ないんですよ、これが」

「英二くん、ちよつと聞いていい?」

「なんででしょうか？」

「英二くんが幸せになれる役者というものを推してる理由って、何かあったりする？」

あ、ちよつと驚いた顔した。

予想外、つて感じの顔。

私そんなに英二くんのことよく見てないイメージある？

「俺が景さんはそういう役者になれると思った、というのが理由ですが……」

そうですね。ちよつと話に付き合ってくださいますか？ 俺の名前と親の話なんですけど」

「英二くんの話？ 私千世子ちゃんほど英二くんのこと知らないから、聞きたいわ」

「これ百城さんやアキラさんも知りませんよ多分。話したことないですし」

「……うん、聞きたい」

すつごく聞きたい。

「俺の名前の由来は、とある特撮の神様です」

「そうなんだ」

「でもその直前に別の案もあったんですよ。」

俺の母親の頭は徐々に悪化していった、という話はしましたよね？」

「うん」

「俺の母親がまだ正常さを保っていた頃の話です。

俺の父親は俺が長男だったので、英一という名前を付けようとしていました。

特撮の神様も英二って名乗ってるだけで本名は英一だったので、当然のことなんです
が」

「え、そうなの？」

「はい。」

英でる、で英。

一番になる、で一。

誰よりも優れた人物になれ、という願いを込めて英一。

でも母親が、ここで異を唱えたそうです。

そして英一に『一本棒を足す』という形で、『英二』になりました」

「英二くんのお母さんは、何か気に入らなかつたのかしら」

「一本棒を持って、というのが俺の優しい母親の願いだったらしいんです」

「……う？」

棒を一本？

「『辛い』という字と『幸い』という字の違いは一本の棒だけ。

だから英二は棒を一本だけ持っていないさ。

どこかの誰かに、その一本の棒をあげられるように。

どこかの誰かの『辛い』を、『幸い』に変えてあげられるように。

辛い思いをした人を見つけたら、その人が幸せになれるよう手伝ってあげなさい、と」

「——辛いを、幸いに」

「俺の母が、頭が完全におかしくなる前に、子に付ける名前を考えていた時、言ったんだとか」

辛いを幸いに。英二くんの名前に、そんな思いが込められているなら。

「私の辛いを幸いにしてくれたのね、英二くんは」

「え……いい、いやそんな、俺は景さんにそんな大したことは」

「してもらったわ、私は。怪我するところをネットで助けてもらったばかりでしょう？」

うん。

英二くんはやっぱいい人だ。

素直に好きだと思える気がする。

……好き？ うん。友達として好き。大事な人。

「いや、えつと、ですわね。」

あ、そうそう。

俺の母は、辛い人生を送った者にこそ、本当の幸せを理解できると思ってたらしくて。

辛い、の後にある辛いこそ、本当の幸せだという持論を持つてたらしいんです。

『本当の幸さいわいってなんだろう』っていうお題を、誰かから出されたんだとか」

本当の幸い……？ 辛いの後に、ある幸い。

辛い思いをした人が救われてこそ、ってことかしら。

「……：そういえばこの話、景さんにしかしたことないですね」

「そうなの？」

「百城さんやアキラさんにはしてないなと思つてましたが、思えば他の誰にもしてませんでした」

そうなんだ。

私だけ。

そっかあ。

「私があなたにとつて特別だから、そういう話をしてくれたの？」

「そうですね。景さんはやっぱり特別です。だからこの話をしたのかもしれませんが」

惚れこまれてる。その実感があると、むず痒くなる。

いけないいけない。

いつも通りの私、いつも通りの私。

私達二人は、海を眺め始めた。

綺麗な空、綺麗な海。

夜空の星も綺麗で、それが映ってる夜の海も綺麗。

いつの間にか風が吹かなくなっていて、静かな海はとても大きな鏡みたいに、夜空の月や輝く星を映し出していた。

「夜風ですね」

私の名前が呼ばれたのかと思って、ちよつとびつくりしちゃった。

「前に茜さんに、夜と昼で風向きが変わる海岸の風の話をしたんですが……」

朝、風向きが変わる直前の無風を朝風と言います。

夕方、風向きが変わる直前の無風を夕風と言います。

それが転じて、昔生まれた言葉が夜の無風の時間……夜風と言うらしいですよ」

「そうなんだ」

二人並んで、夜の空と夜の海を見つめた。

10cmくらい英二くんに寄ってみる。

英二くんは気付かない。

あ、これ、この夜空と夜海をどう造形にしたら上手く行くかを考えてる顔だわ。

あーもう。

「いい夜景だわ」

「そうですね」

でも、まいつか。

私と英二くんは同じものを見ていて、同じ感情を抱いている。

それだけで、友達としては十分だと思う。

「不幸を富幸ふこうに変えてくれそうな出会いが、いっぱいあったの」

「それは、幸せなことです」

「出会えたことで、私は変わった。皆に感謝してる」

「それは、幸せなことです」

「皆と出会えたおかげで、私は役者っていう道を見つけれられたの」

「それは、幸せなことです」

「役者になったから、英二くんとも出会えた」

「それは……」

「幸せなことだと、私は言うの」

「――」

「英二くんと出会えたことは、幸せなこと。それは絶対に言い切れる」

ちゃんと幸せにならないと、英二くん。

あなたに出会えて幸せだと思った人の言葉くらい受け止めないと、英二くん。

辛いを幸いにする男の子がそんなんじや、きつと本当の幸さいわいになんて届かない。

作品を大切にしているあなたが、他人を大切にしているあなたが、自分を大切にしなきゃ、片手落ちどころの話じゃないでしょ？

「ありがとう英二くん。出会ってくれて」

素直にそう言えた。

英二くんは少し照れた様子で、私の目を真つ直ぐに見る。

「ありがとうはこっちの台詞です。ありがとうごさいます、出会ってくれて」

夜風の夜景を、二人で見っていた。

綺麗な空と綺麗な海を、二人並んで見つめ続けた。

風の音が聞こえる。波の音が聞こえる。少し遠くに皆が騒いでいる音が聞こえる。

私は役者としてやっていけるのか？

茜ちゃんに怒られてから私の胸の中にあつた不安は、もうすっかり消えていた。

私は役者だ。

これからもずっと役者だ。

一生、お芝居を続けていく。

そこに、千世子ちゃんみたいなキラキラとした俳優と、英二くんみたいな裏方がいれ

ば……私は一生、幸せでいられると思う。

……ああ、そっか。だから英二くんは、私にああ言ってたんだ。
「知ってますか景さん。」

とある映画の評なんですけど……

『凄い特殊造形と、凄い俳優と、凄い音楽があれば凄い映画ができて上がる』

『他は何もいらない』っていう言葉があるんですよ、映画業界には」

そうなんだ。じゃあ。

「英二くんがいれば必ず凄い映画が作れそうね」

「景さんがいればずっと凄い映画が作れそうですね」

最後の最後に、私達の言葉はハモって。

同じことを考えてたことが分かって、なんだかそれが楽しくて、嬉しくて、幸せで。
夜風の夜景を見ながら、私達は目を見合わせて、笑い合った。
なんとなく分かる。

私は明日も、幸せだ。